

常呂川河口遺跡

—常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書—

1996

北海道常呂町教育委員会



常呂川河口遠景（南側から撮影）



常呂川河口遺跡近景（東側から撮影）



15号竖穴遺物等出土状況



15号竖穴完掘状況



15号竪穴特大型土器出土状況



15号竪穴大・中・小型土器出土状況



15号豎穴骨角製品（クマ）



15号豎穴骨角製品（ラッコ）



300号土壙墓遺存体検出状況



300号土壙墓出土ガラス玉 (20点中の8点)



263 a 号土壙墓



263 a 号土壙墓琥珀玉出土状況



295 a 号土壙墓遺物出土状況



295 a 号土壙墓出土土器



213号土壙墓



213号土壙墓出土土器



213号土壙墓出土玉



126号土壙墓遺物出土状況



126号土壙墓出土土器

序 文

常呂町は北海道の東北端に位置しています。北側にオホーツク海、西側にはサロマ湖に面する農業、漁業を基幹産業とする人口約5,700人の町です。

今回の発掘調査は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴うものです。常呂川は1級河川であり明治期の開拓以降たび重なる氾濫が繰り返され、そのつど住民は多大な被害を蒙ってきました。しかし、この川は生命、文化を育む豊穡の川でもあることが発掘調査で明らかになりました。

この遺跡は縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化の人々が遺した大規模な遺跡です。特に縄文文化晩期のお墓から出土した遺物の中には新潟県糸魚川産のヒスイがあり、文化の広がりを垣間見せています。続縄文文化のお墓からは土器、石器とともに多量のコハク玉や鉄器、ガラス玉を副葬するものなど当地方で未発見の資料が多くあるのもこの遺跡の特色です。謎の海洋民族とされるオホーツク文化では火災に遭遇した住居から土器、骨角器、鉄製品、木製品など多量の生活用品のほかにキビなどの栽培植物も発見され当時の生活・文化を解明する上でも貴重な発見でした。

これらの資料の一部は「ところ遺跡の館」に展示しており、見学者の関心をあつめています。また、展示されない遺物は500万点に及び収蔵に苦慮しているところですが、将来は調査、学習、収蔵機能をもった埋蔵文化財センターを建設しさらに埋蔵文化財の保護・啓蒙に努めたいと思います。

最後に調査当初から北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、東京大学文学部藤本強、宇田川洋氏をはじめ関係各位から多大なご協力をいただき衷心より感謝申し上げます。

平成8年3月

北海道常呂町教育委員会

教育長 武 田 賢一郎

例 言

- 1、本書は、主に昭和63年から平成4年にかけて実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡（TK73遺跡）の緊急発掘調査の報告書である。但し、発掘区出土遺物及び縄文前期末、中期、後期の包含層出土遺物等については紙面の都合上次回に報告する。
- 2、本遺跡は北海道常呂郡常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登載番号はI-16-128である。
- 3、発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、常呂町教育委員会が主体となって実施した。
- 4、本書の執筆、編集は武田修がおこなった。
- 5、付編の各種分析・同定については次の方々に執筆を依頼した。

新美倫子 東京大学文学部

石田 肇 札幌医科大学 松村博文 国立科学博物館

山田悟郎 北海道開拓記念館

合地信生 斜里町立知床博物館

パリノ・サーヴェイ株式会社

- 6、遺構の写真撮影は武田修がおこない、遺物の写真撮影は渡部高士がおこなった。
- 7、各種遺物の実測は佐々木覚、吉田義子、加藤雪江、小林千花子、大西信子、矢萩友子がおこなった。
- 8、ピット220～229、248は次番とした。
- 9、年度毎の調査体制

昭和63年度

調査期間 昭和63年10月4日～11月12日

調査面積 1,000m²

調査担当者 武田修

調査補助員 大貫浩子

作業員 阿部繁、大沼篤子、小野寺金夫、佐々木ハツ、佐藤成子、佐藤芳子、中野トキ子、森サダ、宮林久美子

平成1年度

調査期間 平成1年5月16日～11月17日

調査面積 4,500m²

調査担当者 武田修

調査補助員 大貫浩子、佐々木覚、渡部高士

事務員 堤晴美、中川菜保江、藤田佳子

作業員 阿部繁、大沼篤子、尾形昭治、川村武子、熊谷弘子、栗原アサ子、佐々木ハツ、佐藤成子、中野トキ子、那須弘子、羽生洋子、松平崇弘、山本洋子、吉田国彦、吉田義子、渡辺政彦

整理員 東慎次、石渡一人、加藤雪江、矢萩友子、吉田義子、松平崇弘

平成2年度

調査期間 平成2年4月23日～10月31日

調査面積 1,100m²

調査担当者 武田修

調査補助員 大貫浩子、佐々木覚、渡部高士

事務員 秋保美智子、東慎次

作業員 阿部繁、臼井三郎、大谷俊子、大沼篤子、小野寺金夫、後藤幸三郎、川村武子、工藤清、熊谷弘子、佐々木富男、佐々木ハツ、佐々木由美子、佐藤成子、中野トキ子、室田恵美、矢萩友子、吉田国彦、吉田義子、渡辺政彦

整理員 遠藤進、小原由佳、加藤雪江、絹張洋子、関口千草、高橋美由紀、中川珠美、矢野恵美、矢萩友子、吉田義子

平成3年度

調査期間 平成3年4月22日～11月16日

調査面積 1,100m²

調査担当者 武田修

調査補助員 大貫浩子、佐々木覚、渡部高士

事務員 秋保美智子、内海康子

作業員 臼井三郎、大谷俊子、近江谷光栄、小野寺金夫、後藤幸三郎、栗原アサ子、佐々木富男、佐々木由美子、薩摩俊之、高橋昭夫、竹内敦子、武田美津子、室田恵美、三好康午、矢萩友子

整理員 大西信子、小栗佐和子、小原由佳、加藤雪江、加藤幸恵、京谷みどり、清永順子、小林千花子、佐々木由美子、新里祐子、高橋さよ子、日脇京子、宮崎慎司、宮林真美、矢野恵美、矢萩友子、吉田叔恵、吉田義子、畑中玲子、三浦タカ子、若原信子

平成4年度

調査期間 平成4年4月15日～10月31日

調査面積 800m²

調査担当者 武田修

調査補助員 佐々木覚

事務員 田淵由美子、内海康子

作業員 白井三郎、大谷俊子、近江谷光栄、小野隆三、小野寺金夫、後藤幸三郎、
栗原アサ子、佐々木由美子、竹内敦子、矢萩友子、水野停子、堀沢祐一

整理員 伊藤直枝、加藤幸恵、小林千花子、杉田弘子、鈴木和恵、高木貴美子、武
田美津子、中村萬亀子、日脇京子、馬淵和恵、水野停子、矢萩友子、三浦
タカ子、吉田義子

10、発掘調査及び整理作業には下記の方々の指導、助言を得た。記して感謝の意を表するし
いです。

文化庁 岡村道雄、奈良国立文化財研究所 松村恵司、浅川滋男、東京大学 藤本強、
宇田川洋、大貫静夫、新美倫子、北海道大学 大井晴男、筑波大学 前田潮、札幌大学
木村英明、立教大学 山浦清、ユジノサハリンスク教育大学 ワレリー・ゴルベフ、国
立歴史民俗博物館 西本豊弘、北海道教育委員会 木村尚俊、大沼忠春、種市幸生、北
海道開拓記念館 野村崇、赤松守雄、右代啓視、山田悟郎、平川善祥、枝幸町教育委員
会 佐藤隆広、新冠町教育委員会 乾芳弘、羅臼町教育委員会 湧坂周一、石狩町教育
委員会 石橋孝夫、工藤義衛、紋別市立郷土博物館 佐藤和利、北方民族博物館 青柳
文吉、(財)北海道埋蔵文化財センター 畑宏明、越田賢一郎、高橋和樹、西田茂、熊谷
仁志、平取町教育委員会 森岡健治、恵庭市教育委員会 豊田宏良、(株)タナカコンサ
ルタント 豊原照司、斜里町立知床博物館 合地信生、松田功、北網圏北見文化センター
太田敏量

目 次

序	常呂町教育委員会 教育長 武田 賢一郎	i
例 言		ii
第I章	調査に至る経過	1
第II章	遺跡の地形	3
第III章	周辺の遺跡	6
第IV章	竪穴住居	13
第V章	ピット	295
第VI章	その他の遺構	581
第VII章	まとめ	591
付 編		
付編I	常呂川河口遺跡14・15・16号住居址出土の動物遺存体	599
	東京大学文学部 新美 倫子	
付編II	常呂川河口遺跡15号住居跡から出土した植物遺体	615
	北海道開拓記念館 山田 悟郎	
付編III	常呂川河口遺跡出土人骨について	621
	札幌医科大学 石田 肇	
	国立科学博物館 松村 博文	
付編IV	常呂川河口遺跡出土のヒスイ玉についてのX線スペクトル解析	626
	斜里町立知床博物館 合地 信生	
付編V	常呂川河口遺跡から出土した炭化材の樹種	634
	パリノ・サーヴェイ株式会社	

挿 図 目 次

<p>第1図 基本層序模式図……………4</p> <p>第2図 地形模式図……………5</p> <p>第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡……………7</p> <p>第4図 遺構配置図(1)……………9</p> <p>第5図 遺構配置図(2)……………11</p> <p>第6図 1号竪穴平面図……………14</p> <p>第7図 1号竪穴カマド・床面・埋土出土土器……………15</p> <p>第8図 1号竪穴埋土出土土器……………16</p> <p>第9図 1号竪穴埋土出土土器……………17</p> <p>第10図 2号竪穴、ピット2、ピット2a、ピット3平面図……………18</p> <p>第11図 2号竪穴埋土出土土器……………19</p> <p>第12図 3号竪穴、ピット1、ピット4、ピット6平面図……………21</p> <p>第13図 3号竪穴床面・埋土出土土器……………22</p> <p>第14図 3号竪穴埋土、4号竪穴埋土出土土器……………23</p> <p>第15図 4号竪穴平面図……………24</p> <p>第16図 1号竪穴埋土、2号竪穴埋土、4号竪穴埋土、9号竪穴カマド出土鉄製品・炭化木製品実測図……………25</p> <p>第17図 5号竪穴、1号小竪穴、2号小竪穴平面図……………26</p> <p>第18図 4号竪穴埋土、5号竪穴埋土、6号竪穴埋土出土土器……………27</p> <p>第19図 6号竪穴平面図……………29</p> <p>第20図 7号竪穴床面・埋土出土土器……………30</p> <p>第21図 3号小竪穴、8号竪穴、10号竪穴、ピット14平面図……………32</p> <p>第22図 8号竪穴床面・黒色土上、黒色土下・焼土内・埋土出土土器……………33</p> <p>第23図 7号竪穴、9号竪穴平面図……………35</p> <p>第24図 9号竪穴床面・埋土出土土器……………36</p> <p>第25図 9号竪穴床面、10号竪穴埋土、11号竪穴床面・埋土、3号小竪</p>	<p>穴床面出土土器……………37</p> <p>第26図 11号竪穴、13号竪穴平面図……………39</p> <p>第27図 12号竪穴、12a号竪穴平面図……………41</p> <p>第28図 12号竪穴埋土出土土器……………43</p> <p>第29図 12号竪穴埋土出土土器……………44</p> <p>第30図 12号竪穴埋土出土土器……………45</p> <p>第31図 12号竪穴埋土出土土器……………46</p> <p>第32図 12号竪穴埋土出土土器……………47</p> <p>第33図 12a号竪穴床面・埋土出土土器……………48</p> <p>第34図 12a号竪穴埋土出土土器……………49</p> <p>第35図 13号竪穴埋土出土土器……………50</p> <p>第36図 9号竪穴攪乱、12号竪穴埋土、12a号竪穴床面・埋土出土土器……………51</p> <p>第37図 14号竪穴平面図……………55</p> <p>第38図 14号竪穴埋土出土土器……………57</p> <p>第39図 14号竪穴埋土出土土器……………58</p> <p>第40図 14号竪穴埋土出土土器……………59</p> <p>第41図 14号竪穴埋土出土土器……………60</p> <p>第42図 14号竪穴埋土出土石器・埋土出土青銅製品……………61</p> <p>第43図 14号竪穴埋土出土石器……………62</p> <p>第44図 15号竪穴遺物出土分布図……………63</p> <p>第45図 15号竪穴、ピット27、ピット28、ピット33、ピット33a、ピット49平面図……………65</p> <p>第46図 15号竪穴骨塚出土状況図……………68</p> <p>第47図 15号竪穴出土土器分布図……………69</p> <p>第48図 15号竪穴床面出土土器……………71</p> <p>第49図 15号竪穴床面出土土器……………72</p> <p>第50図 15号竪穴床面出土土器……………73</p> <p>第51図 15号竪穴床面出土土器……………74</p> <p>第52図 15号竪穴床面出土土器……………75</p> <p>第53図 15号竪穴床面出土土器……………76</p> <p>第54図 15号竪穴床面出土土器……………77</p> <p>第55図 15号竪穴床面出土土器……………78</p> <p>第56図 15号竪穴床面出土土器……………79</p>
---	--

第57図	15号竪穴床面出土土器……………80	第89図	16号竪穴埋土出土土器 ……117
第58図	15号竪穴床面出土土器……………81	第90図	16号竪穴埋土出土土器 ……118
第59図	15号竪穴床面出土土器……………82	第91図	16号竪穴床面・火山灰・埋土出土土器・石製品 ……119
第60図	15号竪穴床面・埋土出土土器……………83	第92図	16号竪穴埋土出土土器・鉄器・石製品、16 a号竪穴埋土出土土器 ……120
第61図	15号竪穴埋土出土土器……………84	第93図	16 a号竪穴平面図 ……122
第62図	15号竪穴埋土出土土器……………86	第94図	16 a号竪穴埋土出土土器 ……123
第63図	15号竪穴埋土・攪乱出土土器……………87	第95図	17号竪穴、17 a号竪穴、17 b号竪穴平面図 ……125
第64図	15号竪穴埋土出土土器……………88	第96図	17号竪穴床面・埋土出土土器 ……126
第65図	15号竪穴埋土出土土器……………89	第97図	17号竪穴埋土出土土器 ……127
第66図	15号竪穴埋土出土土器……………90	第98図	17号竪穴埋土、17 a号竪穴埋土出土土器 ……128
第67図	15号竪穴埋土出土土器……………91	第99図	17号竪穴埋土出土土器 ……129
第68図	15号竪穴埋土出土土器……………92	第100図	17 a号竪穴埋土出土土器 ……131
第69図	15号竪穴床面出土骨角器……………94	第101図	17 a号竪穴埋土、17 b号竪穴埋土出土土器 ……133
第70図	15号竪穴床面・埋土・南側骨塚出土骨角器……………95	第102図	17 b号竪穴埋土、17 c号竪穴埋土、17 d号竪穴埋土出土土器 ……134
第71図	15号竪穴床面・埋土・南側骨塚・北側骨塚出土骨角器……………96	第103図	17 a号竪穴埋土出土土器 ……135
第72図	15号竪穴北側骨塚・床面・埋土出土骨角器……………97	第104図	17 a号竪穴埋土、17 b号竪穴床面、17 c号竪穴埋土出土土器 ……136
第73図	15号竪穴床面、中央南小ピット周溝出土土器……………99	第105図	17 c号竪穴、17 d号竪穴、18号竪穴、18 a号竪穴平面図 ……140
第74図	15号竪穴骨塚・埋土出土土器 ……100	第106図	18号竪穴床面出土土器 ……141
第75図	15号竪穴埋土出土土器 ……101	第107図	18号竪穴床面、埋土出土土器 ……142
第76図	15号竪穴床面出土石製品・粘土……………102	第108図	18号竪穴埋土出土土器 ……143
第77図	15号竪穴埋土出土土器・床面出土青銅製品・床面出土鉄器・床面出土骨角器・針 ……103	第109図	18号竪穴埋土出土土器 ……144
第78図	15号竪穴床面出土炭化木製品 ……104	第110図	18号竪穴埋土出土土器 ……145
第79図	15号竪穴床面・柱穴埋土出土炭化木製品 ……105	第111図	18 a号竪穴床面・埋土出土土器……………146
第80図	15号竪穴床面出土炭化木製品 ……106	第112図	18 a号竪穴床・埋土出土土器 ……147
第81図	15号竪穴床面出土炭化木製品 ……107	第113図	19号竪穴平面図 ……148
第82図	15号竪穴床面出土炭化木製品 ……108	第114図	19号竪穴床面・柱穴埋土出土土器 ……150
第83図	16号竪穴平面図 ……111	第115図	19号竪穴埋土出土土器 ……151
第84図	16号竪穴床面・埋土出土土器 ……112	第116図	19号竪穴埋土出土土器 ……152
第85図	16号竪穴埋土出土土器 ……113	第117図	19号竪穴埋土出土土器 ……153
第86図	16号竪穴埋土出土土器 ……114		
第87図	16号竪穴埋土出土土器 ……115		
第88図	16号竪穴埋土出土土器 ……116		

第118图	20号竖穴平面图	154	竖穴、26号竖穴、26 a 号竖穴、
第119图	20号竖穴埋土出土土器	155	27号竖穴平面图
第120图	21号竖穴、21 a 号竖穴平面图	156	第156图
第121图	21号竖穴床面出土土器	157	第157图
第122图	21号竖穴床面出土土器	158	25号竖穴埋土、25 a 号竖穴埋土
第123图	21号竖穴床面·埋土出土土器	159	出土土器
第124图	21号竖穴埋土出土土器	160	第158图
第125图	21号竖穴埋土出土土器	161	25号竖穴埋土、25 b 号竖穴埋土
第126图	21号竖穴埋土出土土器	162	出土石器
第127图	21号竖穴埋土出土土器	163	第159图
第128图	21号竖穴埋土、21 a 号竖穴埋土	164	第160图
	出土土器	164	26号竖穴埋土出土土器
第129图	21号竖穴床面·埋土出土石器	166	第161图
第130图	21号竖穴埋土出土石器	167	26号竖穴床面·埋土出土石器
第131图	21号竖穴埋土出土石器·埋土出	168	第162图
	土骨角器	168	26 a 号竖穴埋土出土土器
第132图	22号竖穴平面图	170	第163图
第133图	22号竖穴埋土出土土器	171	26 a 号竖穴埋土出土土器
第134图	22号竖穴埋土出土土器	172	第164图
第135图	22号竖穴埋土出土石器	173	26 b 号竖穴床面·埋土出土石器
第136图	23号竖穴、23 a 号竖穴平面图	174	208
第137图	23号竖穴埋土出土土器	176	第165图
第138图	23号竖穴埋土出土土器	177	28号竖穴平面图
第139图	23号竖穴埋土出土土器	178	第166图
第140图	23号竖穴埋土出土土器	179	28号竖穴埋土出土土器
第141图	23号竖穴埋土出土石器	180	第167图
第142图	23 a 号竖穴埋土出土土器	182	29号竖穴平面图
第143图	23 a 号竖穴埋土出土土器	183	第168图
第144图	23 a 号竖穴埋土出土土器	184	29号竖穴床面·埋土出土土器
第145图	23 a 号竖穴埋土出土石器	185	第169图
第146图	23 a 号竖穴埋土出土石器	186	29号竖穴埋土出土土器
第147图	24号竖穴、24 a 号竖穴平面图	187	第170图
第148图	24号竖穴埋土出土土器	188	29号竖穴埋土出土土器
第149图	24号竖穴埋土出土土器	189	第171图
第150图	24号竖穴埋土出土土器	190	29 a 号竖穴、29 b 号竖穴平面图
第151图	24号竖穴埋土出土土器	191	208
第152图	24号竖穴埋土出土土器	192	第172图
第153图	24号竖穴埋土出土土器	193	29 a 号竖穴床面·埋土出土土器
第154图	24号竖穴床面·埋土出土石器	195	208
第155图	25号竖穴、25 a 号竖穴、25 b 号		第173图
			29 a 号竖穴埋土出土土器
			第174图
			29 a 号竖穴埋土出土土器
			第175图
			29 b 号竖穴埋土出土土器
			第176图
			28号竖穴埋土、29号竖穴埋土、
			29 a 号竖穴床·埋土出土石器
			208
			第177图
			29 a 号竖穴埋土、29 b 号竖穴埋
			土出土石器
			208
			第178图
			30号竖穴平面图
			第179图
			30号竖穴埋土出土土器
			第180图
			30号竖穴埋土出土土器
			第181图
			31号竖穴平面图
			第182图
			31号竖穴埋土出土土器
			第183图
			31号竖穴埋土出土土器
			第184图
			31号竖穴埋土出土土器
			第185图
			30号竖穴埋土、31号竖穴A面·
			埋土出土石器
			232

第186図	32号竪穴平面図 ……………234	第217図	37号竪穴埋土、38号竪穴埋土、 39号竪穴埋土出土石器 ……………269
第187図	32号竪穴埋土出土石器 ……………235	第218図	40号竪穴、41号竪穴平面図 ……270
第188図	33号竪穴平面図 ……………236	第219図	40号竪穴床面・埋土出土石器 ……271
第189図	33号竪穴床面・埋土出土石器 ……237	第220図	40号竪穴埋土出土石器 ……………272
第190図	33号竪穴埋土・カマド煙道出土 石器 ……………238	第221図	40号竪穴埋土出土石器 ……………273
第191図	32号竪穴埋土、33号竪穴埋土、 34号竪穴埋土出土石器 ……………239	第222図	40 a 号竪穴、40 b 号竪穴平面図 ……………274
第192図	34号竪穴平面図 ……………240	第223図	40 a 号竪穴床面・埋土出土石器 ……………275
第193図	34号竪穴床面・埋土出土石器 ……241	第224図	40 a 号竪穴埋土出土石器 ……………276
第194図	35号竪穴平面図 ……………243	第225図	41号竪穴床面・埋土出土石器 ……278
第195図	35号竪穴埋土出土石器 ……………244	第226図	41 a 号竪穴平面図 ……………279
第196図	35号竪穴埋土、35 a 号竪穴埋土 出土石器 ……………245	第227図	41 a 号竪穴埋土出土石器 ……………280
第197図	35 a 号竪穴平面図 ……………246	第228図	41 a 号竪穴埋土出土石器 ……………281
第198図	35号竪穴埋土、35 a 号竪穴埋土 出土石器 ……………247	第229図	40 a 号竪穴埋土、41号竪穴床 面・埋土、41 a 号竪穴埋土出土 石器 ……………282
第199図	35 b 号竪穴平面図 ……………248	第230図	42号竪穴、42 a 号竪穴、42 b 号 竪穴平面図 ……………284
第200図	35 c 号竪穴平面図 ……………249	第231図	42号竪穴埋土出土石器 ……………285
第201図	35 b 号竪穴埋土、35 c 号竪穴床 面・埋土出土石器 ……………250	第232図	42 a 号竪穴床面・埋土出土石器 ……………286
第202図	35 b 号竪穴埋土、35 c 号竪穴床 面・埋土出土石器 ……………251	第233図	42 a 号竪穴埋土、42 b 号竪穴埋 土出土石器 ……………287
第203図	36号竪穴、36 a 号竪穴平面図 ……253	第234図	42号竪穴埋土、42 a 号竪穴埋土、 42 b 号竪穴埋土出土石器 ……288
第204図	36号竪穴床面・埋土出土石器 ……254	第235図	43号竪穴平面図 ……………289
第205図	36号竪穴埋土出土石器 ……………255	第236図	43号竪穴カマド・埋土出土石器 ……………291
第206図	36号竪穴埋土出土石器 ……………256	第237図	43号竪穴埋土出土石器 ……………292
第207図	36号竪穴床面・埋土出土石器 ……257	第238図	43号竪穴埋土出土石器 ……………293
第208図	36号竪穴埋土出土石器 ……………258	第239図	ピット5・ピット7・ピット9・ ピット10・ピット11・ピット12・ ピット13平面図 ……………297
第209図	36号竪穴埋土、36 a 号竪穴床面、 埋土出土石器 ……………259	第240図	ピット7埋土、ピット14埋土出 土石器 ……………299
第210図	36 a 号竪穴床面出土石器 ……………261	第241図	ピット15埋土、ピット17埋土、 ピット18埋土出土石器 ……………301
第211図	36 a 号竪穴床面・埋土出土石器 ……………262	第242図	14号竪穴西側周辺のピット群平
第212図	36 a 号竪穴埋土出土石器 ……………263		
第213図	37号竪穴平面図 ……………265		
第214図	37号竪穴埋土、38号竪穴埋土、 39号竪穴埋土出土石器 ……………266		
第215図	38号竪穴平面図 ……………267		
第216図	39号竪穴平面図 ……………268		

	面図 ……………302	第263図	ピット34 a 埋土、ピット34 b 埋土、ピット35埋土、ピット37床面・埋土、ピット38埋土、ピット40埋土出土土器 ……………333
第243図	ピット19床面・埋土、ピット19 a 埋土、ピット20埋土、ピット20 a 埋土出土土器 ……………303	第264図	ピット39床面・埋土出土土器 ……336
第244図	ピット19床面・埋土、ピット20埋土、ピット20 a 埋土、ピット21埋土、ピット21 a 埋土出土土器 ……………304	第265図	ピット38平面図 ……………337
第245図	ピット22・ピット22 a 平面図 ……309	第266図	ピット38埋土出土土器 ……………338
第246図	ピット21埋土、ピット21 a 床面・埋土、ピット22埋土、ピット22 a 埋土、ピット23埋土出土土器 ……………310	第267図	ピット38埋土・ピット39床面出土土器 ……………339
第247図	ピット22床面、埋土、ピット22 a 埋土出土土器・管玉・琥珀玉 ……………311	第268図	ピット41埋土、ピット42埋土、ピット43床面・埋土出土土器 ……344
第248図	ピット23、ピット23 a 平面図 ……313	第269図	ピット40埋土、ピット43埋土、ピット44埋土、ピット44 a 埋土出土土器 ……………345
第249図	ピット23埋土出土土器 ……………315	第270図	ピット44 a 平面図 ……………346
第250図	ピット23 a 埋土出土土器 ……………316	第271図	ピット46床面・埋土出土土器 ……348
第251図	ピット24平面図 ……………317	第272図	ピット44 a 床面、ピット45埋土、ピット46埋土、ピット46 a 床面出土土器 ……………349
第252図	ピット25平面図 ……………318	第273図	ピット47床面・埋土出土土器 ……351
第253図	ピット24埋土、ピット25埋土、ピット26埋土出土土器 ……………319	第274図	14号竪穴北・東側周辺のピット群平面図 ……………352
第254図	ピット24埋土出土土器 ……………321	第275図	ピット48埋土出土土器 ……………354
第255図	ピット24埋土出土土器・管玉 ……322	第276図	ピット47床面出土土製品、ピット48埋土、ピット50埋土、ピット51 n 埋土出土土器 ……………355
第256図	ピット27床面・埋土、ピット28埋土出土土器 ……………324	第277図	ピット50埋土、ピット51埋土、ピット51 a 埋土、ピット51 b 埋土、ピット51 f 埋土出土土器 ……357
第257図	ピット30埋土、ピット31埋土、ピット32床面、ピット33埋土、ピット34埋土出土土器 ……………326	第278図	ピット51 h 埋土、ピット51 i 埋土、ピット51 k 埋土、ピット51 m 埋土、ピット52床面、ピット53床面出土土器 ……………358
第258図	ピット25埋土、ピット26埋土、ピット27埋土、ピット29埋土、ピット30埋土、ピット31埋土出土土器 ……………327	第279図	ピット56埋土、ピット57埋土、ピット59埋土、ピット60埋土、ピット61床面・埋土出土土器 ……362
第259図	ピット32埋土出土土器 ……………328	第280図	ピット61埋土、ピット62埋土出土土器 ……………364
第260図	ピット34平面図 ……………330	第281図	ピット61床面、ピット62埋土出土土器 ……………365
第261図	ピット34床面出土土器 ……………331		
第262図	ピット34床面・埋土、ピット34 a 埋土、ピット34 b 埋土、ピット35埋土出土土器 ……………332		

第282図	16号竪穴周辺のピット平面図 …366		
第283図	17号竪穴周辺のピット群平面図 ……………367	第299図	ピット93埋土、ピット95埋土、 ピット96埋土出土土器 ……394
第284図	ピット63埋土、ピット63 a 埋土 出土土器 ……369	第300図	ピット99埋土出土土器 ……395
第285図	ピット63埋土、ピット64埋土、 ピット67埋土出土石器 ……370	第301図	ピット100埋土、ピット101埋土 出土土器 ……396
第286図	ピット64埋土、ピット65埋土、 ピット37埋土、ピット70埋土出 土石器 ……372	第302図	ピット101 a 埋土、ピット102埋 土、ピット102 a 床面・埋土、ピッ ト103埋土、ピット104埋土出土 土器 ……398
第287図	ピット71埋土出土土器 ……374	第303図	ピット90埋土、ピット95埋土、 ピット96埋土、ピット97埋土、 ピット101埋土、ピット101 a 埋 土、ピット102 a 埋土、ピット105 埋土、ピット110 a 埋土、ピット 112埋土、ピット113埋土、ピッ ト116埋土出土石器・琥珀・石製 品 ……399
第288図	ピット71埋土、ピット73埋土出 土土器 ……375	第304図	ピット105埋土、ピット105 a 埋 土、ピット108埋土、ピット110 埋土出土土器 ……402
第289図	ピット74埋土、ピット75 a 埋土、 ピット75 b 埋土、ピット76 a 埋 土、ピット76 c 埋土出土土器 …376	第305図	ピット110 a 埋土、ピット111埋 土、ピット112埋土、ピット113 埋土、ピット113 a 埋土出土土器 ……………405
第290図	ピット77埋土、ピット77 a 埋土、 ピット78埋土出土土器 ……380	第306図	ピット114埋土出土土器 ……407
第291図	ピット71埋土、ピット75埋土、 ピット75 a 埋土、ピット75 b 埋 土、ピット76 b 埋土、ピット76 c 埋土、ピット77埋土出土石器 …381	第307図	ピット114埋土出土土器 ……408
第292図	ピット78 a 埋土、ピット78 d 埋 土、ピット79埋土、ピット80埋 土、ピット80 a 埋土出土土器 …383	第308図	ピット115埋土出土土器 ……409
第293図	ピット78埋土、ピット79埋土、 ピット80埋土、ピット80 a 埋土 出土土器 ……385	第309図	ピット115埋土出土石器 ……411
第294図	15号竪穴北東側周辺のピット群 平面図 ……386	第310図	ピット115埋土出土土器 ……412
第295図	ピット81埋土、ピット81 a 床 面・埋土、ピット82埋土、ピッ ト83埋土、ピット84埋土、ピッ ト85埋土、ピット86埋土、ピッ ト87埋土、ピット88埋土出土石 器 ……389	第311図	ピット116埋土出土土器 ……413
第296図	ピット95平面図 ……392	第312図	ピット116埋土出土土器 ……413
第297図	15号竪穴西側周辺のピット群平 面図 ……393	第313図	ピット117埋土、ピット118埋土、 ピット119埋土、ピット120埋土、 ピット121埋土、ピット122埋土 出土土器 ……414
第298図	ピット90埋土、ピット91埋土、	第314図	ピット117埋土、ピット118埋土、 ピット119埋土出土石器 ……416
		第315図	ピット119埋土、ピット121埋土、 ピット122 a 床面出土石器、石製 品、管玉・琥珀玉 ……417

第316図	ピット122 a 平面図……………418		ピット144埋土出土土器……………443
第317図	ピット112 a 埋土、ピット123埋土、ピット124 a 埋土出土土器……………419	第337図	ピット138埋土、ピット138 a 埋土、ピット140埋土、ピット144埋土出土土器 ……445
第318図	ピット125埋土出土土器……………421	第338図	ピット144 a 埋土、ピット145埋土、ピット146埋土、ピット147埋土出土石器 ……447
第319図	ピット125埋土出土土器……………422	第339図	ピット145床面・埋土、ピット146埋土、ピット147埋土、ピット148床面・埋土、ピット150埋土出土土器 ……448
第320図	ピット122 a 埋土、ピット124埋土、ピット124 a 埋土、ピット125埋土、ピット126埋土出土石器・石製品 ……423	第340図	ピット150平面図……………450
第321図	ピット126平面図……………424	第341図	ピット151平面図……………450
第322図	ピット126埋土出土土器……………425	第342図	ピット151床面・埋土出土土器……………452
第323図	ピット127埋土出土石器……………426	第343図	ピット118、ピット154、ピット173骨片域平面図……………454
第324図	ピット128、ピット129平面図 ……427	第344図	ピット152埋土、ピット153埋土、ピット154埋土、ピット157床面、ピット160埋土、ピット161埋土出土土器 ……455
第325図	ピット127埋土、ピット128埋土出土土器 ……428	第345図	ピット148埋土、ピット154埋土、ピット157床面・埋土出土石器、床面出土鉄製品、ピット165埋土、ピット166埋土、ピット167埋土、ピット169埋土、ピット171埋土出土石器 ……457
第326図	ピット128埋土出土石器……………429	第346図	ピット162床面・埋土出土土器……………459
第327図	ピット130平面図……………430	第347図	15号竪穴南側周辺のピット群平面図 ……461
第328図	ピット130床面・埋土、ピット132床面・埋土、ピット132 a 埋土出土土器 ……431	第348図	ピット164埋土、ピット165埋土、ピット166埋土、ピット167埋土、ピット168埋土、ピット170埋土、ピット171埋土、ピット172埋土、ピット173埋土出土土器……………462
第329図	ピット130埋土出土石器……………432	第349図	掘立柱2・3と周辺のピット群平面図 ……464
第330図	ピット132、ピット132 a 平面図……………434	第350図	ピット173平面図……………466
第331図	ピット132埋土、ピット132 a 埋土、ピット133埋土、ピット133 a 埋土、ピット134埋土、ピット136埋土出土土器……………435	第351図	ピット174埋土、ピット175埋土、
第332図	ピット131、ピット133、ピット133 a、ピット133 b、ピット133 c、ピット134平面図……………437		
第333図	ピット133床面・埋土、ピット133 a 埋土、ピット133 b 埋土、ピット134埋土、ピット135埋土、ピット136埋土、ピット137埋土、ピット137 b 埋土出土土器……………438		
第334図	ピット138平面図……………441		
第335図	ピット137 c 埋土出土土器……………442		
第336図	ピット138埋土、ピット140埋土、ピット141埋土、ピット143床面、		

	ピット176埋土、ピット179埋土 出土土器 ……………467		石3・4平面図 ……………481
第352図	ピット173埋土出土鉄製品、ピット 179埋土、ピット180埋土、ピット 181a埋土出土土器……………469	第359図	ピット201平面図……………483
第353図	ピット178、ピット179、ピット 180、ピット181、ピット181a、 ピット181b、ピット182、ピット 183、ピット183a、ピット184、 ピット185、ピット186、ピット 186a、ピット187、ピット188、 ピット189、ピット190、ピット 191、ピット193、ピット288、ピット 290、ピット292、配石1、集 石1、埋甕2平面図 ……………471	第360図	ピット201床面・埋土出土土器 ……………484
第354図	ピット180埋土、ピット181埋土、 ピット181a埋土、ピット182埋 土、ピット183埋土、ピット184 埋土、ピット185上部、ピット186 埋土、ピット186a埋土出土土器 ……………475	第361図	ピット201埋土出土土器……………485
第355図	ピット187埋土、ピット188埋土、 ピット189埋土、ピット190埋土、 ピット191埋土出土土器……………476	第362図	ピット203平面図……………486
第356図	ピット182埋土、ピット183埋土、 ピット187埋土、ピット190埋土、 ピット191埋土、ピット194埋土、 ピット198埋土、ピット200埋土 出土土器 ……………477	第363図	ピット201埋土・ベニガラ内、 ピット206床面出土石製品・石器 ……………488
第357図	ピット192埋土、ピット196埋土、 ピット197埋土、ピット198埋土、 ピット199埋土、ピット200埋土、 ピット206埋土出土土器……………480	第364図	ピット206床面・埋土、ピット207 床面、ピット210埋土出土土器、 ピット213ベニガラ内出土ヒスイ ……………488
第358図	ピット104、ピット105・105a、 ピット192、ピット194、ピット 195、ピット196、ピット197、ピット 198、ピット199、ピット200、 ピット273、ピット274、ピット 276、ピット286、ピット287、ピット 289、ピット291、配石2、集	第365図	ピット207埋土、ピット208床面、 ピット210埋土、ピット212埋土、 ピット213埋土、ピット214埋土、 ピット216埋土出土土器……………491
		第366図	ピット213平面図……………493
		第367図	23号、24号、34号周辺のピット 群平面図 ……………496
		第368図	ピット217埋土、ピット219埋土、 ピット219a埋土、ピット230埋 土出土土器 ……………497
		第369図	ピット230埋土、ピット231埋土、 ピット232埋土、ピット233埋土 出土土器 ……………498
		第370図	ピット214埋土、ピット216埋土、 ピット217埋土、ピット219埋土 出土土器 ……………499
		第371図	33号、35号竪穴周辺のピット群 平面図 ……………501
		第372図	ピット234埋土出土土器……………502
		第373図	ピット235埋土出土土器……………505
		第374図	ピット236床面・埋土、ピット236 a埋土、ピット237埋土、ピット 238埋土、ピット239埋土、ピット 239a埋土、ピット239b埋土 出土土器 ……………506
		第375図	ピット230埋土、ピット234埋土、 ピット235床面、ピット236埋土、

	ピット236 a 埋土、ピット239埋土、ピット240埋土出土石器……507		ピット260埋土出土石器……535
第376図	ピット241平面図……510	第399図	ピット260平面図……536
第377図	ピット240埋土、ピット141埋土出土石器 ……511	第400図	ピット261平面図……538
第378図	ピット241埋土出土石器……512	第401図	ピット262、262 a、262 b、262 c 平面図 ……539
第379図	ピット241埋土出土石器……513	第402図	ピット261埋土、ピット262埋土、ピット262 a 埋土、ピット262 b 床面・埋土、ピット263埋土出土石器 ……541
第380図	ピット242床面・埋土出土石器 ……514	第403図	ピット263、263 a、263 b、263 c、264 d 平面図……543
第381図	ピット243埋土、ピット244埋土、ピット245埋土出土石器……515	第404図	ピット263 a 琥珀玉出土状況……544
第382図	ピット242床面、ピット245埋土、ピット246埋土出土石器……516	第405図	ピット263 a 埋土、ピット263 b 埋土、ピット263 d 埋土、ピット264埋土、ピット265埋土出土石器 ……545
第383図	ピット246、ピット246 a 平面図 ……517	第406図	ピット256埋土、ピット262 a 埋土、遺体上、ピット262 b 床面・埋土、ピット263埋土、ピット263 a 埋土出土石器・琥珀玉 ……546
第384図	ピット246埋土、ピット246 a 埋土・床面、ピット247埋土出土石器 ……519	第407図	ピット263 a 埋土、遺体上・上部、ピット263 b 埋土、ピット263 c 埋土、ピット264埋土、ピット265埋土出土石器・石製品 ……548
第385図	ピット246 a 埋土出土石器……520	第408図	ピット267平面図……550
第386図	ピット246 a 埋土、ピット247埋土、ピット250埋土出土石器……521	第409図	ピット267埋土出土石器……551
第387図	ピット249埋土、ピット250埋土出土石器 ……522	第410図	ピット267埋土出土石器……552
第388図	41号、42号竪穴周辺のピット群平面図 ……523	第411図	ピット266埋土、ピット267埋土、ピット268 a 埋土出土石器……554
第389図	ピット252平面図……525	第412図	ピット270、270 a、270 b 平面図 ……555
第390図	ピット252床面・埋土出土石器 ……526	第413図	ピット269埋土、ピット270埋土、ピット270 a 埋土、ピット270 b 埋土出土石器 ……557
第391図	ピット252埋土出土石器……527	第414図	ピット271埋土、ピット272埋土、ピット274埋土出土石器……559
第392図	ピット252 a 埋土、ピット253埋土、ピット254埋土出土石器……528	第415図	ピット268 a 埋土、ピット269埋土、ピット270埋土、ピット270 a 埋土、ピット270 b 埋土、ピット271埋土、ピット272埋土、ピット
第393図	ピット253上部、ピット254埋土、ピット254 a 床面・埋土出土石器・琥珀玉 ……530		
第394図	ピット254 a 平面図……531		
第395図	30号、40号竪穴周辺のピット群 ……532		
第396図	ピット255平面図……533		
第397図	ピット255埋土出土石器……534		
第398図	ピット256埋土、ピット257埋土、		

	ト275埋土、ピット283床面・埋 土出土石器・琥珀玉 ……………560	第421図	ピット295 a 埋土出土土器……………573
第416図	ピット275床面・埋土、ピット275 a 埋土、ピット275 b 埋土出土土 器 ……………561	第422図	ピット295 a 埋土、ピット295 b 埋土出土土器 ……………574
第417図	ピット278埋土、ピット278 a 埋 土、ピット279埋土、ピット280 埋土、ピット281埋土、ピット282 埋土、ピット283床面・埋土、ピッ ト283 a 床面、ピット285埋土、 ピット286埋土、ピット287埋土、 ピット289埋土出土土器……………564	第423図	ピット288埋土、焼土内、ピット 290埋土、ピット291埋土、ピッ ト295 a 埋土、ピット297埋土、 ピット297 a 埋土、ピット297 b 埋土、ピット300床面、人骨頭部 出土石器・鉄製品・ガラス玉 ……576
第418図	ピット290埋土、ピット293床面、 ピット294埋土、ピット295埋土 出土土器 ……………568	第424図	ピット296埋土、ピット297埋土、 ピット297 b 埋土出土土器……………577
第419図	ピット295、295 a、295 b、ピッ ト296平面図……………571	第425図	ピット300平面図……………579
第420図	ピット295 a 埋土出土土器……………572	第426図	埋甕 1 ……………583
		第427図	埋甕 2 ……………584
		第428図	埋甕 3 ……………585
		第429図	埋甕 4 ……………586
		第430図	15号堅穴内各種遺物の出土分布 図 ……………590

図 版 目 次

図版 1	1号竪穴 1号竪穴カマド・床面出土土器	図版26	15号竪穴床面出土土器
図版 2	1号竪穴埋土出土土器 2号竪穴	図版27	15号竪穴床面出土土器
図版 3	3号竪穴 3号竪穴・埋土・床面出土土器	図版28	15号竪穴埋土出土土器
図版 4	4号竪穴 4号竪穴埋土出土土器	図版29	15号竪穴床面出土骨角器
	5号竪穴	図版30	15号竪穴床面・北側骨塚・埋土出土骨角器
図版 5	6号竪穴 6号竪穴発掘調査状況	図版31	15号竪穴床面・中央南小ピット・骨塚・周溝出土石器
	6号竪穴埋土出土土器	図版32	15号竪穴出土青銅製品 15号竪穴埋土出土骨角器 15号竪穴床面出土鉄製品 15号竪穴床面・柱穴出土炭化物
図版 6	7号竪穴 7号竪穴土器出土状況	図版33	15号竪穴床面・埋土出土炭化物
図版 7	7号竪穴床面出土土器 8号竪穴	図版34	15号竪穴床面出土炭化物
	8号竪穴床面出土土器	図版35	15号竪穴床面出土炭化物 15号竪穴床面出土 布・ひも
図版 8	9号竪穴	図版36	16号竪穴 16号竪穴床面・埋土出土土器
図版 9	9号竪穴床面出土土器 10号竪穴	図版37	16号竪穴土器出土状況 16号竪穴床面出土石器 16号竪穴床面出土石器製品 16号竪穴埋土出土鉄器 16号竪穴埋土出土石器製品
図版10	11号竪穴 12号竪穴	図版38	17号竪穴
図版11	小竪穴 2 小竪穴 3 小竪穴 3 床面出土土器	図版39	17号竪穴床面・埋土出土土器 17 a 号竪穴埋土出土土器 17 b 号竪穴 17 b 号竪穴床面出土石器
図版12	12号竪穴 12号竪穴埋土出土土器	図版40	19号竪穴 20号竪穴
	12 a 号竪穴埋土出土土器	図版41	18号竪穴床面出土土器 18 a 号竪穴床面出土石器 21号竪穴 21号竪穴床面・埋土出土土器
図版13	13号竪穴 13号竪穴埋土出土土器	図版42	21号竪穴埋土出土土器 22号竪穴
図版14	掘立柱 小柱穴群	図版43	23号竪穴 23号竪穴埋土出土土器
図版15	小河川跡		23 a 号竪穴埋土出土土器 23 a 号竪穴
図版16	14号竪穴 14号竪穴埋土出土青銅製品 14号竪穴埋土出土土器	図版44	24号竪穴 24号竪穴埋土出土土器
図版17	15号竪穴		24号竪穴床面出土石器
図版18	15号竪穴樹皮検出状況 15号竪穴樹皮と木釘検出状況	図版45	25号竪穴、25 a 号竪穴、25 b 号竪穴
図版19	15号竪穴特大型土器出土状況 15号竪穴大・中・小型土器出土状況		
図版20	15号竪穴小・中型土器出土状況		
図版21	15号竪穴骨塚検出状況 15号竪穴骨塚熊頭部検出状況		
図版22	15号竪穴骨角器出土状況		
図版23	15号竪穴骨角器出土状況 15号竪穴遺物出土状況		
図版24	15号竪穴床面出土土器		
図版25	15号竪穴床面出土土器		

	26 a 号竪穴埋土出土石器 26号竪穴床面出土石器 26 a 号竪穴床面出土石器	図版65	ピット23 a 埋土出土石器
		図版66	ピット24 ピット24遺物出土状況 ピット24埋土出土石器
図版46	28号竪穴 28号竪穴埋土出土石器	図版67	ピット24埋土出土石器 ピット24埋土出土管玉
図版47	29号竪穴 29号竪穴埋土出土石器		
図版48	29 a 号竪穴・29 b 号竪穴 29 a 号竪穴埋土出土石器 29 b 号竪穴埋土出土石器 30号竪穴埋土出土石器	図版68	ピット25 ピット25埋土出土石器・石製品・石器
図版49	31号竪穴 31号竪穴埋土出土石器・石器 32号竪穴	図版69	ピット28、ピット33 ピット28埋土出土石器 ピット33埋土出土石器
図版50	33号竪穴 33号竪穴埋土出土石器 34号竪穴	図版70	ピット32 ピット32床面出土石器 ピット32埋土出土石器
図版51	34号竪穴床面出土石器 35号竪穴埋土出土石器 35号竪穴東壁際上部出土石器	図版71	ピット34 ピット34床面出土石器
図版52	36号竪穴 36号竪穴床面・埋土出土石器	図版72	ピット34床面・赤褐色土・埋土出土石器 ピット35埋土出土石器
図版53	36 a 号竪穴埋土出土石器 37号竪穴	図版73	ピット37 ピット37床面出土石器・石器 ピット37埋土出土石器
図版54	38号竪穴 38号竪穴埋土出土石器 39号竪穴	図版74	ピット38埋土出土石器 ピット38埋土出土石製品
図版55	40号竪穴土器出土状況 40号竪穴床面出土石器 40 a 号竪穴	図版75	ピット39 ピット39床面出土石器
図版56	41号竪穴 42号竪穴 42 a 号竪穴埋土出土石器	図版76	ピット43 ピット43床面出土石器 ピット43床面出土石器
図版57	43号竪穴 43号竪穴カマド 43号竪穴カマド出土石器	図版77	ピット44 a ピット44 a 床面出土石器 ピット44 a 埋土出土石器
図版58	ピット14 ピット15 ピット15埋土出土石器	図版78	ピット46 ピット46埋土出土石器 ピット46床面・埋土出土石器 ピット46 a 床面出土石器
図版59	ピット19床面・埋土出土石器 ピット20 ピット20埋土出土石器 ピット20埋土出土石器・石器	図版79	ピット47 ピット47床面出土石器・石製品 ピット48 ピット48埋土出土石器
図版60	ピット21 ピット21埋土出土石器	図版80	ピット52 ピット52床面出土石器 ピット53 ピット53床面出土石器
図版61	ピット22 ピット22埋土出土石器・石器 ピット22床面出土石器	図版81	ピット95 ピット95埋土出土石器 ピット100
図版62	ピット22 a ピット22 a 埋土出土石器・石器 ピット22 a 埋土出土管玉 ピット22 a 管玉・琥珀出土状況	図版82	ピット102 a ピット102 a 床面出土石器 ピット104 ピット104埋土出土石器
図版63	ピット23 ピット23埋土出土石器 ピット23石器出土状況	図版83	ピット105 ピット105埋土出土石器 ピット116
図版64	ピット23埋土出土石器	図版84	ピット117 ピット117埋土出土石器 ピット121 ピット121埋土出土

	器・石製品	図版100	ピット241 ピット241埋土・出土土器・石器
図版85	ピット119埋土出土石器	図版101	ピット246 a ピット246 a埋土出土土器・石器
図版86	ピット122 a ピット122 a床面出土石器・石製品・琥珀 ピット122 a埋土出土石器 ピット125埋土出土土器	図版102	ピット252土器出土状況 ピット252遺体出土状況
図版87	ピット126 ピット126埋土出土土器・石製品	図版103	ピット252床面出土土器 ピット252埋土出土土器
図版88	ピット128	図版104	ピット253埋土出土土器 ピット254埋土出土土器・琥珀 ピット255
図版89	ピット130 ピット130埋土出土土器・石器	図版105	ピット260 ピット260埋土出土土器 ピット261埋土出土土器 ピット261埋土出土土器
図版90	ピット132 ピット132床面出土土器・石器	図版106	ピット262 a
図版91	ピット133 ピット133床面出土土器 ピット138 ピット138埋土出土土器	図版107	ピット263 a ピット263 a琥珀
図版92	ピット143上部角礫出土状況 ピット143遺体検出状況 ピット143床面出土土器	図版108	ピット263 a埋土・遺体上出土石器 ピット263 a上部出土石製品
図版93	ピット145 ピット145床面出土土器 ピット150	図版109	ピット263 c埋土出土土器 ピット267 ピット267埋土出土土器
図版94	ピット151床面・埋土出土土器 ピット153埋土出土土器 ピット154埋土出土土器	図版110	ピット267埋土出土土器
図版95	ピット157 ピット157床面出土土器 ピット175、ピット176 ピット185上部出土土器	図版111	ピット272埋土出土土器 ピット274埋土出土土器 ピット274 ピット288
図版96	ピット201	図版112	ピット293床面出土土器 ピット295 a
図版97	ピット201床面・埋土出土土器 201ベニガラ内出土石製品 ピット208床面出土土器	図版113	ピット295 a遺体上出土土器
図版98	ピット213土墳墓 ピット213土器出土状況 ピット213埋土出土土器	図版114	ピット300遺体検出状況 ピット300人骨頭部と鉄器出土状況 ピット300床面出土鉄製品
図版99	ピット234 ピット234埋土出土土器 ピット242床面出土土器	図版115	埋甕1 埋甕1 埋甕2
		図版116	埋甕3 埋甕4
		図版117	配石1 配石2
		図版118	15号竪穴北側の屋外炉

付編表図版目次

付編 I

表 1	常呂川河口遺跡 14～16号 住居址出土動物種と最小個 体数……………	604
表 2	15号住居址 ヒグマ出土量 (頭蓋骨) ……	605
表 3	15号住居址 ヒグマ出土量 (下顎骨) ……	606
表 4	15号住居址 ヒグマ出土量 (頭蓋骨・下顎骨以外) …	607
表 5	15号住居址 キツネ・タヌ キ・シカ出土量(頭蓋骨・下 顎骨) ……	608
表 6	15号住居址 テン出土量 (頭蓋骨・下顎骨) ……	609
表 7	15号住居址 その他の陸獣 類出土量(頭蓋骨・下顎骨)	609
表 8	15号住居址 ヒグマ以外の 陸獣類出土量(頭蓋骨・下 顎骨以外) ……	610
表 9	15号住居址 海獣類・鳥類・ 焼骨片出土量……………	611
表10	15号住居址 魚類出土量…	611
表11	14号住居址 動物遺存体出 土量……………	612
表12	16号住居址 動物遺存体出 土量……………	612
図版 1	15号住居址出土ヒグマ……………	613
図版 2	15号住居址出土ヒグマ……………	614

付編 II

表 1	常呂川河口遺跡15号住居跡 から出土した植物遺体……	619
図版 1	15号住居跡から出土した植物遺 体……………	620

付編 III

図版 1	ピット300出土頭蓋 ……	625
図版 2	ピット300出土下顎骨 ……	625

付編 IV

表 1	ヒスイ輝石の化学組織……	628
図 1	蛇紋岩メランジェ帯とヒス イ輝石の分布……………	626
図 2	神居古潭産のヒスイ輝石成 分……………	627
図 3	青海産のヒスイ輝石成分…	627
図 4	常呂川河口遺跡出土ヒスイ 玉の化学分析……………	629
図版 1	分析の事前処理……………	632
図版 2	資料ホルダーに挿入したヒスイ 玉資料……………	632
図版 3	分析装置と資料の挿入……………	632
図版 4	分析データの表示とプリンター での打ち出し……………	633
図版 5	走査顕微鏡によるヒスイ玉の表 面と分析場所……………	633

付編 V

表 1	炭化材の樹種同定結果……	635
図版 1	炭化材(1)……………	639
図版 2	炭化材(2)……………	640
図版 3	炭化材(3)……………	641

第 I 章 調査に至る経過

1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山(標高1,541m)に源を発し、流路延長120km、流域面積1,930km²におよぶ1級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃から開拓が進み森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象になった地域は昭和50年の台風6号による出水で河川の決壊、床上浸水等の被害が出たため新捷水路を設けるために工事計画が策定された。常呂川は本遺跡の付近で大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨の時に上流部で溢水するなどの問題があり、水の流れをスムーズにするために蛇行部のショートカットを行うことを目的とされた。昭和52年から用地内の土地買収も進められ、昭和56年には工事着手の計画であった。しかし、直前に遺跡の存在が確認され、昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出された。これを受けて同年11月11日～12日に北海道教育委員会、(財)北海道埋蔵文化財センター、本町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。この結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上にあり、さらに低地の地域には堅穴の存在することが判明した。遺跡の総面積は約140,000m²に及びこの内39,000m²が発掘必要区域である。時期的には縄文中期、晩期、続縄文、擦文、オホーツク文化の各期にわたっている。砂丘上では縄文中期までの包含層は砂層(無遺物層)を挟んで1m50cmにも達する。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間が費やされるなどの問題があり実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部で常呂川下流域の堤防整備が講じられ、本遺跡を回避するため捷水路ルートの変更も考えられ、工事計画以外の区域についても包蔵地範囲確認調査が必要となった。昭和57年9月2日に再度事前協議書が提出された。このため北海道教育委員会と本町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で確認調査を実施した。昭和60年、61年度の調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが包含層は認められなかった。この様な背景とともに常呂川下流域の堤防整備も一段落し、本来の計画通りに新捷水路工事を進めるために事前の緊急

常呂川河口遺跡

調査の依頼があった。しかし、調査にはかなりの歳月を要し、調査体制の問題などもあり、本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の紹介を依頼したが、他に適した機関が無いため本町教育委員会が調査体制の充実を図り実施することになった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅120m、延長320mであるが、調査を終了するには約10年間の歳月が予想される。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすことは困難であり、新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mをまず通したいとの要望があった。しかし、この場合幅20mの護岸部が後回しになり、検出される遺構も半掘りのまま残されるおそれもあるため調査については護岸部を含めて行うことにした。

2

調査グリッドは新捷水路センター杭のIP.No 1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

文 献

網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987

常呂町 『常呂町史』 1969

第II章 遺跡の地形

常呂地域の地形・地質は標高70～75m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15m低位段丘に分けられる。本遺跡は中位段丘から派生するように常呂川に向かって伸びる標高4～5mの低位段丘とこの面よりもさらに低位である標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年、平成1年はこの氾濫原と思われる標高2～3m前後の区域を調査した。この区域の地盤は層厚約30～40cmの黄褐色粘土層でありその下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸では層厚約3～4mに及んでおり、川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層が厚いようである。包蔵地範囲確認調査では約3mのところから木杭が出土している。この区域では現在のところ擦文文化期の竪穴しか発見されていないが、木杭の出土で裏付けられるように下層には他の時期の包含層の存在が想定される。この区域には盛土による道路が横断しているため地形の原形は捉えにくい、台地側から常呂川に向かって緩い傾斜をなしていたと思われる。標高4～5mの低位段丘は平成2年から調査を実施している区域である。この低位段丘はトコロチャシ跡のある中位段丘面側に緩く傾斜し、西側は常呂川方向にむかって伸びている。調査当初は栄浦第二・第一遺跡、常呂竪穴群のある新砂丘I、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査が進むにつれて様々なことが判明した。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫による堆積で形成されたと考えられることである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含んでいる。この砂礫層は数枚の薄い文化層と交互に堆積し、最終面の比較的安定した縄文前期末から中期の文化層にいたる。

第I層	表土層	
第II層	茶褐色砂層	縄文文化晩期、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化
第III層	褐色砂層	無遺物層
第IV層	黒色土層	縄文後期
第V層	褐色砂層	無遺物層
第VI層	黒色砂層	縄文中期後半
第VII層	褐色砂層	遺物包含層
第VIII層	黒色土層	縄文前期末～中期

第V層と第VI層の間にも区域によって2～3枚の薄い黒色土が堆積しているが、遺物は包含していない。

第VII層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中

期のトコロ六類、五類の北筒式が満遍なく出土している。下層の安定した縄文前期末から中期の文化層とは明らかに出土状態が異なっている。第VII層は河川の氾濫等による土砂の流失により堆積したため時期が逆転していると思われる。この様にこの低位面は洪水等による土砂の堆積が繰り返されたことにより形成されたものと判断される。次に明らかになったことは第2図—地形模式図に示す通り少なくとも3回のせり出しが観察されたことである。

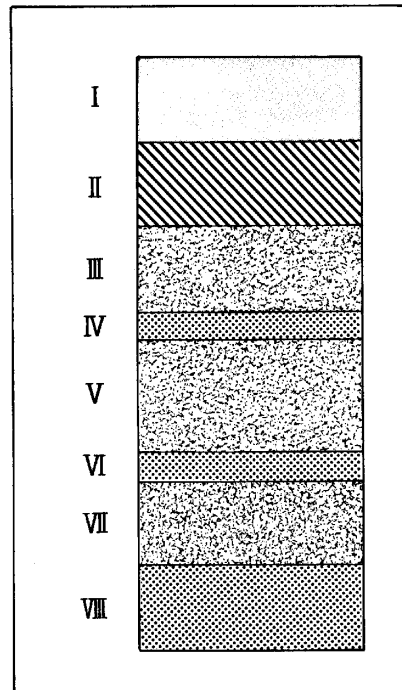
第1次形成は第VIII層の縄文前期末の押型文、中期のトコロ六類の文化層までである。円礫、角礫を含む極めて硬質な黒色土であり層厚は約20～30cm。

第2次形成は上記した第II層～第VII層が第VIII層を覆うように西側に向かって約2～20mほど大きくせり出している。

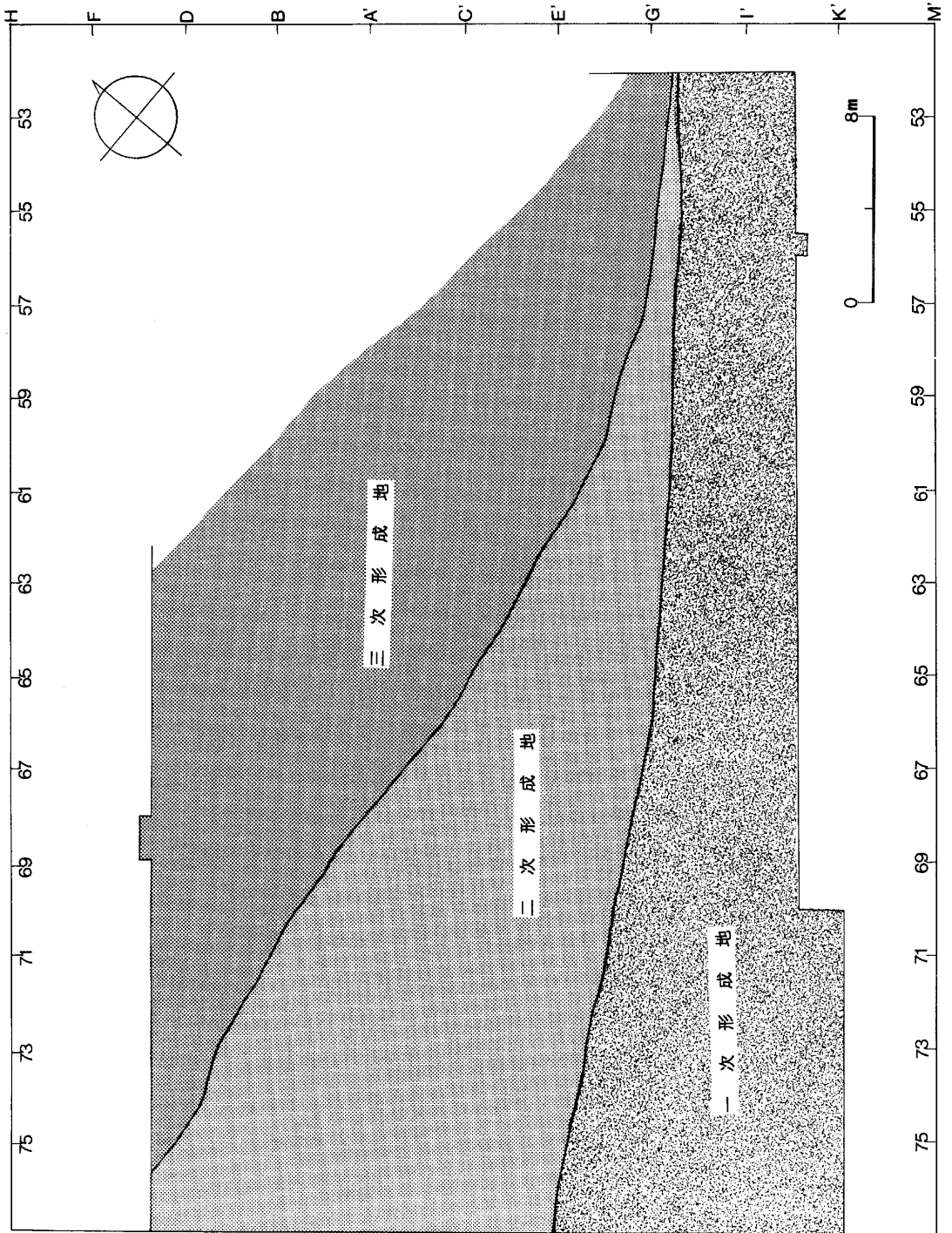
第3次形成地には擦文期の竪穴と続縄文後北C₂・D式の生活面、オホーツク文化期の文化期の遺物包含層があるだけで、それよりも以前の時期の遺構は全く認められない。この面の土層は基本的にI層表土。II層褐色砂。III層礫層（5～15cmの角礫を主体に、2～5cmの円礫もわずかに含む）。IV層黒色砂層（オホーツク文化期e群包含層）。V層褐色砂層。VI層（後北C₂・D、北大式包含層）に分層される。さらに下層は砂層と粘土層が互層に堆積している様であるが、完全に掘り下げていないため詳細は次回に報告する。第2次形成地と第3次形成地の間は自然の細長い浅い窪みが伸び、オホーツク文化期の生活面が認められる。これらのことから第2次形成地は縄文中期後半から晩期にかけて約6回の河川堆積の後に形成された可能性がある。第3次形成地はそれ以後のものであることは確実であり、砂質土は第2次形成地の砂に比して粒子が極めて細かい。

文 献

- 1) 遠藤邦彦・上杉陽『常呂』所収
東京大学文学部 1972



第1図 基本層序模式図

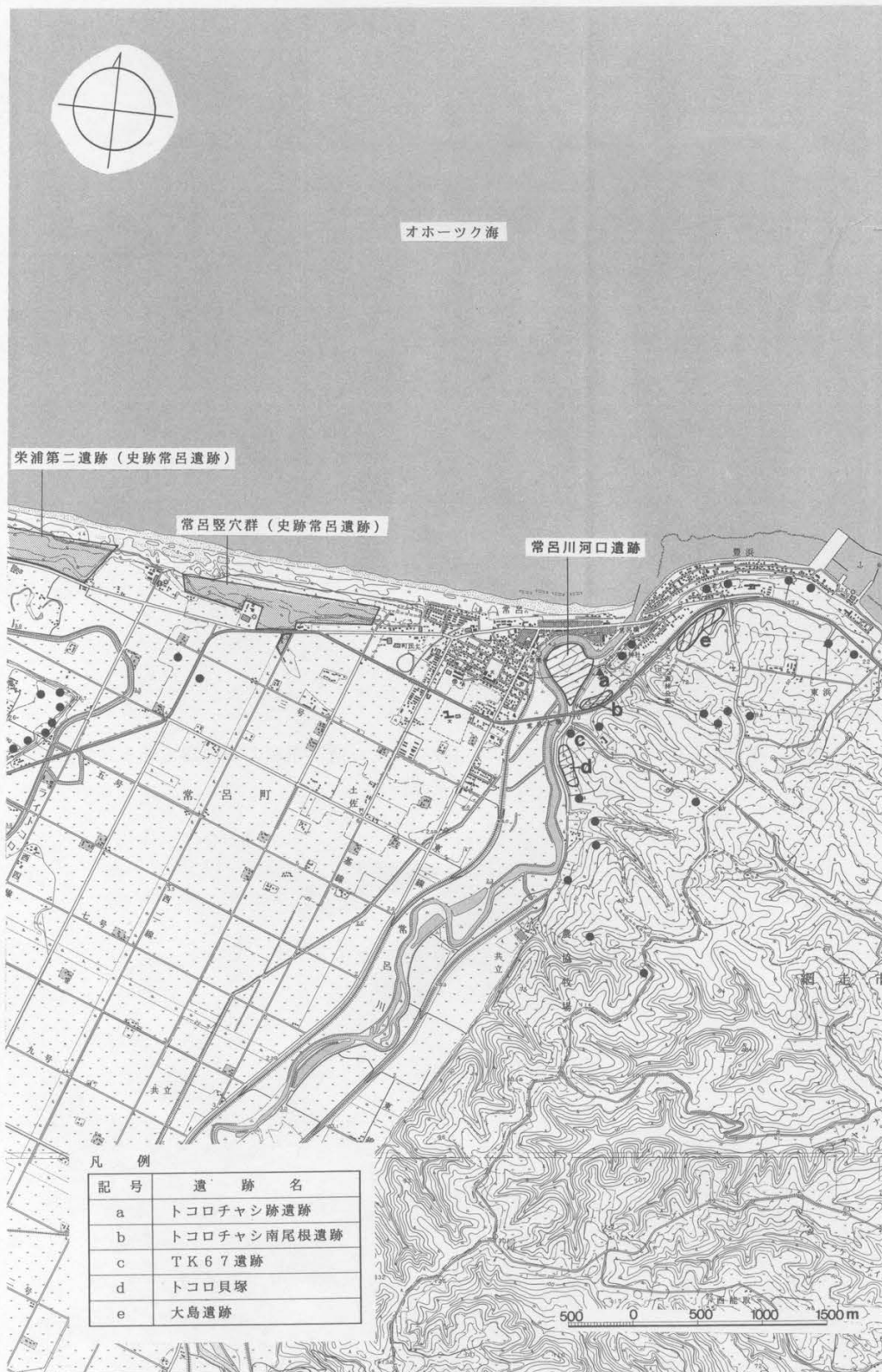


第2図 地形模式図

第三章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本堅穴から約100～150mの距離である。昭和35年に東京大学文学部により擦文文化とアイヌ文化の研究を目的に行われ、オホーツク文化1号内側(藤本e群)、1号外側の2軒が調査された。また、堅穴の埋土中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期の堅穴関係を解明するためオホーツク文化2号堅穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年からは再度トコロチャシ跡の濠の調査を実施しているが、平成7年度において刀子、中柄、青銅製円盤をもつ矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている。トコロチャシ跡から南側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとして大型住居の窪地が多くありトコロチャシ南尾根遺跡に続いている。この遺跡は標高60～80mの高位段丘面から西側に派生する台地の縁辺部にある。地表面から32軒の堅穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により北筒式の1号堅穴が学術調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設」(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査が行われ18軒の堅穴が調査されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式、鮫潤式、エリモB式が出土している。昭和61年にはこの遺跡の最西端部で住宅建設工事に伴う緊急発掘調査が行われ9軒の堅穴が調査されている。擦文文化の堅穴埋土からは頸部に「井」のヘラ記号を持つ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土し、縄文晩期のピットからは中葉頃の刺突の施された鉢型土器とボート状の浅鉢が出土している。トコロチャシ南尾根遺跡から沢を挟んだ対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61年、62年に道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急調査されている。常呂川を望む台地の縁辺部から比較的急傾斜な北側斜面に擦文期の堅穴5軒、時期不明のピット群があり、さらに奥まったところには続縄文期を主体とした堅穴7軒がある。擦文期は後半期のものであり、包含層からは五所川原産の大甕の須恵器が出土している。常呂町内から須恵器が出土する遺跡はこのほか包蔵地範囲確認調査において岐阜127-6番地から1点、常呂川河口遺跡から1点出土している。いずれも五所川原産である。TK67遺跡に続いてトコロ貝塚がある。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。昭和33年～36年に東京大学文学部による学術調査が実施されトコロ六類、五類が層位的に確認された。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、本遺跡の性格を解明する上でも重要な意義がある。例えばオホーツク文化期の堅穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と本堅穴の15号はソーメン状貼付文(藤本e群)の時期であり、両者に新旧関係があるのかそれとも同時併存するのか等の問題がある。擦文期の堅穴も常呂川河口遺跡と同じ宇田川編年後期のものが多い。続縄文期の堅穴では宇津内系が多いようである。縄文後期では今のところ常呂川河口遺跡から



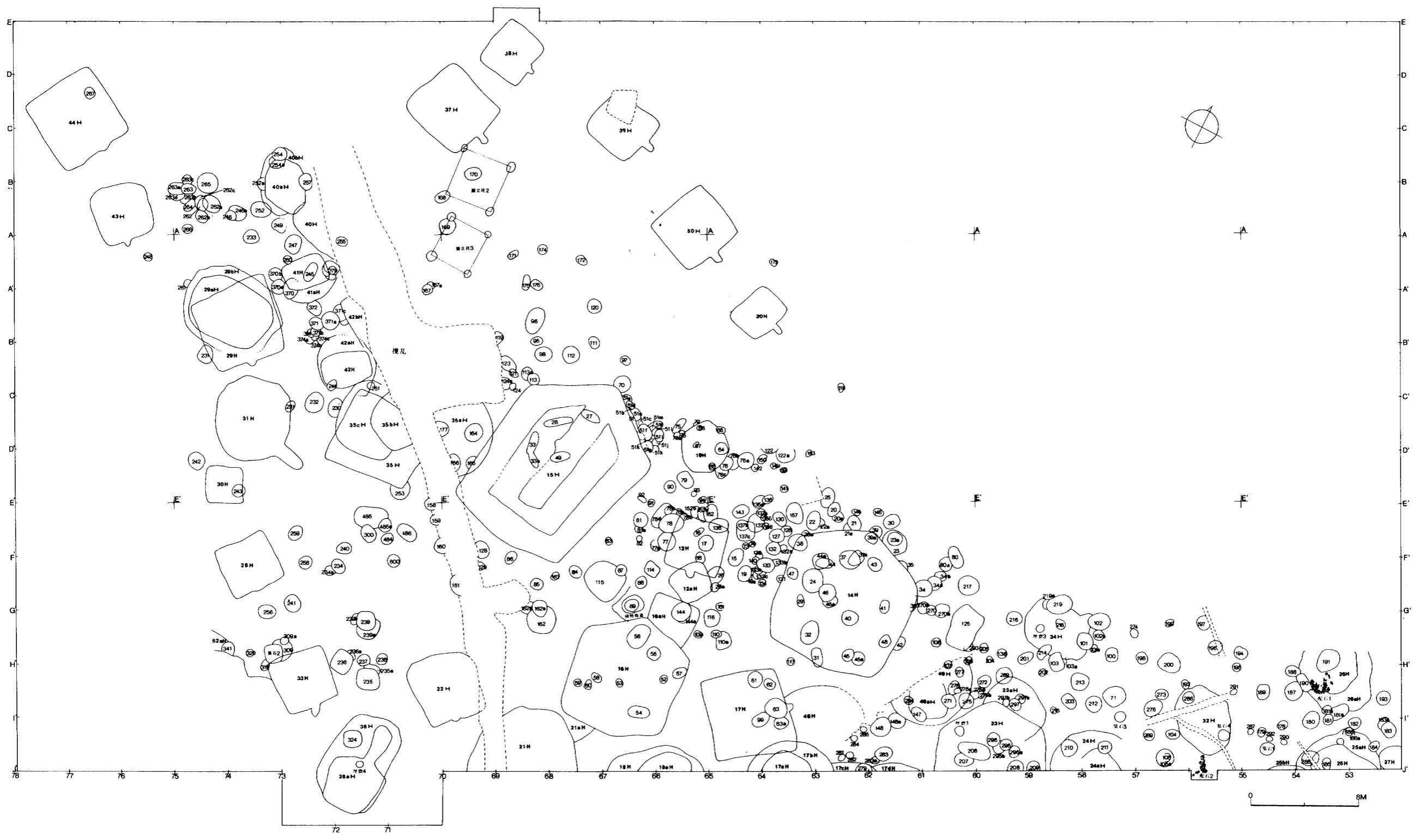
第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

常呂川河口遺跡

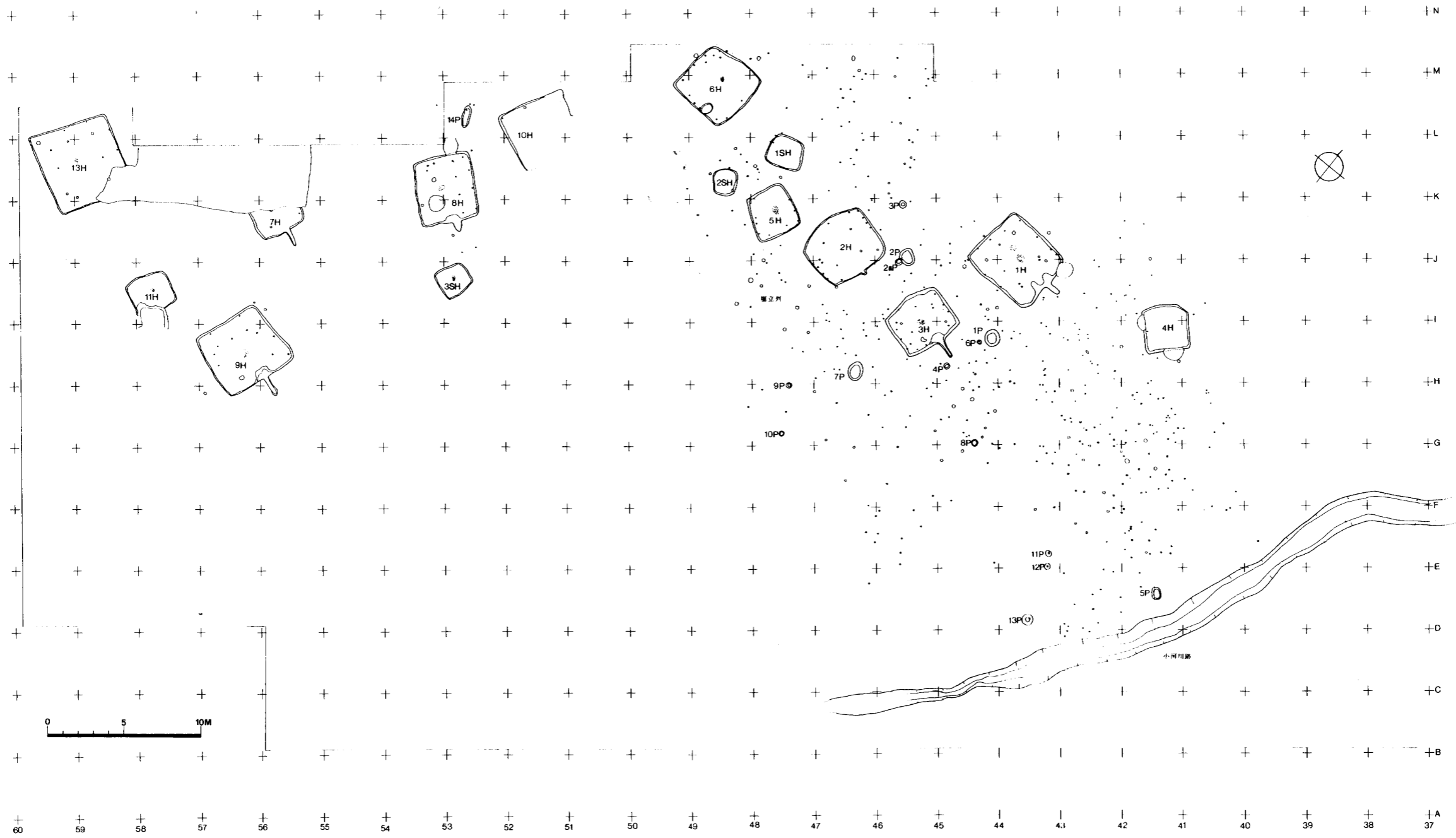
は竪穴の発見はないが、ピット及び包含層の出土から周辺にこの時期の集落の存在が予想される。これらの遺跡はごく一部分を調査したにすぎず各時期の全容は明らかにすることはできないが、現時点でこれらの遺跡と比較すると低地である常呂川河口遺跡の方が面としての広がり大きいようである。段丘上の遺跡と低地の遺跡は同時併存したのか、ある程度の時期（間）があるのか今後の課題である。常呂川河口遺跡の場合は漁労活動上の一時的な生活場としてではなくかなり定住しているようである。それは前北式系の人々が最も顕著のようである。宇津内系の竪穴は7軒ある。集落の近くには墓域が形成されている。墓の副葬品は他の遺跡から比較すると圧倒的に豊富である。ピット95、254、263 a、がその例であり特に琥珀玉の出土は目を見張るものがある。副葬品の豊富さは、食料源の安定によるものと思われ、定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模の遺跡が存在する理由を改めて考える必要がある。

文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室 「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995.9



第4図 遺構配置図(1)



第5図 遺構配置図(2)

第IV章 竪穴住居

1 号 竪 穴

遺 構 (第6図、図版1)

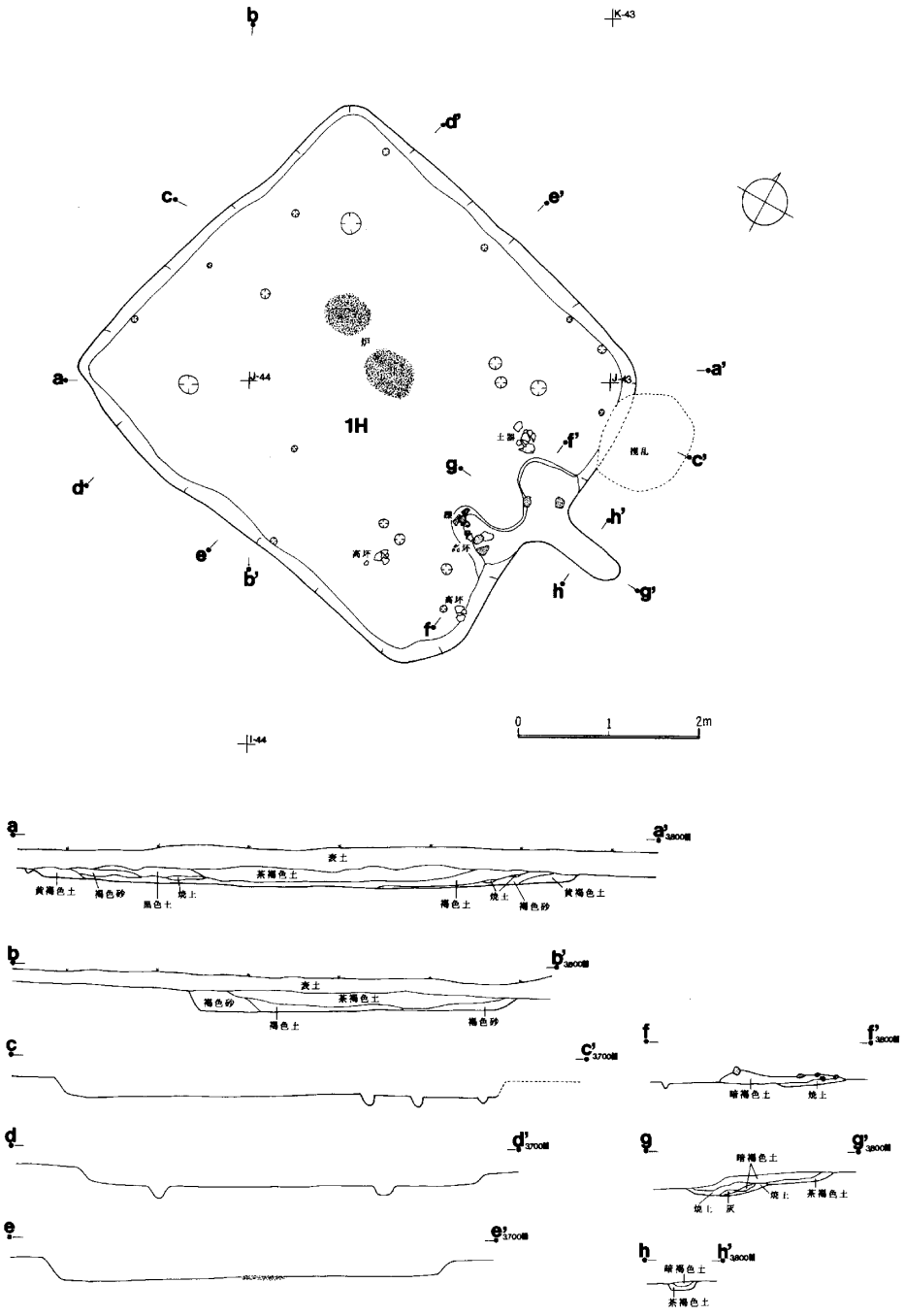
本竪穴は昭和57年度に行った包蔵地範囲確認調査の際に発見した。ユンボでトレンチ状に表土を剝土すると茶褐色土の落ち込みが確認され、擦文土器が数点出土した。この度の調査ではまず本竪穴と隣接する2号竪穴を手始めに周辺の周辺に広げることとした。本竪穴の調査はJ43、J44グリッドとK44、J44グリッドに土層観察用ベルトを残し表土を剝土すると地山と考えられる黄褐色粘土層が現れた。この周辺の黄褐色粘土は微量の砂と多量の礫を含み、土質は固い。礫は拳大の角礫を主体としており床面にも露呈している。竪穴はこの黄褐色粘土を切り込んで構築されている。

本竪穴のプランは長軸5.0m、短軸4.40mの方形を呈し、東西がやや長い形状になっている。壁高は確認面から約20cmである。カマドは東壁中央部に構築されている。遺存は悪い。袖部等の構築材は粘土混じりの暗褐色土と角礫を用いている。煙道は壁から約1m、幅約30cmで細長く伸びている。燃焼部は強い火熱を受けたため赤変している。燃焼部の上には灰と焼土が堆積しており、焼土には魚骨と思われる微細な骨片が多量に検出された。炉跡は竪穴中央部とやや西側にずれた部分の2箇所にある。いずれも直径約50cmほどで良く焼けている。支柱穴は4本ある。直径約20cm、深さは約10～13cmである。壁柱穴は北壁4本、南壁1本、西壁3本、東壁2本を検出した。いずれも直径約5～8cm、深さ約5cmである。北壁と西壁の状況から判断するとほぼ等間隔に配置されていたものと思われる。埋土には図化されるほどではないが炭化材、焼土も認められたところから火災住居と思われる。

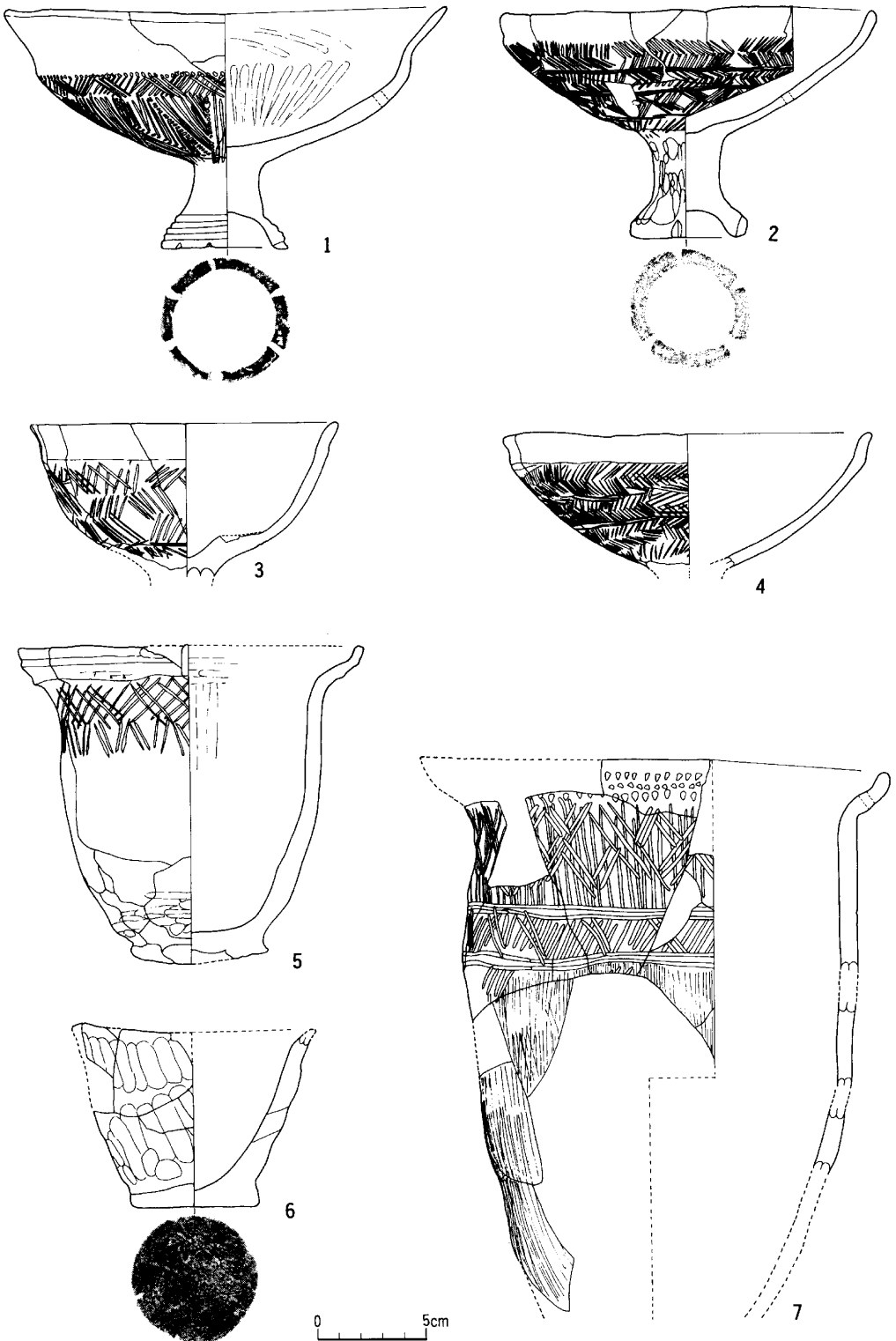
遺 物 (第7図～第9図、第16図-1、図版1-2～5、図版2-1～4)

本竪穴に伴うものと思われる遺物はカマドとその周辺から出土している。第7図-1～4は高杯。1は口縁の中広い無文帯が大きく外に開いている。文様は刻線文と列点文を丁寧に施文している。成形、焼成も良い。底部に6箇所の刻みが施されている。2はやや長めの脚部から杯部が緩く開き、口唇部が垂直に立ち上がる。文様は矢羽根状の刻線が三段の横走洗線により区画されている。脚部は筧により調整され、底部には4箇所の刻みが施されている。3は杯部は半球状を呈し、文様は菱形文を基本としている。脚部は欠失している。4は2と同様の器形、施文である。脚部は欠失している。5は小型鉢形土器。ほぼ等間隔に刻線を施した後にクロスする様に3本単位の刻線を施している。胴下部とは「ハ」字形の刻線で区画される。6は無文の杯形土器。器面は筧により調整されているが、部分的に指痕がみられる。

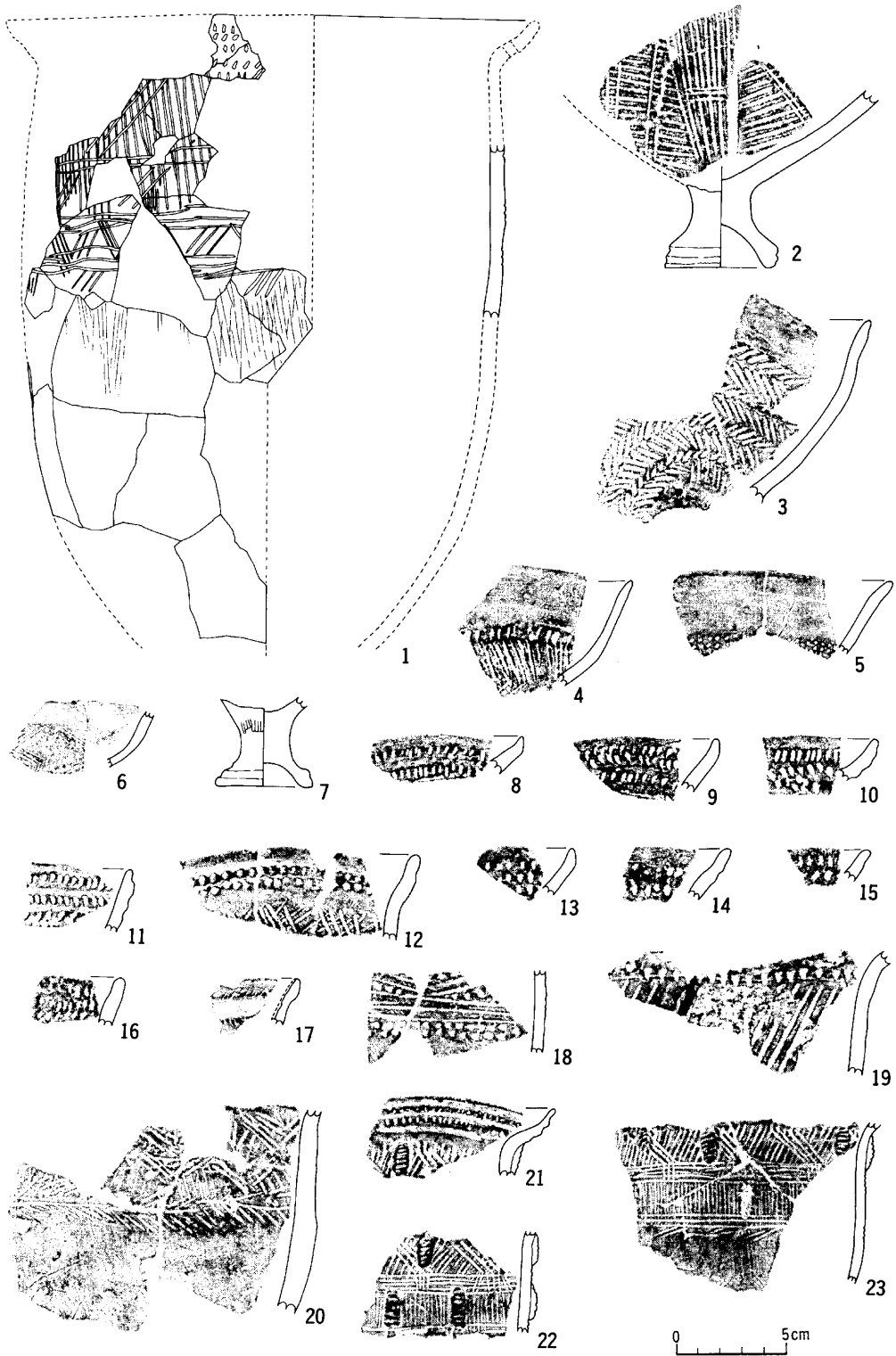
埋土からは7の中型鉢形土器が出土した。この土器は周辺グリッド出土のもののが接合した。



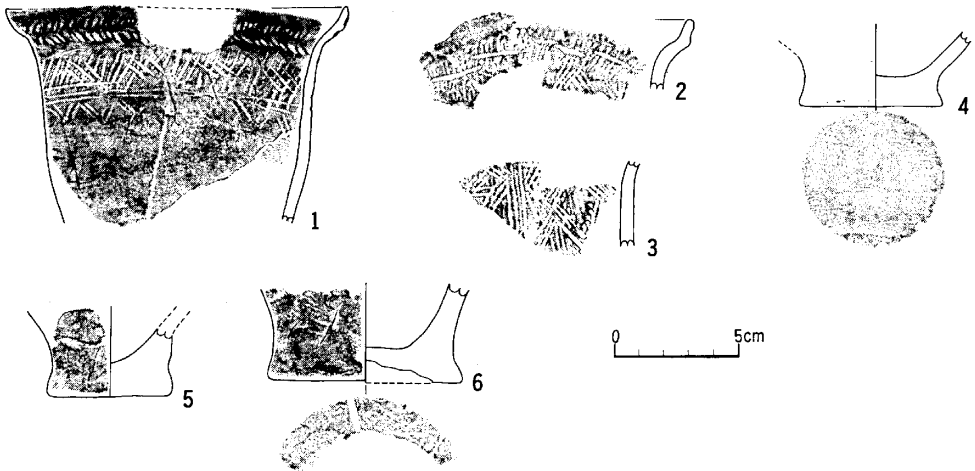
第6图 1号竖穴平面图



第7図 1号竪穴カマド(1・3)・床面(2・4)・埋土(5~7)出土土器



第 8 图 1 号竖穴埋土(1~23)出土土器



第9図 1号竪穴埋土(1~6)出土土器

口縁は緩く開き、文様は複段化を呈する。上段部は縦の刻線を施した後に菱形文を意識して施している。第8図-1~23も埋土出土である。1は大型鉢形土器で、一部は南壁側の焼土と同レベルから出土しているものの、大半は周辺のグリッドから出土したものと接合した。口縁部は「く」字形に開き、短刻文が施される。文様は2~3本の横走沈線で区画された複段文様であるが、施文は雑である。2~7は高杯。2は杯部がかなり斜めに立ち上がる。8~23は鉢型土器である。21~23には2cm程のワラジ虫形の貼付が施される。施文は丁寧である。第9図-1~6も埋土出土。第16図-1は樹皮製品である。数枚の樹皮を楕円状に丸めたもので中空となる。

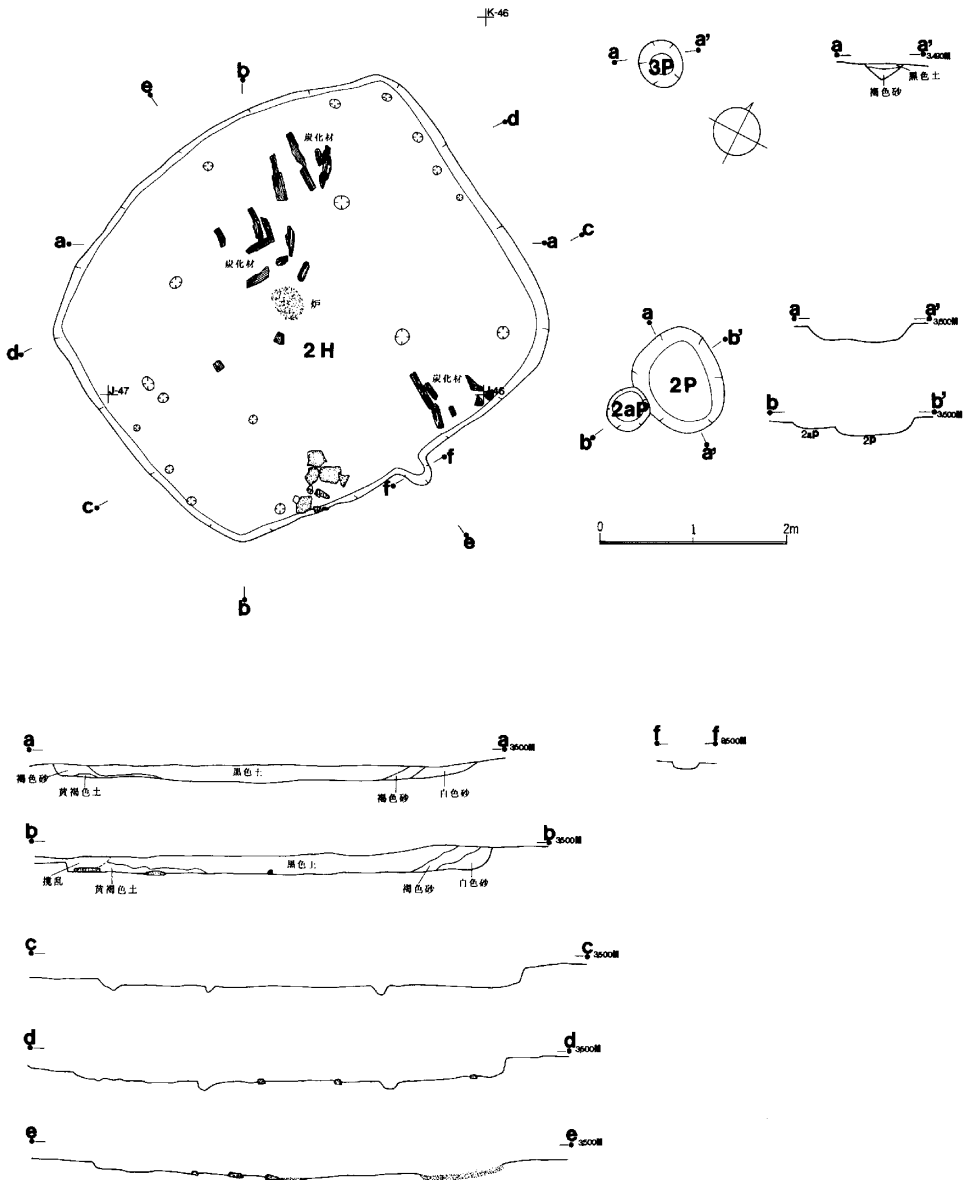
小 括

本竪穴は長軸5.0m、短軸4.40mの方形を呈する。擦文期の火災住居と思われる。カマドは東壁中央部に構築されている。遺物の多くはカマドの周辺から出土している。特に高杯は4点と多い。時期は藤本編年g~h期、宇田川編年後期に比定される。

2号竖穴

遺構 (第10図、図版2-5)

本竖穴も昭和57年度に行った包蔵地範囲確認調査の際に発見した。1号竖穴の西側約5.5mに位置している。竖穴の掘り込みは浅く地山の黄褐色粘土を約15~20cm程切り込んで構築されている。内部の埋土は黒色土が堆積しており、壁際では褐色砂と白色砂が見られる。



第10図 2号竖穴、ピット2、ピット2a、ピット3平面図

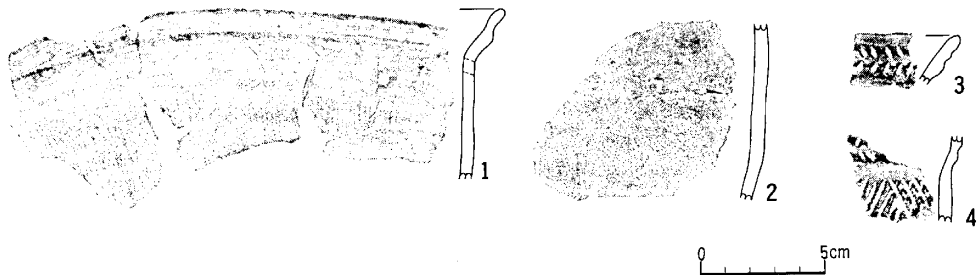
本竪穴のプランは長軸4.6m、短軸4.4mの方形を呈している。壁高は確認面から約20cmを測る。西壁側が胴張り状に緩く膨らんでいる。カマドは東壁中央部に構築されている。構築材である粘土はわずかに認められたが原形をとどめていない。カマドの袖部等に使用する角礫は東側からまとまって出土している。表面は火熱を受けている。燃床部はわずかに赤変している程度であった。煙道は約30cmと短い。炉跡は竪穴の中央部にあり、床面は良く焼けている。支柱穴は炉跡から約1mの位置に4本認められる。直径約10~15cm、深さ約9cmである。壁柱穴は北壁4本、西壁2本、南壁3本、東壁2本がある。直径約6~13cm、深さ約3~8cmである。炭化材は丸材でカマドの北側及び炉跡の周辺と西壁付近にある。

遺物 (第11図-1~4、第16図-2)

床面からの出土遺物はなく埋土出土であり、点数も4点と少ない。1は口縁部に幅広い1条の横走沈線が施される。器面は刷毛により調整されている。2は胴部片。3は口縁部に矢羽根状の短刻文が施される。4は3と同一個体と思われる。第16図-2は刀子である。現存の長さは3cm。実測図左側がすぼまるため先端部近くと思われる。幅1.5cmである。

小括

本竪穴は長軸4.6m、短軸4.4mの方形を呈する。擦文期の火災住居と思われる。カマドは東壁中央部に構築されているが遺存は悪い。詳細な時期は不明である。



第11図 2号竪穴埋土(1~4)出土土器

3 号 豎 穴

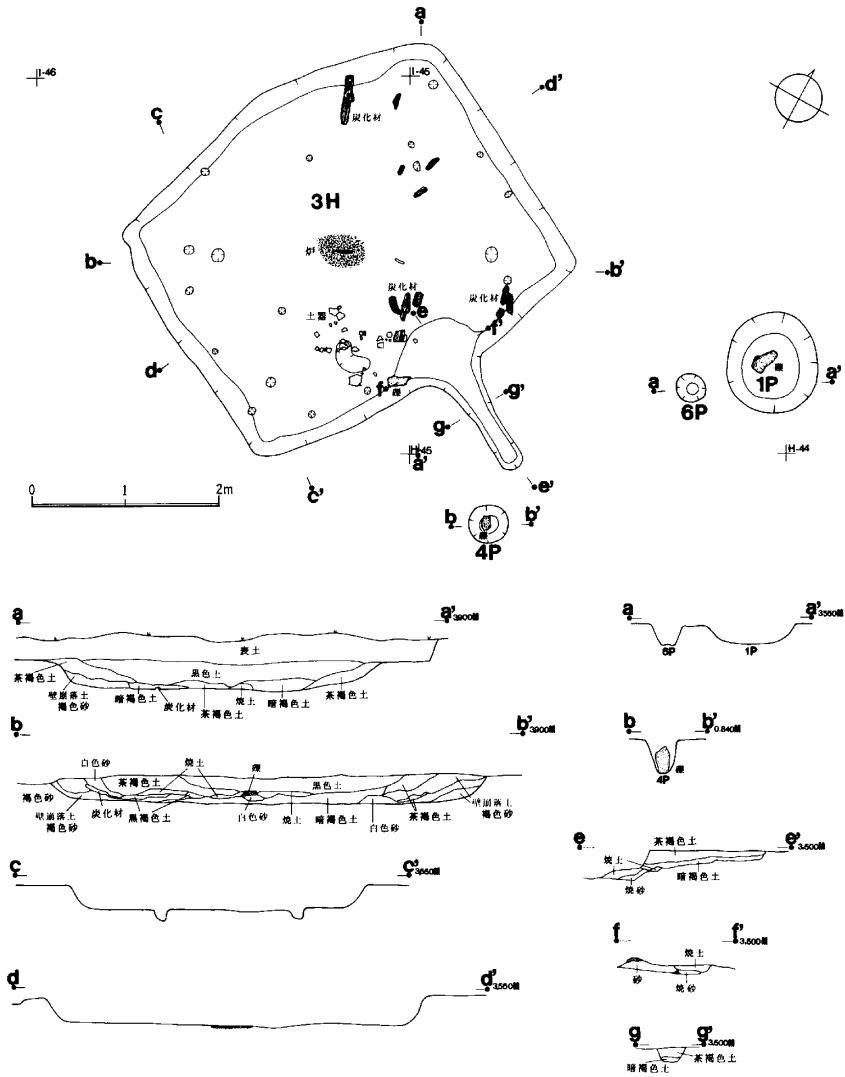
遺 構 (第12図、図版3-1)

本豎穴は1号豎穴の南側約3.8mの位置にある。規模は長軸約4m、短軸約3.5mで南北にやや長いプランである。壁高は確認面である地山の黄褐色粘土から約30cmである。比較的緩やかに立ち上がる。この豎穴は火災住居であるため埋土には焼土が著しく堆積している。焼土は床面から浮いて検出された。1号豎穴の場合も同様であったが焼土がなぜ間層を挟んで存在するのか疑問を抱くところである。炭化材も床面密着ではなく僅かながら浮いている。焼け落ちるまでにある程度の時間が要し、土砂が流れ込んでから建築材が落ちたのかもしれないが定かでない。カマドは東壁中央部に構築されている。遺存は悪い。構築材としての粘土等はない。右側袖部では砂が認められたほか、袖部に使用したと思われる角礫が壁際に見られる。煙道は壁から1.20m、幅25cmで細長く水平に伸びる。燃床部は赤変している。カマドの南側には直径約40cm、幅約20cm、深さ15cmの小ピットがありこの周辺から第13図-1の土器が出土している。土器を置くための小ピットと思われる。炭化材はカマドの周辺と西壁部でわずかに見られる。炭化材はカマドのある東側から西側に向かって倒れている。支柱穴と思われるものは4本ある。直径約10~15cm、深さ約7~14cmである。壁柱穴は北壁3本、西壁1本、南壁3本、東壁3本ある。いずれも直径約5cmから10cm、深さ約5cmでほぼ等間隔に配置されている。炉跡は中央部にある。

遺 物 (第13図、第14図、図版3-2~4)

床面からは第13図-1が出土している。この土器は中型鉢形土器である。底部が斜めなため不安定で立てることができない。この土器はカマドの南側の袖部近くの小ピットの周辺から出土したが、不安定なこの土器はピットの中に入れて使用したのかもしれない。口縁部には矢羽根状の短刻文が1段施される。胴上部の文様は鋸歯文を基本とし全面を刻線で埋めている。口縁部の内・外面には煮汁の煤が付着している。

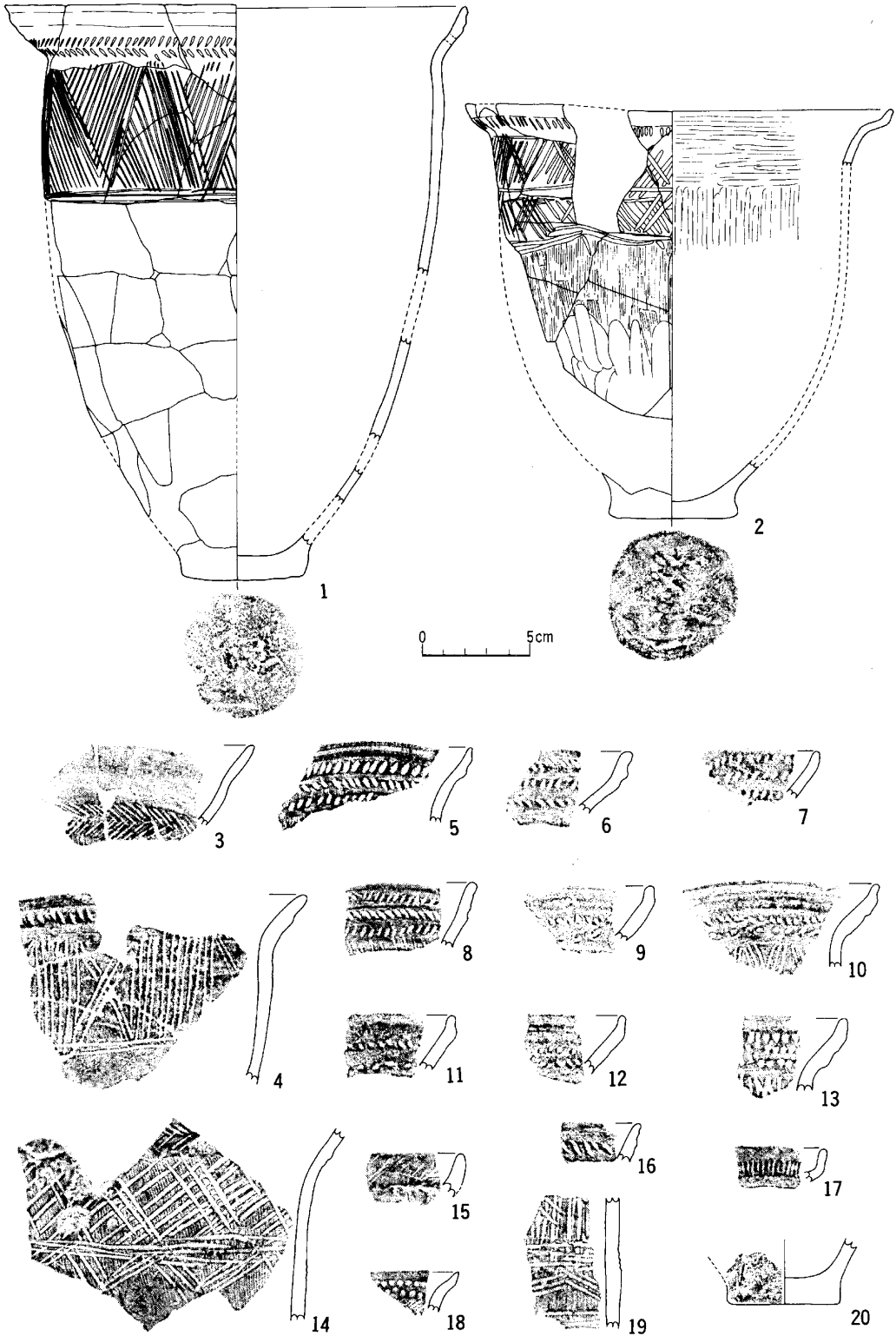
埋土からは第13図-2~20が出土している。2は中型鉢形土器。口縁部には短刻文が1列めぐり。文様は左下がり、右下がりの刻線を全面に施し、その上に2~3本の刻線を施し、横走沈線で区画している。内面は篋により調整されている。底部は凹凸があり葉脈状の細い線がみられる。3は高杯。5~20は中型鉢形土器である。第14図-1~4も埋土出土。1は小型鉢形土器である。1は横沈線が施され、下部は篋により丁寧に調整されている。2は口縁部が外に開いた無文の小型鉢形土器。3は無文の大型鉢形土器である。頸部に約1cm程の浅い沈線がめぐり。胴上部は2号豎穴埋土、下部は3号豎穴埋土から出土したものと接合した。4は紡錘車。中央は「十」字状、外周部は円形の沈線が施され、外周面に3本の溝が巡る。重量90g。



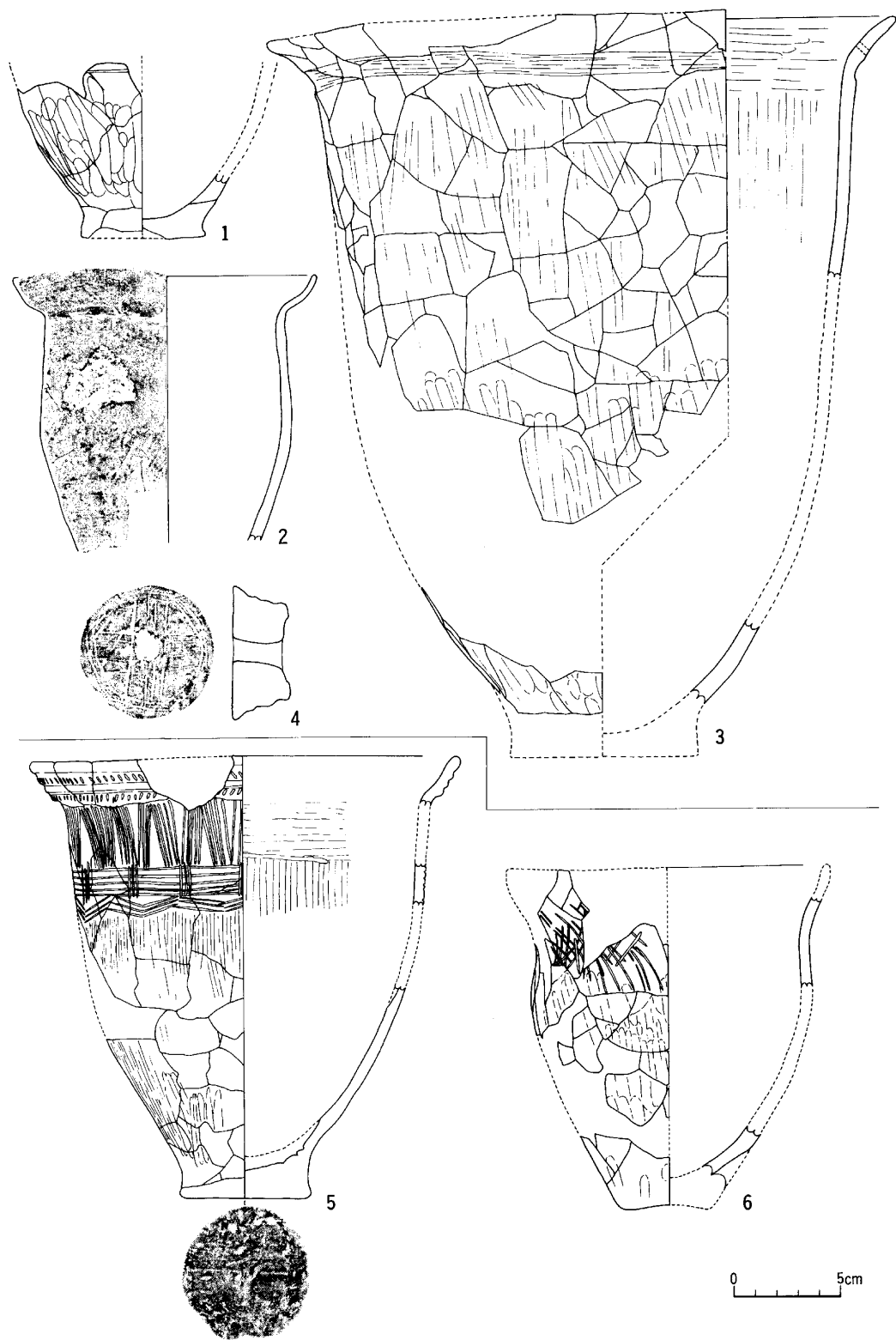
第12図 3号竪穴、ピット1、ピット4、ピット6平面図

小 括

本竪穴は長軸約4m、短軸約3.5mの方形を呈する。擦文期の火災住居である。カマドは東壁中央部に構築されている。時期は藤本編年i~j期、宇田川編年後、晩期に比定される。



第13図 3号竪穴床面(1)・埋土(2~20)出土土器



第14图 3号竖穴埋土(1~4)、4号竖穴埋土(5·6)出土土器

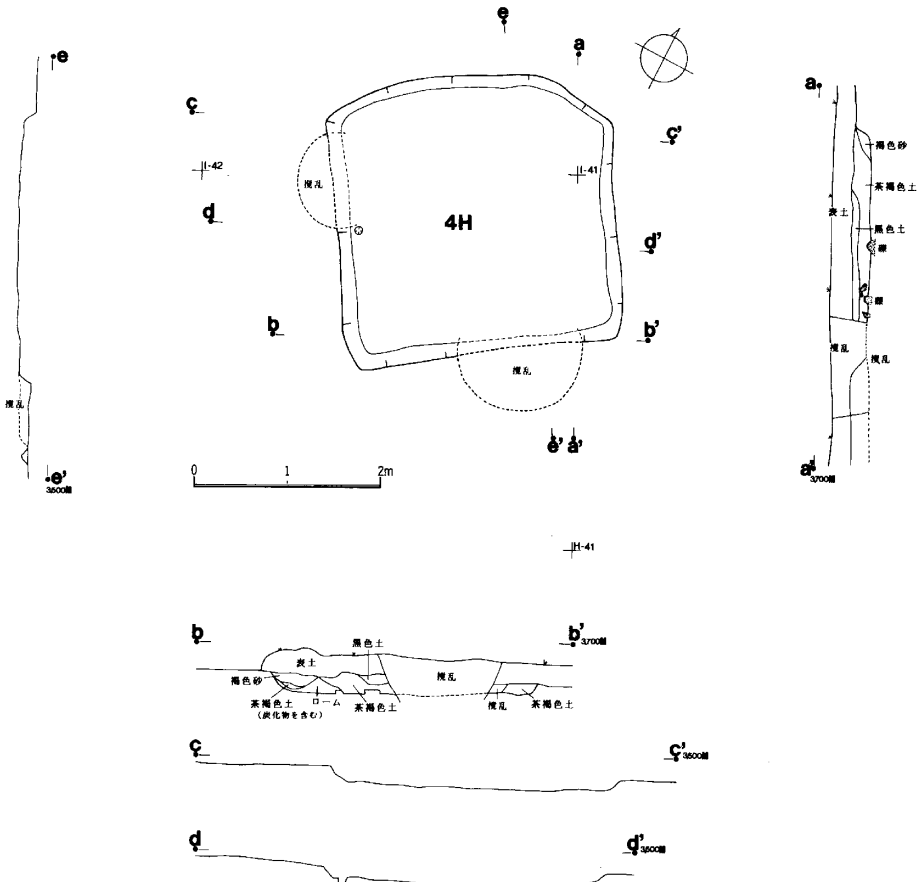
4 号 豎 穴

遺 構 (第14図、図版4-1)

本豎穴は1号豎穴の東側約6mに位置する。上面の確認では4m程度の規模と思われたが予想以上に小型の豎穴であった。規模は南北約2.9m、東西約2.7mの方形を呈するものの、北壁側がやや丸みを呈する。掘り込みは浅く確認面から約9cmである。東壁、南壁側に攪乱が入っているがカマドは無いようである。炉跡も検出できなかった。柱穴は西壁際の中央部に直径約7cm、深さ8cmのものが1本あるだけである。床面も凹凸がある。

遺 物 (第14図-5・6、第16図-3～8、第18図-1～7、図版4-2・3)

遺物はすべて埋土から出土している。第14図-5は中型鉢形土器。文様は5～6本単位に鋸歯文が施され、その下部に横走、縦走の沈線が施され、胴下部とは山形文で区画される。底部には板目状の圧痕が残る。6は胴部が膨らみ、口縁部が緩く立ち上がる小型土器。篋により器面調整が施され、雑な格子目状の沈線が施される。底部は揚げ底。第18図-1は口縁部が緩く立ち

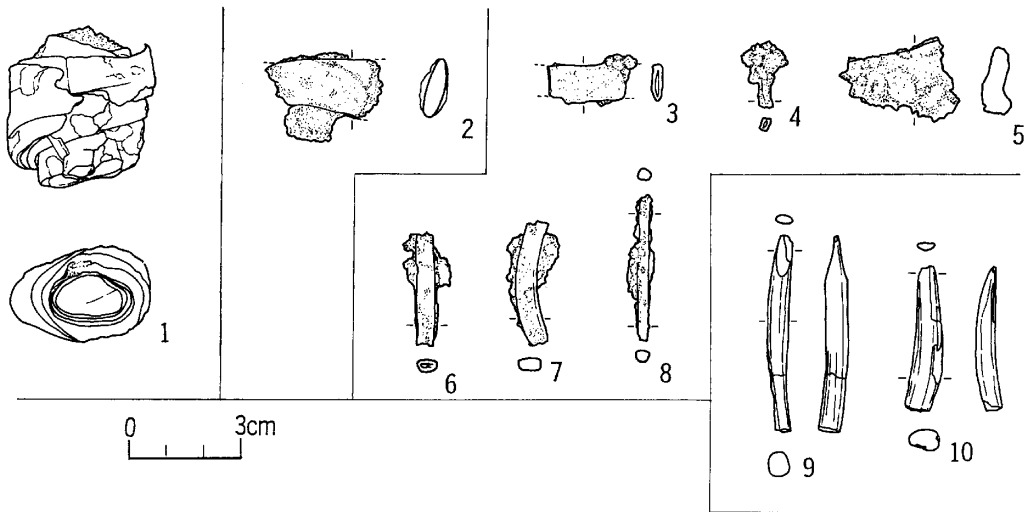


第15図 4号豎穴平面図

上り、口唇部が垂直に立ち上がる。文様は縦走した沈線間を横走沈線で充鎮し、雑な「×」字形の沈線を施している。2は高杯口縁部。3～5は小型鉢形土器の口縁部。6、7は胴部片であり、7は鋸歯文と列点文が施される。鉄製品は第16図-3～8が出土している。3、5は刀子片であろう。4、6、7は形態、断面から釘と思われる。8は針であろう。

小 括

本竪穴は擦文期のものである。規模は直径約3mの方形を呈する。カマド、炉跡はない。床面から出土遺物もないため詳細な時期は不明である。カマドもなく小竪穴として分類した。



第16図 1号竪穴埋土(1)、2号竪穴埋土(2)、4号竪穴埋土(3～8)、9号竪穴カマド(9・10)出土鉄製品・炭化木製品実測図

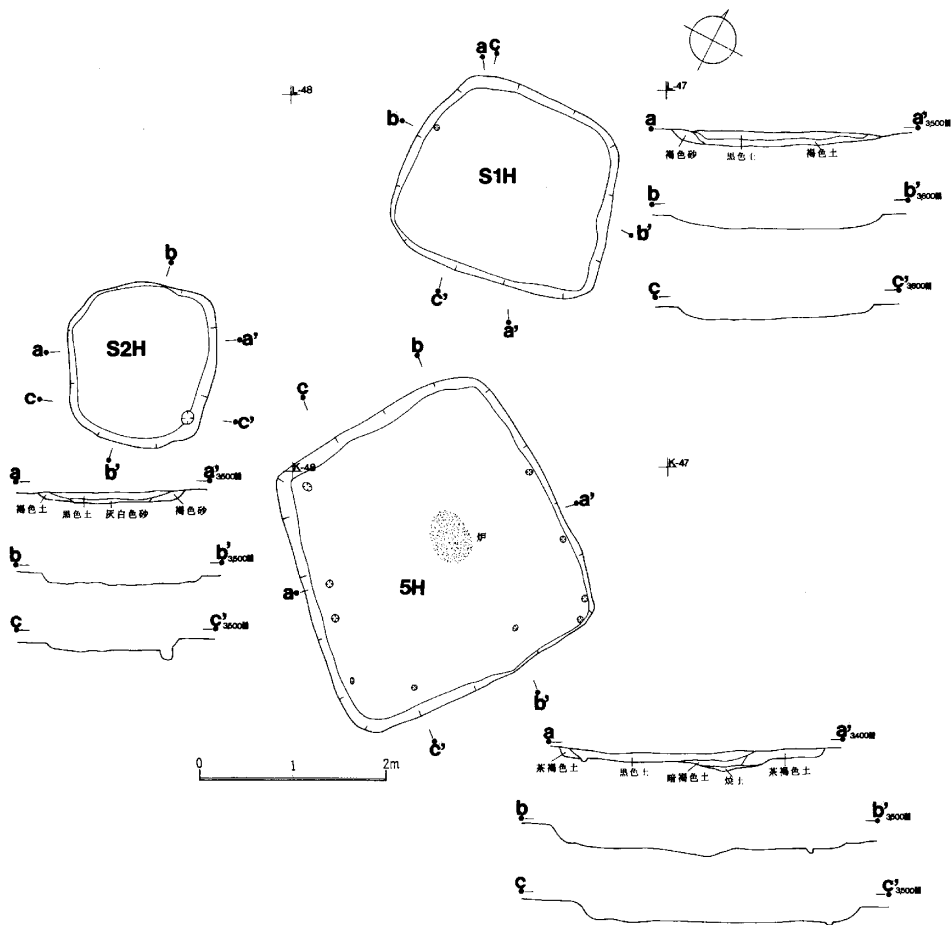
5 号 竪 穴

遺 構 (第17図、図版4-4)

本竪穴は2号竪穴の西側約2.8mに位置する。表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みを確認した。規模は東西3.10m、南北2.80mの方形を呈するが西壁が2.50mとやや短い。掘り込みは浅く確認面から西壁20cm、東壁12cmを測り、緩く立ち上がる。炉跡は竪穴の中央部にある。炉跡は床面よりわずかに掘られており、良く焼けている。焼土から多量の骨片が認められた。カマド、支柱穴は認められない。壁柱穴は径約6～8cm、深さ約3～6cmのものが南壁に4本、東壁に3本、北壁に3本ある。西壁には全く認められないもののほぼ等間隔に配置されている。

遺 物 (第18図-8・9)

この2点は西壁崩落土内から出土した。鉢形土器の口縁部である。



第17図 5号竪穴、1号小竪穴、2号小竪穴平面図

小 括

本竪穴は擦文期のものである。規模は直径約3mである。カマドは認められない。詳細な時期は不明である。

1 号 小 竪 穴

遺 構 (第17図)

本竪穴は5号竪穴の北側約1mに位置する。規模は東西約1.8m、南北約1.6mの方形を呈する。深さは確認面から約10cmを測る。壁は皿状に緩く立ち上がる。カマド、炉跡は認められない。柱穴は西壁のほぼ中央部に直径5cm、深さ7cmのものが一本あるが、竪穴外にも時期の新しい大きさの異なる柱穴がありあるいはこれらのものかもしれない。

擦文期に属すると考えられるが遺物も出土していないため詳細な時期は不明である。



第18图 4号豎穴埋土(1~7)、5号豎穴埋土(8·9)、6号豎穴埋土(10~14)出土土器

2 号 小 豎 穴

遺 構 (第17図、図版11-1)

本豎穴は5号豎穴の西側約1mに位置する。1号小豎穴とは約2mの距離である。規模は直径約1.8mの方形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。南東壁隅に直径14cm、深さ11cmのものが一本あるが本豎穴に伴うものか否か確認できなかった。カマド、炉跡は認められない。

擦文期に属すと考えられるが遺物も出土していないため詳細な時期は不明である。

6 号 豎 穴

遺 構 (第19図、図版5-6)

本豎穴は表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みを確認した。規模は東西4.20m、南北4.35mの方形を呈する。壁高は各壁とも確認面から約8cmと浅い。壁柱穴は径約6~12cm、深さ約4~14cmのものが東壁、西壁、南壁際にほぼ等間隔に配置されている。炉跡は中央部よりやや北側に寄ったところにあり良く焼けている。カマドは認められない。

遺 物 (第18図-10~14)

東壁際の床面からは拳大の円礫21点が出土し、近くから黒曜石の剝片20点が出土している。図示していないが縦長の剝片で、残核に15点が接合した。出土状況からみて本豎穴に伴うものと判断される。10は集石の近くから出土した無文の小型鉢形土器である。器面調整は篋で行われている。幅約5mm~1cmの輪積み痕がある。底部が欠失している。11も小型鉢形土器である。12は大型鉢形土器。口縁部の隆帯上に短刻文が施され、胴上部の文様帯は複段化を呈する。宇田川編年後期に比定される。13は高杯口縁部。14は高杯脚部片である。

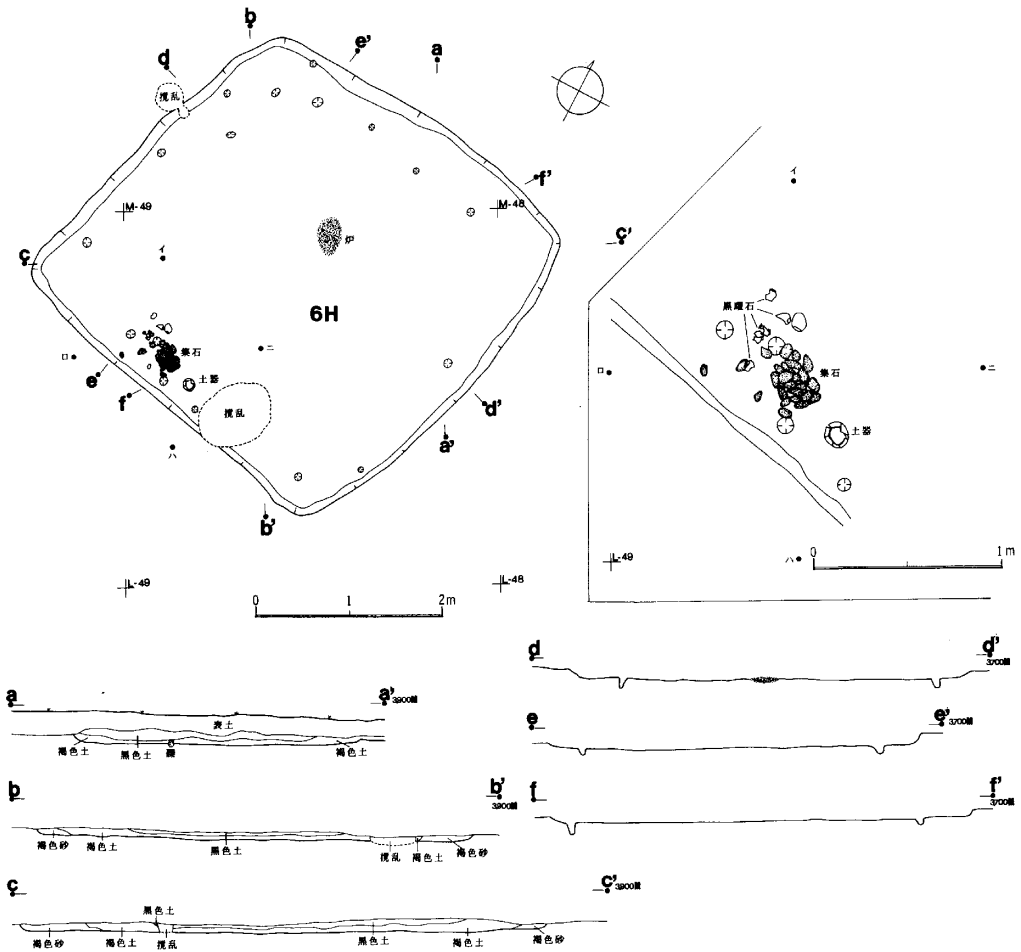
小 括

本豎穴は擦文期のものである。形態は一辺約4.20mの方形を呈する。炉跡はあるもののカマドは認められない。無文の小型鉢型土器が出土しているものの詳細な時期は不明である。

7 号 豎 穴

遺 構 (第23図、図版6-1・2)

本豎穴は完全に表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みを確認したが、西側の半分は旧来この地に建築されていたホタテ貝加工場により破壊を受けている。このため破壊された面を土層観察面とし、土層図を作成後に内部を掘りはじめることにした。黒色土層下の茶褐色土層には炭化粒子の混入が多く見られる。豎穴の規模は残存する部分から判断すると南北約3.2mの方形

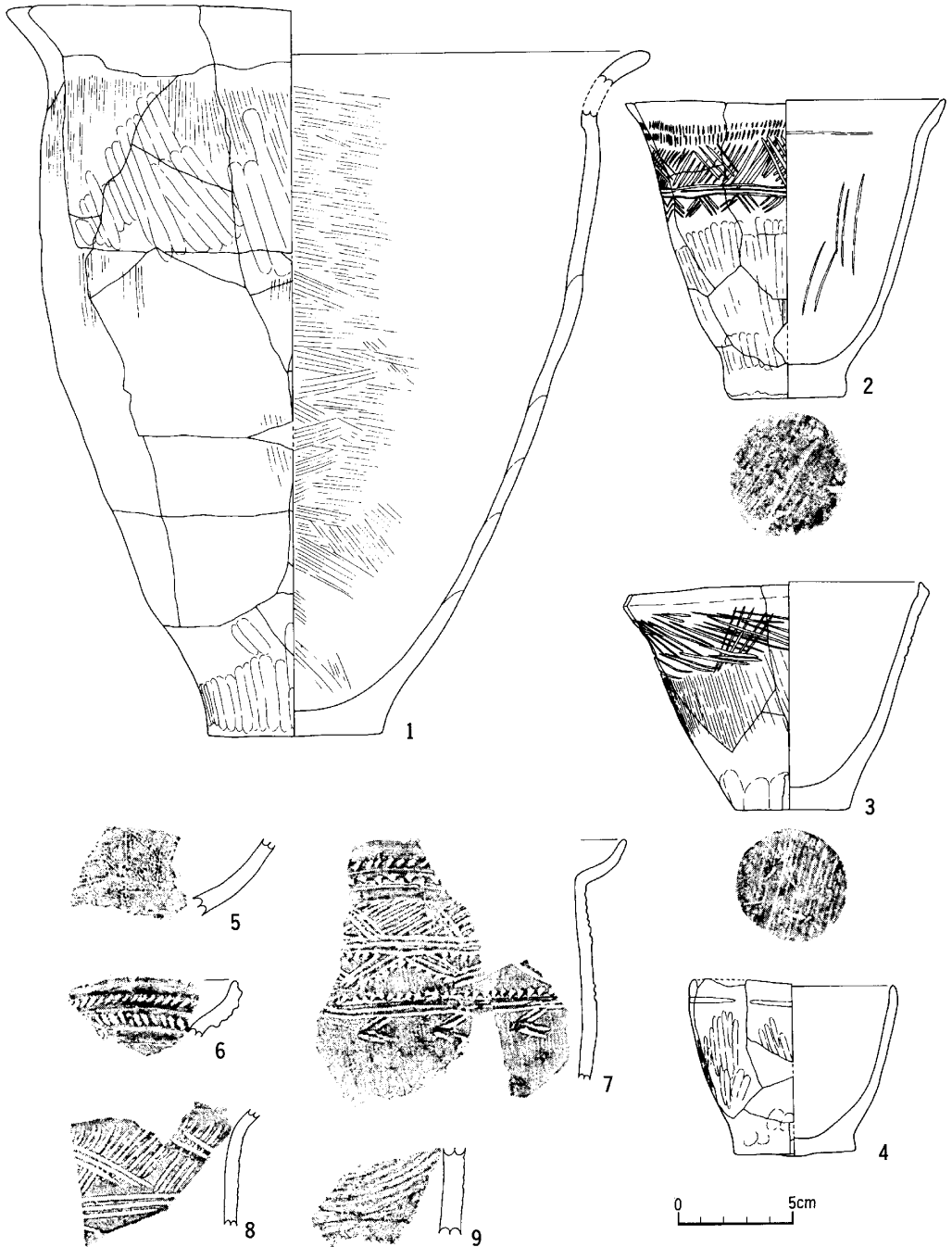


第19図 6号竪穴平面図

と思われる。壁高は確認面から約26cmである。カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は扁平な礫と黄褐色粘土である。扁平な礫は燃烧部から出土している。本来は袖部に使用されていたものが内側に倒れたものであろう。大型無文土器がこの扁平の礫に挟まれた状態で出土している。煙道は細長く水平に伸びる。長さは燃烧部から約1.2mである。燃烧部は赤変している。焼土には骨片が多量に含まれている。カマドの前面を中心に第20図-1～9の各土器が出土している。支柱穴は東側に1本検出した。直径約16cm、深さ約17cm。壁柱穴は北壁際に1本検出した。直径約5cm、深さ約6cmである。炉跡は半分が破壊を受けているが、竪穴のほぼ中央部にある。炭化材はどちらかと言うと竪穴の南側にあるが方向は一定していない。

遺物 (第20図、図版7-1～4)

床面出土遺物はカマドの内部及びその前面から出土している。第20図-1は大型鉢形土器。器面は刷毛により横方向に調整されているが、外面は口縁部を刷毛と篋を用い、底部を篋により調整している。2は小型鉢形土器。細く鋭い施文具を用い比較的丁寧に施している。口縁下部



第20図 7号竖穴床面(1~4)・埋土(5~9)出土土器

に2段の短刻線がある。胴部の文様は斜めの沈線とそれにクロスする4本から5本の沈線で構成され、胴中央部とは横走沈線と山形沈線で区画される。底部に板目状圧痕がある。3は小型鉢形土器。底部から口縁部にかけて大きく開き、口唇部の断面は三角形を呈する。口縁下部は斜めの沈線を主体に施し、実測図に示す個所だけクロスさせている。胴部は篋により丁寧に調整され、底部には板目状圧痕がある。4は無文の小型鉢形土器。口縁部に1本の横走沈線があり、胴部は篋により調整される。底部の中央部がわずかに隆起する。5～9は埋土出土。5は高杯。6～8は鉢型土器。9は後北C₂式。

小 括

本竪穴は一辺約3.2mの方形を呈すると思われる。火災住居である。床面から大型鉢形土器1点、小型鉢形土器3点がセットで出土している。時期は擦文期の藤本編年j～i期、宇田川編年晩期に比定される。

8 号 竪 穴

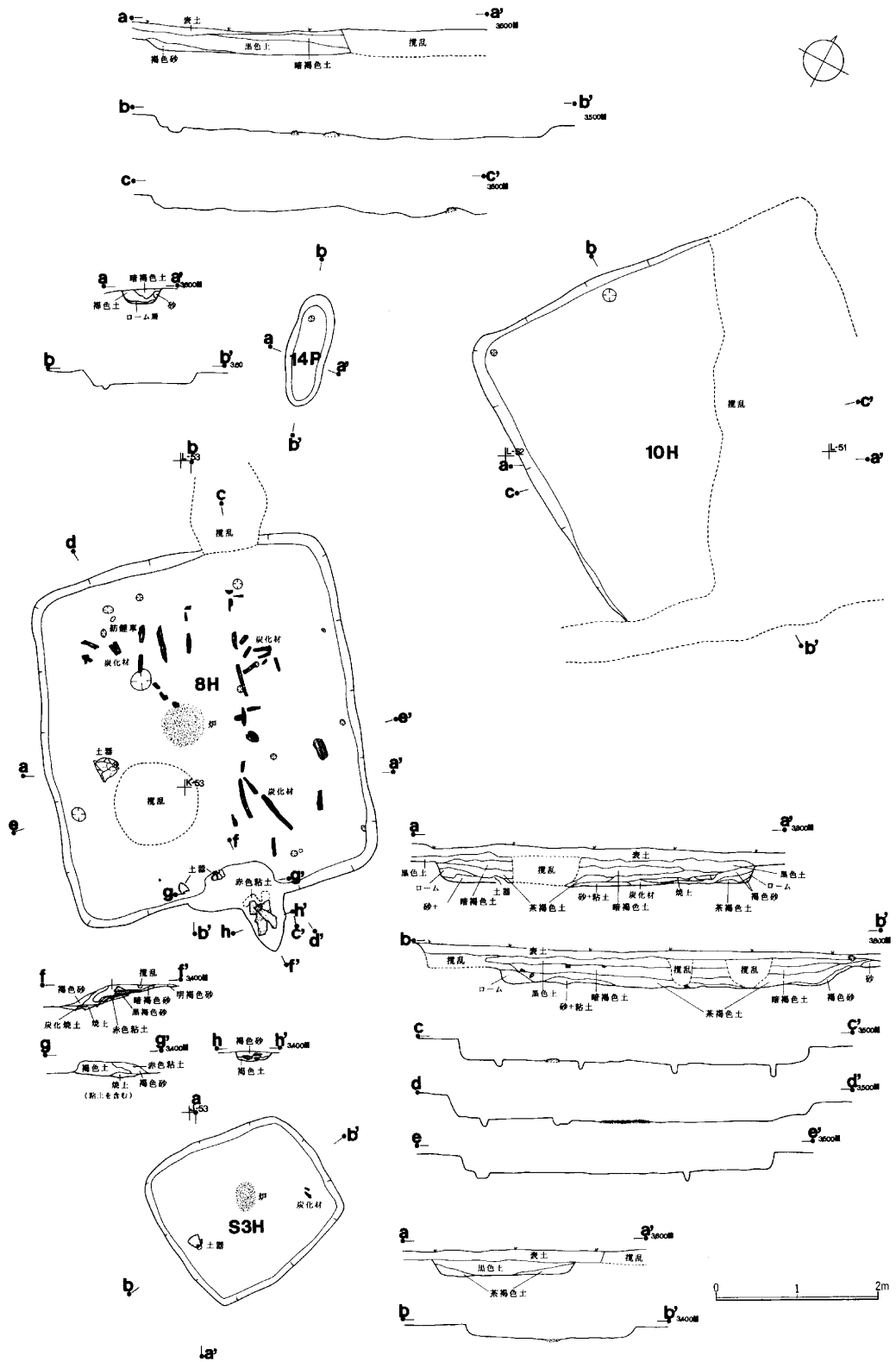
遺 構 (第21図、図版7-5)

本竪穴は7号竪穴の北側約7.6mに位置する。規模は長軸4.18m、短軸3.9mの方形を呈するが、やや東西が長い。壁高は確認面から約20cmを測る。カマドは東壁の中央部に構築されていたといえる。構築材は砂と黄褐色粘土を用いていると思われるが、両袖部は欠失している。煙道部には長方形の礫が4本まとまって出土した。この礫は煙道部を固める粘土の下面にあるため、袖部の材料ではなく煙道部の補強に用いられたのであろう。煙道部の立上りは緩い、炉跡は竪穴の中央部にある。径約55cmにわたって床面が良く焼けている。明確に支柱穴と思われるものは検出できなかった。壁柱穴は北壁側に3本ほぼ等間隔に配置され、西壁に3本、南壁と東壁には1本ある。この壁柱穴は径約4～15cm、深さ約7cmである。床面は凹凸がある。

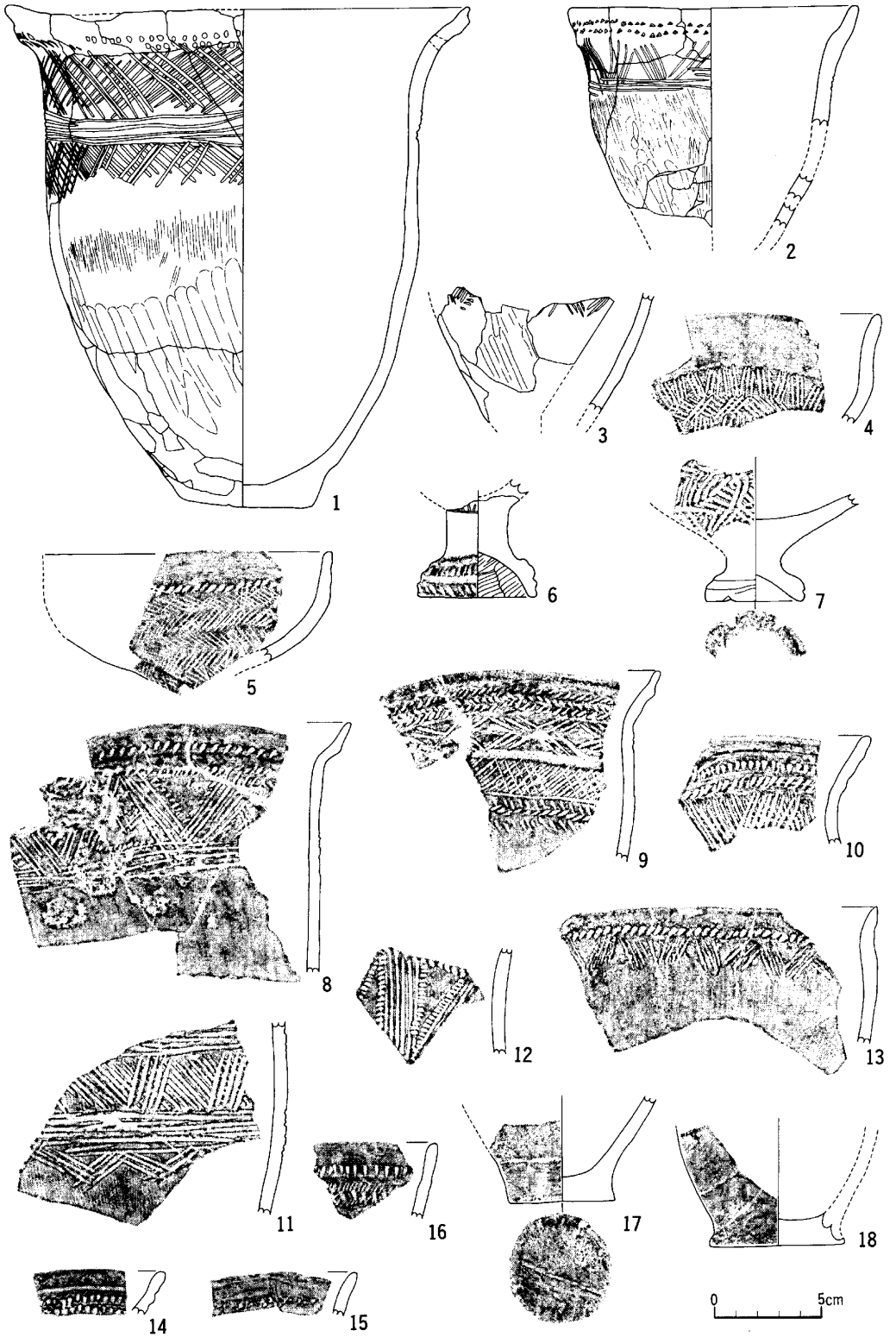
炭化材は東西方向に倒れている。北壁と並行した状態で1列あり、西壁側にも顕著に認められる。

遺 物 (第22図、図版7-6・7)

1は大型鉢形土器。炉跡の南側約60cmの付近から出土した。口縁部には列点文が二段に施される。文様は斜めの沈線を充鎮した後にそれと交叉する様に3本単位の沈線を施している。2はカマドの前面から出土した小型鉢形土器。口縁部に二状の列点文が施され、文様は3～4本単位で鋸歯文が施され、胴下部とは横走沈線で区画される。3～18は埋土出土である。3は小型鉢形土器。4～7は高杯の杯部と脚部。13の口縁部は外反しない。列点文の下部に「ハ」字状の刻線がある。17、18は底部。17は1本の沈線が施される。この土器は二次的な火熱を受けたためであろうか表面は赤褐色を呈する。



第21図 3号小竪穴、8号竪穴、10号竪穴、ピット14平面図



第22图 8号竖穴床面(1·2)·黑色土上(6·14)、黑色土下(12·13·15~16)·烧土内(11)·埋土(3~5·7~10·17·18)出土土器

小 括

本竪穴の形態は長軸4.18m、短軸3.9mの方形を呈する。火災住居である。時期は床面出土土器から藤本編年 i ~ j 期、宇田川編年晩期に比定される。

9 号 竪 穴

遺 構 (第23図、図版 8-1・2)

本竪穴は7号竪穴の東側約4.3mに位置する。表土を剝土した段階で暗褐色土の落ち込みを確認した。3層の黒色土を剝土する段階から炭化粒が顕著に認められ、炭化材が現れてきた。壁際では地山と同じ色調の褐色砂が炭化材を覆う状態で堆積しているため、壁の検出に手間取った。規模は東西4.58m、南北4.90mの方形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり確認面から約36cmを測る。カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は黄褐色粘土と両袖部の芯として角礫を立てた状態で用いている。煙道は7号竪穴と同様に長く燃焼部から約1.50mである。傾斜も無い。炉跡は中央部にある。長軸約80cm、短軸約40cmの楕円形である。支柱穴と思われるものは4本ある。直径約30~12cm、深さ約21~12cm。壁柱穴は北壁に2本、西壁に2本ある。いずれも直径約8~10cm、深さ18cmである。竪穴のほぼ全域から炭化材が検出された。炭化材は東西方向に倒れている数本のやや太めの炭化材がある。四隅から中央部に向かって伸びる炭化材があるが、この炭化材は東西方向の炭化材の下から出土している。また、炉跡の周囲では南北方向に並べられた炭化材がある。

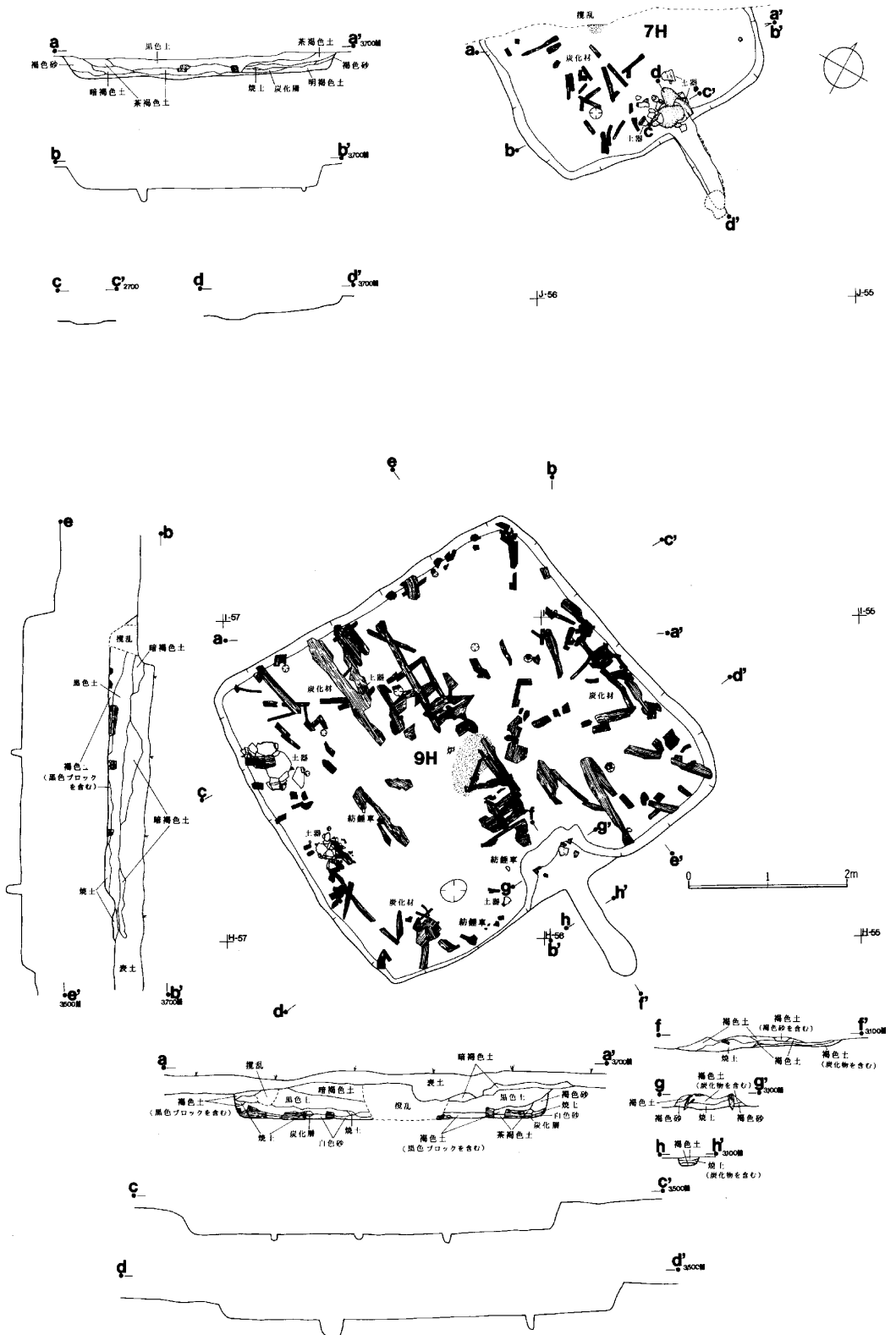
遺 物 (第24図、第25図-1、第16図-9・10、図版 9-1~4)

床面出土遺物は第24図-1~4がある。第24図-1は南壁際から出土した無文の大型鉢形土器である。器高38cm、口径31cmである。胴部中から底部にかけて篋により調整されている。底部は丸みを呈し木葉痕が残る。2は無文の小型鉢形土器。篋により調整されている。底部には板目状圧痕が残る。3は小型鉢形土器。口縁部に3段の列点文が施される。文様は複段化する。底部には板目状圧痕が残る。4は紡錘車。散在する3片が接合した。縦、斜めに刻線を重鎮させ外周部は列点文がめぐる。重量83g。5~9は埋土出土。5は無文の紡錘車。6、7は擦文土器。8はオホーツク文化ソーメン状貼付文。9は縄文晩期。第25図-1は床面から出土した口径25cm、器高29cmの大型鉢形土器。口縁部は外反し3段の隆帯上に刻点がある。文様は斜めの刻線とそれにクロスする3本の刻線で構成され、胴中央部とは7~8本の横走沈線で区画される。底部に板目状圧痕がある。第16図-9、10はカマドの南側床面から出土した炭化木製品である。2点とも断面が角形を呈し、先端部は2方向からカットされている。

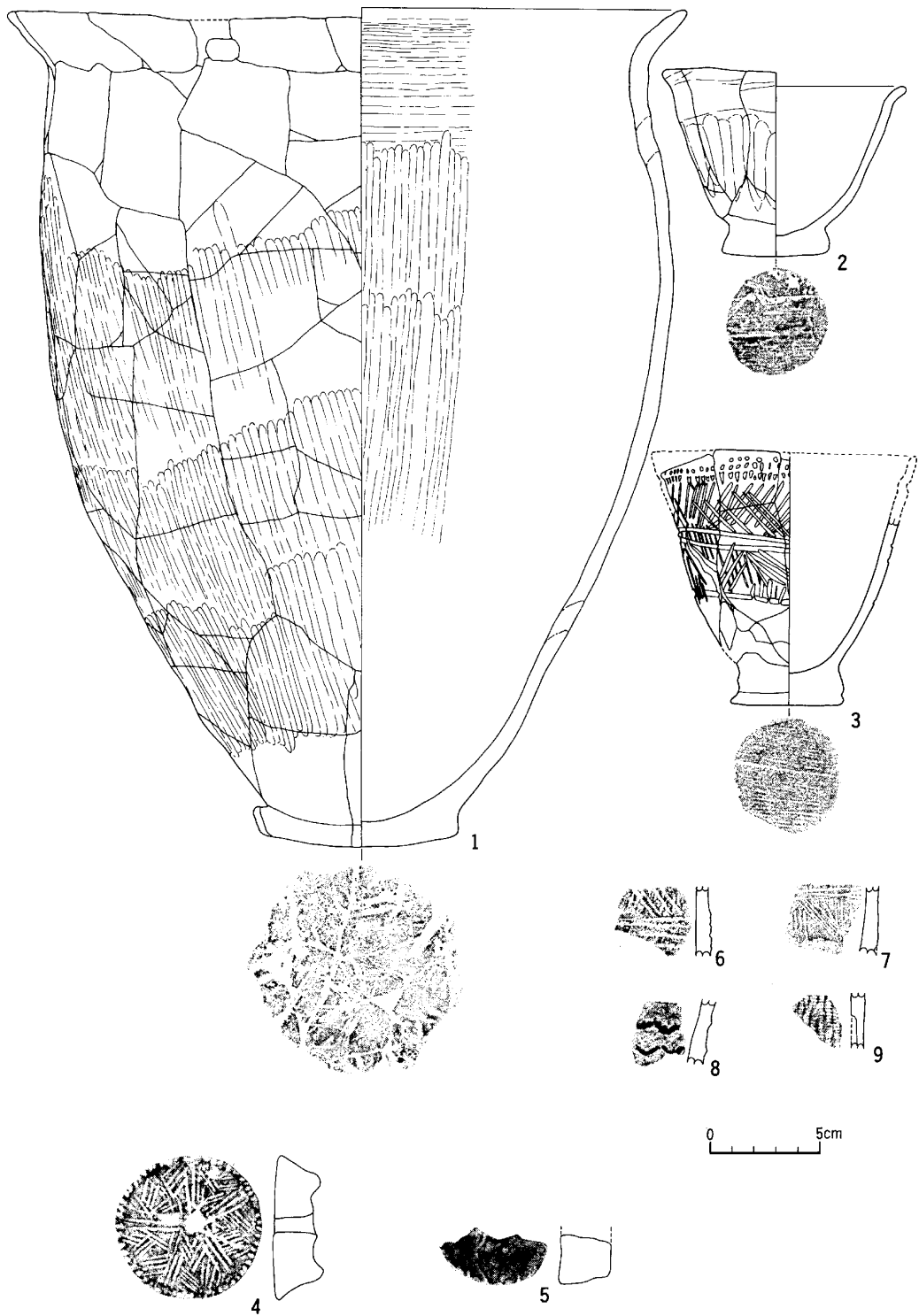
石器は攪乱土から第36図-1の石槍が出土している。黒曜石製。

小 括

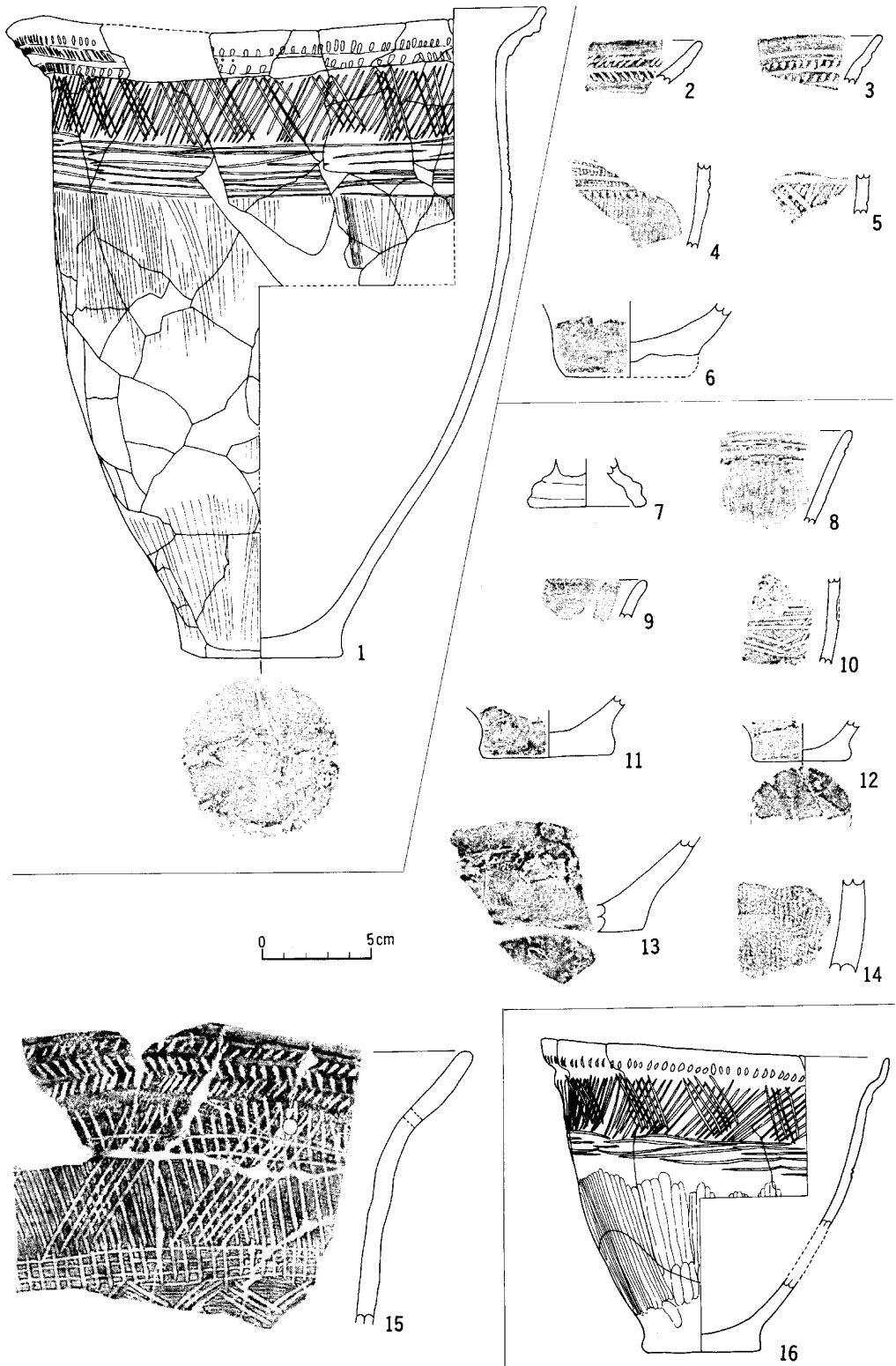
本竪穴は長軸約4.9m、短軸約4.6mの方形を呈する。火災住居跡である。2号、7号、8号



第23図 7号堅穴、9号堅穴平面図



第24图 9号竖穴床面(1~4·7)·埋土(6·8·9)出土土器



第25图 9号豎穴床面(1)、10号豎穴埋土(2~6)、11号豎穴床面(7)・埋土(8~15)、3号小豎穴床面(16)出土土器

の火災住居跡の炭化材の出土状態も東西方向に向き本竪穴と共通点がある。床面から大型鉢形土器2点、小型鉢形土器2点、紡錘車1点、炭化木製品2点が出土している。これらの時期は藤本編年i～j期、宇田川編年晩期に比定される。

10 号 竪 穴

遺 構 (第21図、図版9-5)

本竪穴は8号竪穴の北側約2～3mに位置する。大半が破壊を受けているため正確な規模を計測することはできなかったが、かろうじて残存する北壁の一部と南壁から一辺約4.50mの方形を呈すると思われる。壁高は確認面から約11cmを測る。カマド、炉跡は攪乱により破壊を受けているため検出できなかった。壁柱穴は西壁際から径約5cm、深さ5cm。径約20cm、深さ6cmのもの2本を検出し得ただけである。

遺 物 (第25図-2～6)

この5点は埋土出土である。いずれも擦文期の鉢型土器である。

小 括

本竪穴は擦文期と思われるが、大半が破壊を受けているため正確な時期は不明である。

11 号 竪 穴

遺 構 (第26図、図版10-1)

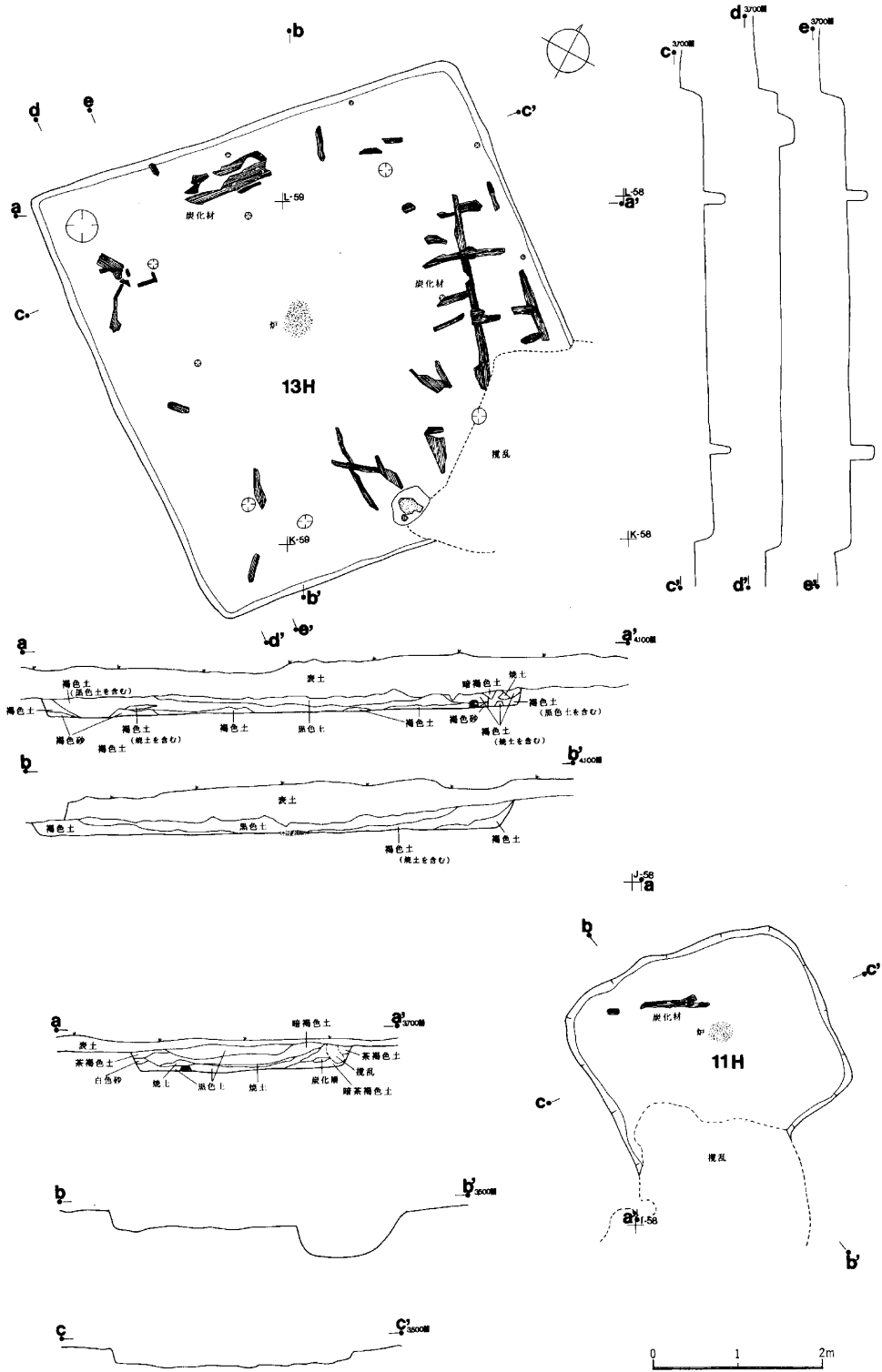
本竪穴は7号竪穴の南側約9mに位置する。規模は東西2.80m、南北2.45mの方形を呈する。東壁の一部が破壊を受けている。壁高は確認面から約20cm。カマドは東壁の一部が破壊を受けているため存在したのか不明であるが、住居の規模からみてカマドはないかもしれない。炉跡は中央部にある。直径約23cmである。柱穴は認められない。西壁際では壁と並行する炭化材が検出された。

遺 物 (第25図-7～15)

床面から第25図-7の高杯脚部が出土しているものの他は埋土からのものである。8～13は擦文土器。14は続縄文土器である。15は13号竪穴出土のものと接合した。口縁部は緩く開き矢羽根状の刻文が施された大型土器。胴部は刻線を重鎮した後にクロスする5～6本の刻線を施し、その下に縦横の刻線を施す。胴下部とは山形文で区画される。

小 括

本竪穴は東西2.80m、南北2.45mの方形を呈する。擦文期と思われるが正確な時期は不明である。火災を受けていると思われる。



第26图 11号竖穴、13号竖穴平面图

3 号 小 豎 穴

遺 構 (第21図、図版11-2)

本豎穴は8号豎穴の東側約2～3mに位置する。規模は直径約2mの方形を呈する。深さは確認面から約12cmを測る。カマドはないが炉跡は中央部にある。良く焼けている。柱穴等は認められない。埋土には炭化粒子も含まれ、南壁際にはわずかに炭化材も検出されており火災住居の可能性はある。

遺 物 (第25図-16、図版11-3)

この土器は南壁際の床面から出土した小型鉢形土器である。口縁部の1段の隆帯上に刻みが施される。文様は斜めの刻線とそれにクロスする4本の刻線で構成され、胴中央部とは横走沈線で区画される。藤本編年j～i期、宇田川編年晩期に比定される。

12 号 豎 穴

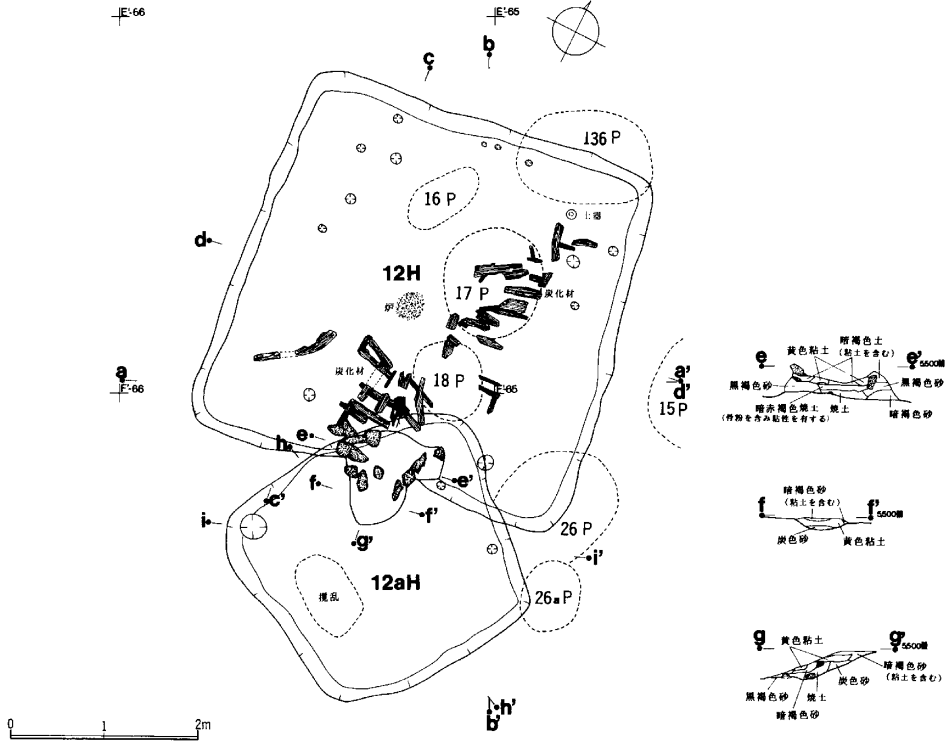
遺 構 (第27図、図版12-1)

本豎穴は標高約5mの砂丘台地にある。表土の下部には白色の樽前a火山灰が粒状に堆積している。規模は東西4.2m、南北3.85mの方形を呈する。壁の立ち上りはほぼ垂直で確認面から約32cmを測る。カマドは南壁中央部に構築されている。袖部は黒褐色土の上に粘土を用いており、外側を円礫でしっかり固定している。カマド内の焼土には微細な骨片が混入している。煙道の掘り込みは浅く、燃焼部からの傾斜はさほどきつくない。この豎穴は火災住居であり炭化材はカマドの前面から西側にかけて認められる。南北方向にある炭化材の上にカマド前面の東西方向の炭化材が載っている。炉跡は豎穴のほぼ中央部にある。良く焼けている。支柱穴はさほど太くはなく直径10～18cm、深さ9～25cmのものが4本ある。壁柱穴は西壁を中心に認められるが規則的に配置されていない。床面は起伏がある。

床面にはピット16、17、18等の遺構があるがこれらは炭化材を除去した後に検出できたものであり、本豎穴より以前のものである。

遺 物 (第28、29、30、31、32、36図、図版12-2・3)

擦文土器は埋土から第28図-1の小型杯が1点と2～6のものがあるだけである。1は器面を刷毛により調整している。7は無文の紡錘車。重量115g。8～16は後北C₂・D式である。17は内外面に櫛歯状の施文がみられるもので時期は後北C₂・D式に併行すると思われる。第29図-1は宇津内II b式。2～4は宇津内II a式。3は突瘤の下部に細い沈線を横走させる。5～9は続縄文前葉であろう。5は縄線文下に縄端圧痕文が施される。6～9は沈線文主体のもので6は工字文となる。10は縄線文上に角形の取っ手をもつ。11は器面に工字文状の沈線を施した壺



第27图 12号竖穴、12a号竖穴平面图

型土器であり大洞A式に比定される。器壁は6mmと厚い。大洞式を模倣した在地系の土器であろう。12は幣舞式。13～22は器面に縄端圧痕文、刺突文、沈線文のあるもので縄文晩期中葉と思われる。第30図-1は縄文晩期幣舞式である。F'64グリッドの2層上面から出土したものと本竪穴の埋土からも出土したものが接合した。大半はグリッドから出土している。口径41cm、器高約52cmの大型土器である。口縁の縄線文上に弧線文が施される。口唇部には3個1組の突起が4個所ある。器面には煤が付着している。第31図-1～11も晩期中葉であろう。1はボール状の器形であり3段の縄端圧痕文をもつ。2～10は縄文。11は無文である。第32図-1～6は晩期前葉であろう。1～4は内側に斜め方向からの突瘤文がある。5、6は「ハ」状の盛り上がりのある爪形文。

石器は第36図-2～17がある。2は無茎石鏃。3～10は有茎石鏃。11は両面加工ナイフ。12は削器。先端部が尖る。13は搔器。14～17は原石面を残す削器。すべて黒曜石製である。

小 括

本竪穴は一辺約4mの方形を呈した火災住居である。カマドは南壁の中央部に構築されている。遺存は良い。擦文期に属するが詳細な時期は不明である。

12a 号 竪 穴

遺 構 (第27図)

本竪穴は12号竪穴の南側で重複している。12号竪穴のカマドは12a号竪穴の上部に構築されている。規模は直径約2.7mの方形を呈する。壁は緩めに立ち上り、高さは確認面から約30cmである。床面は南側にかけてやや傾斜する。柱穴は南西隅に直径約25cm、深さ約14cmのものが1本、北壁に直径約10cm、深さ約10cmのものが2本あるだけである。炉跡等も認められない。

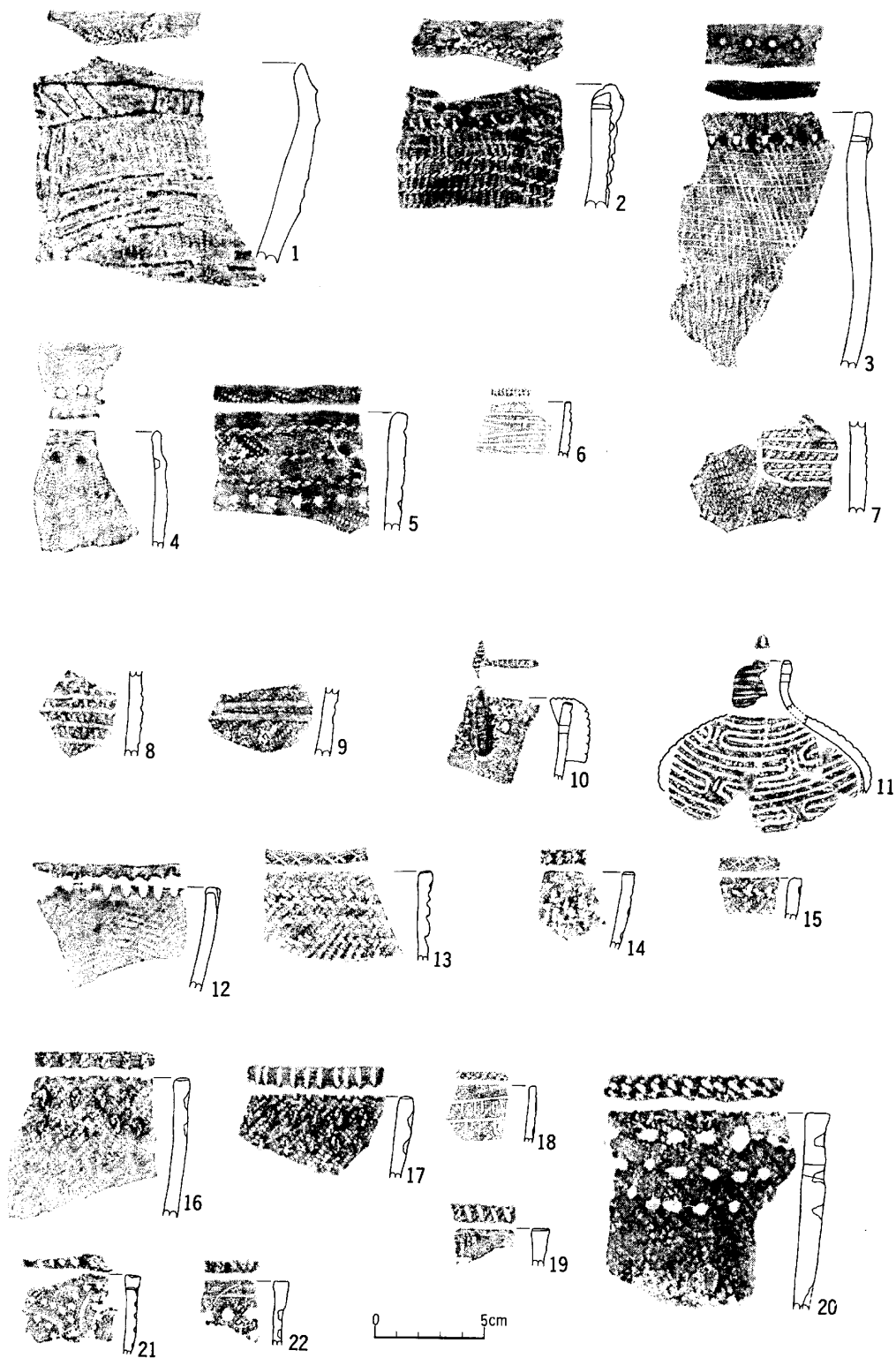
遺 物 (第33、34、36図-18～27)

第33図-1、2は床面出土の宇津内II a式。3～21は埋土出土。3は後北C₂・D式。4は宇津内II b式。5～7は同II a式であり5には半截状施文具による沈線と刺突が施される。8は4本の横走沈線と刺突が加えられるもので続縄文前葉であろう。9～12は晩期後葉の幣舞式。13～21は晩期中葉であろう。13は無文の椀。14～16は縄線文。17、19、21は刺突文。18は縄端圧痕文。20は縄線文が施される。第34図-1～4は縄文、5、6は内側に刺突文あるもので晩期中葉と思われる。7、8は内側に斜め方向からの突瘤文、9、10は盛り上がりのある爪形文をもつもので晩期前葉であろう。11は晩期の底部。

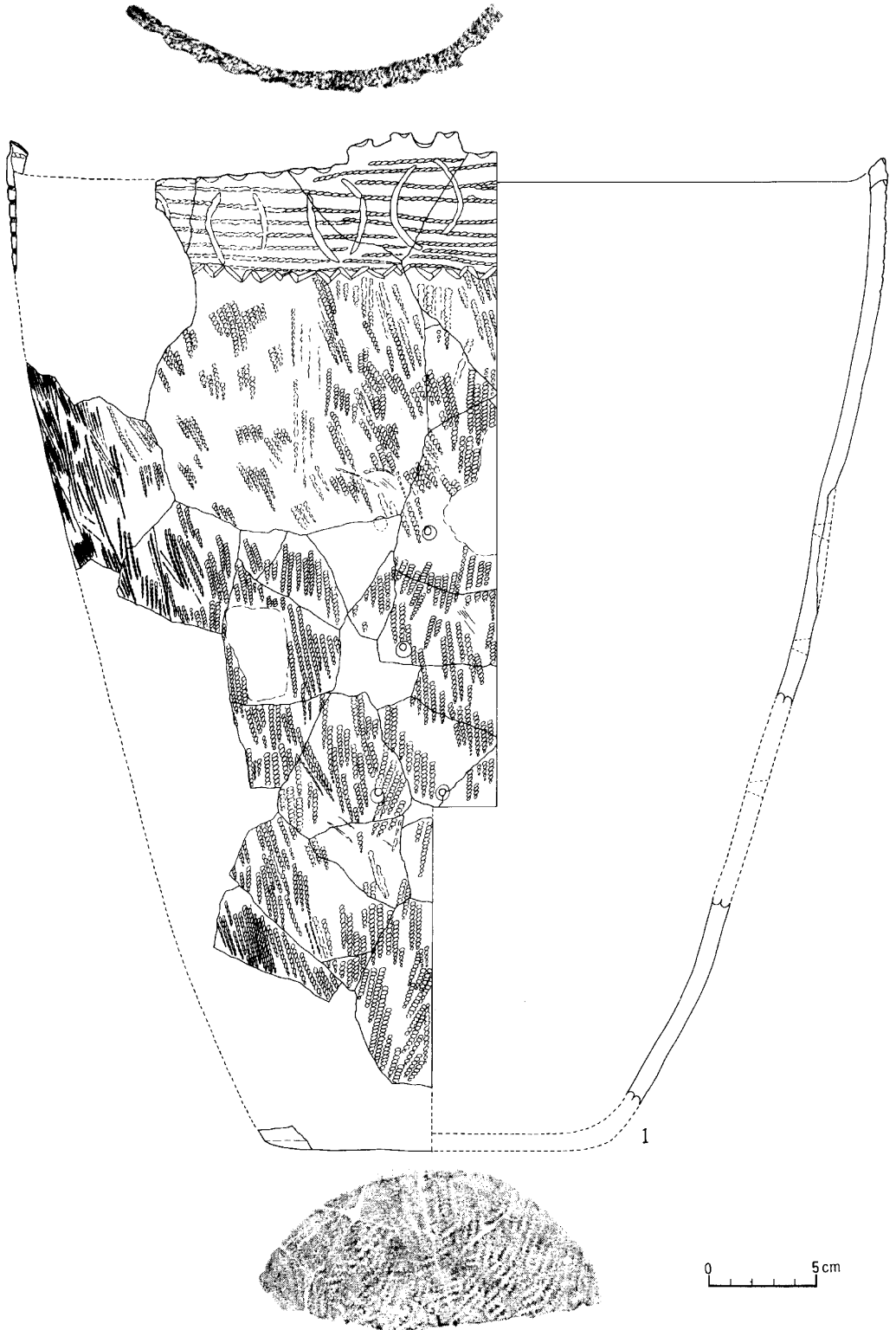
石器は第36図-18～27が出土している。床面では18の凹み石だけ出土している。表面に大きい11個の窪みがあるのに対し裏面は16個あるものの窪みは小さい。砂岩製である。19～22は有茎石鏃。23は頁岩製の両面加工ナイフ。24は断面が丸みをもつ両面加工ナイフ。25、26は側削器。27は扁平な円礫の端部に刃部を作出した泥岩製の磨製石斧。18、23、26を除きすべて黒曜石製



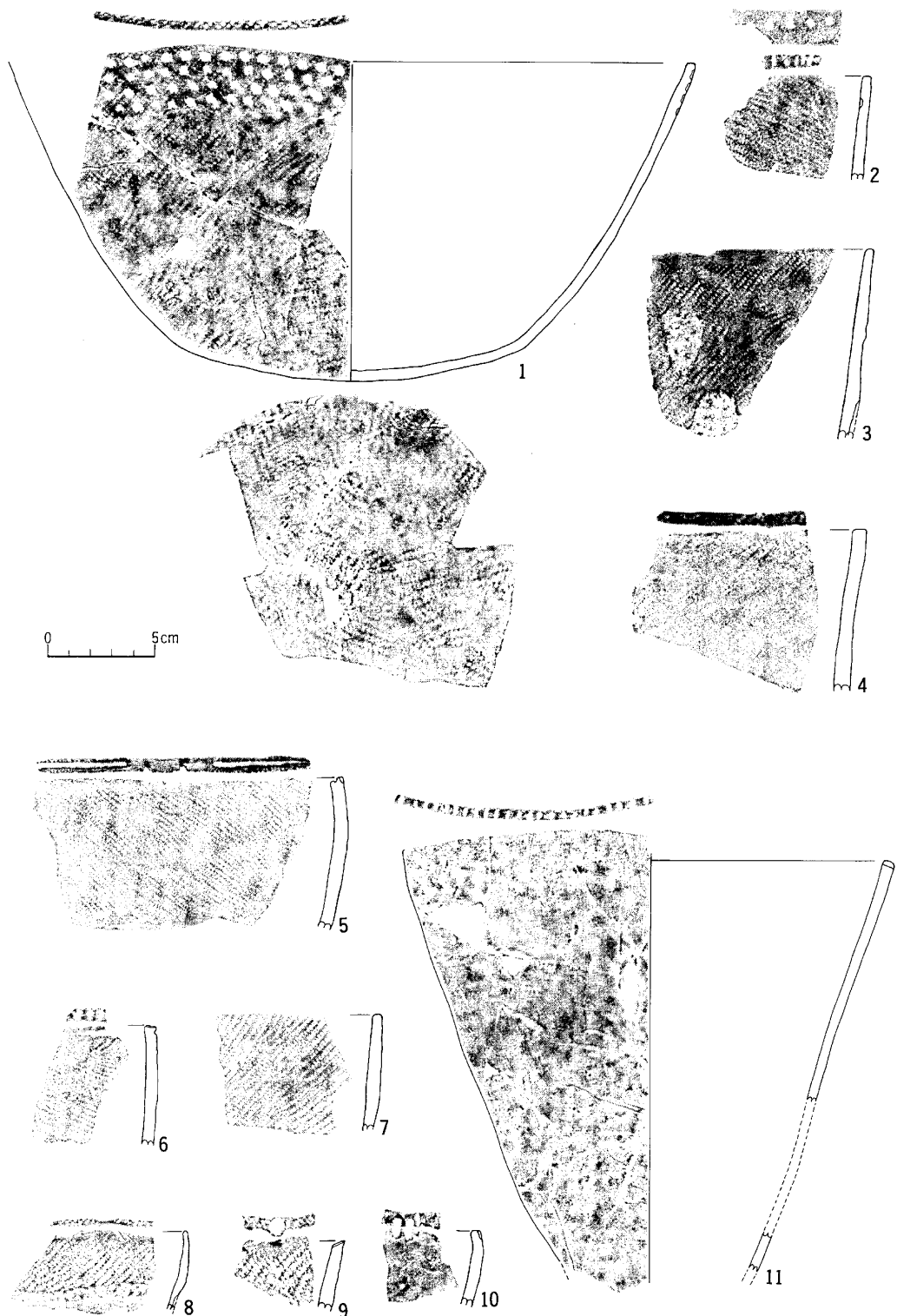
第28图 12号豎穴埋土(1~17)出土土器



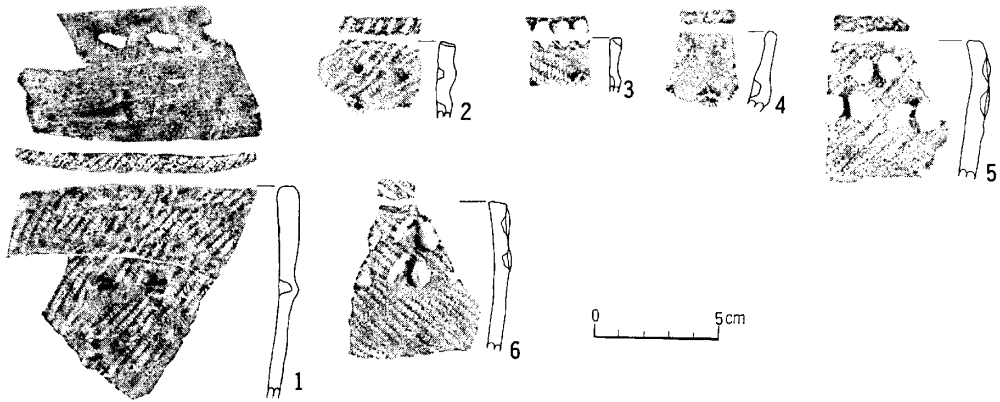
第29圖 12号竪穴埋土(1~23)出土土器



第30图 12号竖穴埋土出土土器



第31图 12号竖穴埋土(1~11)出土土器



第32図 12号竪穴埋土(1~6)出土土器

である。

小 括

本竪穴は床面出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、擦文期の12号より古いことは確実である。あるいは床面から出土した宇津内II a 式の可能性がある。

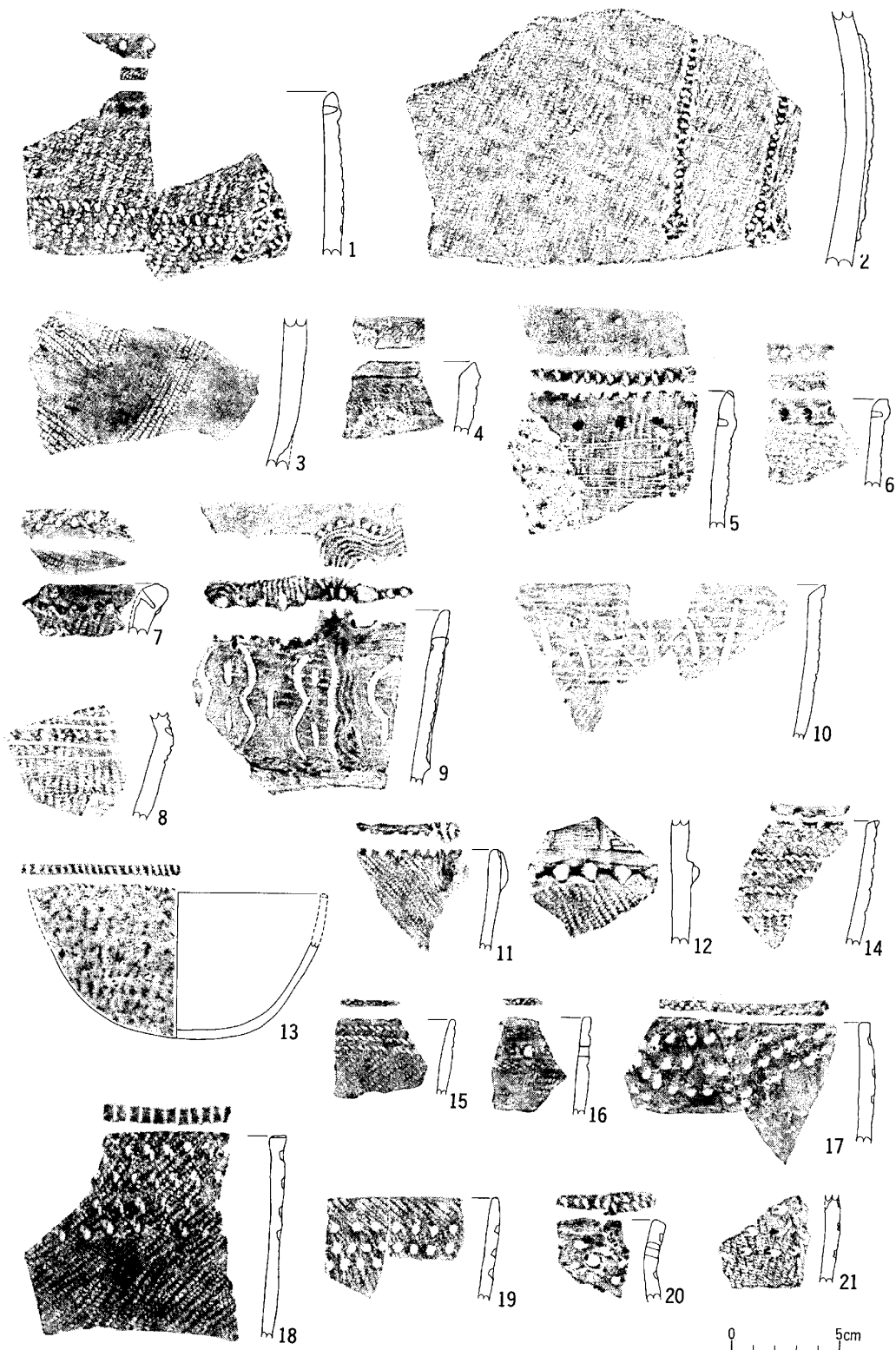
13 号 竪 穴

遺 構 (第26図、図版13-1・2)

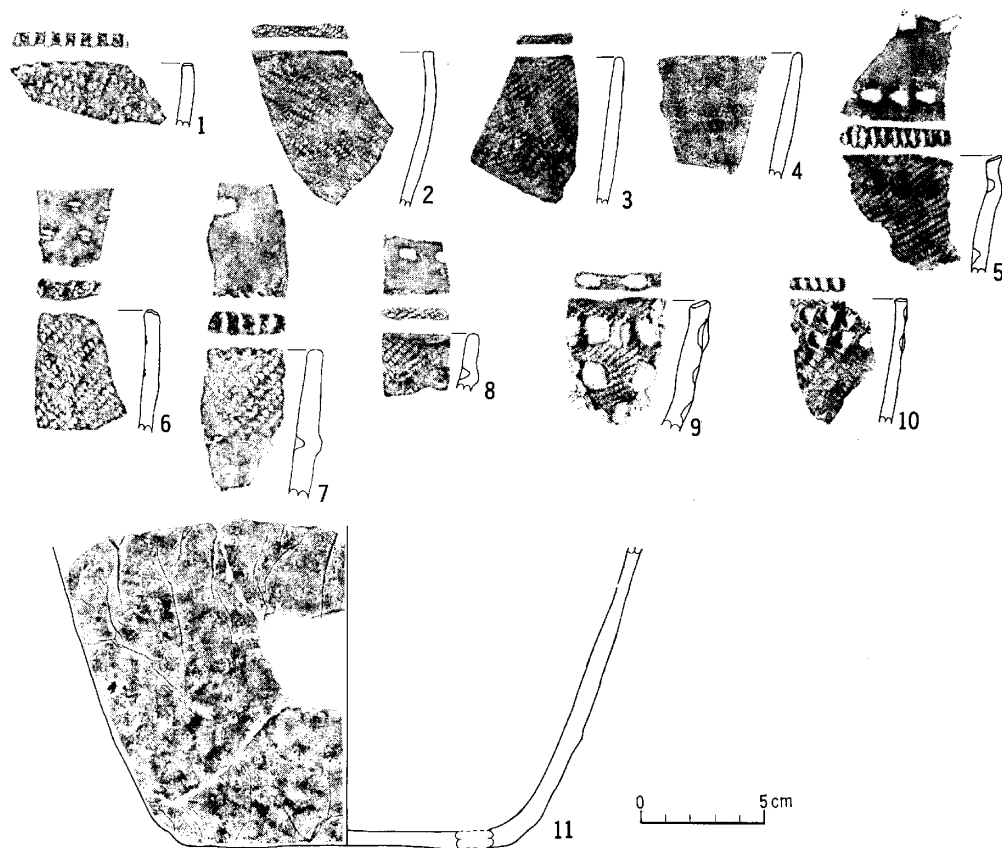
本竪穴は11号竪穴の西側約5.5mに位置する。規模は長軸5.30m、短軸5.25mの方形を呈する。壁高は確認面から約20~25cm。竪穴の東北隅から東壁中央部にかけて破壊を受けているためカマドが存在するか不明であるが、屋外に伸びる煙道が見られないためカマドを持たない竪穴かもしれない。炉跡はほぼ中央部に位置する。直径約40cmである。支柱穴は直径約10~18cm、深さ24~28cmのものが4本あり、支柱穴間にはそれぞれ直径約8cm、深さ約9cmの補助柱が1本配置されている。壁柱穴は北壁、西壁で2本検出したが他の壁では認められなかった。炭化材は各壁の近くから検出され、中央部では認められない。特に北壁では東西方向の炭化材の上にほぼ等間隔に炭化材がみられる。

遺 物 (第35図、図版13-3)

遺物は全て擦文土器で埋土から出土している。第35図-1~4は高杯と脚部。1は口縁部が緩く開き、矢羽根状の刻線が施される。5は中型鉢形土器。口縁の3段の隆帯上に短刻文が施される。6、7は口縁部が僅かに外反し、矢羽根状、格子目状の刻線が施される。同一個体と思われる。8、9にも矢羽根状の刻線が施され、8は縦、斜めの刻線が施され、列点文間に山形文が施される。10は口唇部が垂直に尖る。11、12は刷毛で調整されている。13は斜めに刻線を



第33图 12 a 号竖穴床面(1・2)・埋土(3~21)出土土器

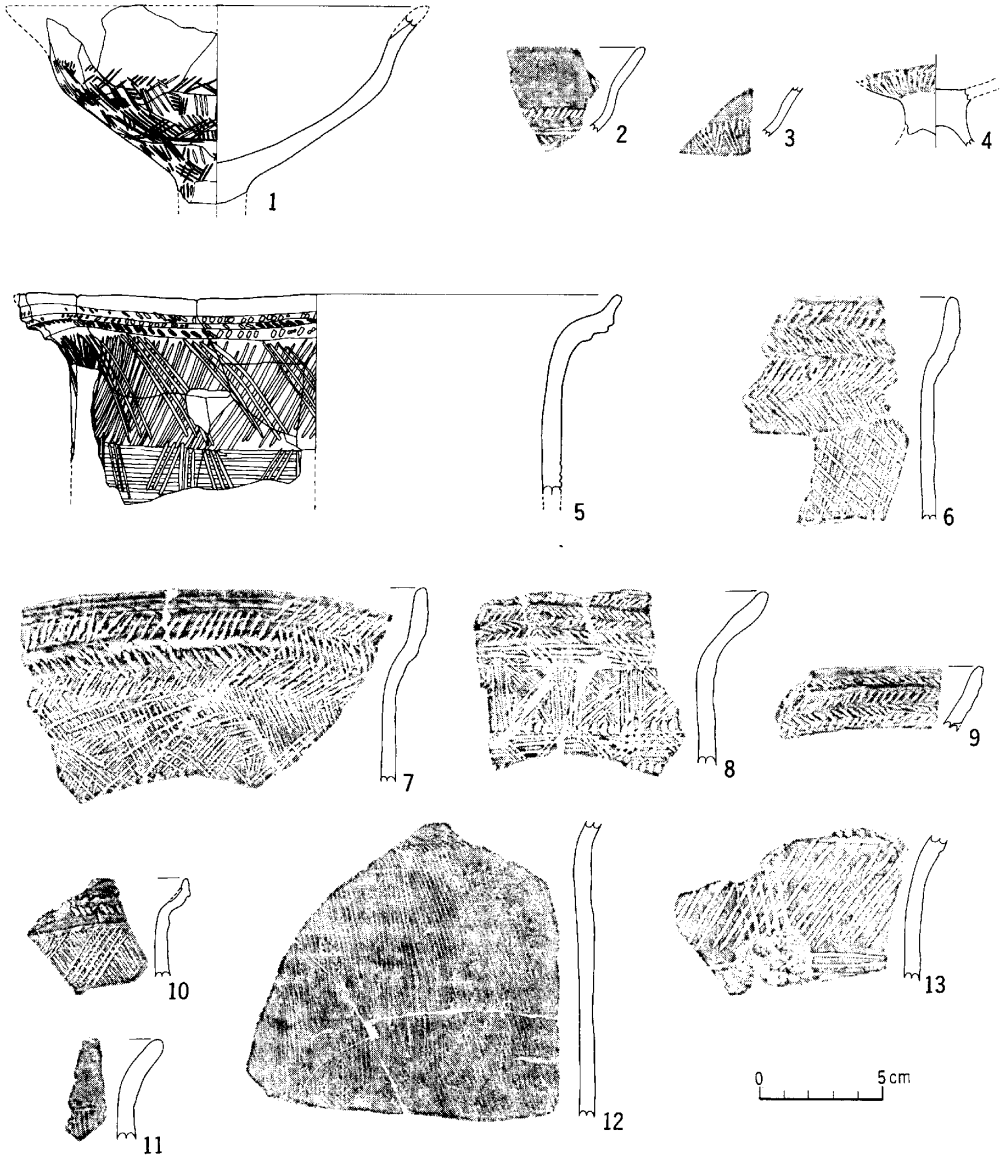


第34図 12a号竪穴埋土(1~11)出土土器

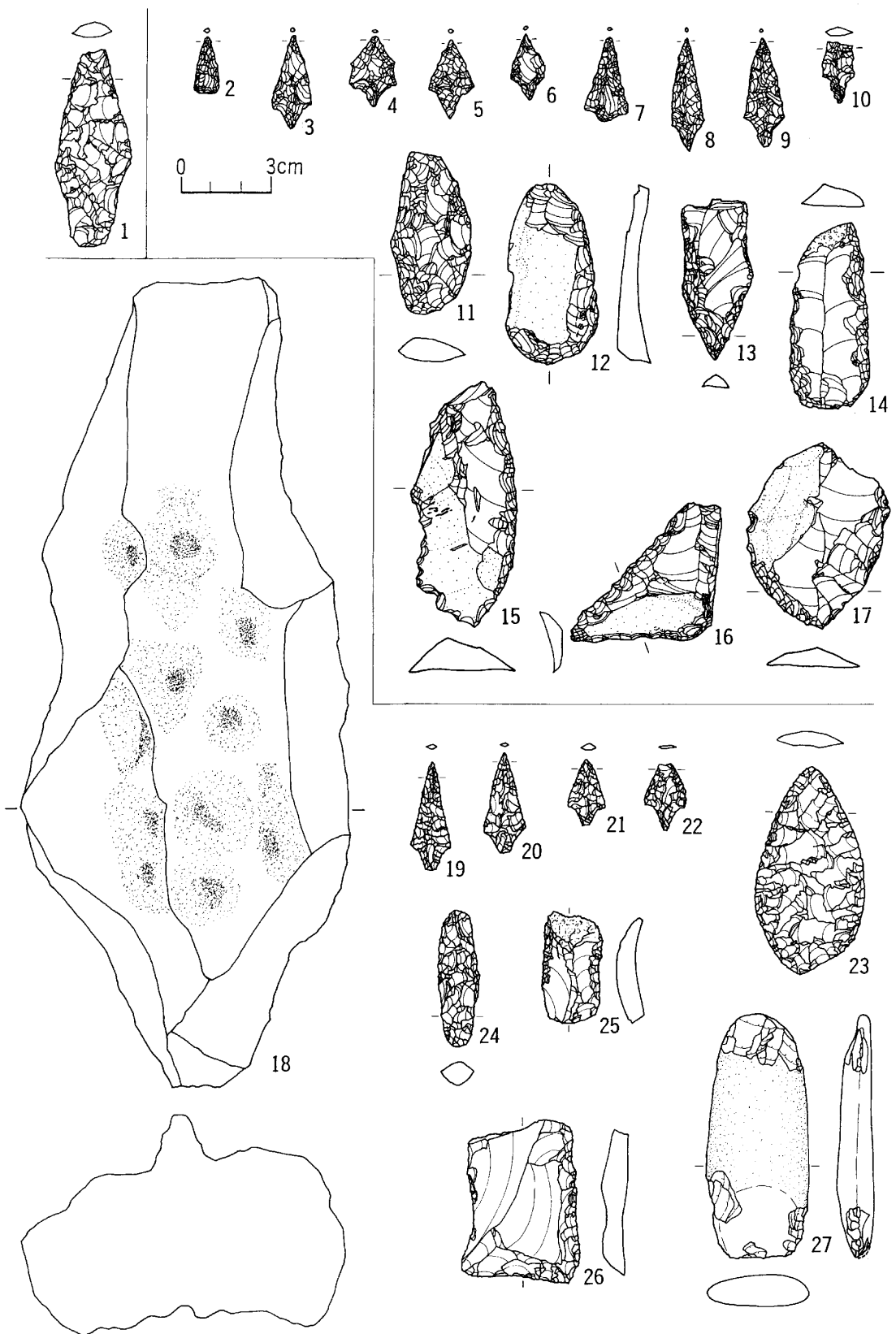
重鎮したあとに4本の刻線をクロスさせている。

小 括

本竪穴は擦文期のものである。カマドを持たない竪穴であろう。火災住居跡である。床面出土遺物がないため詳細な時期は不明である。



第35图 13号竖穴埋土(1~13)出土土器



第36图 9号竖穴搅乱(1)、12号竖穴埋土(2~17)、12a号竖穴床面(18)·埋土(19~27)出土石器

掘 立 柱

遺 構 (図版14-1)

掘立柱はH47、48グリッドに位置する。1号～11号、13号竪穴及び1号～3号小竪穴の周辺には下記の小柱穴群が多量にあるが、この中で最も直径が大きく、配列が正確なものがこの掘立柱である。東西方向に3本2列の柱穴がほぼ等間隔に配置されている。規模は東西の3本が約3.30m、南北の2本が約3.20mを測る。柱穴の断面は底部が丸みを帯びるもの4本と四角形のもので2本ある。柱穴は直径約25～35cm、深さ約25～30cmである。時期は不明である。

小 柱 穴 群

遺 構 (図版14-2)

平成1年度に調査した擦文期の1号～11号、13号、小竪穴1号～3号の竪穴は標高約3～3.7mに存在するが、その中でもわずかの微高地上に構築されている。小柱穴群もこの微高地上にありその数は約400本に及んでいる。大型の柱穴はなく直径約5～10cm、深さ約5cmのものが大部分を占めている。これらの小柱群は擦文期の竪穴埋土中にも認められるところから、時期は少なくともそれ以降のものとは判断される。

小 河 川 跡

本小河川跡は昭和63年度の調査で発見され、平成1年度の調査で完掘している。この小河川跡は擦文期の竪穴群の東側にある(第4図、図版15)。F38グリッド付近で緩く蛇行するものの南北約40mにわたりほぼ直線的である。南側の端部は標高5mの砂丘台地の裾部で切れている。断面は浅い皿状を呈しており最大幅は約2m、深さは約20～25cmである。埋土には小角礫混じりの黒色土が堆積している。黒色土の上部からは宇田川編年晩期に比定される擦文土器が1個体出土しているところからこの小河川は擦文期にはすでに埋没していたものと推測される。この土器の底部には図示していないが板目状圧痕の上に鈍い「X」字状の刻印記号が施されている。

14号竪穴

遺構 (第37図、図版16-1)

本竪穴は標高約5mの砂丘台地の縁辺部に位置する。西側にはオホーツク文化の竪穴である15号があり、南側には16号竪穴がある。調査はまずG'62、63、F'63、G'63、H'63グリッドに沿って土層ベルトを設定し表土を剝土した。2層の茶褐色砂の上面を剝土すると竪穴の輪郭をおぼろげながら確認することができた。F'61グリッドでは鋭角に尖がるようであり他の遺構と重複している可能性もあるので任意にサブトレンチを設定しつつ掘り進めたが土層に変化はなかった。妙に鋭角な形態を持つ竪穴だと疑問をもったもののこの段階ではまだオホーツク文化期の竪穴であることは予想していなかった。オホーツク文化の竪穴であることが理解できたのは床面に周溝が巡っていることが確認されてからであった。

竪穴内部の土層は基本的に表土下に黒色砂、白色を呈するトコロ火山灰IV(樽前a)、暗褐色砂、黄褐色を呈するトコロ火山灰III(摩周b)、褐色砂が堆積している。トコロ火山灰IIIの上部では第38図-1に示す擦文土器とトビニタイII式が混在した状態で出土している。トビニタイII式は口縁部の数点が接合したものであり直ちに共伴したと断定はできないものの、本遺跡の51号竪穴では明らかにトビニタイII式と擦文後期の土器が共伴していることを考えると本竪穴の例は両土器が同一時期に存在した可能性がある。

床面を覆う褐色砂を剝土すると竪穴の中央部に方形の石囲み炉が検出され、東壁には骨塚が認められ、上部には後北C₁式が置かれていた。

本竪穴の規模は長軸約10.8m、短軸約9.8mの六角形を呈する。長軸、短軸ともほぼ同じ長さで寸詰まりの形態である。壁高は確認面から約45cmである。中央部の角隅を用いた石囲み炉は一辺約1.5mである。炉内部はあまり良く焼けていない。貼床は認められない。骨塚は東壁の中央部にある。直径約1.30mの範囲に骨が残っているがほとんどが細かい。骨の表面は赤変しているため火熱を受けている可能性がある。骨はクマと鑑定された。

オホーツク文化期の竪穴の支柱穴は長軸面に4本並ぶが、本竪穴は2本検出し得ただけである。直径約40cm、深さは約17~60cmである。壁際にも支柱穴と思える直径約30~40cm、深さ26~35cmの柱穴が東壁に3本、西壁に3本ある。周溝は東壁側の一部では見られないものの幅約12~30cm、深さ8~15cmが巡る。周溝の周りには直径約7~10cm、深さ約6~20cmの小柱穴がある。土層ベルトで観察することはできなかったが、周溝の有り方と支柱穴の状況から判断して二軒重複の住居と思われる。

遺物 (第38、39、40、41、42、43図、図版16-2・3)

本竪穴の床面からは遺物は出土していないがピット44の上部から約2cmほど下から出土した第42図-62の青銅製鐸がこの竪穴に伴うものと思われる。この鐸は下部が欠失しているため全長

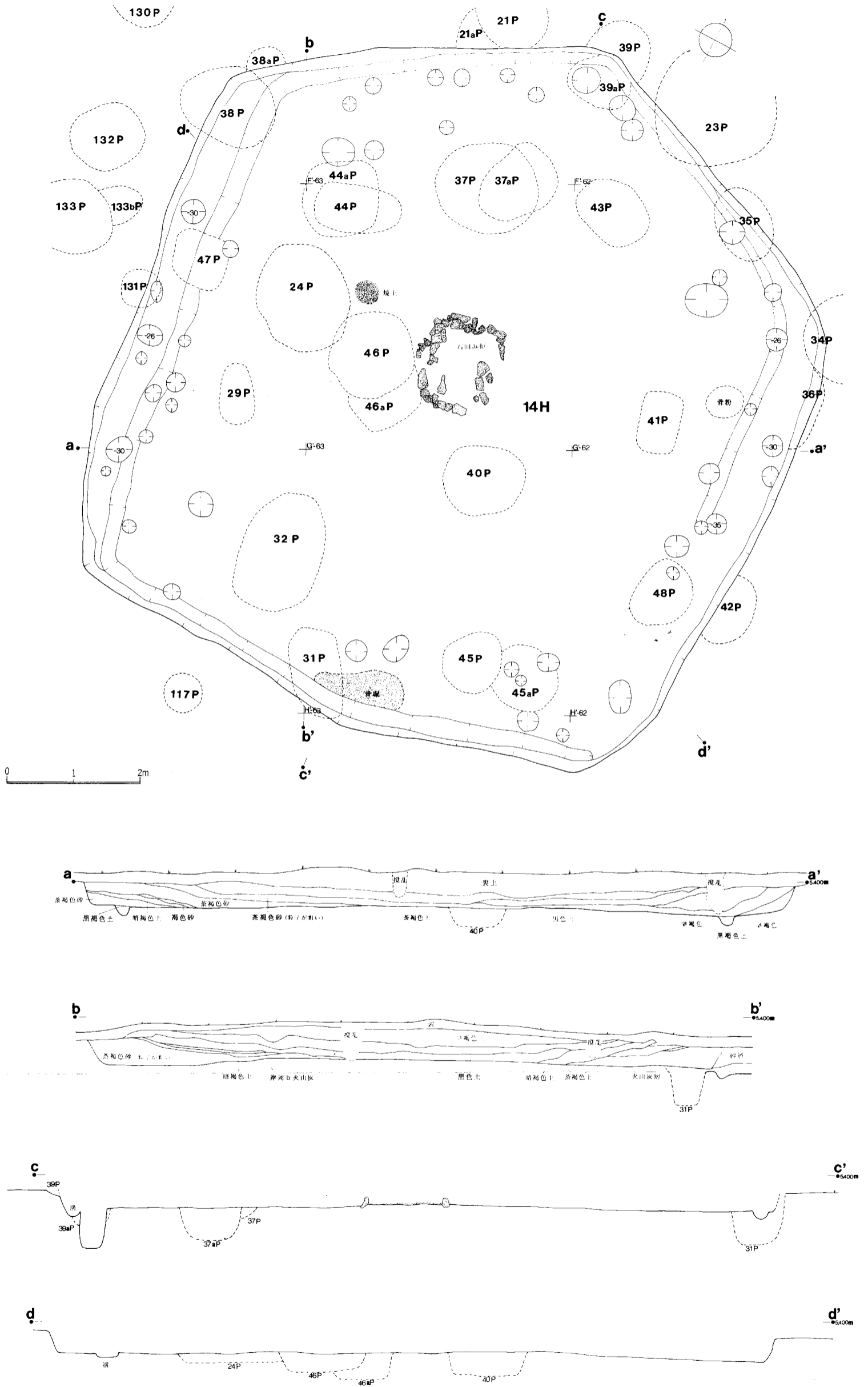
は不明である。鐸の上部には1.5mmの小孔が1個あけられている。第38図-1はトコロ火山灰III（摩周b火山灰）の上部から出土した。1は擦文期の大型鉢形土器の完形品。鋸歯文と斜めの短刻線の複段文様である。

第39図-1は底部から口縁にかけて緩く開く無文の杯。2～7は高杯と脚部。3の底部には刻みが施される。8は無文の大型鉢形土器。頸部に二条の浅い横走沈線が施され、器面は篋により調整されている。9は刷毛により縦横に器面調整され、胴上部は鋸歯文、短刻線の複段文化した大型鉢形土器。第40図-1は宇津内II b、2は頸部が「く」字形に外反し、内外面に縄線文が施された壺型の土器である。宇津内II b式。3～7は内側から突瘤が施されている。3～6は宇津内II a式で6は捺糸文を地文に横走る隆帯の上方に半截状の施文具による刺突が施されている。7の突瘤は宇津内II a式にみられるものよりも浅く、施文具も細い。器面は帯縄文が施され、突瘤の下にも刺突がみられるもので続縄文前葉であろう。8～12は縄文晩期幣舞式。8は四条の緩い波状を呈する縄線文上に波形の浅い沈線を施している。口唇の刻みは上から押さえるのではなく、外側から内側に向かって斜めに突き刺すように施している。9には横走沈線と山形沈線が施される。10は12に見られる細い沈線が縦方向に施し、直線と弧線の沈線を加えている。浅鉢を呈すると思われる。11には縦の隆帯と波状の沈線が施される。12は口縁部の器壁が薄く、外面には弧線文と波状文が施され内面には波条の縄線文が施される。13～14は4～5条の縄線文が施される。15も縄線文が施されるが、途中で方向を変えている。口唇には鋭い刻みが施され、口縁から5cm下には器面に垂直に突いた突瘤が施される。第41図-1～4も縄線文を主体としている。1は縄線文を渦巻状に施し、ほぼ等間隔に円形刺突を加えている。2は縦に縄線文を重鎮させ横走る縄線文で区画する。3、4は縄線文間に縄端圧痕文を等間隔に施す。5、7は縄端圧痕文のみ施される。7は口唇部が幅広い浅鉢であろう。6は極めて浅い擦るような沈線を施し、内面には縄線文もみられる。口唇部の刻みは鋭い。8～11は刺突文が施される。11～13は突瘤のあるもので11には縄線文が、12には刺突文が施される。14～16は盛上がりのある爪形文がある。17は器壁が極めて薄い。逆「R」字状の沈線が施される。18は底部がやや丸味を呈する。19は縄文後期鮫澗式。20は縄文前期末の押型文。

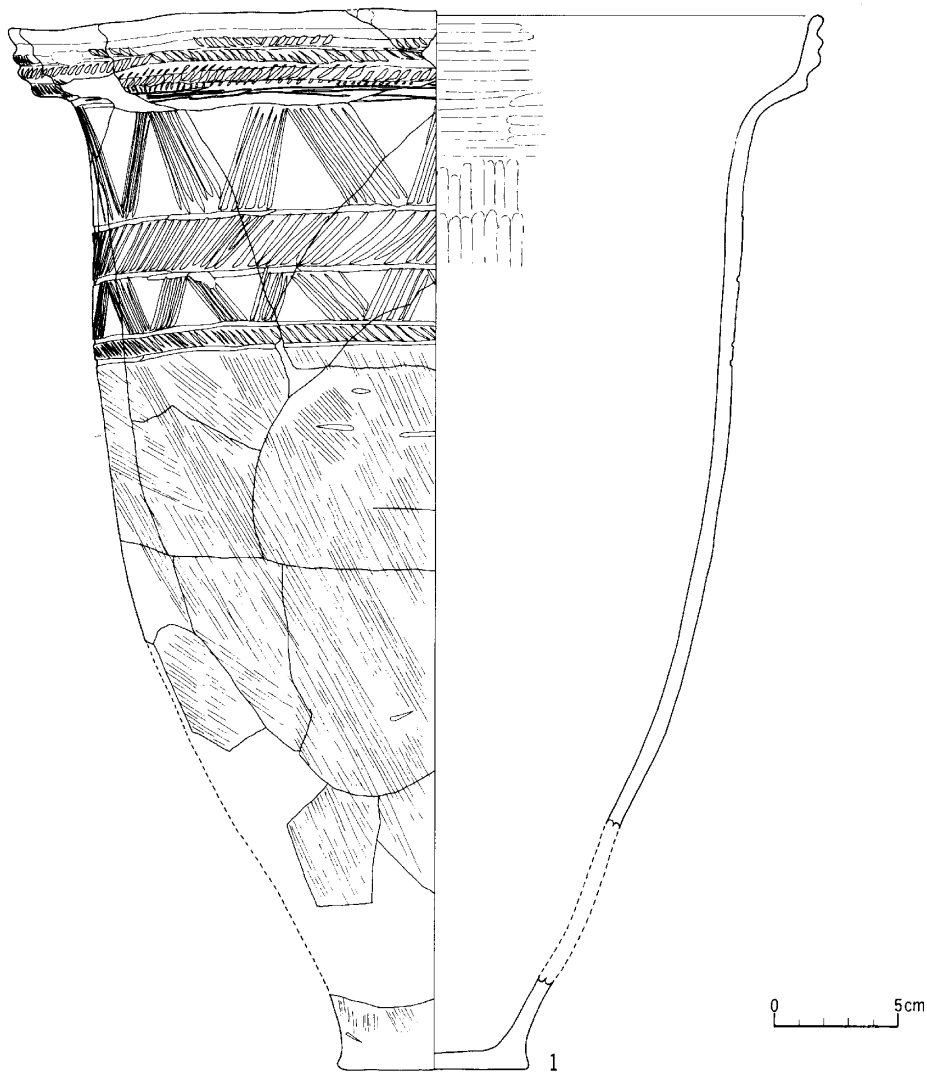
石器は全て埋土から出土している。第42図-1～5はオホーツク文化期の柳葉形石鏃。6～29は有茎石鏃。29～44は無茎石鏃。45は石槍。安山岩製。46、47は両面加工ナイフ。48は片面加工ナイフ。49は表裏の側縁部を粗く加工したものでナイフの未製品と思われる。50～59は側削器。60、61は円形搔器。45を除き全て黒曜石製。第43図-1、2は石錐。1は頁石製。3は玄武岩製の石匙。4、5は磨製石斧。6、7は玄武岩製の側削器。8は石球。9～11は叩き石。10は先端部に、11は表裏の平坦面に使用痕が残る。

小 括

本堅穴の床面からは時期を判断する土器等の出土はないが、形態からオホーツク文化期のものであることは明らかである。詳細な時期は不明であるが、埋土出土のオホーツク土器はソー



第31图 14号穴平面图

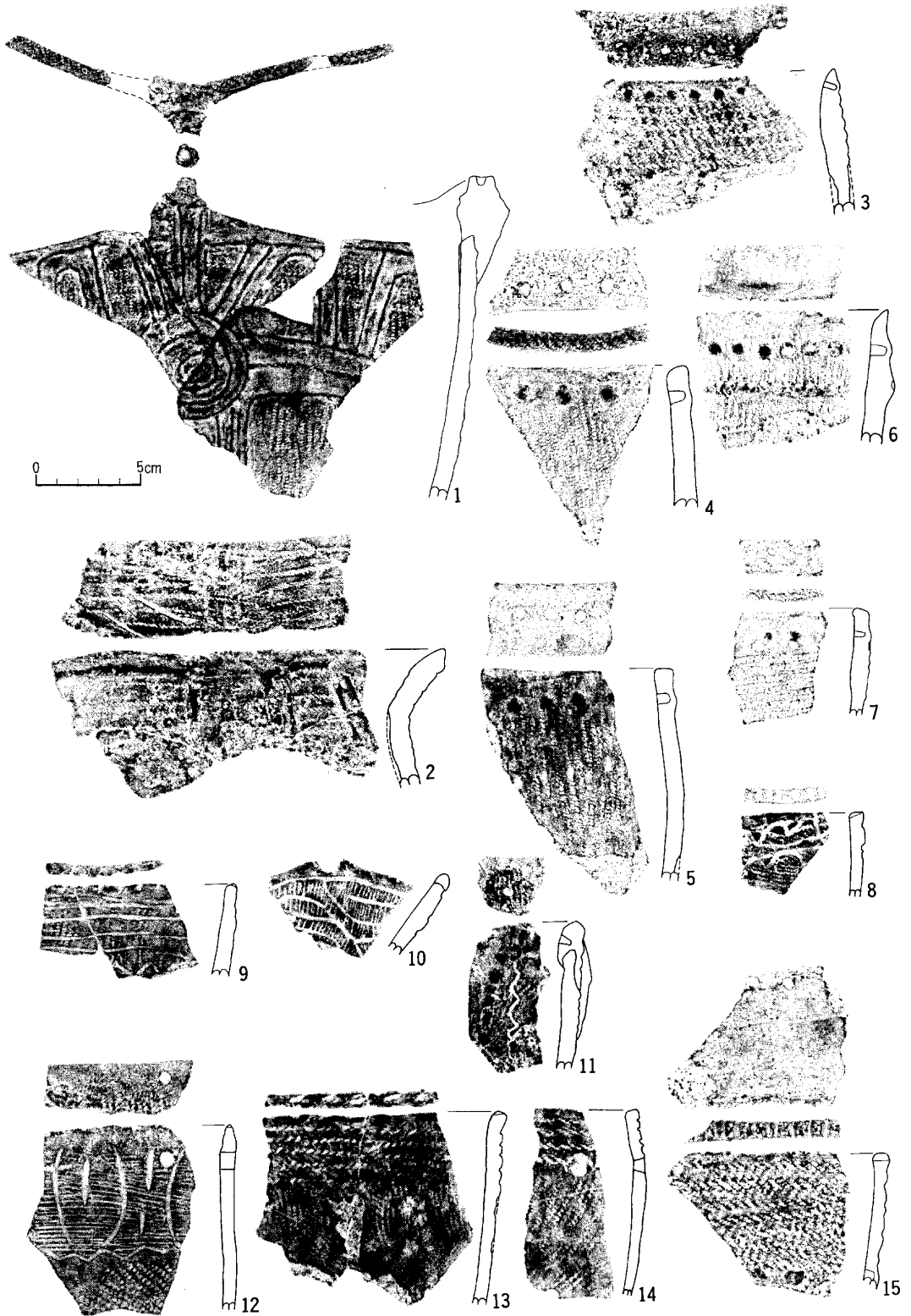


第38図 14号竪穴埋土(1・2)出土土器

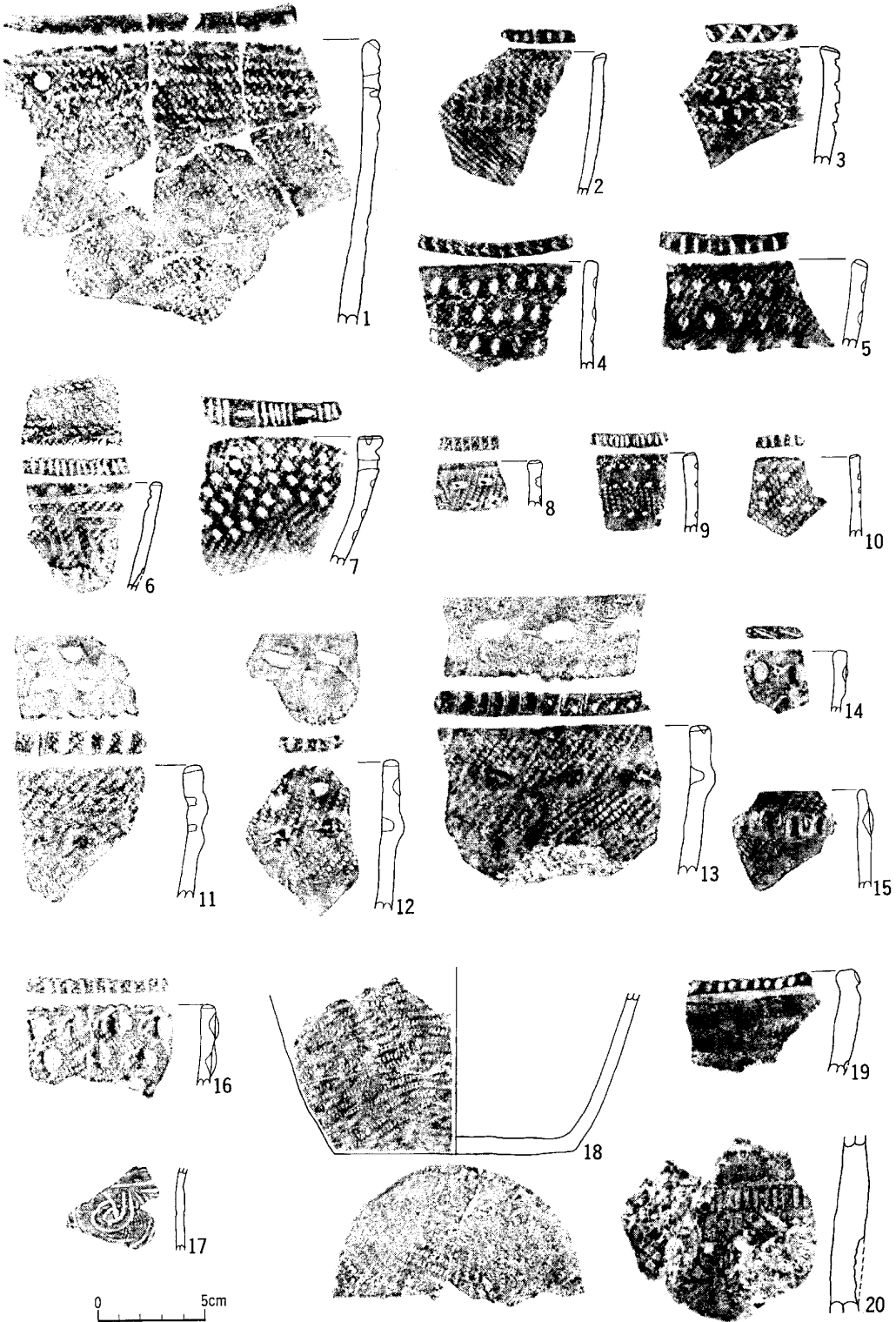
メン状貼付文以外はみられずこの時期のものである可能性がある。青銅製鐸は本竪穴に伴うものであろう。



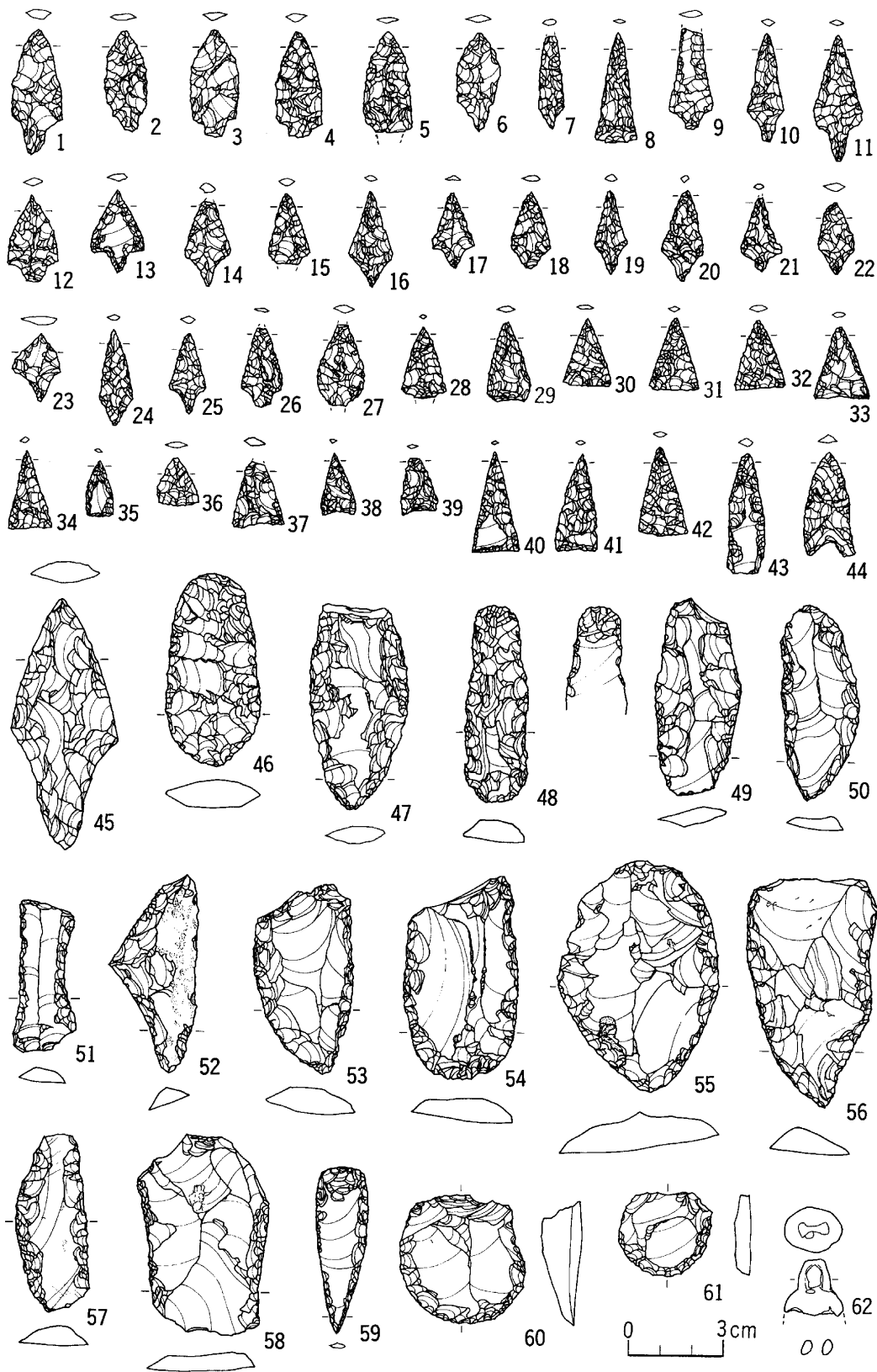
第39图 14号竖穴埋土(1~9)出土土器



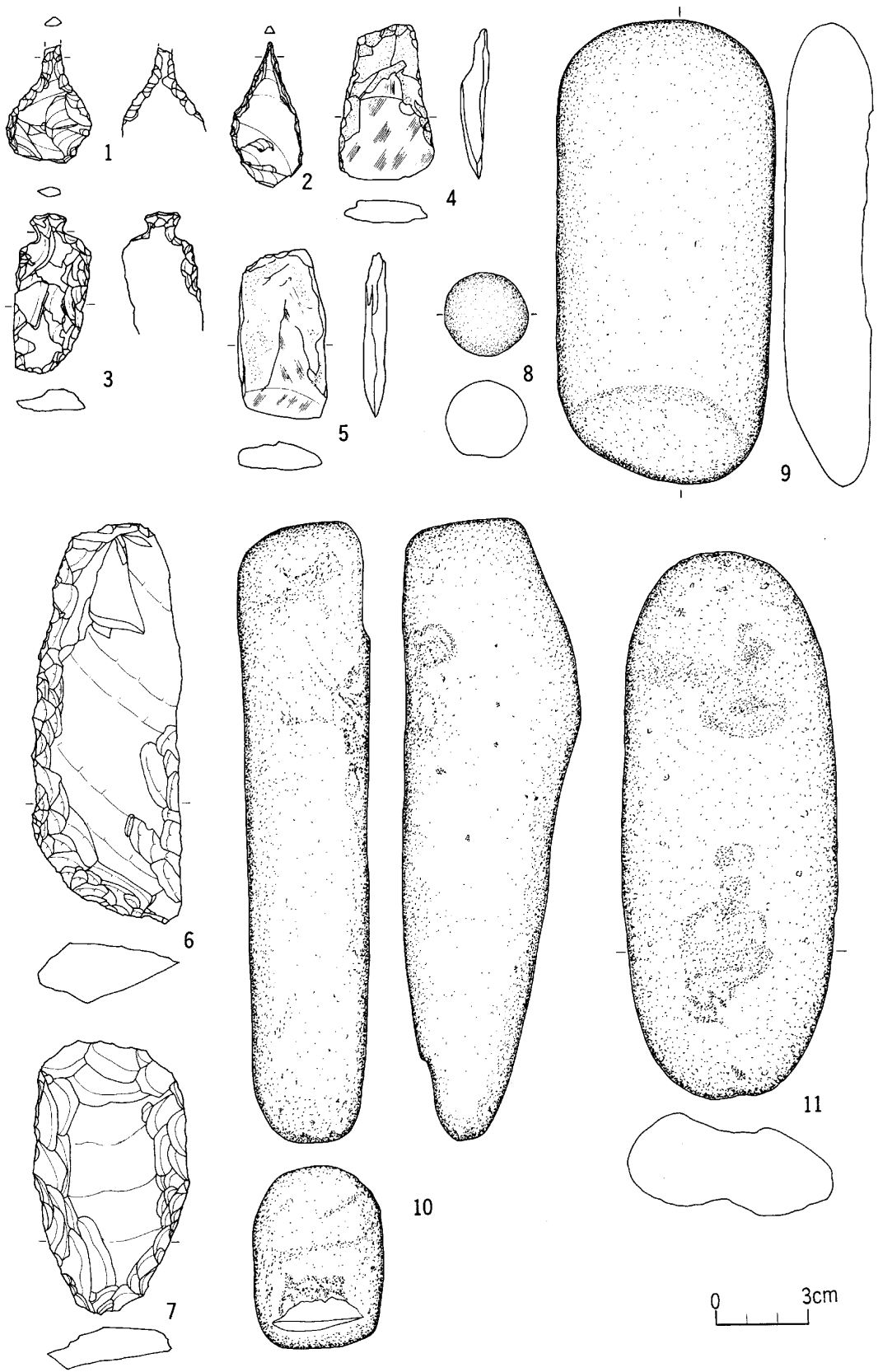
第40图 14号竖穴埋土(1~15)出土土器



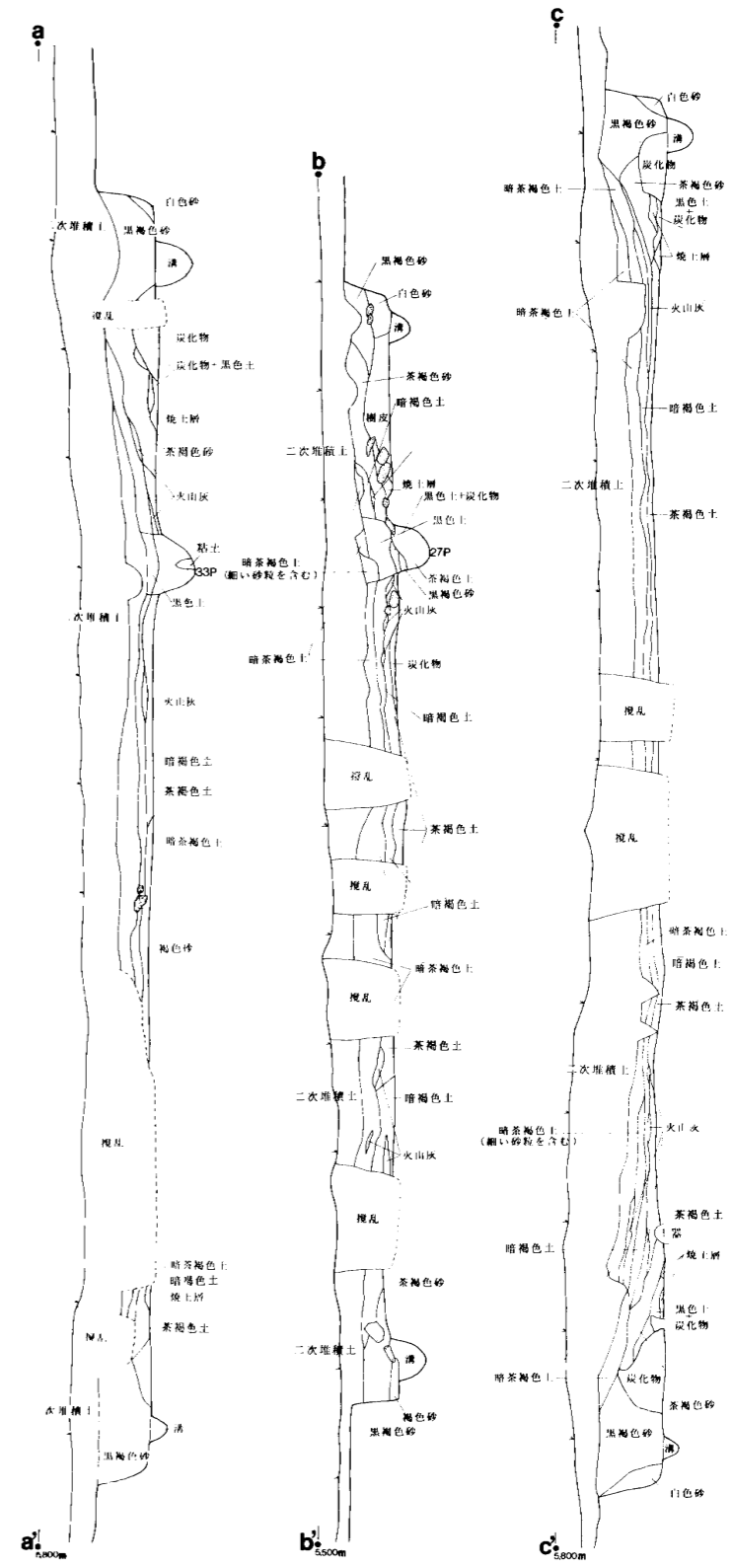
第41圖 14号竖穴埋土(1~20)出土土器



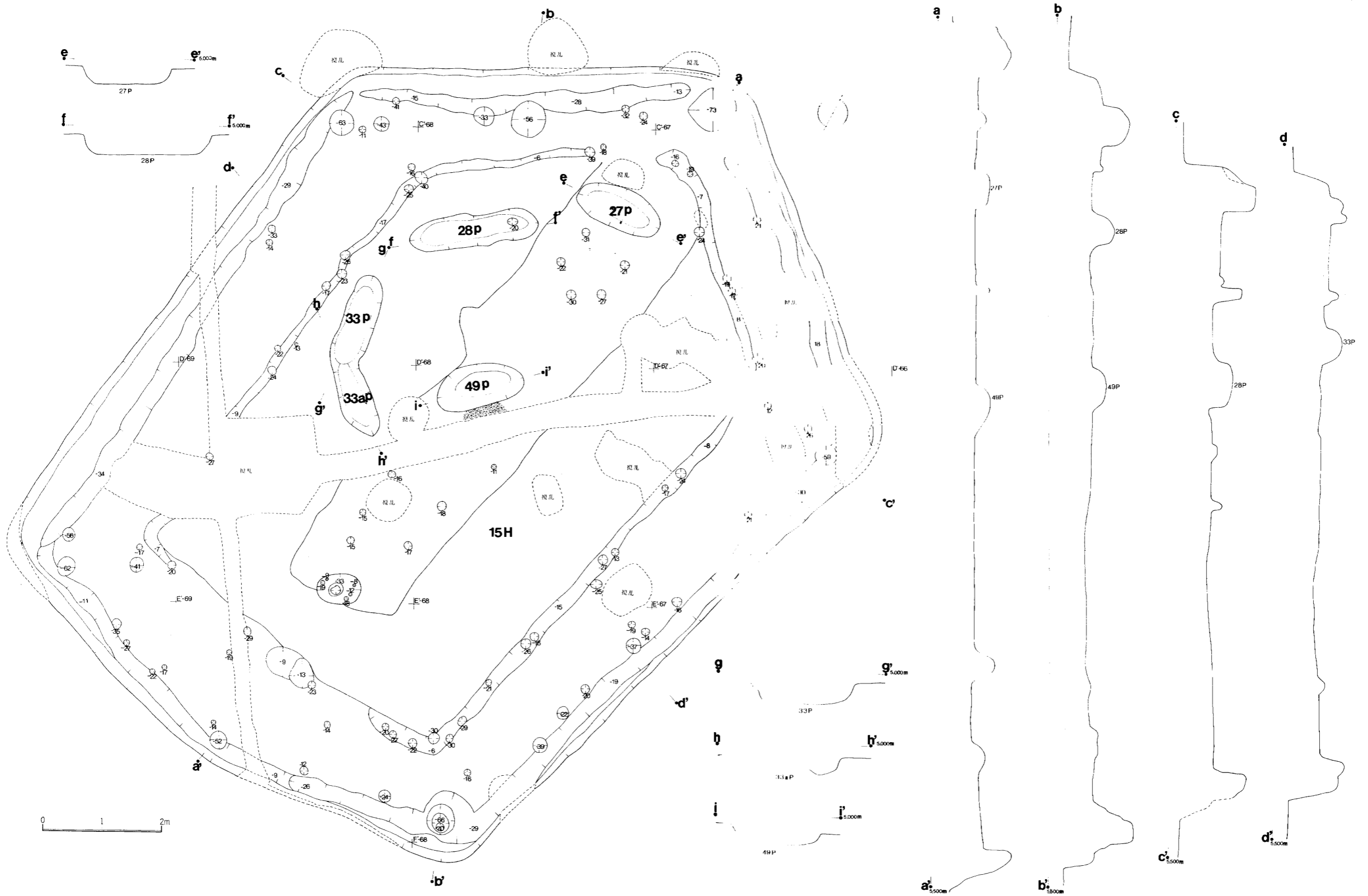
第42图 14号竖穴埋土(1~61)出土石器·埋土(62)出土青铜製品



第43图 14号竖穴埋土(1~11)出土石器



第44図 15号竪穴遺物出土分布図



第45図 15号竪穴、ピット27、ピット28、ピット33、ピット33 a、ピット49平面図

15 号 竪 穴

遺 構 (第44、45、46図、図版17-1・2)

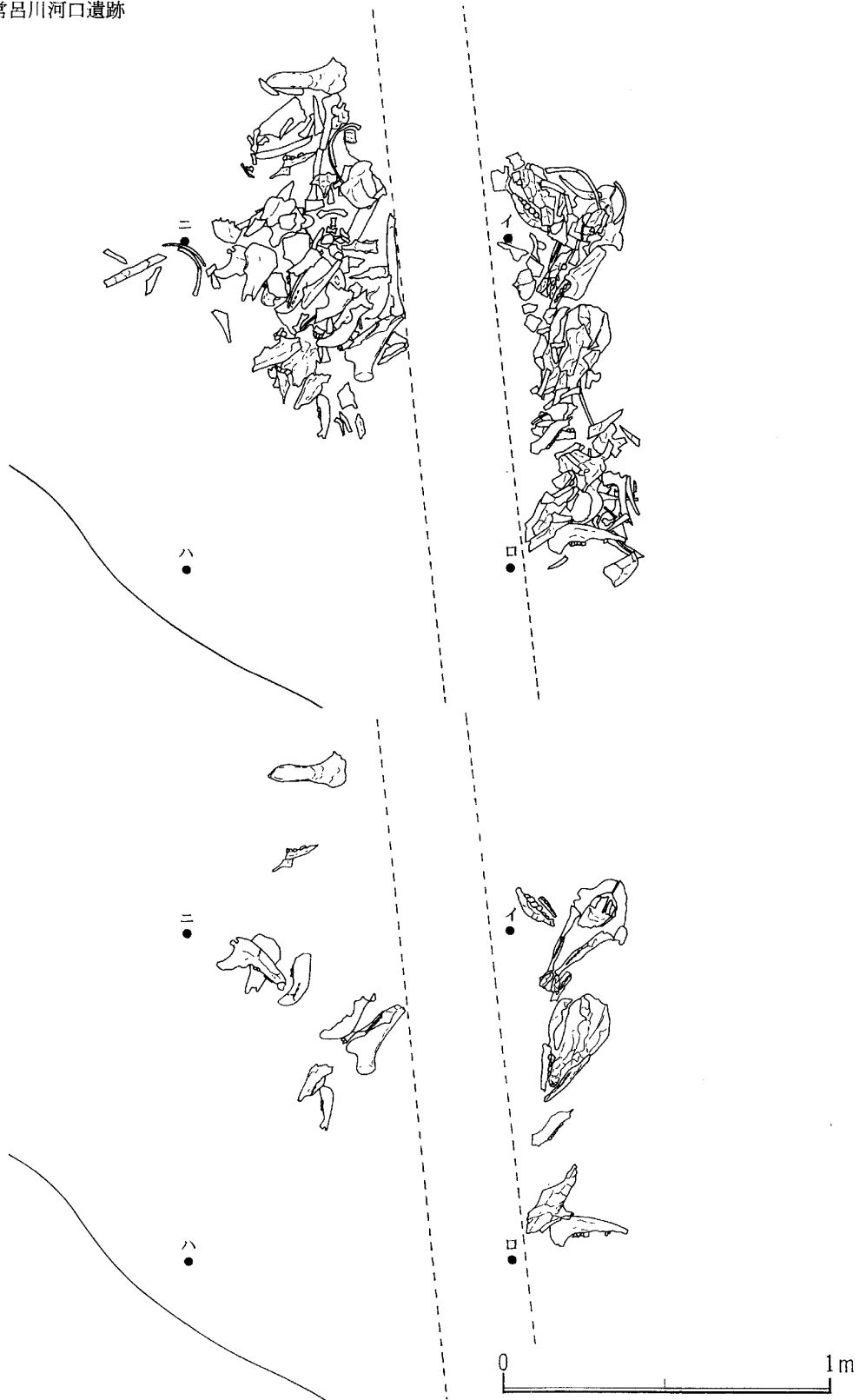
本竪穴はD'66、E'66グリッドの表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みを確認した。この黒色土はD'66、67、68、E'66、67、68、69、F'68、69グリッドの広い範囲に見られ、かなり規模の大きい竪穴であることが予想された。黒色土に掛かる土層ベルトを4本設定し掘り下げるとD'67、68グリッド周辺に粘土の盛土が見られた。これは近年、この地域の住民によるもので、深い窪みであるため盛土をしたものと思われる。この盛土を除去し黒色土を剝土すると前後してD'66グリッドでは赤変した硬質の面が現れた。当初、この面がオホーツク文化の貼床面とは考えられず、新しい時期のものとして判断していたが、各グリッドを掘り進めるうちにオホーツク文化期の土器が出土し始めてきた。土器は貼床と壁の間の砂地から出土している。D'66、68グリッドの土層面ではトコロ火山灰Ⅲ(摩周b火山灰)を切り込むピットが現れた。このピットは貼床を切り込んでおり、ピット上部から高坏が出土している。

壁際には幅約10~30cmの板材が内側に倒れ込むように検出された。板材はベッドもしくは壁の土留め板と考えられるが、貼床の赤変度合い、発泡スチロール化した黒曜石をみるとかなりの焼失温度が予想され、ベッドは焼失した可能性が高い。逆に壁面と垂直に密着している土留め板は焼失を免れている。また、板材を取除くと壁面と並行する幅約10~15cmの板材が西壁側の床面にありこれがベッドの構造材であったかもしれない。内側に倒れ込んだ板材は土留め用の壁材であったものと考えている。図版18-1に示す通り板材の上部には白樺樹皮が載っている。樹皮は幅約30cm、長さ約50cmである。樹皮は竪穴の壁近くから出土し、ほぼ全域から数枚が束の状態で出土している。最後の樹皮——つまり最も内側の面を剥がす時に長さ約4~5cmの木釘が検出された。木釘は内側に倒れ込んだ樹皮と直行して出土している。木釘は樹皮を固定するために利用されたものと思われるが、樹皮に打ち突けたのではないため別の何らかの方法で樹皮を固定したのであろう(図版18-2)。

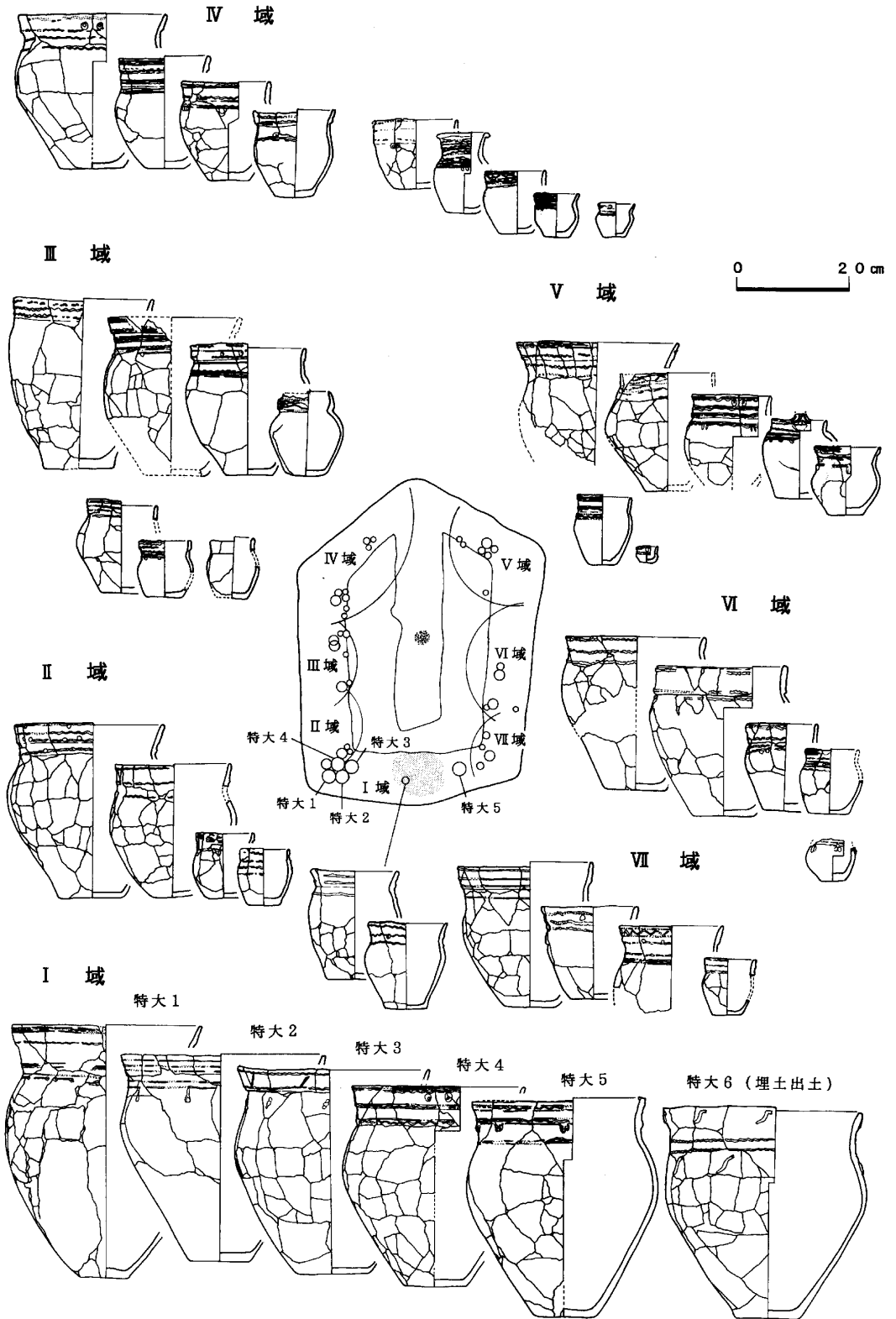
貼床は粘土を使用している。かなりの高い温度で焼けたため移植ゴテで叩けば撥ね返るほどガチガチに硬質化している。貼床の幅は骨塚側が約1.2mであるが概ね2mである。厚さは約3~4cm。この結果、一部は攪乱による破壊を受けているものの開口部を北側に向けた「コ」字形の貼床を容易に検出することができた。

炉跡は竪穴の中央部にある。砂質土面はかすかに赤変しているが半分は攪乱を受け、一部はピット49に破壊されている。周囲に角礫が散在しているところから判断すると本来は石囲み炉であった可能性がある。

周溝は壁直下と貼床外側の二本ある。壁直下の周溝は開口部と西壁隅で途切れるもののほぼ全周している。幅は約25~30cm。深度は床面から約30cmとかなり深い。あるいは検出した土留



第46図 15号竖穴骨塚出土状況図



第47图 15号豎穴出土土器分布图

め用の板材はこの周溝に埋められていたものでそれが焼失時に上に持ち上げられて内側に倒れ込んだものかもしれない。貼床外側の周溝は開口部の一部と骨塚前面部が途切れている。幅は約10～28cm、深度は約7～17cmである。

本竪穴の規模は長軸14m、短軸10mの六角形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上り、高さは確認面から約50cmである。支柱穴は長軸面に4本あると思われるが、1本はピット27の破壊を受けているため検出できず3本確認した。径約27cm～70cm、深さ約73cmである。また、他の壁隅にも同じ規模の支柱穴が認められる。補助柱は貼床外側の周溝内に多くある。径約30cm～50cm、深度約63cmのものがほぼ等間隔に配置されている。また、壁直下の周溝付近では径約25cm～30cm、深度約35cmの小規模な補助柱が等間隔に配置され、径約12cm～20cm、深度約20cmの補助柱が不規則に配置されている。

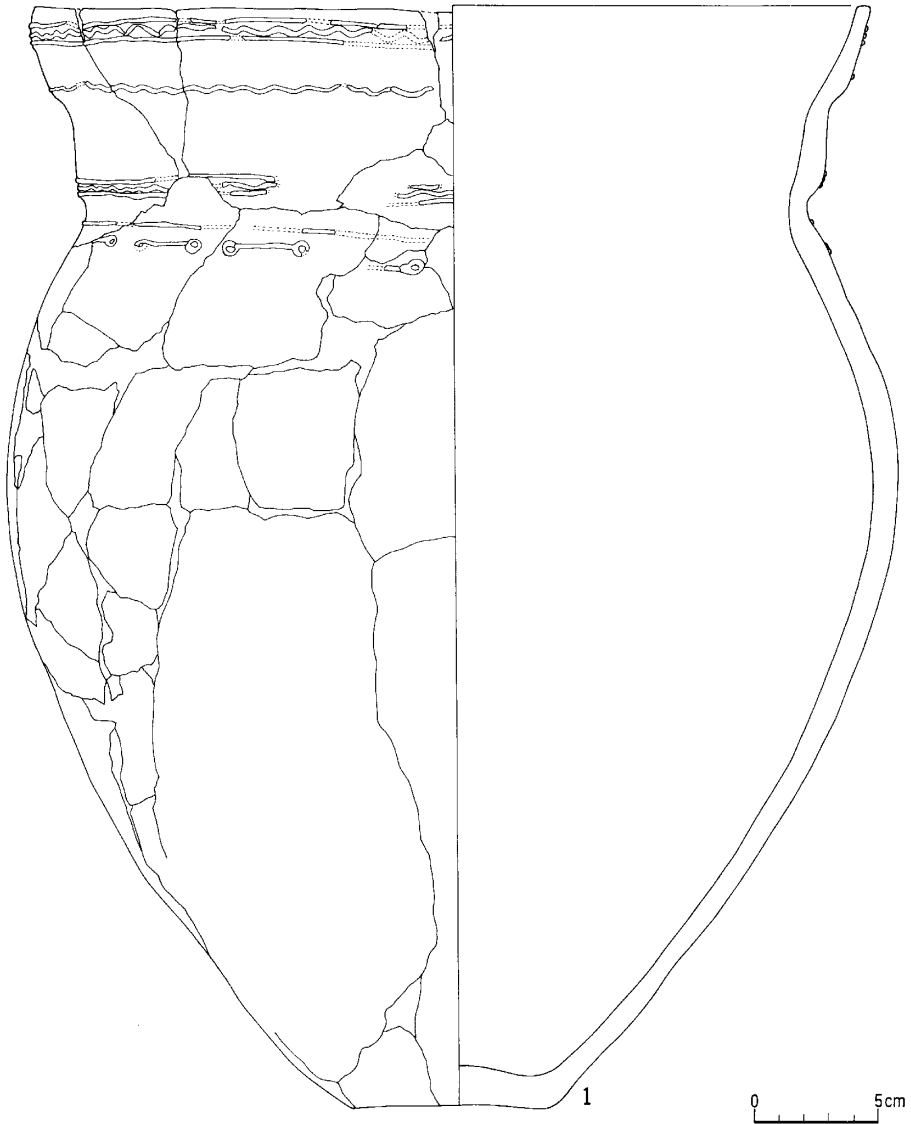
骨塚は竪穴の奥壁中央部にある。骨塚のほぼ中央部が攪乱を受け遺存は悪いが各種の動物骨が検出された。良好な状態の頭骨は2頭、下顎骨は8点ある。頭骨は竪穴の内側に向けて置かれている（図版21-1・2）。その他、四肢骨は骨塚の左側周囲に若干見られる。骨塚の側面上部からは第52図-2・3の中型土器が出土している。骨塚の動物骨の鑑定は付編Iに報告されている。

本竪穴からは各種の遺物が出土している。遺物は雑然と出土するのではなく一定の規則性をもっている。その最も良い例が土器である。土器は第47図の分布図にも示す通り特大型・大型・中型・小型のもの41個体が数個の土器を持ってブロックをなしている（図版19-1・2、図版20-1・2）。このブロックについてはすでに報告しており、第47図に示す通りI～VI域もしくはVII域に区別できる。他の遺物もI～VII域のブロックの中に収まっており複合世帯の単位ではないかと推測している。

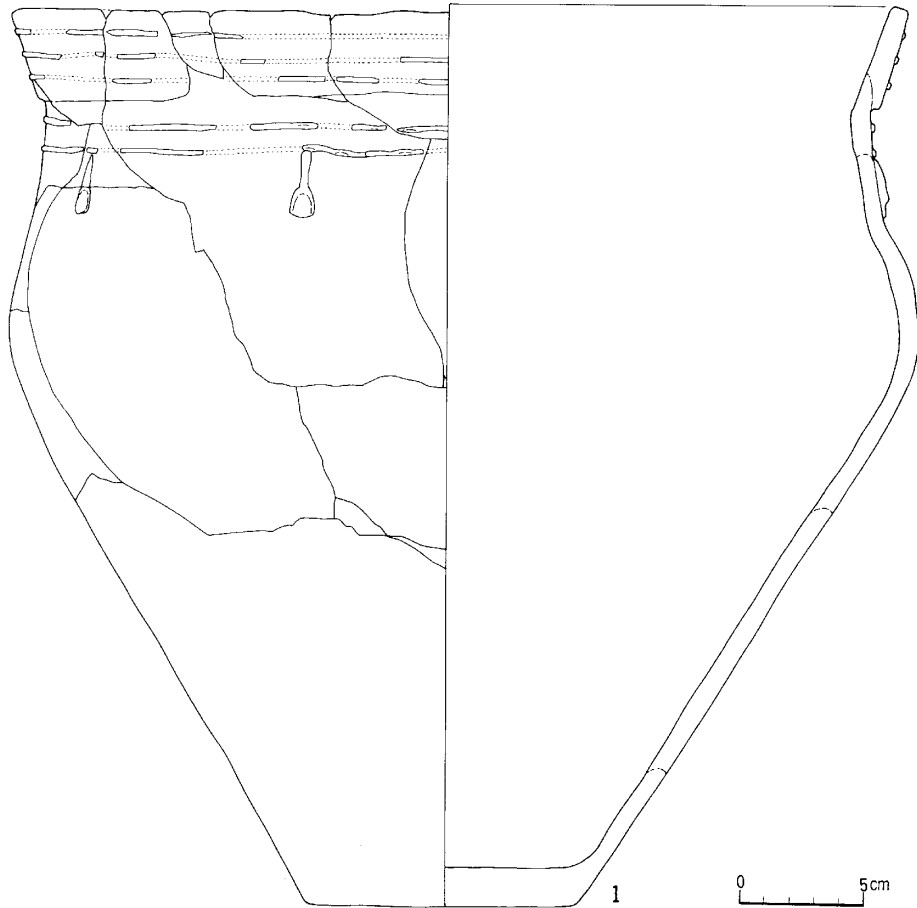
遺物 土器(第48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67、68図、図版24、図版25、図版26、図版27、図版28)

土器をはじめその他の遺物の大半は貼床と壁の間にある「外区」から出土している。遺物の中で最も多いのが土器である。土器はソーメン状貼付文（藤本e群）を主体としいるが、一部に藤本d群も認められる。まず、I域の土器について説明する。

第48図-1、第49図-1、第50図-1、第51図-1の4点は骨塚の西側床面から伏せた状態で出土している。口径が30cm以上に及び特大型土器としたものである。第48図-1は口径34cm、器高45cmを測る。器高の割に底部が小さい。口縁部は薄めの肥厚帯を持ちソーメン文が施される。頸部の幅は29cmと広くやや厚目の下方部にソーメン文が施される。頸部の下には「○—○」型の記号状の貼付が施され、胴部は丸味を呈する。第49図-1は口径34cm、器高35cmを測る。肥厚帯と頸部に5条の直線のソーメン文を施し、頸部の下にはスプーン型の記号状の貼付が施され、肩部は張る。第50図-1は口径31cm、器高38cmを測る。肥厚帯は薄めであり、波状を呈する2条のソーメン文間に直線のソーメン文を施したもので頸部には大きさの異なるボタン状の貼付が



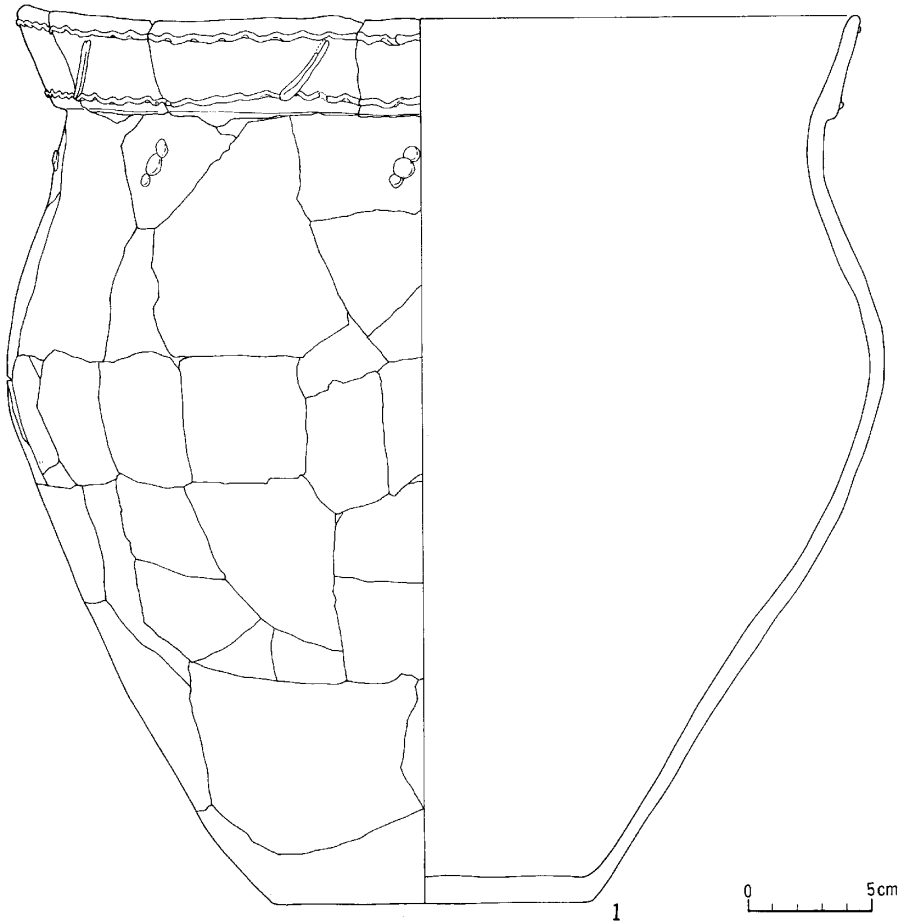
第48图 15号豎穴床面出土土器



第49図 15号竪穴床面出土土器

施される。第51図-1は口径31cm、器高38cmを測る。口縁の内側を直線のソーメン文が横走る。口縁の肥厚帯と頸部には2本の直線と1本の波状のソーメン文で構成される3段の文様帯があり、2段目にはボタン状の貼付文の上にソーメン文を円形に施す。胴部は第48図-1と同じ様に丸味を呈する。第52図-1は骨塚の東側からつぶれた状態出土した。口径31cm、器高35cmの特大型土器である。肥厚帯と頸部に直線と波状それぞれ1本ずつのソーメン文を3段に施している。2は中型土器の割には器厚が9cmと厚い。頸部がなく口縁とその下方に太い直線のソーメン文が施される。3は肥厚帯をもたず3条の波状ソーメン文と円形の貼付文が施される。2、3は骨塚上部から出土している。

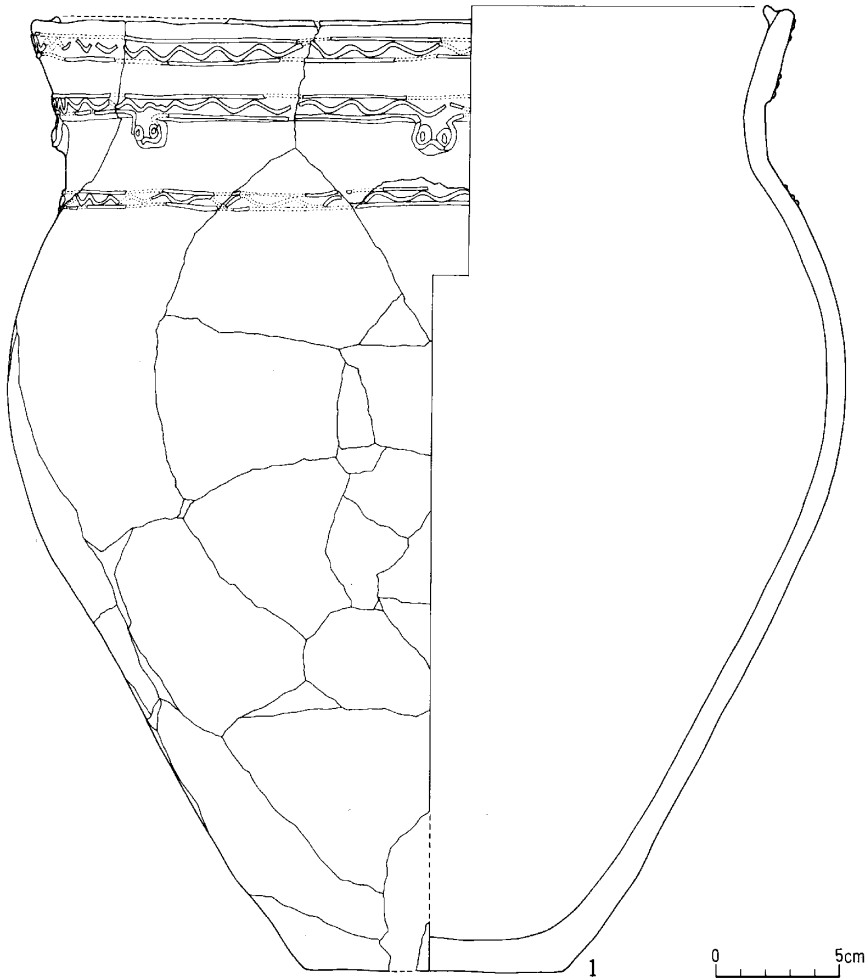
II域の土器は第53図-1～4がある。1は口径27cmの大型土器。肥厚帯をもつが器壁はうすい。口縁部に3条のソーメン文と円形貼付文、頸部に擬縄貼付文と円形貼付文が施される。2は口径21cmの大型土器。肥厚帯はもつが器壁は極めて薄い。ソーメン文は口縁部に2本、頸部では



第50図 15号竪穴床面出土土器

円形貼付文とともに1本みられる。底部はやや丸味を帯び不安定である。3、4は小型土器。3は口縁部から胴中部にかけて4条のソーマン文が施される。底部は厚い。4は1.4cmほどの肥厚帯上と頸部の下にソーマン文と円形貼付文を施す。

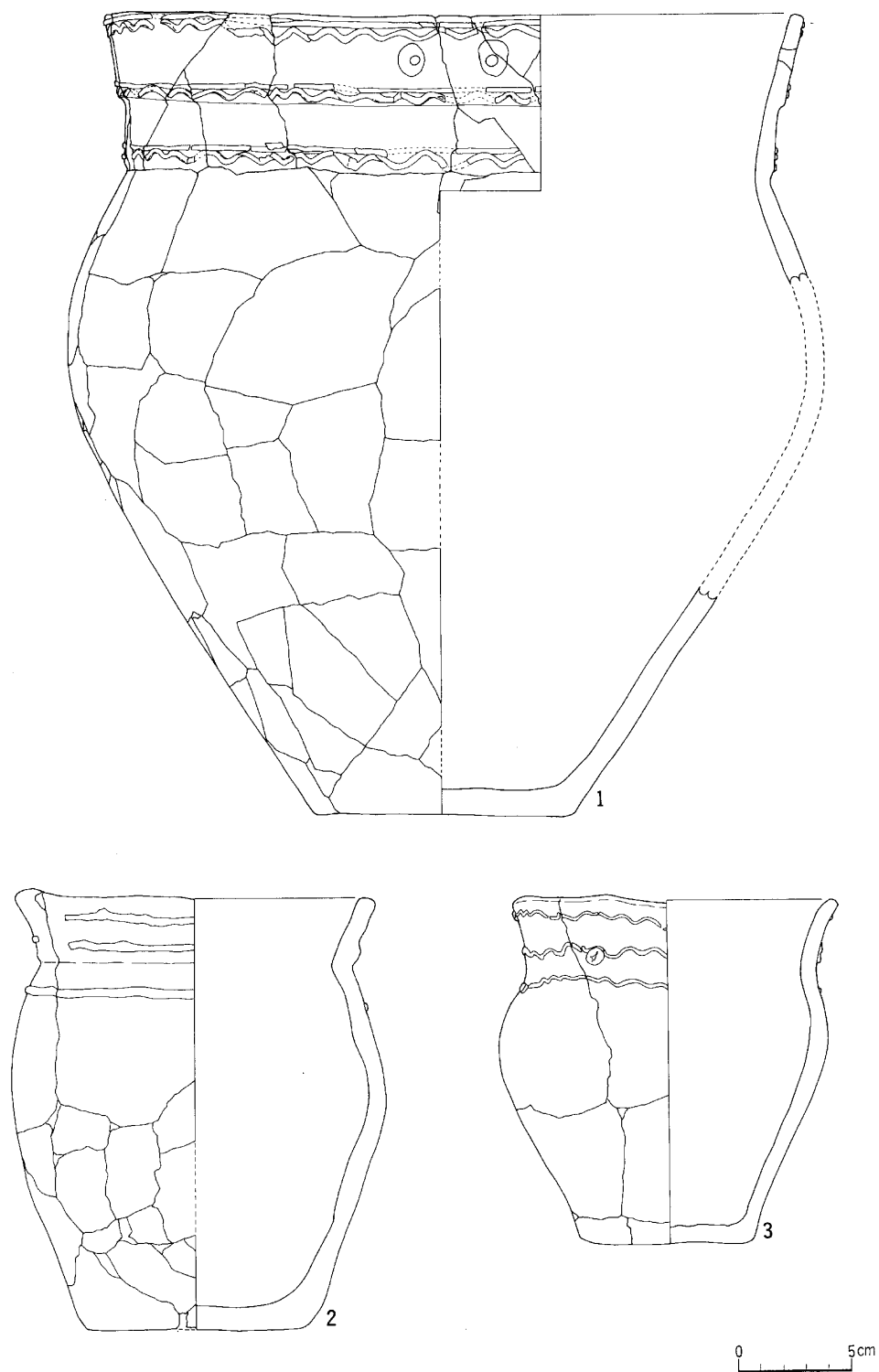
III域の土器は第54図-1～7がある。1は口径25cm、器高30cmの大型土器。土器の大きさの割に肥厚帯の幅は狭く、器壁も薄い。3条のソーマン文は指により捻られる。それに対して2の大型土器は肥厚帯、頸部の作りと施文は丁寧である。文様は直線と波状のソーマン文と頸部下の擬縄貼付文で構成される。3は口縁部が胴部に比して小さい壺型土器である。口縁は内湾する。4の器形は火災の焼失温度によりかなり変形している。肥厚帯はなく4条の直線ソーマン文が施される。5～7は小型土器。5は肥厚帯と頸部下に円形貼付文をもつ。6は肥厚帯をもたず頸部からほぼ垂直に立ち上がる。文様はソーマン文と擬縄貼付文により構成されるが、擬縄貼付文の刻みは鋭い。7は無文。第55図-1は大型土器。ソーマン文を主体とし肥厚帯と頸部



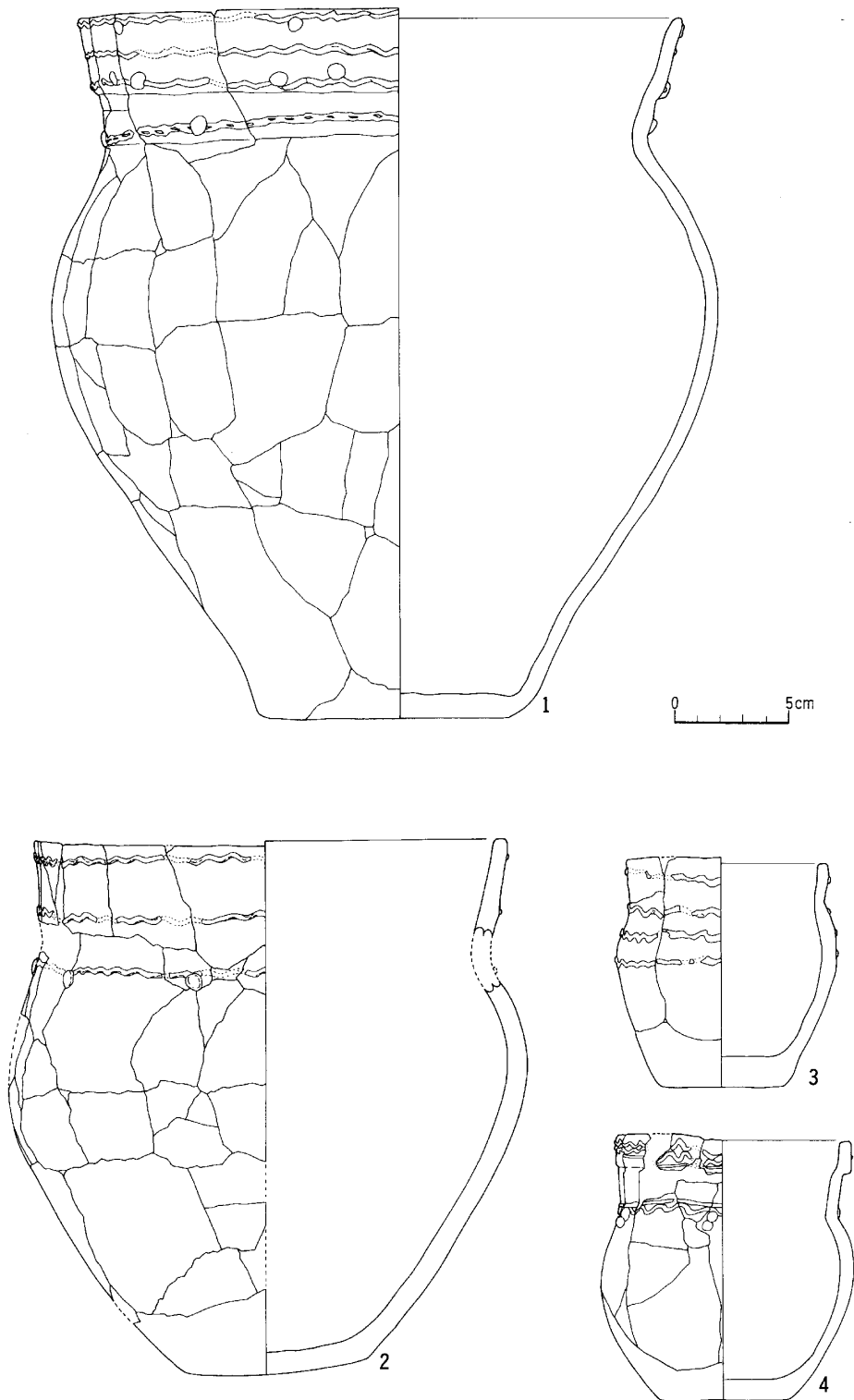
第51図 15号竖穴床面出土土器

にそれぞれ1本の擬縄貼付文が施される。2は口縁部が大きく張り出し、頸部に隆帯が加えられる。

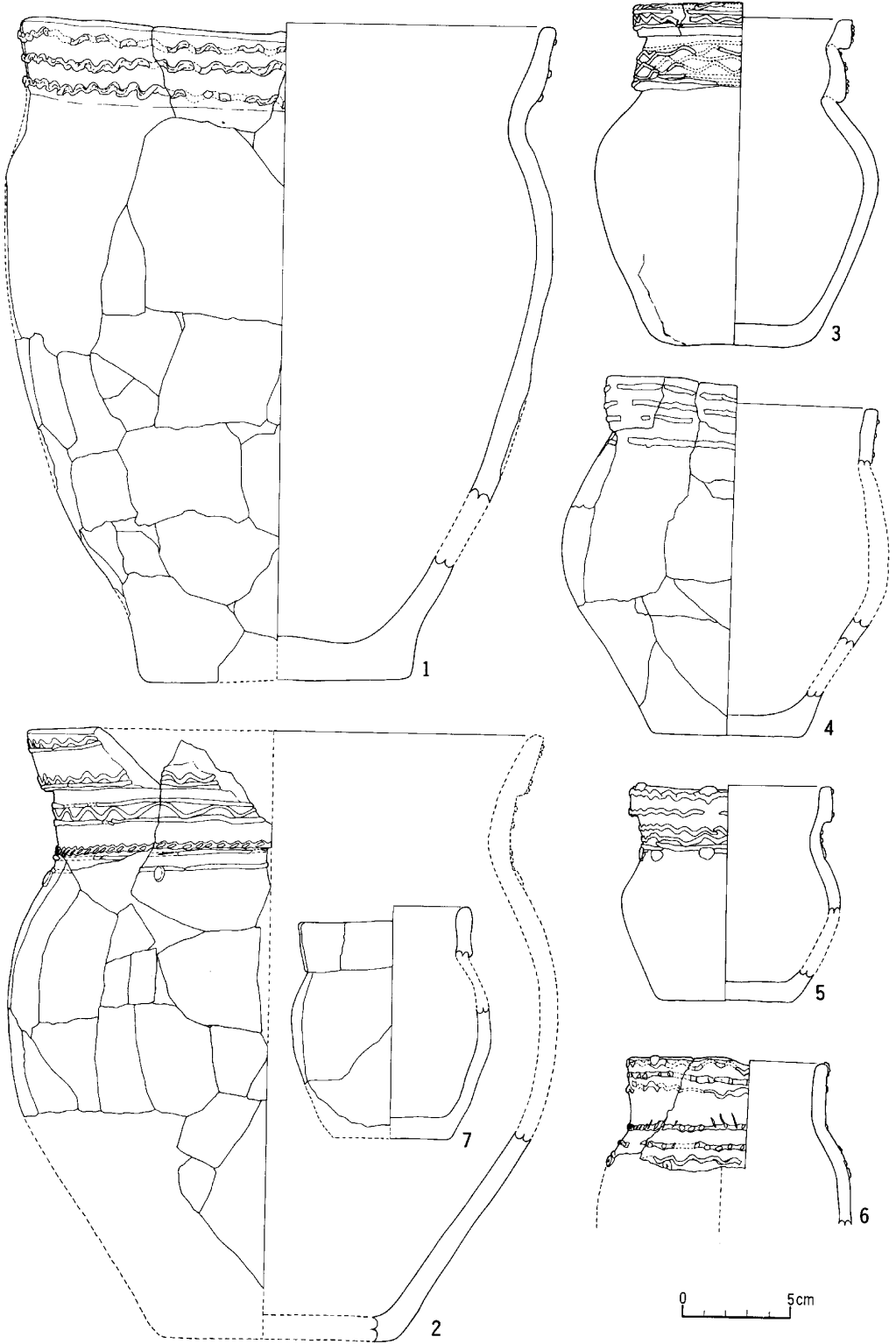
IV域の土器は第56図-1～9がある。1は口径26.2cmの大型土器。肥厚帯をもちソーメン文は頸部にも施される。2～5は中型鉢形土器。頸部が第48図-1の特大型土器にみられるごとくやや膨らむ。施文は丁寧で肥厚帯下部のソーメン文の上下には爪状の刺突が施される。3は肥厚帯と頸部下に擬縄貼付文を施す。4は肥厚帯をもつものの頸部がない。ボタン状貼付文をソーメン文で連結させる。5は肥厚帯はあるものの頸部が明瞭に作られていないため底部から口縁部にかけてほぼストレートに立ち上がる。肥厚帯の幅は4cmと広く直線のソーメン文が施される。6～9は小型土器。6は肥厚帯がなく口唇部が外に張り出す。頸部が長く、頸部下までソーメン文が施される。7～9は直線と波状のソーメン文で構成される。



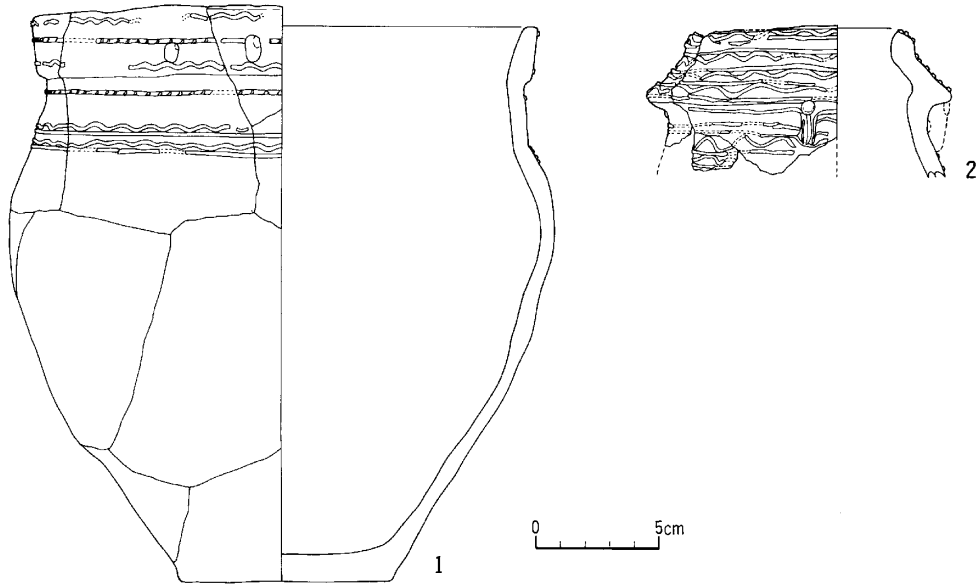
第52图 15号豎穴床面(1~3)出土土器



第53図 15号竪穴床面(1~4)出土土器



第54图 15号豎穴床面(1~7)出土土器



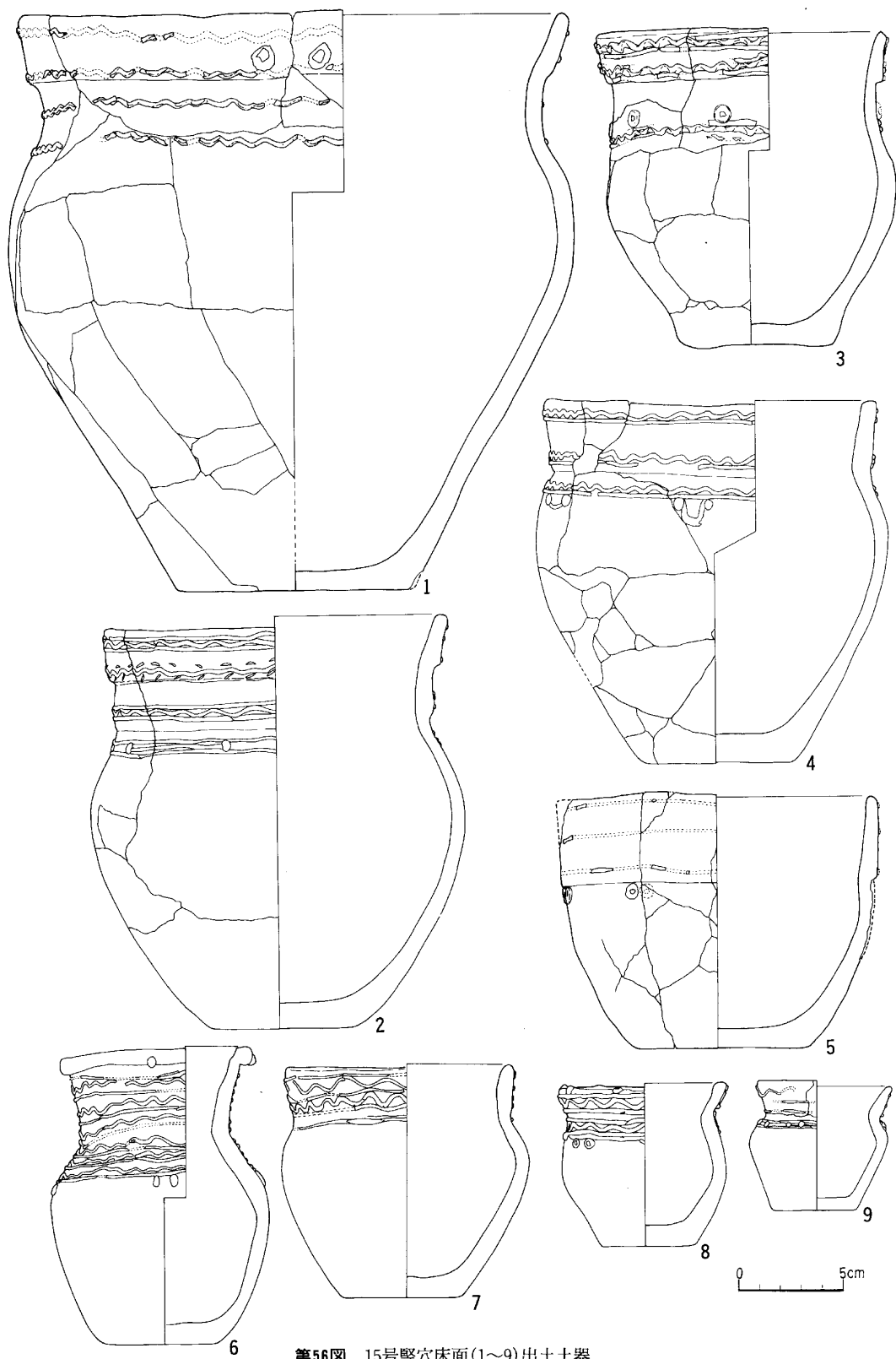
第55図 15号竪穴床面(1・2)出土土器

V域の土器。第57図-1は口径29cmの大型土器。肥厚帯をもつ。ソーメン文の施された口縁部と頸部に擬縄貼付文が施される。2は胴部の張出しの割に口径がすばまり、壺形的である。ソーメン文は口縁、頸部に施される。3は中型土器。胴部の張り出しが上方の肩部にある。口縁と口縁を結ぶ吊り手がついていたのであろう。4は肥厚帯の幅が広く4cmである。直線と波状のソーメン文を4段に施している。5～7は小型土器。口縁部と頸部下にソーメン文が施される。

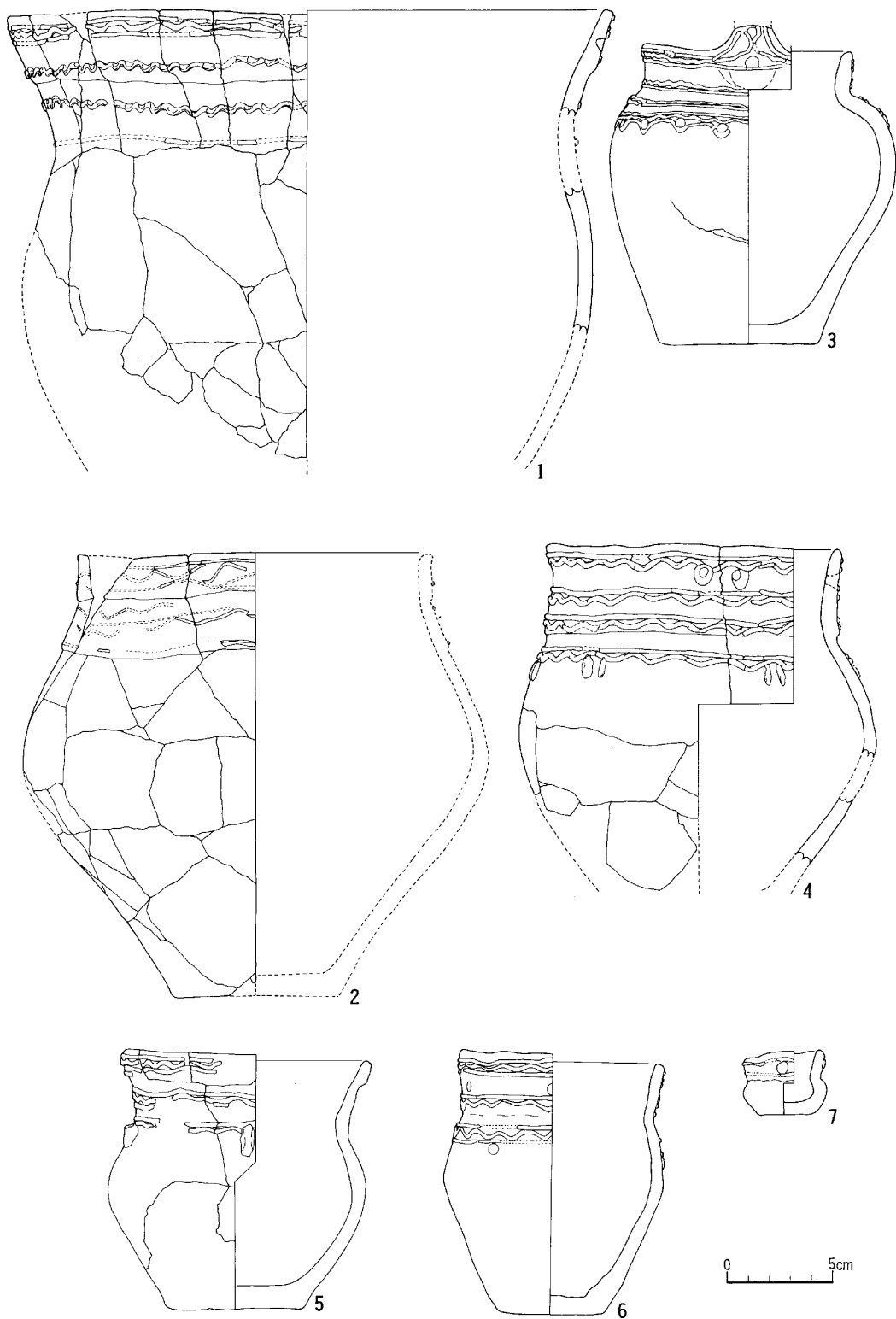
VI域の土器。第58図-1は口径24cm、器高26cmの大型土器。肥厚帯は47cmと幅広い。擬縄貼付文は肥厚帯の上下とその直下に施される。2は口径25cm、器高27cmの大型土器。肥厚帯はなく口縁部から頸部に3条の擬縄貼付文を施す。3は中型土器。肥厚帯をもたず、口縁部から頸部下にかけて4条のソーメン文が施される。4は小型土器。5は口縁部が欠失している。2条のソーメン文下に円形貼付文が施される。6は小型土器。

VII域の土器。第59図-1は大型土器。肥厚帯と頸部に直線の貼付文をもつ。2は中型土器。肥厚帯をもたず3本の擬縄貼付文とボタン状貼付文が施される。口縁部がきつめに外反する点は第85図-1に示した16号竪穴埋土出土の土器と類似する。3は中型土器。胴部が丸みを帯び、頸部に擬縄貼付文をもつ。4は小型土器。肥厚した口縁部に擬縄、ソーメン状の貼付文をもつ。5、6は床面近くから出土した。5は明瞭な肥厚帯を持たない大型土器。6は小型土器である。

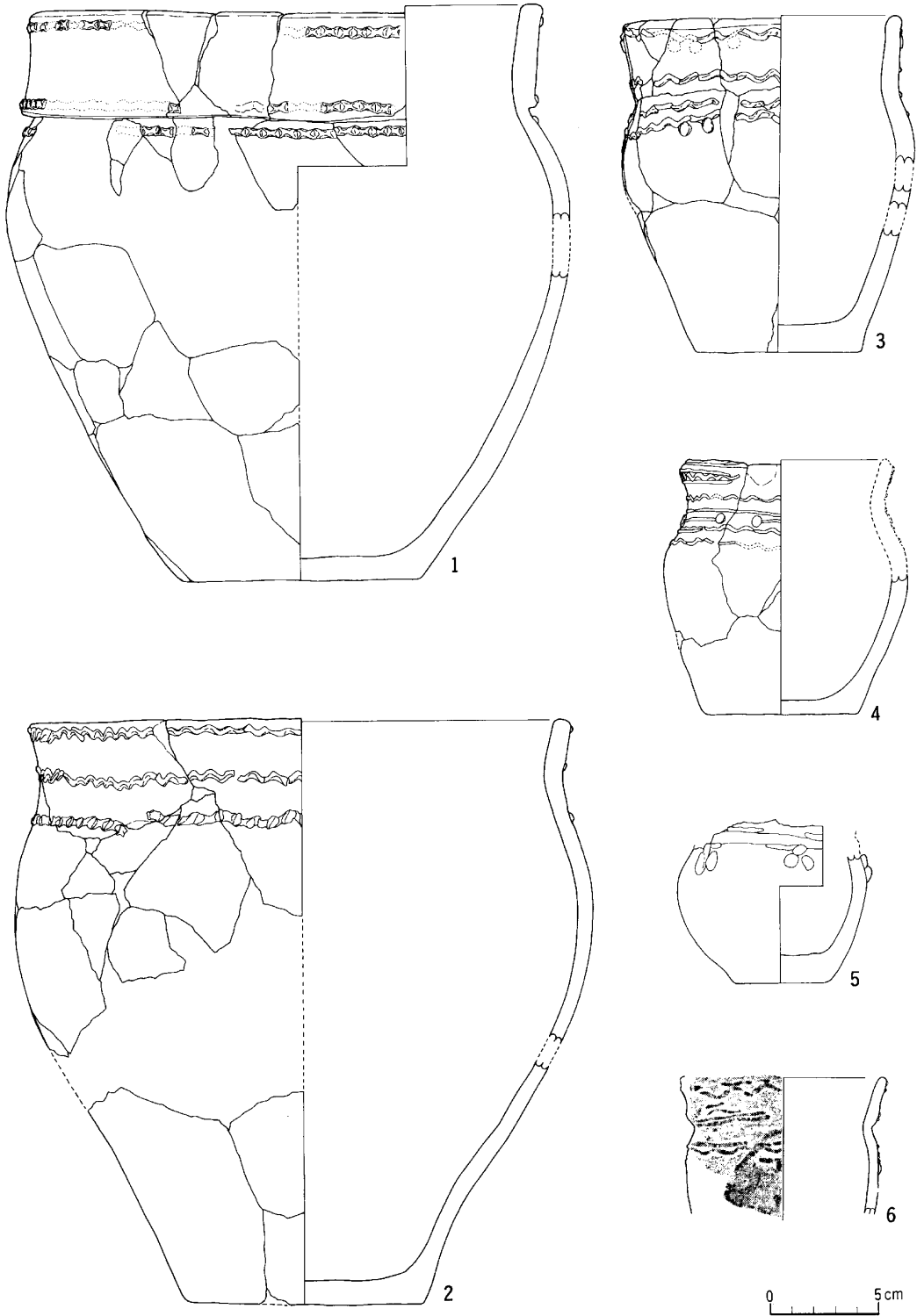
第60図-1～7は床面出土。1は肥厚帯が薄く波状、直線のソーメン状貼付文を施す。2はソーメン文間にボタン状の貼付文を等間隔に施す。2点の破片が接合したが1点は北壁の炭化材の下部から出土したもので器壁は火熱を受けず黒褐色であるが埋土から出土した残る1点は火熱



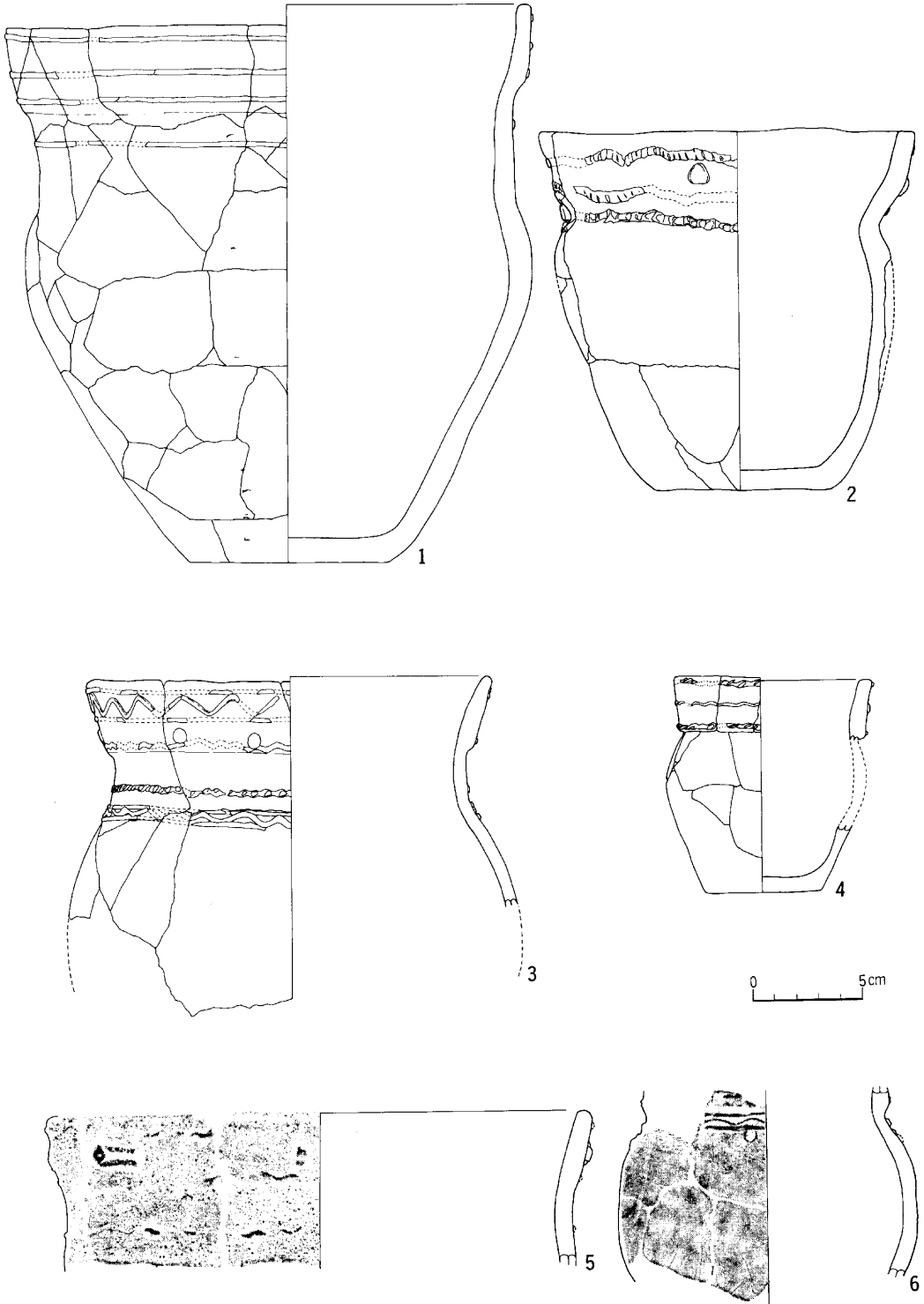
第56图 15号豎穴床面(1~9)出土土器



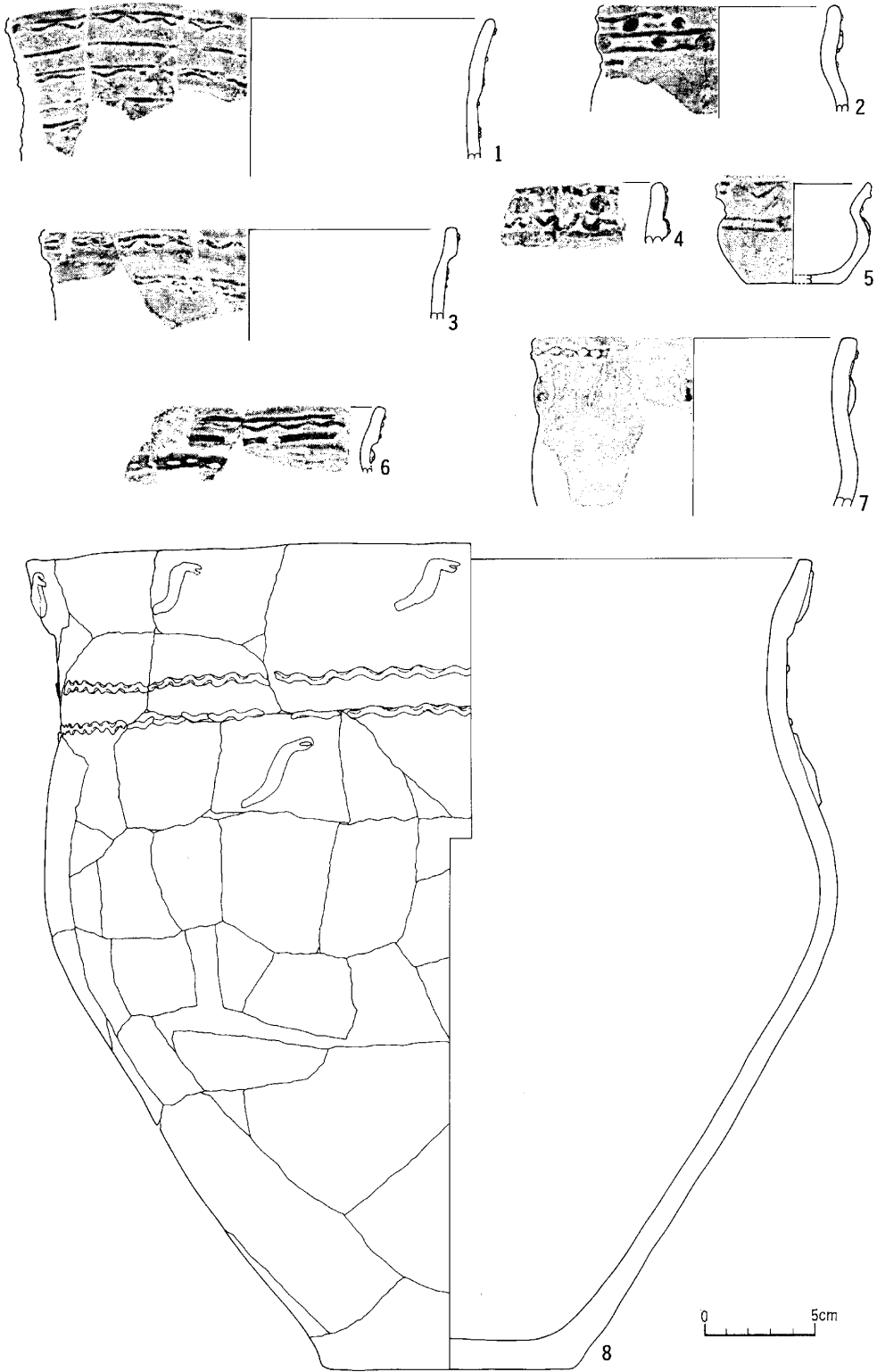
第57図 15号竪穴床面(1~7)出土土器



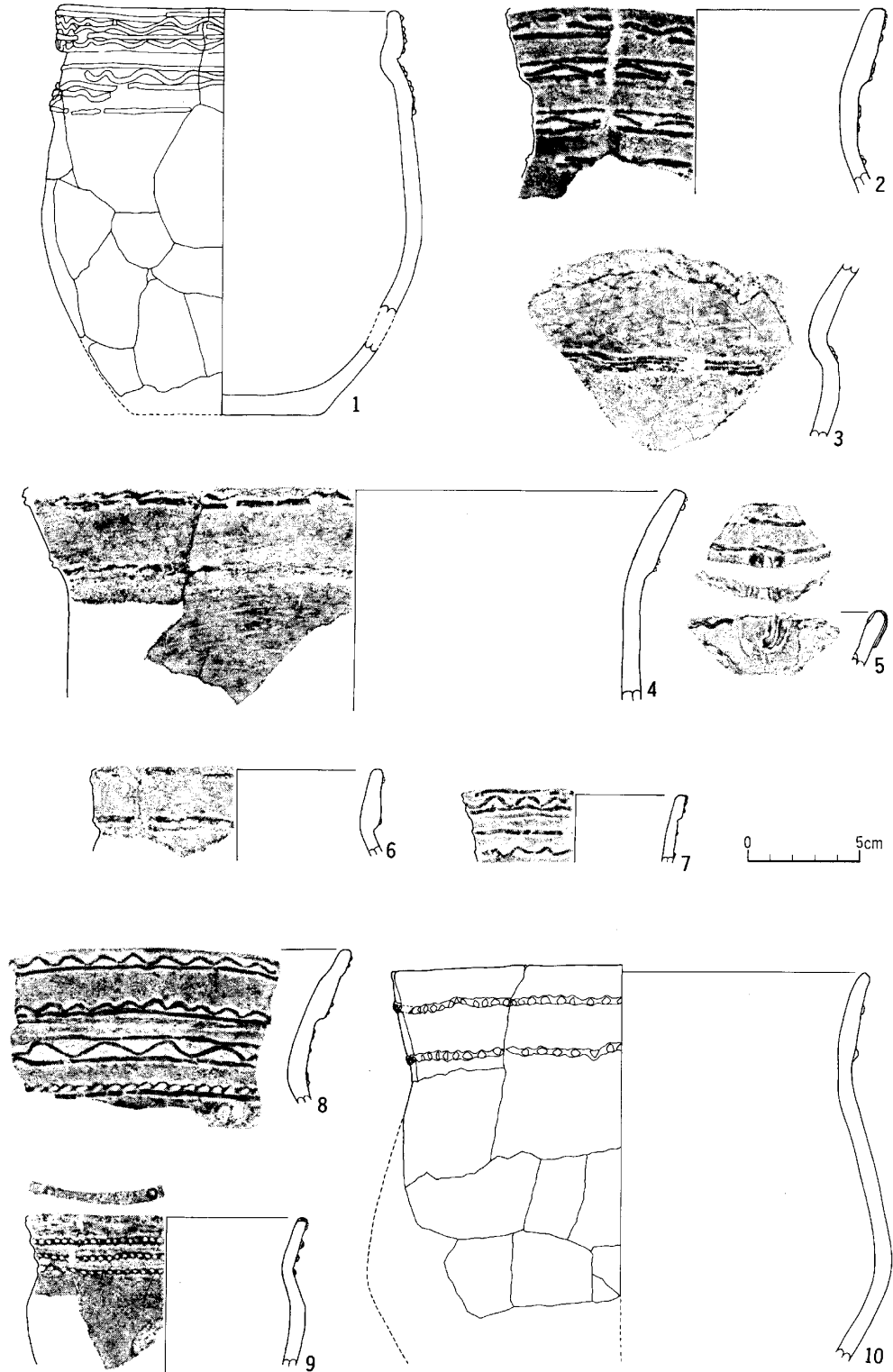
第58图 15号豎穴床面(1~6)出土土器



第59図 15号竖穴床面(1~6)出土土器



第60图 15号豎穴床面(1~7)・埋土(8)出土土器



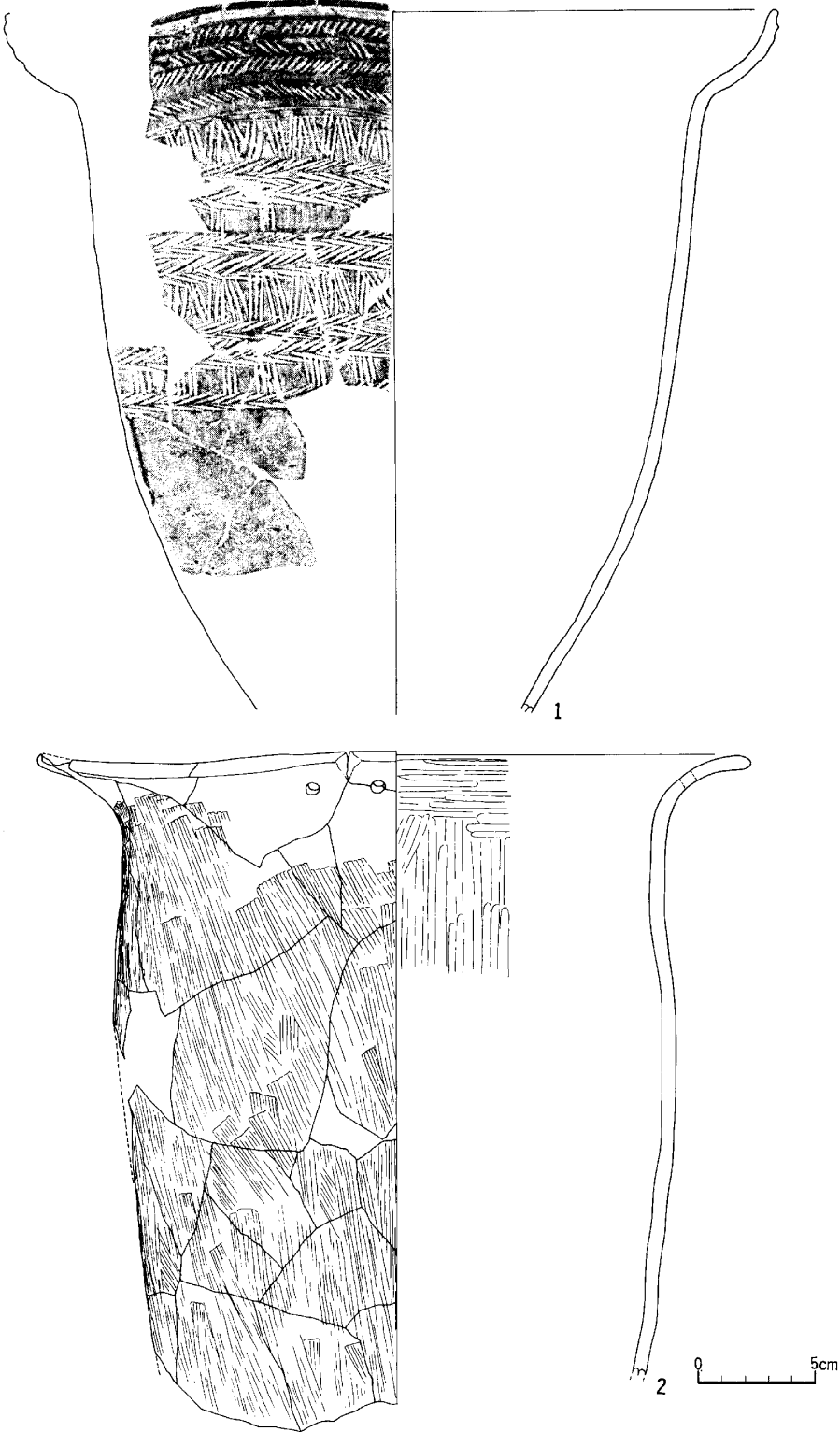
第61図 15号竪穴埋土(1~10)出土土器

を受け赤褐色を呈する。3は肥厚帯の幅が狭い。4は肥厚帯を持たず頸部下が張り出すもので口縁下には擬縄貼付文、ボタン状貼付文がある。5は小型土器。6は肥厚帯の下部に太めの貼付文があり細い刺突が加えられている。7は肥厚帯をもたず口縁部は頸部からほぼ垂直に立ち上がる。口縁の直下に擬縄貼付文が巡る。頸部には断面三角形の縦長の貼付が等間隔に施され、その上部は2本の刻線がある。

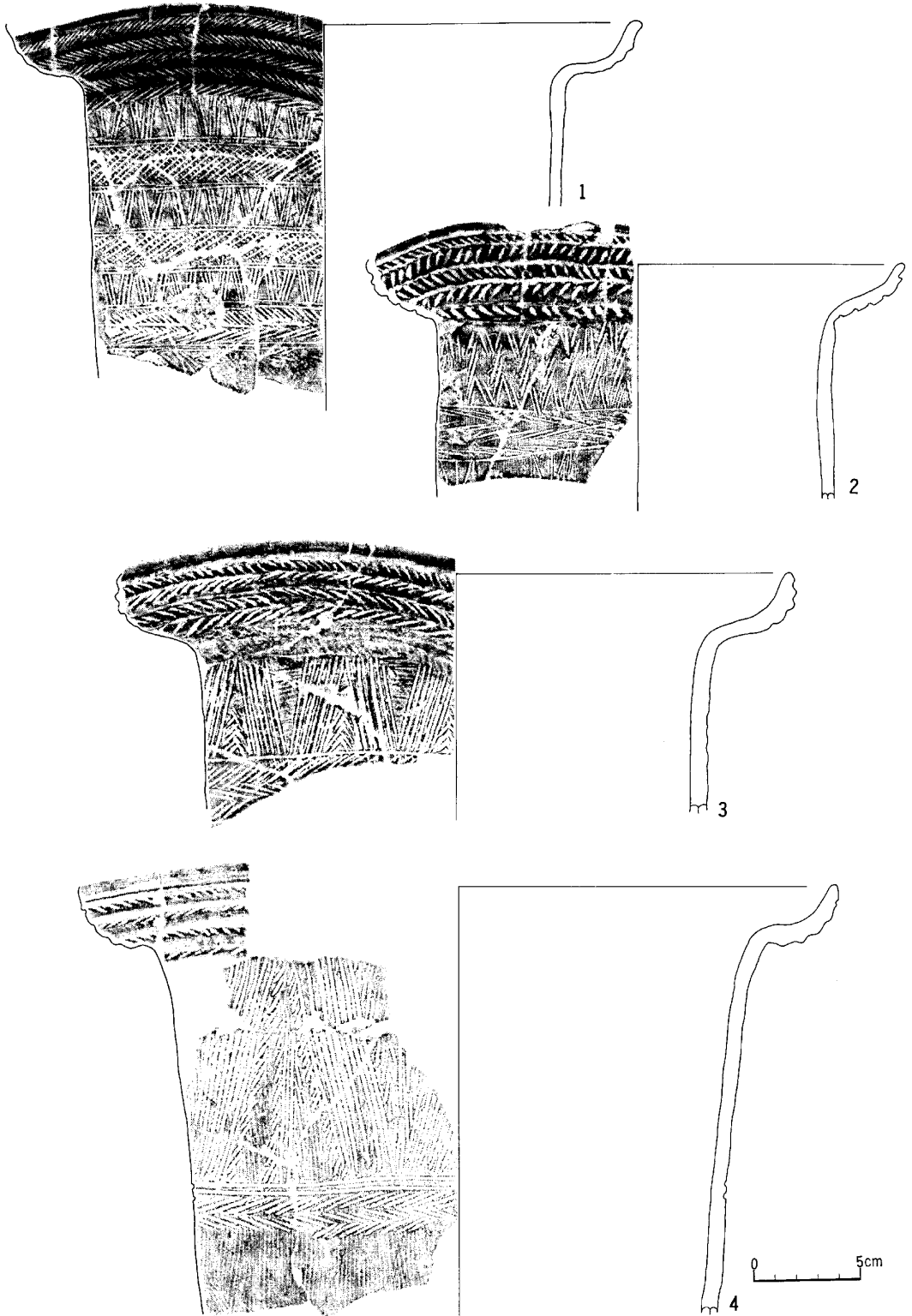
第60図-8は埋土出土の特大型土器。口径35cm、器高37cmを計る。肥厚帯と頸部下に海獣と思われる動物意匠を施し、頸部には波状のソーメン文を施す。

埋土からは第61図-1～10に示したオホーツク土器が出土している。1は中型土器。肥厚帯の幅が狭く頸部は明瞭でない。3の口縁部は第59図-2に類似するが直線の貼付文が施される。5は口唇部をまたがせるように2本の隆帯がある。拓本図右側の隆帯には縦の沈線が施され、内側に直線のソーメン文、口唇部に波状のソーメン文をそれぞれ2本施す。9、10は肥厚帯を持たず擬縄貼付文がある。10はかなり下方に胴部の膨らみがある。

埋土からは擦文期の土器も多く出土している。大部分は本竪穴に堆積している黄褐色を呈する摩周b火山灰より上面から出土しており、竪穴を切り込んで構築されている擦文後期のピット27、28、33、33a、49との関係においても層位的に矛盾はない。第62図-1は大型鉢形土器である。鋸歯文、矢羽根文、短刻線文が交互施され胴下部にまで及んでいる。施文は丁寧である。2は無文の大型鉢形土器。口縁は極めて強く外反し内面は刷毛、外面は篋により丁寧に調整されている。焼成も良い。第63図-1は大型鉢形土器。口縁が強く外反し立ち上がる。胴部の文様は鋸歯文、格子目文が交互に施され、最下部は短刻線を矢羽根状に施しているもので、文様帯は第62図-1と同様に胴下部まで及ぶようである。口縁の短刻線など施文は丁寧である。2は中型鉢形土器。口縁は緩く開き、矢羽根状の短刻線が施される。胴部は上下の「ハ」字状の刻線を2本の刻線で連結し針葉樹状文を変形させたものであり、その下部には矢羽根状文、針葉樹状文が続く。3、4は大型鉢形土器。胴部は6～7本単位の鋸歯文と矢羽根状文が施される。第64図-1は無文の小型鉢形土器。胴部は刷毛により調整されている。2は中型鉢形土器。2～3本単位の鋸歯文と矢羽根状文を交互に施している。3は斜めと縦の刻線と2段の矢羽根状文を交互に施している。4は壺型土器。口縁の張り出しは弱く口唇部はほぼ垂直に立ち上がる。実測図面の胴部文様は2本単位で菱形文を施文した後に鋸歯文を施しているが、裏側は菱形文、鋸歯文がなく斜めの刻線が数本単位で描かれ、その間を乱雑に刻線が施されている。また、この下部は格子目文が見られるが、横から裏側にかけて格子目文がなくなり斜めの刻線だけが施される。5は中型鉢形土器、6は大型鉢形土器であり、鋸歯文、矢羽根状文を交互に施している。第65図-1～5は高杯。1は施文は丁寧で脚部に3個所の透しがある。3、4は脚部が低く3には円形の刺突が巡る。4、5には4個の刻みがある。6は小型鉢形土器。連続する菱形文の中に短刻文を施している。7～12は無文の小型鉢形土器。11の底面には沈線と細かな凹凸が見られる、がこれは意図的に施されたものでなく、底部が外側に張り出していることから上か



第62図 15号竖穴埋土(1・2)出土土器



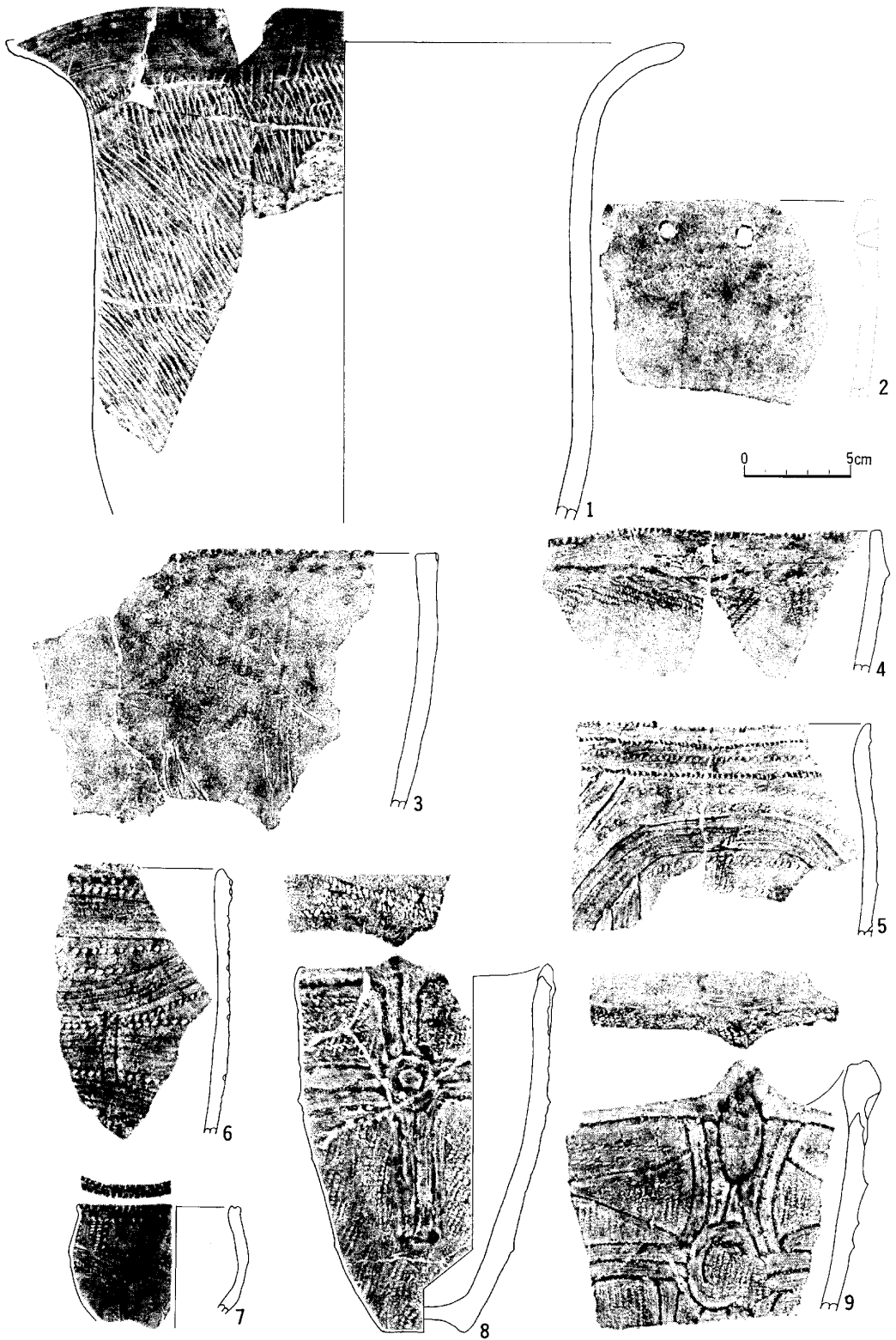
第63图 15号豎穴埋土(1~3)・攪乱(4)出土土器



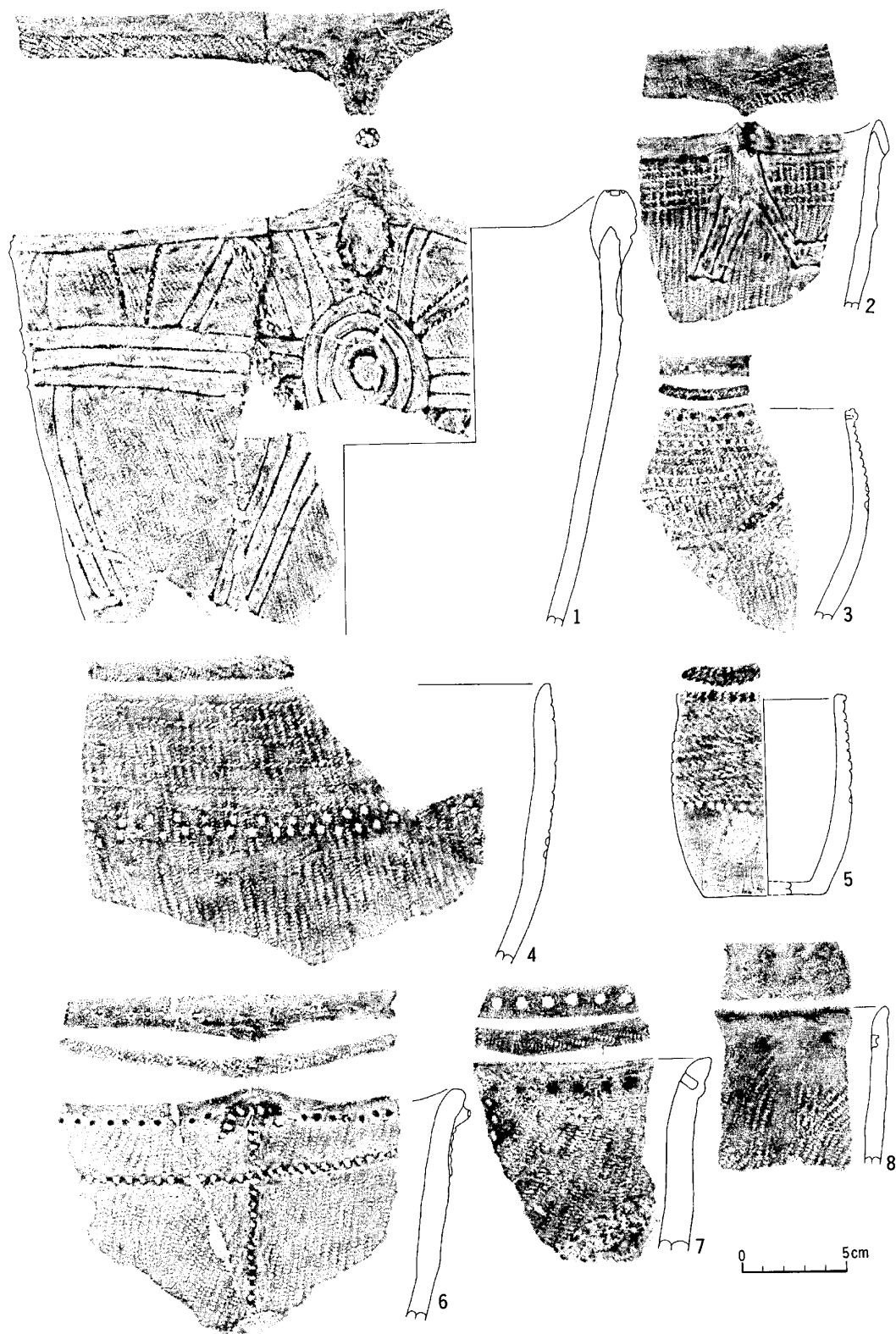
第64図 15号竪穴埋土(1~6)出土土器



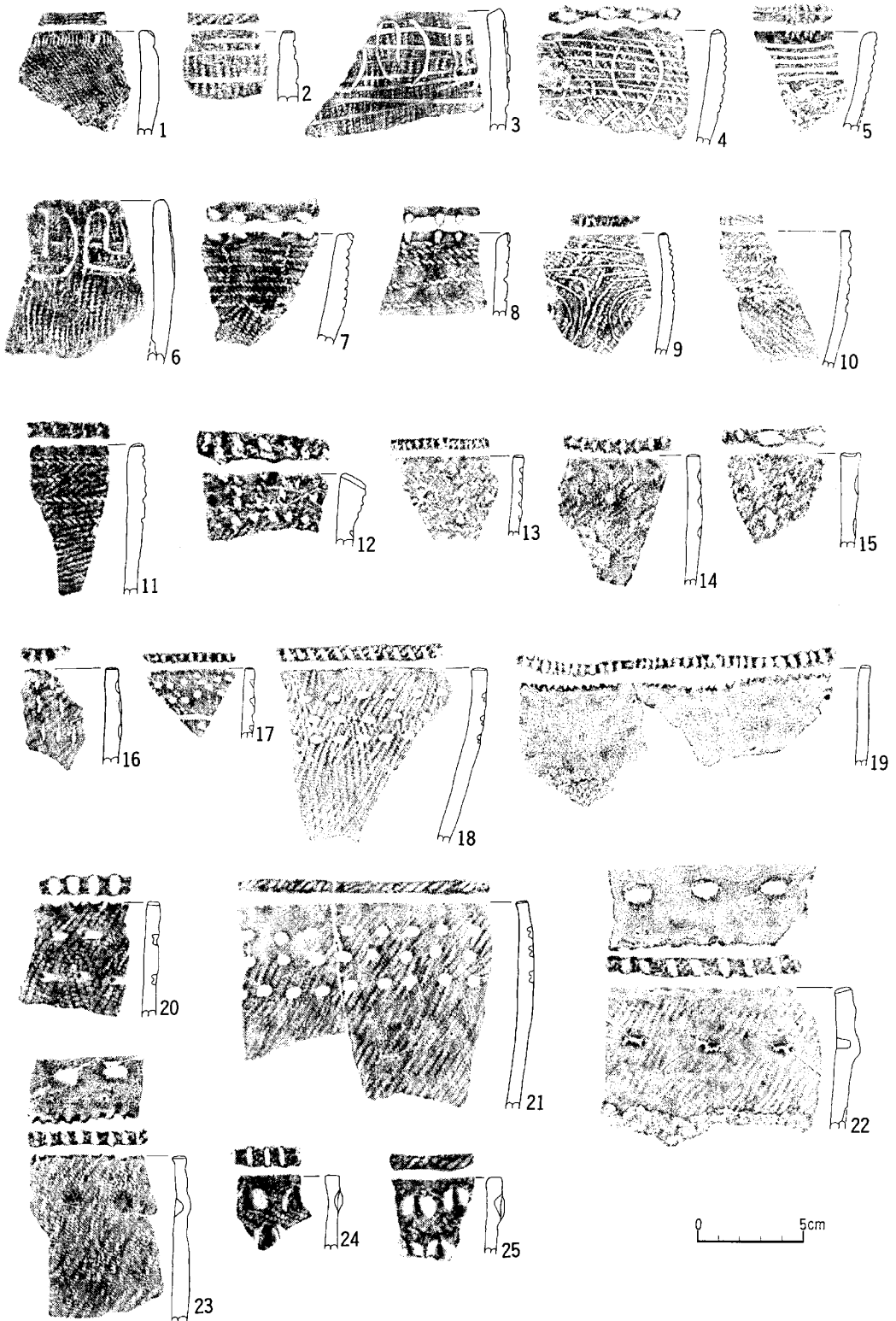
第65图 15号豎穴埋土(1~13)出土土器



第66図 15号竪穴埋土(1~9)出土土器



第67图 15号竖穴埋土(1~8)出土土器

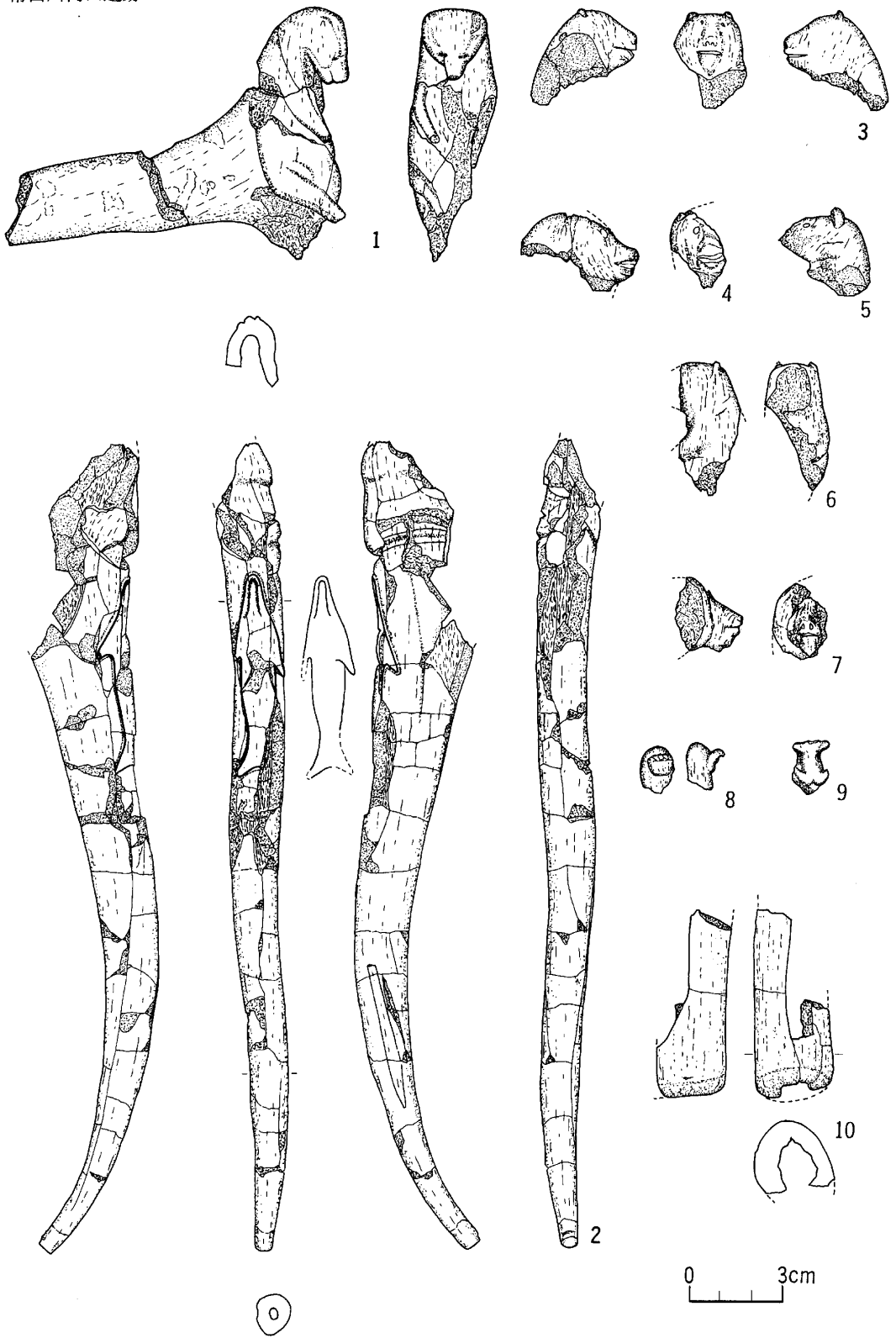


第68図 15号竪穴埋土(1~25)出土土器

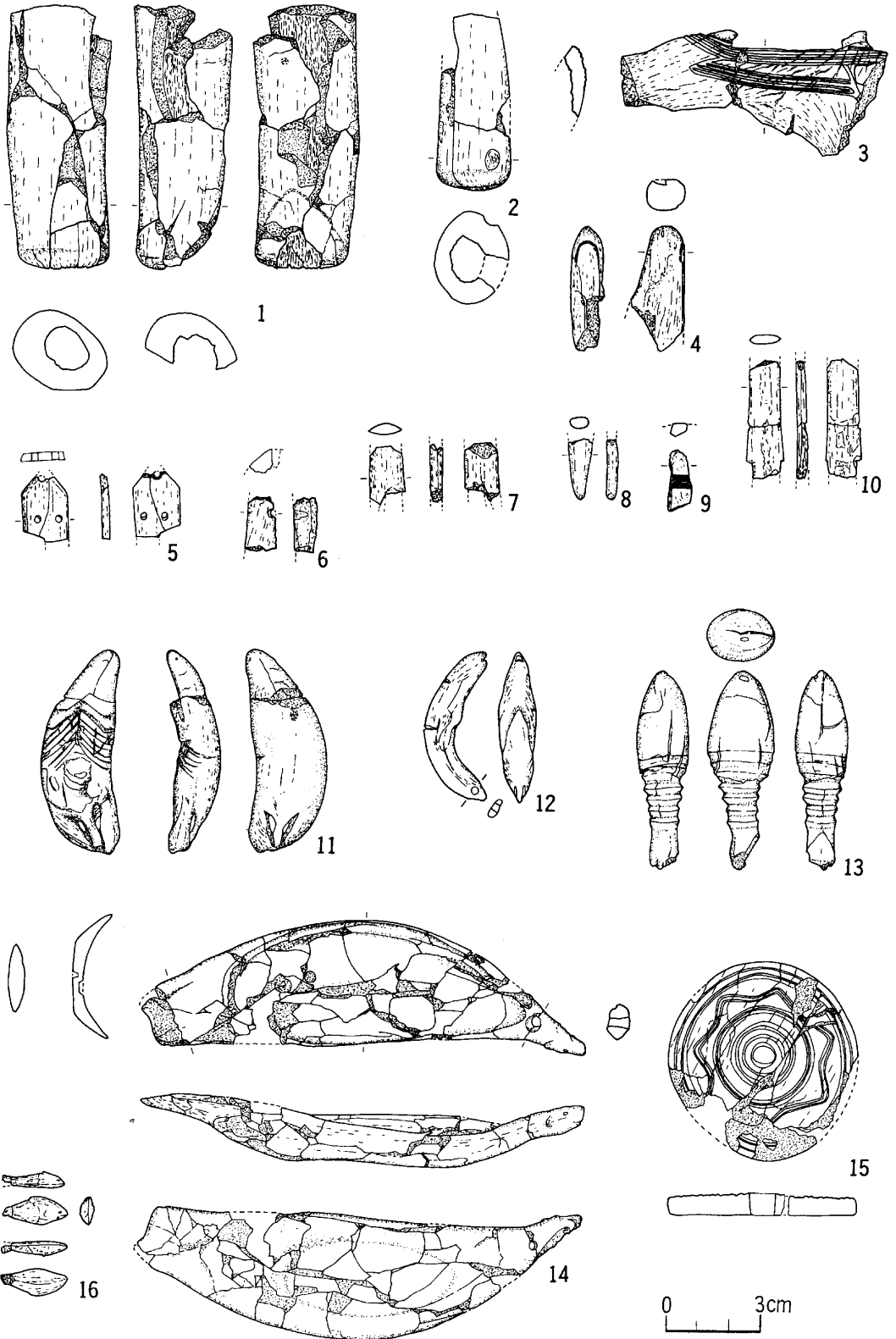
らの圧力による敷き物の圧痕と思われる。13は中型鉢形土器。第66図-1は無文の中型鉢形土器。器面は篋により丁寧に調整されている。焼成も良い。2は北大II式。無文であり、口唇部は角形を呈する。3は口唇部に細い刻みが施される。器面には刷毛と思われる粗い調整痕が残る。胎土は2と同じである。4～7は後北C₂・D式。8、9及び第67図-1は同心円文を持つ宇津内II b式。第67図-2～4は宇津内II b式。5～8は宇津内II a式。第68図-1、2は続縄文前葉のものであろう。1は口唇部に3本の縄線文とその下部に原体を用いた絡縄体圧痕文が施される。2は4本の横走沈線が施される。3～7は沈線文、弧線文、山形文、縄線文が施される縄文晩期幣舞式。9～21は縄文晩期中葉のものと思われる。9は細い施文具を用い円形に施しているであろう。10、11は縄線が太い。12は縄線文を施した後に短縄文を口唇部、口縁部に施文したもので、下方からの刺突文により区画される。13は縄線文を四角形に施し縦、横方向に刺突を加えている。14～16は半截状施文具による刺突が施される。17、18、20、21は横方向からの刺突が施される。22～25は縄文晩期前葉のものと思われる。22、23は内面から斜めに突瘤を施す。24、25はいわゆる盛り上がりのみられる爪形文。

骨角器 (第69、70、71、72図、図版29、図版30)

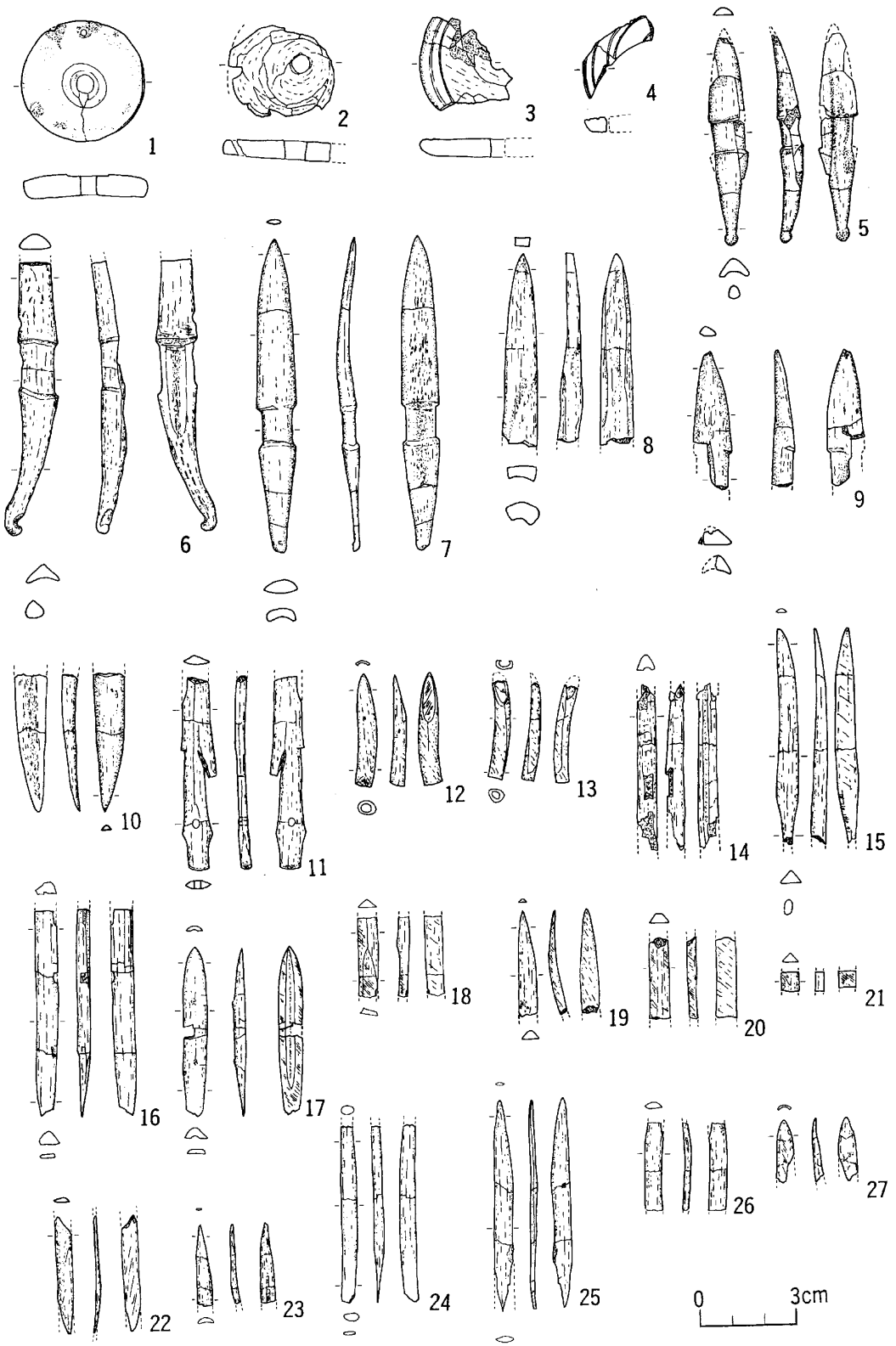
骨角器等は様々なものが出土している。第69図-1、3～9は熊の彫像品であり、これらは全て骨塚の前面から出土している (図版22-1)。1は鹿角に彫刻された熊の座像である。頭部が下を向き居眠りする状態に観て取れる。2も鹿角である。形状と上端の破損面から1の熊足の部分に接合すると思われる。中ほどにクジラと思われる彫刻が施され、そのすぐ上部の右側面には幅約2～3mmの刻線2本、左側面には同じく1本の刻線が施される。下の2本斜めに施され連結するようである。1、2はかなり細かく破損していたものが接合したが、破損面を観察すると新しい時期の破損面もあるが大部分は古い時期のようである。このことは3～9の熊の彫像品がすべて破損していることから理解できる。あるいは意識的に破壊したのであろうか。3は他の熊の彫像品に比べると最もリアルである。正面を向いた顔面は熊の特徴を的確に表現している。表面の整形は図示した中で最も丁寧である。4～7も破損した熊の彫刻品である。4、6～9は海獣骨製。5は海獣骨か鯨骨製。7は熊の脚部であろうか。3に似て彫刻、整形は丁寧である。8は小熊が母熊に抱っこしているところかもしくは木登りを想起させる。9及び第70図-1、2断面が丸味を呈する。下部も丸味をもつように加工している。あるいは第69図-1、2に見られる熊彫像物に伴う握部であるかもしれない。鹿角製。3は用途不明の骨角器。上部に2個の突起を持ち、これを取り巻く様に2本の沈線があり、その下部にも3本の沈線を施す。鹿角製。4は丸味を呈した先端部に「∩」状の刻線が施されるもので海獣の頭部と顎部を表現したものであろう。鹿角製。5は扁平な素材を用いたもので下部は破損するが先端部は尖る。先端部に1個、下部に2個の小孔がある。左側縁部は2～3回の調整痕がある。鹿角製と思われる。6も小孔があるが貫通していない。鹿角製と思われる。7、10は上下端部が欠失しているが断面の形状から銚先か骨鏃と思われる。8は基部が尖る。9は表面に刻線が施され



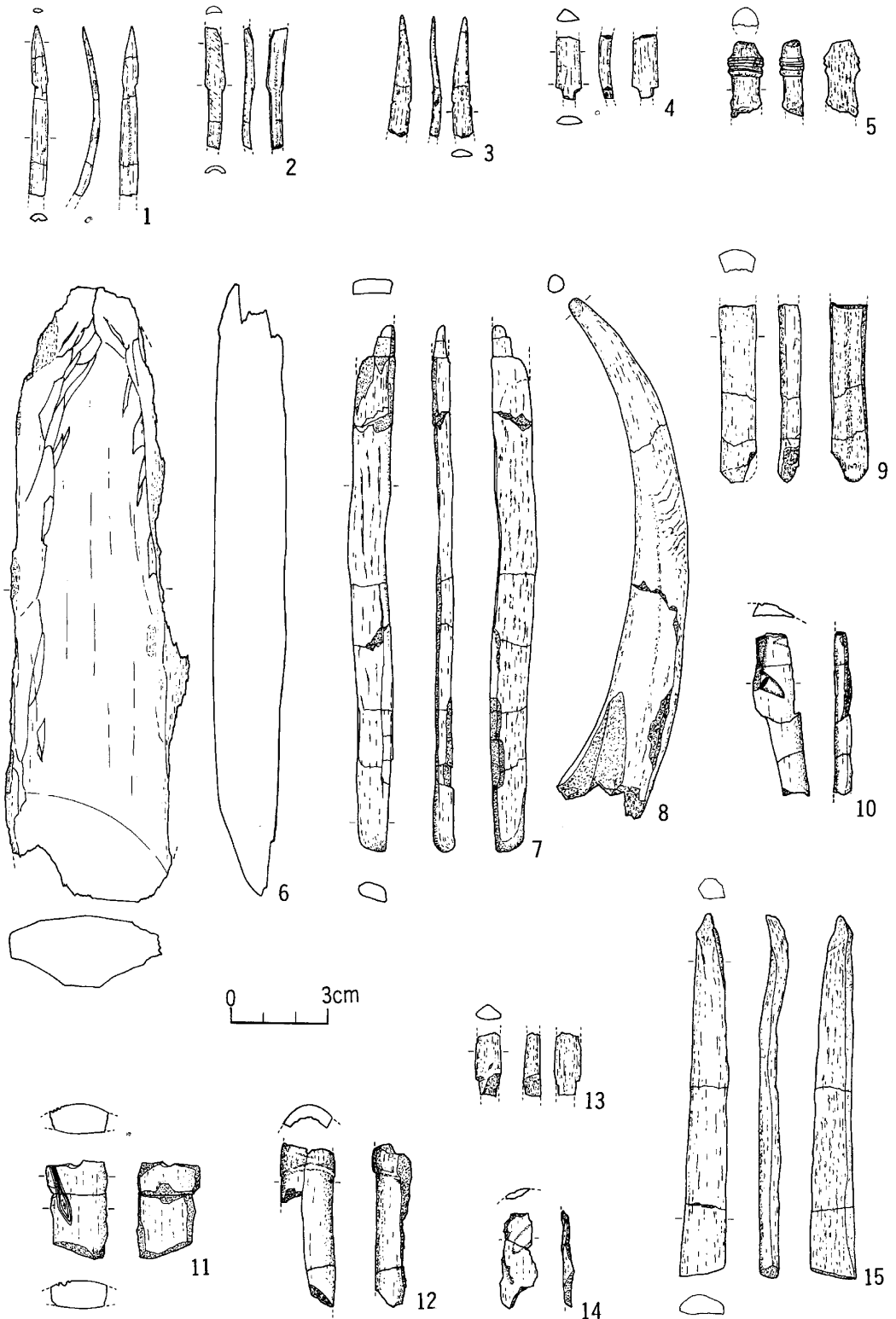
第69圖 15号竪穴床面(1~10)出土骨角器



第70图 15号豎穴床面(1~7·9·11~15)·埋土(16)·南侧骨塚(8·10)出土骨角器



第71图 15号竖穴床面(1·5~11·22)·埋土(3)·南侧骨塚(4)·北侧骨塚(2·8·12~21·23~27)出土骨角器



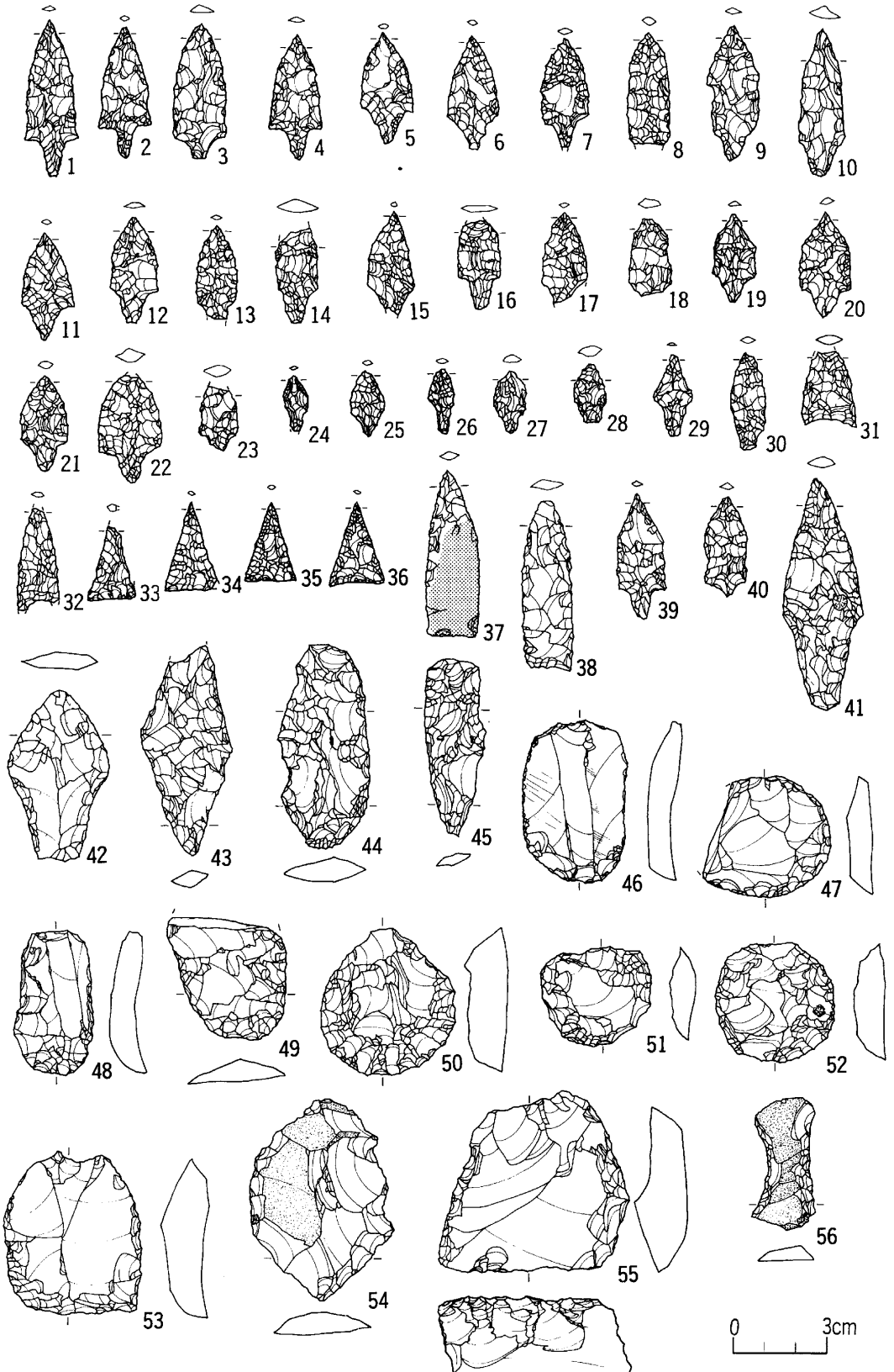
第72图 15号竖穴北側骨塚(1~5)・床面(6~14)・埋土(15)出土骨角器

る。海獣骨製。11～14は西壁側のIV域からまとまって出土した（図版23-1）。11のラッコの彫刻品は長さ6.5cm、幅2.2cmであり14のスプーンの上に乗るような状態で出土した。ラッコは熊の犬歯を素材とする。胸で手を合わせるしぐさや腹の皺、足ヒレの特徴などラッコの特性を見事にとらえておりオホーツク人の芸術的な感性の鋭さを改めて認識される。12はオットセイの彫刻品。下端部に小孔がありペンダントと思われる。13は上部が砲弾形を呈し下部は細長くなる。砲弾形の先端部には浅い孔がある。砲弾形の下部からは6条の溝が全周しており最下端部には手のひら状の彫刻が施される。用途は不明である。鯨類の歯。14は海獣を意匠したスプーンである。実測図右端部が頭部にあたる。15はIII域から出土したクックルケシ。外周部と内周部の2条の刻線間に星形の刻線が施される。16は実測図右端部が頭部にあたり、両眼から鼻部であろうか1本の刻線があり、側面から見ると尾部も作出されている。海獣の彫刻品であろう。第71図-1～4はクックルケシ。1はIV域から出土した。内周部に2条の刻線が施される。2はV域出土。3はVII域出土。外周部に2条の刻線がある。4はVII域出土。外周部に3条の刻線がある。2～4は海獣骨製。5～7は回転式離頭銚。5はIII域出土。締着溝の断面が三角形を呈し、茎槽は浅い。尾部は曲がり最下端部は丸まる。鹿角製。6はIV域出土。締着溝の断面が三角形を呈する。尾部は大きく曲がり、最下端部は凹状の丸みをもつ。海獣骨製。7はIII域出土。体部は全体的に薄い。茎槽、中柄を支える壁は明瞭でない。8は棒状の骨角器の基部と思われる。陸獣骨製。9は回転式離頭銚の先端部。海獣骨製。10は回転式離頭銚の尾部。海獣骨製。11はアグの張り出しが鋭くない有畿式銚。鹿角製。12～25は骨鏃。12、13は中空であり他は断面三角形かやや丸みを呈する。13、27は鳥骨製。14、17、19、20、22、23は陸獣骨製と思われる。16、18、24～26は海獣骨製と思われる。

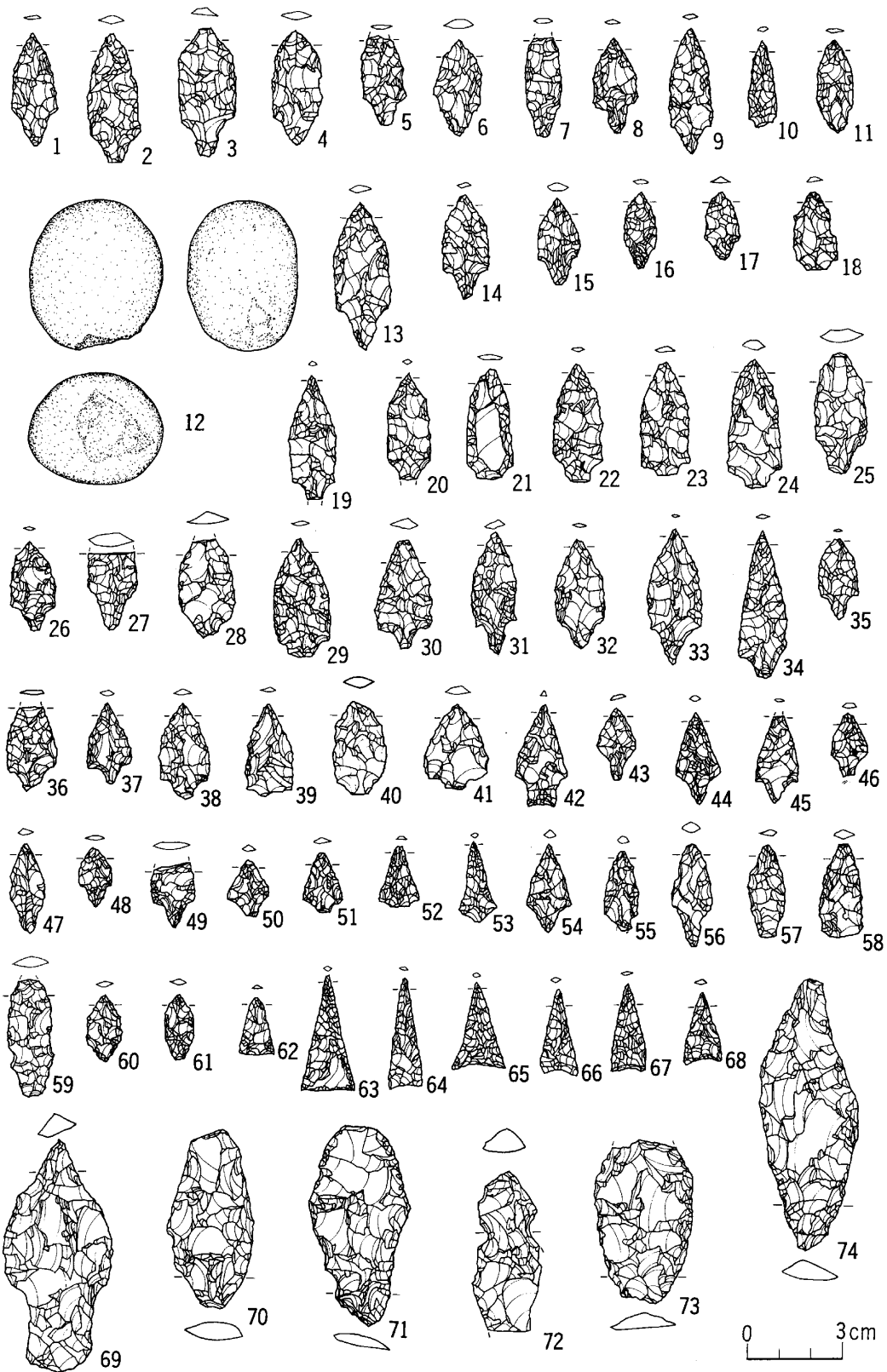
第72図-1～4は骨鏃。開口部側からまとまって出土した（図版22-2）。2、3は陸獣骨製。4は海獣骨製。5は釣針の頭部。海獣骨製。6はIV域出土の骨斧。周辺からクックルケシ、刀子、石鏃も出土している（図版23-2）。表面の両側縁部は柄部から刃部にかけて浅く調整されるが裏面はきつめに作出される。未製品である。鯨骨製。7はIII域出土の骨篋。先端部は摩耗している。実測図上部は破損しているがこの部分は煤が付着したためであろうか黒く変色している。鯨骨製。8は鹿角製である。先端部が摩耗する。9は先端部が摩耗する。形状から骨篋と思われる。海獣骨製。10は表面に刻線がある。鹿角製。11は上部に小孔があり、表面に彫刻が施される。上下、側縁部が破損するため用途は不明である。鯨骨製。12は鹿角製。13は骨篋であろう。陸獣骨製。14は刻線が施される。15は先端部が鋭く摩耗しており骨篋に類似する。

石 器（第73、74、75、76図、77図-1、図版31）

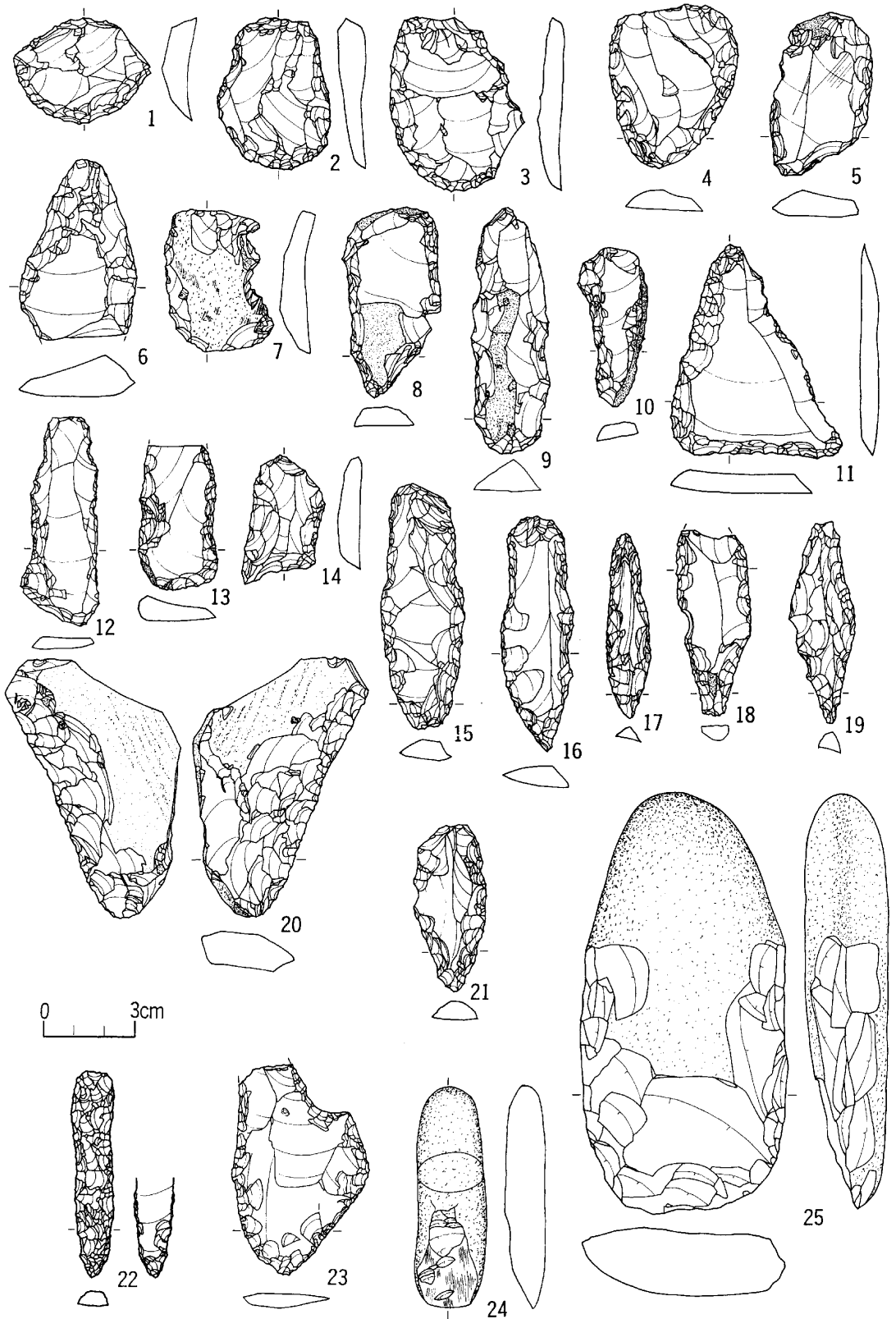
石鏃は床面から第73図-1～23に示したオホーツク文化独特の柳葉形石鏃が最も多い。24～30は有茎石鏃。31～37は無茎石鏃。37は表面の一部が火熱を受け発泡スチロール化している。38～40は柱穴から出土した柳葉形石鏃。41、42は石槍。43～44は周溝から出土した両面加工ナイフ。49は片面加工ナイフ。46～48、50～53は搔器。54～56は削器。55は主要剝離面側にも刃



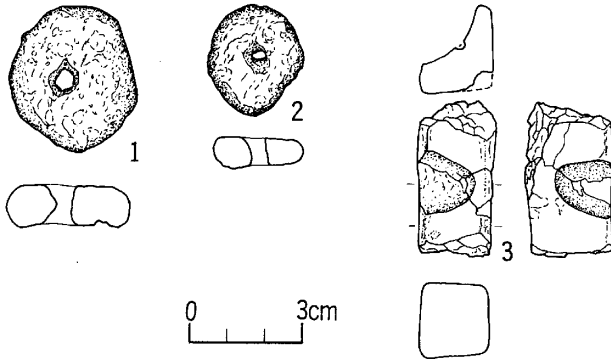
第73図 15号竪穴床面(1~37・42・44~56)、中央南小ピット(38~40・48)周溝(41・43)出土石器



第74图 15号竖穴骨冢(1~18)·埋土(19~74)出土石器



第75图 15号竖穴埋土(1~25)出土石器

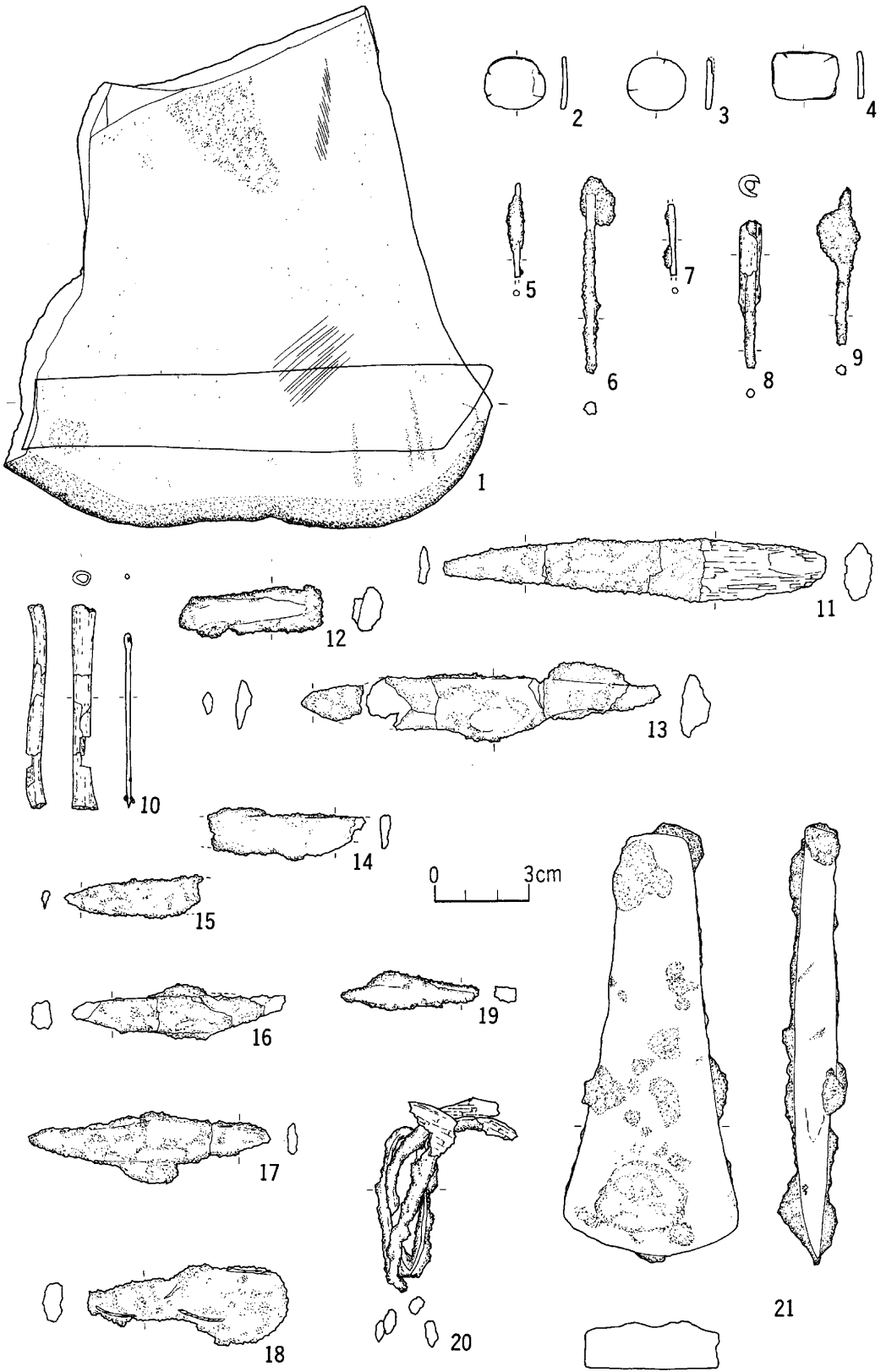


第76図 15号竪穴床面(1・2)出土石製品・粘土(3)

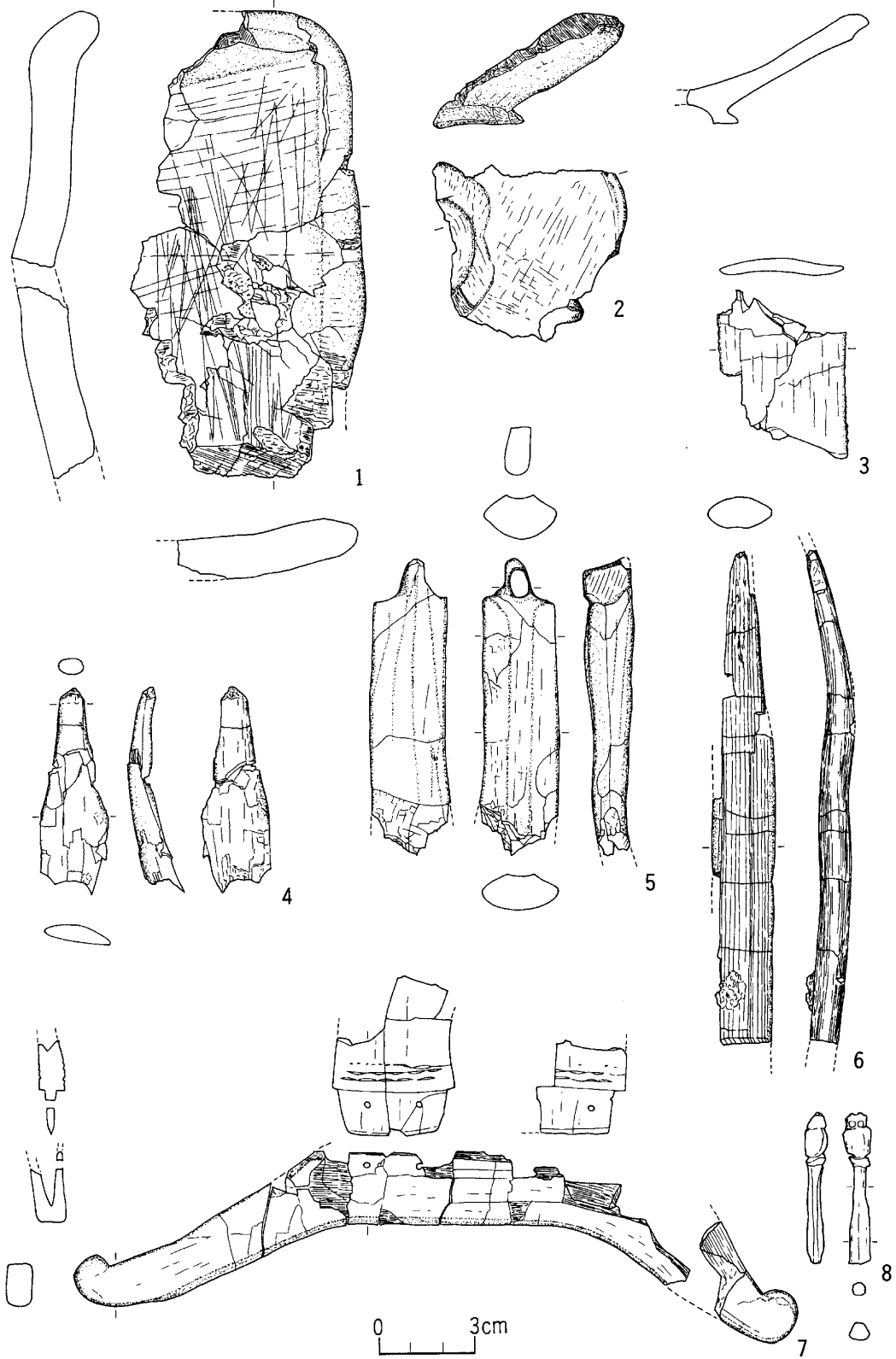
部が作出される。18は頁岩製、42は頁岩製であり他はすべて黒曜石製。第74図-1～11、13～18は骨塚から出土した柳葉形石鏃。12は叩き石。19～74は埋土出土。19～40は柳葉形石鏃、41～61は有茎石鏃。62～68は無茎石鏃。69は石槍。70～72、74は両面加工ナイフ。73は片面加工ナイフ。12を除きすべて黒曜石製。第75図-1、2は搔器。3～14は削器。15～19、21は片面加工ナイフ。先端部は尖り、主要剝離面側の縁辺部も加工される。20は両面加工ナイフ。22は削器。24、25は石斧。偏平な礫の端部を刃部としたものである。24は片刃。25は使用により刃部は剝離されている。24、25を除きすべて黒曜石製。第76図-1、2は有孔石製品。軽石製。3は粘土製品。角形の素材を「U」字状に加工する。第77図-1は石皿。砂岩製。両面とも研磨されている。

青銅製品・鉄器 (第77図-2～21、図版32)

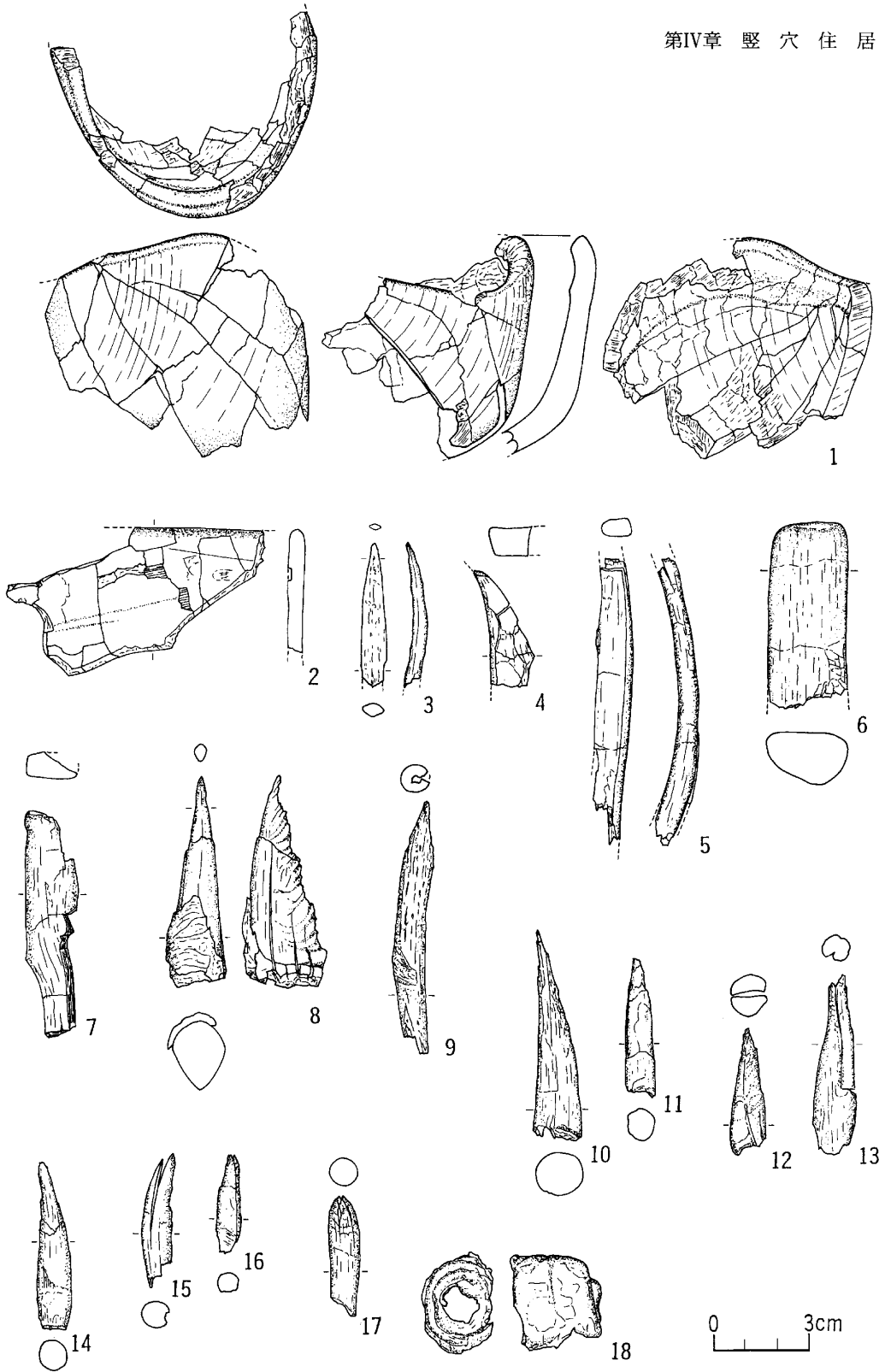
鉄器の遺存状況は悪くかなり腐食が進んでいるため取上げできず、図面に位置を記入しただけのものもある。図示したものは保存の比較的良好なものである。第77図-2～4はI域の骨塚前面から出土した用途不明の青銅製品。2、3は円形、4は方形を呈する。それぞれ厚さ約2mmで縁辺部に2～4個の短いキズ状の刻線がある。5～10は断面円形の針。5はI域、6はIII域、7はIII域、8はIV域、9もIV域から出土。8、10は鳥管骨に収納された状態で検出したもので鳥管骨は針入れとして利用されたのであろう。10は出土域不明であるが他に比べて最も保存が良い。胴部の断面は丸く針穴部は平たくなる。12～18は刀子。12は刀先が内側に曲げられ刀身部と密着している。11は柄部に木質部が遺存する。18の柄部には撚糸、刀先には針金状の製品が付着している。20はIV域出土。2本の太い針金状の製品に幅6～7mmほどの楕円の金属器が密着している。楕円形の金属器の表面には青銅にみられる緑青が観察される。21は骨塚前面にある支柱穴内から出土した平柄鉄斧。長さは13cm。刀部は丸味を呈し断面は方形である。



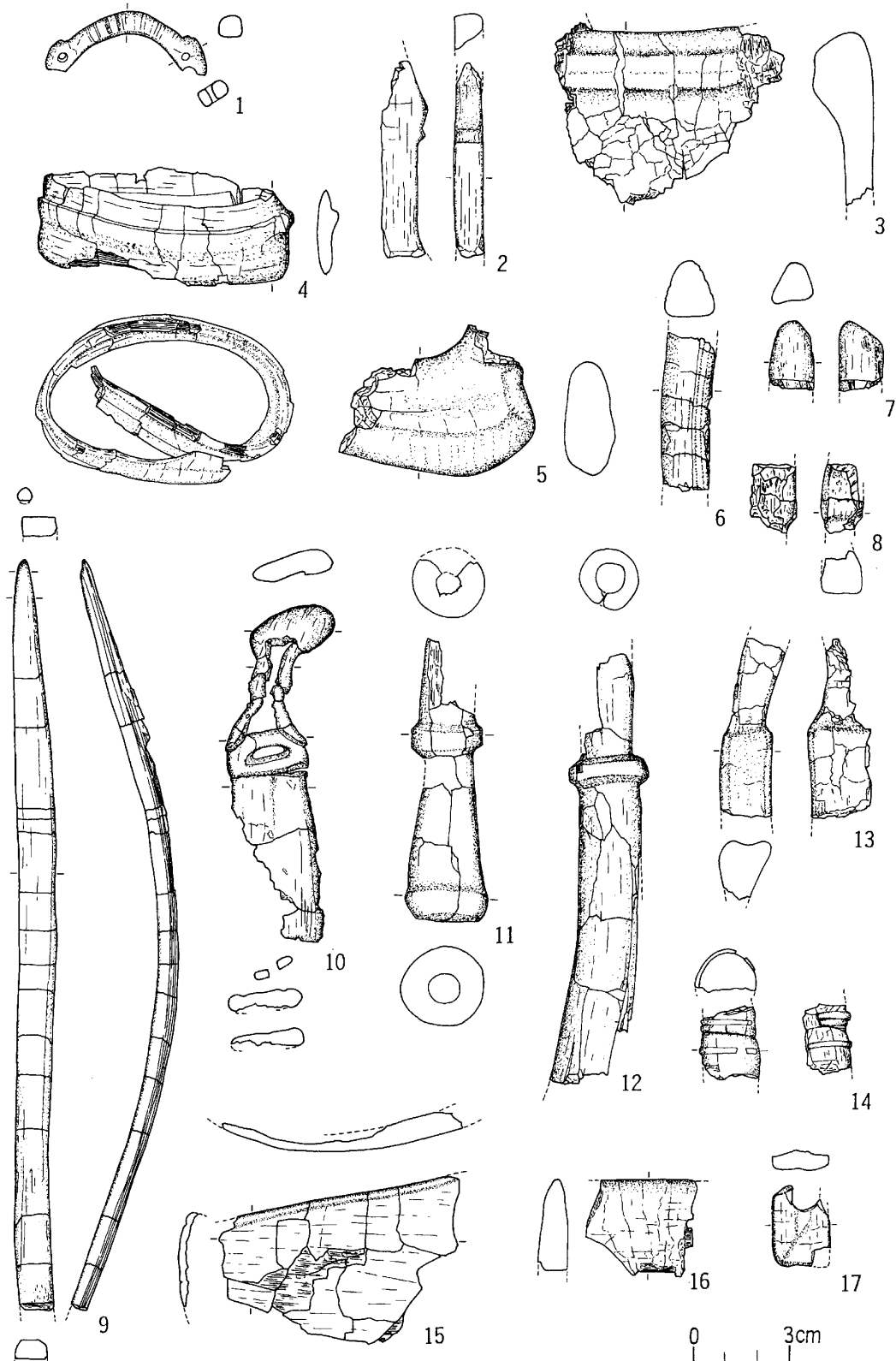
第77图 15号竖穴埋土(1)出土石器・床面(2~4)出土青铜製品・床面(6~9・12~21)出土鉄器・床面(10)出土骨角器・針



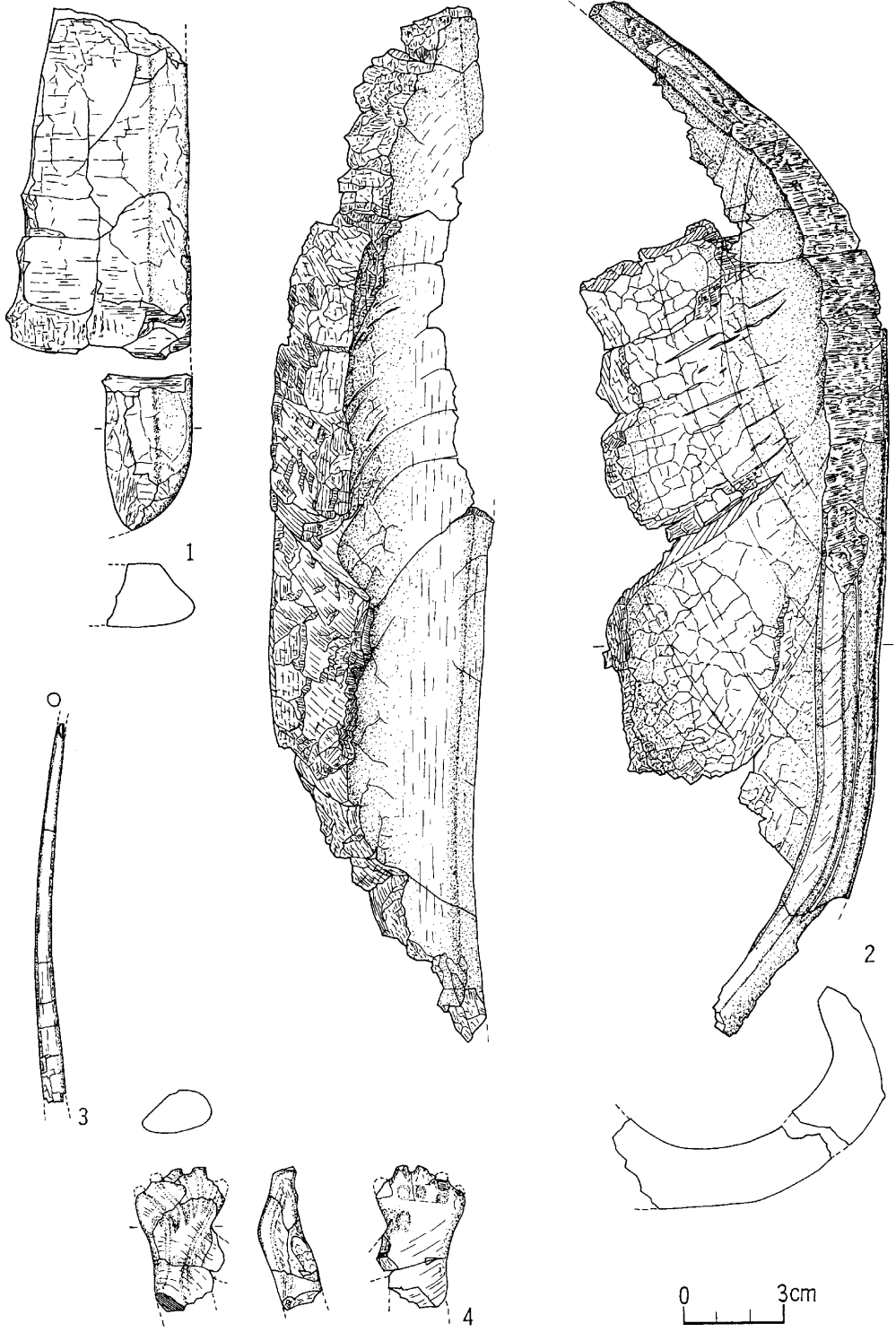
第78图 15号竖穴床面(1~8)出土炭化木製品



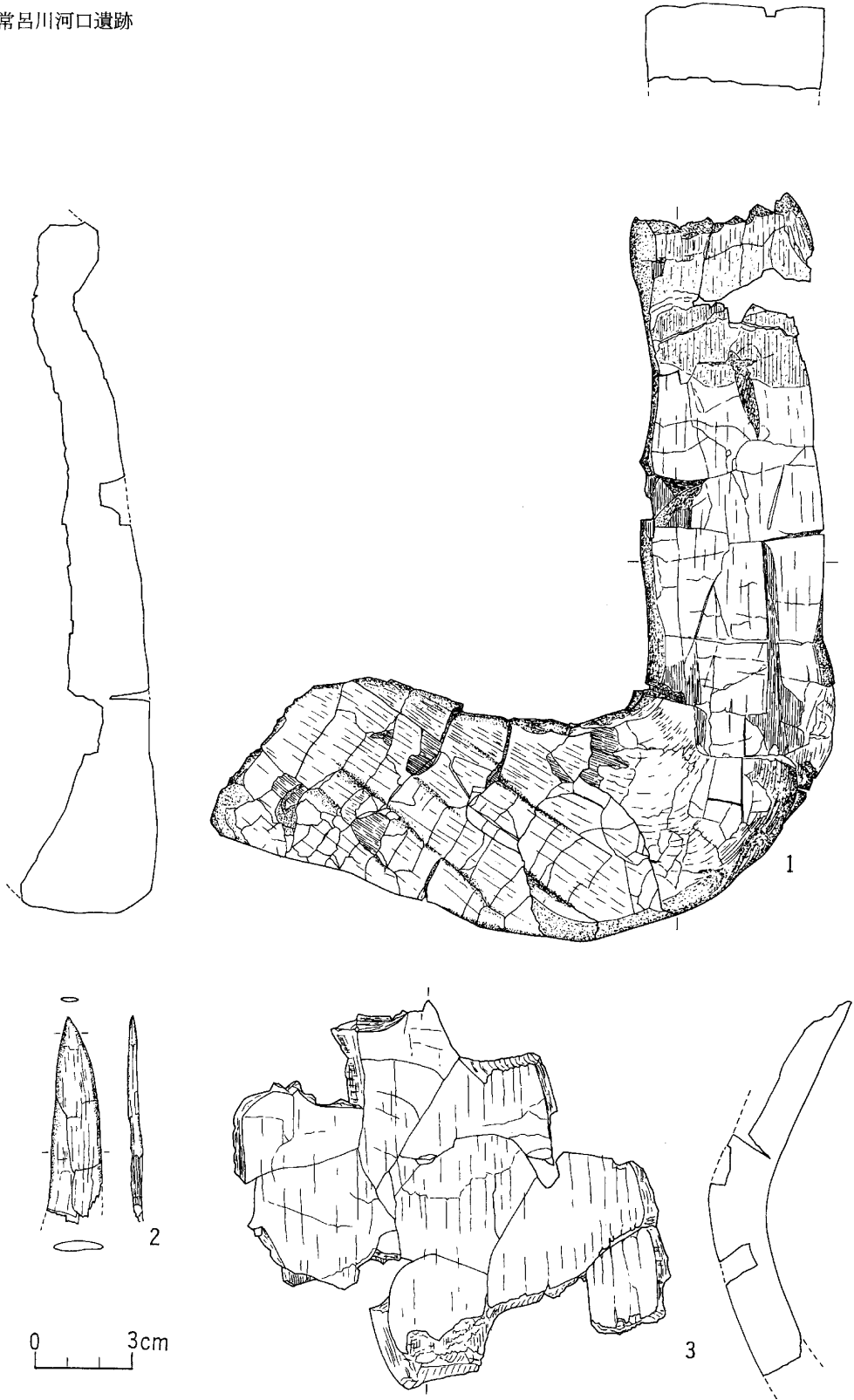
第79图 15号竖穴床面(1~7·10·11·15~18)·柱穴(14)埋土(8·9·12·13)出土炭化木製品



第80圖 15号竪穴床面(1~17)出土炭化木製品



第81图 15号竖穴床面(1~4)出土炭化木製品



第82図 15号竖穴床面(1~3)出土炭化木製品

炭化木製品 (第78、79、80、81、82図、図版33、図版34、図版35)

第78図-1は方形もしくは長方形の皿であろう。縁辺部は丸みを帯びる。内面には縦方向の鋭い使用痕が観察される。2は脚をもった杯である。3は両側縁部を薄く加工した製品であるが上下が欠失しているため用途は不明である。4は先端部を加工する。5は下部が欠失しているため本来の形態は不明であるが細長いのであろう。表が3面カット、裏面が4面カットされ上部に小突起をもつ。断面は変化した扇形になる。イクパシ的な用途をもつものかもしれない。6は幅約2cmで先端部が尖る刺突具。7は衣紋掛け状の製品である。両端が蕨手状の丸みを呈する。胴部は2個のスリットがあり、2枚の小板がはめこまれる。本体と小板には目釘穴があり固定されたのであろう。出土直後の目釘穴部分は油性の光沢がありあるいは何らかの接着剤を用いていた可能性もある。小板には波状の刻線が施される。用途不明の製品である。8は箸状製品の上にフクロウを彫刻している。第79図-1は椀。2は用途不明の製品。3は木釘。4は用途不明の製品。5は火熱を受けて変形し、西端部が欠失するため用途は不明である。6は握部であろう。7は下方から上部にかけて緩く曲がる。8～17は先端部が鋭く尖っている。18は数枚の樹皮を丸めたもので中空となる。第80図-1は吊り手である。吊り手の両端には樹皮状容器と固定するための孔があげられ、刻線が施される。2は第79図-7と同様の形態をもつ。3は皿状容器の一部であろう。4は樹皮状容器である。1の吊り手と組み合わされるのであろう。5は皿状容器の一部であろう。6～8は断面三角形を呈した棒状製品。9は断面方形を呈し、先端部で丸くなる刺突具。10は薄い素材を用い、上部は毛抜形太刀を想起させる。11は握部であろう。12と同一個体と思われる。13は第79図-7、80図-2と類似した形態をもつ。14には2本の細い樹皮が巻きつけられている。15、16は皿状容器の一部と思われる。17は方形を呈し、7～8mmの孔がある。第81図-1は皿状容器。2は一見すると船型を呈するが検出時の写真をみると底面が幅広く盆状容器と思われる。縁は二重に縁取られている。3は先端部が尖った箸状製品。4は熊手を彫刻したのであろう。第82図-1は「L」字形を呈する。裏面は腐食しているが表面は粗い調整面が観察される。2は先端部が鋭く尖った薄手の刺突具。3は比較的大型な皿状容器と思われる。

小 括

本竪穴は長軸約14m、短軸約10mの六角形を呈し、当該期の中でも最大の規模を有する。時期はソーメン状貼付文（藤本e群）を主体に、擬縄貼付文（藤本d群）もわずかに含まれる。火災を受け粘土で「コ」字形に貼られた床は赤変している。遺物は特大型、大型、中型、小型の土器がまとまりをもつなど従来のオホーツク文化期の竪穴にはみられない出土状況である。

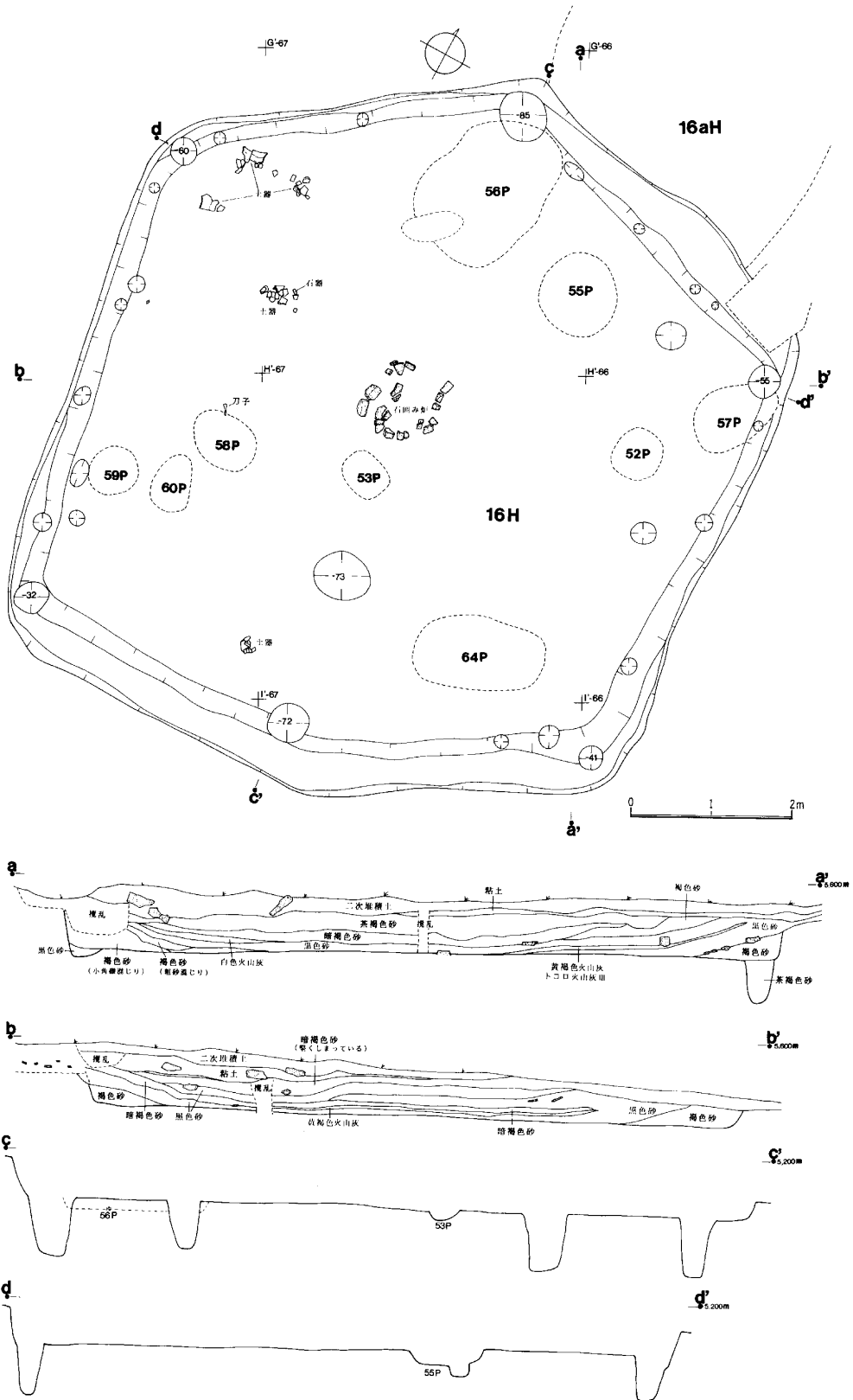
16 号 豎 穴

遺 構 (第83図、図版36-1)

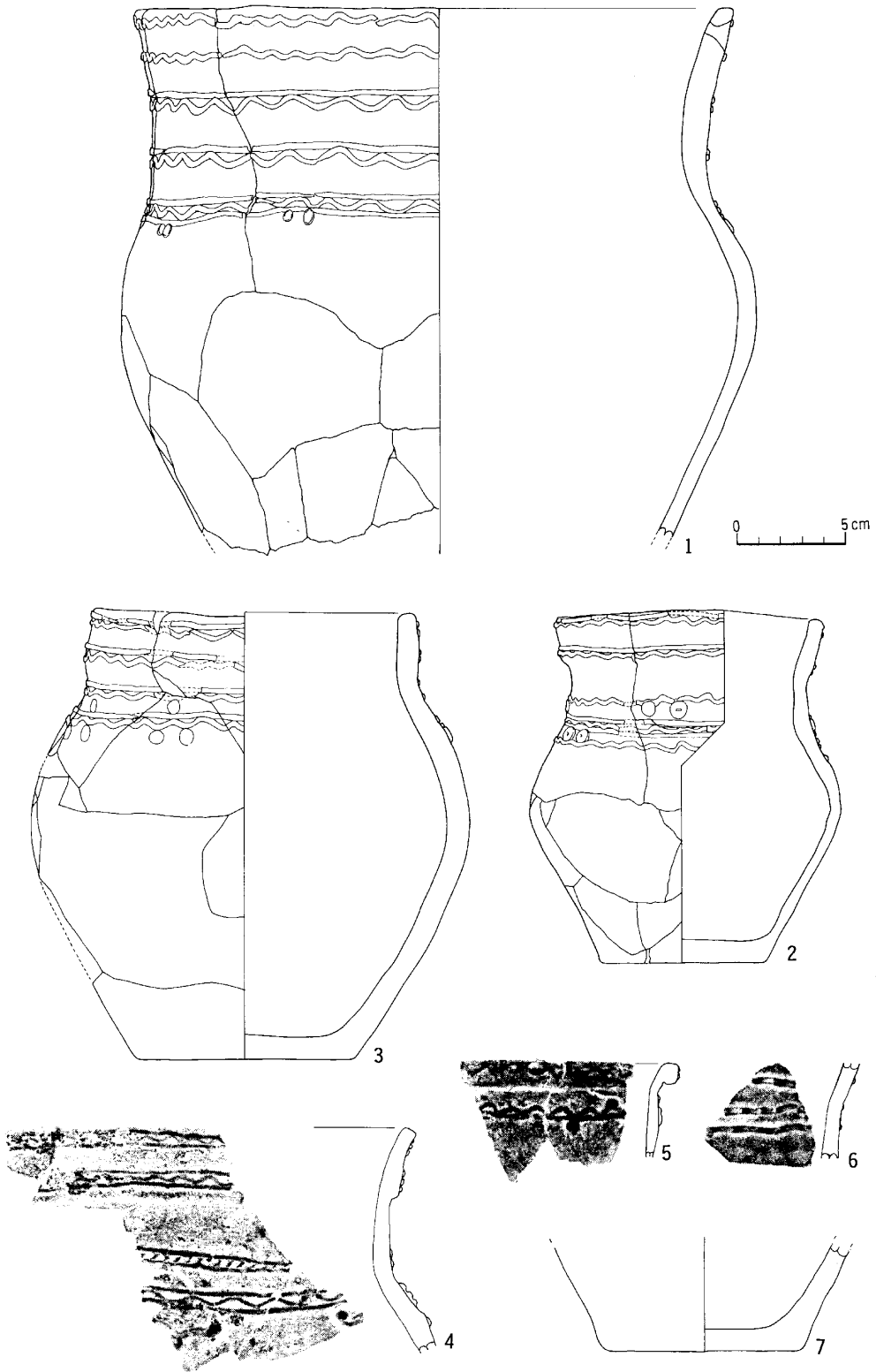
本豎穴は15号豎穴の東側約6mにある。H'66グリッドを掘り下げた段階で黒色土の落ち込みを確認した。このためグリッドをI'66、67に拡張し、黒色土の限界を確認し、2層上面を剝土した段階で全体のプランを把握した。黒色土のほぼ中央部にあるH'66、67グリッドを土層ベルトとし、この面に沿って幅30cmのトレンチを設け深掘りしたところ地表面から約60cmのところにトコロ火山灰Ⅲ(摩周b火山灰)の堆積を確認した。このためこの火山灰の上面までを剝土したが、上面には第85図-5の擦文期の無文大型鉢形土器が出土した(図版37-1)。さらにH'65グリッドからはソーメン状貼付文より古い第85図-1の擬縄貼付文が出土している。この時期の土器は15号豎穴例からもわかるように摩周b火山灰の下層から出土するものであり、本豎穴の出方はあきらかに逆転している。この土器はオホーツク文化以降の人々により廃棄されたのであろう。本豎穴は長軸8.8m、短軸7.5mの六角形を呈したいわゆる寸詰まりの形態である。壁高はほぼ垂直に立ち上り、高さは確認面から約40~50cmである。床面は褐色砂を面としており南側に向かってやや傾斜する。中央部に各礫を用いた一辺約1mの方形の石囲み炉がある。骨塚、粘土の貼床は認められない。支柱穴は長軸面に4本、壁隅に6本ある。周溝は幅約20~30cmのものが全周する。

遺 物 (第84、85、86、87、88、89、90、91、92図-1~14、図版36-2~7、図版37-2~6)

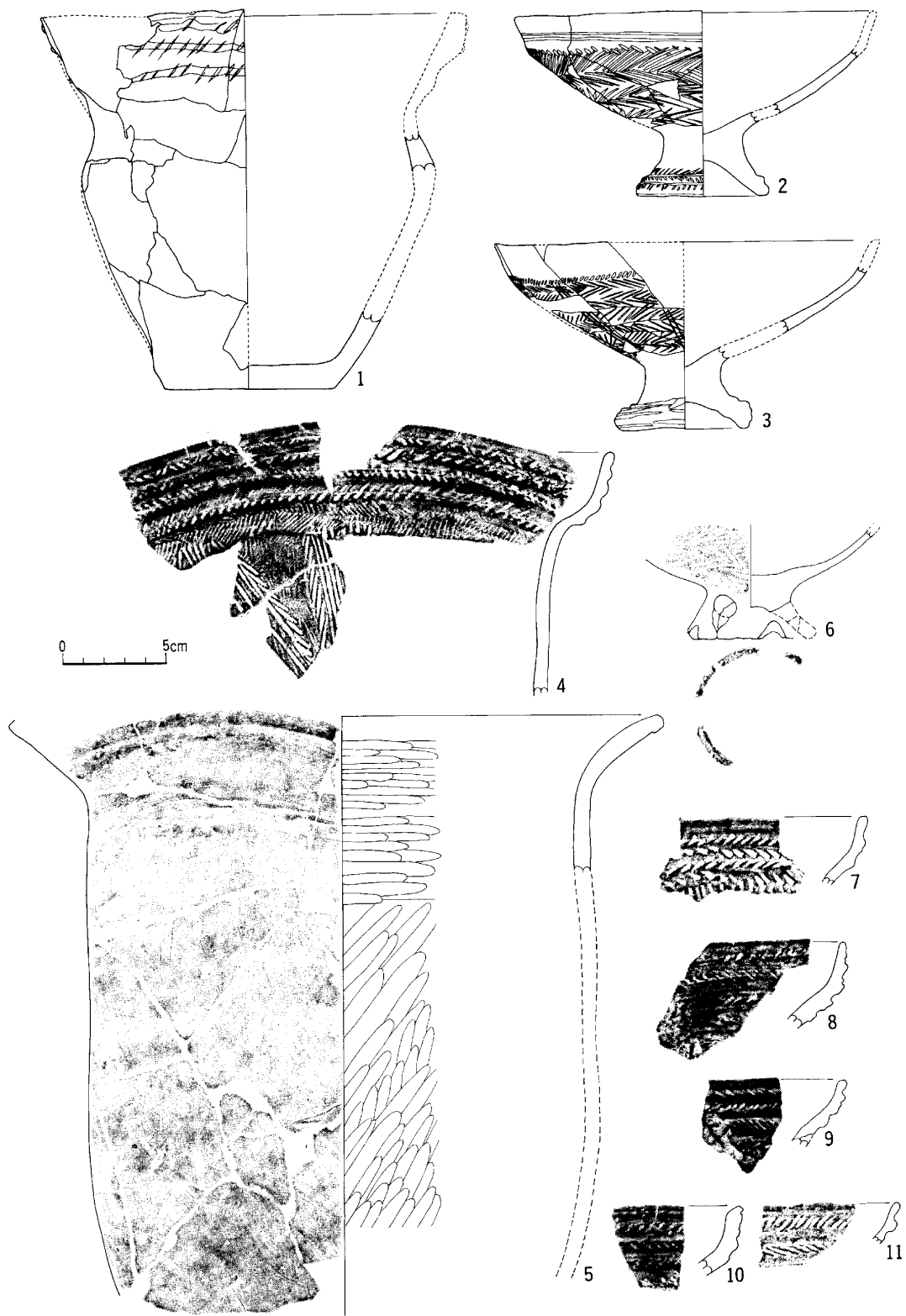
床面から第84図-1、2のソーメン状貼付文が出土している。1は西壁隅から出土した口径27.5cmの大型土器である。オホーツク文化の豎穴である45号豎穴から出土した破片の一部と接合した。肥厚帯は不明瞭でありわずかに外反して立ち上がる。ソーメン文は頸部下まで5段施される。底部欠失している。2は石囲み炉の西側約0.80mから出土した。小型土器である。埋土からは3~7がある。3はこの上に口縁の開きを持たせればオホーツク土器独特の器形になるが垂直に立ち上がる口縁の開きがない。1~3とも円形文を貼付けている。4は頸部付近に擬縄貼付文、記号状貼付文を施す。5は口唇部が外側に張り出す。6は直線のソーメン文を押さえつけ波状に見せている。第85図-1~11は擦文土器である。1~5は摩周b火山灰の上部から出土した。1は擬縄貼付文。頸部から大きく外反し3条の直線のソーメン文を鋭く刻んでいる。2、3は高杯。4は大型鉢形土器。5は刷毛により丁寧に調整された無文土器。6は高杯。脚部に透しと底部に切り込みが加えられている。第86図-1~4は擦文土器。1は口唇部が垂直に立ち上がる。胴部は格子目と鋸歯文を交互に施した複段文の土器。2は中型鉢形土器。器面を刷毛により丁寧に調整し口縁部に2条の沈線を施す。4は小型鉢形土器。5は紡錘車。外周部が隆起する。重量は70g。6~18は続縄文後北C₂・D式。19~21は表面の色調は灰褐色を呈し、須恵器を思わせる硬質な土器である。しかし、本地域に認められる須恵器は擦文期の胎土



第83図 16号竖穴平面图



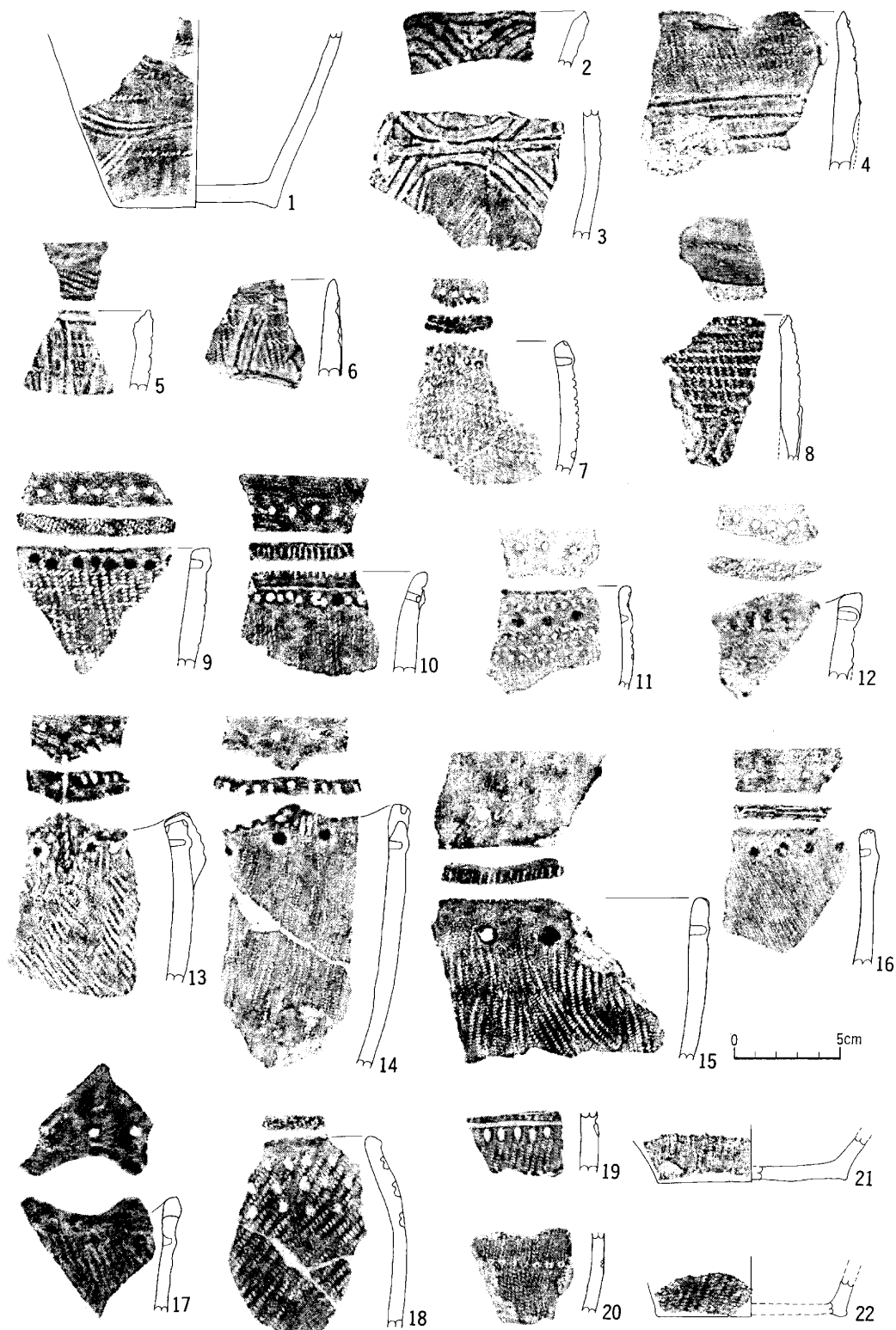
第84図 16号竪穴床面(1・2)・埋土(3~7)出土土器



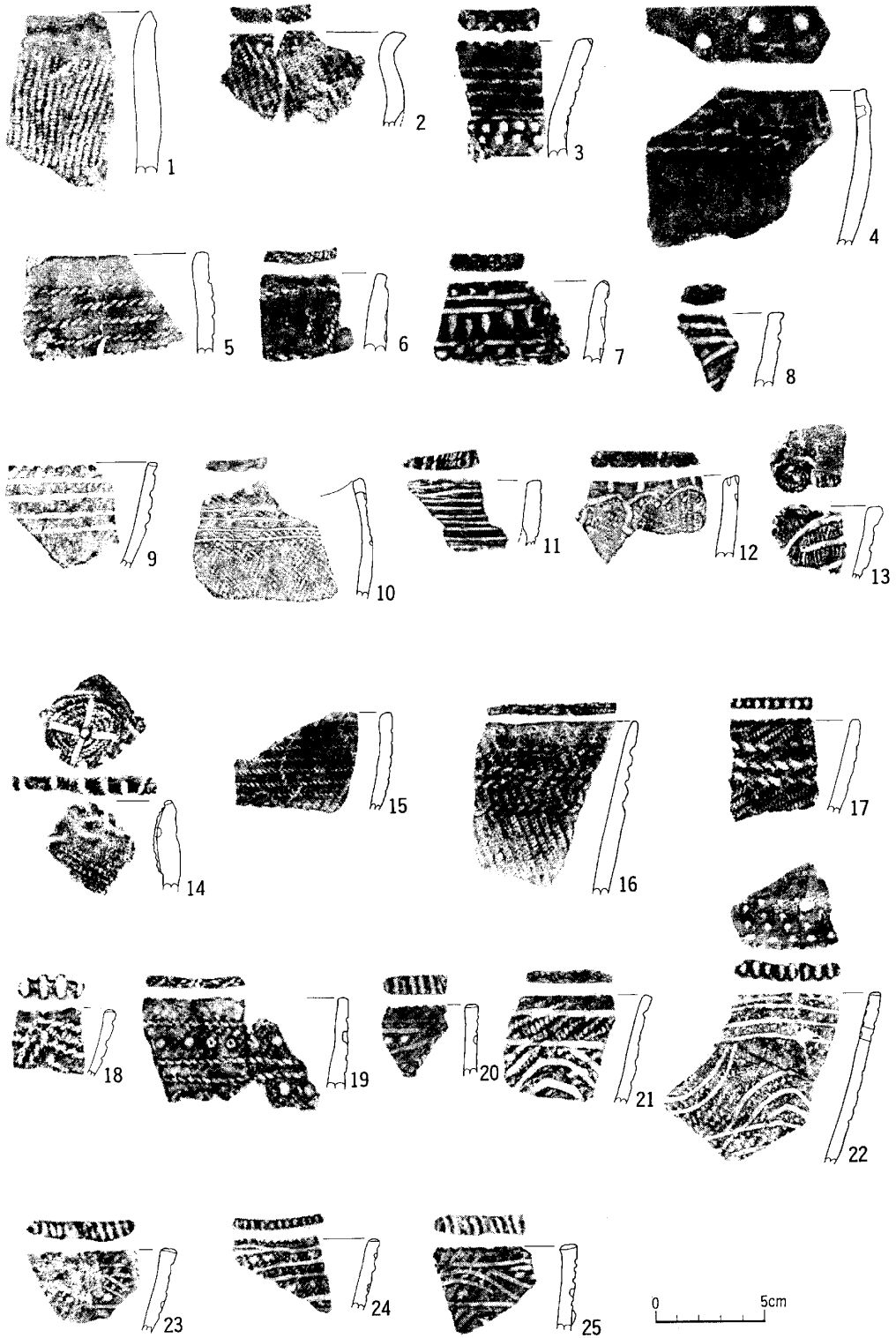
第85图 16号竖穴埋土(1~11)出土土器



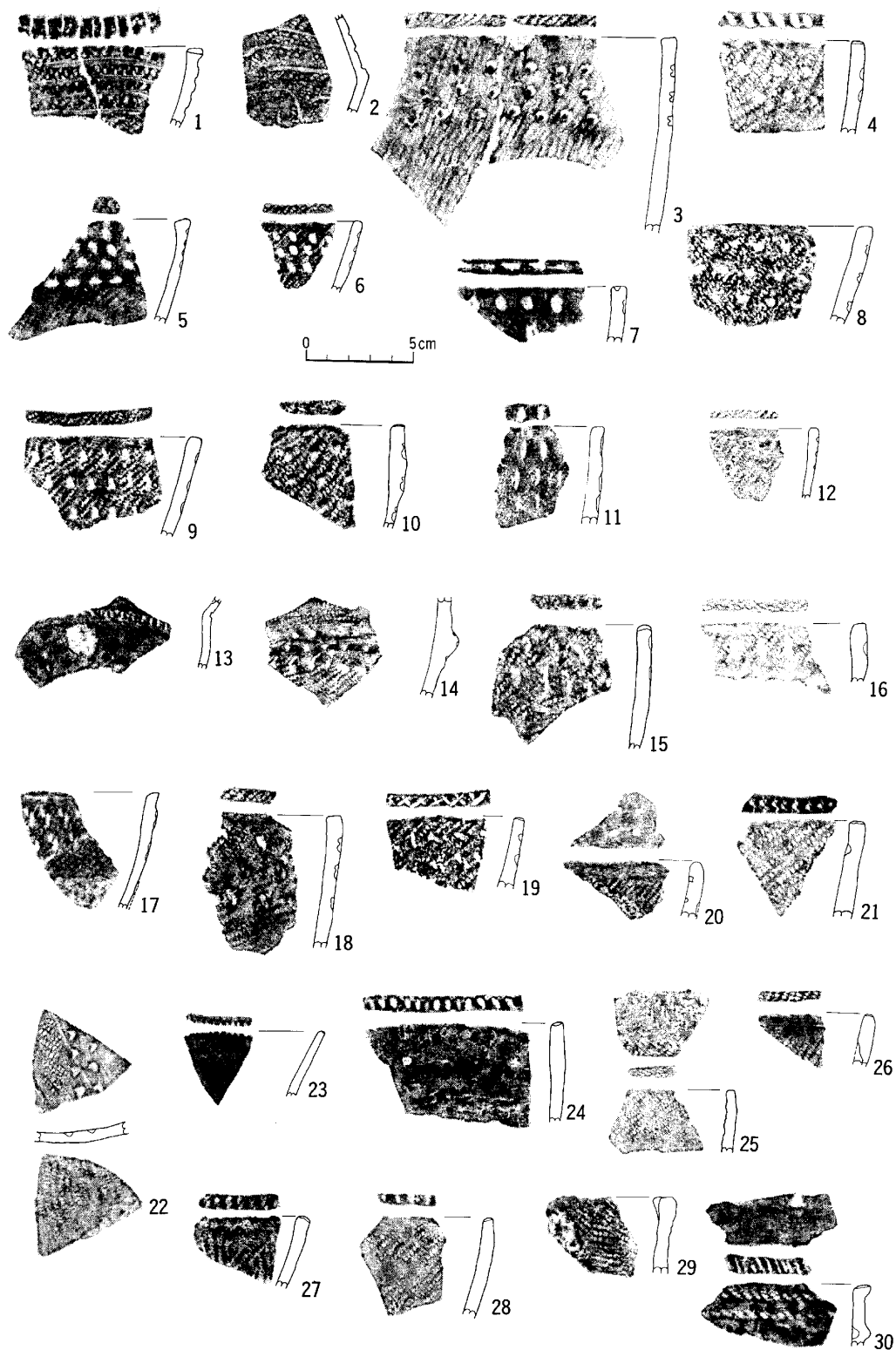
第86图 16号竖穴埋土(1~21)出土土器



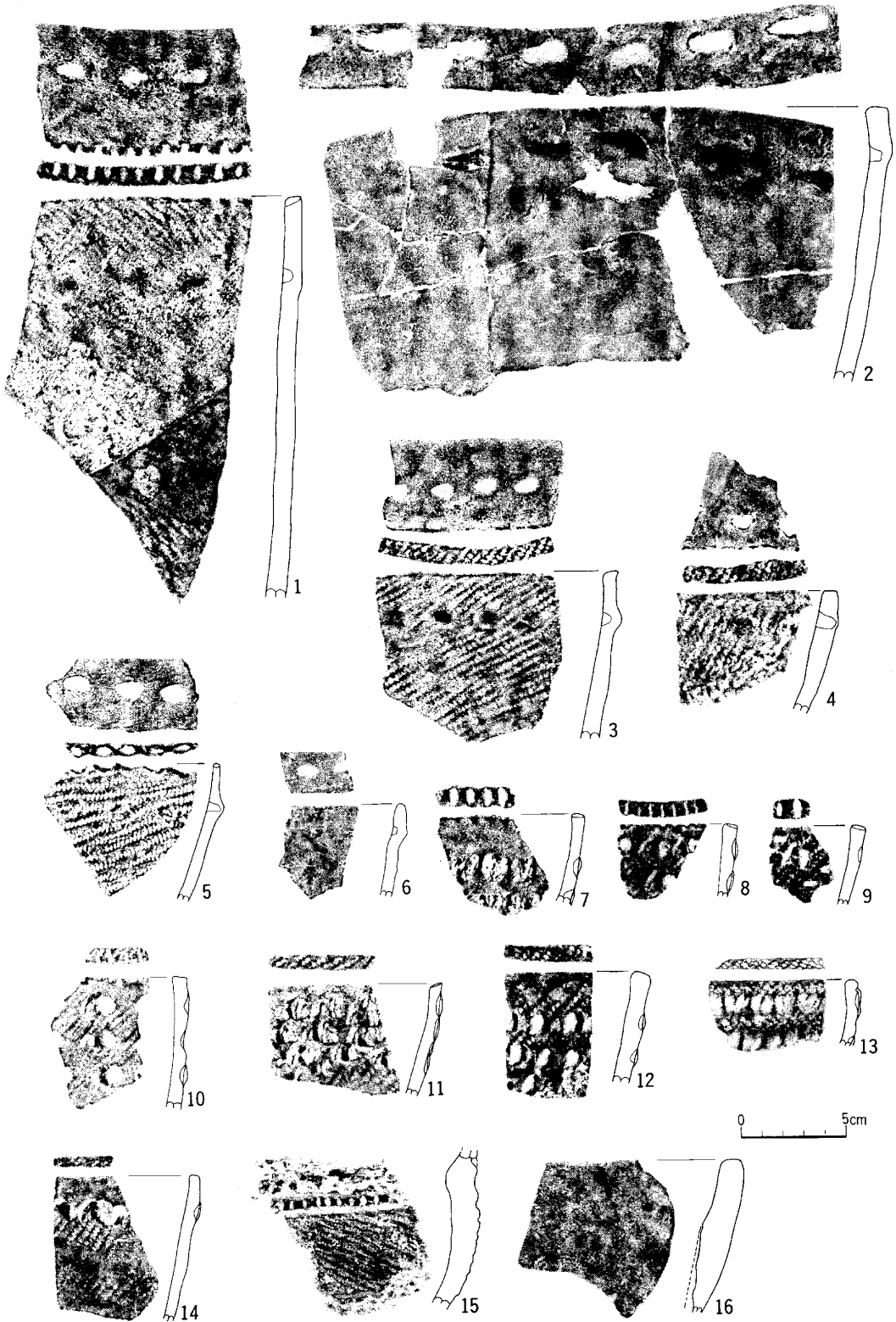
第87图 16号竖穴埋土(1~22)出土土器



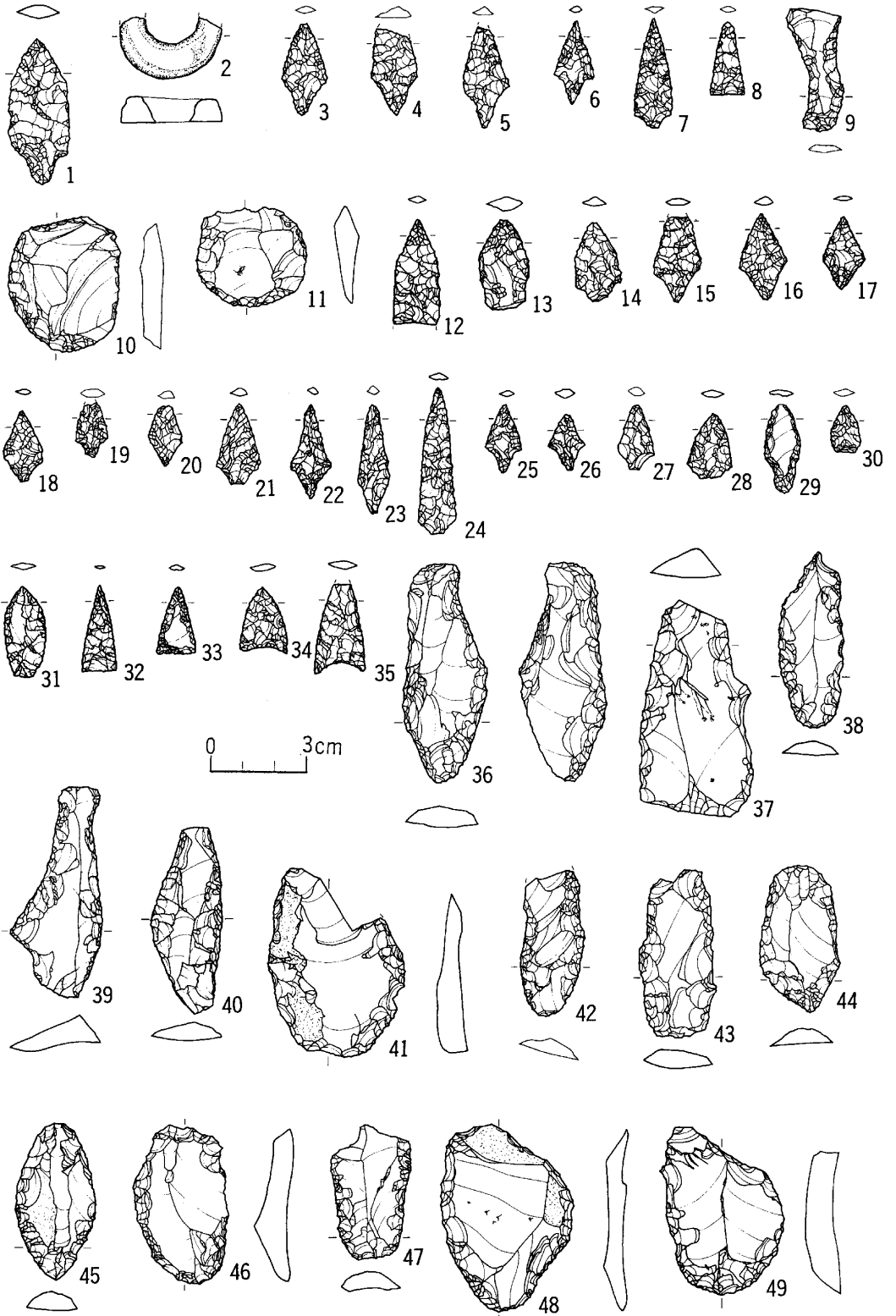
第88図 16号竪穴埋土(1~25)出土土器



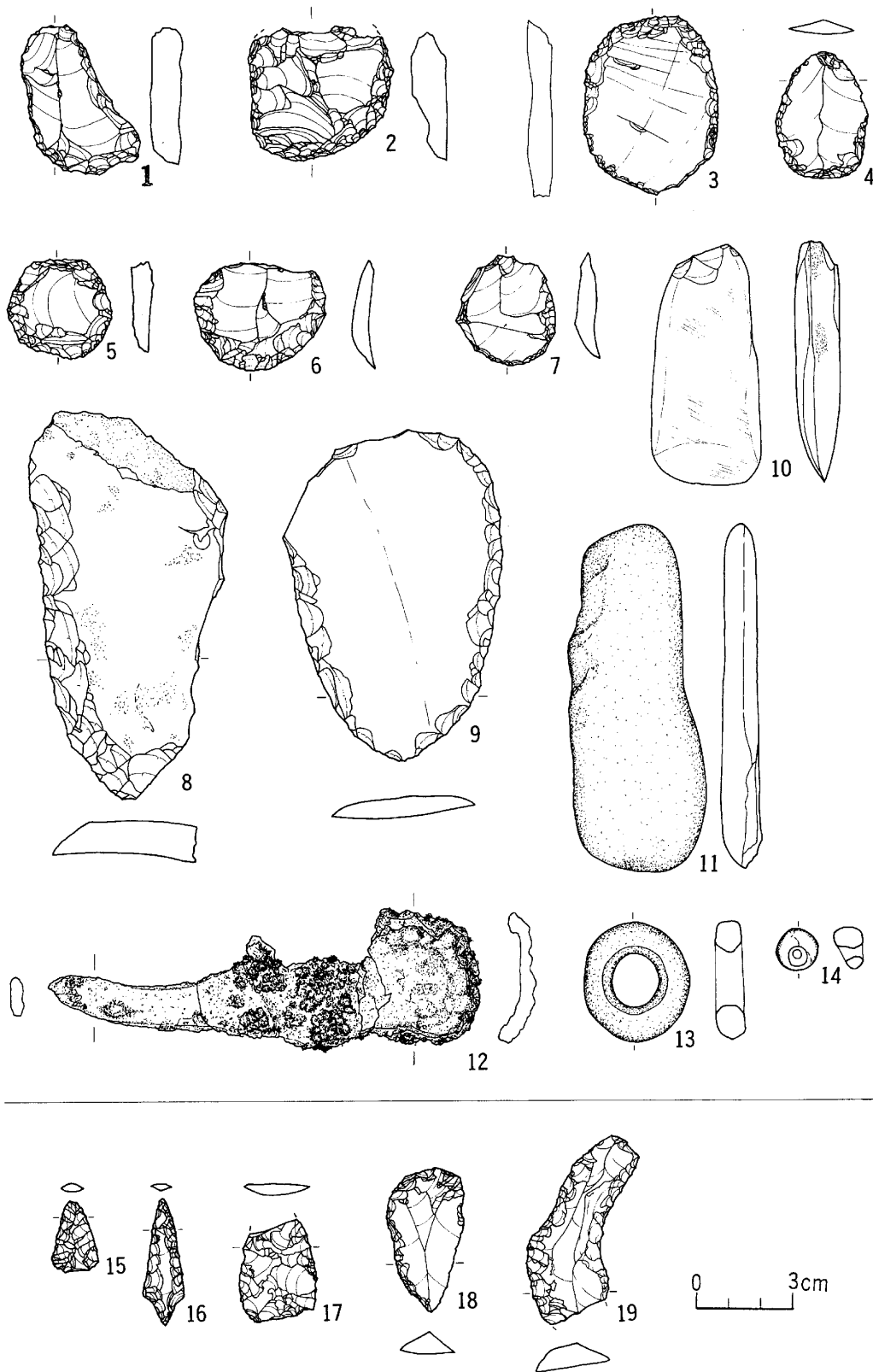
第99图 16号竖穴埋土(1~30)出土土器



第90図 16号竪穴埋土(1~16)出土土器



第91圖 16号竪穴床面(1・2)・火山灰(3~11)・埋土(12~49)出土石器・石製品



第92図 16号竖穴埋土(1~14)出土石器・鉄器・石製品、16a号竖穴埋土(15~19)出土石器

に鉄分を含む青森五所川原産のものであり、胎土に異なりをみせる。沿海州方面のものとの対比分析が必要とされる。第87図-1は後北C₂式。2、3は同C₁式。4～6は宇津内II b式。7～16は内側からの突瘤文が施される宇津内II a式。16の口唇部には細い沈線文が施される。17は小波状を呈し突瘤文が施される。18は下方から刺突が加わる。19は沈線と刺突。20は円形刺突が施される。17～20は続縄文前葉であろう。21、22は続縄文底部。第88図-1～3は宇津内II b期であろう。4は同II a期と思われるが、突瘤が太く胎土に砂を多量に含むなどこの時期のものとしては異質である。5～9は続縄文前葉であろう。5は縄線文が多様されるが胎土は晩期のものに比してやや脆弱であり、続縄文的である。6は縄線と短縄文を施す。7は横走沈線文間に刺突を施す。8、9にも沈線文が施される。9は緑ヶ岡式かもしれない。10～15は幣舞式。16～19は縄線文を主体とし19には円形刺突が加わる。20～25は直線、曲線の沈線を主体とし刺突もしくは25の様に突瘤文の施されるものである。第89図-1～29は縄文晩期中葉であろう。1は浅く擦った沈線が施される。2は直線、曲線の沈線が施される。3～14は器面に刺突が施される。15～19は器面に縄端圧痕文が施される。20～21の裏面、22の底部内側に刺突がある。23、24は無文。25～29は縄文が施される。30には縄線文下に突瘤文が施される。

第90図-1～14は縄文晩期前葉であろう。1～6は斜めの突瘤文が施される。7～14は盛り上りのある爪形文。15は縄文後期鯨潤式。16は縄文前期。

石器は床面から第91図-1の柳葉形石鏃、2の砂岩製の有孔石製品がある。他の3～11は摩周b火山灰の上層から出土した石器である。すべて黒曜石製。3～7は有茎石鏃。7は火熱を受けている。8は無茎石鏃。9は削器。10、11は搔器。12～49は摩周b火山灰の下層から出土した。12～30は有茎石鏃。31～35は無茎石鏃。36は両面加工ナイフ。37～45、47、48は側削器。46、49は搔器。これらはすべて黒曜石製である。第92図-1～7は黒曜石製の搔器。8、9は玄武岩製の削器。10は磨製石斧。11は扁平な自然礫を用いて石斧としたものである。明瞭な刃部は作出されておらず、使用によると思われる剝離があり、表面にはキズ状の使用痕がある。12は長さ約10cm、幅約1.2cmの鉄製刀子。先端部が曲がる。柄部は腐食により丸みを呈する。13は第91図-2と同じ砂岩製の有孔石製品。14は泥岩製の石製品。両側から穿孔されている。

小 括

本竪穴は長軸8.8m、短軸7.5mに規模を呈する。時期はオホーツク文化ゾーメン状貼付文期のものであるが、隣接する同時期の15号竪穴に比して竪穴の規模は寸詰まりであり骨塚、貼床などの構造に著しい差がある。大型竪穴と小型竪穴が前後する例はトコロチャシ跡のオホーツク文化の竪穴例にもあり集落構成研究の手懸かりになるであろう。

文 献

- 1) 宇田川洋・武田修「常呂川河口遺跡15号住居出土の土器群」『考古学ジャーナル』371号 平成6年

16a 号 豎 穴

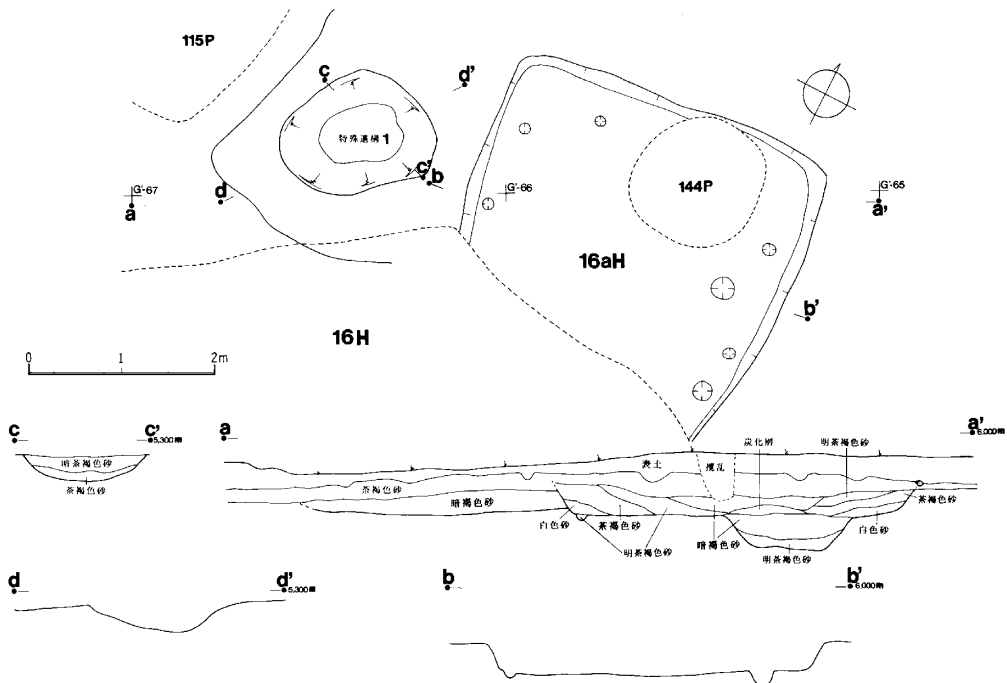
遺 構 (第93図)

本豎穴は16号豎穴により南側の大半が切られている。したがって正確な規模は不明であるが残存する部分から判断すると長軸3.6m、短軸約3m以上に及ぶ方形を呈するであろう。壁高は確認面から約35cmを測り緩く立ち上がる。支柱穴は認められず直径約10~20cm、深さ10~20cmの壁柱穴が認められる。炉跡は検出できなかった。内部を掘り下げる段階でピット144の落ち込みを確認した。

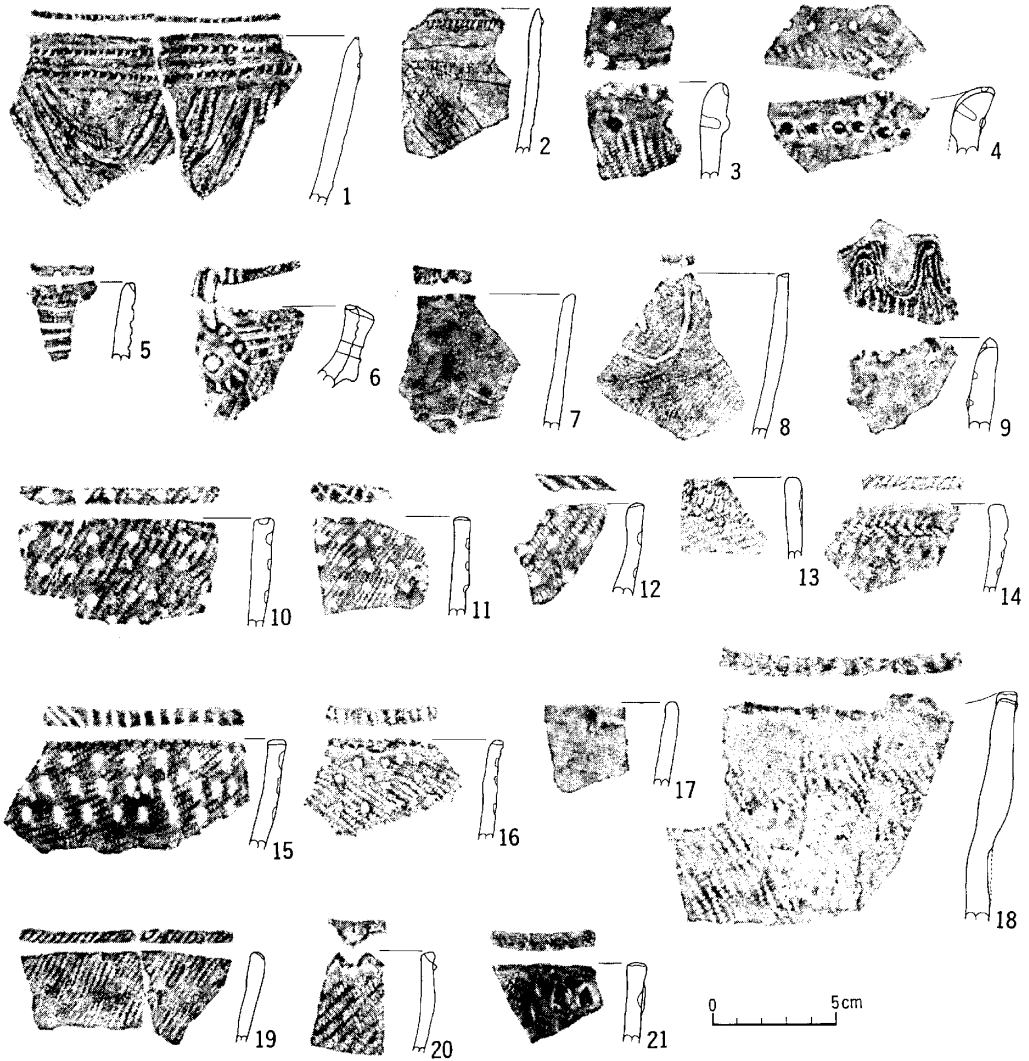
遺 物 (第92図-15~19、第94図)

遺物はすべて埋土からの出土である。第94図-1、2は後北C₂・D式。3、4は宇津内II a式。5~9は幣舞式。10~20は晩期中葉であろう。10~13は器面に刺突が施される。14は縄線文下に刺突が施される。15、16には縄端圧痕文が施される。17は無文。18~20は縄文を施すが、19は口唇部の外側を押さえつけ波状に仕上げている。21は盛上がりのある爪形と無い爪型(刺突)の複合施文である。

第92図-15~19は埋土から出土している。15、16は有茎石鏃。17は先端部が欠失しているがやや大型の無茎石鏃であろう。18、19は削器。すべて黒曜石製。



第93図 16a号豎穴平面図



第94図 16a号竪穴埋土(1~21)出土土器

小 括

本竪穴は16号に切られており規模、形態等は不明である。オホーツク文化期の16号より古いことは確実であるが床面出土の遺物がないため詳細な時期は不明である。

17 号 豎 穴

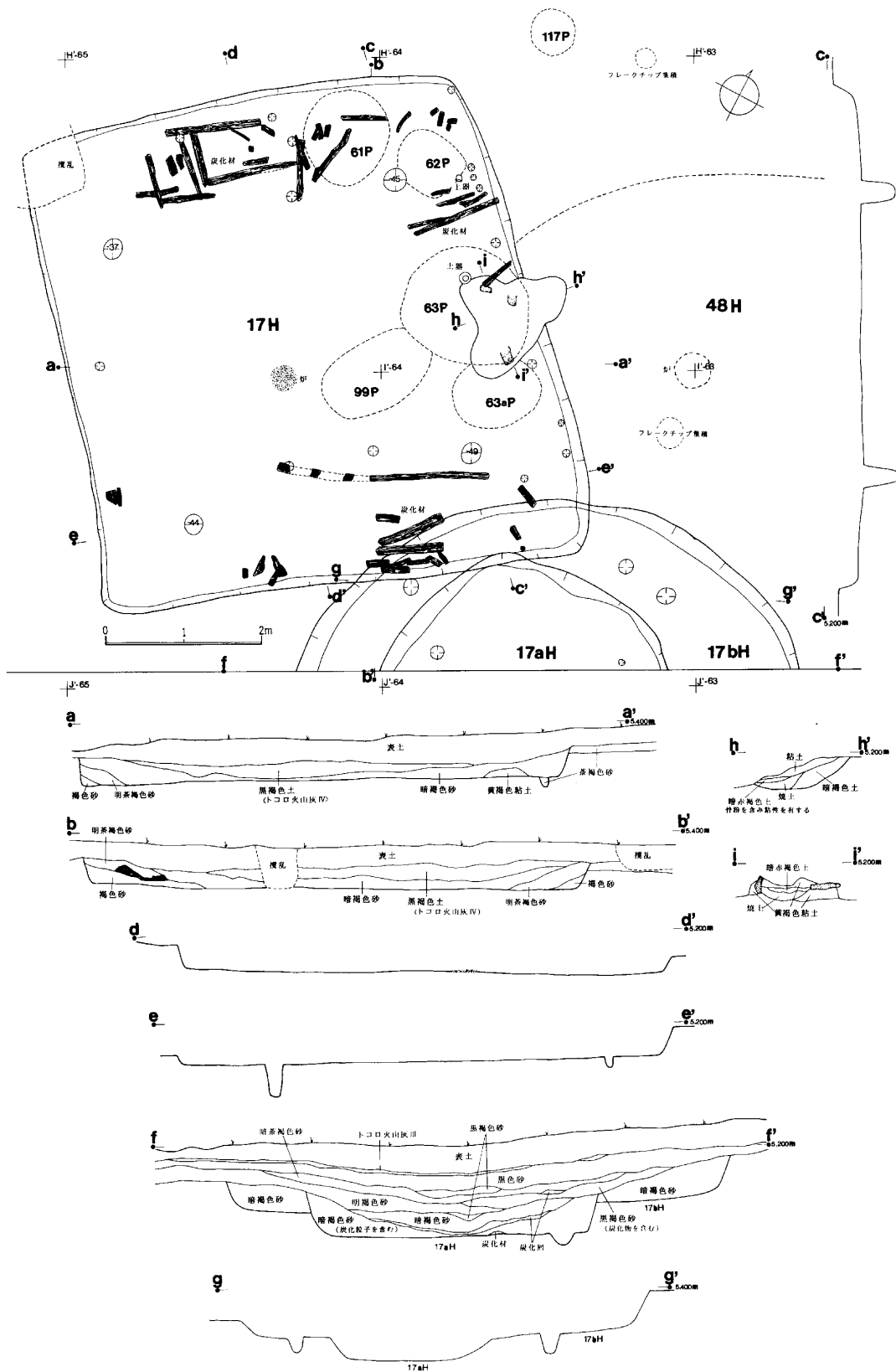
遺 構 (第95図、図版38-1・2)

本豎穴は16号豎穴の東側にある。16号豎穴のグリッドを広げた段階で落ち込みを確認した。基本土層は表土、黒褐色砂、暗褐色砂に分層され、黒褐色砂には白色の樽前a火山灰がブロック状に混入している。暗褐色砂を掘り初めた段階で炭化粒が多くなり、壁際では炭化材が出土している。規模は直径約6.3mの方形を呈する。壁は斜めに立ち上り、確認面から約30~40cmである。カマドは北壁の中央部に構築されている。袖部は黄褐色粘土を使用し、芯に角礫を用いている。西側袖部では角礫を立て、東側袖部では横にしている。煙道はややきつめに立ち上がる。天井部も残り、遺存は良い。焼土上部の暗褐色土は粘性を有し、微細な骨片が含まれている。炭化材は北壁の一部と西壁、東壁際にある。豎穴の中央部には全く認められなかった。北壁と炭化材は内側に倒れ込むものと、壁と並行するものがある。材は壁と並行するものが太いようである。支柱穴は各壁から約1.10mほど離れたところに4本ある。直径約25cmで、深さは約37~49cmである。壁柱は北壁に8本、西壁に2本、南壁に1本ある。直径は約8~12cm、深さ約6~12cmである。炉跡は中央部にある。良く焼けている。

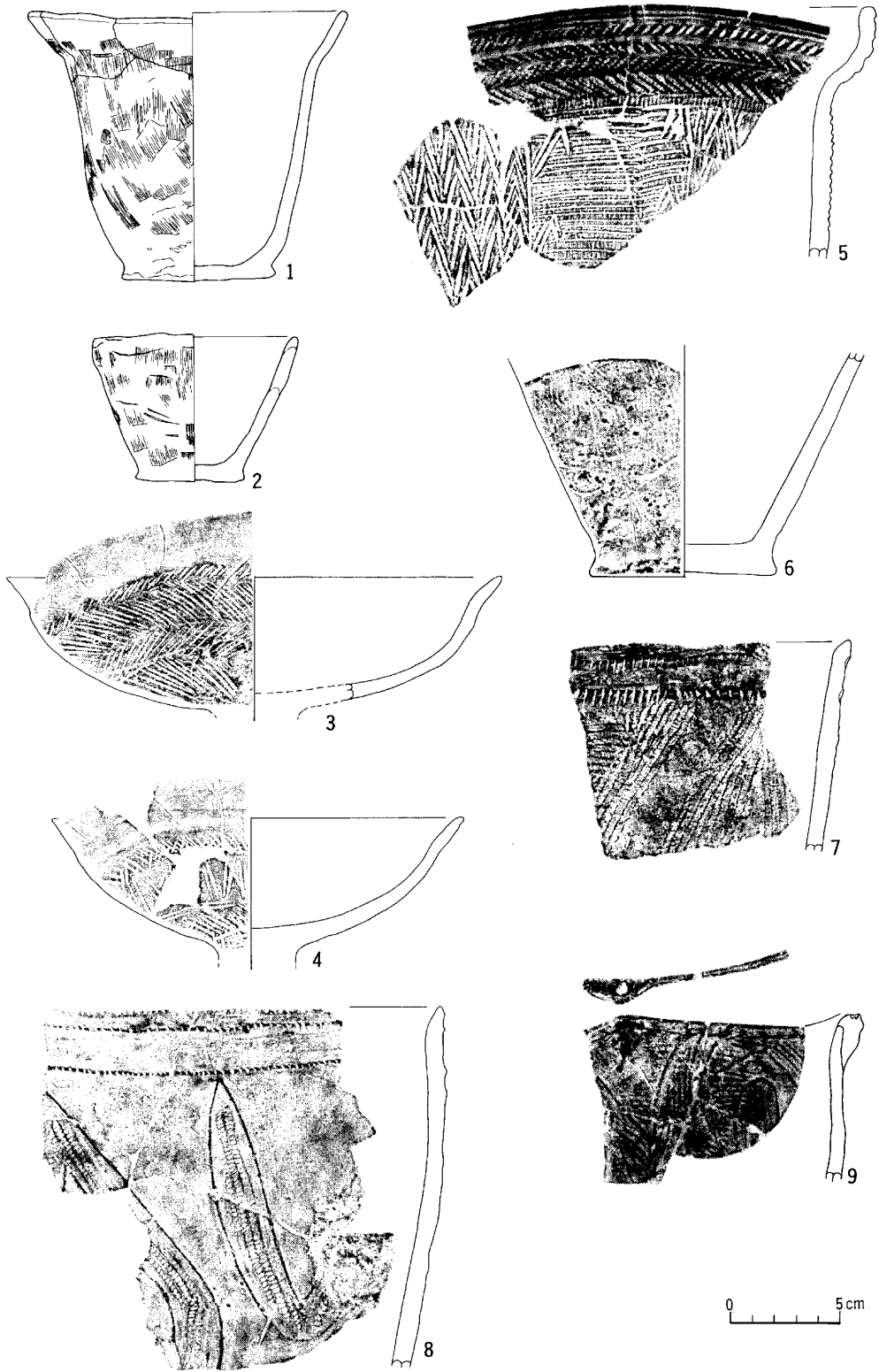
遺 物 (第96、97、98、99図、図版39-1~12)

床面からは第96図-1の無文中型鉢形土器、2の無文小型杯が出土している。2点ともカマドの西側から出土したもので刷毛により丁寧に調整されている。3~9は埋土出土。3、4は高杯。5は器面に針葉樹状文と横走る短刻線を交互に施す。6は篋により調整されている。7、8は後北C₂式。9、10は同C₁式。第97図-1~24も埋土出土。1、2は宇津内IIa式。3は縦の太い隆帯が施されるもので続縄文前葉であろう。4~6は口縁部に直線、山形状の沈線を施す緑ヶ岡式。7~9は幣舞式。9の口唇部には幣舞式に特徴的な刻みが施される。9~24は縄文晩期中葉であろう。10~14は縄線文を直線、曲線に施すもので13には刺突、14には縄端圧痕文が加わる。15~18は刺突文が施される。19は口縁部が無文帯をなし表裏面に刺突が施される。20は山形状の沈線が配置されそれを取り囲む様に刺突が施される。21は縄端圧痕文が施される。22は縄文を施す。23は沈線を渦巻状に施す。24は注口。第98図-1は器面に縄文を施す。2、3は斜めからの突瘤文、4、5は盛り上がりのある爪形文が施される。2~5は縄文晩期前葉であろう。

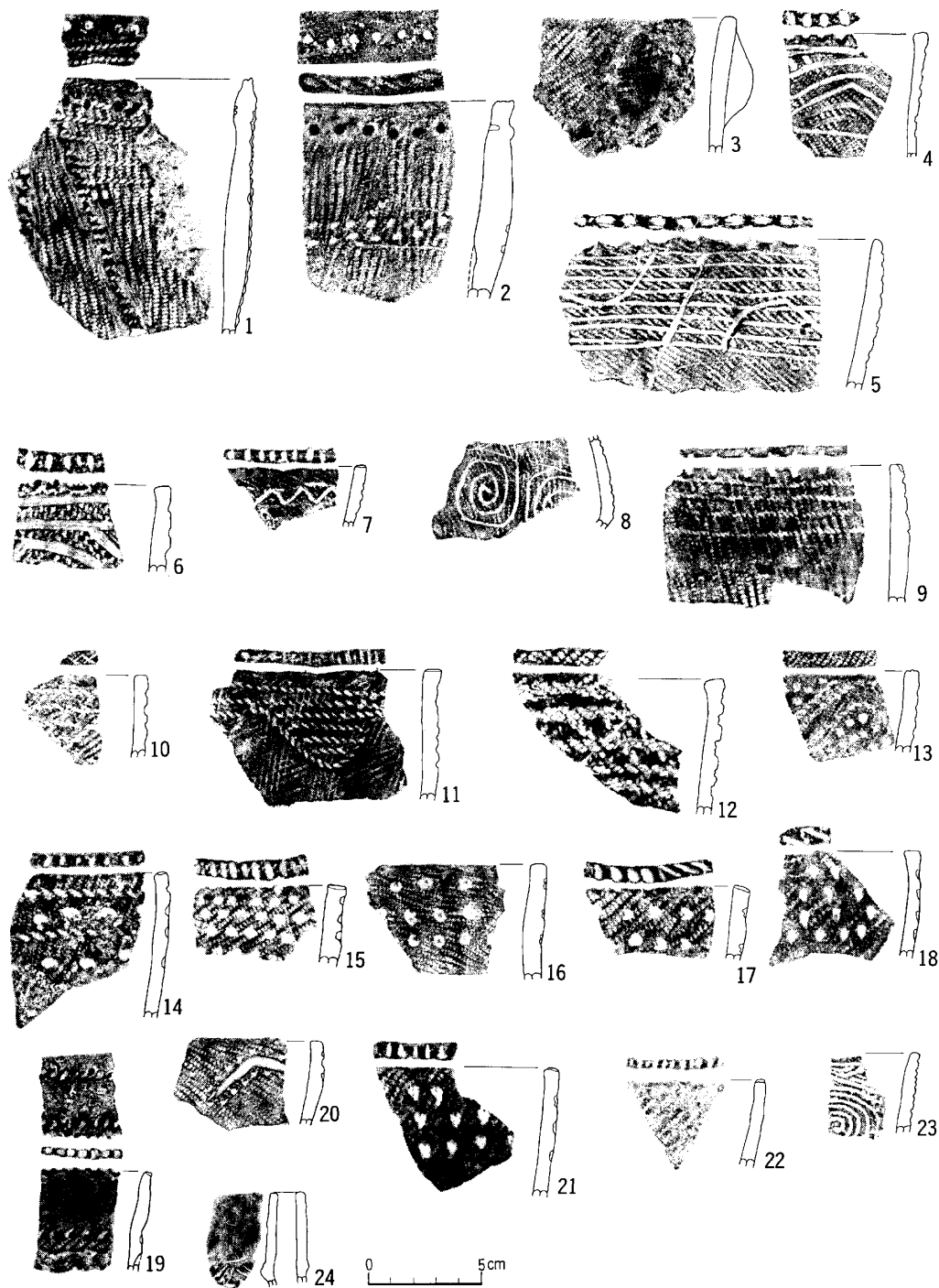
石器は第99図に示したものが埋土から出土している。1~6は有茎石鏃。7~18は無茎石鏃。19~24、26、27は削器。25は片面加工ナイフ。主要剥離面側の打瘤部から縁辺部にかけて調整されている。28は断面三角形の棒状原石に浅い剥離が施される。29~32は搔器。33は緑色岩製の石斧。34は泥岩製の叩き石。33、34を除きすべて黒曜石製である。



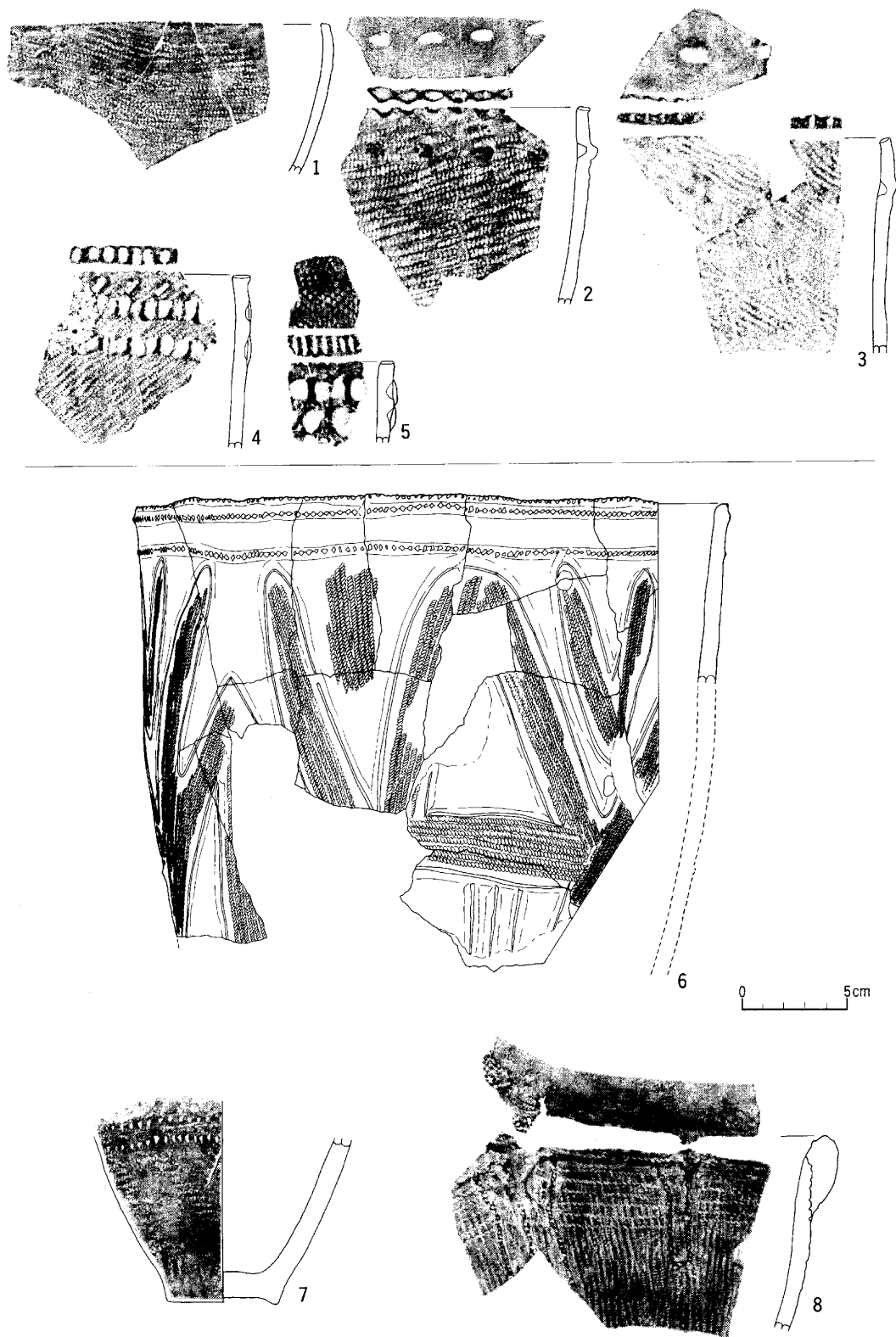
第95図 17号竪穴、17a号竪穴、17b号竪穴平面図



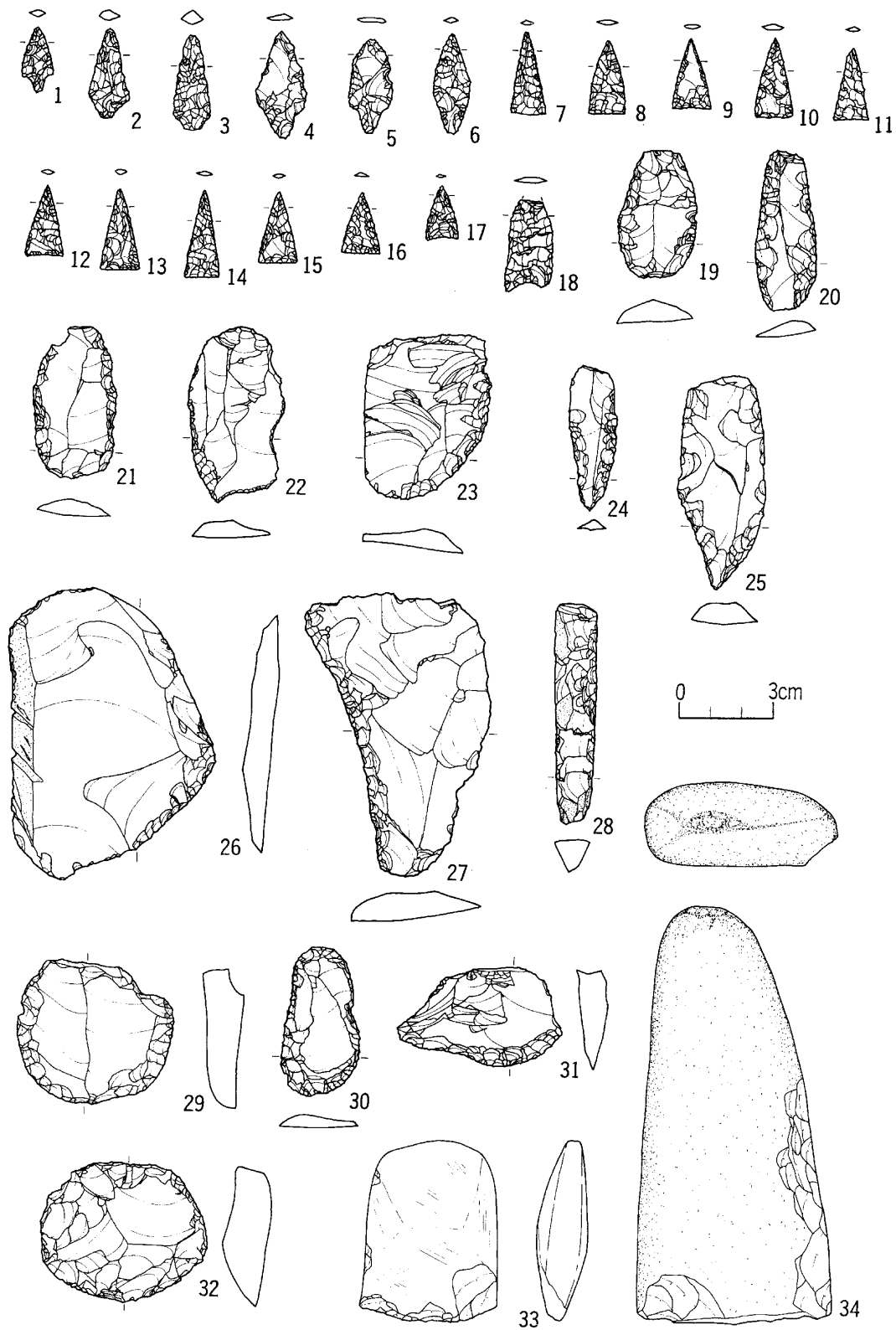
第96図 17号竖穴床面(1・2)・埋土(3~10)出土土器



第97图 17号竖穴埋土(1~24)出土土器



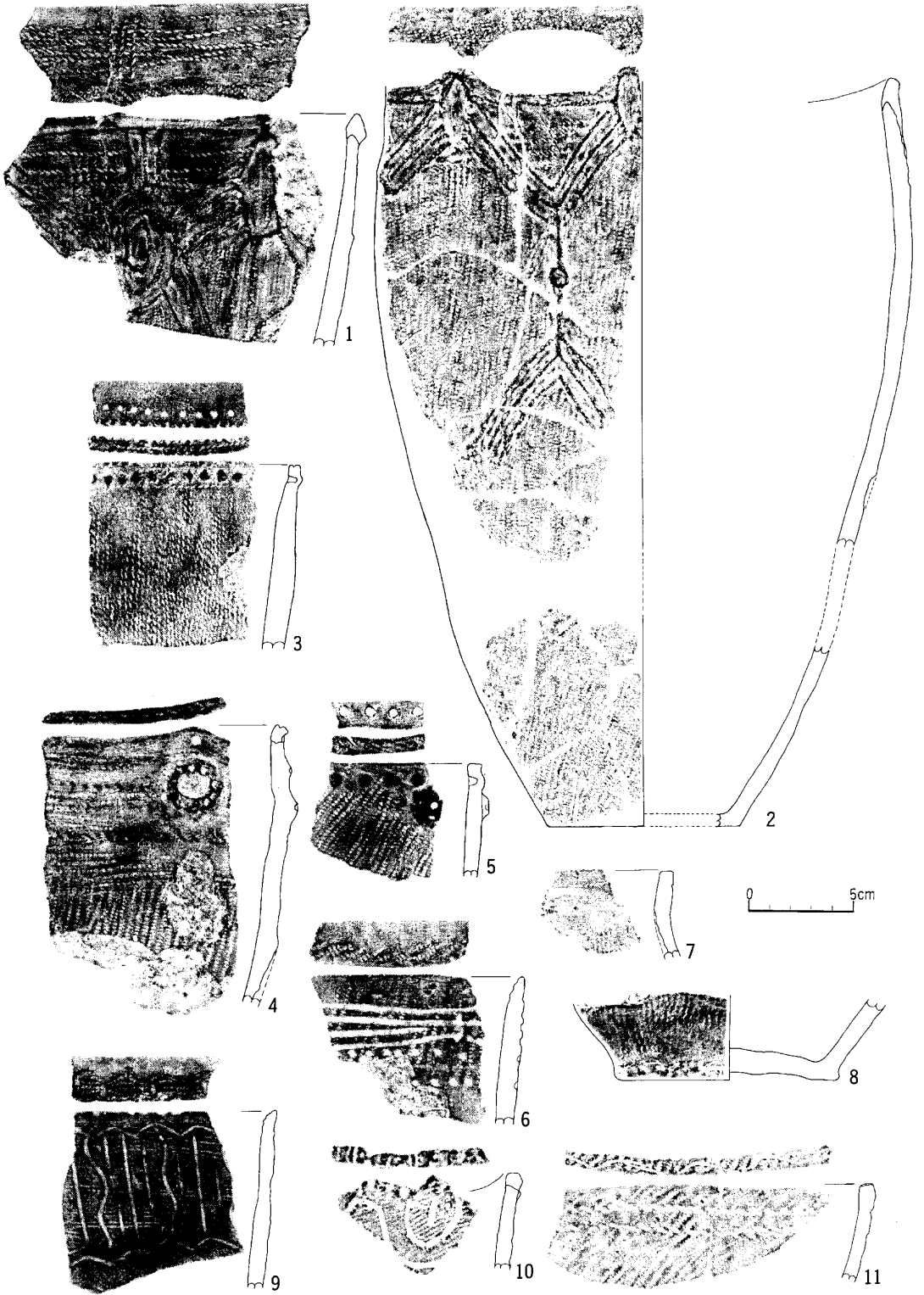
第98図 17号竖穴埋土(1~5)、17a号竖穴埋土(6~8)出土土器



第99图 17号竖穴埋土(1~34)出土石器

小 括

本竪穴は一辺6.3mの方形を呈する。カマドの位置は本遺跡においても珍しく北壁の中央部に構築されている。床面からは2点の無文土器が出土している。火災住居であり、主に西壁際に炭化材が遺存する。時期は第96図-5が本竪穴に伴うものであれば藤本編年e期。宇田川編年中期の可能性はある。



第100图 17a号豎穴埋土(1~11)出土土器

17a 号 豎 穴

遺 構 (第95図)

本豎穴は17号豎穴の東壁と重複する17b号の暗褐色砂層から掘り込まれている。17b号の大半が発掘区域外にありその内部にある本豎穴を検出できたのは北壁側と西壁側の一部である。形態は北壁と西壁の形状から方形を呈すると思われる。正確な規模については不明であるが北壁は緩いカーブを呈しておりあまり大きくないものと推測される。壁はほぼ垂直に立ち上り高さは確認面から約25cmを測る。壁柱穴は北壁、西壁にそれぞれ1本ある。北壁は直径9cm、深さ12cm。西壁は直径19cm、深さ16cm。

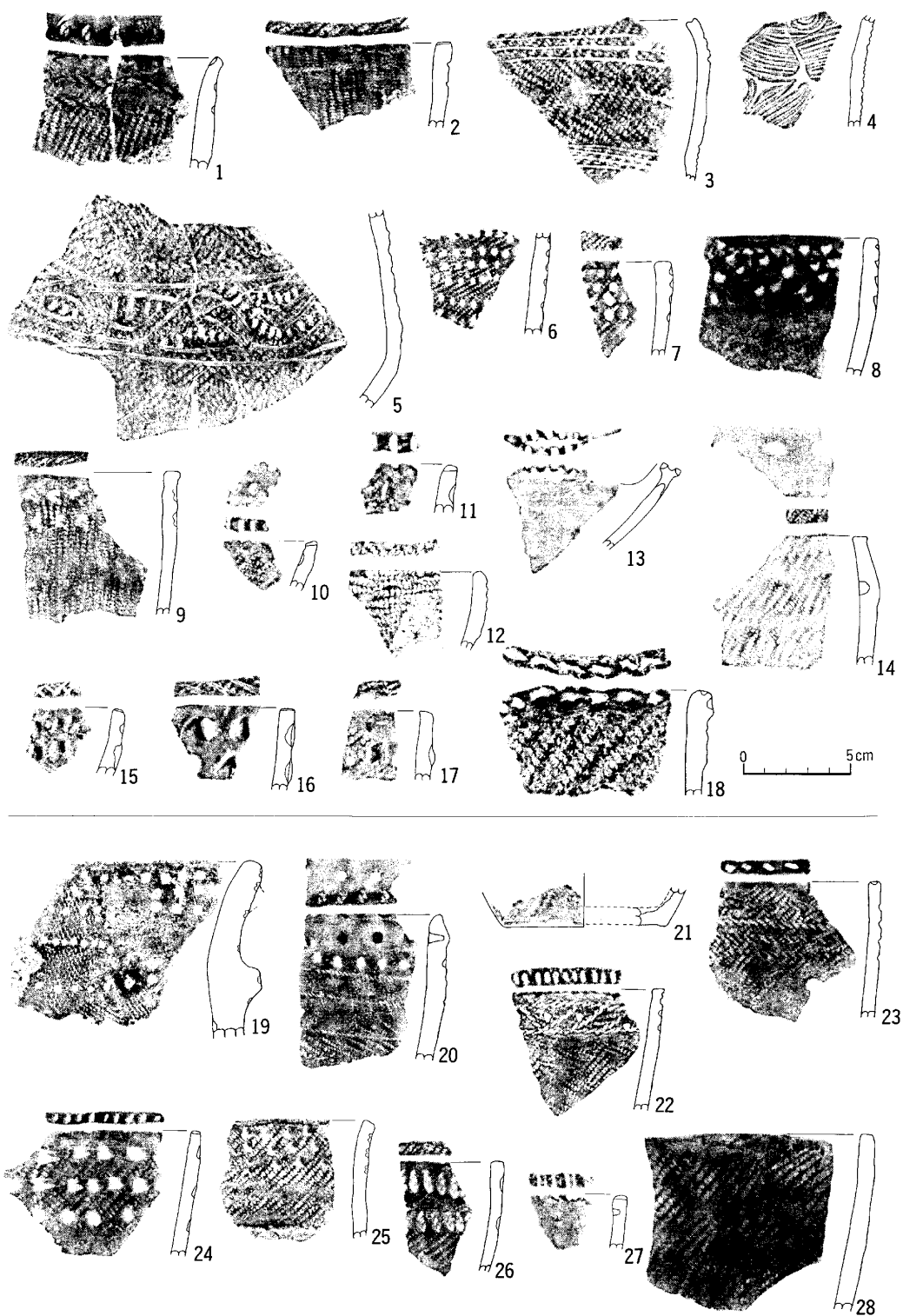
遺 物 (第98図-6～8、第100図、第101図-1～18、第103図、第104図-1～6)

遺物はすべて埋土出土である。第98図-6は後北C₂式。7は同B式と思われる。8は宇津内II b式。第100図-1、2は宇津内II b式。2は2個1対の小突起を山形状の隆帯で連結し、胴部にも「∧」字形の隆帯を施す。それぞれは1本の細い隆帯で結ばれ人を意匠する様である。3、5は宇津内II a式。4、6、7は続縄文前葉であろう。4の口縁部は帯縄文が施され円形の貼付文に刺突が施される。6は3本の横走沈線下に刺突が施される。8は底部。9、10は幣舞式。11は口縁部に縄線文、口唇部に波状の沈線を施す。晩期中葉であろう。第101図-1～3は続縄文前葉。1は口唇部の裏側に縄端圧痕文が施される。3は口縁部が内湾し小突起をもつ。器壁は薄く胎土は砂を多量に含むためか脆弱である。下部の沈線文あたりからやや外側に膨らむかもしれない。4は大洞B式系であろう。5～13は縄文晩期中葉であろう。5は胴部から底部にかけてのものである。器形は下部が膨らみ、上部がすぼまるうりざね形を呈するのであろう。上部は斜めの沈線により鎮られ、その下は不明瞭であるが縄線文が施される。さらにその下部は2本の沈線文間に波状沈線と短刻線が施される。6～8、11は刺突、9は縄端圧痕文が施される。13は無文の浅鉢であろう。14は内側から斜めの突瘤が施される。15～17は盛り上がりのある爪形文。18は縄文中期前葉のモコト式。胎土に繊維を含み口唇部と隆帯上に2列の刺突が施される。

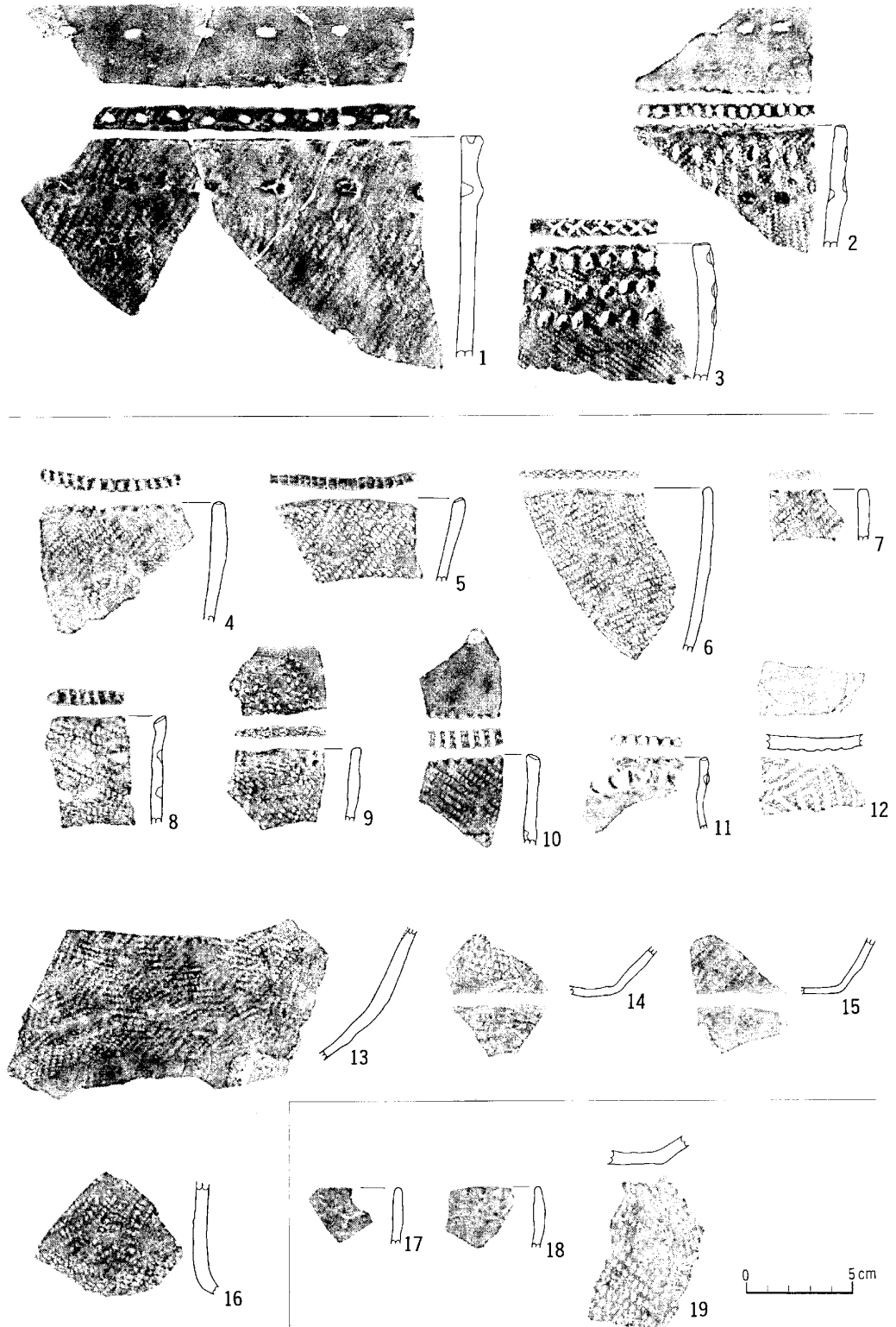
石器はすべて黒曜石製であり埋土から出土している。第103図-1、2は無茎石鏃。3、4は有茎石鏃。5～7は両面加工ナイフ。8は片面加工ナイフ。9～23は側削器。24～27は搔器4の頁岩を除きすべて黒曜石製。第104図-1は横長剝片を利用した肉厚の削器。2、3は搔器。4、5は片面のみ剝離がある。泥岩製。6は玄武岩製の削器。1～3は黒曜石製。

小 括

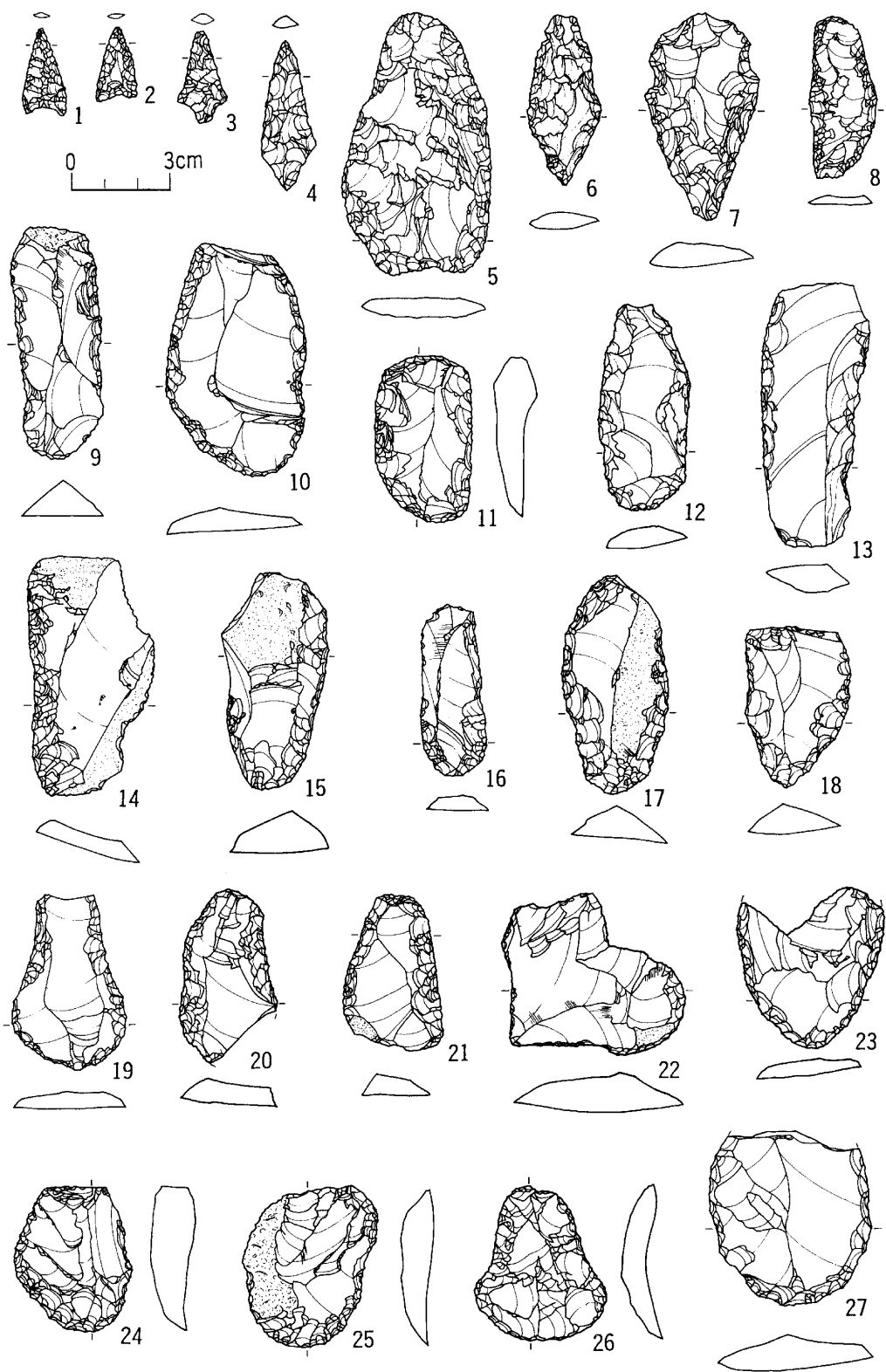
本豎穴は17b号と重複する。新旧関係は17b号より新しい。床面に近い埋土から第100図-2に示す続縄文宇津内II b式が出土しており本豎穴はこの時期に近いものと思われる。



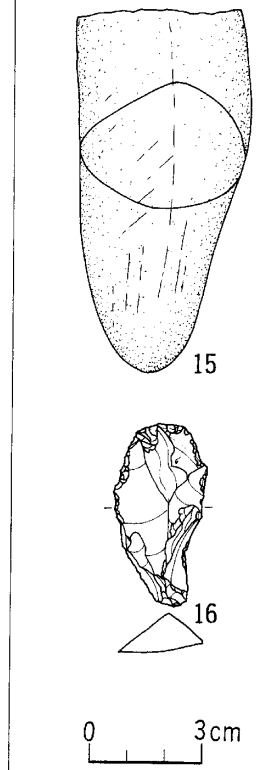
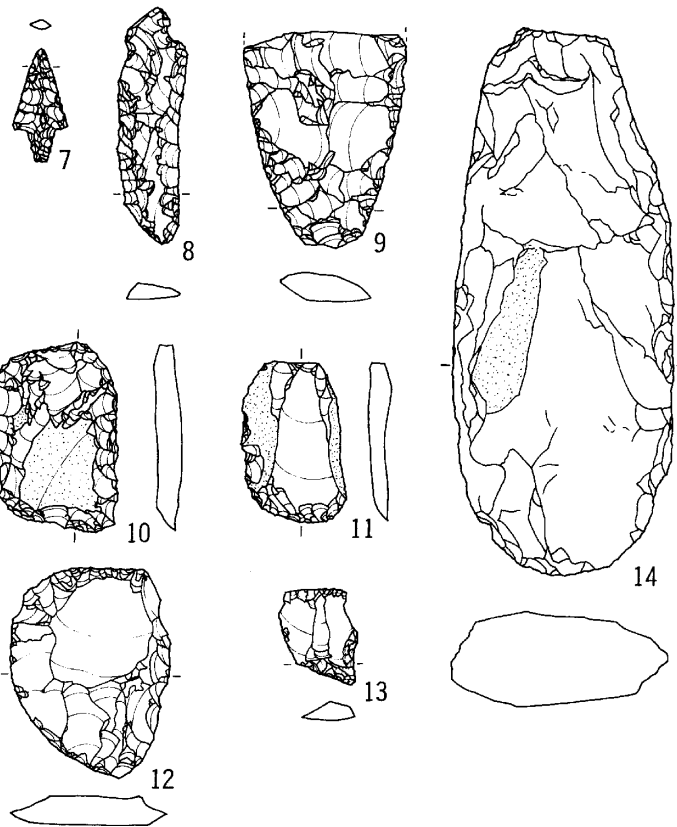
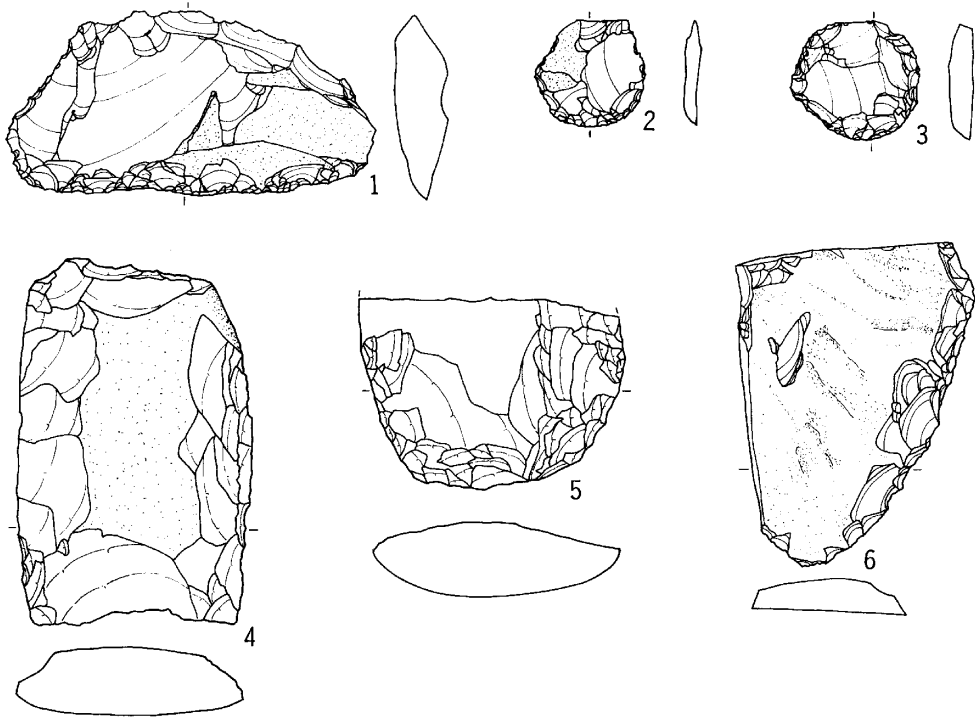
第101图 17 a号竖穴埋土(1~18)、17 b号竖穴埋土(19~29)出土土器



第102図 17b号竪穴埋土(1~3)、17c号竪穴埋土(4~16)、17d号竪穴埋土(17~19)出土土器



第103图 17a号竖穴埋土(1~27)出土石器



第104图 17a号竖穴埋土(1~6)、17b号竖穴床面(7~14)、17c号竖穴埋土(15·16)出土石器

17b 号 竪 穴

遺 構 (第95図)

本竪穴は17号竪穴の東壁の一部と重複する。大半が発掘区域外にあるため検出できたのは西壁の一部である。全体の正確な規模・形態は不明であるが西壁の状況から推定すると直径約6.4mの円形もしくはそれよりも大きい楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約45cmを測る。壁柱穴は西壁際に3本ある。いずれも直径約20～25cm、深さ約14～20cmである。

遺 物 (第101図-19～28、第102図-1～3、第104図-7～14)

第101図-19は宇津内II a 式。器面に円形刺突が施される。20は宇津内II a 式。21は底部。22～28は晩期中葉であろう。22、23は縄線文が施され22には刺突が加わる。24、25は刺突文。26、27は短縄文が施される。第102図-1～3は晩期前葉であろう。1、2は内側から斜めに突瘤文が施されるもので、1には口唇部に、2は表面に刺突が加わる。3は盛り上がりのある爪形文。

石器は床面から第104図-7～14が出土している。7は有茎石鏃。8は石匙。9は両面加工ナイフ。10、11は搔器。12、13は削器。14は泥岩製の打製石斧であり他は黒曜石製。

小 括

本竪穴と17a号は重複する。17a号より本竪穴が古いが正確な時期・規模・形態は不明である。

17c 号 竪 穴

遺 構 (第95図)

本竪穴はJ'62グリッドに位置する。大半が発掘区域外にあるため検出できたのは西壁の一部であり17b号竪穴と重複する。西壁は緩い弧状を呈しているものの正確な規模・形態は不明である。壁は緩く立ち上り高さは確認面から約25cmを測る。壁柱穴は直径8cm、深さ8cmのものが西壁際に2本ある。

遺 物 (第102図-4～16、第104図-15・16)

第102図-4～9は晩期中葉であろう。8、9には刺突が施される。10、11は同前葉であろう。10は内側からの突瘤文、11は盛り上がりのある爪形文が施される。12～16は同中葉から前葉の底部であろう。

石器は第104図-15の磨石。16は刃こぼれ状の微細な使用痕がある。黒曜石製。

小 括

本竪穴は17b号と重複する。切り合い関係は本竪穴が古いが正確な時期については不明である。

17d 号 豎 穴

遺 構 (第95図)

本豎穴は17c号と重複する。17c号同様に大半が発掘区域外にあるため検出できたのは西壁の一部である。壁は皿状に緩く立ち上り高さは確認面から約25cmを測る。支柱穴は西壁際に直径約50cm、深さ20cmのものが1本、壁柱穴は直径25cm、深さ約11~27cmのものが西壁際に2本ある。

遺 物 (第102図-17~19)

第102図-17~19は埋土から出土している。17、18は無文。19は底部。これらは晩期前葉~中葉のものと思われる。

小 括

本豎穴は17c号と重複する。切り合い関係は本豎穴が古いが正確な時期については不明である。

18 号 豎 穴

遺 構 (第105図)

本豎穴は16号豎穴の東側約2mにある。土層の切り合いから18a号が新しい。18a号は18号の窪みを利用して構築されたことになる。18号の全体の形態は不明であるが規模は約7.4mを呈するものと判断される。壁高は確認面から約60cmである。床面には支柱穴と思われる直径約20cm、深さ23cmのもの1本が18a号の壁にある。壁柱穴は直径約10~20cm、深さ約5~16cmで4本ある。床面には焼土と炭化粒があるが18a号に切られている。

遺 物 (第106、107、108、109、110図)

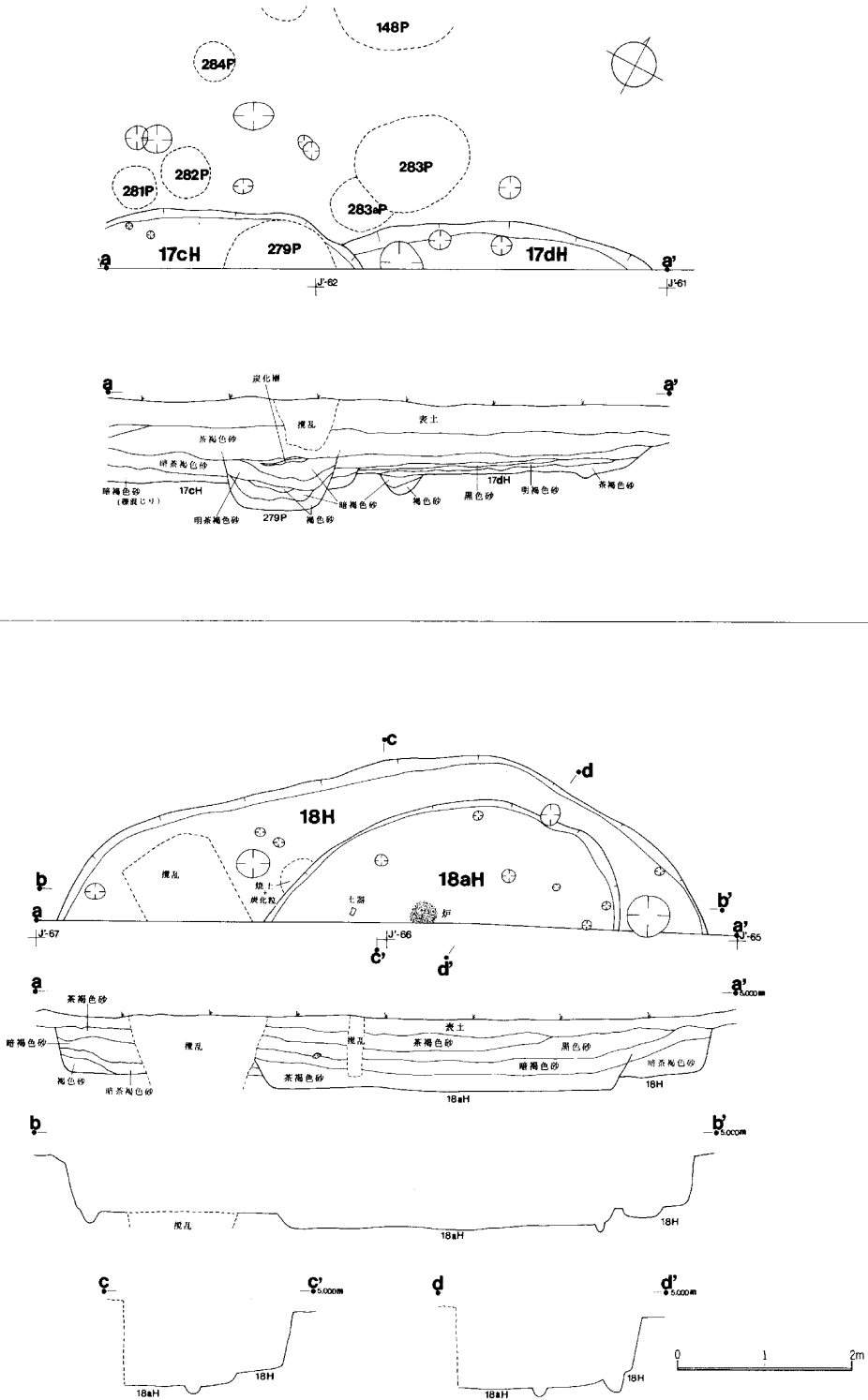
遺物は床面から第106図-1~3が出土している。1は宇津内II a式。口縁部の小突起下部から隆帯が「ハ」字状に垂下し縄端圧痕文が施される。2~3も同時期であろう。第107図-1、2も宇津内II a式のもので床面から出土している。3、4は擦文。5~7は後北C₂・D式。8は同C₁式。9は宇津内II b式。10は宇津内系であろう。底部に円形の沈線文が施される。11~17は続縄文初頭であろう。11は口唇部に鋭い刻み、12は縄の圧痕が施される。13~16は沈線文が施されたもので13、14には刺突が加わる。15、16は沈線が工字文状に施されるのでであろう。17~20は幣舞式。21~25は縄線文を主体としたもので22~24には刺突が加わり、24の口唇部には波状の沈線が施される。第108図-1~3は縄文晩期中葉であろう。1は縄線文が施され3は沈線と刺突がある。4は大洞B式系であろう。5~23は晩期中葉であろう。5は縄線文上に浅い沈線が施される。6は浅い沈線が角形に施される。7~16は各種の刺突文、17は縄端圧痕文が施される。18~20は縄文。21~23無文。24~26は内側から斜めに突かれた突瘤文。27は盛り上がり

のある爪型文。28は縄文中期北筒式。

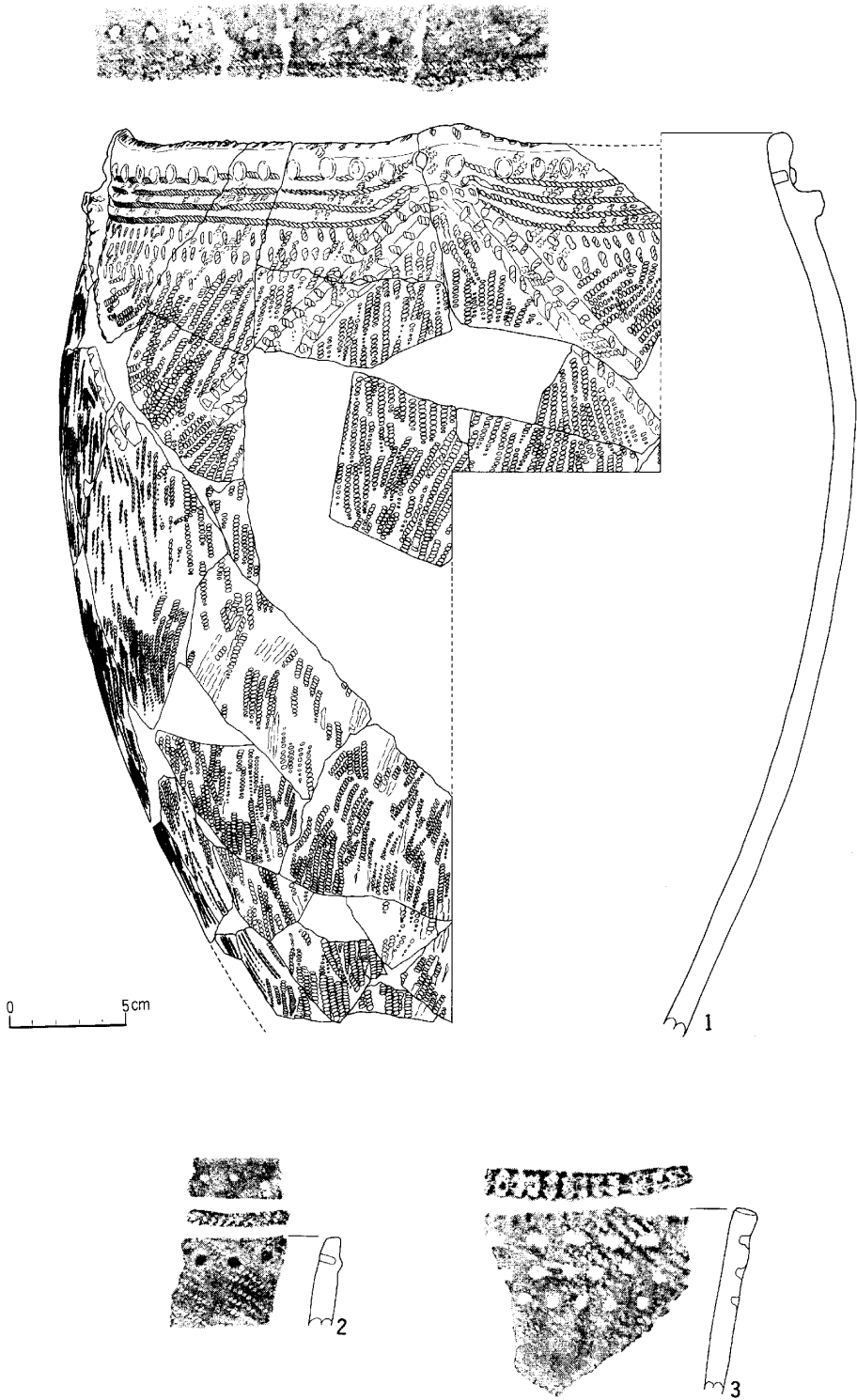
石器は第109図-1～31がある。1は無茎石鏃。2～10は有茎石鏃。11は縦長剥片の先端部から側縁に加工を施している。主要剥離面に加工はなく削器であろう。12は頁岩製の石槍。あるいは形態的な特徴から銛頭と思われる。13は両面加工ナイフ。14～25は側削器。26～31は搔器。第110図-1は玄武岩製の両面加工ナイフ。2は泥岩製の片刃磨製石斧。3、4は叩き石。5は凹み石。

小 括

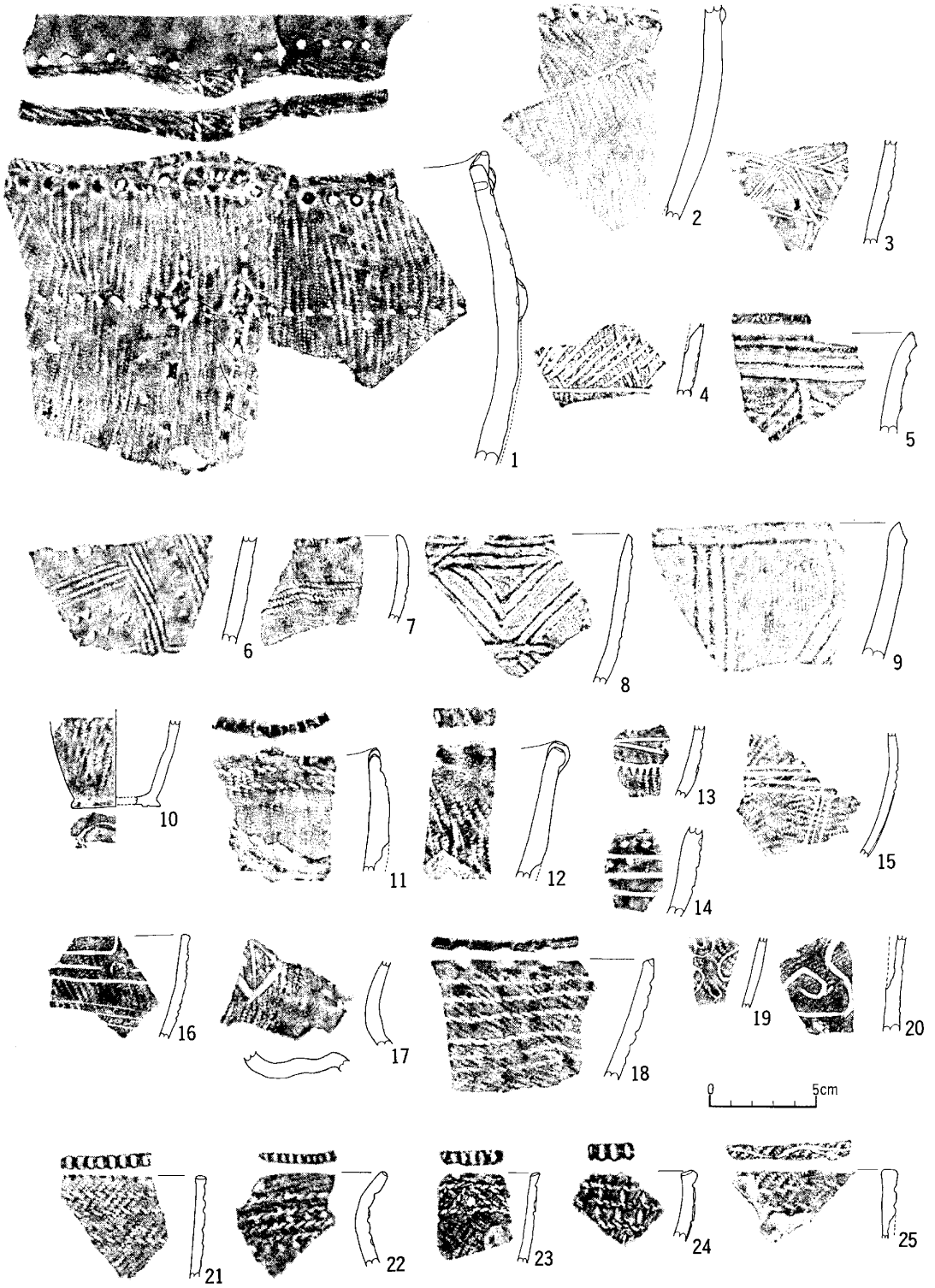
本竪穴は発掘区域外とまたがっているため検出できたのは3分の1程度であり、全体の形態は不明である。時期は竪穴床面から続縄文字津内II a式であろう。



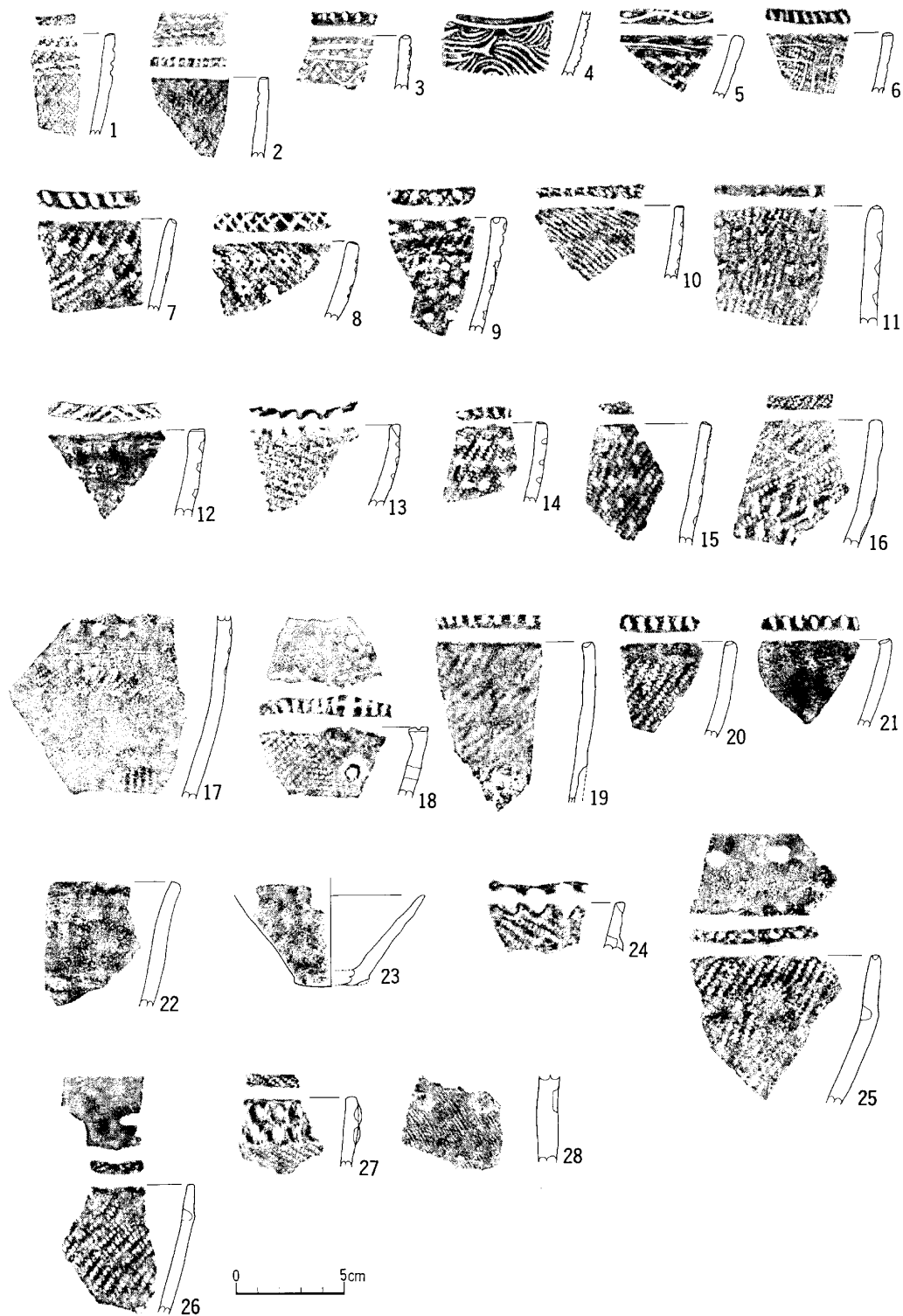
第105図 17c号竪穴、17d号竪穴、18号竪穴、18a号竪穴平面図



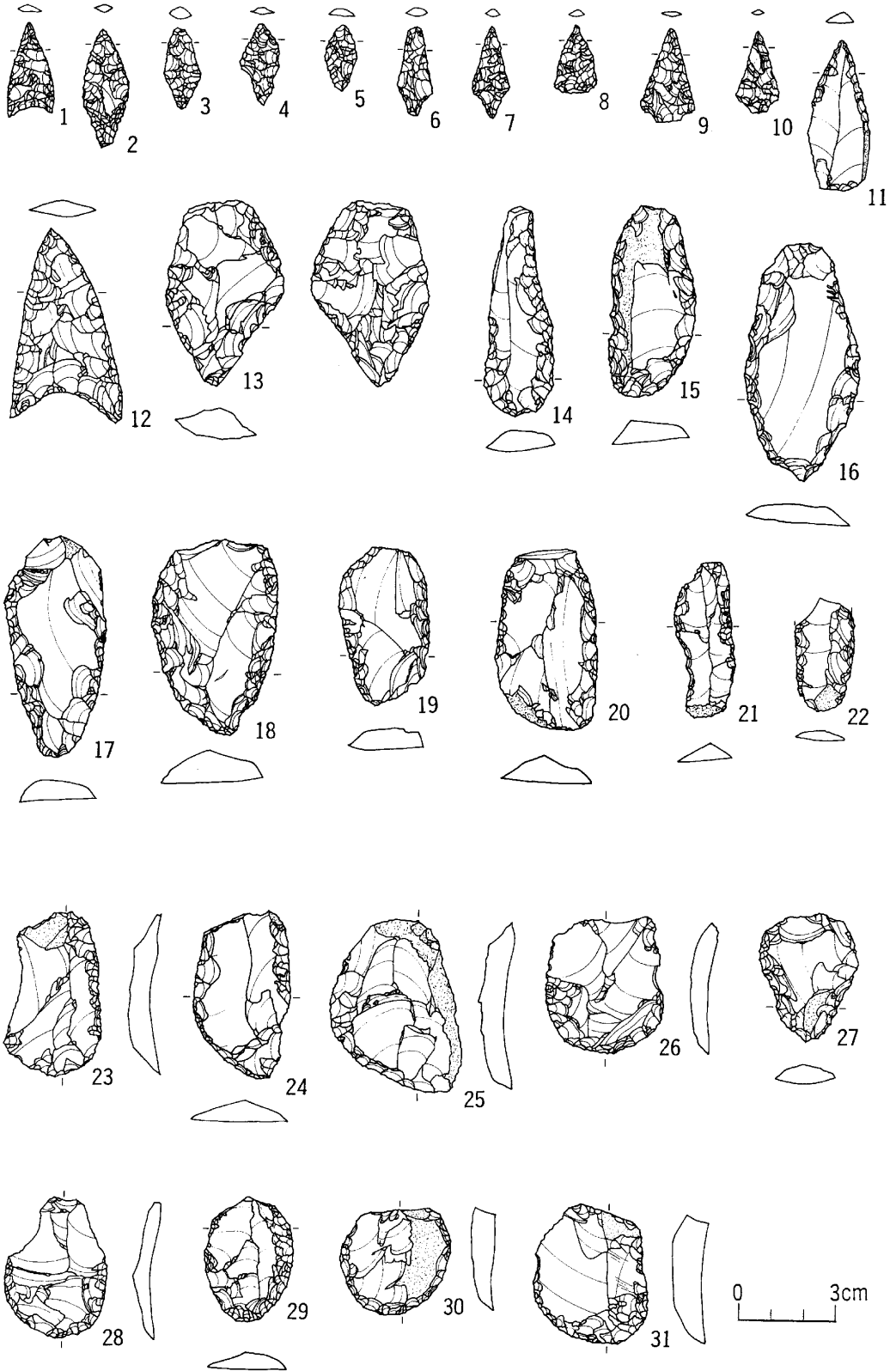
第106图 18号竖穴床面(1~3)出土土器



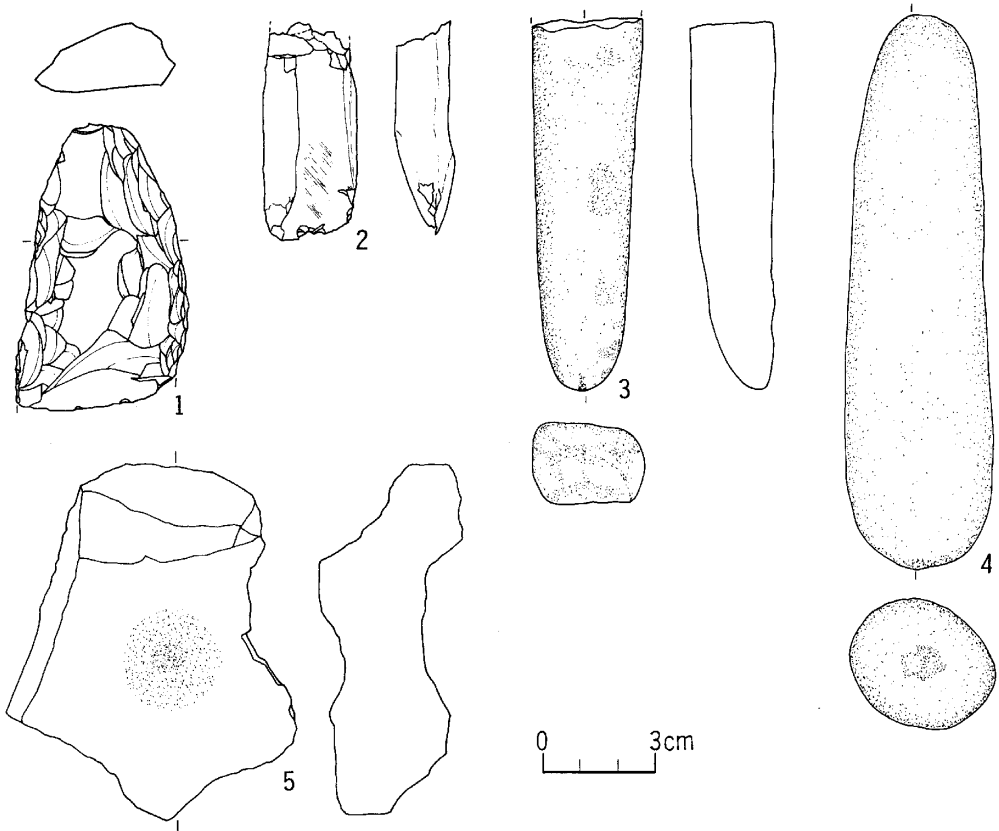
第107图 18号整穴床面(1·2)、埋土(3~25)出土土器



第108图 18号竖穴埋土(1~28)出土土器



第109图 18号竖穴埋土(1~31)出土石器



第110図 18号竪穴埋土(1~5)出土石器

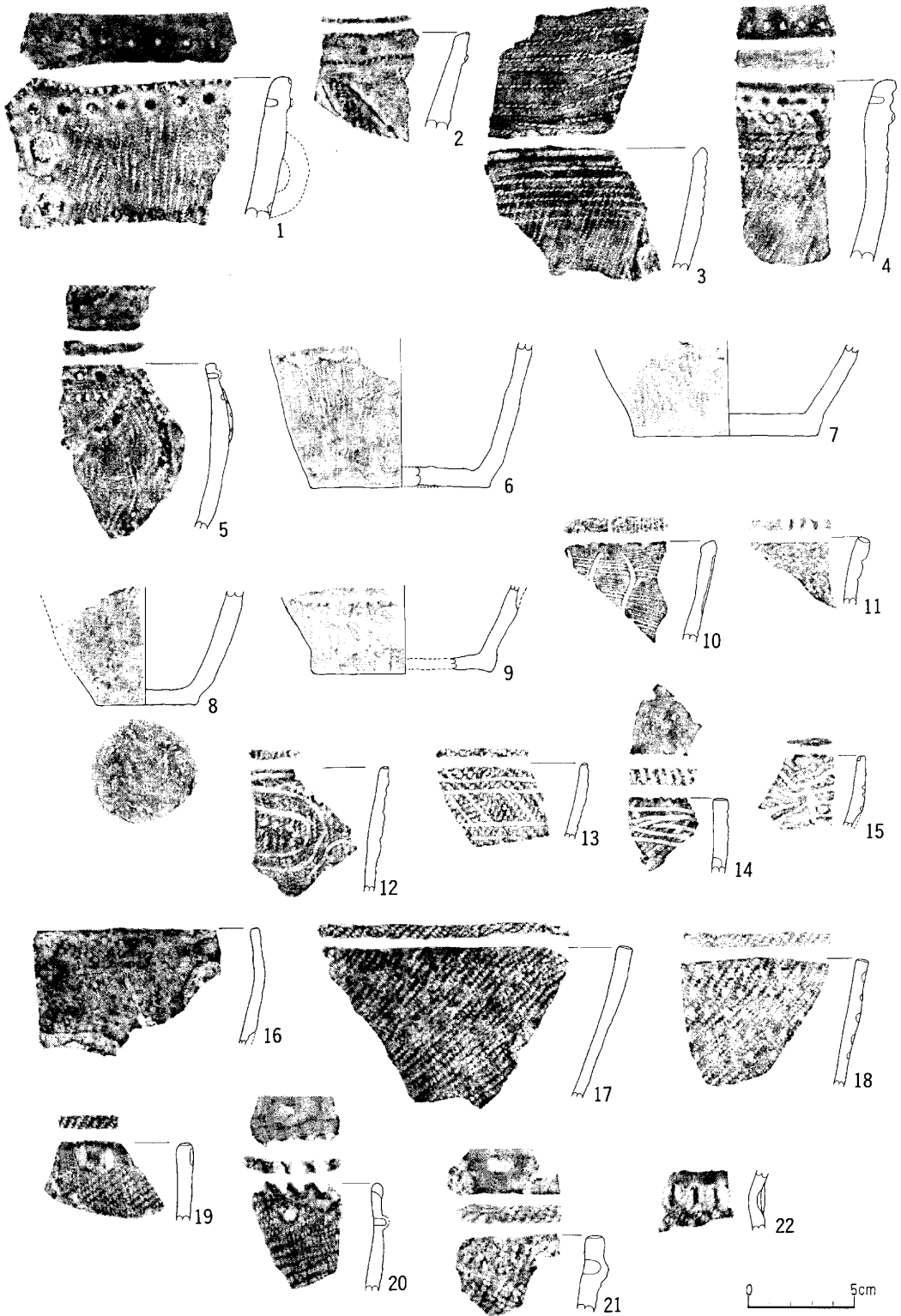
18a 号 竪 穴

遺 構 (第105図)

本竪穴は18号竪穴と重複する。18号竪穴の埋土である暗褐色砂層から掘りこまれ、18号床面の焼土と炭化粒層も切っており時期は本竪穴が新しい。18号同様に大部分が発掘区域外にあるため検出できたのは3分の1程度である。検出した西壁と北壁の状況及び炉跡の位置から判断すると短軸約4mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約40cmを測る。壁柱穴は北壁側に3本、西壁側に2本、西壁からやや内側に1本ある。いずれも直径約10~15cm、深さ約7~12cmのもので支柱穴は認められない。炉跡は中央部からやや南側に寄っている。

遺 物 (第111図、第112図)

床面からは第111図-1の宇津内II a式のみ出土している。吊り耳は欠失する。他はすべて埋土からの出土である。2は後北C₂式。3は宇津内II b式。4、5は宇津内II a式。6~9は宇



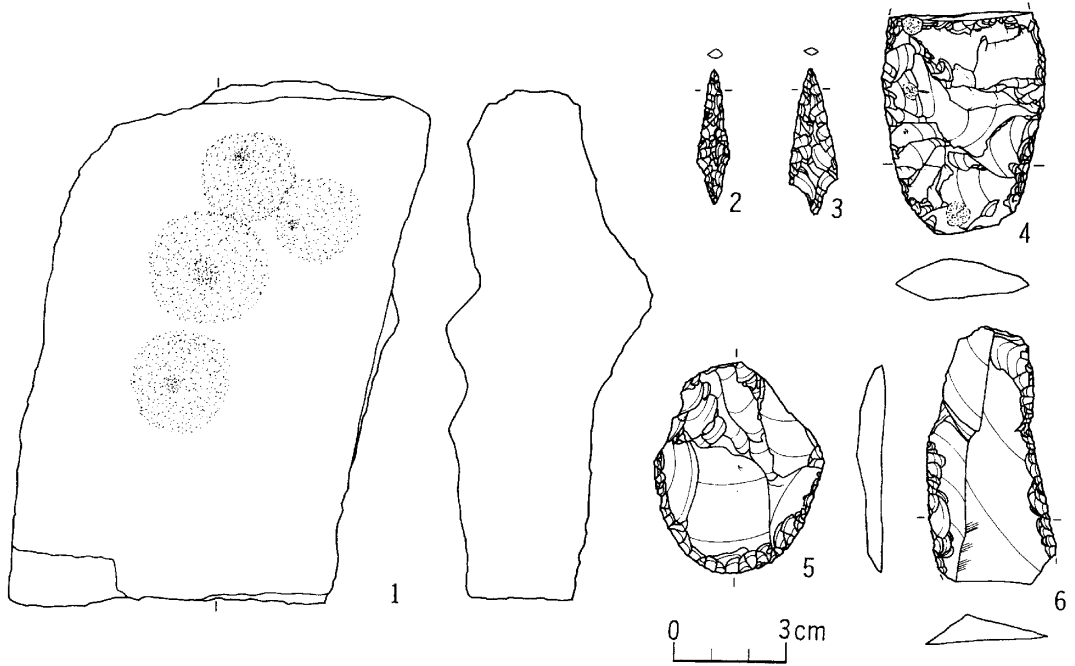
第111图 18a号竖穴床面(1)・埋土(2~22)出土土器

津内系の底部であろう。10は幣舞式。11～19は晩期中葉であろう。11は縄線文、12～15は直線、
 曲線の沈線が施される16、17は縄文。18、19は刺突が施される。20、21は内側から斜めに突瘤、
 22は盛り上がりのある爪型文が施される。

石器は床面から第112図-1の凹み石が出土している。砂岩製。埋土からは2、3の有茎石鏃。
 4の両面加工ナイフ。5、6の削器がある。3の頁岩製を除きすべて黒曜石製である。

小 括

本竪穴は18号竪穴の内部に構築されている。床面からは続縄文字津内II a 式が出土している。



第112図 18a号竪穴床(1)・埋土(2～6)出土石器

19号 竪穴

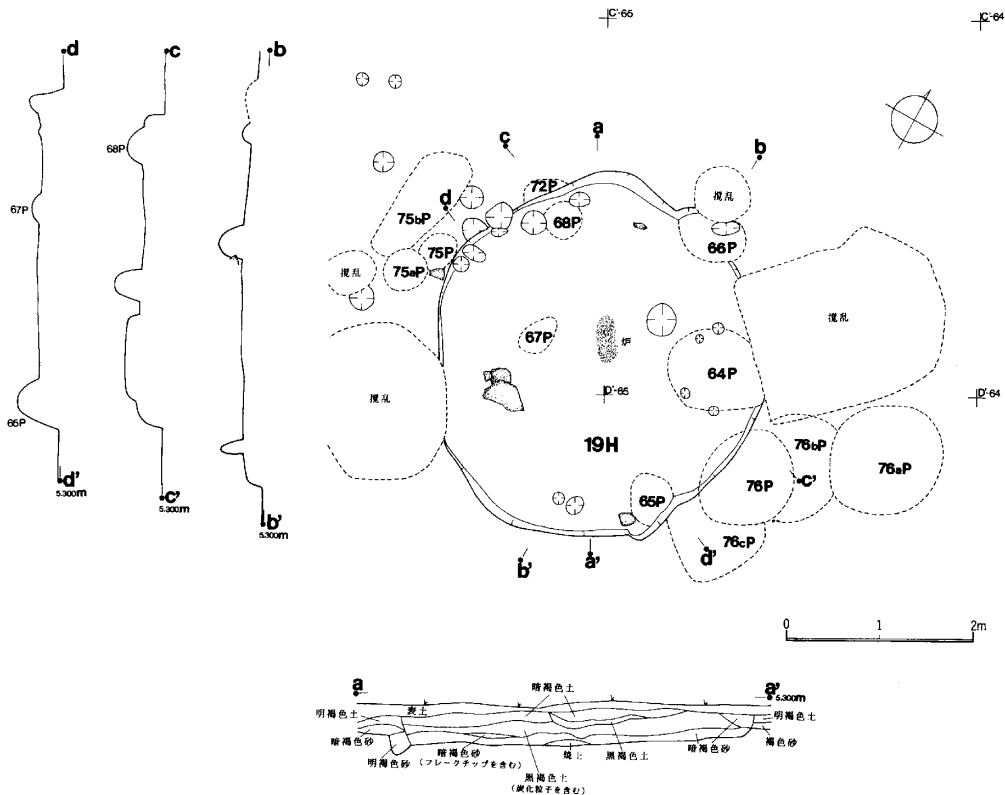
遺 構 (第113図、図版40-1)

本竪穴は15号竪穴の北側約2.5mにある。この付近は第II層の暗茶褐色砂層が欠落しており表土を剝土すると地山である褐色砂が現れ、竪穴の埋土である暗褐色土の落ち込みを確認した。埋土の土層は基本的には3層に分層される。

規模は直径約3.7mの円形を呈し、壁高は確認面から約25cmでほぼ垂直に立ち上がる。炉跡はほぼ中央部にある。支柱穴と思われるのは5本ある。炉の両側の約40cm離れたところに径約30cm、深さ27cmのもの1本と直径35cm、深さ24cmのもの1本がある。また、炉から約1.1m離れた西壁中央部に直径25cm、深さ30cmのもの1本と東壁中央部に直径12~20cm、深さ24~26cmのもの2本ある。これらの支柱穴は対角線上に向かい合うようである。壁際の柱穴は規則性がない。

遺 物 (第114、115、116、117図)

第114図-1~10は床面出土である。大半は縄文晩期中葉のものと思われる。1は口縁上部に



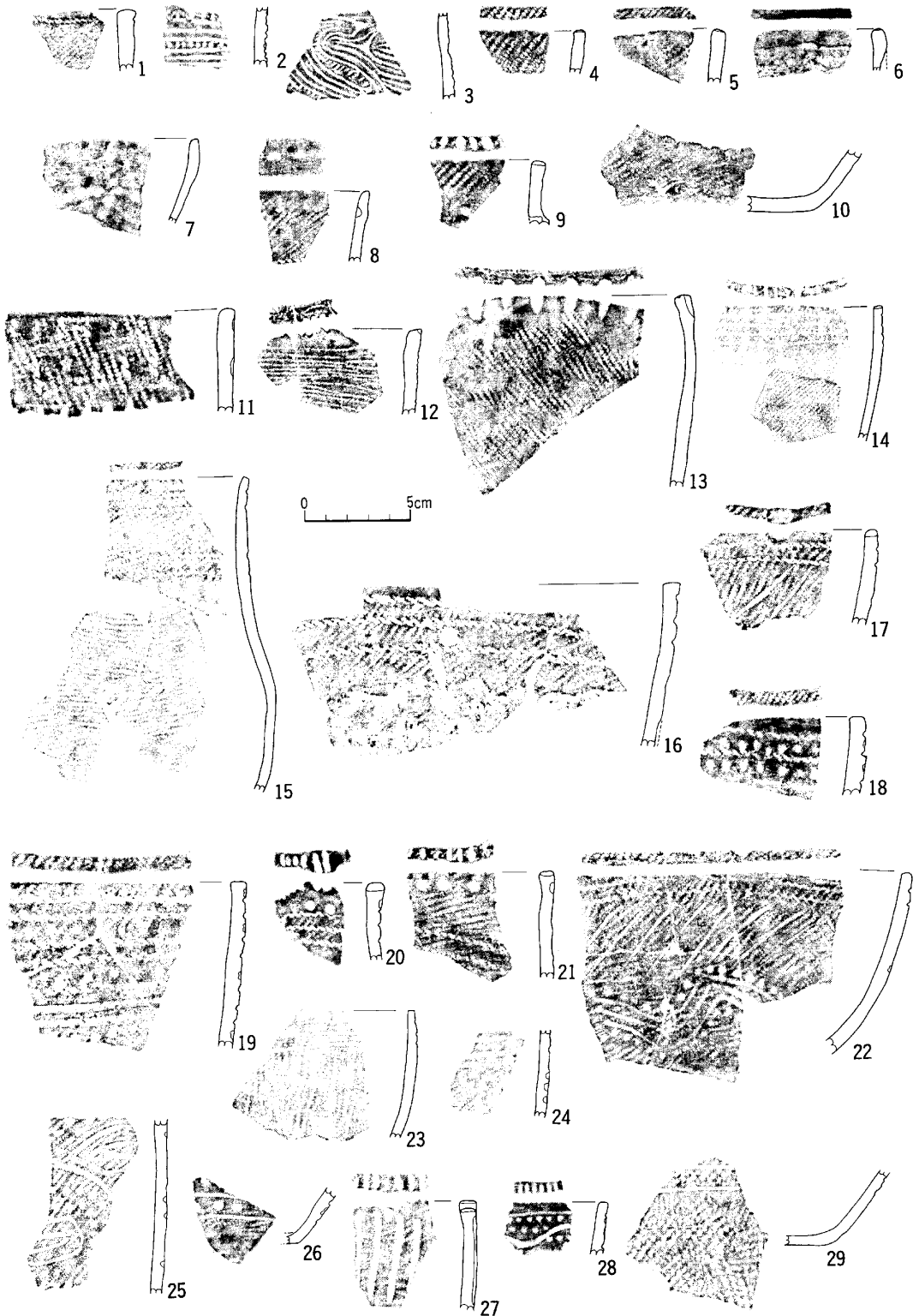
第113図 19号竪穴平面図

縄線文を施す。2は数本の沈線文間に刺突を施す。3は曲線文をモチーフとした大洞B系のものであろう。4、5は縄文が施される。6、7は無文。8は器面に縄線文、裏面に刺突が施される。9は裏面に斜めの突瘤文が加えられている。10は底部。11～29は埋土出土である。11は短縄文を施す。12、13は幣舞式。14～22は基本的に縄線文が施されるもので、18には縄端圧痕文が加わり19～21には円形の刺突文が施される。22の浅鉢には縄線文の他に斜め、波状の沈線と刺突文が施される。23～29には22に見られる沈線と刺突文が施される。第115図-1～14は晩期中葉であろう。1、5は口縁部下に円形刺突文が施された深鉢である。2は器壁がやや厚い。口縁は凹部があり、口唇部には斜め上方からの深い刺突が加えられ「×」字形の刻みがある。器面にも鋭い刺突が施される。3には沈線と刺突が施される。4は2と同じ施文方法であるが同一個体ではない。6～8には表面もしくは裏面に刺突が施される。9～11は縄端圧痕文が施される。12～14は縄文を施す。第116図-1～4は無文。5～14は晩期前葉であろう。5～8は斜め方向から突瘤文が施される。9～11は盛り上がりのある爪型文。12～14は底部。

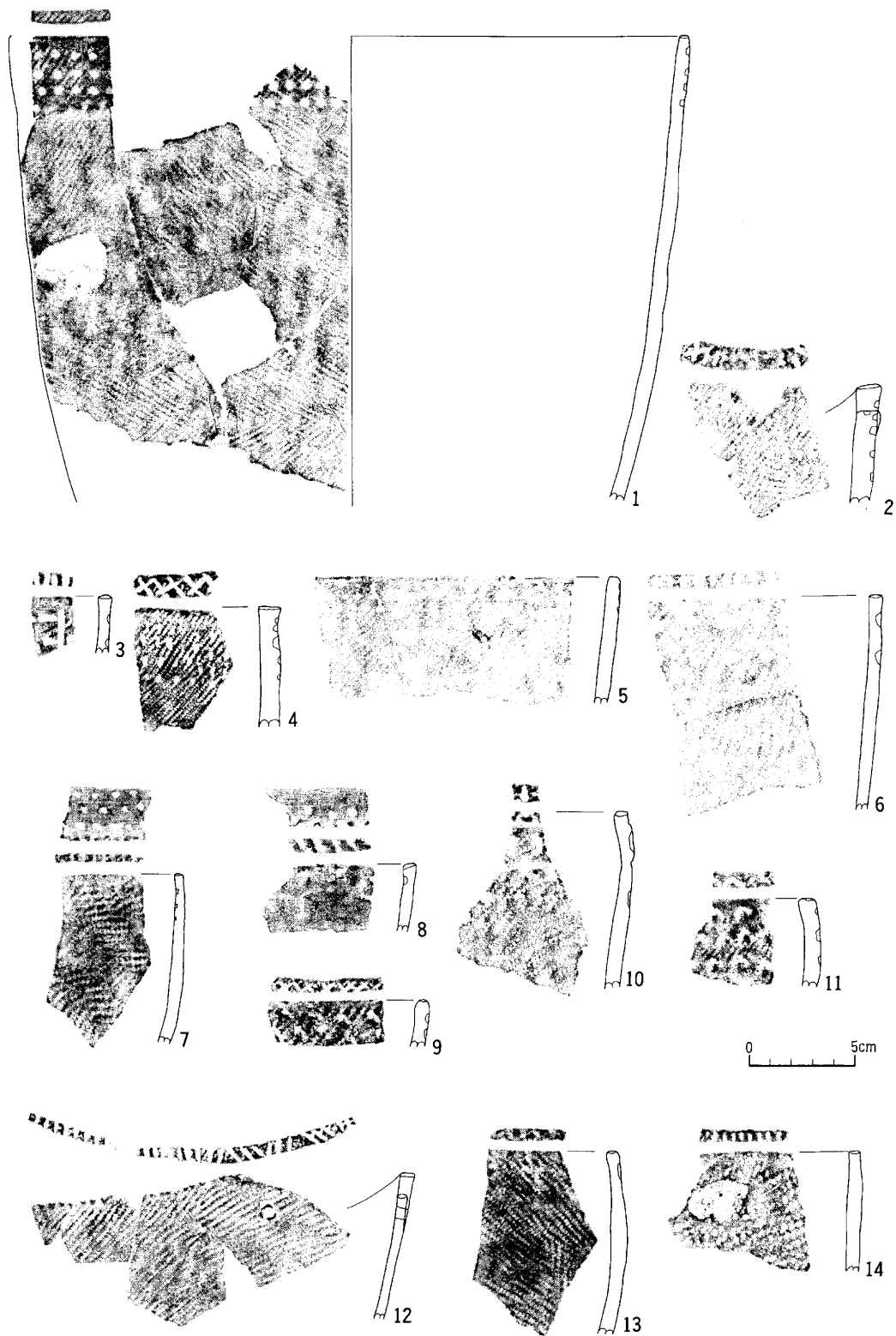
石器はすべて埋土から出土している。第117図-1～20は有茎石鏃。21は両面加工のナイフ。22は石錐。23～26は削器。27は片面加工の小型ナイフ。28は人形を呈した異形石器。29は削器。30はナイフであろう。この2点は玄武岩製。31は石斧。20の頁岩、29、30の玄武岩、31の泥岩を除きすべて黒曜石製。32は両側から穿孔された平玉。脆い石質であり泥岩製と思われる。

小 括

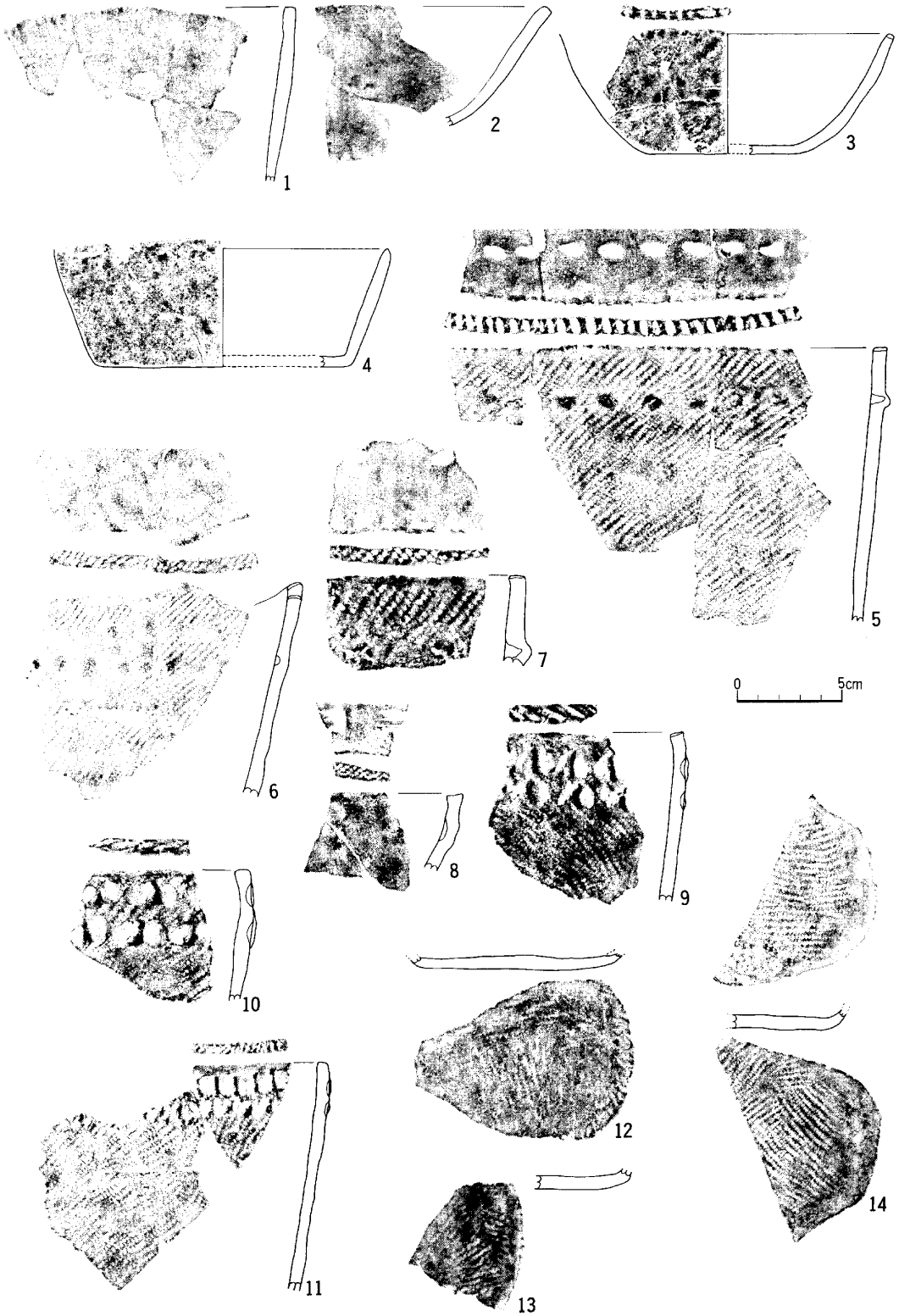
本竪穴は直径約3.7mの円形を呈する。時期は床面出土土器から縄文晩期中葉のものと思われる。



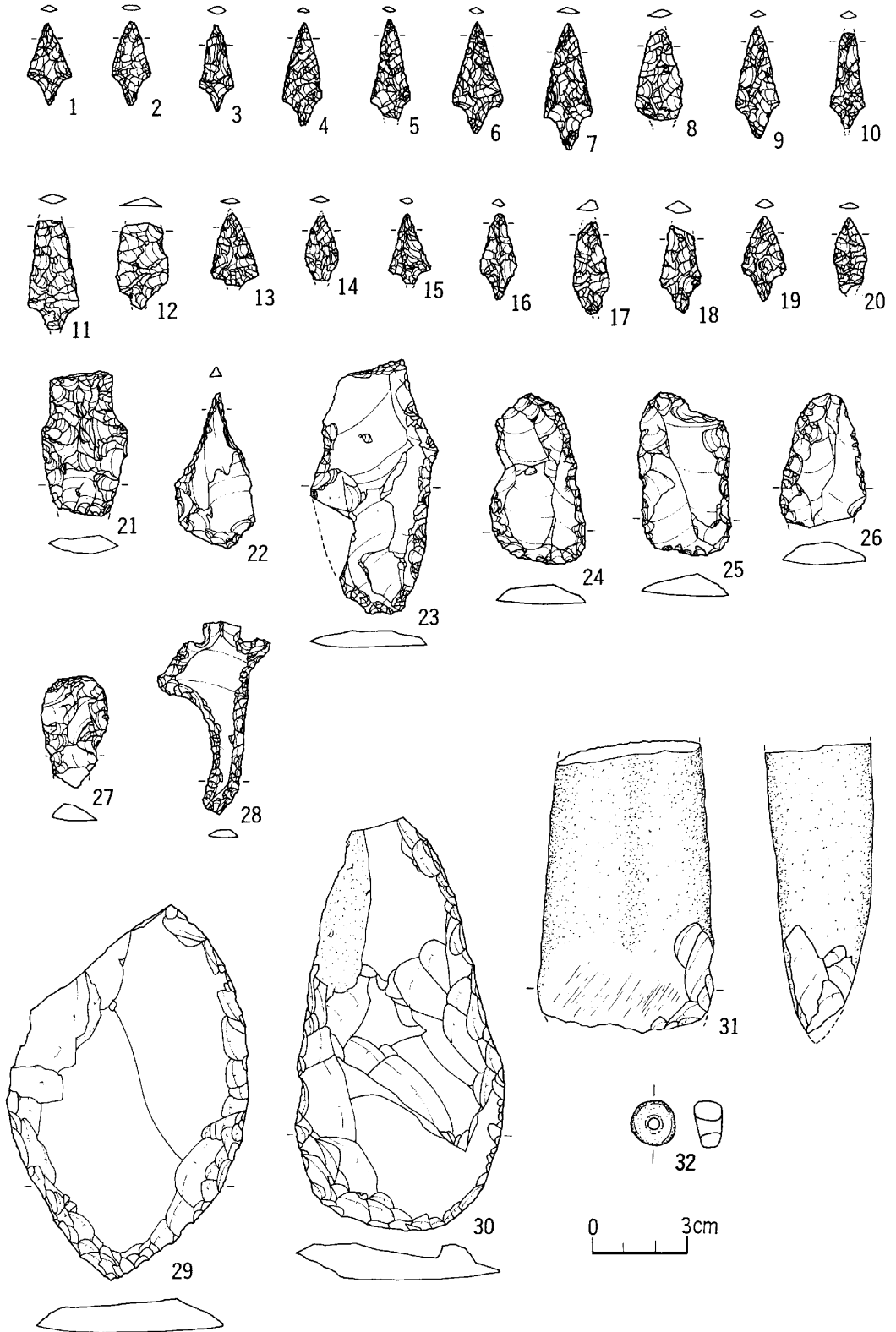
第114図 19号竪穴床面(1~10)・柱穴埋土(11~29)出土土器



第115图 19号竖穴埋土(1~14)出土土器



第116図 19号竖穴埋土(1~14)出土土器



第117图 19号竖穴埋土(1~31)出土石器

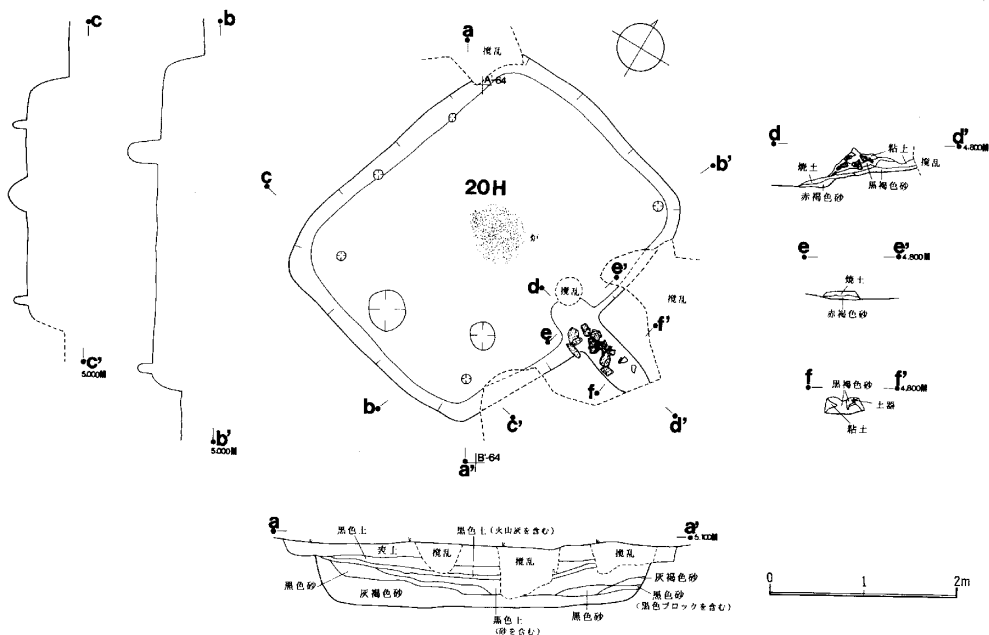
20号 竪穴

遺 構 (第118図、図版40-2)

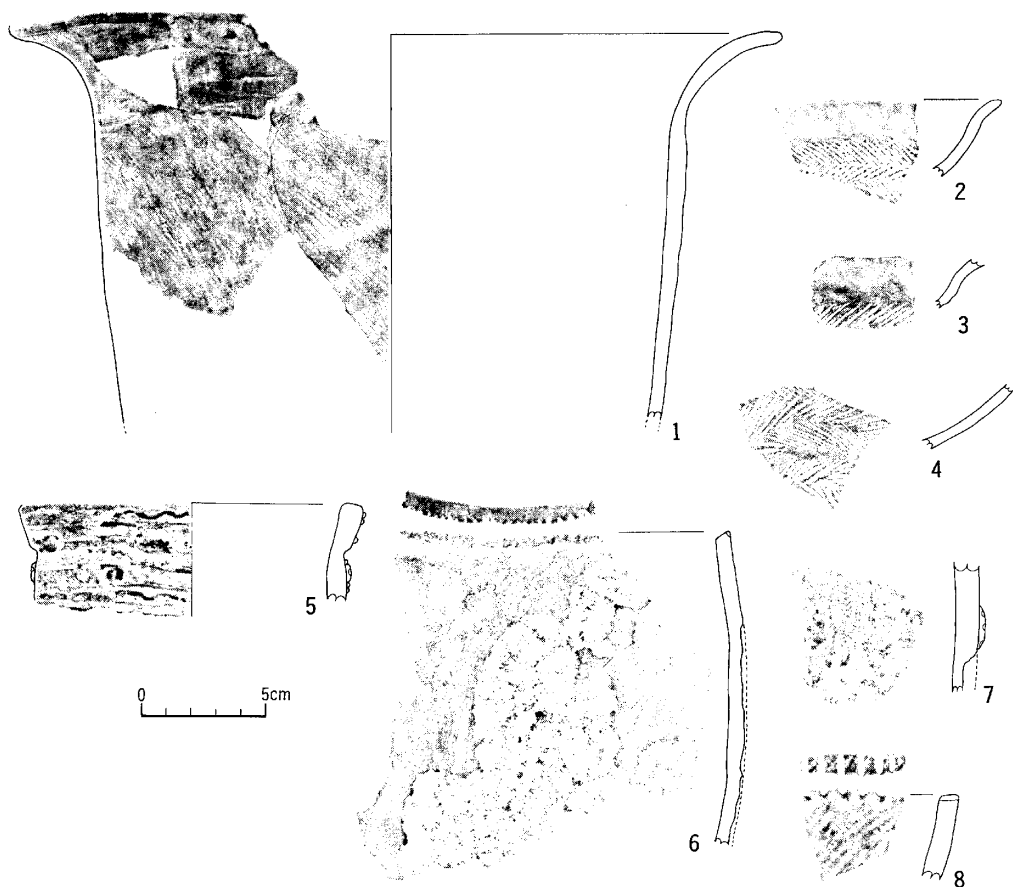
本竪穴は15号竪穴の北側約16m、B'63、64グリッドにある。表土下にはII層の茶褐色砂が堆積している。この茶褐色砂は粒子が細かくサラサラした土質を呈する。竪穴はこのII層を切り込んで構築されており、黒色土の落ち込みが観察された。黒色土には白色の樽前a 火山灰が混じり込んでいる。規模は長軸約3.1m、短軸約2.5mの方形を呈するもので南北がやや長い。壁高は確認面から約20cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。煙出口が破壊を受けているものの煙道の長さは約1mを測る。燃焼部で段をもち緩く外に伸びている。両袖負は認められず遺存は良くない。炉跡は中央部にある。主柱穴と思われるものは東壁側に直径約25cm、深さ約35cmのもの1本、南壁側に直径約40cm、深さ約20cmのものが1本ある。壁柱穴は東壁隅に2本、西壁隅に3本ある。いずれも直径約10cm、深さ約14~16cmである。

遺 物 (第119図)

第119図-1は口縁が大きく外反した無文の中型鉢形土器。胴中部に刷毛の調整痕があり、口縁部に篋の調整痕が粗くみられる。器面は二次的な火熱を受け赤変している。2~4は高杯。5はオホーツク文化ソーメン状貼付文。肥厚帯の下部には剝落しているが幅5mmの太めのソーメン文が巡る。6は後北C₂・D式。無文であるが口唇部の外側に刻みが施される。7は続縄文。8は縄文晩期中葉であろう。



第118図 20号竪穴平面図



第119図 20号竪穴埋土(1~8)出土土器

小 括

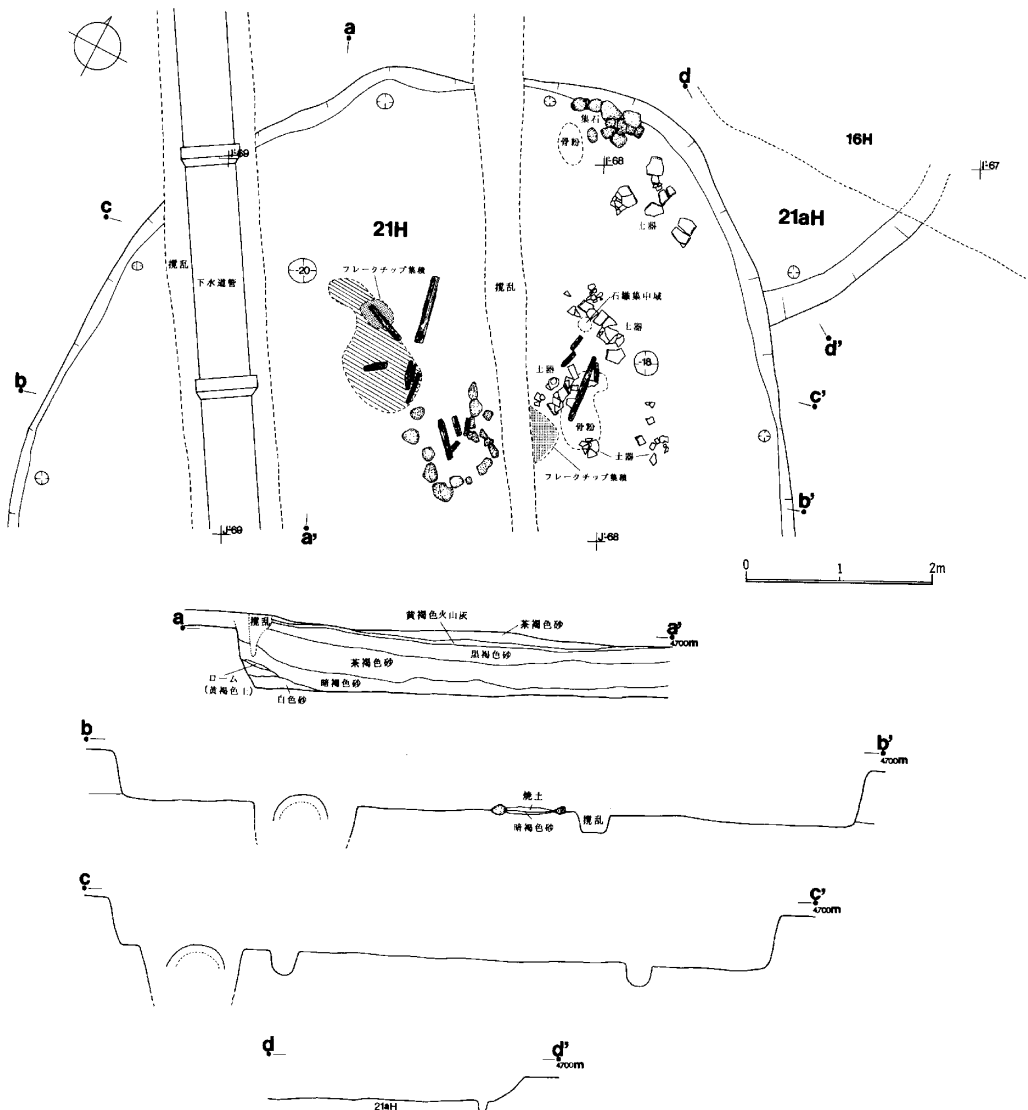
本竪穴は長軸3.1m、短軸2.5mの方形を呈する小型の竪穴である。カマドは東壁に構築されている。擦文期の竪穴であるが詳細な時期は不明である。

21 号 竪 穴

遺 構 (第120図、図版41-3)

本竪穴は16号竪穴の南側約1~2mに位置する。東側が発掘区域外にあたるため竪穴のほぼ半分は検出できなかった。J'68グリッドの表土を剝土すると黒褐色砂の落ち込みが確認された。この黒褐色砂はI'68グリッドにも及びかなり規模の大きい竪穴であることが予想できた。埋土を下げる段階で下水道管が竪穴を破壊していることが判明したため、まず下水道管の攪乱部分を最初に掘り切り、その土層断面から西壁の立上りの確認をおこなうことにした。西壁の立上りを検出できたためこれを追う様にして西壁と北壁の一部を検出した。この段階で円礫の集石

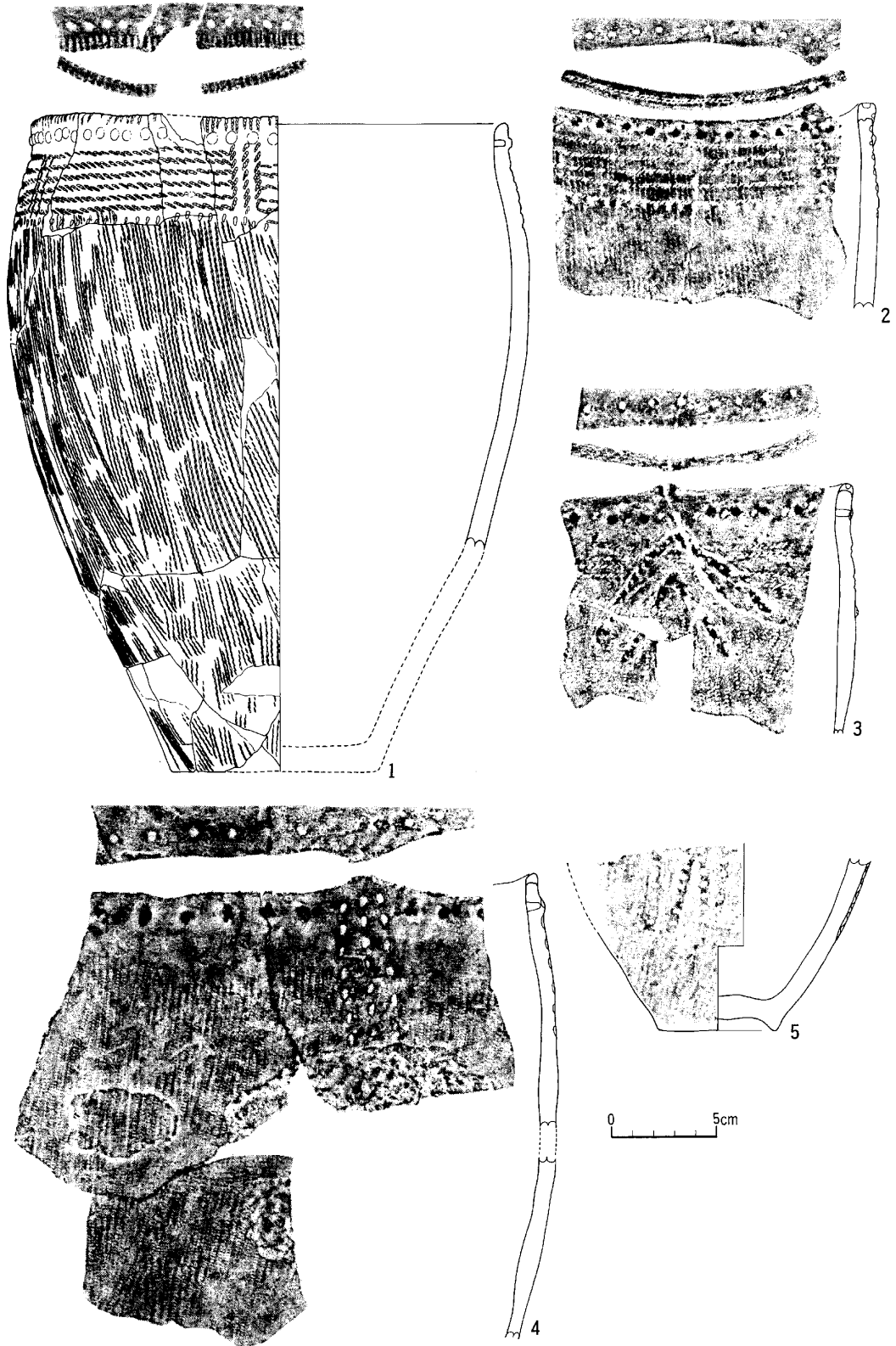
が認められた。集石は壁から床面にかけて密着しているためこの竪穴に伴うものと判断される。竪穴の規模は短軸約8mである。長軸は不明であるが形態は楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約65cmである。この竪穴は縄文前期末の押型文、中期のトコロ六類を主体とする黒色土の包含層上部を床面としている。したがってこの床面からは宇津内II a 式に混じって押型文、シュブノツナイ式等も出土している。床面には骨粉が集中する範囲があり、この上に炭化材が載り、周辺から土器が出土している。ほぼ中央部には円礫を用いた石囲み炉がある。周辺には炭化材が認められ火災住居と思われる。支柱穴、壁柱穴は当然のことに存在していたと思われるが、床面が黒色土層面にあるため、明確に検出できなかった。



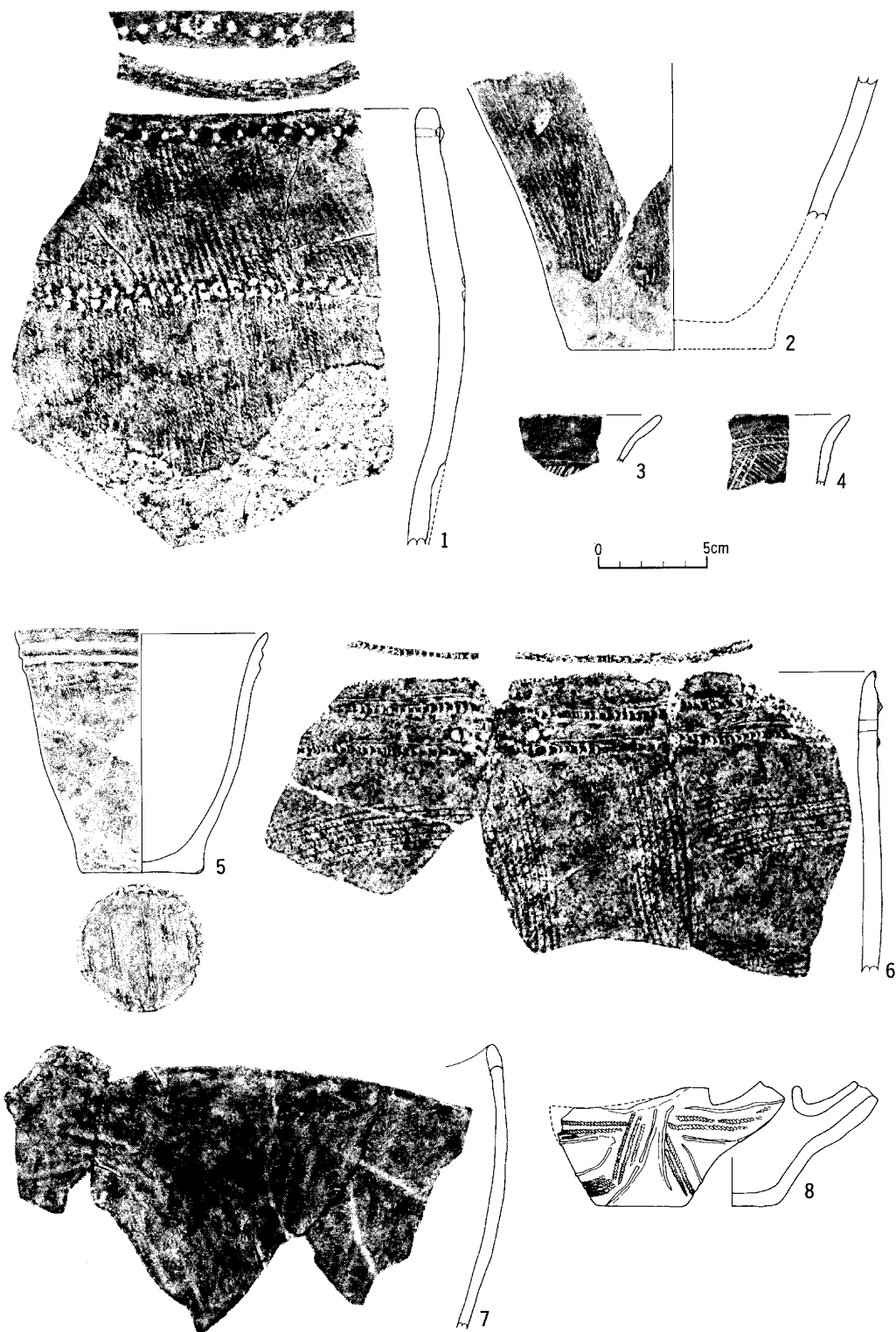
第120図 21号竪穴、21 a号竪穴平面図



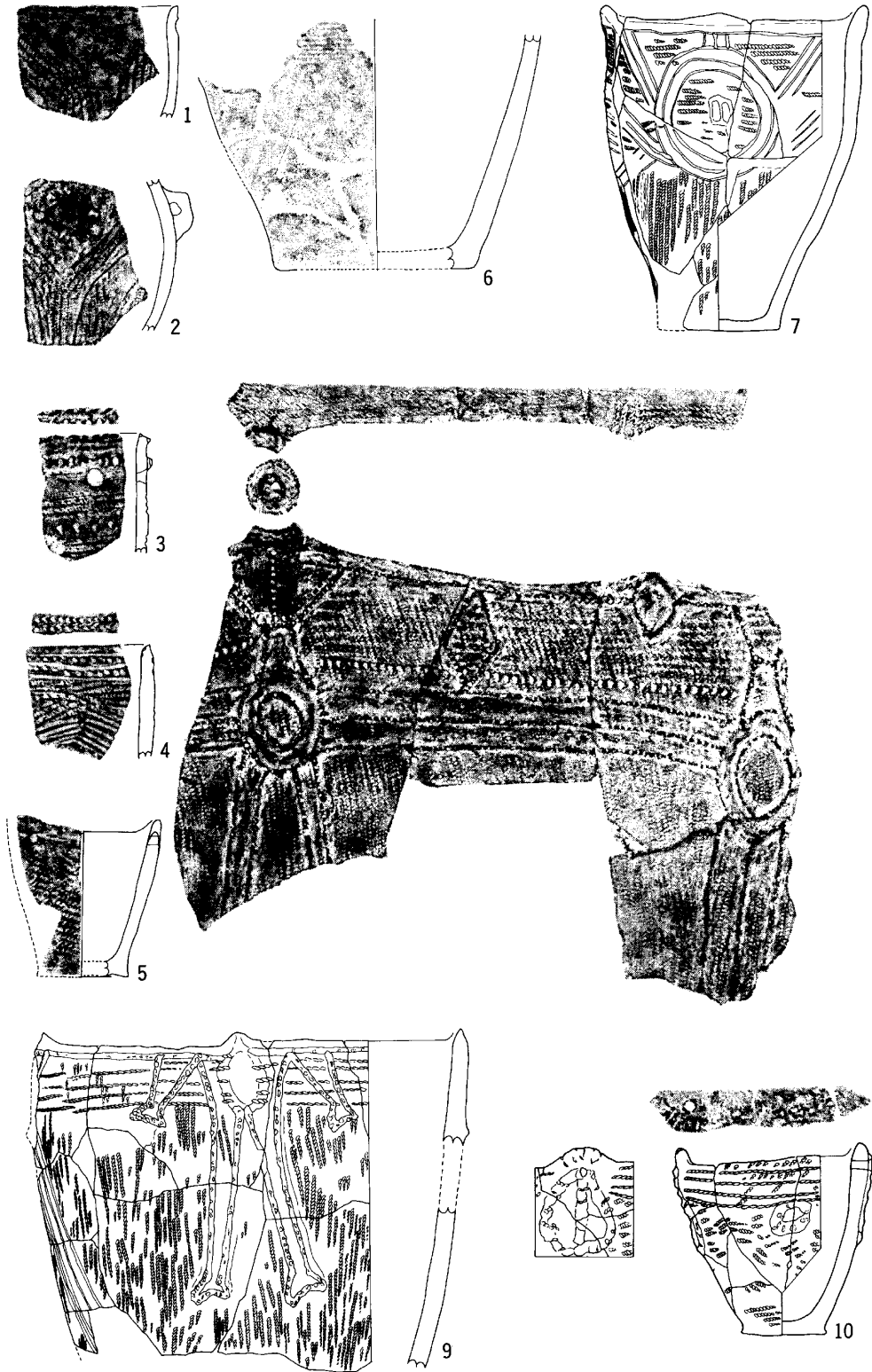
第121图 21号豎穴床面出土土器



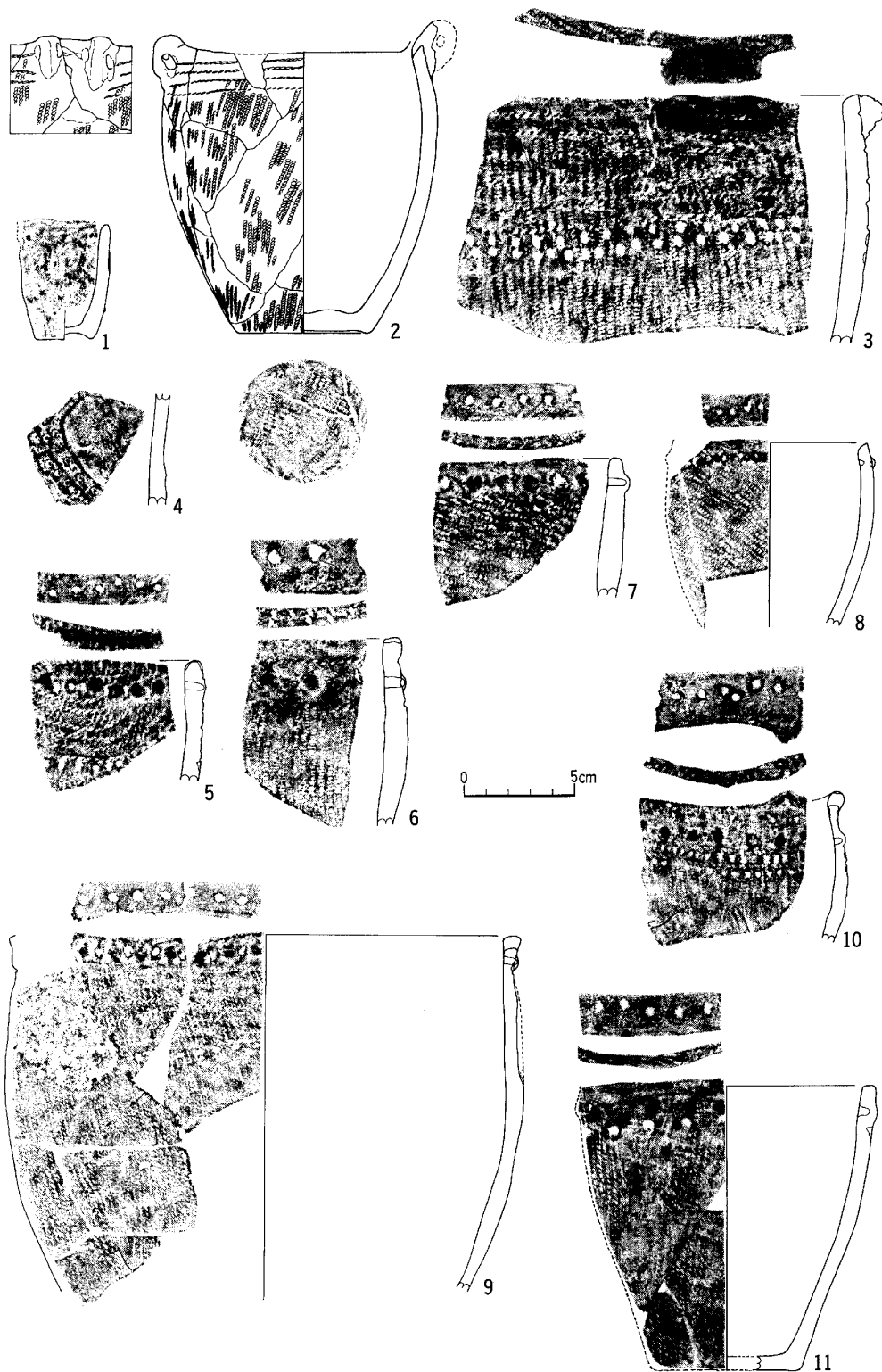
第122图 21号竖穴床面(1~5)出土土器



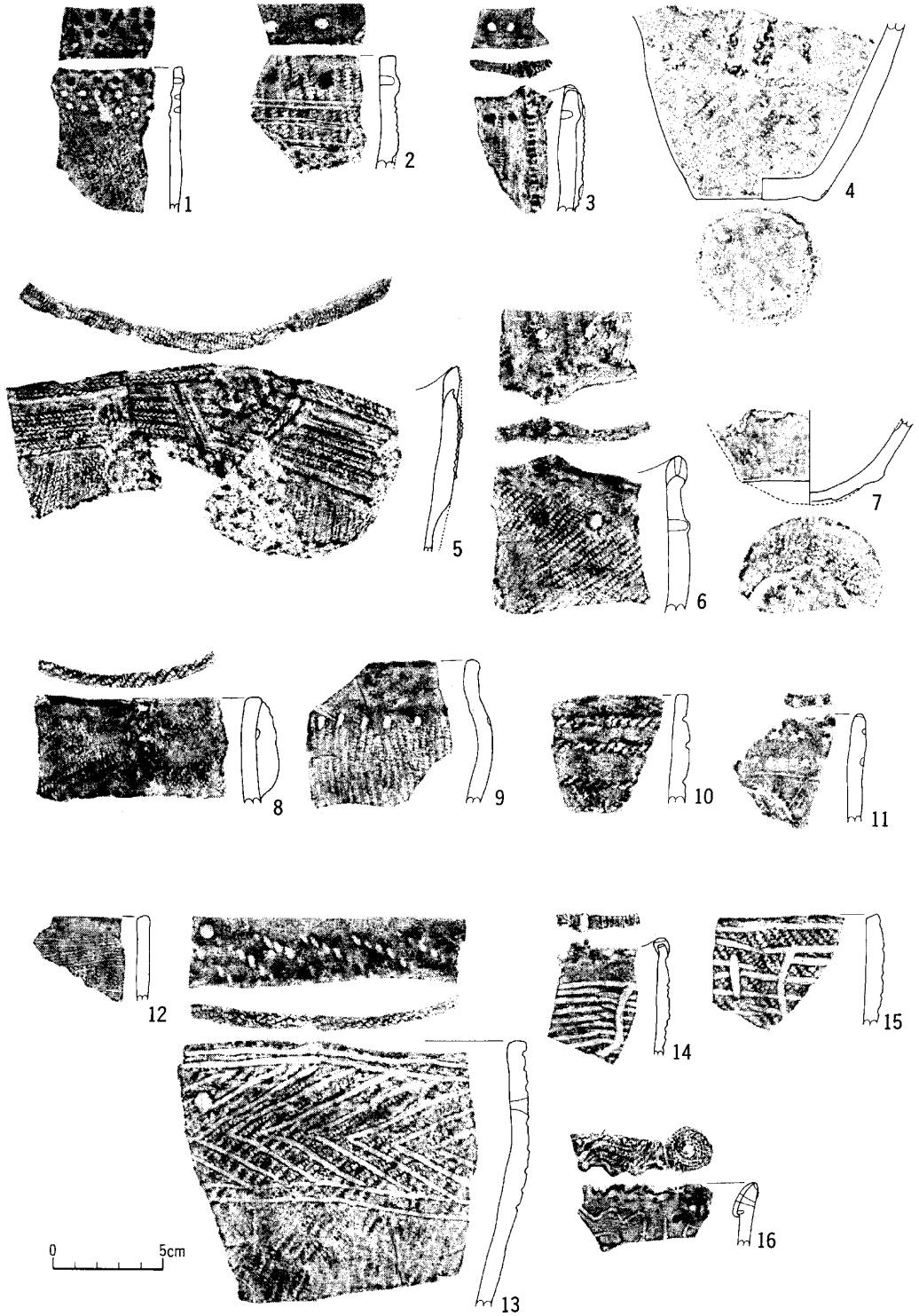
第123图 21号竖穴床面(1·2)·埋土(3~8)出土土器



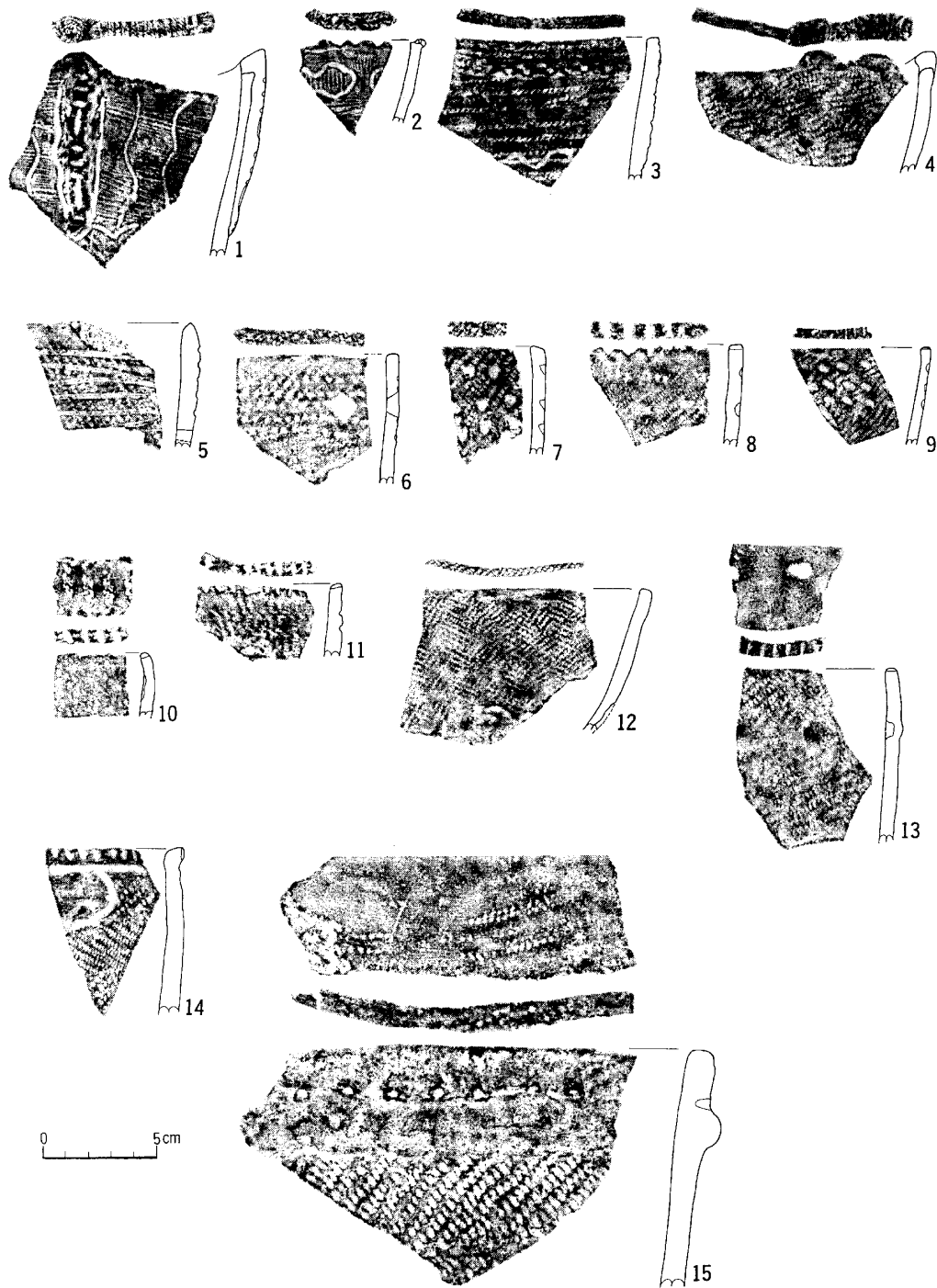
第124図 21号竪穴埋土(1~10)出土土器



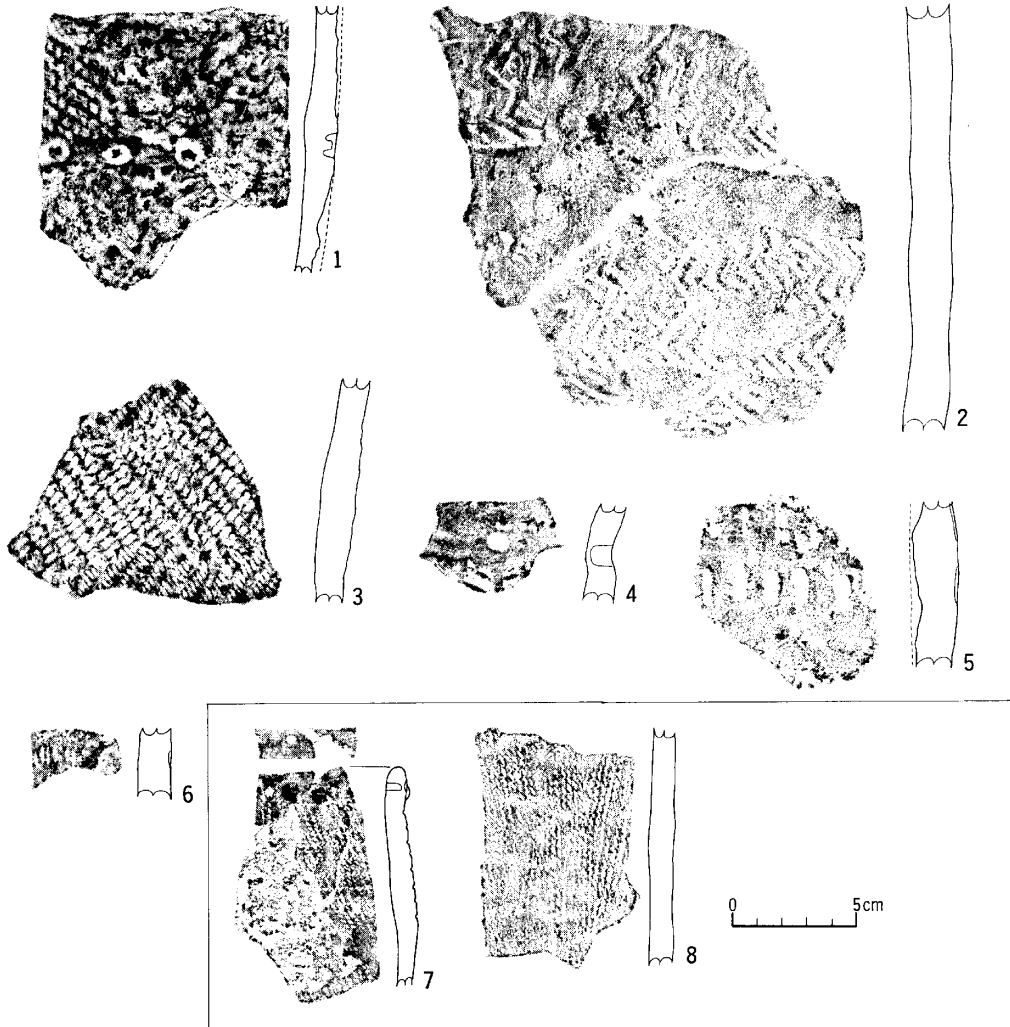
第125图 21号豎穴埋土(1~11)出土土器



第126図 21号竪穴埋土(1~16)出土土器



第127图 21号豎穴埋土(1~15)出土土器



第128図 21号竪穴埋土(1~6)、21a号竪穴埋土(7・8)出土土器

遺物(第121、122、123、124、125、126、127、128-1~6、129、130、131図、図版41-4、5、図版42-1~5)

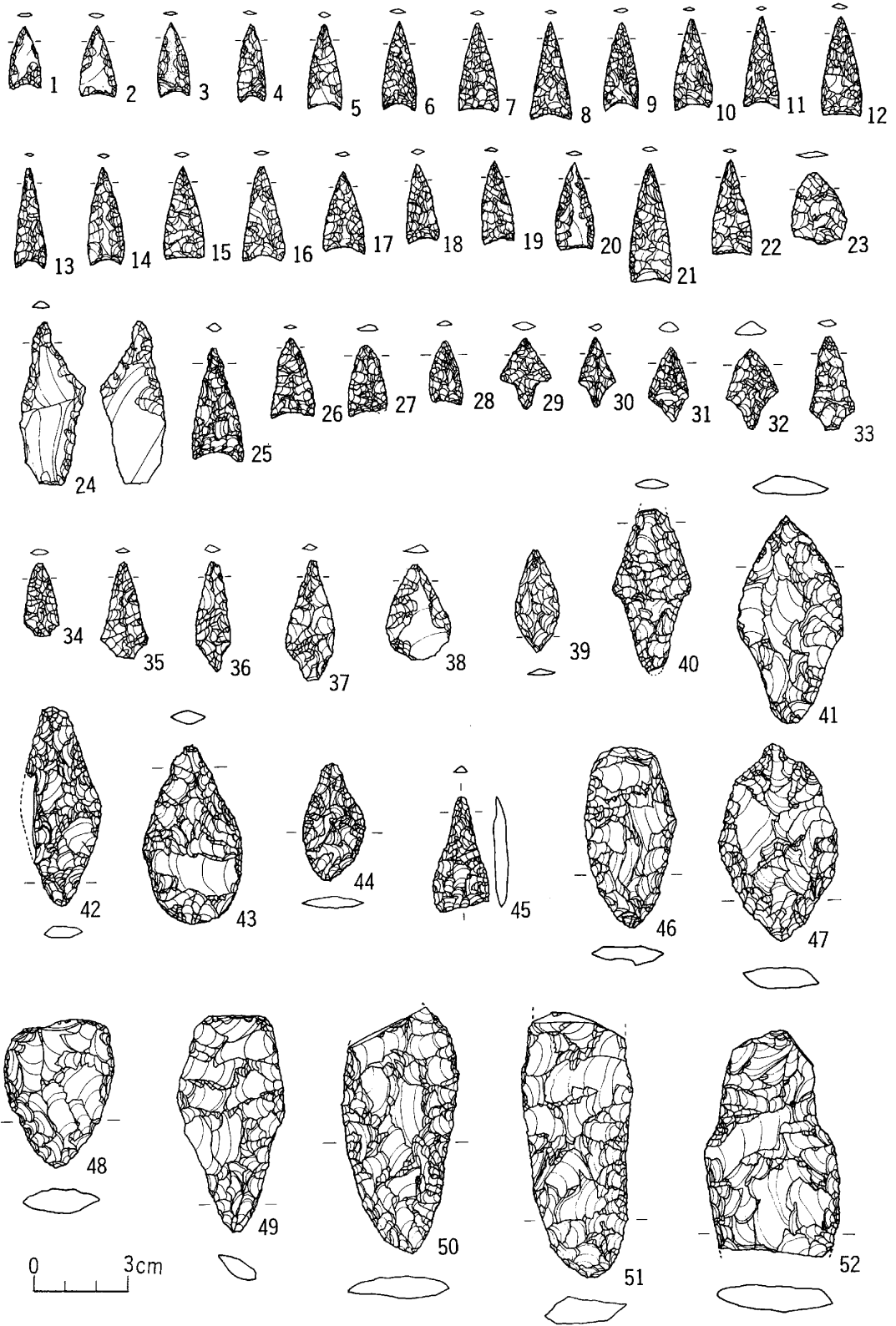
床面からは内側から突瘤が施された宇津内II a式が出土している。第121図-1は口径30cm、器高約50cmの大型土器である。縄線文下の2列の隆帯上は縄端圧痕文が施される。第122図-1、2は撚糸文を地文とする。1は口縁部に3本単位の撚糸を5個所縦方向に押捺する。3は「八」字形の隆帯が施される。4は小突起の下部から縦方向に3列の刺突が施される。5は底部。第123図-1は突瘤の間と胴部に円形の刺突が施される。2は底部。埋土からは3の擦文期の高杯。4、5の小型鉢形土器がある。5は器面を刷毛により調整している。底部は板目痕がのこり、外周部に不規則な刻みがみられる。6、8は後北C₂・D式。7は口縁部が内湾し山形の小突起

をもつ。器面は無文で煮こぼれ汁が付着する。北大式であろう。第124図-1は三角形の列点文が施された後北C₂・D式。2は帯縄文上に細い沈線を密に施し刺突を加えている。3は小波状の口縁を呈し、下部に浅い沈線が施される。2、3は後北系であろう。4は胎土にやや粗目の砂粒が含まれ胴部は貝殻条痕文が横走する。5は後北C₁式。6～8は宇津内II b式。9は隆帯を人型に意匠している。第125図-1～4は宇津内II b式。2は実測図左側に2個の吊り耳、右側に1個の吊り耳を持つ。4は同心円文に円形刺突が施される。5～11は宇津内II a式。11は突瘤の下にやや深めの円形刺突が施される。第126図-1～4は宇津内II a式。1は内側から1段の突瘤、外側からは2段の突瘤が加えられる。2は半截状施文具により沈線が施される。3は縦の隆帯上に刻みが施される。4は底部に円形刺突文が×字形に施される。5は下田ノ沢2式。6～13は続縄文前葉であろう。6は口唇部に小突起をもつ。7は有段の丸底を呈する。8の器形は吊り耳付近からやや膨らむようである。9は8よりも胴部が張り出し、無文帯の下部に縄端圧痕文が施される。10の胎土は砂粒を含み、晩期中葉よりは続縄文的である。11は口縁下部に2段の角形の刺突が施されその下部は鋸歯状の浅い沈線が施される。12は半截状施文具により3列の浅い沈線が施される。13は2列の横走沈線文間に矢羽根状の沈線が連続する緑ヶ岡式。14～16は幣舞式。第127図-1～4は幣舞式。5は口唇部が尖り浅い沈線が6状施される。6～8は刺突、9は縄端圧痕文が施される。10は裏面、11は表面に縄線文が施される。12は縄文。13は晩期前葉の斜めの突瘤文。14は縄文後期鮫潤式。15は口縁下に1状の隆帯が巡りその上部に円形刺突が施される。縄文中期北筒式系であろう。第128図-1は胎土に繊維を含む縄文中期トコロ六類。3は繊維を混入しないトコロ五類であろう。2は縄文前期末の押型文。4には円形刺突が加わりその下部に櫛目がみられる。5、6も櫛目文である。

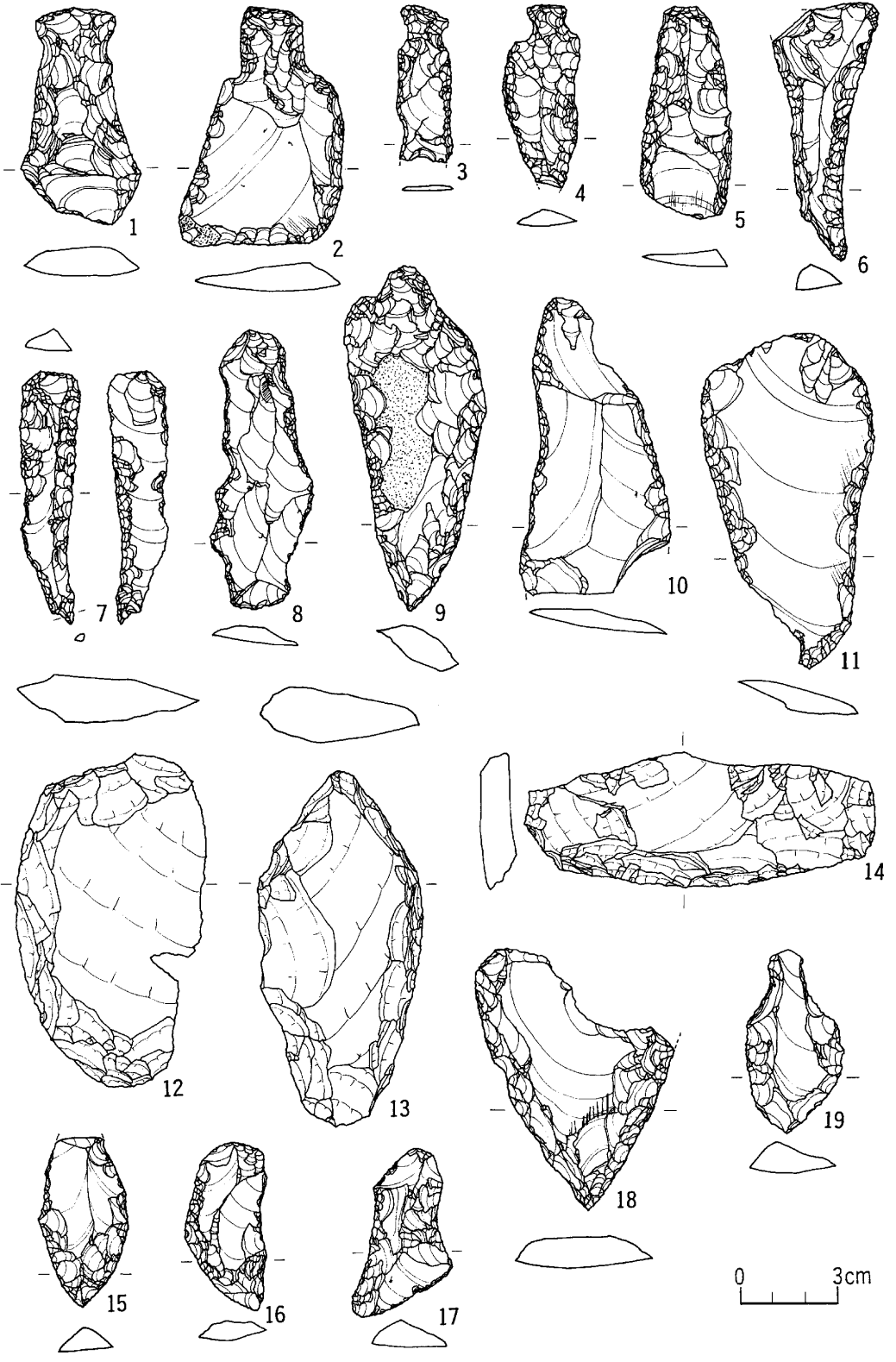
石器は床面から第129図-1～23の無茎石鏃。24の石錐がある。埋土からは25～28の無茎石鏃。29～39の有茎石鏃。40、41の石槍。42～52の両面加工ナイフがある。39の玄武岩を除きすべて黒曜石製である。第130図-1は頭頂部が張り出した両面加工ナイフ。2～4は石匙。5～11は大型の縦長剝片を利用した側削器。12～14は玄武岩製のナイフ。15～19は削器。12～1を除き黒曜石製である。第131図-1、2は削器。3～8は搔器。9は棒状原石。10は分銅型を呈した安山岩製の打製石斧。11は安山岩製の片刃磨製石斧。12は軽石製で表裏面に刻線状の使用痕がある。13は動物骨を鋭く加工している。

小 括

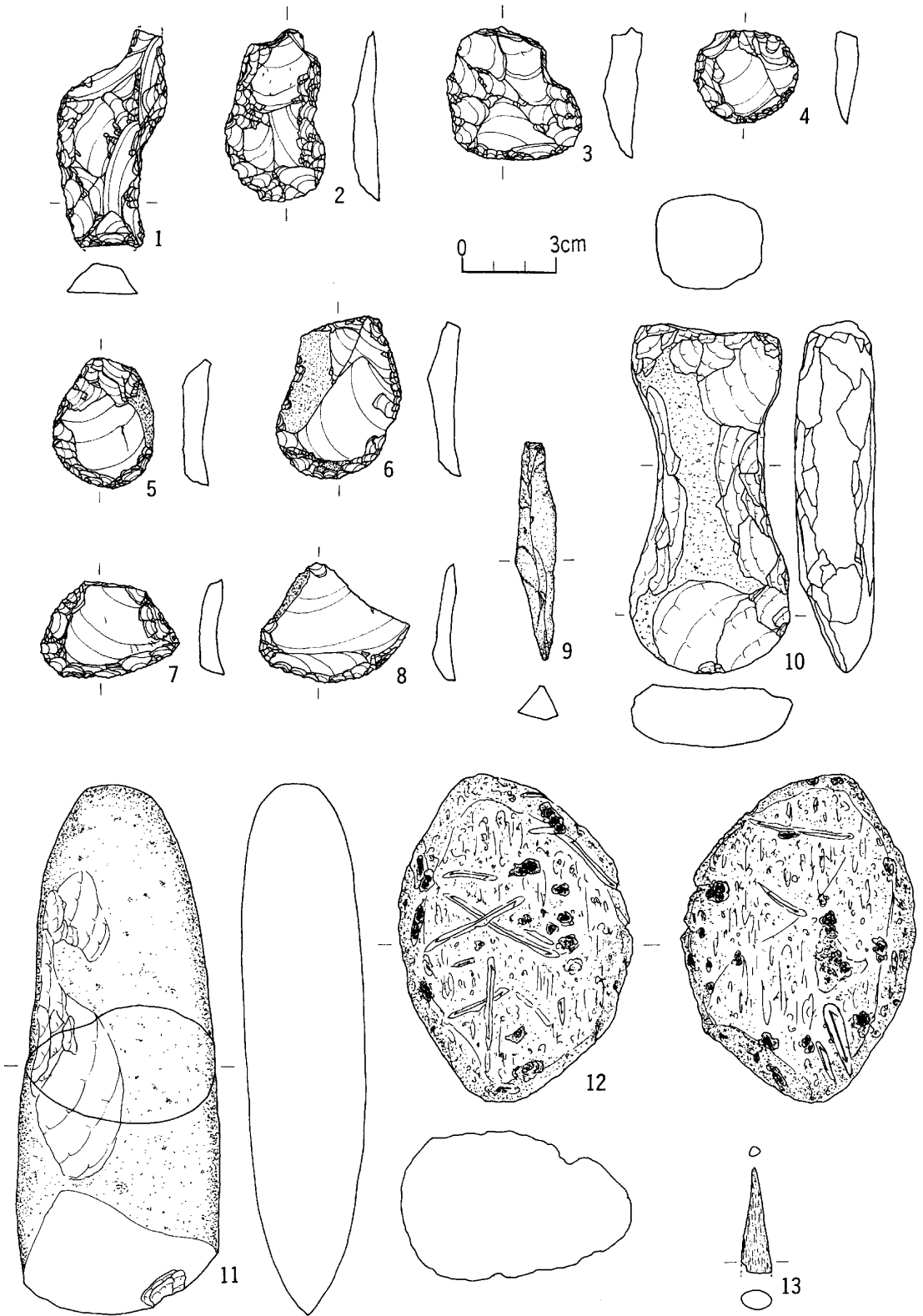
本竪穴の約2分の1が発掘区域外にあるため全体の規模は不明であるが大型の楕円形を呈した竪穴と思われる。時期は続縄文宇津内II a式である。



第129图 21号竖穴床面(1~24)·埋土(25~52)出土石器



第130图 21号竖穴埋土(1~19)出土石器



第131図 21号竪穴埋土(1~12)出土石器・埋土(13)出土骨角器

21a 号 竪 穴

遺 構 (第120図)

本竪穴は21号竪穴の北側にある。竪穴のほぼ全部が21号竪穴により切られているため検出できたのは東壁の約2mである。壁高は確認面から約25cmを測る。壁柱穴は1本検出した。直径約10cm、深さ約8cm。時期・規模・形態は全く不明である。

遺 物 (第128図-7・8)

7、8とも撚糸を地文とした宇津内II a 式で、7は縄線文と突瘤が施される。埋土出土である。

22 号 竪 穴

遺 構 (第132図、図版42-6)

本竪穴は21号竪穴の西側約1.3mに位置する。北壁側が下水管の埋設により破壊を受けているものの直径約5mの方形を呈すると判断される。壁高は確認面から約35cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。袖部は小角礫と黄褐色粘土を用いているが遺存は良くない。煙道はほぼ平坦で、煙道口で斜めに立ち上がる。天井部の下には粘性を有した暗赤褐色土が堆積し骨粉をわずかに含んでいる。炭化材が南西壁際に検出された。火災住居と思われる。炉は竪穴の中央部にある。

主柱穴は4本ある。直径約20～30cm。深さ約20～38cmである。壁柱穴は西壁の6本がほぼ等間隔に配置されている。直径約15cm、深さ約15cmである。

遺 物 (第133、134、135図)

遺物はすべて埋土出土である。第133図-1～7は擦文土器。1～3は大型鉢土器。6は高杯と7は脚部である。8は口縁部に縦の沈線が施されるもので後北C₂末か北大I式であろう。9は後北C₂式。10は後北C₁式。11は宇津内II b 式。12、13は宇津内II a 式。14は続縄文前葉であろう。15～20は縄文晩期幣舞式。21、22は晩期中葉であろう。21は口唇部に小突起をもつ。横走沈線の上にS字状の沈線が施される。拓本図の縦にある太い文様は移植ゴテによる傷である。23は口縁直下に細い円形施文具を下方から刺突し、胴部は格子目状の沈線を雑に施す。第134図-1～16は晩期中葉であろう。1は縦の沈線と縄線文が施される。2、3は刺突、4は短縄文を押捺する。5は口縁下に3個の刺突とその下部に縄端圧痕文が施される。6は口唇部の外側に刻みがあり、口縁直下に爪状の刺突が施される。7、8も爪状の文様である。盛り上がりは認められない。9は裏面に刺突が施される。10は縄端圧痕、11は短縄文が施される。12～14は縄文。15、16は無文。17～22は同前葉であろう。17～20は斜め方向から突瘤が施される。21、22

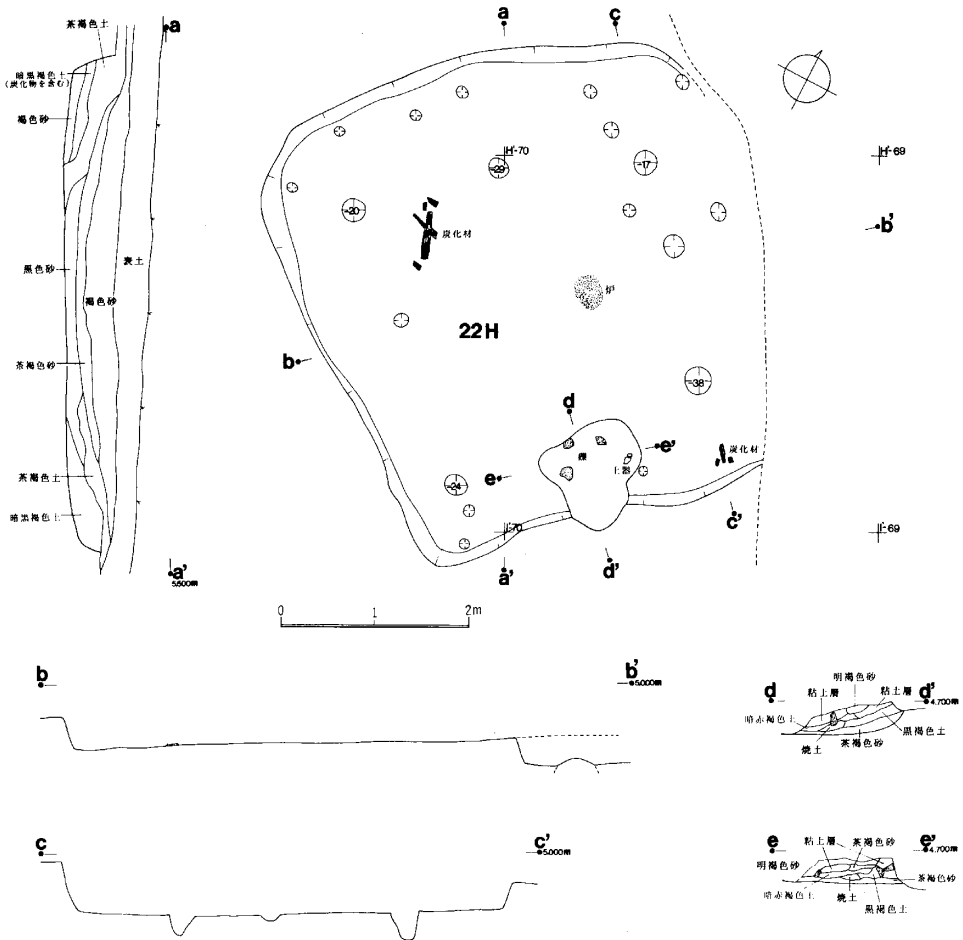
常呂川河口遺跡

は盛り上がりのある爪形文であるが、21は片方から抉るようにしてできた盛り上がりで22とは施文方法が異なる。23は縄文後期であろう。

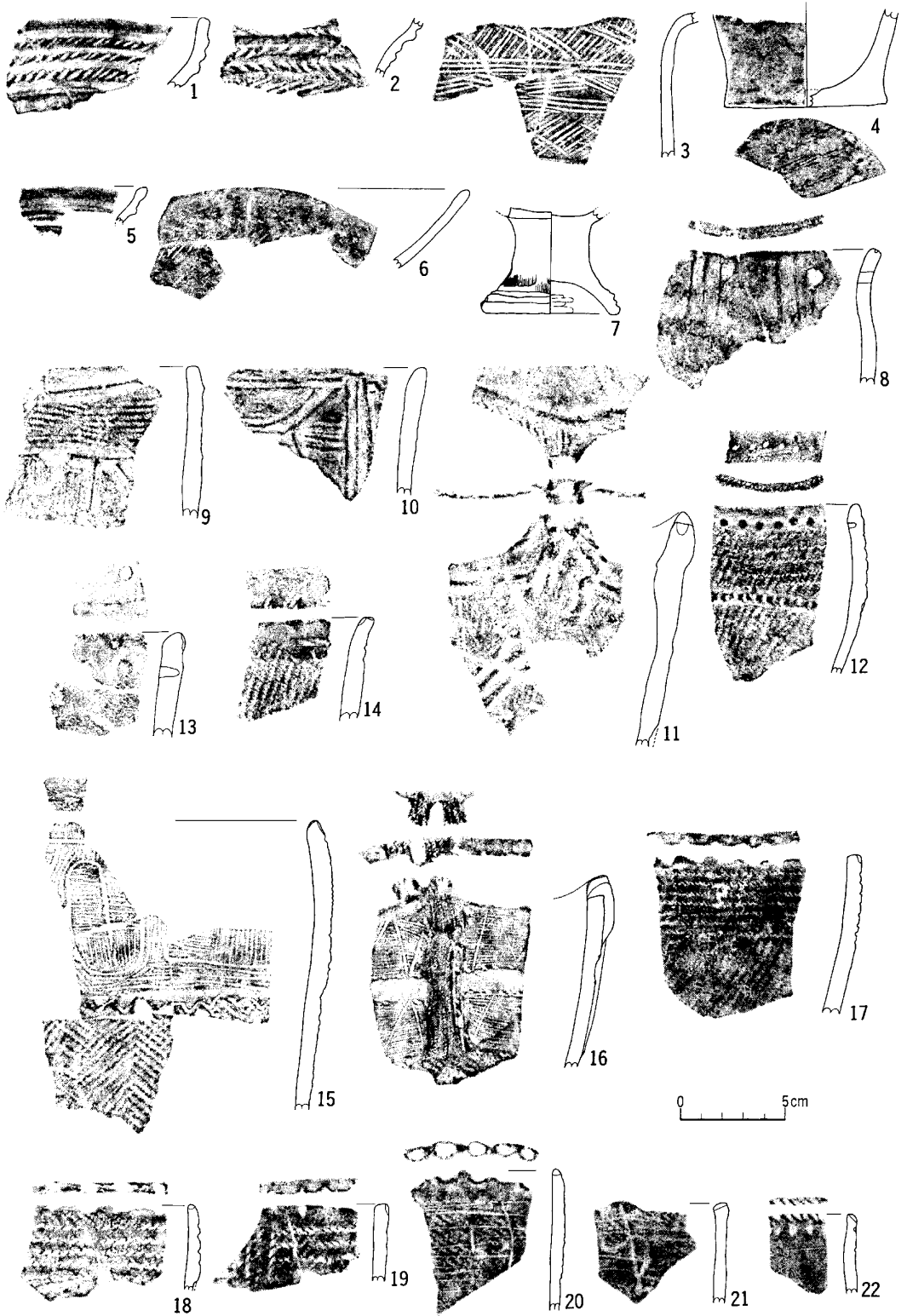
石器は第135図-1～8がある。1は石槍の未製品であろう。基部、先端の右側縁部が加工される。2～4は削器。5～7は搔器。8は刃部が決失している安山岩製の磨製石斧。表面に使用痕が残る。

小 括

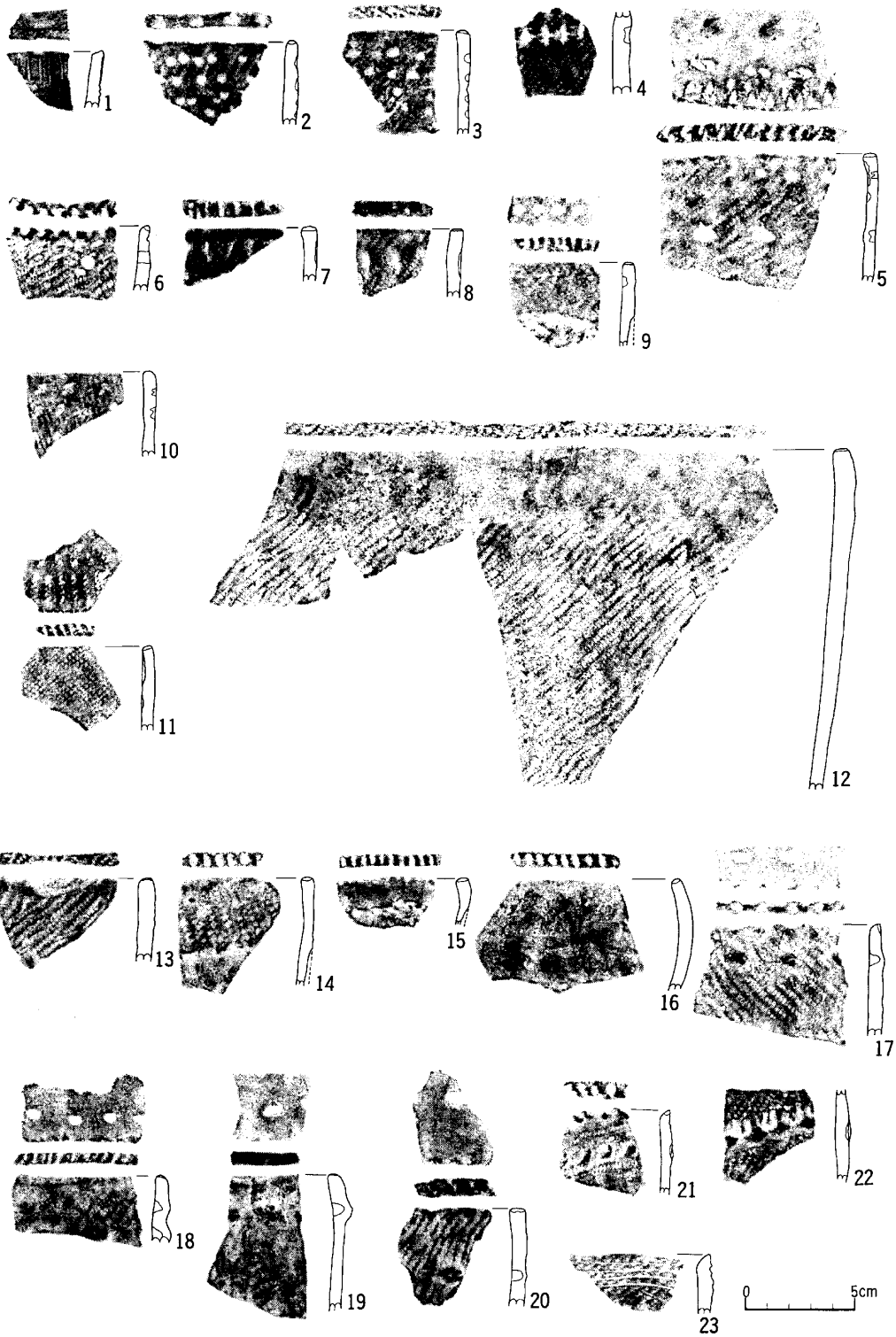
本竪穴の北壁側が下水管により攪乱を受けているものの規模は直径約5mの方形を呈する。カマドは東壁中央部に構築されている。火災を受けた擦文期の竪穴であるが詳細な時期は不明である。



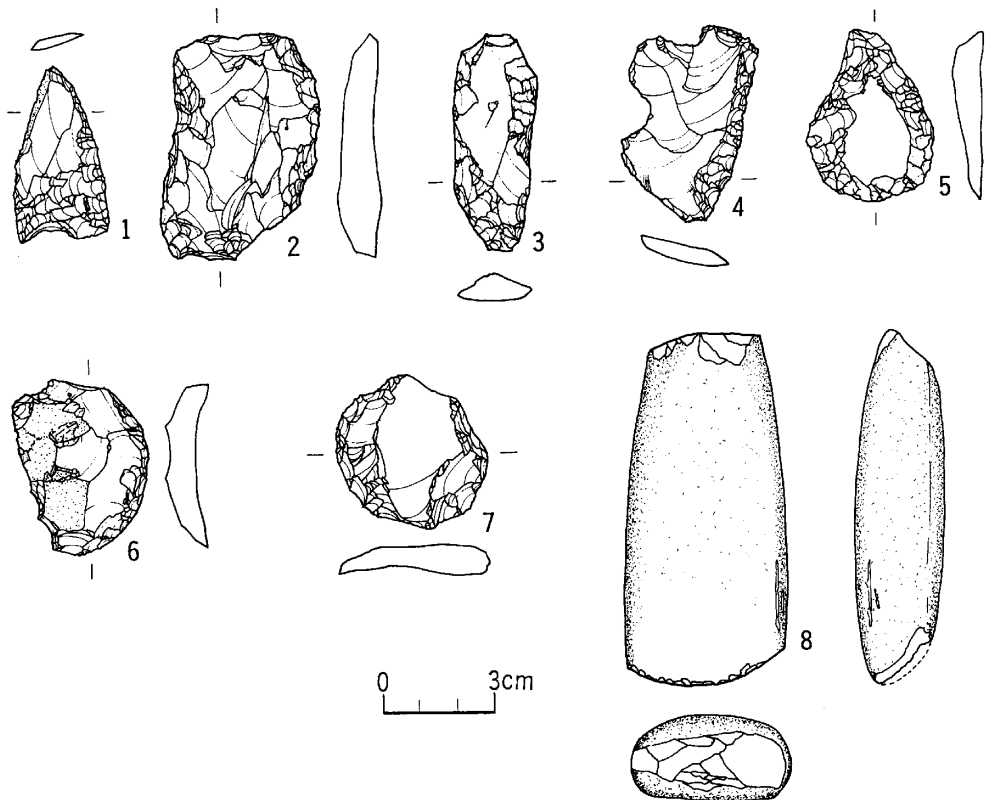
第132図 22号竪穴平面図



第133图 22号豎穴埋土(1~22)出土土器



第134図 22号竪穴埋土(1~23)出土土器

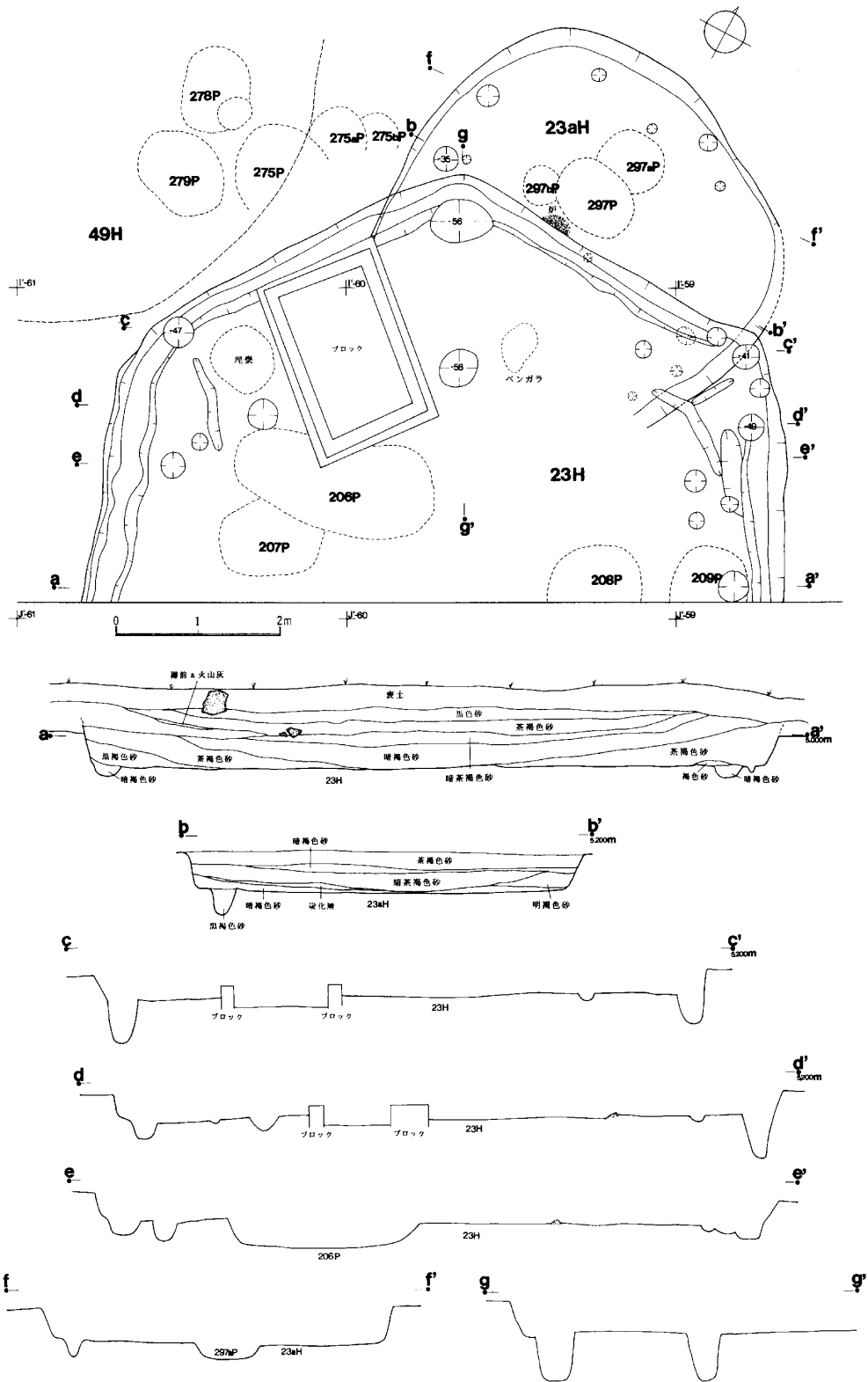


第135図 22号竪穴埋土(1~8)出土石器

23号竪穴

遺構 (第136図、図版43-1)

本竪穴はJ'58、59、60グリッドにある。東側が発掘調査区域外にあるため検出できたのは全体の3分の1程度である。II層の茶褐色砂を剝土し竪穴の落ち込みを確認し、下層を掘り進める段階でJ'60グリッドから続縄文字津内II a 式の埋甕が出土した。埋甕の検出後、南壁から西壁の検出を行いオホーツク文化独特の角形を呈するプランであることが明らかになった。本竪穴の規模は短軸8.5mを呈する。長軸は不明であるが全体の形状から推定してさほど大きくないであろう。14号、16号竪穴に近い寸詰まりの形態になると判断される。壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは約25~30cm。周溝は幅約5~15cm。深さ約8~10cmでほぼ全周する。北壁側ではさらに内側に幅約15cm、深さ約10cmの周溝があり本竪穴は重複していると思われる。貼床は認められない。支柱穴は長軸上に2本、西壁隅に1本、北壁隅に1本検出した。いずれも直径約35~50cm、深さ約40~58cmである。壁柱穴は周溝の周辺にある。特に規則性はなく直径約20~25



第136図 23号竪穴、23a号竪穴平面図

cm、深さ約15～24cmである。

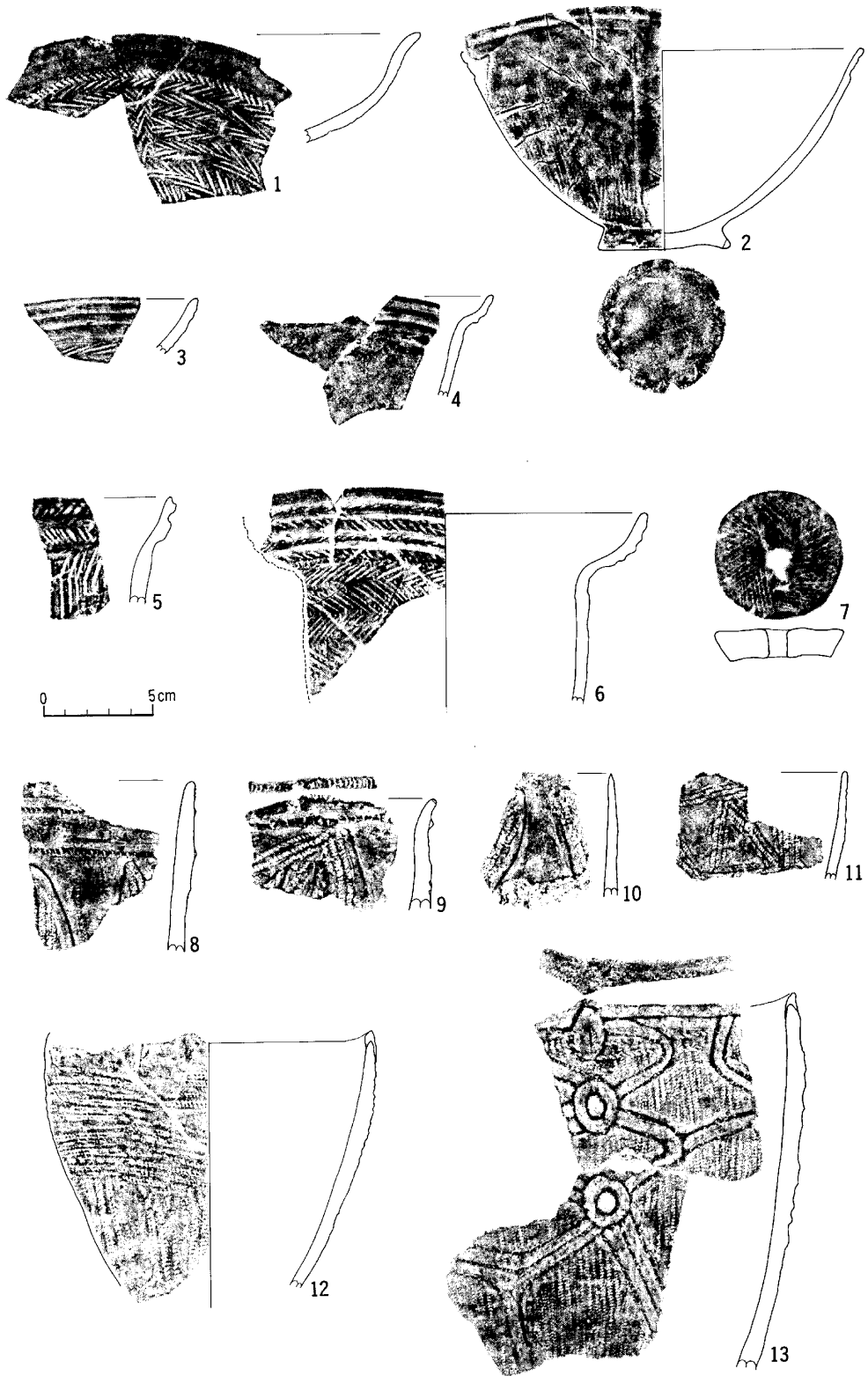
遺物 (第137、138、139、140、141図、図版43-2)

本竪穴に伴う遺物はなく全て埋土から出土している。第137図-1～7は擦文期である。1、3は高杯。2は脚の低い杯である。器形は胴部がやや丸みをもって立ち上がる。器面は刷毛により調整され、底部には7個の刻みが施される。4は器面を刷毛により調整された小型鉢形土器。5は大型鉢形土器。6は矢羽根状の沈線を数段にわたって施文した中型鉢形土器。7は紡錘車。表面は細い沈線が雑に施され、側面上部にも刻みがある。裏面に残る粘土のつなぎ痕を観察すると、製作はまず円盤状の粘土を作りその後に縁周部を貼付している。重量55g。8～11は後北C₂・D式。12は後北C₁式。13は宇津内II b式。第138図-1は後北C₁式。2、3は宇津内II b式。4～9は宇津内II a式。9は撚糸の上に円形刺突を全面に施すもので底部は丸底である。10は口縁部下の無文帯に半截状の施文具を用いた横走沈線とその間に山形文を施す。続縄文前葉と思われる。第139図-1～8は沈線文を主体とした土器。続縄文前葉であろう。1は頸部下に数状の沈線文が施されるもので壺に近い器形を呈する。2はボタン状の貼付文があり沈線が弧状に施される。3は口縁部に5～6本の横走沈線があり、口唇部に付けられた小突起の下部では横走沈線上に波状沈線が施される。4には弧状の沈線、円形刺突もみられる。5は丸底を呈したこの土器の底部と思われる。3～5の内外面は赤彩色される。晩期末から続縄文前葉のものであろう。6は口縁部がわずかに外反する。5状の横走沈線と山形沈線が施され、山形沈線に沿って刺突が加わる。7は横走沈線、8は太めの沈線である。2本の沈線間に弧状の沈線が施される。9は幅広の肥厚帯に縄線文を施すが中央部に無文帯をもつ緑ヶ岡式。10～14は幣舞式。15～24は晩期中葉であろう。15～17は太めの縄線を用い15は縦、17は山形状の沈線が施される。18～23は刺突文が施されるもので19～21は下方から突き上げられている。22は無文帯部に爪状の刺突が施される。23も爪状の刺突である。24の裏面に縄線文が施される。第140図-1、2は晩期中葉であろう。3～9は同前葉であろう。3～5は内側から斜めに突瘤が施されるが、5は口縁部が幅広い無文帯をもつのが特色である。6～9は盛り上がりのある爪型文。10、11は縄文前期末の押型文。

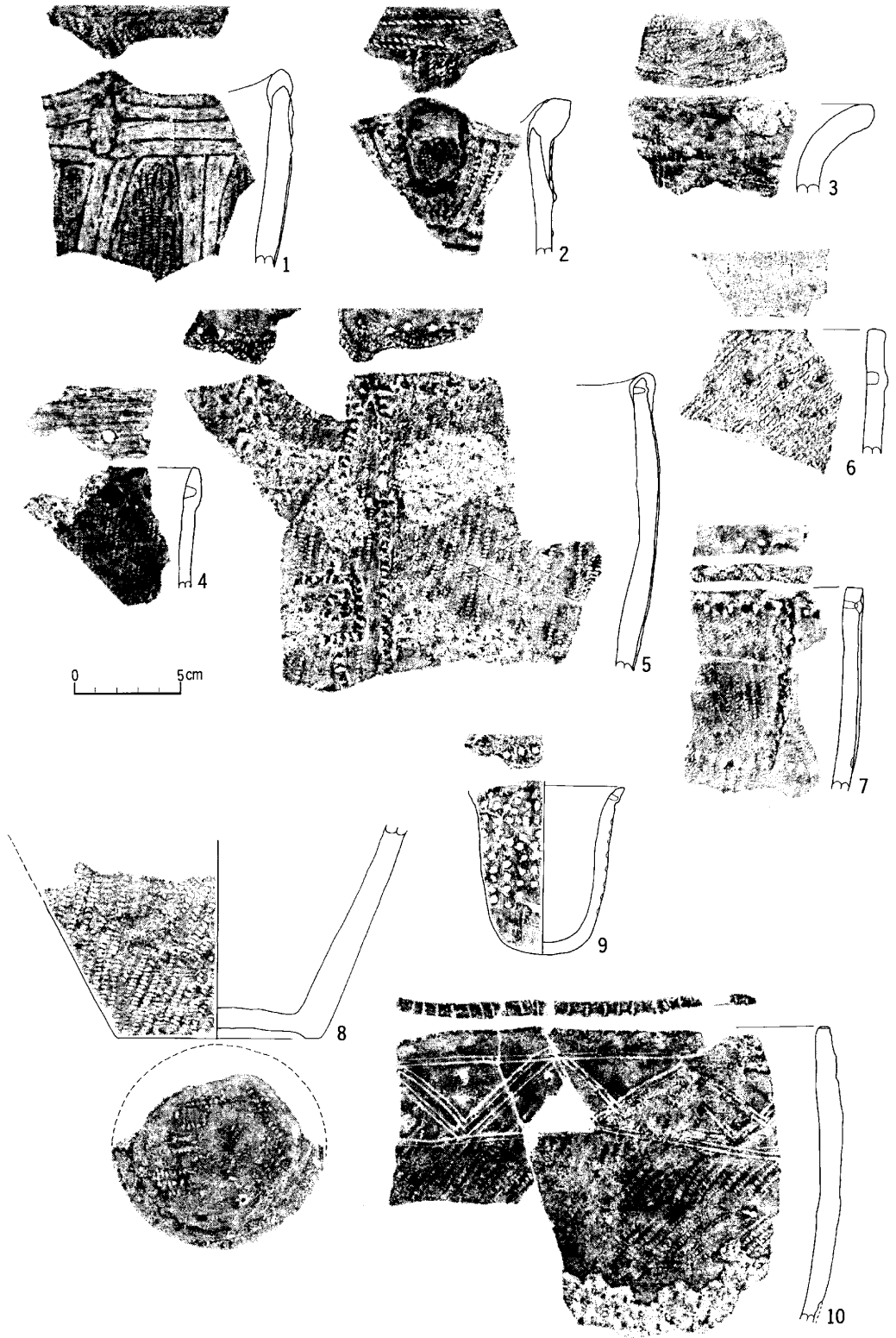
石器は第141図-1～4の無茎石鏃。5～12の有茎石鏃。13、14の石槍。15～21は削器。22はノッチ。23、24は搔器。25は安山岩製、26は角閃岩製、27は緑岩製の磨製石斧。28は自然礫を石斧として利用したもので片面側に加工を加え刃部になっている。

小括

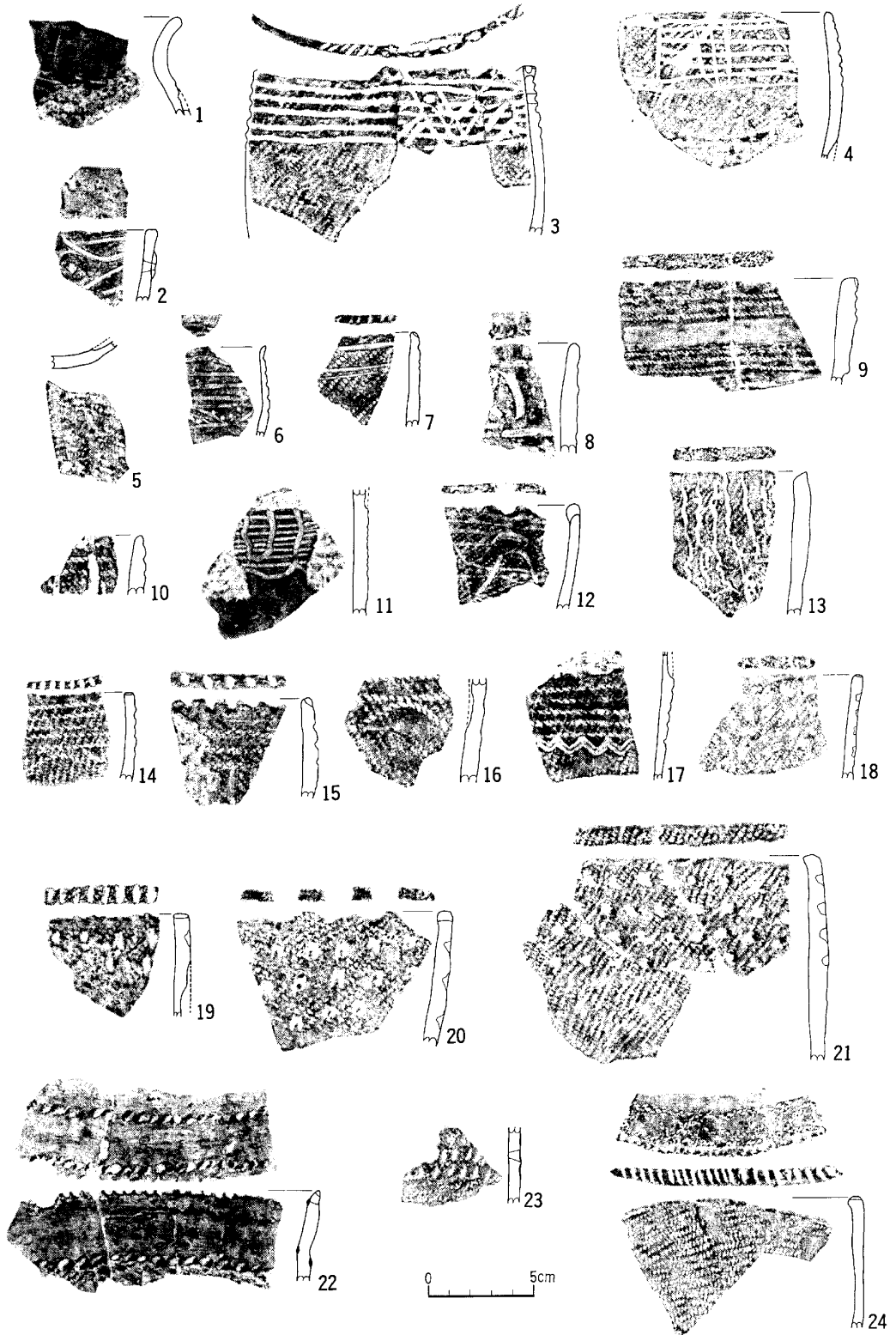
本竪穴は完掘していないが、検出した部分の平面形態及び周溝の存在からオホーツク文化期の竪穴と思われる。詳細な時期は不明である。



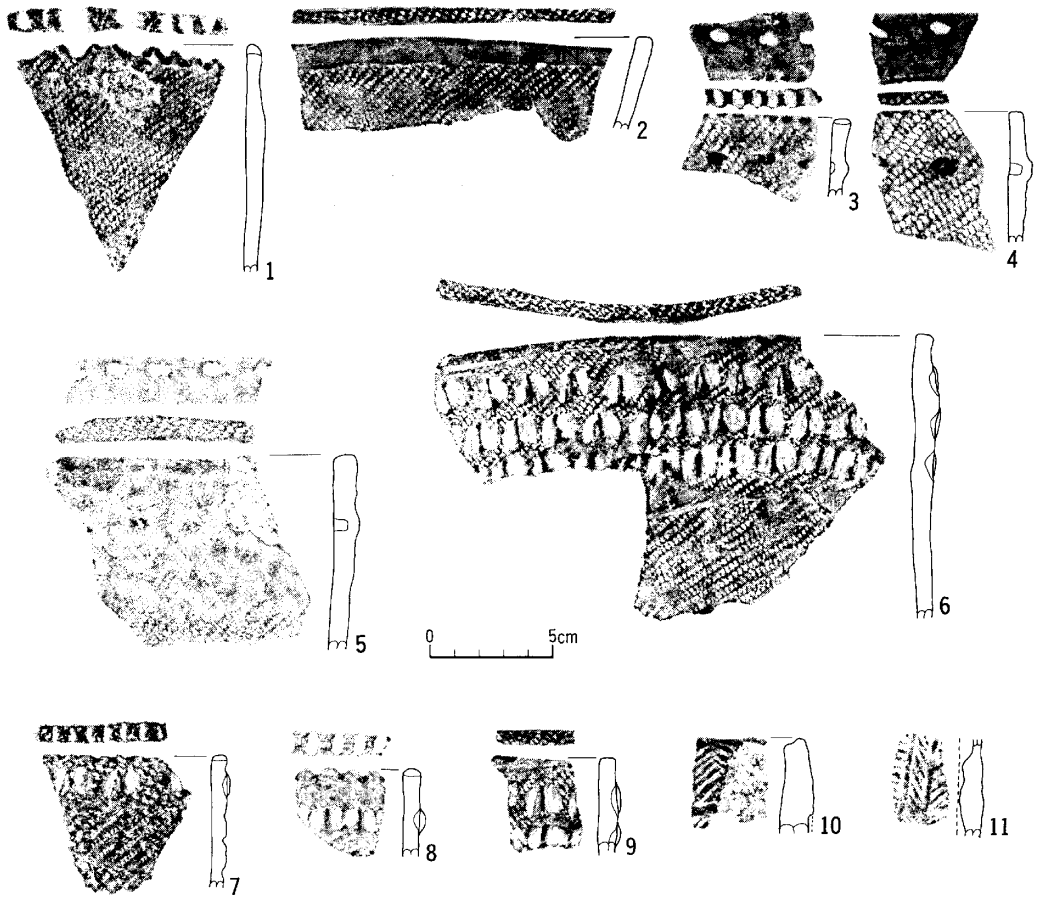
第137图 23号竖穴埋土(1~13)出土土器



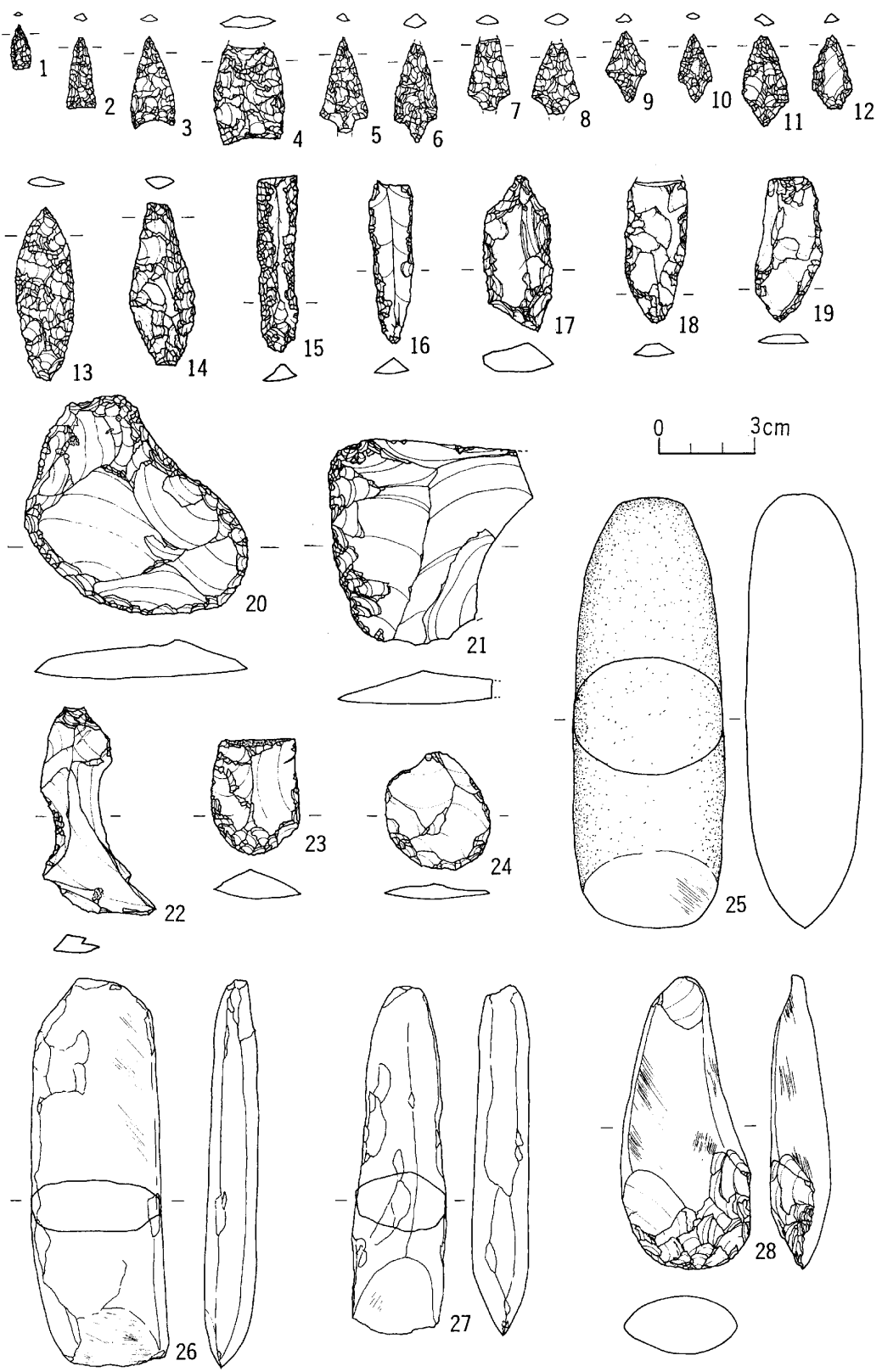
第138图 23号竖穴埋土(1~10)出土土器



第139図 23号竪穴埋土(1~24)出土土器



第140图 23号竖穴埋土(1~11)出土土器



第141图 23号竖穴埋土(1~28)出土石器

23a 号 竪穴

遺 構 (第136図、図版43-4)

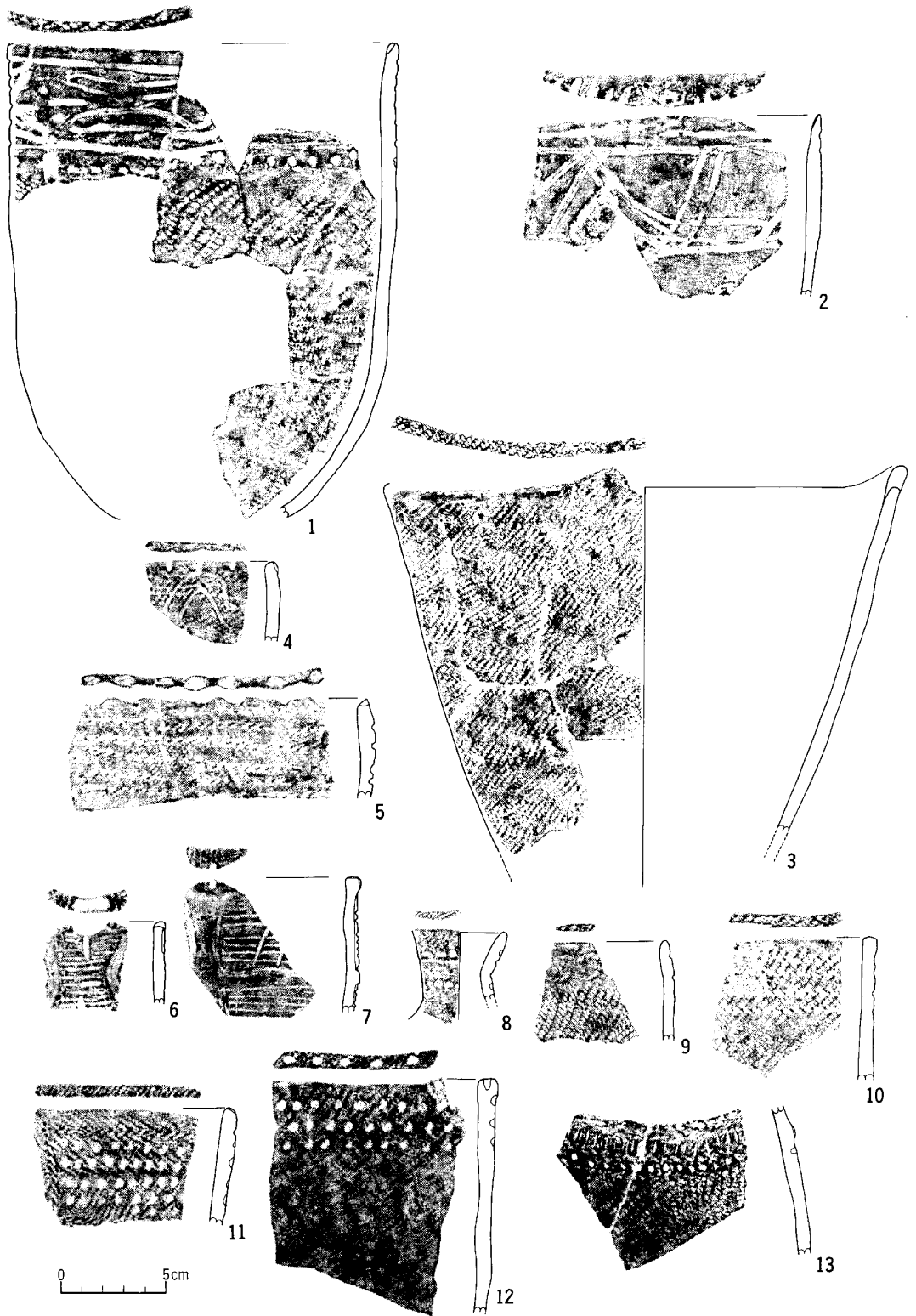
本竪穴は23号の北壁を検出中に発見した。南側の約半分が23号により切られているため正確な規模は不明であるが中央部にある炉跡から推測すると長軸約5m、短軸約4.7mの隅丸方形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上り確認面から約45cmを測る。炉の周辺には微細な骨片を含む黄褐色砂が堆積している。埋土中には炭化粒が多く含み、床面には少量であるが炭化材、焼土も認められ火災住居と判断される。支柱穴と思われるものは北壁、西壁、東壁際の中央部に1本ずつある。いずれも直径約25~30cm、深さ約24~35cmを測る。壁柱穴も支柱穴と同じで壁近くにある。北壁3本、西壁1本、東壁2本がある。いずれも直径約10~15cm、深さ約8~20cmを測る。

遺 物 (第142、143、144、145、146図、図版43-3)

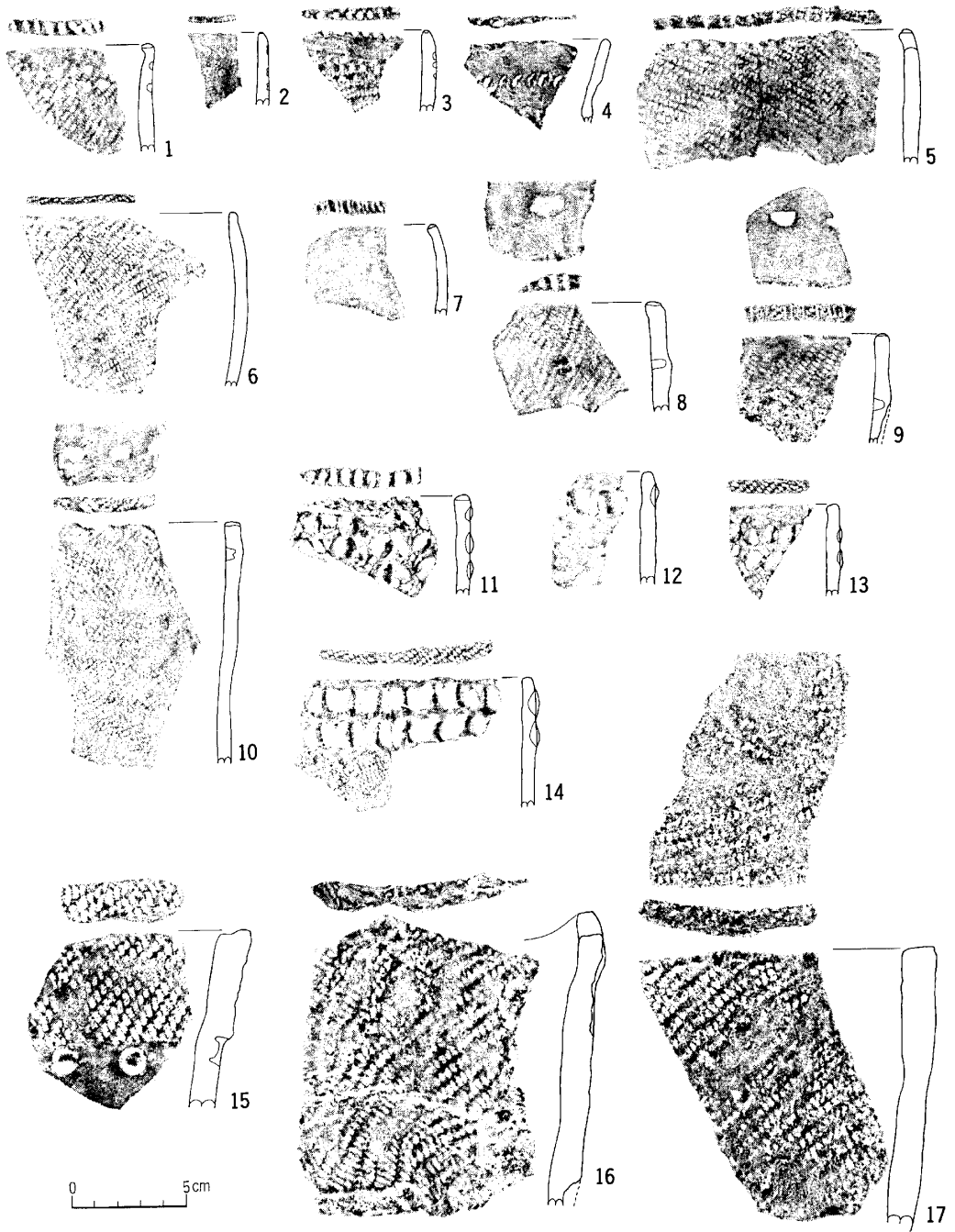
遺物はすべて埋土出土である。第142図-1~3は後北C₂式。4~8は宇津内II a式。7は6条の縄線文上に4本の沈線が加わり、その下に円形刺突が施される。この種の文様は宇津内系にはないが胎土が類似するため一応は宇津内系とした。9~11は続縄文前葉である。9は口縁部には凹状の大きめの突起1対と小さい突起が2個1対あり、口唇部の一部には一条の沈線が巡る。胴部は丸く、口縁下の無文帯では微妙に反る。文様は上部2本、下部1本の横走沈線間に扶入状の沈線を施し半載状施文具による刺突を加えている。器壁は薄い。興津式相当と思われる。10は口縁部が内湾する。口唇部は内削ぎ状をなし棒で押さえた様な刻みがある。口縁下には3条の緩い蛇行沈線があり胴下部のとは半載状施文具による刺突で区画されている。11は口唇部に縄文があり、口縁下は明確でないが弧線と曲線の沈線を施す様である。10は緑ヶ岡式、11は興津式に相当すると思われる。第143図-1~3は続縄文前葉であろう。1は底部が丸くなり胴部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。口唇部には縄文が施され一部に2本の刻線も加えられる。口縁下の文様は2本の横走沈線間に半円弧状の沈線を上下に施し、その空間部に刻線と、半載状施文具による刺突があり胴下部とは縄端圧痕文で区画される。地文の縄文は胴部の上位と下位が斜縄文であるのに対し中位は帯縄文である。フシココタン下層相当であろう。2は口唇部の内側に刻線がほぼ等間隔に施される。口縁下は2条の横走沈線がありその下部は2本単位の斜めの沈線とそれを結ぶ雑な曲線で構成される。3は口唇部に4個の山突起形をもつ。地文はLRの斜縄文である。2、3は緑ヶ岡式、氷川式の段階に比定されよう。4は口唇部の外側に刻線がある。文様は縄文を地文に横撫でした最にできた擦痕と2本の波状の沈線で構成される。5は口唇部が小波状を呈し下部には5条の縄線文が施される。6、7は幣舞式。8は壺形土器であろう。頸部に施された2条の横走沈線の上下に半載状施文具による刺突がある。フシココタン下層に相当すると思われる。9は口縁下に2条の綾線文がある。緑ヶ岡



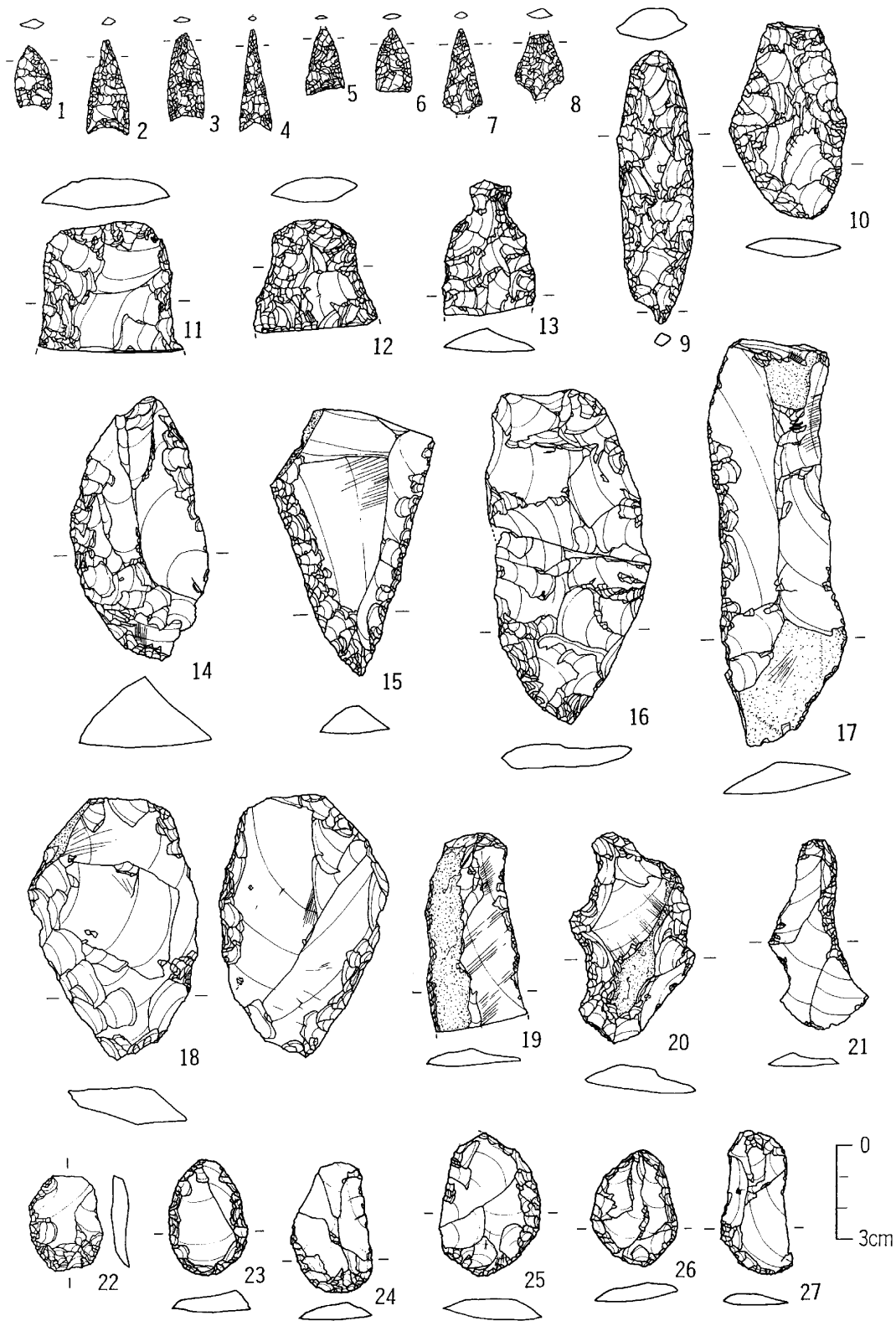
第142図 23a号竖穴埋土(1~11)出土土器



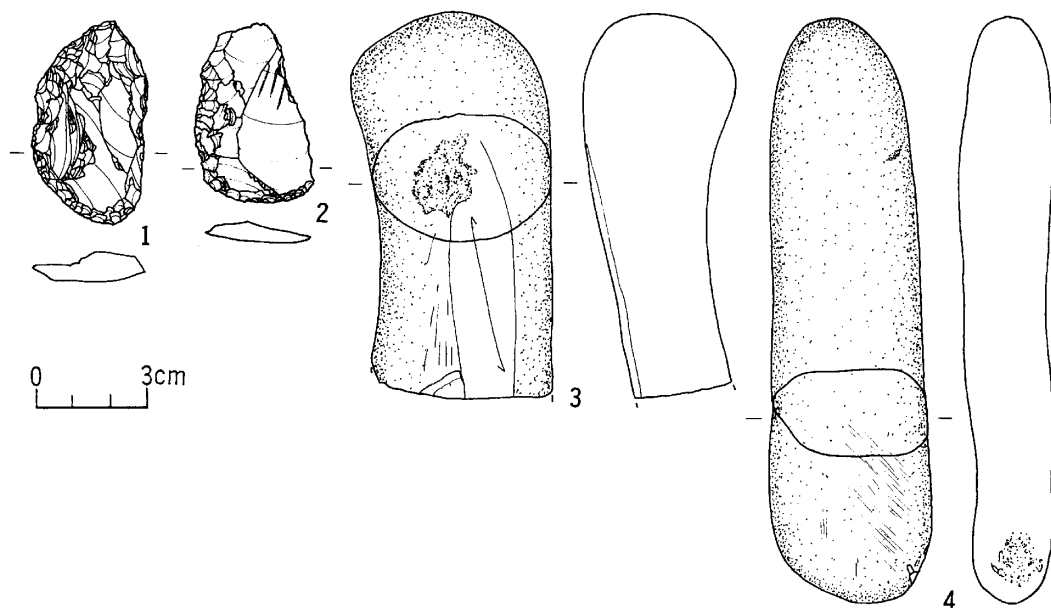
第143图 23a号竖穴埋土(1~13)出土土器



第144図 23a号竪穴埋土(1~17)出土土器



第145图 23a号竖穴埋土(1~27)出土石器



第146図 23a号竪穴埋土(1~4)出土石器

式であろう。10~13は晩期中葉であろう。10は4条の縄線文、11は四角に囲んだ縄線の中に角形の施文具を用いた刺突が施される。13は幅広の隆帯上には刻みが突けられその下部では2条の縄線文間に円形、半截状施文具の刺突がある。あるいは続縄文前葉に比定されるかもしれない。第144図-1~7は晩期中葉であろう。1、2は円形施文具、3、4は半截状施文具を用いている。5、6は縄文。7は無文。8~14は晩期前葉であろう。8~10は内側から斜めの突瘤。11~14は盛り上りのある爪形文。15は縄文中期トコロ六類。16は山形突起の下部は「ハ」字状に縄を押圧する。17は北筒皿式に比定される。

石器は埋土出土である。第145図-1~6は無茎石鏃。7、8は有茎石鏃。9~12は両面加工ナイフで11、12はその柄部。13は石匙。14~27は各種の削器、搔器である。すべて黒曜石製。第146図-1、2は黒曜石製の削器。3、4は泥岩製の叩き石である、3には磨面。4には擦面が見られる。

小 括

本竪穴は23号と重複する。新旧関係は本竪穴が古い。埋土からは続縄文前葉のフシココタン下層、興津式に相当する土器が出土している。この種の土器は24号、26号、26a号の埋土から出土している他はこの周辺のグリットからはあまり認められない。床面出土の遺物がないため明確ではないが平面形態が隅丸方形を呈した本竪穴及び26号、26a号。34号は続縄文前葉の可能性がある。

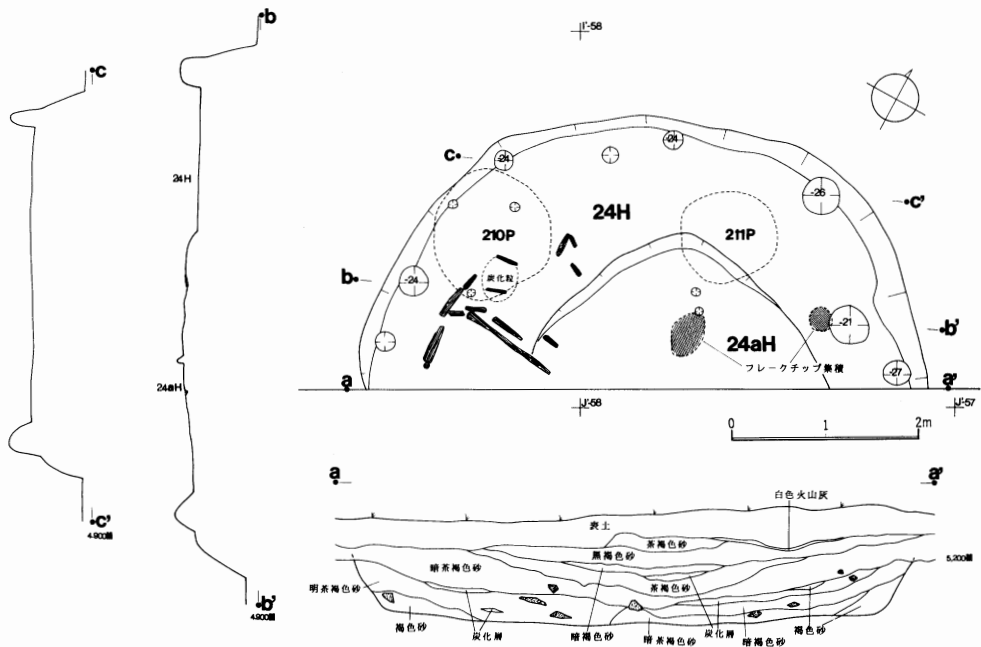
24号竪穴

遺構 (第147図、図版44-1)

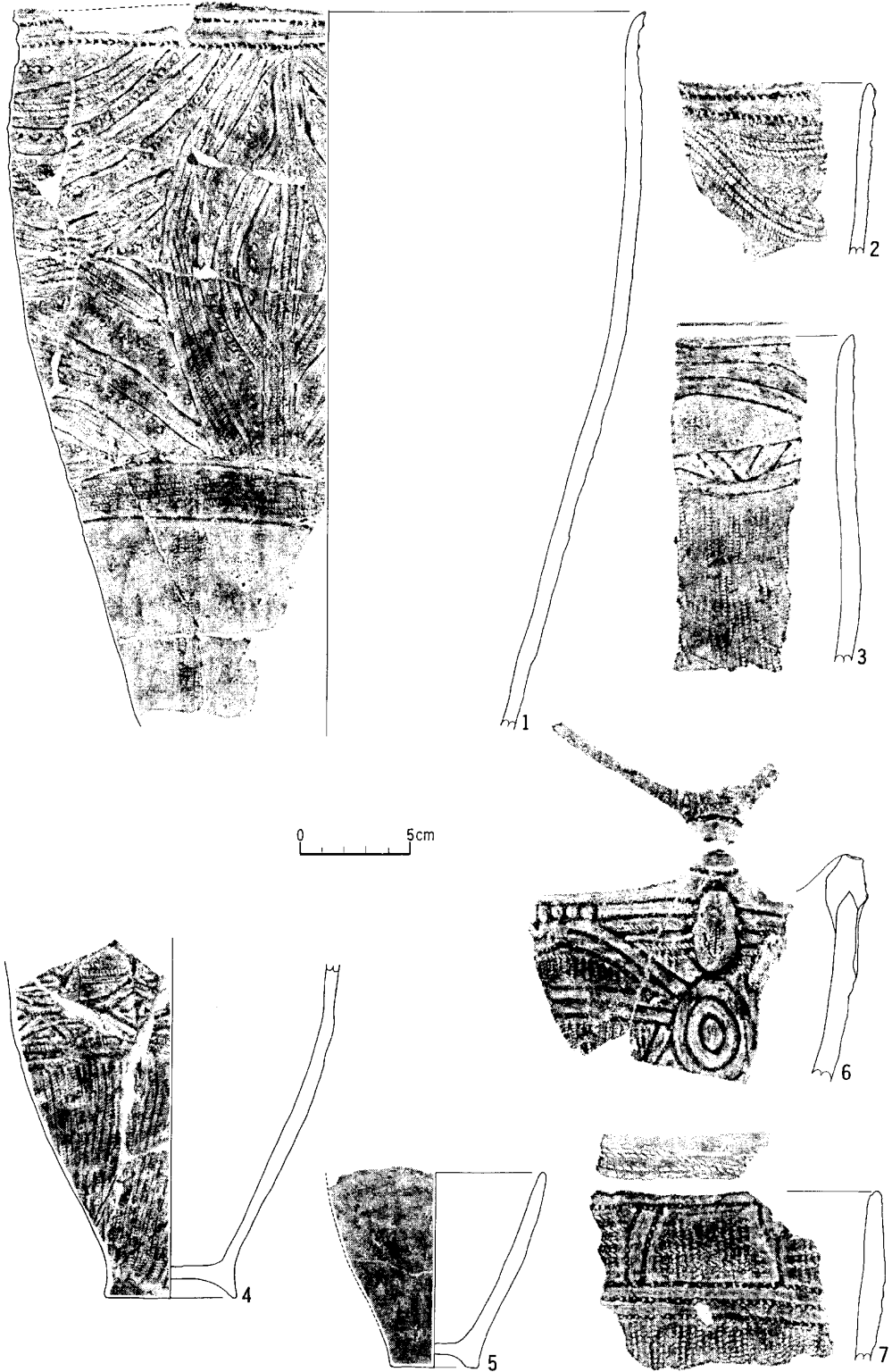
本竪穴は23号竪穴の北側約0.3mに位置する。発掘区域外にまたがっているため検出できたのは約2分の1である。正確な規模、形態は不明であるが直径約6mの円形、もしくは楕円形を呈するものと推測される。床面上部の明茶褐色砂層から暗茶褐色砂層にかけて炭化材の混入が多く床面近くからは茅材も認められた。火災住居と思われる。壁高は確認面から約70cmを測り東壁は緩く開くが他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。北壁隅にフレーク、チップの集積がある。支柱穴と思われるものは各壁にほぼ等間隔に配置される。西壁ではその間に壁柱穴がある。支柱穴は直径約20~40cm、深さ約24~29cmを測る。壁柱穴は直径約10~20cm、深さ約13cmを測る。

遺物 (第148、149、150、151、152、153、154図、図版44-2~9)

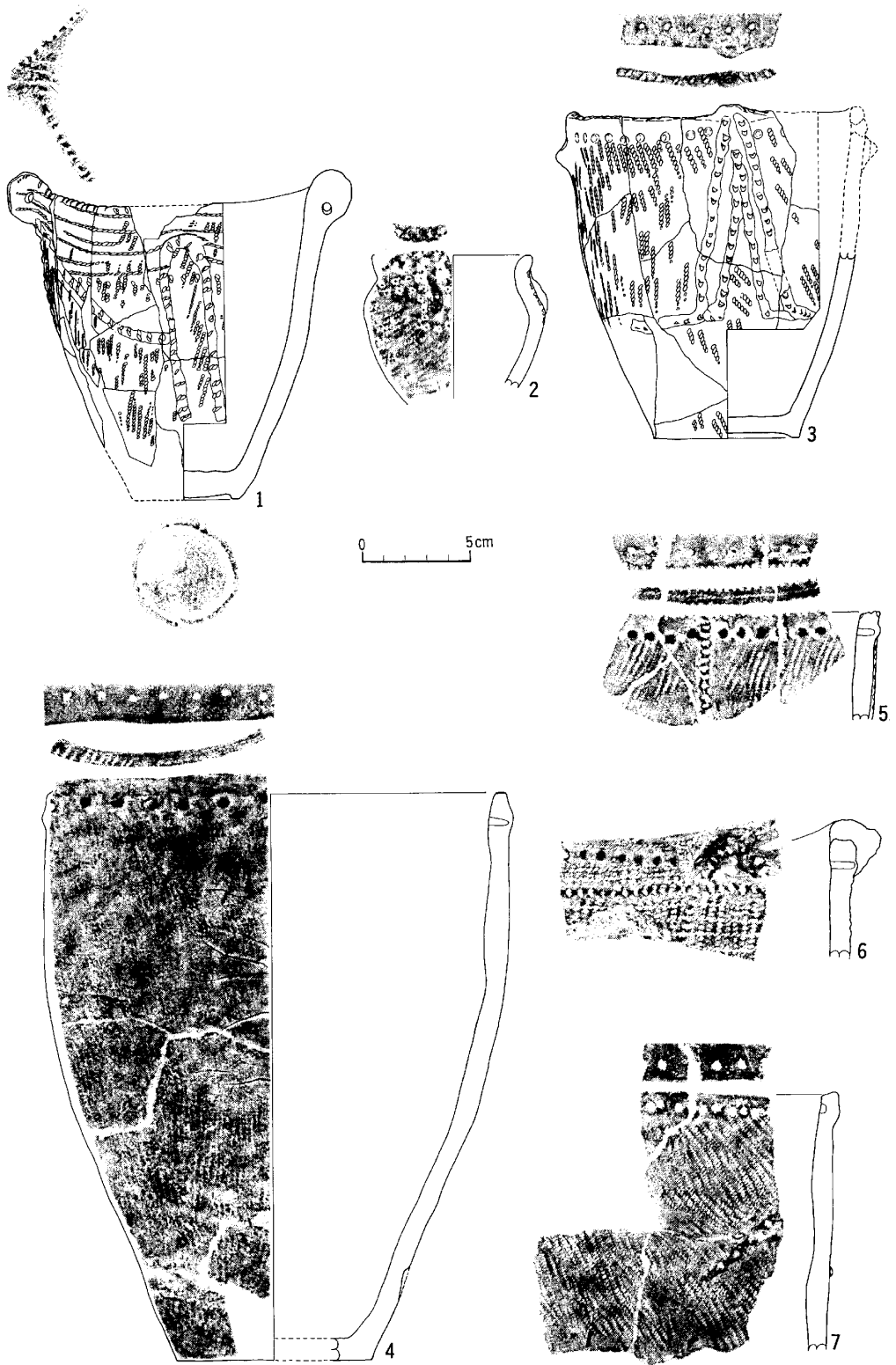
床面から遺物は出土していない。第148図-1、2は後北C₂式。1は深鉢土器。わずかに外反した口縁部に刻みのある2条の貼付がある。胴部には微隆起線文、帯縄文、三角形列点文が縦・横方向に弧状に施される。3、4は同C₁式。5は底部が揚げ底を呈した無文小型鉢形土器。後北系であろう。6、7は宇津内II b式。第149図-1、2は宇津内II b式。1は口縁部に縄線文が施される。2個の吊り耳下部には3本の隆帯がある。吊り耳間の小突起からは「∩」字状の



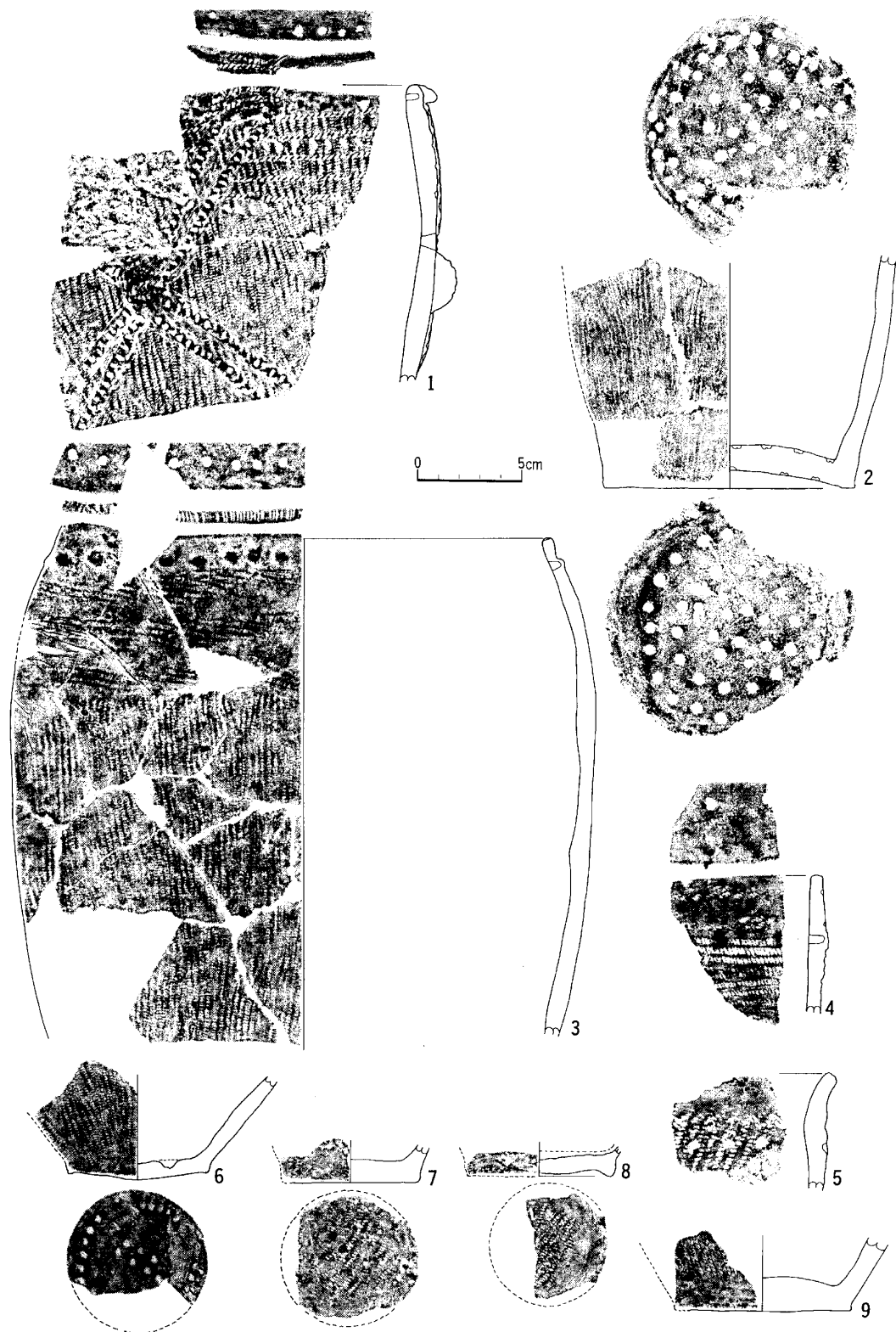
第147図 24号竪穴、24a号竪穴平面図



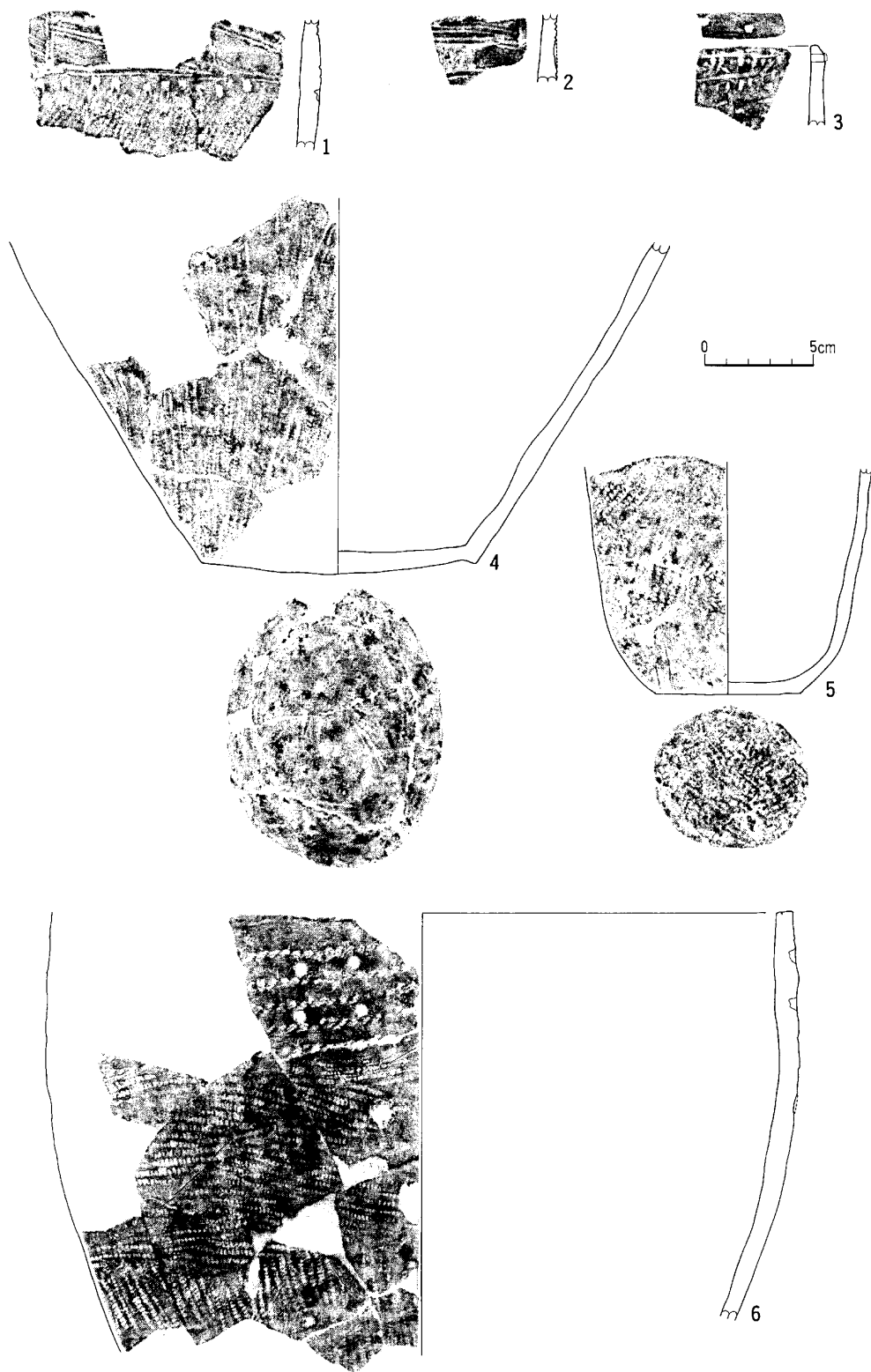
第148図 24号竪穴埋土(1~7)出土土器



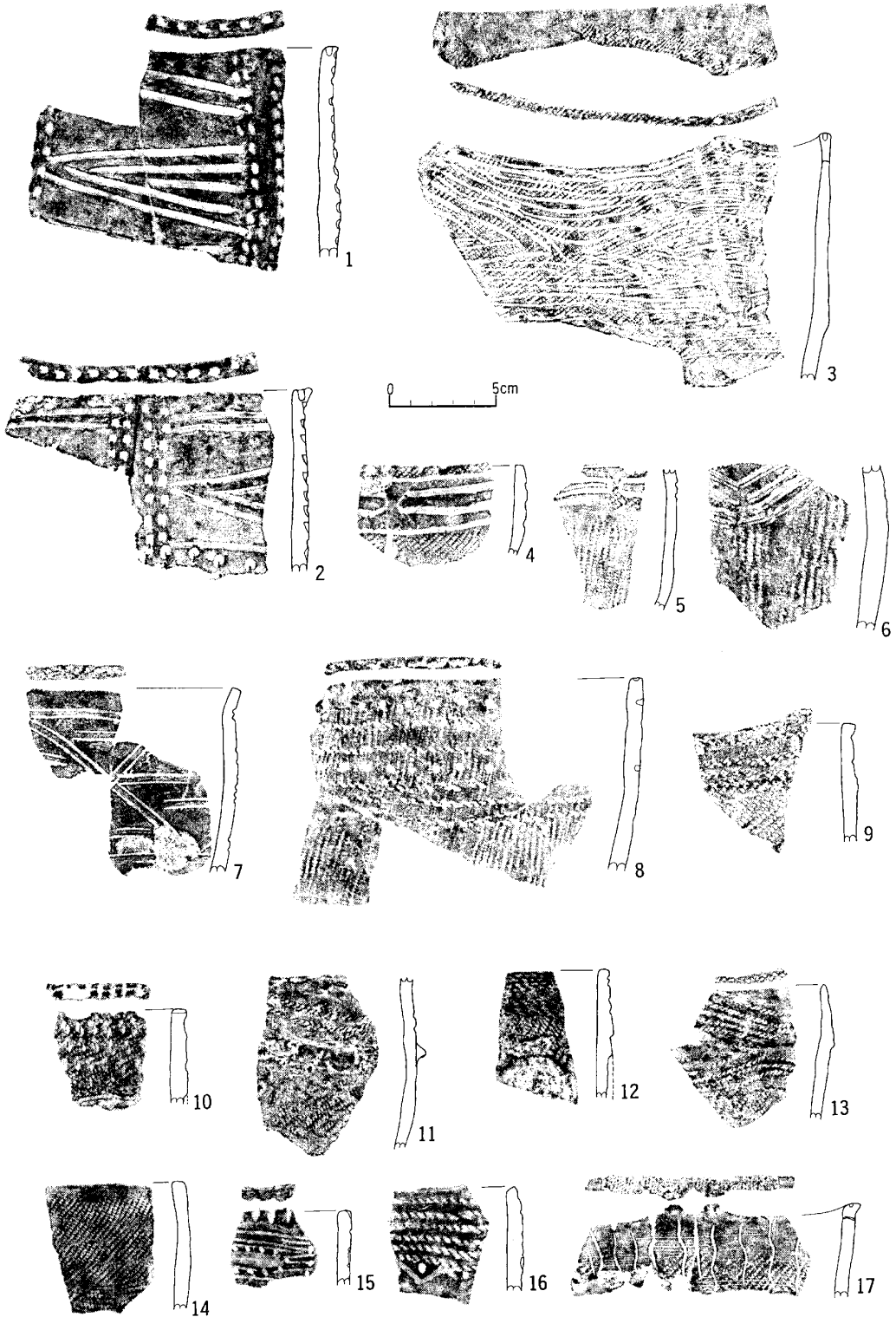
第149图 24号竖穴埋土(1~7)出土土器



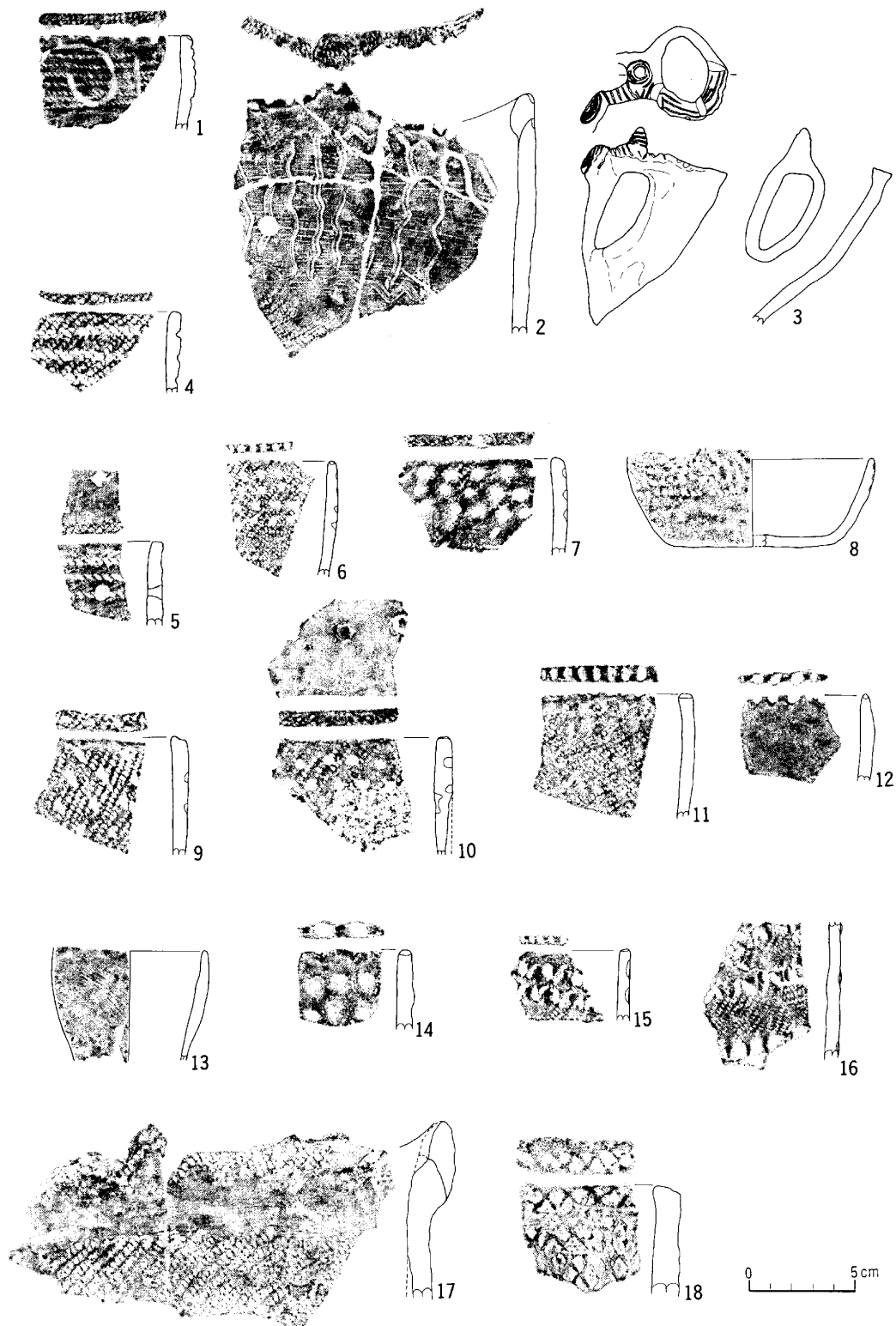
第150図 24号竖穴埋土(1~9)出土土器



第151图 24号豎穴埋土(1~6)出土土器



第152図 24号竪穴埋土(1~17)出土土器



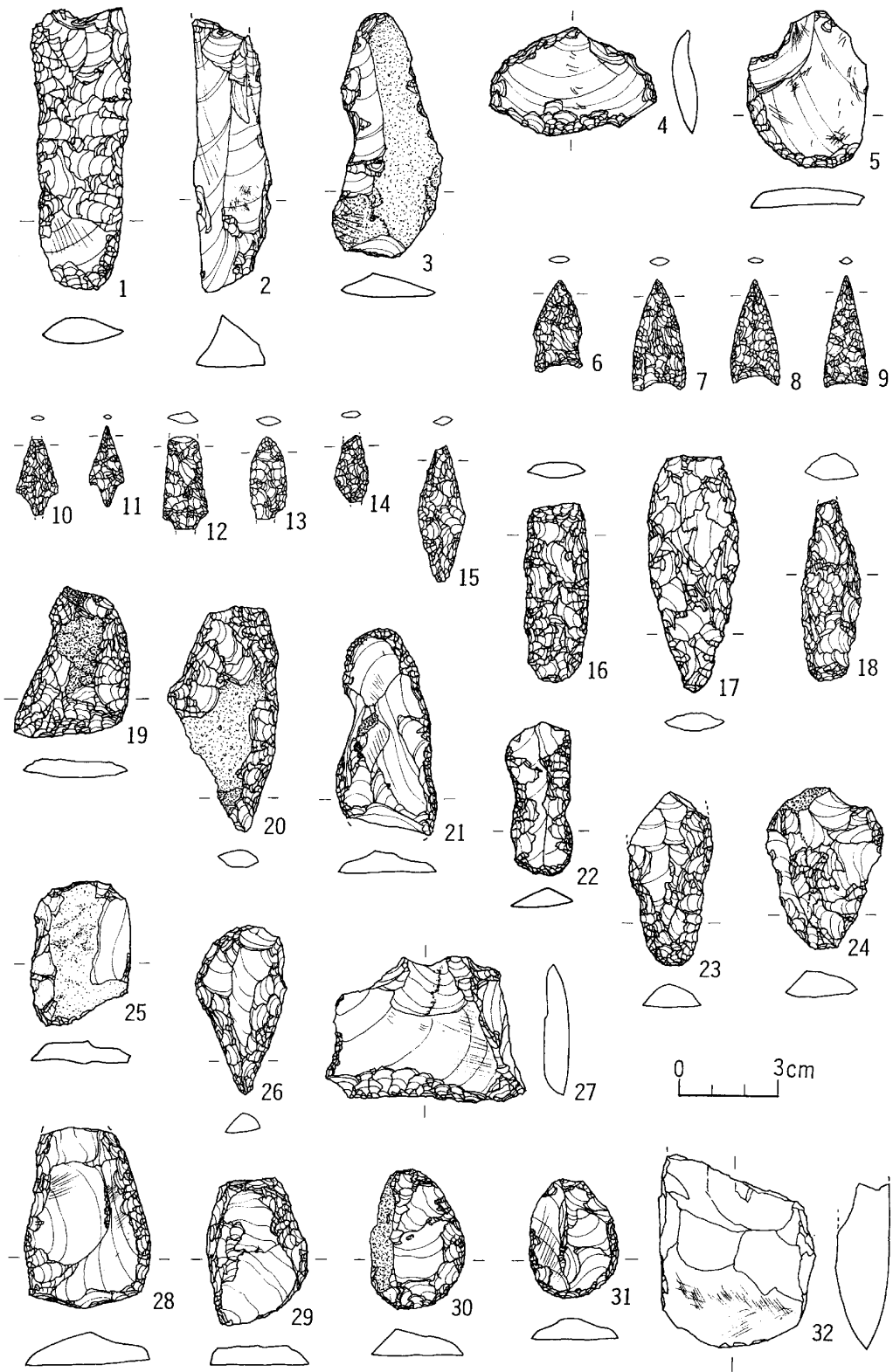
第153图 24号竖穴埋土(1~18)出土土器

隆帯があり吊り耳から伸びる隆帯と連結する。2は口縁下部がくびれ、頸部から肩部にかけて縦方向に貼付がなされ、頸部と貼付を囲むように円形刺突を施す。3～7は突瘤文のある宇津内II a式。3は口唇部に半截状施文具による刺突が施される。口縁部には4個の小突起をもち2個に吊り耳、2個に「—」状の隆帯が垂下する。第150図-1、2は宇津内II a式。2は底部の内外面に円形刺突が施される。3、4は突瘤下に帯縄文が施される。3は口縁部に4個の小突起もしくは小波状を呈し口唇部に刻みが密に施される。4は口唇部が角形であり突瘤文の上に縄線文が加わる。5は口縁部がわずかに外反し縄端圧痕文が施される。3、4は興津式に相当する。6～9は宇津内系もしくは続縄文前葉の底部であろう。第151図-1～6は続縄文前葉であろう。1、2は半截状施文具による沈線が施される。3は貫通した突瘤文と短刻線が雑に施される。4は底部が楕円を呈しわずかに丸味を帯びる。5の底部形態、地文は23a号埋土から出土した第143図-1と類似する。6はわずかに口縁部が外反し4条の縄線文と円形刺突があり、胴部は横走縄文と縦走縄文が施される。第152図-1は口縁部の小突起から細い縄端による刺突が垂下し、拓本図の左側は角形の施文具による刺突が見られその間に2本の横走沈線、「<」状の沈線が施される。口唇部にも深い刺突がある。2は1と同一個体であり、下部に縄端圧痕文がみられる。1、2はフシココタン下層式に併行すると思われる。3は口縁部に小突起をもちその頂部を刺突する。口縁部の沈線文帯と胴部はわずかの段がある。菱形状の沈線を連続し上下の空白帯を緩い弧線文と直線文で埋めたもので緑ヶ岡式に相当される。1と3は突瘤下に不規則な沈線と刺突が施される。4、5は底部が丸みを帯びる。4、5は工字文。6は「V」状の沈線を施す。胎土は砂粒を多量に含む。7は口縁下部がわずかに外反する。半截状施文具を横走、×状に施す。興津式と併行期であろう。8は5条の縄線文と2段の円形刺突文で構成され、一部に縦の縄線が加わる。9は口縁部に小突起をもつ。10は3条の縄端圧痕文と縄線文がある。11には断面三角形の凸帯をもつもので13と同一個体と思われる。12は縄線文、14は縄文が施される。15～17は幣舞式。第153図-1～3は幣舞式。3は異形土器。4～13は晩期中葉であろう。4、5は縄線文、6～10は刺突が施されたもので7は口縁に小突起をもつ。10は内側に円形刺突がみられる。11は縄文、12、13は無文であり13には擦痕がある。14は口唇部、器面を指頭で押さえたような浅い凹部がある。15、16は晩期前葉の盛り上がりのある爪形文。17は口縁部に突起をもち、隆帯下部は無文帯となる。縄文中期北筒III式。18は前期末の押型文。

石器は床面から第154図-1～5が出土している。1は両面加工ナイフ。2、3は縦長の削器。2は実測図右端部に刃部をもつ。4、5は搔器。埋土は6～32が出土している。6～9は無茎石鏃。10～15は有茎石鏃。16～20は両面加工ナイフ。19はメノウ製。20は頁岩製。20～26、28は削器。27、29～31は搔器。29は頁岩製。32は青色泥岩製の磨製石斧。

小 括

本竪穴の床面から遺物は出土していないため時期は不明である。24a号と重複しており24号



第154图 24号整穴床面(1~5)·埋土(6~32)出土石器

が新しいようである。

24a 号 豎 穴

遺 構 (第147図)

本豎穴は24号豎穴の内部にほぼすっぽり収まっている。土層断面は24号と24a号の切り合う部分では同一レベルで重なるため明確ではないが新旧関係は24号が新しいようである。24a号は北壁と西壁の一部を確認できたが、他は24号の床面と重なるため不明である。壁高は北壁、西壁とも24号の床面から約10～12cmを測る。形態は小型の方形を呈するであろう。床面にフレーク、チップの集積がありその近くに直径約8cm、深さ約10cmの小柱穴がある。遺物は出土していない。

小 括

本豎穴は24号と重複する。新旧関係は本豎穴が古いようである。

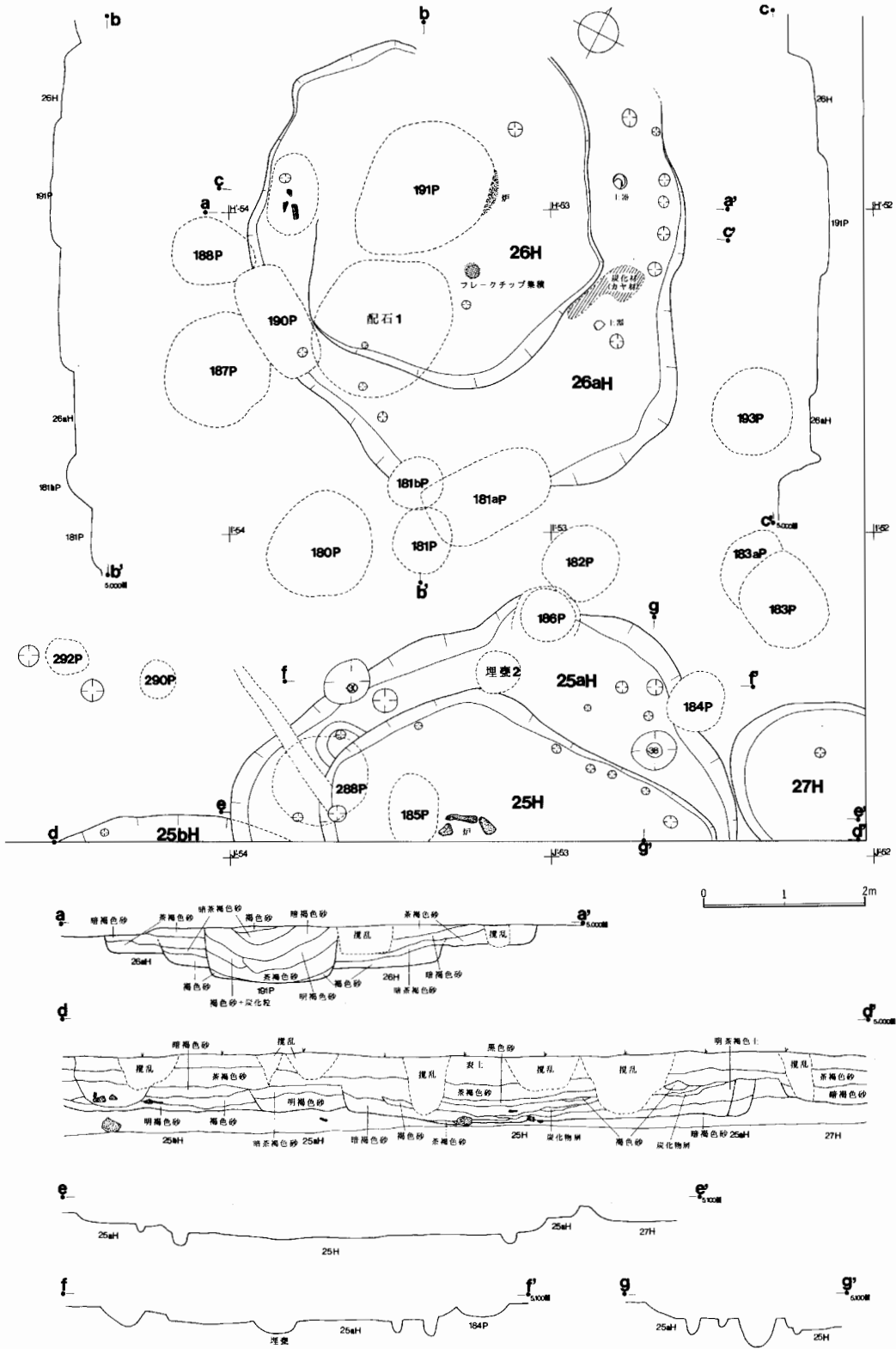
25 号 豎 穴

遺 構 (第155図、図版45-1)

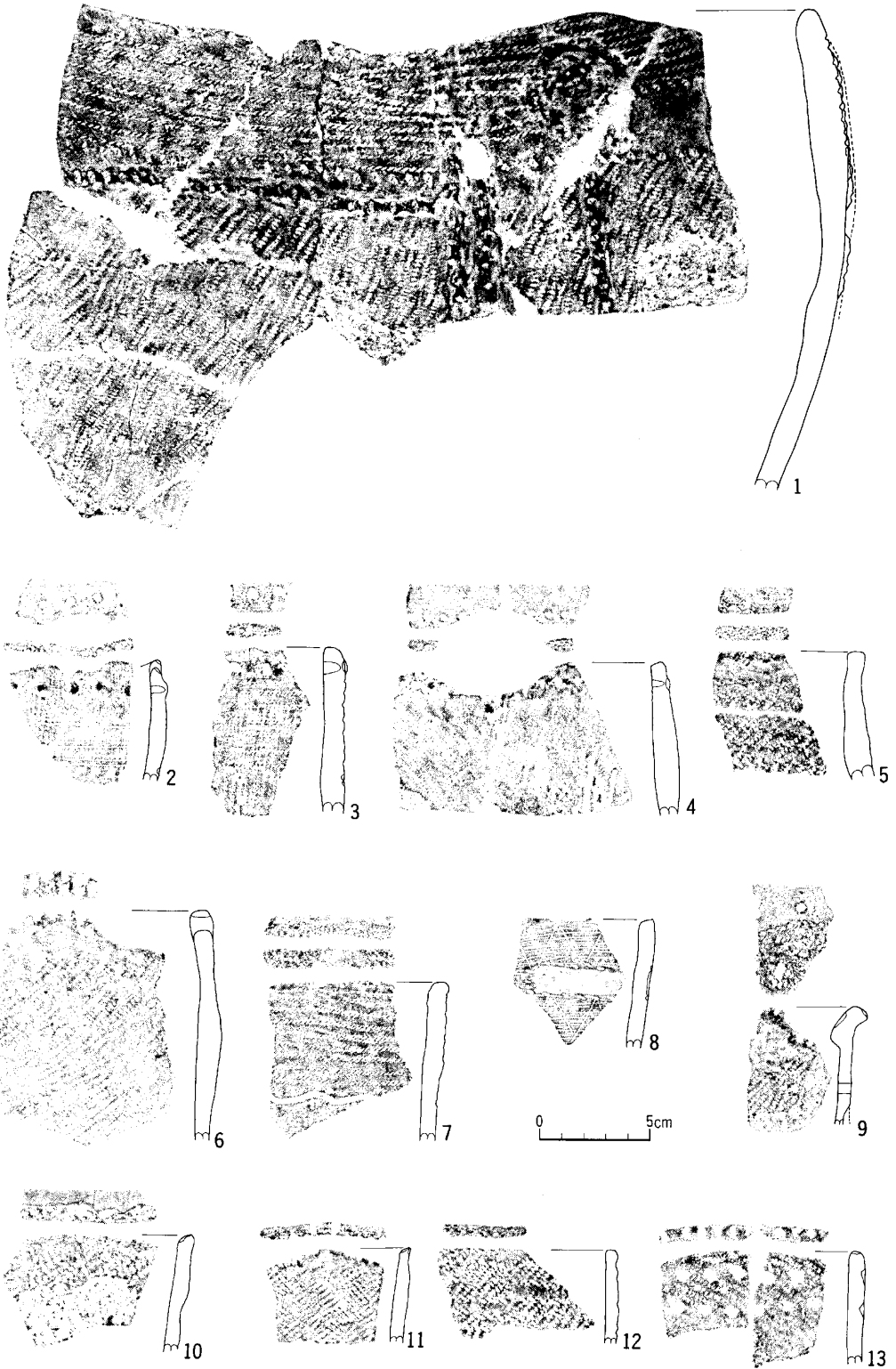
本豎穴は発掘区域の東端にあたるJ'53グリッドに位置する。表土を剝土し、茶褐色土を掘り下げる段階で落ち込みを確認した。発掘区域外の壁面であるJ'53、I'53グリッドを土層観察面とし掘り下げ、西壁の検出を行った。東側が発掘区域外にあるため豎穴全掘できなかった。検出できたのは西側の半分だけであるが、形態は北壁側がすぼまる不整楕円形を呈すると思われる。規模は長軸約5mである。石囲み炉がセクションベルト内にあることから推測すると短軸約3.6mであろう。壁高は確認面から約45cmである。石囲み炉は円礫を用い良く焼けている。支柱穴は北壁、南壁に1本ある。直径約13～21cm、深さ20cmである。壁柱穴は北壁に4本、西壁に1本ある。直径約10cm、深さ約8～12cmである。

遺 物 (第156、157図-1～12、158図-1～10)

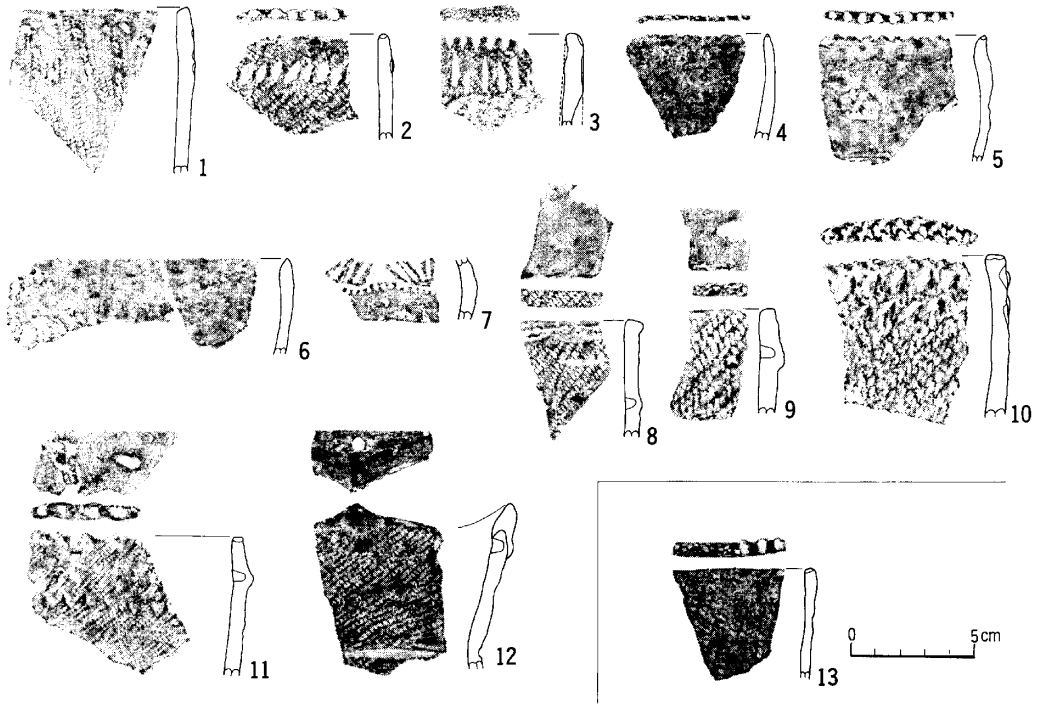
遺物は埋土から出土している。第156図-1は石囲み炉の直上約5cmから出土した宇津内II b式。縄線文を多用するが縦の隆帯部で一部中断する。胴部に比して口縁部の器壁が厚い。2～4は宇津内II a式。2は口縁部に2個の小突起をもつ。半截状施文具による沈線が3列施される。5、6は続縄文前葉。6は口縁の小突起に縄を押し捺する。7は緑ヶ岡系であろう。8～11は幣舞式。8は沈線施文後に無文帯を作り刺突で囲む。12、13は晩期中葉であろう。13は円形刺突が施される。第157図-1～7は晩期中葉であろう。1は縦走縄文を地文に縄端圧痕文を雑に施す。あるいは続縄文前葉かもしれない。2、3は爪状の刺突が施される。4～6は無文もしくは無文帯を形成するもので5の下部には沈線が施される。7～10は晩期前葉であろう。7は鋸



第155图 25号竖穴、25a号竖穴、25b号竖穴、26号竖穴、26a号竖穴、27号竖穴平面图



第156図 25号竖穴埋土(1~13)出土土器



第157図 25号竪穴埋土(1~12)、25a号竪穴埋土(13)出土土器

歯状沈線下に列点文を施す。8、9は内側から斜めに施された突瘤文。10は盛り上がりのある爪型文。11は内側から斜めに施され突瘤と爪型文の複合である。晩期前葉であろう。12は縄文後期堂林式。

石器は第158図-1は基部が欠失するが無茎石鏃であろう。2は有茎石鏃。3~6は削器。7、8は搔器。9は削器。10は叩き石。9の玄武岩製、10の泥岩製を除きすべて黒曜石製である。

小 括

本竪穴は長軸約5mの不整楕円形を呈する。床面から遺物は出土していないが石囲み炉の直上から出土した宇津内II b式が最も近い時期と思われる。

25a 号 竪 穴

遺 構 (第155図、図版45-1)

本竪穴は25号竪穴と重複する。25号竪穴同様に大部分が発掘区域外にあるため検出できたのは全体の2分の1程度である。しかも25号竪穴に切られているため柱穴、炉等は検出できなかった。規模は南北約6mを測る。形態は方形を呈するようである。壁高は確認面から約40cmを測る。支柱穴とおもわれるのは西壁際1本、北壁際1本がある。いずれも直径約20~28cm、深さ

約18~24cmである。壁柱穴、補助柱穴は直径約5~10cm、深さ約7~11cmである。

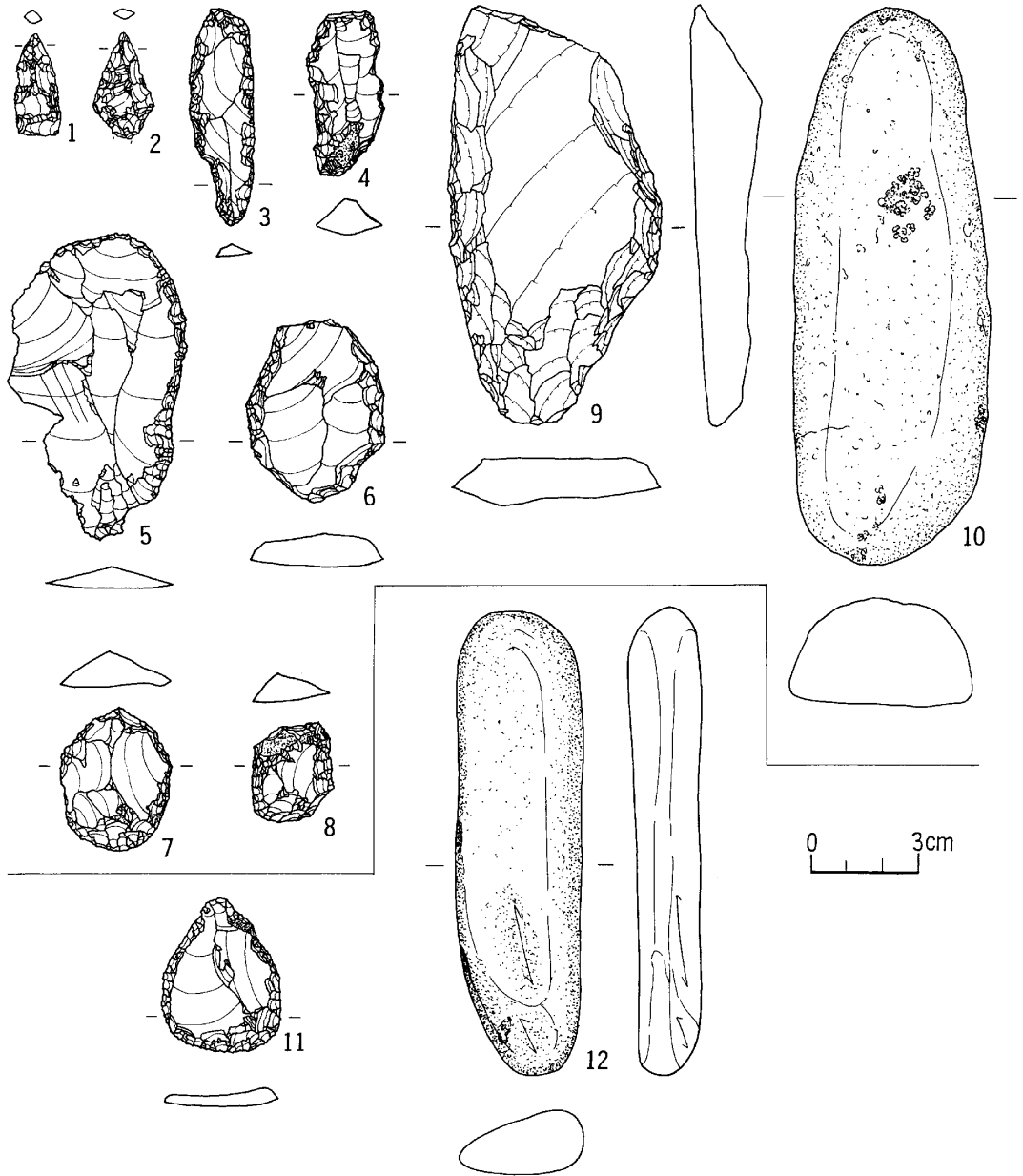
西壁際には本竪穴を切って宇津内II a 式の埋甕がある。

遺物 (第157図-13)

埋土出土である。口唇部に縄文を施した後に刻みを加えている。晩期中葉であろう。

小括

25号竪穴と重複するこの本竪穴はすくなくとも続縄文字津内II b 式より以前の時期である。



第158図 25号竪穴埋土(1~10)、25 b 号竪穴埋土(11~12)出土石器

25b 号 竪 穴

遺 構 (第155図、図版45-1)

本竪穴は25号、25a号の南側にある。遺構は発掘区域外にあるため西壁のごく一部を検出しただけである。したがって規模・形態は全く不明である。検出された西壁から判断すると壁は皿状に立ち上り、高さは約20cm程度である。壁際に直径約10cm、深さ約12cmの柱穴1本が認められた。

遺 物 (第158図-11・12)

遺物は第158図-11の黒曜石製の搔器。12の磨石が出土しているだけである。

小 括

25a号竪穴より古いと判断されるが正確な時期及び規模・形態は不明である。

26 号 竪 穴

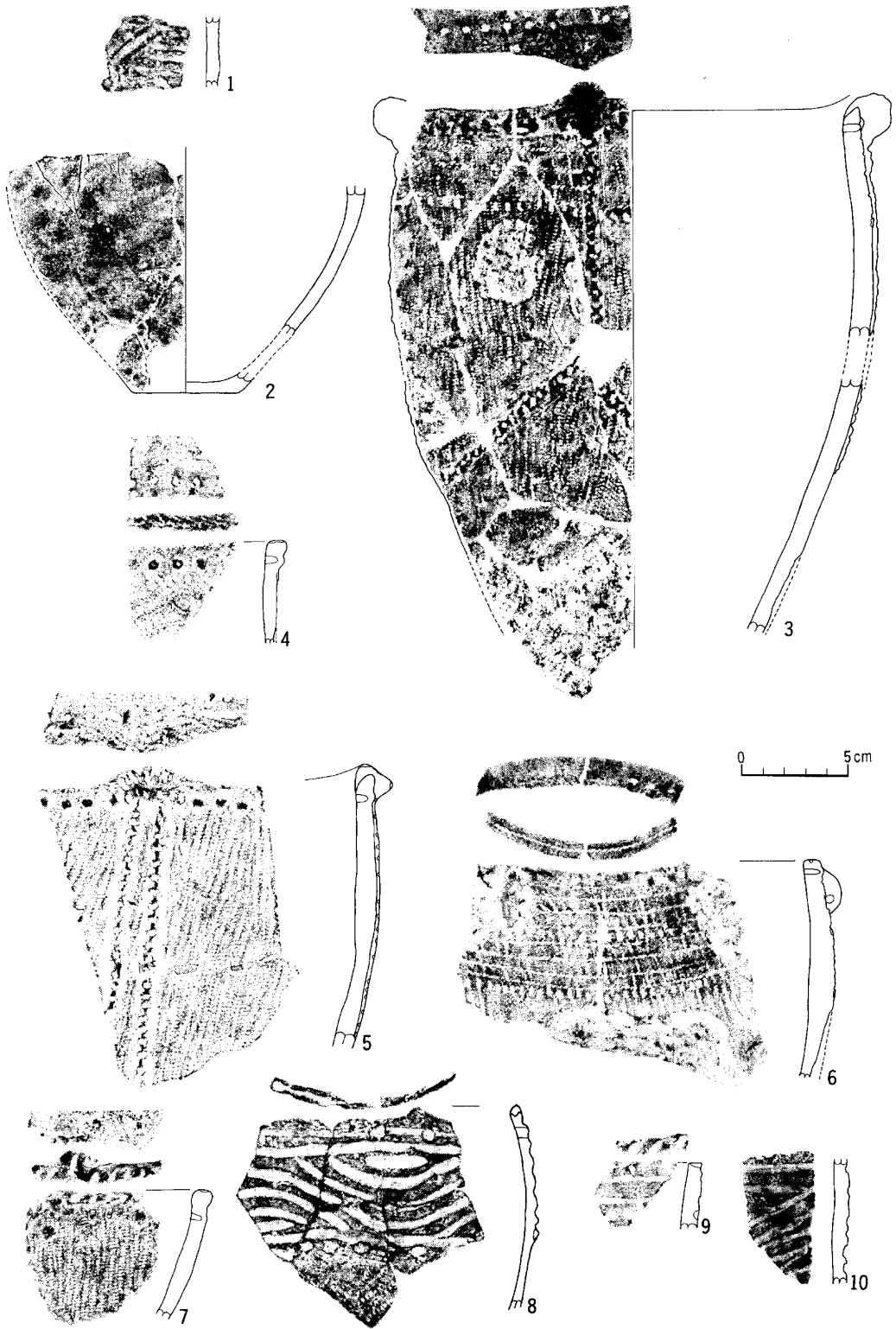
遺 構 (第155図)

本竪穴はH'53、I'53グリッドに位置する。表土を剝土すると配石遺構が検出され、この段階でII層の茶褐色層を約10cm掘り下げた段階で落ち込みを確認した。H'53、H'54ラインに沿ってサブトレンチを入れたところピット191及び26a号竪穴の立上りを確認した。本竪穴は26a号竪穴内に構築されていることが判明したのでピット191の調査後さらにH'53、I'53ラインに沿ってサブトレンチを設定し壁の確認を行った。本竪穴は26a号の2層暗褐色砂から掘り込まれている。西壁、南壁の一部は検出することができなかったものの規模は長軸約4m、短軸約3.4mの不整形方形を呈すると思われる。壁は北壁側がほぼ垂直に立ち上がるが東壁側はやや開いており、高さは26a号の床面から約20cmである。炉跡はほぼ中央部に位置するがピット191に切られているため東端部が残存する程度である。床面は良く焼けている。明確に支柱穴とされるものは無く、壁柱穴もしくは補助柱が4本ある。直径約7～20cm、深さ約7～14cmである。

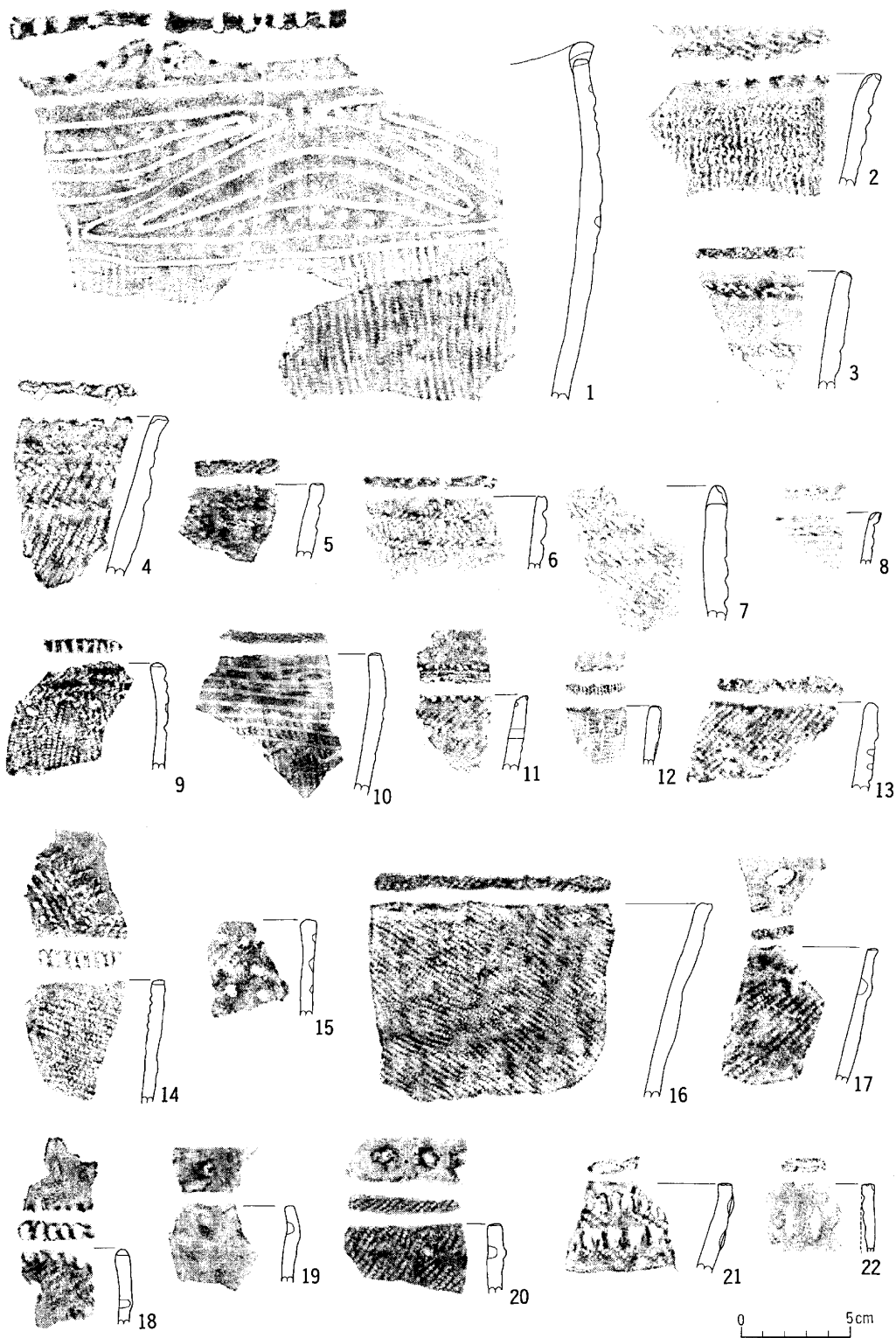
遺 物 (第159、160、161図、図版45-5・6)

遺物はすべて埋土から出土している。第159図-1は後北C₁式。2は底部が小さく胴部にかけて大きく張り出す無文土器で後北系であろう。3～7は宇津内II a式。3は吊り耳をもち小突起が2箇所あり逆「Y」字形に隆帯が垂下する。7は口唇部に刻みが施される。8～10は太めの沈線を弧状、直線に施すもので続縄文前葉であろう。第160図-1～8続縄文前葉であろう。1は口縁部に小突起をもつ。口縁下部の文様はブーメラン状の沈線文とそれを囲む三角形の沈線と、円形刺突で構成される。胴部は縦走縄文で興津式と併行の時期であろう。

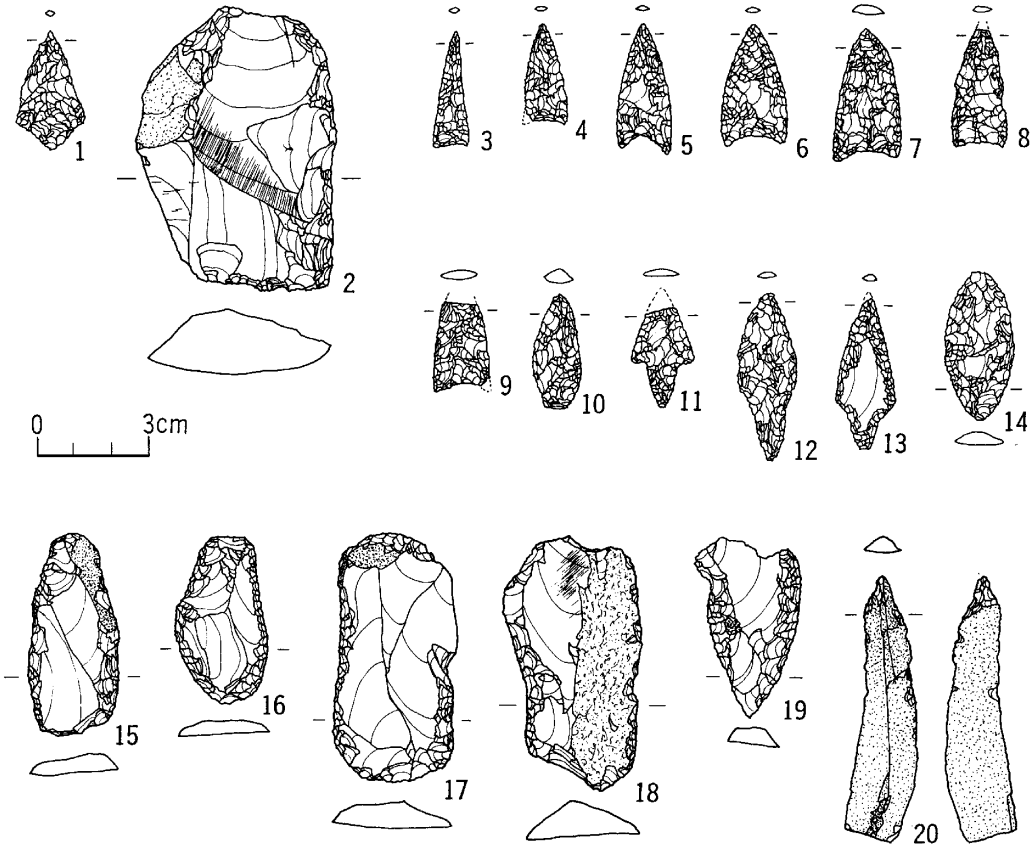
2は撚糸文を地文とし同一の原体を絡縄体状に圧痕する。3は幅広の無文帯に3条の縄線文



第159圖 26号竪穴埋土(1~10)出土土器



第160图 26号竖穴埋土(1~22)出土土器



第161図 26号竪穴床面(1・2)・埋土(3~20)出土石器

を施す。4は縄文を地文とし3条の縄線文が施される。口唇部には縄が押捺される。5~7も縄線文が施される。8は縄線文下に3条の沈線が施され、口唇部の内側には縄端圧痕文がある。9は縄線文を直線、波状に施し空間部に縄端圧痕文を加える。10は緑ヶ岡式系。11、12は幣舞式。13~16は晩期中葉であろう。17~21は晩期前葉であろう。17~20は内側から斜めに突瘤が施される。21は盛り上がりのある爪形文。22は縄文前期末のシュブノツナイ式。

石器は床面から第161図-1の有茎石鏃。2の削器が出土している。埋土からは3~9の無茎石鏃。10~14の有茎石鏃。15~19の削器。20の棒状原石がある。棒状原石は裏面の先端部が調整される。すべて黒曜石製である。

小 括

本竪穴は26a号と重複している。本竪穴のほうがあたらしいものの詳細な時期は不明である。

26a 号 竪 穴

遺 構 (第155図)

本竪穴は26号と重複する。北壁の一部は検出できなかったものの規模は長軸約6m、短軸約5.4mの東西に長い不整長方形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり東壁約45cm、南壁約23cm、西壁約25cm、北壁約25cmを測る。支柱穴と思われるのは東壁からやや内側の2本である。直径約18cm、深さ約14cmを測る。壁柱穴は東壁際の5本、南壁際の4本がほぼ等間隔に配置される。いずれも直径約10~20cm、深さ約10~18cmを測る。東壁際の床面には炭化材と茅材が混在した状態で検出された。茅材は直径約5mmである。炉跡は26号に破壊されたため認められない。

遺 物 (第162、163、164図、図版45-2~4、7・8)

すべて埋土から出土している。第162図-1は宇津内II b式。2~5は同II a式。3は突瘤下に幅広の隆帯が横走り、細長の「V」字形を呈した隆帯が2組施される。4は口縁部に小突起をもつ。縄線文を直線、山形に施す。5は鋭い6本の横走沈線が施される。6、7は宇津内系であろう。7は縄線文と縄端圧痕文で構成される。剥落しているが吊り耳をもつ。8~11は続縄文前葉であろう。8は沈線文下に刺突が施される。9は口唇部がわずかに外反し刻みが加わり、口縁直下は横撫でされている。10は幅広の無文帯上に縄線文が施される。11は半截状施文具を数条横走させ、縦にも施文させている。第163図-1~5は続縄文前葉であろう。1は半截状施文具による沈線を浅く施す。2は口縁部がわずかに外反し、口唇部を沈線が巡る。縄線文間に半截状施文具による刺突が連続する。3は波頂部から太い隆帯が垂下し小孔、刻みがある。口縁部と並行して沈線が施される。口唇部は鐺状に張り出し縄線文が施される。4は壺型土器。5も壺型土器である。6~12は晩期中葉であろう。6、7は縄線文。8~10は刺突文。11、12は縄文が施される。

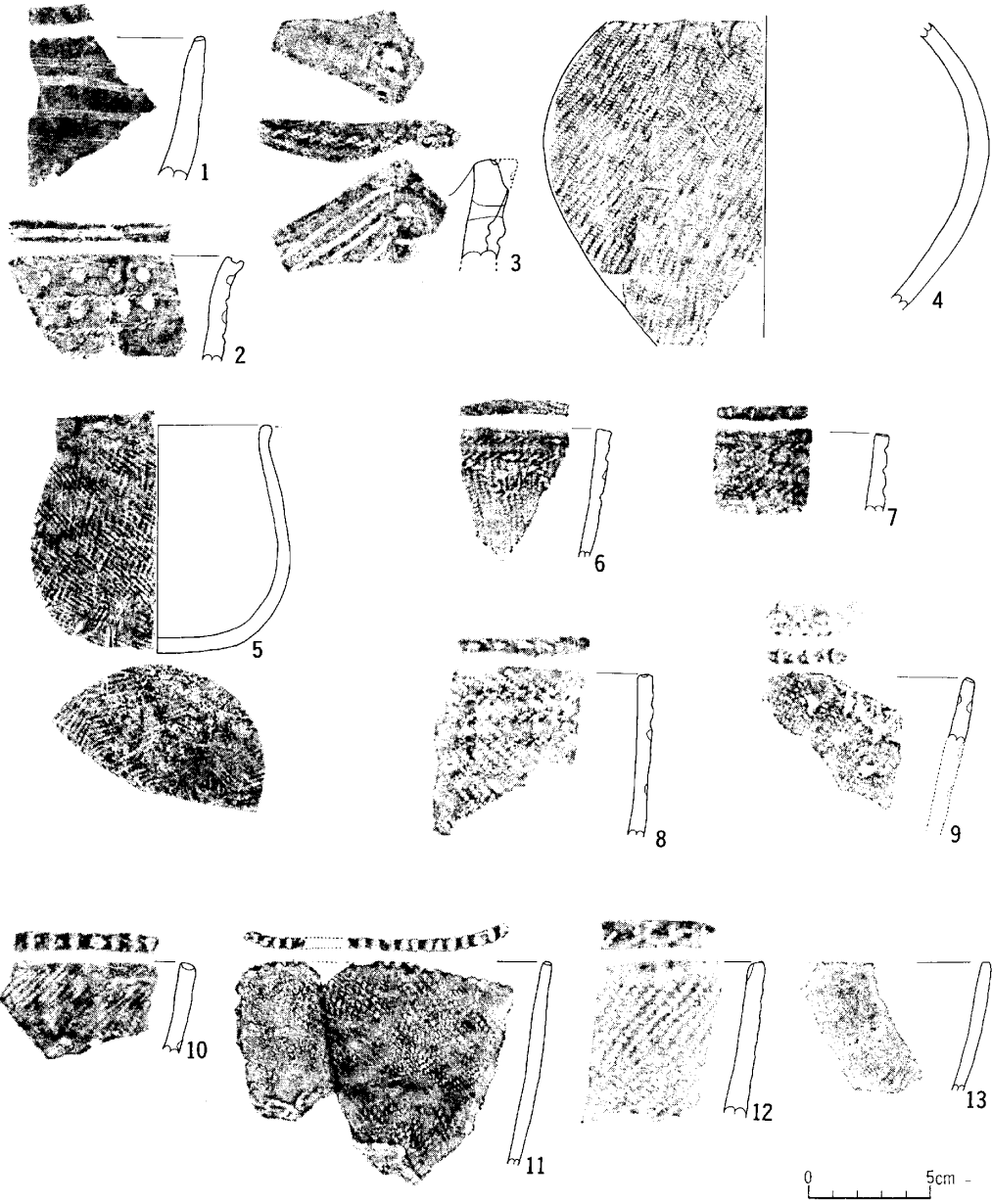
石器は床面から第164図-1、2がある。1は両面加工ナイフである。主要剥離面側は左側縁部にのみ刃部がある。2は側削器。いずれも黒曜石製。埋土出土の3~7は無茎石鏃。8、9は有茎石鏃。10は石槍。11~14は側削器。12はノッチ状の刃部をもつ。15~18は搔器。19は錐。すべて黒曜石製である。

小 括

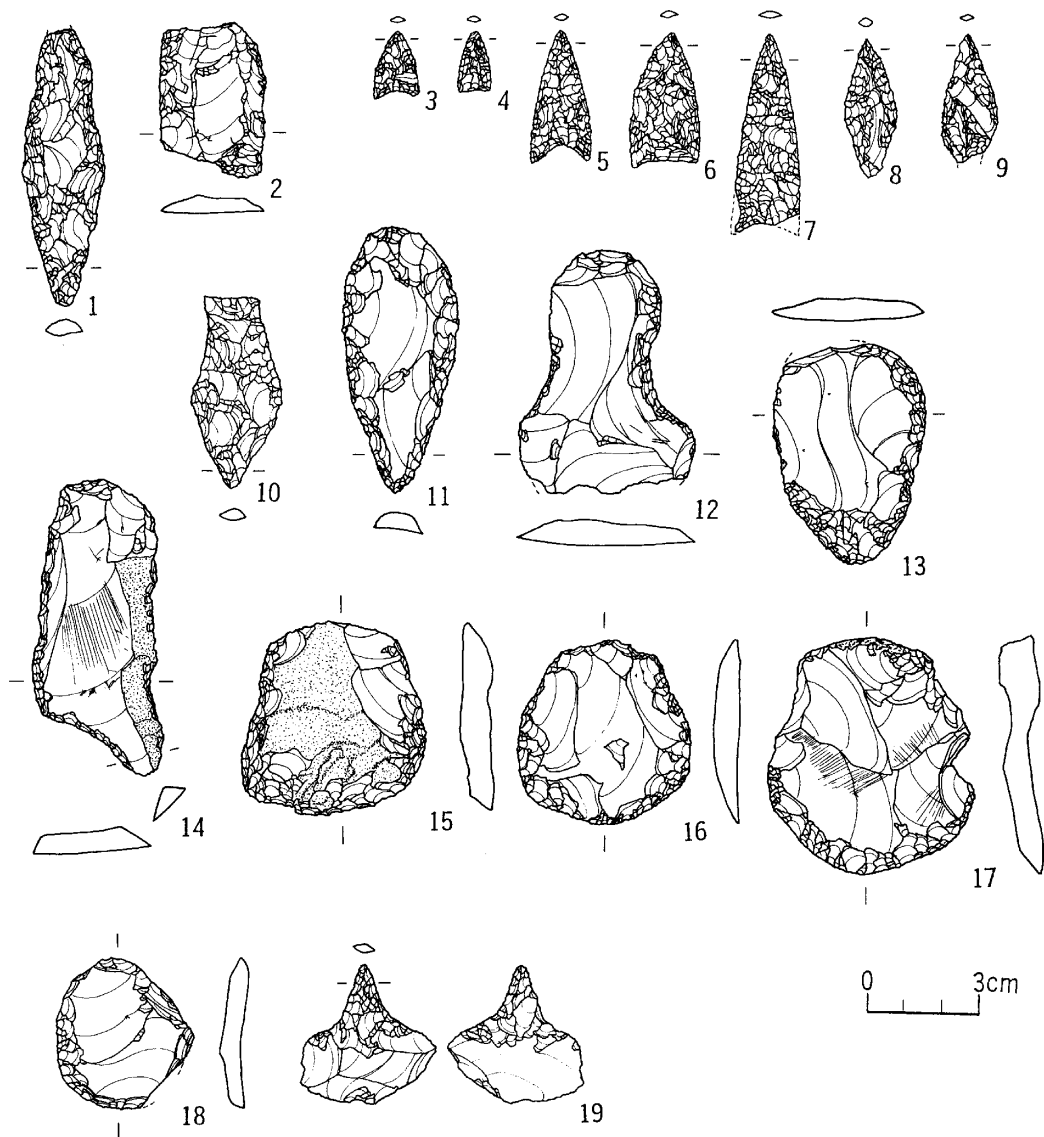
本竪穴は26号と重複するもので新旧関係は26号より古いが詳細な時期は不明である。



第162図 26 a 号竖穴埋土(1~11)出土土器



第163图 26 a 号竖穴埋土(1~13)出土土器



第164図 26 a号竖穴床面(1・2)・埋土(3~19)出土石器

27 号 竖 穴

遺 構 (第155図)

本竖穴は25号竖穴の北側約30cmにある。竖穴の全体は発掘区域外にあるため検出できたのは西壁の一部分である。したがって規模・形態は全く不明であり、遺物も出土していないため時期も不明である。

28号竪穴

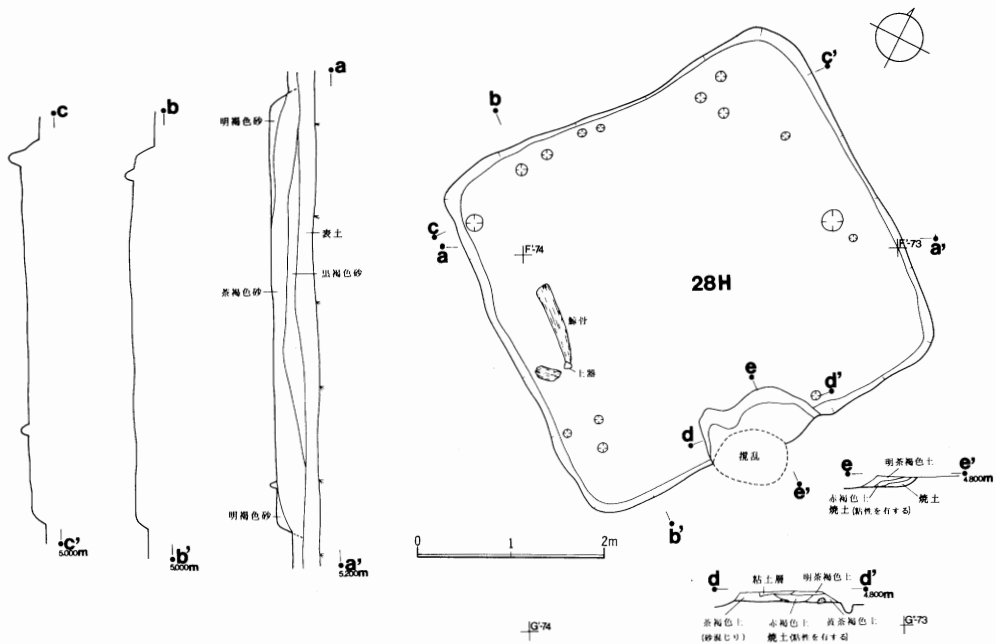
遺構 (第165図、図版46-1)

本竪穴はG'73、F'73グリッドに位置する。形態は一辺4.1mの方形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。黄褐色粘土を用いたカマドは東壁の中央部に構築されている。煙道が攪乱を受けているため正確な長さは不明であるが、外側にあまり伸びない様である。燃烧部の赤褐色土は粘性を有し微細な骨片が見られる。明確に支柱穴とされるものは検出できなかった。壁柱穴は直径約7~10cm、深さ約9~12cmのものが各壁際にある。特に西壁では等間隔に配置する傾向が認められる。鯨骨は床面から約10cm浮いた状態で検出されこれとほぼ同一レベルで第166図-2の小型土器が出土した。炉跡は認められなかった。

遺物 (第166、176図-1~3、図版46-2~5)

すべて埋土から出土している。擦文土器は第166図-1~7がある。1は脚部の低い無文の高杯であり、器面は刷毛により調整されている。2は口縁部に3条の沈線が施され、器面は刷毛により調整される。3は底部から口縁部にかけて大きく開き、横走る沈線間に短刻線が雑に施される。4は口縁部が内湾し3と同様に刻線が施される。底部にも3本の沈線が施される。8は紡錘車。重量80m。9は宇津内式。10は縄文晩期前葉。11は縄文後期堂林式。

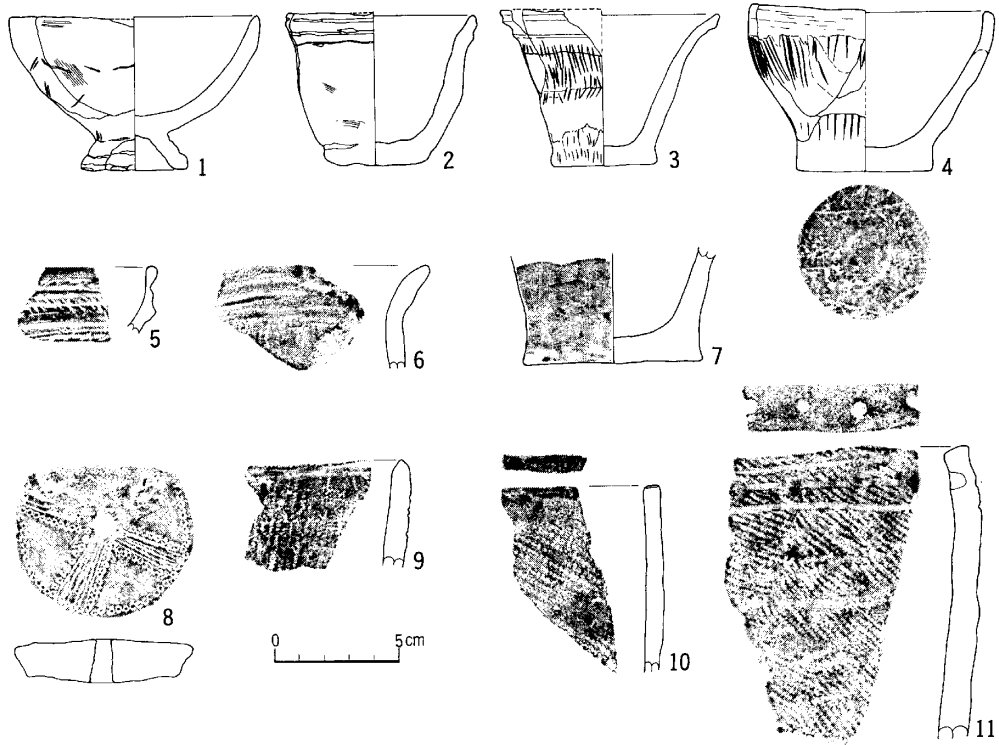
石器は第176図-1の有茎石鏃。2の両面ナイフ。3の側削器がある。1は頁岩製、他は黒曜石製。



第165図 28号竪穴平面図

小 括

本竪穴は一辺約4.1mの方形を呈した擦文期のものである。カマドは東壁に構築されている。詳細な時期は不明であるが第166図-1～4の小型土器は藤本編年h期、宇田川編年後期に比定され、この竪穴に近いものと思われる。



第166図 28号竪穴埋土(1～11)出土土器

29 号 竪 穴

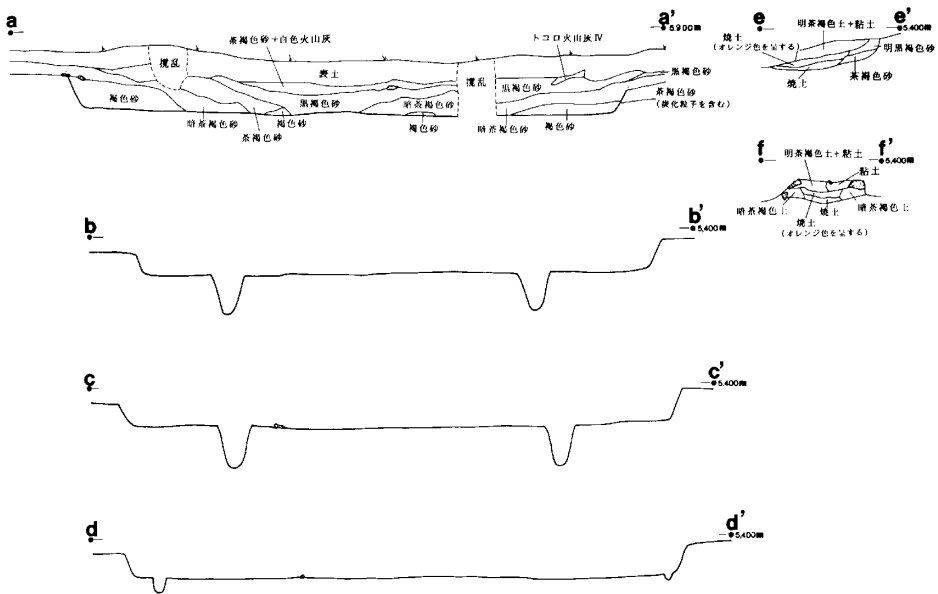
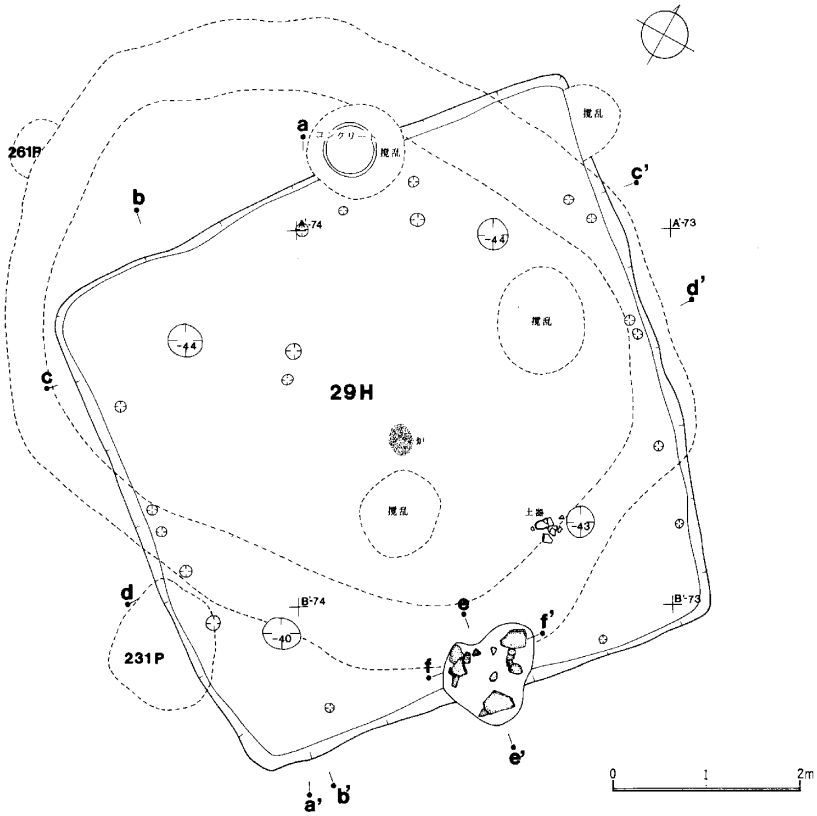
遺 構 (第167図、図版47-1)

本竪穴はA'74グリッドにある。表土下には樽前a火山灰(トコロ火山灰IV)が茶褐色砂中に溶け込む状態で堆積する。形態は一辺約6mの方形を呈するが東壁がやや狭く、それに対応して東壁側の2本の主柱穴の間隔も狭くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり確認面から約30cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。両袖部、煙道口は角礫を用いており遺存は良好である。燃焼部の焼土は2層に分層され、オレンジ色を呈した焼土は粘性を有し微細な骨片が検出された。煙道口は垂直に立ち上がる。炉跡は中央部にある。主柱穴は直径約30~40cm、深さ約43cmのものが4本ある。壁柱穴は西壁隅の一部がないものの各壁ともほぼ等間隔に配置されている。直径約10~15cm、深さ約7~16cmである。

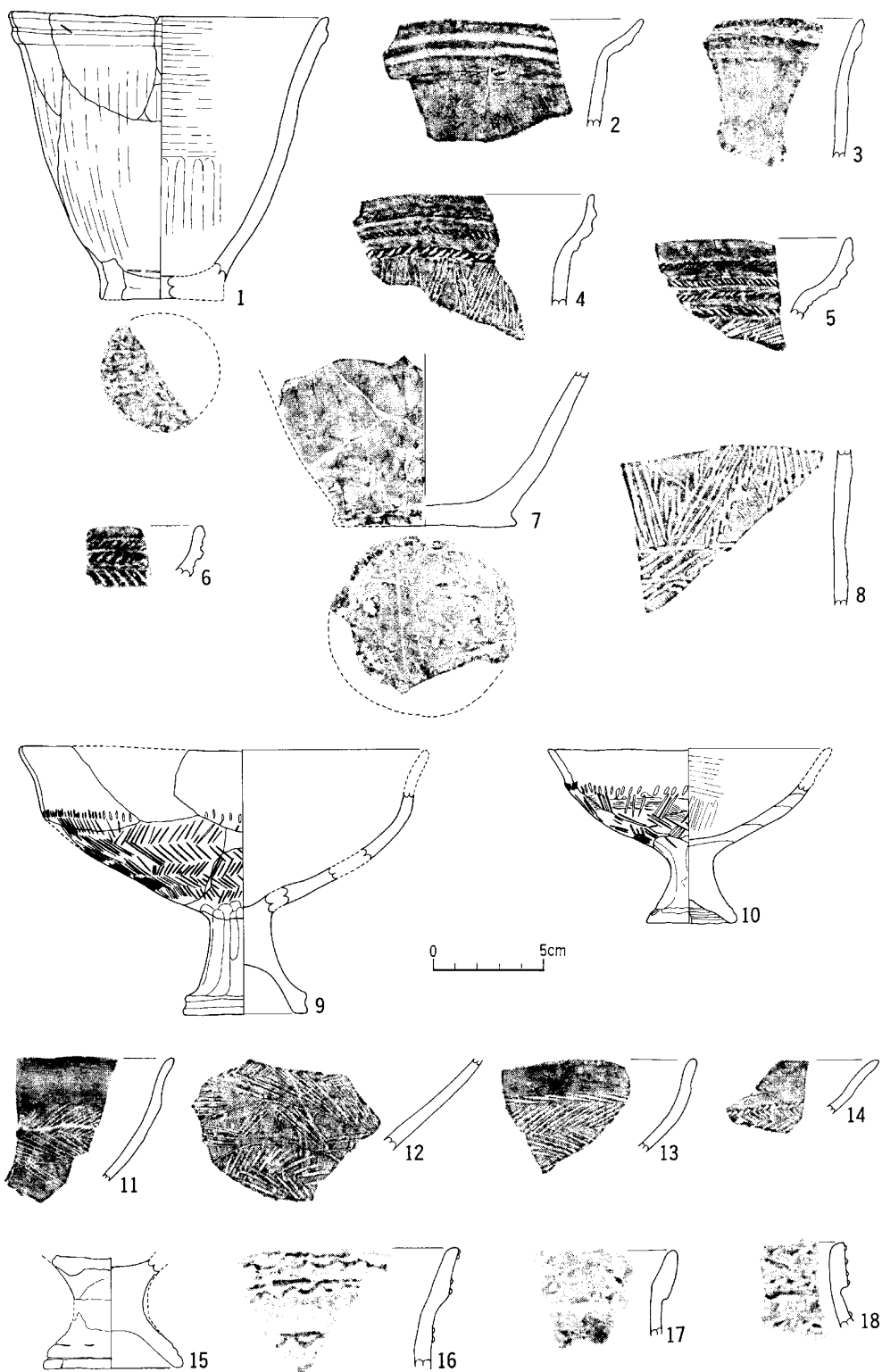
遺 物 (第168、169、170、176図-4~13、図版47-2~5)

床面から第168図-1の無文小型土器のみ出土している。器壁は篋により調整され底部は板目状圧痕が残る。埋土からは2、3の刷毛により調整された無文小型土器。4~6は中型鉢形土器。4は鋸歯状の刻線が施される。7は中型鉢形土器であり底部は張り出す。8は大型鉢形土器である。刷毛により調整され鋸歯文、斜めの刻線が施された複段文様である。9~15は高杯。9は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。器面は細い矢羽根状の刻線が施される。10は刷毛により器面調整された後に斜めの刻線、矢羽根状の刻線が施される。11、12は同一個体である。極めて細い刻線が施される。16~18はオホーツク文化ソーメン状貼付文。第169図-1~3は後北C₂式。1は本竪穴の床面精査中に出土した。口径36cm、器高41cmの大型土器である。口縁部は内湾し、波状を呈する。微隆起線で区画された帯縄文が同心円状に施され、文様帯は幅広の隆起帯で区画される。微隆起線間の無文部には三角形の列点文が重鎮される。第170図-1、2は後北C₂式。3~6は宇津内IIb式。6は口縁部に鐺状の太い隆帯が施され、細い隆帯で連結される。7、8は宇津内IIa式。9は口縁部が外反する。口縁の無文帯には貫通した突瘤が施されるが、突いた際の盛り上がりは内面にで残存しており外側から突かれた可能性が高い。突瘤下に縄線文、内面に短縄文が施される。10は原体の緩い撚糸文を地文とし口縁下に縄短圧痕文が施される。9、10は続縄文前葉であろう。11は器壁に斜めから円形刺突が施される。縄文晩期中葉であろう。12は口縁下に3条の縄線文が横走する。同種のもは縄文晩期にもみられるがこの土器の胎土は晩期のものよりも脆弱であり器壁も薄くあるいは続縄文前葉の可能性もある。13は縄文後期堂林式であろう。

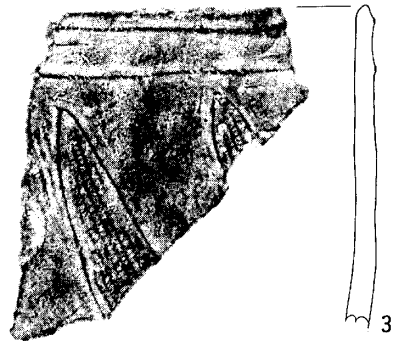
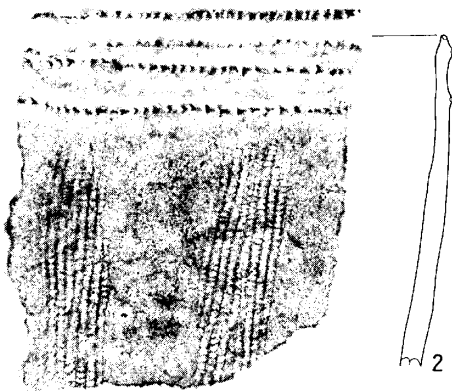
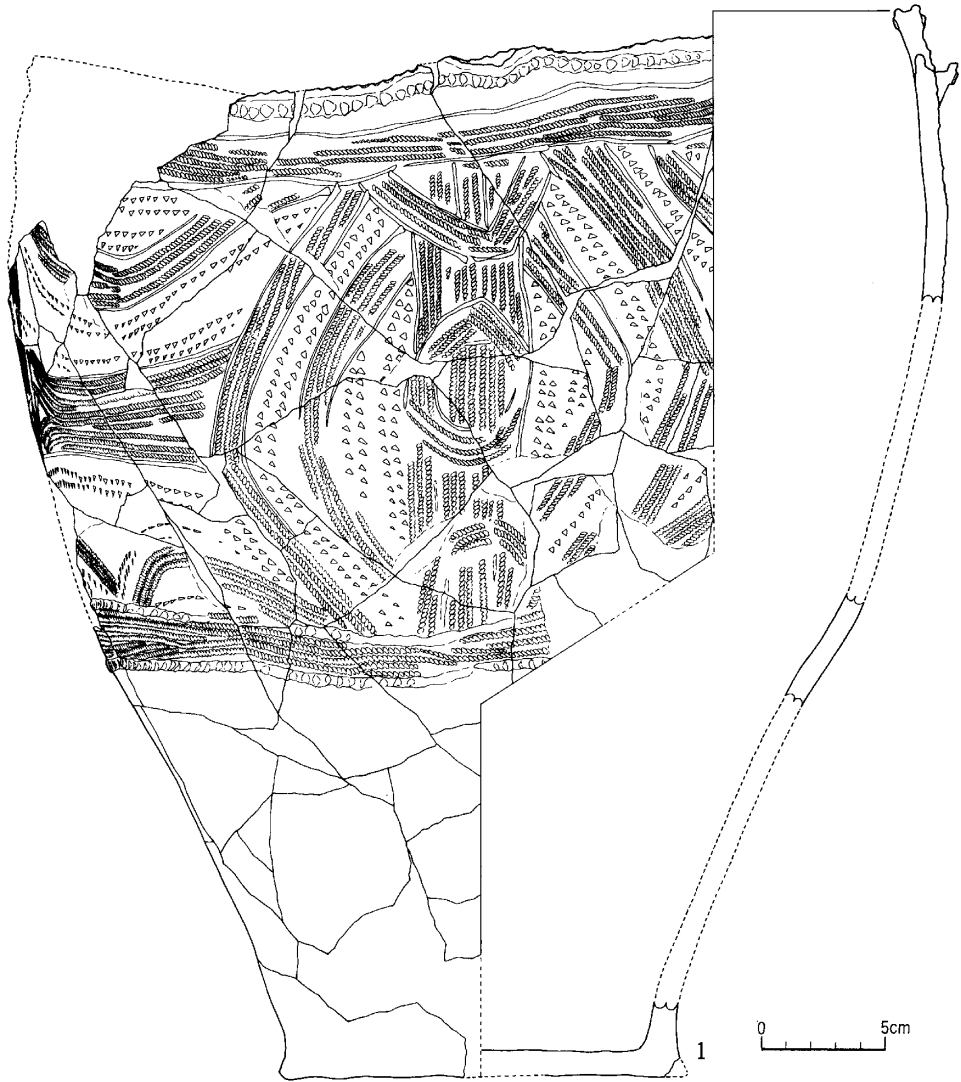
石器はすべて埋土から出土している。第176図-4は無茎石鏃。7は片面加工、9は両面加工のナイフであり他は側削器。すべて黒曜石製である。



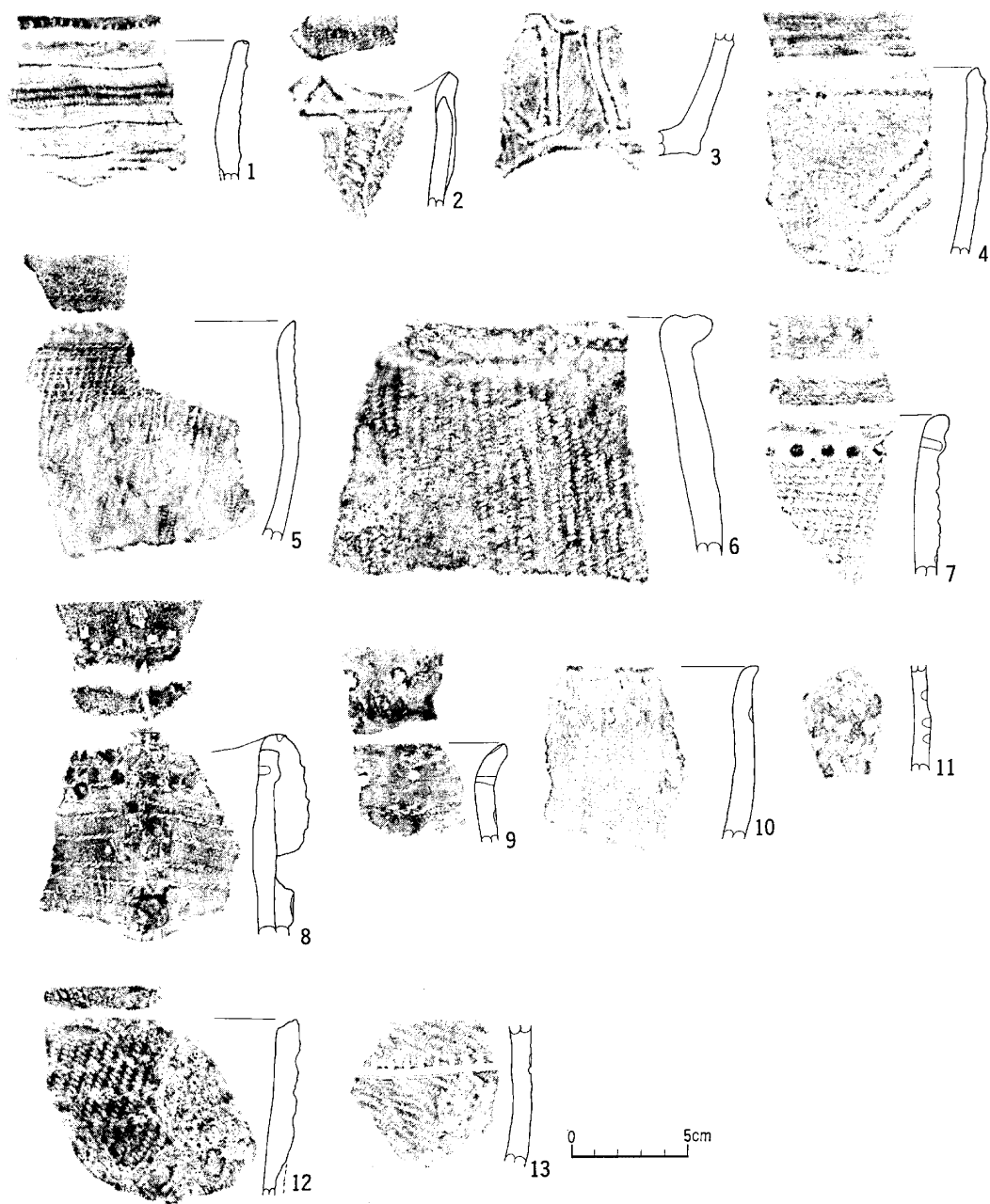
第167図 29号竖穴平面図



第168图 29号豎穴床面(1)・埋土(2~18)出土土器



第169図 29号竖穴埋土(1~3)出土土器



第170图 29号豎穴埋土(1~13)出土土器

小 括

本竪穴は一辺6mの方形を呈する。カマドは東壁の中央部に構築されている。床面から擦文期の無文土器が出土している。詳細な時期は不明であるが宇田川編年の擦文後期に比定されよう。

29a 号 竪 穴

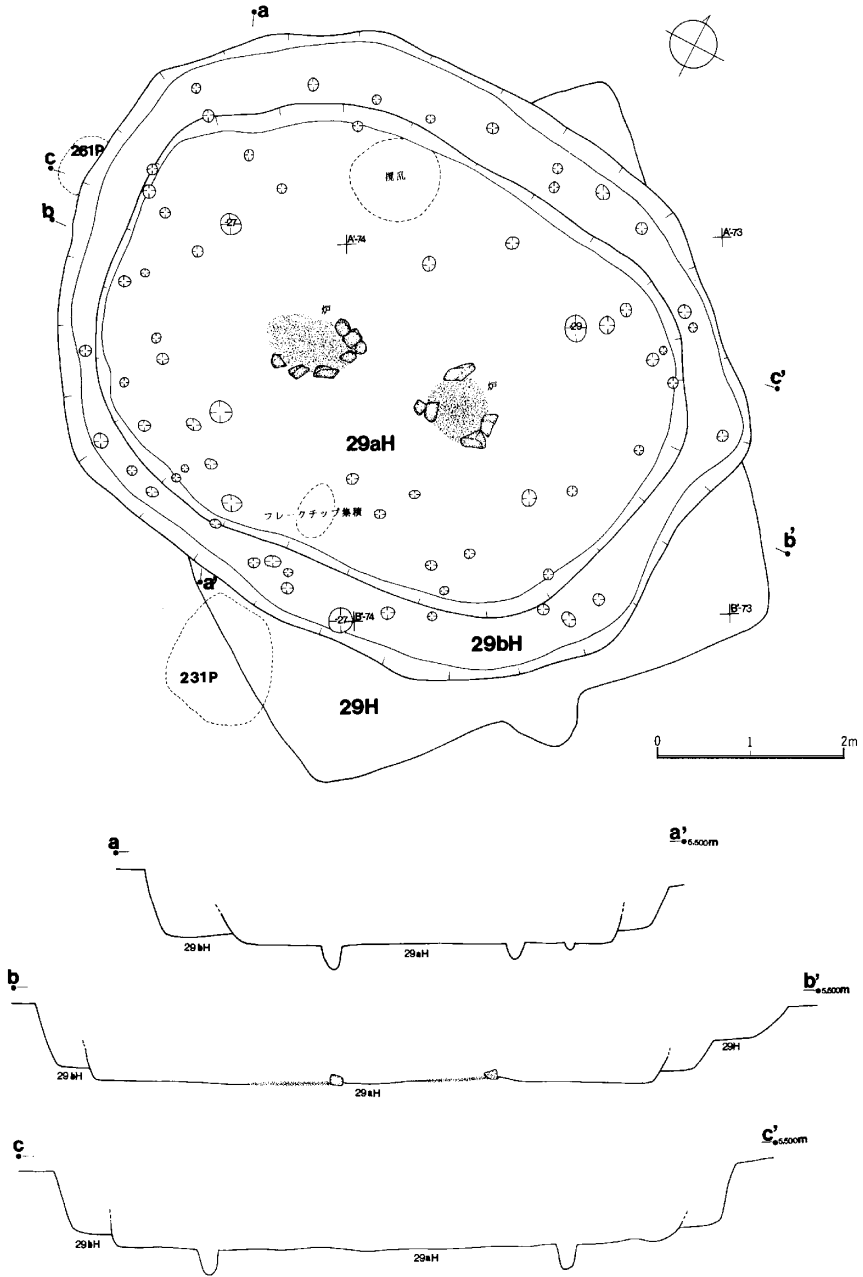
遺 構 (第171図、図版48-1)

本竪穴は29号竪穴の床面精査中に汚れた明茶褐色砂が堆積していたため発見した。29号竪穴のセクションラインに沿って掘り下げたところ粒子の粗い砂層が現れた。床面と判断し任意にサブトレンチを設定しつつ各壁の検出を行った。壁は明褐色砂層を面としているが、詳細に観察すると29a号の壁裾は床面から続く粒子の粗い砂層であり、床面から約20cmでは消失し炭化粒子を含む汚れた褐色砂の面が存在し別の遺構の存在が推測された。このためサブトレンチを伸ばし別の遺構の壁面検出と新旧関係の確認をおこなった。

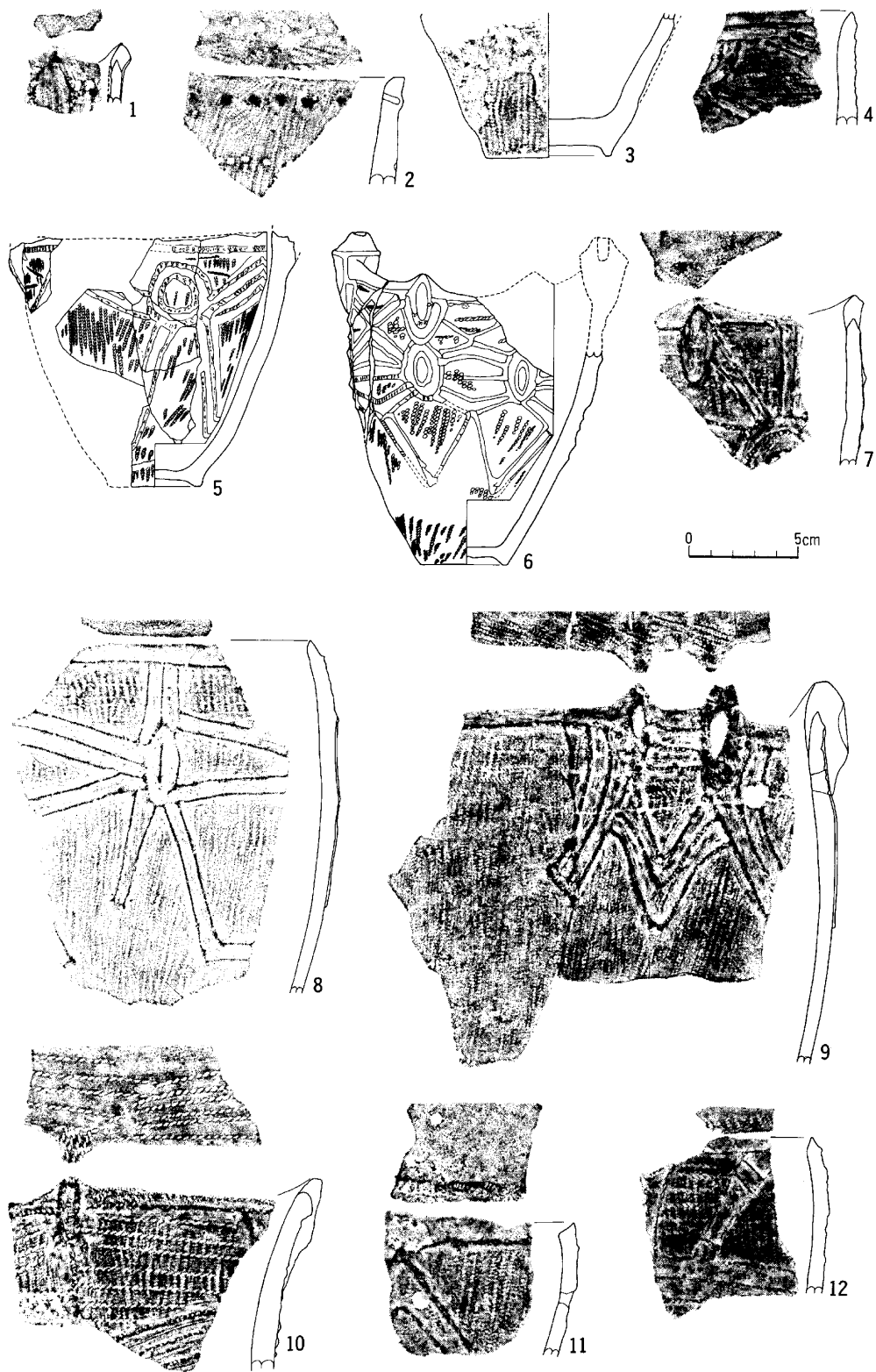
本竪穴の規模は長軸約6.2m、短軸約4.5mを測る。壁隅は丸くなり、形態は楕円形とするより隅丸長方形とすべきものである。壁高は29号の床面から約15cmを測り各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。床面には2基の石囲炉が構築されている。いずれも砂岩質の角礫を使用しているが石は完全に囲まれず一部が欠失する。床面は良く焼けており両方に多量の骨片が含まれている。支柱穴は石囲炉の近い部分に4本ある。直径約15~30cm、深さ約18~27cmである。壁柱穴は特に規則性は認められないものの支柱穴と壁の間が最も多い。直径約10~15cm、深さ約6~18cmである。なお、図示していないが西壁際の上部から床面近くにかけて大型角礫を主体とした集積が流れ込む状態で出土した。壁上部からこの様な例は21号竪穴の北壁にも認められている。本例では床面に密着していないため廃棄と考えたが今後注意する必要がある。

遺 物 (第172、173、174、176図-14~31、177図-1~3、図版48-2・3)

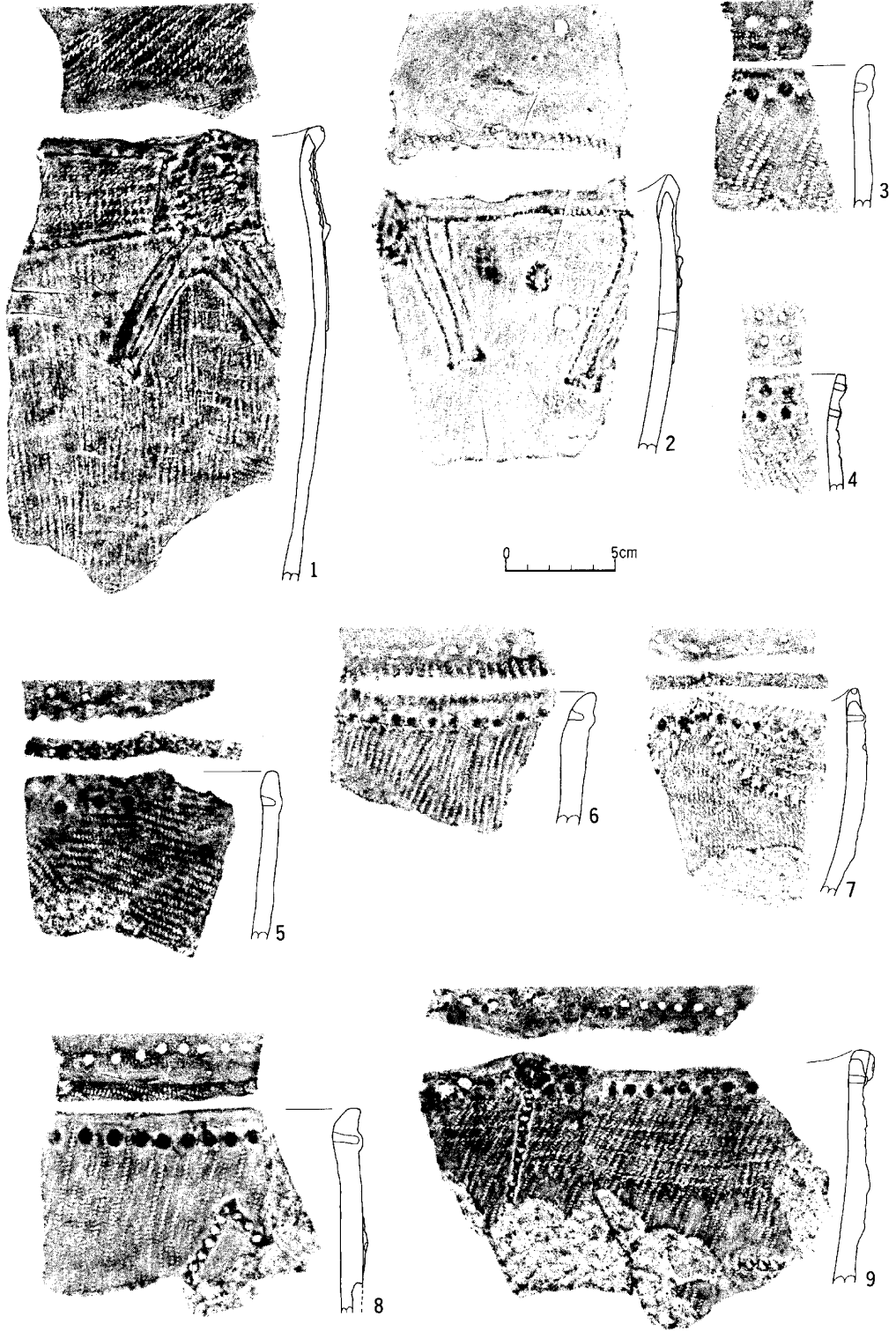
床面からは第172図-1~3が出土している。1は宇津内II b式。2は同II a式。3は宇津内式の底部。4は後北C₁式。5~12は宇津内II b式。5は小突起及び小突起間に同心円文を施し隆帯で連結させる。6は大型突起の下部に1個、2個の小型突起の下部に2個の同心円文を施し隆帯で連結させる。第173図-1、2は宇津内II b式。3~9は同II a式。5は縄文が横走する。7は小突起から縄線文が「八」字状に施されそれに沿って刺突が加えられる。第174図-1は宇津内II a式。口径約36cmの大型土器。吊り耳及び小突起から隆帯が垂下する。2は口縁部が外反し、口唇部に刻みがある。無文の頸部下に半截状施文具による刺突が巡る。3は縄線文が縦横に施され、口唇部に刺突が加わる。4~6は緑ヶ岡式系であろう。7~13は晩期中葉であろう。7、8は縄端圧痕文、9~11は刺突文、12は縄文が施される。13は内側に縄線文と斜めの刺突が施される。



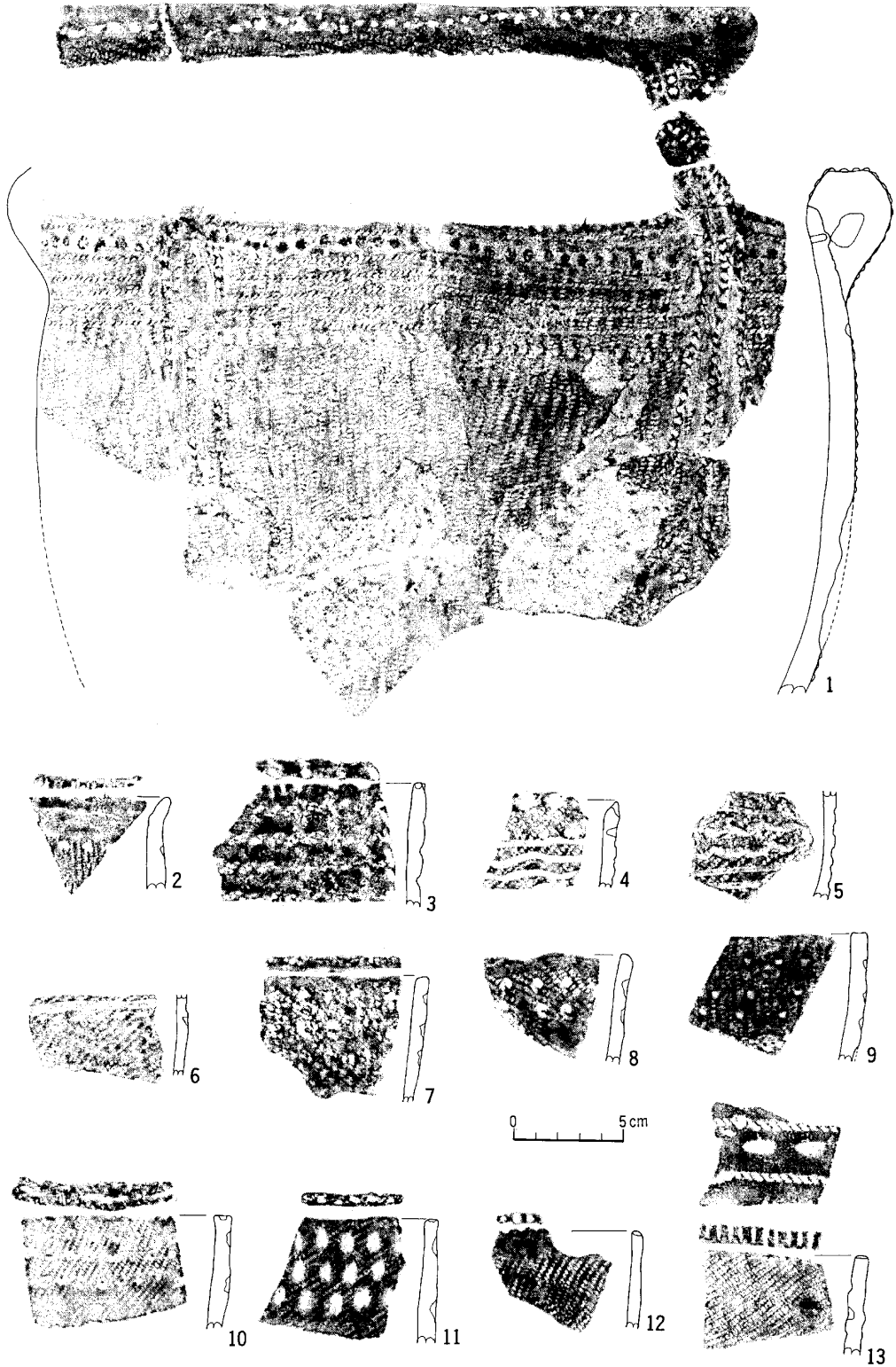
第171図 29 a号竪穴、29 b号竪穴平面図



第172图 29a号竖穴床面(1~3)・埋土(4~12)出土土器



第173图 29a号豎穴埋土(1~9)出土土器



第174図 29a号竪穴埋土(1~13)出土土器

石器は床面から第176図-14の安山岩製の側削器がある。埋土からは15～31の各種のものがある。15～19は無茎石鏃。20は有茎石鏃。21、22は両面加工ナイフ。24～29は側削器。28は柄部をもつ。23、30、31は搔器。すべて黒曜石製である。第177図-1、2は叩き石。3は窪み石。

小 括

本竪穴の床面から小破片であるが宇津内II a、II b式が出土している。床面近くからは埋土出土とした宇津内II b式が最も多く第172図-2は何らかの原因で混入したのであろう。床面からの出土点数が少なく確実ではないが本竪穴の時期は宇津内II b式と思われる。

29b 号 竪 穴

遺 構 (第171図、図版48-1)

本竪穴は29a号竪穴に切られているため内部の構造は不明である。形態は29a号同様の隅丸長方形を呈するが東壁中央部がわずかに凹状となる。規模は長軸約7.5m、短軸約6mを呈する。壁は29a号の床面から約16cmを測る。壁柱穴は西壁、東壁の中央部で検出できなかった以外はほぼ等間隔に配置されている。直径約10～15cm、深さ約5～20cmを測る。

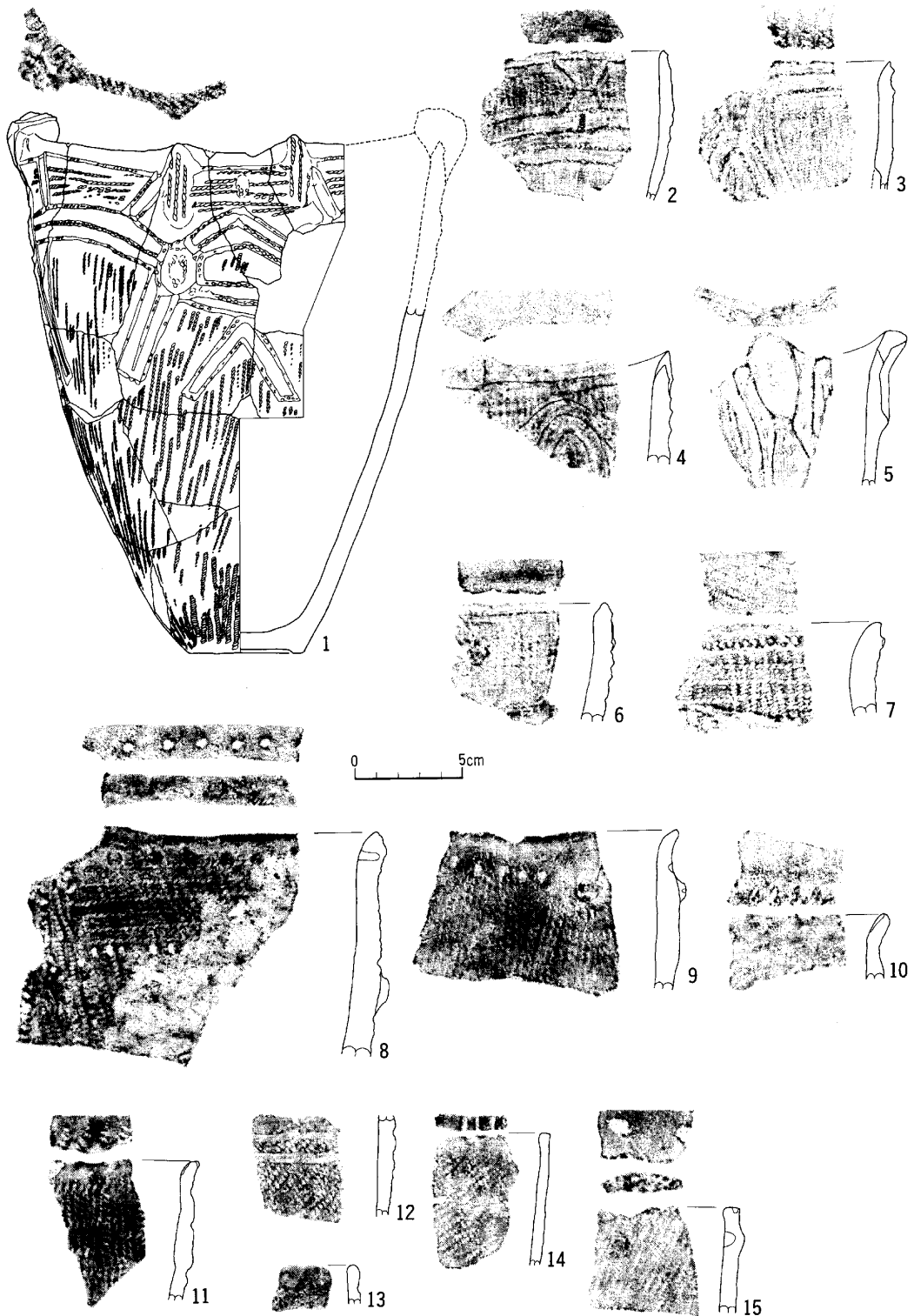
遺 物 (第175、177図-4～14、図版48-4)

すべて埋土出土である。第175図-1～7は宇津内II b式。1は吊り耳の下部及び吊り耳間の小突起には連結した同心円文が施され、小突起には縄線が押捺される。8は宇津内II a式。9～12は続縄文前葉であろう。9は口縁部がわずかに外反する。縄端圧痕文が横走し円形貼付文がある。10も口縁部が外反し内側に縄端を押捺する。11は第174図-3と同一個体である。12は幅広の浅い沈線が施される。13、14は晩期中葉、15は同前葉であろう。

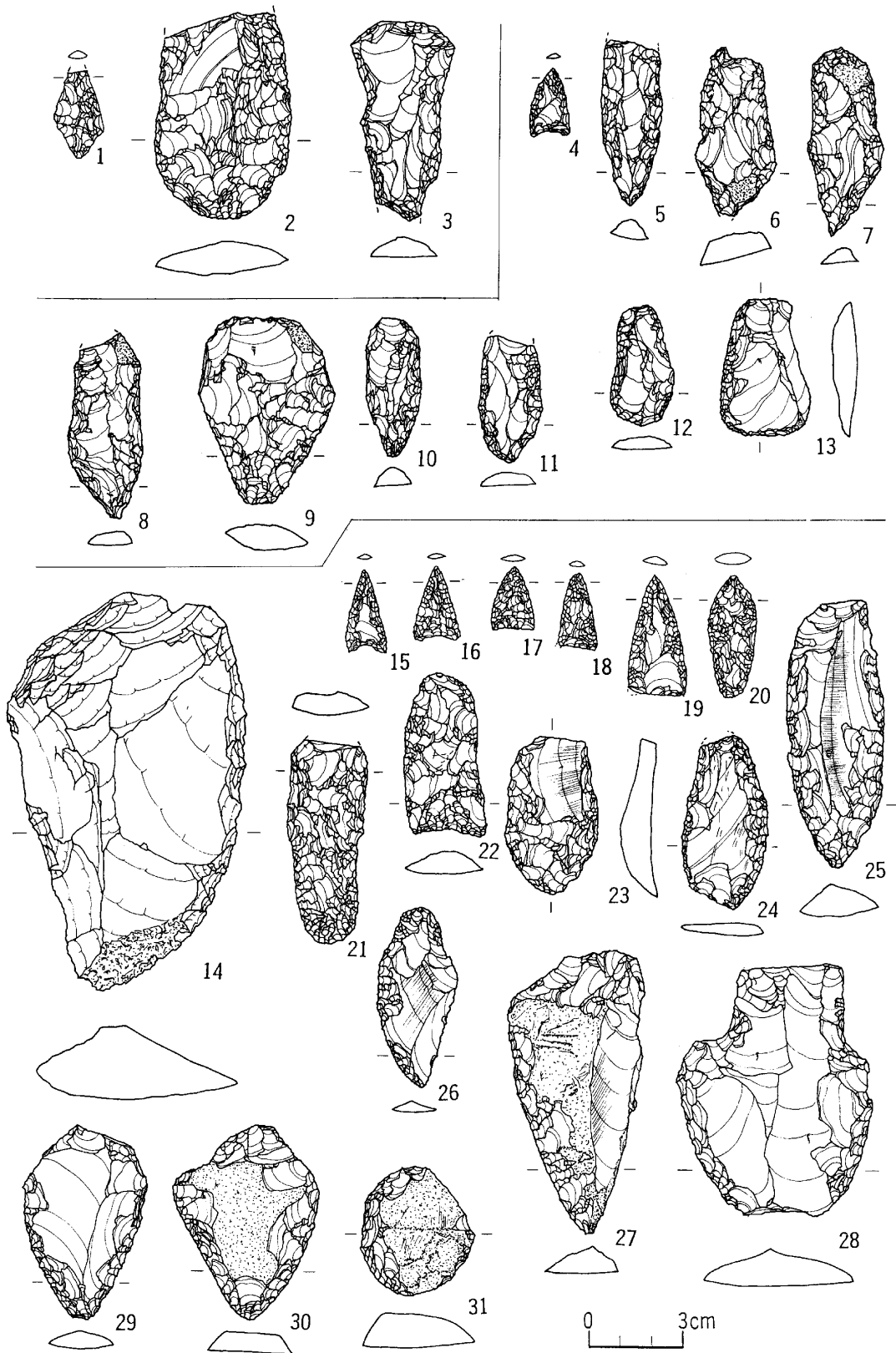
石器は第177図-4～14がある。4は細長い鏃身の無茎石鏃。5は基部が欠失した石槍。6～8は両面加工ナイフ。9～12は側削器。11、12の刃部は薄く11は主要剝離面側にもノッチ状の加工をもつ。8の頁岩製を除き黒曜石製である。13は磨製石斧。青色泥岩製。14は叩き石。両面、両端部にキズ状の使用痕がある。

小 括

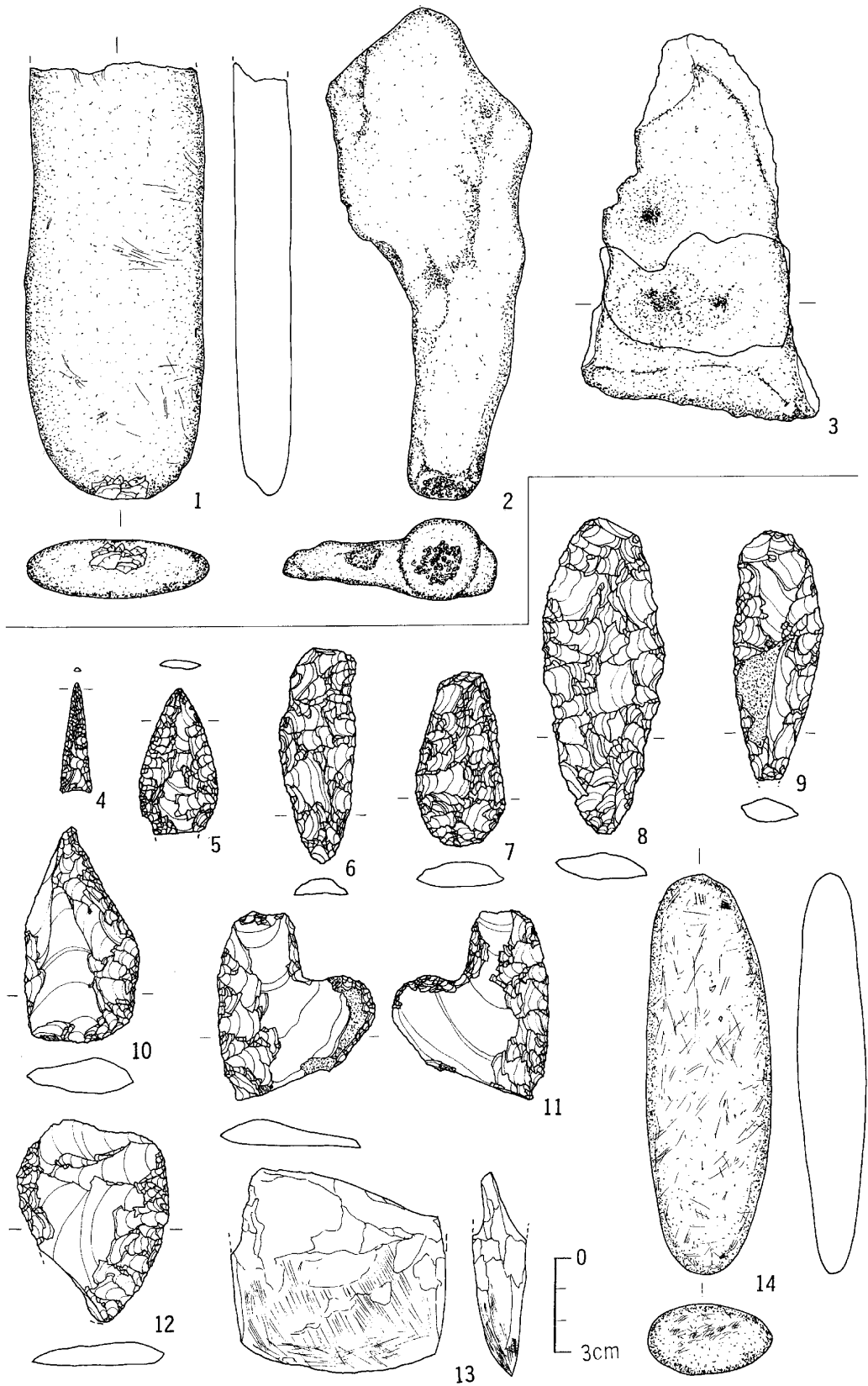
時期は切り合い関係から29a号より古いことは確実である。



第175图 29b 竖穴埋土(1~15)出土土器



第176图 28号竖穴埋土(1~3)、29号竖穴埋土(4~13)、29a号竖穴床(14)·埋土(15~31)出土石器



第177图 29 a 号竖穴埋土(1~3)、29 b 号竖穴埋土(4~14)出土石器

30号竪穴

遺構 (第178図)

本竪穴は31号竪穴の南側、E'73、74グリッドにある。形態は一辺約2.70mの方形を呈する。II層の茶褐色砂層から浅く掘り込まれ、東側に向かう緩い傾斜面にあたる東壁、北壁は検出できなかった。南壁と西壁は確認面から約30cmを測る。炉跡も検出できなかった。

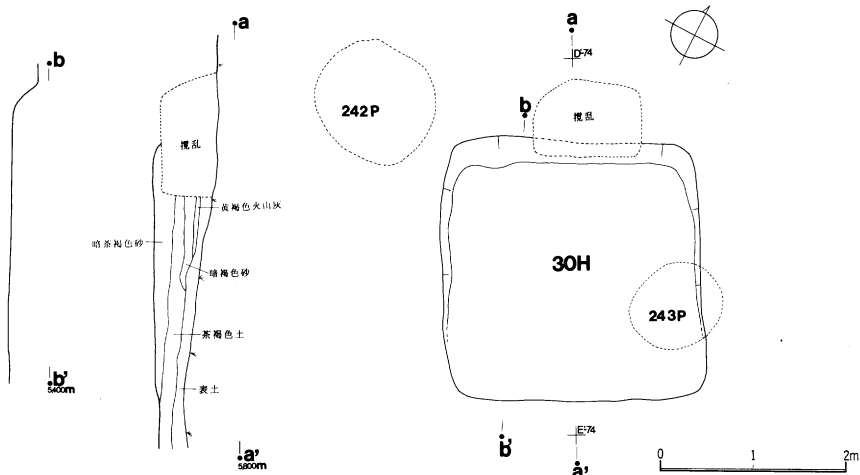
遺物 (第179、180、185図-1・2、図版48-5~8)

遺物はすべて埋土から出土している。第179図-1~4は高杯。いずれも器面は矢羽根状の刻線が施される。3の脚部は捲れ上がる。5は無文の中型鉢形土器。口縁部は2条の横走沈線が施され器面は篋により調整される。6、7は無文である。口縁部に2条の横走沈線文が施され、6の口縁部は外反せずほぼ垂直に立ち上がる。8は無文の紡錘車。60g。9は後北C₂式。10は宇津内系の底部。第180図-1、2は続縄文前葉。1は口縁部に幅広の突起をもつ。2は円形刺突を3段施す。3~6は幣舞式。7は晩期前葉。

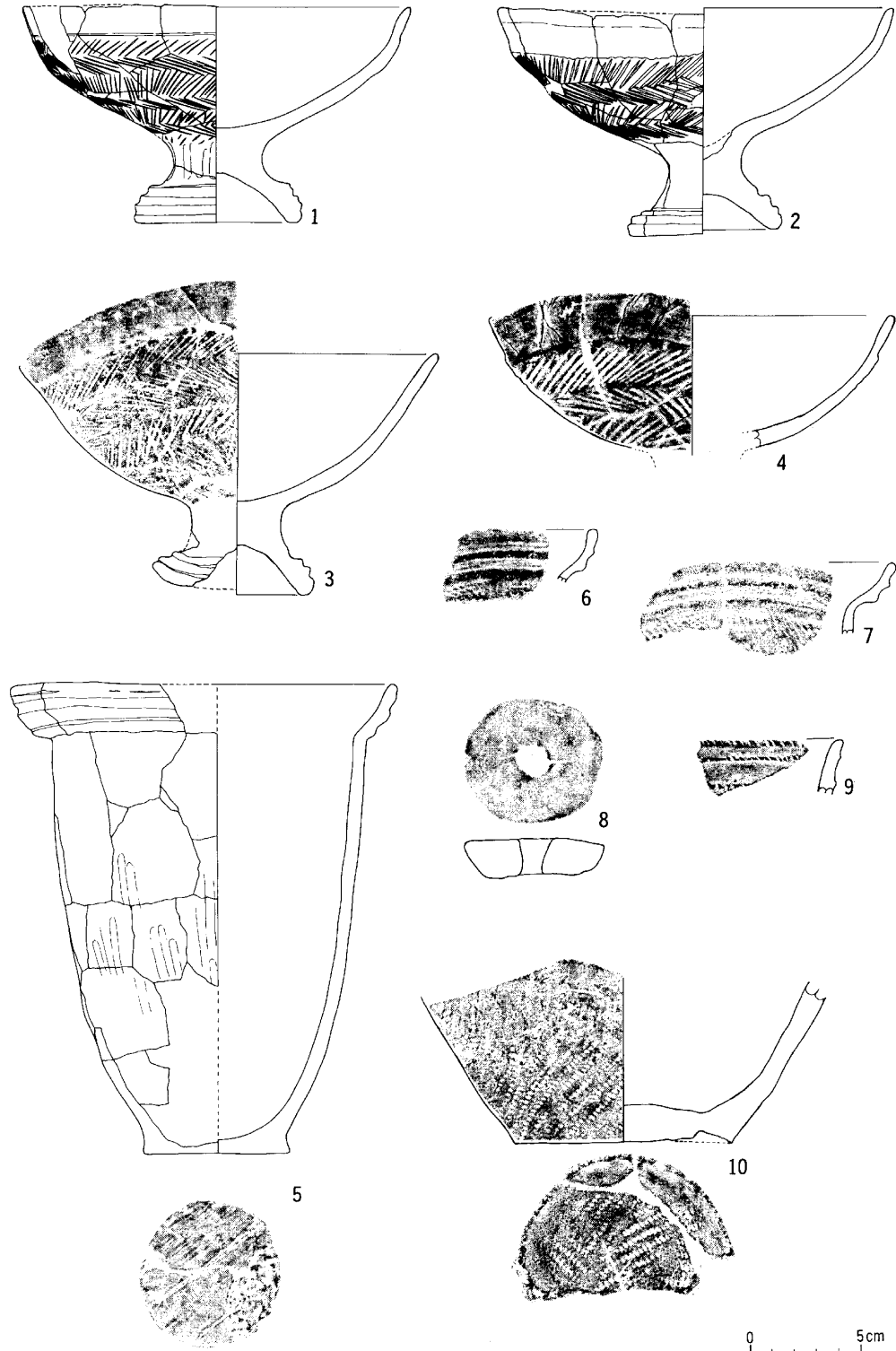
石器は第185図-1の黒曜石製の円形搔器。2の青色泥岩製の石斧が出土している。

小括

本竪穴は直径約2.70mの方形を呈する。時期は擦文期であろう。



第178図 30号竪穴平面図



第179図 30号竖穴埋土(1~10)出土土器



第180図 30号竪穴埋土(1~7)出土土器

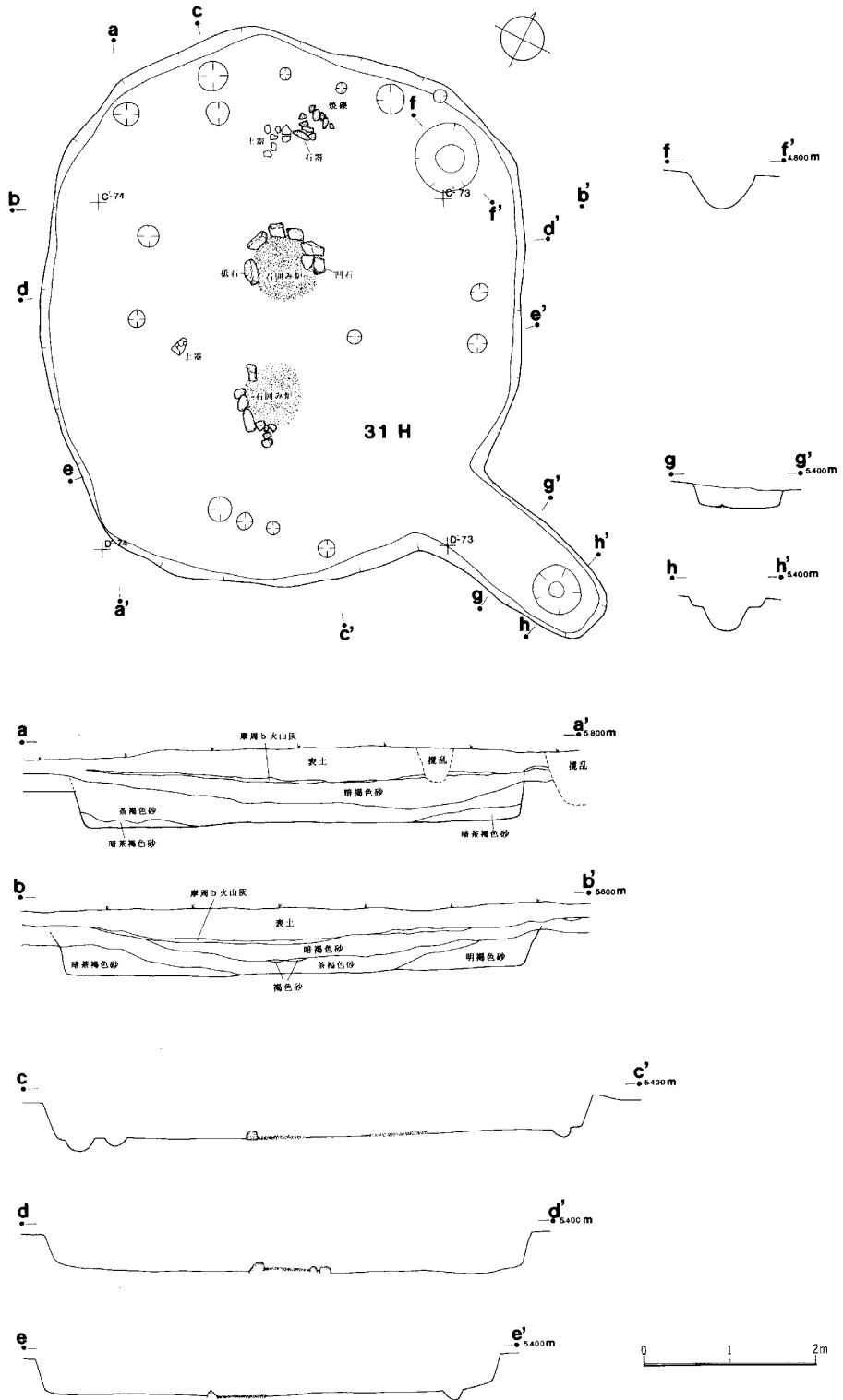
31号竪穴

遺構 (第181図、図版49-1)

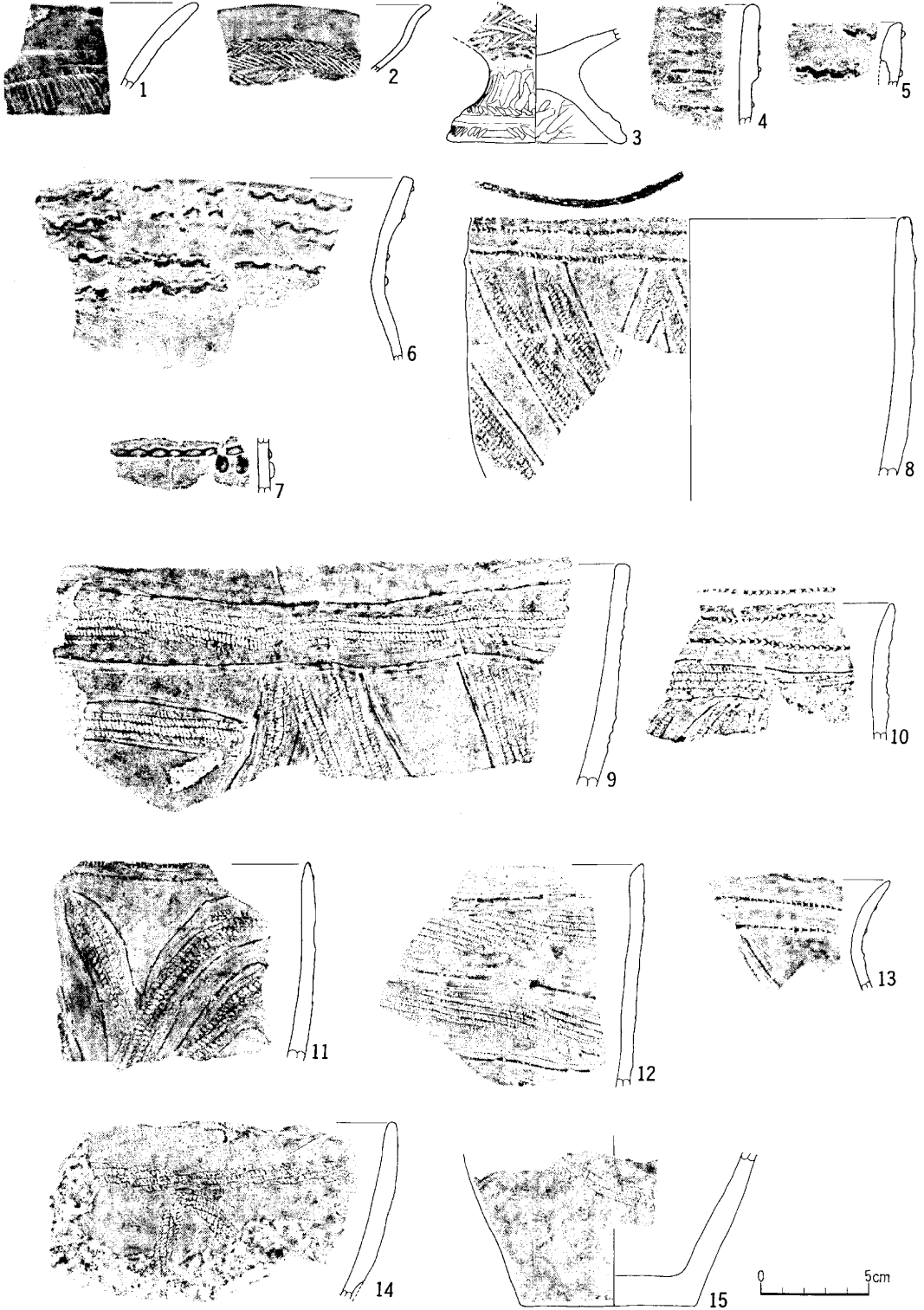
本竪穴は29号竪穴の調査で発掘区を拡張した最後に発見した。表土を剝土すると摩周b火山灰（トコロ火山灰III）が東側に向かい緩く堆積し、この火山灰を取り除くと暗褐色砂の面が現れた。暗褐色砂中からは後北C₂・D式の土器が顕著に認められ、第185図-3~17(図版49-2~16)の小型石鏃が竪穴のほぼ中央部からまとまって出土した。この周囲には微細な骨片も散在している。炉跡は認められなかったが平成7年度までの調査で古い時期の窪みを利用した生活面が多く発見されており、本竪穴例も後北C₂・D式期の生活面と考えられる。この面を掘り下げると茶褐色砂が堆積し31号竪穴床面の褐色砂に続いている。31号竪穴は長軸約6.5m、短軸約5.5mの楕円形を呈し東壁隅に幅約1m、長さ約2mの張り出しをもつ。壁高は確認面から約45cmを測る。床面は南壁側がわずかに傾斜する。北壁に近い位置から4点の円礫が土器、石器と出土している。これらは床面に近い位置から出土したもので本竪穴に伴う可能性がある。円礫は火熱を受け、土器は第183図-8、9のもので時期は宇津内II b式である。焼けた竪穴中央部には2基の石囲み炉がある。いずれも角礫を用いているが礫は完全に周らない。炉の内部では焼土の上に微細な骨片を含む粘性を有した黄褐色土が堆積する。支柱穴と思われる直径約12~15cm、深さ約14~19cmのものが北壁4本、南壁2本あるが特に規則的でない。補助穴は直径約8~10cm、深さ約5~13cmを測る。

遺物 (第182、183、184、185図-3~43、図版49-2~16・17)

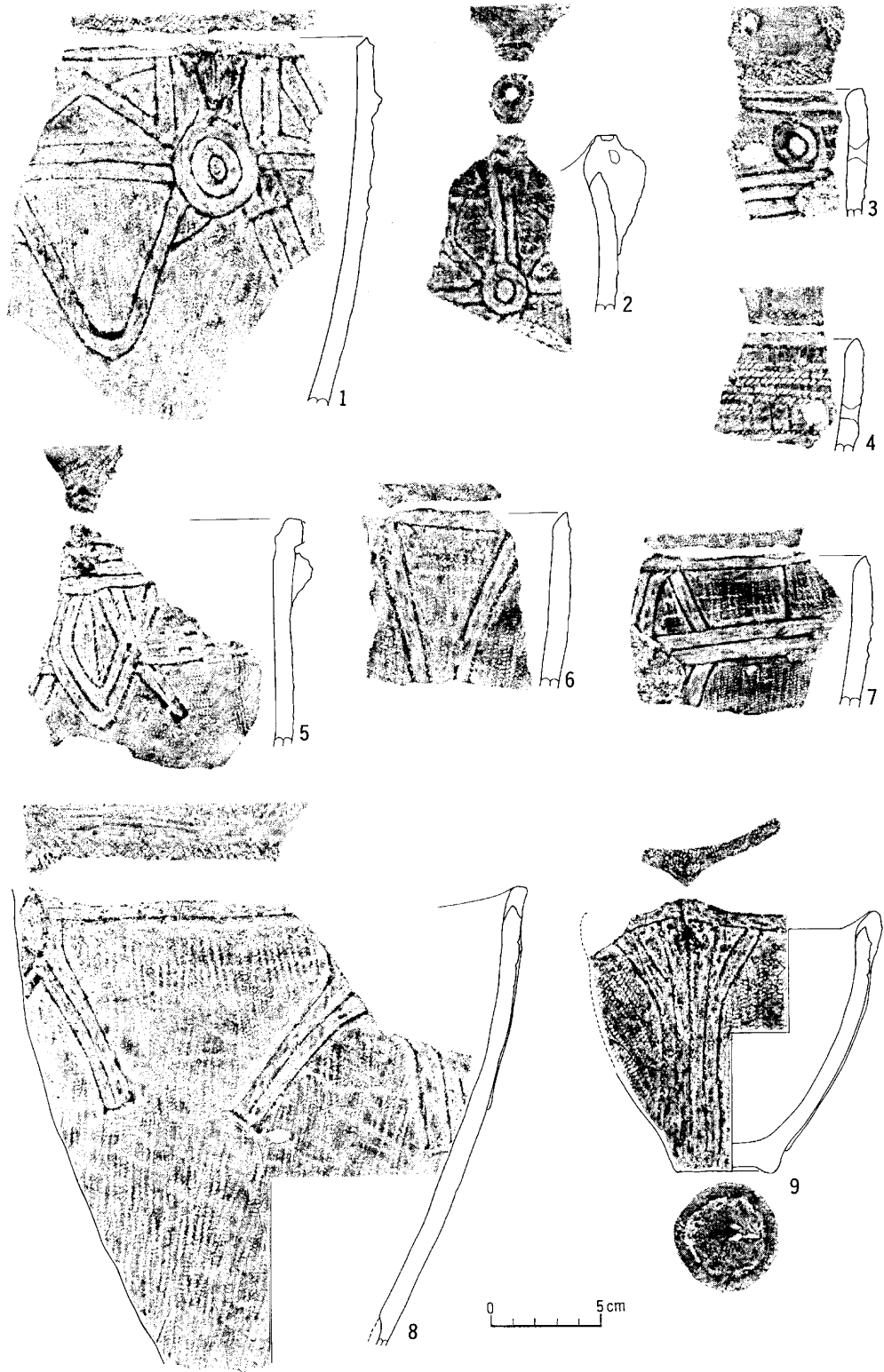
すべて埋土出土である。第182図-1は擦文期の無文大型鉢形土器。口縁部の中ほどから篋の



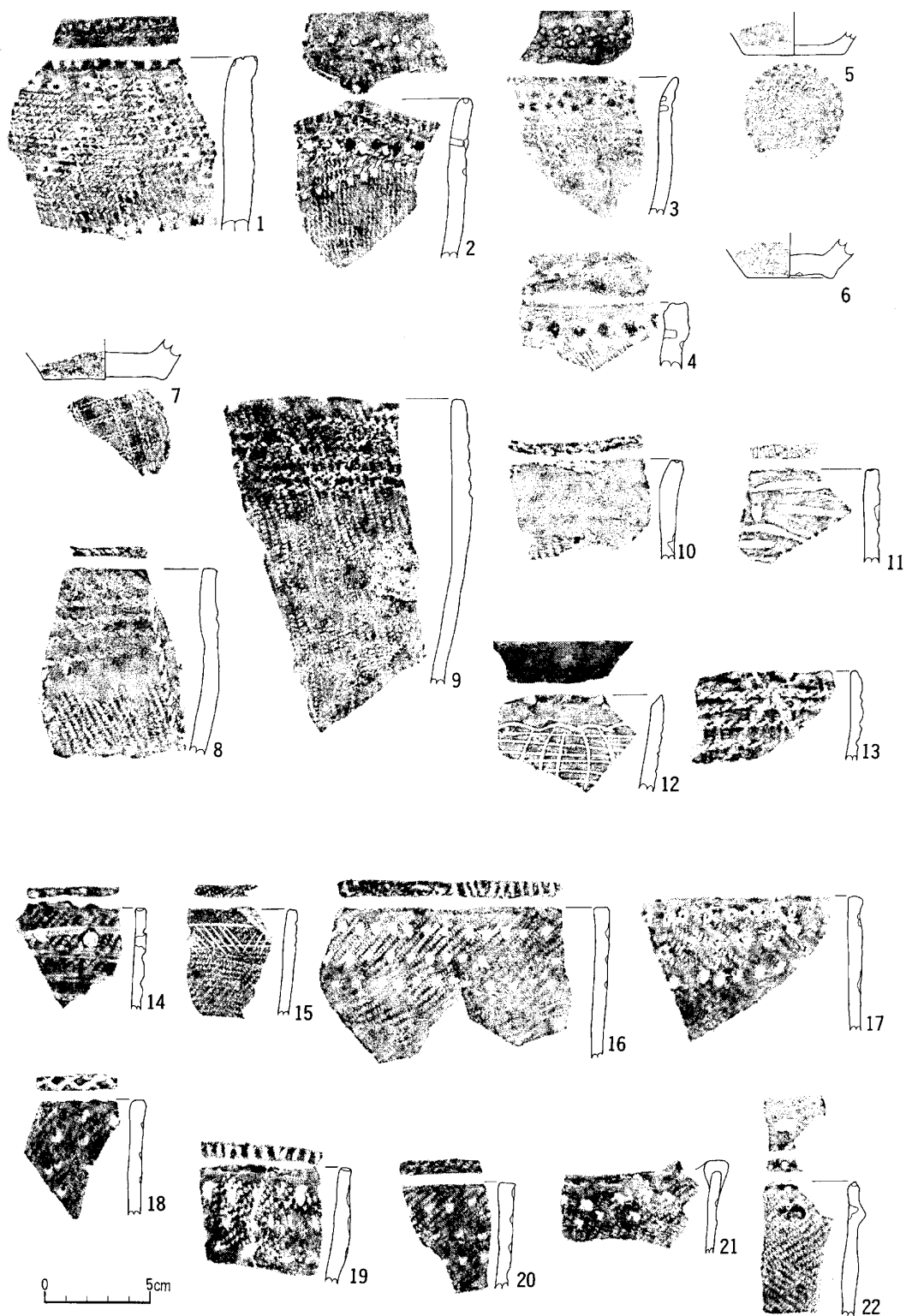
第181图 31号竖穴平面图



第182图 31号竖穴埋土(1~15)出土土器

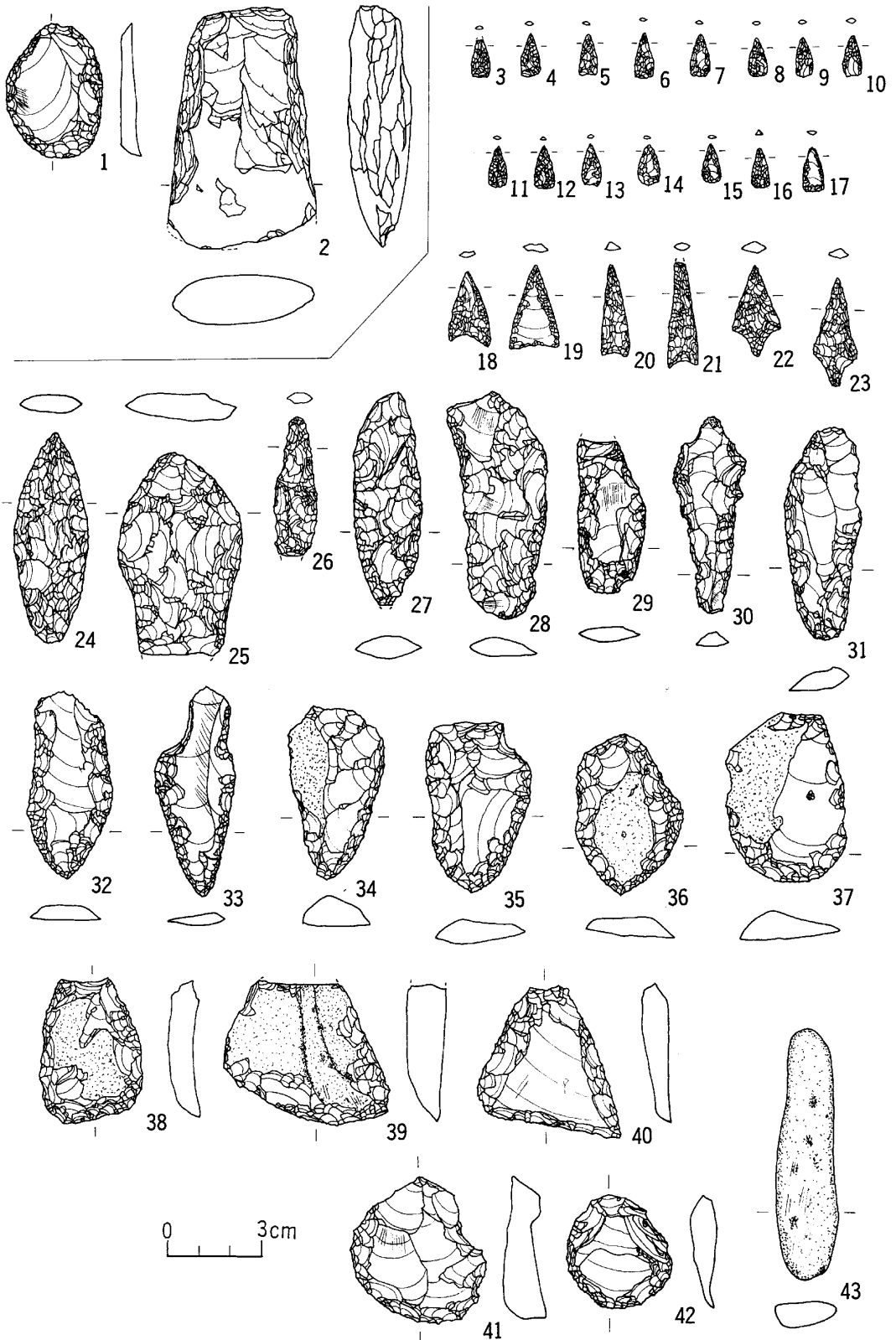


第183図 31号竪穴埋土(1~9)出土土器



第184图 31号豎穴埋土(1~22)出土土器

常呂川河口遺跡



第185図 30号竪穴埋土(1・2)、31号竪穴A面(3~17)・埋土(18~43)出土石器

調整がなされる。2は高杯。3は高杯脚部。4～7はオホーツク土器。ソーメン状貼付文。4は口縁部に明瞭な肥厚帯をもつ。6は頸部から口縁部にかけて緩く外反し肥厚帯をもたない。7は擬縄貼付文。8～15は後北C₂式。第183図-1～9は宇津内II b式。1～3には同心円文がみられる。8、9は7点の破片と伴に床面に近いレベルから出土した。小突起から縦に隆起線文が垂下する。第184図-1は宇津内II b式。2～4は同II a式。5、6は宇津内系の底部。7は下田ノ沢II式系。8～10は続縄文前葉。11、12は緑ヶ岡系であろう。13～21は晩期中葉であろう。22は晩期前葉であろう。

石器は第185図-18～21の無茎石鏃。22、23は有茎石鏃。24、25は石槍。26～29は両面ナイフ。30～34は側削器。35～42は搔器。43は叩き石。43の安山岩を除きすべて黒曜石製である。

小 括

本竪穴は長軸約6.5m、短軸約5.5mの楕円形を呈し、舌状の張り出しをもつ。時期は宇津内II b式の近いものと判断される。

32 号 竪 穴

遺 構 (第186図、図版49-18)

本竪穴はI'55、56及びJ'55、56グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層を約20cm掘り下げる段階で検出した。埋土が第II層とおなじ茶褐色砂質土であるため掘り込み面が明確に把握できず地山である褐色砂層の近くになって検出できた。掘り込みそのものも浅く地山の上部から床面までは約10～15cmである。本来の掘り込み面は第II層の上部であったと思われるので壁高は推定約30cmと思われる。縦横に水道管の攪乱が入るものの全体の規模、形態は確認できた。規模は長軸約5.3m、短軸約4mの楕円形を呈する。中央部からやや北側に角礫を用いた石囲み炉がある。攪乱により一部の石は取り除かれているが本来は完全に囲まれていたと思われる。柱穴に規則性は無い。南壁の1本、東壁の1本が直径約25cm前後であり、主柱穴と思われる。深さは15cm。壁柱穴は直径約10～20cm、深さ約8～13cmを測る。東壁側にある集石4としたものは東壁の一部を切り込んで構築されたもので本竪穴より新しい。

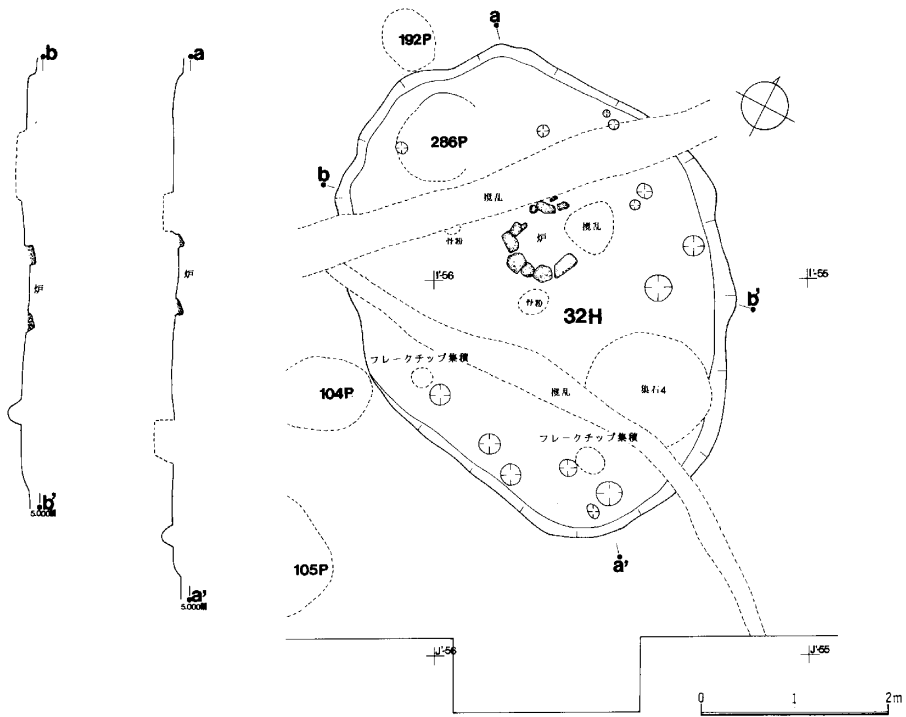
遺 物 (第187、191図-1～5)

第187図-1～3は擦文期の紡錘車。いずれも放射状の列点文をもつ。重量は1が70g、2が60g、3は55gである。4は後北C₂式。5～8は宇津内II b式。9は同II a式。突瘤間、胴中部に1条の円形刺突を巡らしその間も斜めに2列の円形刺突を施す。10は幣舞式。一部剝落するものの小突起から縦の隆帯が垂下し、口唇部の外側に刻みがある。11～14は晩期中葉であろう。11は刺突文。12は縄線文。13、14は無文。

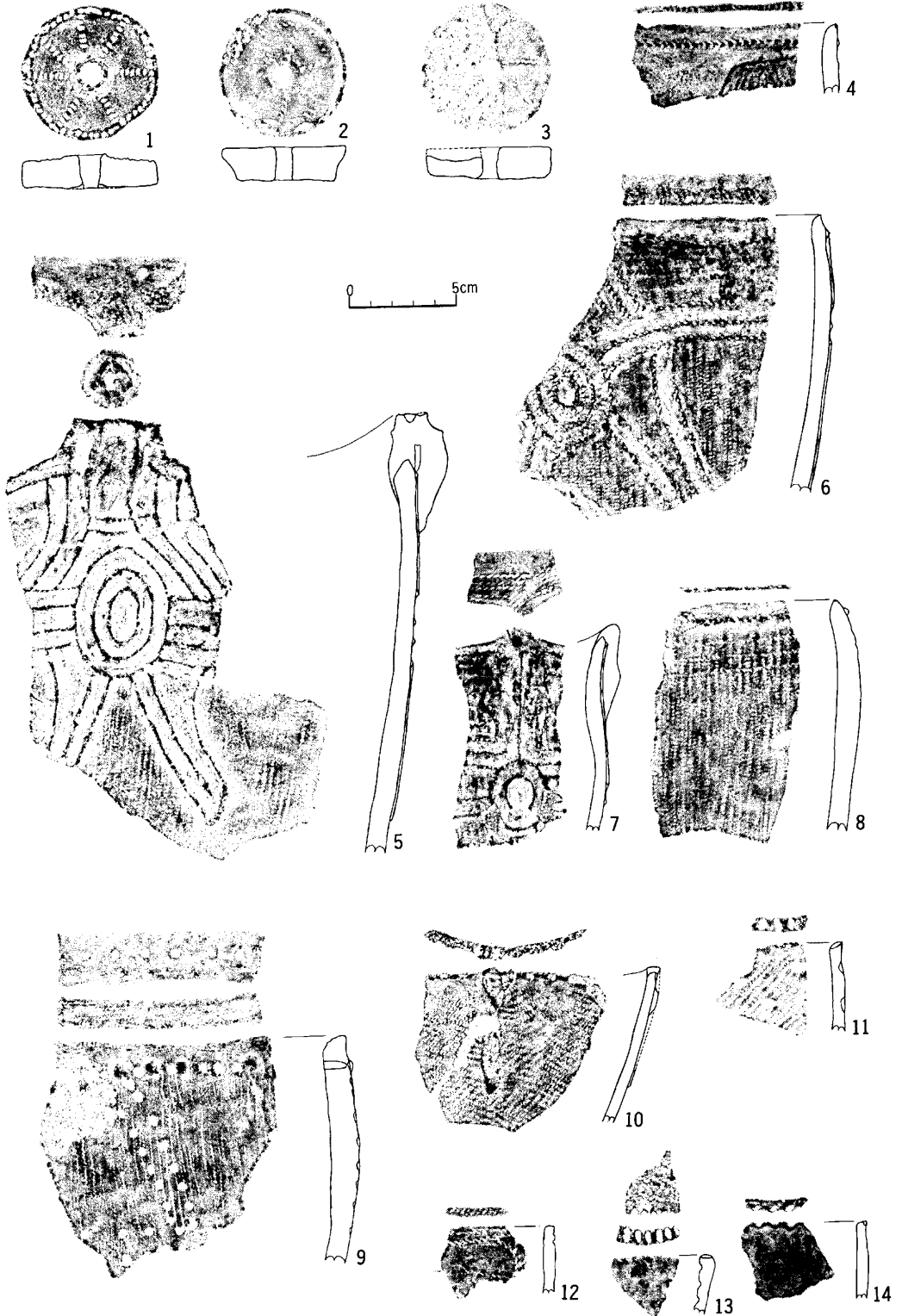
石器は第191図-1は有茎石鏃。2は無茎石鏃。3は両面加工ナイフ。4、5は搔器。すべて黒曜石製。

小 括

床面から出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが縄文期と思われる。



第186図 32号竪穴平面図

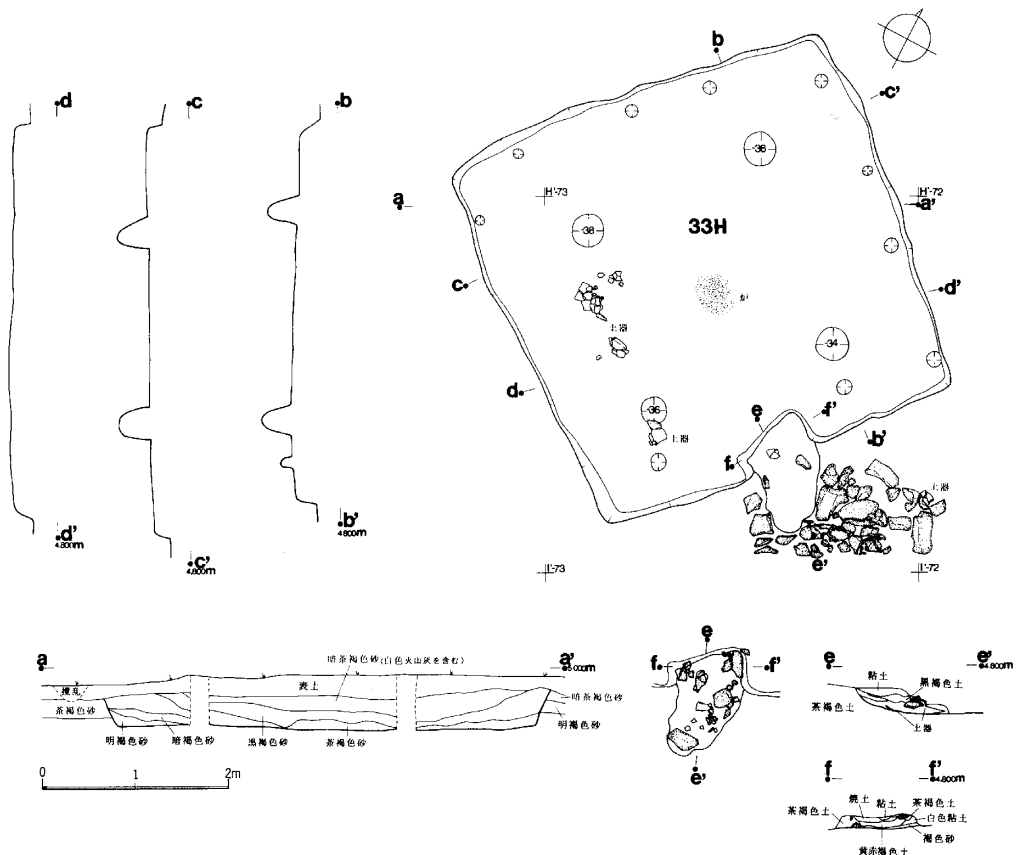


第187图 32号豎穴埋土(1~14)出土土器

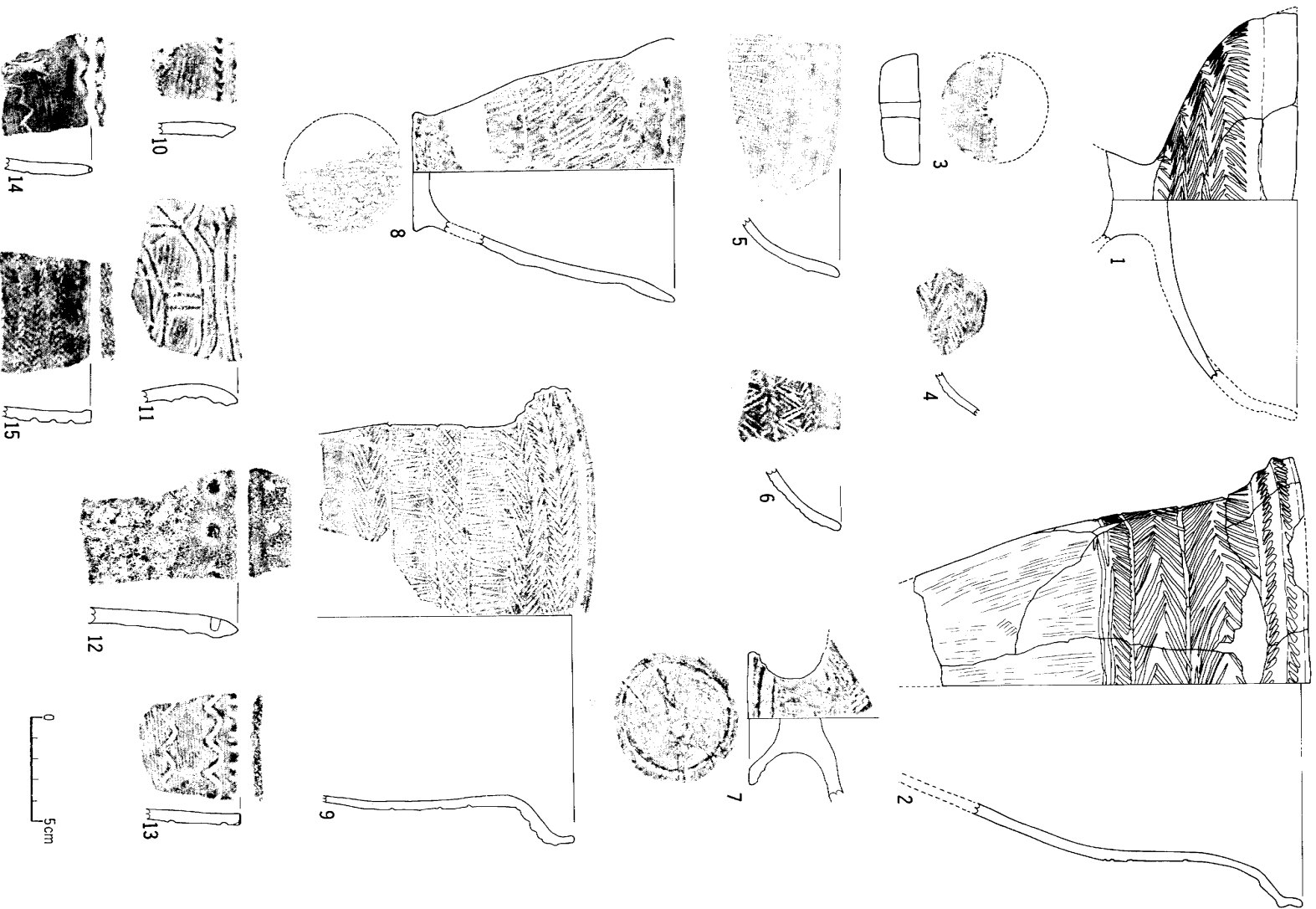
33号 竪穴

遺 構 (第188図、図版50-1)

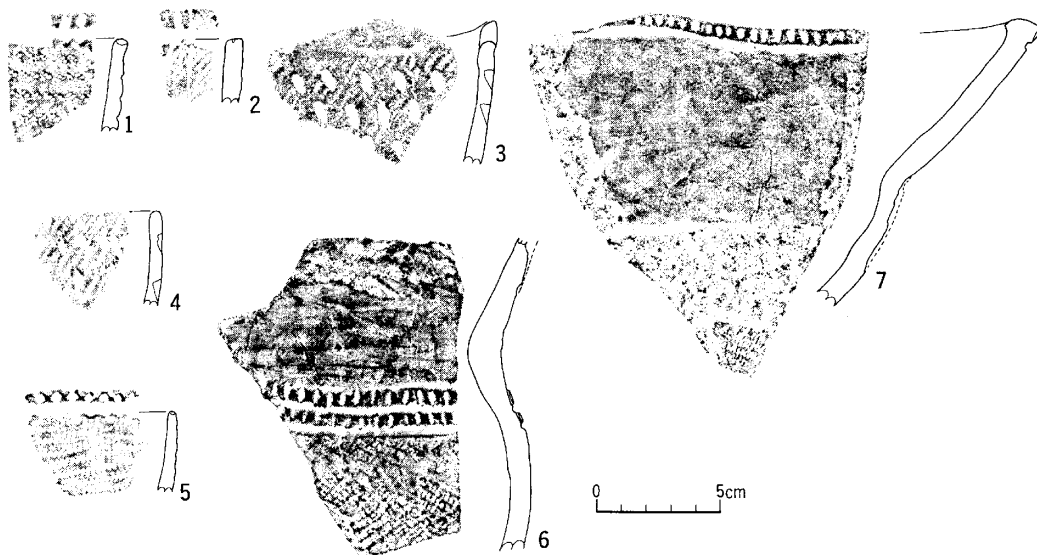
本竪穴はH'72、I'72グリッドにある。表土下の暗褐色砂層の上部には白色の樽前a火山灰が認められる。形態は東西4.4m、南北4.3mの方形を呈する。壁高は確認面から25cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。煙道部は縄文晩期の石組遺構の一部を破壊して作られている。カマドは黄褐色粘土を使用している。カマドの袖部に角礫があるものの他の竪穴のカマドに見られる様な大型のものではない。角礫は使用していないと判断される。支柱穴は4本ある。直径約30~35cm、深さ約34~38cmでしっかり掘られている。壁柱穴は直径約10~15cmで北壁、西壁でほぼ等間隔に配置されている。南壁では1本検出できただけである。良く火熱を受けた炉跡は竪穴の中央部にある。遺物である高杯と小型鉢形土器は南側の2本の支柱穴と並行する様に出土している。



第188図 33号竪穴平面図



第189图 33号墓穴床面(1~3)·埋土(4~15)出土土器



第190図 33号竪穴埋土(1~6)・カマド煙道(7)出土土器

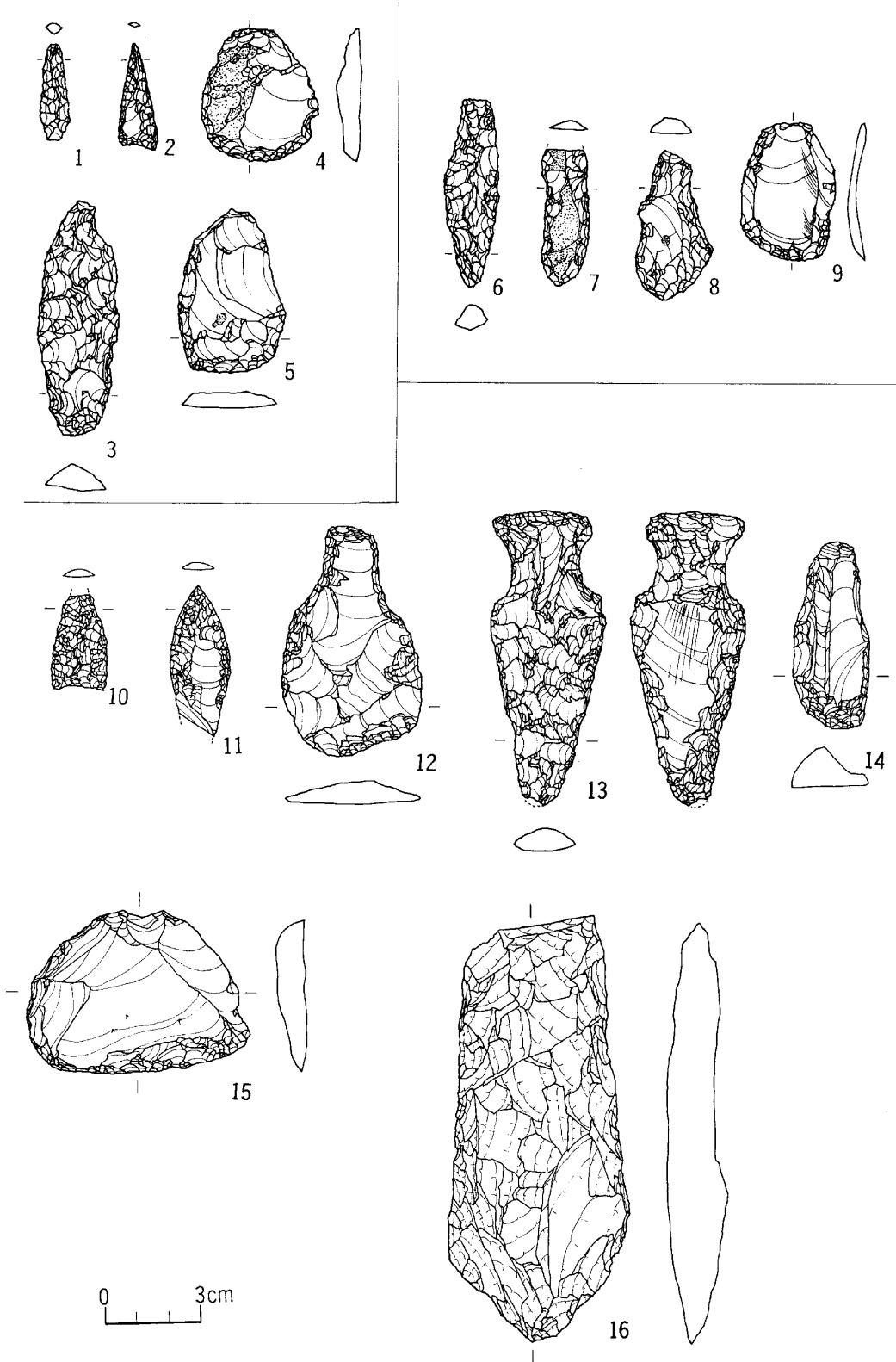
遺物 (第189、190、191図-6~9、図版50-2~4)

床面から第189図-1の高杯。2の中型鉢形土器、3の紡錘車が出土している。1は矢羽根状の刻線、2は矢羽根、斜めの短刻線で構成される。3はカマドの南側から出土した。重量30g。4~7は高杯と脚部である。4は矢羽根状の刻線、5は縦の刻線、6は山形の刻線が施される。8は無文小型鉢形土器。口縁下部がわずかにくびれ、器面は篋により調整される。9は鋸歯文、格子目文、矢羽根状の刻線の複段文様である。10は後北C₂式。11は同C₁式。12は宇津内II a式。13~15は幣舞式。第190図-1~5は晩期中葉であろう。3、4は下方から刺突される。6、7は縄文後期縄濶式。7はカマドの燃焼部から出土した。火熱を受けたため赤変している。

石器は第191図-6の両面加工ナイフ。7~9の削器がある。すべて黒曜石製。

小括

本竪穴は東西4.4m、南北4.3mの方形を呈する。カマドは東壁中央部に構築されている。時期は藤本編年g~h期、宇田川編年後期に比定される。



第191圖 32号豎穴埋土(1~5)、33号豎穴埋土(6~9)、34号豎穴埋土(10~16)出土石器

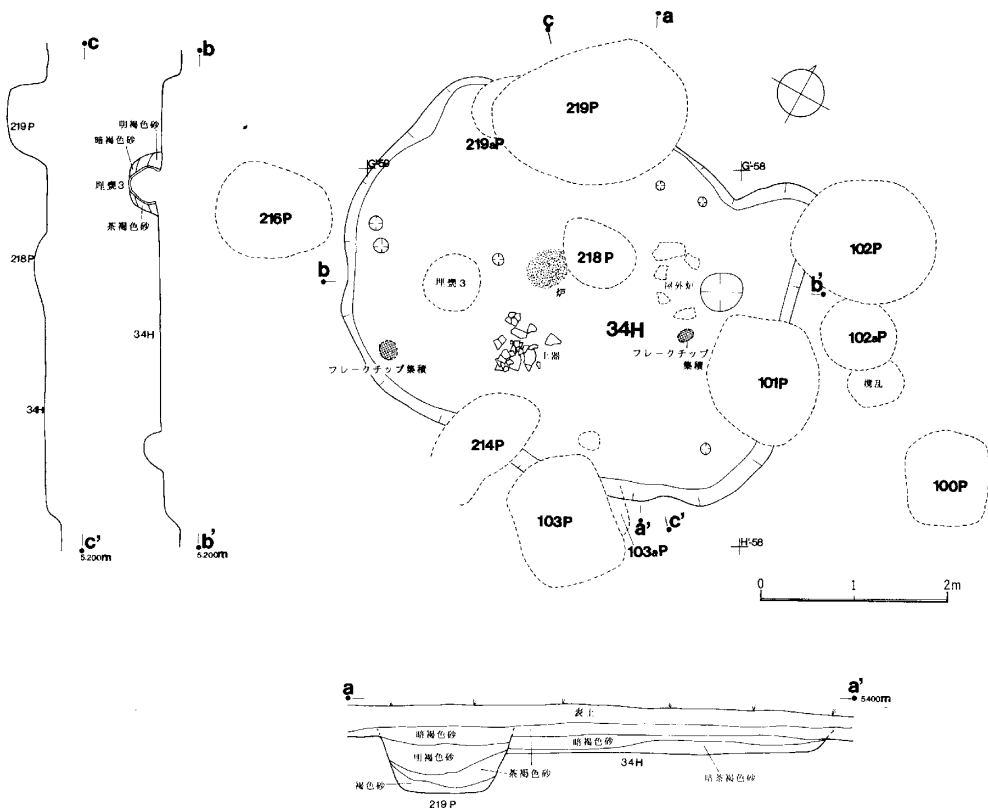
34号 竪穴

遺 構 (第192図、図版50-5)

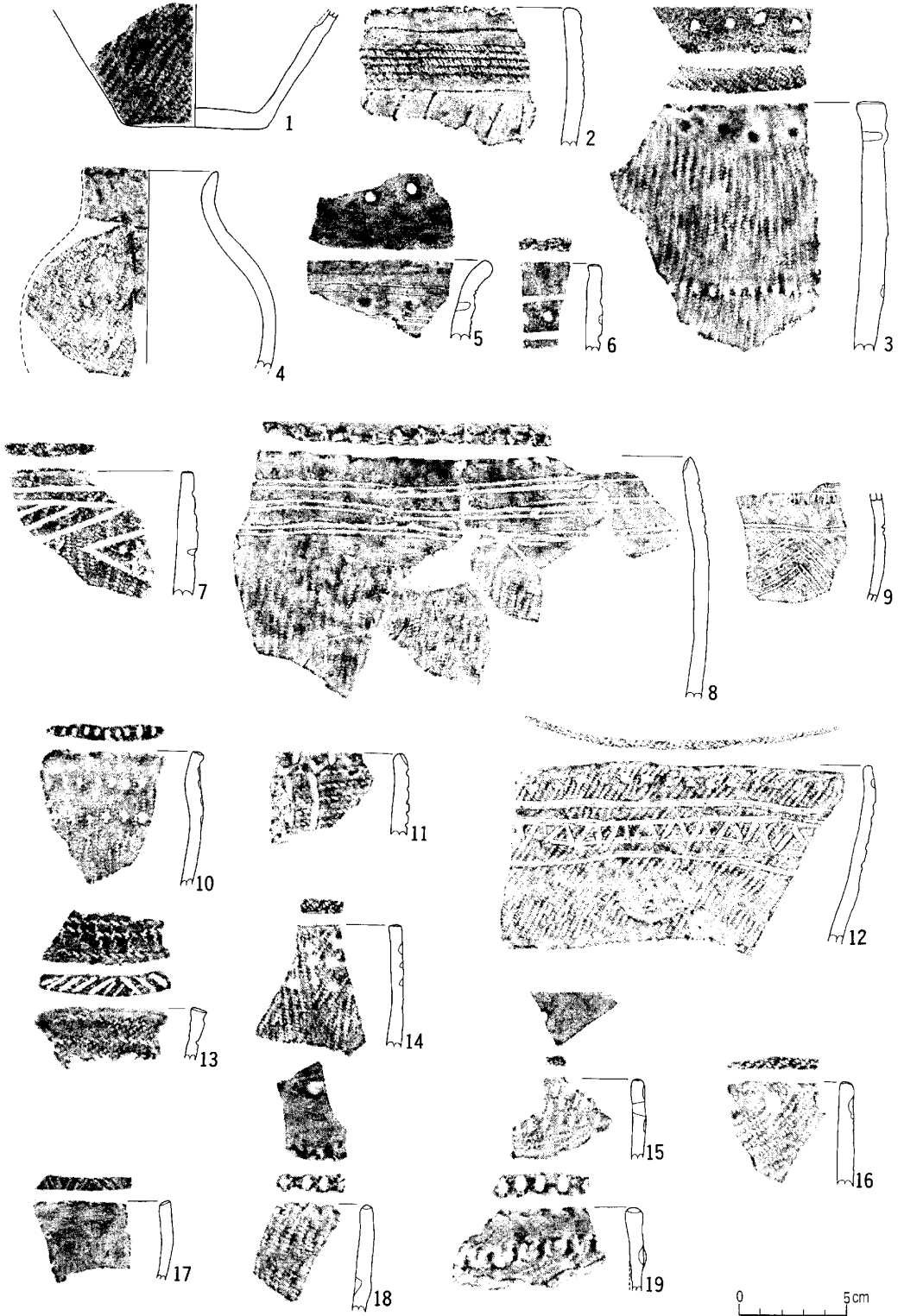
本竪穴はH'58グリッドにある。この周辺はピットが多く先に検出していたピットの断面観察から竪穴の存在を予想していた。表土と2層の茶褐色砂を剝土した段階で明確な落ち込みを確認したが、2層の上部には角礫を用いた屋外炉がありこの周辺から宇津内II a式の完形品3点が出土している。屋外炉は宇津内II a式のものと考えられることから下層にある本竪穴はそれ以前の時期になる。竪穴の規模は長軸4.9m、短軸3.7mで南北にやや長い隅丸長方形であるが北壁隅がわずかに張り出す。出入口であろう。壁高は確認面から約20cmである。炉跡は中央部にある。直径約10~15cm、深さ約10~16cmの壁柱穴は壁際を中心に認められる。

遺 物 (第193・191図-10~16)

南壁に近い床面から図示していないが口縁部、底部が欠失した土器が出土している。地文はRLの縦走縄文で胎土は宇津内的である。第193図-1は床面から出土した続縄文の底部。2~19



第192図 34号竪穴平面図



第193图 34号豎穴床面(1)・埋土(2~19)出土土器

7は横走沈線下に矢羽根状の沈線がある。8は口唇部の内側に縄文を縦に押捺する。9は口縁部は欠失しているが、口縁上部のものであろう。短刻線、半截状施文具による山形沈線が施される。10は口縁部がわずかに外反する。2段目と3段目の縄端圧痕文の間に刺突がある。11は幣舞式。12は口縁下部に刺突があり、4本の横走沈線に連続する山形沈線が施される。晩期後葉の緑ヶ丘系であろう。13～17は晩期中葉、18、19は晩期前葉であろう。

第191図-10は無茎石鏃。11は基部の調整が途中であり石鏃の未製品と思われる。12の形態は靴形石器に近いもので側縁部の調整は全面に及んでいない。13は両面加工ナイフ。柄部がくびれ主要剥離面側の側縁部にも調整を加えている。14、15は搔器。16は安山岩製のナイフ。14の硬質頁岩製を除き黒曜石製である。

小 括

本竪穴は宇津内II a式より若干古いと思われる。

35 号 竪 穴

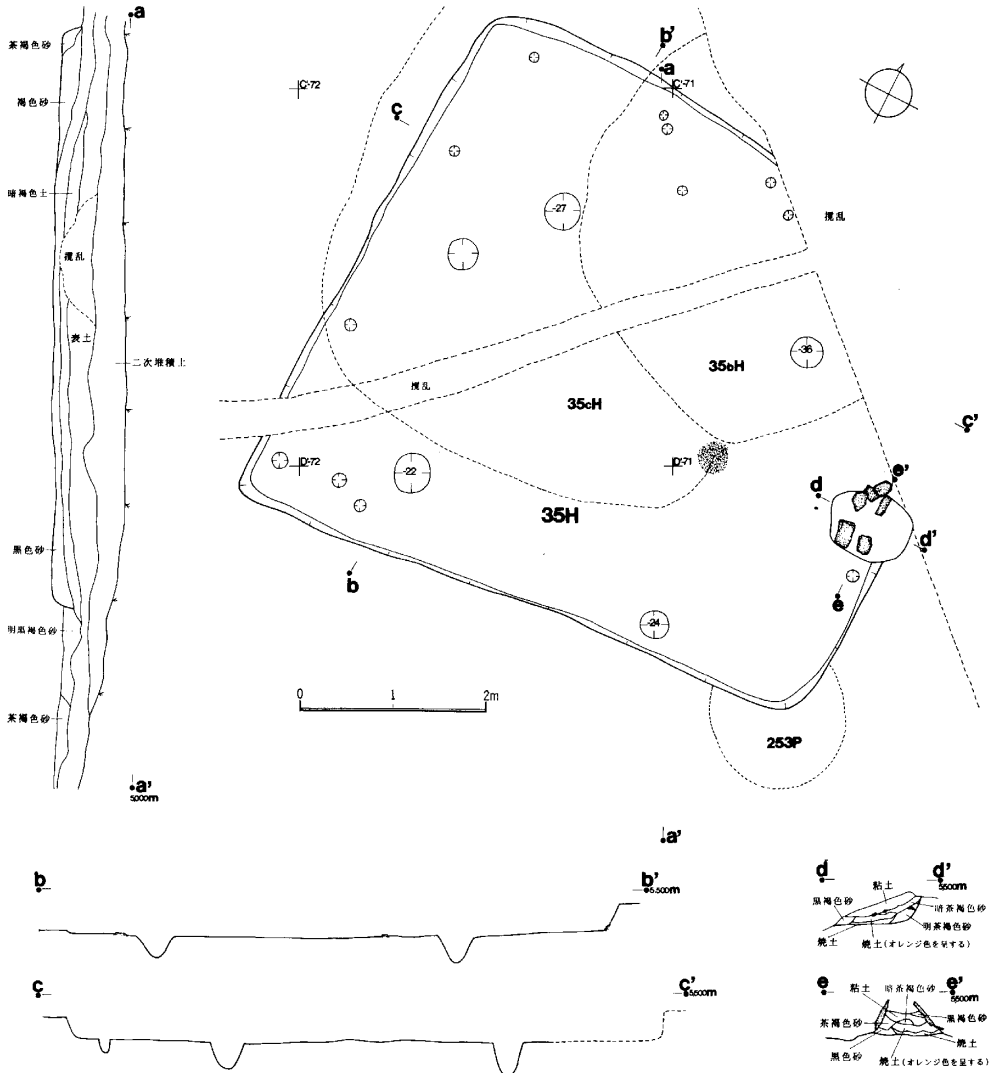
遺 構 (第194図、図版51-1)

本竪穴はD'71グリッドに位置する。規模は長軸約6.5m、短軸約5.5mの方形を呈する。壁高は約20cmを測る。カマドは東壁の中央部に構築されている。袖部は扁平な角礫を縦て補強している。

遺 物 (第195、196図-1～14、194図-1～18、図版51-2・3)

すべて埋土出土である。第195図-1は口径約27cm、器高約35cmの大型鉢形土器。3段の隆帯をもつ口縁部は外反し、口唇部は垂直に立ち上がる。文様である山形文、クロスする斜めの沈線文は横走沈線と列点文で区画される。2は東壁の上部から出土した。口径約14.5cm、器高約13cmの小型鉢形土器。口縁部は2条の沈線が施され、器面は刷毛により丁寧に調整される。3の口縁部は緩く外反する。縦横の沈線で区画した後菱形に施す。4は同一個体であろう。6は底部のほぼ中央部に放射状の筧による幅広の浅い沈線がある。底部の調整痕であろう。7は大型鉢形土器の口縁部。8、9はオホーツク文化ソーメン状貼付文。10、11は後北C₂式。12は同C₁式。第196図-1は宇津内II a式。2～11は晩期中葉であろう。2は縄線文。3は縄端圧痕文が3段ある。4は器面がかなり摩耗するが表面に縄線文、裏面に刺突がある。5は2本の縄線間に刺突がある。6は横走沈線文。7～9は刺突文。10は縄文。11は無文。12は内側に斜めの突瘤文があるもので晩期前葉であろう。13は縄文後期。胎土は脆く細く鋭い沈線が施される。

石器は第198図-1～18がある。1、2は無茎石鏃。3、4は有茎石鏃。5～13は削器。14～17

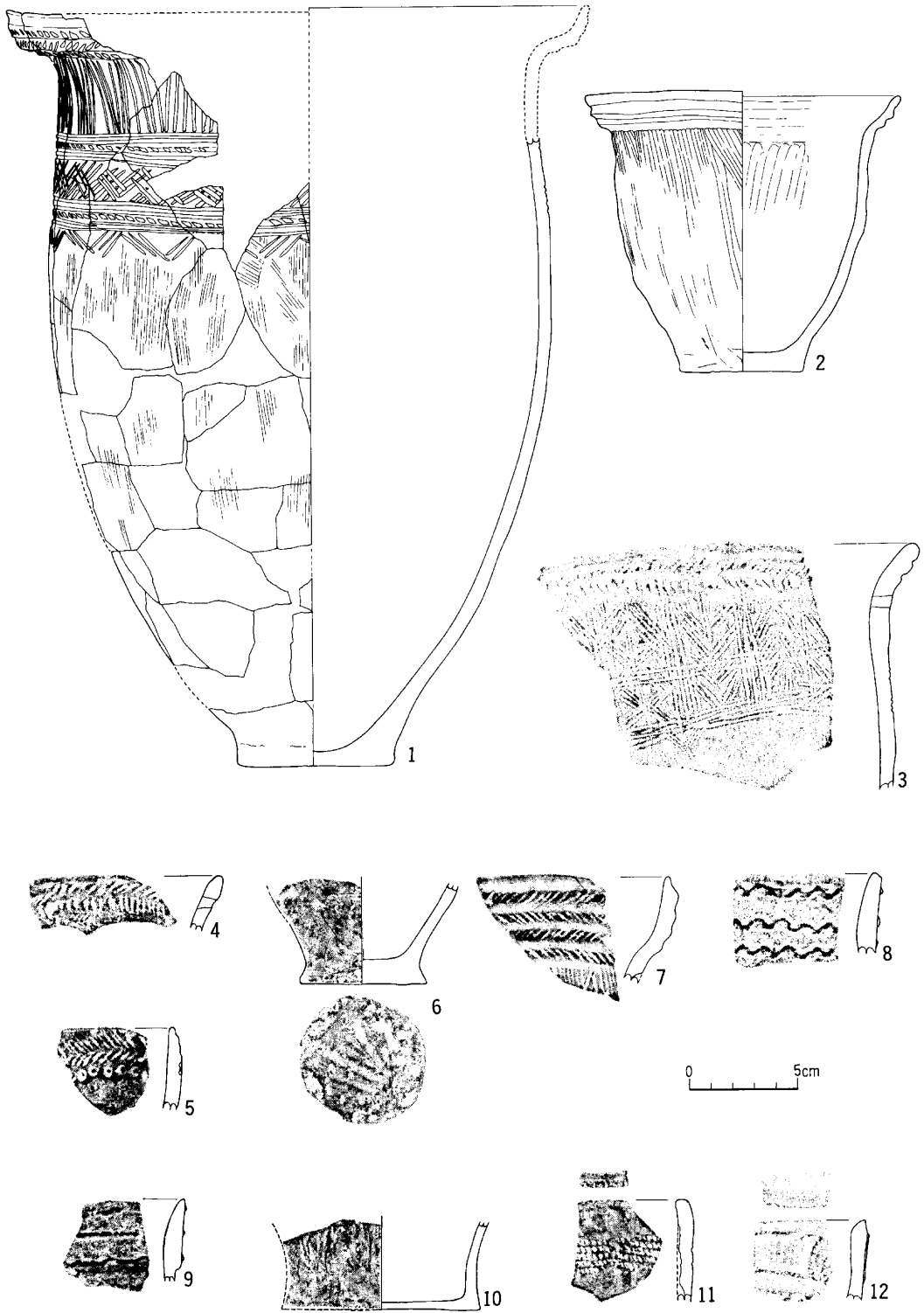


第194図 35号竪穴平面図

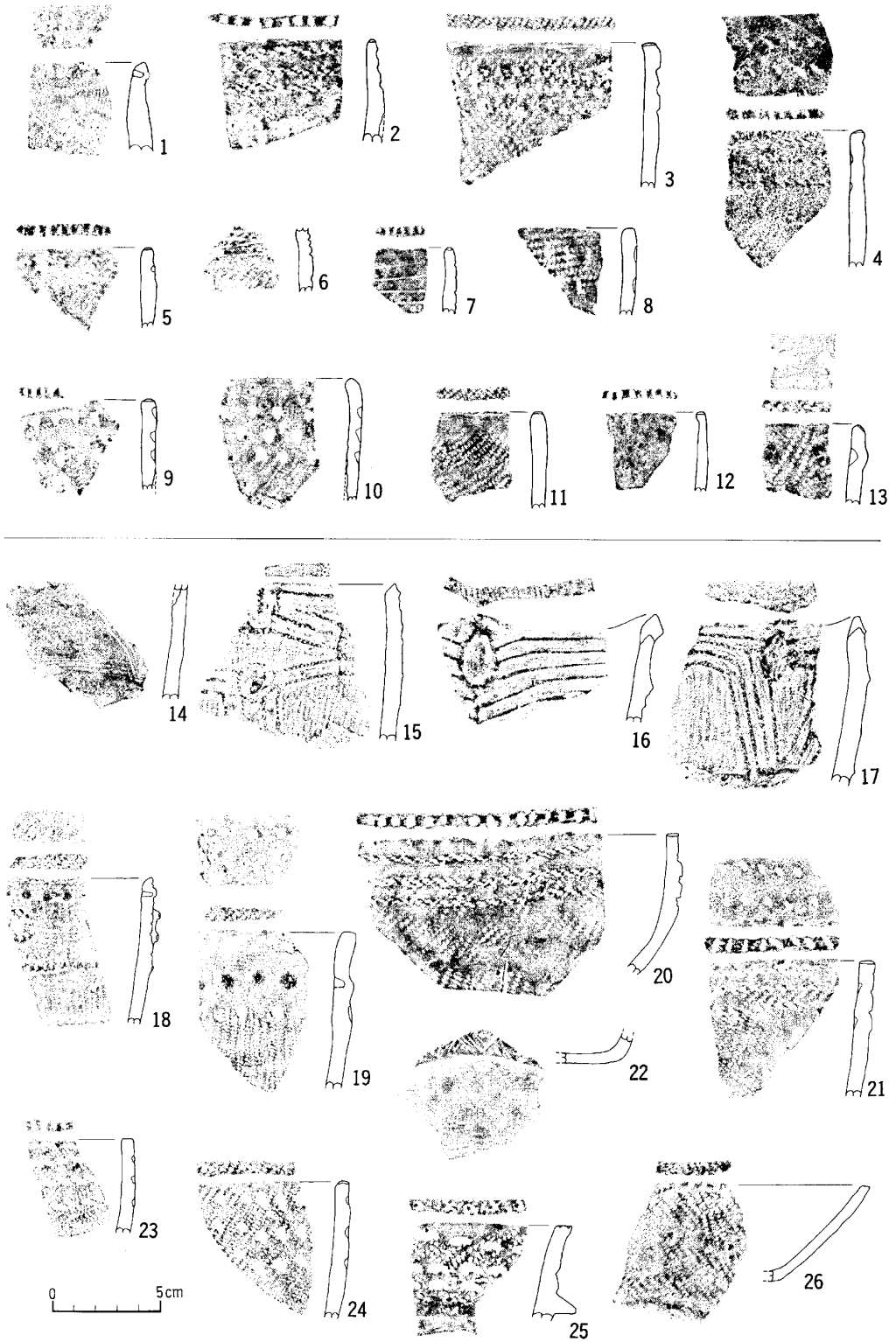
は搔器。18は削器。18の安山岩製を除き黒曜石製である。

小 括

本竪穴は擦文期のものである。床面からの出土遺物がないため詳細な時期は不明である。



第195图 35号竖穴埋土(1~12)出土土器



第196图 35号豎穴埋土(1~13)、35a号豎穴埋土(14~26)出土土器

35a 号 豎 穴

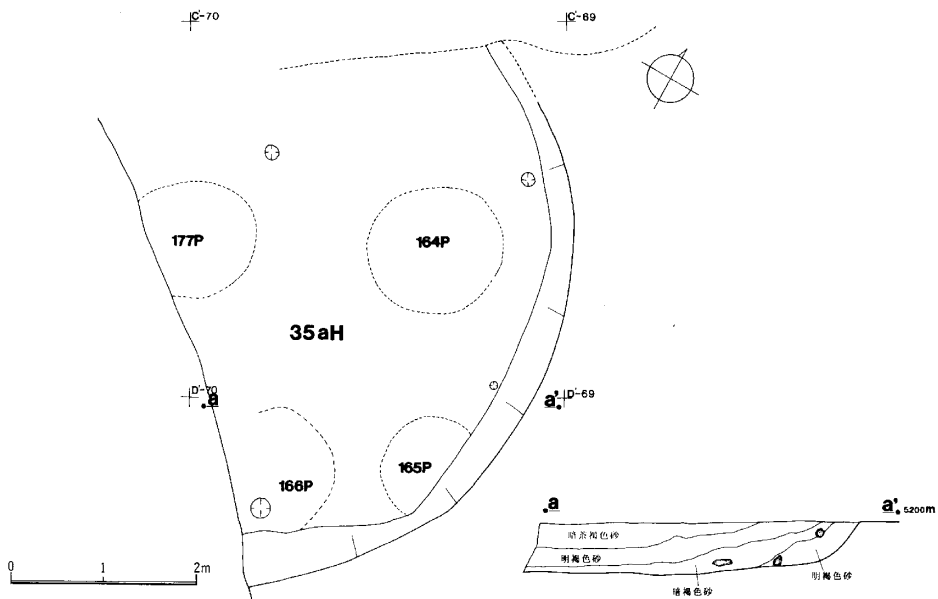
遺 構 (第197図)

本豎穴はD'68、69グリッドにある。豎穴の大部分が下水道管埋設による破壊を受けている。検出できたのは北壁と南壁の一部である。したがって全体の規模、形態等は不明である。壁の立上りは緩く確認面から約45cmを測る。35号、35b号と重複するものの正確な時期は不明である。

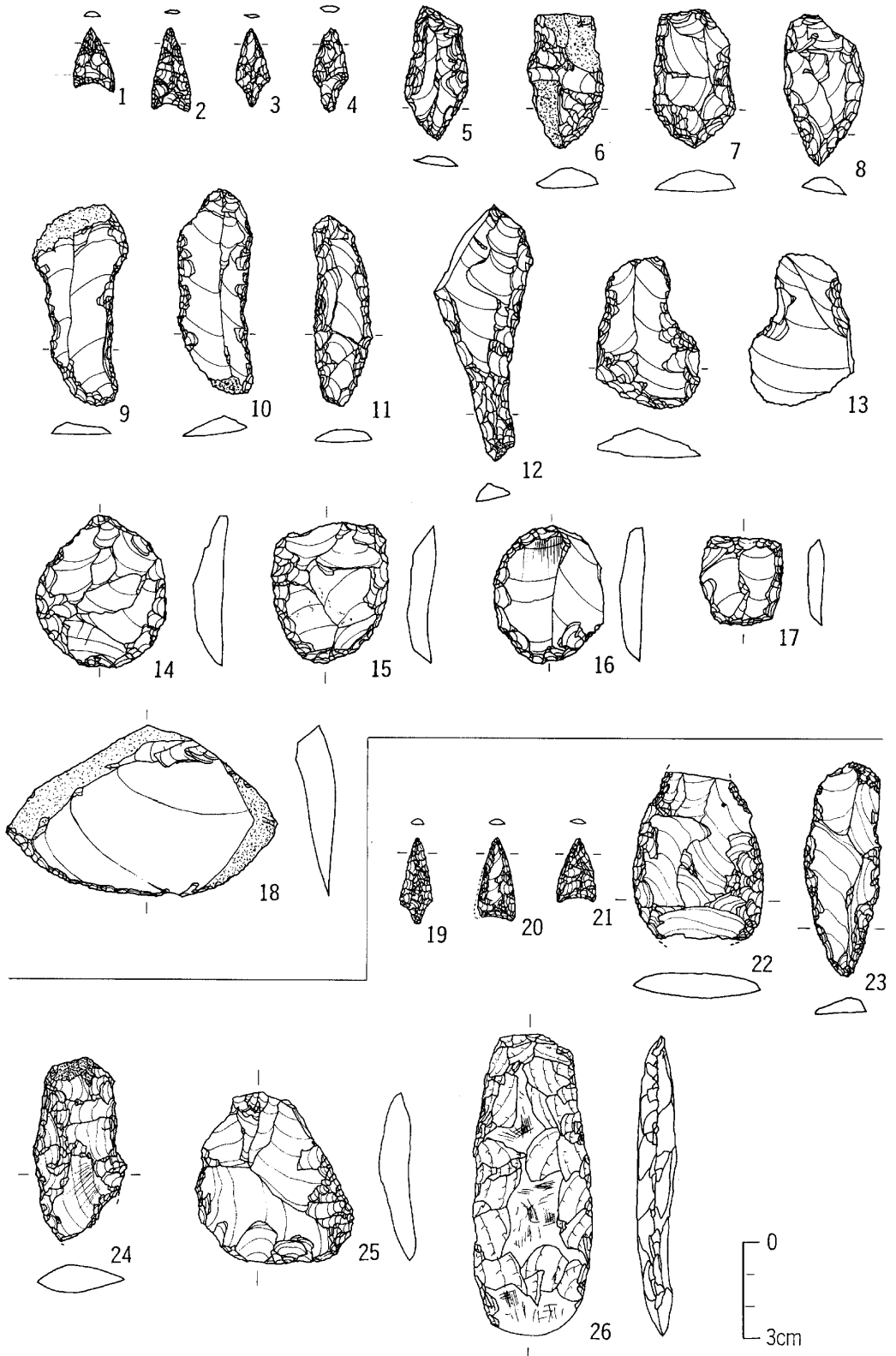
遺 物 (第196図-14~26、198図-19~26図)

第196図-14は櫛歯状施文具による浅い沈線が施されるもので後北C₂式併行期であろう。15~17は宇津内II b式。18、19は同II a式。20~25は晩期中葉であろう。20~22は口縁下部に縄線文があるもので20は浅鉢と思われる。21は内側に爪形文が施される。23は底部。24、25は縄端圧痕文を施したもので25は口縁と並行して凸帯をもつ。26は口唇部の外側に刻み、内側に縄を押捺するもので、晩期後葉の幣舞式であろう。器形は浅鉢と思われる。

石器は第198図-19~26がある。19は有茎石鏃。20、21は無茎石鏃。22~25は側削器。26は両側縁部が敲打に調整された磨製石斧。26を除き黒曜石製。



第197図 35a号豎穴平面図



第198图 35号竖穴埋土(1~18)、35a号竖穴埋土(19~26)出土石器

35b 号 豎 穴

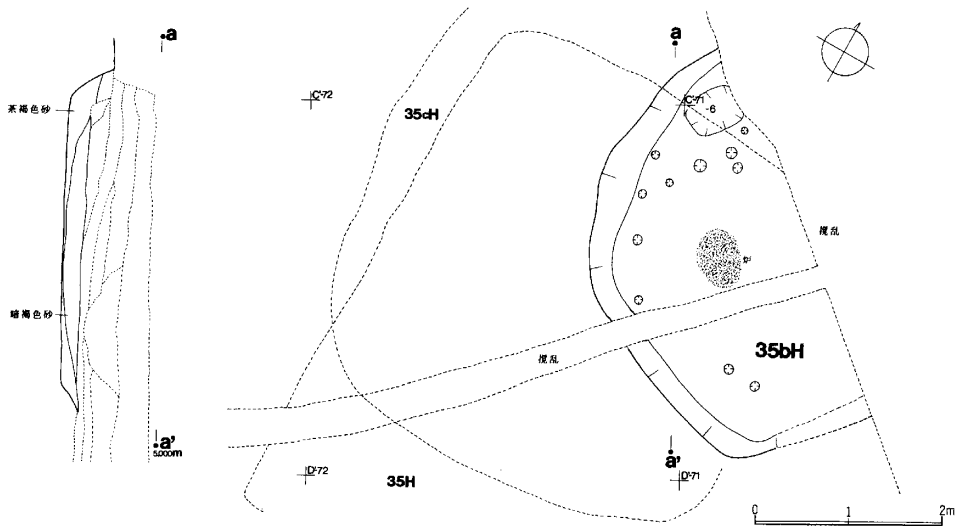
遺 構 (第199図)

本豎穴も下水道管埋設により大部分が破壊を受けている。正確な規模は不明であるが直径約4.20mの不整形を呈すると思われる。壁高は35号豎穴の床面から約20cmである。柱穴は各壁際にあるが規則性はない。直径約6～10cm、深さ5～10cmを測る。

遺 物 (第201図-1～12、202図-1～4)

1は字津内II a式。2、3は続縄文前葉であろう。3は弧線の下部に細い刺突がある。4は底部。5～11は晩期中葉であろう。5、6は縄線文が施されるもので6は浅鉢。7は縄文。8は縄線文を縦方向にも押捺する。9、10は器面に半截状施文具による刺突、11は縄線間に円形刺突が施される。12は盛り上がりのある爪形文で晩期前葉であろう。

石器は第202図-1、2の無茎石鏃。3、4の側削器がある。3は主要剝離面側も加工されている。4点とも黒曜石製。



第199図 35b号豎穴平面図

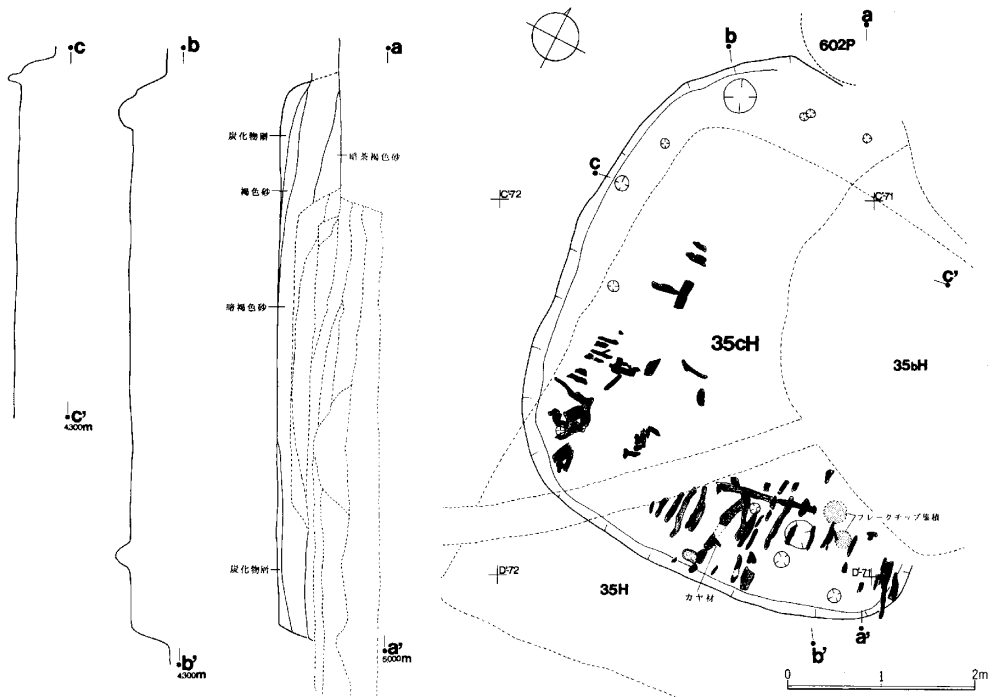
35c 号 竪 穴

遺 構 (第200図)

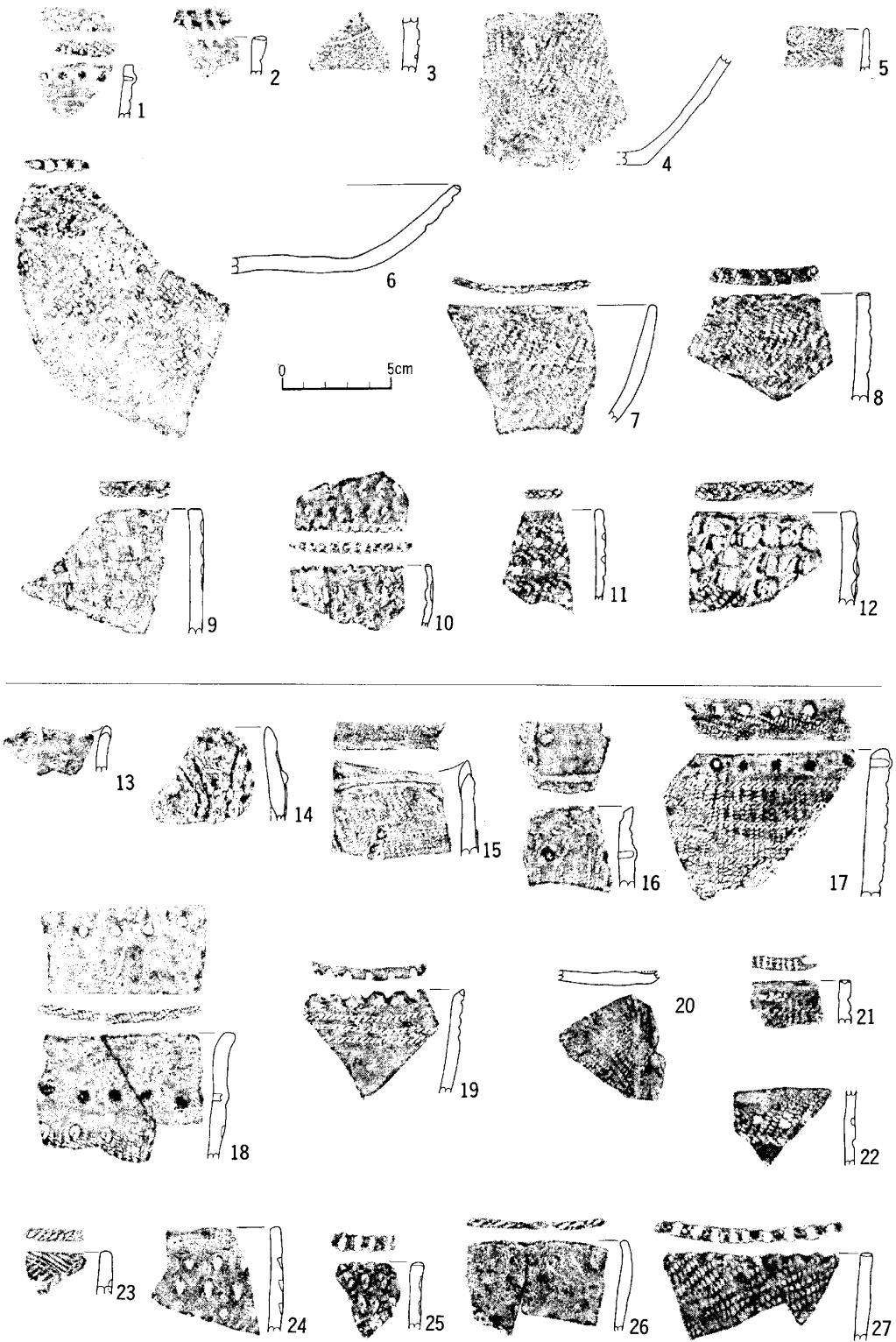
本竪穴は35号の下層約30cmから検出された。大半が35b号及び下水道管の埋設により破壊を受けているものの規模、形態はかろうじて確認することができた。規模は長軸約5.40m、短軸約4.50mを測り、形態はやや南北が伸びる隅丸長方形を呈すると思われる。炭化材は西壁際から南壁際の床面に認められる。各壁と直交し、内側に倒れ込むものが大部分である。壁と並行する梁材と思われるものもある。炭化材は直径約5～8cmのものが大部分をしめ先端部が丸く加工されたものも3本ある。また、炭化材の上部には茅材が一部載っている。壁柱は各壁にほぼ等間隔に配置されている。直径約10～15cm、深さ約7～11cmである。北西壁隅、南東壁隅にある各1本の柱穴は直径約30～34cm、深さ約20～25cmを測るもので支柱穴かもしれない。炉跡は35b号により破壊を受けているため検出できなかった。南東壁隅側に2個所のフレイク・チップの集積がある。

遺 物 (第201図-13～27、第202図5～7)

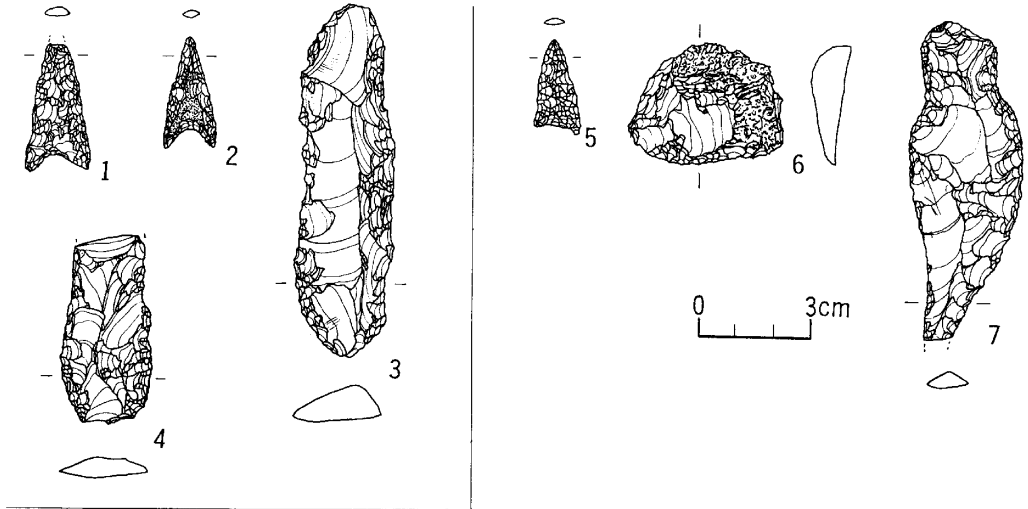
第201図-13は床面出土。口縁部に小突起をもつもので続縄文前葉であろう。14、15は宇津内II b式。16、17は同II a式。18は幅広の無文帯に突瘤を施したもので地文である縄文とは縄端



第200図 35c号竪穴平面図



第201図 35 b号竪穴埋土(1~12)、35 c号竪穴床面(13)・埋土(14~27)出土土器



第202図 35 b号竪穴埋土(1~4)、35 c号竪穴床面(5・6)、埋土(7)出土石器

圧痕文で区画される。宇津内II a式と比較すると器面の色調は黒褐色を呈し、器壁も薄く、胎土に粗い砂粒を含む。宇津内IIの式の古手に相当されよう。19は晩期後葉の幣舞式。20は底部。21~27は晩期中葉であろう。21は縄線文、22は縄線文と刺突文、23~25は刺突文が施される。26は無文。27は縄文。

石器は床面から第202図-5の無茎石鏃、6の搔器が出土している。埋土からは7の削器がある。柄部、右側縁部が調整される。いずれも黒曜石製。

小 括

本竪穴の規模は長軸約5.40m、短軸約4.50mを測る。形態は隅丸長方形を呈する。床面から続縄文前葉の土器1点が出土しており、この時期のものである可能性が高い。

36 号 竪 穴

遺 構 (第203図、図版52-1)

本竪穴はJ71、J72グリッドにある。当初は36号が1軒の竪穴と判断していたが、床面を西側から精査する段階で新たな落ち込みを確認した。土層観察では36号の茶褐色砂層から掘り込まれていることが明らかである。36号は36a号に南壁と東壁の一部を破壊されるものの全体の形態・規模を確認することができた。規模は長軸約7.6m、短軸約4.7mの長楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり確認面から約40cmを測る。中央部から西側寄りに円礫を用いた石囲み炉がある。東側の円礫は36a号の舌状部に落ち込んでいる。炉は良く焼けており骨粉が認められる。炉の位置から判断して南側にも同様な石囲み炉が存在していたものと推測される。支柱穴は西壁際の直径約15~20cm、深さ約13~20cmの3本検出した。壁柱穴は各壁際に数本ある程度である。直径約8cm、深さ約8cmである。

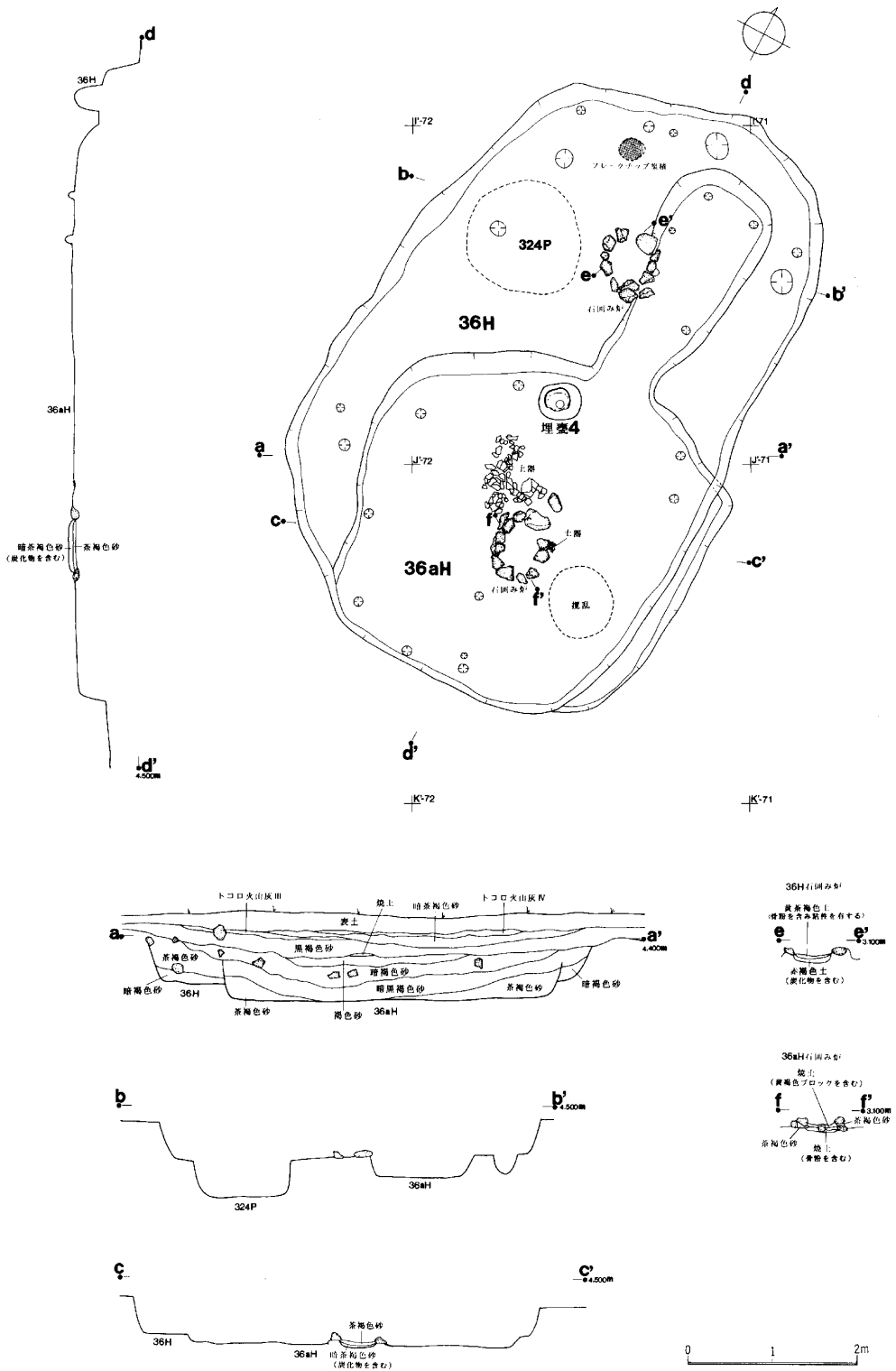
遺 物 (第204、205、206、207、208、209、210図-1・2、図版52-2~14)

第204図-1は突瘤文が施される。2は縦横に沈線が施され刺突文が加わる。3は工字文状の沈線を施した続縄文前葉のものである。4は中型鉢形土器。15~17状の横走沈線上に3~4本単位の縦の沈線をほぼ等間隔に施す。5は中型鉢形土器。矢羽根状の刻線を4段にわたって施す。6は無文の小型鉢形土器。7は高杯。8は紡錘車。90g。9はオホーツクソーメン状貼付文。10は後北C₁式。11は宇津内II b式。第205図-1~4は宇津内II b式。5~10は同II a式。11はミニチュア土器である。12~14は続縄文前葉であろう。15~18は緑ヶ岡式から幣舞式のものであろう。第206図-1は幣舞式。2~4は晩期。5は後期鮎澗式。6、7は縄文中期である。

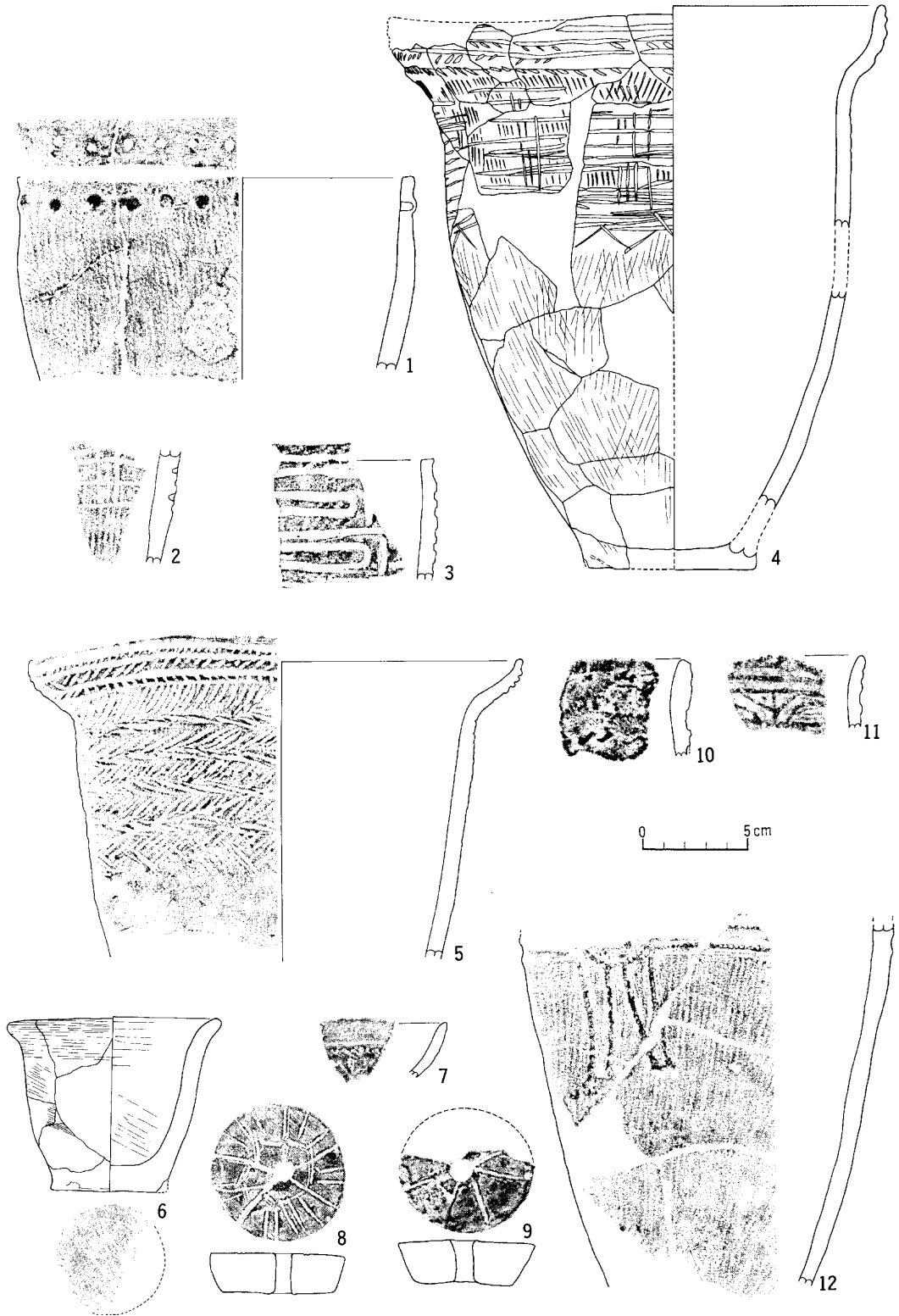
石器は床面から第207図-1~9が出土している。1、2は無茎石鏃、3は有茎石鏃。4は両面加工ナイフ。5~7は側削器。8は方形を呈した搔器。9はブーメラン状の削器。埋土からは10~16の無茎石鏃。17~25の有茎石鏃。26は石槍。27~29は両面加工ナイフ。30~33は片面加工ナイフ。34~36は側削器。第208図-1~3は側削器。3は第207図-9と形態が酷似する。左側縁部に原石面を残した削器であろう。4~14は搔器。15は緑色泥岩製の片刃磨製石斧。16は明確な刃部を持たないが石斧として利用されたのであろう。表面に使用痕が観察される。第209図-1、2は叩き石。

小 括

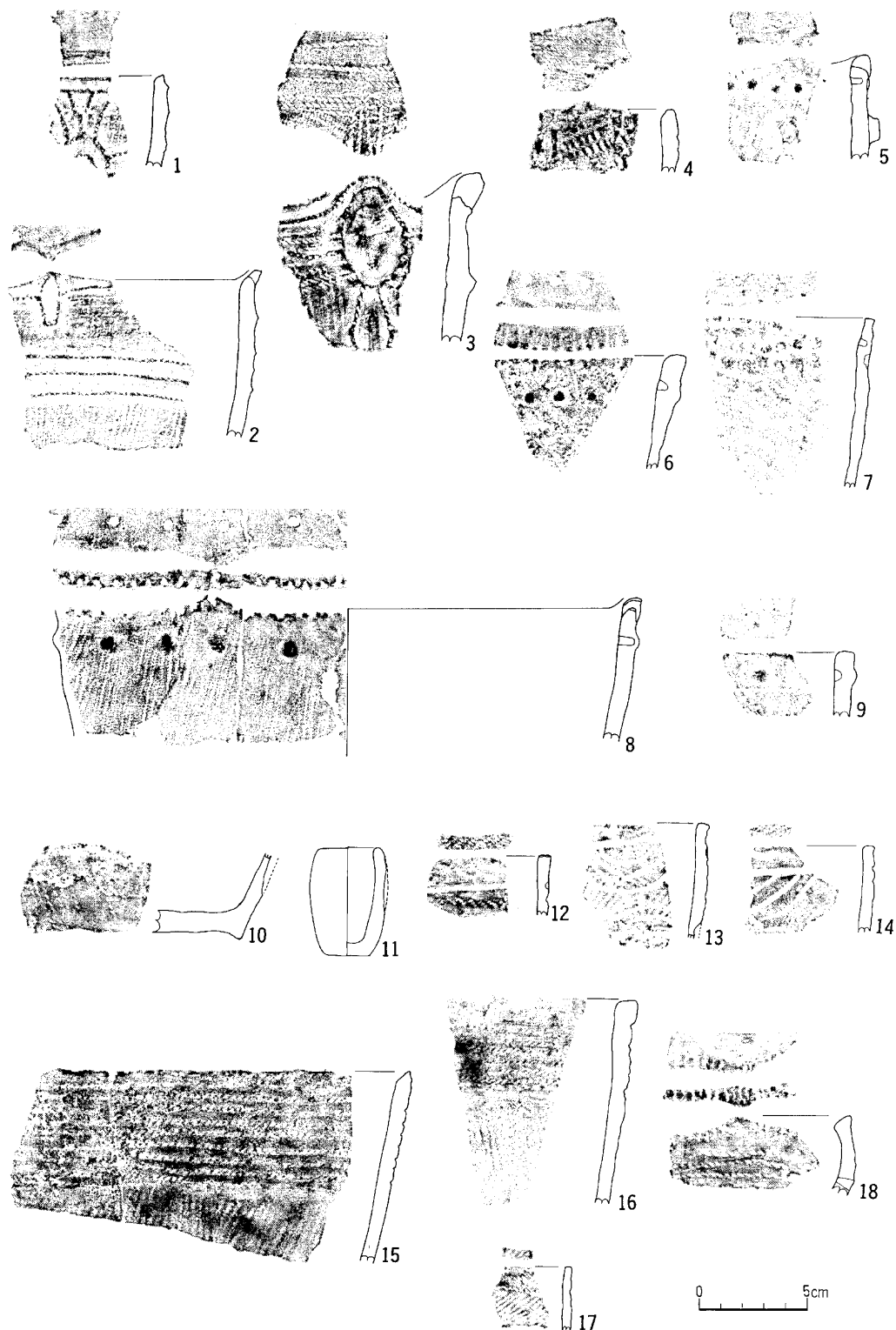
本竪穴は続縄文宇津内II a式の36a号竪穴に切られているためこれよりやや古い時期に相当される。



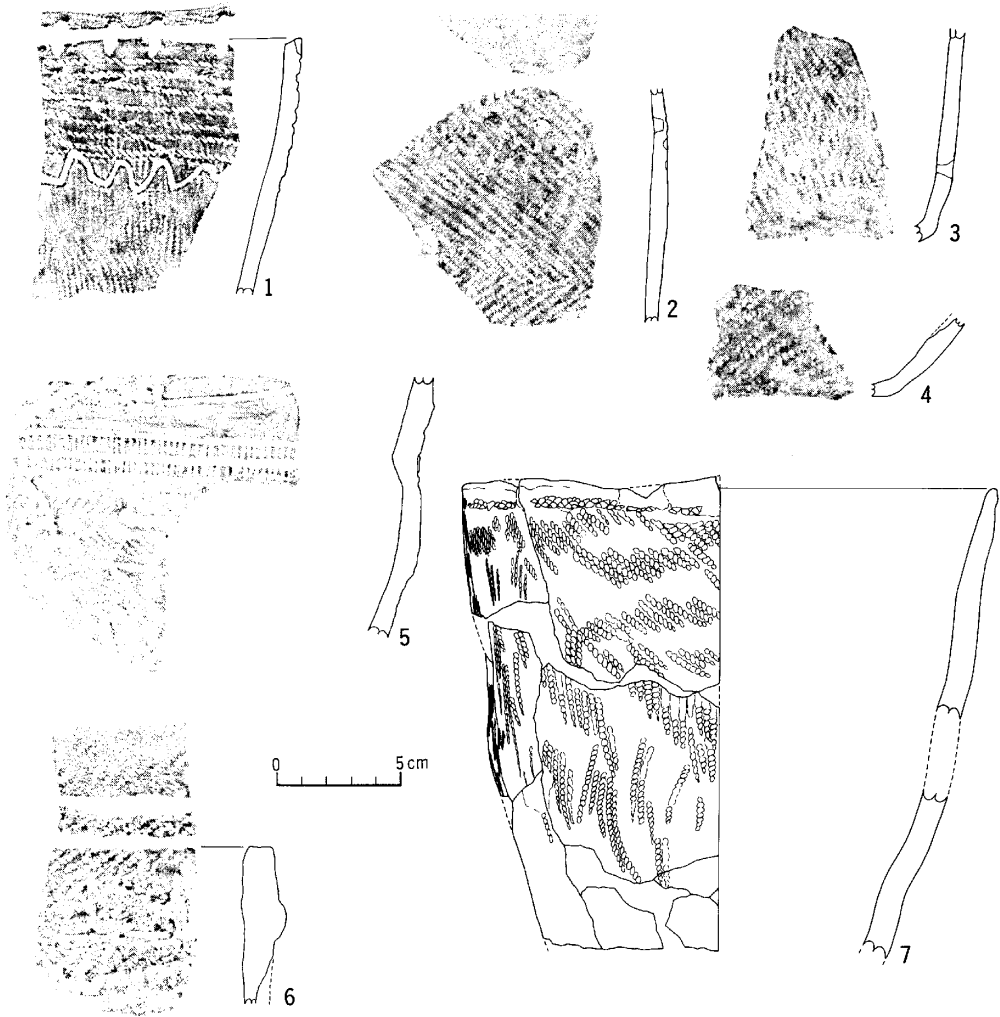
第203図 36号竖穴、36a号竖穴平面図



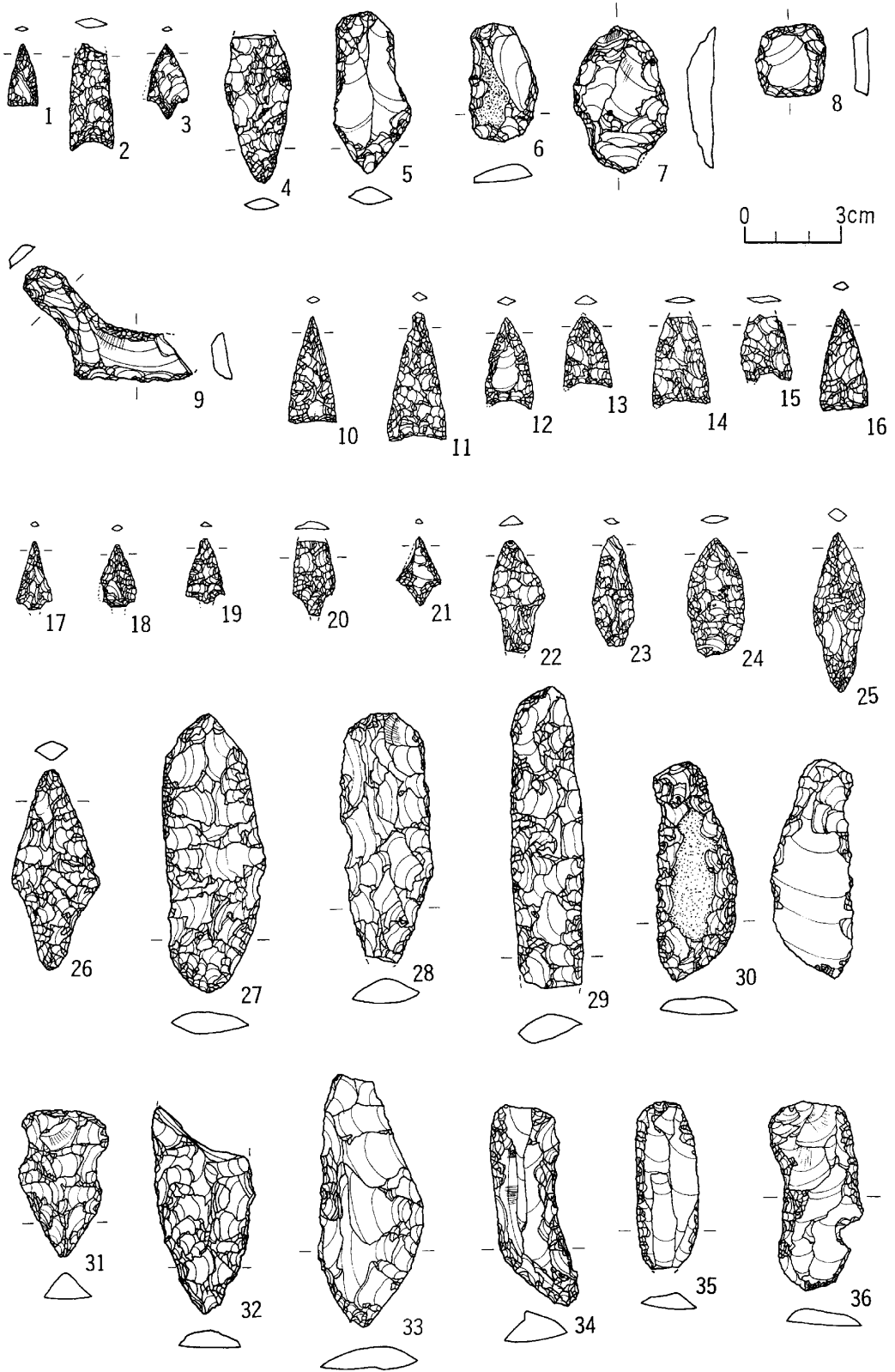
第204図 36号竪穴床面(1~3)・埋土(4~12)出土土器



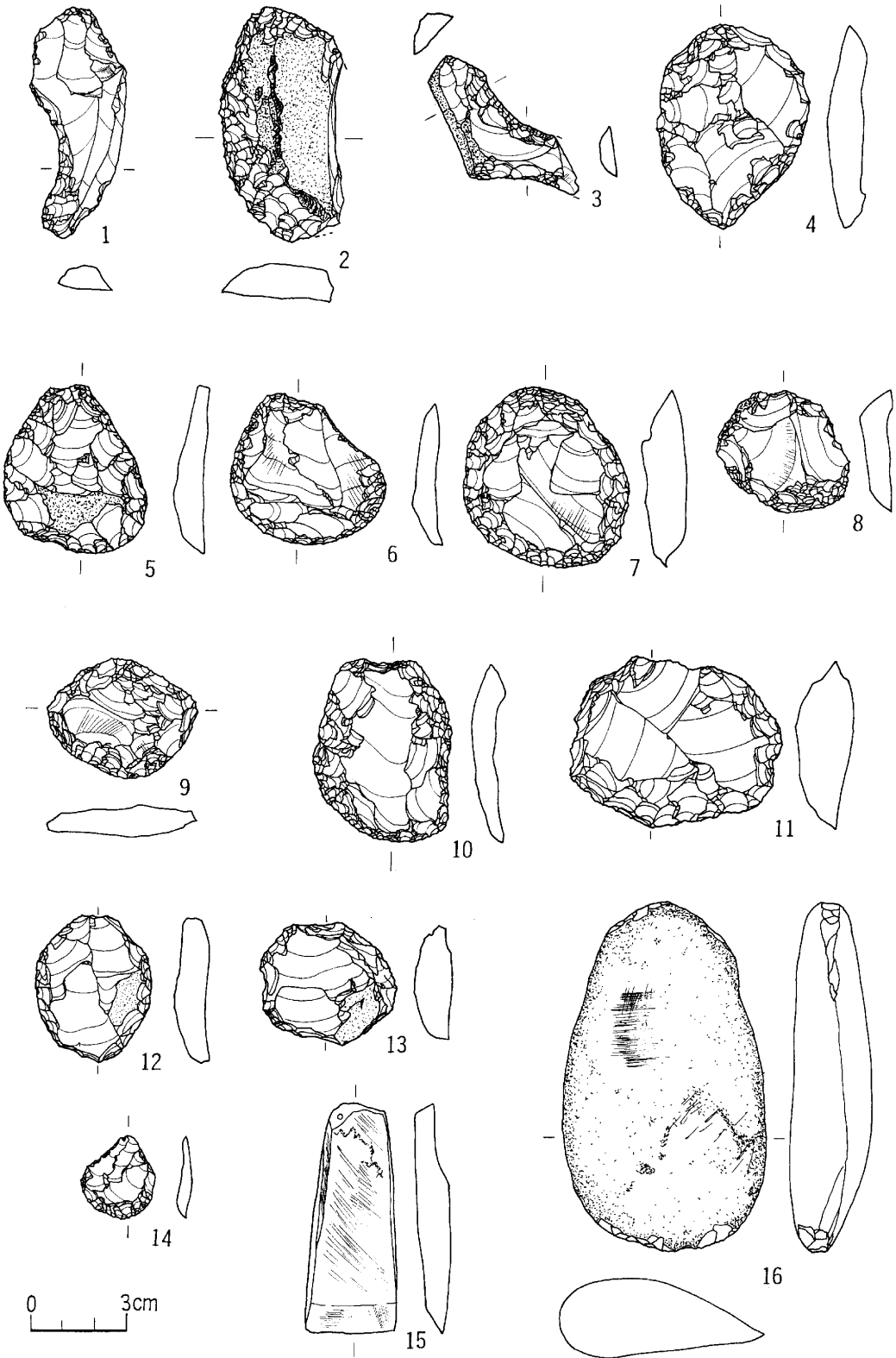
第205图 36号竖穴埋土(1~18)出土土器



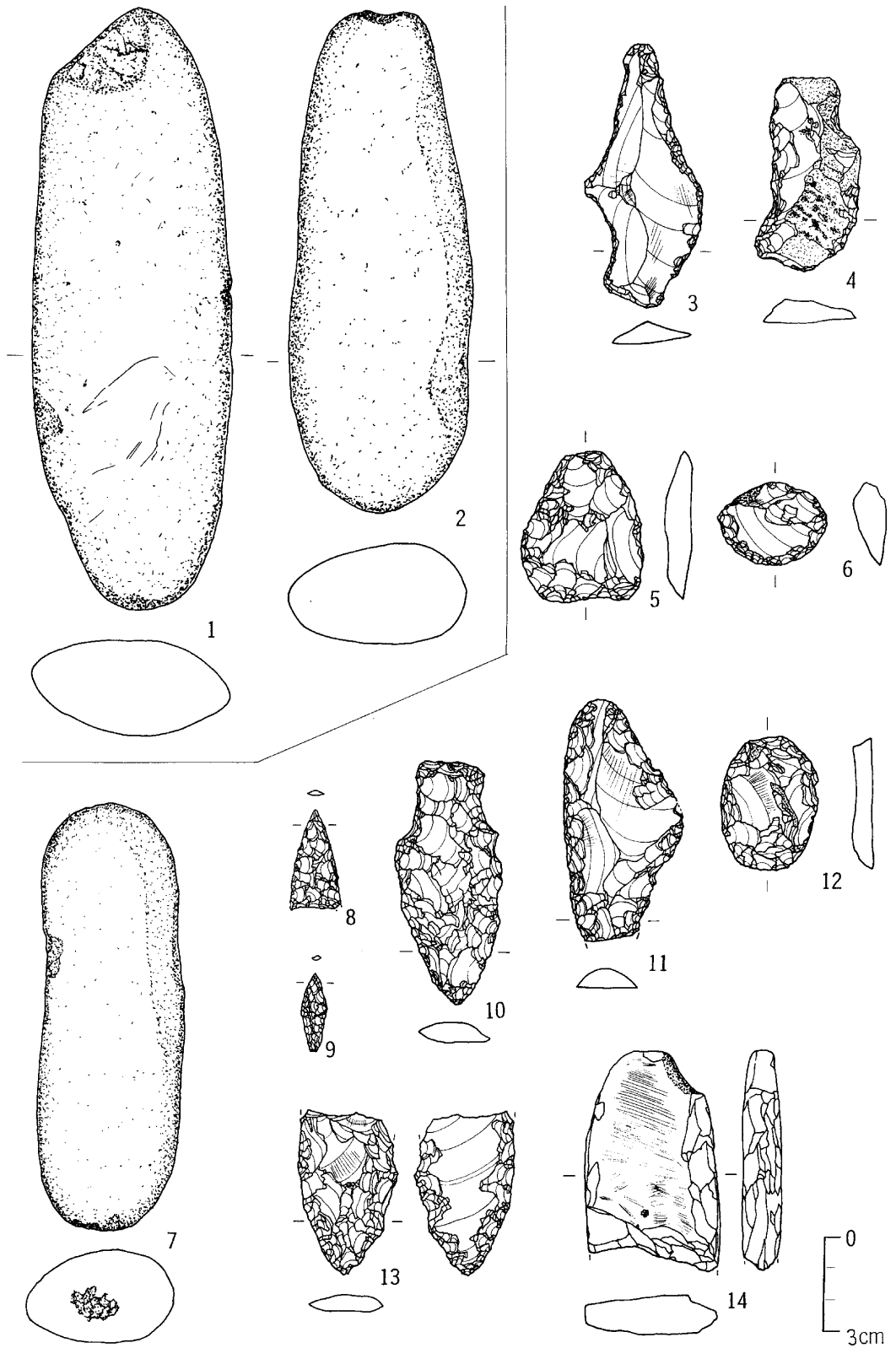
第206図 36号竖穴埋土(1~7)出土土器



第207图 36号竖穴床面(1~9)·埋土(10~36)出土石器



第208図 36号竪穴埋土(1~16)出土石器



第209图 36号竖穴埋土(1~2)、36 a 号竖穴床面(3~7)、埋土(8~14)出土石器

36a 号 竪 穴

遺 構 (第203図)

本竪穴は36号の南側半分を切り込んで構築している。規模は短軸約4.20mの方形を呈し、北側に長さ約3mの舌状の張り出しをもつ。張り出しは端部幅が約1.30mと広いのに対し住居の基部では約0.80mと狭くなっている。壁高は確認面から約45cm、36号の床面から約20cmを測る。石囲み炉は角礫を用いているが西側の状況を見ると角礫が2段に重なっている。作り変えたか補強したのであろう。第211図-1～6は石囲み炉に接する床面上から出土しているが第210図-1よりも古手と判断される。竪穴の廃棄直後に宇津内系の人々が住んだ可能性がある。

遺 物 (第209図-3～14、210、211、212図、図版53-1～6)

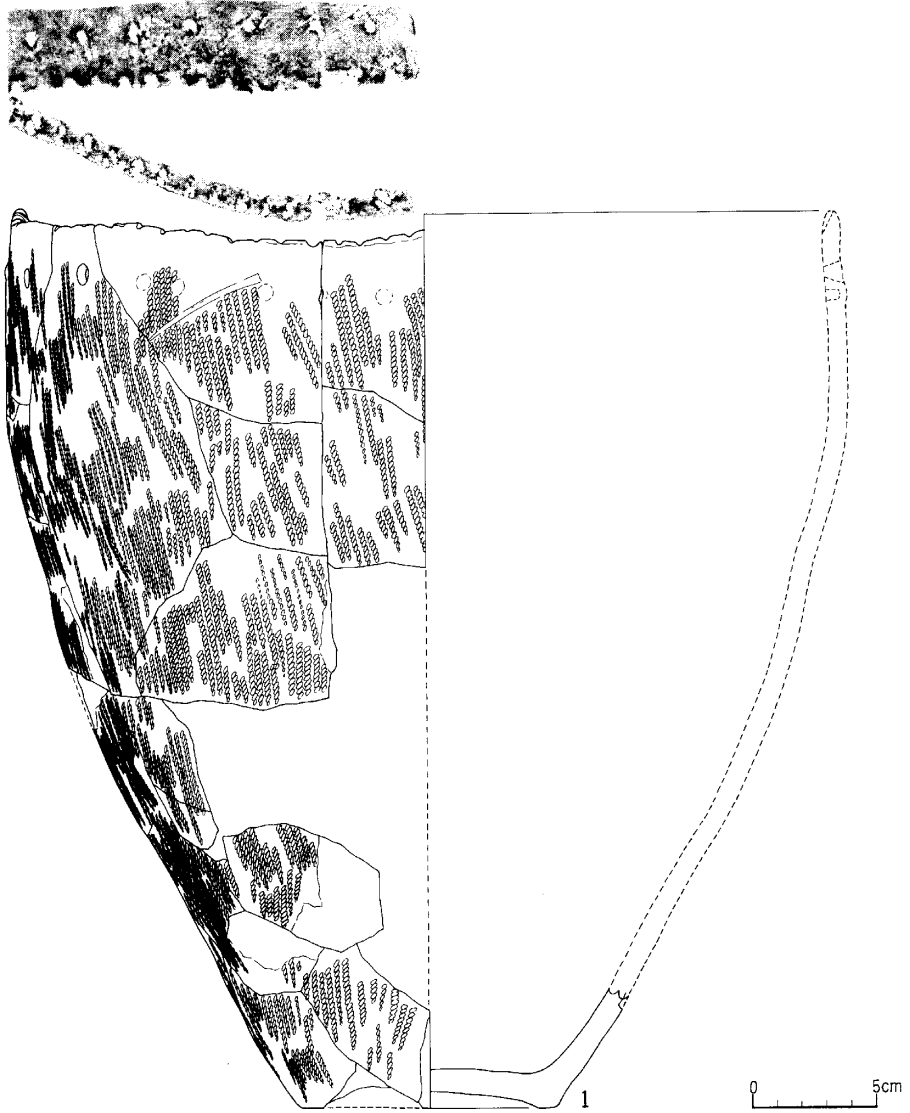
床面から第210図-1の宇津内II a 式(古)が出土している。この土器は口径38cm、器高35cmの大型深鉢土器で石囲み炉の西側から出土した。口縁部はきわめて緩い小波状を呈し内湾せずほぼ垂直に立ち上がる。口唇部には縄端の圧痕文が施される。突瘤は口縁下約2cmに施される。底部は揚げ底になる。第211図-1～9も床面出土である。これらの土器片は石囲み炉に接した床面から出土した続縄文前葉のものである。1は縄線文上に縦の短沈線と刺突文および横走る浅い沈線がある。2、3は横走沈線とその上下に刺突文のあるもので、3の最下段の沈線は途中で切れ縄線文が連続するようである。5は口縁部に小突起をもつ。縦走沈線とそれを結ぶ斜めの沈線で構成され刺突が加わる。6は横走沈線文と刺突が施される。7～9は宇津内II a 式。10は重量25gの紡錘車。11は宇津内系である。12は宇津内II b 式。13、14は口唇部が比較的薄い宇津内II a 式。第212図-1～6は続縄文前葉である。1は縄端圧痕文、2は外反した口唇部に鋭い刻みがあり縄線文の上部に縄端圧痕文が施される。4は幅広の無文帯に縄端圧痕文がある。5はRLの縄文を地文とした小型土器。口縁下部に2個の吊り耳と口縁部に4個の小突起をもつ。土器の内部にベンガラが詰った状態で出土したもので、器面の一部と内面にはベンガラが付着する。6は横走沈線と刺突の加わった楕円状の沈線で構成される。7、8は晩期の緑ヶ岡式と思われる。9～12は幣舞式。11は波状沈線間を細い沈線で重鎮させている。13は縄線文と刺突文、14は刺突文のある晩期中葉、15は内側で斜めの突瘤がある晩期前葉のもの。

石器は床面から第209図-3、4の側削器。5、6の搔器。7の叩き石がある。埋土からは8～14が出土している。8は無茎石鏃。9は有茎石鏃。10は柄部が作出され先端部が尖る両面加工ナイフ。11は削器。12は搔器。13は主要剝離面側の縁辺部も加工されたナイフ。14は緑色泥岩製の磨製石斧。7、14を除きすべて黒曜石製である。

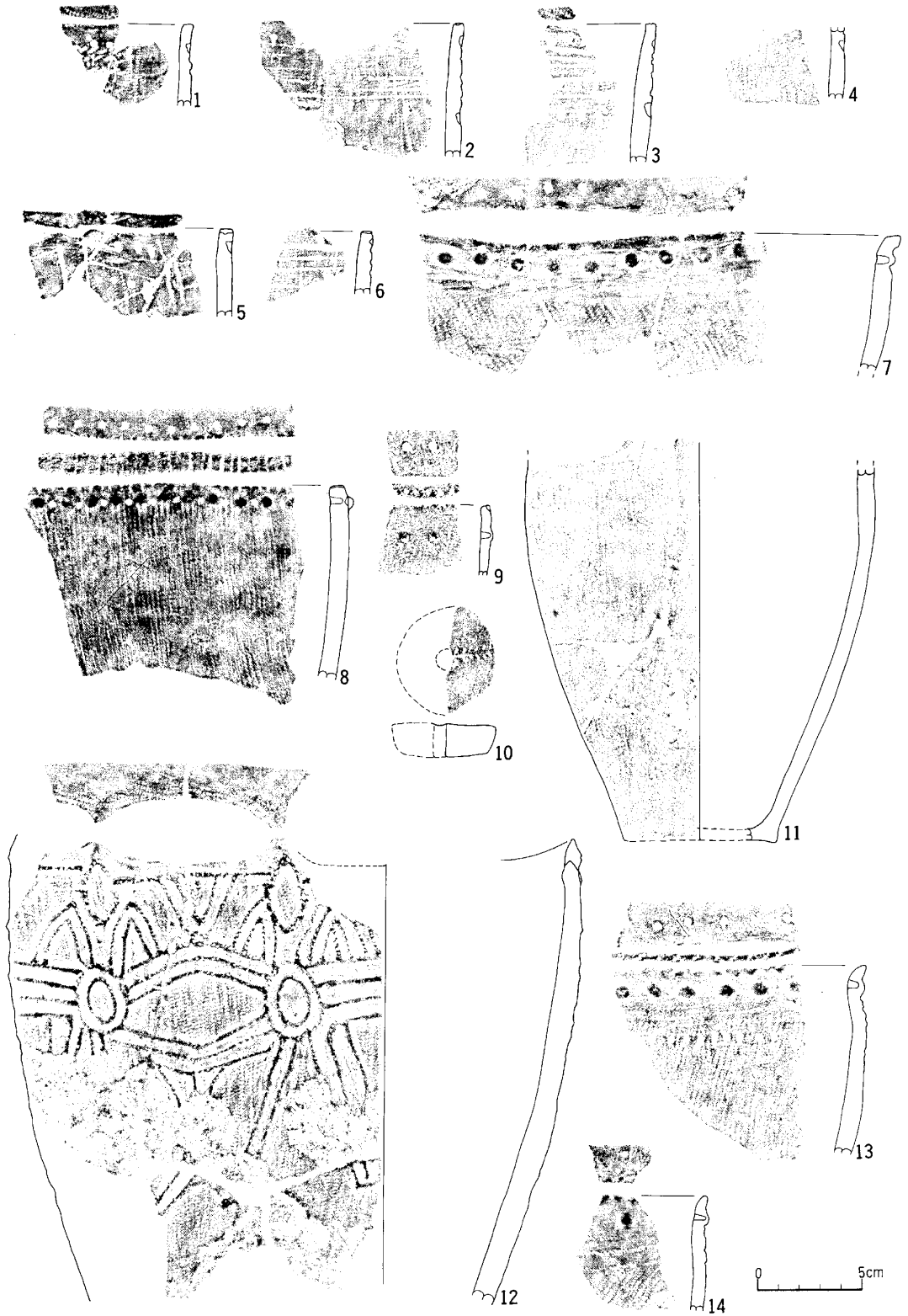
小 括

本竪穴の時期は続縄文宇津内II a 式(古)である。北側に舌状の張り出しと中央部に石囲み炉をもつ。36号を切って構築している。36a号は宇津内II a 式(古)よりさらに古い時期に相当

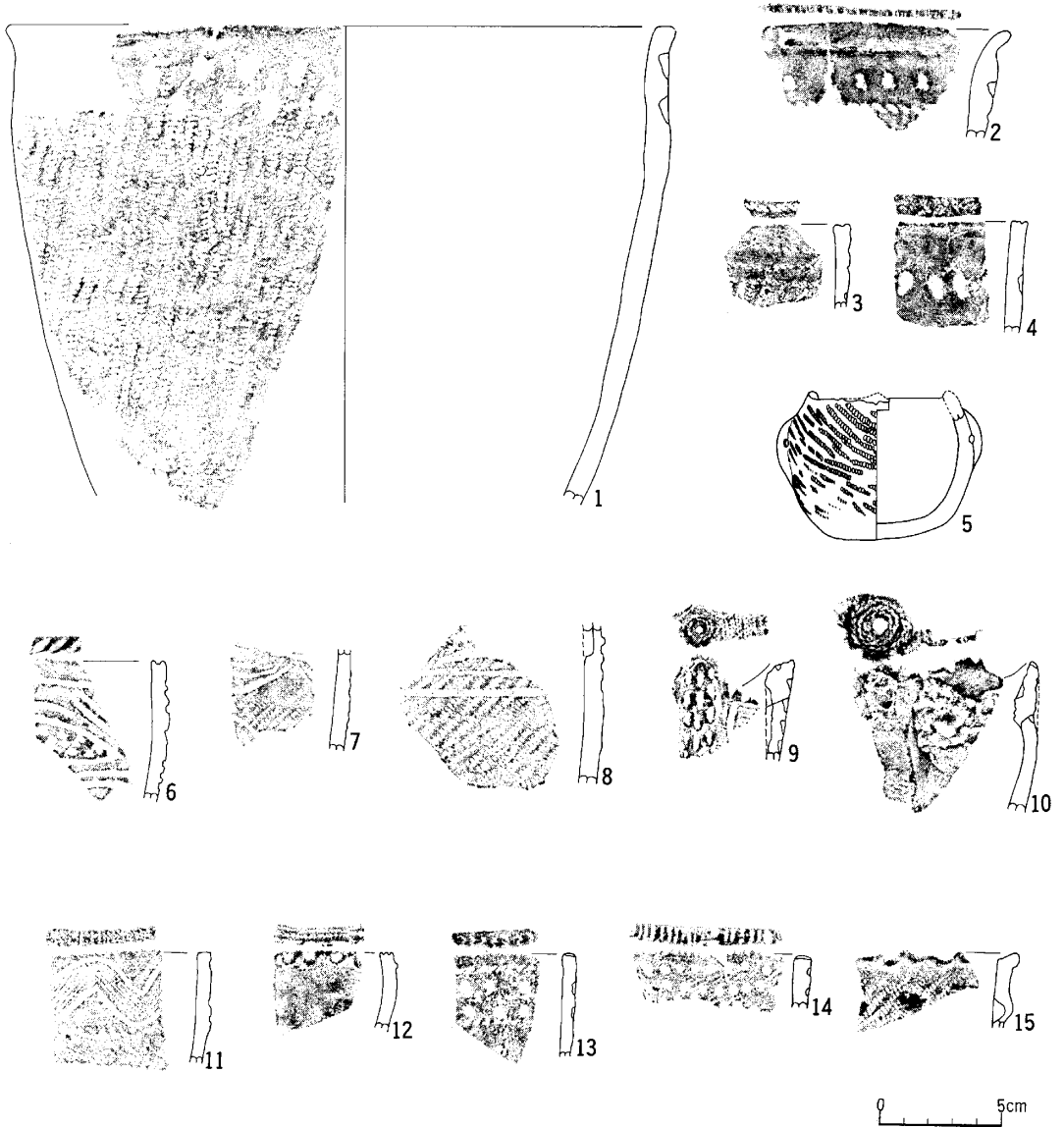
する可能性がある。



第210図 36a号竪穴床面出土土器



第211图 36 a 号竖穴床面(1~9)・埋土(10~14)出土土器



第212图 36 a号竖穴埋土(1~15)出土土器

37 号 豎 穴

遺 構 (第213図、図版53-7)

本豎穴はC69、70グリッドにある。西側の38号とは約1.7mの距離である。表土を剝土すると二次堆積の黄褐色砂質土が現れこれを取り除くと旧地表面が現れた。二次堆積土は豎穴の窪地にのみ認められるものでこの地域の住民が平坦に埋めたものである。旧表土の下面には樽前a火山灰が堆積し、この下の暗褐色砂層を剝土すると粒子の細かい砂質土の床面がある。グリッドの土層断面では表土下に茶褐色砂層さらに黒色土層が堆積するが、黒色土はオホーツク文化ソーメン状貼付文の遺物包含層である。本豎穴の周囲にある38号、39号、50号の各豎穴もこの黒色土層を切り込んで構築されている。黒色土の下層は無遺物層である5～6cmの明褐色砂層を挟んで後北C₂式の包含層に続く。豎穴の規模は一辺約5mの方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約50cmである。カマドは東壁中央部に構築されている。構築材は黄褐色粘土と10～20cmの礫を袖部に用いている。煙道は比較的急に立ち上がる。炉跡は中央部にある。炭化材は西壁際から南壁際にかけて認められる。炭化材は床面に密着する例はなく間層を挟み壁の上部から内側に向かって斜めに倒れ込んでいる。

主柱穴は4本ある。さほど大きくなく直径約12～22cm、深さ約12～28cmである。壁柱穴は直径約7～15cm、深さ約6～18cmのものがほぼ等間隔に配置される。

遺 物 (第214図-1～9、第217図-1～3)

遺物はすべて埋土から出土している。第214図-1は高杯。2は小型鉢形土器。口縁下部に山形刻線が施される。3は大型鉢形土器。隆帯上に短刻線が施される。4は器面が刷毛で調整され底部に板目状圧痕がある。6は後北C₂式。7は細く鋭い沈線を雑に施文する。後北C₂式併行期のものであろう。8は宇津内II a式。9は縄文前期末のシュブノツナイ式。

石器は第217図-1～3の黒曜石製の側削器がある。

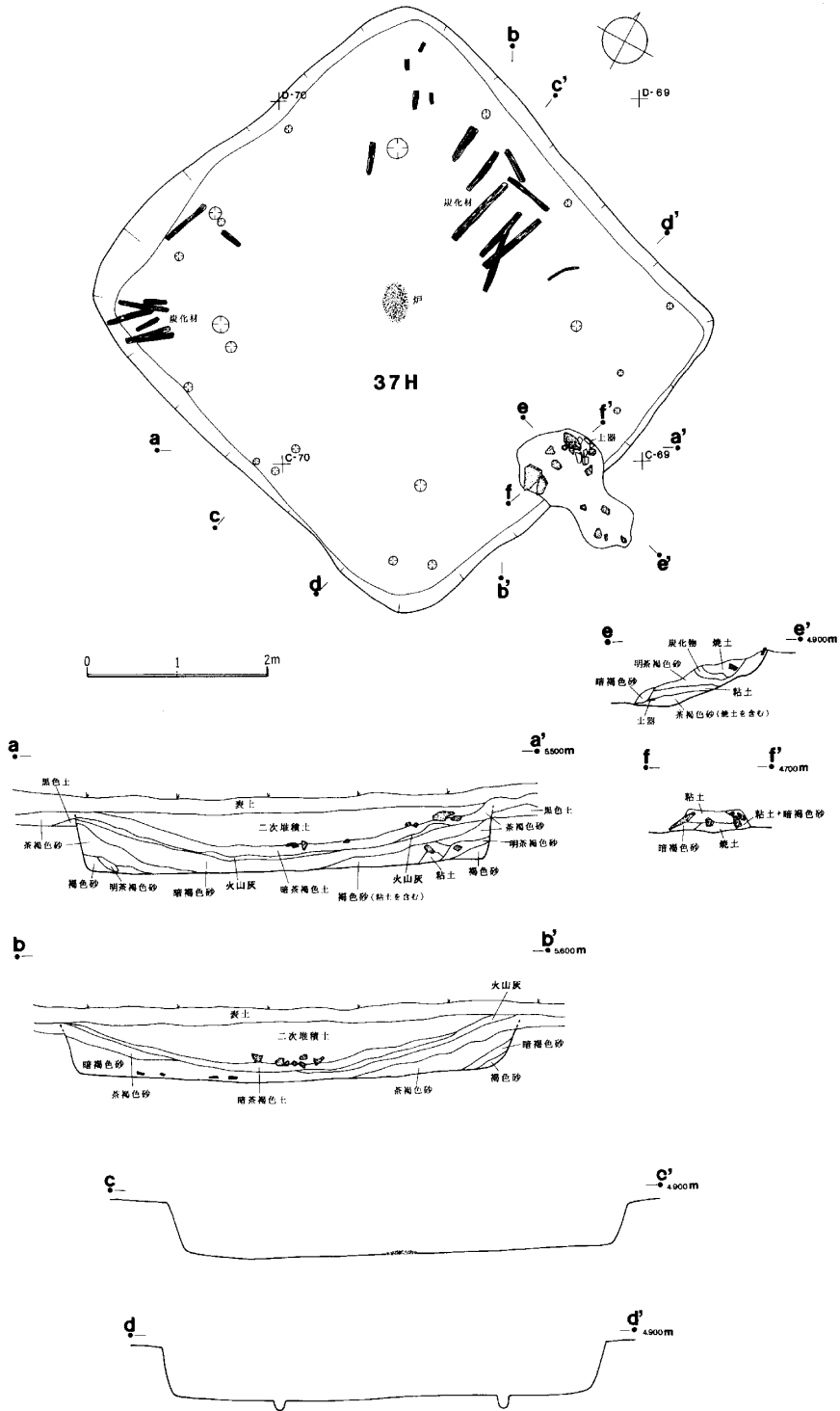
小 括

本豎穴の床面から遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、第214図-3の土器が最も近いのであろう。この土器は宇田川編年後期に比定される。

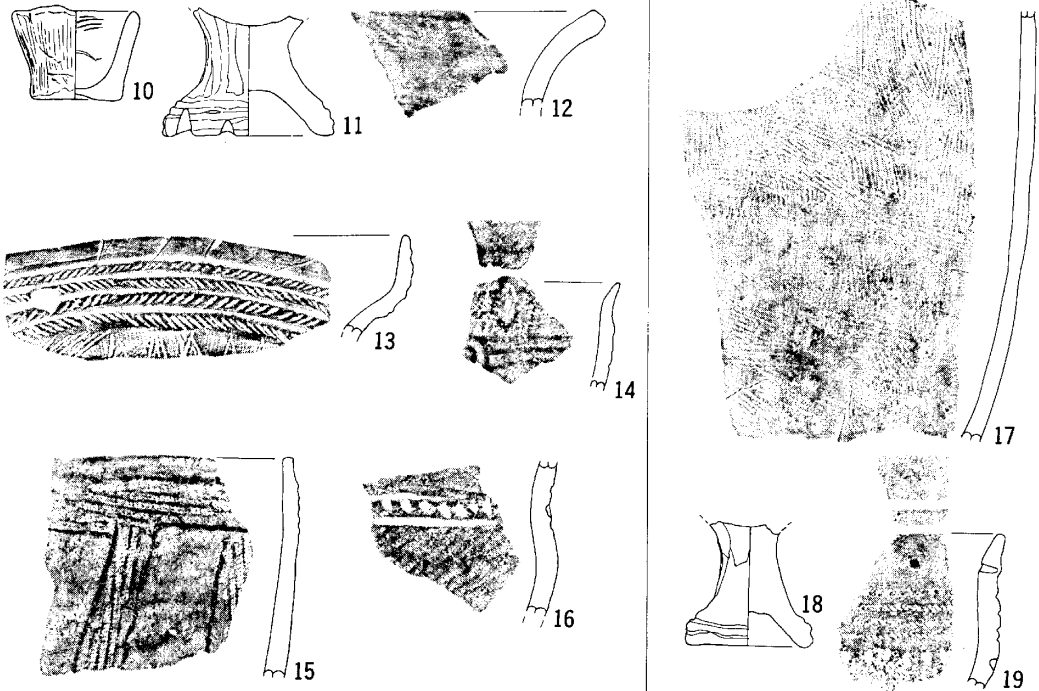
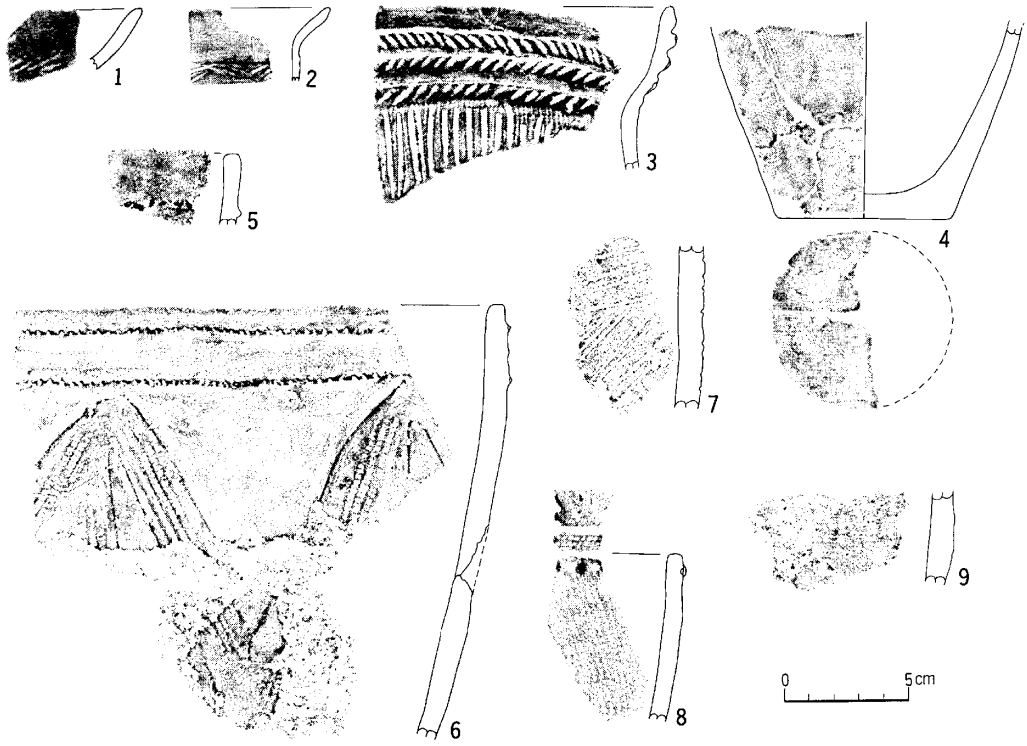
38 号 豎 穴

遺 構 (第215図、図版54-1)

本豎穴は37号豎穴の西側に位置する。規模は長軸4m、短軸3.5mを測り東西がやや長い方形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。カマドは東壁の中央部に構築されている。炉は中央部にある。



第213图 37号竖穴平面图



第214图 37号竖穴埋土(1~9)、38号竖穴埋土(10~16)、39号竖穴埋土(17~19)出土土器

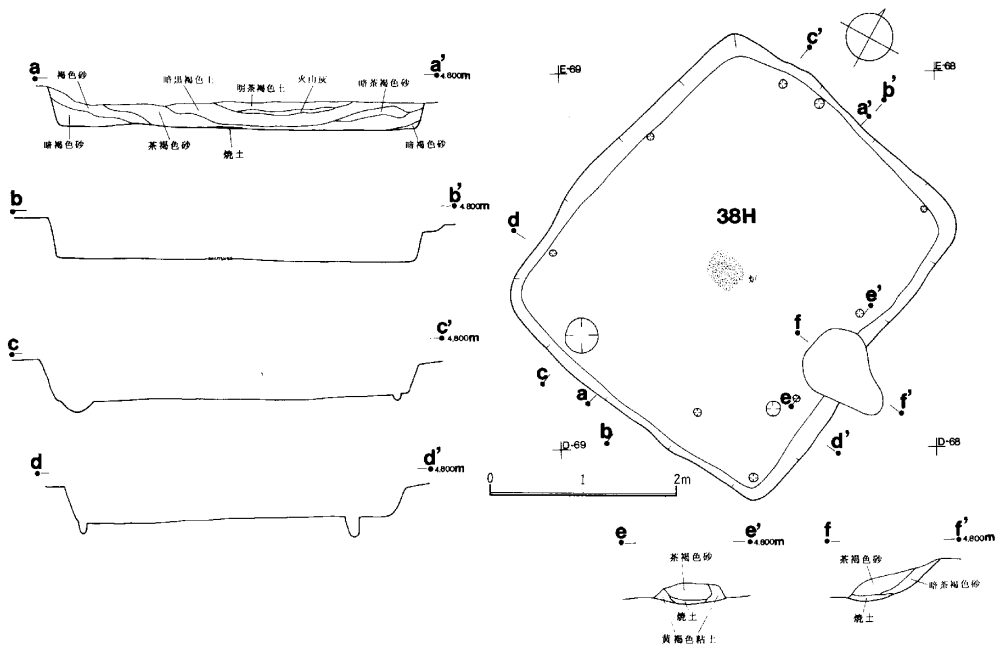
遺物 (第214図-10~16、第217図-4、図版54-2)

第214図-10は小型杯。11は高杯脚部。底部に10個所の刻みがある。12は無文大型鉢形土器。13は大型鉢形土器。14は宇津内II b式。15は後北C₂・D式。16は頸部に2条の横走沈線間にれ刺突文が施される。縄文後期であろう。

石器は第217図-4の黒曜石製の側削器がある。

小括

擦文期の竪穴であるが詳細な時期は不明である。



第215図 38号竪穴平面図

39号 竪穴

遺 構 (第216図、図版54-3)

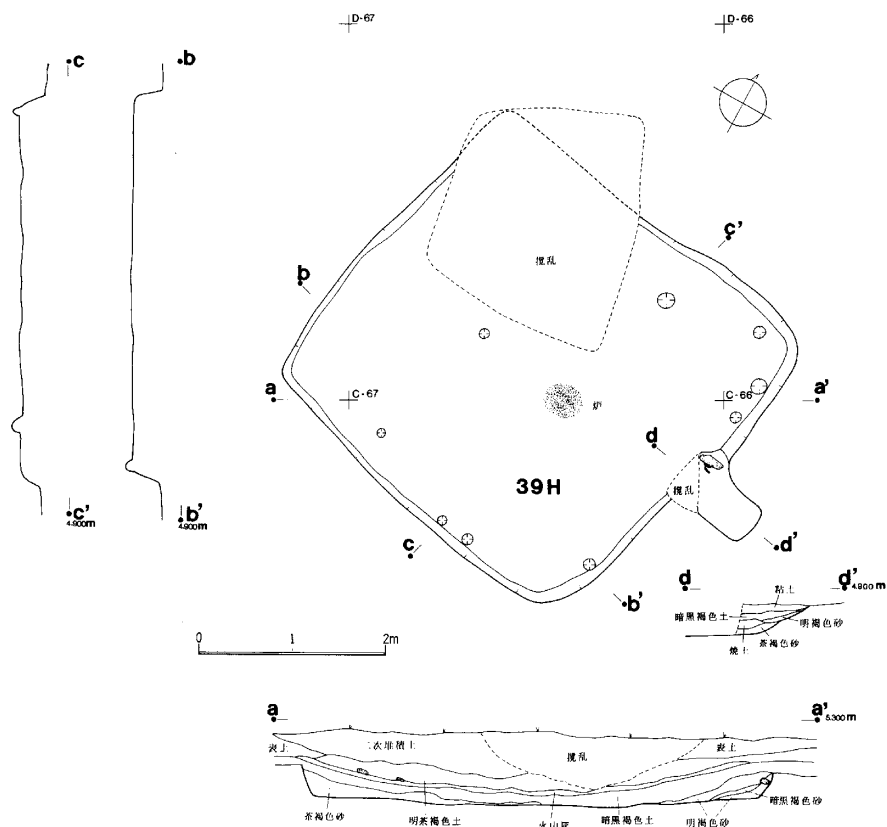
本竪穴は37号、38号の東側に位置する。規模は一辺約4.2mの方形を呈する。北壁、西壁から床面にかけて大きな攪乱を受けるため遺存は悪い。壁高は確認面から約35cmを測る。カマドは東壁に構築されている。

遺 物 (第214図-17～19、第217図-5～7)

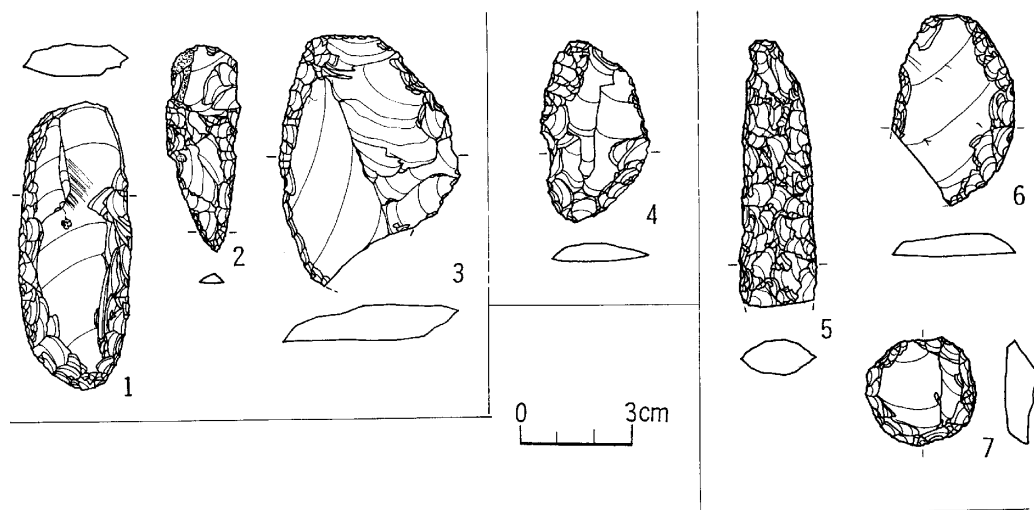
第214図-17は器面が刷毛により調整されている。18は高杯脚部。19は宇津内II a式。石器は第217図-5～7がある。5はつまみの付いた両面加工ナイフ。6は側削器。7は搔器である。3点とも黒曜石製。図示していないが他に黒曜石製で調整の粗い両面加工ナイフが出土している。

小 括

本竪穴は擦文期のものであるが詳細な時期は不明である。



第216図 39号竪穴平面図



第217図 37号竪穴埋土(1~3)、38号竪穴埋土(4)、39号竪穴埋土(5~7)出土石器

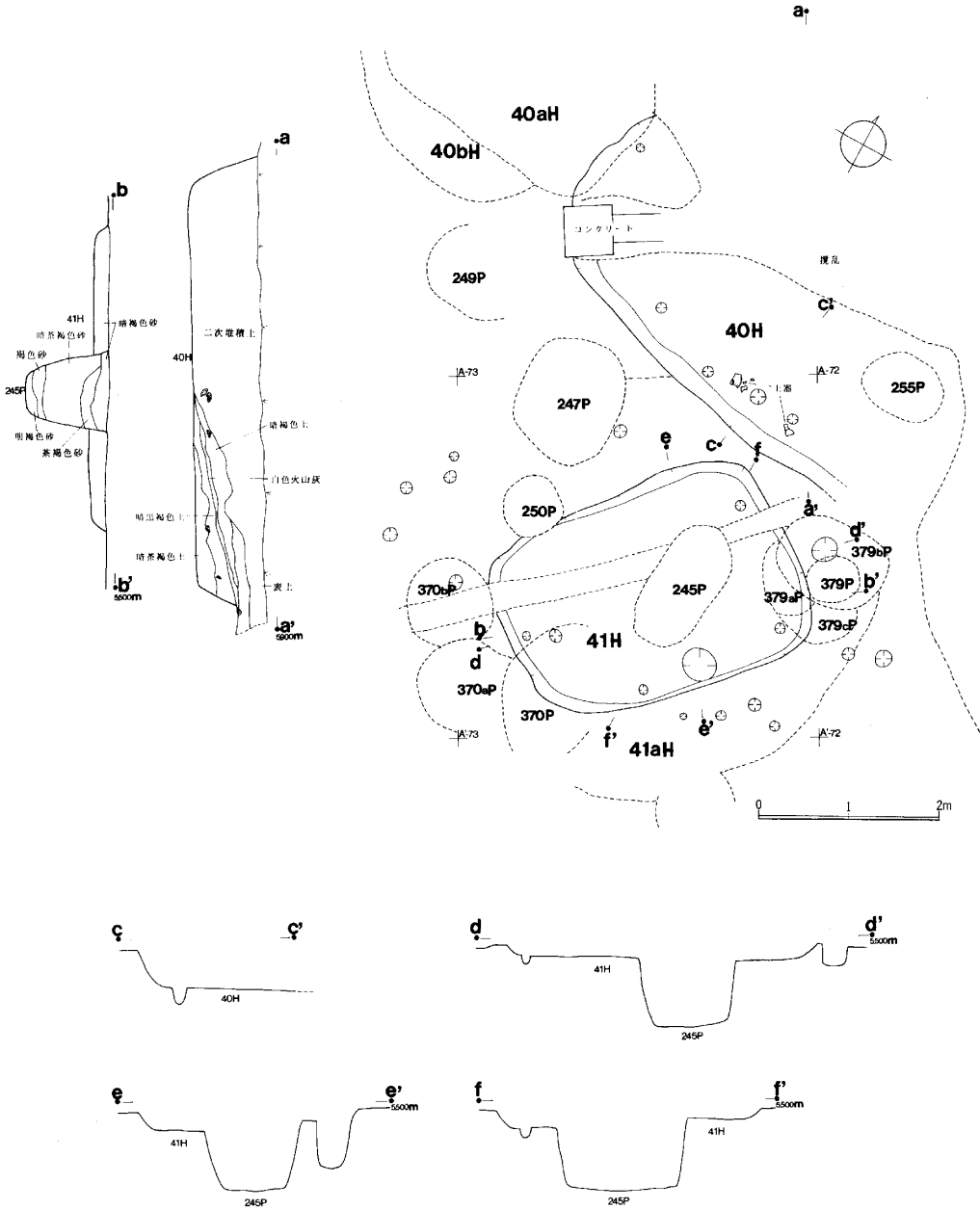
40 号 竪 穴

遺 構 (第218図、図版55-1)

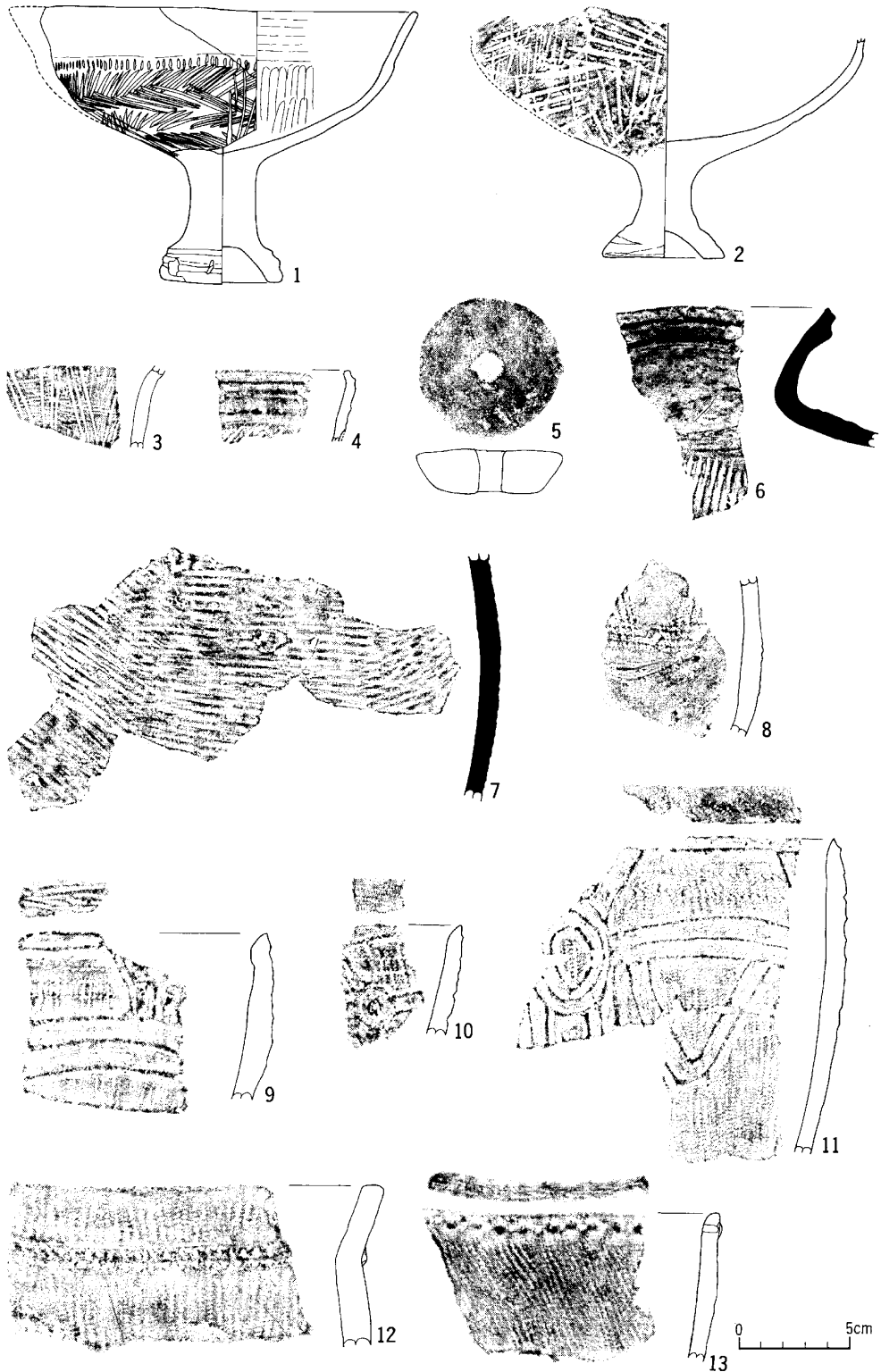
本竪穴はA72グリッドに位置する。二次堆積土、表土を剝土した段階で落ち込みを確認した。埋土には樽前a火山灰(トコロ火山灰IV)が堆積している。竪穴の大半は下水管理設工により破壊を受けており南壁と西壁の一部を検出し得ただけである。したがって規模は全く不明である。形態は方形を呈するであろう。壁は斜めに立ち上がり高さは確認面から約50cmである。壁柱穴は直径約13~18cm、深さ約10~19cmのものが南壁4本、西壁1本ある。南壁の4本はほぼ等間隔に配置される。

遺 物 (第219、220、221図、図版55-2)

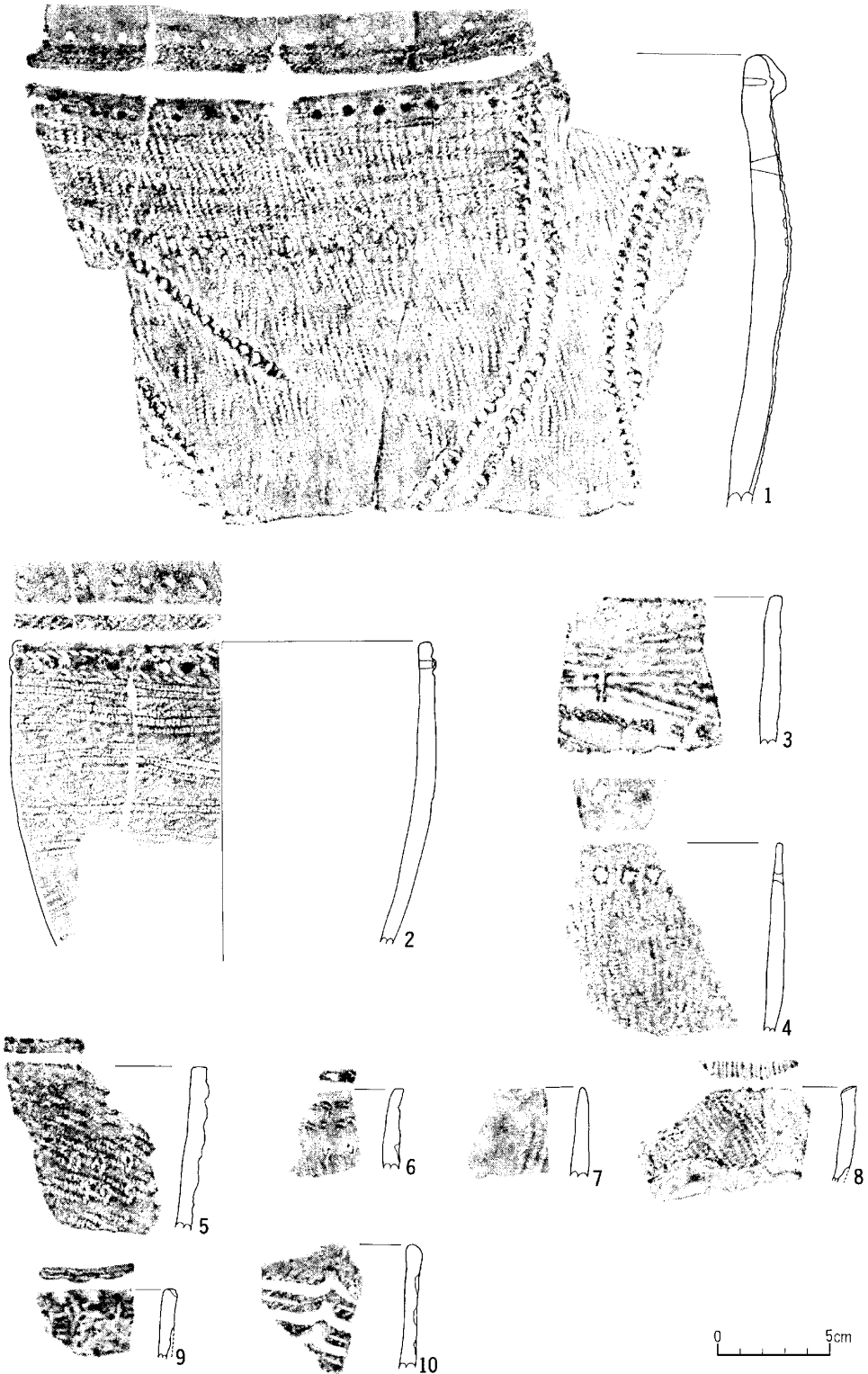
南壁際の床面から第219図-1、2の高杯が出土している。1は矢羽根状の刻線上に4~5本の刻線を縦に施す。2は基本的に矢羽根状の刻線を描くが1と比較すると雑である。埋土からは3の鋸歯状文が施されたものと4がある。5は無文の紡錘車。重量90g。6、7は須恵器。6は口縁部に2条の隆帯が巡り、頸部は「く」字状に外反する。7は胴部であろう。横、斜めに叩き目がみられる。胎土は鉄分を含むため赤褐色を呈する。五所ヶ原窯産のものであろう。8は後北C₂式。9~12は宇津内II b式。13は同II a式。第220図-1~2も同II a式。1は派頂口縁部から4本の隆帯が垂下する。2は突瘤文の上下に縄線文、その下部に帯縄文が施される。3~7は続縄文前葉である。3は沈線を変形工字文状に施し、菱形の沈線の中に縄線が施される。4は内外面にそれぞれ2個の円形刺突が見られるが左側に貫通した補修孔があるため右側の2個は補修孔をあけるための途中の段階のものであろう。5、6は縄線文の下部に縄端圧痕



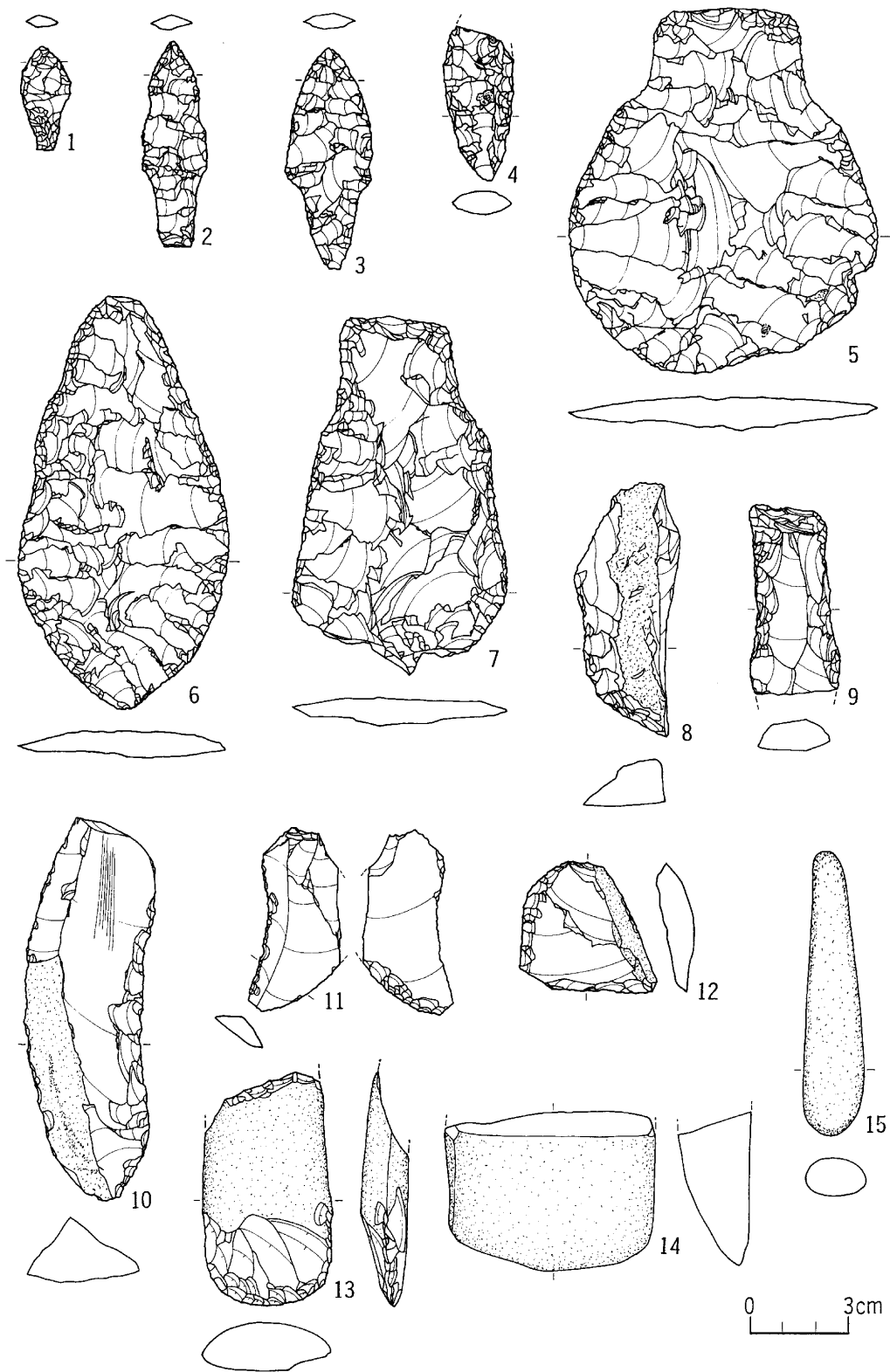
第218図 40号竪穴、41号竪穴平面図



第219图 40号竖穴床面(1·2)·埋土(3~13)出土土器



第220図 40号竪穴埋土(1~10)出土土器



第221图 40号竖穴埋土(1~15)出土石器

文が施される。7は縄文が施される。8、9は幣舞式系、10は大洞A式系と思われる。

石器は第221図-1～15がある。1は有茎石鏃。2、3は石槍。4～7は両面加工ナイフ。5は柄部をもち刃部は丸みを呈する。6の先端部は緩い尖頭状になる。7は柄部をもち刃部は角形を呈する。8～12は側削器。8は切出し状の刃部をもつ。13は泥岩製の磨製石斧。14は形態は石斧状を呈するが刃部を持たない。自然礫かもしれない。15は叩き石。13～15を除き黒曜石製。

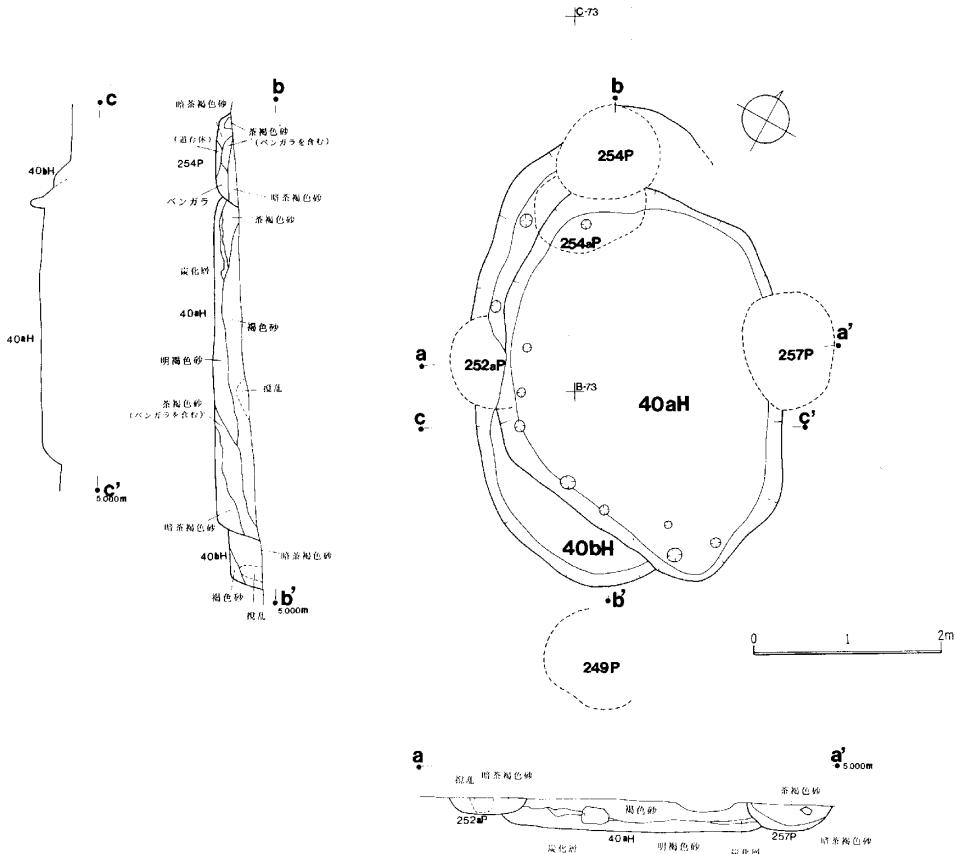
小 括

本竪穴の大半が破壊を受けているため正確な規模は不明である。時期は擦文期のものであり、宇田川編年後期に比定される。

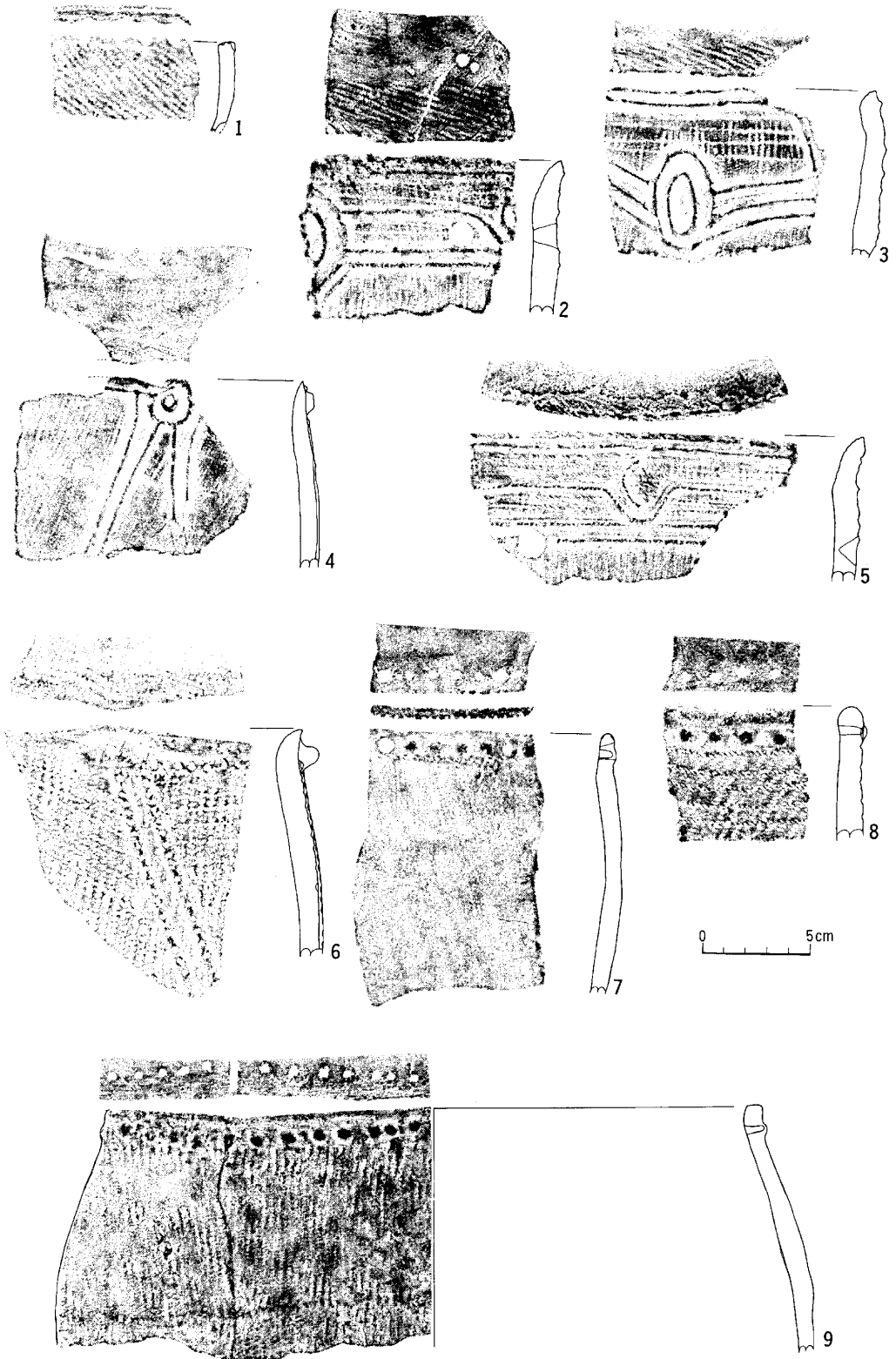
40a 号 竪 穴

遺 構 (第222図、図版55-3)

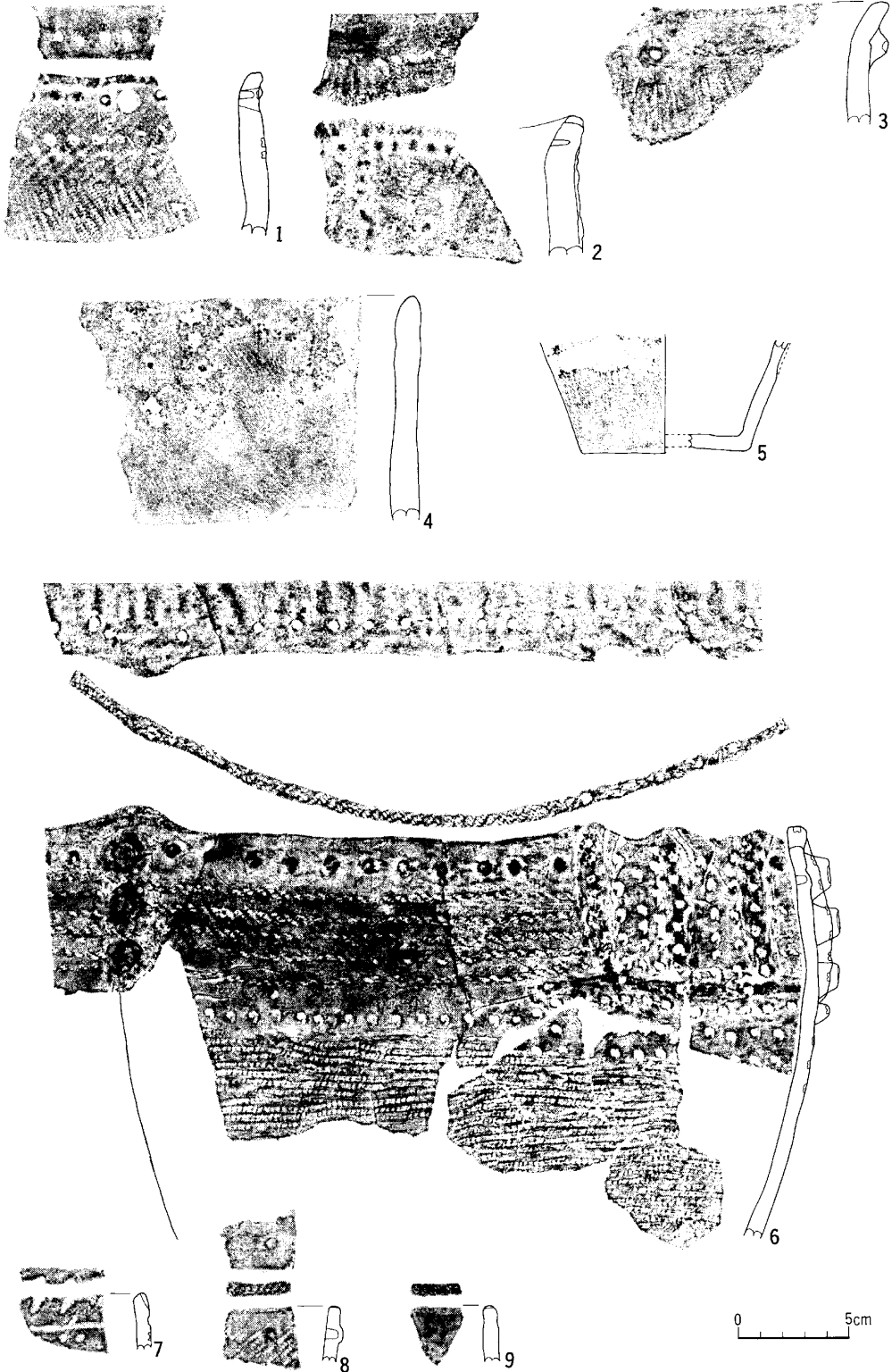
本竪穴は40号竪穴の西壁部で重複している。形態は長軸約4.2m、短軸約3mの不整形形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。



第222図 40 a号竪穴、40 b号竪穴平面図



第223图 40a号豎穴床面(1)・埋土(2~9)出土土器



第224图 40 a 号竖穴埋土(1~9)出土土器

遺物 (第223、224、229図-1～7)

床面から第223図-1に示す口唇部に縄線文、口縁部に刻みが施された幣舞系の土器が1点出土している。埋土からは2～9がある。2～6は宇津内II b式。7～9は宇津内II a式。第224図-1～5も宇津内II a式。1は突瘤文下に円形刺突が施される。6～9は続縄文前葉から宇津内II a式にかけてのものであろう。6は突瘤文の直上に縄線文、下部は帯縄文が施される。7は突瘤文の下部に5～7条の縄線文が施される。縄線文と胴部の横走縄文を区切るように円形刺突文が連続する。小波状を呈する口縁部の一部には隆帯が垂下しその周囲にも円形刺突が集中して施され、ボタン状の貼付がなされる。6の器形は宇津内II a式にみられるように口縁部が内湾する。

石器は埋土から第229図-1～7が出土している。1は無茎石鏃。2、4は両面加工ナイフ。3、5は片面加工ナイフ。6は搔器。7は緑色泥岩製の片刃磨製石斧。3、4は頁岩製であり他は黒曜石製。

小括

本竪穴は不整形を呈する。宇津内系と思われるピット254、254aより古いことは確実である。床面から幣舞式が出土しているので、これに近いと思われるが、正確な時期は不明である。

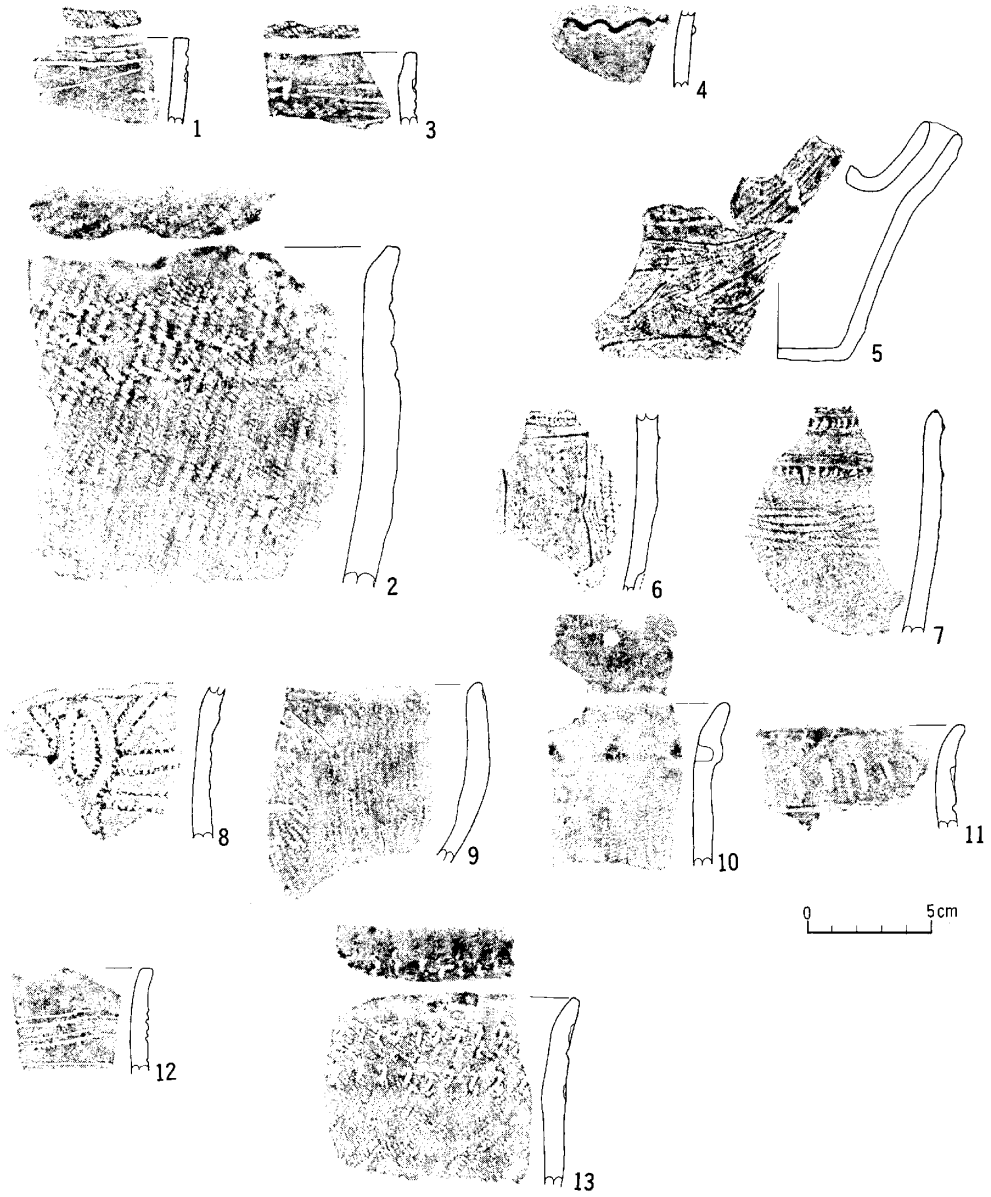
41号竪穴**遺構** (第218図、図版56-1)

本竪穴はA'72グリッドに位置する。規模は長軸約3.3m、短軸約2.3mの長方形を呈する。壁高は確認面から約10～18cmを測る。支柱穴は東壁の中央部に径38cm、深さ54cmのものが1本ある。壁柱穴は東壁2本、南壁2本、北壁1本が検出された。中央部にピット245が構築されているため炉跡は認められない。

遺物 (第225、229図-8～12)

床面から第225図-1～3が出土している。この3点は続縄文前葉に比定される。1は横走沈線と円形刺突、3は横走沈線とそれを仕切る短刻線、縄線で構成される。2は口縁部が緩い小波状を呈し3段の縄線が施される。4～13は埋土出土。4はオホーツクソーメン状貼付文。5～7は後北C₂・D式。8は宇津内II b式。10は同II a式。9、11～13は続縄文前葉であろう。9は口縁下に縄端圧痕文、11は深く鋭い刺突と横走沈線がみられる。12は半截施文具による沈線が施される。13は縄線と縄端圧痕文で構成される。

石器は第229図-8～12が出土している。8は有茎石鏃。9、10は削器。11は搔器。12は緑岩製の片刃磨製石斧。



第225図 41号竖穴床面(1~3)・埋土(4~13)出土土器

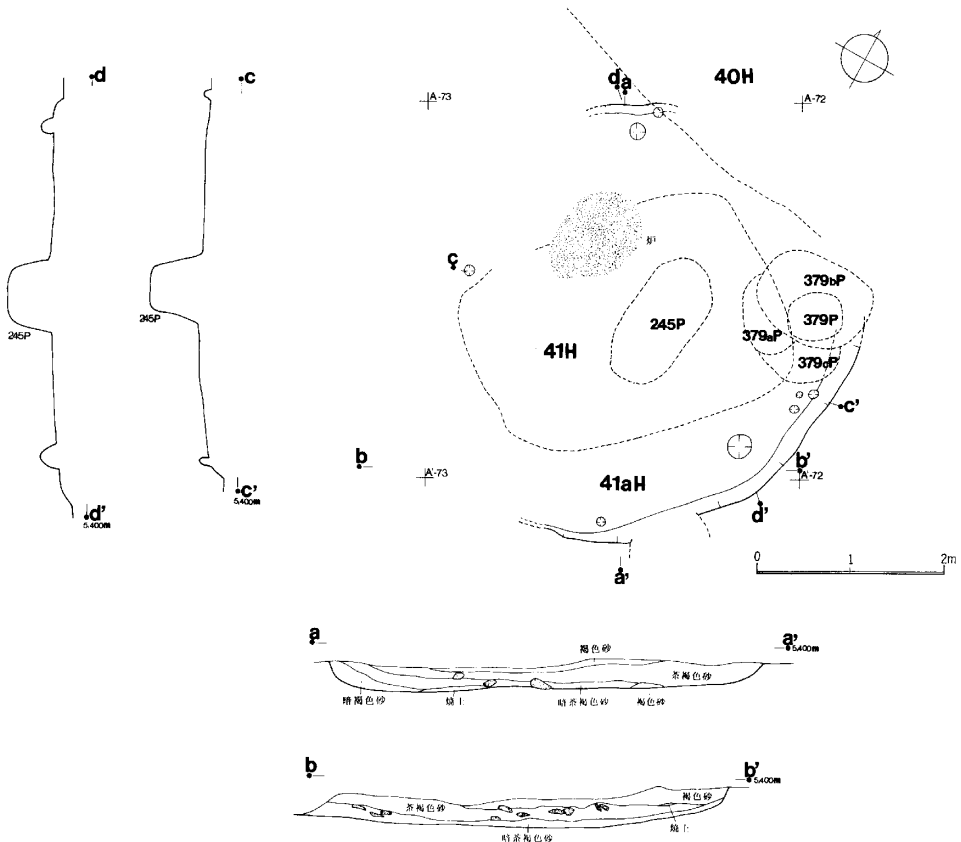
41a 号 竪穴

遺 構 (第226図)

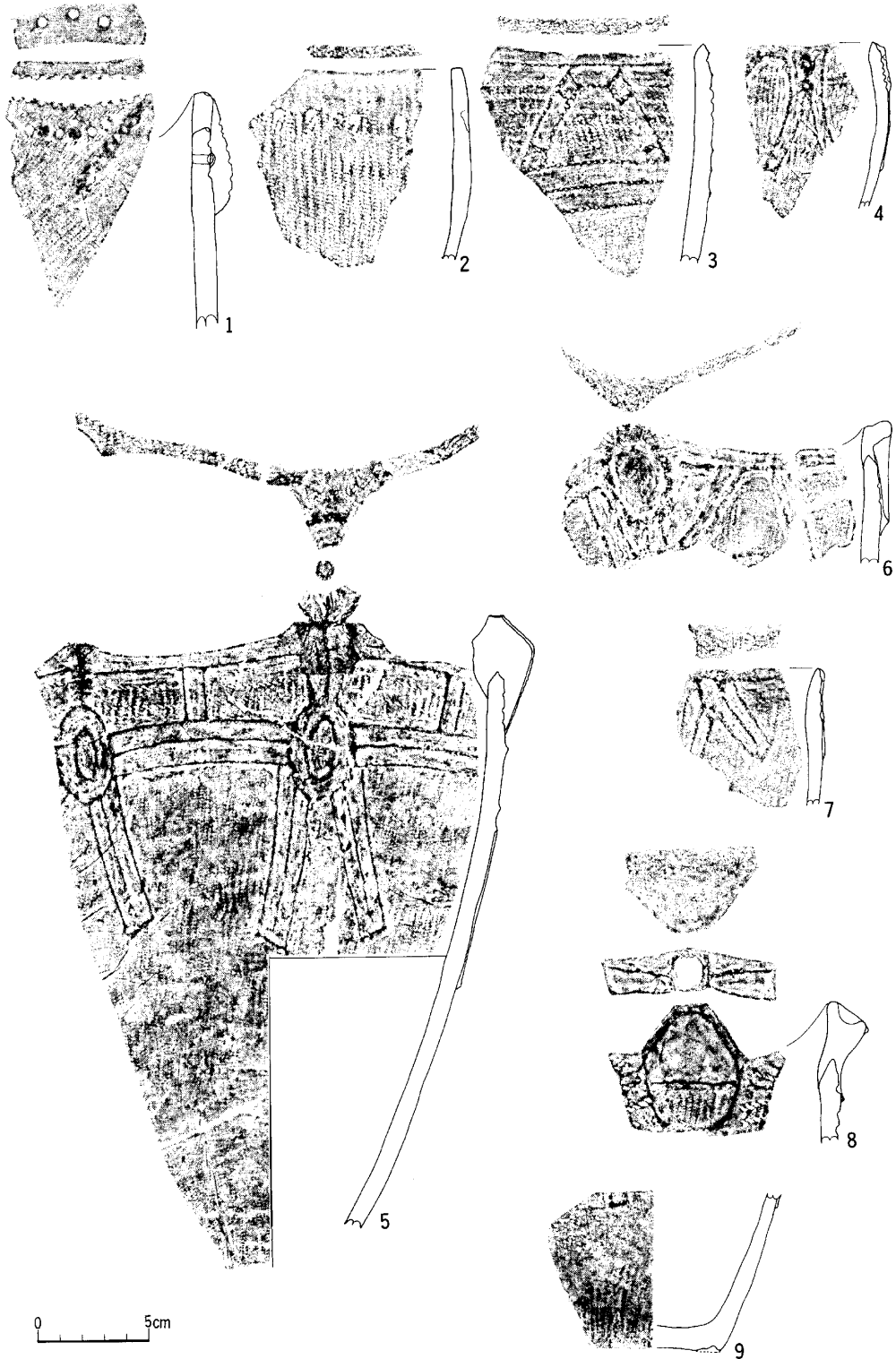
本竪穴は東壁と西壁の一部を検出した。正確な形態は不明であるが、直径約4.40mの円形、もしくは楕円形を呈すると思われる。壁高は約20~28cmであり浅く皿状に立ち上がる。炉跡は中央部から西側に寄った位置にあり長軸1.1mほどの広い範囲が良く焼けている。壁柱穴は直径約5~10cm、深さ約10~15cmである。時期は不明である。

遺 物 (第227、228、229図-13~22)

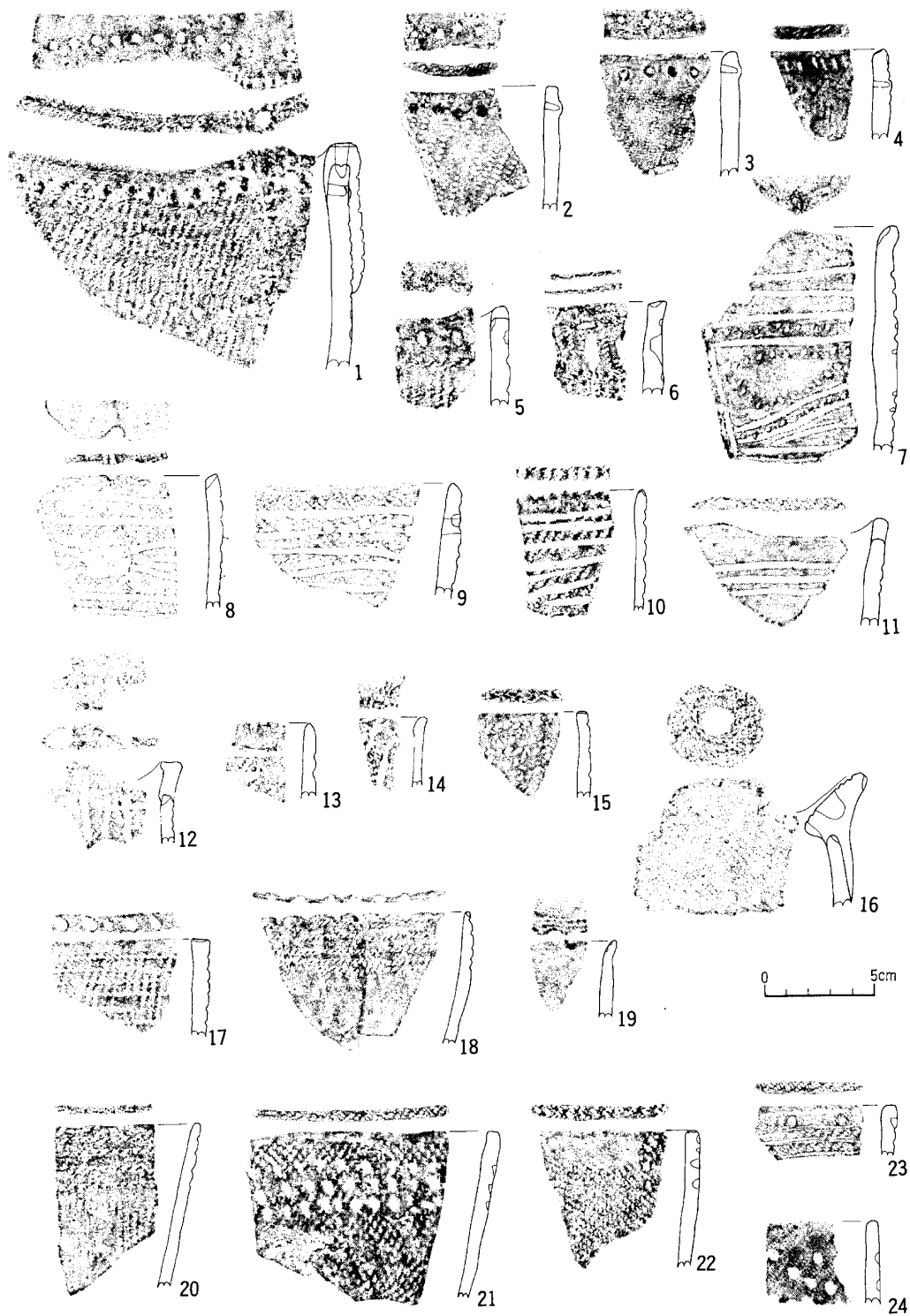
すべて埋土出土。第227図-1は宇津内II a式。2~8は同II b式。9は同期の底部。第228図-1~4は宇津内II a式。4の口縁下には鋭い刺突が施されている。5~7、11は縄文前葉であろう。5には縄線文の他に縄端圧痕文、6には刺突もみられる。7は口縁部に小突起をもつ。横走もしくは斜めの沈線を縦の沈線を縦の沈線で区画し、列点文も加わる。興津式相当であろう。8~10、13は緑ヶ岡式。12、14、16~20は幣舞式。15、21~24は縄文晩期中葉。石器は第



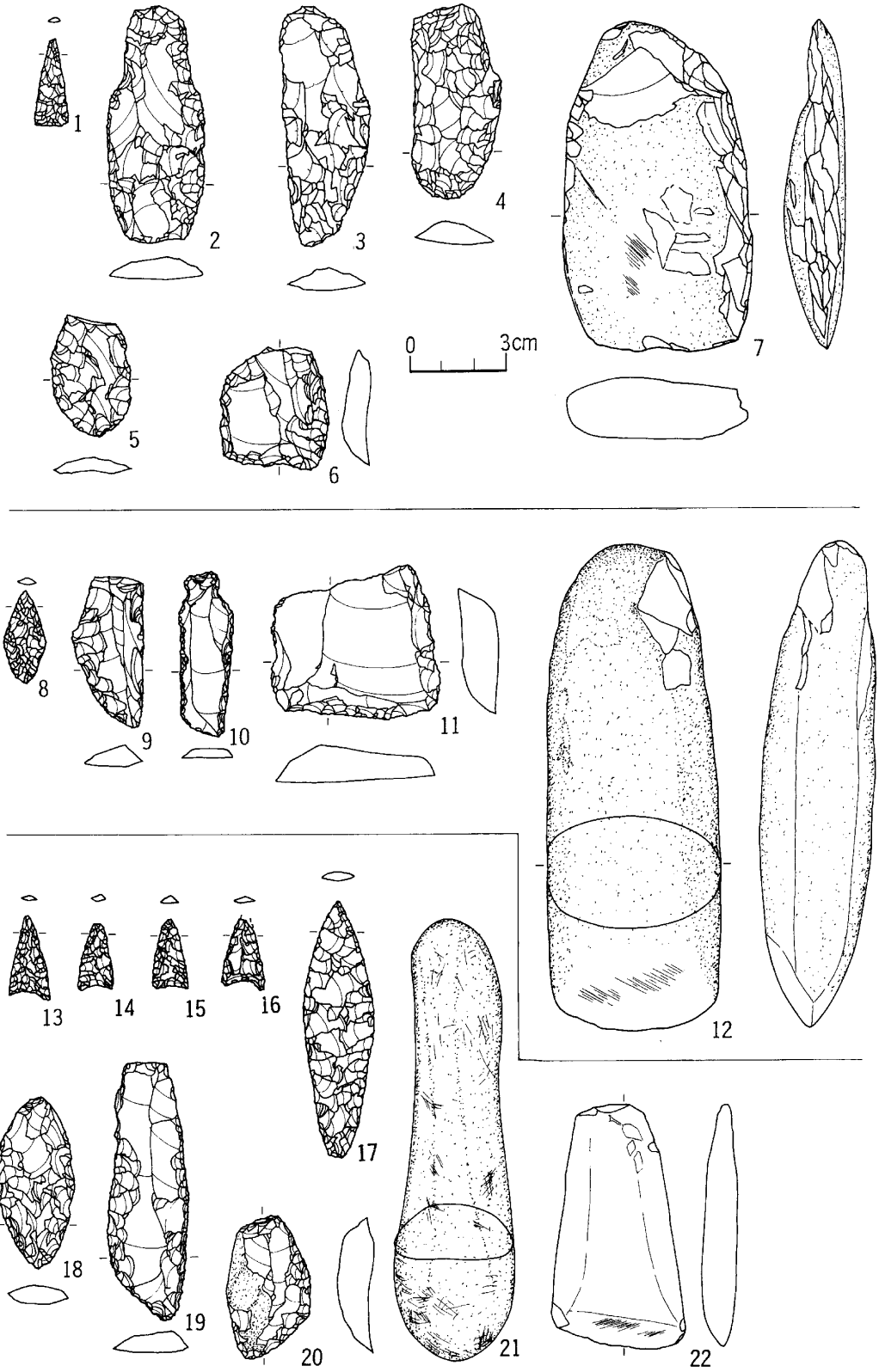
第226図 41a号竪穴平面図



第227图 41 a 号竖穴埋土(1~9)出土土器



第228图 41 a号豎穴埋土(1~24)出土土器



第229图 40 a号竖穴埋土(1~7)、41号竖穴床面(8)·埋土(9~12)、41 a号竖穴埋土(13~22)出土石器

229図-13～16の無茎石鏃、17の石槍、18の両面加工ナイフ、19、20の側削器、21の叩き石、22の片刃磨製石斧がある。21、22の泥岩製を除き黒曜石製である。

42号 竪穴

遺 構 (第230図、図版56-2)

本竪穴はC'71、72グリッドに位置する。規模は長軸約4m、短軸約2.60mの長方形を呈する。壁高は確認面から約22cmを測る。炉跡は認められない。支柱穴は認められないが、壁柱穴は各壁にほぼ等間隔に配置される。直径約8～18cm、深さ6～20cmである。41号壁穴とは規模、形態が一致しており同時併存の可能性をもつ。

遺 物 (第231、234図-1～6)

床面から遺物は出土していない。第231図-1、2は擦文土器。3～5は後北C₂式。6、7は宇津内II b式。8～10は同II a式。11は下田ノ沢2式であろう。12～14は続縄文前葉であろう。12は2本の沈線下に縄線文、13、14は縄線文が施される。15、16は横走沈線が施され16には刺突が加わるもので続縄文前葉かもしれない。17は縄文晩期末、18は同中葉であろう。

石器は第234図-1の両面加工ナイフ。2～6の削器がある。すべて黒曜石製。

42a号 竪穴

遺 構 (第230図)

本竪穴はC'71、72グリッドに位置する。42号竪穴の下部にある。西壁、南壁、北壁が丸みをもつが東壁側が角形になる。舌状の張り出し部が変形したものであろう。規模は西壁から東壁の張り出し部まで約5.20m、短軸約4.30mを測る。壁は皿状に緩く立ち上がる。高さは約40cmである。壁のほぼ中央部に石囲み炉がある。石囲み炉は5点の凹石を使用している。炉内の焼土には多量の骨粉が含まれる。支柱穴は確認できなかった。壁柱穴は各壁際にあるが、それほど多くはない。直径約8～12cm、深さ約6～11cmである。

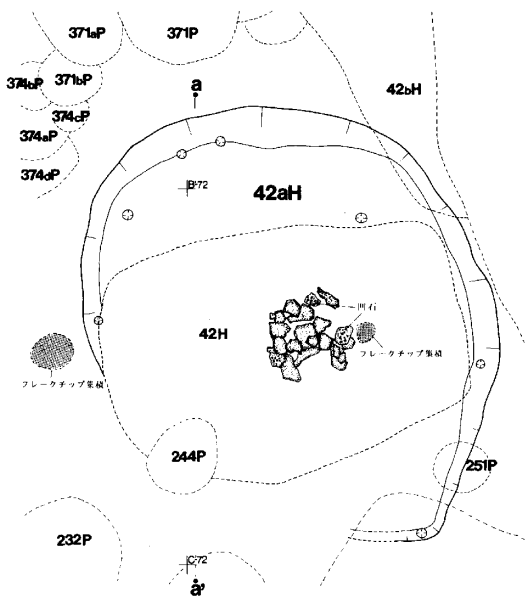
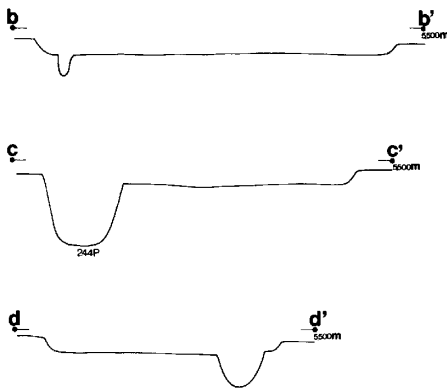
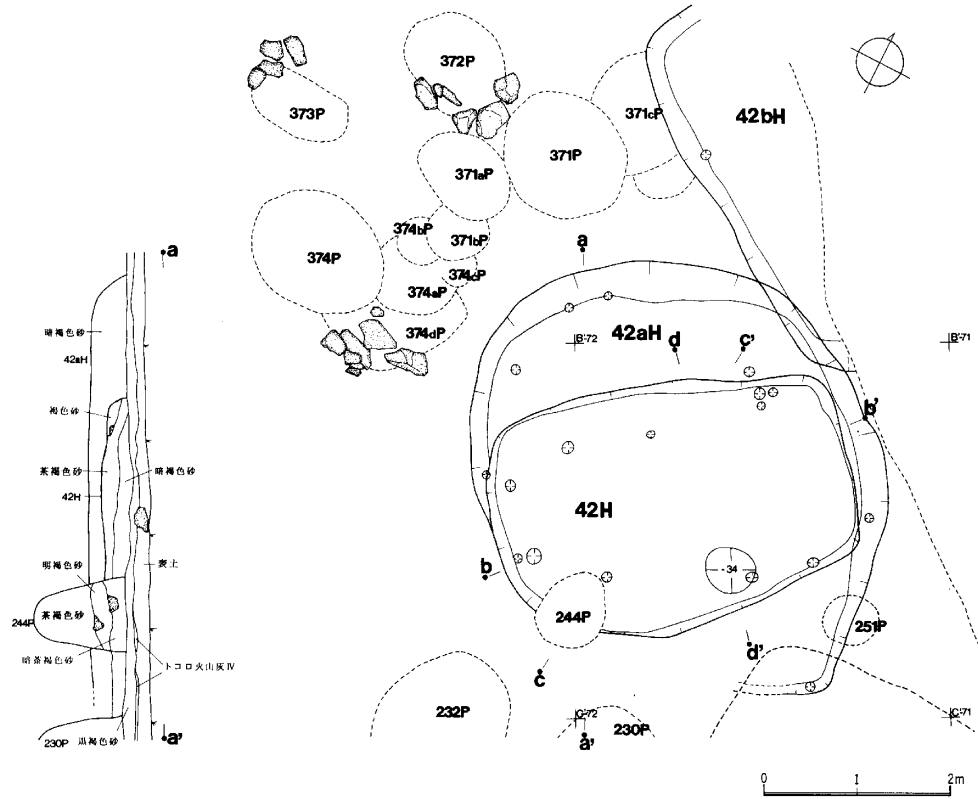
遺 物 (第232、233図-1～13、図版56-3・4)

第232図-1は床面出土である。同心円文をもつ宇津内II b式。埋土からも2～4の宇津内II b式が出土している。5は同II a式。第233図-1、2は続縄文前葉。3は幣舞式。4～13は縄線文、刺突文が施されたもので晩期中葉と思われる。

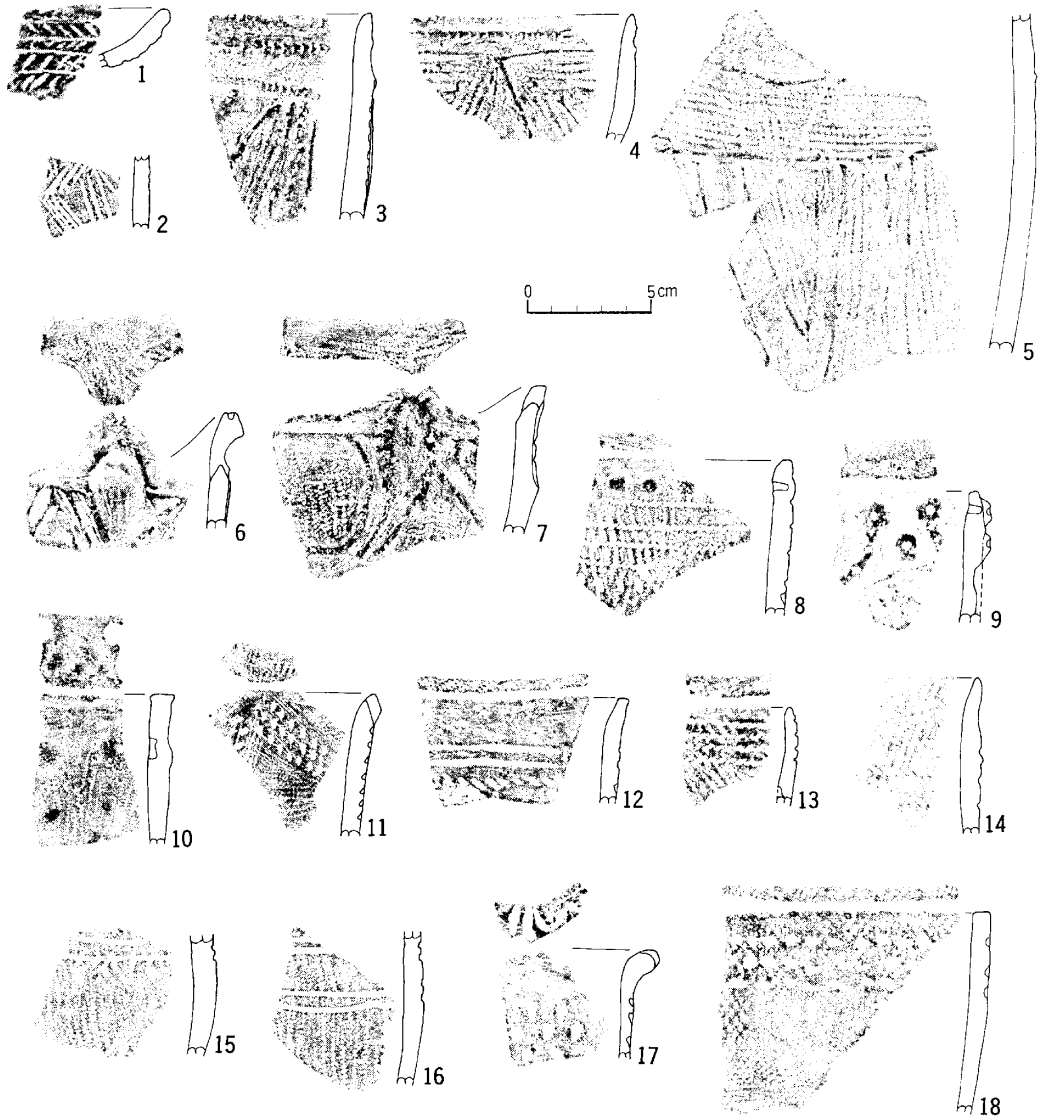
石器は第234図-7～12がある。7は無茎石鏃。8～12は側削器。9の玄武岩製を除きすべて黒曜石製である。

小 括

床面から続縄文宇津内II b式が出土しており、時期はこの頃のものであろう。



第230図 42号堅穴、42 a号堅穴、42 b号堅穴平面図

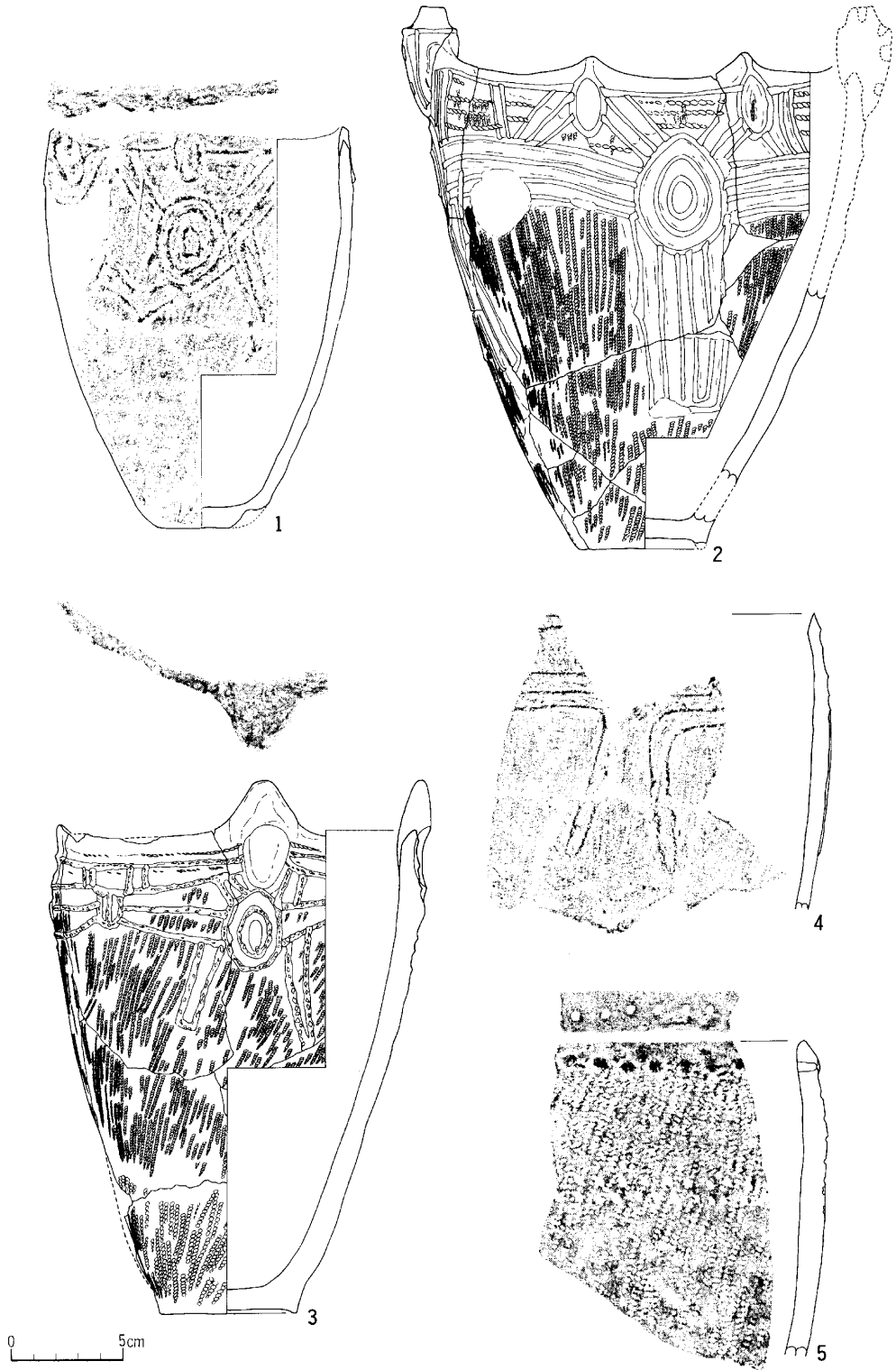


第231図 42号竪穴埋土(1~18)出土土器

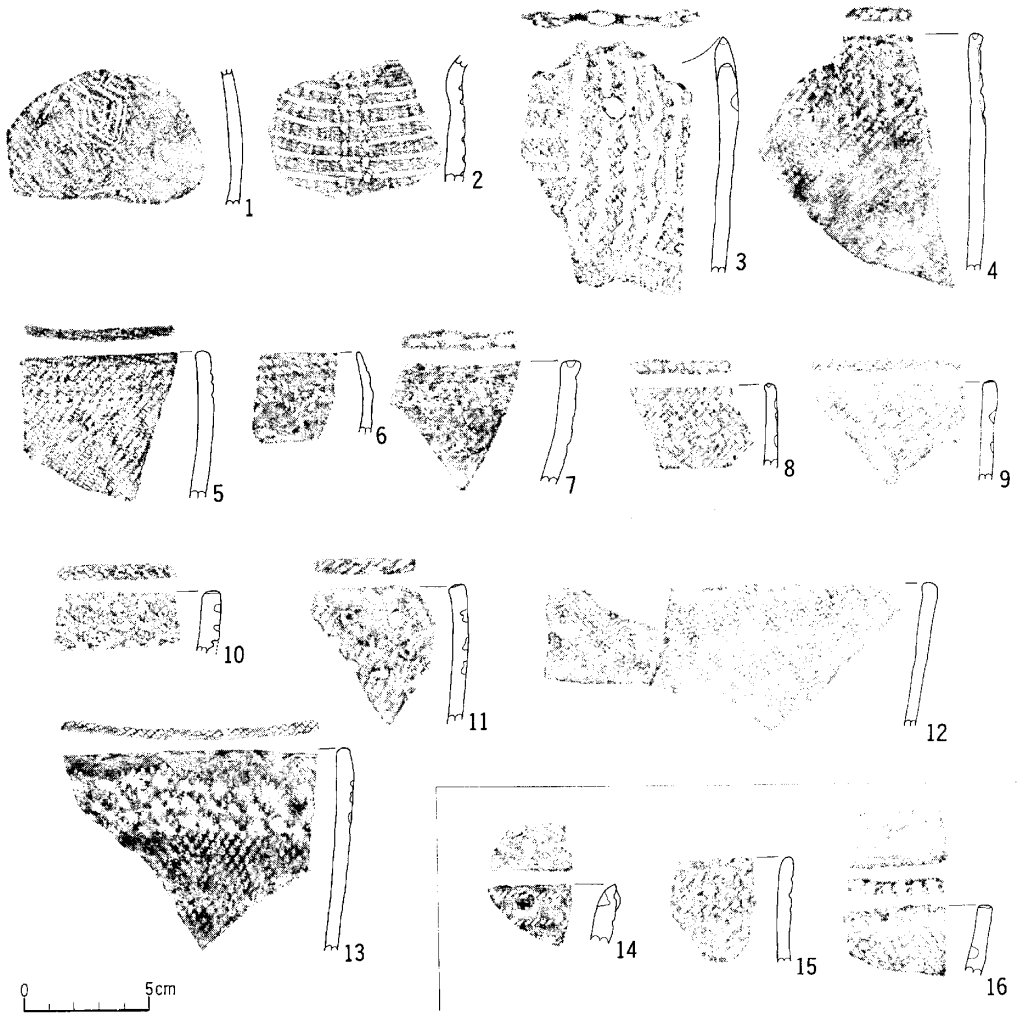
42b 号 竪 穴

遺 構 (第230図)

本竪穴はB/71グリッドに位置する。大半が下水道管埋設工事により破壊を受けているため、検出できたのは南壁と西壁の一部である。東壁側もわずかに残存している。形態は方形を呈するのであろう。規模は東西約4.30mを測る。壁高は確認面から約45cmである。南壁際に直径10



第232図 42 a 号竪穴床面(1)・埋土(2~5)出土土器



第233図 42 a号竪穴埋土(1~13)、42 b号竪穴埋土(14~16)出土土器

cm、深さ11cmの壁柱穴が1本ある。

遺物 (第233図-14~16、234図-13~15)

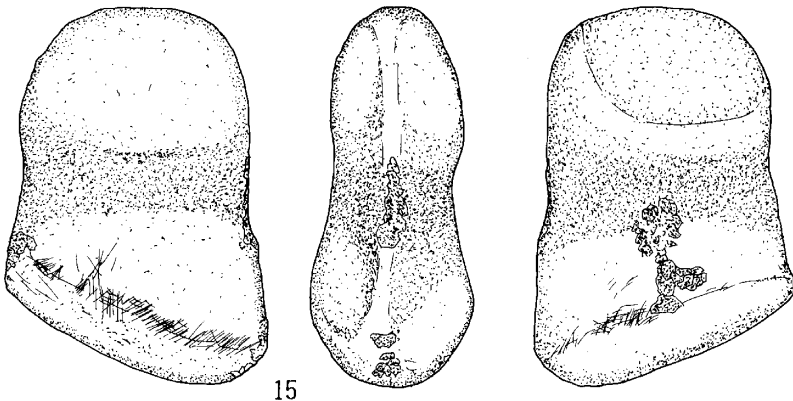
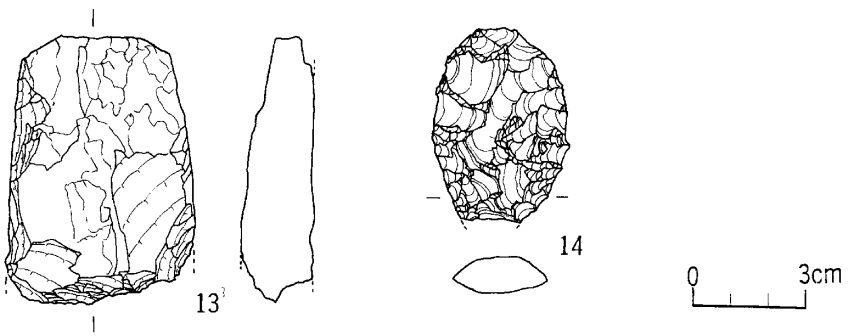
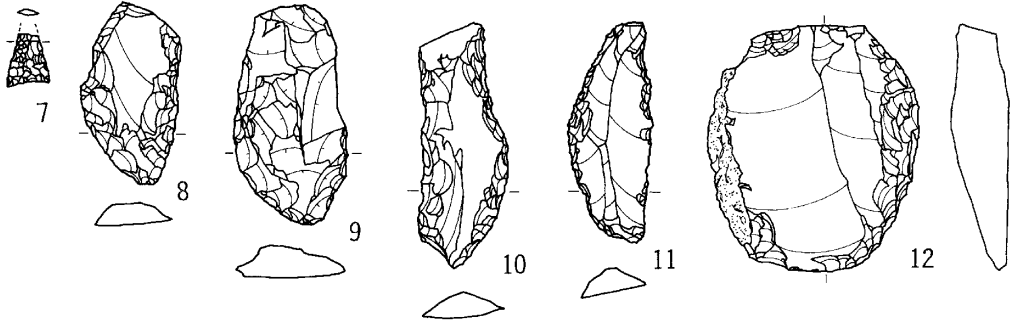
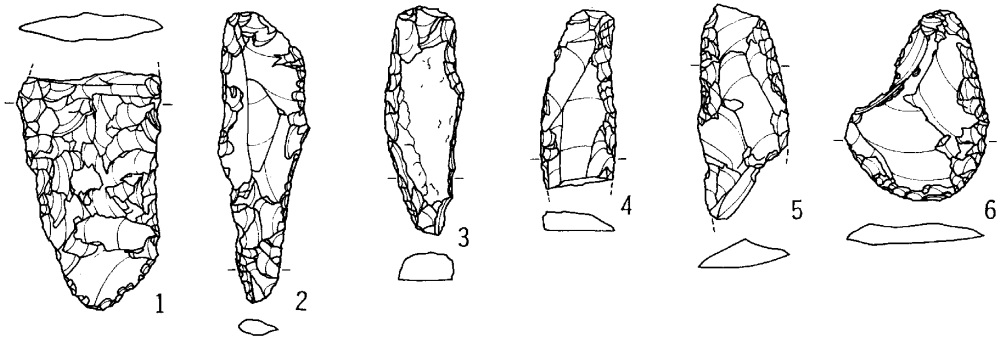
第233図-14は宇津内II a式。15は晩期中葉、16は内側から斜めの突瘤が施されたもので晩期前葉であろう。

石器は第234図-13~15がある。13は泥岩製の磨製石斧。14は両面加工ナイフ。15は磨石。敲打痕、キズ状の使用痕がある。

小括

残存する方形の平面形から判断すると擦文期と思われる。

常呂川河口遺跡

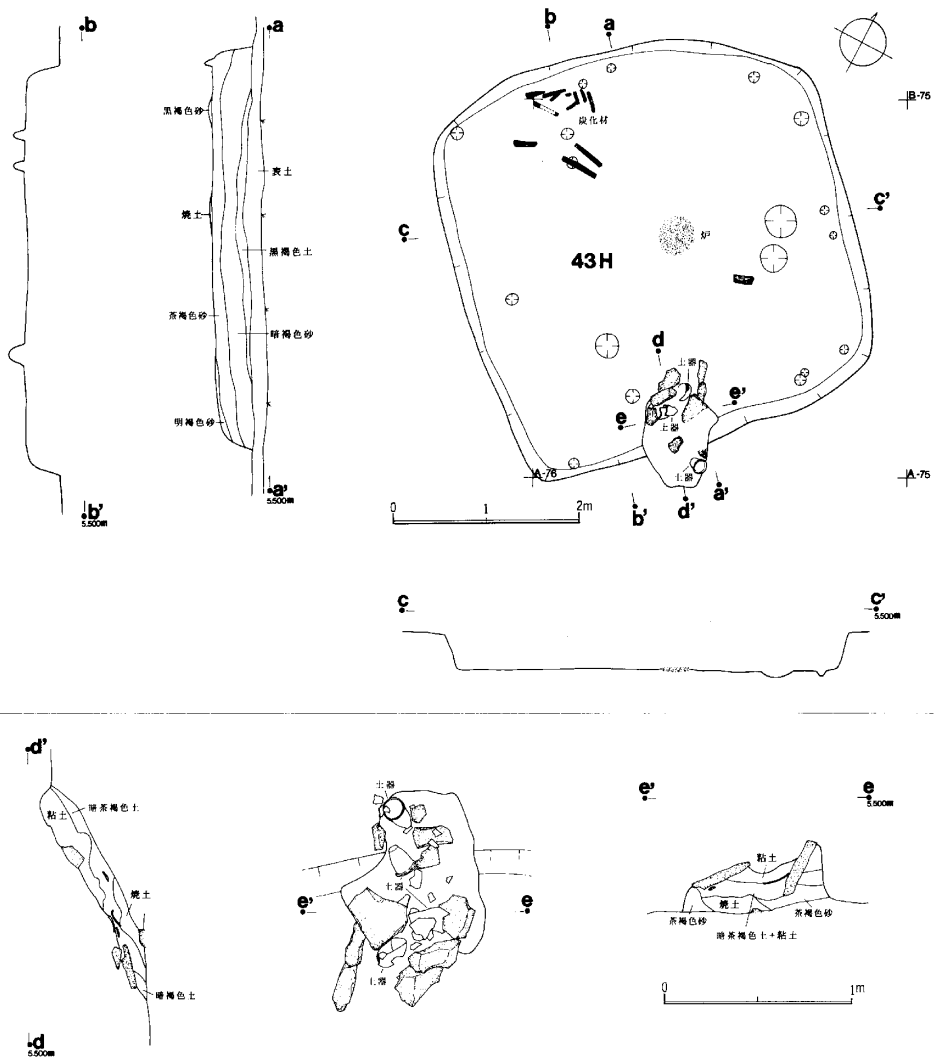


第234图 42号竖穴埋土(1~6)、42 a号竖穴埋土(7~12)、42 b号竖穴埋土(13~15)出土石器

43号 竪穴

遺 構 (第235図、図版57-1・2)

本竪穴はA75グリッドに位置する。このグリッドの表土を剝土した段階で黒色土の落ち込みが確認され、角礫を主体とした直径約4mの集石が現れた。集石は本竪穴の窪みを利用しているもので時間関係は明らかに集石が新しい。また、カマドの構築材である黄褐色粘土が現れ擦文土器も煙道口付近から出土した。竪穴の規模は1辺約4.3mの方形を呈するが、西壁側が胴張



第235図 43号竪穴平面図

り状に丸味を帯びる。壁高は確認面から約25～30cmである。埋土を掘り下げる段階で3層の暗褐色砂からは炭化粒の混入が多くみられ火災住居跡であることが予想された。カマドは東壁の中央部からやや南側に構築されている。構築材は黄褐色粘土と袖部に角礫を使用しているが西側に向かって崩れ込んでいる。炊き口部から高坏、燃焼部から甕が出土し、煙道口付近から3点の小型土器が出土している。炭化材はさほど多くはなく西壁際から径約4～5cmの細いものがまとまり、やや内側には径約8cmの太めの材がみられる。炉跡はほぼ中央部にある。壁柱穴は北壁に4本、西壁に4本、南壁に1本、東壁に3本ある。直径約10cm～16cm。深さ約5～18cmである。支柱穴は検出できなかった。

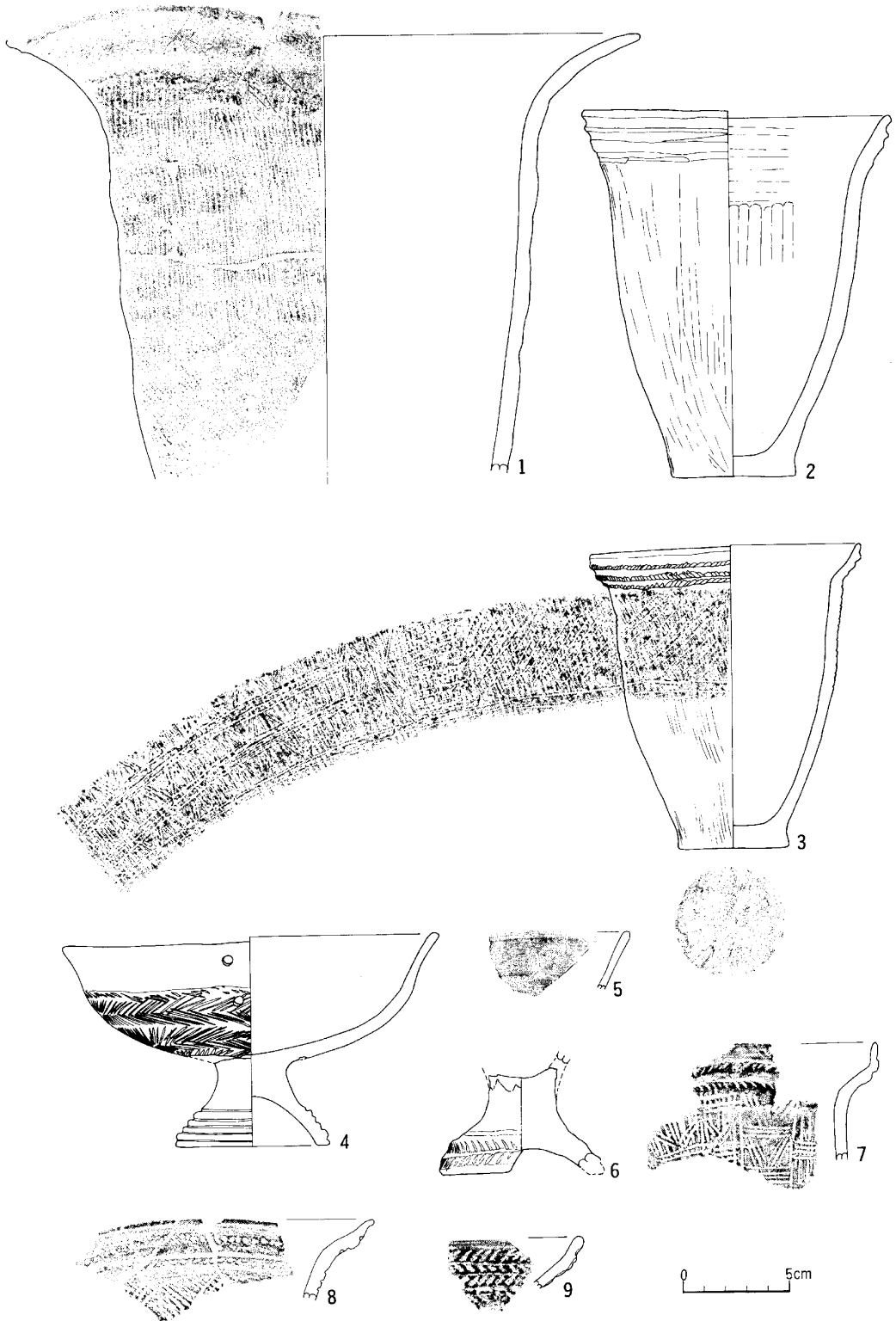
遺物 (第236、237、238図、図版57-3～5)

第236図-1はカマド内部から出土した無文鉢形土器である。口縁部は強く外反する。器面は刷毛により丁寧に調整される。2、3はカマドの煙出口から出土した。2は口縁部に3条の太い沈線が横走する。器面は篋により調整される。3は図示したように文様に統一性がない。篋による調整後土器の約半分が格子目文が施され、残る部分は鋸歯文、縦の刻線を単位とした複段文様となる。格子目文と複段文様の間は縦横刻線と縦の山形刻線が施される。底部は板目状圧痕がみられる。4はカマド内部から出土した。器面は矢羽根状の刻線が施される。5は高杯。6は脚部。7は小型鉢形土器。8は口縁部に2条の列点文が施された鉢形土器。宇田川編年晩期に比定される。9は天塩手法により施された口縁部。第237図-1～7は擦文土器。1は中型鉢形土器。4本単位の刻線間に矢羽根状文が4段施される。2は細い横走沈線文間に三角形の列点文が施されるもので擦文前期であろう。3は無文鉢形土器。器面は篋により調整される。器壁は厚い。4～6は大型鉢形土器。4は口縁部がきつく外反する。6は無文。7は小型鉢形土器。8～10はオホーツク土器。8、9は指圧式浮文。捻りを加えたもので藤本編年d群に比定される。10は底部。11は後北C₂式。12～14は宇津内II b式。15は同II a式。16、17は続縄文前葉であろう。16は器面、口唇部に縄を押圧する。17は口縁下に斜縄文を施す。器壁は薄い。胎土は続縄文的である。18は幣舞式。

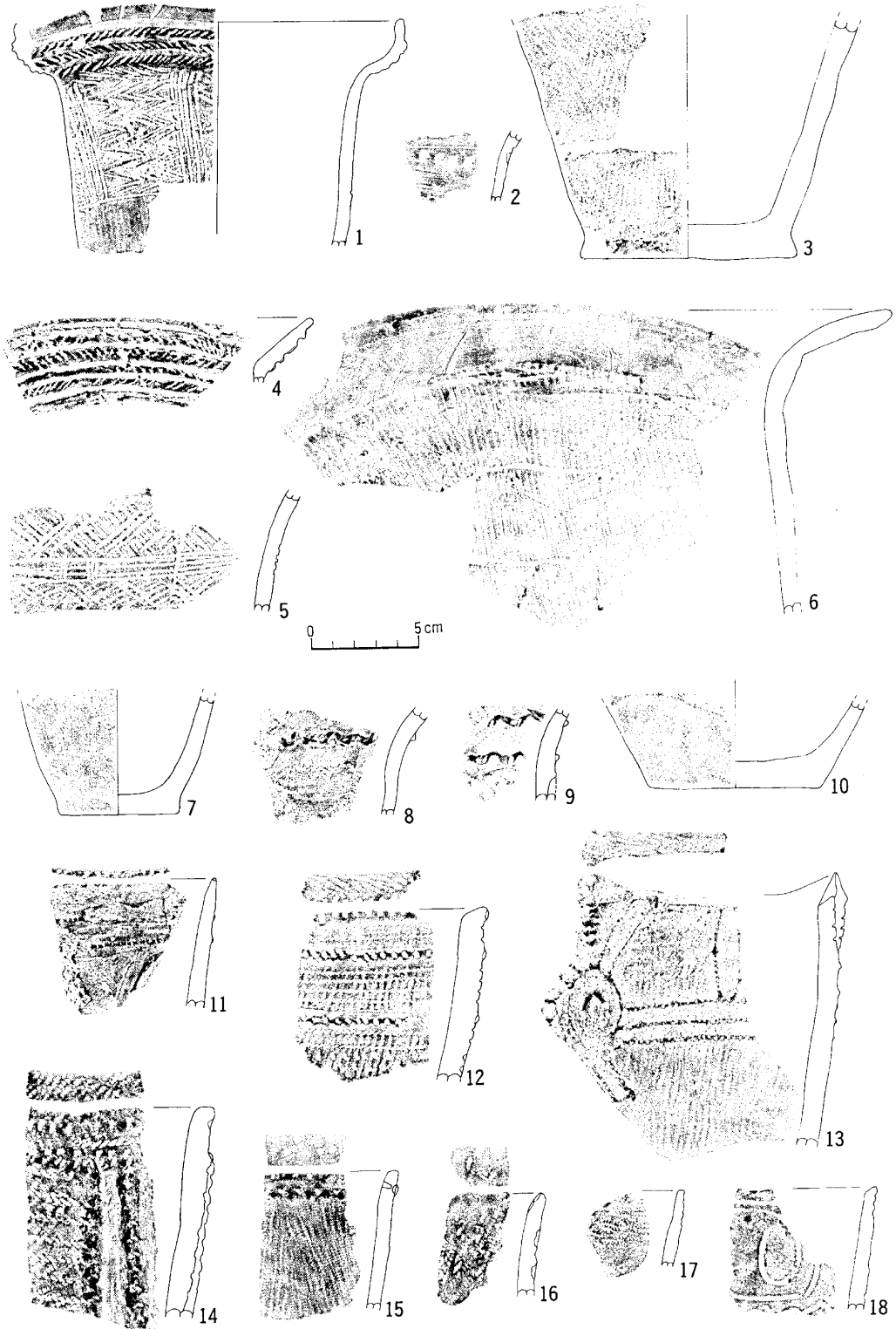
石器は第238図-1～9がある。1～3は無茎石鏃。4は片面加工ナイフ。5、6は搔器。7は断面が台形を呈し側縁に刃部のある棒状原石。8は緑色岩、9は安山岩製の磨製石斧であり他はすべて黒曜石製。

小括

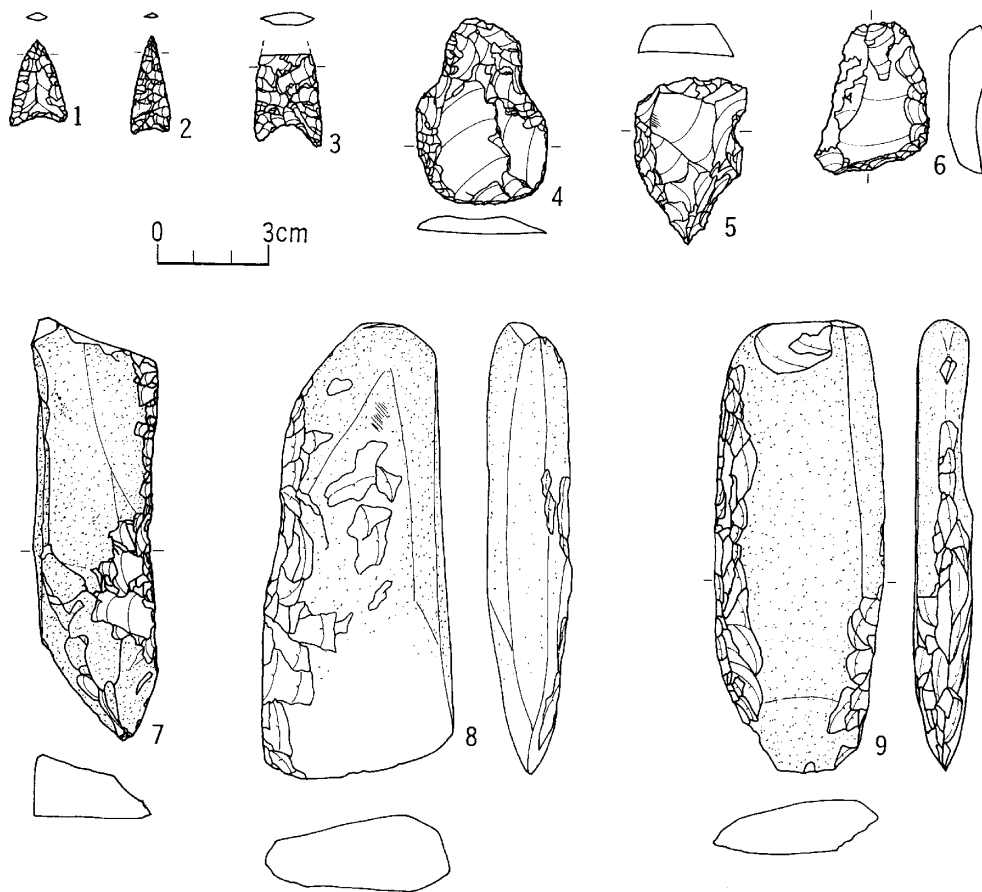
本壁穴は一辺約4.3mの方形を呈するが西壁が胴張り状を呈する。西壁際を中心に炭化材が認められた。火災住居であろう。カマドは東壁中央部に構築されており遺存は良い。時期は藤本編年h期。宇田川編年後期に比定される。



第236図 43号竪穴カマド(1~4)・埋土(5~9)出土土器



第237图 43号竖穴埋土(1~18)出土土器



第238图 43号竖穴埋土(1~9)出土石器

第V章 ピ ッ ト

ピ ッ ト 1

遺 構 (第12図)

本ピットは1号竖穴の東側に位置する。規模は直径1mの円形を呈する。深さは確認面から約20cmであり、皿状に緩く立ち上がる。ピット上部から角礫が1点出土しているが時期を確定する遺物は出土していない。

ピ ッ ト 2・2a

遺 構 (第10図)

本ピットは2号竖穴の東側に位置する。規模は長軸1.07m、短軸0.9mの楕円形を呈する。深さは確認面から約18cmである。

ピット2aはピット2の南側上部を切り込んで構築されている。直径約0.45m、深さ7cmの円形を呈する。両ピットから遺物は出土していない。

ピ ッ ト 3

遺 構 (第10図)

本ピットは2号竖穴の北側に位置する。規模は直径約0.45mの円形を呈する。壁の断面は「V」字形であり深さは約17cm。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 4

遺 構 (第12図)

本ピットは3号竖穴の東側に位置する。規模は直径約0.4m、深さ約35cmの円形を呈する。内部には角礫が直立の状態出土している。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 5

遺 構 (第239図)

本ピットはD41グリッドにある。東側にある小河川跡の西側約2mに位置する。規模は長軸0.85m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは確認面から約10cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 6

遺 構 (第12図)

本ピットはピット1の西側約0.25mに位置する。規模は長軸0.3m、短軸0.28mの円形を呈する。深さは確認面から約20cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 7

遺 構 (第239図)

本ピットは3号堅穴の南側約2.1mに位置する。規模は長軸1.20m、短軸0.88mの楕円形を呈する。壁は皿状に緩く立ち上がり深さは確認面から約15cmである。東壁の上部から第240図-2に示す土器が出土した。この土器は3号堅穴埋土、G46グリッド出土のものと接合した。本ピットに伴うものではないと思われる。

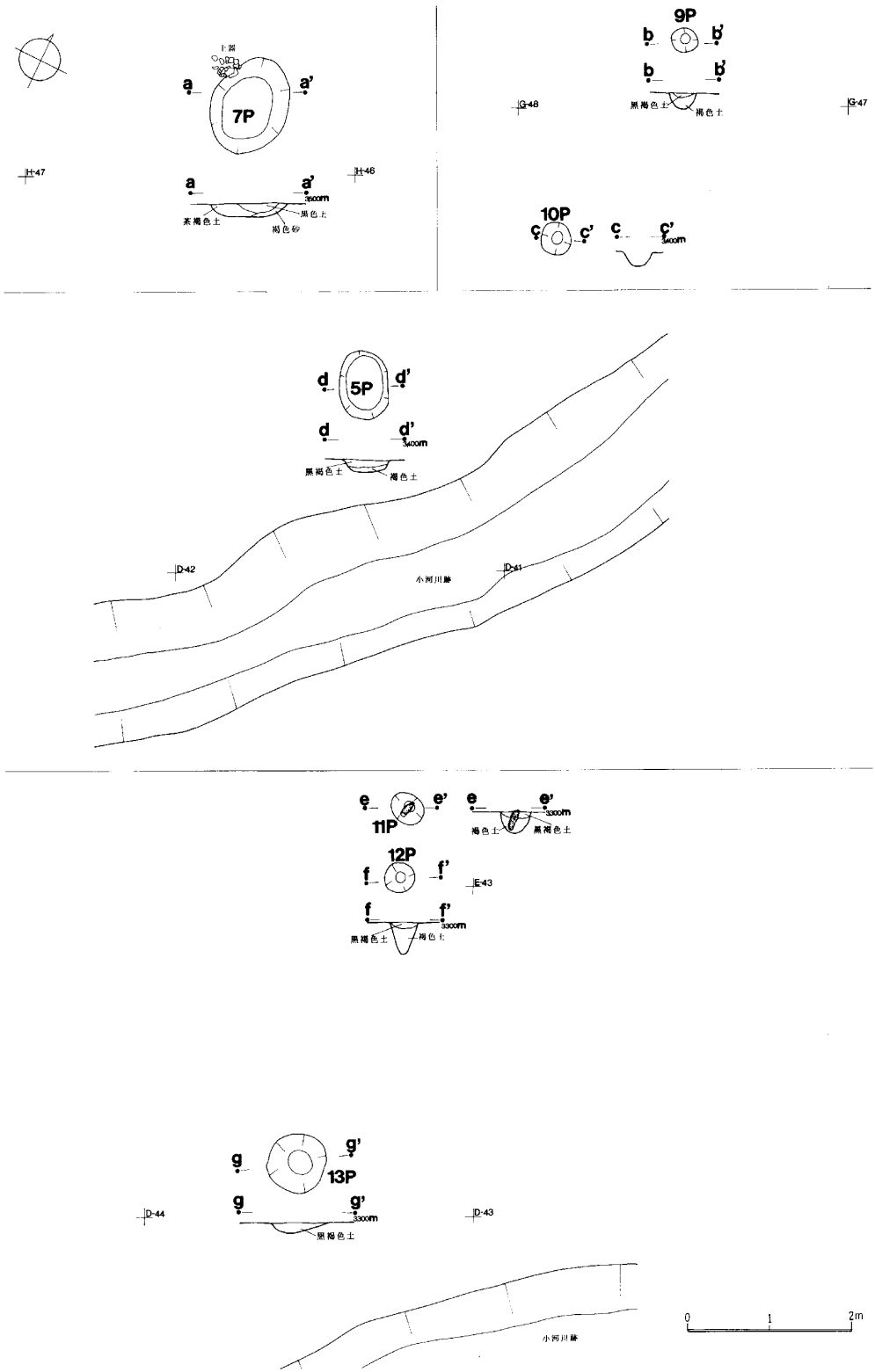
遺 物 (第240図-1・2)

1は埋土出土である。重鎮する様に7～9本単位の鋸歯文が施され、下部の横走沈線は縦の刻線により等間隔に刻まれる。2は中型鉢形土器である。上下二段とも交互に刻線を施す。

ピ ッ ト 8

遺 構

本ピットはG44グリッドに位置する。規模は直径約30cmの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測り、底面は丸みを呈する。褐色土内に黒褐色土が柱状に堆積する。遺物は出土していない。



第239図 ピット5・ピット7・ピット9・ピット10・ピット11・ピット12・ピット13平面図

ピ ッ ト 9

遺 構 (第239図)

本ピットはG47グリッドに位置する。規模は直径約28cmの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測り、底面は丸みを呈する。上部に黒褐色土が堆積する。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 10

遺 構 (第239図)

本ピットはF47グリッドに位置する。規模は直径約35cmの円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 11

遺 構 (第239図)

本ピットはE43グリッドに位置する。規模は直径約34cmの円形を呈する。壁高は確認面から約29cmを測る。長さ約38cm、幅約10cmの円礫が底面まで突き刺さる状態で出土している。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 12

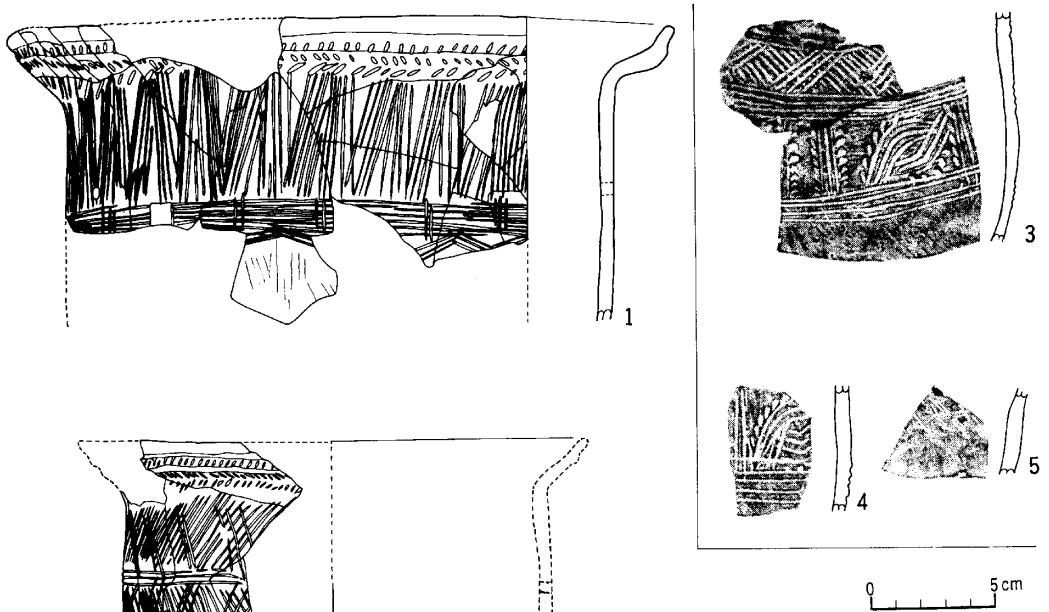
遺 構 (第239図)

本ピットはE43グリッドに位置する。規模は直径約34cmの円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。底面の幅は約10cmと狭いものの上部は開いている。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 13

遺 構 (第239図)

本ピットはD43グリッドに位置する。規模は直径約62cmの円形を呈する。皿状の浅いピットであり確認面から約8cmを測る。遺物は出土していない。



第240図 ピット7埋土(1・2)、ピット14埋土(3~5)出土土器

ピ ッ ト 14

遺 構 (第21図、図版58-1)

本ピットはL52グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。両長軸面の上部が浅い攪乱を受けている。北壁に近い床面に小ピットがあるが本遺構に伴うものではない。

遺 物 (第240図-3~5)

3~5は埋土の褐色土から出土した擦文土器。

ピ ッ ト 15

遺 構 (第242図、図版58-2)

本ピットは12号竪穴の北側に位置する。表土を剥土した段階で第241図-1・2の縄文土器が出土し、図示していないが黒曜石のフレークがまとまって出土した。これらはピットの上部に置かれたものと推測される。規模は長軸約1.40m、短軸0.9mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

遺 物 (第241図-1～2、図版58-3)

第241図-1、2はピットの上部から出土した宇津内Ⅱb式である。1は口縁部が欠失した大型土器である。2個の補修孔がある。2は2個の小突起下部に「X」字状の隆帯が施される。

ピ ッ ト 16

遺 構 (第242図)

本ピットは12号竪穴の床面内にある。規模は長軸0.87m、短軸0.45mの楕円形を呈する。壁高は12号竪穴の床面から約12cmである。遺物が出土していないため時期は不明であるが、擦文期の12号竪穴よりは古いと思われる。

ピ ッ ト 17

遺 構 (第242図)

本ピットは12号竪穴の炭化材を除去した段階で落ち込みを確認した。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは12号竪穴の床面から約33cmである。

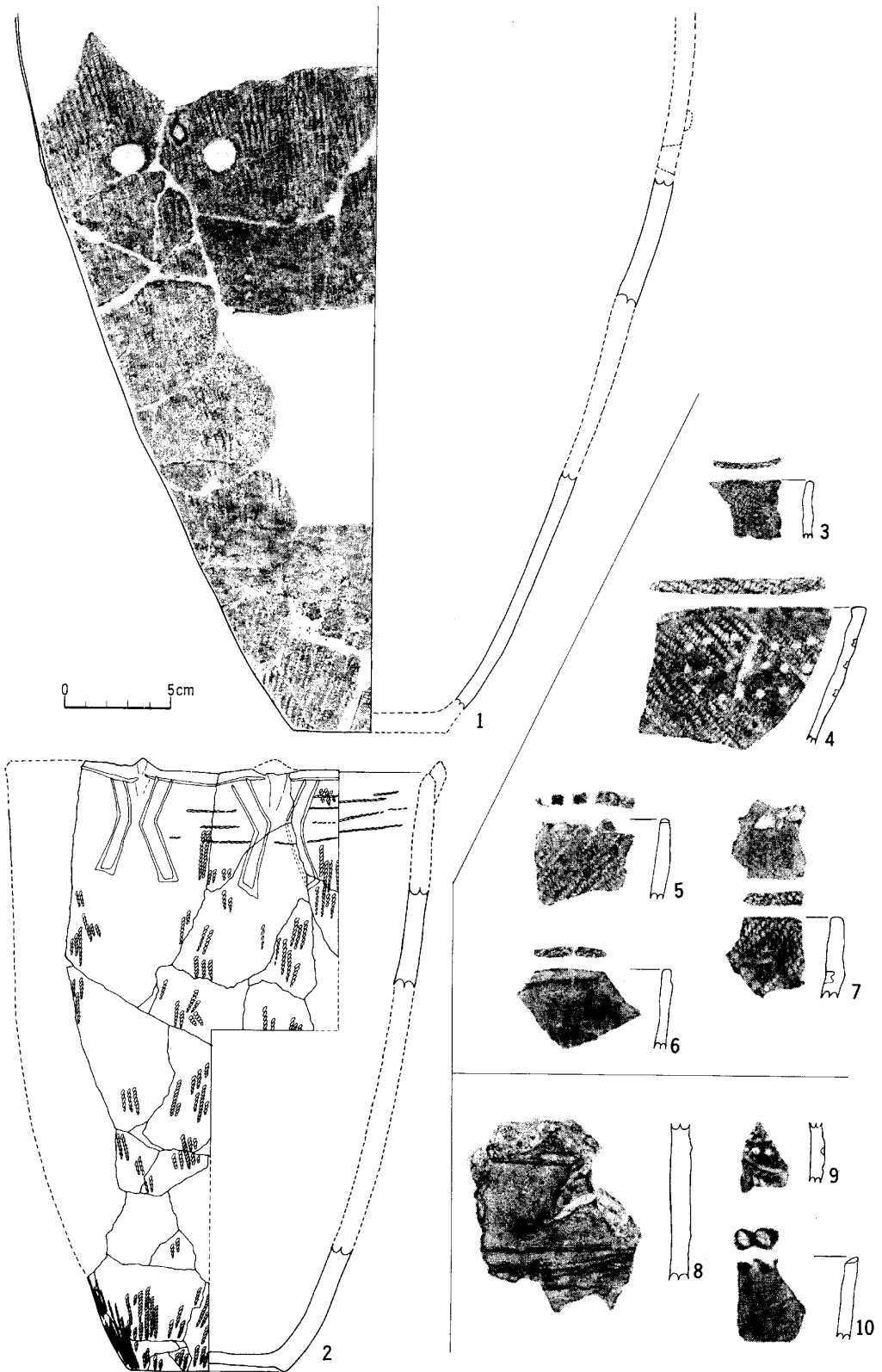
遺 物 (第241図-3～7)

小破片を含めた5点はすべて埋土出土であり、3～6は縄文晩期中葉と思われる。第241図-3は器面に楕円状の列点文が施されたミニチュア土器。4は円形刺突を楕円状に施す。5は縄文。6は無文。7は内面で斜めに突瘤が施される。晩期前葉であろう。

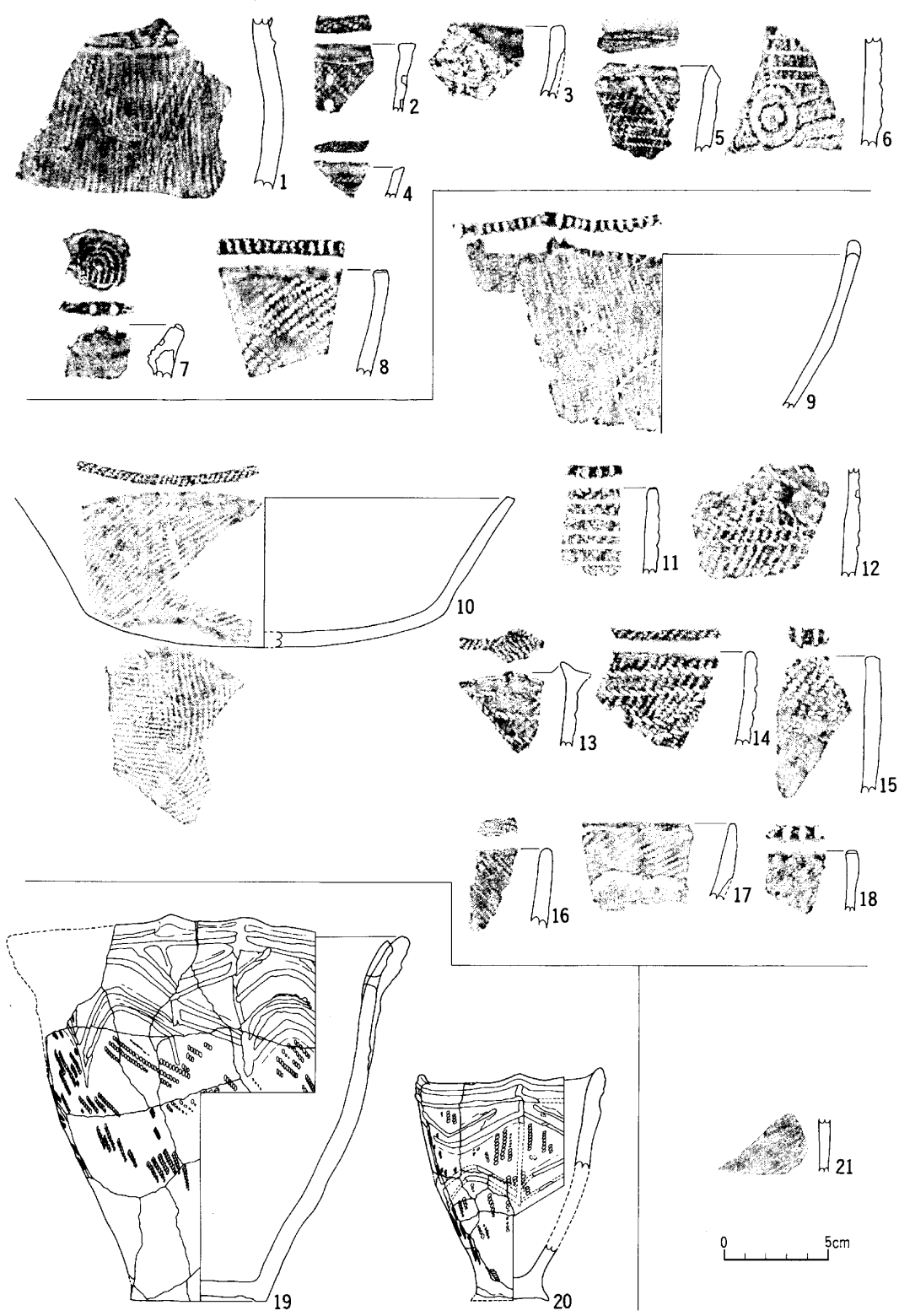
ピ ッ ト 18

遺 構 (第242図)

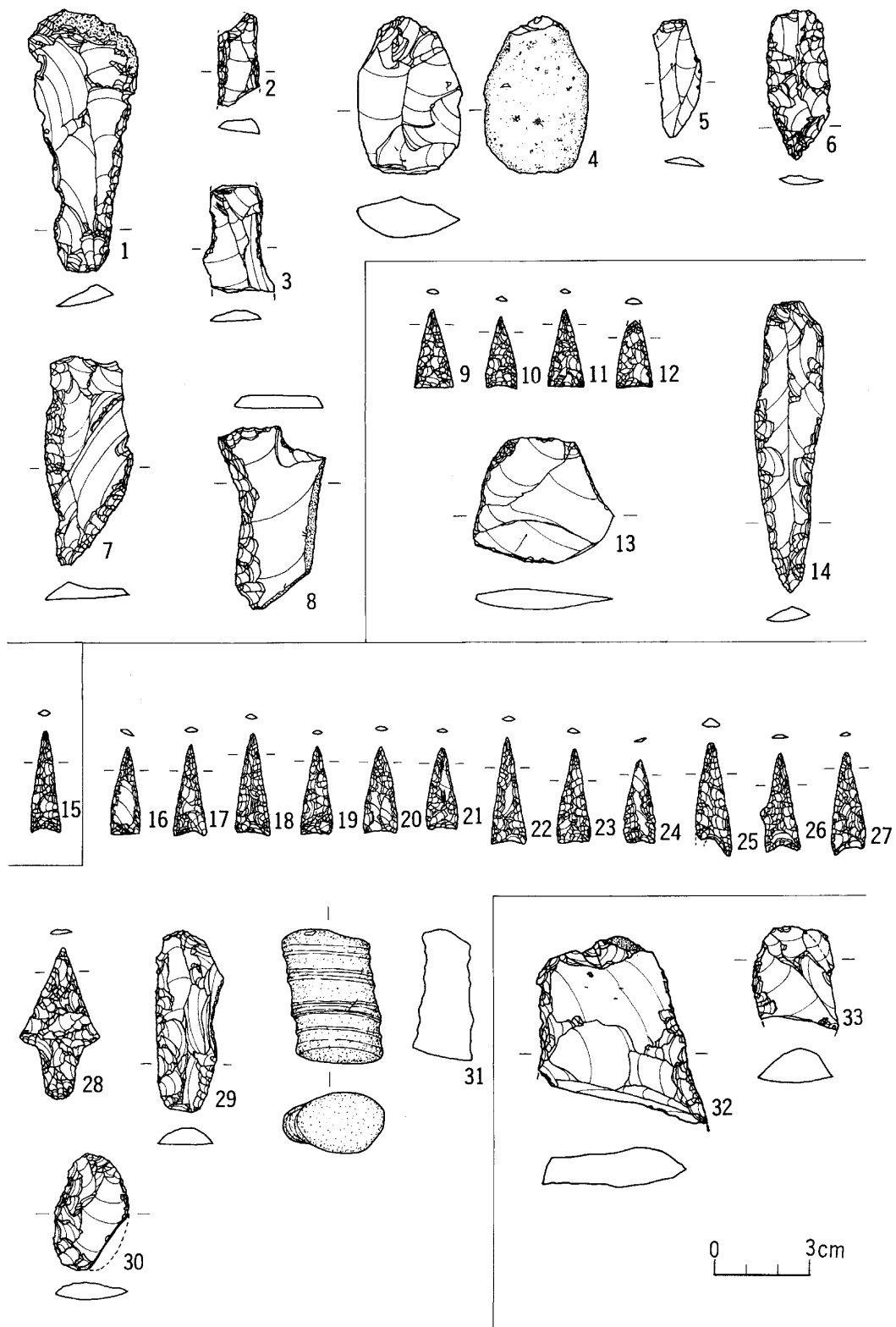
本ピットは12号竪穴の床面にある。規模は直径約0.75mの円形を呈する。壁高は12号の床面から27cmを測る。



第241図 ピット15埋土(1・2)、ピット17埋土(3~7)、ピット18埋土(8~10)出土土器



第243図 ピット19床面(1~4)・埋土(5~8)、ピット19a埋土(9~18)、ピット20埋土(19~20)、ピット20a埋土(21)出土土器



第244図 ピット19床面(1~4)・埋土(5~8)、ピット20埋土(9~14)、ピット20a埋土(15)、ピット21埋土(16~31)、ピット21a埋土(32・33)出土石器

遺 物 (第241図- 8～10)

すべて埋土出土である。第241図- 8は後北C₂式。9、10は縄文晩期中葉と思われるもので9は曲線、円形刺突文の下部に縄線を施す。10は無文。

ピ ッ ト 19・19a

遺 構 (第242図)

本ピットは12号竪穴のあるF'65グリッドに位置する。規模は長軸約1.25m、短軸約0.9mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約38cmを測る。ピットの北壁上部に2点の大型角礫がある。埋土内にも小型の角礫がありこれを取り除くとベンガラが散布されていた。ベンガラの下部には赤褐色土を呈した粘性のある遺存体が認められた。当初は焼けていると思われるほど赤味を呈していた。遺存体が糊状化した範囲は墳底全域に広がっているが厚さは約5～6cmである。第30図- 1の幣舞式は本ピットの東壁上部からピット133c周辺に広く散布されていたものと12号竪穴埋土のものが接合したものである。

ピット19aはピット19により大半を切られている。規模は長軸不明、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁は確認面から約11cmを測る。遺物は出土していない。

遺 物 (第243図- 1～4、9～18、図版59- 1～8)

ピット19は床面から第243図- 1～4が出土している。1は隆帯下部に撚糸文を「V」字形に押捺した宇津内II b式。2、4は縄文晩期中葉であろう。2は口唇部の幅が広く、口縁下部は引きずった様な浅い沈線と円形刺突文が施される。3は表面が剥落しているが無文であろう。胎土の状態から後北C₂・D式と思われる。埋土からは5、6の宇津内II b式。7の幣舞式。8の縄文晩期中葉の土器が出土している。

石器は床面から第244図- 1～3の側削器、4の礫表皮を残すフレークが出土している。5～8は埋土出土である。5はフレーク。6は両面加工ナイフ。7、8は側削器。すべて黒曜石製である。

ピット19aからは9～18が埋土から出土している。縄文晩期中葉であろう。

小 括

ピット19は長軸約1.25m、短軸約0.9mの楕円形を呈した土墳墓である。長軸は南-北である。床面からは各期の遺物が混在して出土した。最も新しいのは時期の遺物は後北C₂であるが、本竪穴に伴うものか不明である。ピット19aはピット19より古いが正確な時期は不明である。

ピ ッ ト 20・20a

遺 構 (第242図、図版59-9)

本ピットはE'61グリッドにある。14号竪穴の西側にあり、ピット20aを切って構築されている。規模は長軸約1.10m、短軸約0.85mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約23cmである。ピットのほぼ中央部には糊状化した遺存体が確認された。遺存体は粘性を有し、色調は暗赤褐色土を呈している。南壁に近い遺存体の上部から2点の土器が出土している。

ピット20aは西壁側がピット20に切られているものの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約12cmを測る。ピットの東壁寄りに糊状化した遺存体がありベンガラが散布されていた。東壁際から石鏃と朱色を呈した編状の繊維製品の断片が出土している。

遺 物 (第243図-19~21、第244図-9~14、図版59-10~17)

第243図-19、20はピット20から出土した後北C₁式である。19は口縁部がゆるく外反し2個1対、1対の小突起をもつ。ほぼ等間隔に縦の隆起帯をもちそれぞれを弧線の隆起帯で連結させているが隆起帯の断面は押圧されたため丸味みを呈する。器面の一部に赤色顔料が付着している。20は口縁部に4個の小突起をもつ。小突起から縦の微隆起線が垂下し20に比して直線的な微隆起線で連結される。この微隆起線の断面は三角形を呈し一部に赤色顔料が付着する。

石器は第244図-9~14が出土している。9~12の無茎石鏃は土器の近くから出土したもので本ピットに伴うものと考えられる。13は削器。14は断面が三角形を呈し、先端部が尖がる側削器。すべて黒曜石製である。

ピット20aからは第243図-21の縄文晩期が出土している。石器は埋土から第244図-15の無茎石鏃が出土している。黒曜石製。

小 括

ピット20は後北C₁式の土壌墓である。長軸は南一北方向である。ピット20aの時期は不明であるがピット20より古い時期であることは確実である。

ピ ッ ト 21・21a

遺 構 (第274図、図版60-1)

ピット21、21aはE'62グリッドにある。東壁の一部が14号竪穴に切られているものの遺存は良い。ピット21の規模は長軸約1.30m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。壁は底面から上部に向かって緩く立ち上がる。高さは約30cmである。粘性を有した黄褐色の遺存体はピットの中央部から南壁際にかけて認められる。歯骨は北側にある。石鏃、石槍は北壁際からまとまって出土した。これらは流れ込む様にやや斜めの状態で出土しているが、石鏃の先端部は墳上部を向く

ことから壁に矢を立てかける様に副葬されたのかもしれない。フレーク・チップ等は頭部の際の床面から出土している。ベンガラ等は認められない。

ピット21aはピット20と14号堅穴に切られているためほとんど原形をとどめていない。わずかに西壁の一部を検出しただけである。壁高は確認面から約12cmである。

遺 物 (第244図-16~33、第246図-1~6、図版60-2~16)

埋土から出土している。第246図-1、2は幣舞式。3、4は晩期中葉。5、6は晩期前葉であろう。

石器は第244図-16~31がある。16~27の無茎石鏃は鏃身が長めで細い特徴をもつ。28は石槍。29、30は側削器。31は細い凸部が数本ある自然石。この様を一見すると男性性器を思わせる形態の自然石を持つ土墳墓は平成7年度調査の際にも出土しておりかなり意識して副葬しているようである。31を除きすべて黒曜石製。

ピット21aからは第244図-32、33の側削器が出土している。黒曜石製。

小 括

本ピットは長軸約1.30m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。長軸は東-西方向である。頭位は歯骨の位置から西方向と判断される。土器の出土がないため時期は不明であるが、近接するピット20aとは長軸方向が一致していること。埋土出土であるものの石鏃の形態が類似することから同時期の可能性がある。だとすれば本ピットは後北C₁式以前の土墳墓と考えられる。

ピ ッ ト 22

遺 構 (第242、245図、図版61-1)

本ピットはE'63-F'63グリッドに位置する。表土を剝土した段階でピットの東側に配置されている大型角礫の上部とピット22aの土器が検出された。周囲を約2~3cm掘り下げた段階でピット22、ピット22aの落ち込みが確認されたため両ピットと直行するセクションベルトを設定した。本ピットの規模は長軸約1.50m、短軸0.95mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約55cmである。ピット22の東壁際に密着して出土した3点の角礫は図示していないが砥石である。この砥石はあたかもピット22aを仕切るように底面近くまで埋められており、本ピットに伴うものである。床面近くからはベンガラが散布された遺存体が検出された。遺存体は粘性がありやや紫色を帯びた赤褐色土を呈する。副葬品である各種の遺物はピットの長軸面端部から出土している。歯骨は長軸上の南東側にある。

遺 物 (第246図-10~13、第247図-1~23、図版61-2~25)

第246図-10は頭部近くの床面から内側に倒れるような状態で出土した。横走縄文を地文とし2個の吊り耳をもつ。吊り耳は後から取付けたのではなく製作時に土器本体から直接瘤状の張出しをつけ、棒上のもので孔をあけている。吊り耳の上部は刻線を同心円状に施す。吊り耳の

下部には2個の同心円文があり同心円文間にはさらに2個の同心円文が施されている。隆帯は細く全体に菱形のモチーフである。隆帯間の凹部では部分的に彩色されている。2個の補修孔をもつものの完形品である。時期は後北C₁式に比定される。11～13は埋土出土であり、縄文晩期中葉と思われる。11、12は縄線文、13は横走沈線下に円形刺突が連続して3段施される。

石器は上述の土器の近くから第247図-1～17の無茎石鏃がまとまって出土している。形態は二等辺三角形を呈する。18～22は削器。これらは頭部の反対側に位置する44点のフレイク集中内から出土した。22は肉厚の剝片の一端に加工を施し、側縁部も歯こぼれがみられる。23は石鏃からやや離れた南壁の中央部から出土した石斧である。円礫を素材とした局部磨製石斧であり尾部に敲打痕が残る。安山岩製。

小 括

本ピットの時期は後北C₁式期である。形態は楕円形を呈する。歯骨の位置から頭位は東方向である。ピット22aと切りあっているが新旧関係は本ピットが新しい。

ピ ッ ト 22a

遺 構 (第245図、図版62-1)

本ピットはピット22により破壊されており検出できたのは2分の1程度である。正確な規模は不明であるが短軸約0.65mを呈する。形態は楕円形と思われる。壁高は確認面から約20cmである。底面に柱穴等の付属施設は認められない。

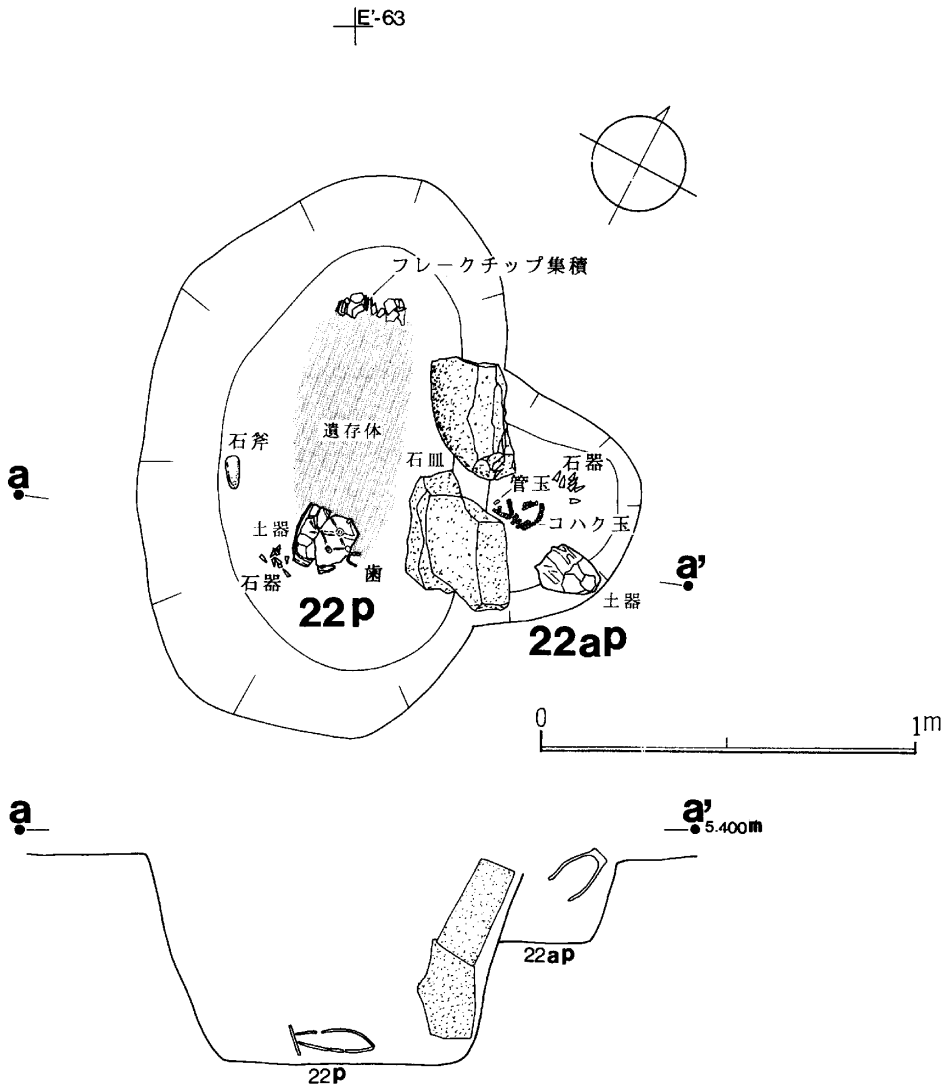
遺 物 (第246図-14、第247図-24～36、図版62-2～11)

第246図-14は東壁際の上部から出土した。口縁下部に1条の隆帯と3条の縄線文が横走る。口縁部には1対の大突起がありその間に2個1対の小突起をもつ。大突起には取っ手状の貼付がなされ、4本の隆帯が垂下する。小突起の下部には「H」状の隆帯が施される。

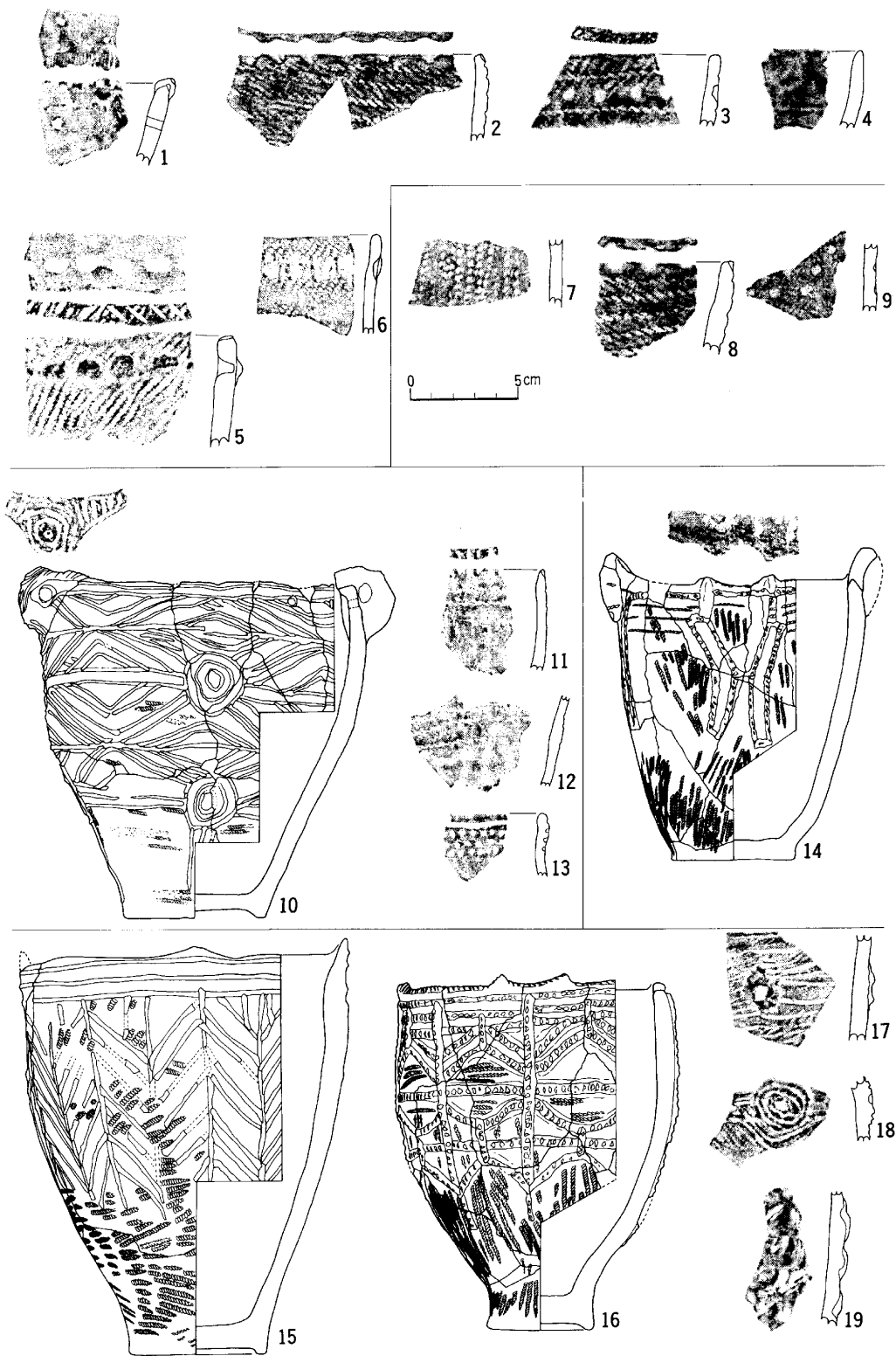
石器は東壁際の埋土内から第247図-24～30の7本の無茎石鏃が出土する。頁質製。琥珀玉はピットのほぼ中央部に位置しており、ピット22の砥石の近くから出土した。31の緑色を呈した管玉と連結した状態の115点出土した。管玉は切断面の側縁を調整している。琥珀玉は代表的な形態を図示した。小円形が大部分を占め大円形、方形もわずかに含まれる。

小 括

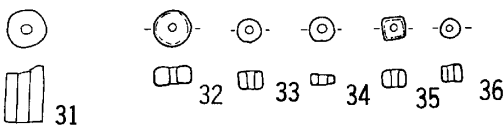
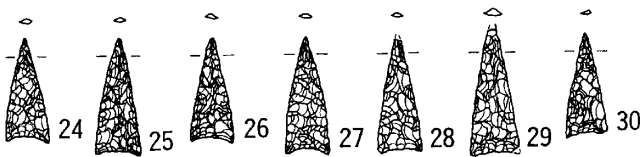
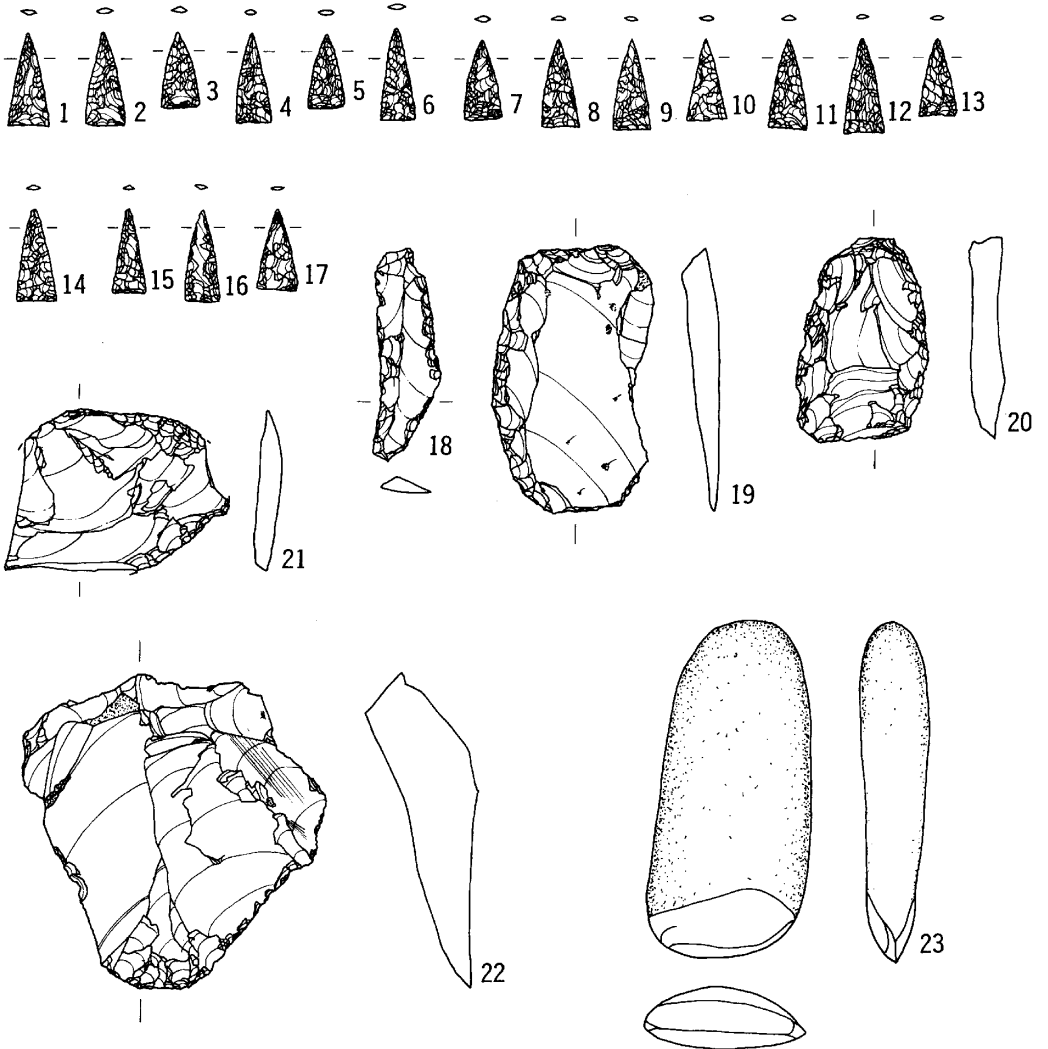
本ピットの時期は宇津内II b式に比定される。ピット22により一部が破壊を受けているため正確な規模、形態は不明であるが長軸が東一西に向く約1.0m前後の楕円形を呈すると思われる。明瞭な遺存体の痕跡は認められなかったが形態、副葬品から土壌墓であることは確実であろう。



第245図 ピット22・ピット22a平面図



第246図 ピット21埋土(1~6)、ピット21 a 床面(7)・埋土(8・9)、ピット22埋土(10~13)、ピット22 a 埋土(14)、ピット23埋土(15~19)出土土器



第247図 ピット22床面(1~17)、埋土(18~23)、ピット22 a 埋土(24~36)出土石器・管玉・琥珀玉

ピ ッ ト 23

遺 構 (第248、274図、図版63-1)

本ピットは14号竪穴の北側に位置するが南壁の一部を切られている。表土を剝土すると黒色土の落ち込みを確認し、上面から副葬品である第246図-15の土器が現れ、黒色土を剝土する段階で第246図-16の土器も出土した。黒色土の下面から遺存体である粘性を有する黄褐色土が西壁側から現れ、さらに東壁側からも検出され、二体合葬であることが確認された。土器はそれぞれの遺存体の頭部付近に置かれている。規模は直径約1.80mの円形を呈する。壁は確認面から約20cmを測る。ベンガラ等は認められなかった。

遺 物 (第246図-15~19、第249図、図版63-2~4、図版64-1~48)

第246図-15は西壁隅の床に密着して出土した。口縁部に4個の小突起をもつ。3条の横走沈線の下部から胴下部にかけてほぼ等間隔に縦の隆帯が垂下しそれぞれを山形状の隆帯で連結させる。16の全体的なモチーフは15と類似するが隆帯は太く擬縄を呈する。口縁部に6個の小突起をもつ。胴部は横走縄文、胴下部は縦走縄文を地文とする。文様は口縁下部に3条の隆帯が横走する。縦に施された隆帯は山形、直線の隆帯で連結する。口径の割に底部は小さくスリムである。埋土からは17~19が出土している。17は円形の貼付文から細い沈線を数本施したもので、続縄文前葉と思われる。18は幣舞式。19は晩期前葉の盛り上がりのある爪形文。石器は両遺存体の上部から多く出土する傾向がある。第249図-1~40は石鏃である。茎部が広くわずかに湾曲する無茎石鏃。41、42は茎部の狭い無茎石鏃。43~46は安山岩製の無茎石鏃。47は削器。48は長めの礫状を呈した両面加工ナイフ。刃部、柄部が丁寧に調整されている。49はくぼみ石。

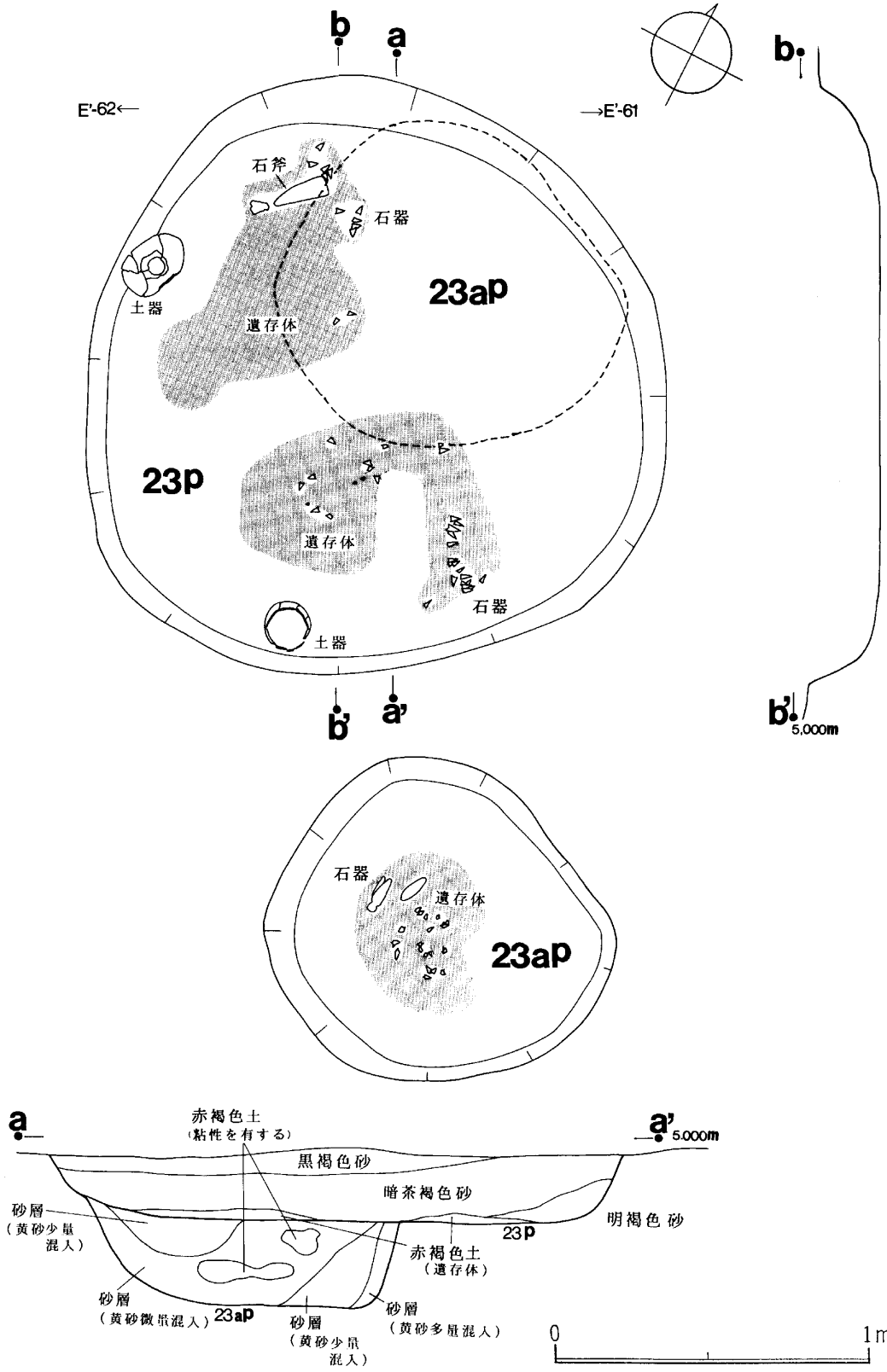
小 括

本ピットは後北B式期の二体合葬墓である。埋葬方法は遺存体の検出状況から屈葬と思われる。頭位は南西方向にありそれぞれ1点の土器が正立の状態で置かれている。形態は直径約1.80mの円形を呈する。

ピ ッ ト 23a

遺 構 (第248、274図)

本ピットはピット23の床面を精査中に発見した。規模は直径約1.0mの円形を呈する。壁は東壁側がほぼ垂直なのに対し、北壁側はやや緩く立ち上がる。高さはピット23の床面から約25cmである。遺存体は粘性のある暗赤褐色土を呈するもので床面から約10cmほど上から検出された。第250図-1~34の有茎石鏃は遺存体のやや上部に散布されていたものである。



第248図 ピット23、ピット23a 平面図

遺物 (第250図、図版65-1～40)

本ピットから時期を特定する土器の出土はなく、石器が遺存体の上部からまとまって出土している。第250図-1～34は有茎石鏃。35～37は埋土から出土した無茎石鏃でピット23に伴うものである。38～40は両面加工ナイフ。38は柄部から先端部にかけて緩く湾曲する。先端部は鋭く、裏面の左側縁部は急斜な角度をもつ。39の剥離調整は雑である。柄部に挟りをもつ。40は柄部に原石面を残す。41は左の側縁部に微細な刃こぼれがみられる。

小括

本ピットの正確な時期は不明であるが、ピット23より古いことは確実である。石鏃の形態は有茎を呈する。本地域における縄文晩期の有茎石鏃は続縄文期になり無茎石鏃に変化すると指摘されており、本土墳墓は縄文晩期の可能性がある。

ピット 24

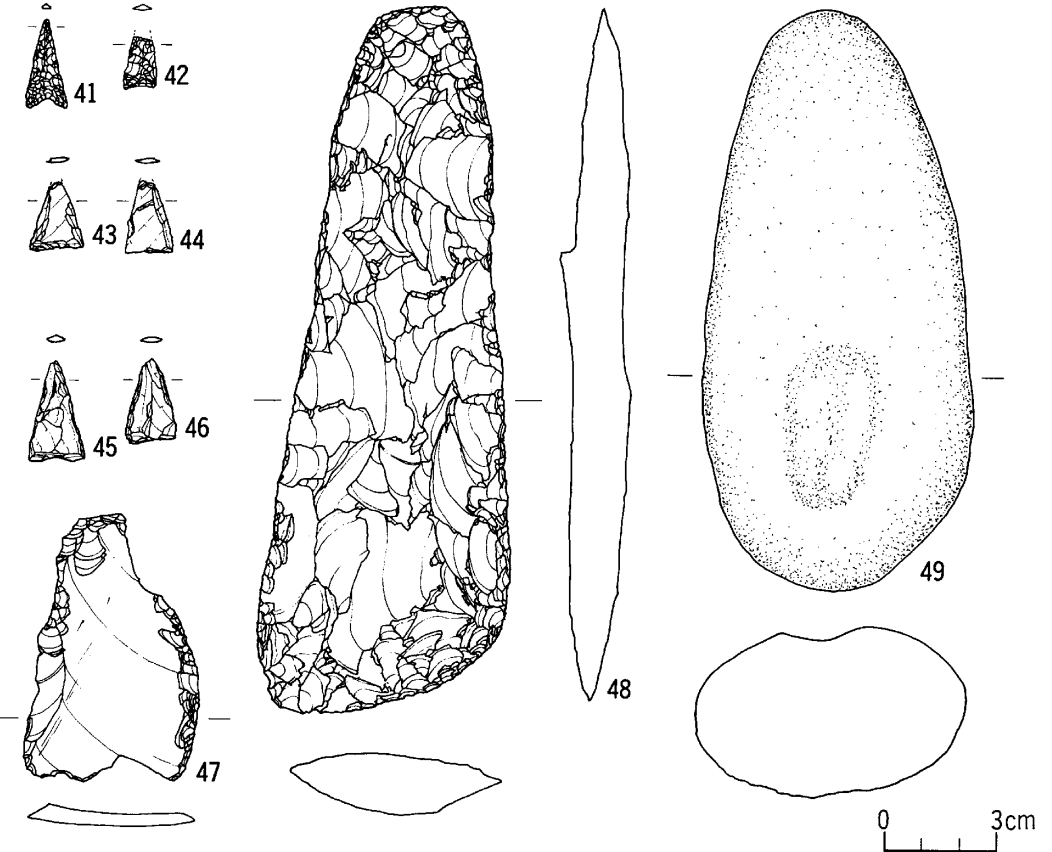
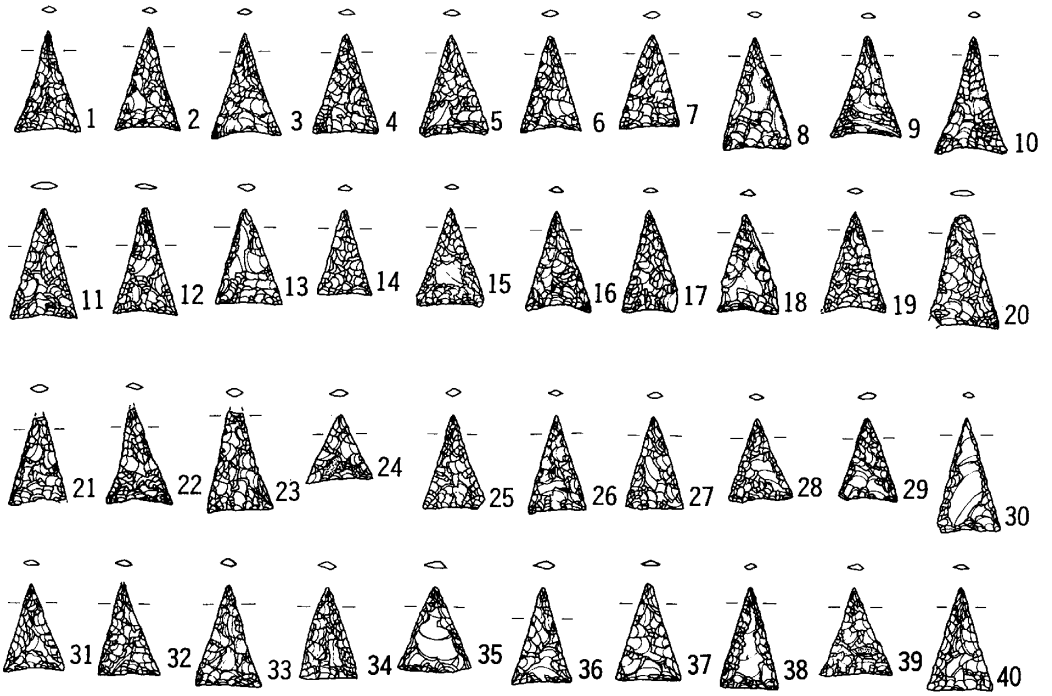
遺構 (第242、251図、図版66-1)

本ピットは14号堅穴の床面精査中に発見した。規模は長軸約1.75m、短軸約1.55mの楕円形を呈する。壁高は比較的緩く立ち上がり14号堅穴の床面から約13cmを測る。遺存体は西壁際から検出された。粘性を有する黄褐色土を呈しており歯骨も検出された。第254図-1～7の石鏃、第255図-2の砥石はこの遺存体の上部にあり、土器は頭部に近いところから正立の状態で出土した。東壁際には扁平な円礫がありこの周辺に各種の石器が副葬されている。この周辺の土質も部分的に糊状化しており遺体のあった可能性がある。

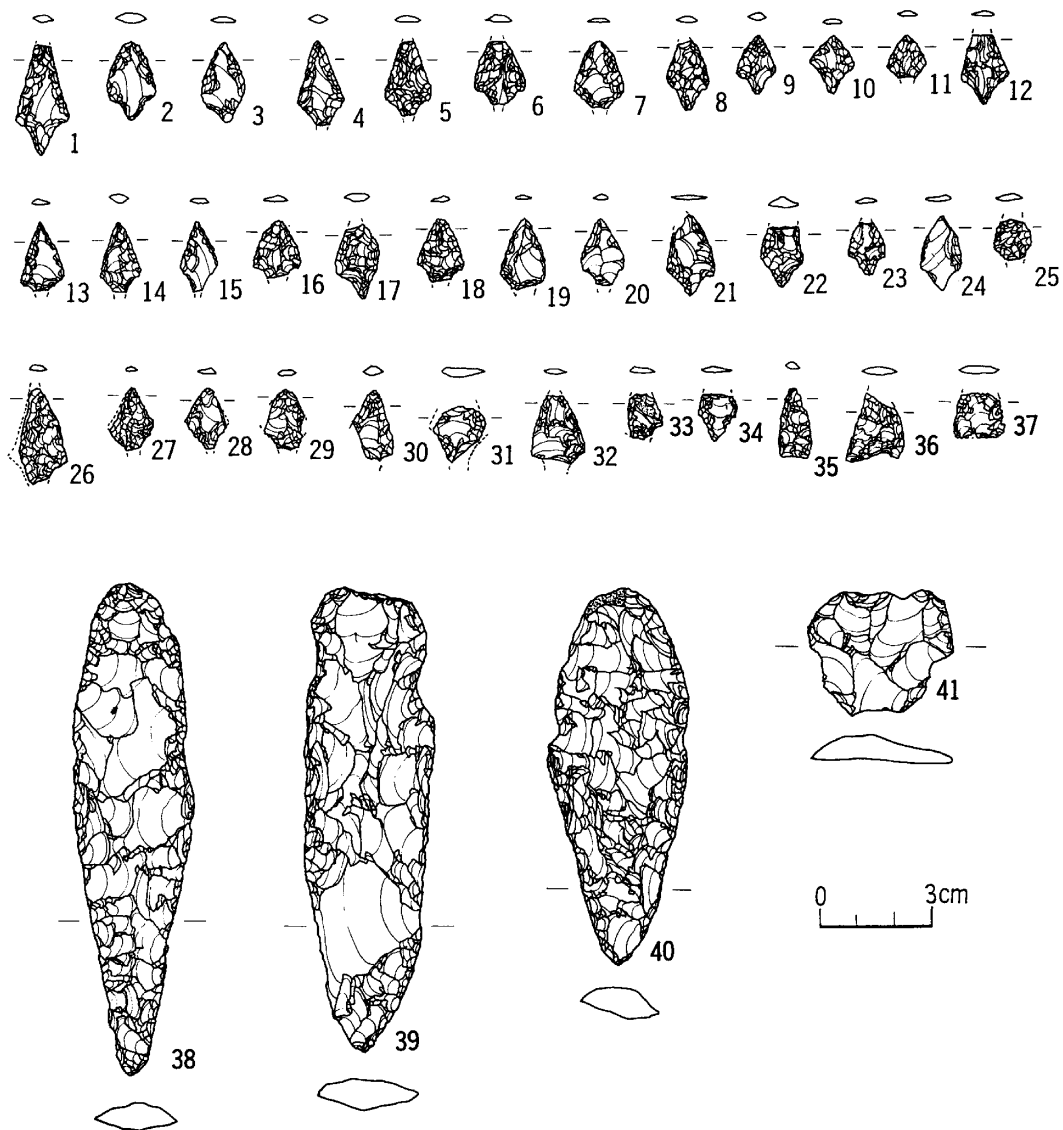
遺物 (第253図-1～6、第254図、第255図、図版66-2・3、図版67-1～31)

第253図-1は床面の約5cm上から出土したが本ピットに伴うものである。時期は宇津内II b式。口唇部は尖がる。口縁部に2個の小突起とその間にやや低い突起をもつ。小突起の下部には楕円形の隆帯が施される。2～6は埋土出土である。2、3は宇津内系と思われる。4～6は縄文晩期である。4は横走沈線文下に山形文が施されたもので、幣舞式であろう。6は口縁下部に縄端圧痕文が施された晩期中葉であろう。

石器は第254図-1～7の無茎石鏃が遺存体の上部から出土している。8～10は東南壁側の石器群と供伴したもので8は有茎石鏃、9は石槍。10は石鏃の先端部であろう。11は主要剥離面側の縁辺部のみ調整を加えた両面加工ナイフ。右側縁上部が欠失している。12～19は側縁もしくはその一部に加工を施した削器。20～22は側縁部に微細な刃こぼれ状の使用痕が残る。23は横長剝片を用いた玄武岩製ナイフ。24は磨製石斧。25は円礫の両側縁部と柄部を敲打調整している。先端部は欠失するが磨製石斧と思われる。第255図-1は大型の片刃磨製石斧。青色泥岩製。2は砥石。三面を使用している。遺存体の頭上部から出土した。3～7は管玉。東壁上部の円礫下部から出土。他に図示していないが玄武岩製の大型剝片が埋土から1点出土している。



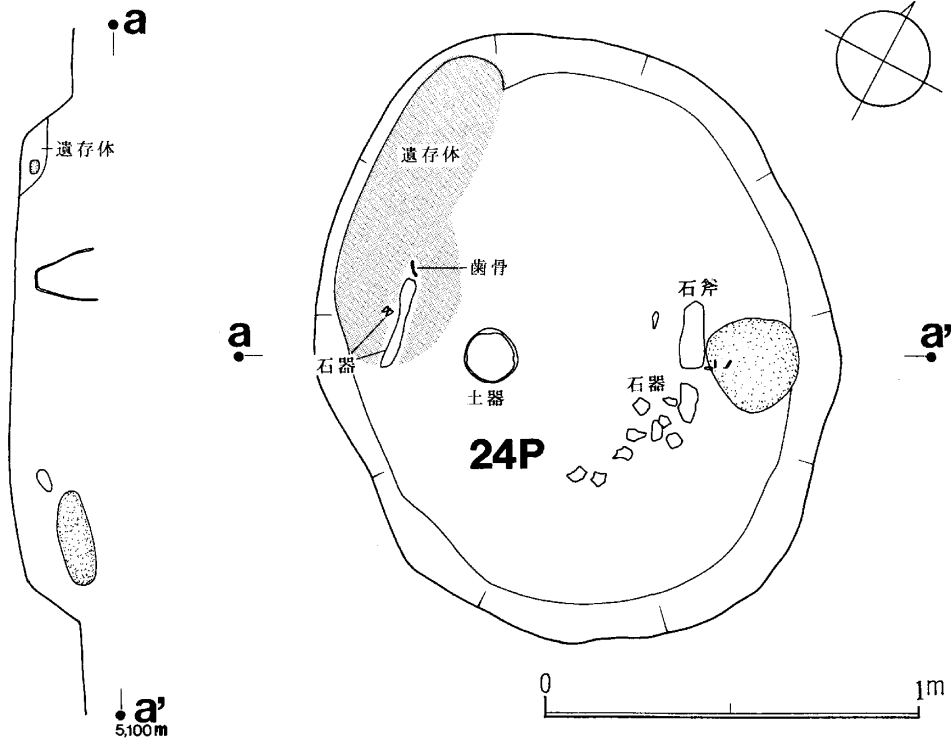
第249図 ピット23埋土(1~49)出土石器



第250図 ピット23a埋土(1~40)出土土器

小 括

本ピットの時期は宇津内II b式期である。本遺跡のこの時期の土壌墓の形態はピット22a号等にみられる様に楕円形を基調とするが、本例の形態はやや東西が張り出す傾向がある。あるいは2体合葬墓かもしれない。長軸は西北—東南にある。頭位は西方向と思われる。



第251図 ピット24平面図

ピ ッ ト 25

遺 構 (第242、252図、図版68-1)

本ピットはE'62グリッドに位置する。西壁の一部が破壊を受けているものの規模は長軸約1.45m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約14cmと浅く、暗褐色砂が堆積している。遺存体の痕跡は認められないが土壌墓であろう。

遺 物 (第253図-7～11、第258図-1～47、図版68-2～49)

第253図-7は長軸面の東壁際の埋土から出土した。時期は後北C₁式期である。口縁部に3個の小突起がある。対面が欠失しているため定かでないが3個1対になるのであろう。文様は縦走縄文を地文とする。縦の微隆起線を基準に弧状の微隆起線を施し、その内側に刺突を加える部分もある。縦の微隆起帯では菱形を呈する。埋土からは8の縄文晩期の幣舞式。9～11の同期中葉が出土している。

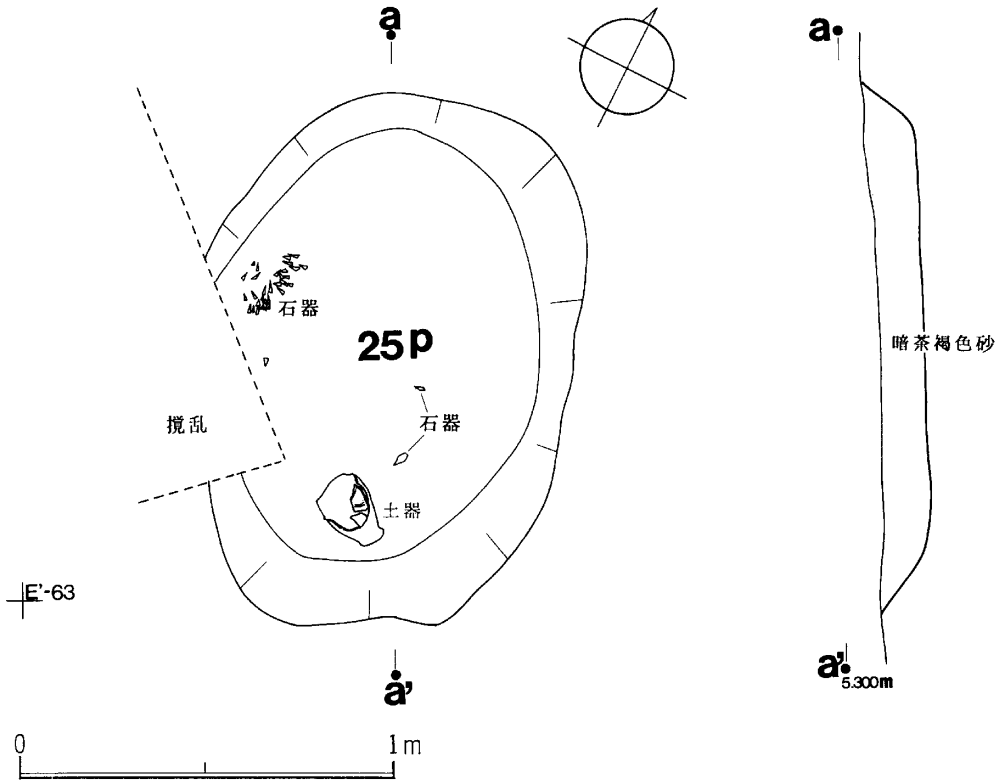
石器は第258図-1～41が南壁中央部からまとめて出土した。41の有茎石鏃以外すべて無茎石鏃である。42は表裏の側縁部のみを加工したものでナイフかもしれない。43は有茎石鏃。こ

常呂川河口遺跡

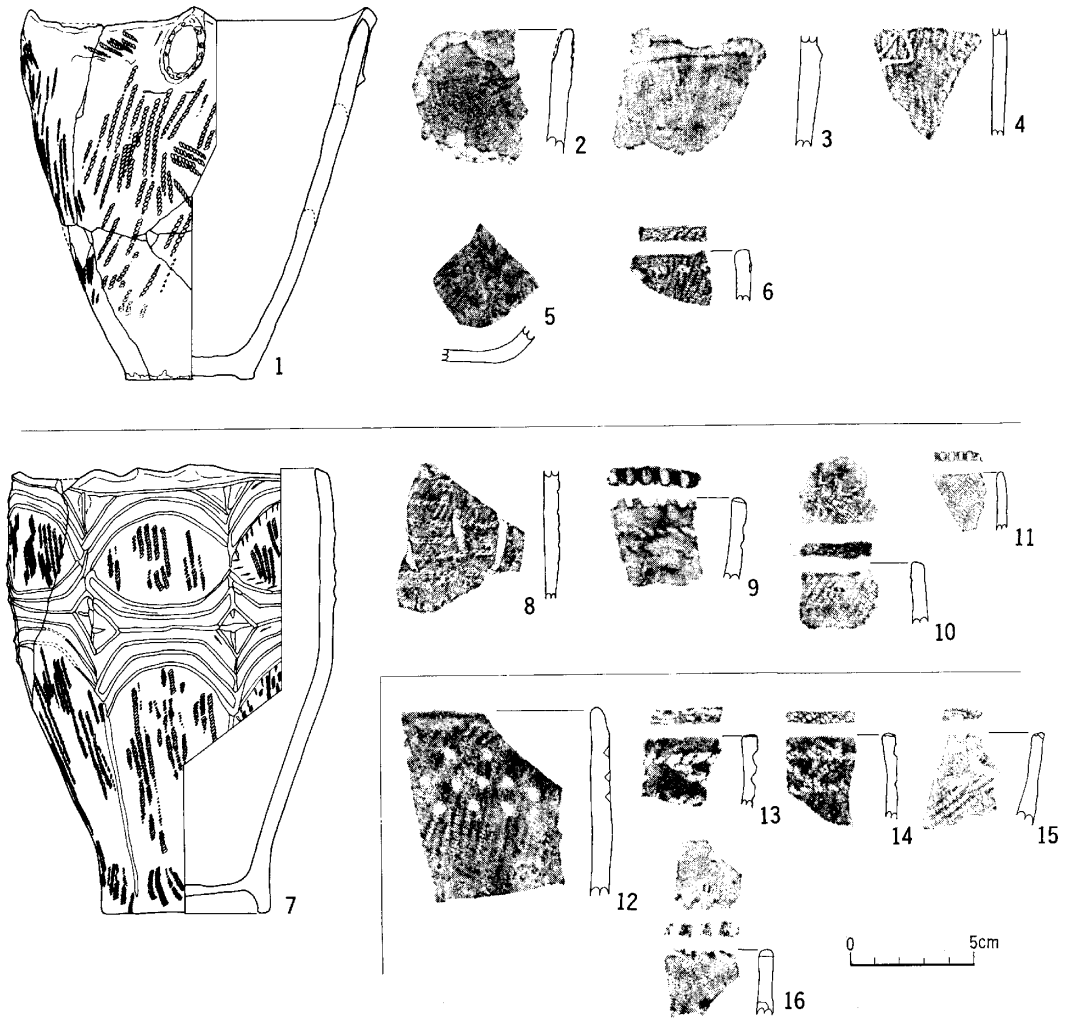
の2点は中央部からやや北壁寄りから出土した。44~46は削器。47は両面から穿孔した石製装身具。

小 括

本ピットは長軸約1.45m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。続縄文後北C₁式期の土壌墓である。



第252図 ピット25平面図



第253図 ピット24埋土(1~6)、ピット25埋土(7~11)、ピット26埋土(12~16)出土土器

ピ ッ ト 26・26a

遺 構 (第242図)

本ピットは12号竖穴の東壁隅に位置する。規模は長軸約1.50m、短軸約1.12mの楕円形を呈する。壁は確認面から約42cmを測る。遺存体の痕跡はないが南壁に近い床面からは7~8cm浮いてベンガラがまとまっているため土壇墓と思われる。時期は不明である。

ピット26aはピット26の南側に位置する。ピット26の南壁上部を切って構築している。規模は直径約0.75m。形態は円形を呈する。壁高は確認面から約24cmである。床面近くに角礫が認められるものの遺物は出土していない。

遺物 (第253図-12~16、第258図-48~51)

第253図-12~16は埋土出土。12は刺突文、13、14は縄線文がほどこされた縄文晩期中葉であろう。16は器面は無文であるが内側から斜めに突かれた突瘤文が施されたもので同前葉であろう。

石器は第258図-48、49は搔器。50、51は削器。すべて黒曜石製。

ピット 27

遺構 (第45図)

本ピットはオホーツク文化期の15号堅穴を調査中に発見した。15号堅穴の硬質化し貼床面を切り込んで構築されている。西壁のごく一部が近代の破壊を受けているものの規模は長軸1.50m、短軸0.7mの長楕円形を呈する。断面は土層から判断する限り逆三角形の緩い立ち上がりである。高さは15号堅穴の床面から約20cmを測る。埋土は黒色土を主体とし、床面には黒褐色砂が堆積する。

遺物 (第256図-1~3、第258図-52・53)

第256図-1、2は床面。3は埋土から出土した擦文土器。1は鋸歯文を2段施している。2は底部。3は高杯。

小括

本ピットは15号堅穴の床面を切り込んで構築された擦文期の土壌墓であろう。土器は藤本編年h、i期、宇田川編年後期に比定される。

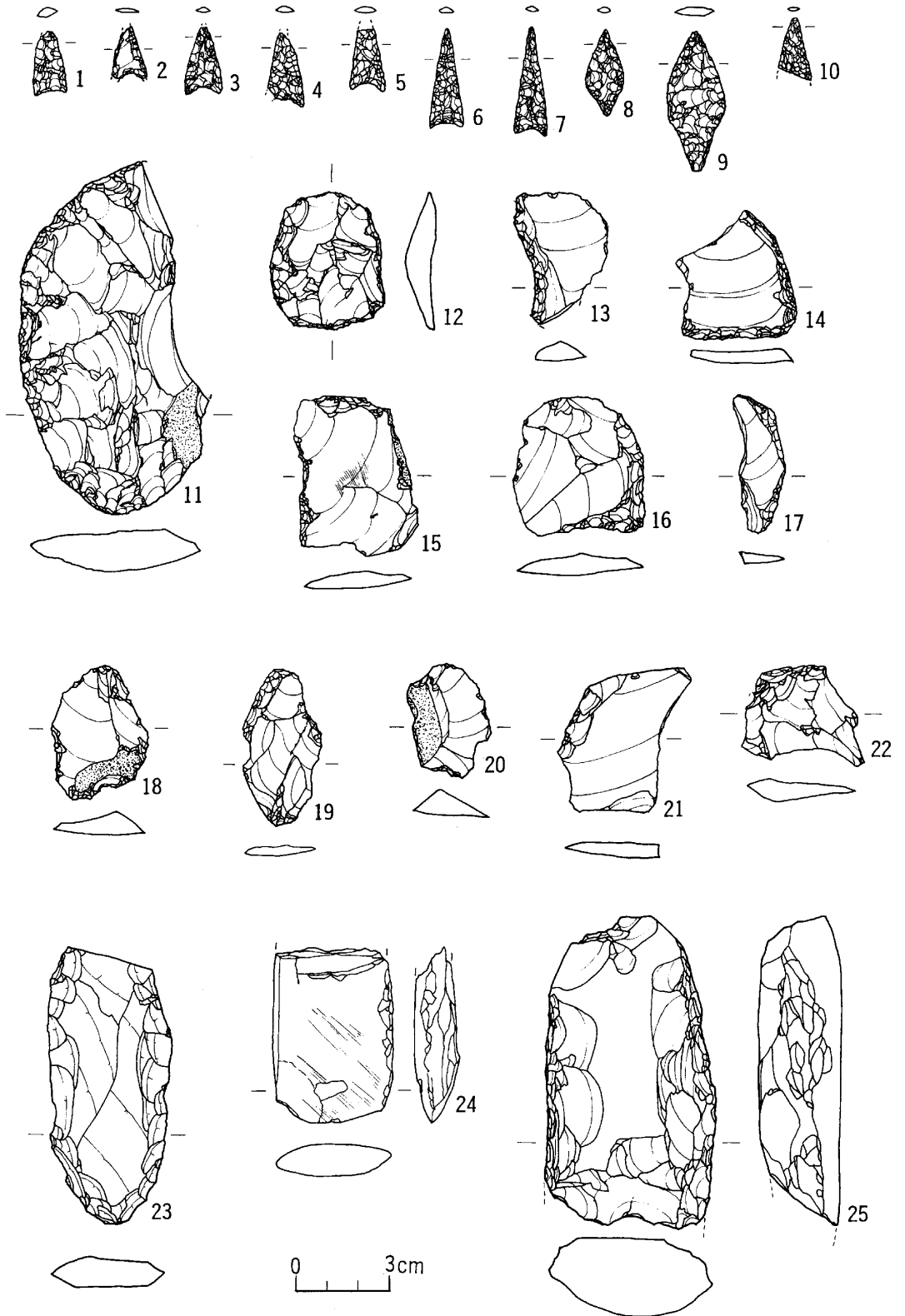
ピット 28

遺構 (第45図、図版69-1)

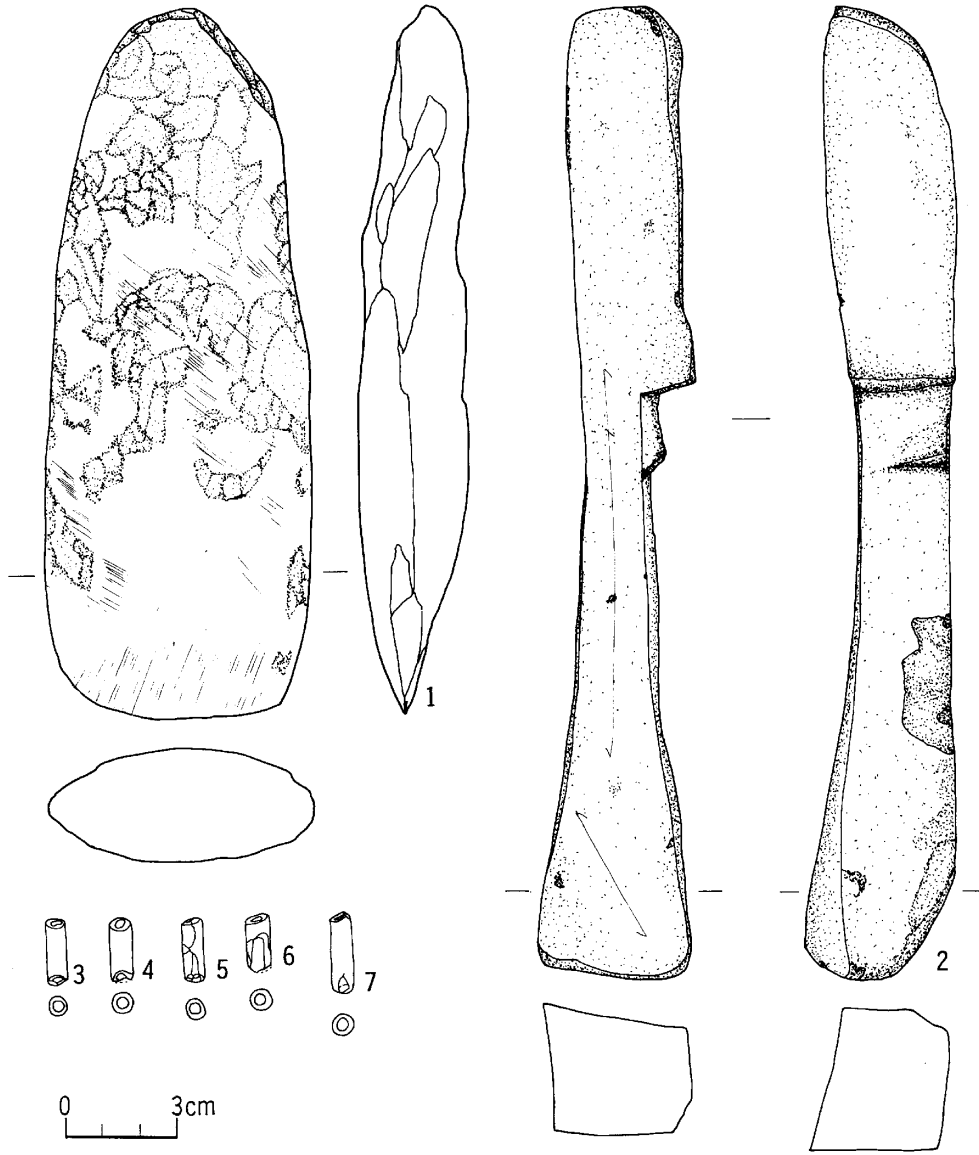
本ピットはピット27の南側約80cmにある。15号堅穴の貼り床を切り込んで構築されている。土層面を観察すると15号堅穴の埋土である摩周火山灰b(トコロ火山灰III)を切り、その上部の暗褐色土から切り込んでいることが確認された。規模は長軸2.1m、短軸0.6mの楕円形を呈する。底面は丸みを持ち、ほぼ垂直に立ち上がる。高さは掘り込み面である暗褐色土上部から約30cmである。

遺物 (第256図-4~9、図版69-2)

埋土から第256図-4の中型鉢形土器が出土している。口縁部の隆帯上には「天塩手法」がみ



第254図 ピット24埋土(1~25)出土石器



第255図 ピット24埋土出土石器(1・2)・管玉(3~7)

られる。胴部文様は細く鋭い矢羽根、鋸歯文で構成されそれぞれは2条の沈線で区画される。底部は板目状の圧痕が残る。5は高杯。器面は矢羽根状の刻線が施される。6は大型鉢形土器。7は無文の大型鉢形土器。8は中型鉢形土器。9は篋により調整された胴部。

小 括

本ピットは15号竪穴の床面を切り込んで構築された擦文期の土壌墓であろう。土器は藤本編年h、i期、宇田川編年後期に比定される。

ピ ッ ト 29

遺 構 (第242図)

本ピットは14号竪穴の床面にある。規模は長軸0.92m、短軸0.5mの楕円を呈する。掘り込みは浅く、14号の床面から約14cmである。

遺 構 (第258図-54)

54は埋土から出土した有茎石鏃。黒曜石製。

ピ ッ ト 30

遺 構 (第274図)

本ピットはF'61グリッドに位置する。規模は長軸約1.26m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。本来の掘り込み面は少なくとも茶褐色砂層の上部にあると判断されるがこのピットはなかなか確認できなかった。第III層の褐色砂層まで掘り下げた段階でようやく確認できたが本来の掘り込みが浅いためこの段階で遺存体が検出された。第III層の褐色砂層から床面までの高さは約18cmである。遺存体は粘性のある黄褐色土を呈する。残存する歯骨の位置から頭位は南と思われる。時期は不明である。

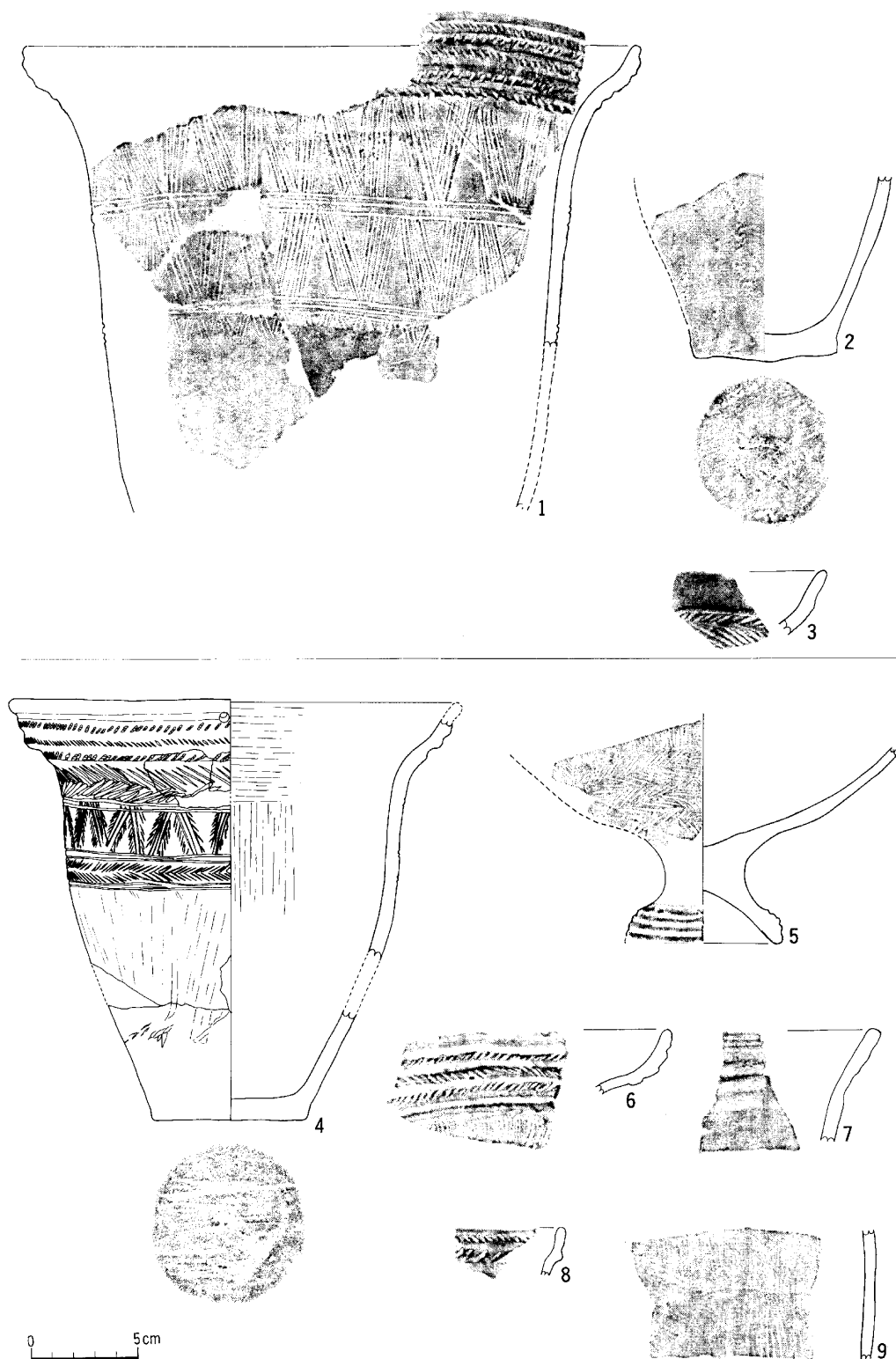
遺 物 (第257図-1～4、第258図-55～57)

この4点は埋土出土である。1は後北C₁式。2は縞縄文が施された続縄文前葉の土器。3は縄文晩期中葉。4は同後葉の幣舞式。

ピ ッ ト 31

遺 構 (第283図)

本ピットはオホーツク文化期の14号竪穴の南壁中央部付近にある。規模は長軸1.45m、短軸0.75mの楕円形を呈する。壁高は14号の床面から約55cmを測る。



第256図 ピット27床面(1・2)・埋土(3)、ピット28埋土(4~9)出土土器

遺 物 (第257図-5～8、第258図-58～60、図版69-4)

第257図-5は14号竪穴の骨塚の南側上部から出土した。出土位置がピット上部付近にあたるためピット31上部土器として取り上げたが、出土状況から判断して骨塚に置かれていたものと考えられる。6は後北C₂式。7は縄文晩期前葉の突瘤文。8は同中葉であろう。

ピ ッ ト 32

遺 構 (第242図、図版70-1)

本ピットは14号竪穴の南壁に近い床面にある。規模は長軸1.85m、短軸1.20mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは14号の床面から約55cmである。ピットのほぼ中央部に遺存体と思われる粘性を有した黄褐色土があり、ほぼ中央部に歯骨も検出された。西壁際にはフレーク・チップの集積中に白色粘土も認められた。フレーク・チップは114点である。土器は頭部に近い東側壁際の床面からつぶれた状態で出土している。

遺 物 (第257図-9、第259図、図版70-2～22)

第257図-9は南壁付近の床面から出土。口縁部に1対の大突起、2個1対の小突起をもつ。胴部文様は縦走縄文を地文に3本単位の隆起線と同心円文を施す。後北C₁式。

石器は埋土出土。第259図-1～3は無茎石鏃。4は先端部が欠失しているものの断面は三角形を呈したナイフ。5～17は削器。すべて黒曜石製である。

ピ ッ ト 33・33a

遺 構 (第45図)

ピット33は15号竪穴の床面を切り込んで構築されている。規模は長軸1.55m、短軸0.55mの長楕円形を呈する。ピット33aと南壁の上部でわずかに重複するが新旧関係を確認できるだけの切り合いではない。壁高は15号の貼り床から30cmを測る。

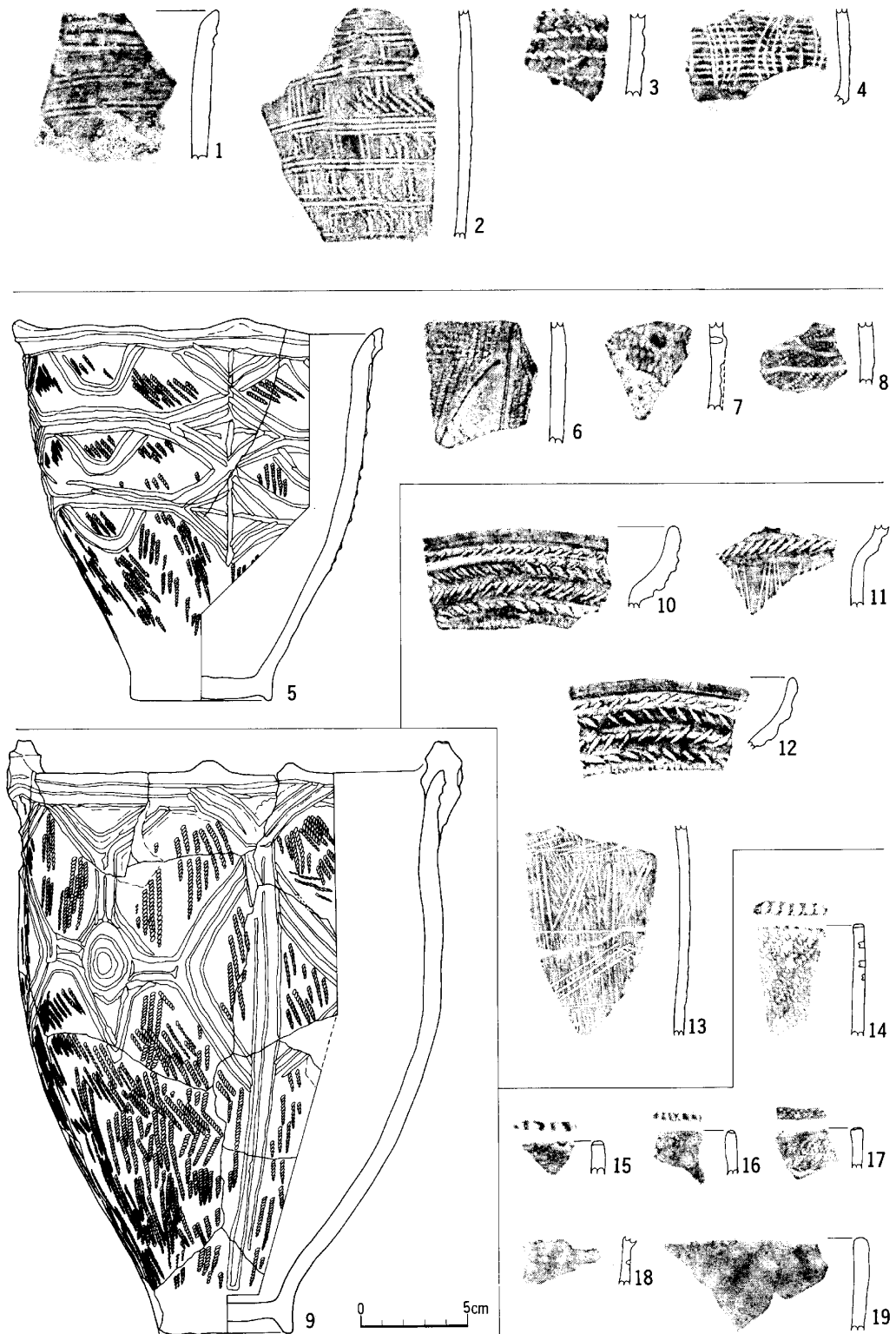
ピット33aは長軸約1.45m、短軸約0.45mの楕円形を呈する。床面は凹凸があり、東壁側が15号竪穴の床面から約28cm、西壁側が約19cmである。遺物は出土していない。

遺 物 (第257図-10～13、図版69-3)

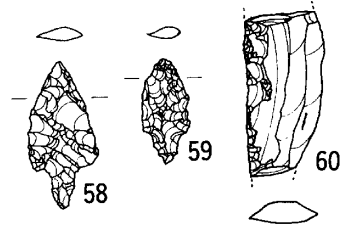
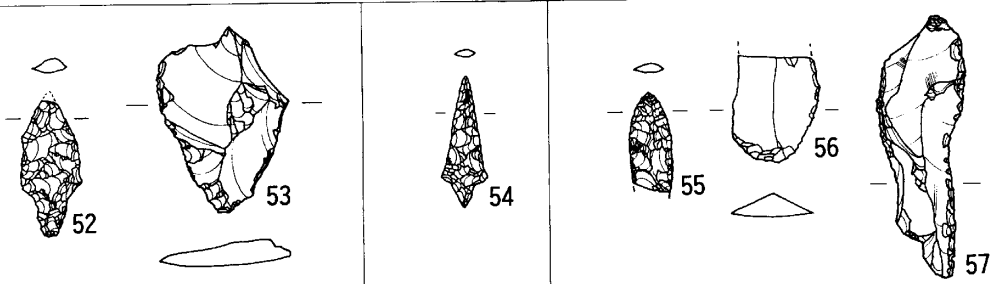
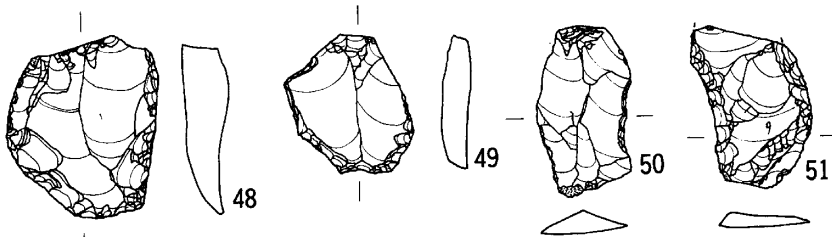
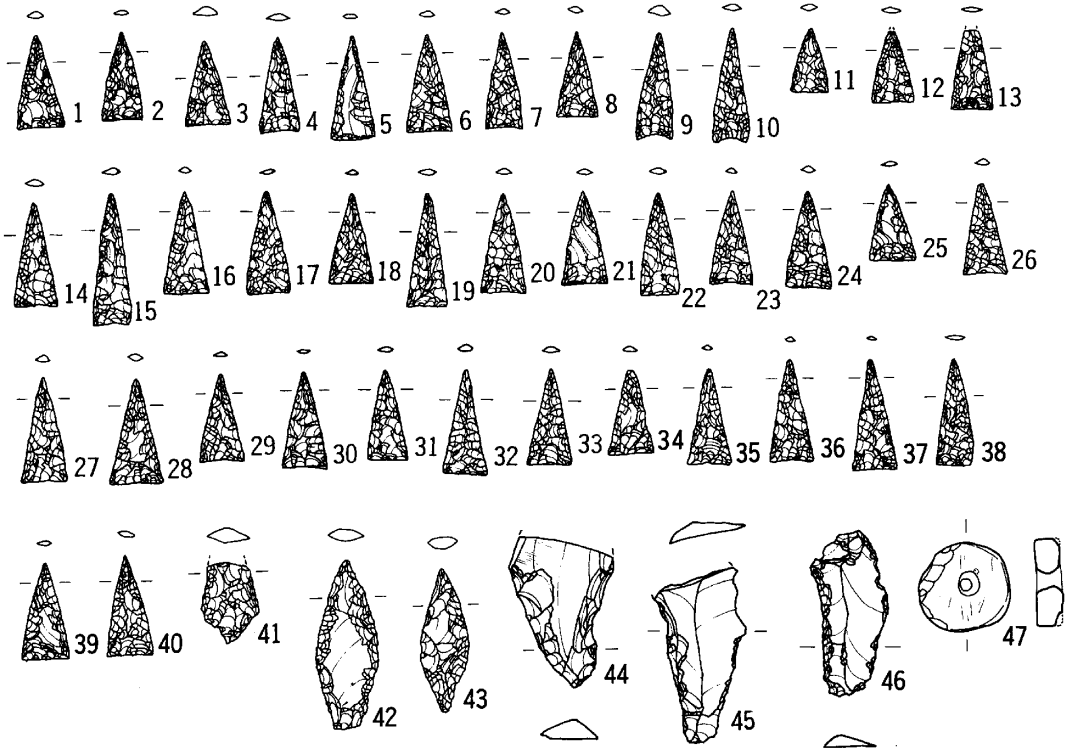
ピット33の埋土から第257図-10～13の擦文土器が出土している。10、12は大型鉢形土器であり隆帯上に矢羽根状の短刻文が施される。13は鋸歯文、山形文の複段文様が施される。

小 括

ピット33、33aは15号竪穴の床面を切り込んで構築されている。完形土器が出土している。形態的な特徴から擦文期の土壌墓であろう。時期はピット28、29と同様の藤本編年h、i期、宇田川後期に比定されると思われる。

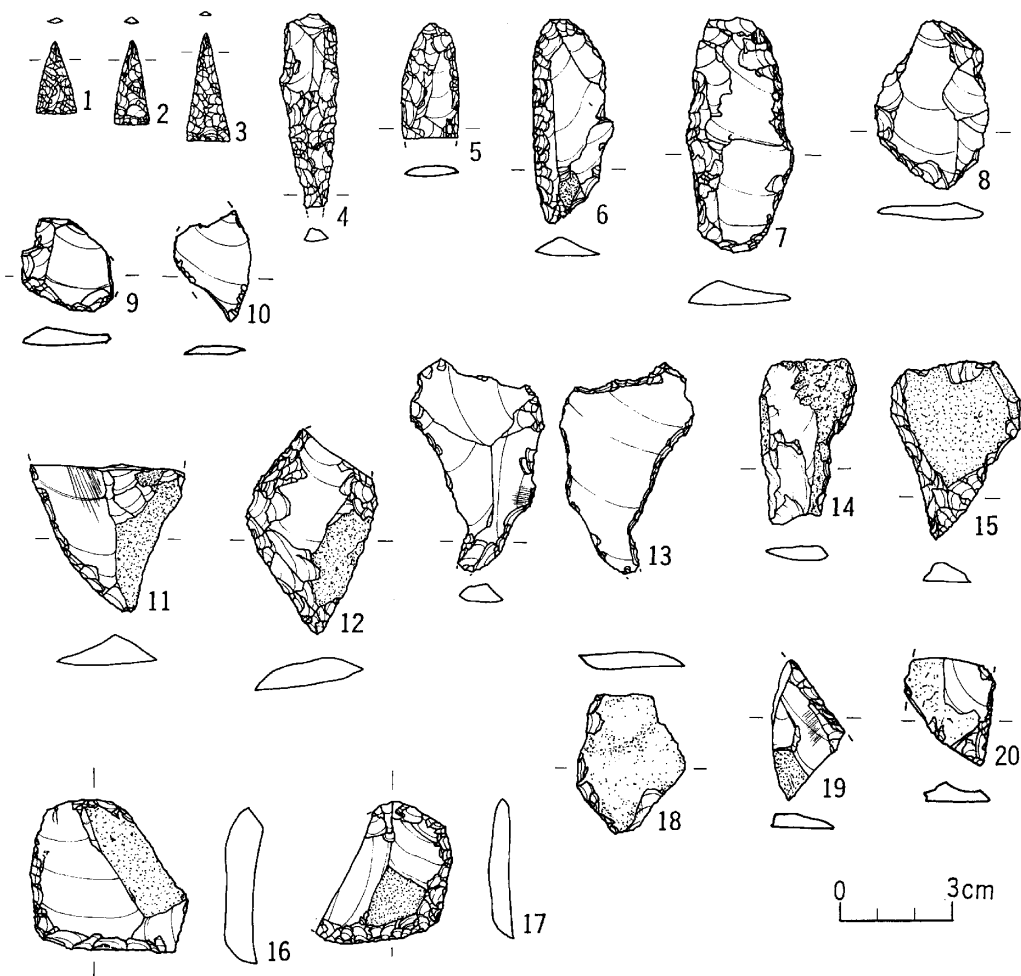


第257図 ピット30埋土(1~4)、ピット31埋土(5~8)、ピット32床面(9)、ピット33埋土(10~13)、ピット34埋土(14~19)出土土器



0 3cm

第258図 ピット25埋土(1~47)、ピット26埋土(48~51)、ピット27埋土(52・53)、ピット29埋土(54)、ピット30埋土(55~57)、ピット31埋土(58~60)出土石器



第259図 ピット32埋土(1~20)出土石器

ピ ッ ト 34

遺 構 (第260、274図、図版71-1)

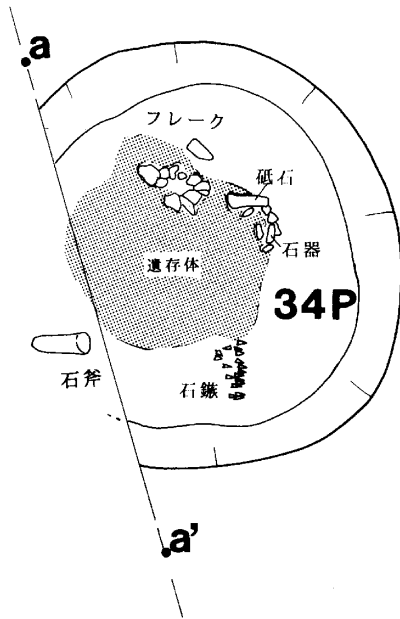
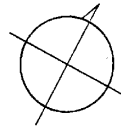
本ピットは14号竪穴の北壁を検出中に発見した。規模は直径約1.40mの円形を呈するが、南壁の一部が14号竪穴により破壊されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から約33cmを測る。ピットのほぼ中央部に赤褐色を呈した遺存体がある。遺存体の上部にはベンガラが散布されていた。

遺 物 (第257図-14~19、第261図、第262図-1~15、図版71-2~64、図版72-1~15)

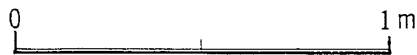
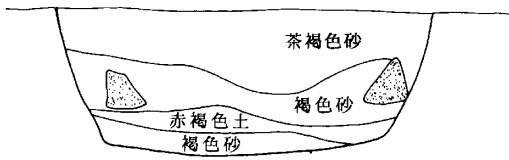
土器はないものの石器は各種のものが多量に出土している。最も多いのが石鏃で東壁際から先端を北に向けた状態で出土している。第261図-1~63は鏃身の長い無茎石鏃で基部が緩い弧状を呈するもの、直線的で二等辺三角形を呈するものがある。64は側縁部に歯こぼれが見られる。65、66は削器。64~66はベンガラの濃い部分から出土したもので特に66にはベンガラが付着している。67は大型の片刃磨製石斧。第262図-1は砥石。2~12、14、15は遺存体の上部から出土し、13は埋土出土。2は無茎石鏃。3~5は有茎石鏃。特に5はアグが張り出す。6、7は両面加工ナイフ。10は片面加工ナイフ。8、9、11~14は削器。9は横長剝片の表裏先端部の側縁を加工している。15は磨製石斧。

小 括

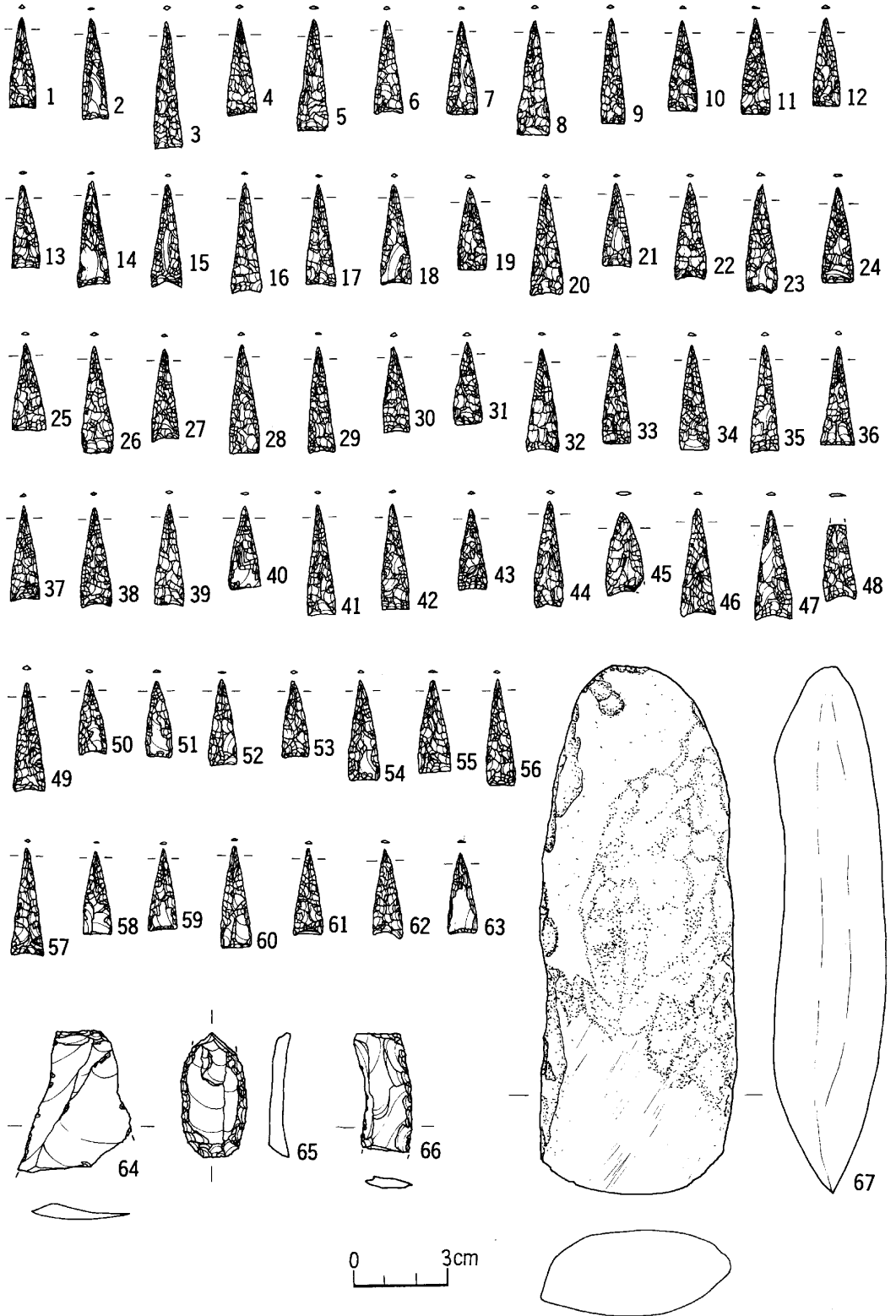
本ピットからは土器が出土していないため正確な時期は不明である。石器の形態から続縄文期であることは確実である。この区域は後北C₁式期の土壌墓が集中しておりあるいはこの頃の可能性がある。



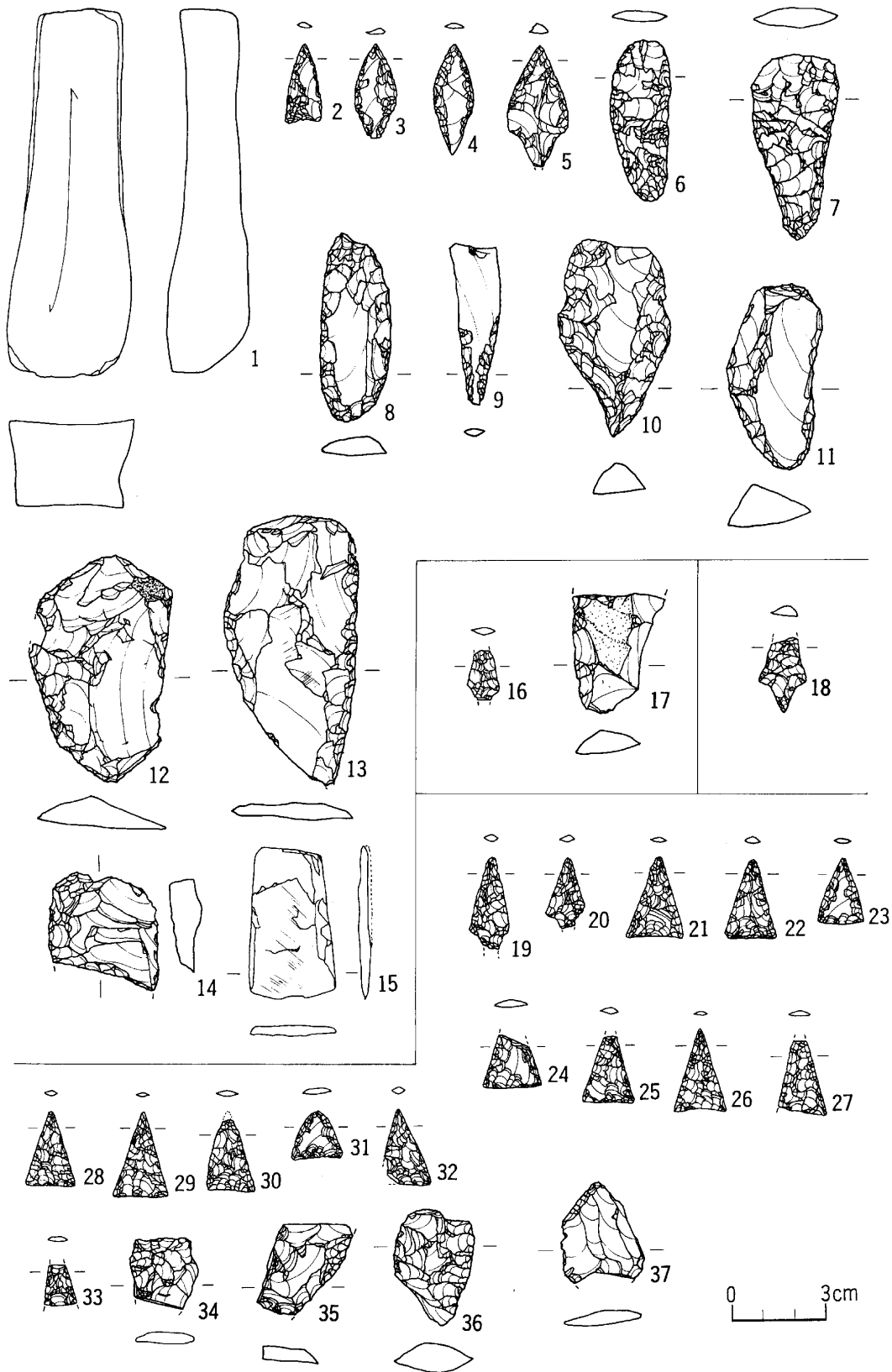
a **a'** 5300m



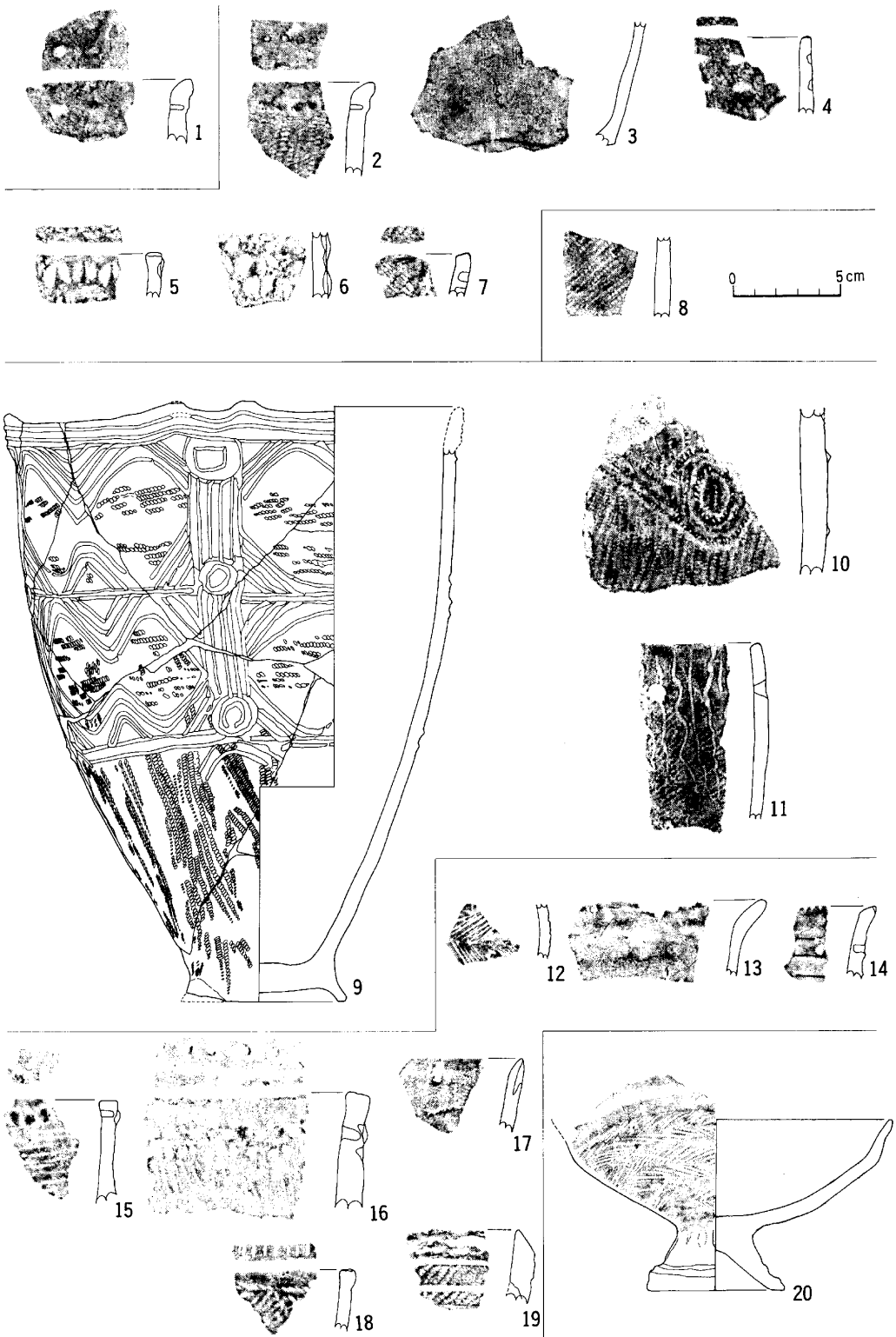
第260図 ピット34平面図



第261図 ピット34床面(1~67)出土石器



第262図 ピット34床面(1)・埋土(2~15)、ピット34 a 埋土(16・17)、ピット34 b 埋土(18)、ピット35埋土(19~37)出土石器



第263図 ピット34a埋土(1)、ピット34b埋土(2~7)、ピット35埋土(8)、ピット37床面(9)・埋土(10・11)、ピット38埋土(12~19)、ピット40埋土(20)出土土器

ピ ッ ト 34a

遺 構 (第274図)

本ピットはピット34に南壁を切られている。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁高は確認面から約27cmを測る。

遺 物 (第262図-16・17、第263図-1)

第263図-1は宇津内II a式。埋土出土である。石器は第262図-16の有茎石鏃。17の削器がある。17は原石面を残し縁辺部の調整も顕著でない。

ピ ッ ト 34b

遺 構 (第274図)

本ピットはピット34aに南壁を切られている。規模は直径約0.8mの円形を呈する。壁高は確認面から約18cmを測る。

遺 物 (第262図-18、第263図-2～7)

第263図-2は宇津内II a式。3～7は縄文晩期。4は刺突文が施された同中葉。5、6は盛り上がりのある爪形文のある同前葉。7は縄文後期堂林式。

石器に第262図-18の有茎石鏃がある。

ピ ッ ト 35

遺 構 (第274図)

本ピットは14号竪穴の北壁を検出中に発見した。断面をみると遺存体である粘性を有する赤褐色土が露呈していた。あきらかに14号竪穴により破壊されているため検出できたのは3分の1程度である。規模は推定1.15mの円形を呈すると判断される。壁高は確認面から約33cmである。

遺 物 (第262図-19～37、第263図-8、図版72-16～33)

埋土から第263図-8の縄文晩期の土器片が出土している。石器は第262図-19～36がある。19、20は有茎石鏃。21～32は無茎石鏃。33は石鏃の先端部。34、35、37は削器。36は両面加工ナイフ。すべて黒曜石製。

ピ ッ ト 36

遺 構 (第274図)

本ピットは14号堅穴の東壁にある。大半が14号堅穴に切られているため検出できたのは東壁の上部だけである。正確な規模は不明であるが、残存部から判断すると長軸約1.25mの楕円形を呈すると思われる。

遺物は出土していない。

ピ ッ ト 37・37a

遺 構 (第274図、図版73-1)

ピット37は14号堅穴の床面精査中に発見した。形態は直径約1.50mの円形を呈する。壁高は14号床面から約18cmを測る。遺存体は粘性を有し糊状化し、上部にベンガラがわずかに散布されている。色調は黄褐色を呈する。西壁際に大型土器1点と両面加工ナイフ、石斧があり遺存体の上部に石鏃が副葬されている。

ピット37aはピット37に西壁から南壁を切られている。形態は長軸約1.30m、短軸約0.9mの長楕円形を呈する。壁高は14号堅穴の床面から約40cmを測る。黄褐色を呈した遺存体が認められたが時期は不明である。

遺 物 (第263図-9～11、第246図、図版73-2～45)

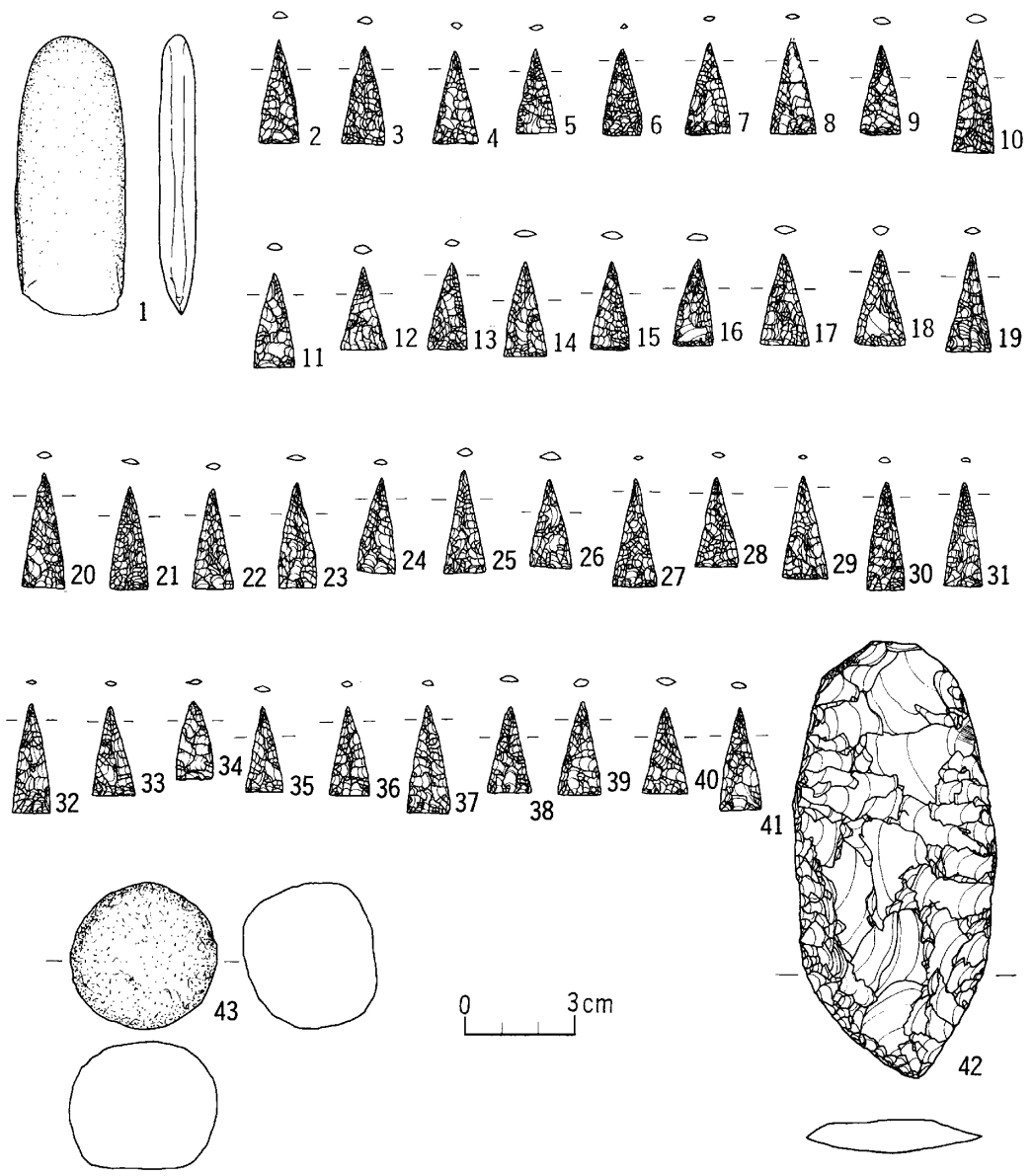
第263図-9は床面からつぶれた状態で出土した口径21.5cm、高さ28cmの深鉢である。口縁部には対角上に2個1対、1対の小突起をもつ。小突起からは微隆起線が垂下し同心円文が施される。垂下する微隆起線間には波状の微隆起線が連続している。続縄文後北C₁式である。10は宇津内II b式。11は縄文晩期幣舞式。

石器は第264図-1～43が出土している。1は片刃磨製石斧。泥岩製。2～41は無茎石鏃。42は両面加工ナイフ。43は石球。1、43を除き黒曜石製である。

ピット37aからは黒曜石のフレークが1点出土しているだけである。

小 括

ピット37は続縄文後北C₁式の土壌墓である。



第264図 ピット37床面(1)・埋土(2~43)出土石器

ピ ッ ト 38

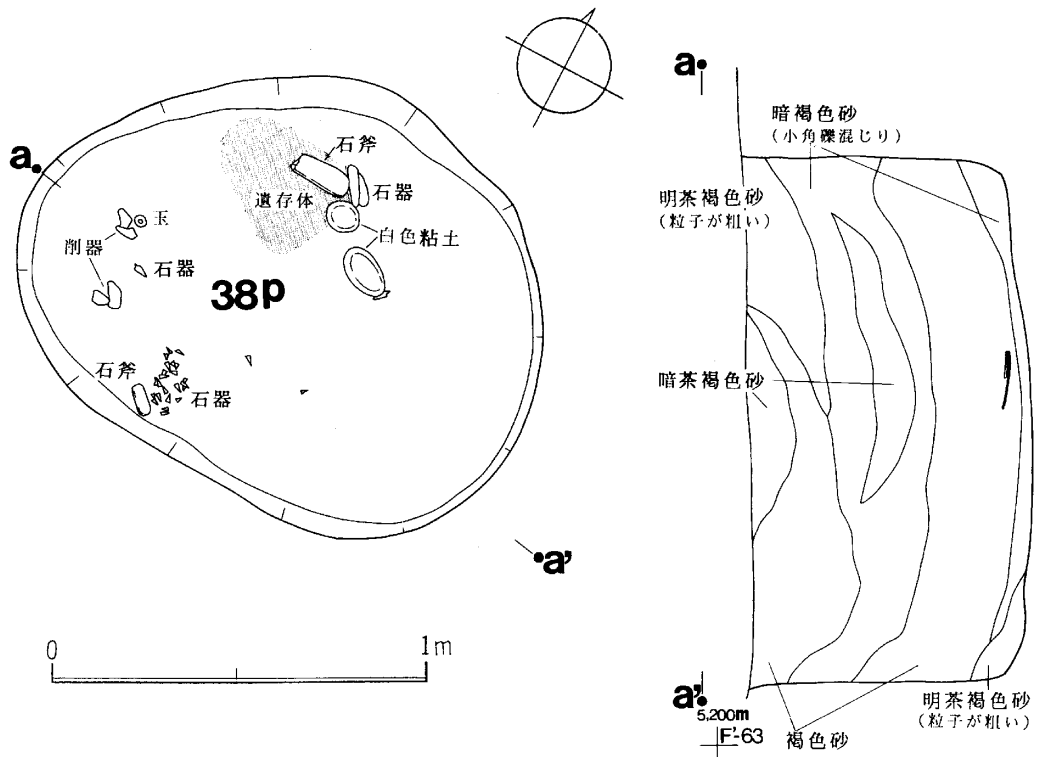
遺 構 (第242、265図)

本ピットは14号竪穴の北西壁隅にある。東壁上部が14号竪穴に切られているものの底面はかろうじて残存している。規模は直径1.40mの不整楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約0.75mである。遺物は北壁際から石斧1本、両面加工ナイフ2本、白色粘土2個、南壁際からは石斧1本、石鏃36本、石槍1本、削器、玉が出土しており両壁に区別して副葬している。遺存体は確認できなかった。

遺 物 (第263図-12~19、第266図、第267図-1~3、図版74-1~48)

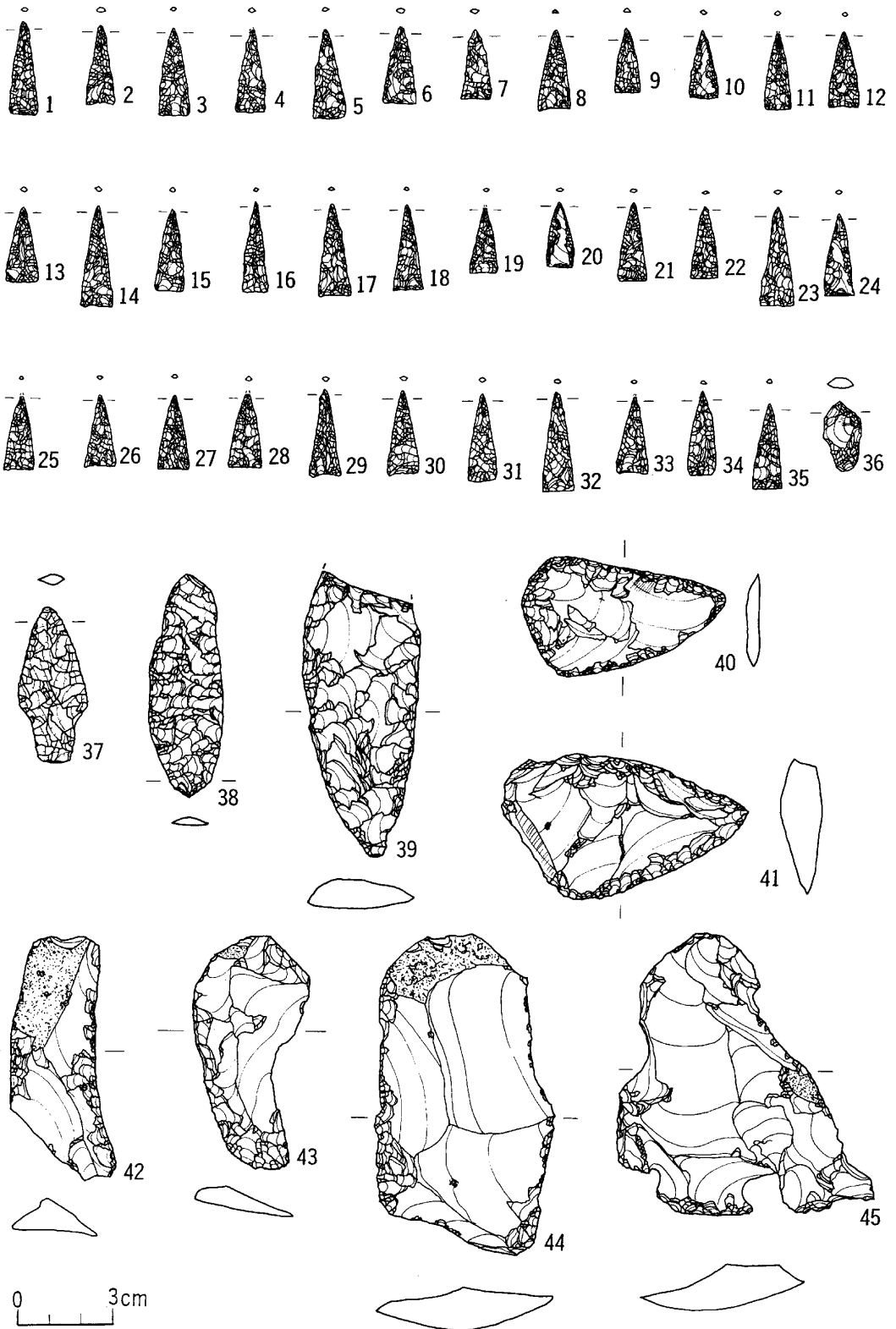
埋土から第263図-12~19が出土している。12、13は擦文。14は北大I式。15、16は宇津内II a式。17はほぼ垂直に刺突されているが文様としての刺突ではないと思われる。18は縄文晩期中葉。19は縄文後期堂林式。

石器は第266図-1~45、第267図-1~3に示す通り各種ある。1~35は無茎石鏃。36は有茎石鏃。37は石槍。38、39は両面加工ナイフ。40、41は三角形状を呈した削器。42~44は側削器。45は大型フレイクの縁辺部に歯こぼれ状の微細な使用痕がある。37は頁岩製であり他は黒曜石

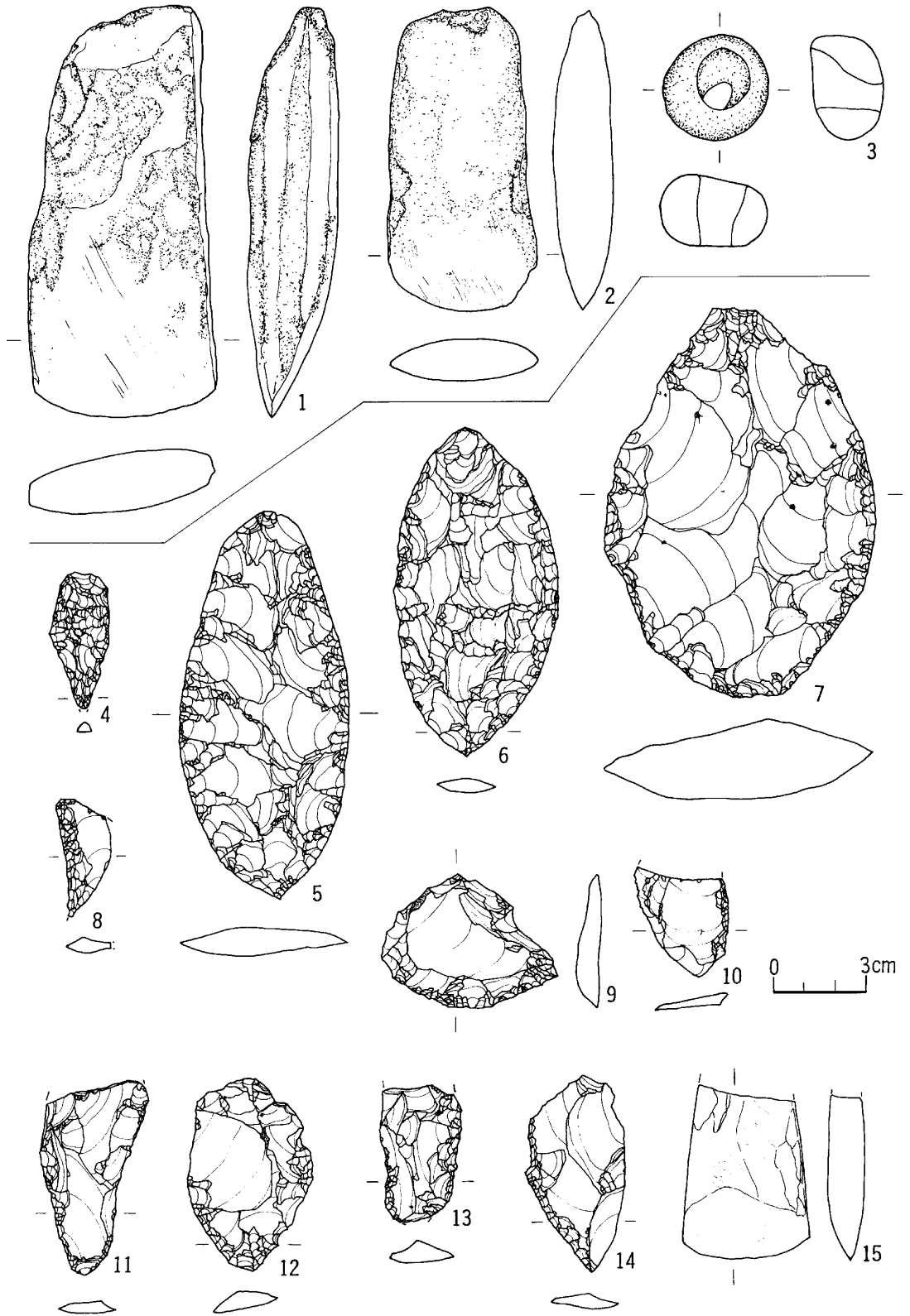


第265図 ピット38平面図

常呂川河口遺跡



第266図 ピット38埋土(1~45)出土石器



第267図 ピット38埋土(1~3)・ピット39床面(4~15)出土石器

常呂川河口遺跡

製。第267図-1、2は泥岩製の片刃磨製石斧。1は擦り切られている。3は硬質頁岩製の玉。一方から穿孔している。

小 括

本ピットの詳細な時期は不明であるが統縄文期の土壙墓と思われる。この周辺には後北C₁式の墓が多くこの頃のものかもしれない。

ピ ッ ト 38a

遺 構 (第242図)

大半を14号竪穴に切られているため正確な規模、形態は不明である。深さは確認面から約15cmを測る。

ピ ッ ト 39・39a

遺 構 (第274図、図版75-1)

ピット39は14号竪穴の北壁中央部にある。表土を剝土すると黒褐色砂の落ち込みがあり上面から多量のフレイクが現れた。フレイクは北壁際に固まっておりその下部から第267図-4～15の石器が出土した。底面は比較的固く締まった黒褐色を呈している。遺存体は確認できなかった。規模は14号竪穴により約3分の1が削られているものの短軸約0.95mの楕円形を呈すると思われる。深さは確認面から約10cmを測る。

ピット39aは14号竪穴の北壁中央部にある支柱穴と重複する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。高さは14号竪穴の床面から約63cmを測る。遺物は出土しておらず時期は不明である。

遺 物 (第267図-4～15、図版75-2～13)

土器は図示していないが統縄文、縄文晩期の胴部片が6点出土している。石器はフレイク186点のほか第267図-4～15が床面から出土している。4は片面加工ナイフ。5、6は両面加工ナイフ。7は肉厚で刃部も作出されていない。両面加工ナイフの製作段階のものであろう。8、10～14は削器。9は搔器。15は緑色泥岩製の片刃磨製石斧。15以外は黒曜石製。

小 括

ピット39は壙上部に多量のフレイクがある。詳細な時期は不明であるが床面から出土した両面加工ナイフは統縄文期と思われる。

ピ ッ ト 40

遺 構 (第274図)

本ピットは14号竪穴の石囲み炉の東端側にある。規模は直径約1.20mの円形を呈する。深さは14号の床面から約28cmである。

遺 物 (第263図-20、第269図-1・2)

第263図-20はピット上部の暗褐色砂層から出土した。矢羽根状の短刻線を施した擦文期の高杯。

ピ ッ ト 41

遺 構 (第274図)

本ピットは14号竪穴の東壁に近い床面にある。規模は長軸約0.90m、短軸約0.60mの長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。高さは約47cmを測る。埋土は黒色土と褐色砂に分層され底面近くから第268図-1の土器が出土している。

遺 物 (第268図-1)

第268図-1は床面から約5cm浮いた位置から出土した。縄文後期鯨潤式である。

ピ ッ ト 42

遺 構 (第274図)

本ピットは14号竪穴の東壁にある。約2分の1が14号竪穴に切られているが形態は楕円形を呈する。規模は長軸約1.10m、短軸は推定0.8m程度であろう。壁高は確認面から約3.5cmである。遺存体の痕跡は認められなかったが形態的な特徴、埋土が人為的に埋め戻されているところから土壌墓の可能性がある。床面からの出土遺物がないため時期は不明である。

遺 物 (第268図-2～6)

第268図-2～6は埋土の暗褐色砂から出土した。2は後北C₂式。3、4は縄文、5、6は縄線文が施されたもので3～6は縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 43

遺 構 (第274図、図版76-1)

本ピットは14号竪穴の北壁近くにある。長軸約1.15m、短軸約0.85mの不整長方形を呈する。

埋土を約15cm掘り下げた段階で第268図-8の土器が出土しやや下面からベンガラとともに石斧、削器、フレークがまとまって出土した。ベンガラと石器類は暗赤褐色を呈した遺体の直上にあたる。第268図-7、9、10は北壁際から出土しているがこれらは遺体の上というよりは遺体の際に副葬されているようであり、10は床面から出土した。歯骨は腐食が著しく原形を留めていないが西壁側から検出した。

遺物 (第268図-7～11、第269図-3～7、図版76-2～8)

遺物は埋土中と床面出土がある。埋土のものも出土状況から本ピットに伴うものと判断できる。第268図-7は上面観が円形を呈した浅鉢。口縁部の一端に幅広の凸帯がありその中央部に幅3mmの孔がある。反対側の口縁部に1個の小突起をもつ。口縁部は刻みが施され口唇部には縄が押捺される。8は口縁部に刻みがある。器面は縄文を地文とし直線、波状の縄線文、さらに変形工字文的に沈線を施したもので底部には山形沈線がある。また、幅3mmの孔が2個ある。9は上面観が円形を呈した浅鉢。口縁部の3個の小突起から幅広の貼付帯が垂下し両側の2本には刻みがある。中央の貼付帯は短く、近接して幅3mmの孔が2個ある。この反対側の口縁部は2個の小突起のみある。小突起のある口唇部分のみ縄が押捺され、それ以外は平縁となり2個の刻みが施されている。器面は口縁下部が横走縄文になる。10は全体の3分の1が残存し口縁、底部は欠失する。口縁下部の付近と底部に横走縄文が施された深鉢である。11は晩期の底部。

石器は第269図-3～7がある。これらはベンガラ内からフレーク9点とともに出土した。3はノッチ状の刃部をもつ。4、5は削器。6、7は青色泥岩製の石斧。他はすべて黒曜石製。

小括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壙墓である。浅鉢を主体とした3点の土器が出土している。3点の土器の幅約3mmの孔は焼成前にあけられたものである。注ぎ口としては小さく非実用的であり、底部穿孔に通じる祭祀的な側面をもつものと思われる。遺物の位置は石器が遺体上部、土器は周辺の壁際から出土する。長軸は東-西にあり西壁側から歯骨が検出された。

ピット 44

遺構

本ピットは14号堅穴の西壁近くの床面にある。規模は長軸約1.39m、短軸約0.70mの長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり14号堅穴床面から約45cmを測る。

遺物

遺物は埋土から第269図-8の側削器1点のみ出土している。黒曜石製。

ピ ッ ト 44a

遺 構 (第270図、図版77-1)

本ピットはピット44の下部に位置する。ピット44の調査段階で本ピットの存在をつかむことができず縄文中期の包含層を検出するため14号竪穴の床面から約10cm掘り下げた段階で輪郭を確認した。形態は長軸約1.2mの方形を呈する。壁の高さは約20cmの低い立ち上がりである。これは本来の掘り込み面はさらに上位にあったことは確実であるが、遺憾にも遺構の存在が確認できず上部を削ってしまったため低い高さになってしまった。埋土は茶褐、暗茶褐色砂を主体としこれを取り除く途中に黄褐色土の遺存体を検出した。一部に大腿部と思われる幅約5～6cm、長さ約30cmの骨も残っていたが取り上げることはできなかった。頭部は南にあり歯骨も検出された。頭部の西側にはフレーク122点の集積がありこれよりやや上部に第272図-1の土器が遺体側に向かって傾斜した状態で出土した。北壁近くには角礫が遺体からやや浮いて置かれている。石鏃は角礫の下、遺体の上部から出土している。ベンガラ等は認められない。

遺 物 (第272図-1、第269図-9～32、図版77-2～26)

第272図-1は口縁部に4個の小突起をもつが1点は打ち欠けられている。口唇部には刻みがある。縦走縄文を地文とするが、口縁下部では幅広の浅い沈線が多重に施され、胴中央部とは縦の沈線で区画される。底部は細く揚げ底となり、底部に近い器面では指頭で成型した痕跡が見られる焼成は良い。

石器は遺体上から出土した第269図-9～31の無茎石鏃と埋土出土の32の削器がある。フレークの集積は122点に及び微細な刃こぼれをもつもの、原石面を残すものも数点ある。

小 括

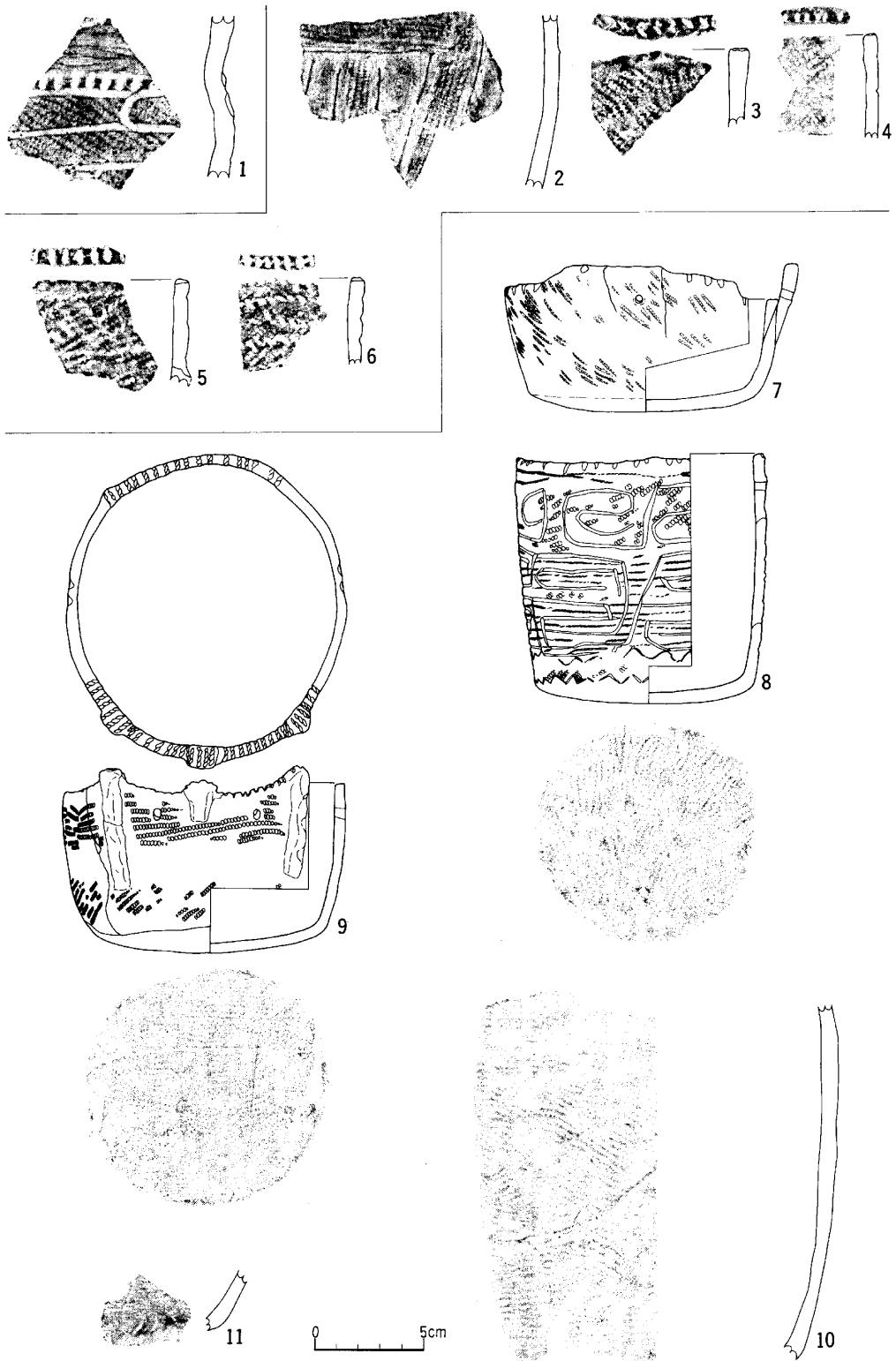
本ピット出土の土器は口縁下部に多重の沈線を施すもので本例に類似する資料の報告例はないが縦走縄文、揚げ底を呈する点から後北C₂式と平行する時期のものと考えられる。頭位は南方向にある。

ピ ッ ト 45・45a

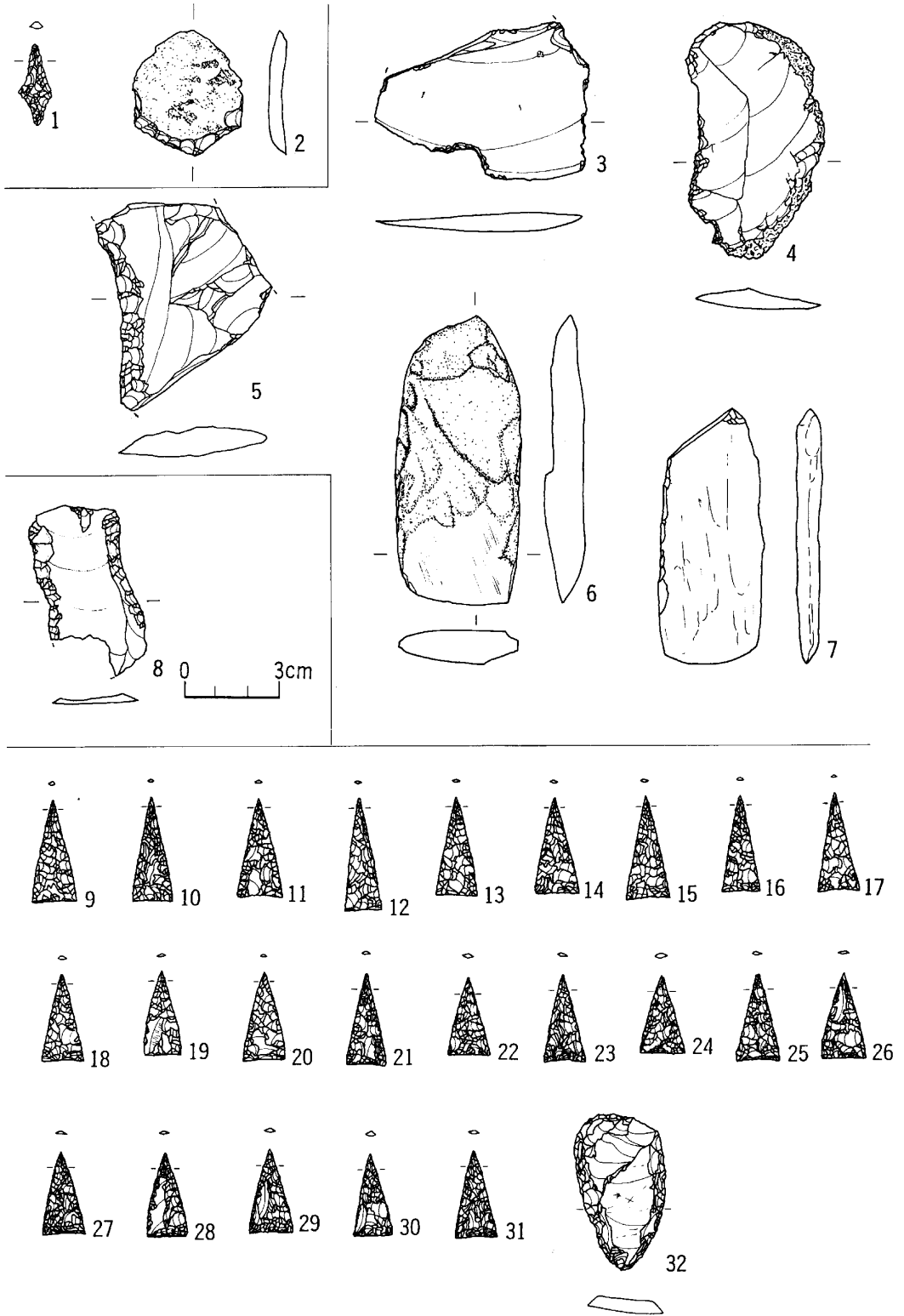
遺 構 (第274図)

ピット45は14号竪穴の南壁に近い床面にある。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁高は14号竪穴の床面から約12cmを測る。埋土は暗褐色砂が堆積している。

ピット45aはピット45に南壁の一部を切られている。直径約1.0mの円形を呈した皿状のピットである。深さは約8cmを測る。遺物は出土していない。



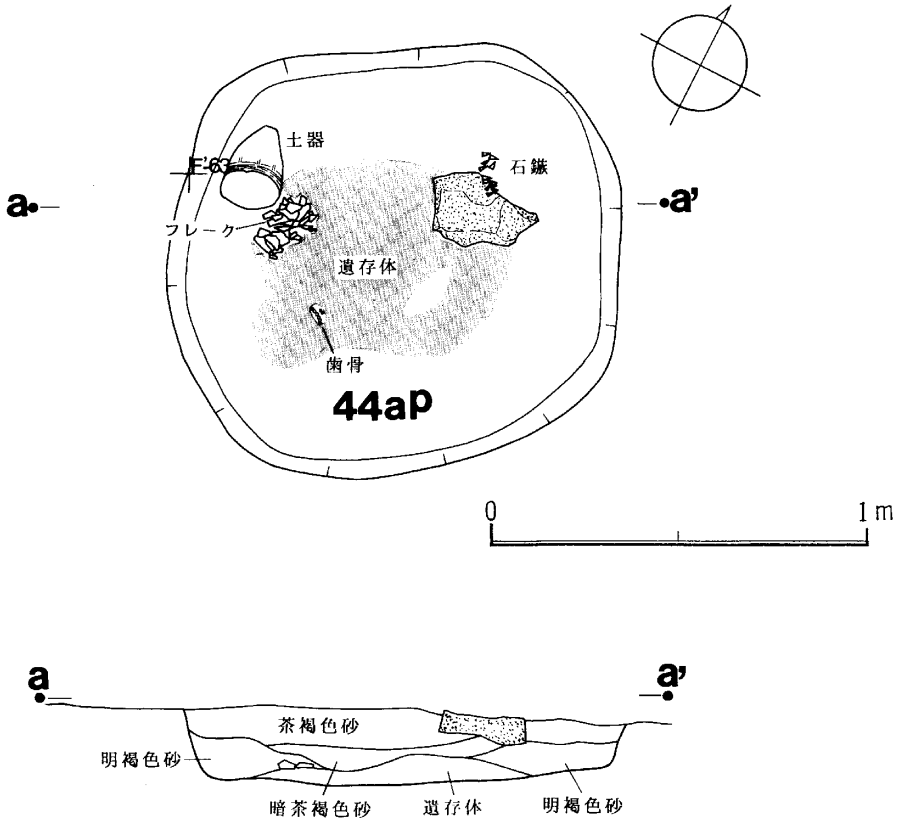
第268図 ピット41埋土(1)、ピット42埋土(2~6)、ピット43床面(7~10)・埋土(11)出土土器



第269図 ピット40埋土(1・2)、ピット43埋土(3~7)、ピット44埋土(8)、ピット44a埋土(9~32)出土石器

遺物 (第272図)

ピット45からは第272図-2、3が埋土から出土している。2は浅鉢。3は無文土器でいずれも縄文晩期中葉と思われる。



第270図 ピット44 a 平面図

ピ ッ ト 46

遺 構 (第242図、図版78-1)

本ピットは14号竪穴石囲み炉の南側にある。ピット24の東壁上部とわずかに重複する。規模は直径約1.30mの円形を呈する。壁は14号竪穴の床面から約28cmを測る。ピットのほぼ中央部に粘性を有した黄褐色の遺存体がある。土器は南壁際から横倒しの状態で出土した。床面の約10cm上から出土した。ナイフ等の石器は遺体の上部近くにある。石鏃は先端部を西側に向け西壁近くにあり、管玉は南際から出土している。

遺 物 (第271図、第272図-4、図版78-2～13)

第272図-4は口縁部に1個の注口があり、反対側に2個の片口がつけられる。注口と片口の間の小突起上部に細長い刺突がある。文様は菱形の微隆起線とそれを結ぶ横走の微隆起線で構成されるが、片口の下面のみ四角形の微隆起線になる。菱形微隆起線、注口部には刺突が施される。土器の内部から白色粘土が検出された。

石器は第271図-1～11がある。1は床面から出土した両面加工ナイフで他は埋土出土。2～8は無茎石鏃。9は両面加工ナイフ。10は削器。11は石皿。割られた3点が接合した。11の砂岩を除きすべて黒曜石製である。他に図示していないが管玉が4点出土している。

小 括

本ピットは続縄文後北C₁式の土壌墓である。

ピ ッ ト 46 a

遺 構 (第242図)

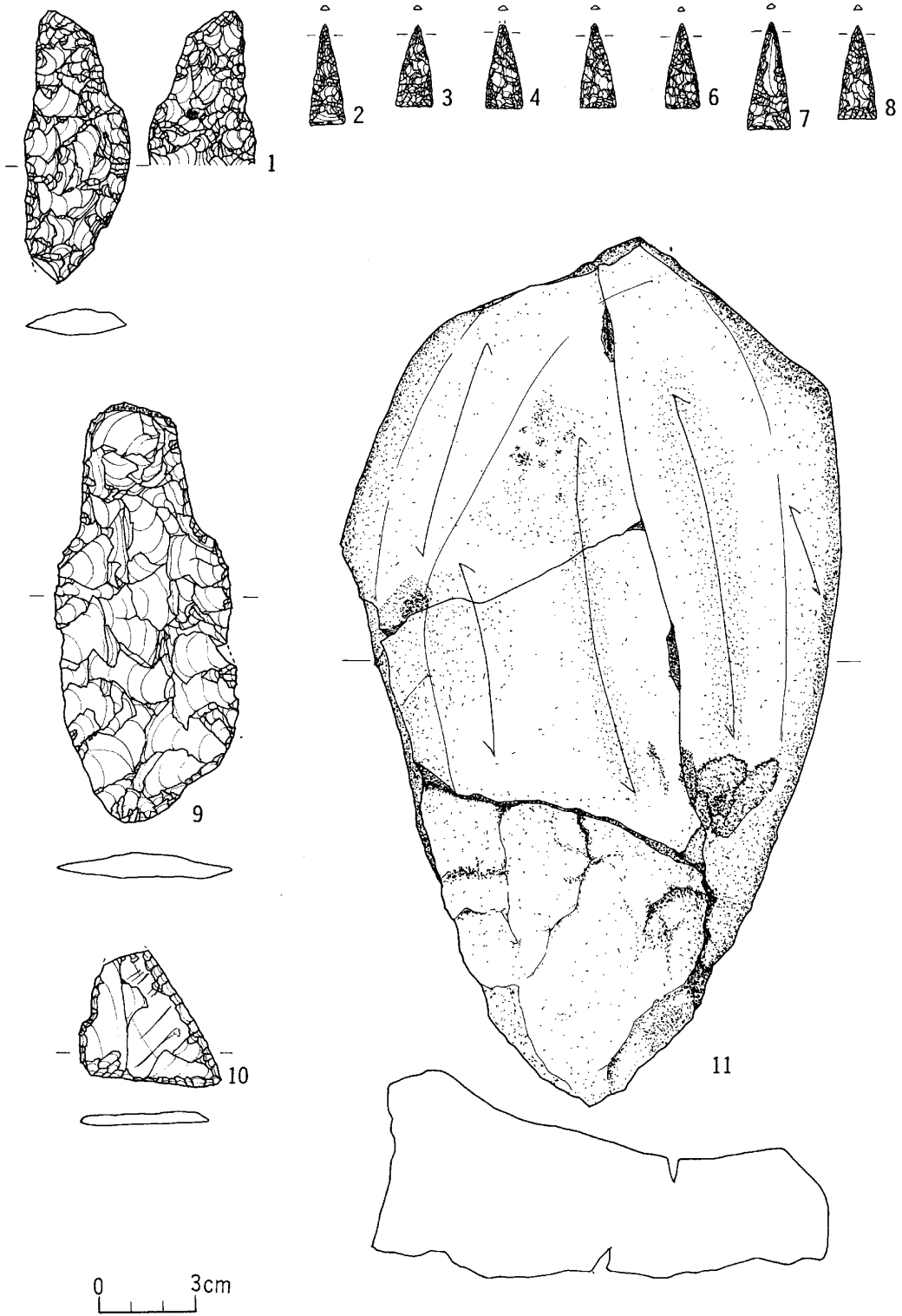
本ピットはピット46に西側を切られているため正確な形態規模は不明であるが、残存部から判断すると長軸1.12m、短軸0.98mの方形を呈すると思われる。壁高は14号壁穴の床面から約34cmを測る。床面のほぼ全域に黄褐色を呈した粘性のある遺存体が認められた。

遺 物 (第272図-5、図版78-13)

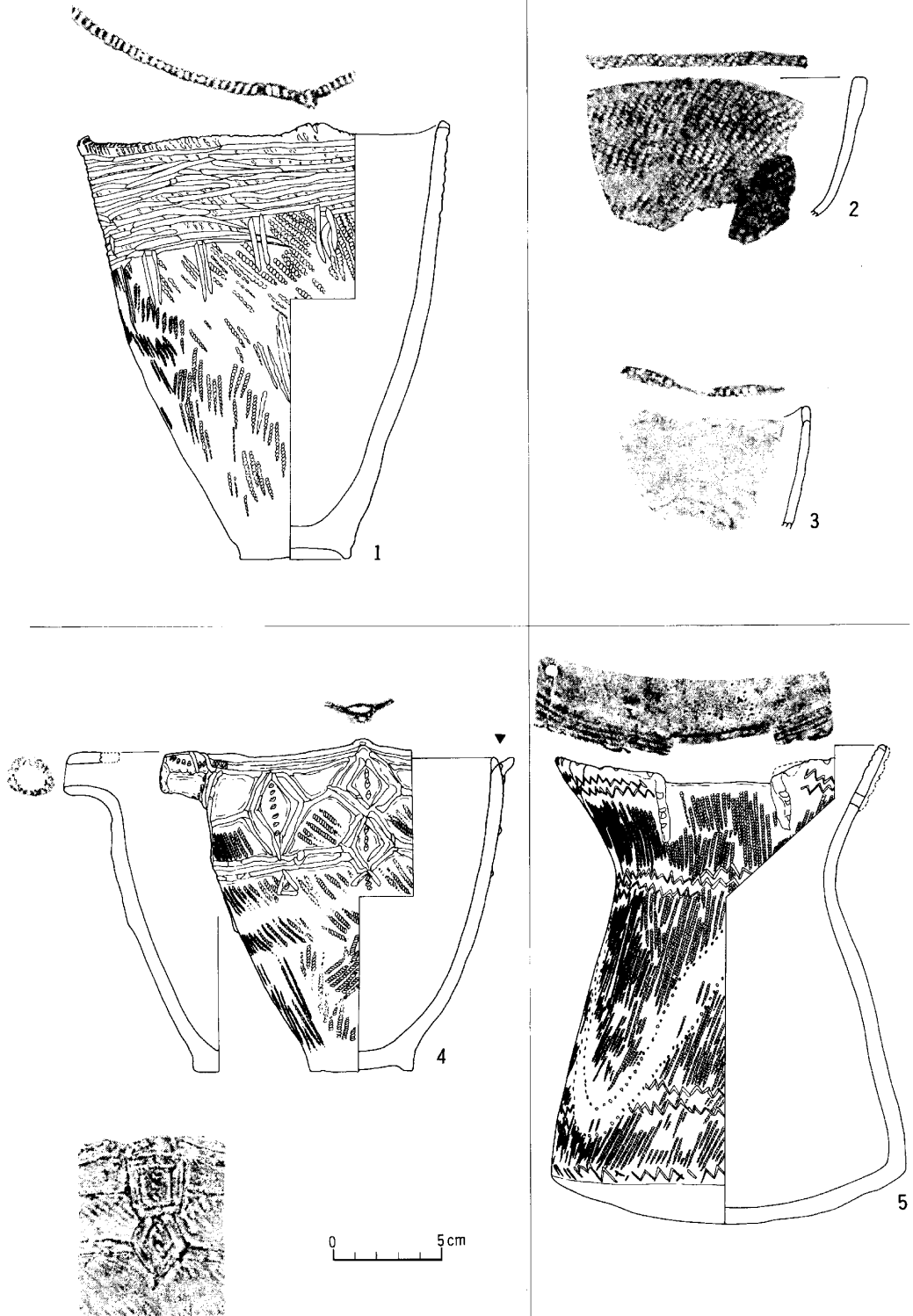
この土器は依存体の上部から正立の状態で出土した。頸部は縮約し、口縁部にかけて大きく外反した瓜実形を呈する。口縁部には垂下した2本の隆帯で仕切られた凸部があり、その中央部に幅3～4mmの小孔がある。口縁下部、頸部、底部には山形沈線が連結しており、胴部には幅1cmの磨消しが波状に行なわれており、それを強調するためか刺突を施している。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。形態は方形を呈すると思われる。



第271図 ピット46床面(1)・埋土(2~11)出土石器



第272図 ピット44 a 床面(1)、ピット45埋土(2・3)、ピット46埋土(4)、ピット46 a 床面(5)出土土器

ピ ッ ト 47

遺 構 (第242図、図版79-1)

本ピットは14号竪穴の西壁際にある。規模は直径約0.8mの不整形を呈する。壁高は14号竪穴の床面から約45cmを測る。遺存体の痕跡は認められないが土壌墓と思われる。2点の土器はピットの中央からやや東側寄りの位置から出土した。玉は北壁付近から3点出土した。

遺 物 (第273図、第267-1～3、図版79-2～6)

第273図-1は浅鉢である。口縁部の一端が台状に高くなり中央部には欠失しているが大突起をもち内側は渦巻き状の縄線文がある。この大突起の下部に径3mmの孔があげられている。端部の小突起から貼付帯が垂下し口縁下部は縄線文が施される。2は椀である。口縁の一端に1個の小突起をもちその下部に径約3mmの孔がある。口縁部には刻みが巡る。3は浅鉢。約3分の1程度が出土した。口縁部の一端が台状になりその口唇部には部分的に縄線文、円形刺突文、刻みが施される。

石器は第276図-1～3の装飾品が出土している。1、3は両側から穿孔している。3点ともメノウ製。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。形態は直径約0.8mの不整形を呈する。頭位は不明である。

ピ ッ ト 48

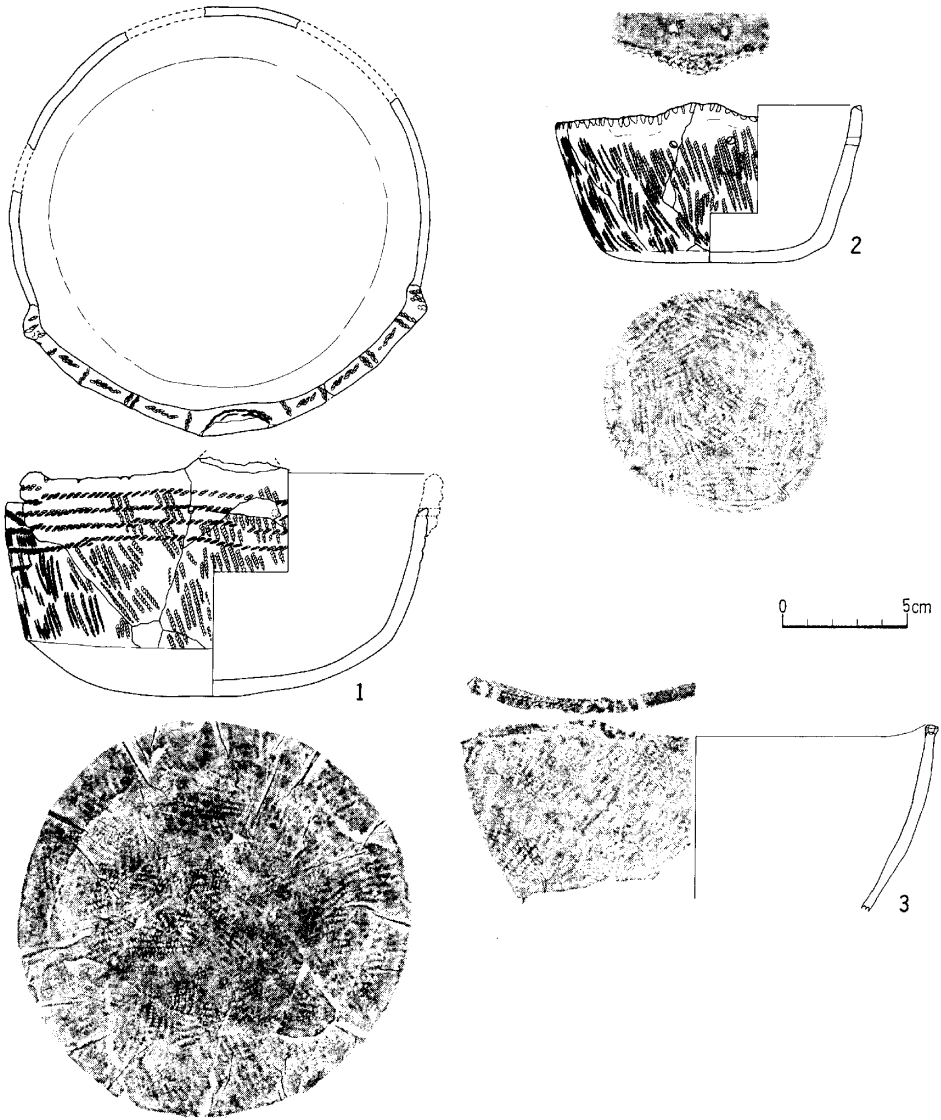
遺 構 (第274図、図版79-7)

本ピットは14号竪穴の東壁際の床面にある。規模は長軸約1.05m、短軸約0.80mである。形態は南側がやや丸みを呈した不整形を呈する。壁高は14号竪穴の床面から約22cmを測る。埋土は2層に分層され3点の土器は上層の暗褐色砂層から出土している。遺存体の痕跡は認められない。北壁の小ピットは14号竪穴の柱穴である。

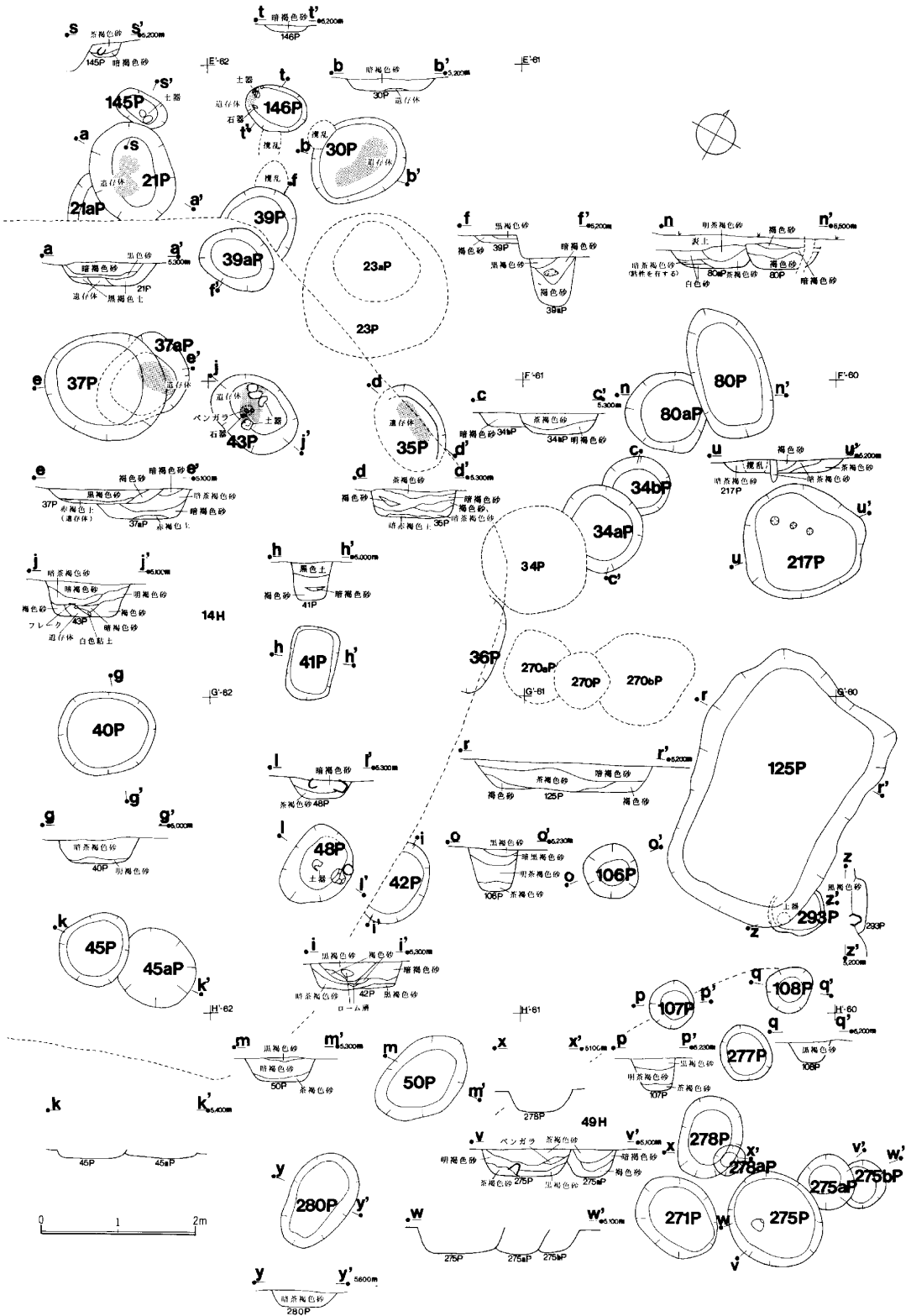
遺 物 (第275図、第276図-4～10、図版79-8～10)

第275図-1は東壁上部から横倒しの状態で出土した。完形土器であるが土圧の影響により変形し接合できない個所がある。器形は文様帯のある部分から内湾した深鉢である。胴中央とは連続する山形沈線で区画される。口縁部に4個の小突起がありそのうち2個からは貼付帯が垂下する。文様は方形の沈線、数本の短刻線とそれを仕切る縦の沈線、山形文が交互に施される。

2は口縁部に台状の凸部をもちほぼ中央に2個の孔をもつ。胴部は縄文を地文とするが、口縁下約2cmのところから外反する特徴をもつ。



第273図 ピット47床面(1・2)・埋土(3)出土土器



第274図 14号竖穴北・東側周辺のピット群平面図

3は口縁部に4個の小突起をもつが2個は欠失する。口縁下に5～6条の横走沈線がありその上から山形沈線、短沈線が施される。口縁下には幅約3～4mmの小孔があるが貫通していない。4～6は幣舞式である。

石器は第276図-4～10が埋土から出土している。これらは黒曜石製の搔器であり、4～6は肉厚の刃部をもつ。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。形態は直径約1.05m、短軸0.8mの不整形を呈する。頭位は不明である。

ピ ッ ト 49

遺 構 (第45図)

本ピットは15号竪穴のほぼ中央部にある。規模は長軸約1.45m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は15号竪穴の床面から約25cmを測る。底面は丸みを呈する。近接する他のピット同様に15号竪穴の貼り床をごく一部であるが切り込んでいる。遺物は出土していないが擦文期の土壌墓と思われる。

ピ ッ ト 50

遺 構 (第274図)

本ピットはI'61グリットに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。床面を覆う茶褐色砂の上面にはベンガラも散布されており、土壌墓と思われる。壁高は確認面から約30cmを測る。

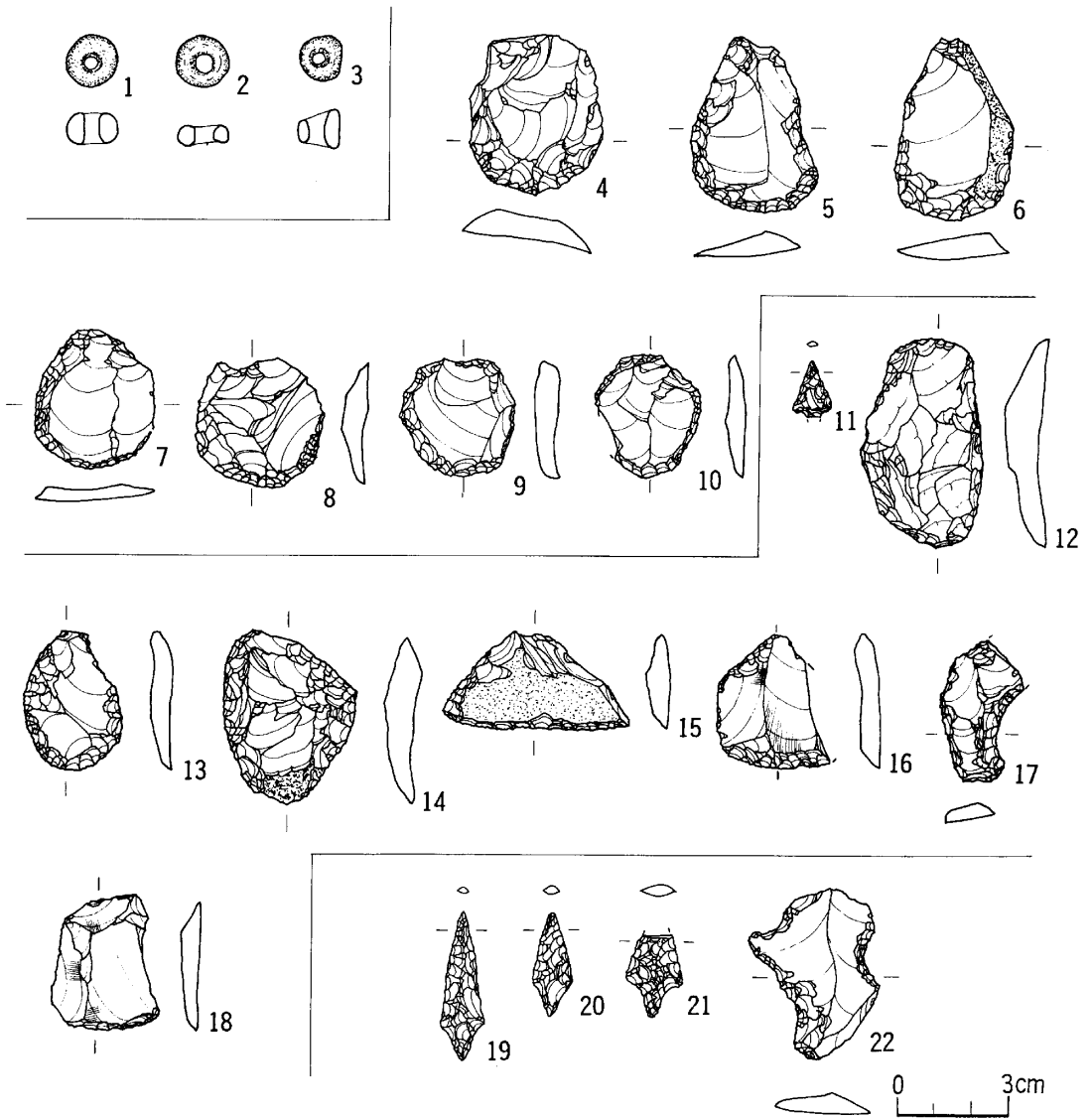
遺 物 (第276図-11～18、第277図-1～9)

すべて埋土出土である。1は続縄文前葉。2、3は縄線文を主体とし口縁部に刻みのある縄文晩期幣舞式。4～6は縄文晩期中葉、7、8は同前葉と思われるもので4は縄端圧痕文と盛り上がりのない爪形文が施される。5は曲線的な浅い沈線、6は円形刺突、7、8は内側から斜めに刺突される。9は縄文後期堂林式。

石器は第276図-11～18がある。11は有茎石鏃。12～14は搔器。15～18は削器。12は頁岩製であり他はすべて黒曜石製である。



第275図 ピット48埋土(1~6)出土土器



第276図 ピット47床面出土石製品(1~3)、ピット48埋土(4~10)、ピット50埋土(11~18)、ピット51n埋土(19~22)出土石器

ピット51・51a

遺構 (第294図)

ピット51は15号竪穴の北壁側にある。大半が15号竪穴に切られているため検出できたのは北壁のごく一部である。したがって全体の規模、形態は全く不明である。深さは確認面から約38cmを測る浅い皿状を呈する。

ピット51aはピット51に切られている。規模は長軸約1.05m、短軸約0.67mの楕円形を呈する。底面は狭く、壁は緩く立ち上がる。高さは確認面から約55cmを測る。

遺物 (第277図)

ピット51からは第277図-10～14が埋土から出土している。10、11は続縄文期のもので10は宇津内II b式。12は頸部の上下に細い沈線を施す。13は隆帯を半円形に貼付けて縄線を捺押し、12に見られる細い沈線を直線的に施す。12、13の胎土は類似している。続縄文前葉であろう。14は縄文晩期。

ピット51aからは第277図-15～17が埋土から出土している。3点とも縄文晩期である。

ピット51b・51c

遺構 (第294図)

ピット51bはピット51aの西側にある。西壁のごく一部を検出した。正確な規模は不明であるが柱穴状のピットと思われる。高さは確認面から約25cmを測る。

ピット51cはピット51aの北側にある。北壁のごく一部を検出した。正確な規模は不明であるが柱穴状のピットと思われる。高さは確認面から約20cmを測る。

遺物 (第277図)

ピット51bからは第277図-18、19の2点が埋土から出土している。18は後北C₂式。19は縄文晩期である。ピット51cから遺物は出土していない。

ピット51d・51e

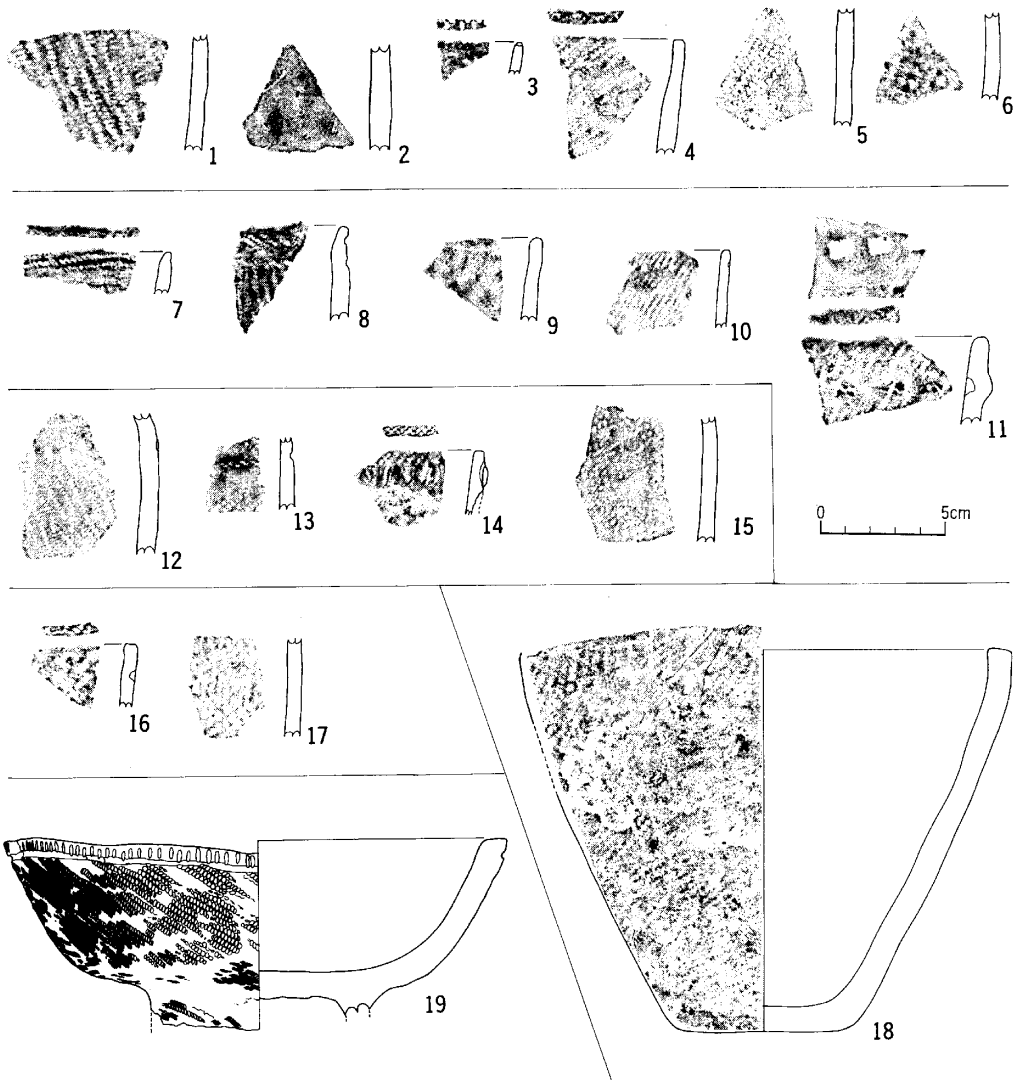
遺構 (第294図)

ピット51dはピット51aの西側にある。北壁をピット51a、51bに切られているものの規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約17cmを測る。

ピット51eは東壁を15号竪穴、北壁をピット51dに切られている。長軸は不明であるが短軸約0.7mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約23cmを測る。



第277図 ピット50埋土(1~9)、ピット51埋土(10~14)、ピット51 a埋土(15~17)、ピット51 b埋土(18・19)、ピット51 f埋土(20~23)出土土器



第278図 ピット51 h 埋土(1~6)、ピット51 i 埋土(7~11)、ピット51 k 埋土(12~15)、ピット51 m 埋土(16・17)、
ピット52床面(18)、ピット53床面(19)出土土器

両ピットの時期は不明である。

ピット51f・51g

遺 構 (第294図)

ピット51fはピット51a、51cの北側にある。東壁の一部は攪乱を受けているものの長軸約1.23m、短軸約0.9mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約45cmを測る。

ピット51gは大半が15号堅穴に切られているため規模、形態は不明である。壁高は確認面から約30cmを測る。両ピットの時期は不明である。

遺 物 (第277図-20~23)

20は内側に斜め方向から刺突が施された縄文晩期前葉。21、22は同中は。23は続縄文の底部。

ピット51h・51i

遺 構 (第294図)

ピット51hはピット51gに東壁を切られ、北壁は攪乱を受けている。残存する部分から判断すると直径約0.6mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約15cmを測る。

ピット51iはピット51hの西側にある。規模は直径約0.9mの円形を呈する。壁高は確認面から約28cmを測る。

遺 物 (第278-1~11図)

ピット51hは第278図-1~6が埋土出土である。1は続縄文、2~6は縄文晩期。

ピット51iは第278図-7~11が埋土出土である。7は続縄文後北C₂式。8は同前葉。9、10は縄文晩期中葉と思われるもので10は円形刺突が施される。11は同前葉であろう。

ピット51j・51k

遺 構 (第294図)

ピット51jはピット51iと51hの中間にあり壁をこの両ピットにより切られている。規模は短軸約0.55mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約10cmを測る。

ピット51kは各壁をピット51f、51g、51jに切られかろうじて北壁の一部と底面が残存する。壁高は確認面から約13cmを測る。

遺 物 (第278図-12~15)

ピット51kからは埋土より第278図-12~15が出土している。12は続縄文文字津内式。13は縄文晩期中葉、14は盛り上がりのある爪形文で同前葉であろう。15は晩期の胴部片。

ピット51l・51m

遺 構 (第294図)

ピット51lはピット51iにより大半が切られている。かろうじて西壁が残存する程度である。底面まで削られているため正確な高さは不明であるが推定約20cmであろう。

ピット51mも大半がピット51f、51lに切られているため北壁側が残る程度である。深さは約25cmを測る。

遺 物 (第278図-16・17)

ピット51mからは埋土より第278図-16、17が出土している。2点とも縄文晩期のもので16は刺突文が施された中葉のものであろう。

ピット51n

遺 構 (第294図)

本ピットは東壁の一部をピット51mに切られているものの形態は明らかにすることができた。規模は長軸約1.15m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約22cmを測る。

遺 物 (第276図-19～22図)

埋土から第276図-19～22の石器が出土している。19～21は有茎石鏃。22は両側の刃部がノッチ状を呈する。4点とも黒曜石製。

ピット 52

遺 構 (第282図、図版80-1)

本ピットは16号竪穴の床面精査中に土器の底部が現れ茶褐色砂の落ち込みを発見した。位置は東壁側の床面にある。規模は直径約0.6mの円形を呈し、壁高は16号竪穴の床面から約18cmを測る。

遺 物 (第278図-18、図版80-2)

この土器は倒立の状態出土した。口径20cm、器高15.4cmの縄文後期鯨潤式である。

ピット 53

遺 構 (第282図、図版80-3)

本ピットは16号竪穴の床面精査中に土器の口縁部が現れ茶褐色砂の落ち込みを発見した。位

置は石囲み炉の南側の床面にある。規模は直径約0.6mの円形を呈し、壁高は16号竪穴の床面から約10cmを測る。

遺 物 (第278図-19、図版80-4)

この土器は正立の状態出土した。台つきの浅鉢である。口縁直下の刻みは横走沈線で区画される。縄文後期籬潤式。

ピ ッ ト 54

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の東側の床面にある。規模は長軸約1.6m、短軸0.95mの楕円形を呈し、壁高は16号竪穴の床面から約18cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 55

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の北側の床面にある。規模は直径約1.0mの円形を呈し、壁高は16号竪穴の床面から約13cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 56

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の北側の床面にある。規模は長軸約1.8m、短軸約1.4mの楕円形を呈し、壁高は16号竪穴の床面から約11cmを測る。

遺 物 (第279図-1～5)

第279図-1～5は埋土出土である。1は縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。2は同期の底部。3～5は縄文前期末葉の押型文。内側に矢羽根状の押型文が施される。

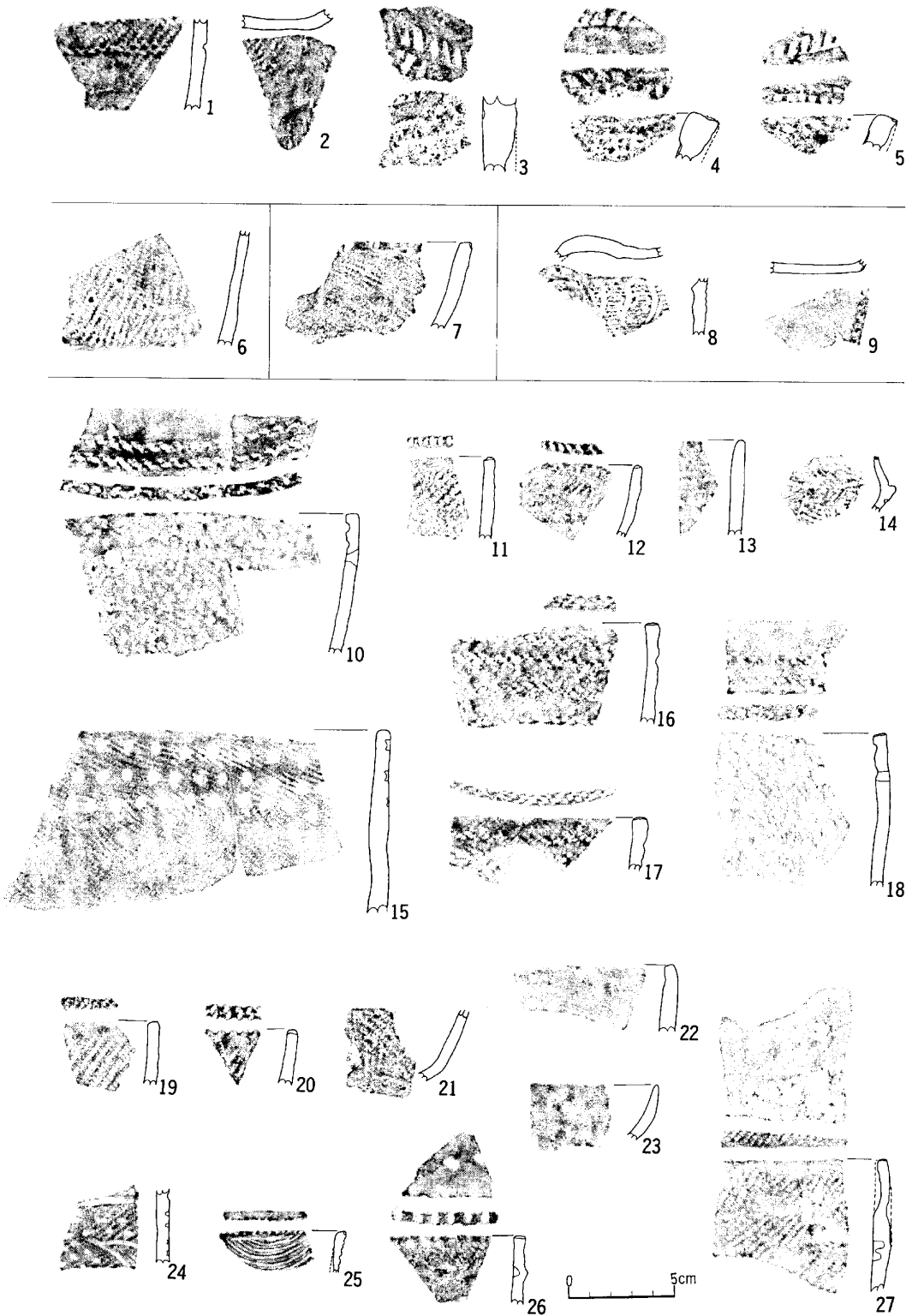
ピ ッ ト 57

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の北東壁隅にある。規模は長軸約1.10m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は16号竪穴の床面から約23cmを測る。

遺 物 (第279図-6)

この土器は埋土から出土した。縄文晩期である。



第279図 ビット56埋土(1~5)、ビット57埋土(6)、ビット59埋土(7)、ビット60埋土(8・9)、ビット61床面(10~14)・埋土(15~27)出土土器

ピ ッ ト 58

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の南壁側にある。規模は長軸約0.85m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。壁高は16号竪穴の床面から約23cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 59

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の南壁側にある。規模は直径約0.6mの円形を呈する。壁高は16号竪穴の床面から約10cmを測る。

遺 物 (第279図-7)

埋土から出土した。口唇部の外側に刻みのある縄文晩期幣舞式。

ピ ッ ト 60

遺 構 (第282図)

本ピットは16号竪穴の南壁側にある。規模は直径約0.73mの不整楕円形を呈する。壁高は16号竪穴の床面から約58cmを測る。

遺 物 (第279図-8・9)

埋土から出土した。8は縄文晩期幣舞式の異形土器。9は同期の底部。

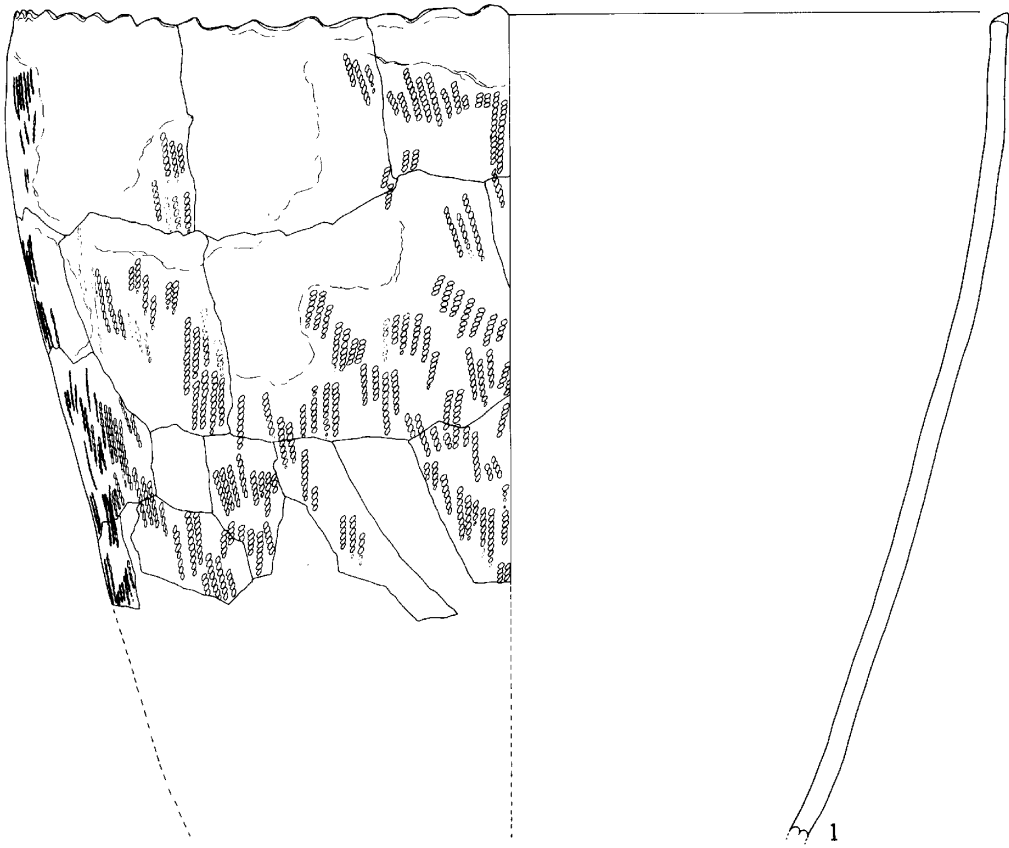
ピ ッ ト 61

遺 構 (第283図)

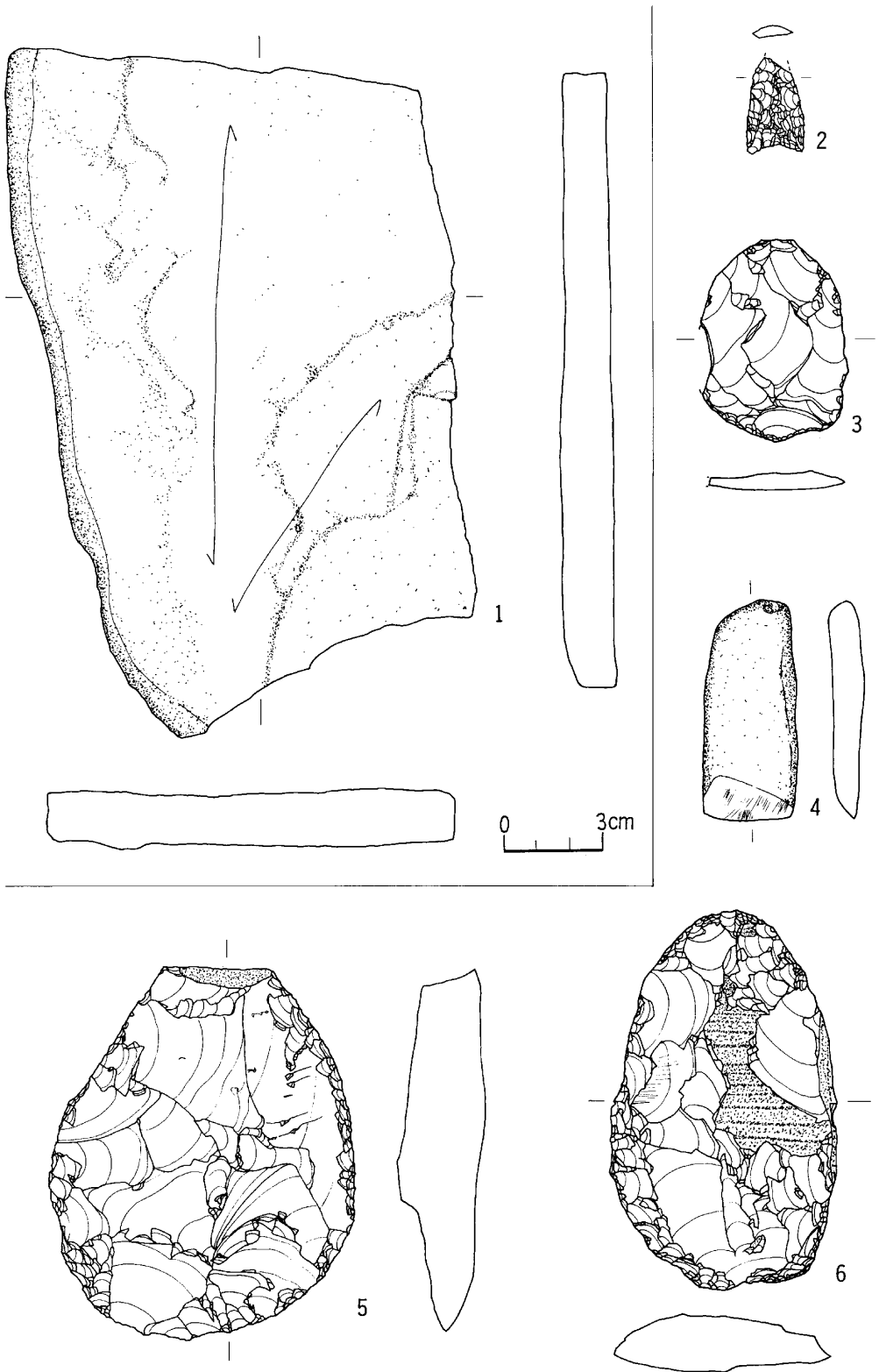
本ピットは17号竪穴の床面精査中に発見した。規模は直径約1.21m不整の円形を呈し、深さは約13cmである。

遺 物 (第279図-10~27、第280図-1、第281図-1)

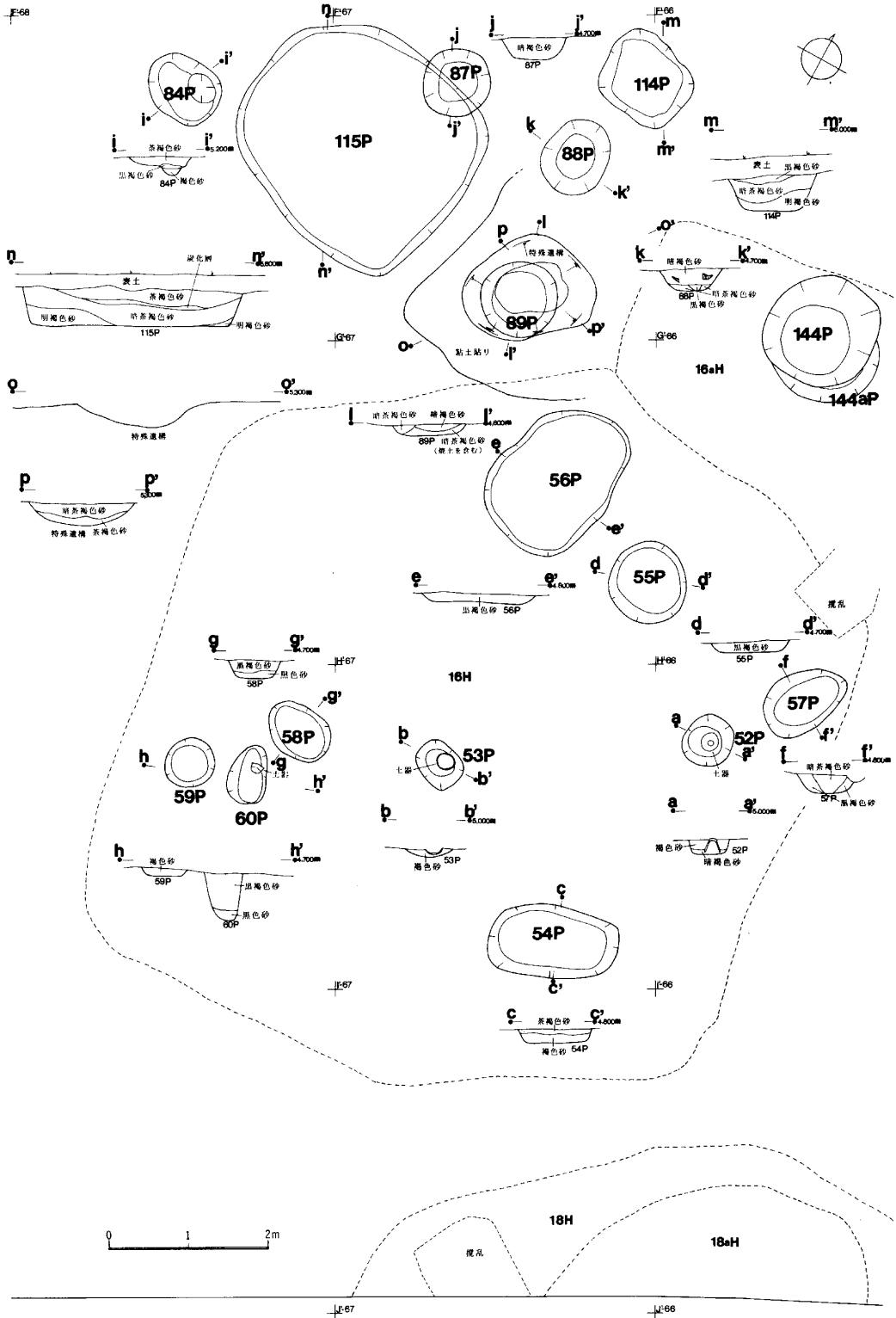
第279図-10~14は床面出土。10の器面は複節縄文で裏面に縄線文が施される。11~13はは縄文が施される。14は胴部の張出し部に縄線文、下部に縄端圧痕文が施されたミニチュア土器。焼成は良い。15~27は埋土出土。15は3段の円形刺突文、16、17は縄線文が施される。18は10と同一個体。19~21は縄文。22、23は無文。24は刺突文の上に直線、曲線の沈線を施す。25は細い数条の沈線を弧状に施す。26、27は内側斜めからの突瘤文。10~25は縄文晩期中葉、26、



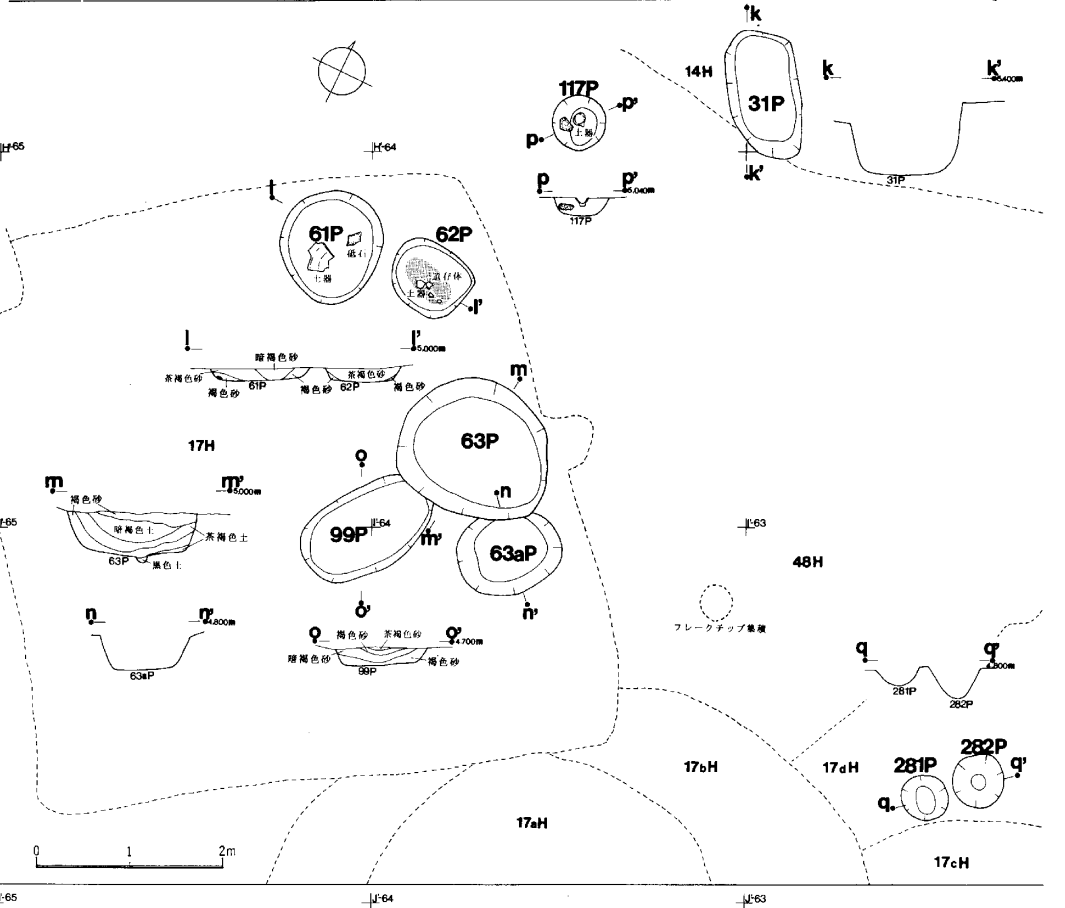
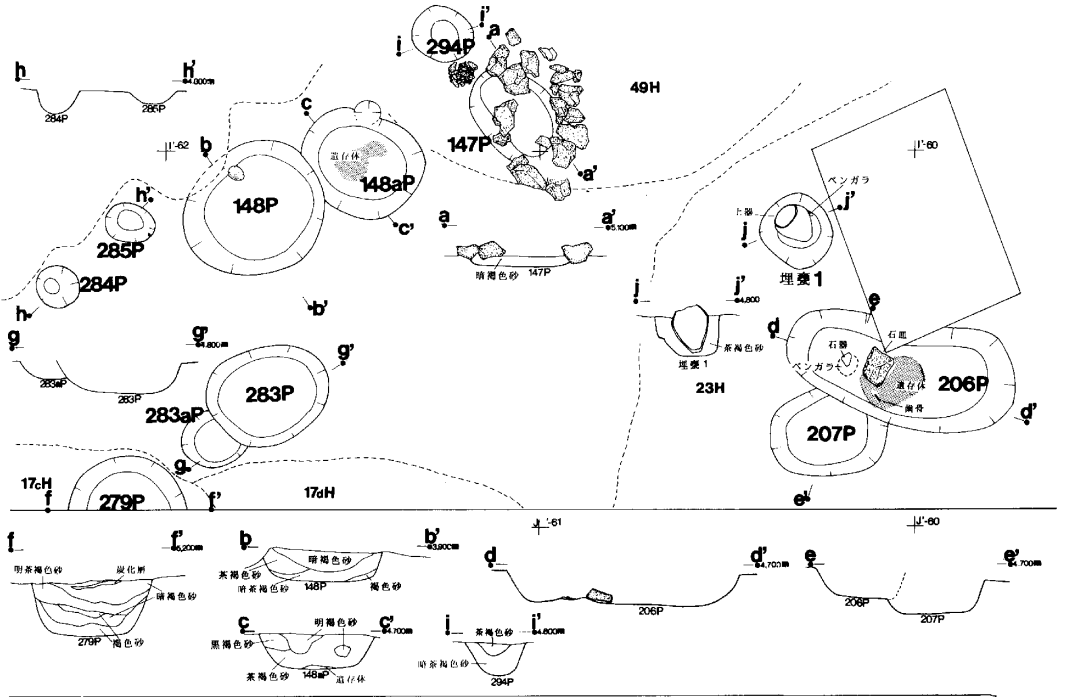
第280図 ピット61埋土(1)、ピット62埋土(2~7)出土土器



第281図 ピット61床面(1)、ピット62埋土(2~6)出土石器



第282図 16号竖穴周辺のピット平面図



第283図 17号竪穴周辺のピット群平面図

27は同期前葉であろう。第280図-1はピットの上部から出土した口径40cmの大型深鉢である。口縁部は内湾せず口唇部は小波状を呈する。器面は縦走縄文を地文とする。土器の一部はピット110aと接合した。時期は続縄文前葉であろう。

第281図-1は石皿。偏平な砂岩質を用いたもので、表面は軽く研磨されている。

小 括

時期は床面出土遺物から縄文晩期中葉と思われる。

ピ ッ ト 62

遺 構 (第283図)

本ピットは17号竪穴の北壁隅にある。規模は長軸約0.85m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約14cmを測る。中央部に粘性を有した黄褐色土の遺存体がある。遺存体の南壁側にはベンガラと混じって第281図-2～6の石器が出土した。

遺 物 (第280図-2～7、第281図-2～6)

土器は第280図-2～7が埋土から出土した縄文晩期の細片である。

石器は第281図-2～6が遺存体の上部から出土。2は無茎石鏃。3は削器。4は磨製石斧。刃部は片刃であり柄部に敲打痕をもつ。緑色泥岩製。5、6は表裏面に大きな剝離が残るものでナイフの未製品。肉厚で実測図上部に原石面がある。4を除き黒曜石製。

ピ ッ ト 63・63a

遺 構 (第283図)

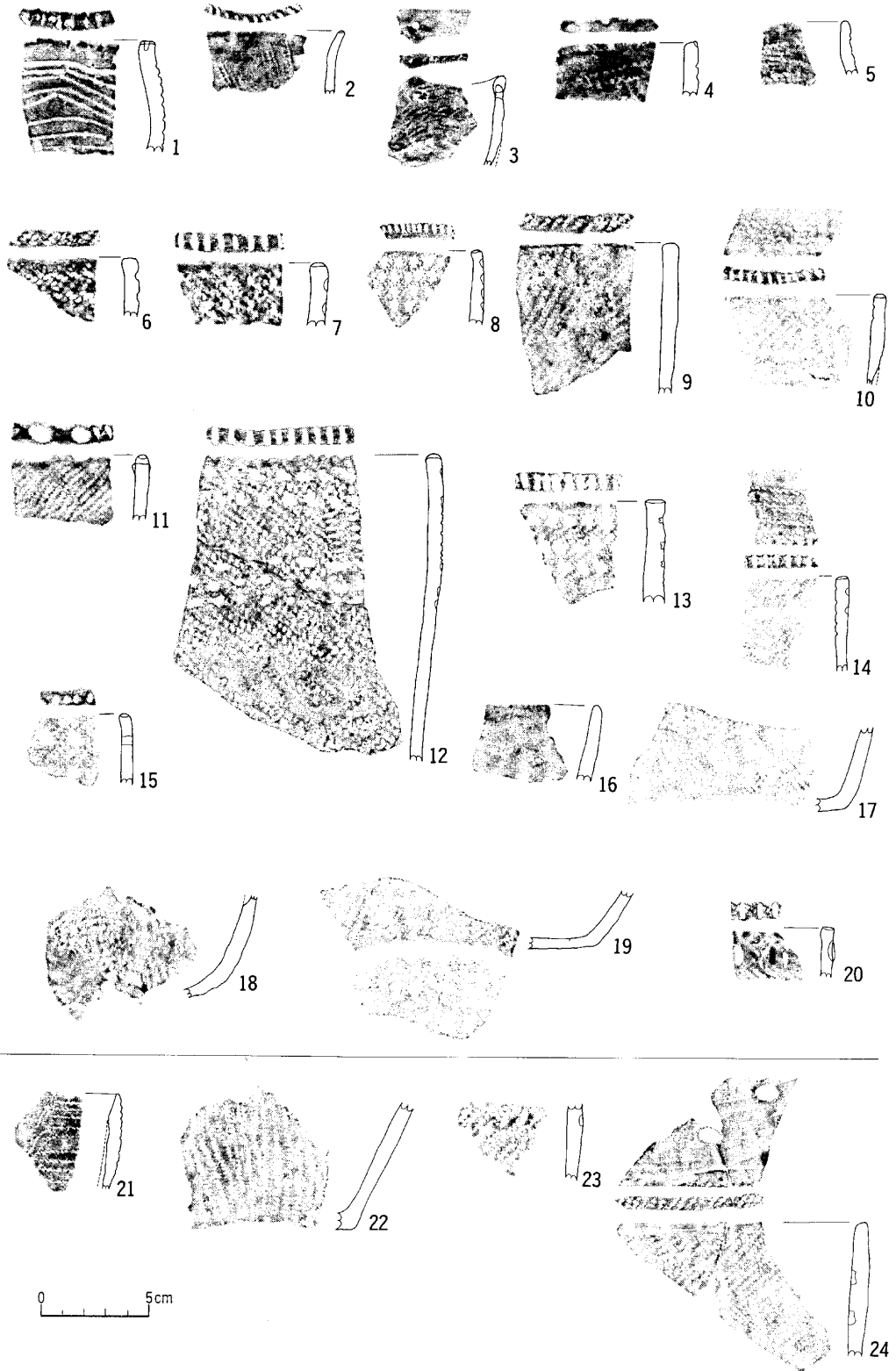
本ピットはピット62の東側約0.65mにある。規模は長軸約1.60m、短軸約1.50mの不整楕円形を呈する。壁高は確認面から約44cmを測る。

ピット63aはピット63に北壁上部を僅かに切られている。規模は長軸約1.15m、短軸約0.9mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約32cmを測る。

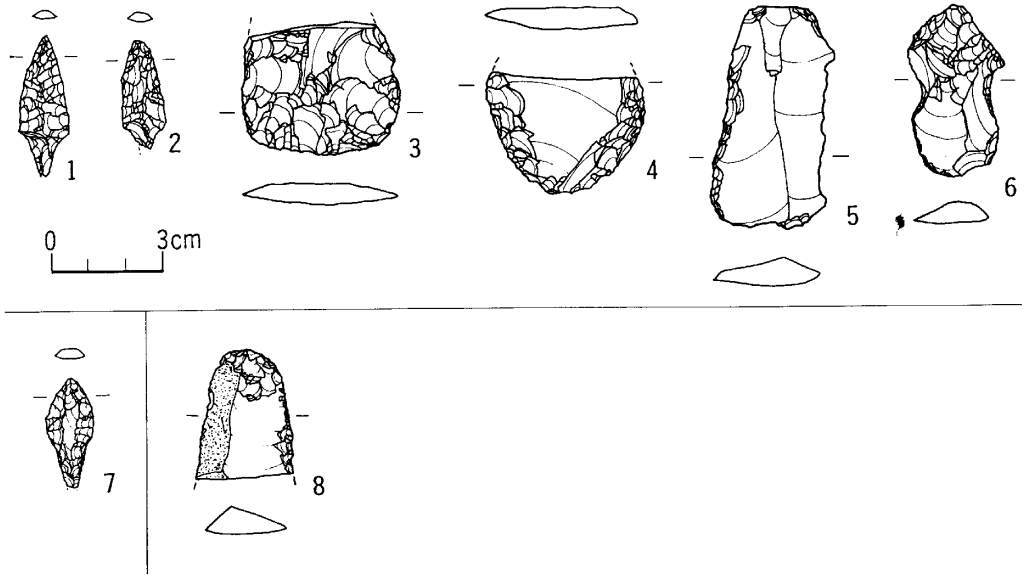
遺 物 (第284図-1～20、第285図-1～6、第284図-21～24)

ピット63はすべて埋土出土。1～3は続縄文前葉であろう。1は口縁部が内湾する。口唇部の刻みの間に円形刺突が施される。器面には数本の曲線間に山形の沈線がある。2は口唇部に刻み、3は小突起をもつ。4～6は縄線文が施されるもので4、5は幣舞式。7、8は縄端圧痕文、9～11は縄文、12～15は刺突文が施されるが、12は口縁下に縄端部も押捺される。16は無文。17～19は底部、20は「ハ」字状の盛り上がりのある爪形文。6～16は晩期中葉、20は同前葉であろう。

石器は第285図-1～6がある。1、2は有茎石鏃。3は両面加工ナイフ。4は搔器。5は削



第284図 ピット63埋土(1~20)、ピット63 a埋土(21~24)出土土器



第285図 ピット63埋土(1~6)、ピット64埋土(7)、ピット67埋土(8)出土石器

器。図示していないが主要剥離面側にも刃部がある。6は両側縁にノッチ状の微細な刃部を作出している。すべて黒曜石製。

ピット63aも埋土出土。第284図-21は後北C₂式。22は宇津内式。23は縄文晩期中葉の盛り上がりのみられない爪形状文。

ピ ッ ト 64

遺 構 (第242図)

本ピットは19号壁穴の東壁側の床面にある。一部が攪乱を受けているものの規模は長軸約1.20m、短軸約0.78mの不整楕円形を呈し、壁高は19号壁穴の床面から約13cmを測る。東壁際に骨片がわずかに認められる。

遺 物 (第285図-7、第286図-1~4)

4点とも埋土出土。1は縄文、2は口縁直下に浅い沈線がある、3は刺突文、4は無文。縄文晩期中葉であろう。

第285図-7は基部が細長い有茎石鏃。黒曜石製。

ピ ッ ト 65

遺 構 (第242図)

本ピットは19号壁穴の南東壁側にある。規模は長軸0.8m、短軸0.4mの不整形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。

遺 物 (第286図-5～8)

4点とも埋土出土。5～7は縄文が施され7の内側には縄線文がある。8は無文。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 66

遺 構 (第242図)

本ピットは19号穴の北壁側にある。規模は長軸0.8m、短軸0.6mの不整形を呈する。壁高は確認面から約6cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 67

遺 構 (第242図)

本ピットは19号壁穴のほぼ中央部にある。規模は長軸0.53m、短軸約0.43mの小形の楕円形を呈し、壁高は19号の床面から約10cmを測る。

遺 物 (第285図-8、第286図-9)

第286図-9は埋土出土。口縁部が緩く外反する。器面は幅1～2mmの施文具を用いて横撫でしている。時期は縄文晩期と思われる。

石器は第285図-8の削器が埋土から出土している。

ピ ッ ト 68

遺 構 (第242図)

本ピットは19号壁穴の北壁際にある。規模は直径約0.40mの小円形を呈し、壁高は19号壁穴の床面から約20cmを測る。

遺 物 (第286図-10～13)

4点とも埋土出土。10は3条の縄線文、11は刺突文、12は縄を「∩」字状に押捺する。13は底部。細く、浅い沈線が横走する。10～12は縄文晩期中葉。13は幣舞式かもしれない。

ピット 69

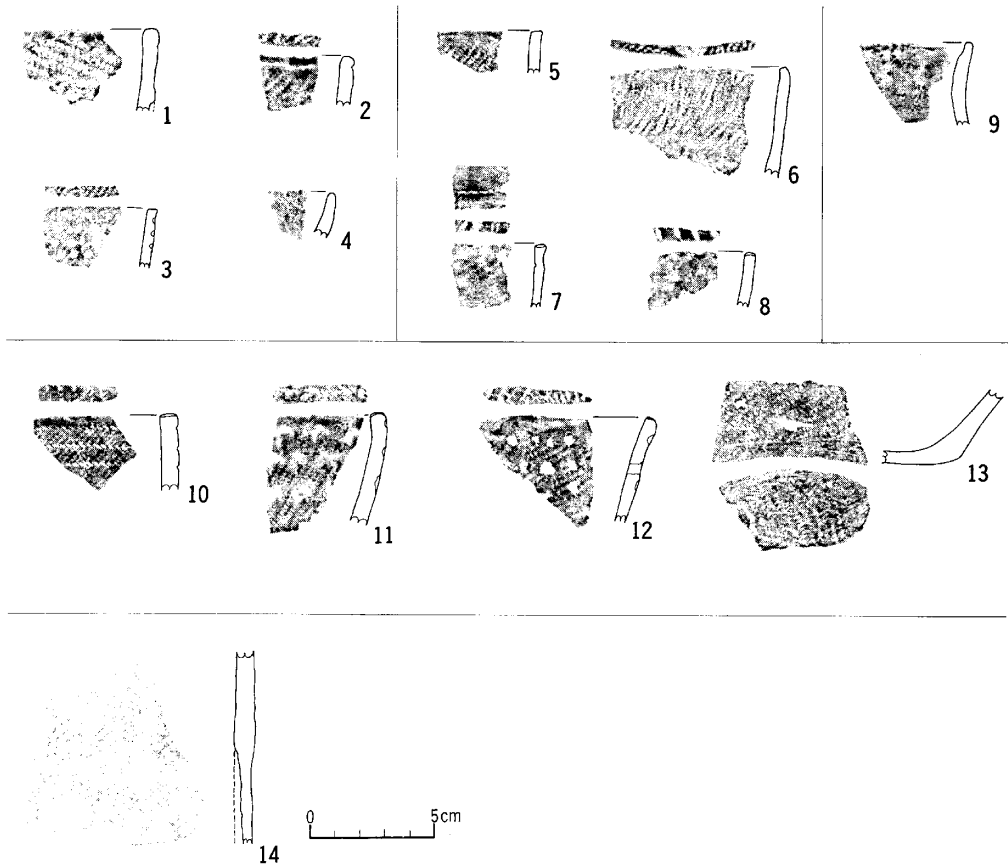
遺構 (第242図)

本ピットはE'63グリッドに位置する。規模は長軸約0.53m、短軸約0.40mの小楕円形を呈する。深さは確認面から約17cmを測る。遺物は出土していない。

ピット 70

遺構 (第294図)

本ピットはC'66グリッドに位置する。南壁の一部を15号竪穴により破壊され、北壁の一部を後世に攪乱されているものの全体の規模を確認することができた。直径約1.20mの円形を呈し、深さは確認面から約15cmである。



第286図 ピット64埋土(1~4)、ピット65埋土(5~8)、ピット67埋土(9)、ピット70埋土(14)出土石器

遺 物 (第286図-14)

第286図-14は埋土から出土した縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 71

遺 構 (第367図)

本ピットはI'57グリッドに位置する。規模は直径約1.8mの円形を呈する。底面から上部にかけて丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から60cmを測る。

遺 物 (第287図、第288図-1～4、第291図-1・2)

第287図-1～6は1層の暗褐色砂層から出土し、他はピット上部の3個所の攪乱から出土している。1は横走沈線が施された続縄文土器。2は細い沈線文の上に縦方向を基調とした太い波状の沈線、刻線を施した幣舞式。3は直線、4は曲線の縄線文を施した緑ヶ岡式。5は右下方からの刺突文、6、7は縄端圧痕文が施される。8は縄文を施した浅鉢。9は本ピットの底面より下層にある縄文中期包含層から出土した。縄文中期北筒Ⅲ式である。第288図-1は薄手の無文土器の口縁下部に3段の刺突を施す。拓本では円形刺突のように表現されているが、刺突の底は2個の細い凹部があり特殊な施文具を使用しているように思われる。2は底部。3は内側から斜めの突瘤が施される。4は第287図-9と同じ層から出土した。口縁部は幅2.5cmの無文帯をなす。縄文前期末葉の押型文に相当すると思われる。

石器は第291図-1の窪み石、2の叩き石が埋土から出土している。

ピ ッ ト 72

遺 構 (第242図)

本ピットは19号壁穴の西側にあるが大半は削られているため正確な規模、形態は不明である。壁高は確認面から約25cmを測る。

遺物は出土していない。

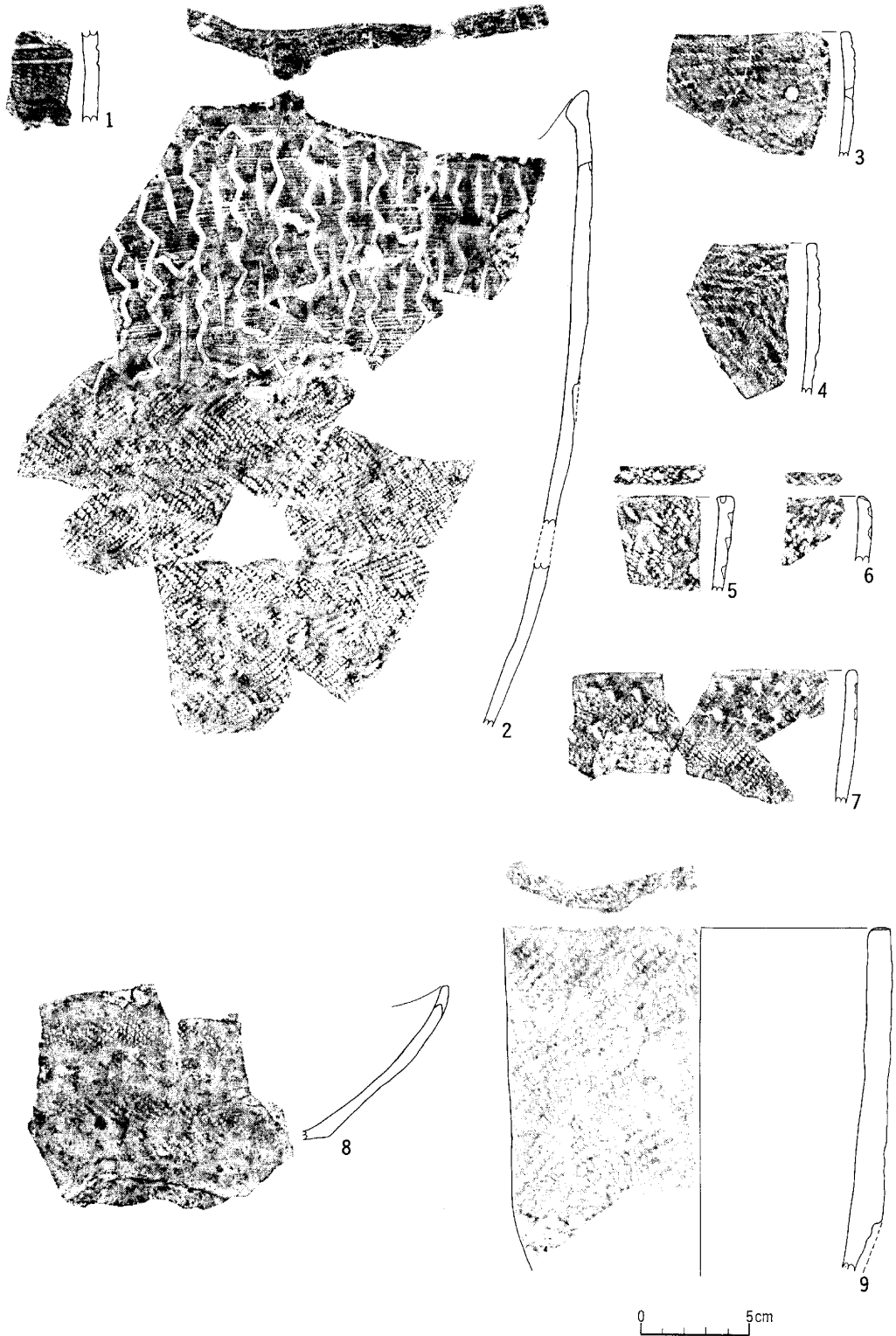
ピ ッ ト 73

遺 構 (第242図)

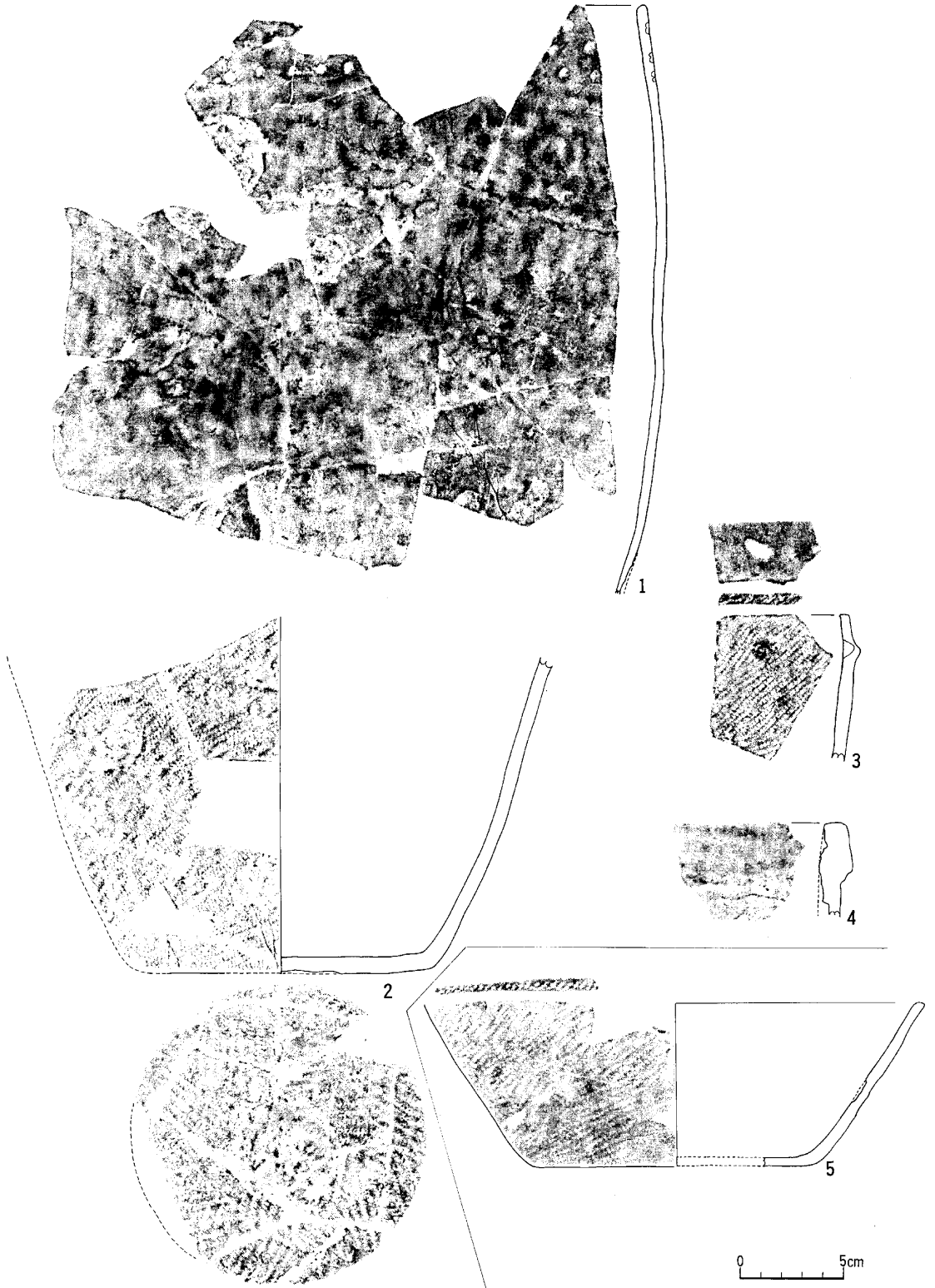
本ピットはF'64グリッドに位置する。規模は直径約50cmの小円形を呈し、壁高は確認面から約40cmを測る。

遺 物 (第288-5図)

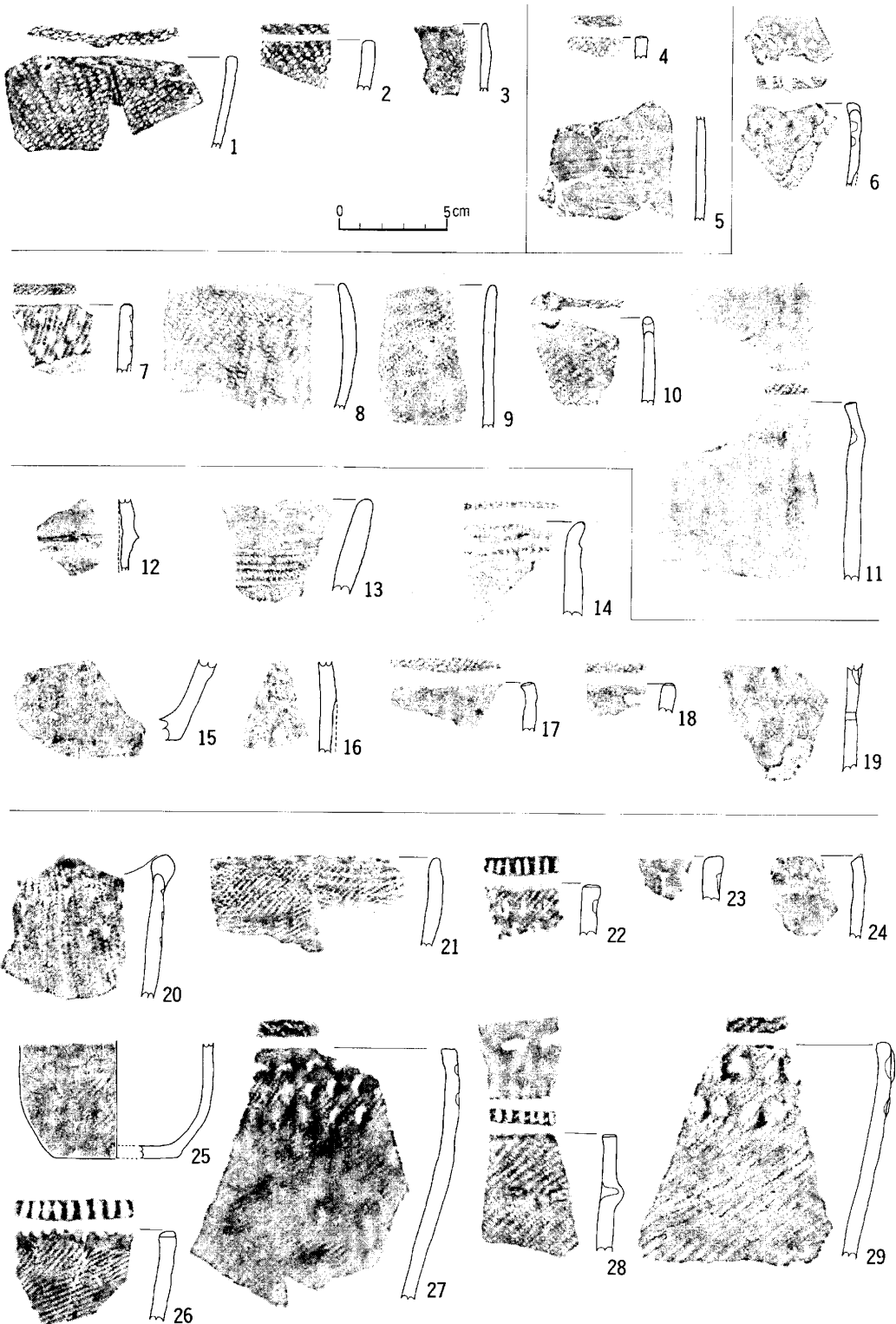
第288図-5は埋土から出土した浅鉢。縄文晩期中葉であろう。



第287図 ピット71埋土(1~9)出土土器



第288図 ピット71埋土(1~4)、ピット73埋土(5)出土土器



第289図 ピット74埋土(1~3)、ピット75 a 埋土(4~5)、ピット75 b 埋土(6~11)、ピット76 a 埋土(12~19)、ピット76 c 埋土(20~29)出土土器

ピ ッ ト 74

遺 構 (第242図)

本ピットはF'64グリッドにあり、ピット73と近接している。規模は直径約50cmの小円形を呈し、壁高は確認面から約20cmを測る。

遺 物 (第289図-1～3)

1～3は埋土出土。3点とも器面に縄文のある縄文晩期中葉と思われる。

ピ ッ ト 75・75a

遺 構 (第294図)

ピット75はD'65グリッドに位置する。規模は直径約0.35mの円形を呈する。深さは確認面から約36cmである。

ピット75aはD'65グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの円形を呈する。深さは確認面から約31cmである。

遺 物 (第289図-4・5、第291図-3・4)

ピット75からは第291図-3が埋土出土。右側縁部に原石面を残す黒曜石製の削器。

ピット75aからは第289図-4、5は埋土出土。4は縄文。5は無文。いずれも縄文晩期中葉であろう。

第291図-4は埋土出土。下端部に原石面を残し、刃部は弧状を呈した黒曜石製の削器。

ピ ッ ト 75b

遺 構 (第294図)

本ピットはD'65グリッドに位置する。規模は長軸約1.35m、短軸0.45mの楕円形を呈する。深さは確認面から約33cmである。

遺 物 (第289図-6～11、第291図-5・6)

埋土出土である。6は無文であるが内側に刺突を雑に施される。7は器面に三角状の刺突が施される。8～10は縄文。11は口縁部が薄くわずかに内湾し、内側から斜めの突瘤がある。

第291図-5、6は埋土出土。5は基部はわずかに挟りが見られる無茎石鏃。先端部が欠失している。6は急斜な刃部をもつ削器。いずれも黒曜石製。

ピ ッ ト 76・76a

遺 構 (第242図)

ピット76はE'64グリッドに位置する。規模は直径約1.1mの円形を呈する。深さは確認面から約29cmである。遺物は出土していない。

ピット76aはピット76の北側40cmに位置する。規模は直径約1.20mの円形を呈する。深さは確認面から約30cmである。

遺 物 (第289図-12~19、第291図-7)

ピット76aはすべて埋土出土。12~14は後北C₂式。15は宇津内II a式。16は器面の一部が剥落しているが縄文がみられる。17は無文であるが、18は刺突がある。19は盛り上がりのある爪形文。

第291図-7は黒曜石製の削器。

ピ ッ ト 76b

遺 構 (第242図)

本ピットはE'64グリッドに位置する。規模は直径約1.15mの円形を呈する。深さは確認面から約59cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 76c

遺 構 (第242図)

本ピットはE'64グリッドに位置する。規模は長軸約1.0mの方形を呈する。深さは確認面から約14cmである。

遺 物 (第289図-20~29、第291図-8・9)

すべて埋土出土。20は口縁部に小突起があり、器面は縦走縄文を地文に下方から半截状施文具による刺突が施される。縄文晩期末葉であろう。21は縄線文、22は縄端圧痕文、23は刺突が施される。24は無文。25、26は縄文。27は口縁部がわずかに内湾し、器面には縄端圧痕文がある。28は内側から斜めの突瘤文がある。29は「ハ」字状を呈した盛り上がりのある爪形文。

第291図-8は埋土出土の有茎石鏃。

ピ ッ ト 77・77a

遺 構 (第294図)

ピット77は12号竪穴により北東壁を切られている。規模は直径約1.45mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり高さは確認面から約50cmを測る。埋土は主に黒褐色系の土砂と暗褐色系の土砂からなる自然堆積である。床面から白色粘土が出土し、他の遺物は埋土の各層から出土する。

ピット77aはピット77に北側を切られ、西側は攪乱により破壊を受けている。正確な規模・形態は不明である。壁高は丸みをもって立ち上がり確認面から約28cmを測る。

遺 物 (第290図-1~12、第291図-10~15)

ピット77はすべて埋土出土。1は宇津内II b式。2は小突起があり口唇部に縄を縦に押しつけている。幣舞式であろう。3の裏面に円形刺突を雑に施す。4は縄線を直線、曲線に描く。5は無文。内面は横撫により調整される。6、7は縄文。8は口縁部に弧線文を施す。9~11は内側から斜めに突瘤が施される。11は無文で焼成は良い。

石器は第291図-10~15がある。10は有茎石鏃。11~15は削器。13~15は原石面を残す。15は玄武岩製で他は黒曜石製。

ピット77aは第290図-12が埋土から出土している。縄文晩期中葉であろう。

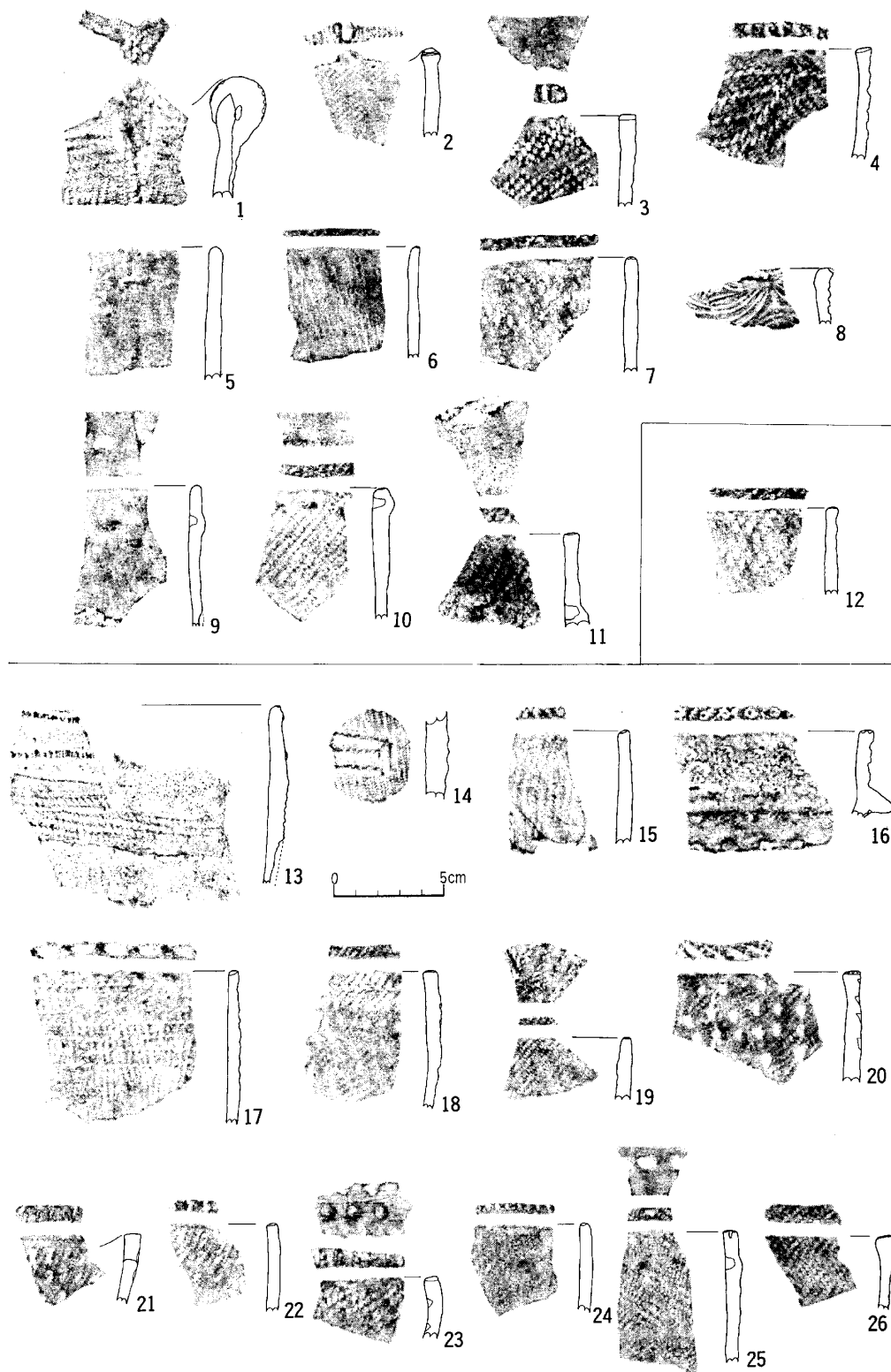
ピ ッ ト 78

遺 構 (第294図)

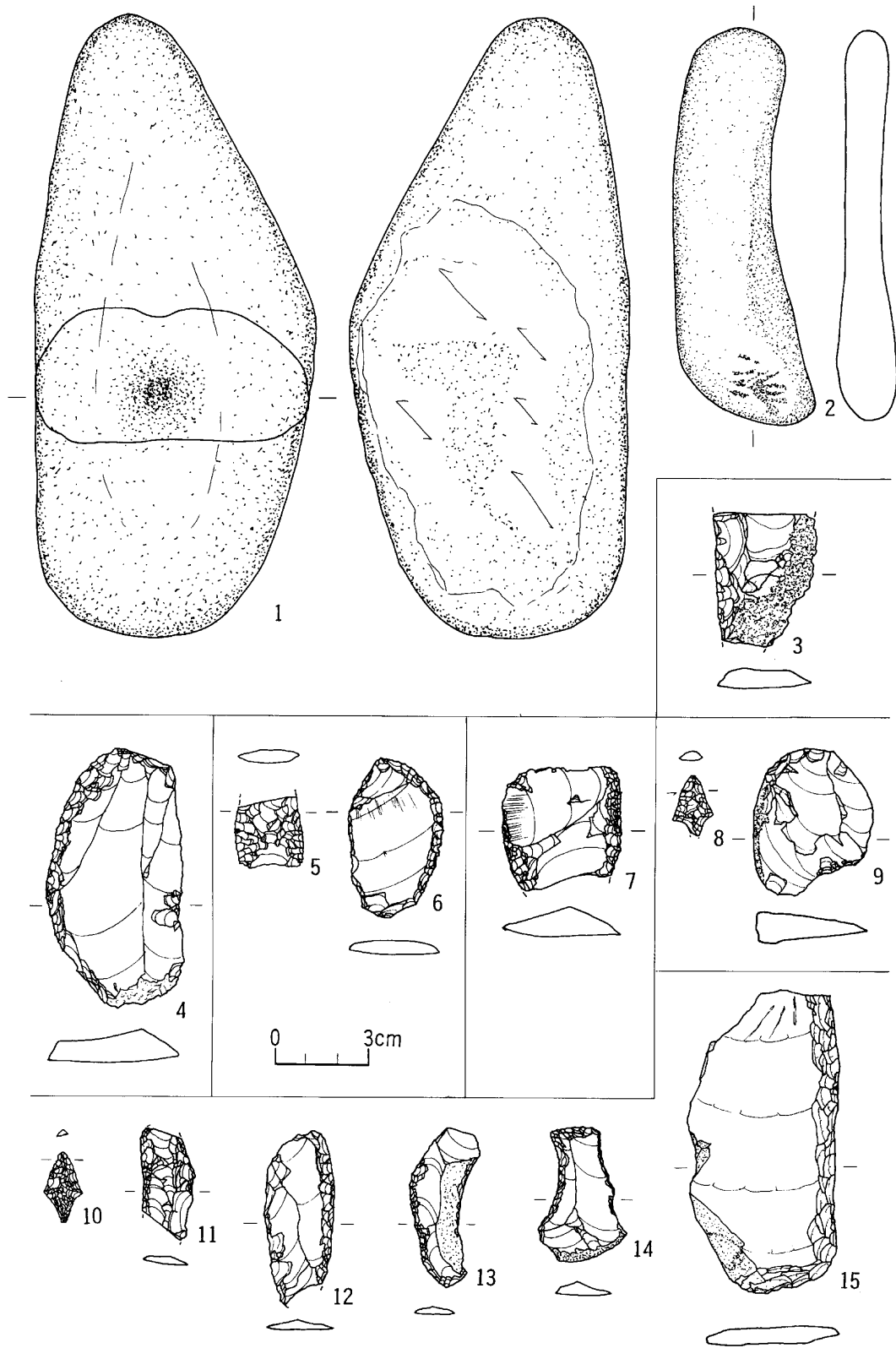
本ピットは12号竪穴により北東壁の一部を削られている。規模は長軸約1.80m、短軸約1.40mの不整楕円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約50cmを測る。埋土中には角礫が多く混入し、遺物は黒褐色砂から多く出土している。時期は不明である。

遺 物 (第290図-13~26、第293図-1)

すべて埋土出土である。13は続縄文後北C₂式。14は同宇津内II b式。15、16は同前葉であろう。16は口縁部に縄端圧痕文が押捺され、口唇部と凸帯下部に円形刺突が施される。17は縄文晩期後葉の緑ヶ岡式。18~24は同中葉であろう。18は縄線間に刺突がある。19は内側に縄文、縄線文を施す。20~23は刺突文。24縄文。25は内側から斜めの突瘤が施される。26は縄文後期鯨潤式。



第290図 ピット77埋土(1~11)、ピット77a埋土(12)、ピット78埋土(13~26)出土土器



第291図 ピット71埋土(1・2)、ピット75埋土(3)、ピット75 a 埋土(4)、ピット75 b 埋土(5・6)、ピット76 b 埋土(7)ピット76 c 埋土(8・9)、ピット77埋土(10~15)出土石器

ピ ッ ト 78a・78b

遺 構 (第294図)

ピット78aはピット78に南壁側を切られている。規模は長軸が推定約0.85m、短軸約0.6mの楕円形を呈する。壁は底面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約30cmを測る。

ピット78bは南壁をピット78、西壁をピット78aに切られている。規模は短軸約0.55mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約31cmを測る。遺物は出土していない。

遺 物 (第292図-1、第293図-1)

埋土出土である。盛り上がりのある爪形文で縄文晩期前葉であろう。石器は第293図-1の砂岩製の砥石がある。

ピ ッ ト 78c・78d

遺 構 (第294図)

ピット78cは東壁をピット78と78aに切られ、上部にある直径約55cmの焼土を切って構築している。規模は短軸約0.75mの円形と思われる。壁高は確認面から約22cmを測る。

ピット78dは東壁をピット78、78cに切られている。規模は長軸約2.0mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約10cmを測る。

遺 物 (第292図-2～5)

埋土出土である。2、3は宇津内IIb式。4は縄線文、5は縄文のある晩期中葉と思われる。

ピ ッ ト 79

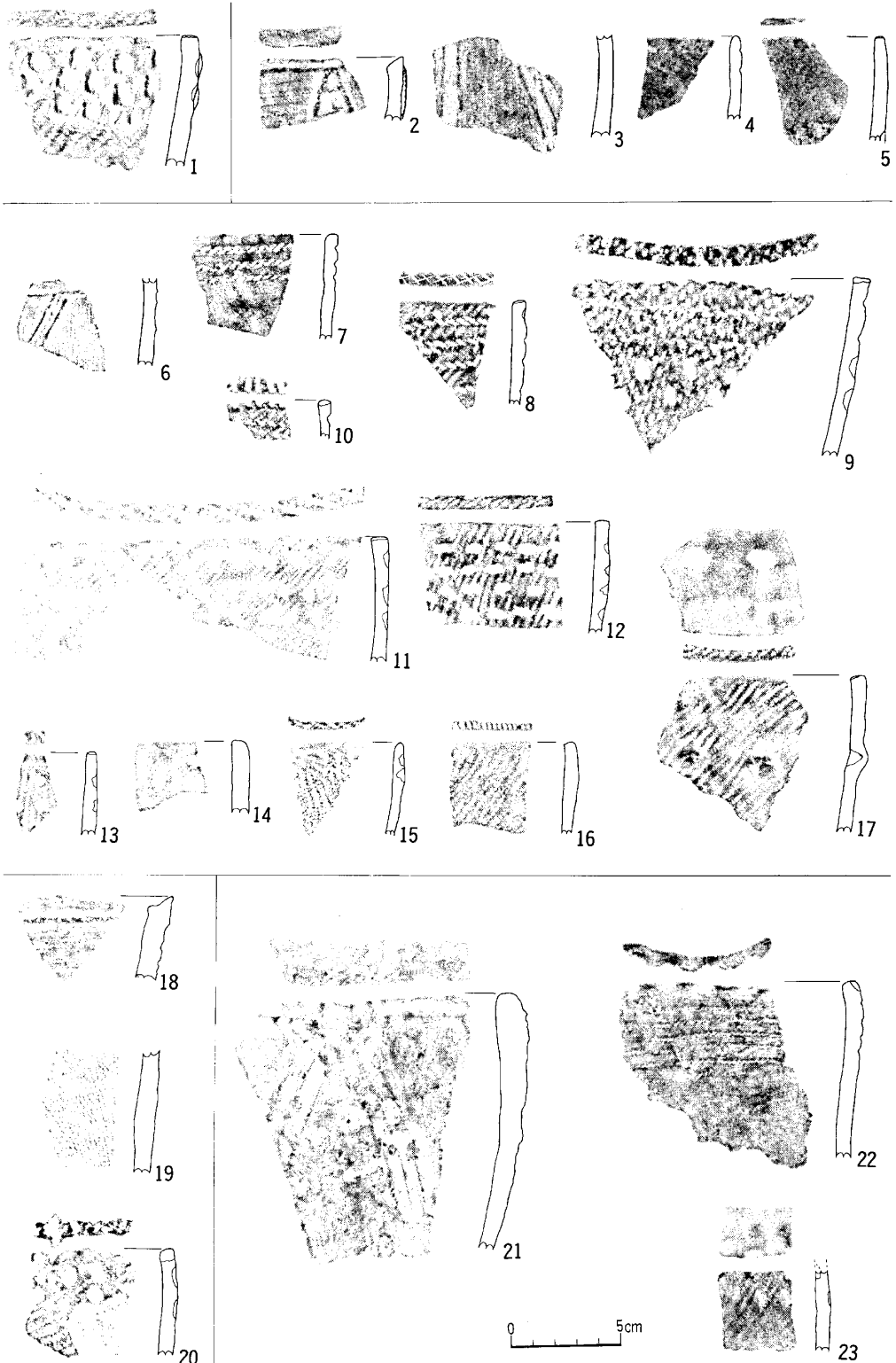
遺 構 (第294図)

本ピットは12号竪穴の西側約2.0mにある。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁は東側がやや丸みをもつて立ち上がる。壁高は確認面から約45cmを測る。埋土は黒褐色土が主体を占め、壁際では褐色砂が堆積する。遺物は黒褐色砂から出土する。

遺 物 (第292図-6～17、第293図-2～5)

すべて埋土出土。6は宇津内IIb式。7～9は縄線文のあるもので9はその下に盛り上がりのない爪形文が施される。11～13は刺突文。14は無文。15、16は縄文。17は内側から斜めに突瘤が施される。

石器は第293図-2～5の削器がある。2、5は玄武岩製。3、4は下端部に原石面を残す。



第292図 ピット78a埋土(1)、ピット78d埋土(2~5)、ピット79埋土(6~17)、ピット80埋土(18~20)、ピット80a埋土(21~23)出土土器

ピ ッ ト 80・80a

遺 構 (第274図)

ピット80は14号竪穴の北側のF'60、G'60グリッドに位置する。表土を剝土した直後に落ち込みを確認した。規模は長軸1.75m、短軸0.95mを測る。東側が隅丸、西側が細い丸み呈した楕円形である。

ピット80aは北壁の一部をピット80に切られている。規模は直径約1.0mの円形を呈する。壁は南壁側が比較的緩く立ち上がる。高さは約22cmを測る。南壁際に遺存体と思われる粘性のある暗茶褐色土があり、北壁側から遺体に向かってベンガラが散布されている。

遺 物 (第292図-18~23、第293図-6~11)

ピット80の埋土から第292図-18~20が出土している。18は宇津内II b式。19も宇津内系である。20は器面に盛り上がりを持たない爪形文で縄文晩期中葉と思われる。

石器は第293図-6~8がある。6は無茎石鏃。7は削器。8は主要剝離面側にノッチ状の刃部をもつ。

ピット80aの埋土からは第292図-21~23が出土している。21は口縁部が厚く欠失した小突起から隆帯が「八」字形に施された下田ノ沢2式。22は緑ヶ岡式。23は晩期中葉であろう。

石器は第293図-9~11がある。9は実測図の右側縁部の原石面に加工がある。11は凹み石。

ピ ッ ト 81・81a

遺 構 (第294図)

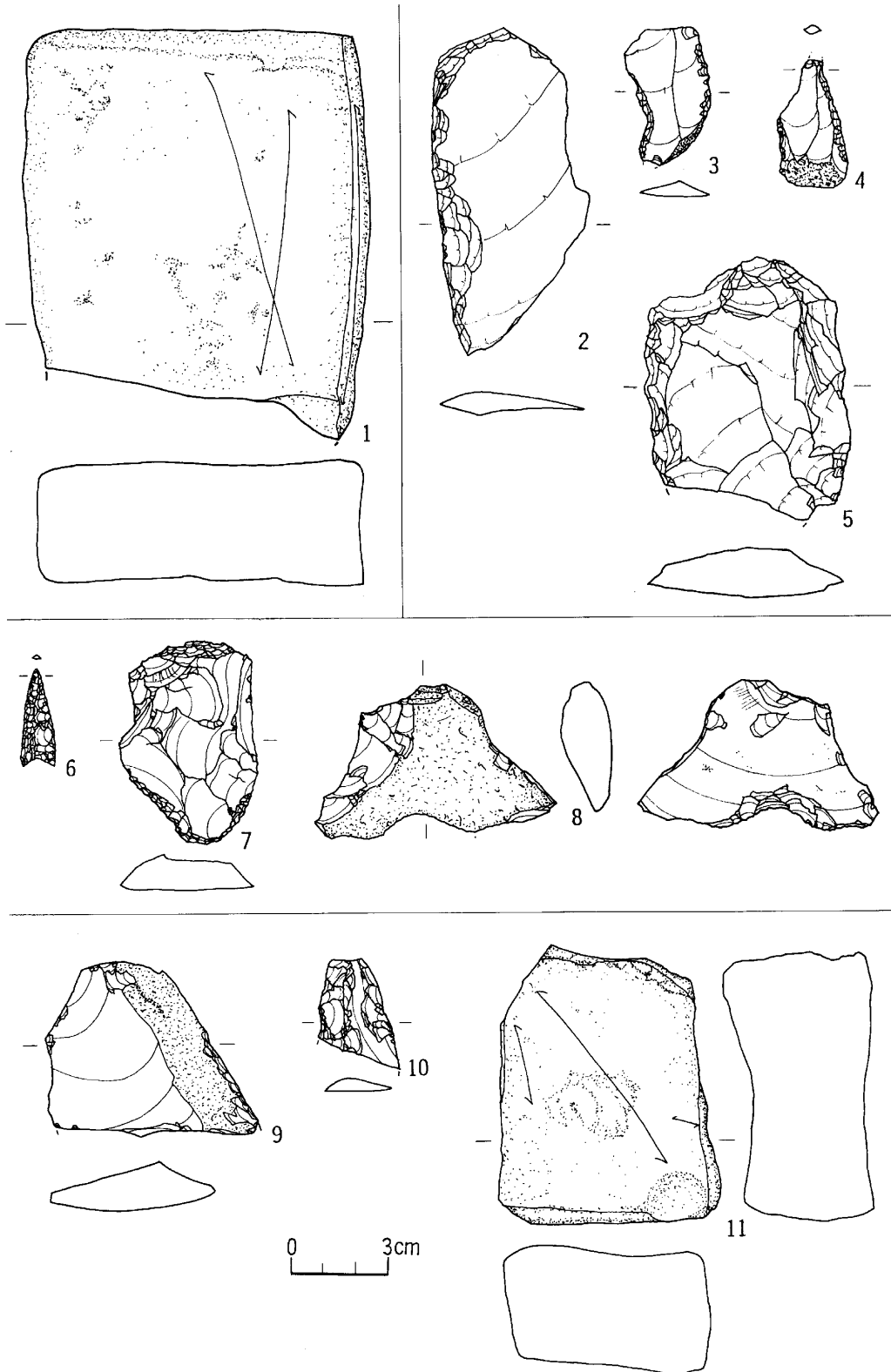
両ピットはF'66グリッドに位置する。ピット81の規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

ピット81aは北壁をピット81に切られている。規模は直径約0.7mの円形を呈する。壁高は確認面から約18cmである。

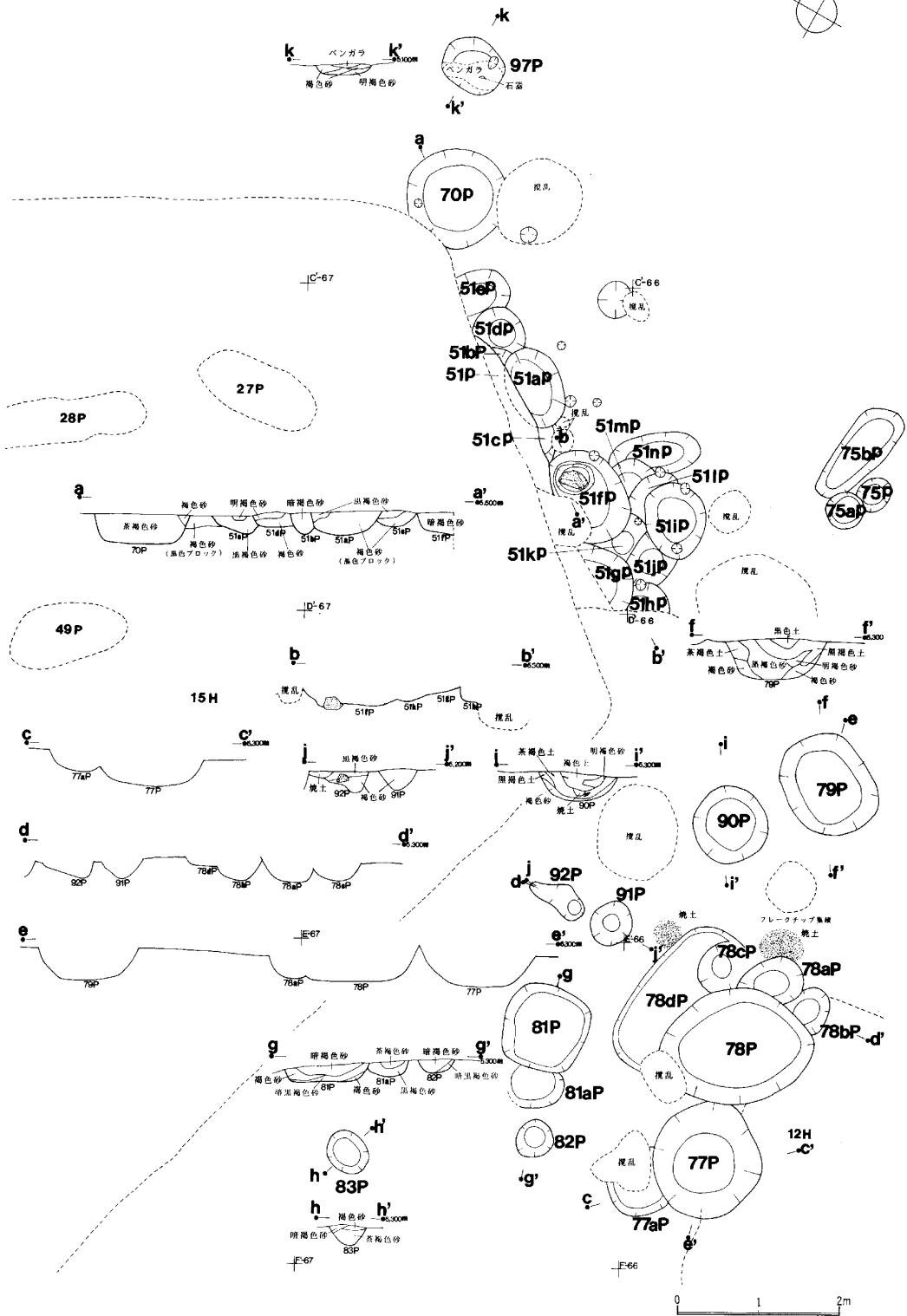
遺 物 (第295図-1~7、8~12)

ピット81は1~7が埋土出土である。1は続縄文土器の底部。2~6は縄文晩期中葉。7は同前葉の爪形文。

ピット81aからは8~12が出土している。すべて縄文晩期中葉であろう。8は床面出土。口縁部に小突起をもつ。9は縄端を押捺している。10、11は縄文。12は横走沈線間に半截状施文具による刺突が施される。



第293図 ピット78 a埋土(1)、ピット79埋土(2~5)、ピット80埋土(6~8)、ピット80 a埋土(9~11)出土石器



第294図 15号竪穴北東側周辺のピット群平面図

ピ ッ ト 82

遺 構 (第294図)

本ピットはF'66グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。第295図-13は縄文晩期中葉である。

ピ ッ ト 83

遺 構 (第294図)

本ピットはF'66グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。壁高は確認面から約25cmである。第295図-14は細い沈線が施される。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 84

遺 構 (第282図)

本ピットはG'67グリッドに位置する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。

遺 物 (第295図-15～19)

埋土出土。15は縄文。16は沈線と三角形の刺突文が施される。17は半截状施文具による刺突間に縄線文が施される。18は無文。19は内側に刺突がある。すべて縄文晩期中葉である。

ピ ッ ト 85

遺 構 (第347図)

本ピットはG'68グリッドに位置する。規模は直径約0.80mの不整形を呈する。壁高は確認面から約23cmである。第295図-20、21は縄文。22は刺突が施される。縄文晩期中葉である。

ピ ッ ト 86

遺 構 (第347図)

本ピットはF'68、G'68グリッドに位置する。規模は長軸約1.50m、短軸約0.77mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。第295図-23は縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 87

遺 構 (第282図)

本ピットはG'66グリッドに位置する。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から約26cmである。第295図-24は縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 88

遺 構 (第282図)

本ピットはG'66グリッドに位置する。規模は長軸約0.95m、短軸約0.77mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。第295図-25は縄文後期鮫潤式の胴部片。

ピ ッ ト 89

遺 構 (第282図)

本ピットはG'66グリッドに位置する。規模は直径約0.94mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 90

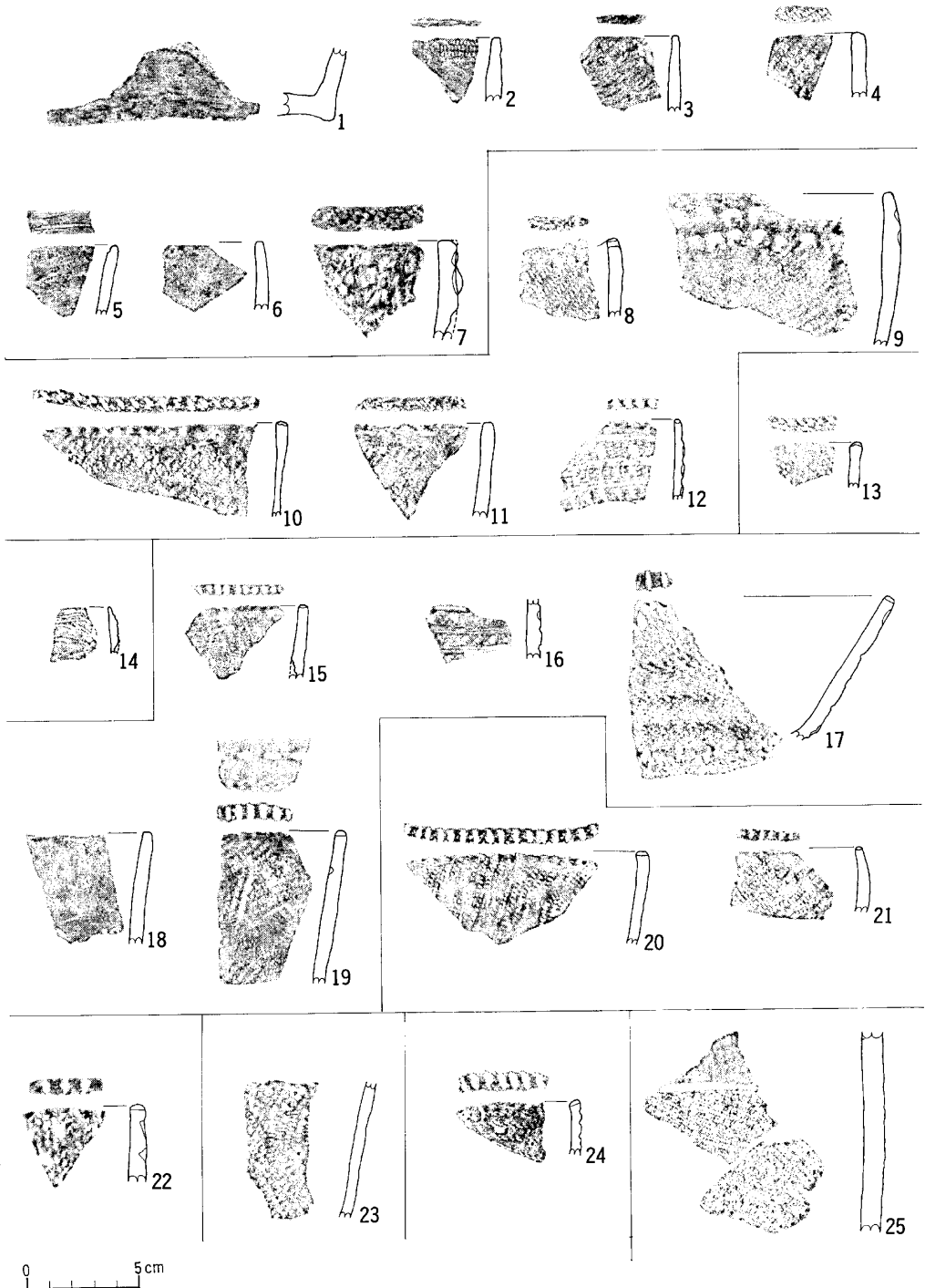
遺 構 (第294図)

本ピットはE'65グリッドに位置する。15号竪穴の東壁から約2.0mの距離にある。規模は直径約0.95mの円形を呈する。底面から壁は丸みをもって立ち上がる。深さは確認面から約30cmを測る。時期は不明である。

遺 物 (第298図-1～8、第302図-1～3)

第298図-1～8は埋土出土。1は口縁下部に細い縄端圧痕文を施し、縄線文の上に短縄文を縦に押捺する。2は器面の一部が剥落しているものの縄線文がある。3は縄端圧痕文を2段施す。4は円形施文具を斜めから浅く突き刺している。5～7は縄文が施される。8はRL縄文を地文に「ハ」字状の盛り上がりのある爪型文。1～7は晩期中葉、8は同前葉であろう。

石器は第302図-1、2は削器。3は両側縁部に微細な歯こぼれがある。3点とも黒曜石製。



第295図 ピット81埋土(1~7)、ピット81 a 床面(8)・埋土(9~12)、ピット82埋土(13)、ピット83埋土(14)、ピット84埋土(15~19)、ピット85埋土(20~22)、ピット86埋土(23)、ピット87埋土(24)、ピット88埋土(25)出土土器

ピ ッ ト 91

遺 構 (第294図)

本ピットはE'65、66グリッドに位置する。規模は直径約0.55mの小円形を呈する。深さは確認面から約27cmである。東壁上部から骨片が検出された。

遺 物 (第298図)

第298図-9～11は埋土出土。いずれも縄文晩期の胴部片である。

ピ ッ ト 92

遺 構 (第294図)

本ピットはE'66グリッドに位置する。ピット91の西側にあるもので、規模は長軸約0.75m、短軸約0.3mを測る。底面は狭く西方向に浅く伸びる。深さは確認面から約25cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 93

遺 構 (第242図)

本ピットはE'65グリッドに位置する。規模は直径約0.4mの小円形を呈する。深さは確認面から約25cmを測る。西壁際の上部から骨片が検出された。

遺 物 (第298図)

第298図-12、13は埋土出土。2点とも縄文晩期の胴部片である。

ピ ッ ト 94

遺 構 (第242図)

本ピットはE'65グリッドに位置する。ピット93の東側にあるもので規模は長軸約0.55m、短軸約0.40mの楕円形を呈する。深さは確認面から約20cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 95

遺 構 (第296図、図版81-1)

本ピットはB'68グリッドに位置する。この周辺では第II層の茶褐色砂層の堆積が薄く、表土

を剝土すると暗褐色砂の落ち込みが確認できた。規模は長軸約0.95m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは約18cmと浅く、約10cmほど掘り下げた段階で広範囲に散布されたベンガラが現れ、ほぼ同レベルから琥珀玉が出土した。ベンガラの下部には粘性のある赤褐色を呈した遺存体が認められる。土器はベンガラの上部にある。東壁際には石斧と5点の白色粘土が副葬されている。

遺 物 (第298図-14~18、第302図-4~6、図版81-2~4)

第298図-14~16は南壁際からまとまって出土した。3点とも小型土器である。14は突瘤下に4条の縄線文と縄端圧痕文が施されたもので、底部は丸底である。15はRLの縄文を地文とした壺型土器で底部は平底である。16は頸部がすばまり底部がわずかに平底を呈する。これらの土器は縄文晩期の影響をもつものであるが、15は丸底から平底に移行した段階のものであろう。16、17は埋土出土である。縄文晩期後葉であろう。

石器は第302図-4の黒曜石製の削器。5の磨製石斧がある。6は琥珀玉。879点出土しているが大きさ、形はほぼ同じである。

小 括

本ピットの時期は続縄文前葉であり、字津内II a式よりも古手の時期と思われる。遺体の上部に多量のベンガラを散布している。長軸は南北方向にとる。

ピ ッ ト 96

遺 構 (第297図)

本ピットはB'68グリッドに位置する。規模は長軸約2.07m、短軸約1.25mの楕円形を呈する。深さは確認面から約42cmである。壁は皿状に緩かく立ち上がる。

遺 物 (第298図-19~21、第302図-7~10)

第298図-19~21は埋土出土。19は6条の縄線文の上に同じ原体を用いて山形状に押捺し、山形の中に円形刺突を施している。器形は浅鉢を呈すると思われる。幣舞式である。20は無文。21は内側斜め方向から突瘤が施される。

石器は埋土から第302図-7~10が出土している。7、8は無茎石鏃。9は有茎石鏃であろう。10はメノウ製の片面加工ナイフであり他は黒曜石製。

ピ ッ ト 97

遺 構 (第294図)

本ピットはC'66グリッドに位置する。15号竪穴の北壁から約1.5mにある。ベンガラはピット上部において広い範囲に散布されている。規模は長軸約0.75m、短軸約0.63mの楕円形を呈す

常呂川河口遺跡

る。深さは確認面から約15cmである。北壁隅に直径約15cm、深さ28cmの小柱穴をもつ。

遺物 (第302図)

土器は出土していない。第302図-11は横長剥片を利用した削器。左下側縁部の刃角は鋭く、打瘤部は調整されている。黒曜石製。

小括

北壁隅に小柱穴をもつ。時期は不明であるが土墳墓であろう。

ピット 98

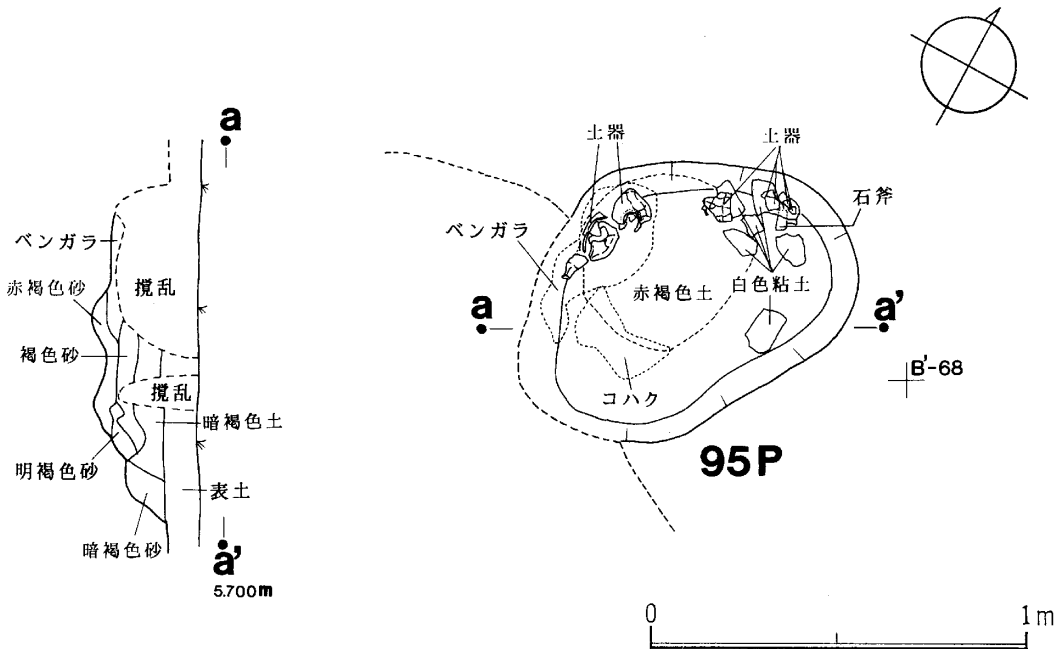
遺構 (第297図)

本ピットはC'67、68グリッドに位置する。規模は長軸約1.2m円形を呈する。壁高は確認面から約55cmを測る。

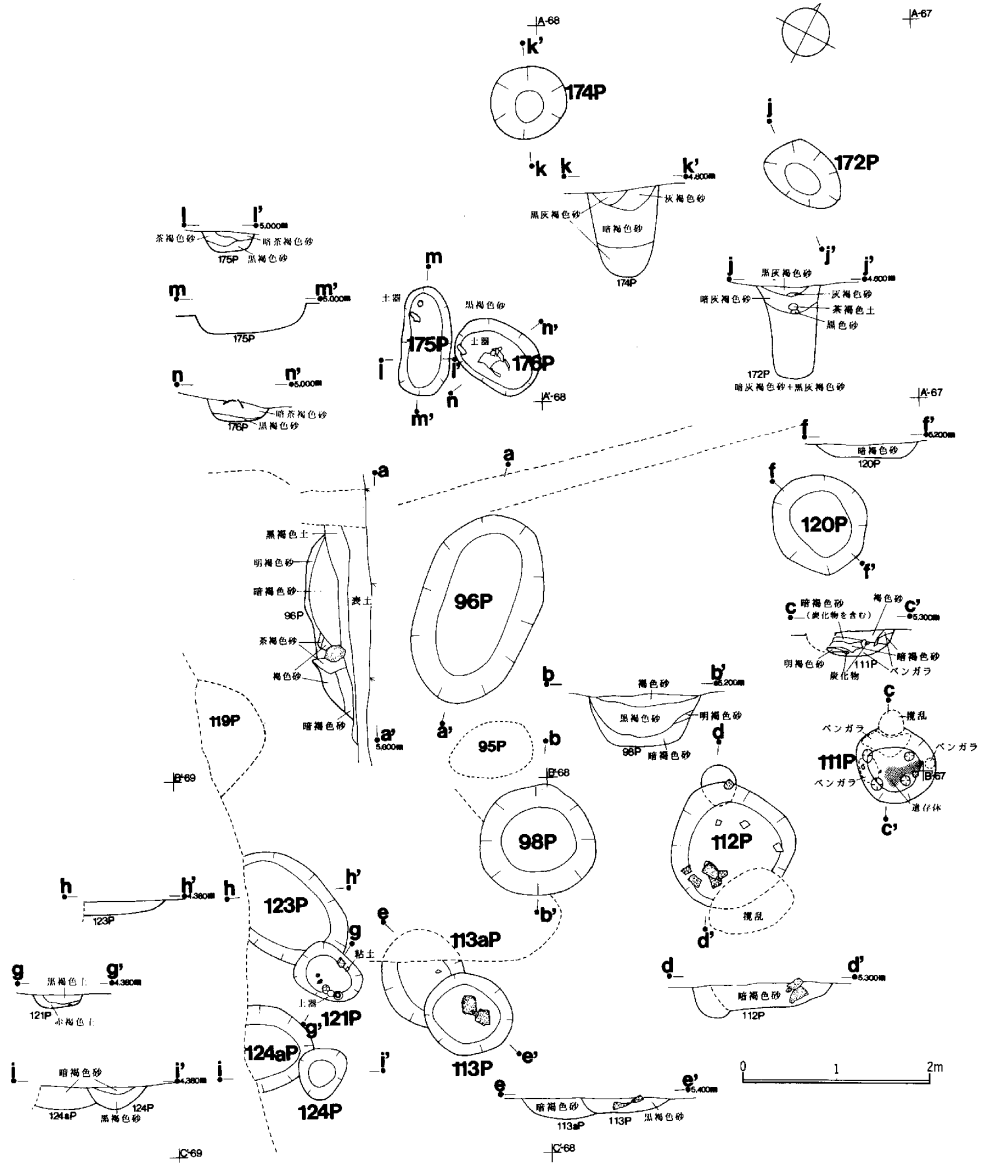
ピット 99

遺構 (第283図)

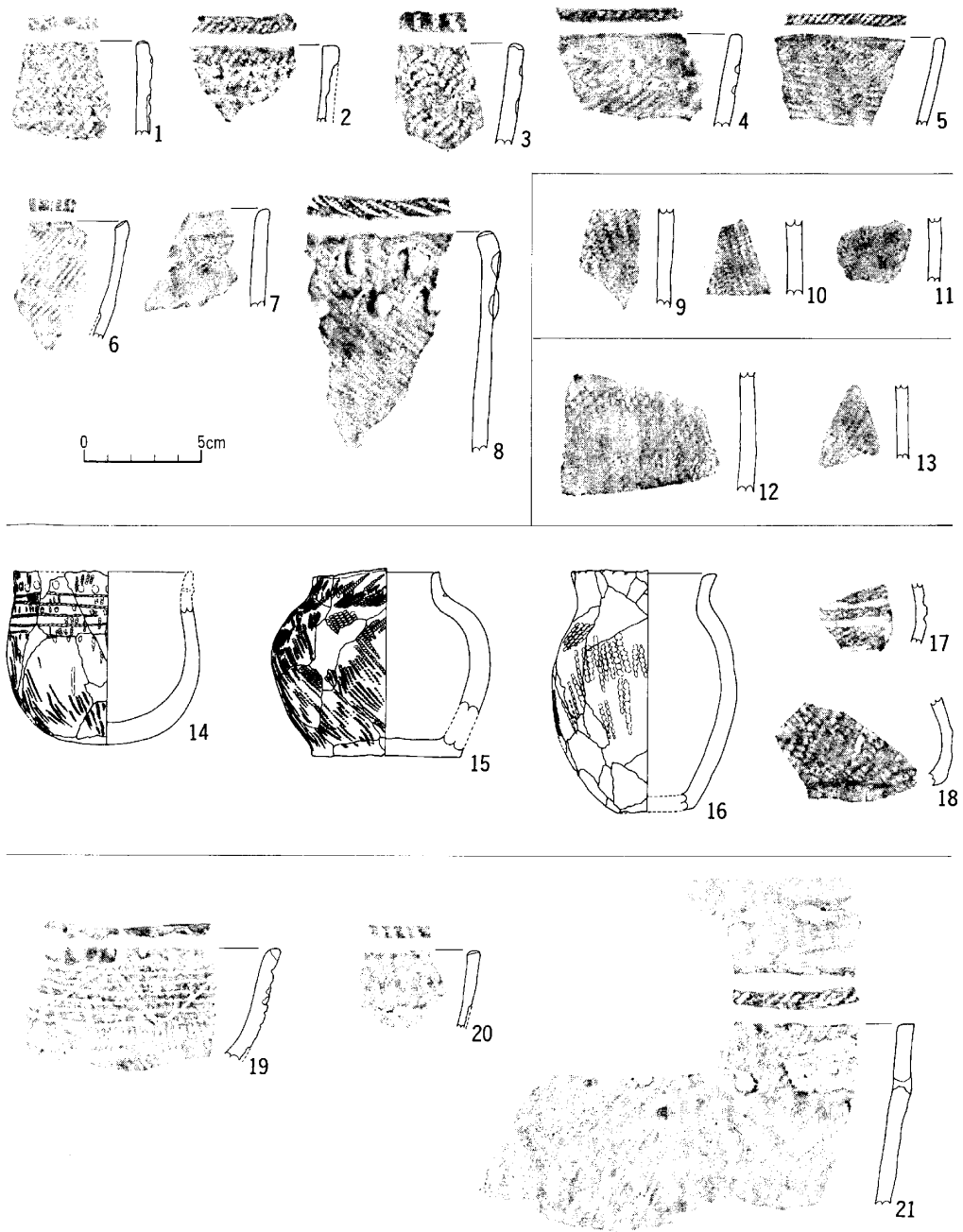
本ピットは17号竪穴にある。形態は長軸約1.5m、短軸約0.9mの楕円形を呈する。壁高は14号の床面から約20cmを測る。遺物は出土していない。



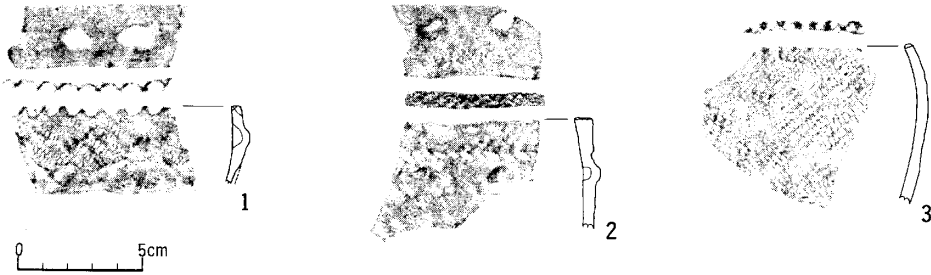
第296図 ピット95平面図



第297図 15号堅穴西側周辺のピット群平面図



第298図 ピット90埋土(1~8)、ピット91埋土(9~11)、ピット93埋土(12・13)、ピット95埋土(14~18)、ピット96埋土(19~21)出土土器



第299図 ピット99埋土(1~3)出土土器

遺 物 (第299図-1~3)

1、2は内側から突瘤が施され、1の器面には縄縁文がみられる縄文晩期前葉。3は中葉の浅鉢と思われる。

ピ ッ ト 100

遺 構 (第367図、図版81-5)

本ピットはH'57グリッドに位置する。形態は直径約1.0mの方形を呈する。深さは確認面から約60cmを測り、壁は床面から緩く立ち上がる。ピットのほぼ中央部に約25cmの大型角礫がある。この角礫は遺存体の真上にあり、意識的に埋設された可能性がある。遺存体は粘性を有する赤褐色を呈しベンガラを含む。

遺 物 (第300図)

第300図-1、2は埋土出土である。縄文晩期中葉であろう。図示していないが遺存体の上部からは黒曜石のフレーク13点が出土している。

小 括

本ピットの時期は確定する遺物が出土していないため不明であるが、大洞C₂~A式が出土したピット213とは形態、深さなどに類似点がある。位置も近接しており本ピットは縄文晩期中葉から後葉の土壙墓ものと思われる。

ピ ッ ト 101

遺 構 (第367図)

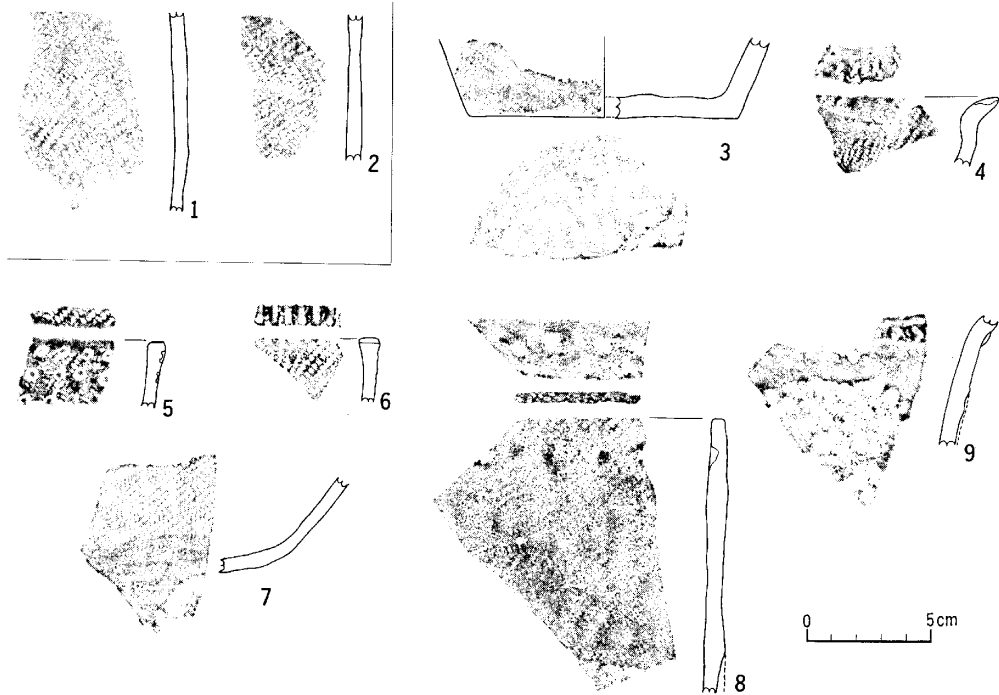
本ピットは34号堅穴の東南壁隅、H'57グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの不整円形を呈する。深さは確認面から約37cmを測る。

遺 物 (第300図-3~9、第302図-12~14)

第300図-3~9は埋土出土。3は宇津内系の底部。4は口縁部が「く」字状に緩く外反し、

口唇部に縄端圧痕文が施された続縄文前葉の土器であろう。5～7は晩期中葉、8は同前葉であろう。9は後期縄濶式。

石器は第302図-12～14がある。12は両面加工ナイフの先端部。13、14は削器。14は頁岩であり他は黒曜石。



第300図 ピット100埋土(1・2)、ピット101埋土(3～9)出土土器

ピ ッ ト 101a

遺 構 (第367図)

本ピットは34号竪穴の北東壁際に位置する。規模は直径約0.6mの円形を呈する。深さは確認面から約26cmを測る。

遺 物 (第301図-1～5、第302図-15・16)

第301図-1～5は埋土出土。1は宇津内IIa式。2は刺突、3は縄文が施される。4は半截施文状工具を用いたもので盛り上がりをもつもの前葉の爪形文とは異なる。5は内側から斜めに突瘤が施される。2～4は縄文晩期中葉、5は同期前葉。

第302図-15は石槍。16は石錐。

ピ ッ ト 102

遺 構 (第367図)

本ピットは34号竪穴の北東壁に位置する。規模は長軸1.50m、短軸1.25mの楕円形を呈する。深さは確認面から約28cmを測る。

遺 物 (第301図-6～8)

第301図-6～8は埋土出土。6は続縄文の底部。7、8は晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 102a

遺 構 (第367図、図版82-1)

本ピットはピット102により北壁上部が切られている。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。遺存体は粘性のある暗赤褐色を呈しており南壁側から検出された。北壁側はやや広い空間をもち土器2点が副葬されている。石製品は遺存体の上部から出土した。

遺 物 (第301図-9～13、第302図-17、図版82-2～3)

第301図-9、10は床面出土。9は口縁部に3条の縄線文と刺突文を施す。口唇部の外側に刻みが施され底部中央は穿孔されている。10は無文の小形浅鉢。11～13は埋土出土。

第302図-17は遺存体上部から出土した滑石製の玉。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。副葬品として土器2点、石製品1点がある。

ピ ッ ト 103・103a

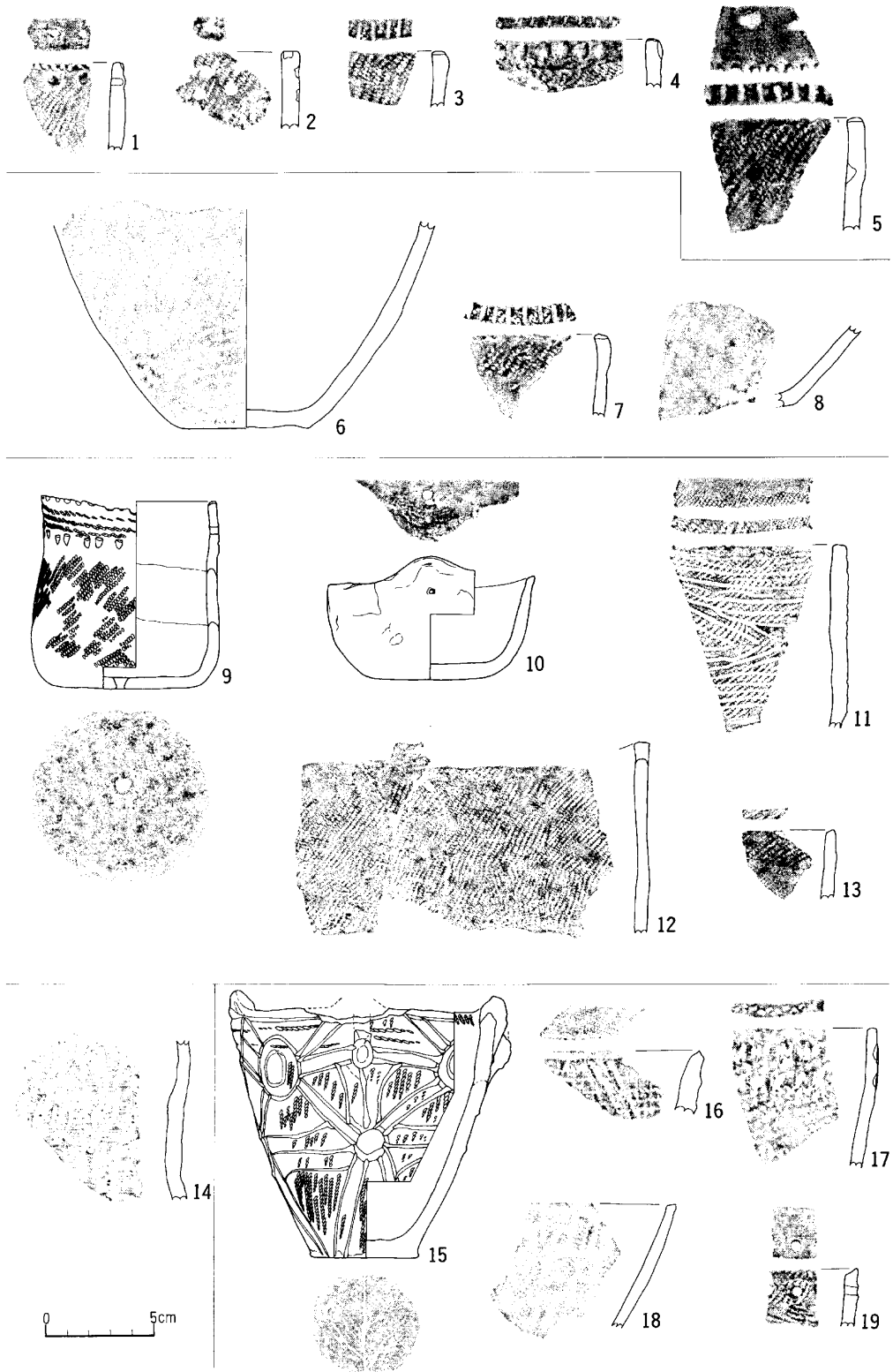
遺 構 (第367図)

ピット103は34号竪穴の南側、H'58、I'58グリッドに位置する。規模は長軸1.50m、短軸1.25mの楕円形を呈する。深さは確認面から約65cmを測る。

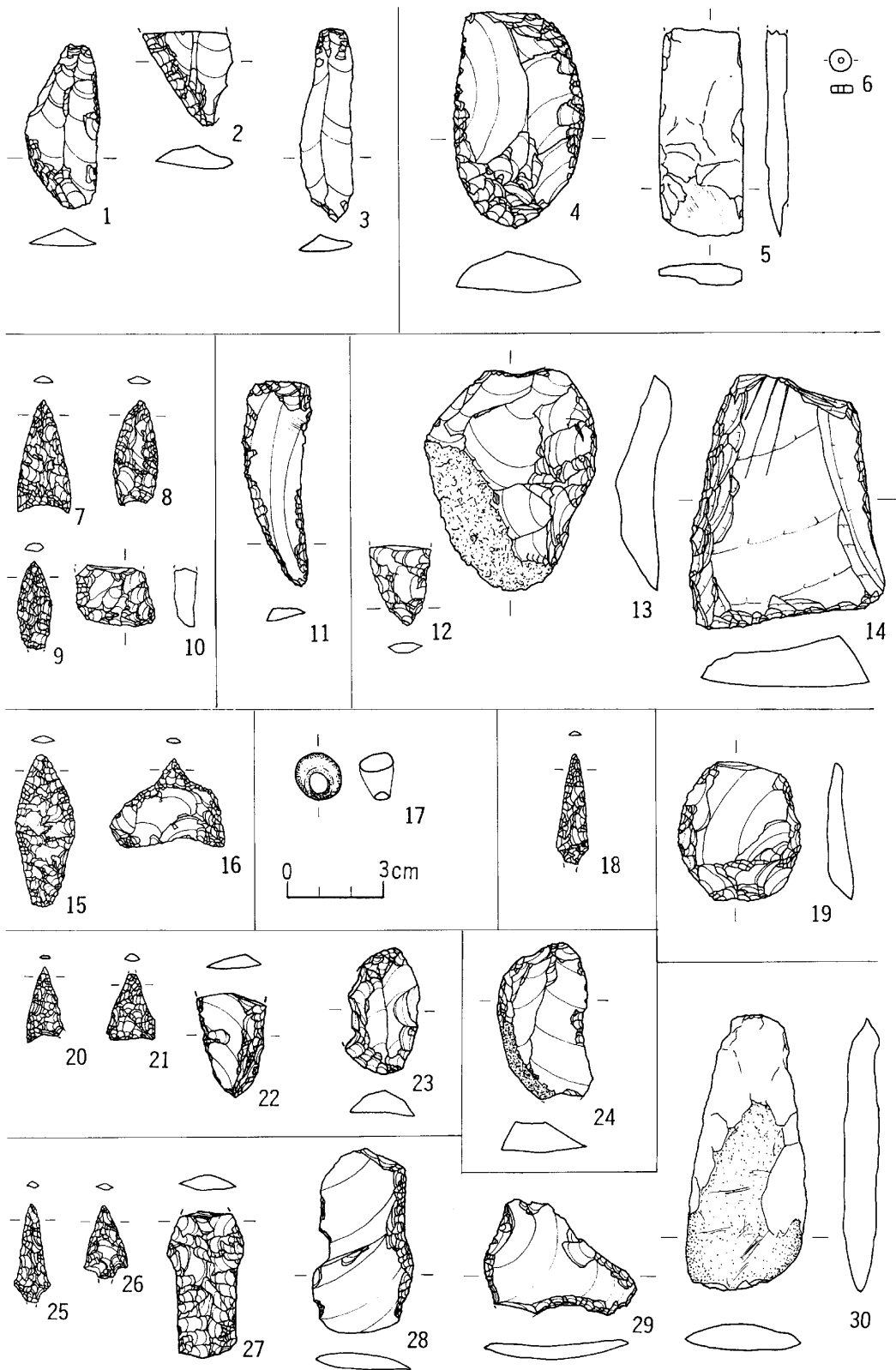
ピット103aはピット103に大半が切られている。わずかに東壁が残存する程度である。したがって規模、形態は不明である。深さは確認面から約17cmを測る。

遺 物 (第301図-14)

14はピット103の埋土から出土した縄文晩期後葉の幣舞式。



第301図 ピット101 a 埋土(1~5)、ピット102埋土(6~8)、ピット102 a 床面(9・10)・埋土(11~13)、ピット103埋土(14)、ピット104埋土(15~19)出土土器



第302図 ピット90埋土(1~3)、ピット95埋土(4~6)、ピット96埋土(7~10)、ピット97埋土(11)、ピット101埋土(12~14)、ピット101 a 埋土(15・16)、ピット102 a 埋土(17)、ピット105埋土(18)、ピット110 a 埋土(19)、ピット112埋土(20~23)、ピット113埋土(24)、ピット116埋土(25~30)出土石器・琥珀・石製品

ピ ッ ト 104

遺 構 (第358図、図版82-4)

本ピットはJ'56グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層上面で第301図-15の宇津内IIb式が伏せた状態で出土した。このため土器を基準にサブトレンチを設定し落ちこみを確認した。規模は長軸約1.1m、短軸0.80mの楕円形を呈する。深さは確認面から約20cmを測る。

遺 物 (第301図-15~19、図版82-5)

すべて埋土出土である。15は器面に同心円文をもつ宇津内IIb式。口縁部に4個の小突起をもつが2個は欠失する。底面に木葉痕がみられる。16も宇津内IIb式。17は刺突文、18は縄文が施される。19は縄文後期堂林式。

小 括

土器の出土位置がピット上部のため疑問は残るが、続縄文字津内IIb式期のピットと思われる。

ピ ッ ト 105・105a

遺 構 (第350図、図版83-1)

本ピットはJ'56グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂層上面で第303図-1の後北C₂式が口縁部を西側に傾けた状態で出土した。サブトレンチを設定した結果ピット105aの埋土内に構築されていることが確認された。ピット105の規模は直径約0.54mの円形を呈する。壁高は確認面から約32cmである。

ピット105aは長軸約1.40mを測る。形態は西側がすぼまる三角形状を呈する。壁高は確認面から約28cmであり、西壁際の床面に深さ6cmの小柱穴をもつ。西壁側に本ピットと同じ形態をもった炭化した盆状木製品が出土している。

遺 物 (第303図-1~11、第302図-18、図版83-2)

1~5はピット105の埋土から出土した。1は後北C₂・D式。2は宇津内IIb式。3は同IIa式。4は突瘤文が施された縄文晩期前葉の土器。

第302図-18は黒曜石製の有茎石鏃。

小 括

ピット105は続縄文後北C₂・D式期と思われる。ピット105aは不明である。

ピ ッ ト 106

遺 構 (第274図)

本ピットはH'60グリッドに位置する。規模は直径約0.67mの円形を呈する。壁高は確認面から約53cmである。

遺物は図示していないが埋土から縄文晩期の細片が出土している。

ピ ッ ト 107

遺 構 (第274図)

本ピットはH'60グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 108

遺 構 (第274図)

本ピットはH'60グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約25cmである。

遺 物 (第303図-12~14)

12は後北C₂式。13は口縁下に2個の瘤状の貼付が施されている。宇津内系と思われる。14は縄線文が施される。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 109

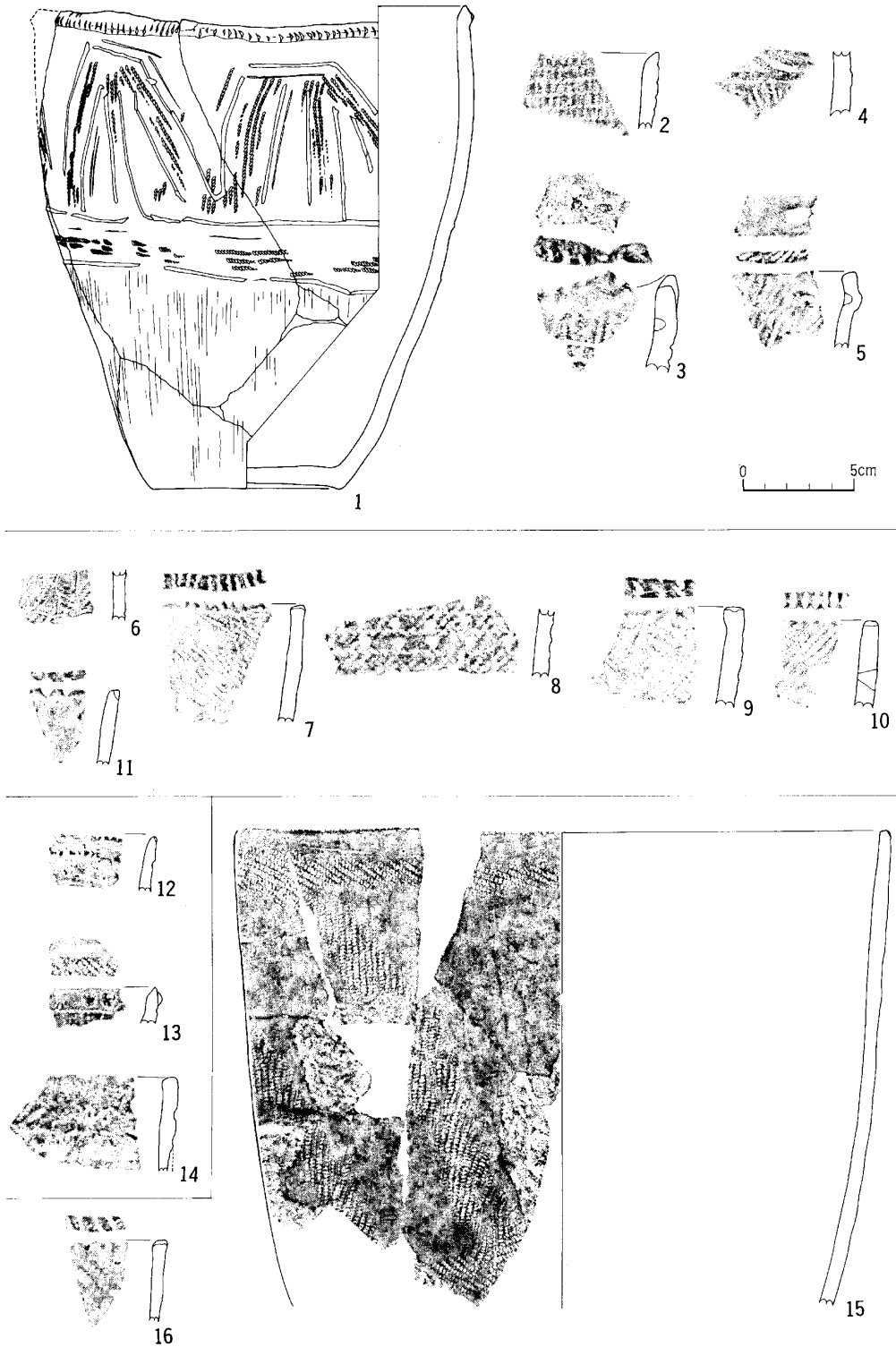
遺 構 (第242図)

本ピットはH'64グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 110

遺 構 (第242図)

本ピットはH'64グリッドに位置する。ピット110aの西壁側を切って構築している。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。ピット上面の東



第303図 ピット105埋土(1~5)、ピット105a埋土(6~11)、ピット108埋土(12~14)、ピット110埋土(15・16)
出土土器

壁際から後北C₂式の底部が出土しているもの時期は不明である。

遺 物 (第303図-15・16)

埋土出土。15は口唇部に刻みが施される。帯縄文を縦横に施した後北C₂式。16は縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 110a

遺 構 (第242図)

本ピットはH'64グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの不整形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。ピットの中位に角礫が多量に混入し、西壁際では角礫とほぼ同一レベルで炭化物、焼土の堆積がある。埋土出土の遺物は角礫の下から出土しており、本ピットの時期に近いと思われる。

遺 物 (第304図-1～6、第302図-19)

すべて埋土出土。1～6は幣舞式。3は縦走縄文を地文とし口縁部、胴中央部、底部に細く鋭い沈線を施し、張り出した底部には刻みがある。4は浅鉢。底面は縄文が施されるが大半は無文である。5、6は縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 111

遺 構 (第297図)

本ピットは、B'67、C'67グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの不整形を呈する。底面には暗赤褐色を呈した遺体がある。ベンガラは西壁際、北壁際、南壁際にある。特に西壁際のベンガラが広い範囲に散布されている。底面は丸みを持ち細いもので直径約6cmが1本、太いもので10～14cmの小柱穴が4本ある。深さは32～45cmである。壁の高さは確認面から約27cmである。時期不明の土墳墓である。

遺 物 (第304図-7)

埋土出土。器面の一部は剝落するものの刺突が施され、内側にも刺突と縄線がある。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 112

遺 構 (第297図)

本ピットはC'67グリッドに位置する。東壁側が攪乱を受けているものの規模は直径約1.25mの円形を呈する。壁高は確認面から約24cmである。

遺物 (第304図-8～12、第302図-20～23)

埋土出土。8、9は宇津内IIb式。10は同IIa式。11は刺突文。12は無文。11、12は縄文晩期中葉であろう。

石器は埋土から第302図-20、21の無茎石鏃。22、23の側削器が出土している。黒曜石製。

ピット 113・113a

遺構 (第297図)

ピット113はC'68グリッドに位置する。規模は直径約0.84mの不整形円形を呈する。壁高は確認面から約14cmである。北壁近くから2点の角礫が出土しているだけであり、時期は不明である。

ピット113aは東壁をピット113に切られ、西壁は攪乱を受けている。短軸約0.90mの楕円形を呈する皿状のピットと思われる。深さは約21cmを測る。

遺物 (第304図-13～16、第302図-24)

ピット113は埋土出土。13は北大I式。14は宇津内系であろう。

第302図-24は原石面のある剝片の縁辺部に微細な刃こぼれ状の使用痕がある。黒曜石製。

ピット113aからは第304図-15の縄文晩期中葉の刺突文と同前葉の16の突瘤文が埋土から出土している。

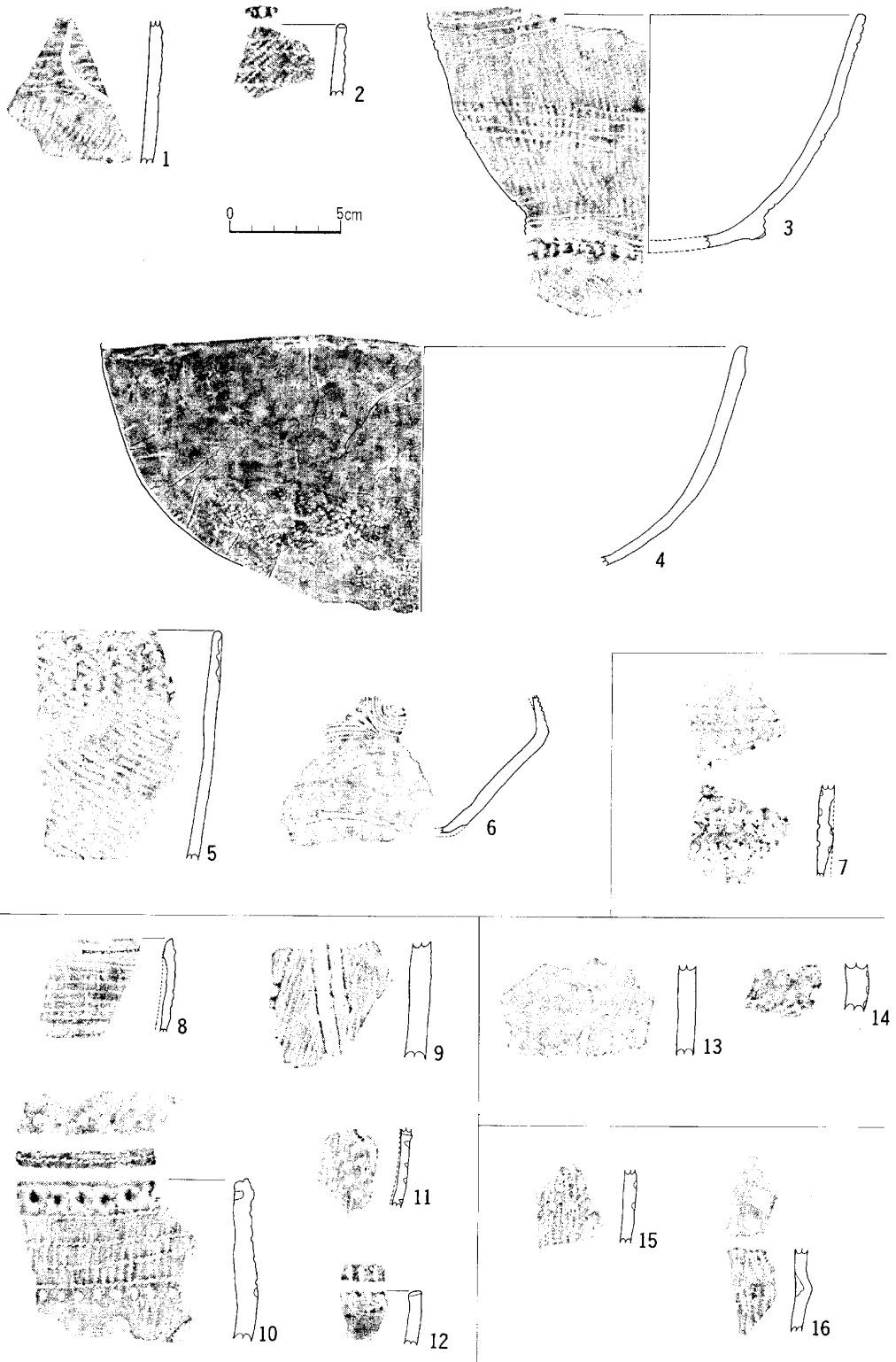
ピット 114

遺構 (第282図)

本ピットはG'66、G'67グリッドに位置する。規模は直径1.15mの不整形方形を呈する。壁高は確認面から約44cmを測る。時期は不明である。

遺物 (第305図-1～5、第306図-1～7)

埋土出土。1は宇津内IIb式。上部が完全に接合できたが底部は欠失する。底部のみ意識的に打ち割られた可能性がある。口縁下、頸部、胴部に横走する隆帯をもち縦の隆帯で連結している。2は宇津内IIa式。口唇部に鋭い刻みをもつ。3は縄線文下に縄端圧痕文が施される。続縄文前葉であろう。4、5は幣舞式。第306図-1は口唇部に三角形の小突起をもつ。続縄文前葉であろう。2、3は縄線文をもち2には刺突が加わる。4、5は縄文が施されたもので4は幣舞式の浅鉢。6、7は無文。第306図-2、3、5～7は縄文晩期中葉であろう。



第304図 ピット110 a 埋土(1~6)、ピット111埋土(7)、ピット112埋土(8~12)、ピット113埋土(13・14)、ピット113 a 埋土(15・16)出土土器

ピ ッ ト 115

遺 構 (第282図)

本ピットはG'67、68グリッドに位置する。表土を剝土すると茶褐色砂の落ち込みが確認された。埋土出土の土器はこの茶褐色砂層からのものである。茶褐色砂層の下層の炭化層は北壁側から中央部に向かって堆積している。形態は北壁から東壁にかけて方形を呈するのに対し、西壁から南壁は丸みをもった不整形である。規模は長軸約2.90mである。壁高は確認面から約40cmである。時期は不明である。

遺 物 (第307図-1～17、第308図-1～10、第309図-1～18)

埋土出土。第307図-1は後北C₂式。2、3は宇津内IIb式。4～6は宇津内IIa式。7は後北系である。8、9は続縄文前葉。10は幣舞式。11～17は縄文晩期前葉であり12～17は器面に刺突が施される。17は沈線と半截状施文具による刺突がみられる。第308図-1～7は縄文晩期中葉であり1～4は縄文、5～7は無文である。8～10は同前葉。

石器は第309図-1～18が埋土から出土している。1、2は有茎石鏃。3は両面加工ナイフ。4～14は側削器。15、16は搔器。17は玄武岩製の削器。18は青色泥岩製の両刃磨製石斧。

ピ ッ ト 116

遺 構 (第242図、図版83-3)

本ピットはH'64グリッドに位置する。形態は近接するピット110aと同様の直径約1.10mの不整形を呈する。壁は比較的緩く立ち上がる。高さは確認面から約52cmである。埋土上部に大型角礫が2点ある。

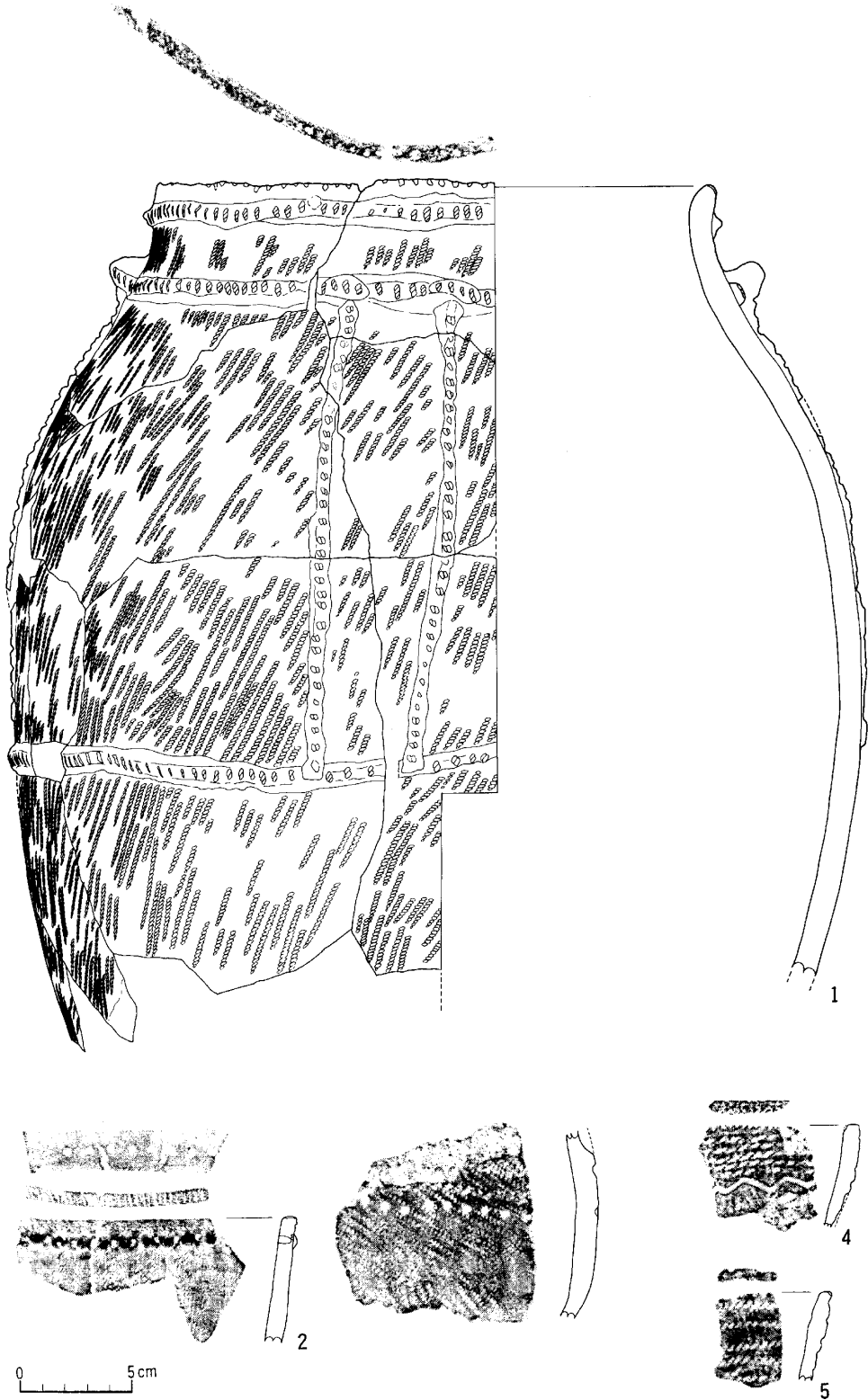
遺 物 (第310図-1～21、第311図-1～6、第302図-25～30)

すべて埋土出土。第310図-1は宇津内IIb式。2、3は同IIa式。3は半截状施文具による横走沈線と刺突が施される。4は隆帯に指頭大の押捺、5は縄線文のあるもので続縄文前葉であろう。6は口縁下に横走沈線、7は斜行沈線を施した緑ヶ岡系と思われる。8も緑ヶ岡系であろう。10～13は幣舞式。14～21は縄線文、刺突文のある縄文晩期中葉であろう。第311図-2は内側に円形刺突がある。3は盛り上がりのある爪形文で晩期前葉であろう。4は縄文中期トコロ五類。5は同前期末葉のシュブノツナイフ式。

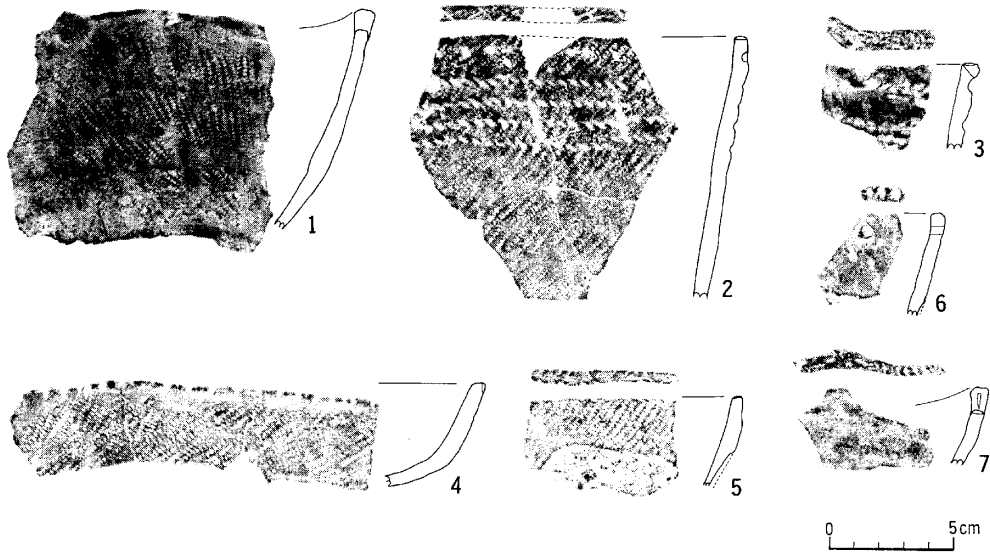
石器は第302図-25～30がある。25、26は有茎石鏃。27は石槍。28、29は削器。30は青色泥岩製の片刃磨製石斧。他は黒曜石製。

小 括

形態はピット110a同様で不整形を呈する。埋土の状況は自然堆積であり土墳墓と異なる性



第305図 ピット114埋土(1~5)出土土器



第306図 ピット114埋土(1~7)出土土器

格のピットであろう。時期は縄文晩期幣舞式の可能性がある。

ピット 117

遺構 (第283図、図版84-1)

本ピットは14号竪穴の南側、I'63グリッドに位置する。規模は上部が直径約0.60mの円形を呈し、底面は長軸約0.40m、短軸約0.30mの楕円形である。壁高は確認面から約20cmである。

遺物 (第313図-1、図版84-2)

床面から約10cm浮いて出土した片口土器である。口唇部に2個の丸みをもった小突起をもつが1個は欠失する。小突起は口縁に平行して貫通した孔があり、吊り耳の機能をもつ。器面に同心円文が施された後北C₁式である。

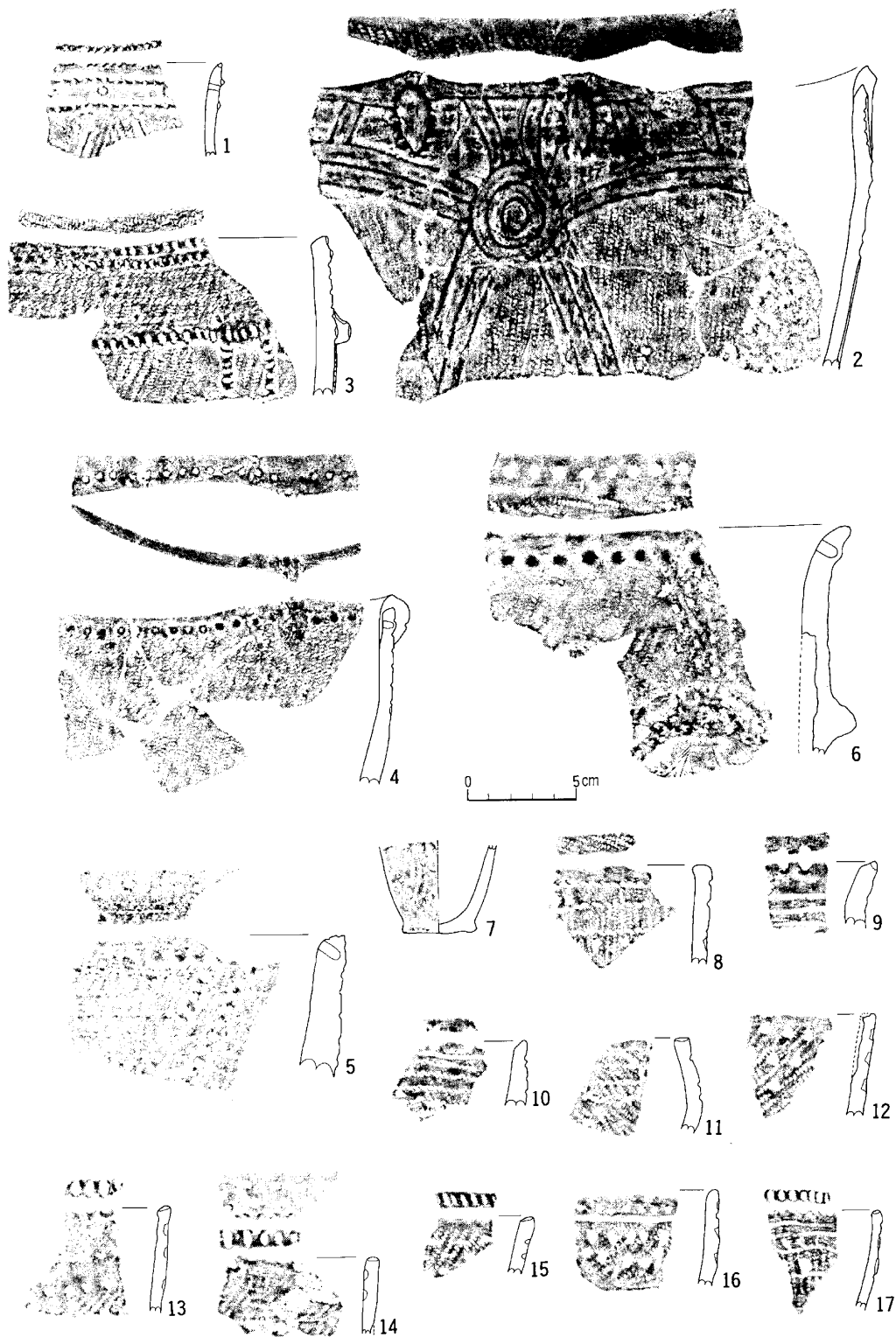
ピット 118

遺構 (第343図)

本ピットはC'62グリッドに位置する。規模は長軸約0.65m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約14cmである。埋土の暗茶褐色砂層には多量の炭化粒が混入する。

遺物 (第313図-2)

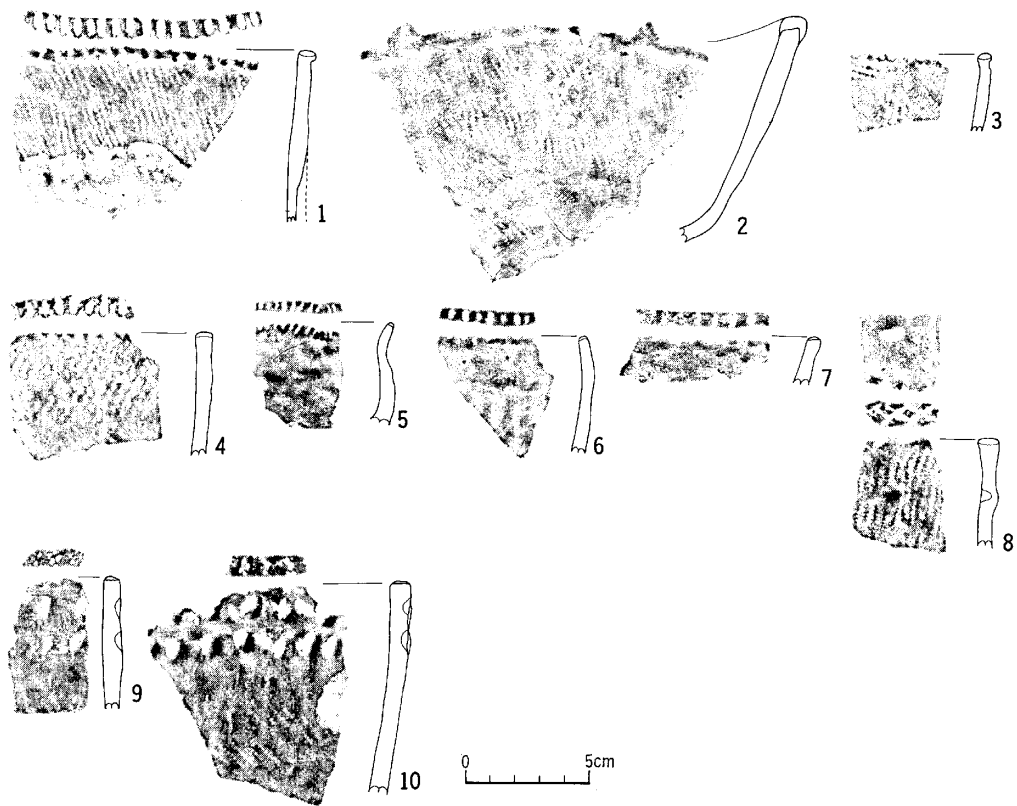
埋土出土。直線、波状のソーメン状貼付文を口縁、頸部、頸部下に施している。口径約22cmのオホーツク土器。



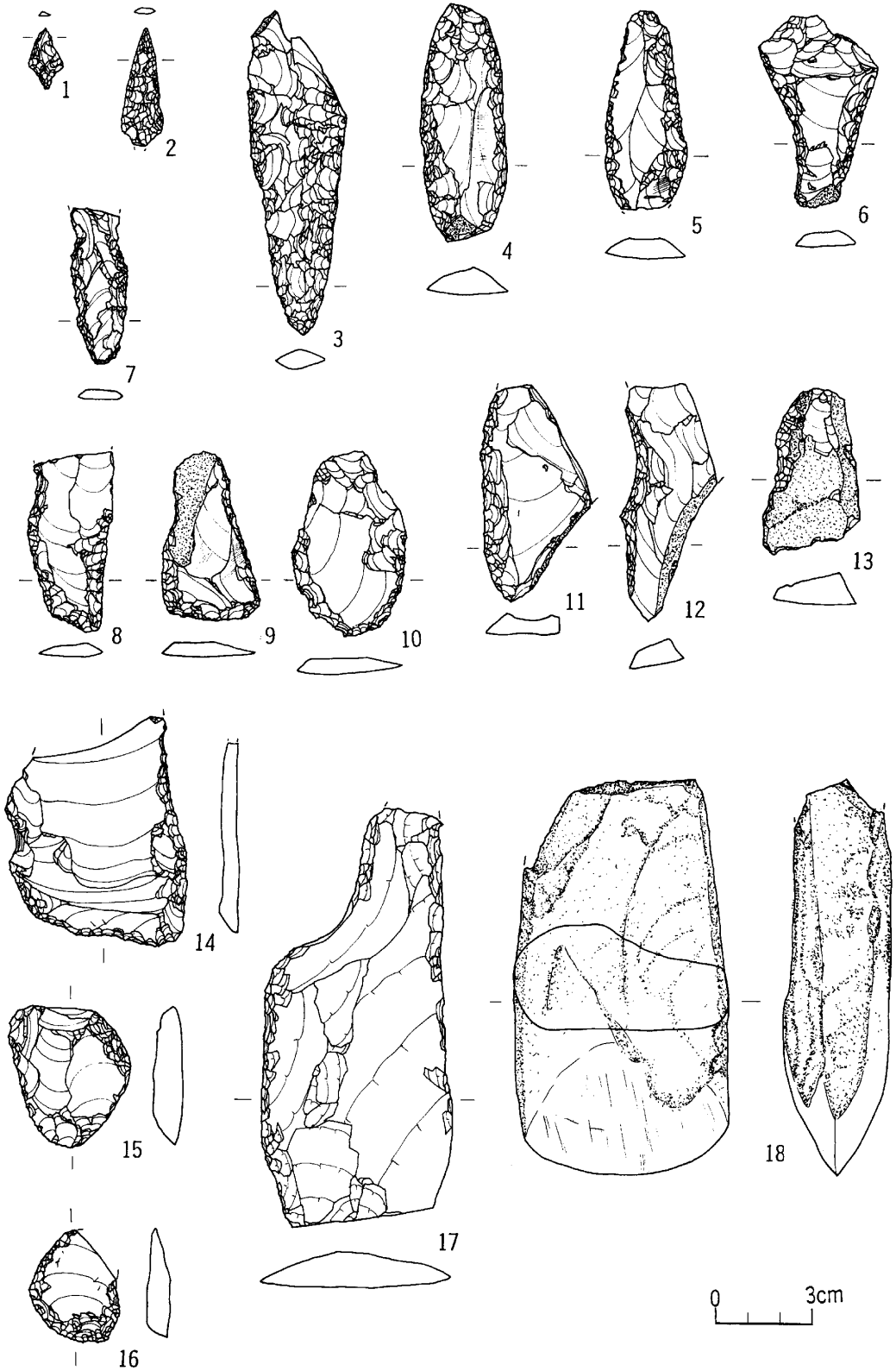
第307図 ピット115埋土(1~17)出土土器

小 括

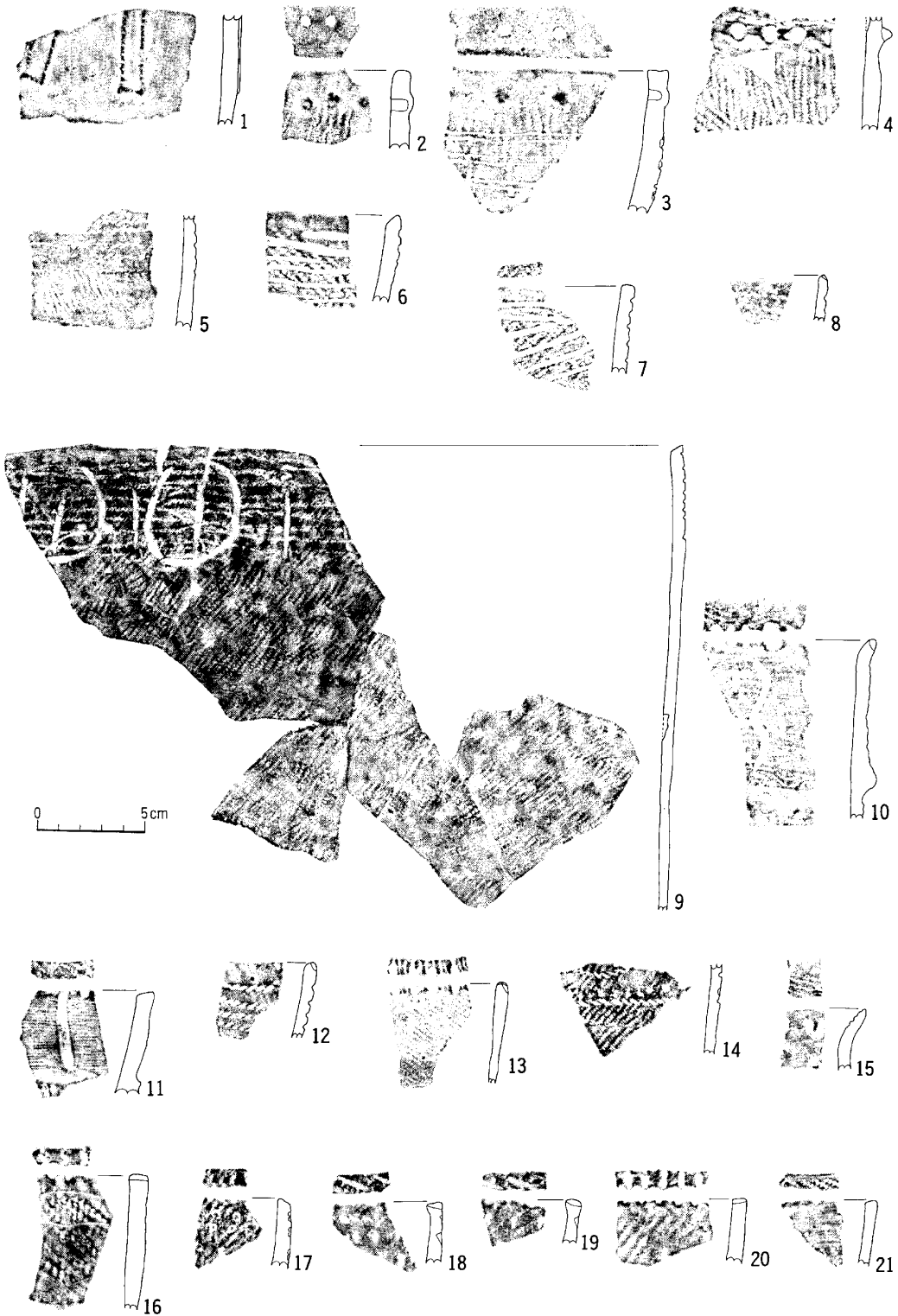
埋土からオホーツク文化貼付文土器が出土している。時期はこの頃のものであろう。



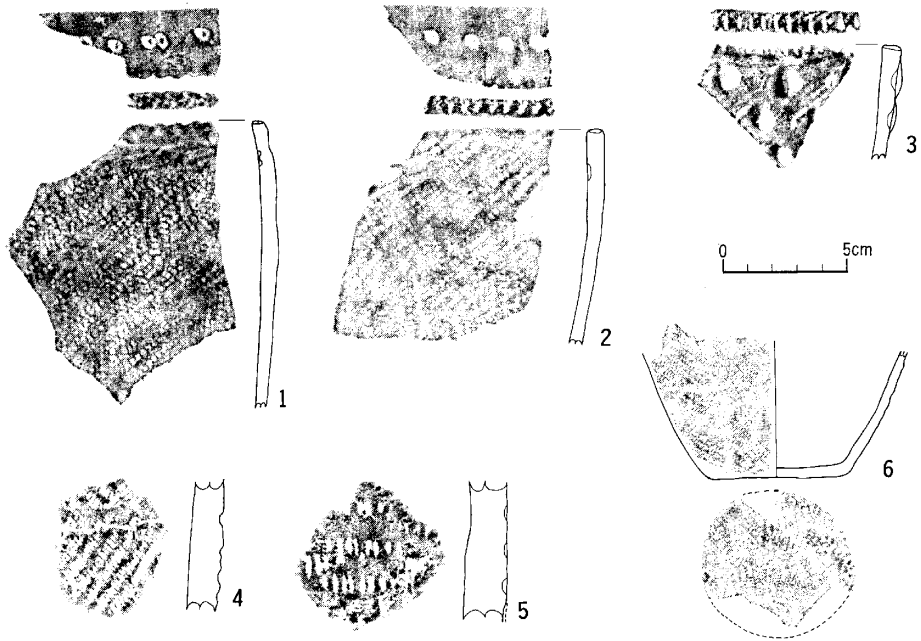
第308図 ピット115埋土(1~10)出土土器



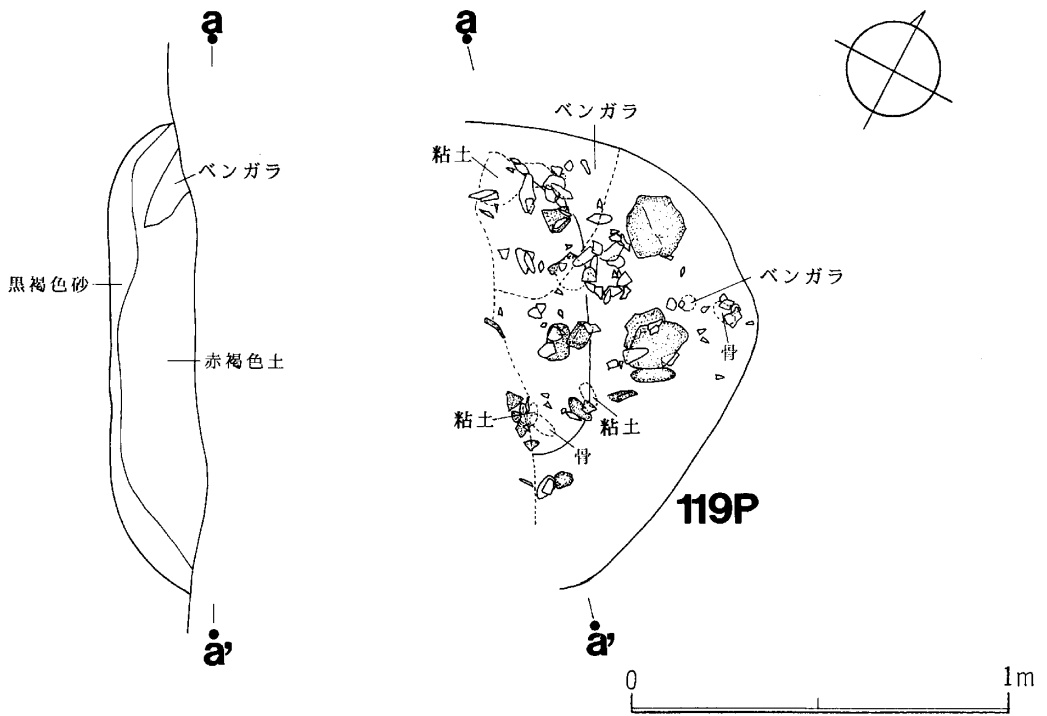
第309図 ピット115埋土(1~18)出土石器



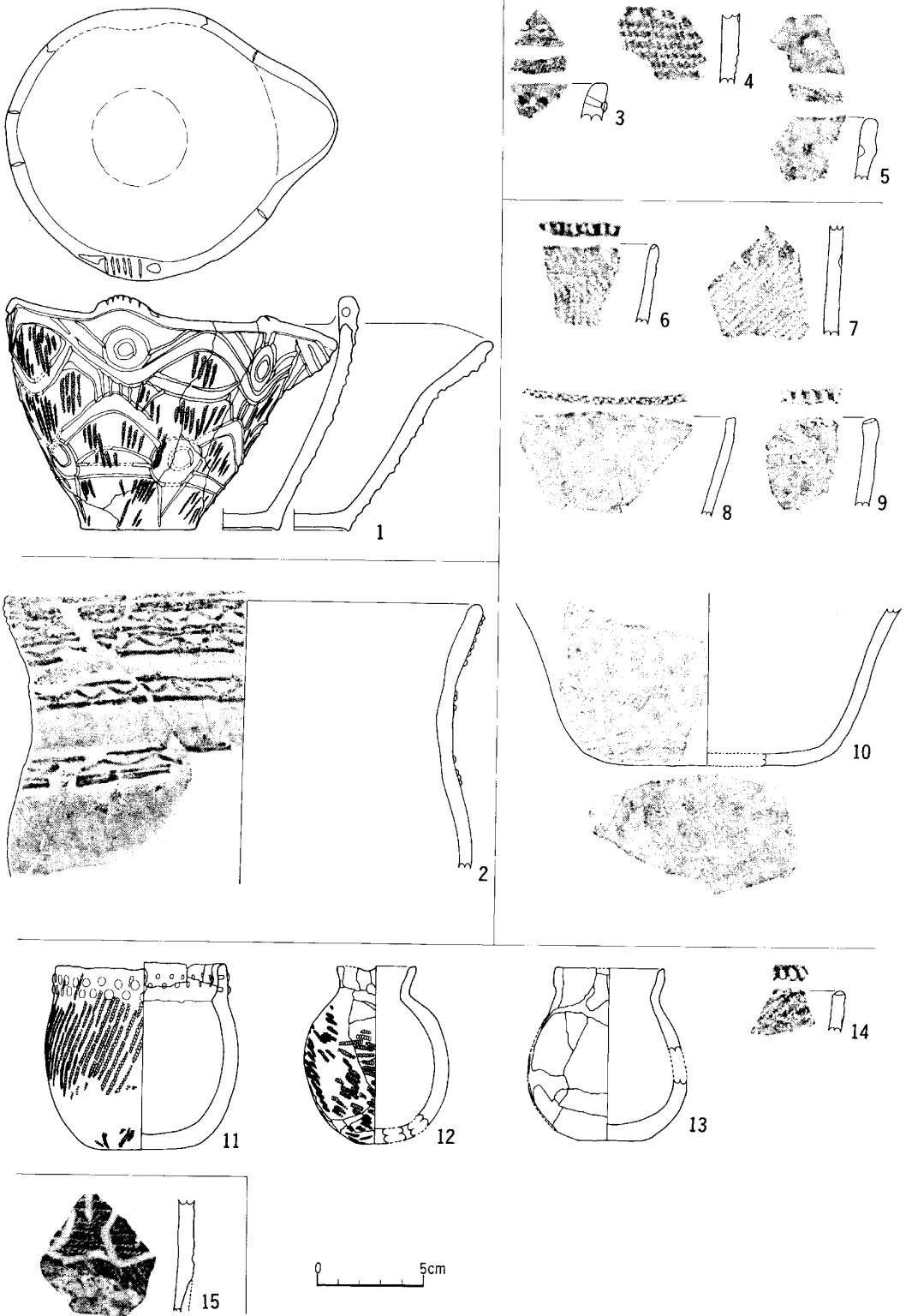
第310図 ビット116埋土(1~21)出土土器



第311図 ピット116埋土(1~6)出土土器



第312図 ピット119平面図



第313図 ピット117埋土(1)、ピット118埋土(2)、ピット119埋土(3~5)、ピット120埋土(6~10)、ピット121埋土(11~14)、ピット122埋土(15)出土土器

ピ ッ ト 119

遺 構 (第297、312図)

本ピットはB'69グリッドに位置する。

遺 物 (第313図-3～5、第314図-1～39、第315図-1・2、図版85-1～41)

埋土出土。3、4は宇津内IIa式。5は縄文晩期前葉であろう。

石器は第314図-1～21は無茎石鏃。22、23は有茎石鏃。24～29、37は両面加工ナイフ。30、32～35は削器。31は片面加工ナイフ。36は搔器。25、34、35はメノウ製。31は硬質頁岩製であり他は黒曜石製。38は泥岩製の片刃磨製石斧。39は青色泥岩製の片刃磨製石斧。第315図-1は柄部をもち、主要剥離面の縁辺部にも刃部をもつ玄武岩製のナイフ。2は磨石。これらの石器の他にナイフ片3点。削器3点。フレーク6点。石斧片2点が出土している。

ピ ッ ト 120

遺 構 (第297図)

本ピットはB'67グリッドに位置する。規模は直径約1.08mの不整形円形を呈する。壁高は皿状に緩く立ち上がり、高さは確認面から約12cmである。時期は不明である。

遺 物 (第313図-6～10)

埋土出土。6は続縄文前葉。10は底部に一条の横走沈線が施され、他はすべて縄文晩期中葉と思われる。

ピ ッ ト 121

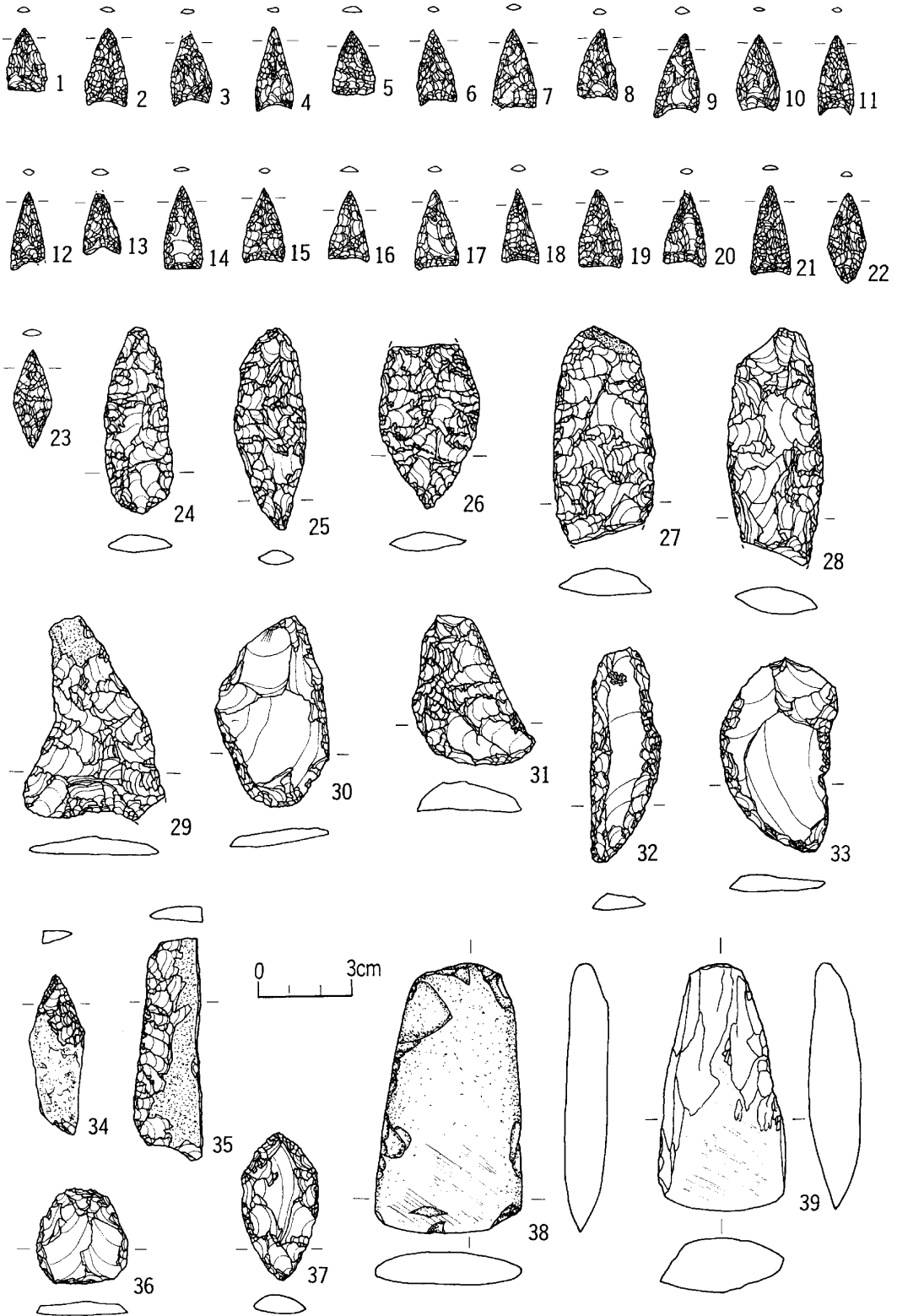
遺 構 (第297図、図版84-3)

本ピットはC'68グリッドに位置する。規模は長軸約0.70m、短軸約0.52mの楕円形を呈する。長軸を東西方向にもつ。壁高は確認面から約15cmである。遺存体は粘性のある赤褐色を呈する。遺物は南壁際から並んで出土してる。

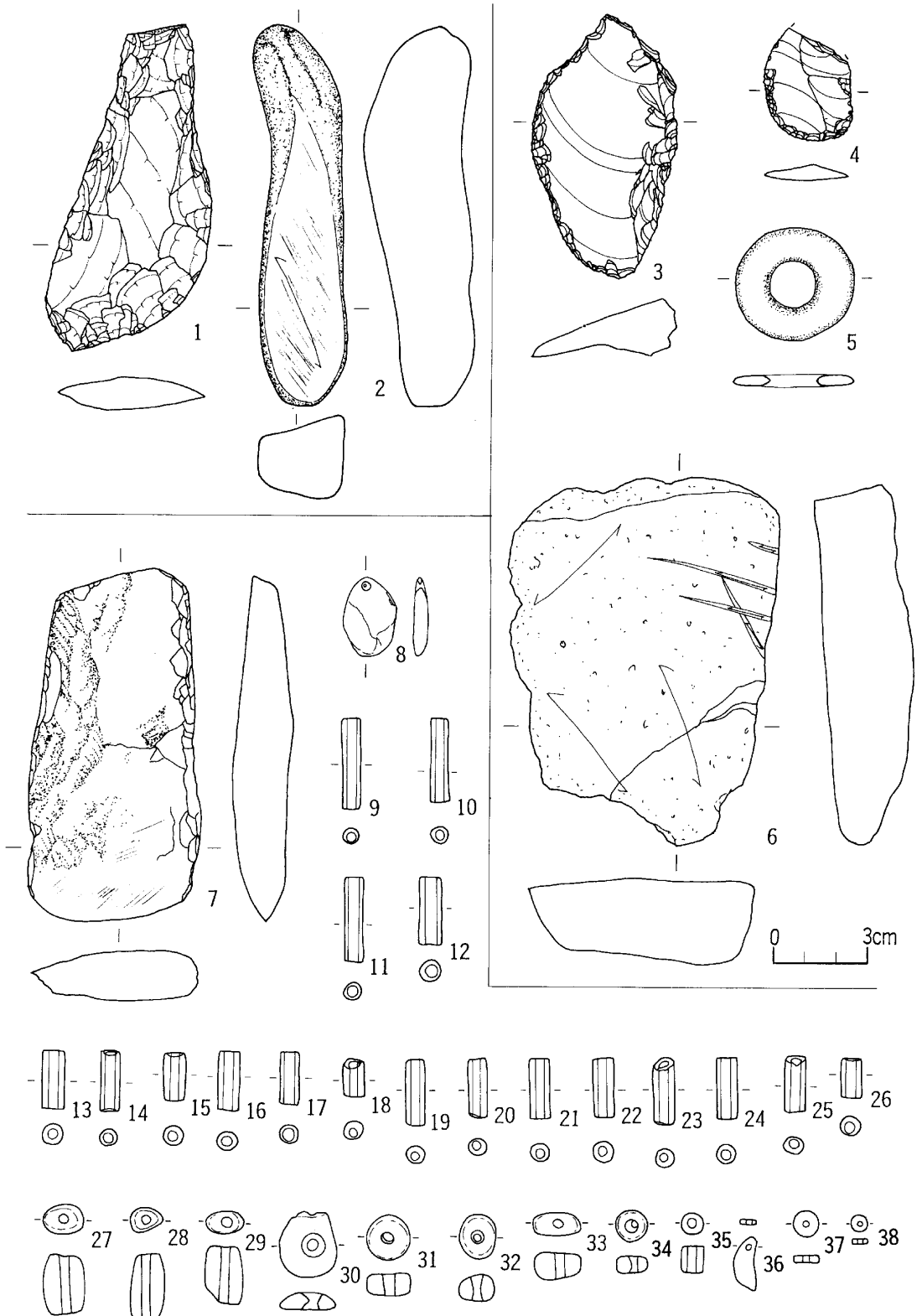
遺 物 (第313図-11～14、第315図-3～6、図版84-4～7)

第313図-11～13の3点は床面からやや浮いて出土した。3点とも底部は丸みを呈する。口縁部内側が張り出す特徴をもち突瘤が2段施される。12は横走縄文、13は無文の壺形土器である。14は縄文晩期中葉であろう。

第315図-3、4は削器。3は頁岩、4は黒曜石製。5は硬質頁岩製の装身具。6は軽石製の石皿。



第314図 ピット119埋土(1~39)出土石器



第315図 ピット119埋土(1・2)、ピット121埋土(3~6)、ピット122 a 床面(7~38)出土石器、石製品、管玉・琥珀玉

小 括

本ピット出土の土器底部は丸みをもち、完全に平底に移行していない。時期は続縄文前葉であろう。

ピ ッ ト 122

遺 構 (第242図)

本ピットはE'63グリッドに位置する。このピットの北壁は第II章で説明した砂丘の第2次形成地と第3次形成地との間の細長い窪みに堆積した黒色土層にあり、東壁は茶褐色砂層にある。上面で確認した段階で北壁側の確認はできず、東壁のみ検出した。規模は不明であるが、形態は円形を呈するようである。底面には幅約5～10cm、深さ約6cmの溝が壁際を全周する。壁高は確認面から約28cmである。

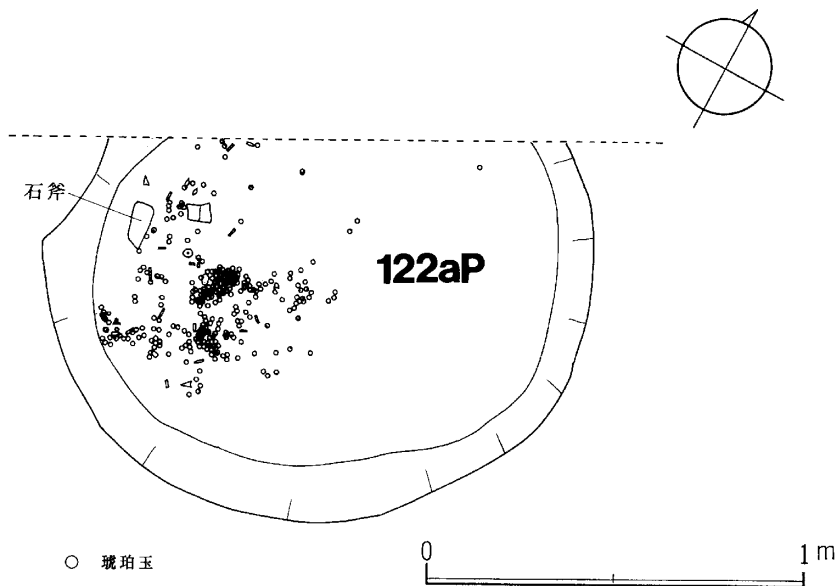
遺 物 (第313図-15)

ピット122では第313図-15の幣舞式が埋土から1点出土しているだけである。

ピ ッ ト 122a

遺 構 (第242、316図、図版86-1)

本ピットはE'63グリッドに位置する。北壁はピット122と同じ理由で検出できなかった。規模



第316図 ピット122a平面図



第317図 ピット112 a埋土(1~3)、ピット123埋土(4・5)、ピット124 a埋土(6~8)出土土器

は直径約1.50mの円形を呈する。壁高は確認面から約31cmである。糊状化した暗赤褐色の遺存体は底面の全域に広がっている。

遺 物 (第317図-1~3、第315図-7~38、第320図-1~5、図版86-2~19)

埋土出土。1は字津内IIb式。2は緑ヶ岡式。3は斜め方向からの突瘤文があるもので縄文晩期前葉であろう。

石器は床面から第315図-7~38の石器、装身具が出土している。7は青色泥岩製の片刃磨製石斧。8はペンダント。上部に表裏面から穿孔した幅約1mmの孔をもつ。貝製品。9~26は管玉。琥珀玉は破損品を含め229点出土している。形態は27~38に代表的なものを図示した。平玉状を主体に管玉状のものも見られる。埋土からは第320図-1~5が出土している。1~3は無茎石鏃。4、5は有茎石鏃。黒曜石製。

小 括

本ピットは副葬品に多量の琥珀玉と管玉をもつ。本遺跡において管玉をもつ土壌墓は後北C₁式のピット46、字津内IIb式のピット24があり、本ピットもこの時期に近いものと判断される。

ピ ッ ト 123

遺 構 (第297図)

本ピットはC'68グリッドに位置する。西壁側は攪乱を受け、東側はピット121に切られているため遺存は悪い。規模は長軸約1.50m、短軸約1mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約16cmである。時期は不明である。

遺 物 (第317図-4・5)

埋土出土。4は曲線的な沈線と刺突、5は縄文が施される。この2点は縄文晩期中葉と思われる。

ピ ッ ト 124 124a

遺 構 (第297図)

両ピットともC'68グリッドに位置する。ピット124は直径約0.60mの円形を呈し、深さは確認面から約25cmである。

ピット124aは西側の大半が攪乱を受けており、東側はピット124に切られている。長軸は不明であるが、短軸は0.90mを測る。形態は楕円形と思われる。壁高は確認面から約24cmである。時期は不明である。

遺 物 (第317図-6～8、第320図-6・7)

ピット124aからは第317図-6の後北C₂式。7は縄文。8は縄端圧痕文の下部に縄線が施された縄文晩期中葉の土器が埋土から出土している。石器は第320図-6の片面加工ナイフと7の側削器がある。

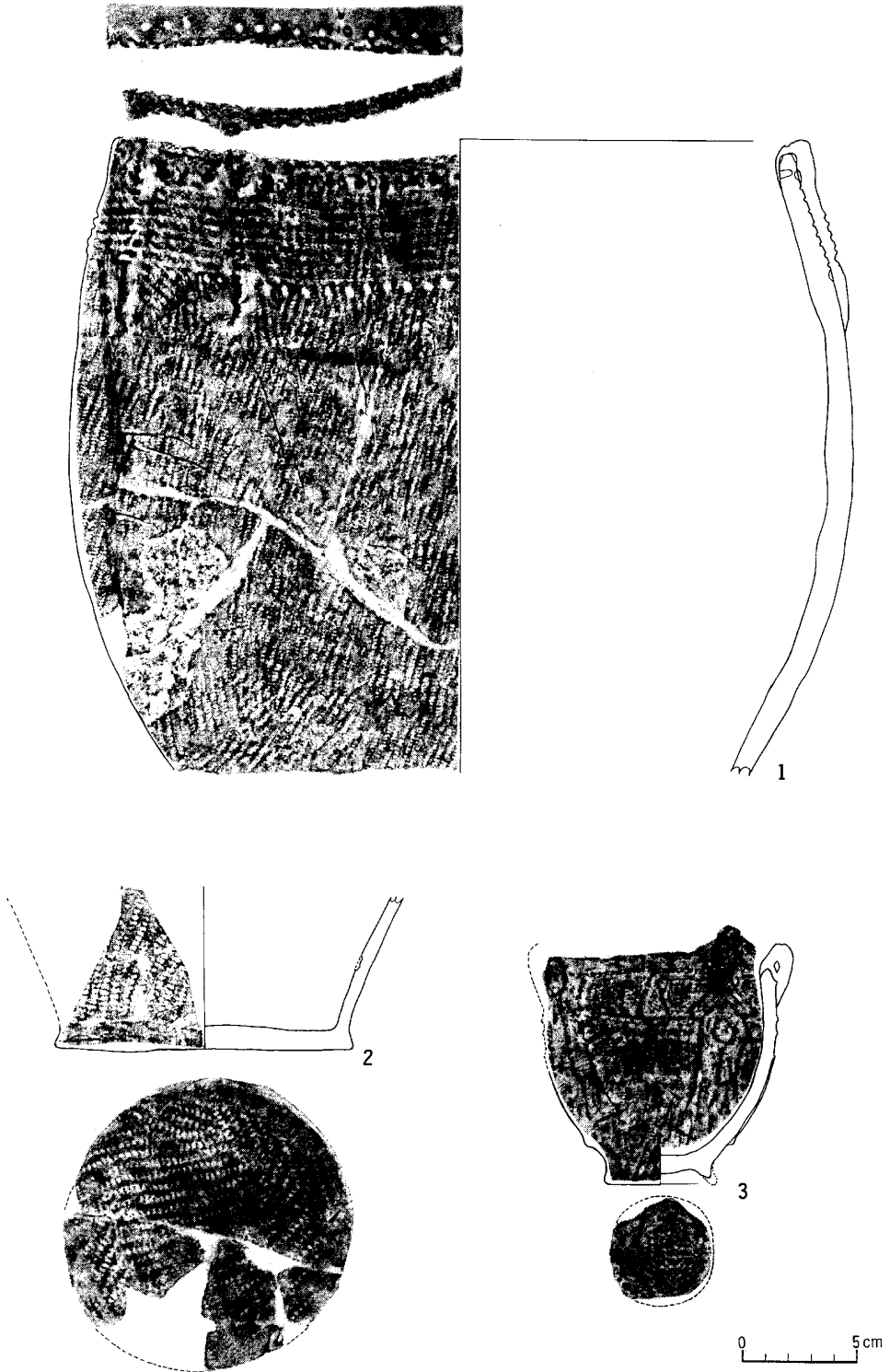
ピ ッ ト 125

遺 構 (第274図)

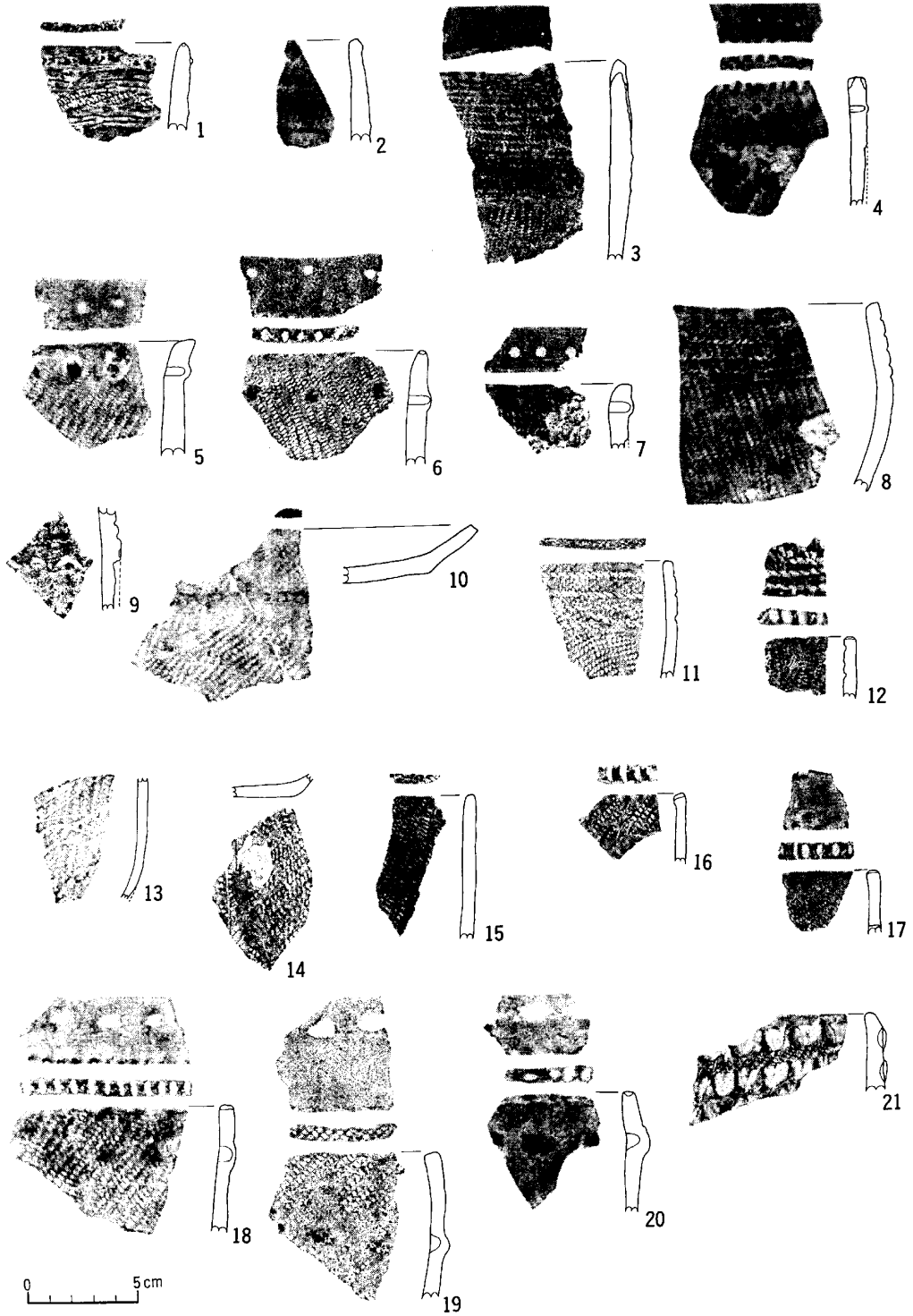
本ピットはH'59、G'60グリッドに位置する。規模は長軸約3.20m、短軸約2.2mの長方形を呈する。壁高は確認面から約34cmである。竪穴とするには柱穴がなく炉跡も認められないためピットとした。時期は不明である。

遺 物 (第318図-1～3、第319図-1～21、第320図-8～11、図版86-20)

埋土出土。1は宇津内IIa式。口縁部に2個の小突起をもち2本の縦の隆帯が垂下する。2は底部。3は宇津内IIb式。第319図-1は後北C₂式。2、3は宇津内IIb式。4～7は同IIa式。8は緑ヶ岡式。9は幣舞式。10は石皿。11、12は縄線文、13、14は沈線文、15、16は縄文が施さ



第318図 ピット125埋土(1~3)出土土器



第319図 ピット125埋土(1~21)出土土器

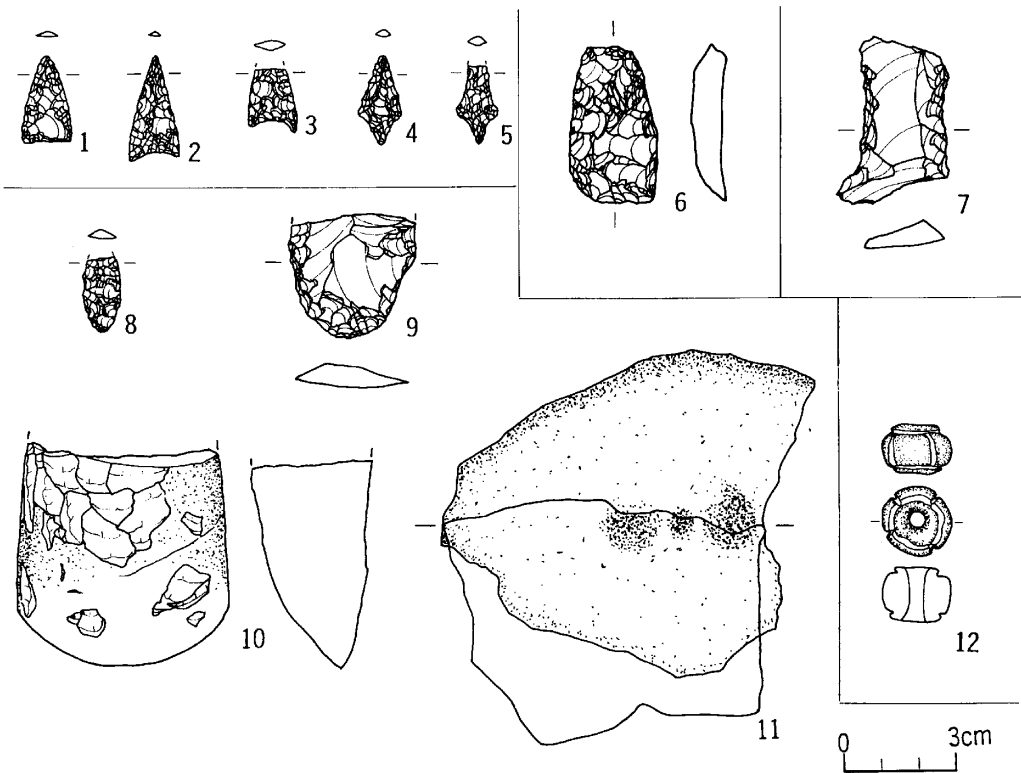
れる。17～20は斜め方向からの突瘤文、21は爪形文が施される。

石器は第320図- 8～11がある。8は有茎石鏃。9は削器。10は泥岩製の片刃磨製石斧。11は窪み石。他に図示していないが長さ28cm、幅11cmの石皿がある。

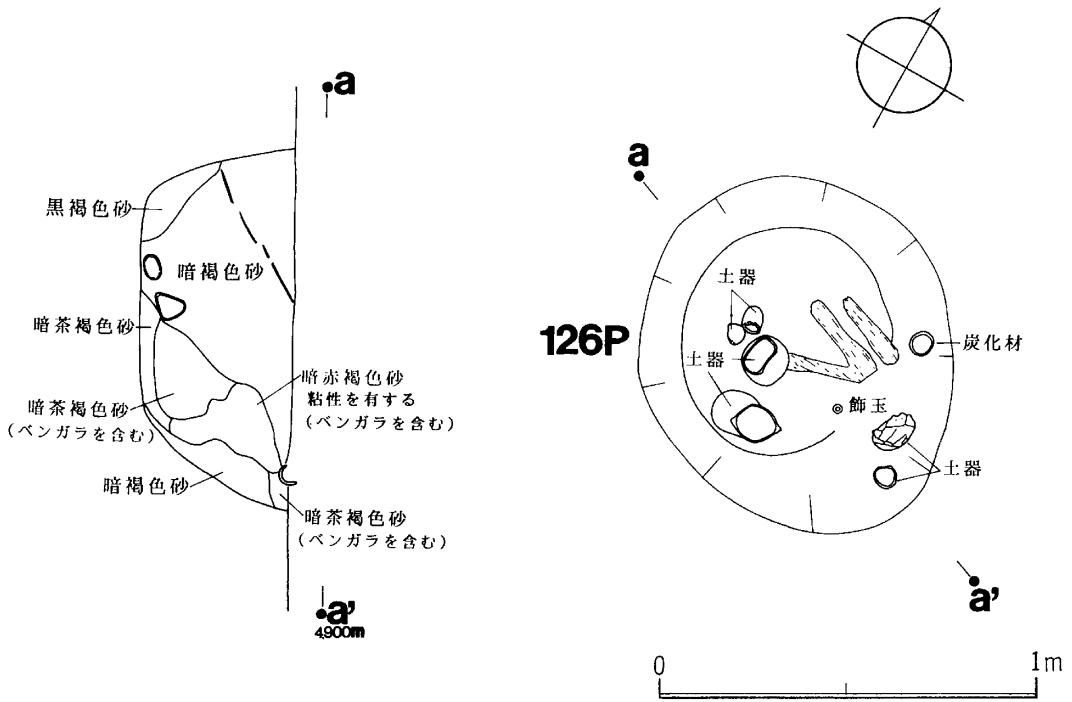
ピ ッ ト 126

遺 構 (第242、321図、図版87-1)

本ピットはF'63グリッドに位置する。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。頭部のある東壁側が開くものの他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺存体粘性のある暗赤褐色を呈する。埋土の上部から糊状化した遺体の痕跡が認められ、床面から約20cm浮いた位置から歯骨が検出された。大腿部もかろうじて確認することができた結果、遺存体は中央部からやや北東壁に寄った位置にあることが判明した。頭部は緩い傾斜の東壁面に載せた座葬で埋葬しているようである。土器は床面、ピット上部から出土している。床面の土器は腰



第320図 ピット122 a埋土(1～5)、ピット124埋土(6)、ピット124 a埋土(7)、ピット125埋土(8～11)、ピット126埋土(12)出土石器・石製品



第321図 ピット126平面図

部、ピット上部の土器は頭部付近から出土している。頭部の北側には直径約6cmの炭化材が輪状に残っている。深さは約16cmである。さらに幅約7~10cm、長さ約40cm、厚さ約5cmの炭化材がピット中央部から西壁にかけてみとめられ、遺存体を覆う埋土にも炭化粒子が含まれている。歯骨とほぼ同一レベルから樹皮片も出土しており、木質を利用したピットである可能性がある。

遺物 (第322図-1~6、第320図-12、図版87-2~8)

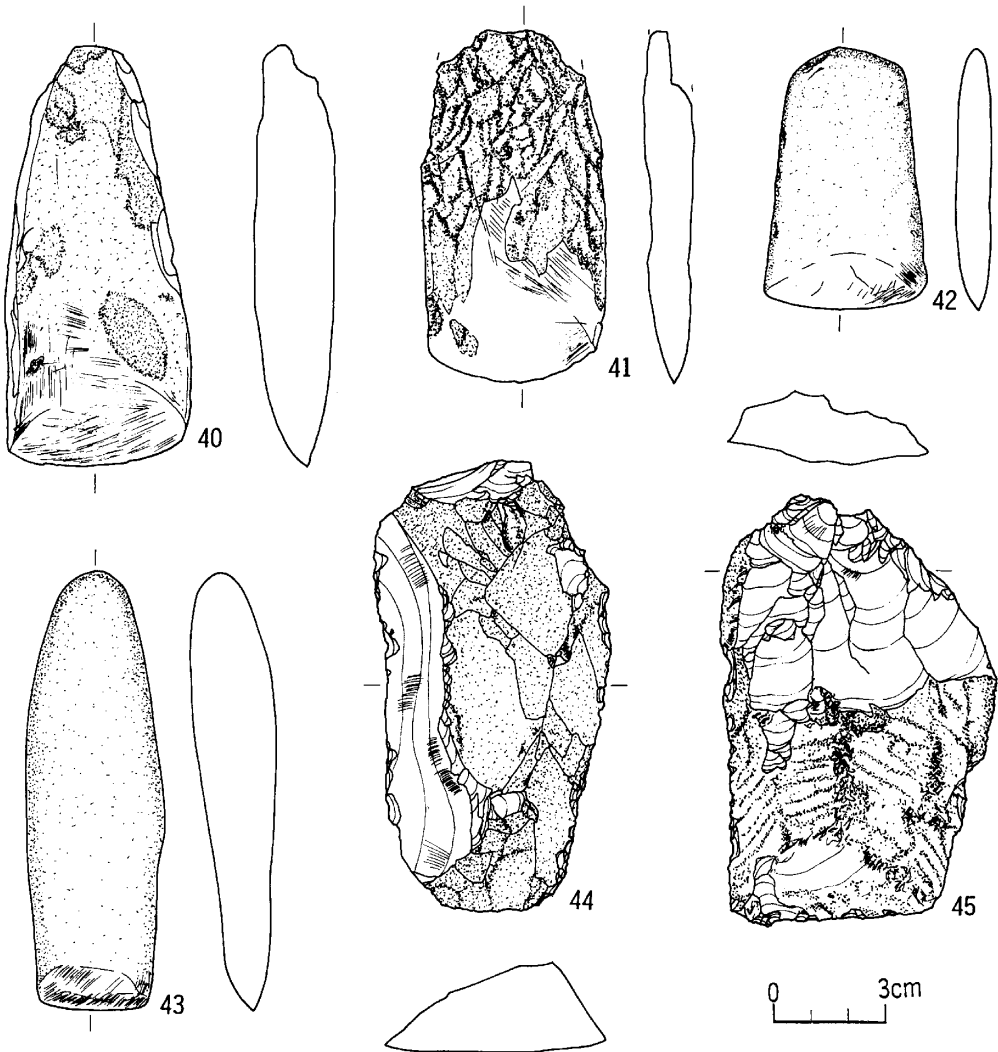
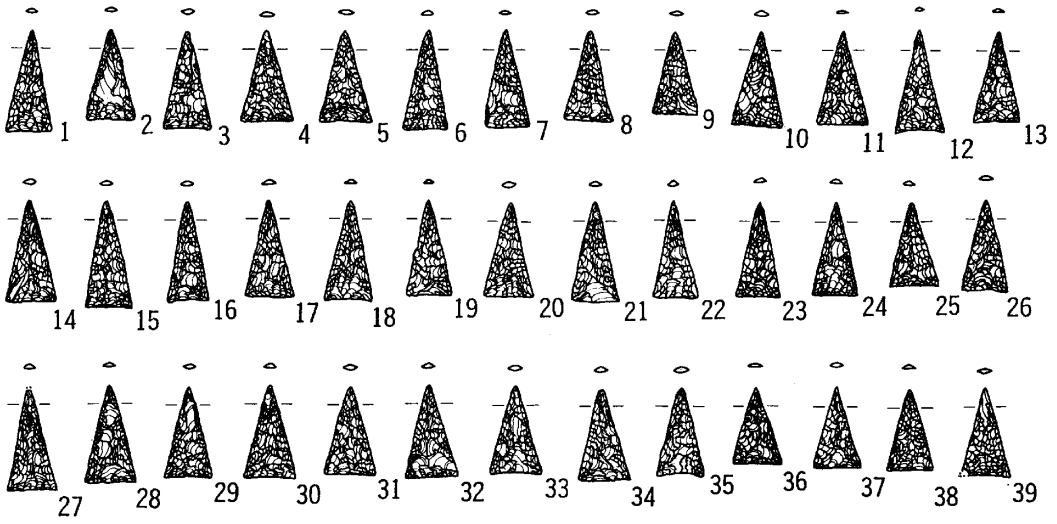
1は上面観が楕円形を呈し口縁部に2個吊り耳をもつ。底部は円形になる。器面は2個の円形沈線を縦の沈線で連結させたものが表面に2個、その反対側に1個、吊り耳下部に2個施され、実測図右側ではボタン状の貼付が施される。底部周辺には横走沈線、山形沈線、半截状施文具による刺突が施される。口縁部の一部が欠失する。2も上面観が楕円形、底部が平底の円形を呈する。口縁部は欠失するものの幅広の凸帯をもつ。器面は三角形の無文帯を残し縄線文を多様する。底部では縄線文を「ハ」字状に施す。3~5はミニチュアである。3点とも口縁部の一端に小突起をもつ。3は縄線文、4は円形刺突文、5は無文である。6は皿状の器形を呈する。上面観はあたかも亀を意匠しているように見受けられる。器面には1~2条の円形刺突が施される。口縁部の小突起内側に細い沈線が施される。

第320図-12は滑石製の装身具。両側から穿孔している。縁辺部に円形の刻線を描き、それぞ

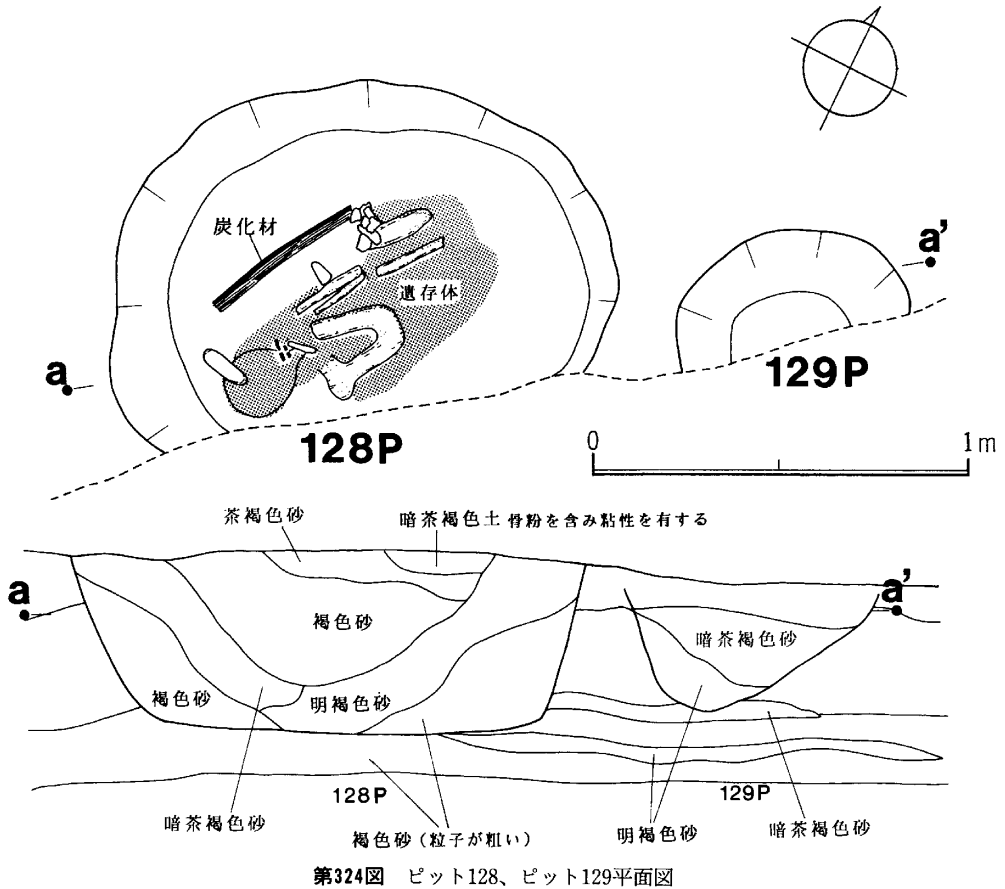


第322図 ピット126埋土(1~6)出土土器

常呂川河口遺跡



第323図 ピット127埋土(1~45)出土石器



第324図 ピット128、ピット129平面図

れを直線の刻線で連結させている。

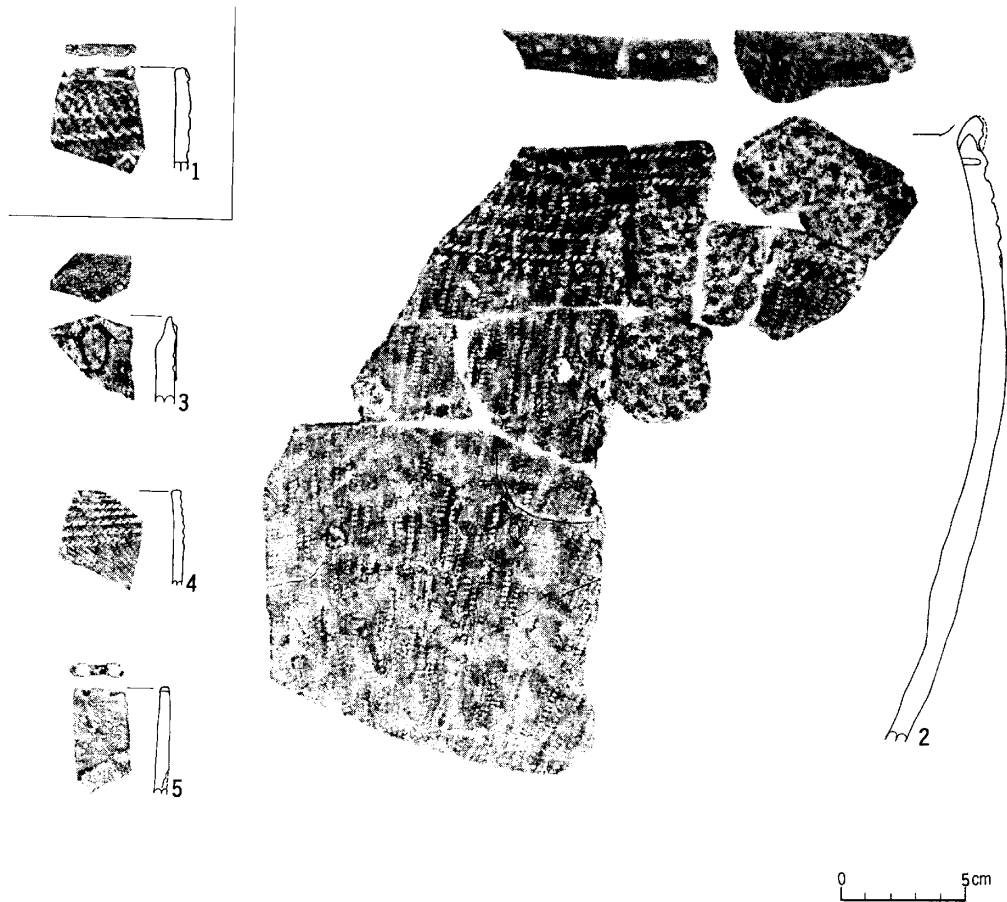
小 括

本ピットは縄文晩期中葉～後葉にかけての土壌墓と思われる。第322図-1に示した土器は幣舞式の特徴をもつものの、他の土器は古手の特徴を残している。埋葬形態は東頭位の座葬であろう。

ピ ッ ト 127

遺 構 (第242図)

本ピットはF'63グリッドに位置する。規模は長軸約1.10m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約25cmである。長軸は東西方向である。底面のほぼ全域に遺存体である暗茶褐色土があり部分的にベンガラが含まれている。歯骨は西壁際近くから検出された。歯骨に近接して白色粘土、石斧も認められる。遺物は北壁と南壁の間から出土している。北壁際ではベンガラのまとまりと先端部を東に向けた石鎌と石斧及び約2～3cmの樹皮がある。南壁際には石斧、原石面を残す大型剥片がある。これらの副葬品は遺存体を取り囲む様に置かれたのであろう。



第325図 ピット127埋土(1)、ピット128埋土(2～5)出土土器

遺物 (第325図-1、第323図-1～45)

1は埋土から出土した縄文晩期幣舞式。

第323図-1～39は無茎石鏃。40～43は片刃の磨製石斧。40～42は青色泥岩製。43は緑色泥岩製である。44、45は原石面を残す大型剥片。黒曜石製。他に白色粘土がある。

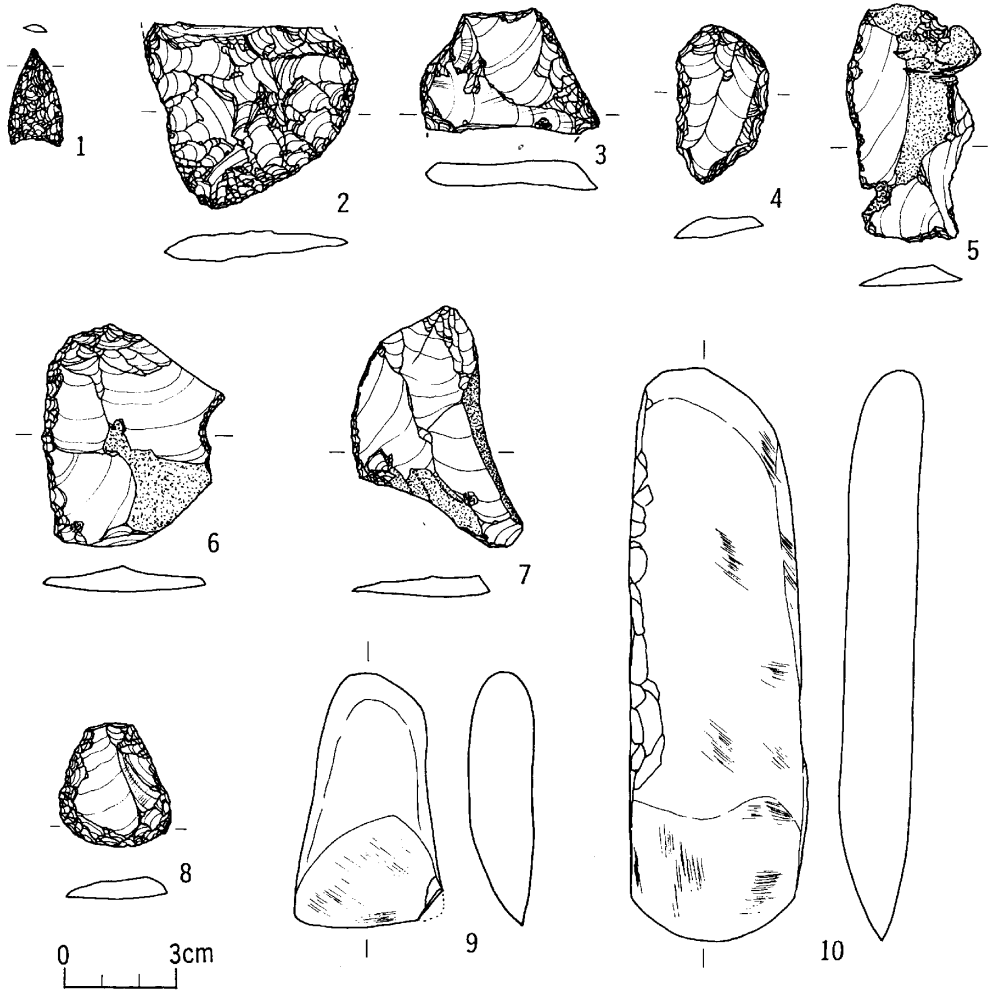
小括

本ピットは続縄文期の土壌墓と思われるが詳細な時期は不明である。遺存体の周りに石器を主体とした副葬品を置いている。頭位は西方向である。

ピット 128

遺構 (第347、324図、図版88-1)

本ピットはF'69グリッドに位置する。西壁側が下水道工事により破壊を受けているものの、長軸約1.38m、短軸約1mの楕円形を呈すると思われる。埋土の各層には拳大の角礫が多量に



第326図 ピット128埋土(1~10)出土石器

含まれ、床面近くに粘性を有した黄褐色土の遺存体が検出され、取り上げできなかったが、上腕部、大腿部の骨も残存している。頭部は西一北方向にある。遺存体の脇に幅約2~3、長さ約45cmの炭化材が検出された。壁側に面する部分が強い赤味を帯びており、弓等の木製品等の可能性がある。壁高は確認面から約46cmを測る。

遺物 (第325図-2~5、第326図-1~10)

埋土出土。2は宇津内IIa式。3は同IIb式。4は幣舞式。5は縄文晩期中葉。

石器は第326図-1~10がある。1は無茎石鏃。2は両面加工ナイフ。3~7は側削器。8は搔器。9、10は片刃磨製石斧。2点とも緑色泥岩製。

小括

ピットの形態から続縄文の土壌墓と思われるが、詳細な時期は不明である。頭位は西一北方向にある。

ピット 129

遺構 (第324、347図)

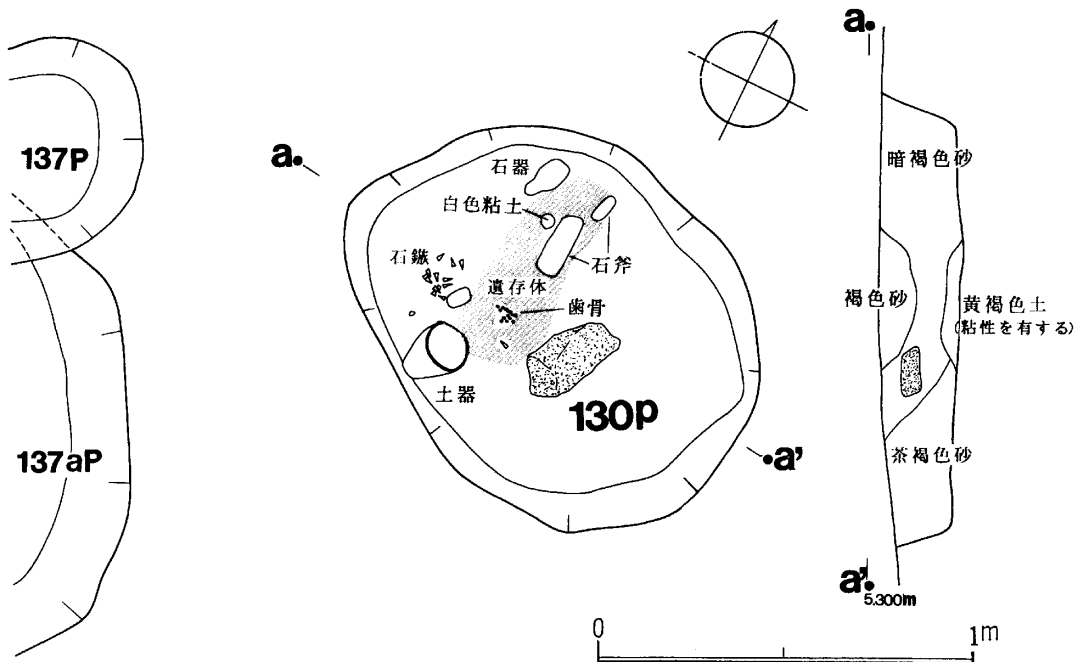
本ピットはG'69グリッドに位置する。約半分を下水道管埋設により破壊されているものの規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約35cmである。遺物は出土していない。

ピット 130

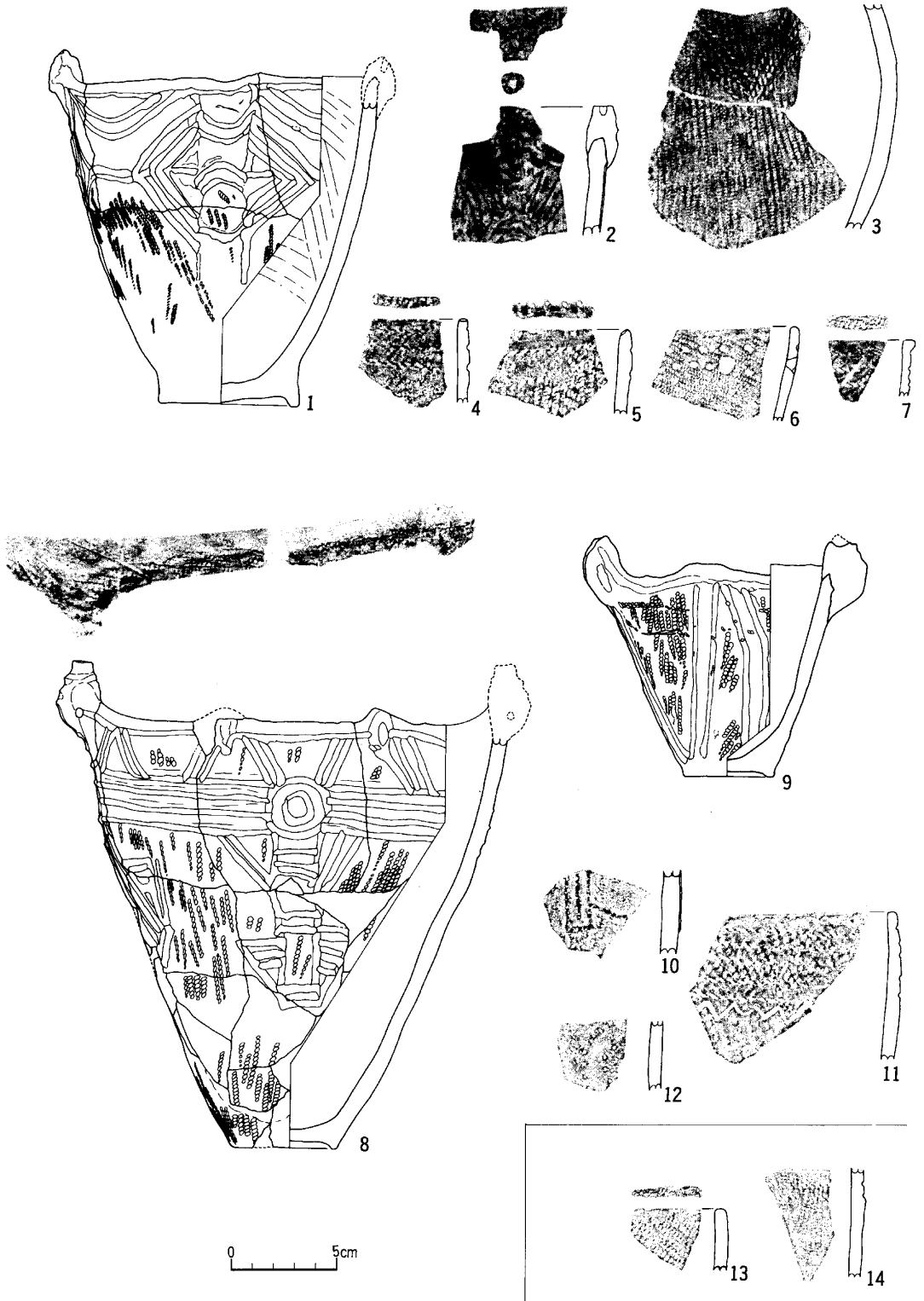
遺構 (第242、327図、図版89-1)

本ピットはF'63グリッドに位置する。ピット157と近接するもので、規模は長軸約1.20m、短軸0.90mの楕円形を呈する。遺存体は黄褐色を呈する。糊状化した遺存体は長軸面に葬られたのではなく短軸面のズレた位置にある。頭部は東方向にある。土器は頭部にあり、口縁部をやや頭部に向けた状態で出土している。本来は正立の状態で置かれていたのであろう。石器は遺存体の上部から出土している。

E'64

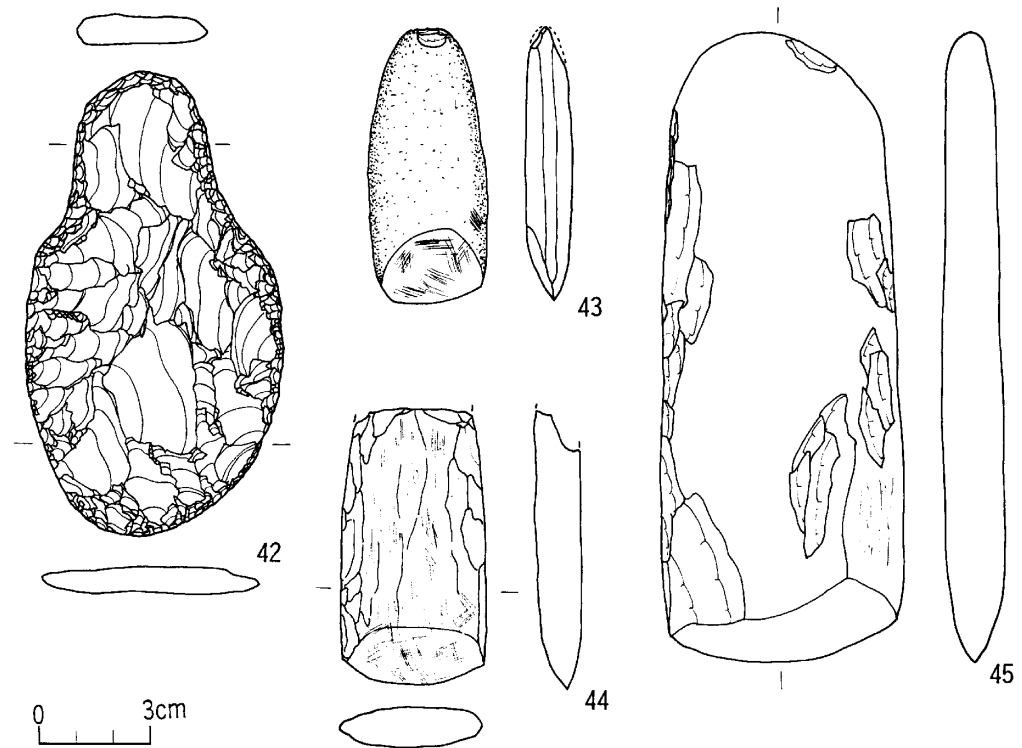
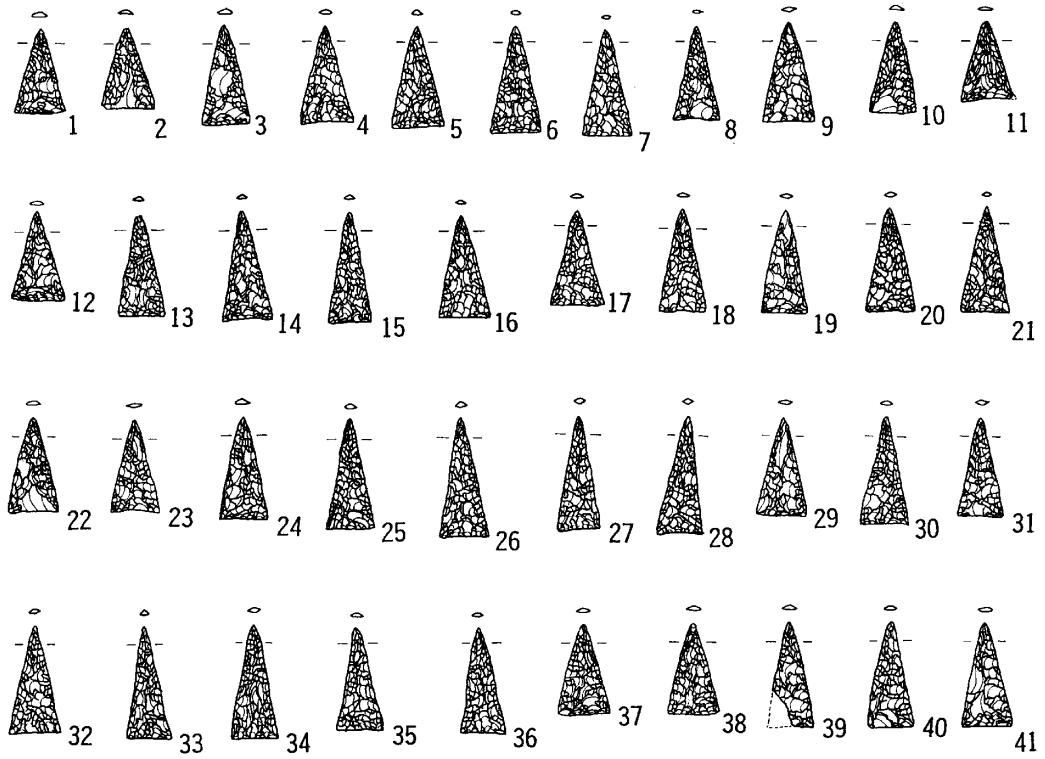


第327図 ピット130平面図



第328図 ピット130床面(1)・埋土(2~7)、ピット132床面(8・9)・埋土(10~12)、ピット132 a 埋土(13・14)出土土器

常呂川河口遺跡



第329図 ピット130埋土(1~45)出土石器

遺 物 (第328図-1～7、第329図-1～45、図版89-2～47)

1は床面出土。口縁部に2個の大突起をもつ後北C₁式。

2は宇津内IIb式。3は縄線文を「V」字状に施したもので縄文前葉であろう。4は緑ヶ岡系。5、7は縄線文、6は縄端圧痕文が施されたもので縄文晩期中葉と思われる。

石器は第329図-1～45がある。1～41は無茎石鏃、42は両面加工ナイフ。43～45は片刃の磨製石斧。

小 括

本ピットは縄文後北C₁式期の土壌墓である。頭位は東である。

ピ ッ ト 131**遺 構** (第242、332図)

本ピットは14号竪穴の西壁、G'63グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約44cmである。

図示していないが縄文の胴部片3点と縄文晩期の胴部片が1点出土している。

ピ ッ ト 132**遺 構** (第242、330図、図版90-1)

本ピットはF'63グリッドに位置する。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁高は確認面から約34cmである。遺存体の痕跡は認められなかった。東壁に密着して長さ35cmほどの円礫がピット上部から底面にかけて認められる。土器は西壁際から内側に倒れ込む状態で出土した。石器は円礫のある東壁際からまとまって出土した。石鏃の先端部は基本的に壁側に向けている。

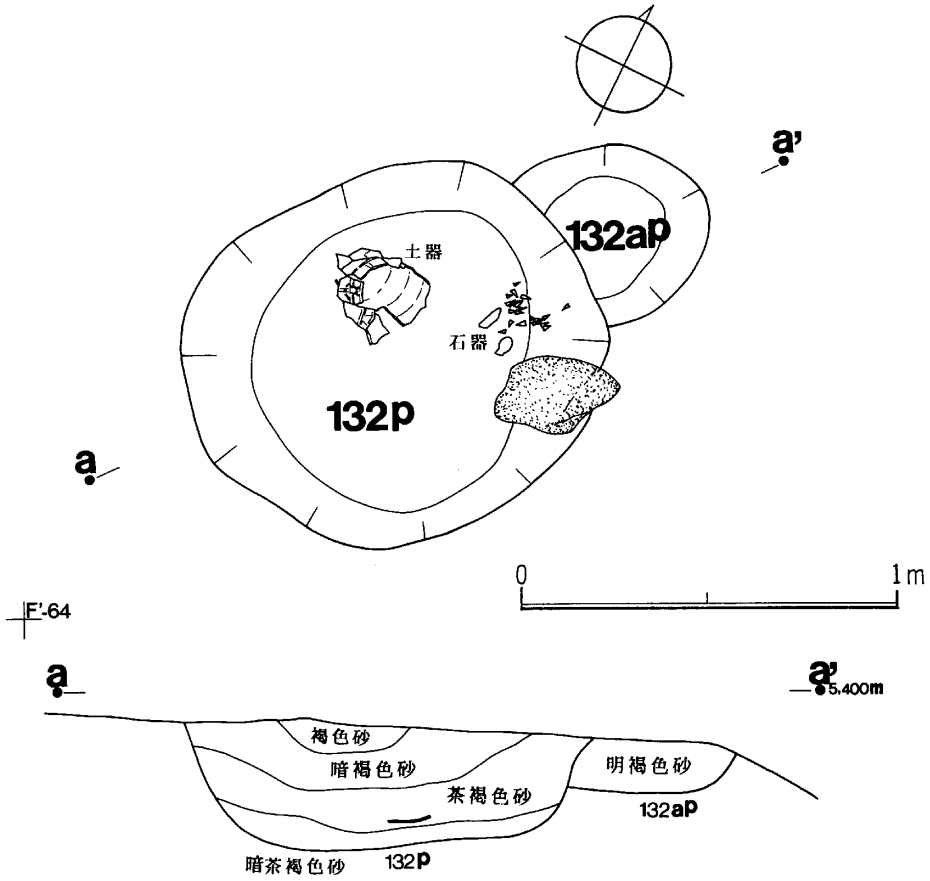
遺 物 (第328図-8～12、第331図-1～37、図版90-2～37)

第328図-8は床面出土であり9は8の内部から検出した。8は1対の吊り耳、2個1対の小突起を持つがそれぞれ1個は欠失する。吊り耳、小突起の下部に同心円が施され隆帯で連結される。9は1対の吊り耳と小突起をもつが吊り耳は貫通していない。縄線文の上から2本単位の隆帯が垂下する。10～12は埋土出土。10は宇津内IIb式。12は幣舞式。13は縄文晩期中葉の刺突文。

石器は第331図-1～37が埋土から出土した。1～32は無茎石鏃。33は両面加工ナイフ、34は片面加工ナイフ、35、36は側削器。石器は全て黒曜石製。37は琥珀玉。

小 括

本ピットに遺存体は認められないが土器、石器、琥珀玉などをもつことから土壌墓と判断される。時期は縄文宇津内IIb式である。



第330図 ピット132、ピット132a 平面図

ピ ッ ト 132a

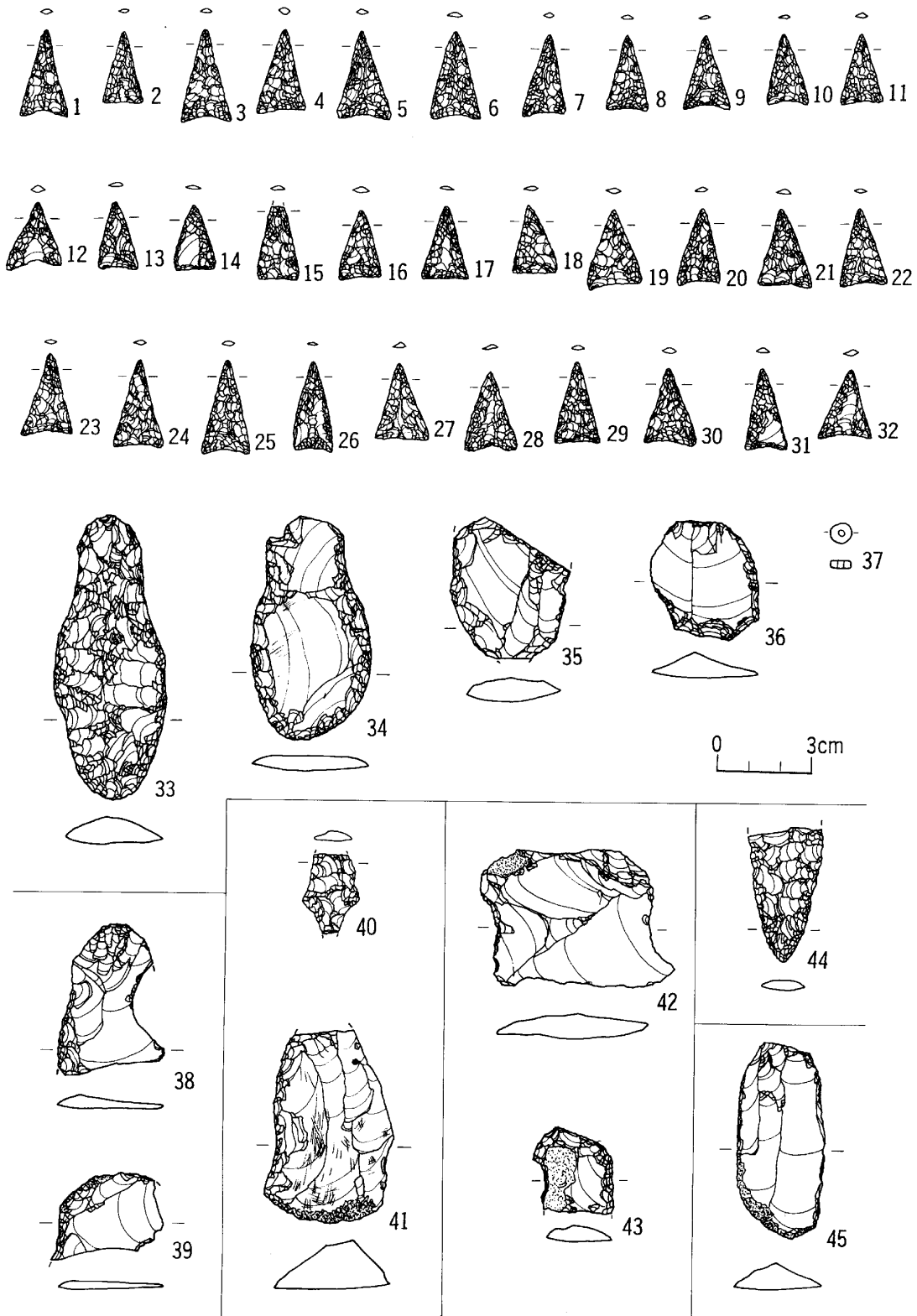
遺 構 (第330図)

西壁をピット132に切られているものの規模は直径約0.48mの円形を呈する。壁高は確認面から約13cmである。

遺 物 (第328図-13・14、第331図-38・39)

埋土出土。第328図13は縄文晩期中葉、14は同後葉の幣舞式。

第331図-38、39は破損しているが側削器である。



第331図 ピット132埋土(1~37)、ピット132 a埋土(38・39)、ピット133埋土(40・41)、ピット133 a埋土(42・43)、ピット134埋土(44)、ピット136埋土(45)出土石器

ピ ッ ト 133

遺 構 (第242、332図、図版91-1)

本ピットはG'63、64グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約55cmである。セクション図に示すように薄手の角礫が底面に向かって突き刺さる状態で出土し、北壁上部にも大型角礫がみられる。底面には暗赤褐色を呈した粘性のある遺存体が広がり、土器は西壁側から倒れた状態で出土している。

遺 物 (第333図-1～9、第331図-40・41、図版91-2)

1は西壁際の床面から出土した。口縁部に2個の大突起、2個の小突起をもつと思われるが2個の大突起は欠失している。突起からは「ハ」字状の隆帯が垂下し、各隆帯間には菱形の隆帯が施された宇津内IIb式。器面の一部に幅1cmほどの赤色顔料が付着している。埋土からは2～9が出土している。2、3は宇津内IIb式。4～6は幣舞式。7は縄文、8、9は刺突文が施された縄文晩期中葉。

石器は第331図-40の有茎石鏃、41の側削器がある。41には使用痕が観察される。2点とも黒曜石製。他に41同様に原石面を残す側削器1点と剝片5点が出土している。

小 括

本ピットは続縄文宇津内IIb式期の土壌墓である。

ピ ッ ト 133a・133b

遺 構 (第242、332図)

ピット133aはピット133に北壁側が削られているため形態は不明である。短軸は約0.64m、深さは確認面から約25cmである。

ピット133bもピット133に南側を切られている。形態は楕円形であろう。短軸は約0.60mであり、深さは確認面から約24cmである。

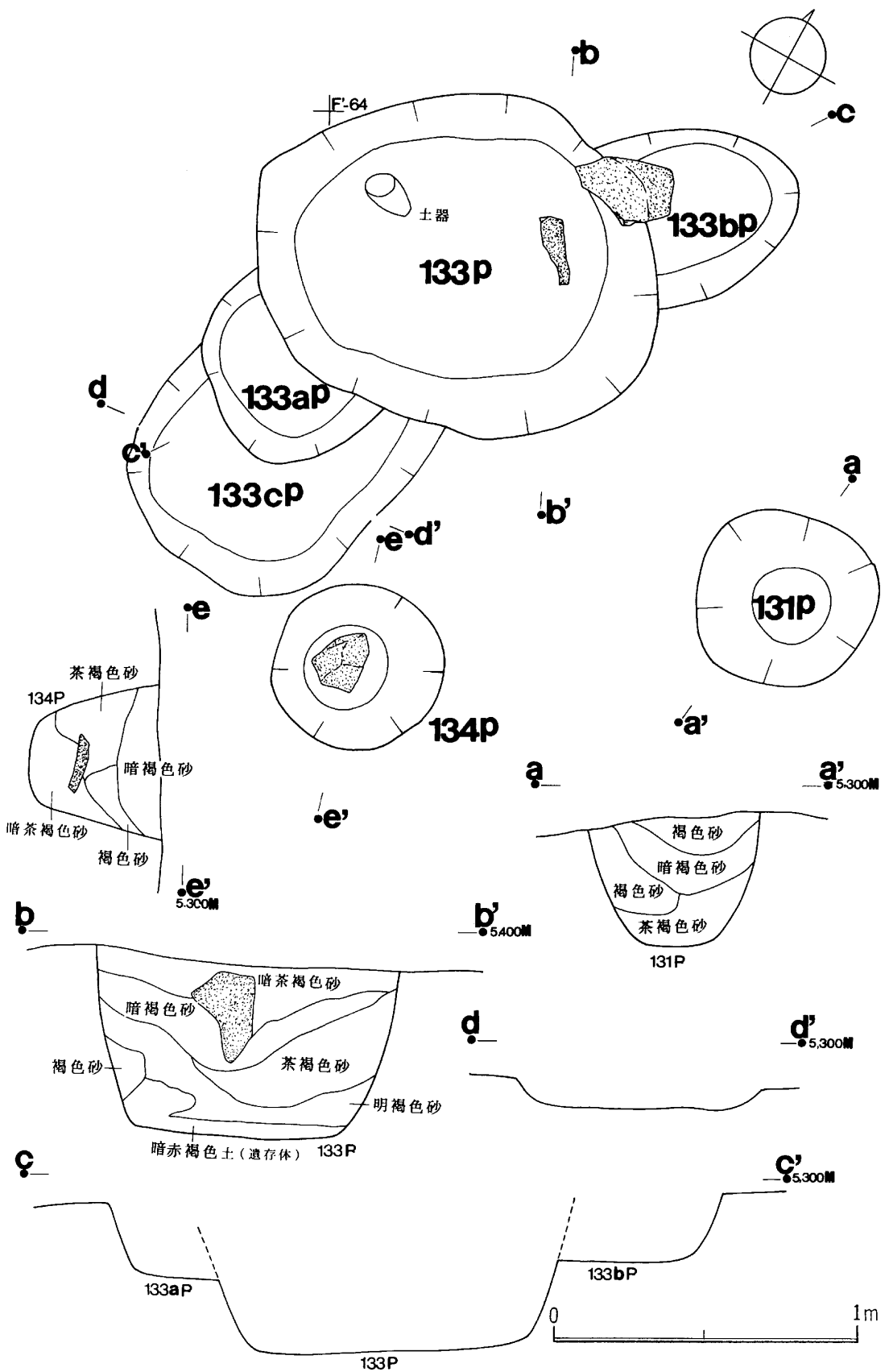
遺 物 (第333図-10・11、第331図-42・43)

ピット133aからは第333図-10の縄文晩期がある。石器は第331図-42、43の削器がある。ピット133bからも11の縄文晩期が出土している。

ピ ッ ト 133c

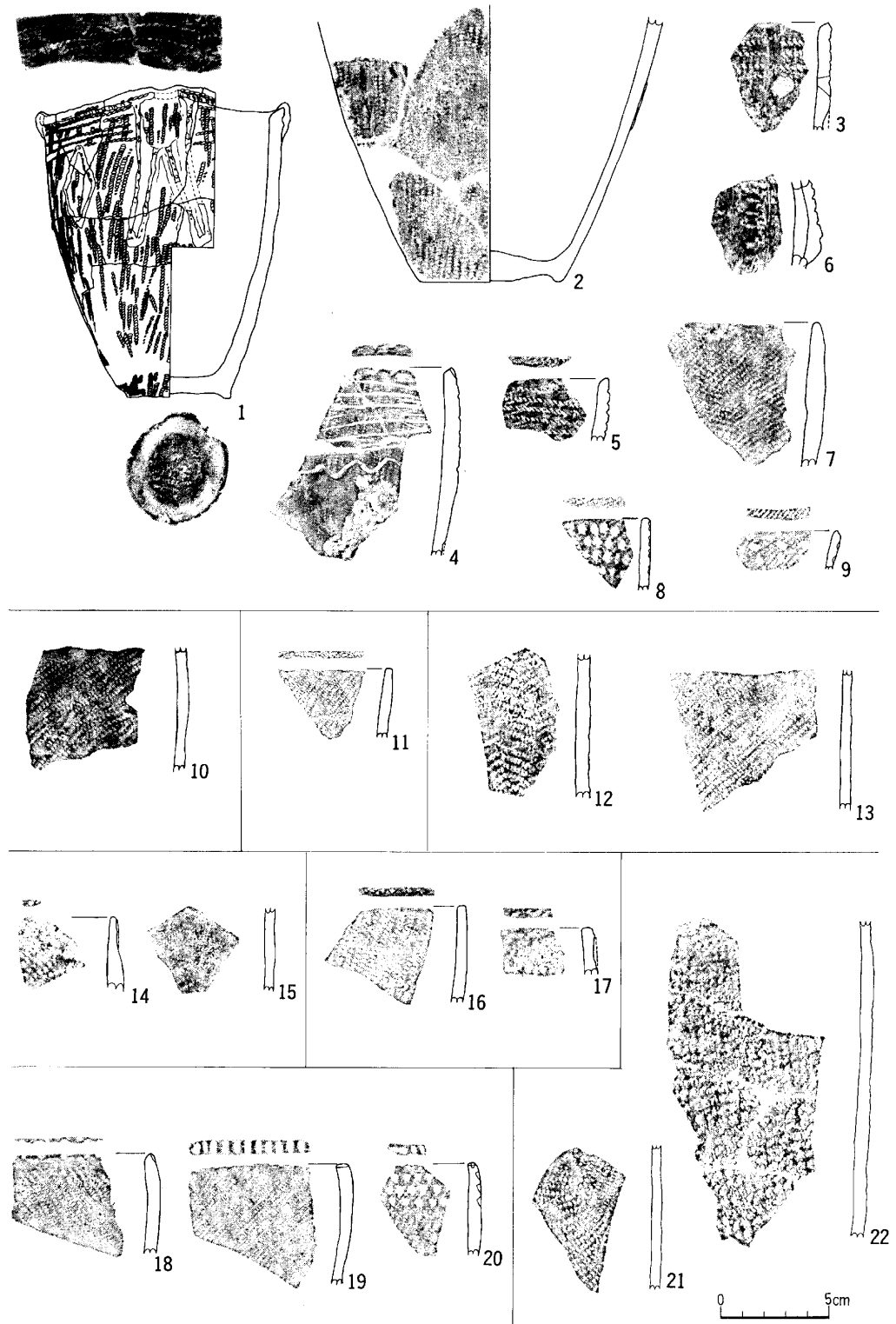
遺 構 (第242、332図)

ピット133の南側にある。北壁側をピット133及び133aに切られている。形態は楕円形を呈す



第332図 ピット131、ピット133、ピット133 a、ピット133 b、ピット133 c、ピット134平面図

常呂川河口遺跡



第333図 ピット133床面(1)・埋土(2~9)、ピット133 a 埋土(10)、ピット133 b 埋土(11)、ピット134埋土(12・13)、ピット135埋土(14・15)、ピット136埋土(16・17)、ピット137埋土(18~20)、ピット137 b 埋土(21・22)出土土器

と思われる。規模は短軸約0.98mである。壁高は確認面から約10cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 134

遺 構 (第242、332図)

本ピットはG'63グリッドに位置する。規模は直径約0.55mの円形を呈する。壁高は確認面から約42cmである。底面近くから偏平な角礫が出土している。時期は不明である。

遺 物 (第333図-12・13、第331図-44)

埋土出土。2点とも縄文晩期である。第331図-44は両面加工ナイフの先端部。

ピ ッ ト 135・135a

遺 構 (第242図)

両ピットはE'63グリッドに位置する。ピット135の規模は長軸約0.95m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。床面中央部に直径約20cm、深さ7cmの小ピットがある。

ピット135aは北壁の一部をピット135に切られている。形態は長軸約0.95m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約16cmである。

遺 物 (第333図-14・15)

14、15はピット135の埋土から出土した。2点とも縄文晩期である。

ピ ッ ト 136

遺 構 (第242図)

本ピットは12号壁穴の北壁に位置するが、北壁側を12号壁穴に切られている。規模は長軸約1.40mの楕円形を呈し、壁高は確認面から21cmを測る。底面に暗赤褐色の遺存体が認められる。時期は不明である。

遺 物 (第333図-16・17、第331図-45)

埋土出土。2点とも縄文晩期中葉であろう。石器は第331図-45の側削器がある。

ピ ッ ト 137・137a

遺 構 (第242図)

両ピットはF'63、64グリッドに位置する。ピット137の規模は直径約1.20mの楕円形を呈する。

壁高は確認面から約70cmである。

ピット137aはピット137の北壁側を切り込んで構築している。規模は直径約0.60mの円形を呈する。深さは確認面から約19cmである。

遺物 (第333図-18～20)

ピット137の埋土出土である。18は縄文晩期後葉の幣舞式。19、20は同晩期中葉のもので20は刺突が施される。ピット137aから遺物は出土していない。

ピット 137b・137c

遺構 (第242図)

ピット137bはピット137cの埋土内にあり、ピット137に東壁の一部を切られている。形態は長軸約0.90m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

ピット137cは直径約1.40mの方形を呈する。壁高は確認面から約64cmである。

遺物 (第333図-21・22、第335図-1～7)

ピット137bからは第333図-21、22の縄文晩期の胴部片が出土している。ピット137cからは第335図-1～7が埋土から出土している。すべて縄文晩期である。1は縄線下に爪形文が交互に施されるが施文時の盛り上がりはない。6、7は無文であり、7は口縁下に縄線文が1条施される。

ピット 138

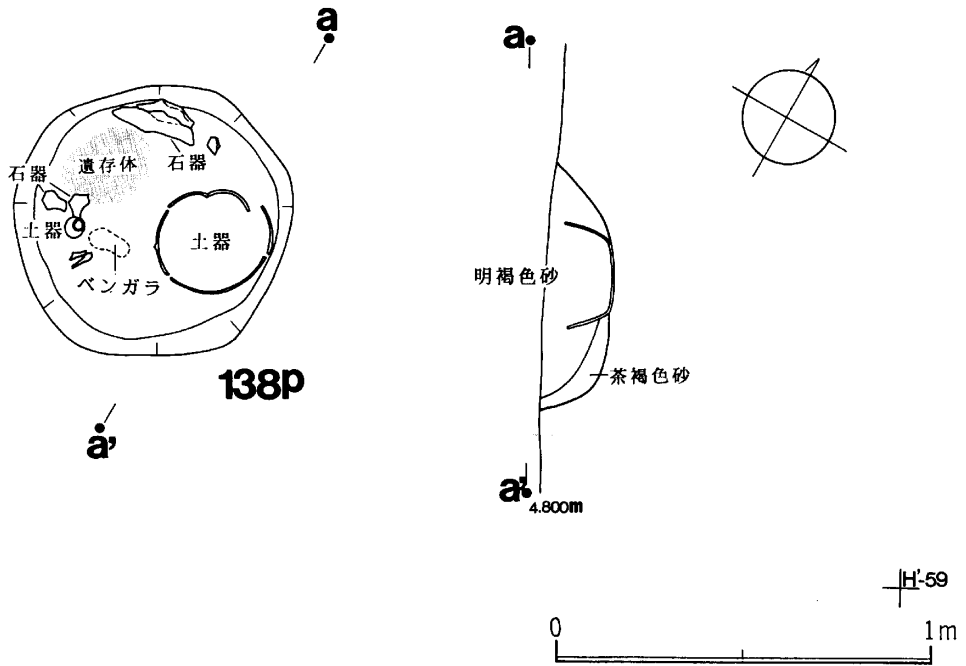
遺構 (第334、367図、図版91-3)

本ピットはH'59グリッドに位置する。規模は直径0.76mの円形もしくは不整形を呈する。底面には暗赤褐色を呈した遺体の痕跡がわずかに認められた。ベンガラは遺体の上部に位置する。壁の高さは約20cmである。II層の茶褐色砂を完全に掘り切り、地山を検出した面であろう落ち込みを確認したもので、本来の掘り切り面はかなり上部にあったと思われる。

遺物 (第336図-1～4・第337図-1～6、図版91-4・5)

1、2は床面出土。1は口縁部の一端に幅広凸部をもつ。文様は縄線文の上に隆帯をもち、それを囲む様に円形文が施されている。幣舞式のボール形土器である。2は小型壺。口縁部は小波状を呈する。胴部の2本の隆帯は指頭による押さえのため凹凸がある。3、4は埋土出土。3は半截状施文具による刺突文、4は縄線文の下に斜め方向から突瘤が施されている。3は縄文晩期中葉、4は同前葉。

石器は第337図-1～6がある。1は有茎石鏃。2、3は削器。4は片刃磨製石斧。青色泥岩製。5、6は玄武岩製の大型剝片。縁辺部を粗く調整している。



第334図 ピット138平面図

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。

ピ ッ ト 138a

遺 構

本ピットはピット138に大部分が切られている。北壁上部がわずかに残存する程度である。ピットの規模、形態、時期は不明であるが、縄文晩期幣舞式以前であることは確かである。

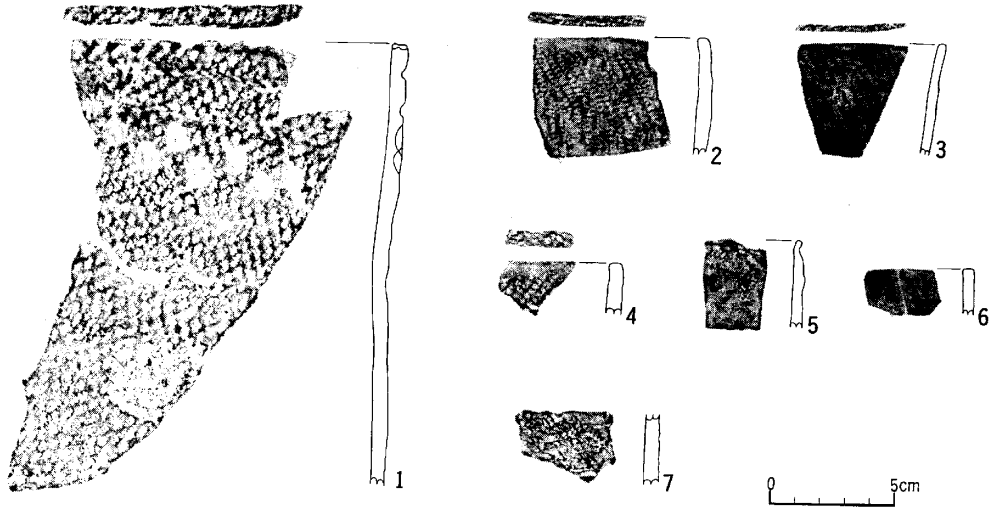
遺 物 (第337図-7・8)

この2点は埋土から出土した。7は先端部の一縁に刃部をもつ黒曜石製の削器。8は玄武岩製の削器。

ピ ッ ト 139

遺 構 (第242図)

本ピットはH'64グリッドに位置する。規模は直径約0.40mの小円形を呈し、壁高は確認面から約30cmである。



第335図 ピット137c埋土(1~7)出土土器

遺物は埋土から縄文晩期の細片が出土している。

ピ ッ ト 140

遺 構 (第242図)

本ピットはH'64グリッドに位置する。規模は直径約0.58mの小円形を呈し、壁高は確認面から約45cmを測る。

遺 物 (第336図-5・6、第337図-9)

埋土出土。5は続縄文前葉。6は幣舞式。第337図-9は玄武岩製の側削器。

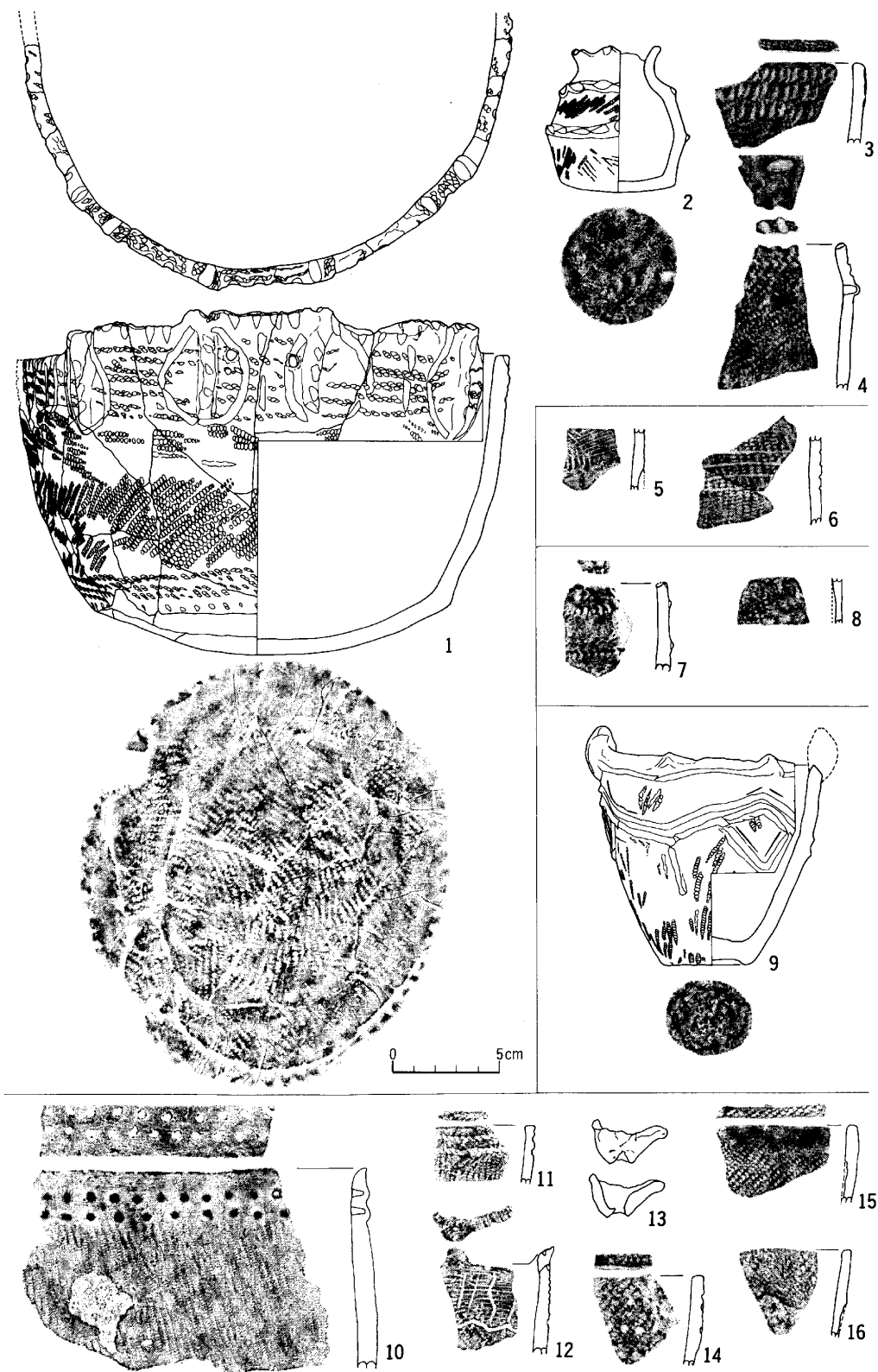
ピ ッ ト 141

遺 構 (第242図)

本ピットはE'63グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。深さ約12cmほどの皿状のピットである。

遺 物 (第336図-7・8)

埋土出土。3は後北C₂式。4は縄文晩期。



第336図 ピット138埋土(1~4)、ピット140埋土(5・6)、ピット141埋土(7・8)、ピット143床面(9)、ピット144埋土(10~16)出土土器

ピ ッ ト 142

遺 構 (第242図)

本ピットはE'64グリッドに位置する。規模は直径約0.56mの小円形を呈し、壁高は確認面から約30cmを測る。

遺物は図示していないが縄文晩期中葉の細片が出土している。

ピ ッ ト 143

遺 構 (第242図、図版92-1・2)

本ピットはF'64グリッドに位置する。表土を剝土すると、暗褐色土の落ち込みがあり、上部に角礫を敷き並べた状態で出土した。角礫は扁平なものを利用している。角礫を取り除くと黄褐色を呈した遺体が認められた。一部に大腿部と思われる腐食した骨もあり、頭部の輪郭も明瞭である。頭部は北壁側にあり、第336図-9の小型土器、白色粘土が近くから出土している。壁高は確認面から約26cmである。

遺 物 (第336図-9、図版92-3)

9は床面出土。口縁部に1対の大型突起、2個1対の小突起をもつが大型突起の1個は欠失する。隆帯を弧状に配置し突起下部では方形状に施す。

小 括

本ピットの遺体上部に角礫が認められる。頭位は北側にあり、埋葬方法は屈葬である。時期は続縄文字津内II b式に比定される。

ピ ッ ト 144・144a

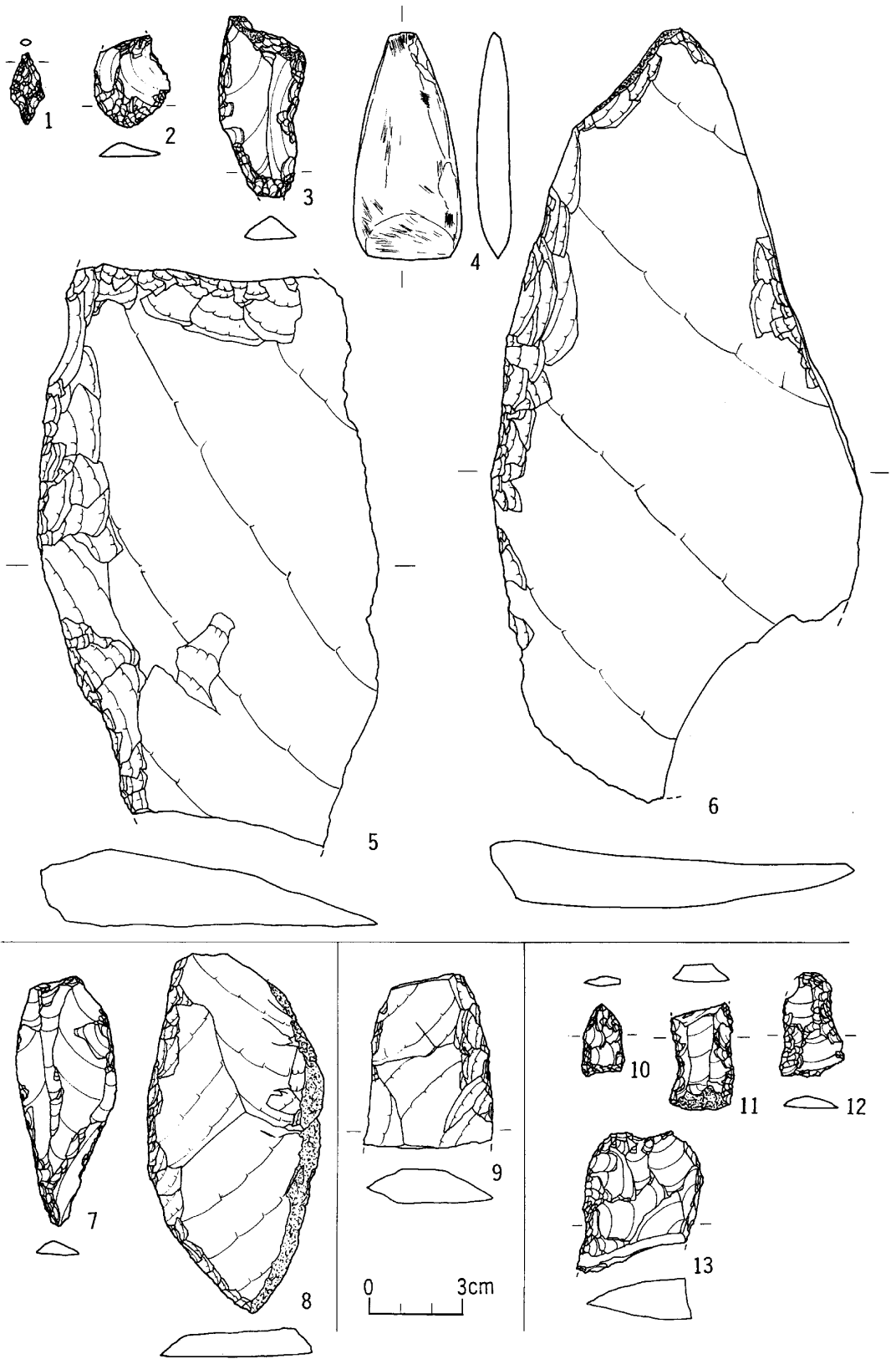
遺 構 (第282図)

ピット144は16a号竪穴床面に構築されている。規模は直径約1.35mの円形を呈する。壁は各壁とも緩く立ち上がる。特に北壁側が緩い。新旧関係はピット上部に竪穴に伴うと思われる炭化材があること、土層セクションの判断から16a号竪穴が新しい。

ピット144aはピット144の東壁側に位置するが大半はピット144に切られているため正確な規模、形態は不明である。壁高は確認面から約22cmである。

遺 物 (第336図-10~16、第337図-10~13、第338図-1)

埋土出土。10は宇津内II b式。11は続縄文前葉。12は幣舞式。13は手握ね土器。14~16は縄文晩期中葉。



第337図 ピット138埋土(1~6)、ピット138 a埋土(7・8)、ピット140埋土(9)、ピット144埋土(10~13)出土石器

石器は第337図-10～13がある。10は無茎石鏃。11～13は側削器。

ピット144aからは図示していないが縄文土器の破片と第338図-1の玄武岩製の石匙が埋土から出土している。

ピ ッ ト 145

遺 構 (第274図、図版93-1)

F'62グリッドに位置する。南壁上部をピット21に僅かに切られている。規模は長軸約0.70m、短軸約0.40mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。底面に遺存体と思われる暗赤褐色土が残存していた。

遺 物 (第339図-1～5、第338図-2・3、図版93-2・3)

1、2は南壁際の床面から出土した幣舞式土器。1、2とも上面観が楕円形を呈する。口縁部はすばまり両端部に約3～4mmの小孔がある。底部に最大幅をもつ。1は口縁下と胴部のくびれ下に縄線文を施し縄線文の下部は縄端圧痕文が波状に施される。2は縄端圧痕文を半弧状に囲み内側を磨消している。3、4は縄文晩期中葉。5は同前葉の爪形文土器。

石器は埋土から第338図-2の無茎石鏃。3の有茎石鏃がある。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土墳墓である。

ピ ッ ト 146

遺 構 (第274図)

本ピットはF'61グリッドに位置する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。掘り込みは浅く確認面から約8cmである。西壁際に遺存体の痕跡があり石器がまとまって出土している。時期は不明である。

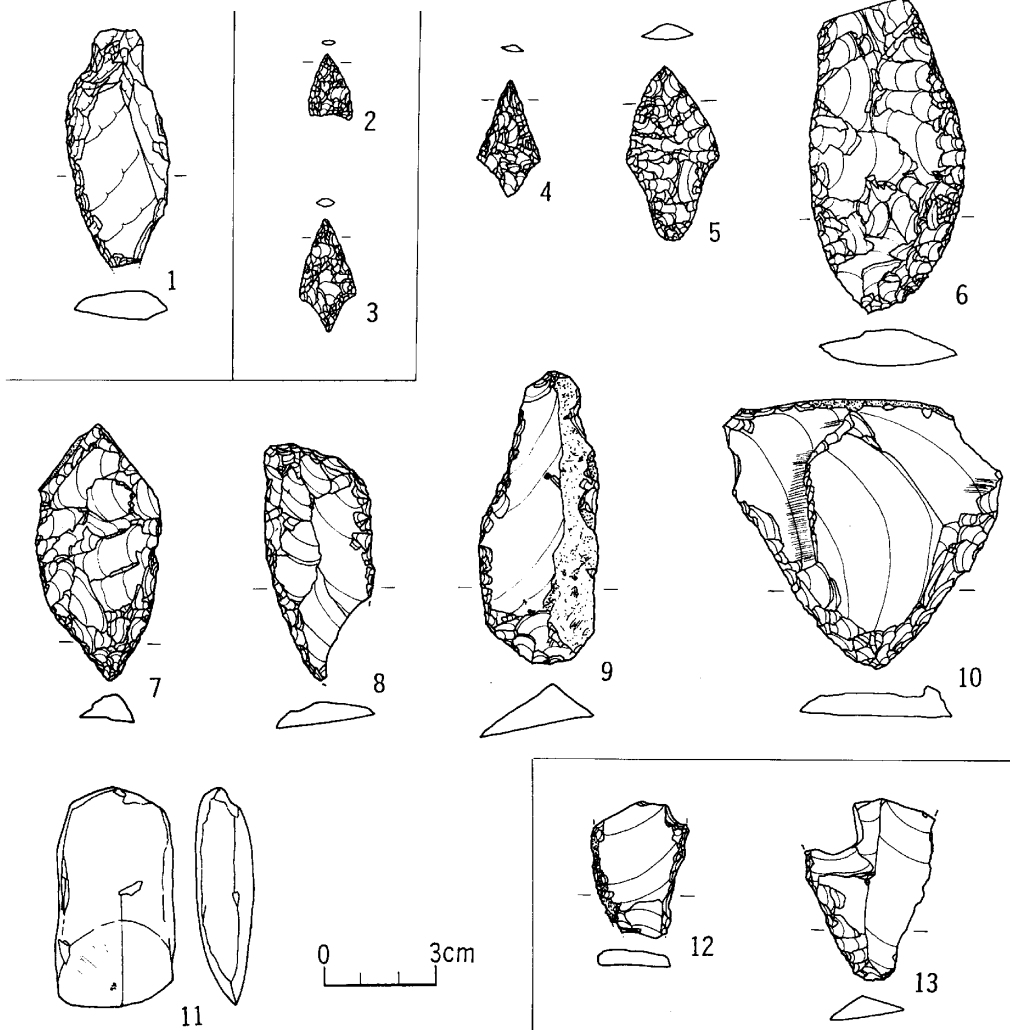
遺 物 (第339図-6～8、第338図-4～11)

埋土出土。6は字津内IIa式。7、8は縄文晩期中葉。石器は第338図-4～11がある。4は有茎石鏃。5は石槍。6、7は両面加工ナイフ。8～10は側削器。11は片刃磨製石斧。11の青色泥岩製を除き黒曜石製。

ピ ッ ト 147

遺 構 (第283図)

本ピットはH'59グリッドに位置する。規模は直径約0.82mの円形を呈する。壁高は約10cmで



第338図 ピット144a埋土(1)、ピット145埋土(2・3)、ピット146埋土(4～11)、ピット147埋土(12・13)出土石器

ある。

遺物 (第339図-9、第338図-12・13)

埋土出土。9は縄文晩期中葉であろう。石器は第338図-12、13の側削器である。黒曜石製。

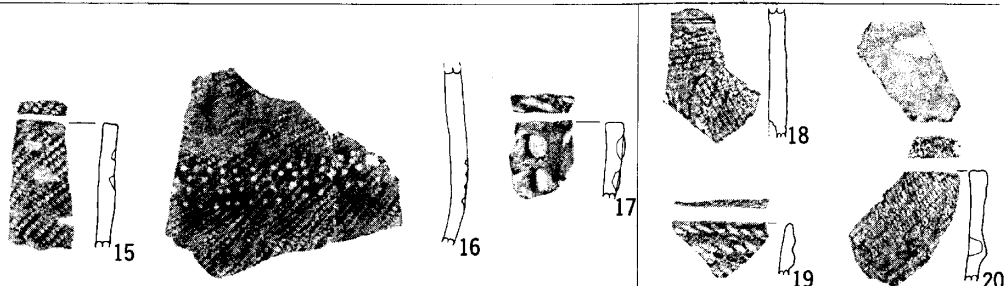
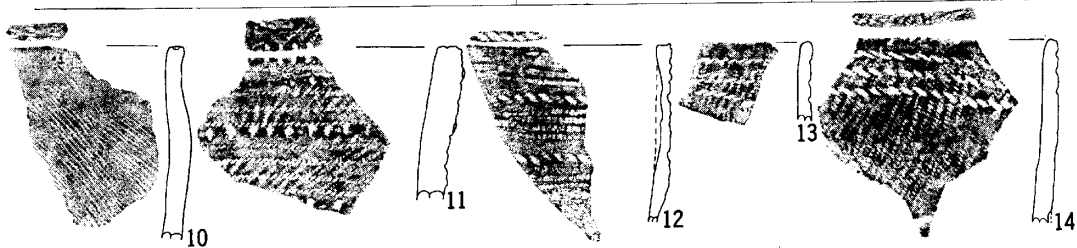
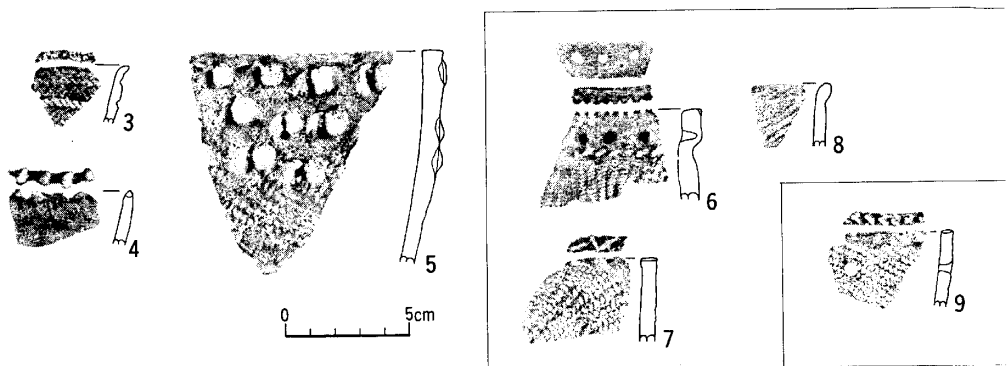
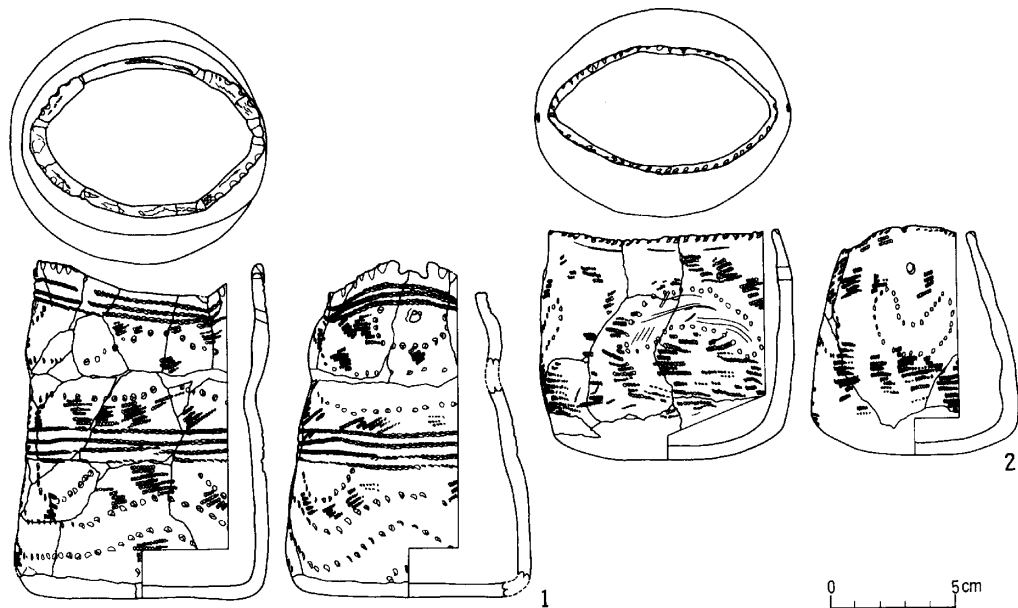
ピ ッ ト 148

遺構 (第283図)

本ピットはJ'61グリッドに位置する。規模は直径約1.50mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。床面を覆う暗茶褐色砂は粘性がある。遺存体が土質化したのかもしれない。

遺物 (第339図-10～17、第345図-1～7)

10、11は床面出土であり他はすべて埋土出土である。10は口唇部に3本単位の刺突がある。



第339図 ピット145床面(1~2)・埋土(3~5)、ピット146埋土(6~8)、ピット147埋土(9)、ピット148床面(10)・埋土(11~17)、ピット150埋土(18~20)出土土器

続縄文前葉であろう。11は沈線が施される。縄文晩期中葉であろう。12は後北C₂・D式。13は宇津内IIb式。14は同IIa式。15は縄線文と帯縄文、16は縄線文が施されたもので続縄文前葉であろう。17は縄文晩期中葉と思われるもので縄線文が施されている。

石器は第345図-1～7がある。1は無茎石鏃。2は有茎石鏃。3は石槍。4、5は側削器。6は搔器。7は叩き石。7の泥岩製を除き黒曜石製。

ピ ッ ト 148a

遺 構 (第283図)

本ピットはJ'61グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁は斜めに立上り高さは確認面から約35cmである。長軸を東西方向にもつ。床面のほぼ中央部に暗赤褐色の遺存体がある。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ピ ッ ト 149

遺 構 (第242図)

本ピットはE'63グリッドに位置する。規模は直径約0.45mの円形を呈する。深さは確認面から約60cmである。遺物は出土していない。

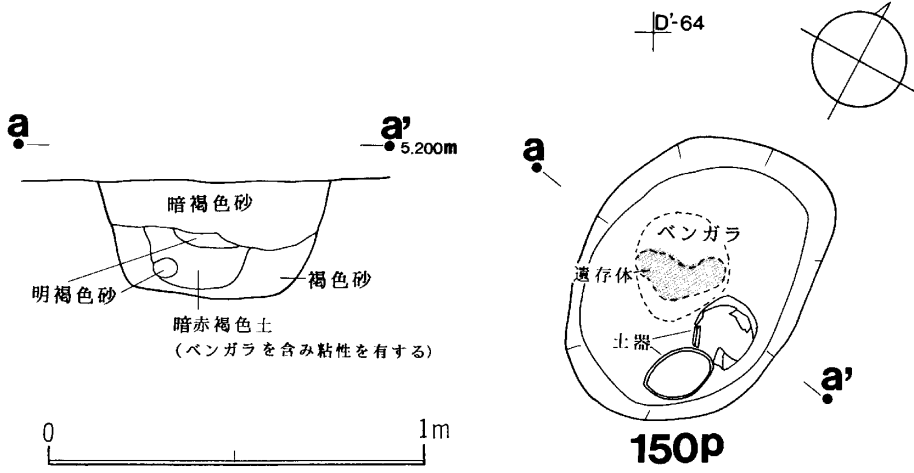
ピ ッ ト 150

遺 構 (第242、340図、図版93-4)

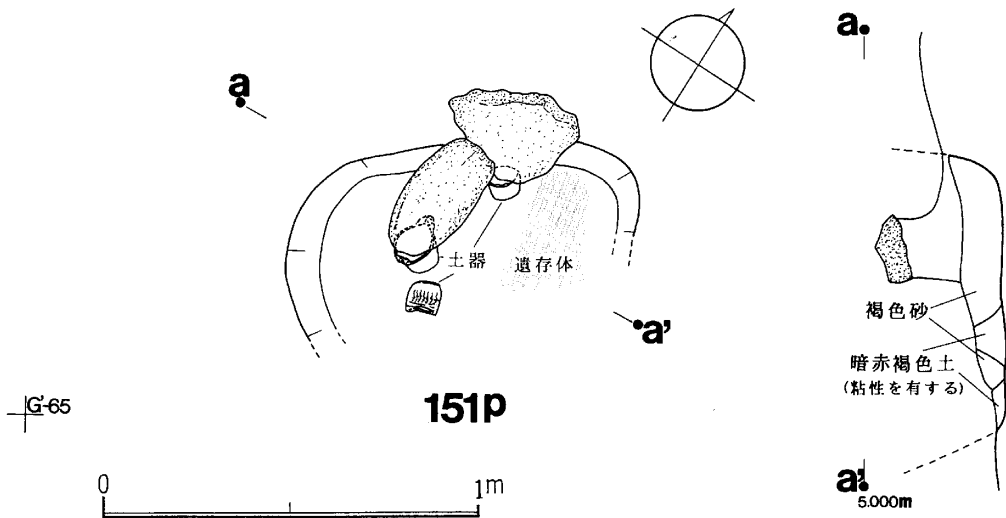
本ピットはE'63、64グリッドに位置する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。深さは確認面から約30cmである。

遺 物 (第339図-18～20)

埋土出土。18は続縄文後北C₂式。19は縄線文のある縄文晩期中葉、20は突瘤文のある同前葉であろう。



第340図 ピット150平面図



第341図 ピット151平面図

ピ ッ ト 151

遺 構 (第242、341図)

本ピットはG'64グリッドに位置する。この周辺は平成4年9月の集中豪雨により土砂が流失しており、このピットの上部はその際に削り取られている。確認した時は角礫が露呈した状態であった。規模は長軸約0.9m、短軸約0.5mの楕円形を呈すると思われるが、東壁が破壊されているため正確な数値は不明である。

遺 物 (第342図、図版94-1・2)

第342図-1、2は北西壁に接して床面から出土した。1は胴中央部がくびれ口縁部に向かって緩く開く。口縁部には4個所の突起をもつが1個は欠失する。突起からは「∩」字形の隆帯が垂下する。文様は口縁下部が細い沈線で構成されるのに対し、低部はやや太めの沈線と縄線文が施される。2は口縁部に3個の突起がある。実測図の反対側にも2～3個の突起があると思われるが欠失している。文様は多用された縄線文とそれを囲む沈線文及び胴中央部では波状の縄線文と円形刺突文、短沈線で構成される。1、2とも突起下部に2個の孔をもつがこれらは内側から穿孔されている。2は底部の中央部も幅3mmの孔がある。石器は図示していないが埋土から玄武岩製の幅13cm、長さ19cmの大型剥片が出土している。

小 括

本ピットは上部に3個の角礫が認められる。本来はこれ以上に多く用いられていたと思われるが土砂の流失により明らかにすることはできない。時期は縄文晩期幣舞式である。

ピ ッ ト 152

遺 構 (第242図)

本ピットはF'64グリッド、12号堅穴の西側に位置する。規模は長軸約1.35m、短軸1.05m楕円形を呈する。壁高は確認面から約40cmを測る。

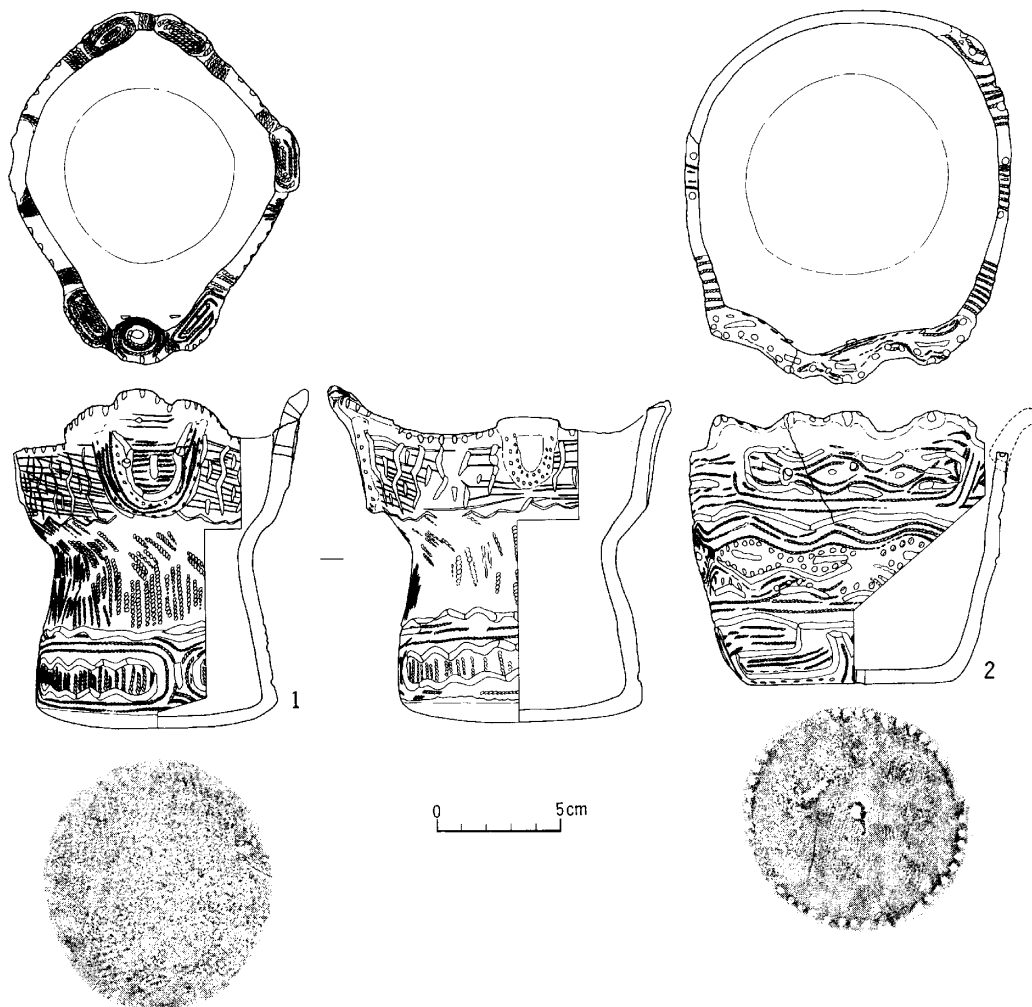
遺 物 (第344図)

第344図-1は埋土出土の縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 152 a・152 b

遺 構 (第242図)

ピット125aはピット125に東壁側を切られているものの形態は長軸約1.10mの楕円形を呈するようである。壁高は確認面から約13cmである。



第342図 ピット151床面(1)・埋土(2)出土土器

ピット152bはピット152aに東壁側を切られている。直径約0.73mの円形を呈する。壁高は確認面から約7cmである。両ピットから遺物は出土していない。

ピ ッ ト 153

遺 構 (第242図)

本ピットはD'63、E'63グリッドに位置する。地山である粗い砂質土まで下げた段階で発見したものであり本来の掘り込み面はさらに上部にあったことは確実である。南壁側が攪乱を受けているものの規模は長軸約55cm、短軸約42cmの楕円形を呈する。壁高は確認面から約8cmであ

る。土器は北壁際から正立の状態出土した。

遺 物 (第344図-2・3、図版94-3)

埋土出土。2は保存状態が悪く器面はかなり剥落している。胴中央部がくびれ、1個の孔が認められる。幣舞式である。3は2の内部から検出された片口土器である。片口の周辺と口縁部に短刻線、片口の上部に沈線を施す以外は無文である。片口の底部に幅3mmの孔がある。2との共伴から幣舞式と思われる。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓と思われる。

ピ ッ ト 154

遺 構 (第343図)

本ピットはE'62グリッドに位置する。規模は長軸約0.55m、短軸約0.44mの楕円形を呈する。このピットもピット153同様に地山である粗い砂質土まで下げた段階で発見したものである。本来の掘り込み面はさらに上部にあったことは確実である。壁高は約14cmである。

遺 物 (第344図-4、第345図-8～10、図版94-4)

埋土出土。4は上面観が湾曲した「十」字形を呈し、底部は方形である。口縁部に2個の突起部をもちその下部は幅5mmの孔がある。口縁部は短刻線が巡るもので幣舞式である。

石器は第345図-8～10がある。8、9は有茎石鏃。10は側削器。黒曜石製。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓と思われる。

ピ ッ ト 155

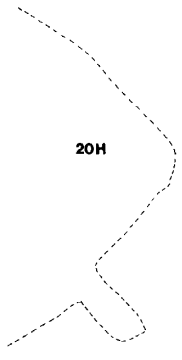
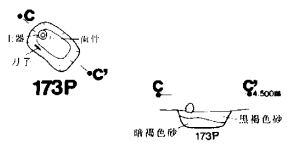
遺 構 (第242図)

本ピットはF'63グリッドに位置する。規模は直径約0.47mの円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。遺物は出土しておらず時期も不明である。

ピ ッ ト 156

遺 構 (第242図)

本ピットはF'63グリッドに位置する。規模は直径約0.52mの円形を呈する。壁高は確認面から約14cmである。遺物は出土しておらず時期も不明である。



A'-63

A'-62



B'-63

B'-62



炭化材 集中域

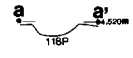


焼土
(竹類を含む炭化物を有する)



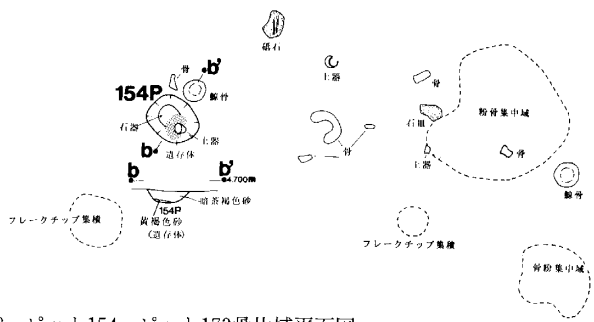
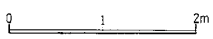
C'-63

C'-62

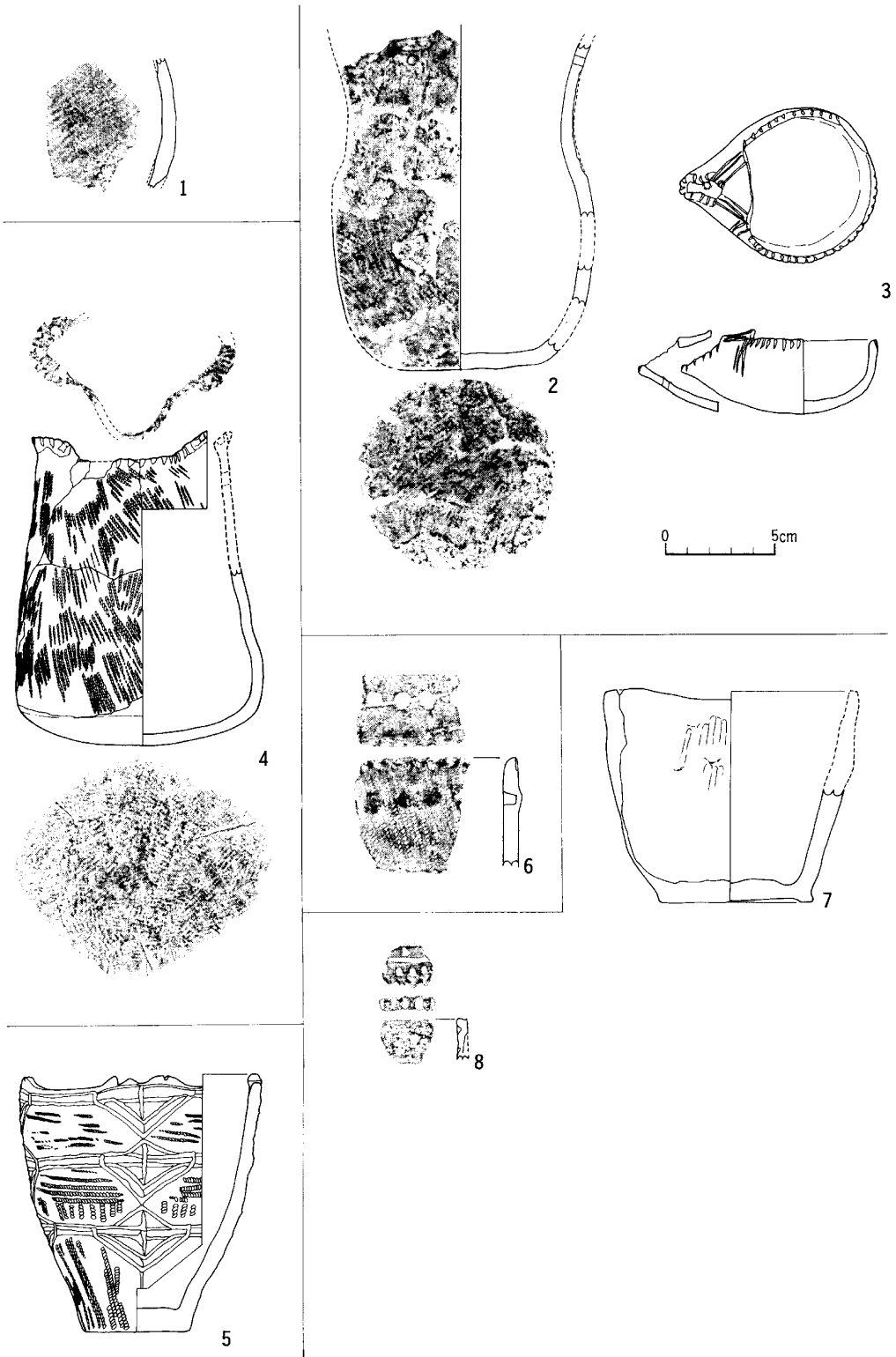


D'-63

D'-62



第343図 ピット118、ピット154、ピット173骨片域平面図



第344図 ピット152埋土(1)、ピット153埋土(2~3)、ピット154埋土(4)、ピット157床面(5)、ピット160埋土(6)、ピット161埋土(7・8)出土土器

ピ ッ ト 157

遺 構 (第242図、図版95-1)

本ピットは14号堅穴の西側約1mに位置する。西壁の一部が破壊を受けているものの規模は長軸約1.60m、短軸約1.30mの楕円形を呈すると思われる。長軸は東西方向である。壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは確認面から約80cmである。遺存体は黄褐色を呈し粘性がある。糊状化した遺存体の輪郭から頭部は東方向と推測され歯骨も検出された。頭部のある東壁際の床面には長さ約30cm、幅約10cm、深さ8cmの溝がある。副葬品は頭部の南側に第344図-5の小型土器が正立の状態で置かれそこからやや離れて石鏃、削器が出土している。石鏃はすべて先端部を西側に向けている。北壁際では白色粘土、フレイク・チップの集積と伴に鉄製刀子が出土している。

遺 物 (第344図-5、第345図-11~14、図版95-2)

5は床面出土。2個2対の小突起をもつが1個所は欠失する。横走縄文を地文に小突起から菱形状の微隆線が底部まで連続して施され、それぞれは横走る微隆起線で結ばれる。後北C₁式である。

石器は第345図-11~14がある。11は砥石。両側の縁辺部を使用している。12は叩き石。使用痕部に赤色顔料が付着している。安山岩製。13、14は側削器。黒曜石製。15は床面出土の鉄製刀子。幅約8cmの刃部をもち樹皮が巻かれている。他に白色粘土が出土している。

小 括

本ピットは続縄文後北C₁期の土壌墓である。頭位は東方向にあり、溝状の小ピットをもつ。副葬品は遺存体の両側にある。

ピ ッ ト 158

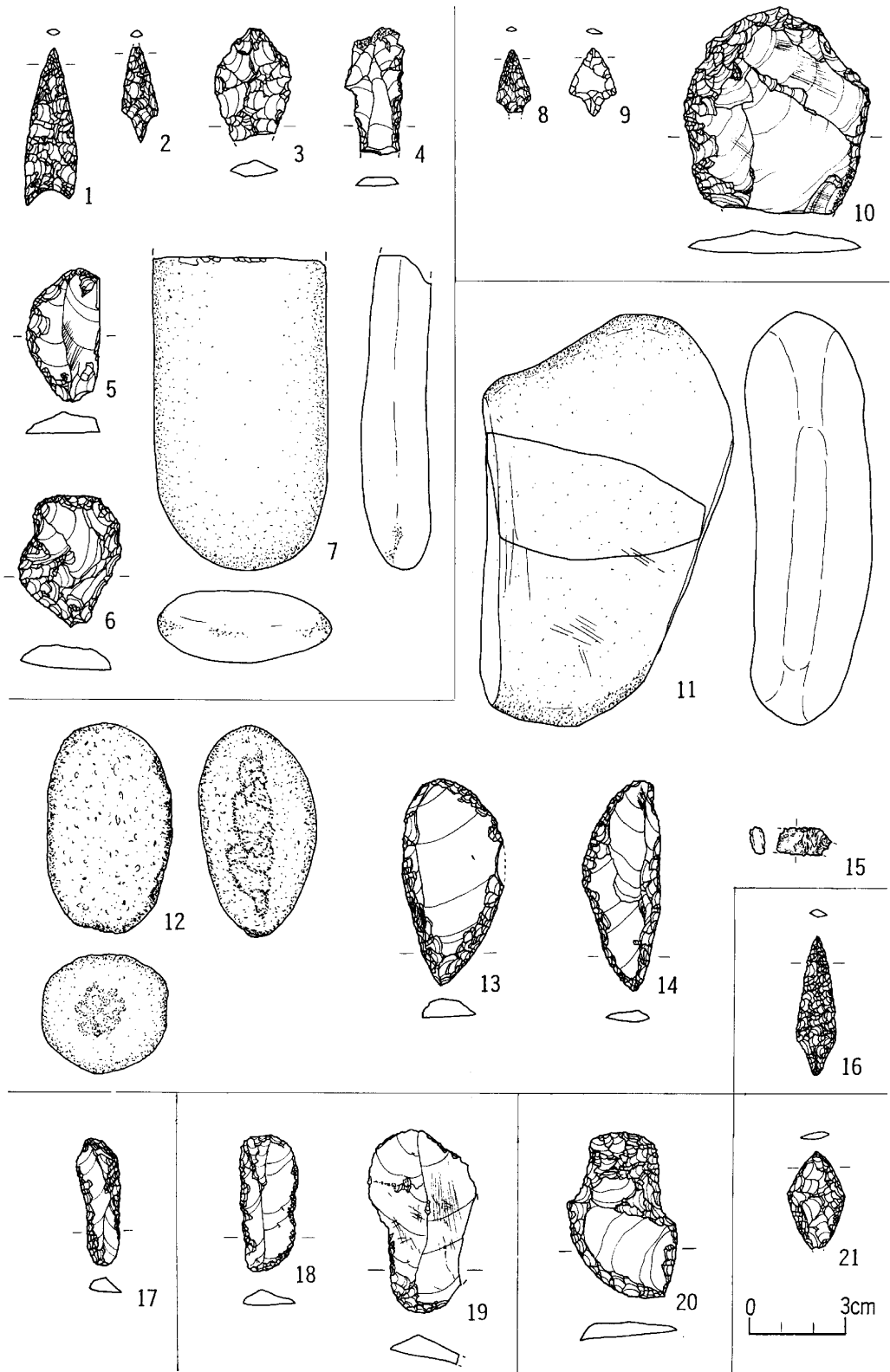
遺 構 (第347図)

本ピットはE'70、F'70グリッドに位置する。大半が下水道管の埋設により破壊を受けているものの規模は直径約0.90mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約28cmを測る。出土遺物がなく時期も不明である。

ピ ッ ト 159

遺 構 (第347図)

本ピットはF'70、G'70グリッドに位置する。大半が下水道管の埋設により破壊を受けているものの規模は直径約0.80mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約40cmを測る。出土



第345図 ピット148埋土(1~7)、ピット154埋土(8~10)、ピット157床面(11~13)・埋土(14)出土石器、床面(15)出土鉄製品、ピット165埋土(16)、ピット166埋土(17)、ピット167埋土(18・19)、ピット169埋土(20)、ピット171埋土(21)出土石器

常呂川河口遺跡

遺物がなく時期も不明である。

ピ ッ ト 160

遺 構 (第347図)

本ピットはF'70グリッドに位置する。大半が下水道管の埋設により破壊を受けているものの規模は直径約1.10mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約49cmを測る。

遺 物 (第344図-6)

埋土出土。6は宇津内II a式。

ピ ッ ト 161

遺 構 (第347図)

本ピットはG'69グリッドに位置する。大半が下水道管の埋設により破壊を受けているため正確な規模は不明である。形態は楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約60cmを測る。時期は不明である。

遺 物 (第344図-7・8)

埋土出土。7は無文。底部はわずかに揚げ底を呈する。続縄文土器であるが詳細な時期は不明である。8は内側に刺突文と沈線文がある縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 162

遺 構 (第347図)

本ピットはG'67、68、H'67、68グリッドに位置する。規模は直径約2.16mの円形を呈する。壁高は確認面から約76cmである。時期は不明である。

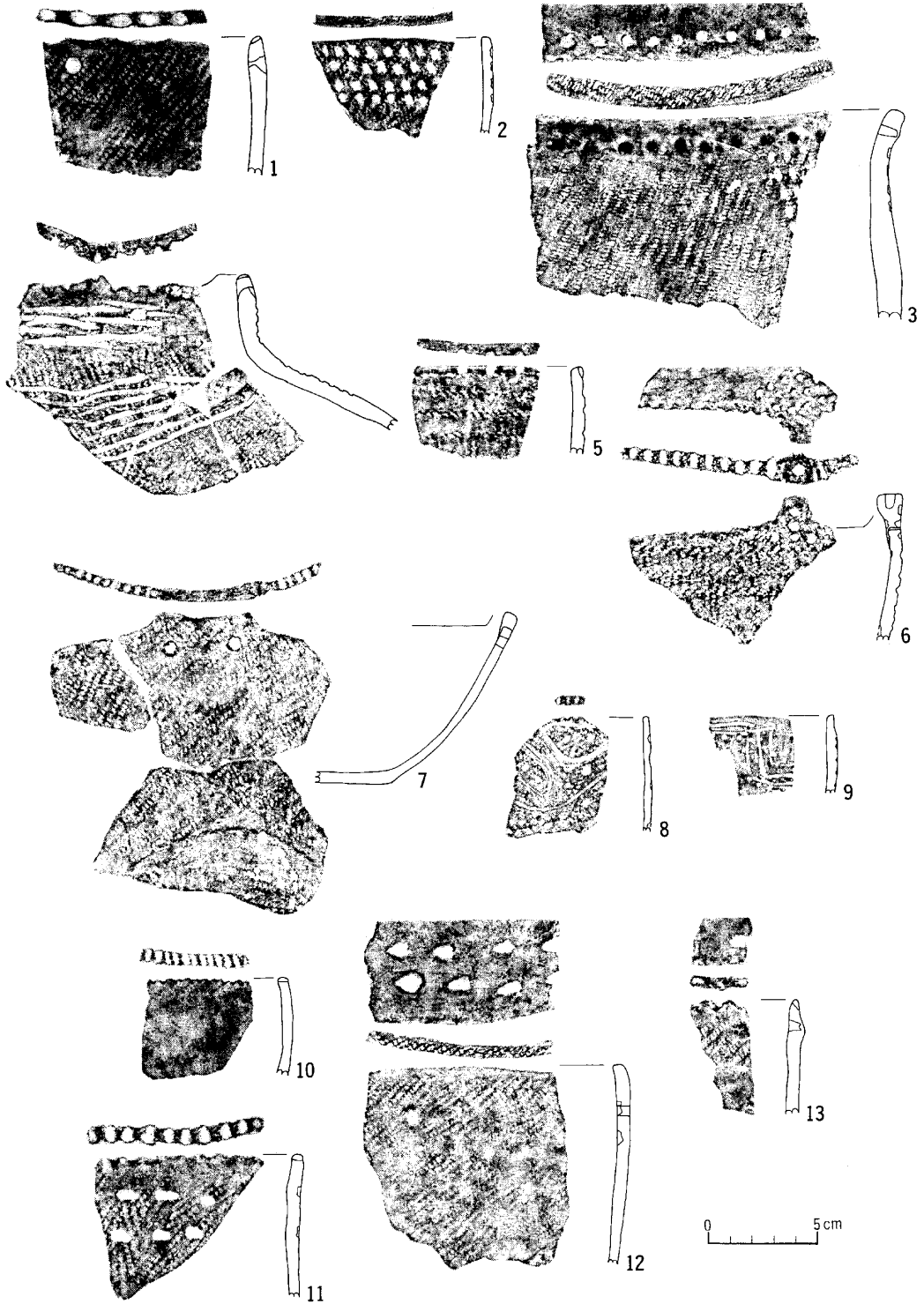
遺 物 (第346図-1～13)

1、2は床面出土。1は縄文晩期後葉。2は同中葉であり縄端圧痕文がみられる。3～13は埋土出土。3は宇津内II a式。4は壺形土器である。口縁部に小突起と刻みをもつ。口縁下と肩部に横走沈線を施した続縄文前葉の土器。5は幣舞式。6～12は縄文晩期中葉。13は同前葉。

ピ ッ ト 162 a

遺 構 (第347図)

本ピットはピット162の西壁上部に位置する。ピット162の土層ベルト内に北壁が認められた。



第346図 ピット162床面(1・2)・埋土(3~13)出土土器

常呂川河口遺跡

規模は長軸約1.14mの楕円形を呈する。高さは確認面から約45cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 162 b

遺 構 (第347図)

本ピットはピット162及び162 a に北壁、東壁を切られ、西壁は攪乱を受けているため遺存は悪い。規模は短軸約0.93mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約11cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 163

遺 構 (第282図)

本ピットはG'67グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約42cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 164

遺 構 (第347図)

本ピットは35 a 号竪穴の床面にある。規模は直径約1.40mの円形を呈する。壁高35 a 号の床面から約30cmである。第348図-1～4 は埋土出土。縄文晩期中葉であろう。2、3 は同一個体。

ピ ッ ト 165

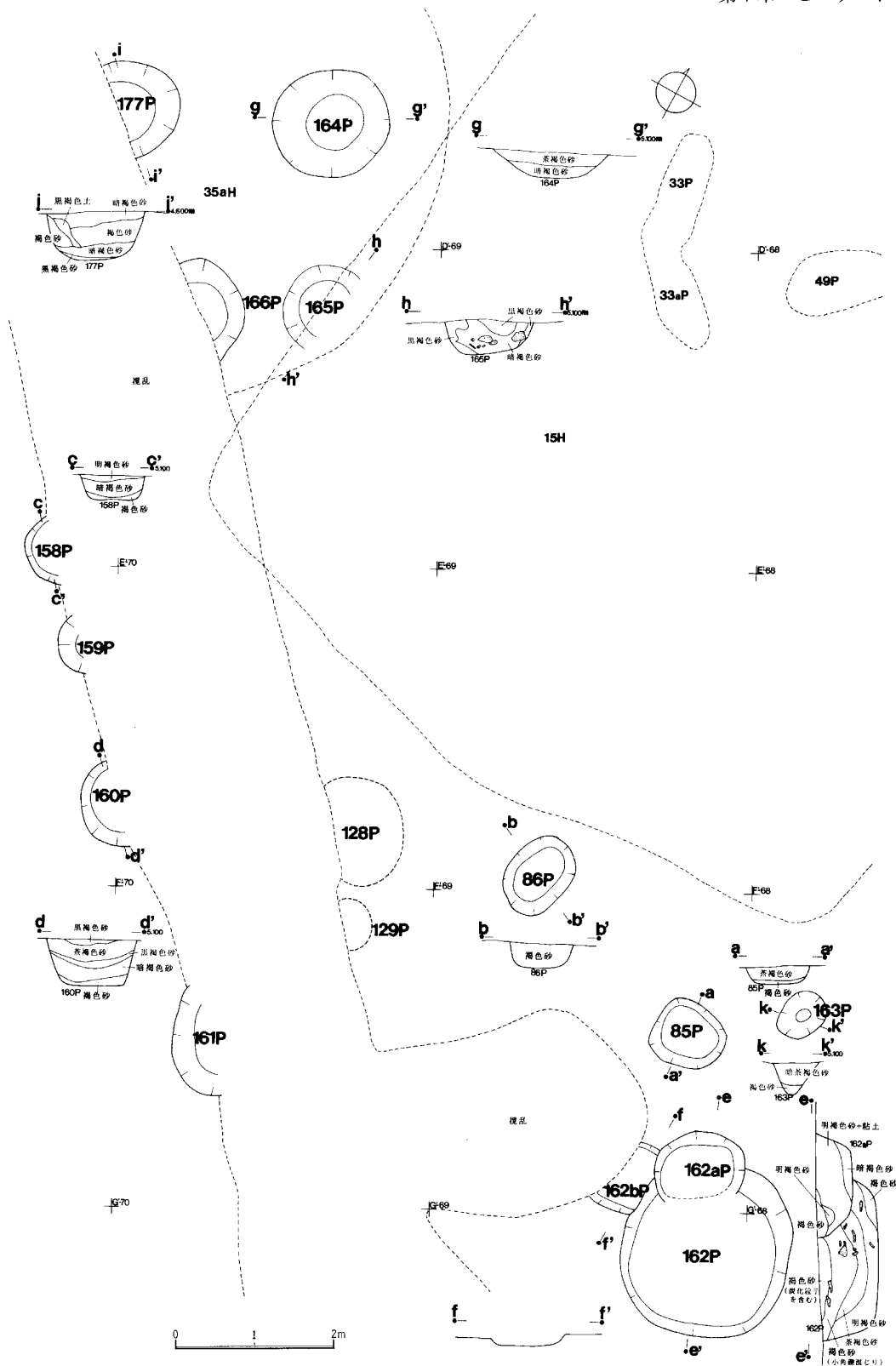
遺 構 (第347図)

本ピットは35 a 号竪穴の床面にある。規模は直径約1.10mの円形を呈する。壁高35 a 号の床面から約41cmである。第348図-5 は埋土から出土した縄文晩期の胴部片。第345図-16は有茎石鏃。

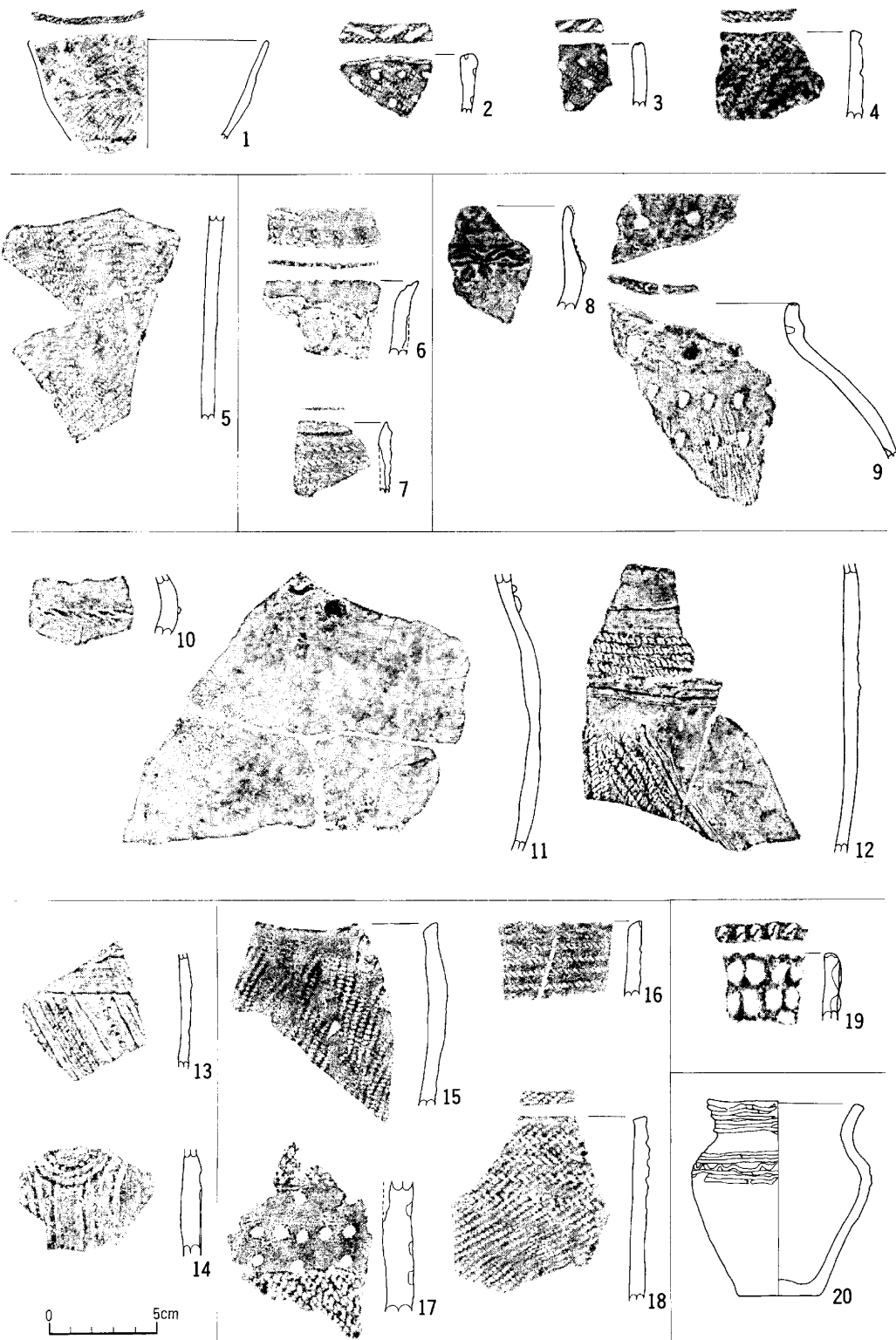
ピ ッ ト 166

遺 構 (第347図)

本ピットは35 a 号竪穴の床面にある。南壁側が下水道管埋設工事により破壊を受けている。規模は直径約1.22mの円形を呈すると思われる。壁高は35 a 号の床面から約60cmである。底面



第347図 15号竪穴南側周辺のピット群平面図



第348図 ピット164埋土(1~4)、ピット165埋土(5)、ピット166埋土(6・7)、ピット167埋土(8~9)、ピット168埋土(10・12)、ピット170埋土(13・14)、ピット171埋土(15~18)、ピット172埋土(19)、ピット173埋土(20)出土土器

の全域に暗赤褐色を呈した粘性のある遺存体が糊状に広がっている。

遺 物 (第348図-6・7、345図-17)

埋土出土。6は器面が剥落するが北大I式である。口唇部の外側は刻みがあり、内側には縄が押捺されている。7は宇津内IIb式。

第345図-17は黒曜石製の削器。

ピ ッ ト 167

遺 構 (第349図)

本ピットはA70グリッドに位置する。規模は直径約80cmの円形を呈する。壁高はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約40cmである。

遺 物 (第348図-8・9、第345図-18・19)

埋土出土。8はオホーツク文化ソーメン状貼付文。9は口縁下部に突瘤があり胴部は丸く張り出す。器面には刺突が施された続縄文前葉の土器。第345図-18・19は黒曜石製の削器。

ピ ッ ト 167 a

遺 構 (第349図)

本ピットはピット167に大半が切られているため正確な全体の規模、形態は不明であるが直径約55cm程度の円形を呈するであろう。壁高は西壁側が極めて緩く立ち上がり、確認面から約19cmである。図示していないが埋土から続縄文が1点出土している。

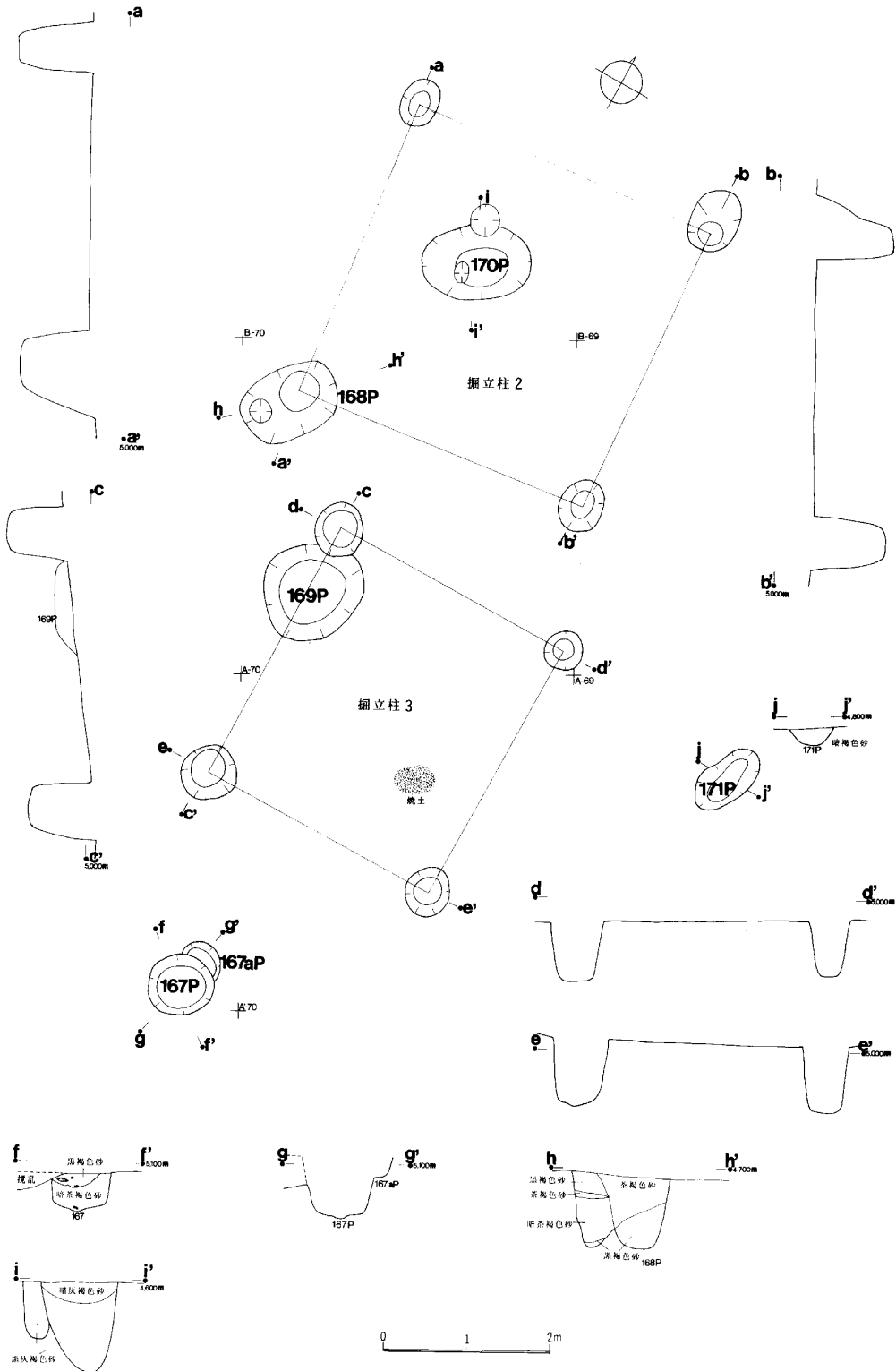
ピ ッ ト 168

遺 構 (第349図)

本ピットはA69グリッドに位置する。規模は長軸約1.20m、短軸約0.83mの楕円形を呈する。底面堀立柱2のピットをもつ。土壌としてのピットではなく堀立柱のピットとして取り扱うべきかもしれない。

遺 物 (第348図-10~12)

埋土出土。10、11はオホーツク文化のソーメン状貼付文。12は後北C₂式。石器は図示していないが無茎石鏃1本、他に軽石が5点出土している。



第349図 掘立柱 2・3 と周辺のピット群平面図

ピ ッ ト 169

遺 構 (第349図)

本ピットはA 69グリッドに位置する。規模は直径約1.24mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。埋土の全域体にベンガラが混入している。東壁際から20点の琥珀玉が散らばって出土している。第345図-20は片面加工ナイフ。

小 括

続縄文期の土壌墓と思われる。琥珀玉をもつことから前葉のものであろう。

ピ ッ ト 170

遺 構 (第349図)

本ピットはB 69グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約1.06mを測る。土器は第348図-13の後北C₂式、14の宇津内II b 式が埋土から出土している。

ピ ッ ト 171

遺 構 (第349図)

本ピットはB 69グリッドに位置する。規模は長軸約0.94m、短軸約0.50mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。

遺 物 (第348図-15~18、第345図-21)

第348図-15~18は埋土出土。15は続縄文前葉であろう。16、18は幣舞式。17は胴部の無文帯に円形刺突を施した縄文中期。

第345図-21は有茎石鏃。

ピ ッ ト 172

遺 構 (第297図)

本ピットはA'67グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁はピットの中ほどから上部にかけて開くがこの部分に遺存体と思われる黄褐色土が認められた。高さは確認面から約92cmを測る。

遺物 (第348図-19)

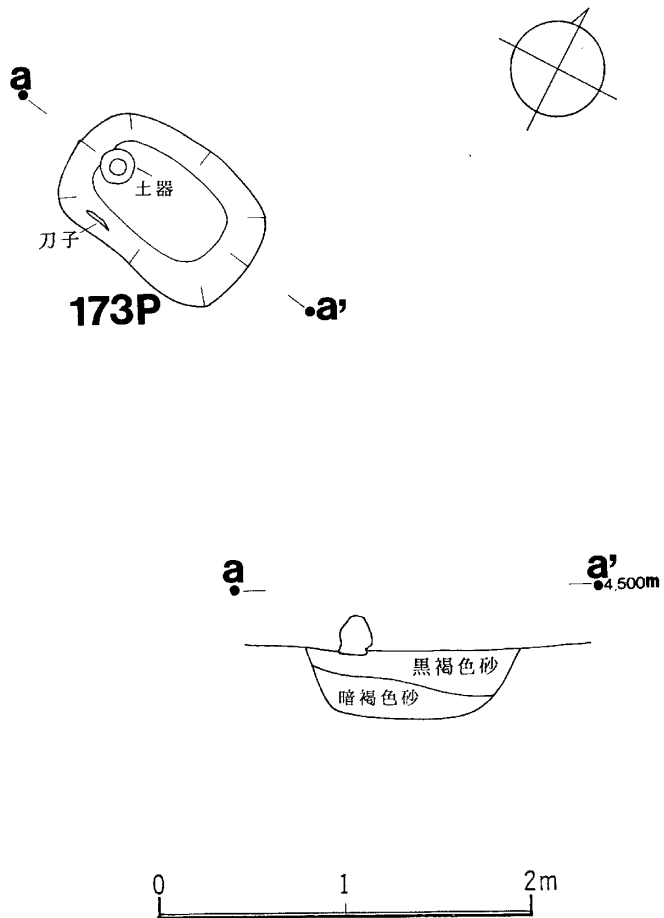
第348図-19は埋土出土。「ハ」字形の盛り上がりのある爪型文で晩期前葉であろう。

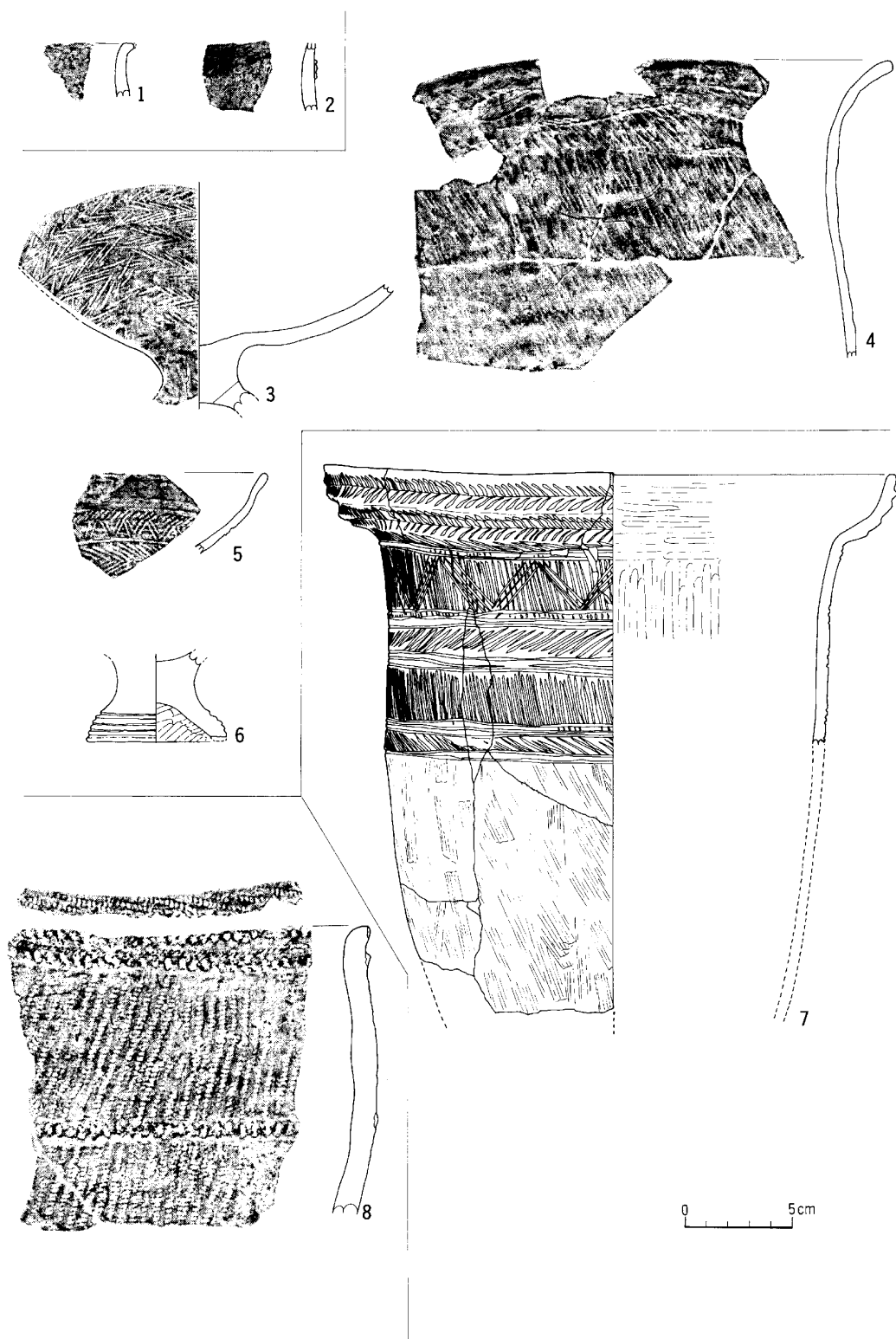
他に図示していないがオホーツク貼付文土器、後北C₂式が出土している。

ピット 173

遺構 (第343図)

本ピットはA'63グリッドに位置する。規模は長軸約0.55m、短軸約0.35mの楕円形を呈する。壁高は約18cmであるが、第343図-20の小型土器が出土した段階でピットの掘り込み面を確認した。本来の掘り込み面はさらに上部にあったと思われる。小型土器は床面から約15cm上部の西壁際から伏せた状態で出土した。土器の下部にあたる床面からは歯骨も検出され、土器の南側からは鉄製刀子が出土した。





第351図 ピット174埋土(1~2)、ピット175埋土(3~6)、ピット176埋土(7)、ピット179埋土(8)出土土器

遺物 (第348-20、352-1 図)

埋土出土。第348図-20は口縁部にソーメン文を重鎮させ、肩部は3本の直線のソーメン文間に波状のソーメン文を施す。第352図-1は鉄製刀子。

小括

本ピットはオホーツク文化期の土壌墓である。小型土器は被甕として用いられたものである。

ピ ッ ト 174

遺構 (第297図)

本ピットはA'67グリッドに位置する。規模は直径0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から約90cmを測る。第351図-1は後北C₂式。2はオホーツク文化ソーメン状貼付文。

ピ ッ ト 175

遺構 (第297図、図版95-3)

本ピットはA'68グリッドに位置する。本ピットは第II章で説明した2次形成地から3形成地の変換線にあり自然の浅い窪地に構築されている。規模は長軸約1.15m、短軸約0.52mの長楕円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。長軸は南北方向である。北壁際の上部から高杯の杯部と脚部が出土している。

遺物 (第351図-3～6)

埋土から出土した擦文土器。3は屋羽根状の沈線を丁寧に施した高杯。4は器面を篋により調整している。5は高杯。6は高杯の脚部。

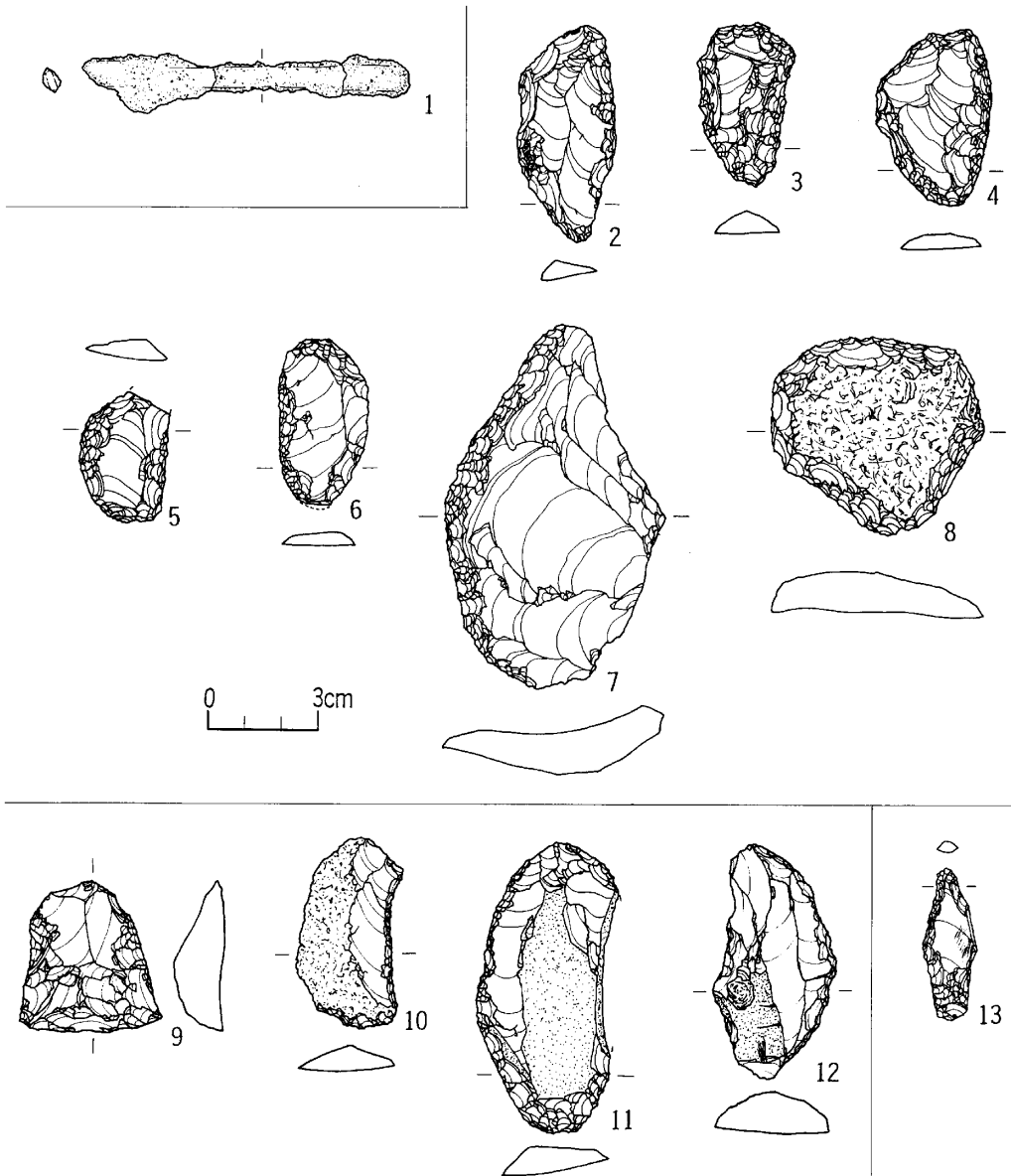
小括

本ピットは形態的特徴から擦文期の土壌墓の可能性はある。15号堅穴に認められた土壌墓も廃屋墓的な性格をもち、自然の窪みに作られた本ピットも同様の考え方ができる。

ピ ッ ト 176

遺構 (第297図、図版95-3)

本ピットはA'68グリッドに位置する。ピット175とはわずか5cm程度の距離である。規模は長軸約0.95m、短軸約0.65mの楕円形を呈する。長軸は東西方向にもつ。壁高は確認面から約20cmを測る。ピット175と比較して長軸は短い。ほぼ中央部から擦文土器が出土した。



第352図 ピット173埋土出土鉄製品(1)、ピット179埋土(2~8)、ピット180埋土(9~12)、ピット181 a埋土(13)出土石器

遺 物 (第351図-7)

埋土出土。口径26.5cmの大型土器。文様は縦、斜めの沈線を横走沈線で区画した複段文様である。胴下部は刷毛により調整される。

小 括

本ピットもピット175同様に擦文期の土壌墓の可能性はある。土器は宇田川編年後期、藤本編年h、i期に比定される。

ピ ッ ト 177

遺 構 (第347図)

本ピットはD'69、70グリッドに位置する。南壁の一部は破壊されているものの規模は直径約1.20mの円形を呈する。壁高は確認面から約62cmを測る。床面に黒褐色を呈した遺体が認められる。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ピ ッ ト 178

遺 構 (第353図)

本ピットはJ'54グリッドに位置する。規模は直径約0.85mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmを測る。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 179

遺 構 (第353図)

本ピットはJ'54グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。第351図-8は埋土から出土した宇津内II b式。石器は第352図-2～8の黒曜石製の削器がある。7は横長剥片を利用している。

ピ ッ ト 180

遺 構 (第353図)

本ピットはI'53、J'53グリッドに位置する。規模は直径約1.30mの円形を呈し、壁高は確認面から約40cmを測る。時期は不明である。

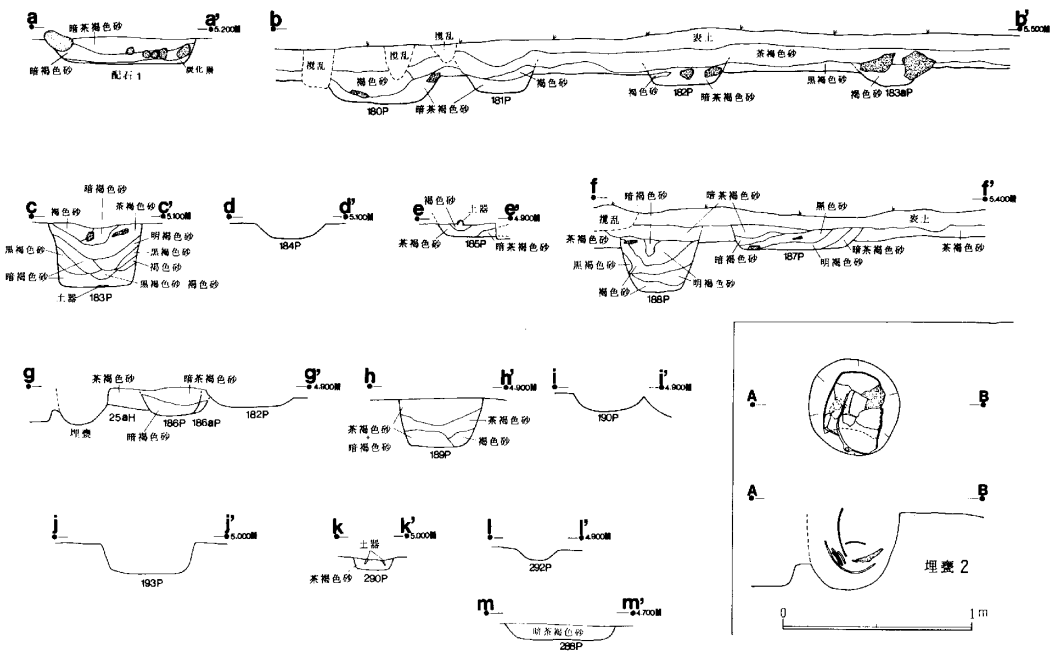
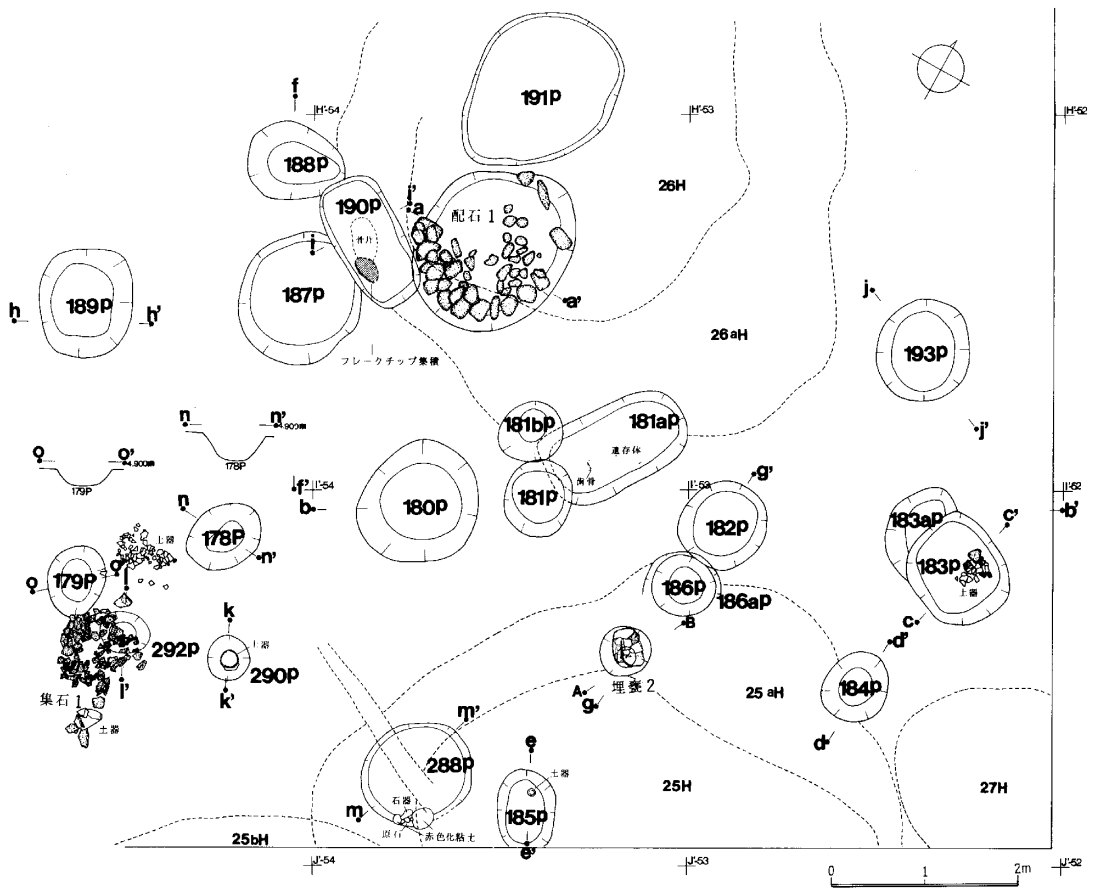
遺 物 (第354図-1～4、第352図-9～12)

埋土出土。1は続縄文。2は宇津内II a式。3、4は幣舞式。石器は第352図-9～12がある。9は搔器。10～12は原石面を残す側削器。

ピ ッ ト 181

遺 構 (第353図)

本ピットはI'53、J'53グリッドに構築されている。規模は直径約0.7mの円形を呈する。壁



第353図 ピット178、ピット179、ピット180、ピット181、ピット181 a、ピット181 b、ピット182、ピット183、ピット183 a、ピット184、ピット185、ピット186、ピット186 a、ピット187、ピット188、ピット189、ピット190、ピット191、ピット193、ピット288、ピット290、ピット292、配石 1、集石 1、埋壑 2 平面図

常呂川河口遺跡

高は確認面から約30cmである。

遺物 (第354図-5・6)

埋土出土。5は底部、6は無文。2点とも縄文晩期である。

ピット 181 a

遺構 (第353図)

本ピットはピット181、181 bに南壁側を切られている。規模は長軸約1.6m、短軸約0.9mの楕円形を呈すると思われる。長軸は南北方向である。壁高は確認面から約25cmである。遺存体はさほど粘性を有しないものの黄褐色を呈する。頭部は南方向にあり歯骨も検出された。時期不明の土壌墓である。

遺物 (第354図-7・8、第352図-13)

埋土出土。7、8は縄文晩期。8は幣舞式。

石器は第352図-13の黒曜石製のナイフ。基部の調整は両面に及ぶが、刃部は片面のみ行なわれている。

ピット 181 b

遺構 (第353図)

本ピットはピット181とわずかに切り合う様である。規模は直径約65cmの円形を呈する。壁高は確認面から約23cmである。遺物は出土していない。

ピット 182

遺構 (第353図)

本ピットは25 a 号の北壁近くにある。規模は直径約0.9mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。時期は不明である。

遺物 (第354図-9～11、第356図-1)

埋土出土。9は擦文。10は後北C₂式。11は縄文晩期前葉。第356図-1は黒曜石製の削器。

ピ ッ ト 183

遺 構 (第353図)

本ピットはJ'52グリッドに位置する。規模は長軸約1.15m、短軸約1.0mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約65cmである。ピット上部に20cm程度の角礫が縄文晩期幣舞式の土器とともに混入する。北壁際の床面近くにベンガラが散布されていた。時期は不明である。

遺 物 (第354図-12~17、第356図-2)

第354図-12は縄線文を施す。太めの縄を用いている。13~15は幣舞式。16は揚げ底の底部。続縄文であろう。17は縄文晩期前葉。石器は第356図-2の無茎石鏃がある。黒曜石製。

ピ ッ ト 183 a

遺 構 (第353図)

本ピットはJ'52グリッドに位置する。東壁側をピット183に切られている。規模は短軸約0.9mで楕円形を呈すると思われる。壁は緩く立ち上がり、高さは確認面から約23cmである。表土を剥土した段階で大型の石皿と角礫が出土した。この石皿と角礫はピットの上部に位置するものでピットの埋め戻し後に配置されたものと思われる。時期は不明である。

ピ ッ ト 184

遺 構 (第353図)

本ピットは25 a 号竪穴の北壁を切り込んで構築されている。規模は直径約0.80mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。

遺 物 (第354図-18・19)

第354図-18、19は埋土から出土した縄文晩期の土器。18は後葉であろう。

ピ ッ ト 185

遺 構 (第353図)

本ピットは25号竪穴の西壁際に構築されている。規模は長軸約0.9m、短軸約0.6mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約14cmである。

遺 物 (第354図-20、図版95-4)

第354図-20はピット上部から出土した小型土器。続縄文である。

ピ ッ ト 186・186 a

遺 構 (第353図)

ピット186は25 a 号の北壁を切って構築されている。規模は直径約0.7mの円形を呈する。壁高は確認面から約25cmである。

ピット186 a の大部分はピット186に切られているため検出できたのは北壁の一部である。形態は円形を呈すると思われるが規模は定かでない。

遺 物 (第354図-21~27)

第354図-21~24はピット186の埋土出土。21は続縄文宇津内式。22は縄文晩期中葉。23は口唇部が波状を呈する。器面は横位の縄文、内側は斜めの突瘤が施される。24は縄文後期堂林式。

ピット186 a からは25~27が出土しているが25はピット186の埋土から出土した第354図-24と同一個体である。26は縄文晩期中葉。27は続縄文の胴部片。

ピ ッ ト 187

遺 構 (第353図)

本ピットは26 a 号の南側に位置する。規模は直径約1.3mの円形を呈する。壁高は確認面から約25cmを測る。北壁側の暗褐色砂にベンガラが認められる。

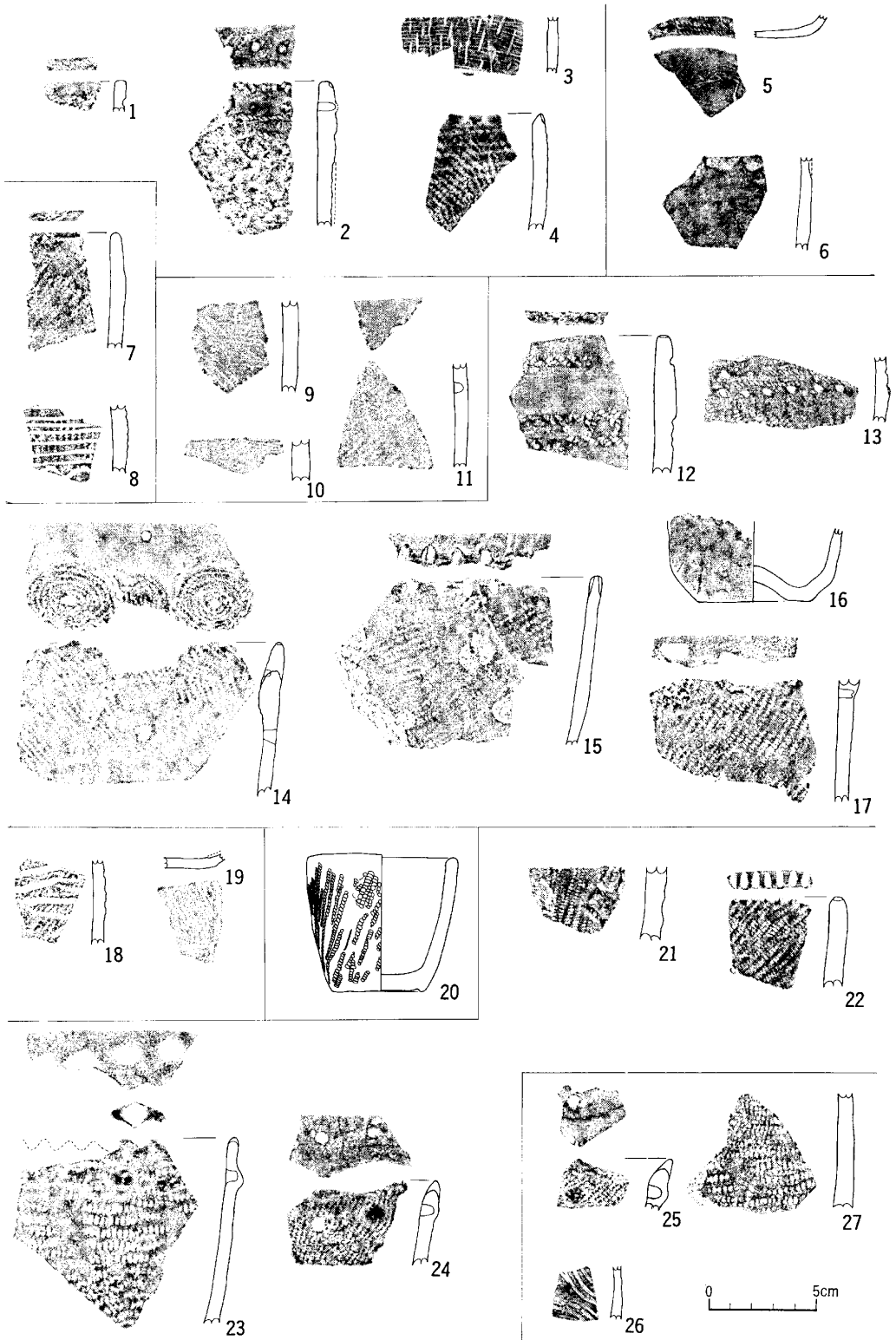
遺 物 (第355図-1・2、第356図-3~5)

第355図-1、2は埋土出土。1は口縁部の無文帯上に1本の沈線で区画され、半截状施文具による刺突を施し、胴部の縄文を横走沈線で区画している。続縄文前葉フシココタン下層式に相当するであろう。2は横走縄文上に縄線文を施す。

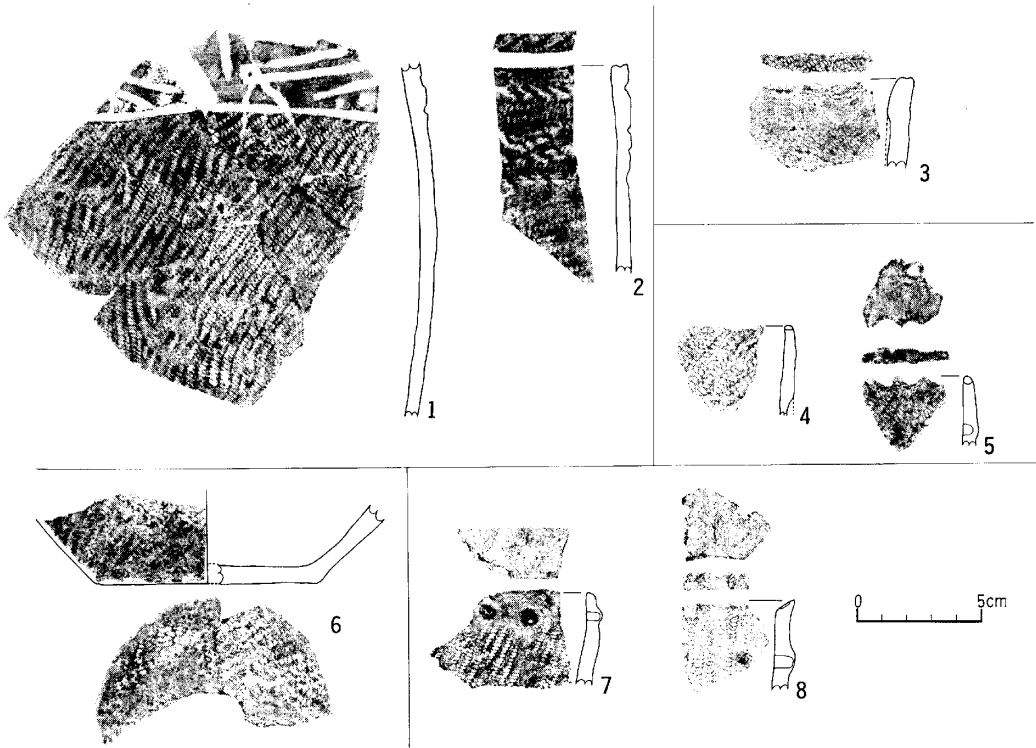
第356図-3~5は埋土出土。3は有茎石鏃。4は柄部が作出され、刃部が丸みを呈する両面加工ナイフ。5は削器。

小 括

第356図-4のナイフは続縄文期のものであると思われる。詳細な時期は不明であるが続縄文前葉の土墳墓であろう。



第354図 ピット180埋土(1~4)、ピット181埋土(5•6)、ピット181 a埋土(7•8)、ピット182埋土(9~11)、ピット183埋土(12~17)、ピット184埋土(18•19)、ピット185上部(20)、ピット186埋土(21~24)、ピット186 a埋土(25~27)出土土器



第355図 ピット187埋土(1・2)、ピット188埋土(3)、ピット189埋土(4・5)、ピット190埋土(6)、ピット191埋土(7・8)出土土器

ピ ッ ト 188

遺 構 (第353図)

本ピットは26 a 号の南壁を切り込んで構築されている。ピット190に東壁上部を削られているが長軸約1.05m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約70cmである。ピット上部から15cm下げた段階でベンガラが確認された。時期不明の土壌墓である。

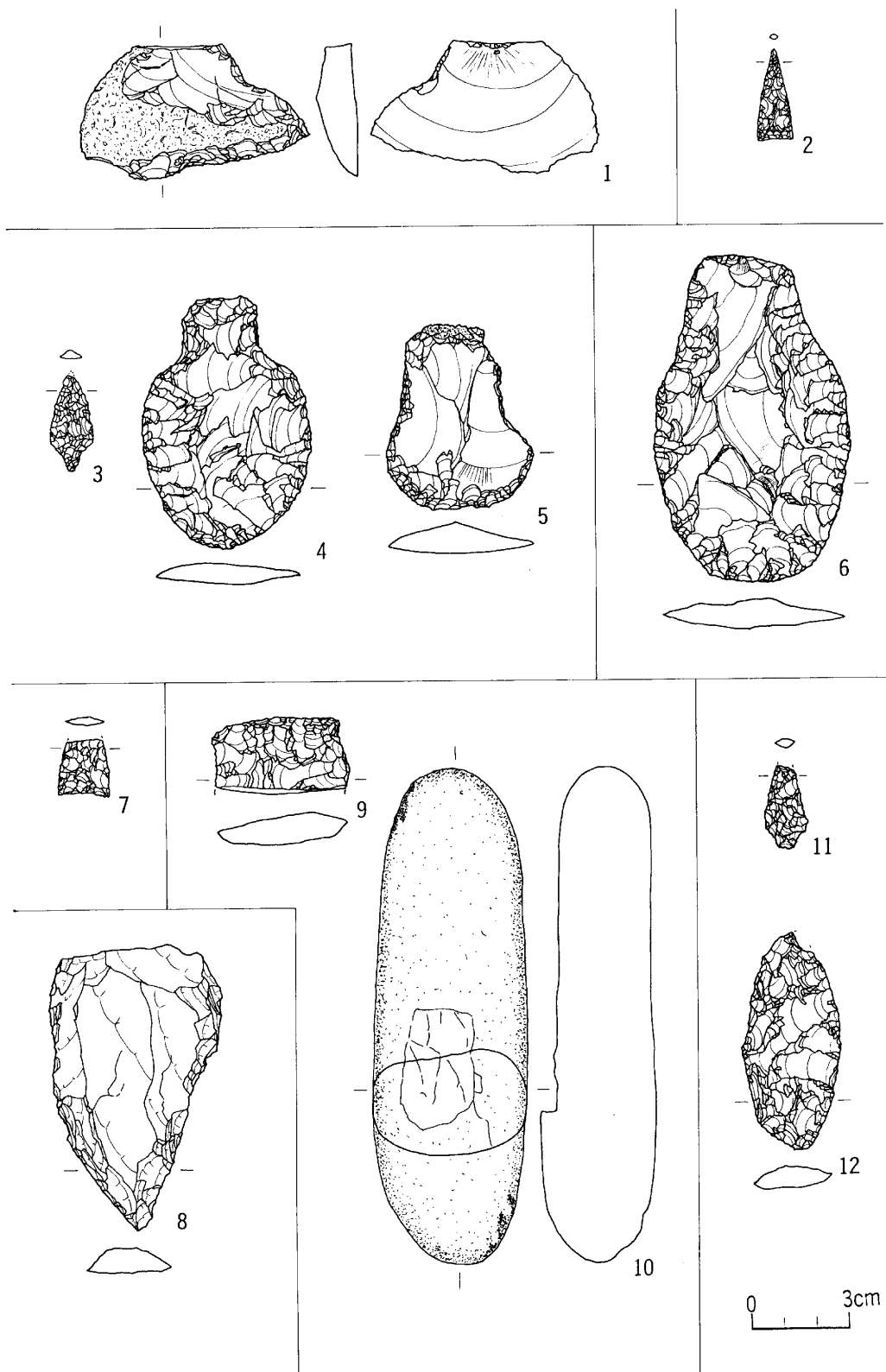
遺 物 (第355図- 3)

第355図- 3 は続縄文前葉であろう。

ピ ッ ト 189

遺 構 (第353図)

本ピットは I'52グリッドに位置する。規模は直径約1.15mの不整形方形を呈する。壁高は確認



第356図 ピット182埋土(1)、ピット183埋土(2)、ピット187埋土(3~5)、ピット190埋土(6)、ピット191埋土(7)、ピット194埋土(8)、ピット198埋土(9・10)、ピット200埋土(11・12)出土石器

常呂川河口遺跡

面から約55cmである。時期は不明である。

遺物 (第355図-4・5)

第355図-4、5は埋土出土。2点とも縄文晩期である。5は内側から突瘤が施されたもので晩期前葉であろう。

ピ ッ ト 190

遺構 (第353図)

本ピットは26a号竪穴の南壁を切って構築されている。規模は長軸約1.5m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約15cmを測る。ピットのほぼ中央部には幅約25cm、長さ約50cmの範囲に骨片が集中し、それに接してフレーク、チップも出土した。時期は不明である。

遺物 (第355図-6、第356図-6)

第355図-6は縄文晩期の底部。

第356図-6は両面加工ナイフ。

ピ ッ ト 191

遺構 (第353図)

本ピットは26号竪穴の床面を切り込んで構築されている。規模は長軸約2.0m、短軸約1.5mの不整形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは確認面から約38cmを測る。時期は不明である。

遺物 (第355図-7・8、第356図-7)

第355図-7、8は埋土出土。8は口縁部が内削の宇津内II b式。

第356図-7は無茎石鏃。

ピ ッ ト 192

遺構 (第358図)

本ピットはI'56グリッド、32号竪穴の西側に位置する。規模は直径約0.6mの円形を呈する。深さは確認面から約13cmを測る。時期は不明である。

遺物 (第357図-1・2)

第357図-1、2は縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 193

遺 構 (第353図)

本ピットはI'52グリッドに位置する。規模は直径約1.0mの円形を呈する。深さは確認面から約30cmを測る。物は出土していない。

ピ ッ ト 194

遺 構 (第358図)

本ピットはH'55、54グリッドに位置する。規模は直径約1.05mの円形を呈する。深さは確認面から約25cmを測る。

遺 物 (第356図-8)

第356図-8は埋土から出土した玄武岩製のナイフ。

ピ ッ ト 195

遺 構 (第358図)

本ピットはI'55グリッドに位置する。規模は直径約0.65mの不整形円形を呈する。壁は底面から丸みをもって立ち上がり、深さは確認面から約43cmを測る。物は出土していない。

ピ ッ ト 196

遺 構 (第358図)

本ピットはH'55グリッドに位置する。規模は直径約1.0mの円形を呈する。深さは確認面から約18cmを測る。

遺 物 (第357図-3・4)

第357図-3、4は埋土出土。3は幣舞式。4は縄文後期鯨潤式。

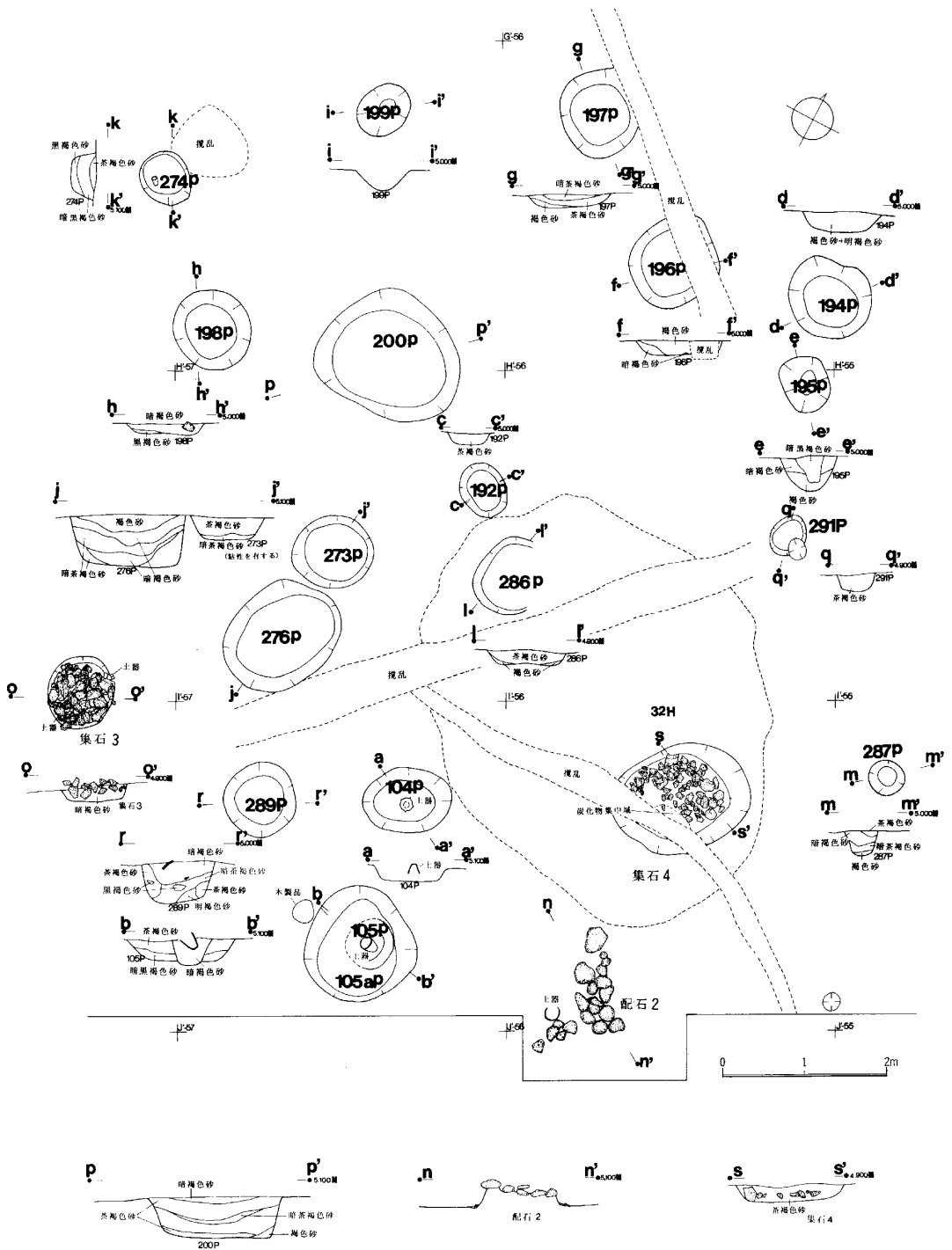
ピ ッ ト 197

遺 構 (第358図)

本ピットはH'55グリッドに位置する。北壁上部が攪乱を受けるものの規模は直径約1.0mの円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、深さは確認面から約17cmを測る。時期は不明である。



第357図 ピット192埋土(1・2)、ピット196埋土(3・4)、ピット197埋土(5)、ピット198埋土(6)、ピット199埋土(7)、ピット200埋土(8~16)、ピット206埋土(17~26)出土土器



第358図 ピット104、ピット105・105 a、ピット192、ピット194、ピット195、ピット196、ピット197、ピット198、ピット199、ピット200、ピット273、ピット274、ピット276、ピット286、ピット287、ピット289、ピット291、配石 2、集石 3・4 平面図

遺物 (第357図-5)

第357図-5 は縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 198

遺構 (第358図)

本ピットはH'56グリッドに位置する。規模は直径約1.0mの円形を呈する。深さは確認面から約13cmを測る。時期は不明である。

遺物 (第357図-6、第356図-9・10)

第357図-6 は埋土出土。口縁部は緩く外反し、口唇部に斜めの刻みが施される。続縄文前葉であろう。

第356図-9 は両面加工ナイフの柄部。10は叩き石。両先端部の側縁に使用痕が認められる。

ピ ッ ト 199

遺構 (第358図)

本ピットはH'56グリッドに位置する。規模は直径約0.7mの円形を呈する。底面は狭くピット上部にむかって緩く立ち上がる。深さは確認面から約25cmを測る。時期は不明である。

遺物 (第357図-7)

第357図-7 は埋土出土。器面に円形刺突を不規則に施したもので晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 200

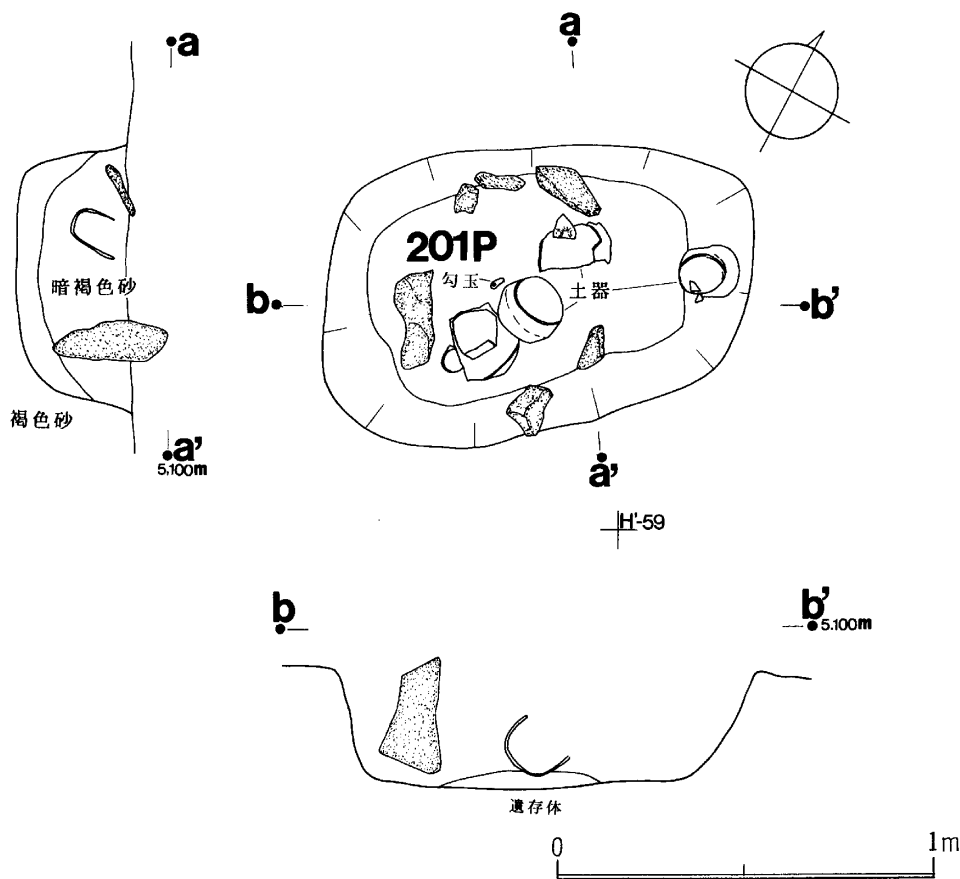
遺構 (第358図)

本ピットはH'56、I'56グリッドに位置する。規模は長軸約1.7m、短軸約1.5mの楕円形を呈する。深さは確認面から約50cmを測る。

遺物 (第357図-8～16、第356図-11・12)

第357図-8～16は埋土出土。8は後北C₂式。9は宇津内II b式。10は口縁部がわずかに外反するようである。口唇部に斜めの刻みが施されるもので続縄文前葉と思われる。11、12は幣舞式。13は半截状施文具を斜めに突き刺し、14は円形施文具をもちいた刺突文。15は浅鉢である。縄文の上に擦痕がみられる。13～14は縄文晩期中葉であろう。16は縄文後期堂林式。

第356図-11は有茎石鏃。12は両面加工ナイフ。2点とも黒曜石製。



第359図 ピット201平面図

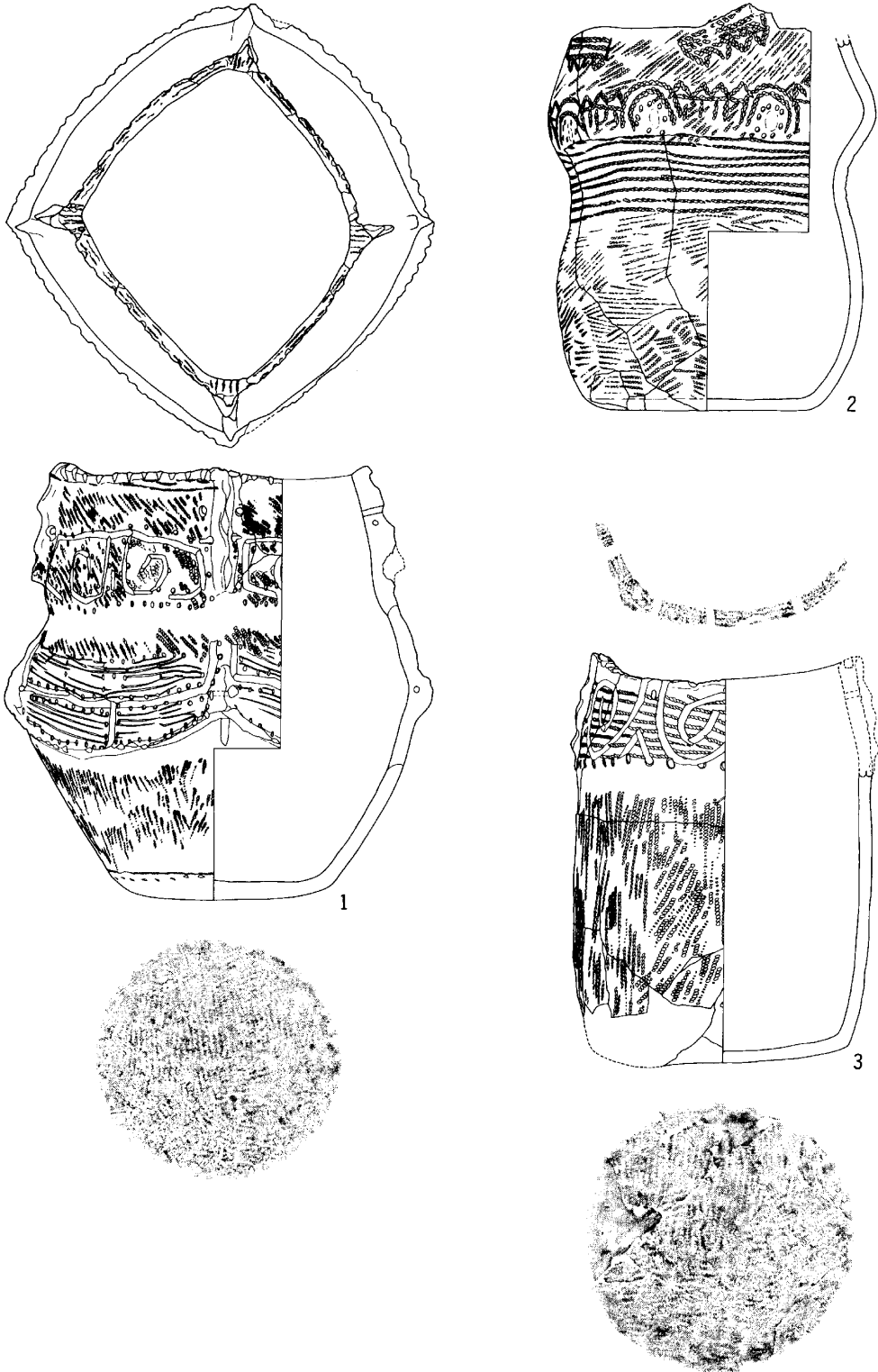
ピ ッ ト 201

遺 構 (第359、367図、図版96-1・2)

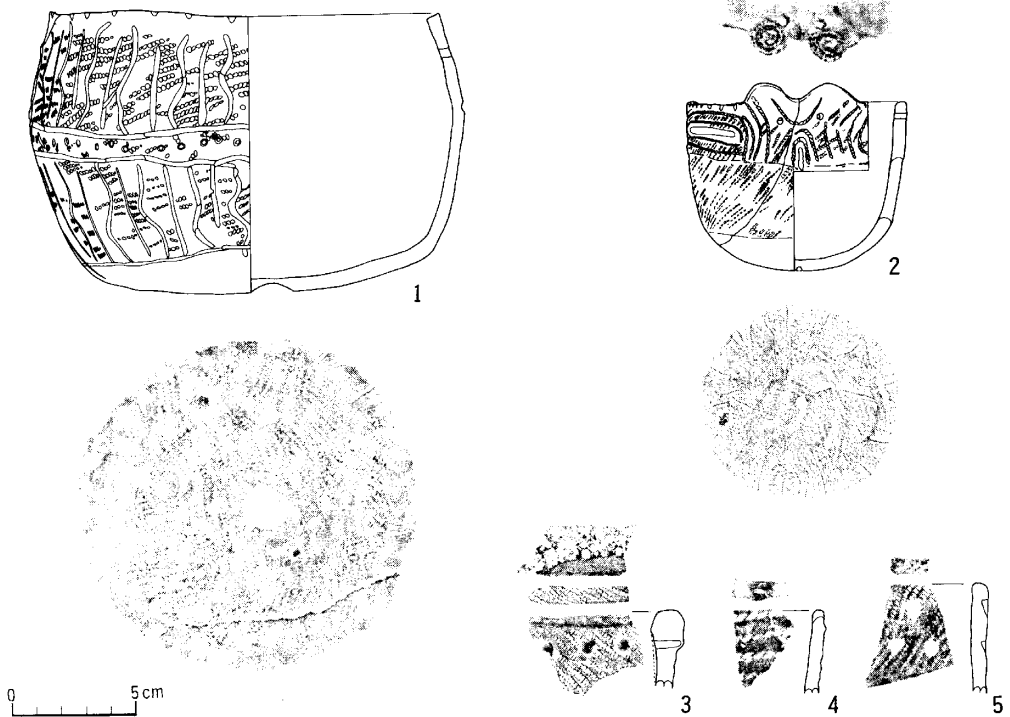
本ピットはH'58、59グリッドに位置する。表土を剥土し第II層の茶褐色砂を約15cm下げた段階で直立した角礫が現れ、精査の結果、暗褐色の落ち込みを確認した。形態は長軸約1.15m、短軸約0.80mの不整長方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは約30cmを測る。遺存体は黄褐色を呈しピットのほぼ中央部にある。角礫はピットを取り囲むのではなく遺存体を取り囲むように大型4本、小型2本が直立している。大型の角礫は底面近くまで達している。土器は遺存体の上部から4点、北壁際から1点出土した。

遺 物 (第360図-1～3、第361図-1～5、第363図-1～5、図版97-6)

1は床面出土。上面観は方形、底部は円形を呈する。口縁部の角から隆帯が垂下する。胴中央部が磨消しによる無文帯となる。無文帯の上部は渦巻き状の沈線と刺突文が施され、下部は細かい沈線、太い沈線、刺突文で構成される。胴下部の縄文とは隆帯で区画される。2はくびれた



第360図 ピット201床面(1)・埋土(2・3)出土土器



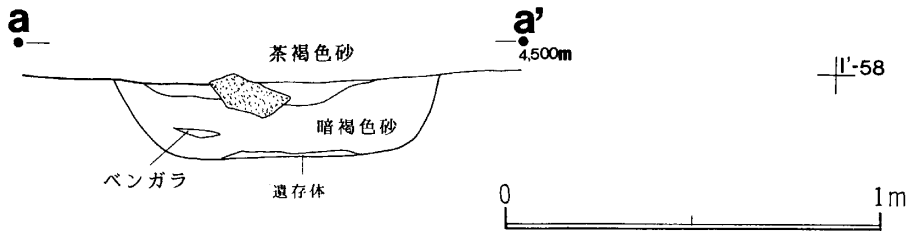
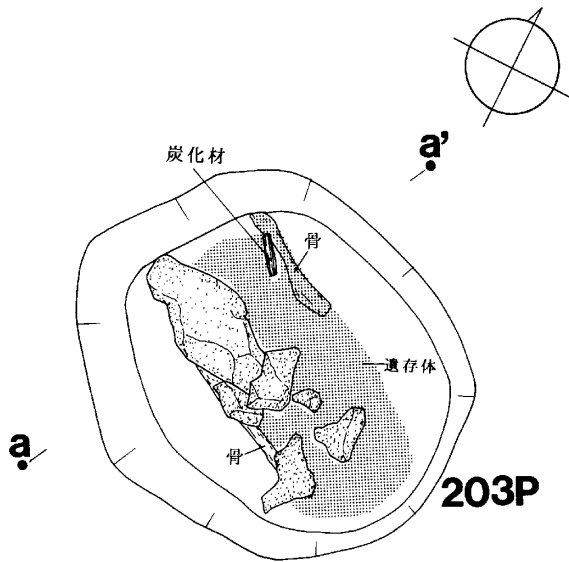
第361図 ピット201埋土(1~5)出土土器

胴中央部に縄線文が施され、その上部は丸みをもち縄線を半円形、山形、直線状に施す。3は4個の小突起をもつと思われるが2個は欠失する。小突起から隆帯が垂下する。文様は口縁下部に限定しており縄線文の上から渦巻き状沈線が施され、下部とは円形刺突で区画される。第361図-1はボール状の器形を呈する。胴中央部の2本の沈線間に円形刺突が施され、その上下に弧線、直線状の沈線を施す。底部中央部には幅1.5cmの凹みがある。2は口縁部に2個1組の小突起を3箇所にもつ。文様は縄線文を主体に構成され、一部に沈線も施される。3は宇津内II a式。4は緑ヶ岡系。5は晩期中葉の刺突文。

石器は第363図-1~5がある。1は有茎石鏃。2は石鏃の先端部。3は両面加工ナイフ。4は側削器。5は勾玉。両側から穿孔され覆面に3本の刻線がある。滑石製。1は玄武岩製であり他は黒曜石製。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。遺体を取り囲むように角礫が直立の状態に配置されている。壺形、ボール形の土器が5点セットで出土し、勾玉状の石製品も伴出している。



第362図 ピット203平面図

ピット 202

遺構 (第367図)

本ピットは I'58グリッドに位置する。規模は直径約0.55mの円形を呈する。壁高は確認面から約49cm測る。時期は不明である。

ピット 203

遺構 (第362、367図)

本ピットは I'58グリッドに位置する。規模は長軸約1.1m、短軸約0.95mの楕円形を呈する。ピット上部には長軸面に角礫が認められた。角礫を取り上げると黄褐色土の遺存体が糊状に広

がっていた。頭部は最も大きな角礫の下部にある。頭位は西方向である。黄褐色土には骨も残存している。頭部の北には幅3cm、長さ約33cmの骨がある。北壁際には大腿部と思われる幅5cm、長さ22cmの骨が検出された。頭部の上部にベンガラが散布されている。

小 括

形態は楕円形を呈する。上部に角礫が配置され下部に遺存体が認められる。頭位は西方向である。時期は不明である。

ピ ッ ト 204

遺 構 (第367図)

本ピットはH'59グリッドに位置する。規模は直径約0.5mの円形を呈する。壁高は確認面から約29cmを測る。時期は不明である。

ピ ッ ト 205

遺 構 (第367図)

本ピットはH'59グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。

ピ ッ ト 206

遺 構 (第283図)

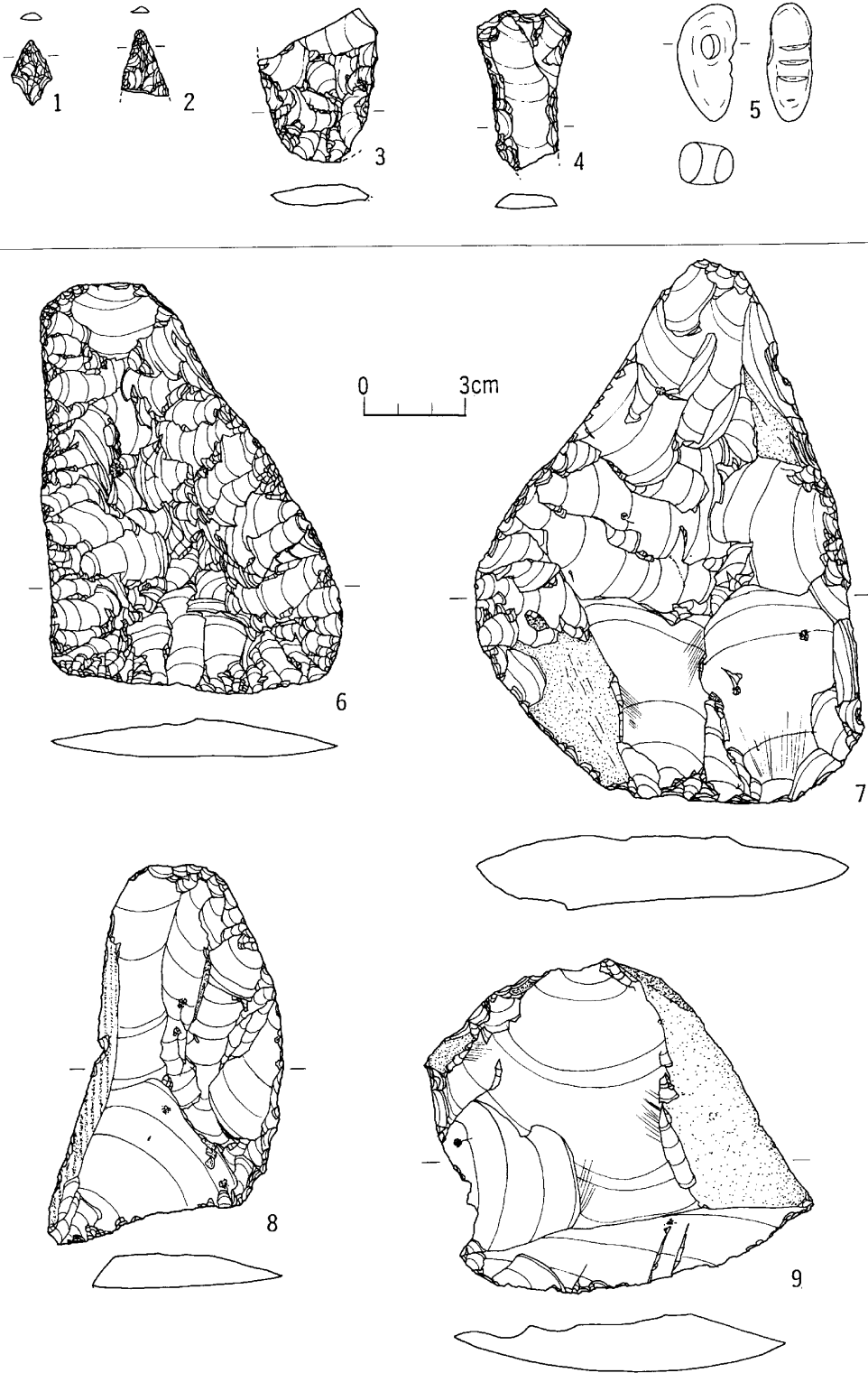
本ピットは23号竪穴の床面にある。北壁の一部が攪乱を受けているものの規模は長軸約2.5m、短軸約1.1mの楕円形を呈する。底面のほぼ中央部に図示していないが直径約35cmの石皿があり、近くから遺存体とベンガラが検出された。時期は不明である。

遺 物 (第357図-17～26、第363図-6～9、第364図-1～7)

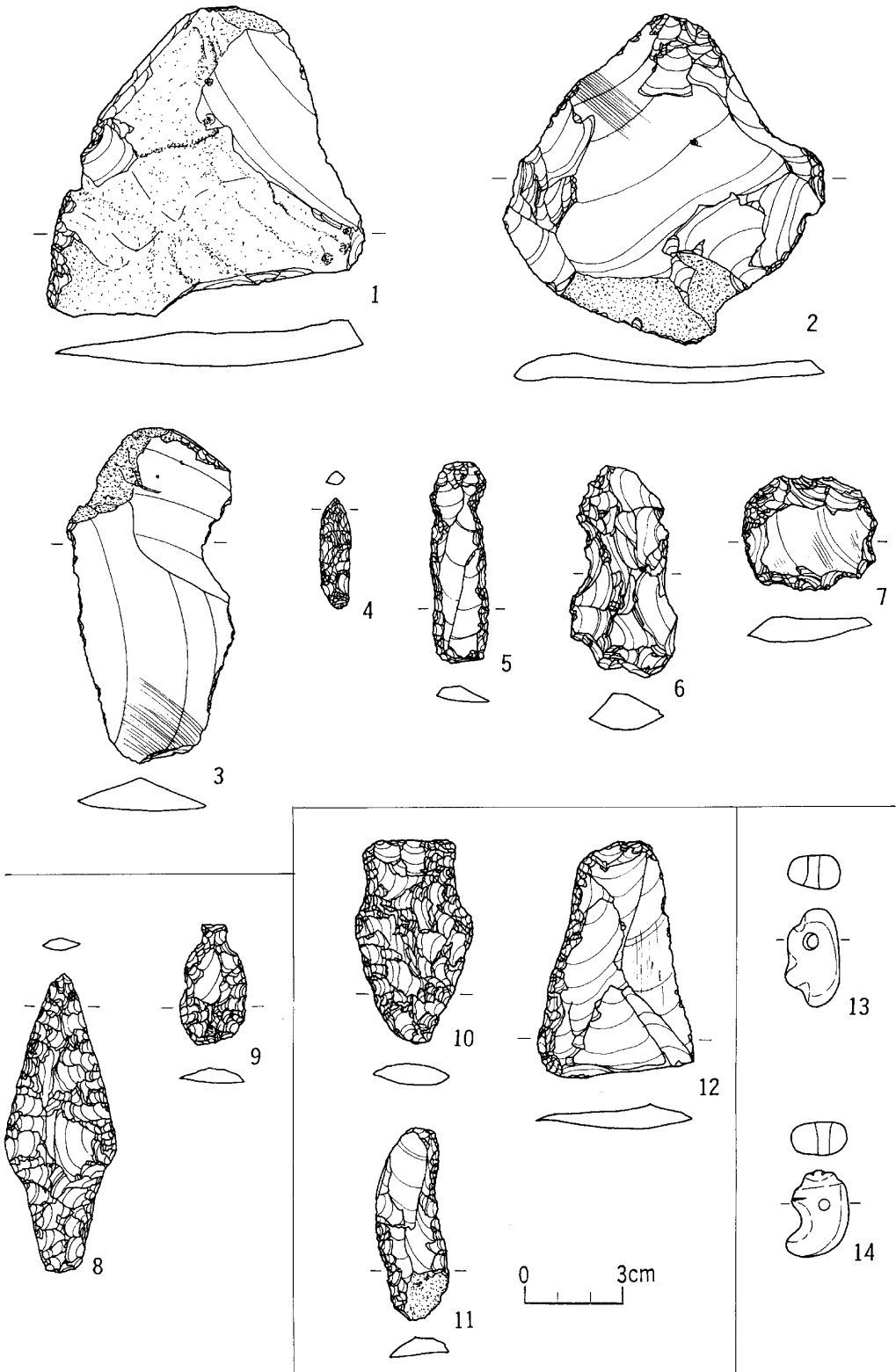
埋土出土。17は宇津内II a 式。18～20は幣舞式。21～25は晩期中葉。26は縄文後期。

石器は床面から第363図-6～9が出土した。6は両面加工ナイフ。7は両面加工ナイフの未製品。8、9は大形の剝片。9の原石面に赤色顔料が付着する。第364図-1～3も床面出土。原石面を残す大形の剝片。4は有茎石鏃。5は側削器。6は両面加工ナイフの未製品。7は搔器。すべて黒曜石製。他に白色粘土が出土している。

常呂川河口遺跡



第363図 ピット201埋土(1~4)・ベニガラ内(5)、ピット206床面(6~9)出土石製品・石器



第364図 ピット206床面(1~3)・埋土(4~7)、ピット207床面(8・9)、ピット210埋土(10~12)出土石器、ピット213ベニガラ内(13・14)出土ヒスイ

ピ ッ ト 207

遺 構 (第283図)

ピット206に北壁の一部を切られている。規模は長軸1.30m、短軸0.90mの不整形を呈する。壁高は23号壁穴の床面から約35cmを測る。

遺 物 (第365図-1～3、第364図-8・9)

埋土出土。1は縄文前葉。2は縄文晩期前葉。3は同前葉。石器は床面から第364図-8の石槍、9の石匙が出土している。9は頁岩製。

ピ ッ ト 208

遺 構 (第367図)

本ピットはJ'59グリッドに位置する。規模は短軸約1.15mの楕円形を呈すると思われる。壁高は23号壁穴の床面から約12cmを測る。

遺 物 (第365図-4、図版97-7)

4は床面出土。口縁部に2個1対、1対の小突起をもつが1個は欠失する。突起の下部にボタン状の貼付文がある。口縁部には内側から突瘤が施され、器面には円形刺突が連続した宇津内II a式。

ピ ッ ト 209

遺 構 (第367図)

本ピットはJ'58グリッド23号壁穴の床面に位置する。規模は短軸約0.87mの楕円形を呈すると思われる。壁高は23号壁穴の床面から約5～11cmを測る。時期は不明である。

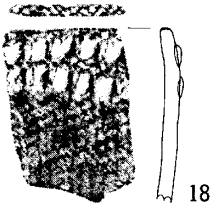
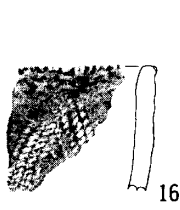
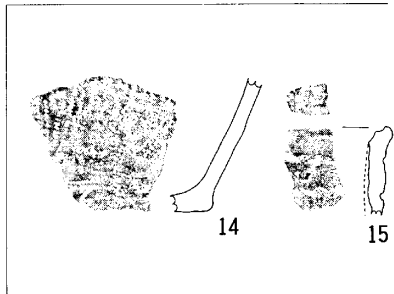
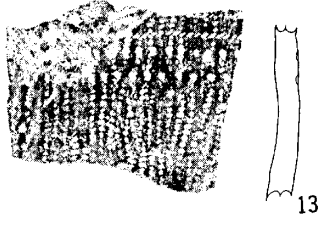
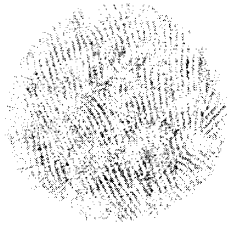
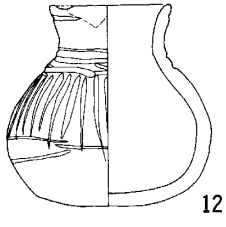
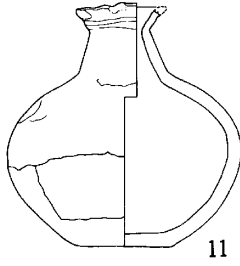
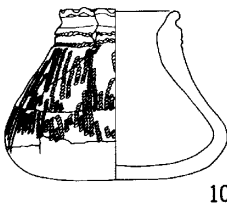
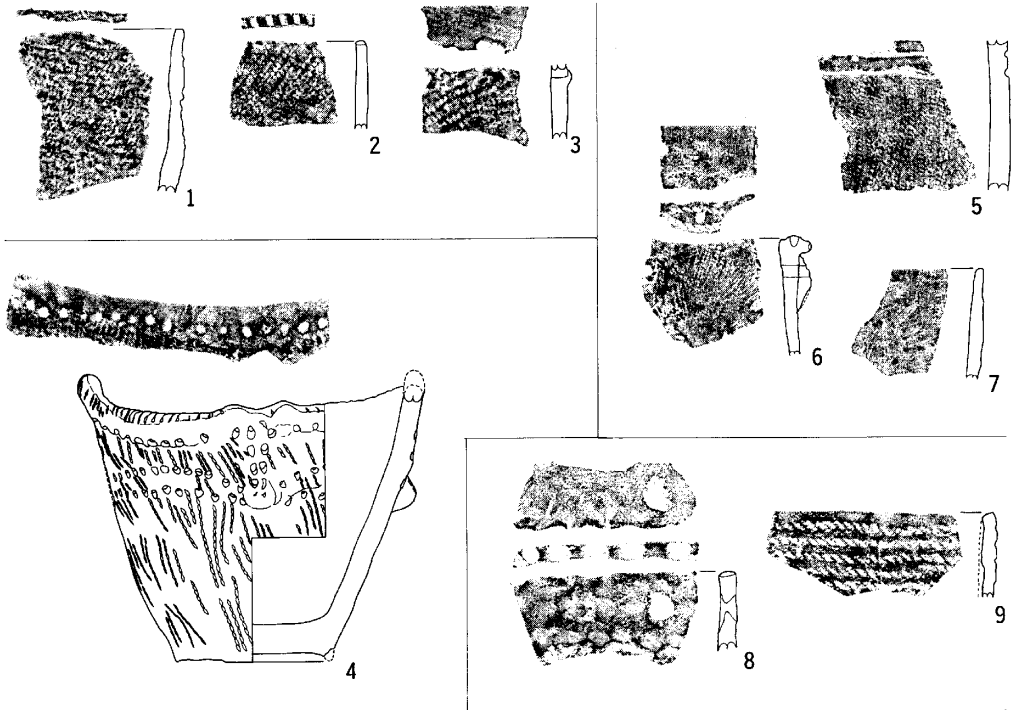
ピ ッ ト 210

遺 構 (第367図)

本ピットはJ'58グリッド24号壁穴の埋土内に構築されている。規模は長軸約1.25m円形を呈する。壁高は確認面から約60cmである。

遺 物 (第365図-5～7、第364図-10～12)

埋土出土。5は縄文前葉。6は幣舞式。7は縄文晩期中葉。石器は第364図-10～12がある。10は両面加工ナイフ。11、12は側削器。すべて黒曜石製。



0 5cm

第365図 ピット207埋土(1~3)、ピット208床面(4)、ピット210埋土(5~7)、ピット212埋土(8・9)、ピット213埋土(10~13)、ピット214埋土(14・15)、ピット216埋土(16~18)出土土器

ピ ッ ト 211

遺 構 (第367図)

本ピットはJ'57グリッドにあり、24号堅穴の床面を切って構築している。規模は直径約0.95mの楕円形を呈する。壁高は24号堅穴の床面から約10cmを測る。

ピ ッ ト 212

遺 構 (第367図)

本ピットはI'57グリッドに位置する。規模は直径約1.2m円形を呈する。床面の中央からやや東寄りにフレーク・チップがまとまって出土した。フレーク・チップの周囲は粘性をもつ赤褐色土が薄く堆積しており、遺存体と思われる。壁高は確認面から約38cmである。時期は不明である。

遺 物 (第365図-8・9)

埋土出土。8は口唇部が小波状を呈する。器面は指頭を押しつけた様な丸く浅い凹みがある。詳細な時期は不明である。9は幣舞式。

ピ ッ ト 213

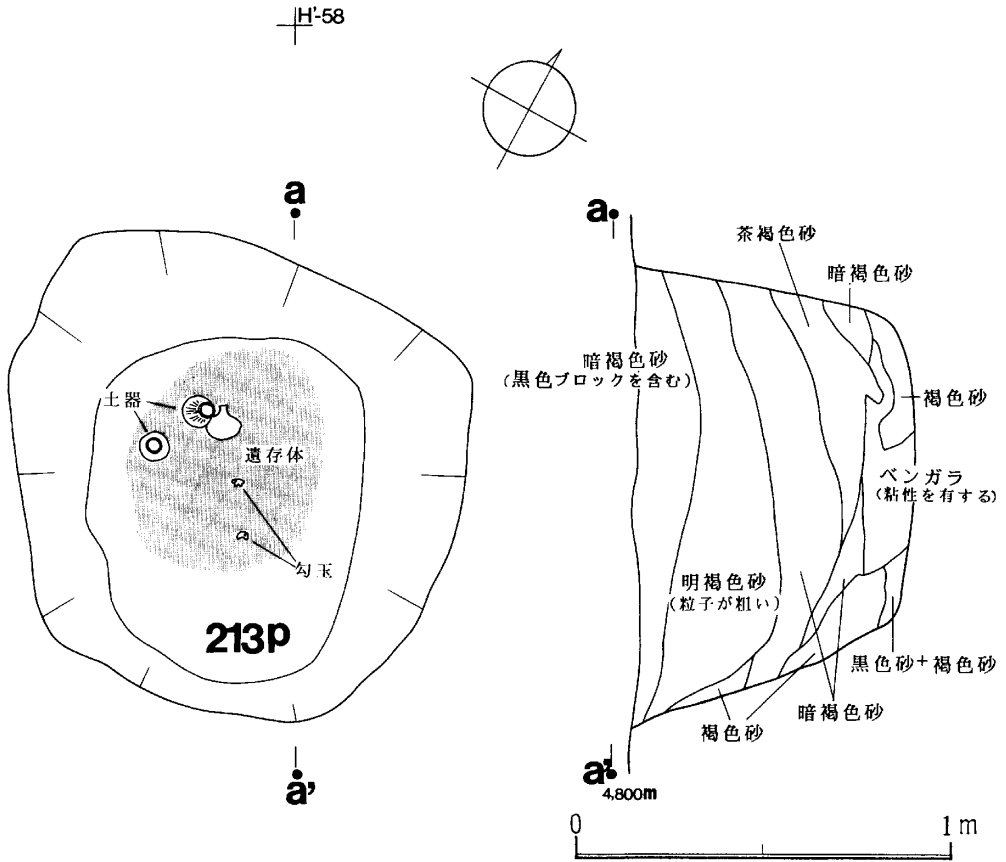
遺 構 (第366、367図、図版98-1・2)

本ピットはI'57、58グリッドに位置する。規模は長軸約1.20mの不整形を呈する。壁高は約70cmである。床面に近い段階で赤褐色土の面が現れた。赤褐色土は粘性を有し、部分的にベンガラが含まれている。遺体上部にベンガラを散布したものと判断されるが、それほど多量にあるわけではない。土器は西壁際にある。遺体の上部から出土したもので第365図-10は床面に近い位置から出土している。勾玉は遺体の中程から2～3cmのレベル差をもって出土している。

遺 物 (第365図-10～13、第364図-13・14、図版98-3～5)

埋土出土。この3点は遺存体の上部から近接して出土した。10は底部がきつく張り出した壺形土器であり、口縁部に2条の縄線文が施される。11は丸みをもった胴部から細い頸部のある無文の壺形土器で口縁部は「く」字状に外反する。器面は朱色に彩色される。大洞C₂～A式に比定される。12は10と11の中間タイプである。11に比して胴部の丸みも弱い。頸部下に横走、縦走沈線が施される。13は宇津内II b式。

石器は第364図-13、14のヒスイの勾玉他に図示していないが玄武岩製の有茎石鏃が1本出土している。



第366図 ピット213平面図

小 括

本ピットから出土した第365図-11は大洞C₂~A式に比定され、10、12は在地の土器とすることができる。

ピ ッ ト 214

遺 構 (第367図)

本ピットはH'58グリッドに位置する。規模は長軸約1.35m、短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmを測る。

遺 物 (第365図-14・15、第370図-1~4)

埋土出土。14は続縄文の底部。15は縄線文が施される。続縄文前葉であろう。石器は第370図-1~4の削器がある。

ピ ッ ト 215

遺 構

本ピットはI'58グリッドに位置する。規模は長軸約0.58m、短軸約0.40mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約27cmを測る。時期は不明である。

ピ ッ ト 216

遺 構 (第367図)

本ピットはH'59グリッドに位置する。規模は長軸約1.25m、短軸約1.0mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。時期は不明である。

遺 物 (第365図-16~18、第370図-5・6)

埋土出土。16、17は後北C₂式。18は縄文晩期前葉の爪形文。第370図-5、6は剝片の縁辺部に刀こぼれ状の微細な使用痕がある。

ピ ッ ト 217

遺 構 (第274図)

本ピットはG'59、60グリッドに位置する。規模は直径約1.60mの不整形は確認面から約19cmである。時期は不明である。床面に3本の小柱穴があるが本ピットに伴うものではない。

遺 物 (第368図-1~7、第370図-7)

埋土出土。1は宇津内II b式。2は沈線間に刺突が施される。続縄文前葉であろう。3は口縁下部に縄線文が施される。縄線文は全周しない。続縄文前葉である。4~7は縄文晩期中葉。時期は不明である。

第370図-7は側削器。黒曜石製。

ピ ッ ト 218

遺 構 (第367図)

本ピットはH'58グリッド34号竪穴の中央部床面を浅く切って構築されている。規模は長軸約0.85m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。34号竪穴の床面から約12cmを測る。

焼土内からフレーク・チップ132点が出土している。時期は不明である。

ピ ッ ト 219

遺 構 (第367図)

本ピットはG'58、H'58グリッド、34号堅穴の北壁を切って構築されている。規模は長軸約2.05m、短軸約1.5mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約41cmである。時期は不明である。

遺 物 (第368図-8～18、第370図-8～13)

埋土出土。8～10は宇津内II a式。9、10は同一個体。突瘤下に細い横走沈線とそれを区切る縦沈線が施され、胴部とは刺突文で区画される。宇津内II a式の中でも類例の少ない文様である。11～13は幣舞式。14、15は縄文晩期中葉。16は同前葉。17は縄文後期堂林式。18は縄文中期北筒III式。

石器は第370図-8～13がある。8～11は側削器。12は片刃磨製石斧。緑色岩製。13は台石。細い線状の使用痕と叩き痕が表裏に見られる。実測図の下端部は黒く変色している。

ピ ッ ト 219 a

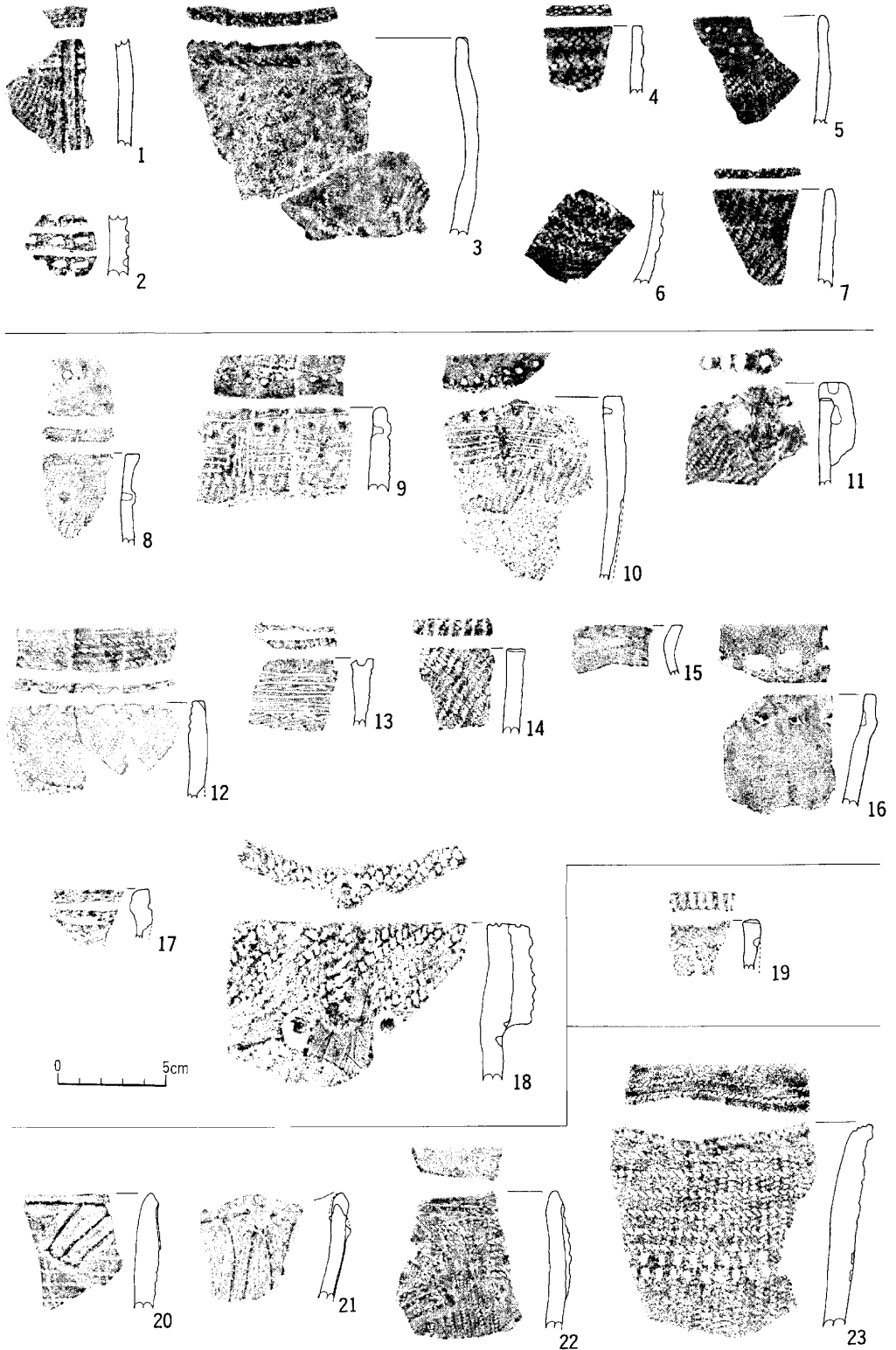
遺 構 (第367図)

本ピットはピット219に大半を切られており、西側がかろうじて残存している。形態は楕円形を呈すると思われるが詳細は不明である。

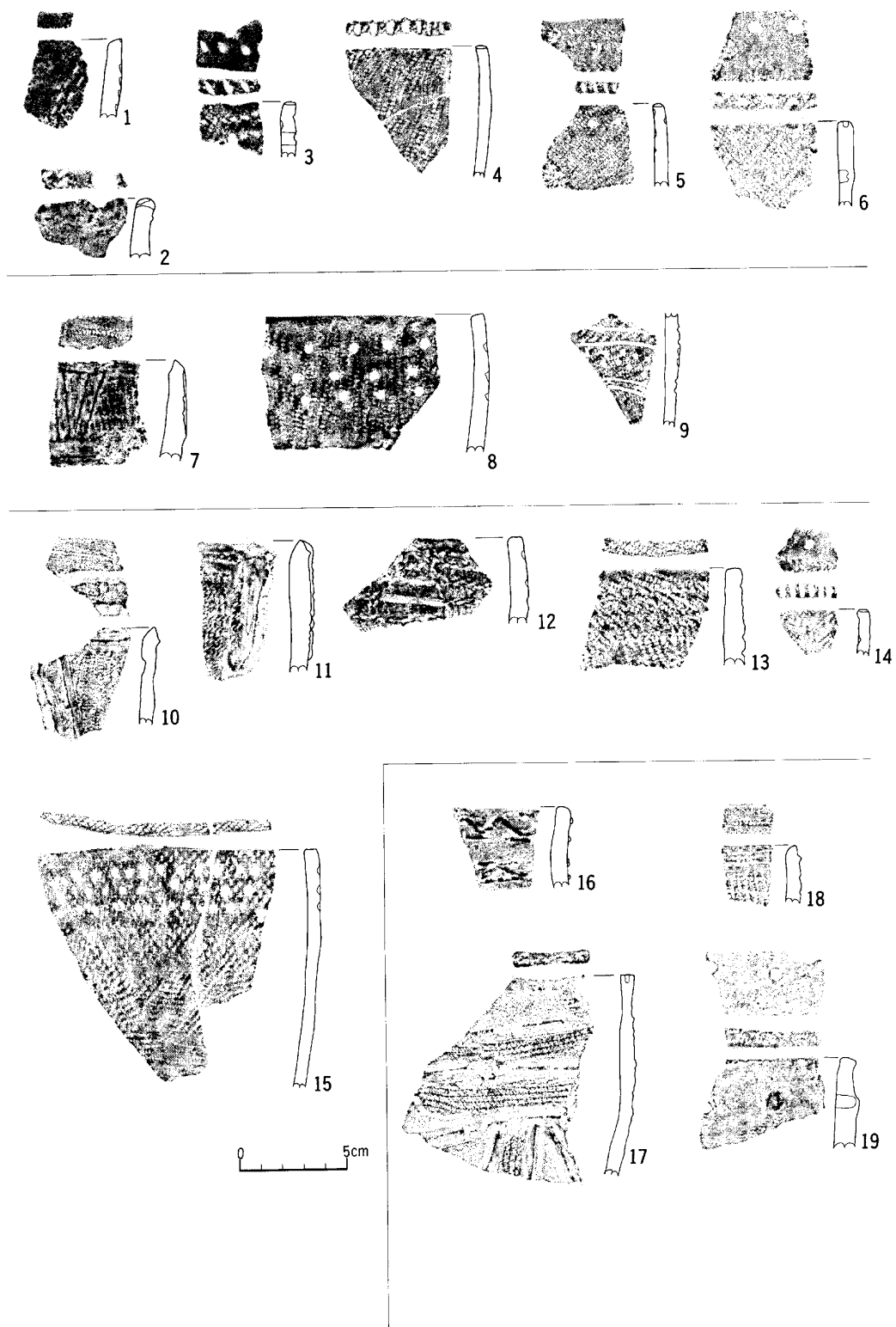
遺 物 (第368図-19)

埋土から出土。器面に半截状施文具による刺突が施された縄文晩期の土器。

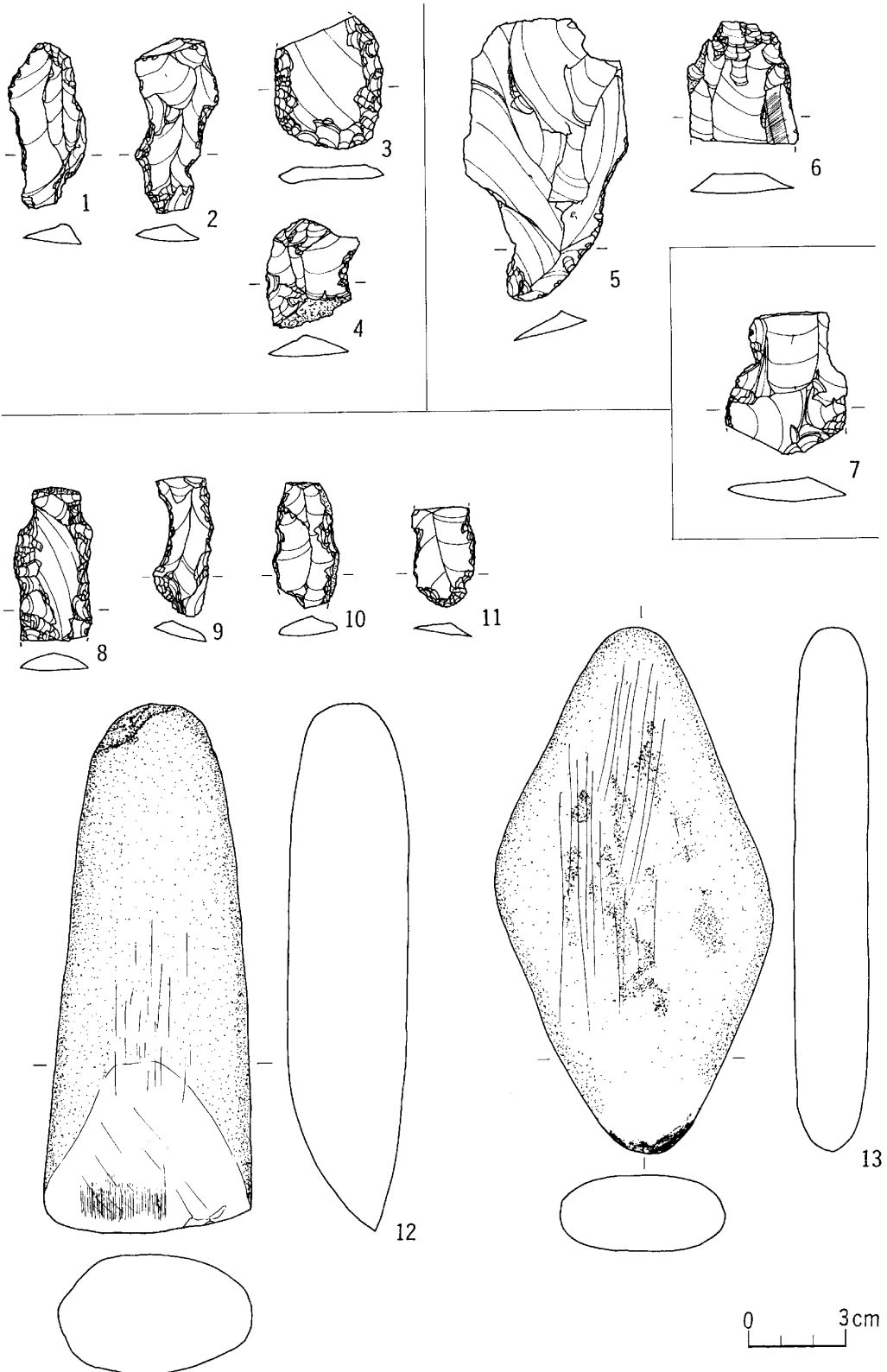
ピット220～229は欠番



第368図 ピット217埋土(1~7)、ピット219埋土(8~18)、ピット219 a埋土(19)、ピット230埋土(20~23)出土土器



第369図 ピット230埋土(1~6)、ピット231埋土(7~9)、ピット232埋土(10~15)、ピット233埋土(16~19)出土土器



第370図 ピット214埋土(1~4)、ピット216埋土(5・6)、ピット217埋土(7)、ピット219埋土(8~13)出土石器

ピ ッ ト 230

遺 構 (第388図)

本ピットはD'71、72グリッドに位置する。規模は直径約1.4m円形を呈する。壁高は確認面から約98cmを測る。

遺 物 (第368図-20~23、第369図-1~6、第375図-1・2)

埋土出土。20~23は宇津内II b式。第369図-1は下田ノ沢2式、2は統縄文前葉。3~5は縄文晩期中葉。6は同前葉。

石器は第375図-1の有茎石鏃。2の両面加工ナイフがある。2点とも黒曜石製。

ピ ッ ト 231

遺 構 (第388図)

本ピットはD'72グリッドに位置する。規模は長軸約0.92m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。時期は不明である。

遺 物 (第369図-7~9)

埋土出土。7は宇津内II b式。8は統縄文前葉、9は縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 232

遺 構 (第388図)

本ピットはC'72、D'72グリッドに位置する。規模は長軸約1.6m、短軸約1.4mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約60cmを測る。

遺 物 (第369図-10~15)

埋土出土。10、11は宇津内II b式。12は幣舞式。13~15は縄文晩期中葉。

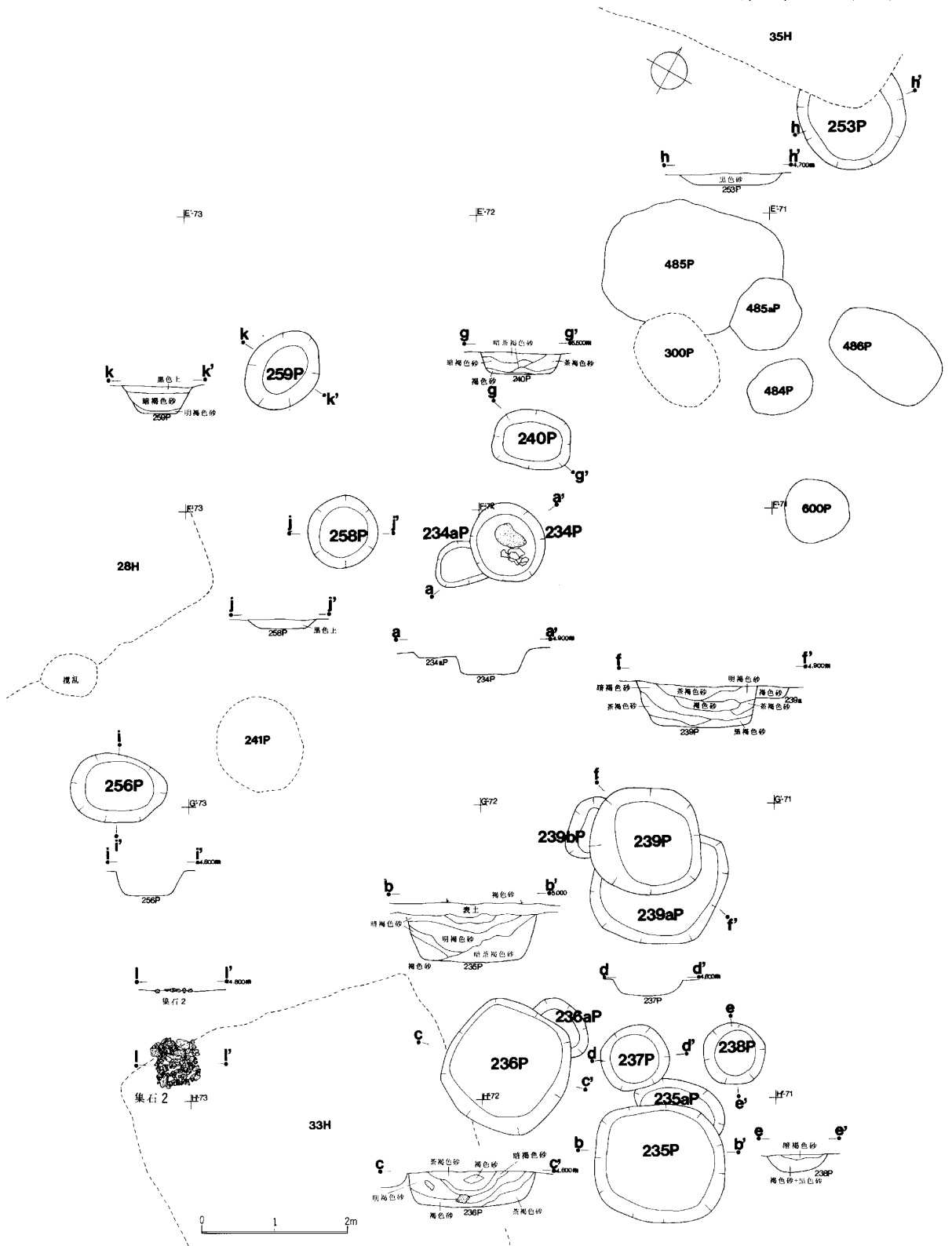
ピ ッ ト 233

遺 構 (第388図)

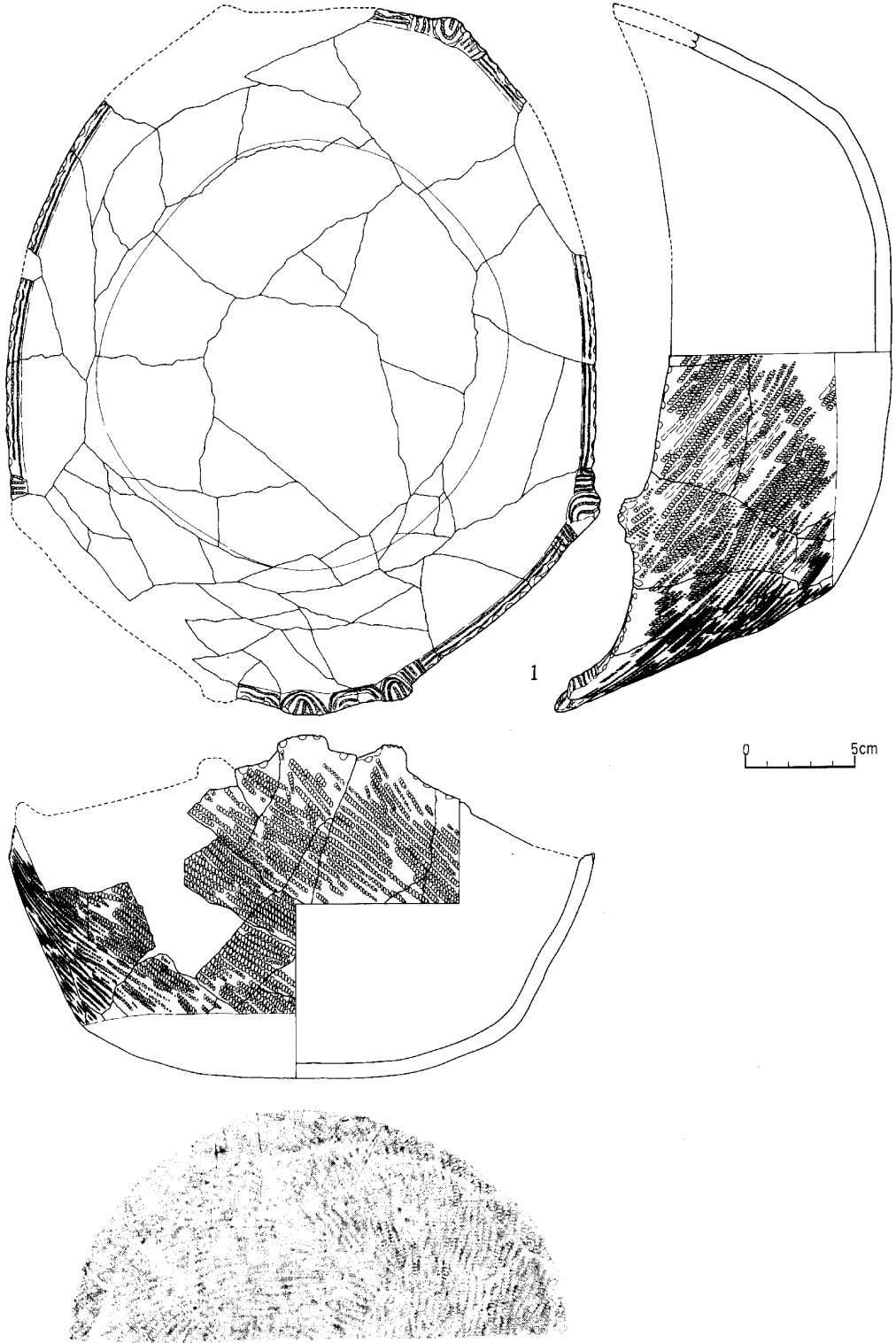
本ピットはA73グリッドに位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は確認面から約29cmである。時期は不明である。

遺 物 (第369図-16~19)

埋土出土。16はオホーツク文化ソーメン状貼付文。17は後北C₂式。18は宇津内II b式。19は



第371図 33号、35号竪穴周辺のピット群平面図



第372図 ピット234埋土(1)出土土器

同II a 式。

ピ ッ ト 234

遺 構 (第371図、図版99-1)

本ピットはG'71グリッドに位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。ピットの中位に長さ45cmの大型角礫があり、同一レベルから第370図-1の土器が内面を表にむけた状態で出土している。

遺 物 (第372図-1、第375図-3、図版99-2)

埋土出土。1は舟形浅鉢である。口縁部の長軸面に3個、反対側に2個の突起と角の部分にそれぞれ4個の小突起をもつ幣舞式である。

石器は第375図-3の石槍片がある。

ピ ッ ト 234 a

遺 構 (第371図)

本ピットはピット234に北壁を切られているものの楕円形を呈するようである。深さは確認面から約7cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 235

遺 構 (第371図)

本ピットはI'71グリッドに位置する。規模は長軸約1.75mの不整形を呈する。壁高は確認面から約52cmである。第II層の茶褐色砂層から宇津内II b 式の完形品が出土しているためこの時期より古い可能性はあるものの詳細は不明である。

遺 物 (第373図-1~14、第375図-4・5)

埋土出土。1は宇津内II a 式。2も宇津内系である。3は縄文晩期後葉。4、5は幣舞式。6~12は縄文晩期中葉。13、14は横走縄文を地文に内側から突瘤が施される。同前葉であろう。

石器は床面から第375図-4の両面加工ナイフ、5の削器が出土している。

ピ ッ ト 235 a

遺 構 (第371図)

本ピットはピット235に大半を切られている。長軸1.20mの楕円形を呈すると思われる。壁高

は確認面から約21cmである。遺物は出土せず時期も不明である。

ピ ッ ト 236

遺 構 (第371図)

本ピットはH'71、72、I'71グリッドに位置する。規模は直径約1.70mの不整形を呈する。埋土は自然堆積であり明褐色砂層には10～20cmほどの角礫を多量に含む。壁高は確認面から約50cmである。時期は不明である。

遺 物 (第374図-1～11、第375図-6～10)

1は床面から出土した。口唇部にも縄が押捺されている。縄文晩期中葉であろう。他は埋土出土である。2は宇津内II a式。3は縄端圧痕文が深く押捺された宇津内系。4は突瘤文に半截施文状工具による沈線と円形刺突が施される。5、6は幣舞式。7～10は縄文晩期中葉。7に縄線文と縄端圧痕文がみられる。

石器は第375図-6～10が埋土から出土している。6～9は黒曜石製の側削器。10は叩き石。

ピ ッ ト 236 a

遺 構 (第371図)

本ピットはピット236に南壁側を切られている。規模は長軸約0.90mの楕円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約23cmである。時期は不明である。

遺 物 (第374図-12・13、第375図-11・12)

埋土出土。縄文晩期の細片。石器は11の有茎石鏃と12の泥岩製の磨製石斧がある。

ピ ッ ト 237

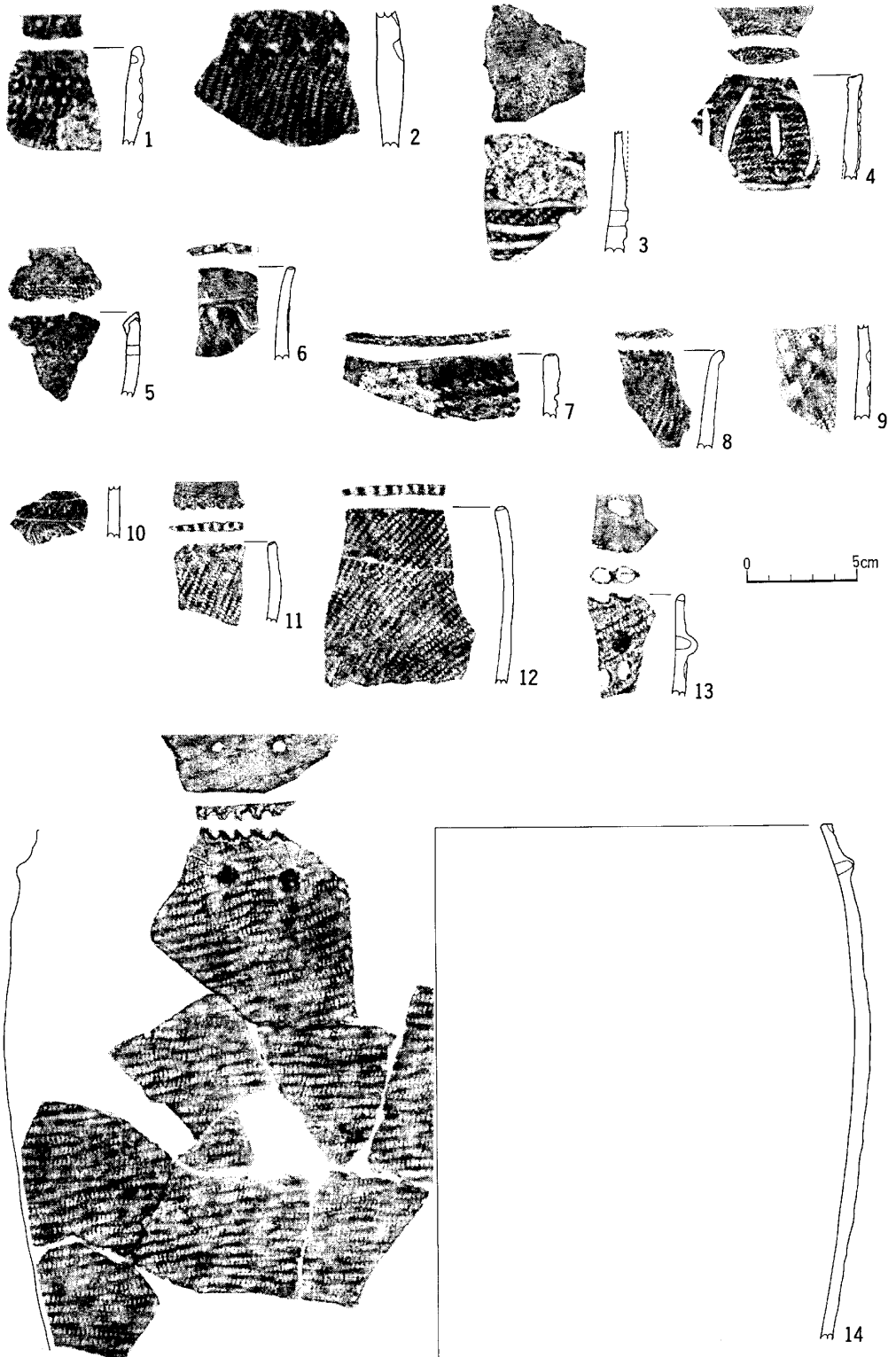
遺 構 (第371図)

本ピットはH'71グリッドに位置する。規模は直径0.90m円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。第374図-14は埋土出土の縄文晩期の細片。

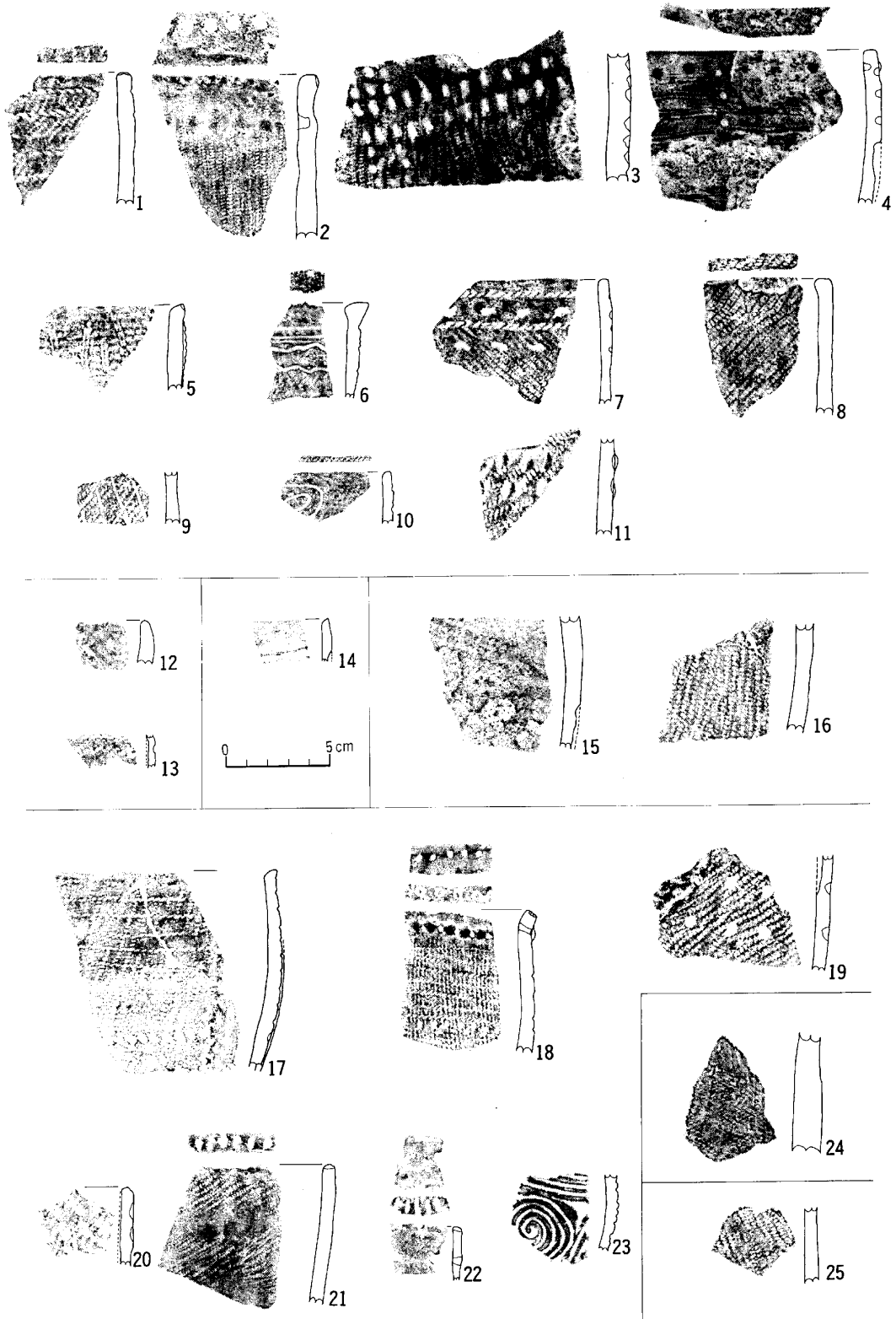
ピ ッ ト 238

遺 構 (第371図)

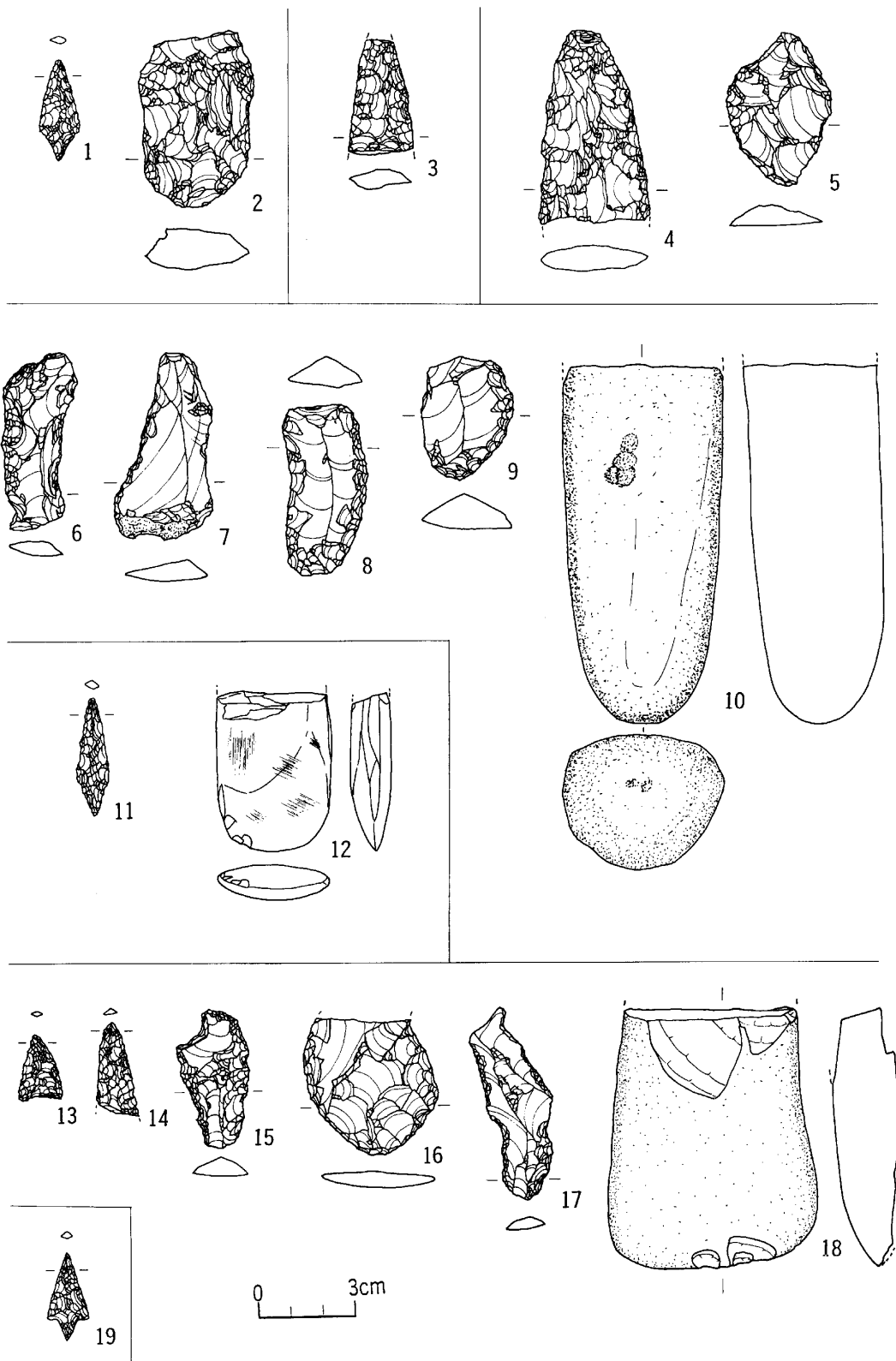
本ピットはH'71グリッドに位置する。規模は直径約0.85mの円形を呈する。壁は底面から丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から約24cmである。第374図-15、16は埋土出土の縄文晩



第373図 ピット235埋土(1~14)出土土器



第374図 ピット236床面(1)・埋土(2~11)、ピット236 a 埋土(12・13)、ピット237埋土(14)、ピット238埋土(15・16)ピット239埋土(17~23)、ピット239 a 埋土(24)、ピット239 b 埋土(25)出土土器



第375図 ピット230埋土(1・2)、ピット234埋土(3)、ピット235床面(4・5)、ピット236埋土(6~10)、ピット236 a埋土(11・12)、ピット239埋土(13~18)、ピット240埋土(19)出土石器

期の胴部片。

ピ ッ ト 239・239 a・239 b

遺 構 (第371図)

ピット239はH'71グリッドに位置する。規模は長軸約1.50mの不整形を呈する。南壁側がやや丸みをもち外に開く。高さは確認面から約56cmである。時期は不明である。

ピット239 aはピット239に西壁を切られている。規模は長軸約1.80mの不整形を呈すると思われる。壁高は確認面から約16cmである。時期は不明である。

ピット239 bは239に北壁を切られている。規模は長軸約0.84mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約22cmである。

遺 物 (第374図-17~26、第375図-13~18)

埋土出土。17は字津内II b式。18は同II a式。19~23は縄文晩期中葉。19は円形刺突、20は縄端圧痕文がみられる。

石器は第375図-13~18がある。13は無茎石鏃。14、16は両面加工ナイフ。15、17は側削器。18は泥岩製の石斧。16は玄武岩製であり他は黒曜石製である。

第374図-24は239 a 出土の続縄文の胴部片。25は239 b 出土の縄文晩期の胴部片。

ピ ッ ト 240

遺 構 (第371図)

本ピットはF'71グリッドに位置する。規模は長軸約1.04m、短軸約0.80mの不整形を呈する。壁高は確認面から約35cmである。時期は不明である。

遺 物 (第377図-1~6、第375図-19)

埋土出土。1~6は縄文晩期中葉であろう。1は縄線文。2は内側に縄線文がある。3は口縁部の破片が多くあるものの接合できなかった。口縁下に細い縄端圧痕、さらに下は太い縄端圧痕を施す。4、5は3と同一個体。6は無文。第375図-19は有茎石鏃。黒曜石製。

ピ ッ ト 241

遺 構 (第371、376図、図版100-1)

本ピットはG'72グリッドに位置する。上面に大型の角礫4点がピットのほぼ中央部に配置されている。規模は長軸約1.30m、短軸約1.20mの不整形楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは確認面から約60cmである。遺存体は床面に密着するのではなく西壁際の上近

から中央部にかけて傾斜した状態で認められる。歯骨は西壁の墳口部から約30cm下がった位置から検出された。遺体はおそらく西壁にもたれるような座葬で埋葬されたものと思われる。副葬品は遺存体の前面付近に置かれているようである。正立の状態出土した鉢型土器に接して浅鉢がある。浅鉢の内部には石鏃がまとまり、浅鉢の下からは小型土器が出土した。大型剥片は頭部の周辺から出土している。

遺 物 (第377図-7・8、第378図-1～6、第379図、図版100-2～47)

埋土出土。7は浅鉢。口縁の端部に3個の小突起、中間にそれぞれ1個の小突起をもつ。8は口縁下に縄線を施し、細沈線の上に曲線文を加える。部分的に彩色され、土器の底部にベンガラが詰まっていた。第378図-1は口縁部の一端に3個の小突起、その反対側は山形状になる。文様は細沈線の上に渦巻き状の沈線を施す。2は深鉢である。口縁は3個の山形状の突起と1個の台状の突起をもつ。文様は細沈線の上に縦方向の波状沈線、短沈線を施す。3、4は縄文晩期中葉。5は縄文後期堂林式。6は縄文中期トコロ五類。

石器は第379図に示した。1～82は有茎石鏃。2は使用痕が残る。他に図示していないが玄武岩製の大型剥片がある。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。頭部のレベルから判断すると座葬の可能性がある。

ピ ッ ト 242

遺 構 (第395図)

本ピットはE'74グリッドに位置する。規模は長軸約1.30mの不整形を呈する。壁高は確認面から約51cmである。

遺 物 (第380図-1～5、第382図-1、図版99-3)

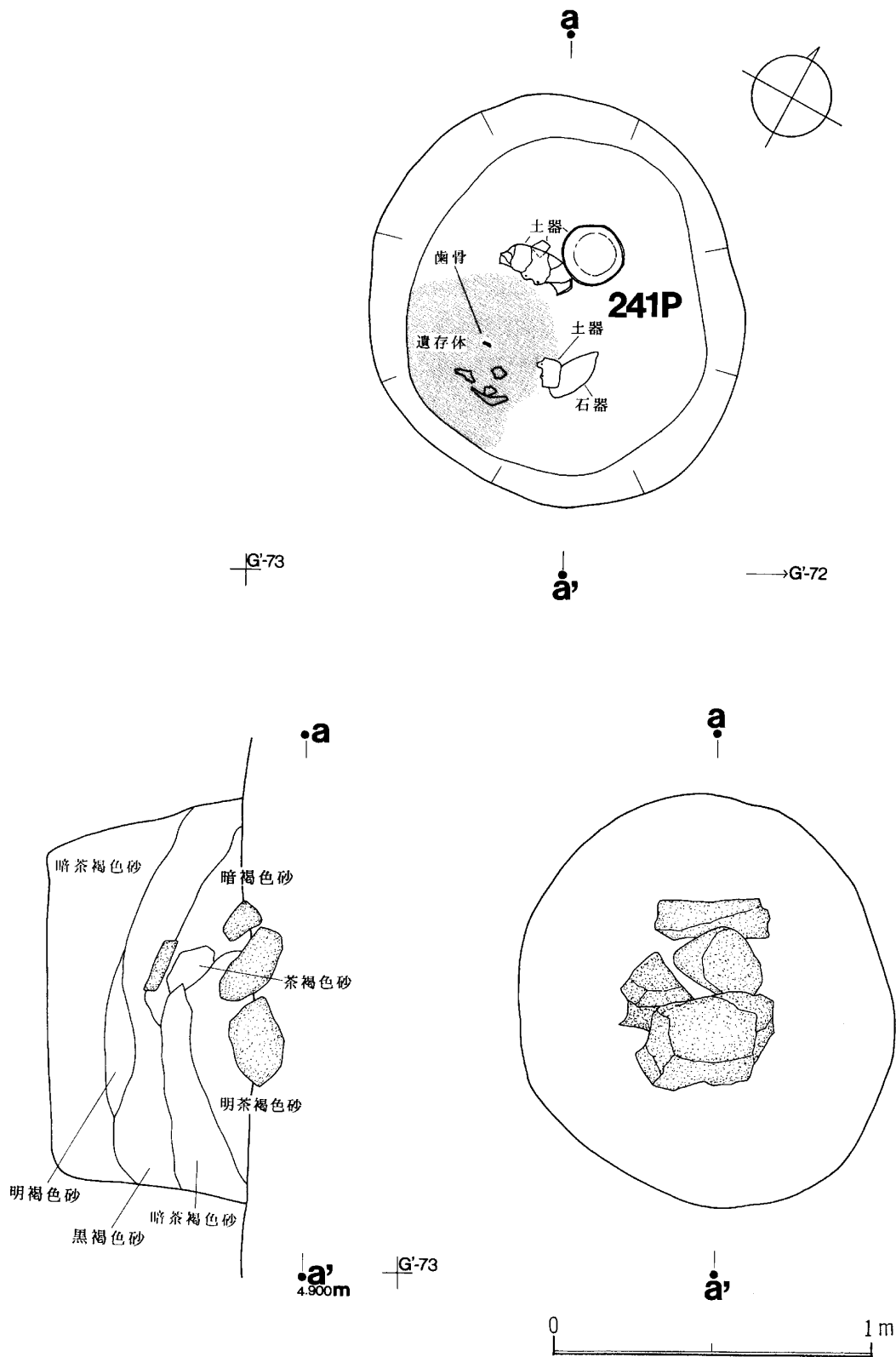
1は床面出土。上面観は方形を呈し、口縁部に四隅に小突起をもつ。長軸面の中央部は山形の口縁になる。短軸側の口縁部は内屈する。文様は突瘤文が連続し、器面は帯縄文と縄端圧痕文で構成される。2、3は後北C₂式。4は宇津内II b式。5は縄文晩期後葉。

第382図-1は黒曜石製の削器である。

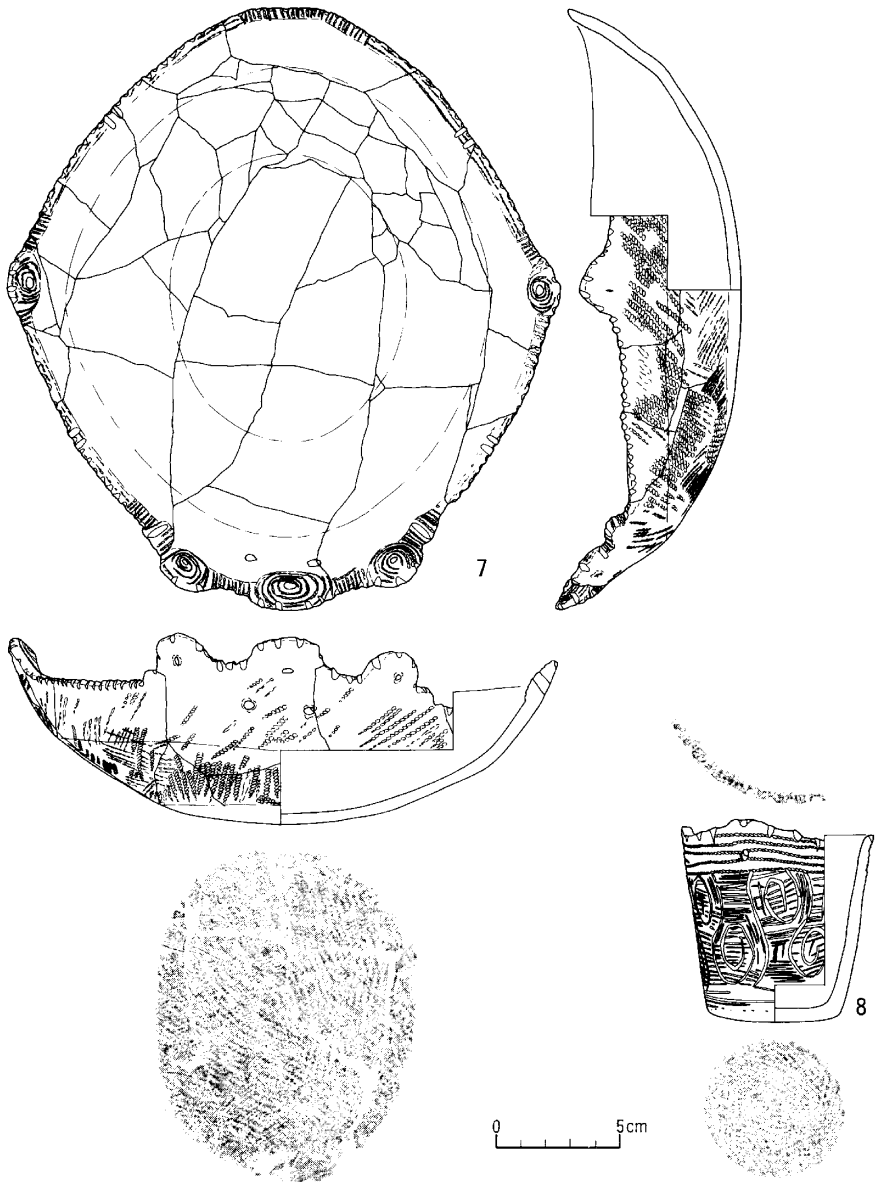
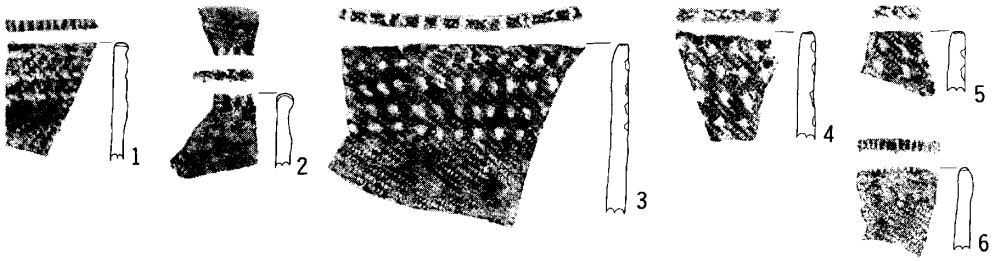
ピ ッ ト 243

遺 構 (第395図)

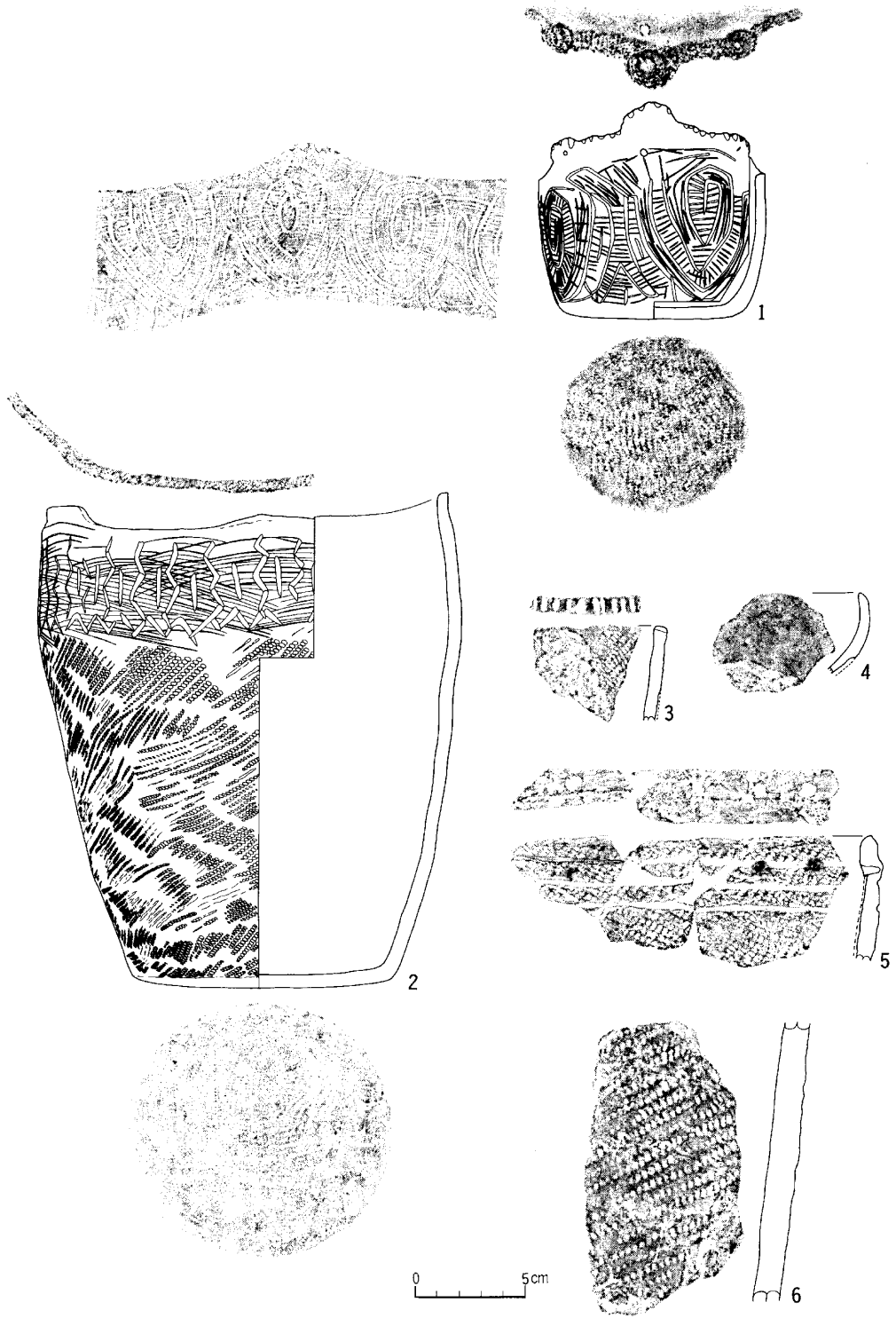
本ピットは30号堅穴の床面、E'73グリッドに位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。



第376図 ピット241平面図



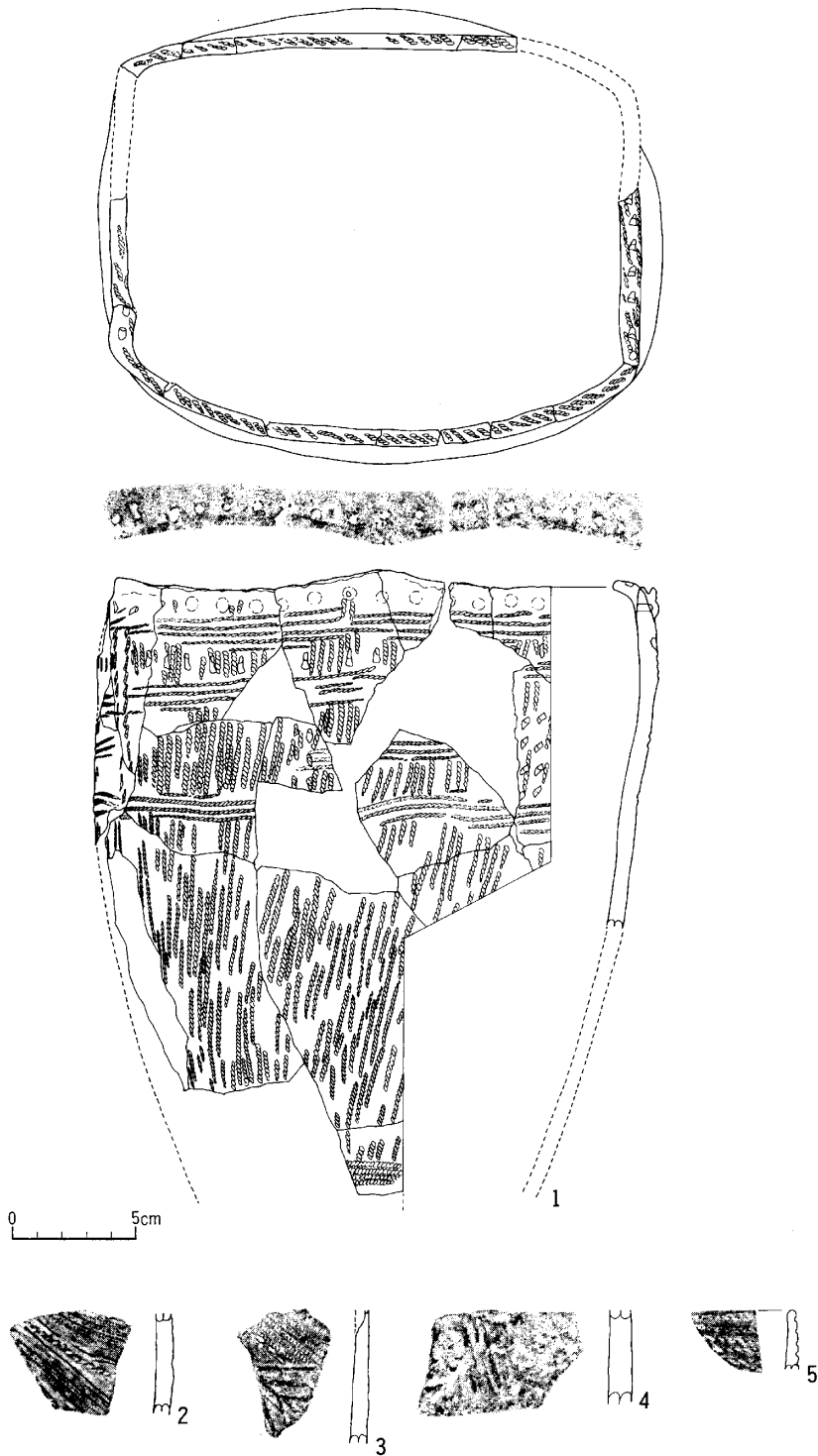
第377図 ピット240埋土(1~6)、ピット141埋土(7・8)出土土器



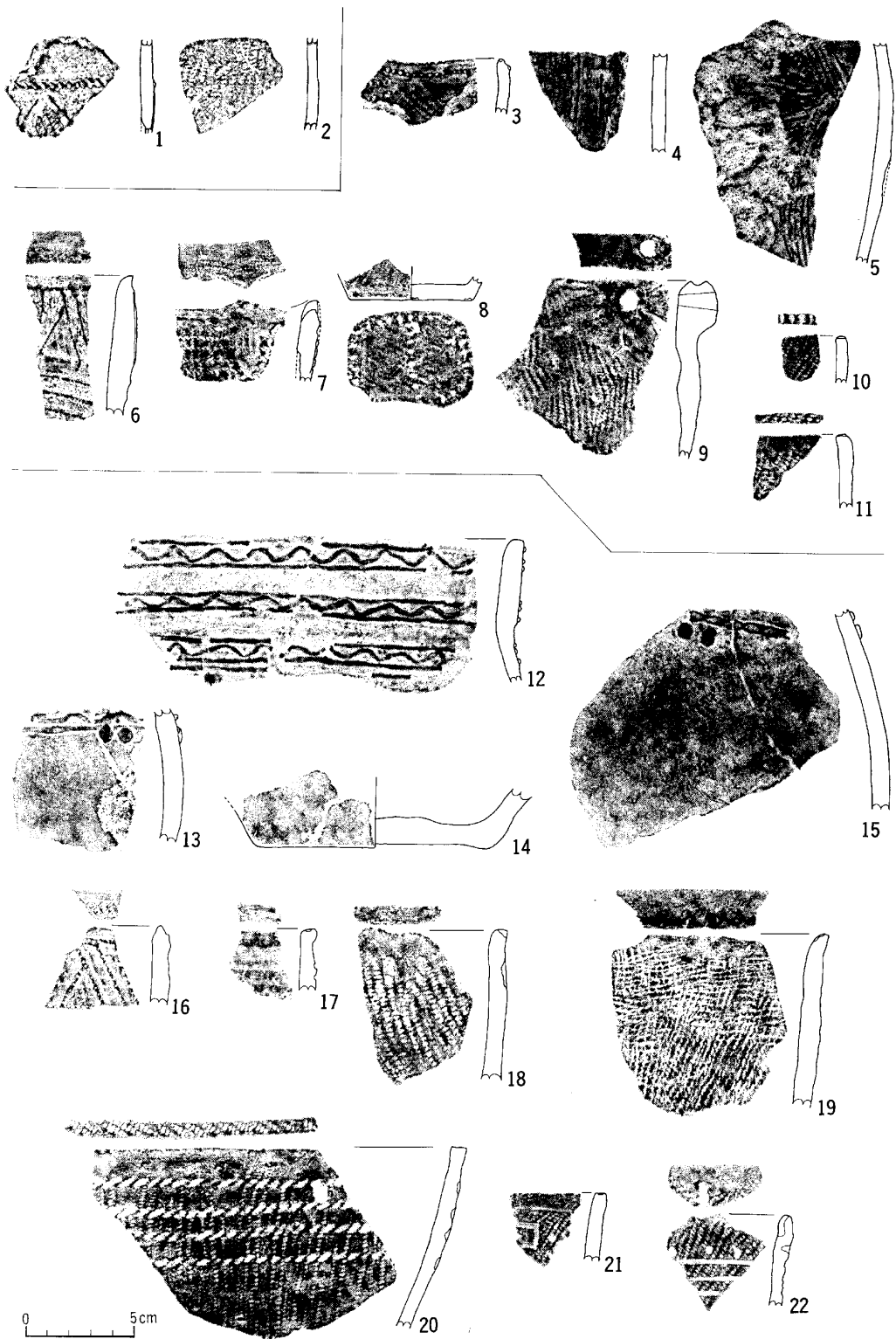
第378図 ピット241埋土(1~6)出土土器



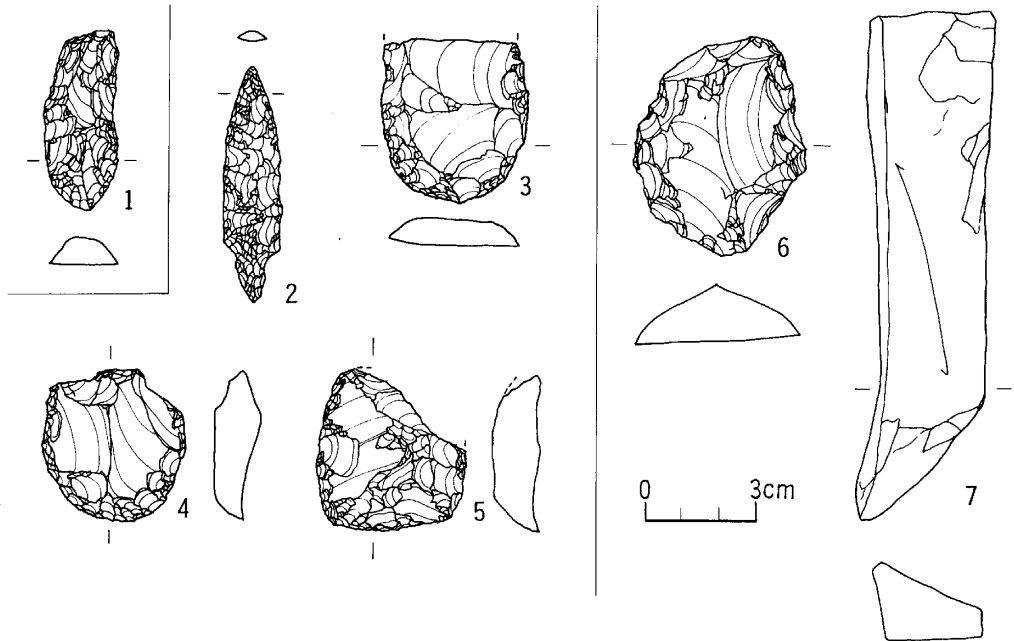
第379図 ピット241埋土(1~83)出土石器



第380図 ピット242床面(1)・埋土(2~5)出土土器



第381図 ピット243埋土(1・2)、ピット244埋土(3~11)、ピット245埋土(12~22)出土土器



第382図 ピット242床面(1)、ピット245埋土(2~5)、ピット246埋土(6・7)出土石器

遺物 (第381図-1・2)

埋土出土。1は後北C₂式。2は縄文晩期。

ピット 244

遺構 (第388図)

本ピットは42号竪穴を切り込んで構築されている。規模は長軸約0.85m、短軸約0.70mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約70cmである。時期は不明である。

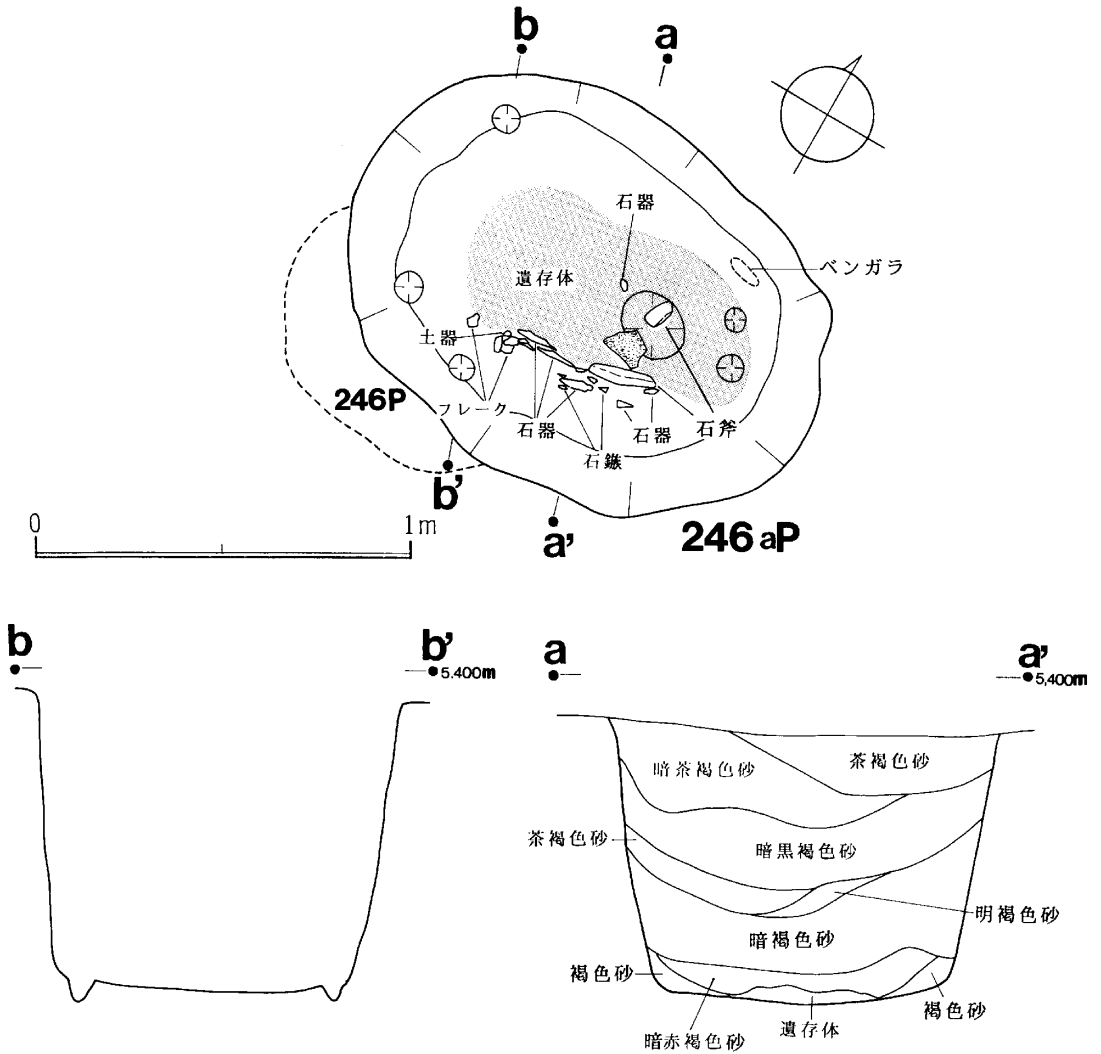
遺物 (第381図-3~11)

埋土出土。3~5は後北C₂式。6、7は宇津内II b式。8は方形を呈し縄端圧痕文が施された宇津内系の底部。9は注口をもつ後北系の土器。10、11は縄文晩期中葉。

ピット 245

遺構 (第388図)

本ピットは41号竪穴の床面に構築されている。規模は長軸約1.47m、短軸約0.73mの楕円形を呈する。壁高は41号の床面から約55cmである。長軸は南北方向にある。ピット上部から約20



第383図 ピット246、ピット246 a 平面図

cm掘り下げた段階で第381図-12~15のオホーツク土器が出土した。オホーツク土器はA'73、A73グリッド周辺に散在しているがこれらはピット245出土土器と同一個体である。おそらくピット245にあったものが攪乱を受け周辺に散在したものと推測される。床面から約15cm浮いた位置には幅20cmの角礫がありこれを取り除くとオホーツク文化期独特の柳葉形石鎌が出土した。

遺物 (第381図-12~22、第382図-2~5)

埋土出土。12、13、15はオホーツク文化ソーメン状貼付文。14は同時期の底部。16は宇津内II b式。17は口唇部に1条、口縁下に2条の横走沈線が施され、18は口縁下に縄端部が押捺される。19は撚糸紋を地文に口唇部に縄端部が押捺される。20は縄線文、21、22は沈線と刺突が施される。17~19は続縄文前葉。20は縄文晩期後葉。21は同中葉。22は縄文後期と思われる。

石器は第382図-2～5がある。2はオホーツク文化期の柳葉形石鏃。3は削器。4、5は搔器。すべて黒曜石製である。

小 括

本ピットはオホーツク文化期の土壙墓と思われる。長軸方向は南北にあり一致する。上部から出土した土器は被甕に用いられたものであろう。

ピ ッ ト 246

遺 構 (第395、383図)

本ピットはA73グリッドに位置する。ピット246 aに大半が切られているため規模・形態は不明であるが、推定約70cmの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約12cmである。時期は不明である。

遺 物 (第384図-1、第382図-6・7)

埋土出土。第384図-1は器面に縦の縄線文を3本単位で施す。縄文晩期中葉。

第382図-6は搔器。7は砥石。さらに図示していないが両面加工ナイフの破損品がある。

ピ ッ ト 246 a

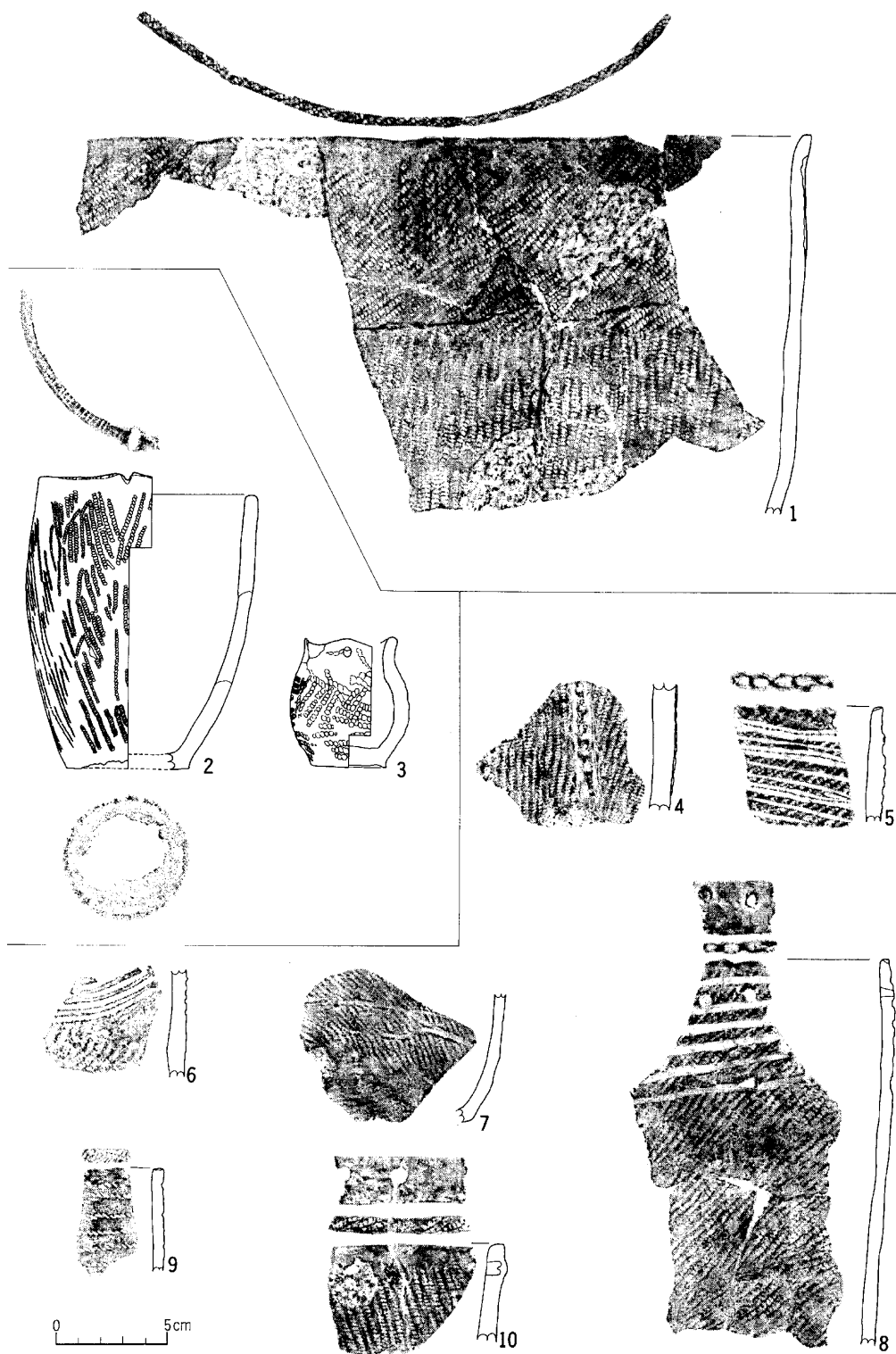
遺 構 (第395、383図、図版101-1)

本ピットはA73グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約1mの楕円形を呈する。長軸は東西方向にもつ。壁は垂直に立上り確認面から約72cmである。上面から約20cm掘り下げた段階で暗茶褐色砂層から第384図-2の土器、第385図-17の磨製石斧が直径約20cmの円礫と共に南壁側から流れ込む状態で出土した。当初、この面を底面と考えたがさらに下層にベンガラ混じりのよごれた暗黒褐色砂層が堆積している。底面には暗赤褐色を呈した粘性のある遺存体が認められた。遺存体の上部はベンガラ混じりの暗赤褐色砂が覆われている。遺物は壁と並行して出土し、あたかも木製容器等に収納されていたことを想起させる。遺体を除去すると第385図-18の大型磨製石斧が直径約14～18cm、深さ約6cmのピットから出土した。底面には直径約6～8cm、深さ約4～9cmの6本の小柱穴が各壁際から検出された。ベンガラは壁際にあり、床面からやや浮いて認められる。

遺 物 (第384図-2・3、第385図-1～18、第384図-1～4、図版101-2～19)

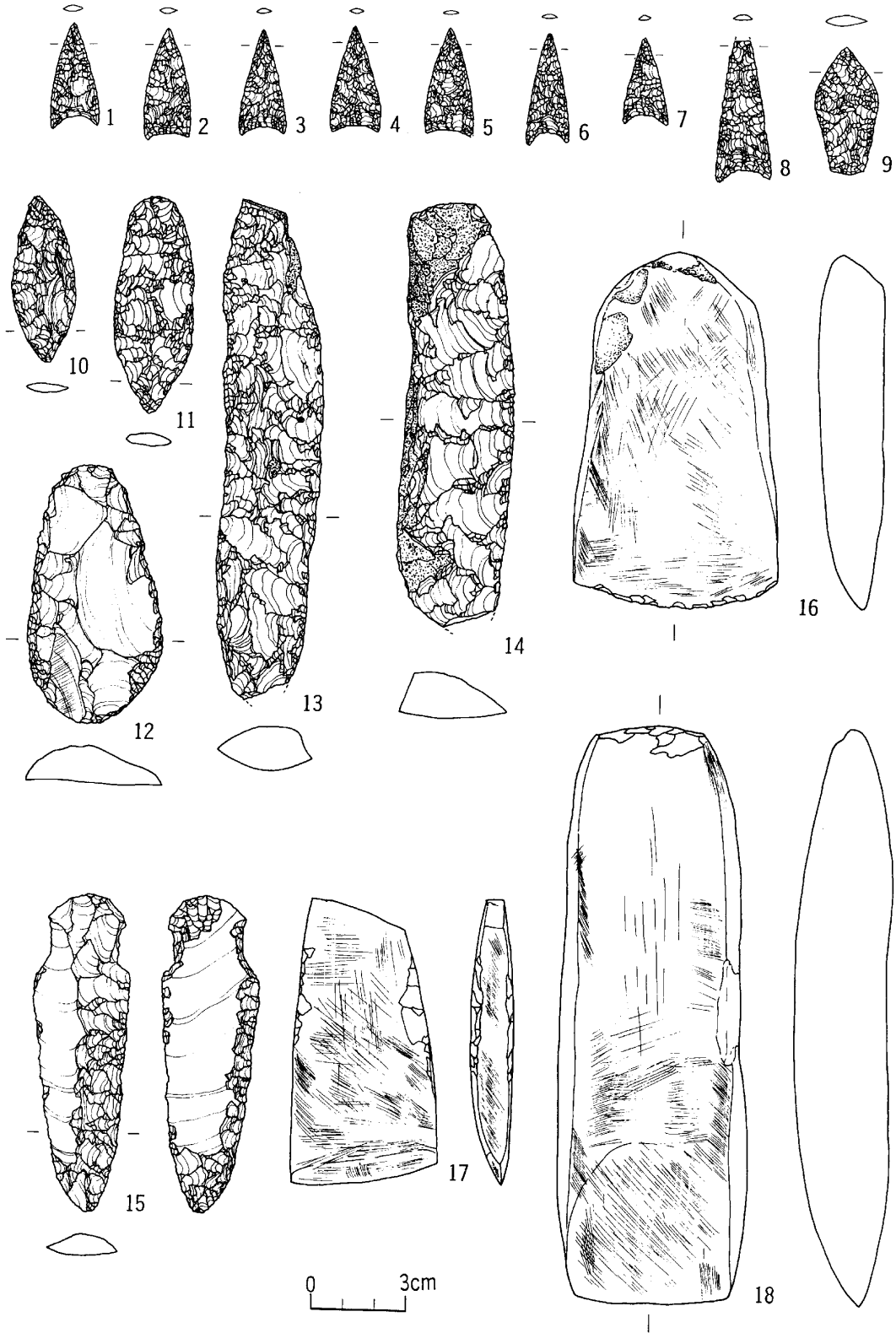
2はピット上部の暗茶褐色砂層から出土した。縦走縄文を地文とし、口唇部に細い刻みが施される。底面部は打ち欠かれている。3は床面出土。口縁部に4個の小突起をもつたミニチュア土器。

石器は第385図-1～18が埋土から出土した。1～8は無茎石鏃。9は石槍。10、11、13～15

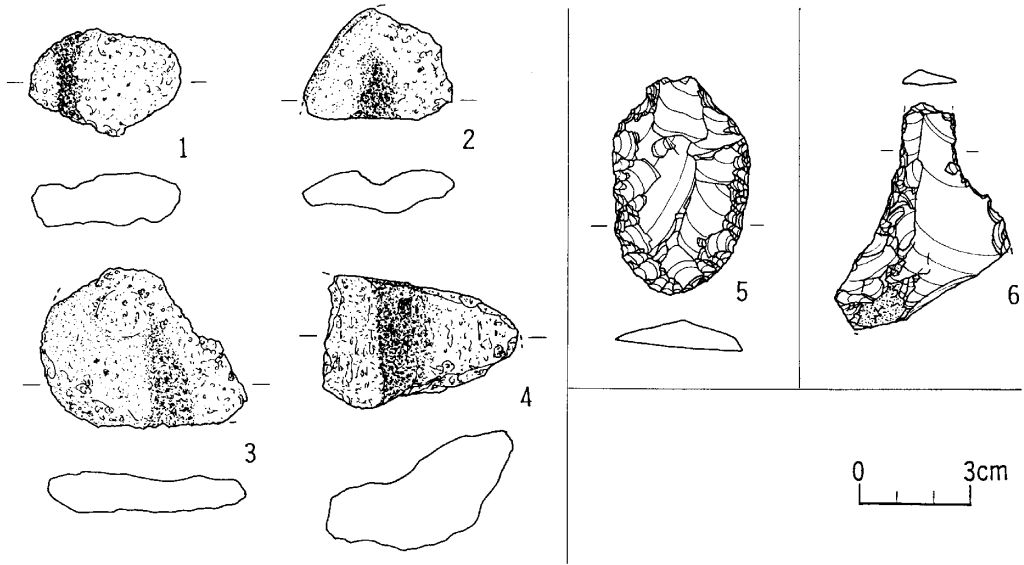


第384図 ピット246埋土(1)、ピット246 a埋土(2)・床面(3)、ピット247埋土(4~10)出土土器

常呂川河口遺跡



第385図 ピット246a埋土(1~18)出土石器



第386図 ピット246 a 埋土(1~4)、ピット247埋土(5)、ピット250埋土(6)出土石器

は両面加工ナイフ。12は側削器。13、14は断面が楔状を呈する。15は柄部があり刃部は表裏の一縁辺部と先端部にある。10、15は頁岩製であり他は黒曜石製。16~18は緑色岩製の片刃磨石石斧。第384図- 1 ~ 4 は矢柄研磨器。1 ~ 3 は軽石製。4 は不明。

小 括

本ピットは楕円形を呈し、底面に小柱穴をもつ形態的な特徴から続縄文字津内II a 式の土壇墓と思われる。頭位は不明である。

ピ ッ ト 247

遺 構 (第388図)

本ピットはA'72、A72グリッドに位置する。規模は長軸約1.40m、短軸約1.16mの楕円形を呈する。長軸は南北方向にある。床面には2個所のベンガラが散布されている時期は不明である。

遺 物 (第384図- 4 ~10、第386図- 5)

埋土出土。4 は宇津内II a 式。5 ~ 8 は縄文晩期後葉であろう。5、8 は緑ヶ岡。6 は工字文状の沈線を施す。9 は幣舞式。10 は縄文晩期前葉の突瘤文。

石器は第386図- 5 の削器がある。黒曜石製。

ピット248は欠番

ピット 249

遺構 (第388図)

本ピットは40号竪穴の西側に位置する。浅いピットであり検出できた壁は南壁だけである。正確な規模、形態は不明である。西壁の高さは確認面から約11cmである。

遺物 (第387図-1～4)

埋土出土。1～3は続縄文前葉であろう。1は縄端圧痕文、2は幅広の浅い沈線、3は縄端圧痕文と縄線が施される。4は続縄文の底部。

ピット 250

遺構 (第388図)

本ピットは41号竪穴の西壁上部をわずかに切り込んで構築されている。規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約28cmである。

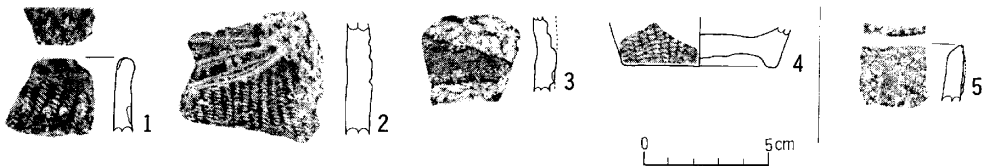
遺物 (第387図-5、第386図-6)

埋土出土。5は続縄文津内II b式。1は側削器。黒曜石製。

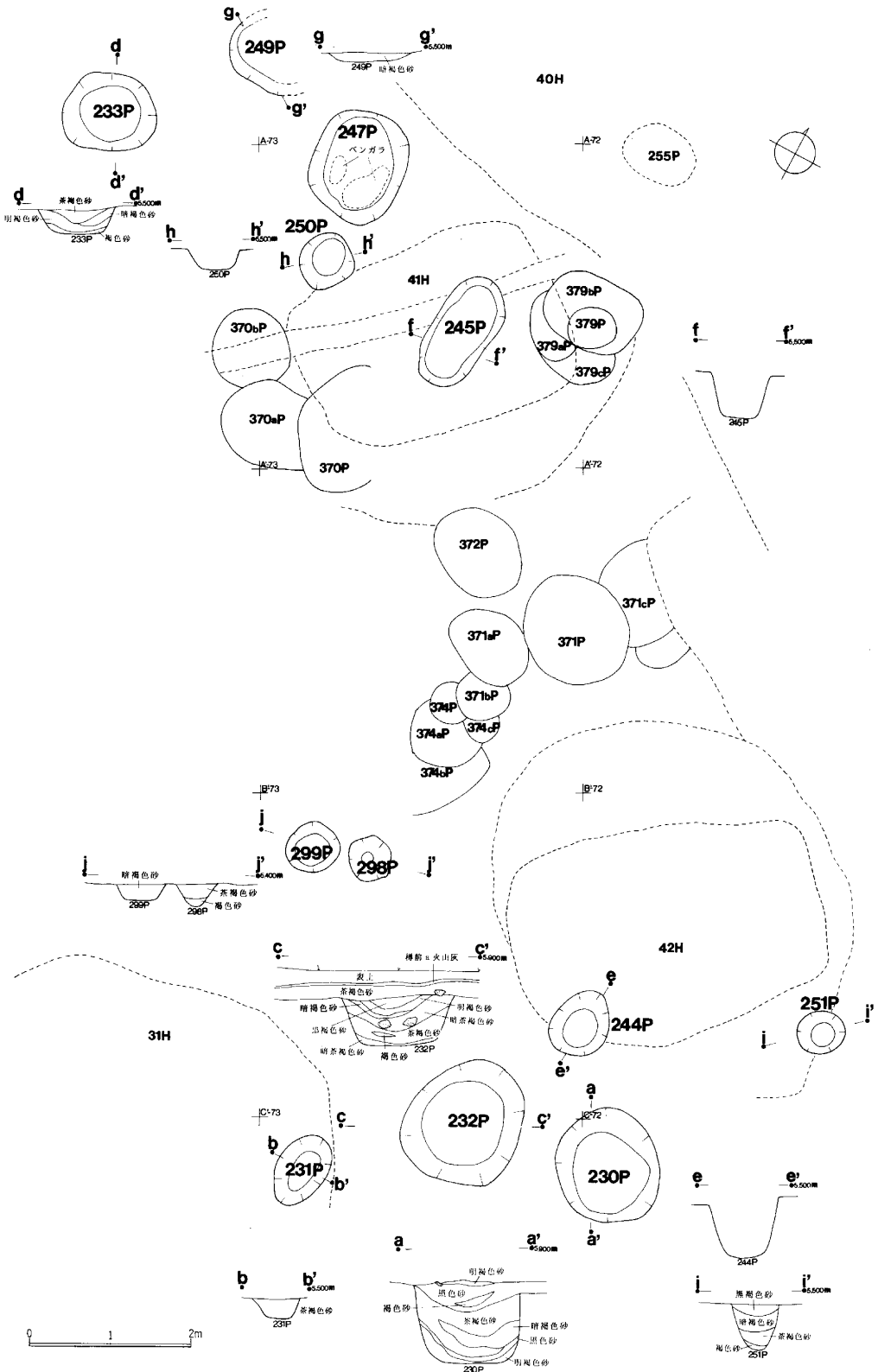
ピット 251

遺構 (第388図)

本ピットは35号竪穴の西壁側、C'71グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈し深さは確認面から約54cmである。遺物は出土しておらず時期は不明である。



第387図 ピット249埋土(1～4)、ピット250埋土(5)出土土器



第388図 41号、42号竪穴周辺のピット群平面図

ピ ッ ト 252

遺 構 (第395、389図、図版102-1・2)

本ピットはA73グリッドに位置する。第II層の茶褐色砂を約5cm掘り下げた段階で落ちこみを確認した。規模は長軸約1.5m、短軸約1.2mの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり確認面から約50cmを測る。ピットのほぼ中央部に粘性をもつ暗褐色土の遺存体があり、セクション図に示される通り遺存体の上部にベンガラがかたまっていた。遺存体は糊状を呈しているものの人型の輪郭をつかむことができ、頭部はわずかに盛り上がり歯骨も検出された。第390図-1の土器は頭部の近くに正立の状態で置かれている。棒状原石は頭部の上部から多く出土し下部からも4本発見された。石斧は遺存体の下部から出土した。遺存体の両側に副葬品を配置しているようである。壁隅には直径約10cm、深さ約6～9cmの小柱穴が4本認められる。

遺 物 (第390図-1～10、第391図-1～30、図版103-1～31)

1は床面出土。撚糸文を地文とした宇津内II a式。他は埋土出土である。2は後北C₂式。3～6、7は同II b式。5は幣舞式。8は小突起から「ハ」字状の隆帯が垂下する。突瘤文はみられないものの宇津内II a式である。9は沈線を菱形に施文すると思われる。縄端圧痕文があり一部縄線文も施される。10も9と同様の文様構成をもつものと思われる。この2点は続縄文前葉であり9は、フシココタン下層式に相当すると思われる。

石器は第391図-1～30がある。1は石槍。2は搔器。3は削器。4、5は片刃磨製石斧。緑色岩製。6～30は棒状原石。

小 括

形態は楕円形を呈する。頭位は西方向である。土器、石斧、石槍、棒状原石を副葬している。時期は続縄文宇津内II a式である。

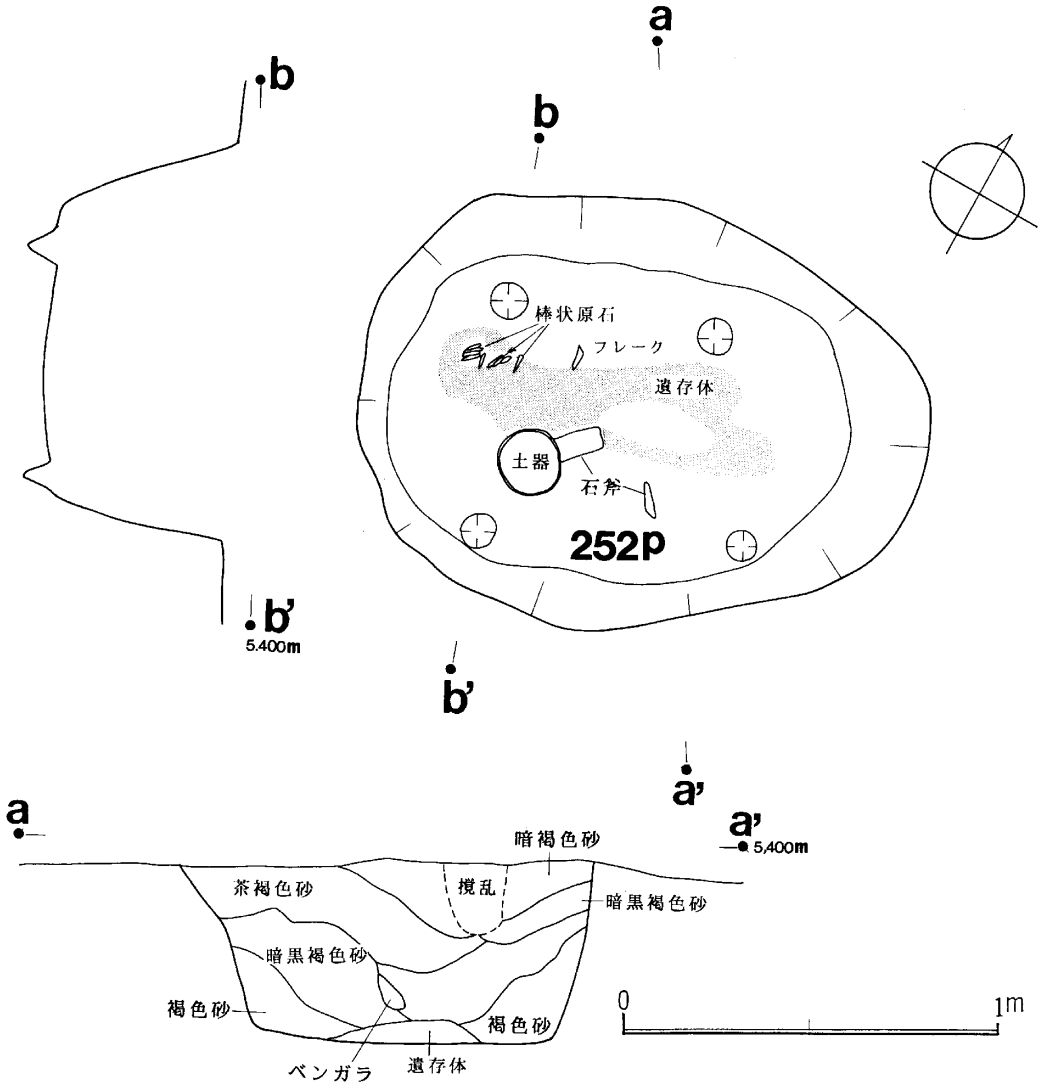
ピ ッ ト 252 a

遺 構 (第395図)

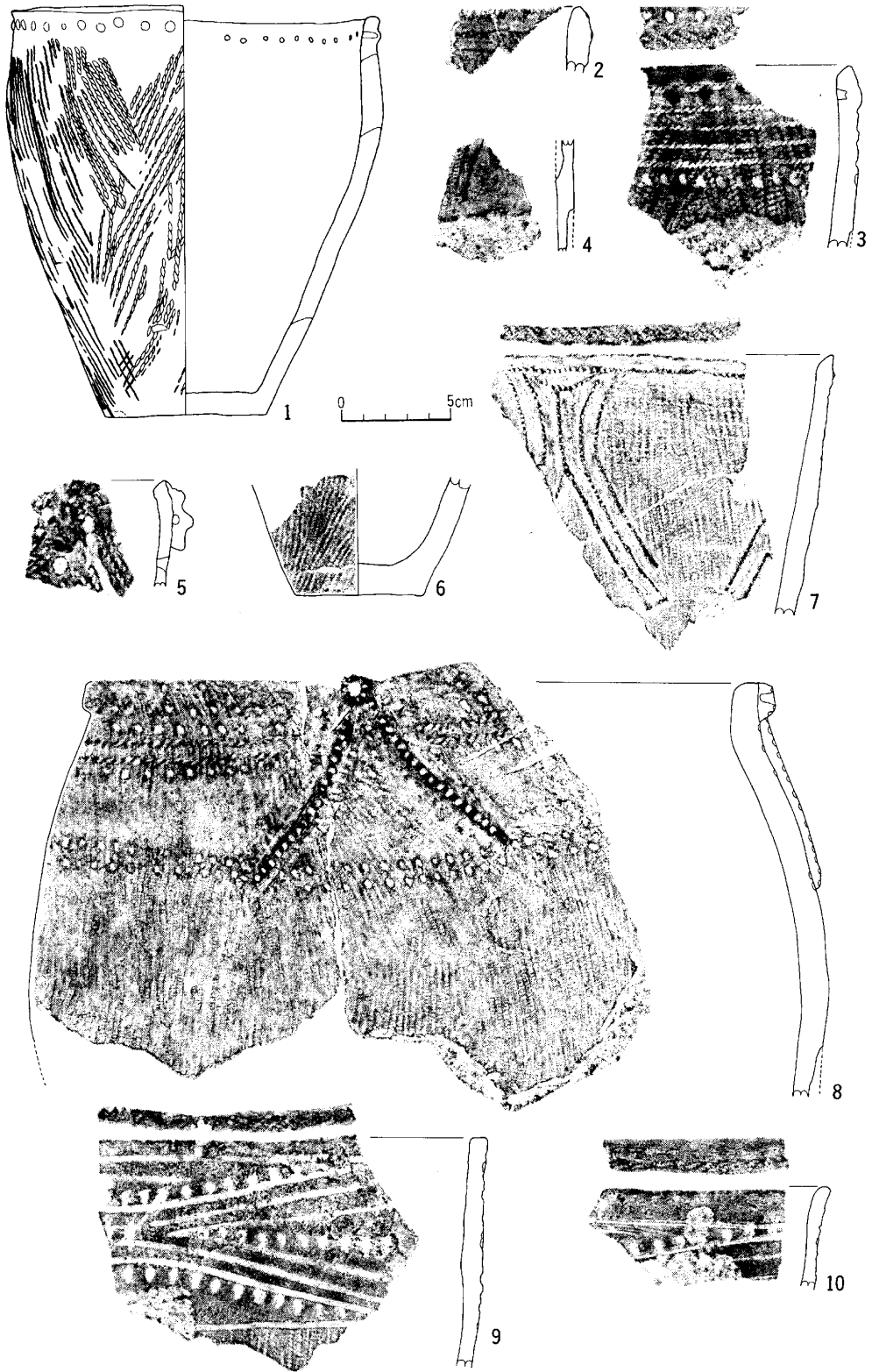
本ピットは40 a号竪穴に西壁側を切られている。規模は短軸約0.95mを測る。楕円形を呈するものと思われる。壁高は確認面から約18cmである。

遺 物 (第392図-1～5)

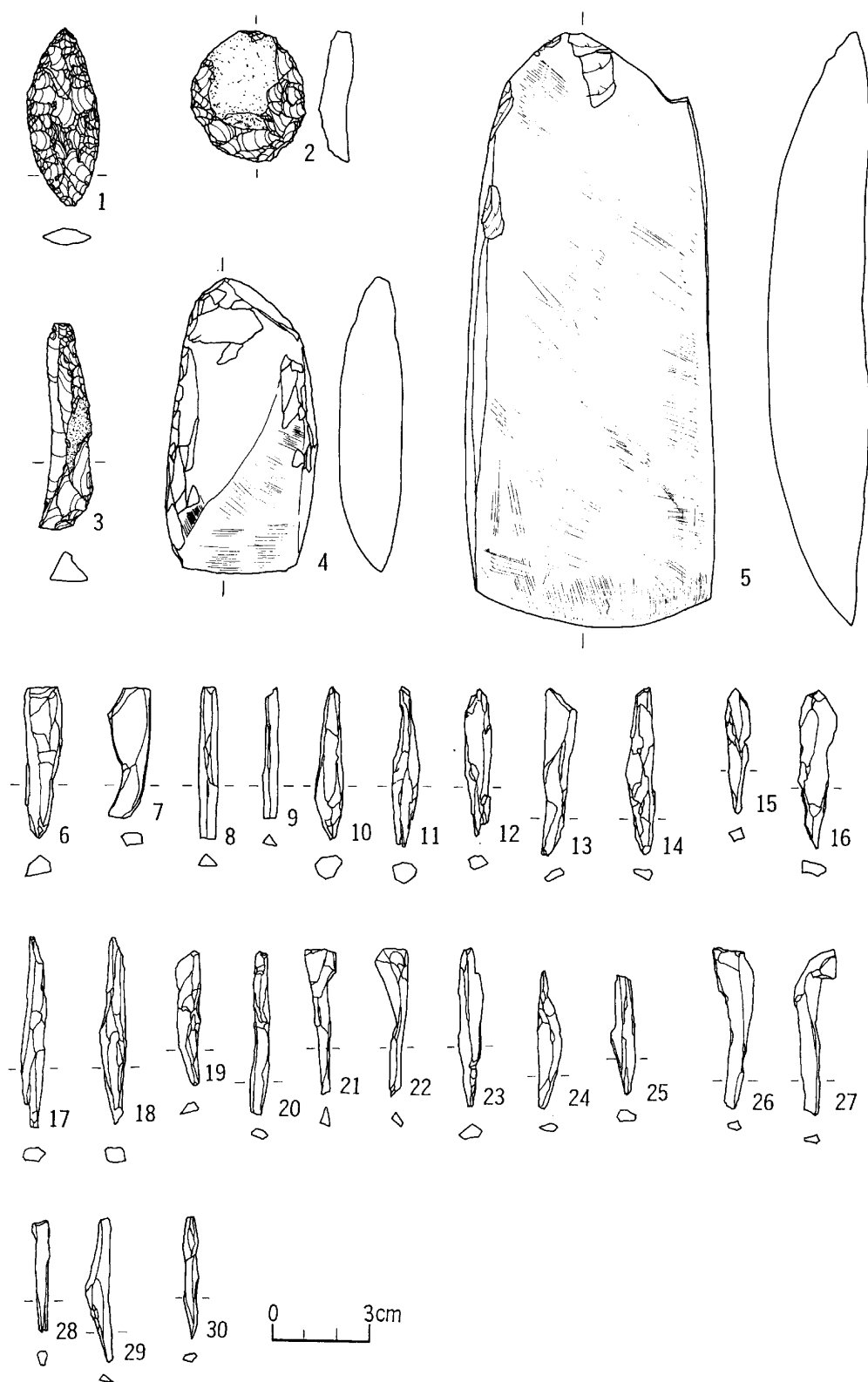
埋土出土。1、2は宇津内II b式。3は続縄文前葉。4は緑ヶ岡式。5は幣舞式。



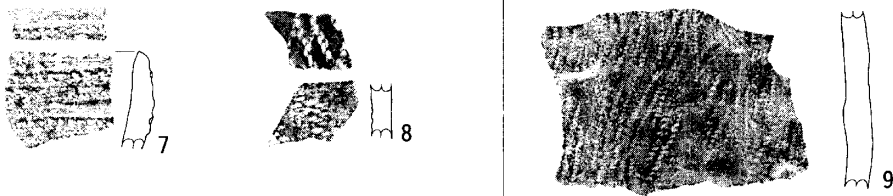
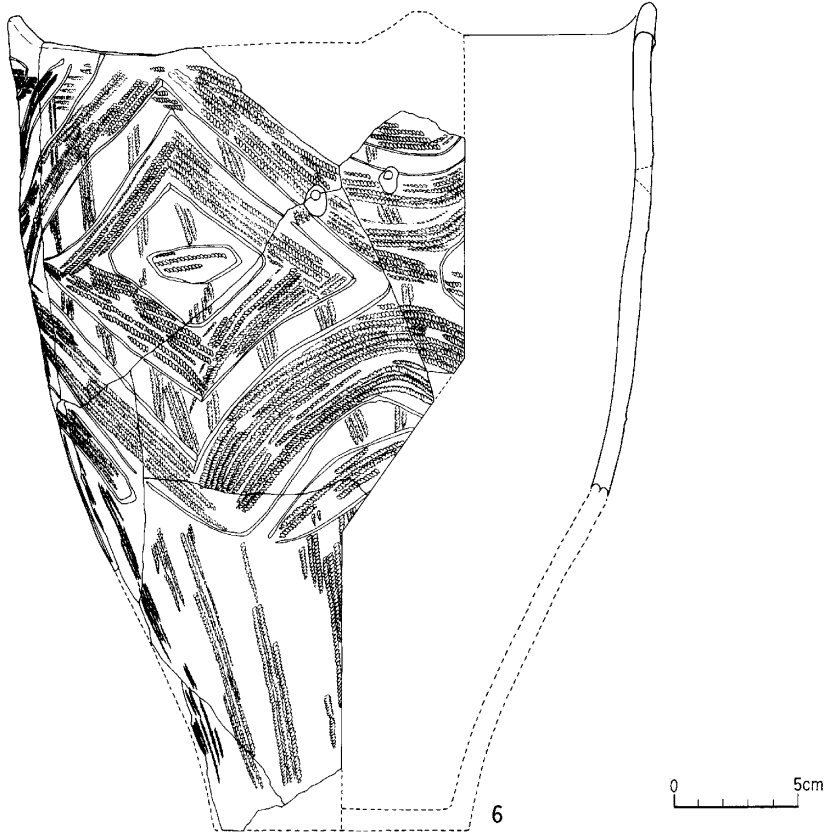
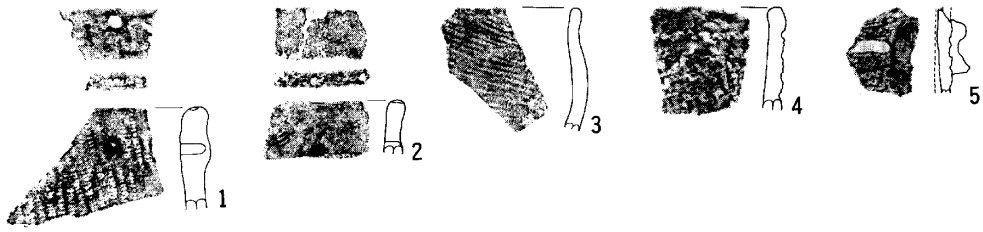
第389図 ピット252平面図



第390図 ピット252床面(1)・埋土(2~10)出土土器



第391図 ピット252埋土(1~30)出土石器



第392図 ピット252 a 埋土(1~5)、ピット253埋土(6~8)、ピット254埋土(9)出土土器

ピ ッ ト 253

遺 構 (第371図)

本ピットは35号竪穴により西壁を切られている。表土を剝土した段階で黒色土の落ちこみが確認され、第392図-6の後北C₂式が上部から出土した。規模は直径約1.43mの円形を呈する。壁は緩やかに立ち上り確認面から約16cmを測る。時期は不明である。

遺 物 (第392図-6～8、第393図-1～4、図版104-1)

埋土出土。6はピット上部の黒色土内から出土した。口縁部に山形の小突起をもつ。文様は菱形の微隆起線とそれを囲む弧状の微隆起線で構成される。後北C₂式である。7は宇津内II a式。8は縄文晩期中葉。

石器は第393図-1～4がある。1は両面加工ナイフの柄部。2～4は側削器。黒曜石製。

ピ ッ ト 254

遺 構 (第395図)

本ピットは40 a号竪穴の北西壁側に位置する。40 a号の埋土内に構築されているもので、規模は長軸約1.10m、短軸約1mの楕円形を呈する。壁高は約20cmである。赤褐色を呈した遺存体の上部から琥珀玉が数珠状に連なって出土した。石器は北壁際から出土している。

遺 物 (第392図-9、第393図-5～27、図版104-2～27)

10は埋土出土の続縄文土器。宇津内系の胴部片と思われる。石器は第393図-5～27がある。5は無茎石鏃。6は有茎石鏃。7は側削器。3点とも黒曜石製。8～27は琥珀玉。琥珀玉は198点出土しておりその代表的な形態を図示した。8～11は大型。12～19は中型。20～27は小型である。大型、中型は楕円形の形態をもち上部に孔がある。

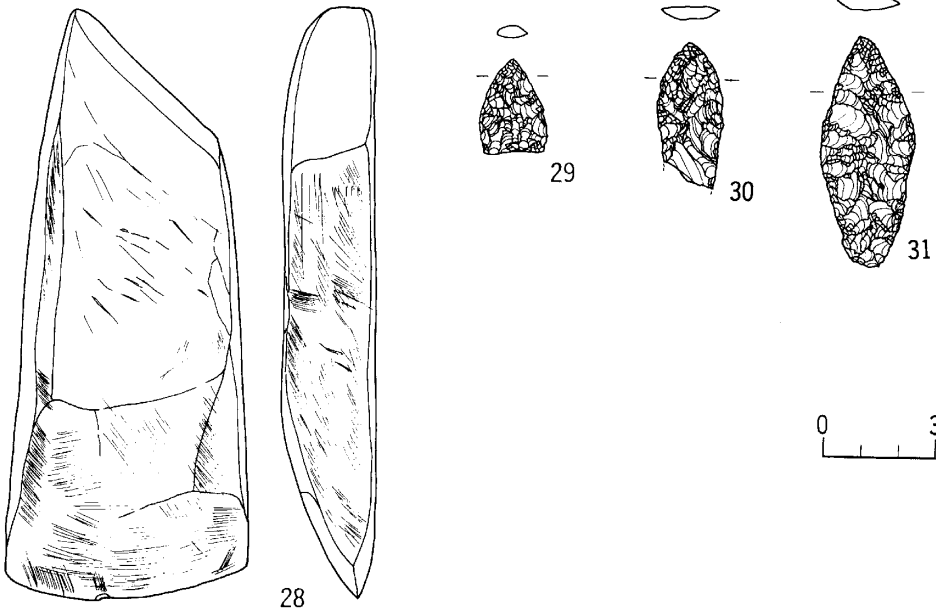
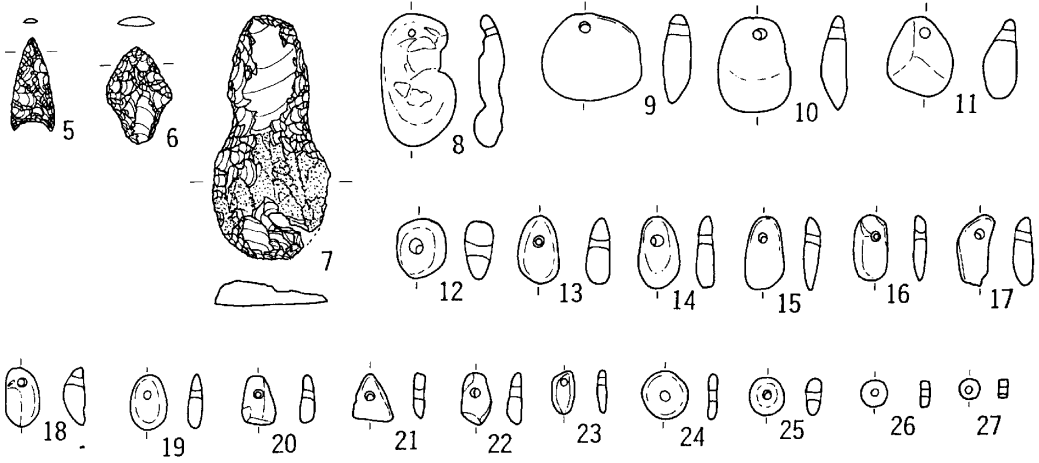
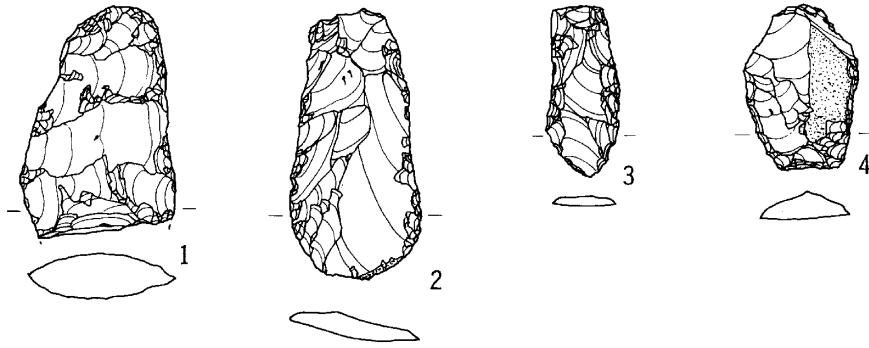
小 括

本ピットは続縄文期の土壌墓と思われる。詳細な時期は不明であるが琥珀玉を多量に副葬することから続縄文宇津内系の時期と思われる。

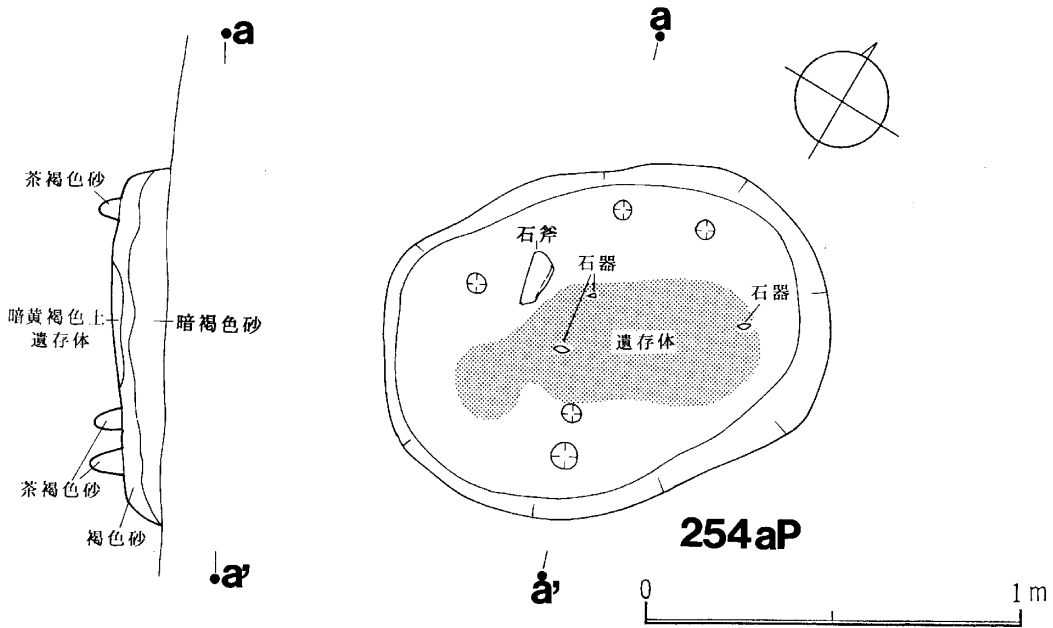
ピ ッ ト 254 a

遺 構 (第394、395図)

本ピットはピット254と重複する。時期はピット254が新しい。形態は長軸約1.20m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。遺存体は暗黄褐色を呈する。糊状化した遺体の輪郭から頭部は西方向に位置すると判断される。北壁側の床面に3本、南壁側の



第393図 ピット253上部(1~4)、ピット254埋土(5~27)、ピット254 a床面(28)・埋土(29~31)出土石器・琥珀玉



第394図 ピット254 a 平面図

床面に2本の小柱穴がある。規模は直径約5～8cm、深さ約5～11cmである。副葬品である石器はナイフ、石鏃が遺体の上部にあり、石斧は頭部近くの床面から出土している。

遺 物 (第393図-28～31)

石器のみ出土している。第393図-28は床面から出土した。片刃磨製石斧。緑色岩製。29～31は埋土出土。29は無茎石鏃。頁製。30は基部が欠失しているため形態は不明であるが両面加工ナイフである。31は石槍。

小 括

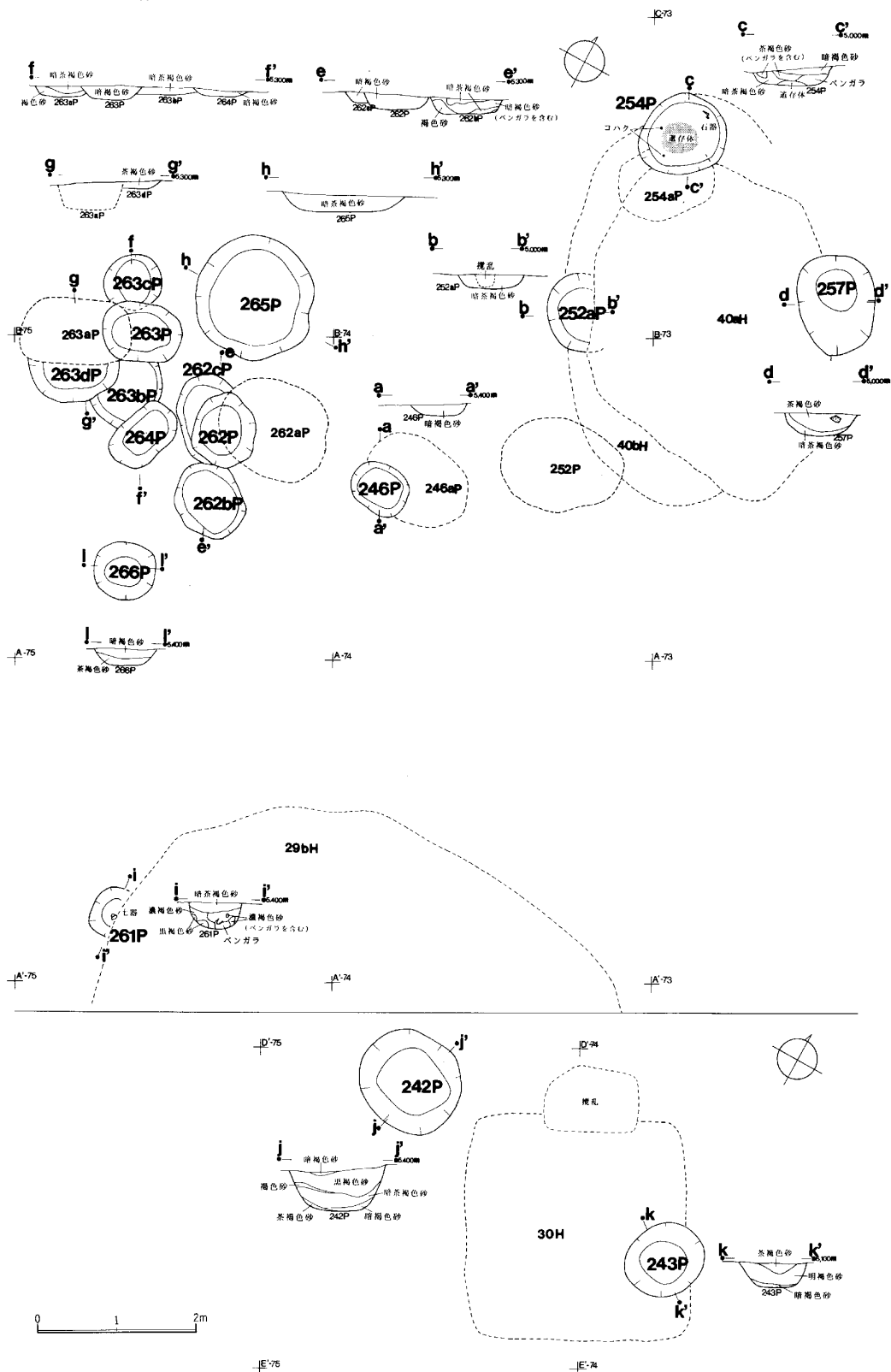
土器の出土が無いため詳細な時期は不明であるが、底面に小柱穴をもつこと、頭位が西方向にある点から続縄文字津内II a 式の可能性が高い。そうすると先のピット254は宇津内II a 式よりもやや新しい時期であろう。

ピ ッ ト 255

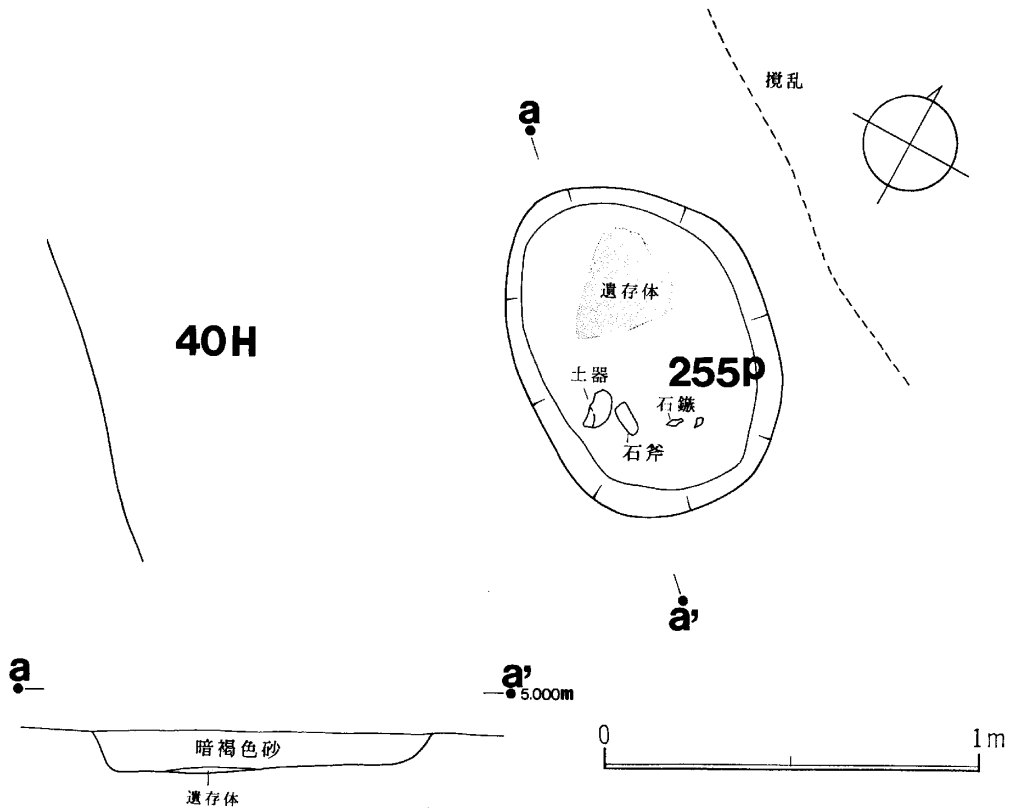
遺 構 (第388、396図、図版104-28)

本ピットは40号竪穴の床面、A71、A'71グリッドに位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.68mの楕円形を呈する。40号竪穴により上部は削られているため壁高は10cmと浅い。かろうじて暗赤褐色の遺存体が残し、石器が東壁際から出土した。

常呂川河口遺跡



第395図 30号、40号竪穴周辺のピット群



第396図 ピット255平面図

遺 物 (第397図-1～3)

埋土出土。1は石槍。2は片刃磨製石斧。青色泥岩製。3は砥石。

小 括

続縄文期の土壌墓と思われるが詳細な時期は不明である。

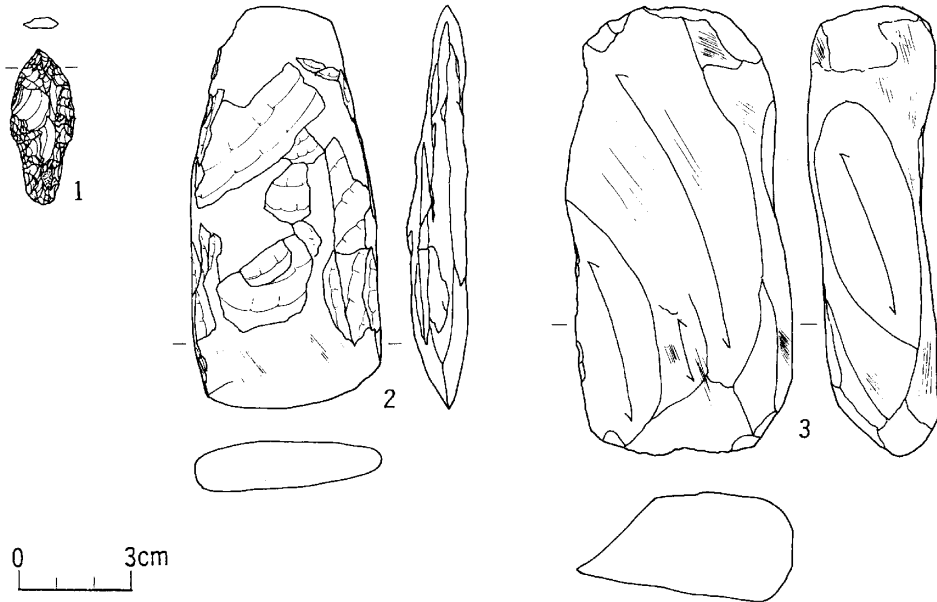
ピ ッ ト 256

遺 構 (第371図)

本ピットはG'73グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約28cmである。時期は不明である。

遺 物 (第398図-1～5、第406図-1・2)

埋土出土。5点とも幣舞式。1、3は同一個体である。石器は第406図-1の石鏃先端部、2の片面加工ナイフがある。黒曜石製。



第397図 ピット255埋土(1~3)出土石器

ピ ッ ト 257

遺 構 (第395図)

本ピットは40 a 号の北東壁を切って構築されている。形態は長軸約1.2m、短軸約0.98mを測る。北壁側のピット上部が極端に開く。壁高は確認面から約27cmである。時期は不明である。

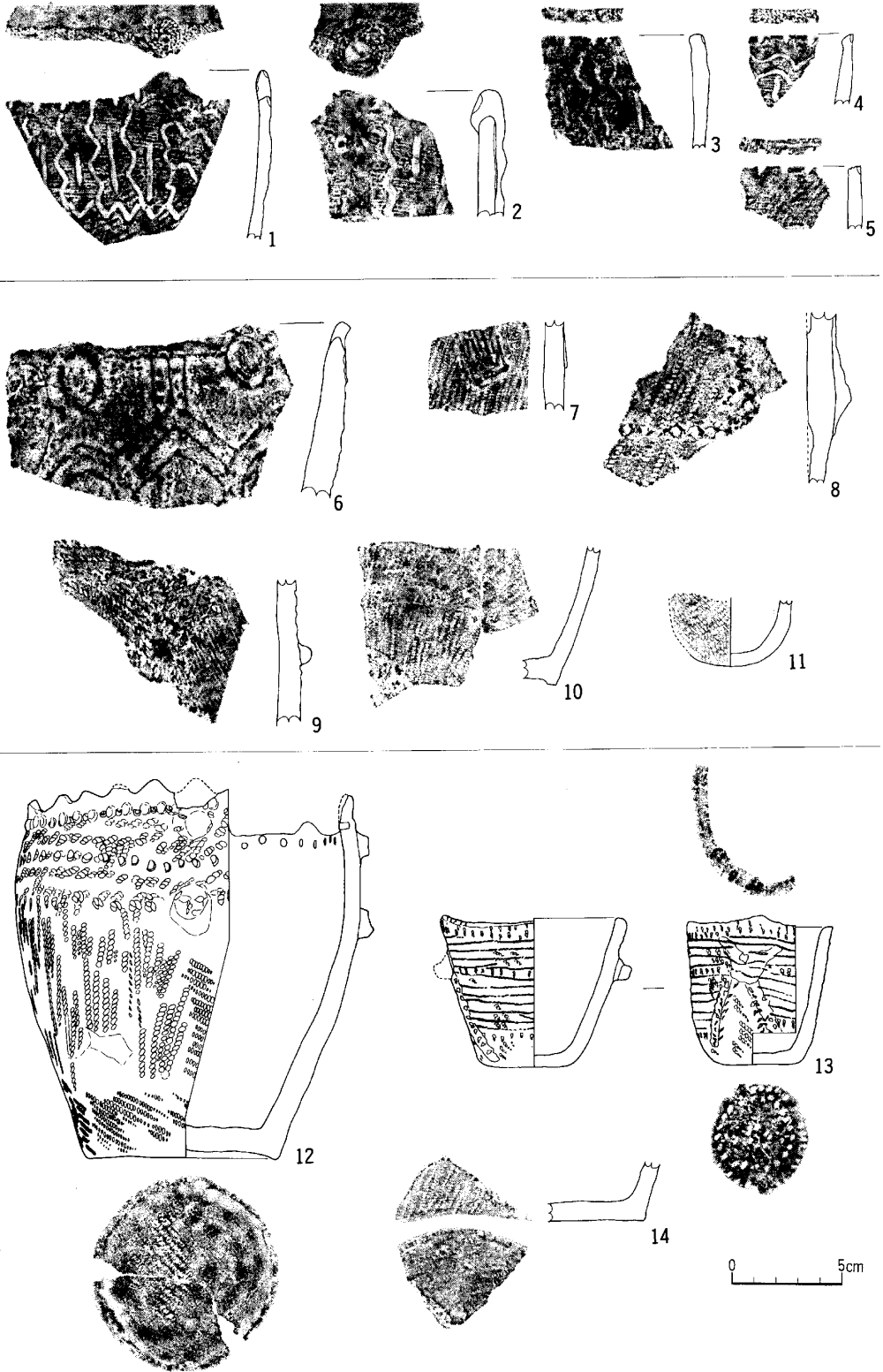
遺 物 (第398図-6~11)

埋土出土。6は宇津内II b式。7~10も宇津内系の土器である。9はボタン状の貼付に向かって縄線文が施される。11は縄文晩期の底部。

ピ ッ ト 258

遺 構 (第371図)

本ピットはG'72、F'72グリッドに位置する。規模は直径約0.93mの円形を呈する。壁高は確認面から約13cmである。時期は不明である。



第398図 ピット256埋土(1~5)、ピット257埋土(6~11)、ピット260埋土(12~14)出土土器

ピット 259

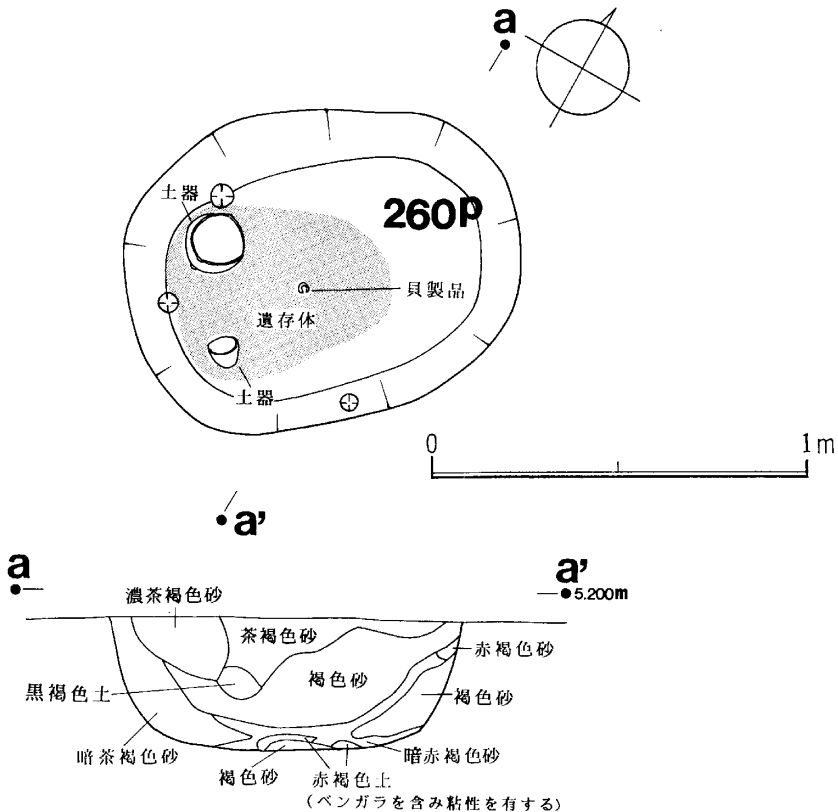
遺構 (第369図)

本ピットはF72グリッドに位置する。規模は長軸約1.13m、短軸約0.92mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約34cmである。時期は不明である。

ピット 260

遺構 (第399図、図版105-1)

本ピットはD75グリッドに位置する。II層の茶褐色砂を約15cm掘り下げた段階で落込みを確認した。この段階でベンガラ散布も確認できた。規模は長軸約1.15m、短軸約0.85mを測る。壁は底面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約70cmである。遺存体は糊状化し、粘性を有する。色調は赤褐色を呈し、ベンガラも散布されている。頭部の位置は確認すること



第399図 ピット260平面図

ができなかったが糊状化した遺存体は長軸面の南側に寄っている。同時期の他のピットの頭位も南方向にあるため本ピットの頭位は南方向にあると思われる。2点の土器を頭部の両側に置き、貝製装飾品は胸部に副葬されていたものと推測される。土器は正立の状態で出土した。床面に2本、東壁中央部に1本の小柱穴がある。規模は直径約10～12cm、深さは約2～5cmである。

遺 物 (第398図-12～14、図版105-2・3)

埋土出土。12は口縁部が小波状を呈するが一部は欠失する。口縁下部に突瘤文があり、太めの縄線文、円形刺突文、縄端圧痕で構成され2個1組のボタン状貼付が4個所ある。宇津内II a式である。13は上面観が楕円形を呈し、長軸側に吊り耳をもつ。吊り耳からは「ハ」字状の隆帯が垂下する。器面は縄線文と縄端圧痕文で構成される。14は宇津内系の底部。遺存体の上部から直径約3cmの貝製品が出土しているが遺存は悪い。

小 括

本ピットは続縄文字津内II a式の土墳墓である。大、小2点の土器と貝製品が副葬品されている。頭位は南方向と思われる。底面、東壁中に3本の小柱穴がある。

ピ ッ ト 261

遺 構 (第400図)

本ピットは29 a号竪穴の西側に位置するが29 a号竪穴により約2分の1が削られている。規模は残存部から判断して短軸約0.60mの楕円形を呈すると思われる。埋土の中位からベンガラが散布され、床面には長さ約20cm、幅約10cmのベンガラがありそのうえから第402図-1、2の土器が出土した。壁は底面から丸みをもって立ち上がる。高さは確認面から約33cmである。

遺 物 (第402図-1・2、図版105-4・5)

埋土出土。1は4個の小突起から垂下した隆帯がつながる。口縁下部に縄線文が部分的に施される。2は2個の吊り耳、2個1対の小突起をもつ。器面は縄線文と縄端圧痕文が施される。この2点は宇津内II a式である。

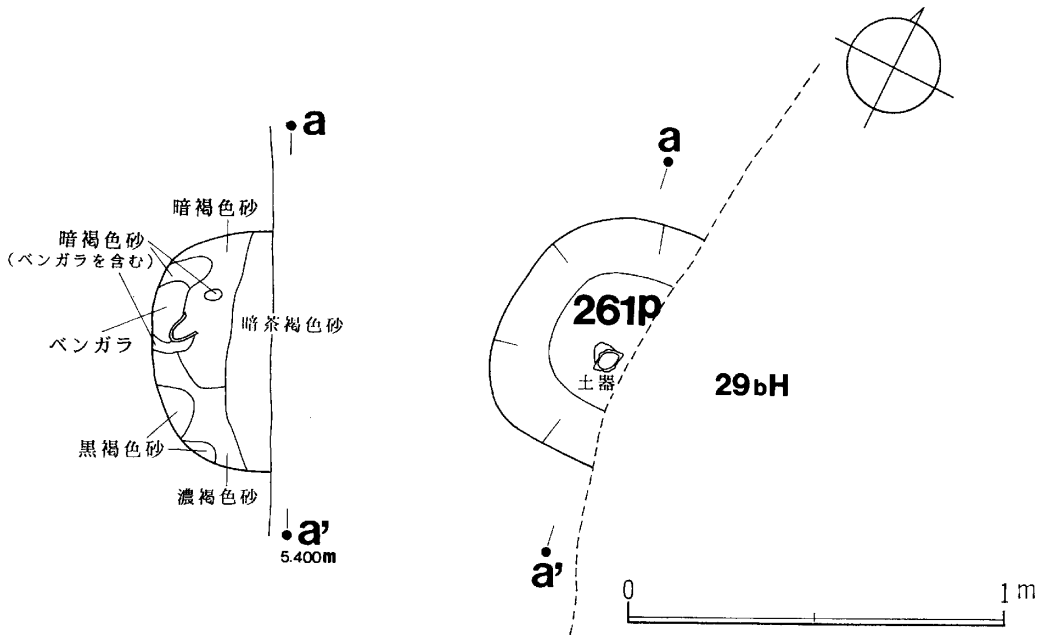
小 括

本ピットの埋土中、床面に多量のベンガラがあるため土墳墓と思われる。副葬品に2点の小型土器がある。時期は続縄文字津内II a式である。

ピ ッ ト 262

遺 構 (第395図)

本ピットはA74グリッドに位置する。規模は長軸約1.80m、短軸約1.50mの不整楕円形を呈



第400図 ピット261平面図

する。壁高は確認面から約20cmである。

遺物 (第402図-3)

3は埋土から出土した後北C₂式。

ピット 262 a

遺構 (第395、401図、図版106-1)

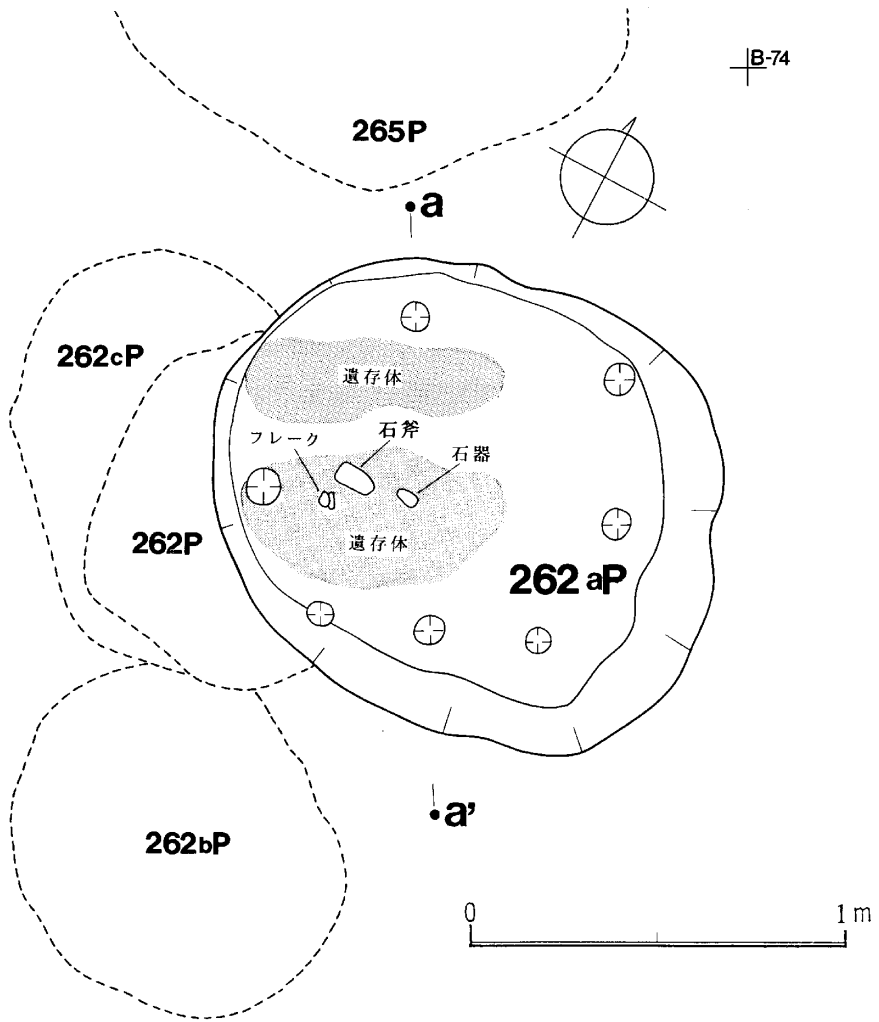
本ピットはピット262の東壁と床面検出中に発見した。規模は長軸約1.40m、短軸約1.19mの楕円形を呈するが短軸の幅が長い。長軸は東西方向にある。その理由は二体合葬のため規模を大きくする必要があるためである。床面には粘性をもつ暗褐色土の遺存体が2箇所認められた。糊状の輪郭から頭部の位置は判断できなかったが他のピット同様に西方向にあるものと思われる。第406図-4の石斧は南側の遺存体の下部から出土した。床面には各壁際に総計7本の小柱穴がある。規模は直径約6～10cm、深さ約5～9cmである。壁高は確認面から約70cmである。

遺物 (第402図-4～7、第406図-3～5)

埋土出土。4は宇津内II a式。5、6は幣舞式。7は刺突文のある縄文晩期中葉。

第406図-3は搔器。4は片刃磨製石斧。緑色岩製。

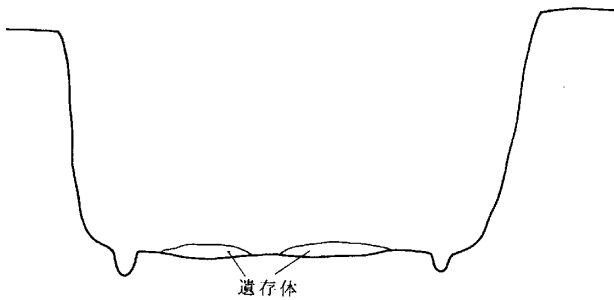
B-74



a

a'

●5.300m



第401図 ピット262、262a、262b、262c平面図

小 括

本ピットの形態は楕円形を呈する。土器が出土していないため時期は不明であるが、近接する続縄文字津内II a 式の土壌墓と形態、構造が類似するため宇津内II a 式の可能性が高い。

ピ ッ ト 262 b

遺 構 (第395図)

本ピットはピット262の南壁とわずかに重複する。規模は長軸約1.0m、短軸約0.8mの楕円形を呈する。長軸は東西方向にある。壁高は確認面から約20cmである。ピットのほぼ中央部に赤褐色土の遺存体が認められ、上部からベンガラと混じって第402図-8の小型土器と第406図-6の叩き石が出土した。

遺 物 (第402図-8～10、第406図-5～7)

8は床面出土。突瘤文の下に縄端圧痕文が施された宇津内II a 式。9、10は口唇部に縄を押し捺した続縄文前葉の土器。

石器は床面から第406図-5の棒状原石、6の叩き石が出土している。先端部を中心に赤色顔料が付着している。7は埋土から出土した有茎石鏃。

小 括

本ピットの形態は楕円形を呈する。遺存体の上部から続縄文字津内II a 式が出土している。本ピットに伴うものと判断される。

ピ ッ ト 262 c

遺 構 (第395図)

本ピットはピット262に大半を切られている。形態は短軸約0.78mの楕円形を呈すると思われる。上部に直径約35cmの石皿、10～20cmの角礫6点が認められる。壁高は確認面から約16cmである。

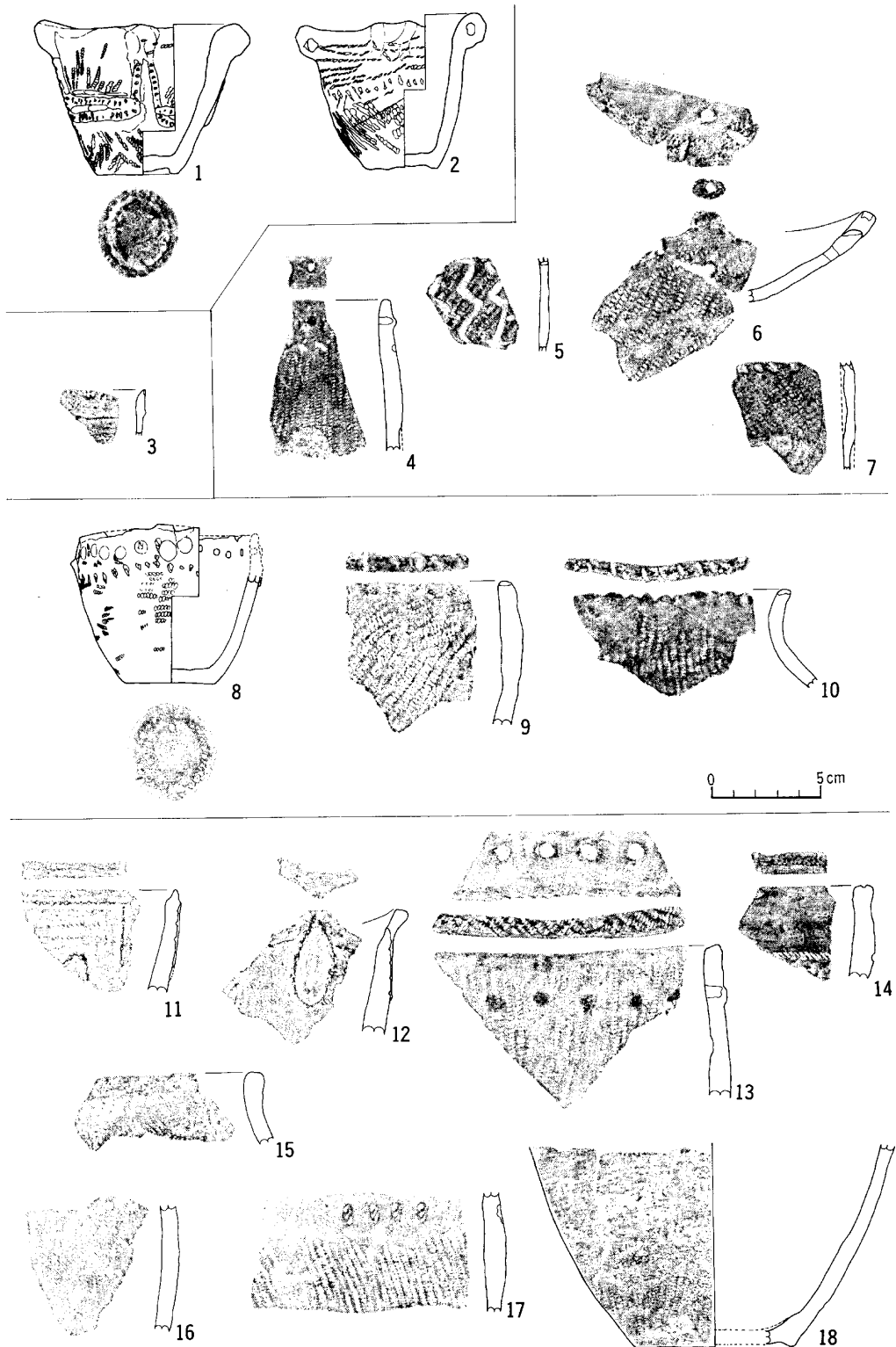
ピ ッ ト 263

遺 構 (第395図)

本ピットはA74、B74グリッドに位置する。規模は長軸約1m 短軸約0.75mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。埋土は暗黒色砂が堆積する。

遺 物 (第402図-11～18、第406図-8)

埋土出土。11、12は宇津内II b 式。13は同II a 式。14、15、17は続縄文前葉。16、18は宇津



第402図 ピット261埋土(1・2)、ピット262埋土(3)、ピット262 a 埋土(4~7)、ピット262 b 床面(8)・埋土(9・10)、ピット263埋土(11~18)出土土器

内系と思われる。第406図-8は琥珀玉。

ピ ッ ト 263 a

遺 構 (第395、403図、図版107-1)

本ピットはB74グリッドに位置する。表土を剝土すると南壁上部に角礫が茶褐色砂にもぐり込む状態で出土した。北東壁上部はピット263に切られている。形態は長軸約1.40m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。長軸は東西方向にある。確認面から約15～20cm掘り下げた段階で棒状原石、大型剥片、石斧が壁際から流れ込む状態で出土した。さらに下げると北壁隅にベンガラと8本の石鏃が認められた。石鏃は図示していないが無茎石鏃であり先端部を東側に向けている。遺存体は粘性のある赤褐色土であり糊状を呈する。糊状の輪郭をみると頭部は西方向にある。遺存体の上部には第404図に示す様に琥珀が数珠状に連なって出土した。琥珀は一括して取上げ室内で各連ごとに取り上げた。その結果、琥珀は5連に及ぶことが判明した。琥珀は胸部付近に置かれているのであろう。琥珀の大きさは各連とも直径約1.0～1.2cmと一定しており極端に大きいものとか小さいものは無い。琥珀玉は約1,300粒に及ぶ。底面の各壁隅には直径約8～9cm、深さ約6～9cmの小柱穴が4本認められた。

遺 物 (第405図-1～5、第406図-9～18、第407図-1～7、図版107-2、図版108-1～17)

埋土出土。1は後北C₂式。2～5は続縄文前葉であろう。3、4は刺突が施される。

石器は第406図-9～18、第407図-1～7がある。すべて埋土出土。第406図-9は両面加工ナイフ。10、11は側削器。12～18は大型剥片。13～15、17、18は微細な刃こぼれがある。第407図-1、2は棒状原石。3は残核であろう。4～6は片刃磨製石斧。4は安山岩製。5、6は緑色岩製。7は両面から穿孔された石製品。石質は不明。

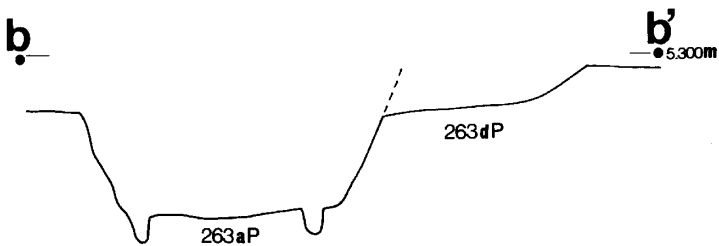
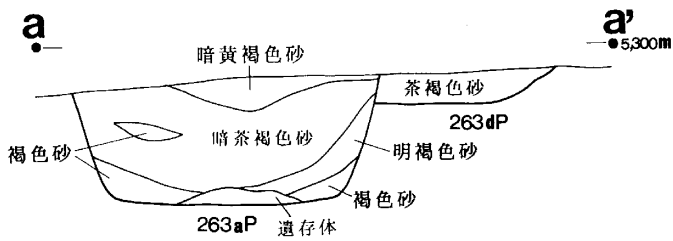
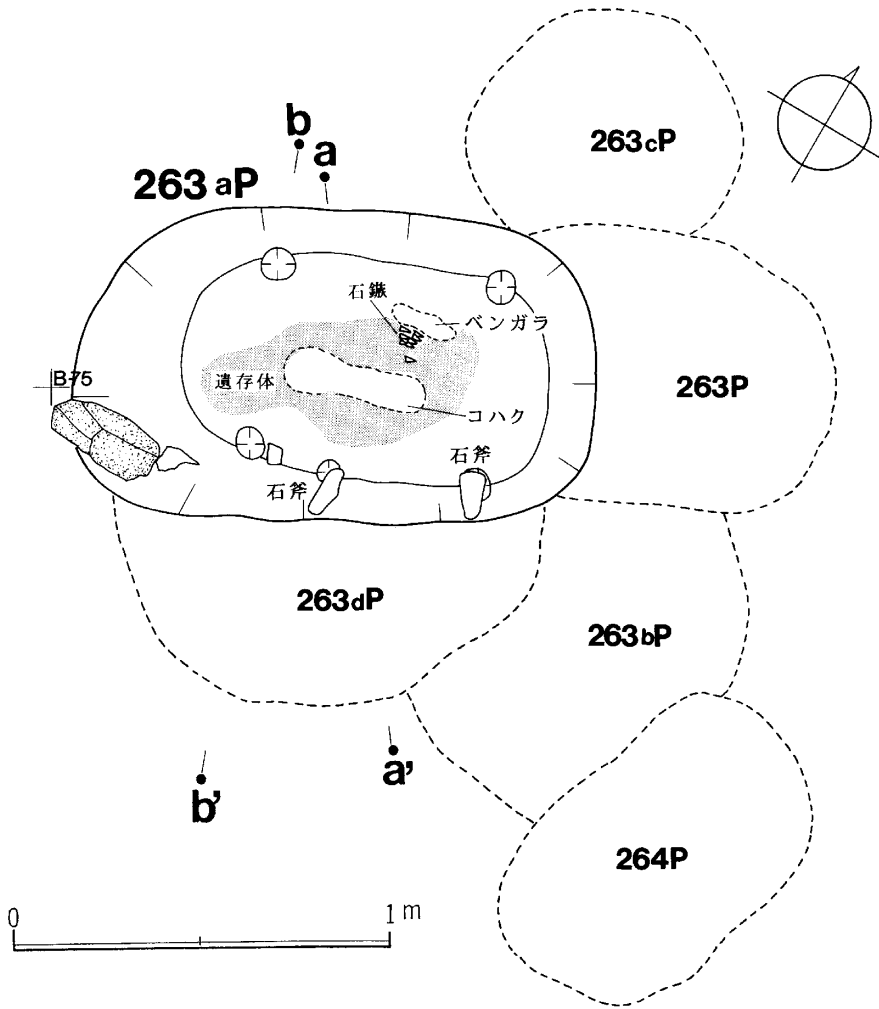
小 括

本ピットの形態は楕円形を呈する。土器が出土していないため詳細な時期は不明であるがピットの長軸が東西方向にあること、底面に小柱穴があること、棒状原石をもつこと、琥珀玉を多量に副葬する点などから続縄文津内II a式の土墳墓と判断される。

ピ ッ ト 263 b

遺 構 (第395図)

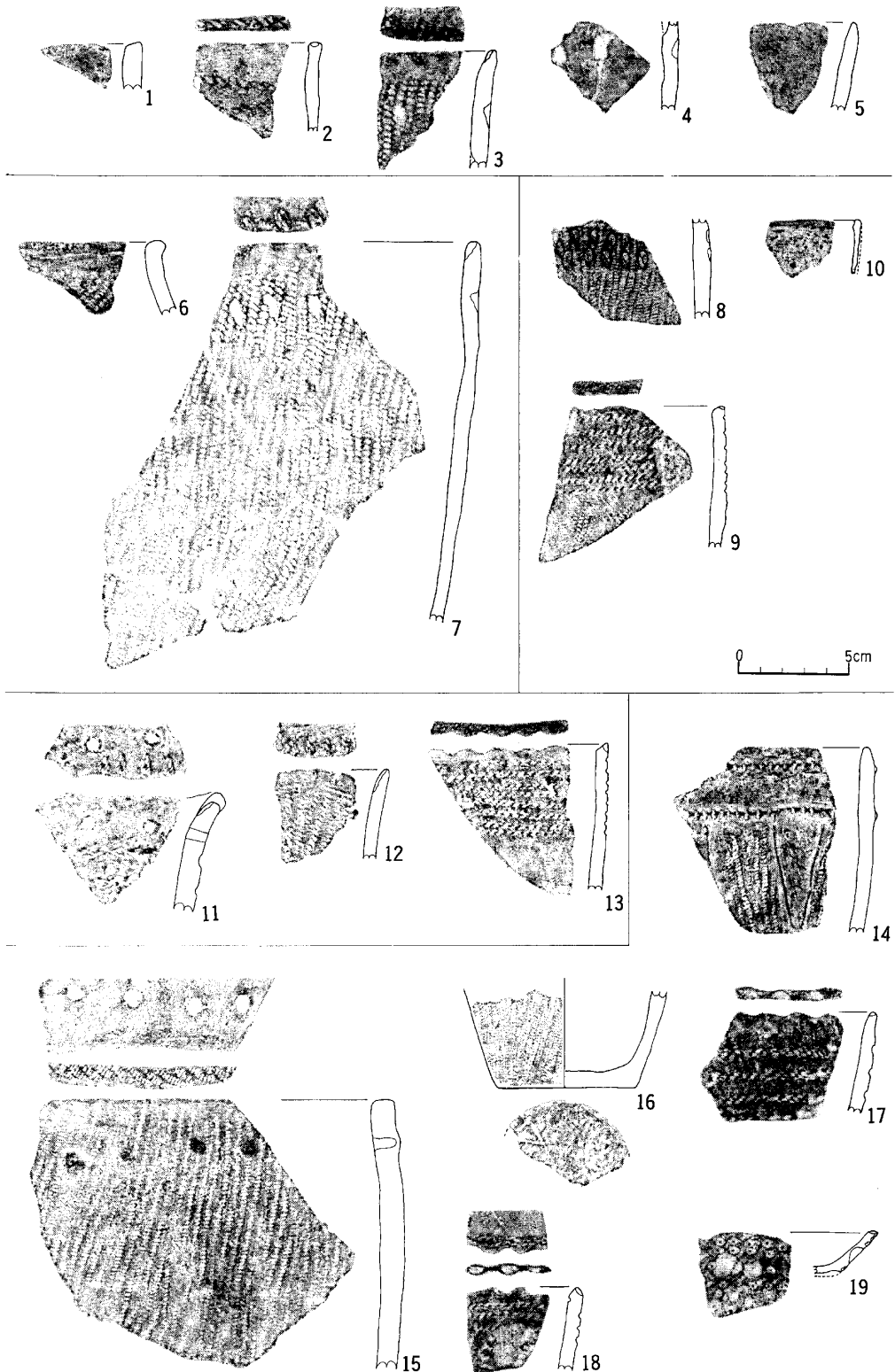
本ピットはピット263、263 d、264に切られているため正確な規模は不明である。残存部分から判断すると不整形を呈する様である。直径約1mである。壁高は確認面から約10cmである。詳細な時期は不明である。



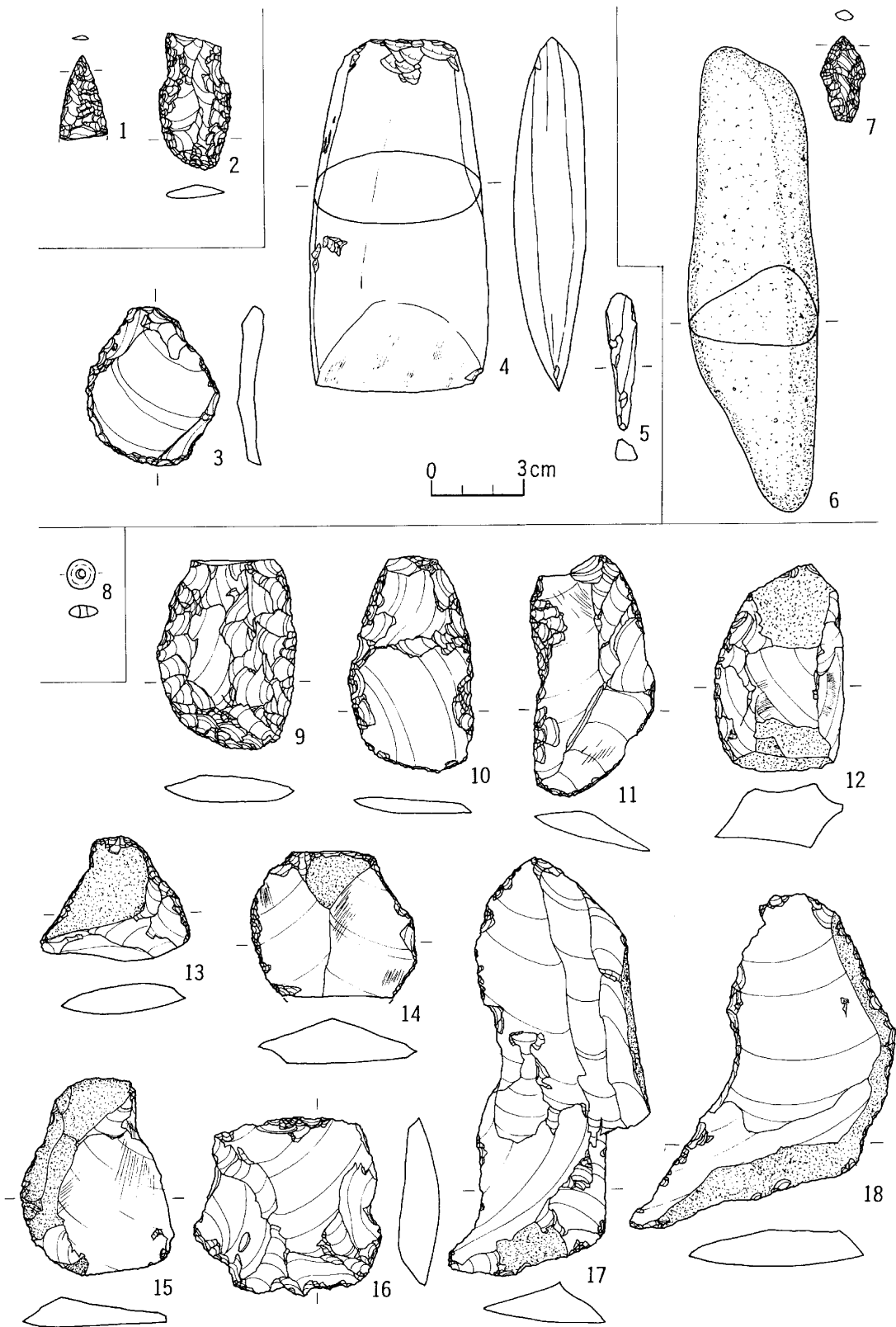
第403図 ピット263、263 a、263 b、263 c、264 d 平面図



第404図 ピット263a 琥珀玉出土状況



第405図 ピット263 a 埋土(1~5)、ピット263 b 埋土(6・7)、ピット263 d 埋土(8~10)、ピット264埋土(11~13)、ピット265埋土(14~19)出土土器



第406図 ピット256埋土(1・2)、ピット262 a 埋土(3)、遺体上(4)、ピット262 b 床面(5)・埋土(6・7)、ピット263埋土(8)、ピット263 a 埋土(9~18)出土石器・琥珀玉

遺 物 (第405図-6・7、第407図-8)

埋土出土。6は口縁部がわずかに張り出す。7は口唇部に縄の押圧、器面に刺突が施される。第405図-3と同一個体である。第407図-8は黒曜石製の無茎石鏃。

ピ ッ ト 263 c

遺 構 (第395図)

本ピットはピット263に南壁側を切られている。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約12cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第407図-9・10、図版109-1～2)

埋土出土。9はオホーツク文化期の柳葉形石鏃。黒曜石製。10は玄武岩製の両面加工ナイフ。刃部は鋸歯状を呈し、両先端部から縁辺部にかけて赤色顔料が付着する。

ピ ッ ト 263 d

遺 構 (第395図)

本ピットはピット263aにより大半が削られているため正確な形態は不明であるが、残存部から判断して直径約1.10mの円形を呈すると思われる壁高は約8cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第405図-8～10)

埋土出土。8は宇津内系であろう。9は幣舞式。10は縄文晩期。

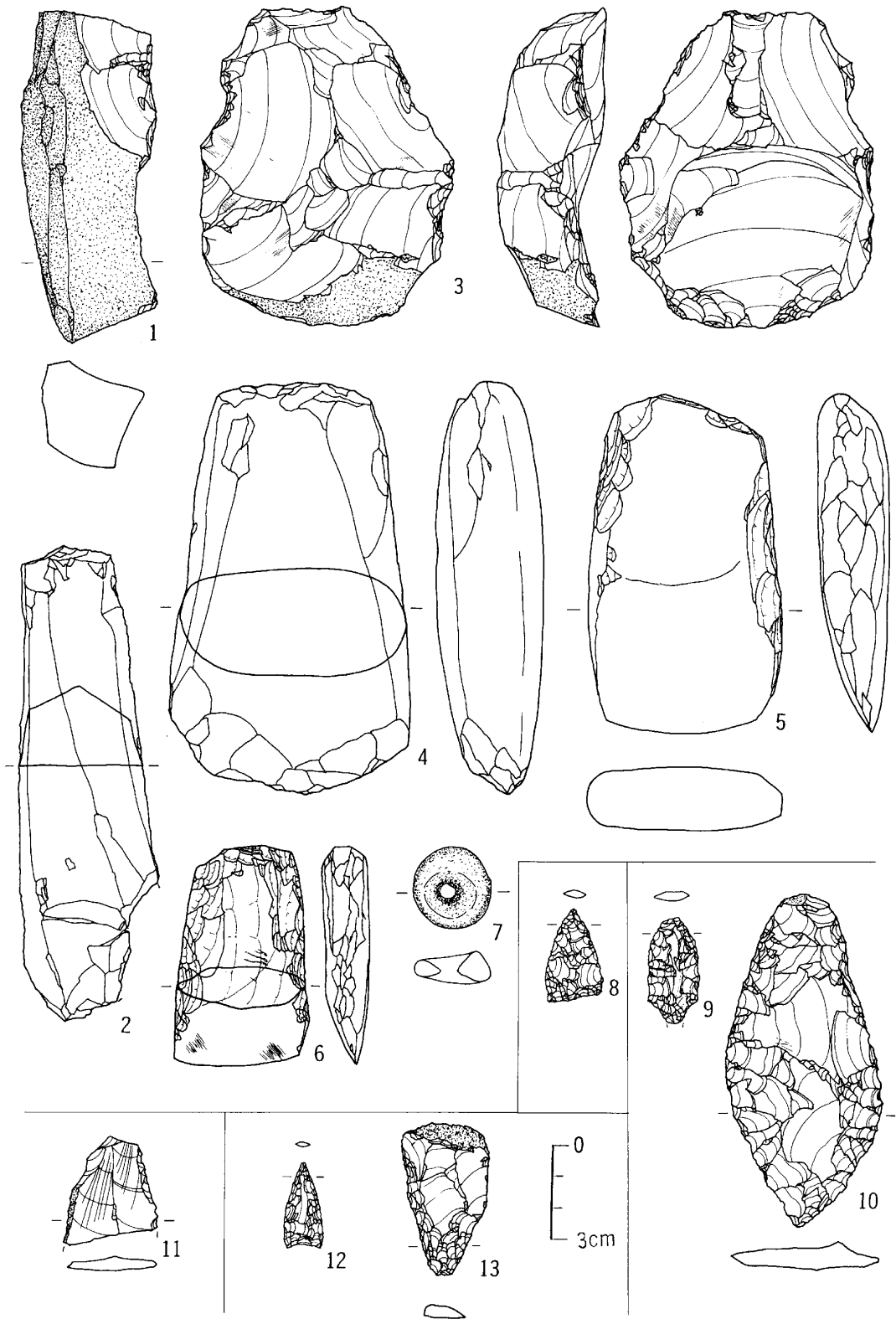
ピ ッ ト 264

遺 構 (第395図)

本ピットはピット263の東側に位置する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.55mの楕円形を呈する。壁は皿状に緩く立ち上がり、高さは確認面から約8cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第405図-11～13、第407図-11)

埋土出土。11、12は続縄文前葉。山形の小突起をもつ。突瘤は貫通し縄線文が施される。13は幣舞式。第407図-11は両縁片部に微細な刃こぼれが認められる。



第407図 ピット263 a埋土(1~5)、遺体上(6)・上部(7)、ピット263 b埋土(8)、ピット263 c埋土(9・10)、ピット264埋土(11)、ピット265埋土(12・13)出土石器・石製品

ピ ッ ト 265

遺 構 (第395図)

本ピットはB74、A74グリッドに位置する。表土を剝土すると大型の石皿が現れ、周辺を精査すると円形の落ちこみを確認した。石皿は東壁に近接した位置にあり底面近くまで達する。規模は直径約1.50mである。壁高は確認面から約20cmである。詳細な時期は不明である。

遺 物 (第405図-14~19、第407図-12・13)

埋土出土。15はピットの最上部から出土した宇津内II a式。16は宇津内系の底部。18、19は緑ヶ岡式。19は縄文晩期中葉の刺突文。第407図-12は無茎石鏃。13は削器。

ピ ッ ト 266

遺 構 (第395図)

本ピットはA74グリッドに位置する。規模は直径約0.78mの円形を呈する。壁高は確認面から約22cmである。時期は不明である。

遺 物 (第411図-1~3)

埋土出土。1は縄文晩期中葉。2、3は続縄文前葉かもしれない。3は刺突が施される。

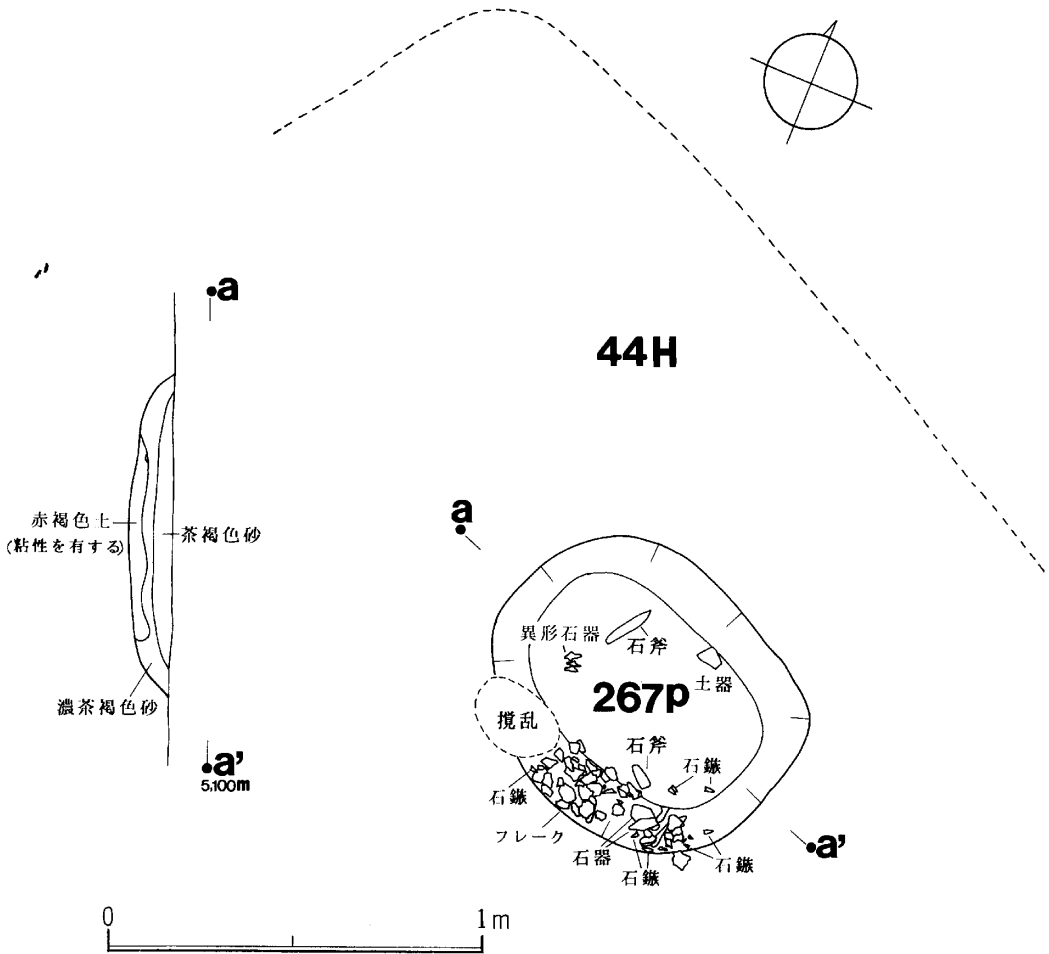
ピ ッ ト 267

遺 構 (第408図、図版109-3)

本ピットは44号竪穴の床面精査中に発見した。規模は長軸約0.9m、短軸約0.7mの楕円形を呈する。長軸は東西方向にある。壁は緩く立ち上がり、高さは44号竪穴の床面から約13cmを測る。長軸は東西方向にある。底面に遺存体と思われる粘性のある赤褐色砂質土が認められる。遺物は石器だけであるが出土状況に規則性がある。石器の分布は南壁際の上部に集中しているがその中でも剝片は南壁の中央部に集中しているのに対し石斧、石鏃、ナイフは壁隅にまとまっている。石偶は西壁側からまとまって出土している。これらの石器は遺存体の上部近くから出土したもので本ピットに伴うものと判断できる。

遺 物 (第411図-4、第409図-1~33、第410図-1~14、図版109-4~19、図版110-1~17)

4は埋土から出土した続縄文の底部。石器は第409図-1~32がある。1~9は無茎石鏃。10~15は石偶。16は片面加工の小型ナイフ。17~24は両面加工ナイフ。25、27~32は削器。27は石匙。33は搔器。19のメノウ製を除き黒曜石製。第410図-1~3は削器。4~6は搔器。7は玄武岩製の削器。8、10~12は片刃磨製石斧。8は泥岩製。9は擦り切り手法による両刃の



第408図 ピット267平面図

石斧。綠色岩製。10は綠色岩製。11は泥岩製。12は青色泥岩製。13、14は棒状原石。他に図示していないが琥珀玉が1点石器の下部から出土している。

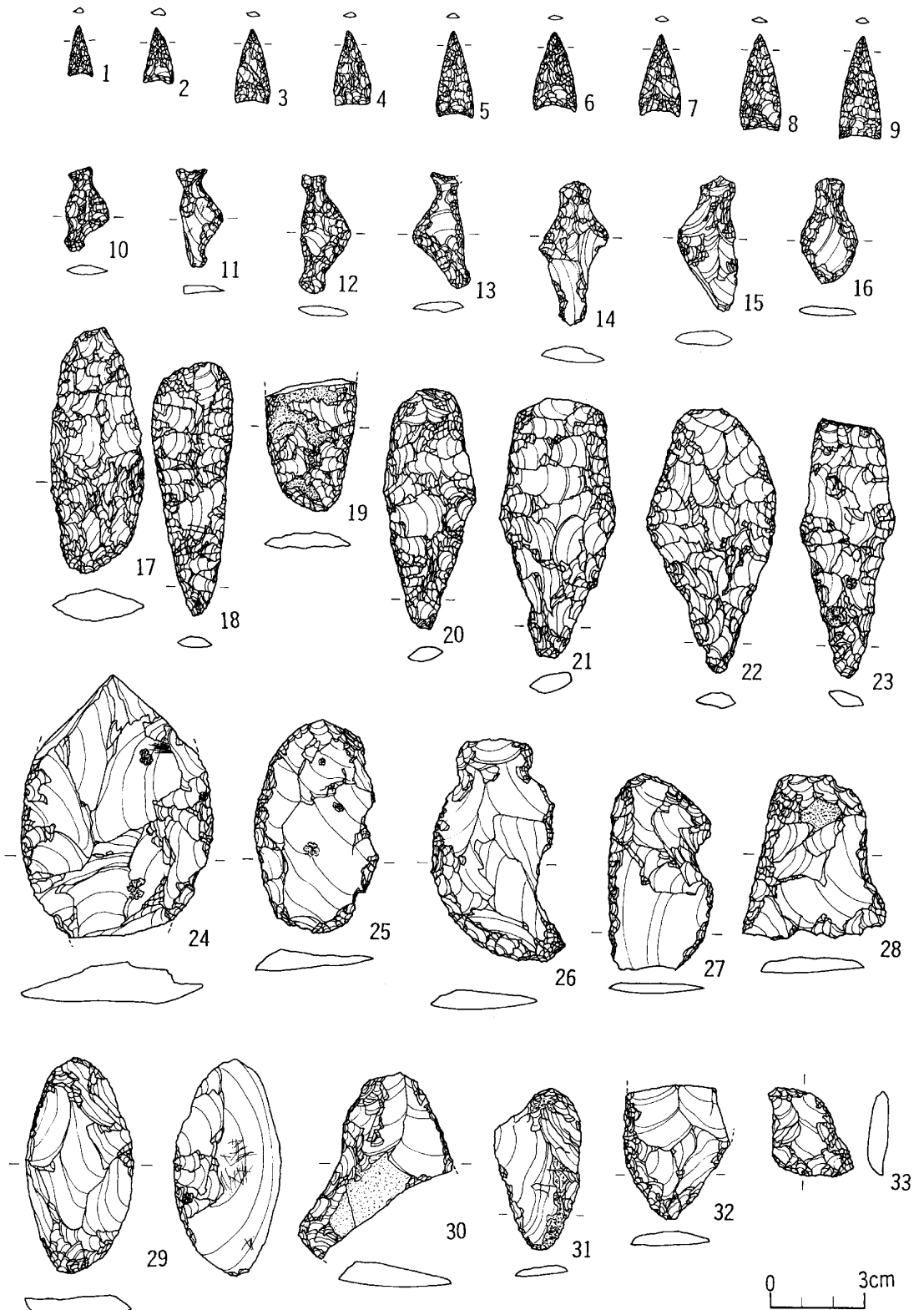
小 括

土器の出土がないため詳細な時期は不明であるが石鏃、ナイフの形態から続縄文期と思われる。ピットの長軸方向が宇津内II a式とほぼ同じでありこの時期の土壌墓である可能性が高い。

ピ ッ ト 268

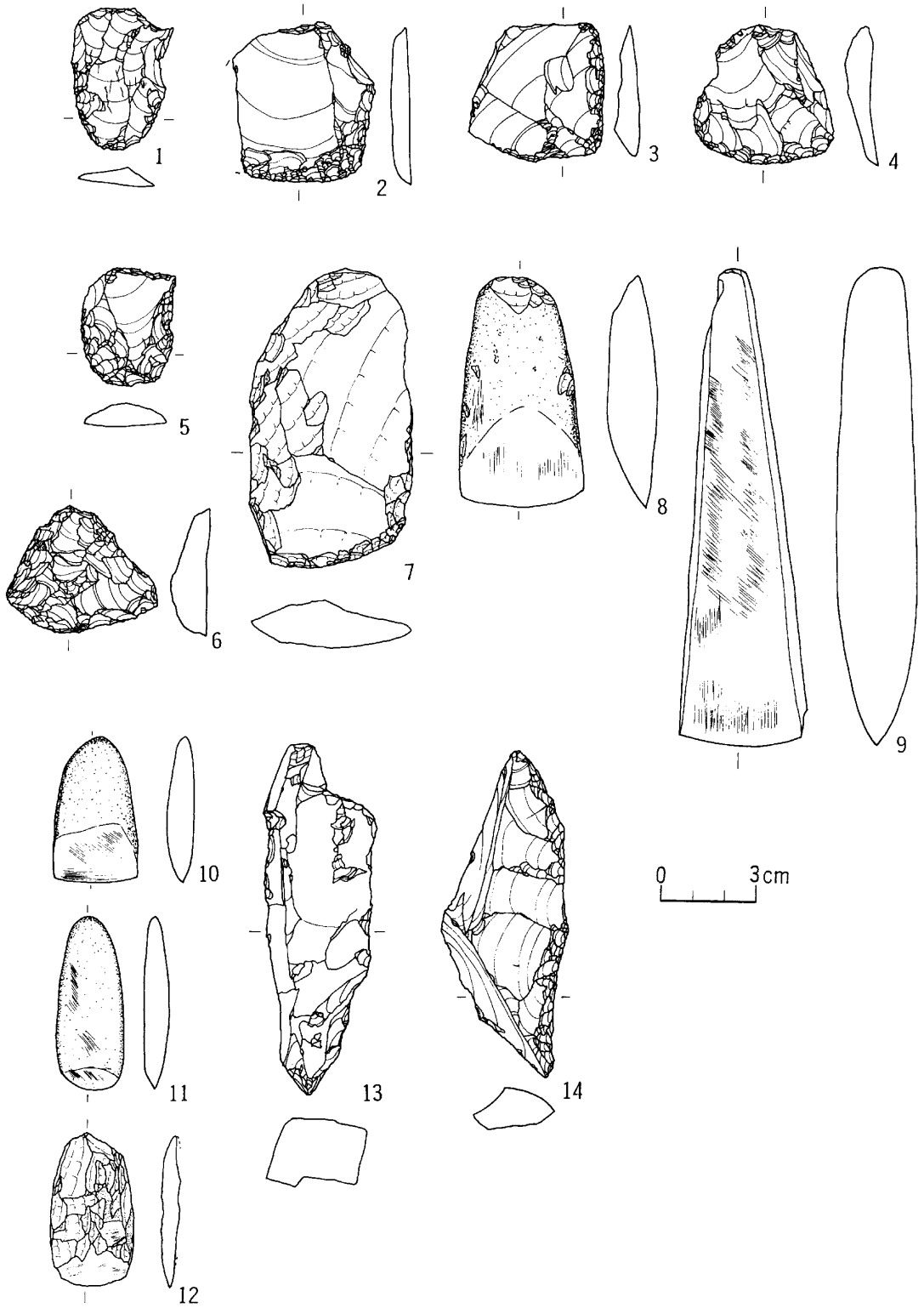
遺 構

本ピットはI'62グリッドに位置する。規模は直径約1.16mの円形を呈すと思われる。壁高は確認面から約28cmである。平成4年9月の集中豪雨により破壊を受けたため、土層図しか残っていない。ベンガラが上部から検出されたため土壌墓と思われる。ピット268号を切って構築し



第409図 ピット267埋土(1~33)出土石器

常呂川河口遺跡



第410図 ピット267埋土(1~14)出土石器

ているが時期は不明である。

ピ ッ ト 268 a

遺 構

本ピットはI'62グリッドに位置する。規模は直径約2.24mの方形を呈する。壁高は確認面から約1m90cmである。ピット268同様、土層図を作成した段階で集中豪雨により破壊された。時期は不明である。

遺 物 (第411図-5～13、第415図-1)

埋土出土。5～7は幣舞式。8～11は縄文晩期中葉。9は浅い沈線を螺旋状に施す。10は帯縄文が施される。11は沈線と刺突が施される。12は内側から斜めの突瘤が施され、13は爪形文である。第415図-1は鋸歯状の刃部をもつ黒曜石製削器。

ピ ッ ト 269

遺 構 (第367図)

本ピットはI'59グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの円形を呈する。壁高は確認面から約28cmである。

遺 物 (第413図-1～6、第415図-2・3)

埋土出土。1は幣舞式。2、3は縄文晩期。4は同前葉の盛り上がりをもつ爪形文。5は縄文後期堂林式。6は肥厚帯の下部に刺突があり器面は四角形の押型が施される。縄文前期末葉。第415図-2は石匙。3は側削器。

ピ ッ ト 270

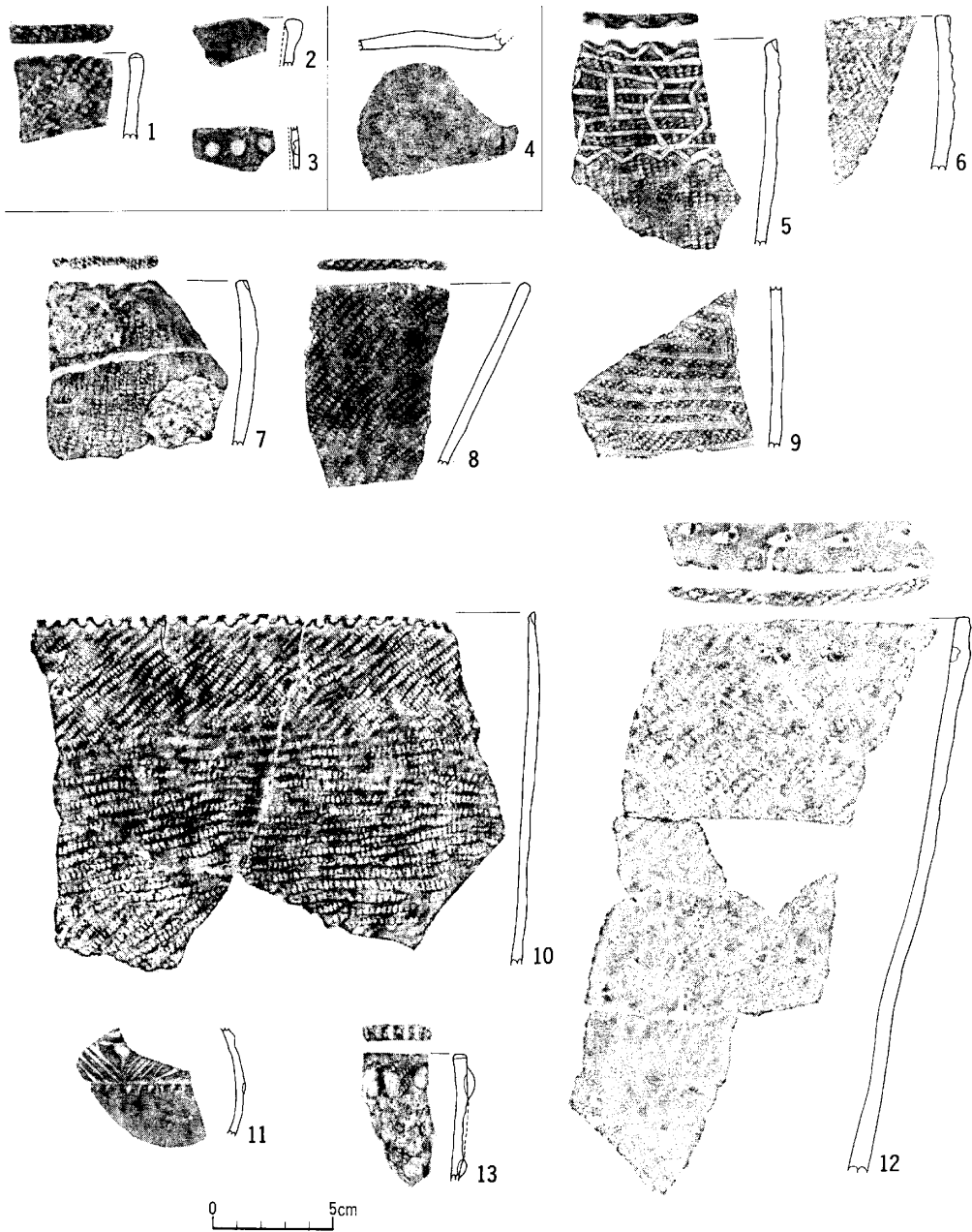
遺 構 (第274、412図)

本ピットはG'60、H'60グリッドに位置する。規模は直径約0.7mの円形を呈する。壁高は確認面から約16cmである。埋土を約5cm下げると長さ約25cm、幅約4.5cmの骨が出土した。さらに下げると赤褐色を呈した遺存体が北壁際と南壁際から中央にかけて認められた。

遺 物 (第413図-7～13、第415図-4～7)

埋土出土。7～9は後北C₂式。第412図平面図ではピット270a上部から出土したものであろう。本ピットに伴う可能性が高い。10、11は宇津内II a式。12は浅い沈線間に円形刺突が施される。宇津内系であろう。13は縄文晩期。

第415図-4、5は削器。6は搔器。7は縁辺部に微細な刃こぼれがある。黒曜石製。



第411図 ピット266埋土(1~3)、ピット267埋土(4)、ピット268 a 埋土(5~13)出土土器

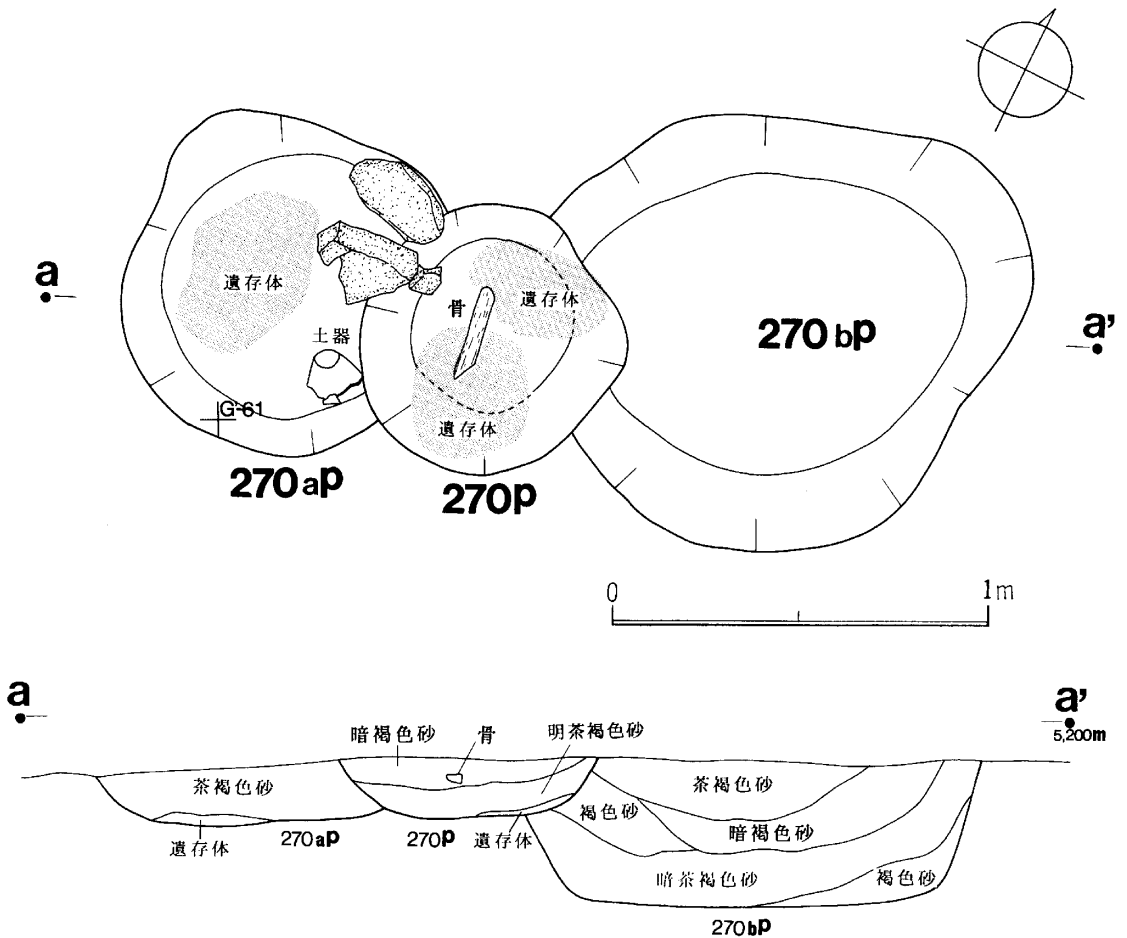
ピ ッ ト 270 a

遺 構 (第274、412図)

本ピットはピット270に東壁を切られている。規模は直径約0.9mの円形を呈する。壁高は確認面から約15cmである。埋土に微細な骨片が認められた。

遺 物 (第413図-14~17、第415図-8)

埋土出土。14はオホーツク文化ソーメン状貼付文。15は後北C₂式。16は突瘤下に3本の沈線が施される。続縄文前葉であろう。17は縄文晩期中葉。第415図-8は片面加工ナイフ。



第412図 ピット270、270 a、270 b 平面図

ピ ッ ト 270 b

遺 構 (第274、412図)

本ピットはピット270の北側にある。南壁の一部をピット270に切られているものの規模は長軸約1.3m、短軸約1.2mの不整円形を呈する。壁高は確認面から約40cmである。時期は不明である。

遺 物 (第413図-18~24、第415図-9~11)

埋土出土。18は縄文晩期後葉であろう。19は幣舞式。20~22は縄文晩期中葉。23、24は縄文後期堂林式。

第415図-9は両面加工ナイフ。10、11は側削器。黒曜石製。

ピ ッ ト 271

遺 構 (第274図)

本ピットはI'60グリッドに位置する。規模は長軸約1.15m、短軸約0.90mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約26cmである。時期は不明である。

遺 物 (第414図-1~5、第415図-12)

埋土出土。1は後北C₂式。2は統縄文前葉。3は幣舞式。4は縄文晩期中葉。5は山形の押型文が施されている。縄文前期末葉。第415図-12は凹み石。

ピ ッ ト 272

遺 構 (第367図)

本ピットはI'59グリッドに位置する。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。時期は不明である。

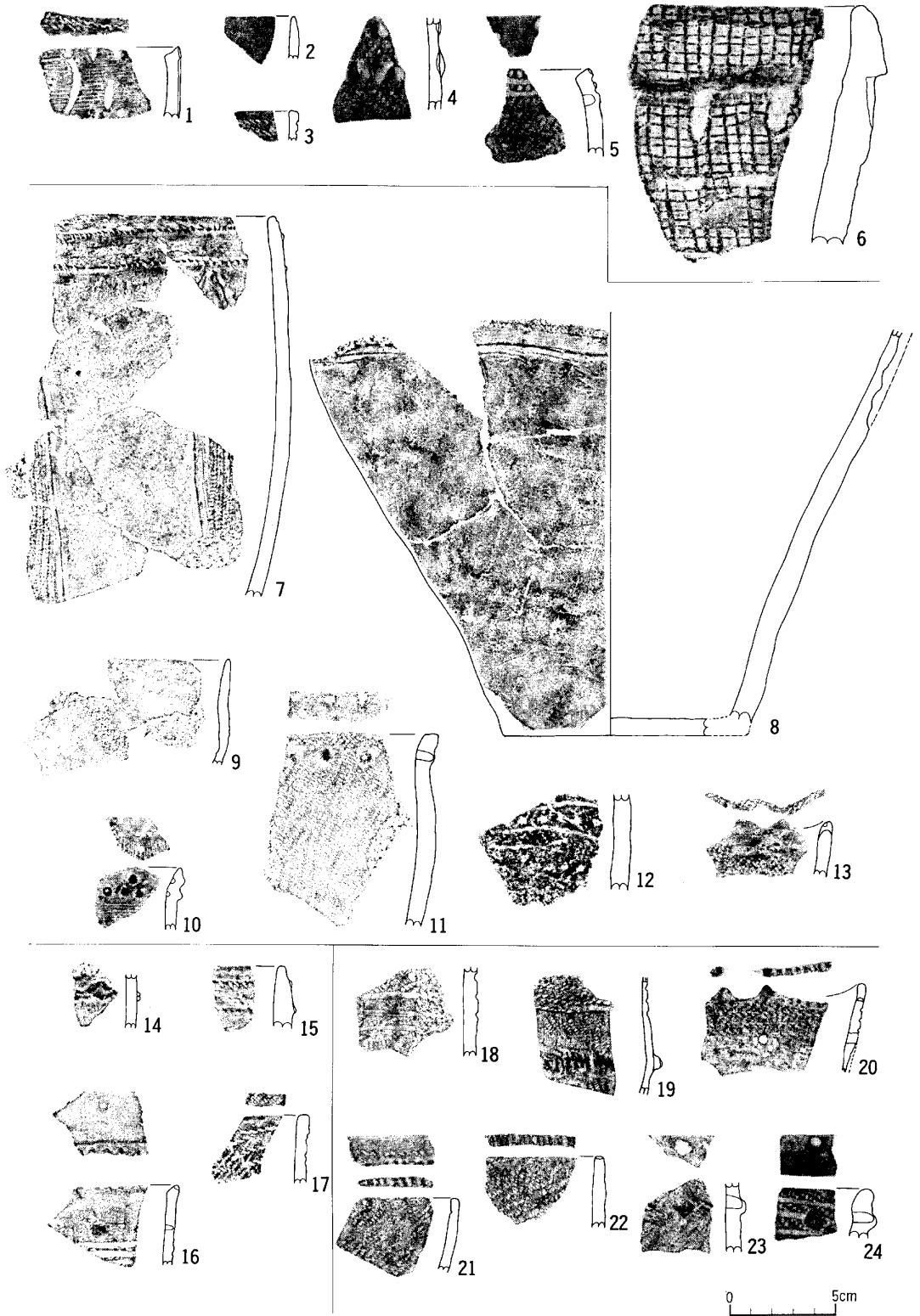
遺 物 (第414図-6~12、第415図-13~17、図版111-1)

埋土出土。6、8~12は宇津内II a式。6は上面観が楕円形を呈する。長軸側に小突起をもち、その下部に吊り耳があるが反対側は欠失する。突瘤下に縄線文が施される。内部に赤色顔料が付着する。7は宇津内II b式。

石器は第415図-13、14の無茎石鏃がある。15~17は琥珀玉。琥珀は22点出土している。

小 括

詳細な時期は不明であるが統縄文期II a式の土壌墓と思われる。



第413図 ピット269埋土(1~6)、ピット270埋土(7~13)、ピット270 a 埋土(14~17)、ピット270 b 埋土(18~24)
出土土器

ピ ッ ト 273

遺 構 (第358図)

本ピットはI'56グリッドに位置する。規模は直径約0.90mの円形を呈する。壁高は確認面から約27cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 274

遺 構 (第358図、図版111-3)

本ピットはH'56、57グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約33cmである。時期は縄文晩期中葉から後葉であろう。

遺 物 (第414図-13、図版111-2)

13は埋土出土。口縁部は「く」字状に外反し2本の横走沈線が施される。肩部は平坦で大きく張り出し「×」字状の沈線がある。胴部は細長く底面に沈線が施される。

ピ ッ ト 275

遺 構 (第274図)

本ピットはI'60グリッドに位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1.10mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約34cmである。時期は不明である。

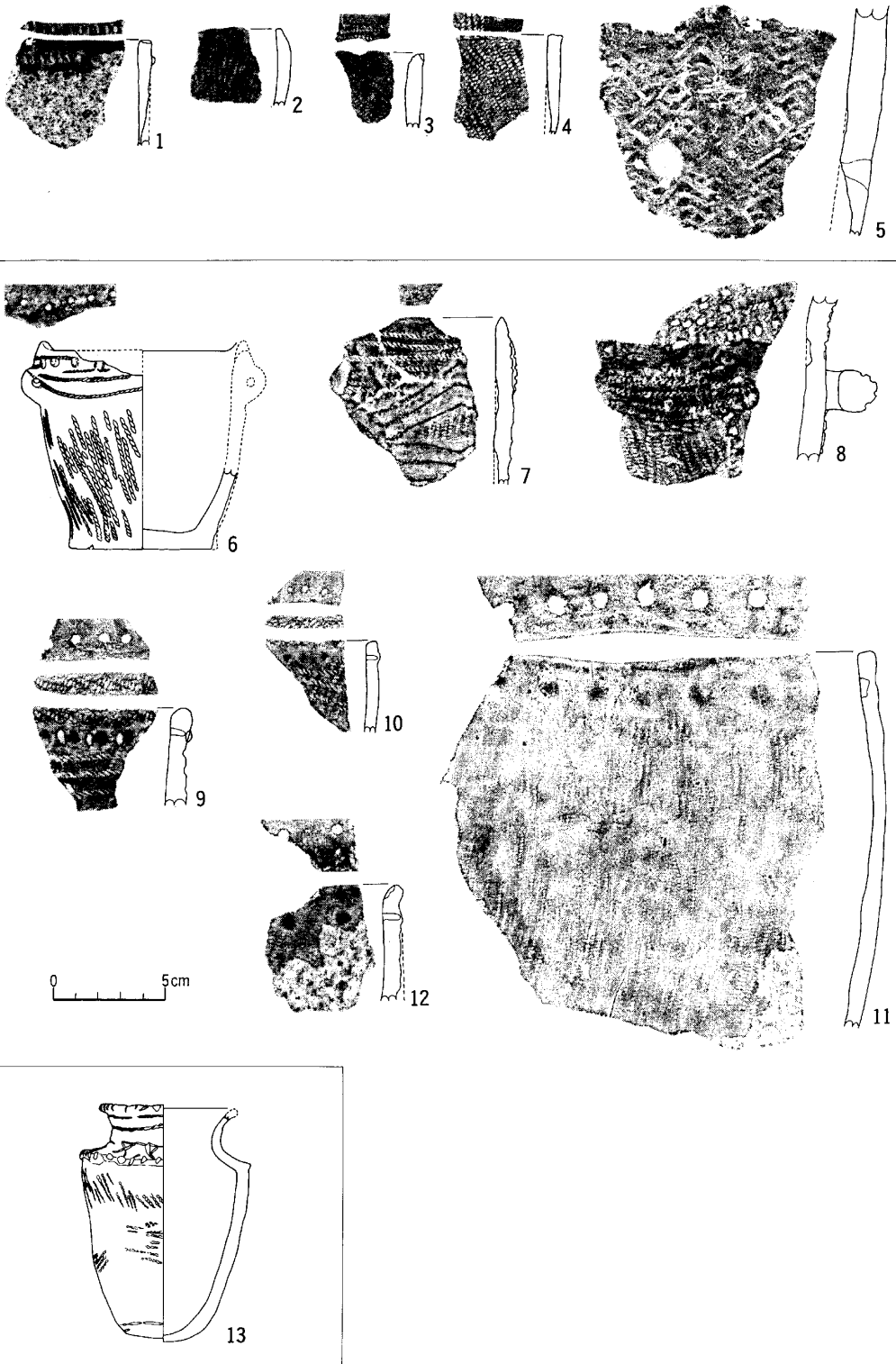
遺 物 (第416図-1~13、第415図-18)

1は床面から出土した宇津内II b式。2~13は埋土出土。すべて縄文晩期である。2~6は縄文晩期中葉。7は底部。8は無文の椀。9~12は無文の椀か杯と思われる。12は口縁部に半状施文具により刺突があるため無文の土器は晩期中葉と思われる。13は前葉の内側から斜めに施された突瘤文。第415図-18は有茎石鏃。

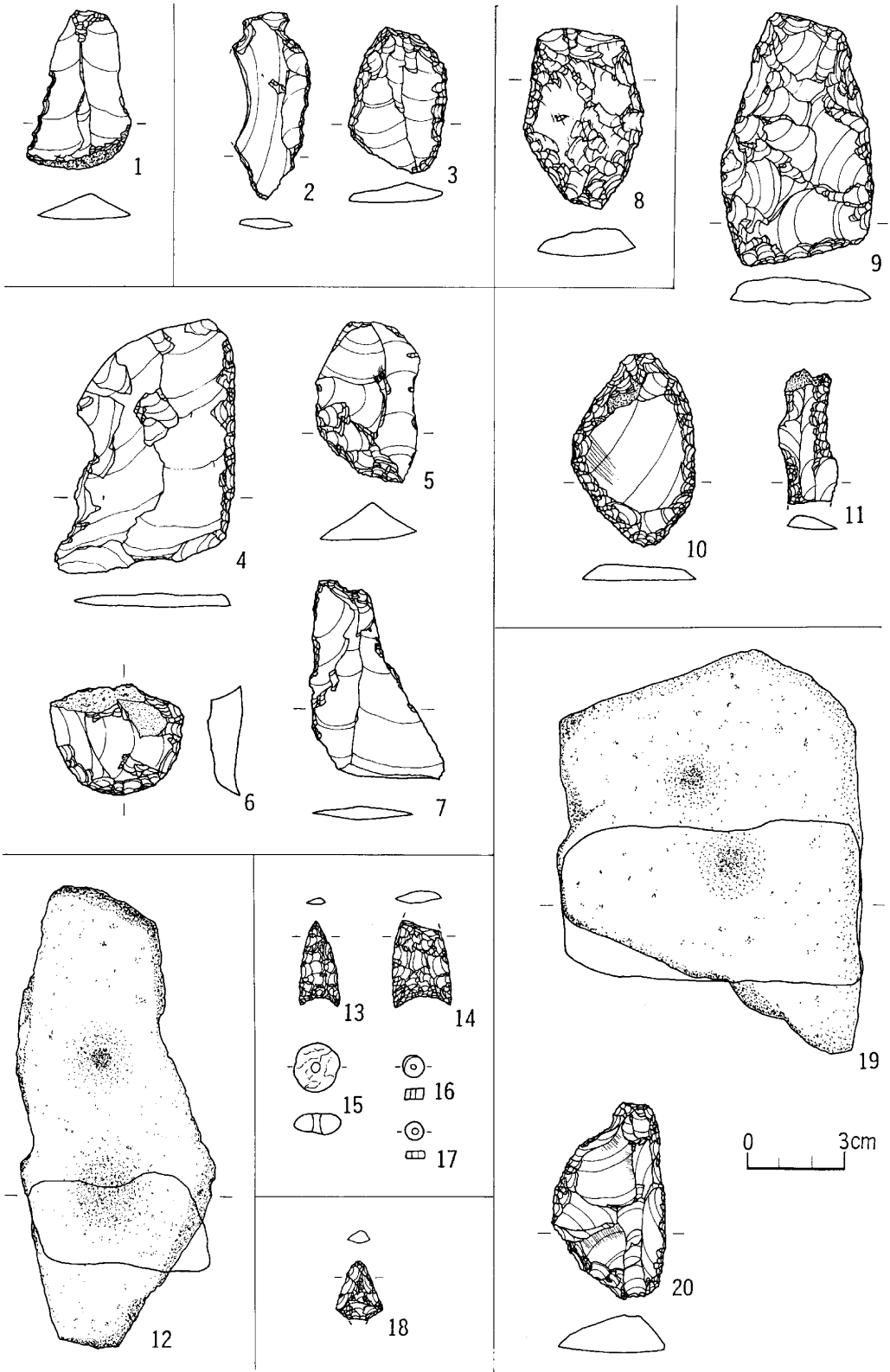
ピ ッ ト 275 a ・ 275 b

遺 構 (第274図)

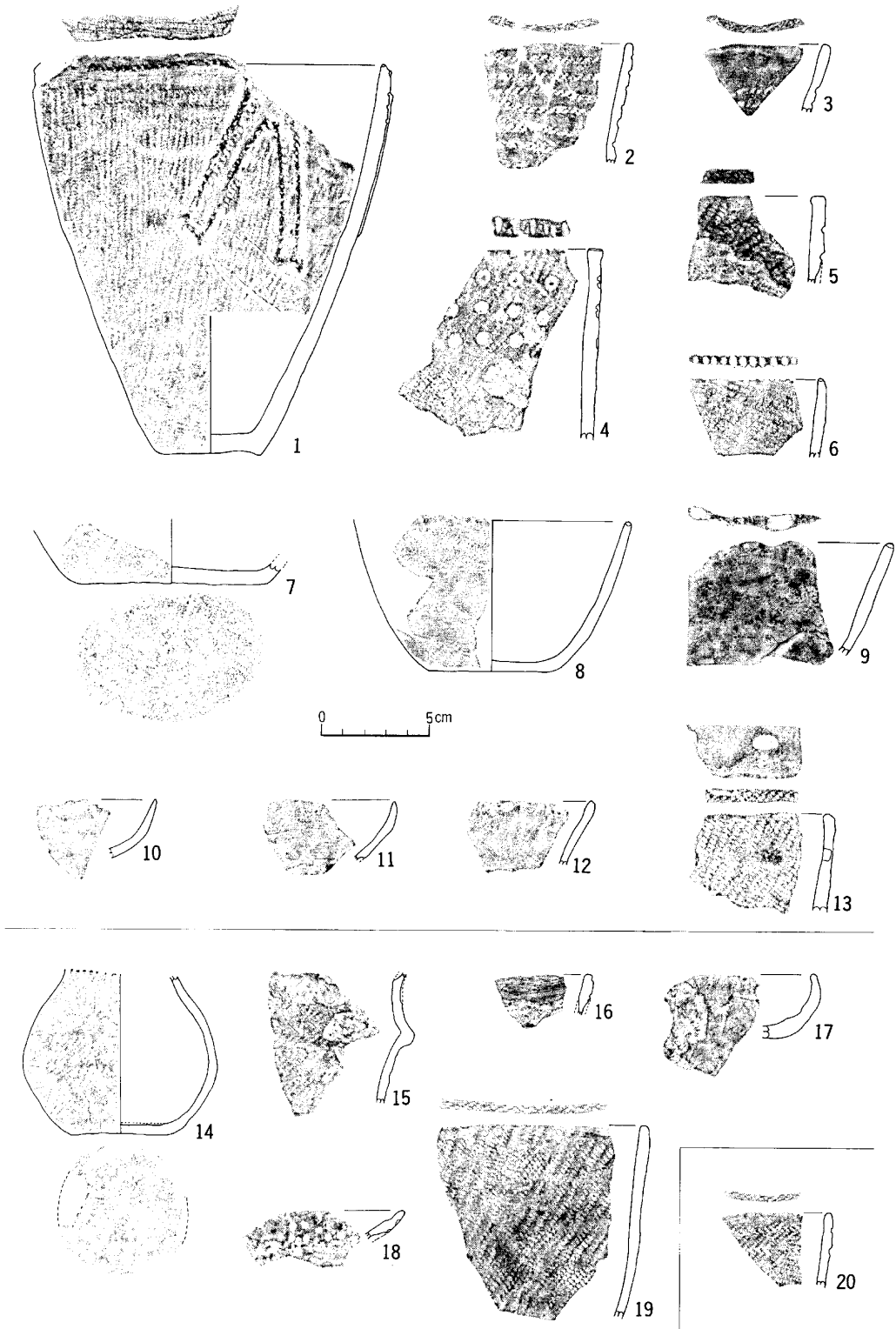
本ピットはI'59、60グリッドに位置する。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。時期は不明である。ピット275 bは直径約0.60mの小円形を呈し、壁高は確認面から約30cmである。



第414図 ピット271埋土(1~5)、ピット272埋土(6~12)、ピット274埋土(13)出土土器



第415図 ビット268 a埋土(1)、ビット269埋土(2・3)、ビット270埋土(4~7)、ビット270 a埋土(8)、ビット270 b埋土(9~11)、ビット271埋土(12)、ビット272埋土(13~17)、ビット275埋土(18)、ビット283床面(19)・埋土(20)出土石器・琥珀玉



第416図 ピット275床面(1)・埋土(2~13)、ピット275 a埋土(14~19)、ピット275 b埋土(20)出土土器

遺物 (第416図-14~20)

ピット275 a からは14~19が埋土から出土している。すべて縄文晩期中葉であろう。14は壺型土器。17、18は杯であろう。

ピット275 b からは20が埋土から出土している。縄文晩期中葉であろう。

ピ ッ ト 276

遺構 (第358図)

本ピットはI'56グリッドに位置する。規模は長軸約1.45m、短軸約1.15mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約50cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 277

遺構 (第274図)

本ピットはI'60グリッドに位置する。規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 278・278 a

遺構 (第274図)

本ピットはI'60グリッドに位置する。規模は長軸約1.05m、短軸約0.8mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

ピット278 a はピット278の東壁を切っている。規模は直径約0.40mの円形を呈し、深さは確認面から約23cmである。

遺物 (第417図-1~4)

ピット278からは1の擦文。2、3の縄文晩期が埋土から出土している。ピット278 a は4の内側に擦痕をもつ宇津内II a 式が埋土から出土している。。

ピ ッ ト 279

遺構 (第283図)

17 c 号の床面を切って構築されている。南壁側が発掘区域外にあるため検出できたのは北側の約2分の1である。規模は直径約1.30mの円形を呈すると思われる。壁高は確認面から約60cmである。時期は不明である。

遺 物 (第417図-5～8)

埋土出土。すべて縄文晩期である。

ピ ッ ト 280

遺 構 (第283図)

本ピットはI'61グリッドに位置する。規模は長軸約1.28m、短軸約0.80mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

遺 物 (第417図-9～13)

埋土出土。9は宇津内II a式。10も宇津内系であろう。11は浅い沈線間に円形刺突が施される。12は縄文。13は縄線文下に縄端圧痕文が施される。11～13は縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 281

遺 構 (第283図)

17c号の西側に位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。壁は底面から丸みをもって立ち上り、高さは確認面から約15cmである。

遺 物 (第417図-14)

埋土から縄文晩期の胴部片が多く出土している。14は縄文晩期中葉である。

ピ ッ ト 282

遺 構 (第283図)

17c号の西側に位置する。規模は直径約0.55mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。

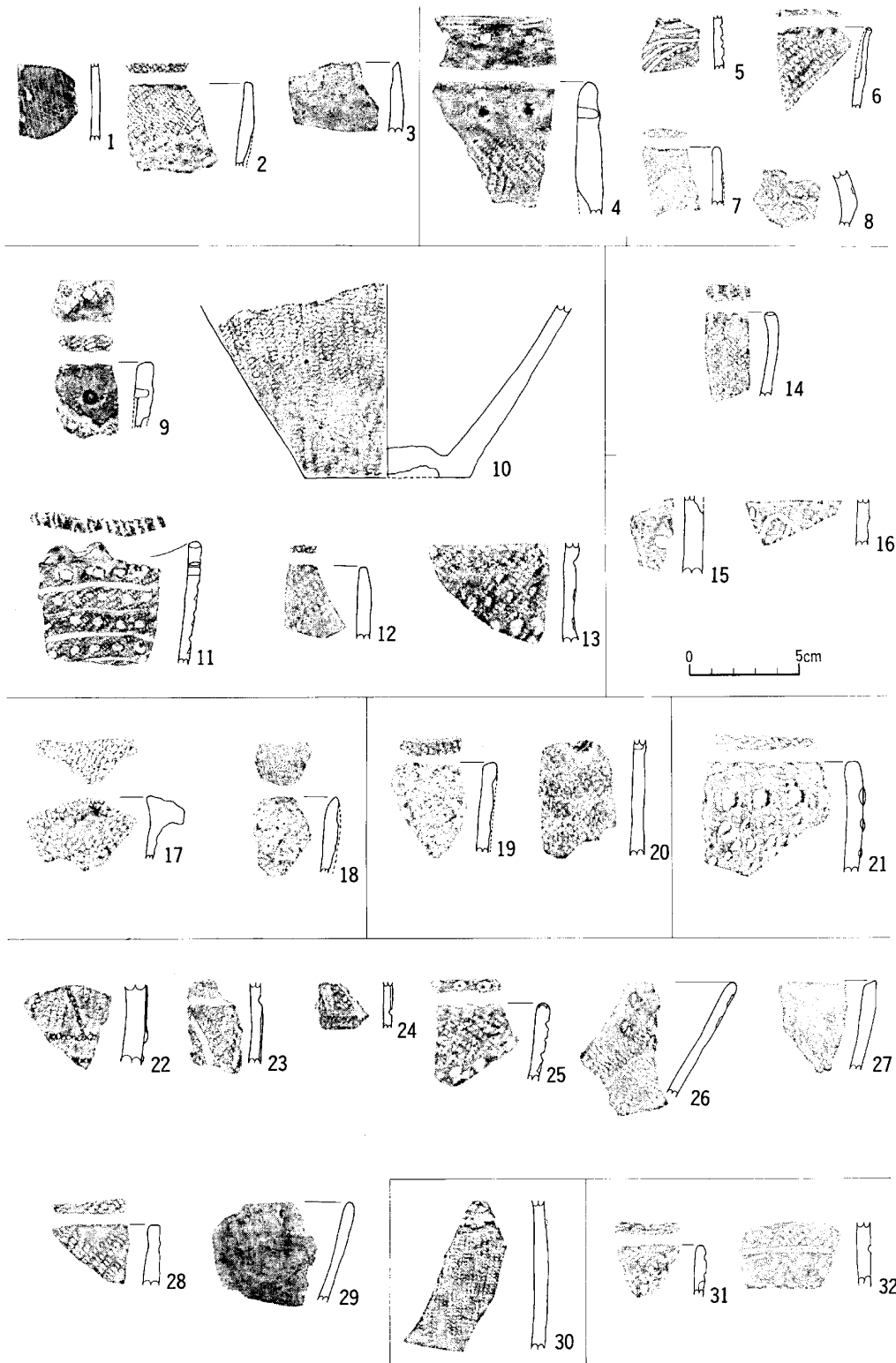
遺 物 (第417図-15・16)

埋土出土。15は続縄文前期。16は縄文晩期。

ピ ッ ト 283

遺 構 (第283図)

17c号の西側に位置する。規模は長軸約1.30m、短軸約1mの楕円形を呈する。壁は南壁が緩く立ち上る。高さは確認面から約30cmである。



第417図 ピット278埋土(1~3)、ピット278 a 埋土(4)、ピット279埋土(5~8)、ピット280埋土(9~13)、ピット281埋土(14)、ピット282埋土(15・16)、ピット283床面(17)・埋土(18)、ピット283 a 床面(19・20)、ピット285埋土(21)、ピット286埋土(22~29)、ピット287埋土(30)、ピット289埋土(31・32)出土土器

遺 物 (第417図-17・18、第415図-19・20)

17は床面出土。口縁部に把手状の張出しをもつ。続縄文前葉であろう。18も続縄文。
第415図-19は床面から出土した凹み石。20は埋土から出土した黒曜石製の側削器。

ピ ッ ト 283 a

遺 構 (第283図)

ピット283に北側を切られている。規模は直径約0.65mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

遺 物 (第417図-19・20)

床面出土。2点とも縄文晩期であり20は前葉であろう。

ピ ッ ト 284

遺 構 (第283図)

17c号の西側に位置する。規模は直径約0.45mの楕円形を呈する。壁は底面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約28cmである。遺物は出土していない。

ピ ッ ト 285

遺 構 (第283図)

本ピットは17c号の西側、J'62グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。皿状の浅いピットであり、深さは約14cmである。

遺 物 (第417図-21)

埋土出土。口縁下に1条の盛り上がりをもつ爪形文があり、その下部は半截状の施文具か幼児の爪を思わせる小さな刺突が雑に施される縄文晩期前葉であろう。

ピ ッ ト 286

遺 構 (第350図)

本ピットは32号竪穴の床面、I'55、56グリッドに位置する。東壁側が欠失しているものの直径約1mの円形を呈する。壁高は32号の床面から約15cmである。時期は不明である。

遺 物 (第417図-22~29)

埋土出土。埋土からは多量の土器が出土しているが9点を図示した。22は宇津内II b式。23、

常呂川河口遺跡

24は胎土に粗砂を多量に混入し、器壁も薄い。やや太めの沈線を弧状に施すようである。詳細な時期は不明である。25～29は縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 287

遺 構 (第358図)

本ピットはJ'54グリッドに位置する。規模は直径約0.42mの円形を呈する。壁高は確認面から約30cmである。時期は不明である。

遺 物 (第417図-30)

30は埋土から出土した。宇津内系であろう。

ピ ッ ト 288

遺 構 (第351図、図版111-4)

本ピットは25 a号竪穴の西壁側、J'53グリッドに位置する。規模は直径約1.20mの円形を呈し、深さは確認面から約20cmである。東壁際から朱色を呈した土の固まりと共に玄武岩製のナイフ、黒曜石の原石が出土した。朱色の土はベンガラのように赤色化しておらず粒子の細かいサラサラした土質を呈する。

遺 物 (第423図-1・2)

1は埋土から出土した片面加工ナイフ。玄武岩製。2は石刃鏃状の形態をもつ特徴的な石鏃である。主要剝離面側の縁辺部も加工がなされ打瘤部を除去し基部としている。黒曜石製。この他、1点は1方向から、2点は2方向から打割されている。拳大の黒曜石の原石4点が出土している。

ピ ッ ト 289

遺 構 (第358図)

本ピットはJ'56グリッドに位置する。規模は直径約0.88mの円形を呈する。壁高は確認面から約51cmである。底面にベンガラが認められた土壌墓であろう。時期は不明である。

遺 物 (第417図-31・32)

埋土出土。31は縄文晩期中葉。32は縄文後期縄濶式。

ピ ッ ト 290

遺 構 (第351図)

本ピットはJ'54グリッドに位置する。規模は直径約0.49mの円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。

遺 物 (第418図-1～5、第423図-3)

埋土出土。1は宇津内II b式。2、4は縄文晩期。3は擦文。5は縄文前期末葉のシュブノツナイ式。第423図-3は無茎石鏃。主要剝離面側は打瘤部を調整し、縁辺部のみ加工する。

ピ ッ ト 291

遺 構 (第358図)

本ピットはI'55グリッドに位置する。規模は直径約0.50mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

遺 物 (第423図-4)

埋土出土。黒曜石製の側削器。

ピ ッ ト 292

遺 構 (第351図)

本ピットはJ'54グリッドに位置する。集石1の下面から検出したもので規模は直径約0.55mの円形を呈する。壁高は確認面から約10cmである。時期は不明である。

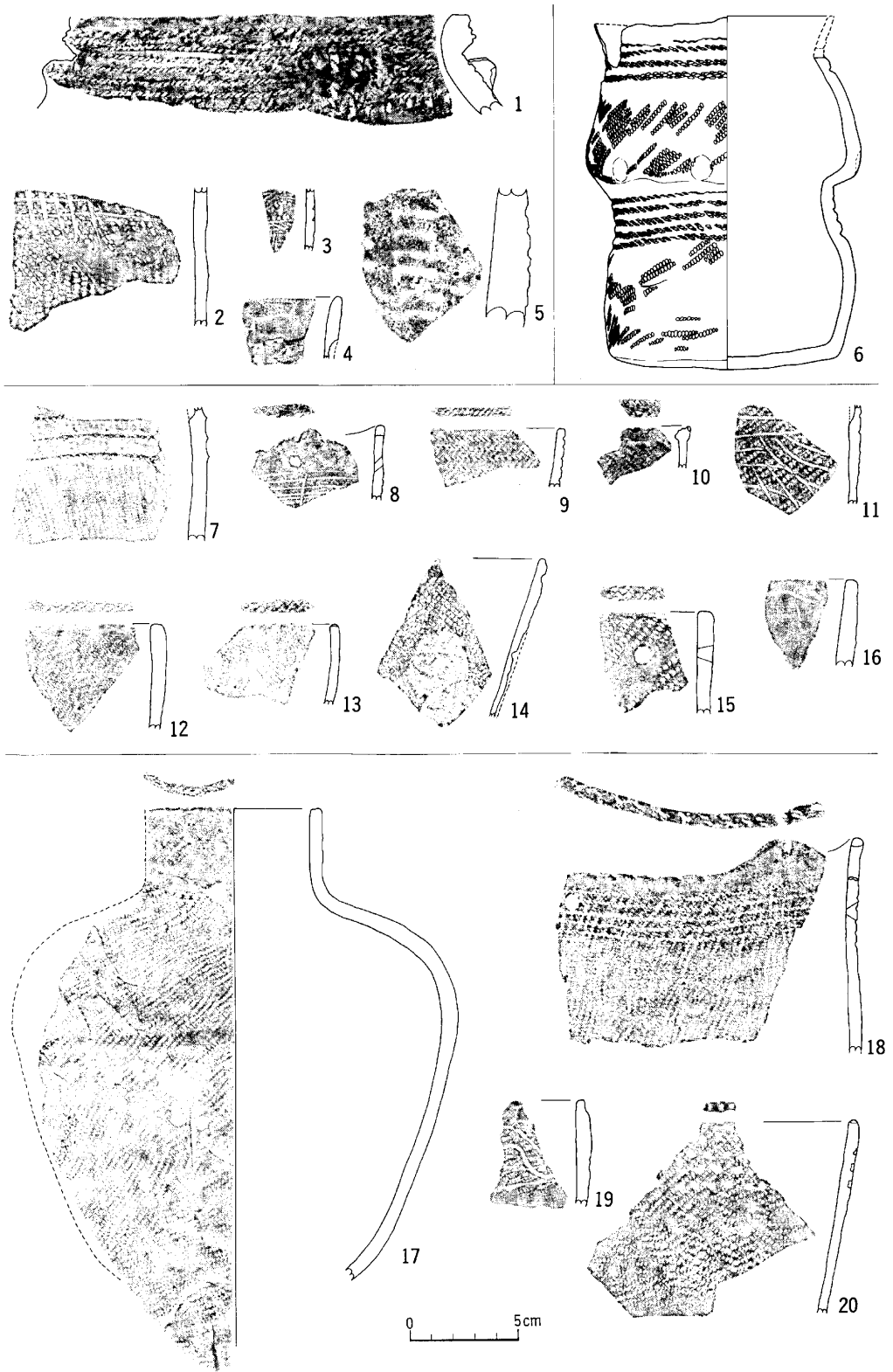
ピ ッ ト 293

遺 構 (第274図)

本ピットはH'60グリッドに位置する。平成4年9月の集中豪雨により遺構の大部分が破壊され、縄文前・中期包含層である黒色土に掘られた底面部がかろうじて残っている。規模は直径約0.70mの円形を呈する。壁高は確認面から約20cmである。

遺 物 (第418図-6、図版112-1)

床面出土。胴中央部が凹み、上半部が最大幅をもつ。口縁下に4条の縄線文と胴中央部の凹みに5条の縄線文を施す。上半部の最大幅部には指頭で押さえた凹みが連続して施されている。縄文晩期幣舞式である。



第418図 ピット290埋土(1~5)、ピット293床面(6)、ピット294埋土(7~16)、ピット295埋土(17~20)出土土器

ピ ッ ト 294

遺 構 (第283図)

本ピットはI'61グリッドに位置する。規模は直径約0.64mの円形を呈する。壁高は確認面から約31cmである。

遺 物 (第418図-7~16)

埋土出土。7は宇津内II b式。8~10は幣舞式。11~16は縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 295

遺 構 (第367、419図)

本ピットは23号竪穴の床面にある。規模は直径約0.95mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立上り、高さは23号竪穴の床面から約50cmである。

遺 物 (第418図-17~20)

埋土出土。17は約2分の1ほど復元できた。無文の口縁部は垂直に立ち上がり、胴部はLRの縄文を地文とする。肩部が大きく張り出した壺形土器である。縄文晩期後葉から続縄文前葉であろう。18は口縁部に山形突起をもち口唇部に縄文が押捺されたもので続縄文前葉であろう。19は沈線を不規則に施す。19、20は縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 295 a

遺 構 (第367、419図、図版112-2)

本ピットは23号竪穴の床面精査中にピット295、295 b、296とともに落ちこみを確認したもので、これらに直交する土層ベルトを設定し新旧関係を確認した。その結果、ピット295に西壁上部を削られているもののほぼ完全の状態を検出することができた。規模は長軸約0.90m、短軸約0.75mの円形を呈する。壁はやや斜めに立上り、高さは23号竪穴の床面から約32cmを測る。黄褐色を呈した遺存体は北壁際から中央部にかけて認められ、東壁側から南壁側にかけて土器が集中して出土した。土器は遺体の周辺に置かれ、石器は遺体の上部から出土している。土器はすべて埋土出土である。比較的大型の土器を最初に置き、次に小型の土器を置いている。これらの土器は遺体を埋葬後に副葬したものと判断される。土器は各種の形態があり11点に及ぶ。頭位は不明である。

遺 物 (第420図-1~7、第421図-1・2、第422図-1・2、第423図-5、図版113-1~11)

第420図-1~7は小型の土器であり、上面観が角形もしくは楕円形を呈するものである。1

は渦巻き状の沈線と縦の隆帯が垂下する。2は胴中央部がわずかにくびれる。くびれより下の胴下部を縄文、胴中央部を渦巻き状の沈線が施され、口縁下の細い横走沈線を意識的に現している。3も胴中央部がくびれる。縄線文、半截状施文具を主体とした文様構成であり、磨消しの無文帯をもつ。4は縄文を施す。5はコップ形の器形であり、縄文と沈線文が施される。6、7は船形土器である。口縁部の3個の小突起から「U」字形の隆帯が施される。文様は波状沈線、短沈線で構成される。7は口縁部の小突起から2本の隆帯が垂下し、曲線状の沈線が施される。第421図-1、2は大型土器である。1は胴中央部のくびれ部に縄線文と無文帯がある。くびれ部の下部は縄文、上部は波状沈線と短沈線が施される。2は口縁下部に波状沈線と短沈線があり縄文とは山形文で区画される。第422図-1は口縁部の片側に方形状の吊り耳をもつ中型土器。文様は縄線文、縄文、横走沈線で構成されそれぞれは波状沈線で区画されている。2は土器群の中で最も上部から出土した異形土器である。上面観は小型土器にみられる様な角形を呈する。頸部が大きくくびれておりその上部と下部では文様構成が異なる。上部は口縁部に2個の突起とそこから連続する耳状の張り出しをもつ。器面は眼部を意識した横方向の短沈線と鼻部を意識した縦方向の短沈線がありこれらは円形刺突文で強調されている。口唇部は無文帯に相当するようであり人面を意匠している。下部も人面を意匠している。両側に耳状の突起をもち、器面は眼部、鼻部を渦巻き状の沈線が施さ、口唇部は無文帯で表現している。

石器は第423図-5が埋土から出土している。黒曜石製の削器である。他に図示していないが玄武岩製の大型剝片1点が遺存体の上部から出土している。

小 括

本ピットは縄文晩期幣舞式の土壌墓である。頭位は不明である。埋土から小形土器4点、コップ形土器1点、船形土器2点、大型土器2点、中型土器1点、異形土器1点の合計11点セットで出土している。

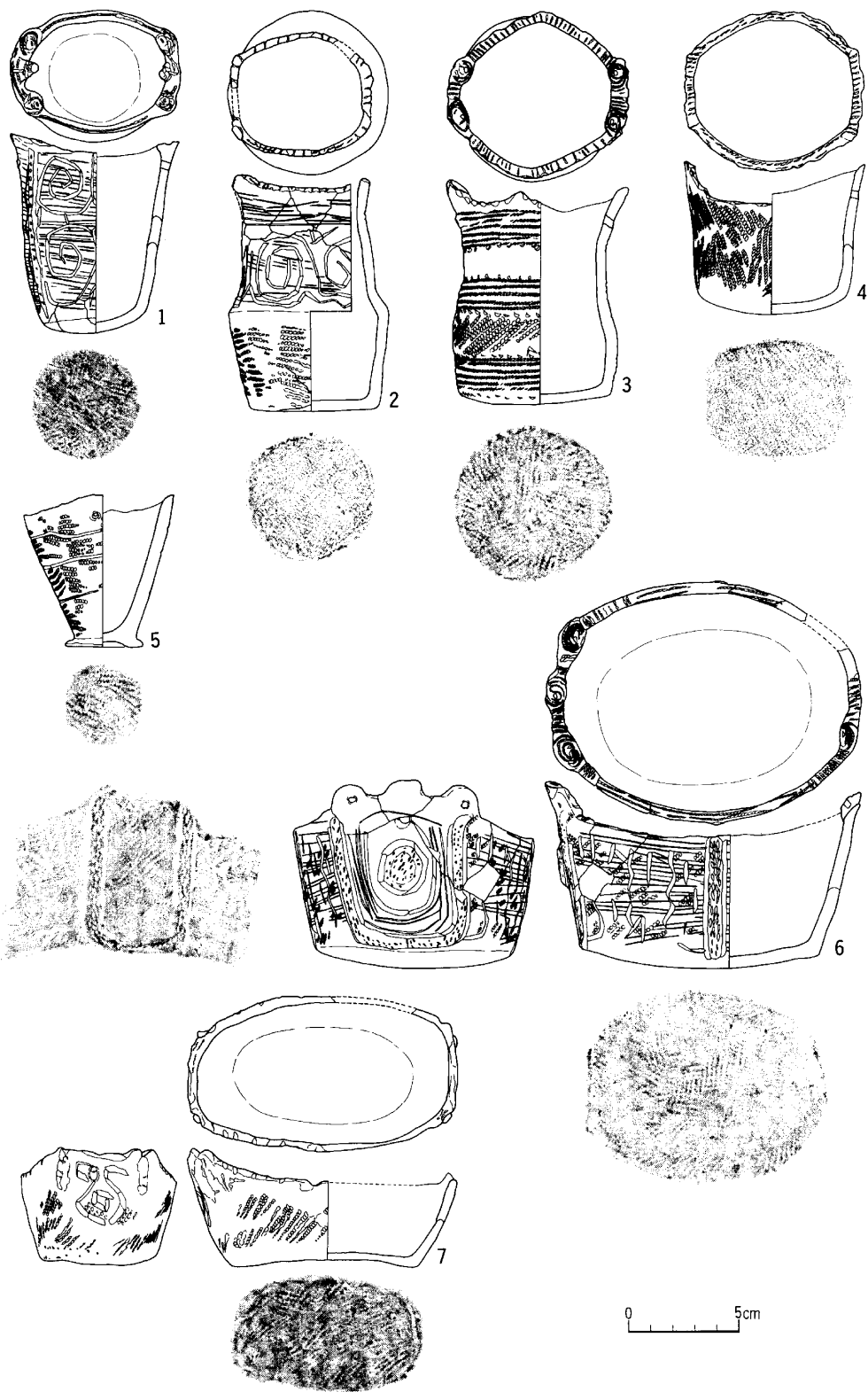
ピ ッ ト 295 b

遺 構 (第367、419図)

本ピットは北壁をピット295、西壁をピット296に切られているものの規模は直径約1mの円形を呈すると思われる。壁高は23号の床面から約30cmである。時期は不明である。

遺 物 (第422図-3・4)

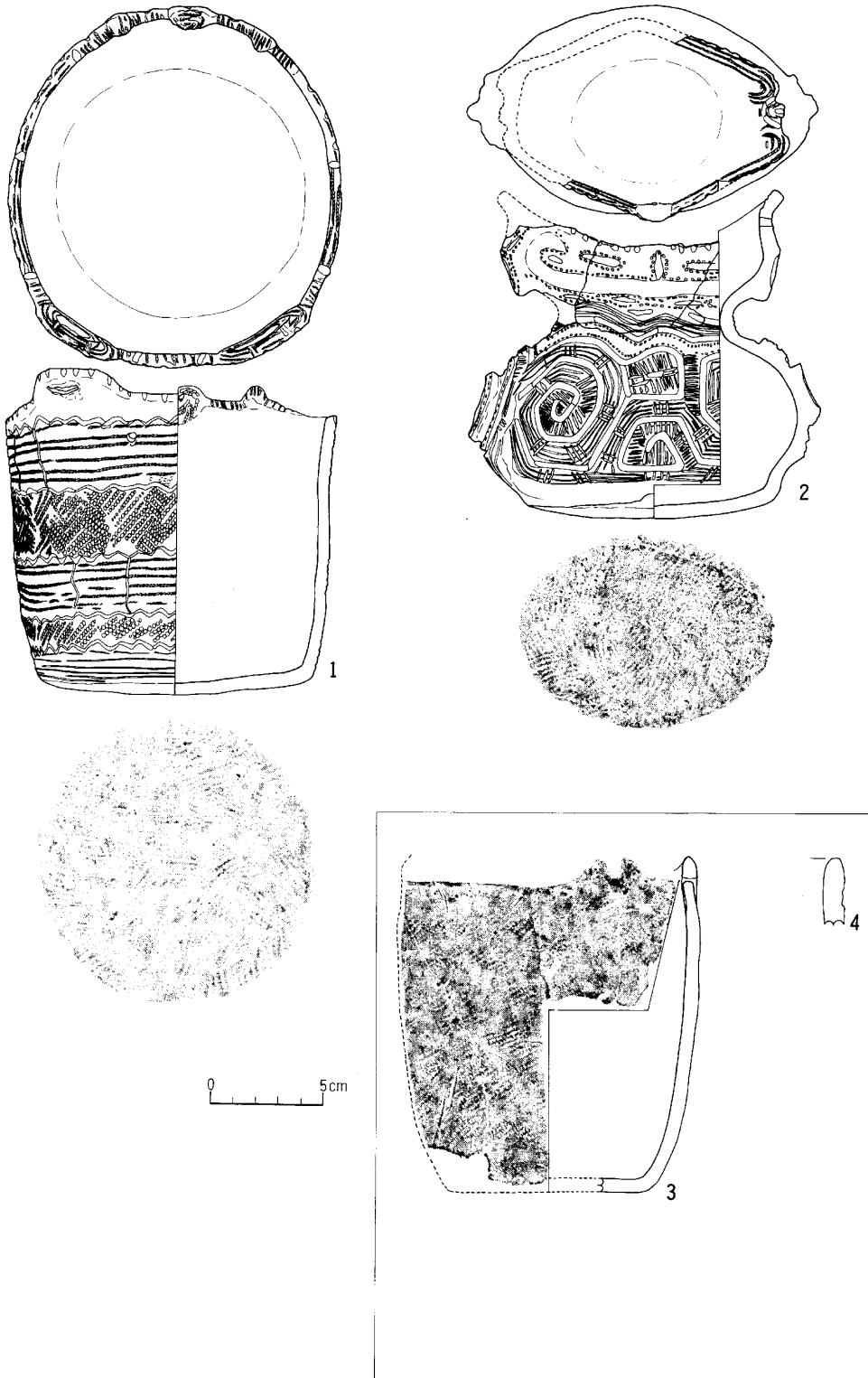
埋土出土。3は口縁部に刻みのある突起を4個所にもつ。続縄文前葉であろう。4は縄文後期。



第420図 ピット295a 埋土(1~7)出土土器



第421図 ピット295 a 埋土(1・2)出土土器



第422図 ピット295 a 埋土(1・2)、ピット295 b 埋土(3・4)出土土器

ピ ッ ト 296

遺 構 (第367、419図)

本ピットは23号竪穴の床面にある。規模は直径約1mの円形を呈する。壁高は23号竪穴の床面から約25cmである。遺存体は黄褐色を呈し、東壁側から歯骨が検出された。時期は不明である。

遺 物 (第424図-1～6)

埋土出土。1は器壁は比較的薄く、縄線文間に突瘤が施される。宇津内II a式。2は続縄文前葉。3～6は縄文晩期中葉。

ピ ッ ト 297・297 a

遺 構 (第367図)

ピット297は23 a号の床面に位置する。竪穴とピットの切り合い関係を確認することはできなかった。規模は長軸約1.05m、短軸約0.8mの楕円形を呈する。壁高は23 a号の床面から約29cmを測る。時期は不明である。

ピット297 aはピット297に南壁側を切られているものの形態は楕円形を呈するようである。規模は長軸約0.8m、深さは約17cmを測る。時期は不明である。

遺 物 (第424図-7～12、第423図-6～8)

ピット297は埋土出土。7は緑ヶ岡系。8は縄文晩期後葉から続縄文前葉であろう。9～11は縄文晩期中葉。11は杯である。12は同前葉。第423図-6は両面加工ナイフ。7は軽石製の浮き。

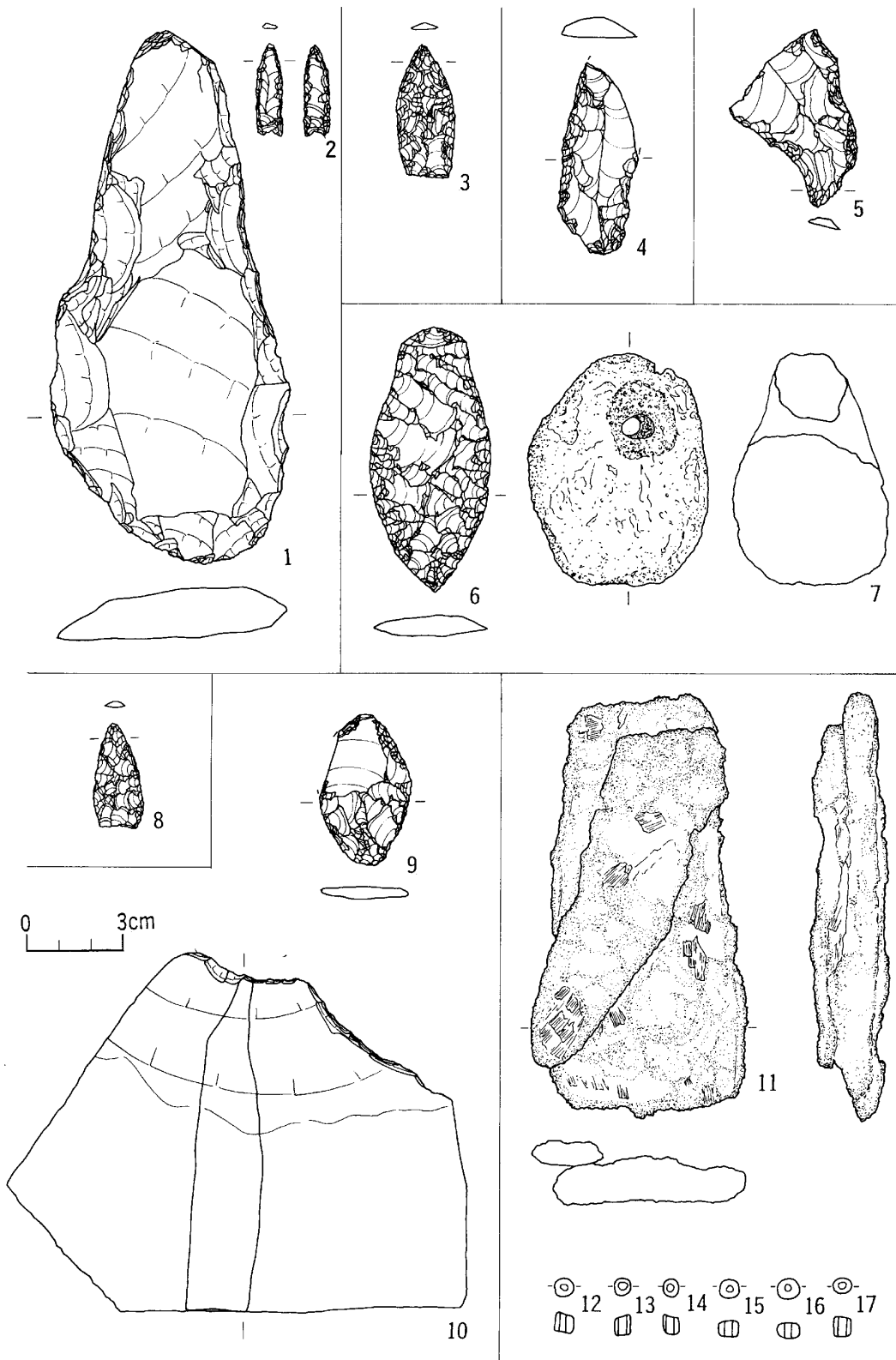
ピ ッ ト 297 b

遺 構 (第367図)

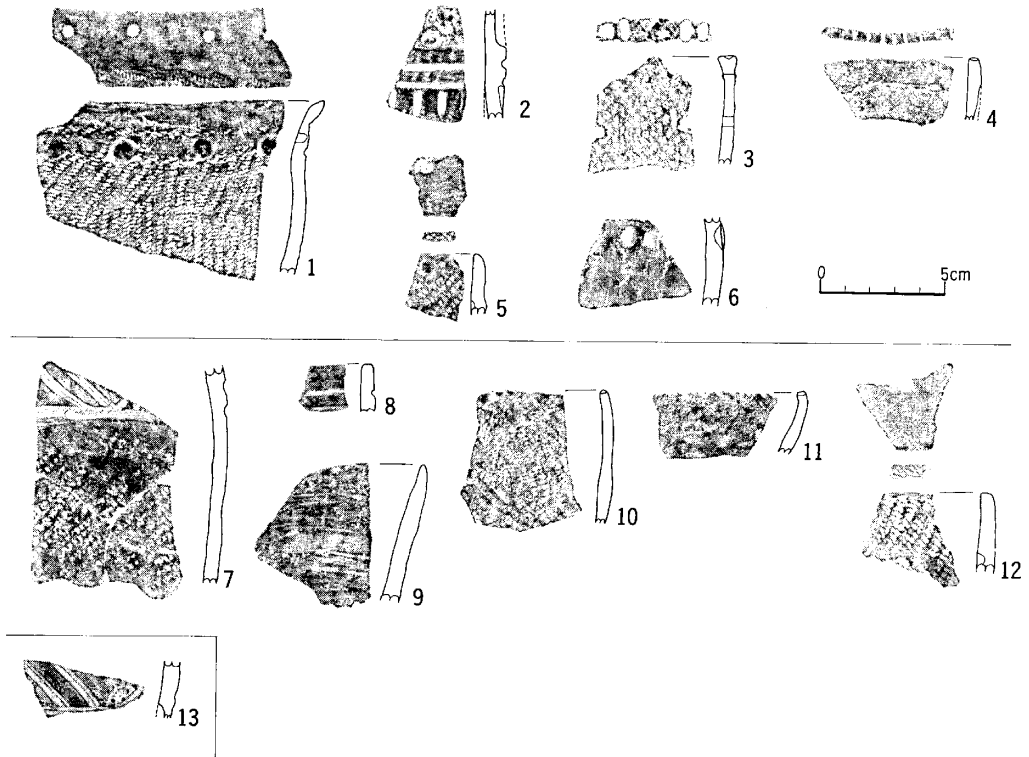
ピット297に北壁上部を切られている。規模は直径約0.47mの円形を呈する。壁高は確認面から約44cmである。時期は不明である。

遺 物 (第424図-13、第423図-9・10)

ピット297 bからは13が埋土から出土した。7と同一個体と思われる。石器は第423図-9の削器と10の石皿が埋土から出土した。



第423図 ピット288埋土(1)、焼土内(2)、ピット290埋土(3)、ピット291埋土(4)、ピット295 a 埋土(5)、ピット297埋土(6・7)、ピット297 a 埋土(8)、ピット297 b 埋土(9・10)、ピット300床面(11)、人骨頭部(12~17)出土石器・鉄製品・ガラス玉



第424図 ピット296埋土(1~6)、ピット297埋土(7~12)、ピット297b埋土(13)出土土器

ピ ッ ト 298

遺 構 (第388図)

本ピットはC'72グリッドに位置する。規模は直径約0.52mの小円形を呈する。壁高は確認面から約29cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 299

遺 構 (第388図)

本ピットはC'72グリッドに位置する。規模は直径約0.60mの円形を呈する。壁高は確認面から約21cmである。時期は不明である。

ピ ッ ト 300

遺 構 (第425図、図版114-1)

本ピットは平成3年度の調査区域にある。当時この周辺のグリッドのみ手をつけておらず平成6年度の調査で発見し483のピット番号を付けていた。今回、平成4年度までの分を報告するにあたりピット番号を300に変更した。本来は本ピット周辺の3基のピットも報告しなければならないが紙面の都合もあること。また、このピットが副葬品に鉄器、ガラス玉をもつなど重要な点が多いので本ピットの報告にとどめる。

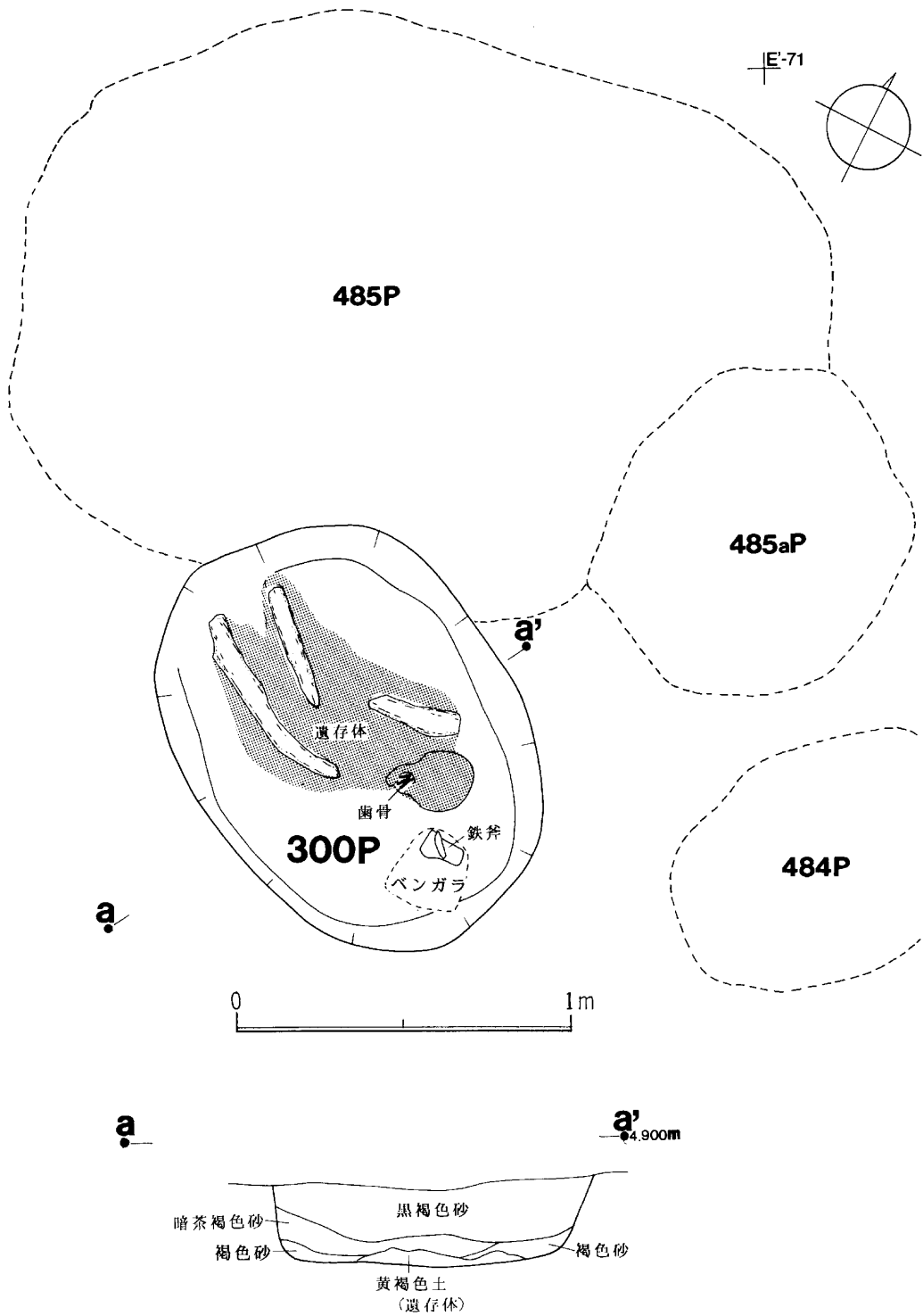
表土を剝土した段階で黒褐色砂の落ちこみを確認した。規模は長軸約1.3m、短軸約1mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約23cmを測る。埋土は3層に分層され第425図の遺存体は茶褐色砂層を剝土した段階で検出した。大腿骨も認められたが遺存は悪く取り上げるに至らなかった。大腿骨の幅は約6～7cmを測る。頭部は東方向にあり顔面は南を向く。歯骨が著しく磨滅している。屈葬である。頭部を検出中、表の眼部から8点、裏(床面側)の眼部から9点のガラス玉が出土し、さらに人骨鑑定の際に頭部内から3点出土している。頭部から10cm離れた東壁際にはベンガラが固まっており中から第423図-11に示す鉄斧と刀子が重なって出土した。頭部の遺存が比較的良いのは鉄器の影響によるものと推測される。

遺 物 (第423図-11～17、図版114-2・3)

11は床面出土。刃部幅5.5cm、柄部幅4.5cm、長さ12.5cmの平柄鉄斧である。刀子は平柄鉄斧と斜めに密着している。長さ約11cm、幅約3cmである。2点の鉄器には木質片が付着している。12～17は青紫色を呈したガラス玉であり総数20点出土している。

小 括

本ピットの規模は長軸約1.3m、短軸約1mの楕円形を呈する。葬法は東頭位の屈葬である。ガラス玉は両眼球部に納められた可能性がある。土器等がないことから詳細な時期は不明であるがガラス玉の存在すること。本遺跡の後北C₁式のピット埋土に黒色土が入り込む点、頭位が共通することから後北C₁式頃の土壌墓と判断される。他の後北C₁期の土壌墓が北側、後北C₂期の土壌墓が西側に分布しているのに対し、本土壌墓はこれら2時期の墓群から離れた位置にある。副葬品のガラス玉は眼部に収められた可能性が高く、本時期に類例のない平柄の鉄斧をもつこと、歯が著しく磨滅している点から判断してシャーマン的な人物が埋葬されたものと推察される。なお、人骨の所見については付編Iで報告されている。



第425図 ピット300平面図

第VI章 その他の遺構

埋 甕 1

遺 構 (第283図、図版115-1)

本埋甕は23号竪穴の埋土、J'60グリッドに位置する。掘り方の規模は直径約0.73mの円形を呈し、深さは確認面から約40cmである。土器はやや西側に傾くもののほぼ正立の状態出土した。

遺 物 (第426図、図版115-2)

口径約28.5cm、器高約49.5cmの大型土器である。全体の器形は底部がすぼまり、胴上部が大きく張り出している。口縁部は内湾し、突瘤文と縄線文が施された続縄文字津内II a式である。口縁部の一部が割れているものの無傷の状態出土した。内部から微細な骨片が検出されている。

小 括

23号竪穴は形態、内部構造からオホーツク文化の竪穴と判断しているがこの埋甕は続縄文字津内II a式であり、明らかに新旧関係が逆転している。どのような理由によるものか定かでないがオホーツク文化期以後の人々が偶然発見した土器を埋め戻したのものかもしれない。

埋 甕 2

遺 構 (第353図、図版115-3)

本ピットは25 a号竪穴の北壁側の埋土、J'53グリッドにある。掘り方の規模は直径約0.56mの円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり高さは確認面から約70cmである。土器は中央部から割れており、上部が下にずれ落ちた状態で出土した。

遺 物 (第427図)

口径約29.5cm、器高約48cmの大型土器である。口縁部に突瘤文と2個の小突起を持つ。縄線文とは横走する擬縄隆帯により区画され、2本単位の擬縄隆帯が垂下する。続縄文字津内II a式である。

埋 甕 3

遺 構 (第367図、図版116-1)

本ピットは34号竪穴の床面を切り込んで構築している。掘り方の規模は直径約0.60mの円形

を呈する。壁高は34号の床面から約31cmである。

遺物 (第428図)

口縁部は欠失しているため正確な口径は不明であるが推定21cmと思われる。器形は宇津内II a式と異なり、口縁部が狭く外反するようである。胴下部は大きく張出し、底部はやや丸みをもち不安定である。器面は縦走縄文を地文とする。

小括

時期は埋甕1、2にみられた宇津内II a式よりも古いと思われる。続縄文前葉であろう。

埋 甕 4

遺構 (第203図)

36号竪穴の床面、J'71グリッドに位置する。掘り込み面を正確に確めることはできなかったが、竪穴よりは新しいのであろう。掘り方の規模は直径約50cm、深さは36号の床面から約40cmである。

遺物 (第429図、図版116-2)

埋甕3の土器と同様な器形である。口縁部は欠失するものの口径約20cm、高さは約42cmである。胴部が丸く張り出しており最大部で約42cmである。器面は器面は縦走縄文を地文とする。

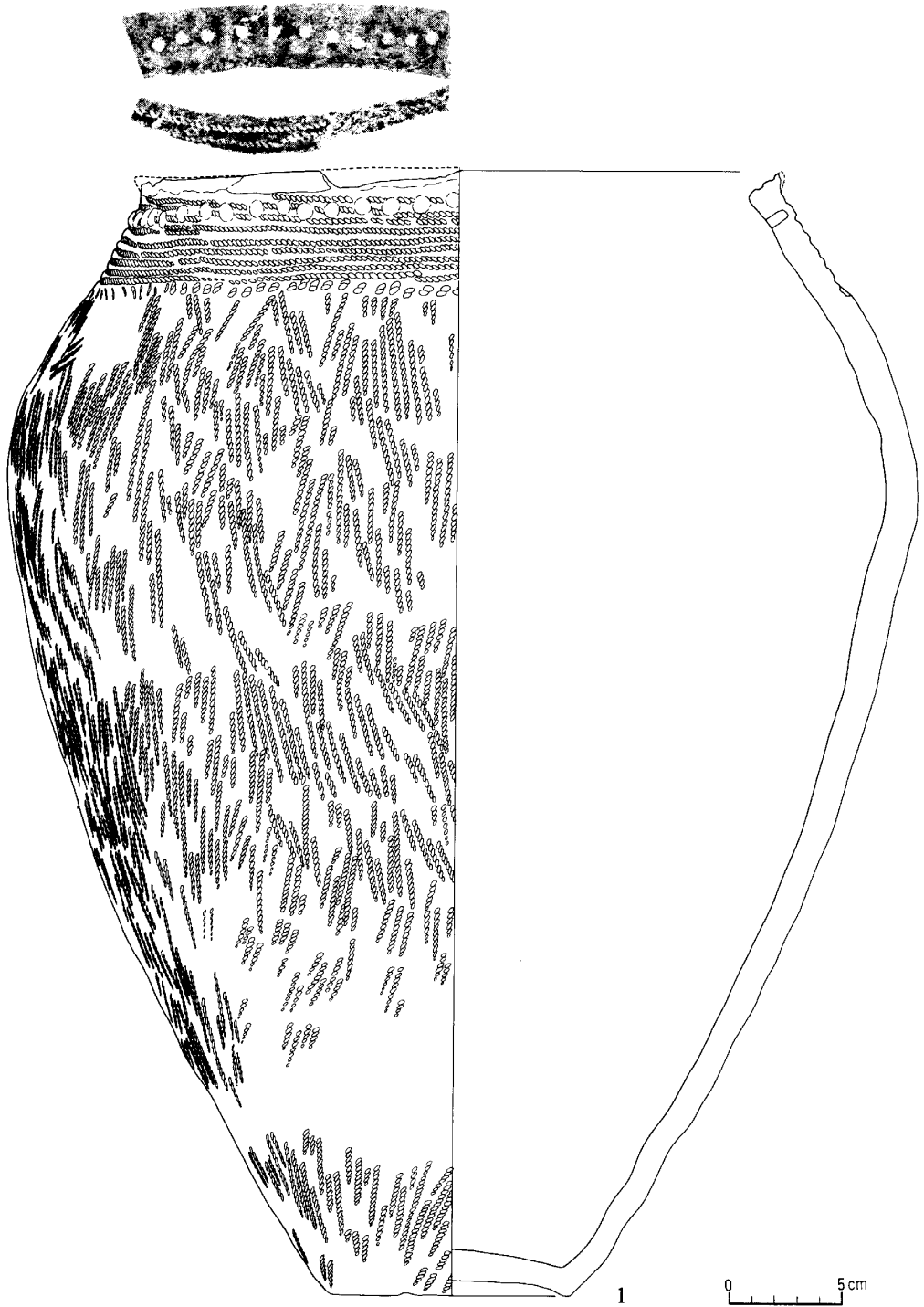
小括

時期は埋甕3と同様の続縄文前葉であろう。

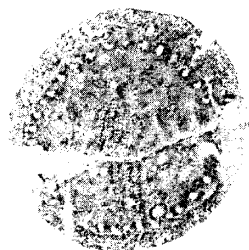
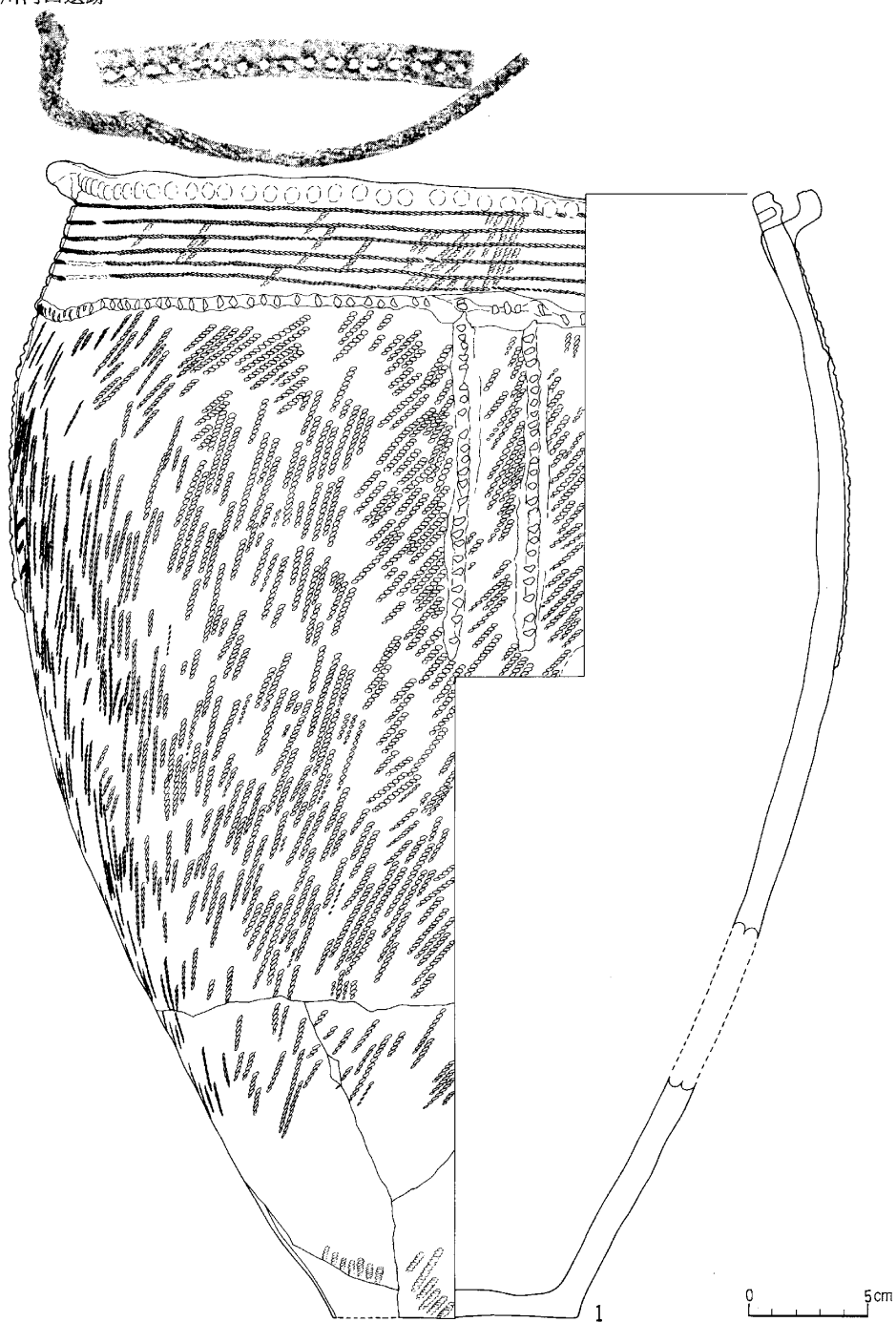
配 石 1

遺構 (第353図、図版117-1)

26 a号竪穴の埋土、I'53グリッドに位置する。表土を剝土した段階で礫面を検出した。礫は直径約10～20cmの円礫を用いている。円礫は直径約1.7m、深さ約30cmの円形ピット内に配置されている。円礫は南側が中心にあり北側は認められないもののほぼ円形を呈するようである。南側では壁面から底面まで2～3段に積み重ねた状態で検出した。円礫の表面はそれほど赤変していないが円礫の上部、下部に炭化物片が多量に含まれている。続縄文期で礫を用いる遺構に集石がある。この場合、角礫を用いるのが本遺跡の特色であり、円礫を用いるのは本例と次の配石2だけである。栄浦第二遺跡では続縄文後北系の円礫を用いた集石が3基検出されているが、円礫は拳大ほどの大きさのものであり、構造をみても本例とは明らかに異なるようである。時期は続縄文の可能性のあるものの詳細は不明である。



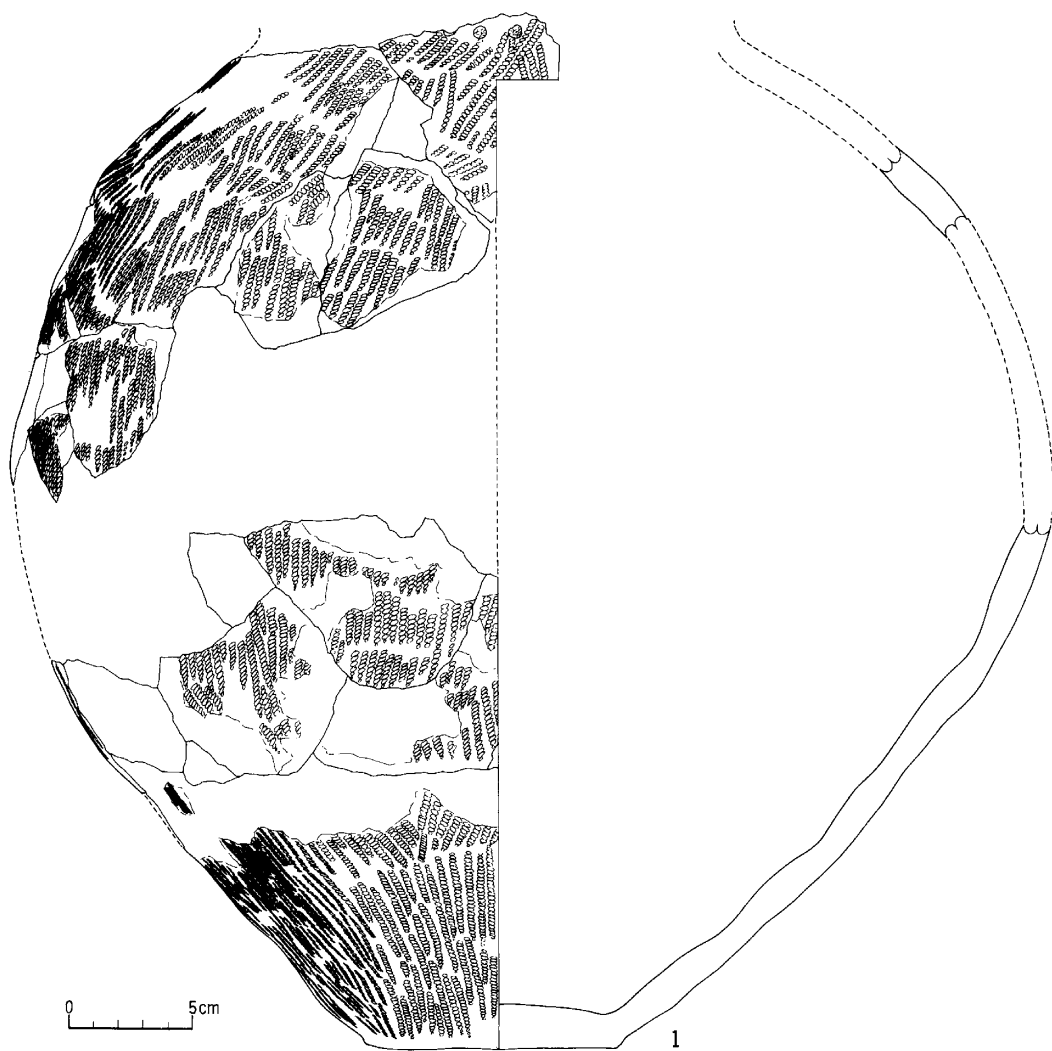
第426図 埋甕1



第427図 埋葬 2



第428図 埋甕 3



第429図 埋葬 4

配 石 2

遺 構 (第358図、図版117-2)

J'55グリッドに位置する。表土を剝土した段階で検出した。礫はさらに東側の発掘区域外に入り込んでいるため幅1mほど拡張した。礫は直径約10~30cmの円礫を用いている。配石1にみとめられた形態、下部構造をもたない。円礫は南北約1.7mの短い伸びであるが概ね2列に配列している様である。近接して後北C₂式の完形品が同一レベルから出土している。

集 石 1

遺 構 (第353図)

J'54グリッドに位置する。II層上面の茶褐色砂の上面から検出した。砂岩の角礫を用いており直径約0.80mの方形状を呈する。角礫は火熱を受けている。角礫の下面に掘り込みは持たない。近接して続縄文字津内II a 式の完形品、縄文晩期の土器が出土している。縄文晩期の集石はいまのところ確認されておらず、最も近接している続縄文字津内II a 式が本集石に伴う時期と思われる。

集 石 2

遺 構 (第369図)

H'73グリッドの33号竪穴の埋土内に位置する。砂岩の角礫を用いており規模は直径約0.6mの方形状を呈する。角礫の表面はわずかに火熱を受け赤変している。角礫の下面に掘り込みは持たない。

集 石 3

遺 構 (第358図)

I'57、J'57グリッドに位置する。底面に直径約90cm、深さ約20cmのピットをもち上部から中部にかけて砂岩の角礫を多量に用いている。上部の角礫が比較的大きいものを用いているようである。角礫下面から底面の茶褐色砂には多量の炭化粒が含まれている。角礫は火熱を受けている。

集 石 4

遺 構 (第358図)

J'55グリッドに位置する。32号竪穴の床面を切り込んで構築しているもので、底面に長軸約1.66m、短軸約1.30m深さ約20cmのピットをもつ。礫は小型の角礫を主体としており大型は少ない。礫の密度も集石3にみられたほど顕著でない。角礫は火熱を受けている。

屋 外 炉 1

遺 構 _____

D'66グリッドに位置する。表土を剥土した段階で検出した。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mの方形を呈した石囲み炉である。礫は長方形の角礫3点、円礫1点を用いている。内部は火熱を受け扁平な角礫が認められる。周辺から縄文文字津内式の土器が出土しておりこの時期のものと思われる。

特殊遺構1 (粘土貼り遺構)

遺 構 (第282図)

粘土はG'66グリッドに広く貼られている。各時期のピット、竪穴等に切られているため正確な規模は不明であるが概ね長軸約2.70mを測る。粘土の厚さは2cm程度である。平面図に示す通りほぼ中央部に長軸約1.65m、短軸約1.15m、深さ約30cmの落ち込みがある。この落ち込みの周辺は焼けており、埋土には焼土粒子が多量に含まれる。貼り床面、中央部の落ち込みからは縄文晩期中葉の刺突文系の土器が出土している。

粘土を貼った遺構は栄浦第一遺跡から発見された縄文前期末葉の円形石囲み炉群、オホーツク文化期の竪穴住居の貼り床が知られているが縄文晩期中葉の例は認められない。今回、報告していないが48号竪穴は貼り床をもった浅い皿状の住居である。床面からはやはり縄文晩期中葉の土器が多量に出土している。

掘 立 柱 2・3

遺 構 (第349図)

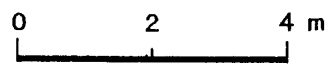
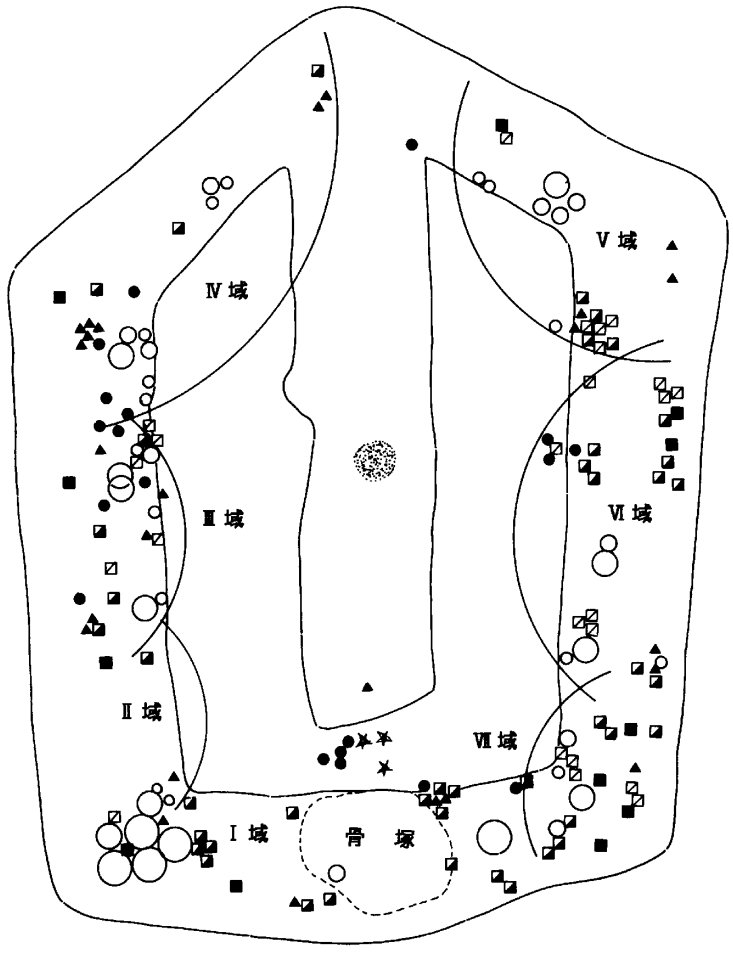
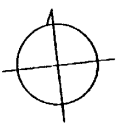
掘立柱跡はB69、A'69グリッドに位置する。B69グリッドの掘立柱跡はほぼ等間隔に4本配置されている。規模はいずれも直径約3.70～3.84mの方形を呈し、深さは約80～90cmを測る。

A'69グリッドの掘立柱跡も等間隔に4本ある。規模はいずれも直径約3～3.80mの方形である。深さは約60～80cmを測る。

この掘立柱1は第2次形成地と第3次形成地の間の浅い溝状の窪地と平坦にかけてあり、掘立柱2は平坦面にある。第3次形成地の基本土層は第II章にも記述しているが次の通りである。

- I層 表土 (層厚10～20cm)
- II層 褐色砂 (層厚5～20cm。粒子の細かい砂質土)
- III層 礫 (層厚10～18cm)
- IV層 黒色砂 (層厚3～10cm。第2次形成地と第3次形成地の間の浅い溝状の窪地からグリッドまでの範囲に堆積している。それ以降IV層は欠落しV層の褐色砂が堆積する。オホーツク文化期ソーメン状貼付文・藤本e群包含層)
- V層 褐色砂 (層厚5～12cm。粒子の粗い砂質土)
- VI層 黒色砂 (層厚2～4cm。後北C₂・D包含層)

擦文文化の竪穴は表土を剝土したII層褐色砂で確認したものであり、確実にII層から切り込み深いものでVI層まで達している。II層を剝土した段階では掘立柱は確認できずV層の褐色砂を剝土した段階で発見した。また、続縄文期のピット169を切り込んで構築しており掘立柱2、3はオホーツク文化期のソーメン状貼付文の時期と判断できる。



凡 例

- | | | | |
|-----------------------|-------|-------------------------------|------|
| ○ (large circle) | 特大型土器 | ✱ | 青銅製品 |
| ○ (medium circle) | 大型土器 | ● | 骨角器 |
| ○ (small circle) | 中型土器 | ◻ (square) | 石 鎌 |
| ○ (very small circle) | 小型土器 | ◻ (square with diagonal line) | 削 器 |
| ▲ | 鉄 器 | ■ | 木 製品 |

第430図 15号竖穴内各種遺物の出土分布図

第Ⅶ章 ま と め

1. 地形と遺構

本遺跡は常呂川河口から約700mの距離にある。標高は4～5mの低地域である。本遺跡の地形上の特色は第Ⅱ章でもふれたが、河川の氾濫等による土砂の堆積によるせり出しで形成されたことである。大きくみると第1次面～第3次面に分けることができる。第1次面は縄文前期末・中期、第2次面は縄文後期の包含層を挟み、縄文晩期、続縄文(前葉～後北C₂・D)、擦文、オホーツク文化がある。第3次面はオホーツク、擦文、後北C₂・Dの(地床炉)遺構・遺物がわずかに認められ、各時期の遺構・遺物からある程度のせり出し時期を推測することができた。おそらく第1次面から第3次面は時間的に順次形成されたのであろう。第2次面と第3次面とは形成までにある程度時間差があったと考えられる。第3次面では第2次面に認められた後北C₂・Dの土壇墓は全く見られず焼土、骨粉、土器が出土するだけである。第3次面は後北C₁の頃はまだ形成されず、後北C₂の時期に形成されたのであろう。

擦文期の竪穴の場合は第2次面、第3次面及びそれよりも低地の第4次面にある。第4次面は擦文以外の遺構は検出されていない。各面における擦文期の竪穴の配置をみると東西方向に1～2軒並列した状況で伸びている。

2. 擦文文化期

本時期の竪穴は25軒、小竪穴3軒を調査した。第4次面では1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、13号の12軒。3軒の小竪穴がある。第3次面は20、37、38、39の4軒、他に今回報告していないが50号がある。第2次面は12、17、22、28、29、30、33、35、40の9軒。各面の竪穴の時期は宇田川編年後期がほとんどである。平成5年度の調査で藤本編年a～b期、宇田川編年前期の土器が包含層から出土しているが遺構は認められていない。擦文期では後期を主体とした集落であることが明らかであるが、西側の大部分が来年以降の発掘地として残っているため全体としてどの程度の規模になるのか不明である。第2次面から第3次面が形成されたことにより竪穴の占地も変化しているのであろう。いずれにしても全体の調査が終了したいとまとめることとしたい。

1号～11号、13号、小竪穴1号～3号は第4次面とした標高2～3mの低地に構築されている。東西に伸びる微高地にあるもので時期を確認できるのは1、3、7、8、9号、小竪穴3号である。1号は藤本編年h期、宇田川編年後期。他の6軒は藤本編年i～k期、宇田川編年晩期に比定される。竪穴の形態をみるとカマドを持つものと、持たないものがある。カマドを持つのは1、2、3、7、8、9、12号。カマドを持たず炉だけを持つのは4、5、6、13

号。小竪穴3号。小竪穴としたものは直径約2.50m前後のものであり1、2、3号の3軒である。攪乱によりカマドの有無が確認できなかったのは10、11号。カマドを持つ竪穴と持たない竪穴を比較すると持たない竪穴の掘り方は浅く、遺物の出土は少ないようである。小竪穴も掘り方が浅い。カマドを持つ竪穴、炉だけを持つ竪穴の軸がほぼ一定であるのに対し、小竪穴の軸は不規則である。規模の上からも住居とするには問題がないわけではないが小竪穴3号には炉跡、完形土器も出土しており一時的な仮住居として利用されたのであろう。

第3次面の竪穴は、20号、37号、38号、39号、50号がある。5軒ともカマドを持ち、分布は台地と併行し、東西方向に直線に並ぶ傾向をもつ。遺物量は少ないものの宇田川編年後期に比定できる。

第2次面の竪穴は12号、17号、22号、28号、29号、30号、33号、35号、40号やや不確定であるが42b号がある。30号は小竪穴に属するものでカマドを持たないが他は全てカマドをもつ。12号、17号は宇田川編年前期に比定できるかもしれないが他は後期のものである。12号、17号を除きカマドの方向はほぼ東側を向き分布は第3次面と同様、東西方向に直線的に並ぶ。

本遺跡における擦文文化の竪穴は第4次～第2次形成地面上において東西に伸びる分布傾向をもつ。竪穴間の同時併存については今後の課題としたい。

擦文期の土壌墓は15号竪穴内にピット27、28、33、33a、49の5基が構築されている。竪穴に堆積している摩周b火山灰を切っている。土壌墓の形態は長楕円形を呈し、5基は楕円状に配置されている。底面は15号竪穴の貼床も完全に切っている。副葬品は中型土器と高杯がある。施文は丁寧に行われている。時期は擦文後期に比定される。15号竪穴の西にあるピット156、157も擦文後期である。この2基は15号竪穴の5基とは長軸が短く、短軸が広がるもので形態がやや異なる。

3. オホーツク文化期

第2次形成地に構築されている。本遺跡における当該期の遺構に竪穴、ピットがある。竪穴は14号、15号、16号、23号、45号の5軒であるがそれぞれは規模、形態、内部構造で大きな差異が認められる。ピットは118、173、245の3基がある。

まず竪穴についてまとめることにする。14号竪穴は規模が長軸約10.8m、短軸約9.8mの六角形を呈する。長軸と短軸がほぼ同じ長さの寸詰まりの形態である。骨塚、方形の石囲み炉をもつもののこの文化独特の貼床は認められない。土器が出土していないため詳細な時期は不明であるが第42図-62の青銅製鐸が特筆される。

15号竪穴は本遺跡で発見されたオホーツク文化期の中で最も規模が大きく長軸約14.3m、短軸約9.2～10.6mの六角形である。14号と比較して長軸が長いタイプである。床面積は125㎡である。火災を受けた竪穴住居であり粘土を用い「コ」字状に貼られた床は赤変している。壁板は内側に倒れ、その上に白樺樹皮が木釘を伴って検出された。石囲み炉は中央部にあったと思

われるが近代の破壊をうけ礫は散在している。遺物は土器、石器、骨角器、鉄器、青銅製品、木製品等があり従来調査されたどの堅穴よりも豊富である。しかも出土のあり方に一定のパターンをもっている。

各種の遺物の中で最も特徴的な出土パターンを示すのが土器である。土器はソーメン状貼付文（藤本 e 群）主体であるが擬縄貼付文（藤本 d 群）もみられる。土器は特大型・大型・中型・小型土器がセットになりほぼ等間隔に出土している。総数44個体に及ぶ。特大土器は6個体出土している。5個体は骨塚の西側から伏せた状態で出土し、1個体は埋土出土である。これらの特大土器には記号状貼付文・動物意匠が施され¹⁾、他型式に比較して特殊である。かつて各型式の土器の出土傾向から I～VI域に別け、その後各種の遺物の出土分布から I～VII域に別け、各群を家族の単位と考えた²⁾。詳細は上記の論文を参照されたい。ひとつの堅穴から各種の遺物が一定のまとまりをもって出土する例はなく、その意味からすると本例は極めて特殊といえる。オホーツク文化は以前から生業形態、堅穴住居の規模から複数の家族が同居すると考えられてきたがそれを立証するにたる重要な遺構である。第430図に示した各域の出土遺物は次の通りである。

第 I 域出土遺物

特大型土器 5、中型土器 2、平柄鉄斧 1、刀子 2、針 1、青銅製品 3、鉄製品(形態不明)

1、熊彫像 5、骨鏃 7、石鏃 13、木製品 1。

II 域出土遺物

大型土器 2、小型土器 2、刀子 1、鉄製品(形態不明) 1、石鏃 2、削器 1、木製品 1。

III 域出土遺物

大型土器 3、中型土器 2、小型土器 2、刀子 1、針 2、鉄製品(形態不明) 2、クックルケシ 1、銚先 1、骨篋 1、骨鏃 3、石鏃 4、削器 5、木製品 2。

IV 域出土遺物

大型土器 1、中型土器 3、小型土器 5、刀子 2、針 2、鉄製品(形態不明) 3、クックルケシ 2、銚先 3、骨鏃 3、骨斧 1、石鏃 3、木製品 1。

V 域出土遺物

大型土器 1、中型土器 3、小型土器 3、刀子 4、石鏃 4、削器 4、木製品 1。

VI 域出土遺物

大型土器 2、中型土器 1、小型土器 2、刀子 2、石鏃 7、削器 8、木製品 1。

VII 域出土遺物

大型土器 1、中型土器 2、小型土器 1、鉄製品(形態不明) 1、石鏃 9、削器 5、木製品 4。

各域では土器の出土位置と各種の遺物が比較的均一に分布していることがわかる。どの域をとっても一方極端に多い、少ないということがない。中でも刀子、針などは各家庭で2～3本は所有していたのであろう。木製品は焼失した可能性が高いので家族の平均的な数量は不明で

であるが、他の物はそれぞれの家族で所有する一般的な家財道具であったものと推察できる。骨塚側のⅠ域が祭祀を司る共同の場であり、Ⅱ～Ⅶ域は各家族の居住空間だったのであろう。そこには18～27人が生活を営んでいたものと思われる。

各域の土器はソーメン状貼付文を主体にしているが基本的に波状、直線、擬縄状貼付文とそれらを複合した文様で構成されている。擬縄貼付文には指で捻りを加えたもの、貼付文を鋭く刻み込んだものもある。器形もマチマチあり整形が丁寧なもの雑なものなど様々ある。各家族で土器を製作しているのであればそこには個人（製作者）の属性（癖）が反映されているはずである。今回は時間の制約もあり検討できなかったが、将来はその点を踏まえて各域の土器の特徴を考えてみたい。

付編でも報告されているが動物遺存体にカツオブシ虫の幼虫がある。カツオブシ虫は毛皮に多く寄生する虫である。15号堅穴からはエゾクロテンの遺存体、ラッコの彫刻品も出土しており毛皮の存在を暗示しているようである。

植物遺体ではマメ科の種子、栽培植物であるキビ穎果が検出されたことも特筆される。

16号堅穴は14号と15号の南側に位置する。規模が長軸約8.8m、短軸約7.5mの六角形を呈する。14号同様の寸詰まりの形態である。中央に方形の石囲み炉を持つが骨塚、貼床をもたない。時期はソーメン状貼付文（藤本e群）である。15号と同時併存と思われる。さらに第84図-1の16号床面出土土器は今回は報告されていないが45号堅穴埋土出土のものと接合した。あるいは同時併存の可能性もある。

23号堅穴は14号堅穴の東側に位置する。発掘区域外にまたがるため検出できたのは北側だけである。規模は短軸約8.5mを測る。形態は六角形であろう。壁面より内側に周溝があり2軒重複か拡張された住居であろう。詳細な時期は不明である。

5軒の堅穴の時期は15号、16号がソーメン状貼付文であり他は不明である。45号出土土器と16号出土の土器（第84図-1）が接合したので45号堅穴はソーメン状貼付文の可能性はある。

5軒の堅穴の立地をみると15号の後に16号、14号の後に23号がある。規模の大きい堅穴の後ろにやや小型の堅穴を配置する傾向が指摘できる。この傾向はトコロチャシ跡に構築されている1号、2号とも共通する。トコロチャシ跡のオホーツク文化期の堅穴と本遺跡の堅穴との距離は直線で約150～200mであり、極めて近接している。トコロチャシ跡の1号、2号はソーメン状貼付文（藤本e群）であり、15号のソーメン状貼付文は同一形式であるが、台地上にあるトコロチャシ跡の堅穴と台地の下部にある堅穴が果たして同時併存したのか、同時併存したとすると極端に立地の異なる理由はなにか疑問が残る。同時併存でなかったとするとどちらが先行するのか問題が残る。最近注目されている、中世の温暖化現象と関係しているのであろう。

ピット173からはソーメン状貼付文の小型土器、刀子1本が出土し、ピット245からは柳葉形石鏃1本、攪乱により破損を受けたソーメン状貼付文の大型土器が出土しており土墳墓と考えられる。

オホーツク文化と擦文文化の時間関係を解明する上でもいくつかの知見を得ることができた。14号、15号、16号のオホーツク文化堅穴の埋土には摩周b火山灰（トルコ火山灰III）が堆積しており、擦文文化後期の土壌墓であるピット27、28、33、33a、49はこの火山灰と15号堅穴の貼り床を切り込んで構築されている。他の摩周b火山灰を堆積する堅穴の埋土上部にも擦文後期の土器が混入している。この点からオホーツク文化ソーメン状貼付文（藤本e群）と擦文文化後期は明らかに時間差があることは明らかである。また、14号堅穴の摩周b火山灰の上部には擦文後期の土器とトビニタイII式が共伴し、平成5年度に調査した51号堅穴埋土からは擦文後期とトビニタイII式が共伴している。

掘立柱は3箇所確認された。掘立柱1は第4次形成地にある。周辺にある小柱穴群と擦文期の堅穴との切り合から擦文以降と判断される。一方、掘立柱2、掘立柱3はオホーツク文化15号堅穴の西側に位置するもので第3次面にある。本文中でも報告した通りオホーツク文化期のものと判断している。同期における掘立柱遺構の報告例はないが倉庫、あるいはクマを飼育する檻などが考えられよう。樺太アイヌは家の前面か右横に高床の食料庫を設け³⁾、北海道アイヌも出入口に近い所に建てていたとされる⁴⁾。同種の建築物はギリヤーク族にもありオホーツク文化の中に祖形的なものとして存在した可能性もあろう。今後、各地の発見に期待したい。

第2次形成地と第3次形成地の間にある細長い窪地にはオホーツク文化期ソーメン状貼付文15、16号堅穴の人々が遺した獣骨、鯨骨、炭化材が広い範囲に認められた。この区域は14、15号堅穴の北側、「コ」字状貼床の開口部に近い位置にあたる。開口部に出入口が設けられていたとするとこの区域が頻繁に使用されていたのであろう。鯨の脊椎骨の存在から部分的な解体場もしくはゴミ捨場としても用いられたであろう。

4. 続縄文文化期

本時期の堅穴で明確なのは7軒ある。宇津内II a期のものは18号、18a号、21号、29a号、36a号である。同II b期は17a号、25号である。続縄文前葉では23a号、26号、26a号、34号がある。他の19軒は不明である。堅穴の形態も舌状の張り出し部をもつタイプともたないタイプがある。炉は石囲み炉を持つのが宇津内系の特色として考えられるが、時期的な形態上の特色については、現在、発掘中の成果をふまえ将来報告することにした。

続縄文各期の土壌墓の分布をみると明らかに墓域を形成している。

後北C₁式の土壌墓はピット20、22、25、31、37、46、117、130、157、300があり宇津内II aの土壌墓よりやや東寄りの標高約5mの位置にみられる。形態は楕円形を呈する。頭位は南方向を基調とする。合葬墓の場合は円形。ピット300からはガラス玉、平柄鉄斧、刀子が出土している。ガラス玉は両眼部から出土したものであり被葬者はシャーマンを想起させる。

後北C₂・D式の土壌墓はピット105、253がある。形態は円形を呈する。

宇津内II b式の土壌墓はピット15、22a、104、132、133、143、275がある。宇津内II a期の

土墳墓の東寄りに位置する傾向をもつ。形態は楕円形を呈するが、宇津内II a 式に認められた底面の小柱穴はもたない。副葬品に土器、石器があるものの琥珀は減少する。

宇津内II a 式の土墳墓はピット208、246 a、251、252、254 a、261、260、262 a、262 b、263 a、267がある。第2次形成地の中で最も高い位置に集中して構築されている。この時期の土墳墓の形態は楕円形を呈し、底面の壁際に数本の小柱穴をもつものがある。この時期の土墳墓にみられる特色と言える。頭位は歯骨の位置から判断して西方向を基調としている。副葬品も豊富である。土器、石器、特にナイフ形石器は特徴的である。琥珀玉はピット263 a に認められる様に数珠状に連結して出土する。この時期は遺物量も豊富であるが土墳墓によって土器がなく、石器だけのタイプ、琥珀玉を大量に持つタイプ、土器、石器、琥珀玉をもつタイプなど副葬品のあり方が異なる。

続縄文各期の土墳墓から出土した土器には底部穿孔、破壊の例は認められないが口縁部を欠失したものがみられる。偶然破損したものか意識的に打ち欠いたものか判断することは困難だが特に後北C₁式に顕著である。その他、続縄文と思われるピットは21、34、38、119、122 a、127、128、206、272である。ピット44 a は後北式と併行期であろう。

その他、副葬品に白色粘土としたものがあるがこれは粘性が無く、非常に細かいサラサラした成分であり一般的な粘土とは異なるもので珪藻土（珪質泥岩）と思われる。珪藻土は非晶質シリカの骨格組織をもつ微細な水生植物（珪藻）の遺骸が堆積してできた軟質の土塊あるいは岩石であり、天北・十勝南部・網走地方に分布する⁵⁾。かつて北海道アイヌは調味料として食土（チエトイ）を用い、樺太アイヌも食物の調理と飢饉時には食べたといわれる⁶⁾。平成5年に調査した後北B式の土墳墓では樹皮状のものに包まれており、他の副葬品と異なった扱いがされている。ピット46では土器内部から検出しており食用の可能性も指摘できる。他遺跡の場合も白色粘土と記述されているのが殆どの様である。珪藻土は珪藻殻を含むもので顕微鏡観察が可能であり明確な区分が必要であろう。

4. 縄文文化晩期

この時期に該当するのは後葉の幣舞式である。ピット43、46 a、47、48、102 a、126、138、145、151、153、154、201、234、241、293、295 a など総数16基に及ぶがこの時期の竪穴は認められない。小型の土墳墓は第2次形成地の中で最も高い標高約4～5 mの位置にあるが、大型の土墳墓はそれよりもやや低い位置にある。土墳墓の形態は不整形もしくは円形である。幣舞遺跡等に見られる底面に柱穴をもつタイプはないが201の立石、241の配石をもつものがある。土器は201、295 a から各種の形態のものがセットで出土している。

縄文晩期前葉に比定されるものに盛り上がりをもつ爪形文、内側から斜めに施された突瘤文がある。19号竪穴がこの時期に近いものと判断される。中葉と思われるのはピット51 n、87がある。包含層からは多量の遺物が出土しておりその整理がつきしだい次回に報告する。

縄文晩期の土壌墓は幣舞式が大半を占める。セットで出土するものも多く、道東部の晩期編年の指標となるであろう。統縄文前葉の土器も興津式相当、フシココタン下層、氷川式段階のものも出土している。平成7年度の調査ではフシココタンチャシ下層式の土壌墓も調査されており、従来不明であった縄文晩期から統縄文前葉の編年を埋める資料になるであろう。現在調査している区域からこの時期の遺構が発見されており、この時期の編年についても将来の課題としたい。

この度報告できなかった平成5年から平成7年の区域にも各時期の遺構が連綿に連なり、下層には縄文前期末葉の押型文が多量に出土している。特に統縄文前葉の土壌墓、同後北C₂・D式の土壌墓などは本地域であまり発見例がなく集落と墓域の形成を探る上でも貴重な遺構が検出されている。また縄文前期末葉の押型文では円形石囲み炉群を伴っている。円形石囲み炉群は平成5年に調査した栄浦第一遺跡でも発見しており、当該期の特殊遺構として注目される。この年度の調査報告についても2年後にまとめたいと考えている。

今回の報告は昭和63年から平成4年度に調査した区域の調査報告である。当初は2～3年ごとに報告することを考えていたが、この遺跡は遺構が各時期にわたり遺物量が多いこと、途中で栄浦第二・第一遺跡の発掘を4年間、遺物整理に1年間また史跡整備に伴う発掘調査も実施していたため大幅に遅れてしまった。今後、大いに反省して調査に取り組みたい。

本遺跡の発掘、遺物整理には大変多くの方からご指導、助言を頂いている。特に東京大学藤本強、宇田川洋、北海道教育委員会文化課種市幸生、大沼忠春の各先生からは日頃からあたたかい激励の言葉を頂き心から感謝するしだいです。(武田 修)

●

文 献

- 1) 武田 修 「オホーツク文化竪穴住居内の遺物出土パターンについて」『古代文化』第49巻第6号、平成8年
- 2) 宇田川洋、武田 修 「常呂川河口遺跡15号住居出土の土器群」『考古学ジャーナル』371号、平成6年
- 3) 山本祐弘 『樺太アイヌ・住民と民具』相模書房、昭和45年
- 4) アイヌ文化保存会対策協議会 『アイヌ民族誌』第一法規、昭和45年
- 5) 北海道立工業試験場・北海道立地下資源調査所 「本道珪藻土の高度利用と資源評価に関する研究」『平成4年度共同研究報告書』平成5年
- 6) アイヌ文化保存会対策協議会 文献4) 所収

圖 版



1. 1号竖穴



2. 1号竖穴カマド出土土器



3. 1号竖穴床面出土土器



4. 1号竖穴カマド出土土器



5. 1号竖穴床面出土土器



1. 1号竖穴埋土出土土器



2. 1号竖穴埋土出土土器



3. 1号竖穴埋土出土土器



4. 1号竖穴埋土出土土器



5. 2号竖穴



1. 3号竖穴



2. 3号竖穴床面出土土器



3. 3号竖穴埋土出土土器



4. 3号竖穴埋土出土土器



1. 4号竖穴



2. 4号竖穴埋土出土土器



3. 4号竖穴埋土出土土器



4. 5号竖穴



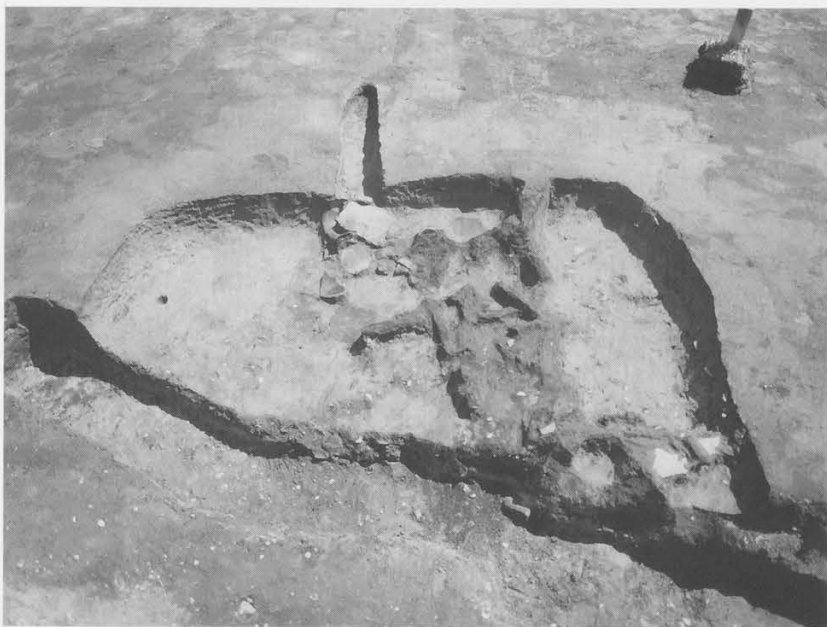
1. 6号竖穴



2. 6号竖穴発掘調査状況 (上から1号、2号、3号、5号、1号小竖穴、2号小竖穴)



3. 6号竖穴埋土出土土器



1. 7号竖穴



2. 7号竖穴土器出土状况



1. 7号竖穴床面出土土器



2. 7号竖穴床面出土土器



3. 7号竖穴床面出土土器



4. 7号竖穴床面出土土器



5. 8号竖穴



6. 8号竖穴床面出土土器



7. 8号竖穴床面出土土器



1. 9号竖穴



2. 9号竖穴



1. 9号竖穴床面出土土器



2. 9号竖穴床面出土土器



3. 9号竖穴床面出土土器



4. 9号竖穴床面出土土器



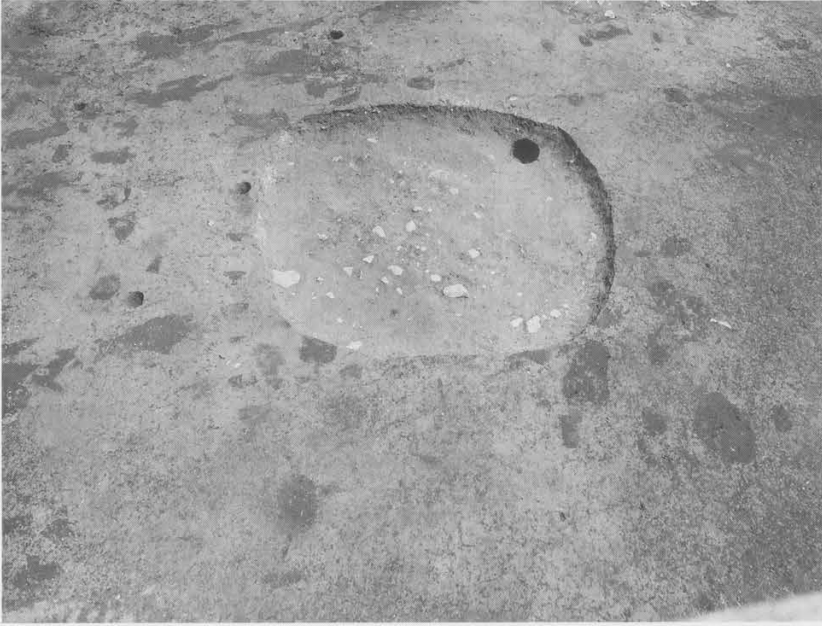
5. 10号竖穴



1. 11号竖穴



2. 12号竖穴



1. 小竖穴 2



2. 小竖穴 3



3. 小竖穴 3 床面出土土器



1. 12号竖穴



2. 12号竖穴埋土出土土器



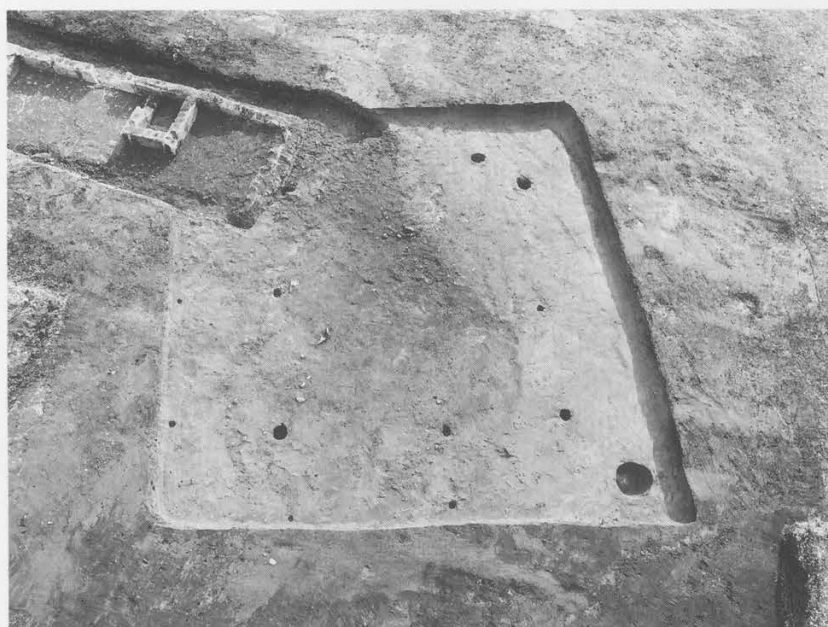
3. 12号竖穴埋土出土土器



4. 12a号竖穴埋土出土土器



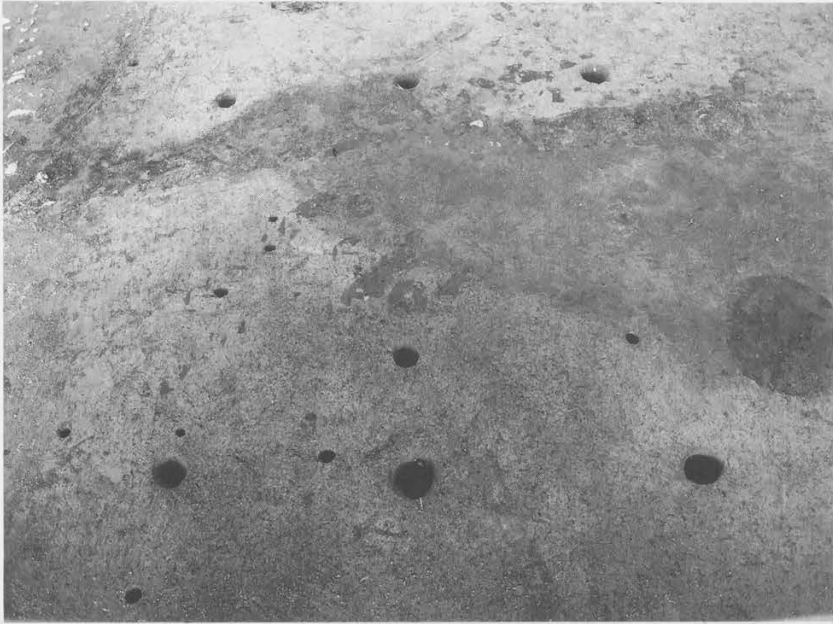
1. 13号竖穴



2. 13号竖穴



3. 13号竖穴埋土出土土器



1. 掘立柱



2. 小柱穴群



1. 小河川跡



1. 14号竖穴



2. 14号竖穴埋土出土青铜製品



3. 14号竖穴埋土出土土器



1. 15号竖穴



2. 15号竖穴



1. 15号竪穴樹皮検出状況



2. 15号竪穴樹皮と木釘検出状況



1. 15号竖穴特大型土器出土状况



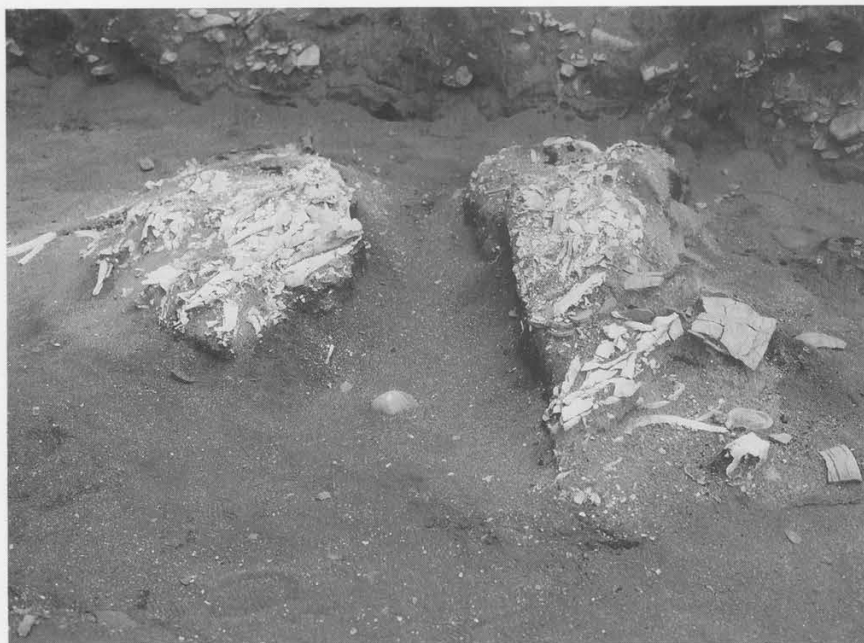
2. 15号竖穴大・中・小型土器出土状况



1. 15号竖穴小型土器出土状况



2. 15号竖穴中・小型土器出土状况



1. 15号竖穴骨塚検出状況



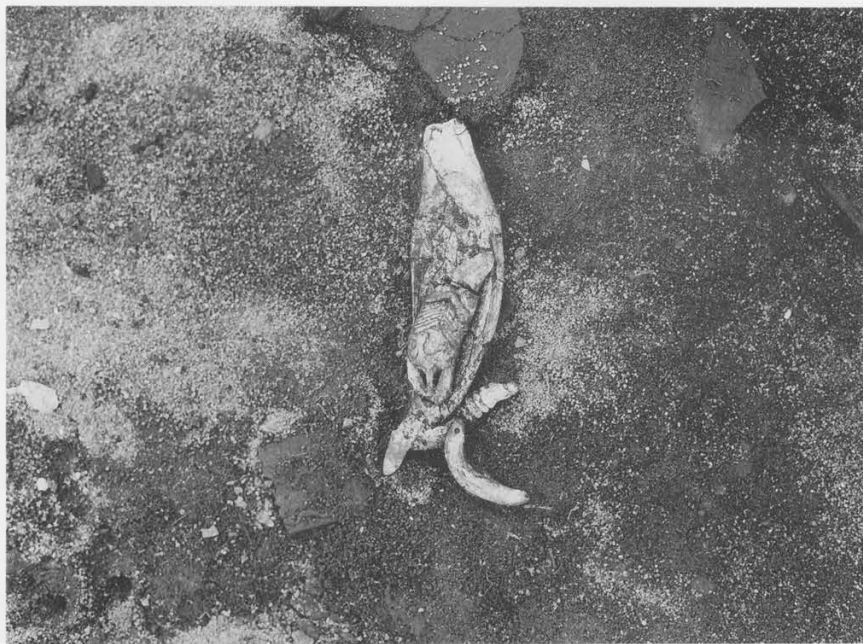
2. 15号竖穴骨塚熊頭部検出状況



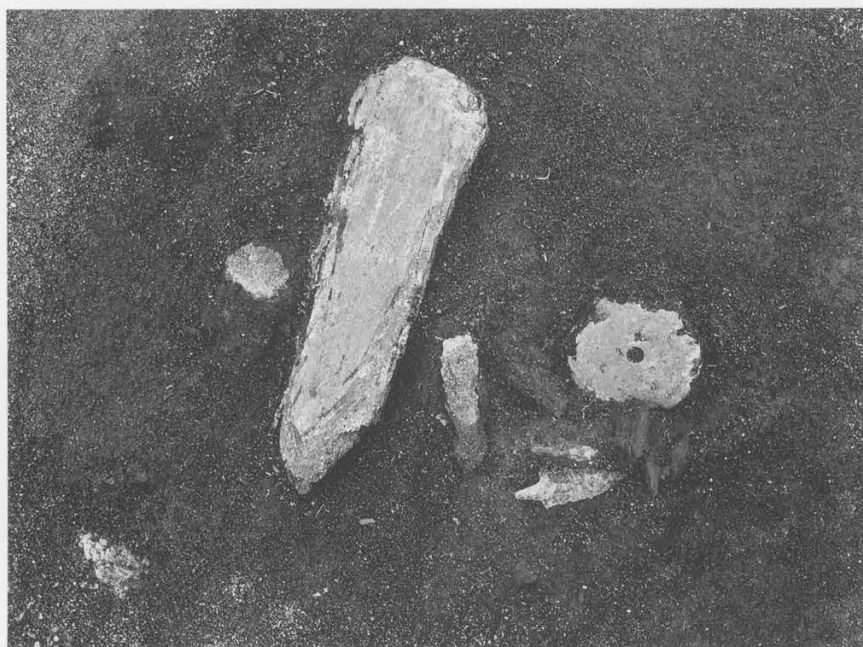
1. 15号竖穴骨角器出土状况



2. 15号竖穴骨角器出土状况



1. 15号竖穴骨角器出土状况



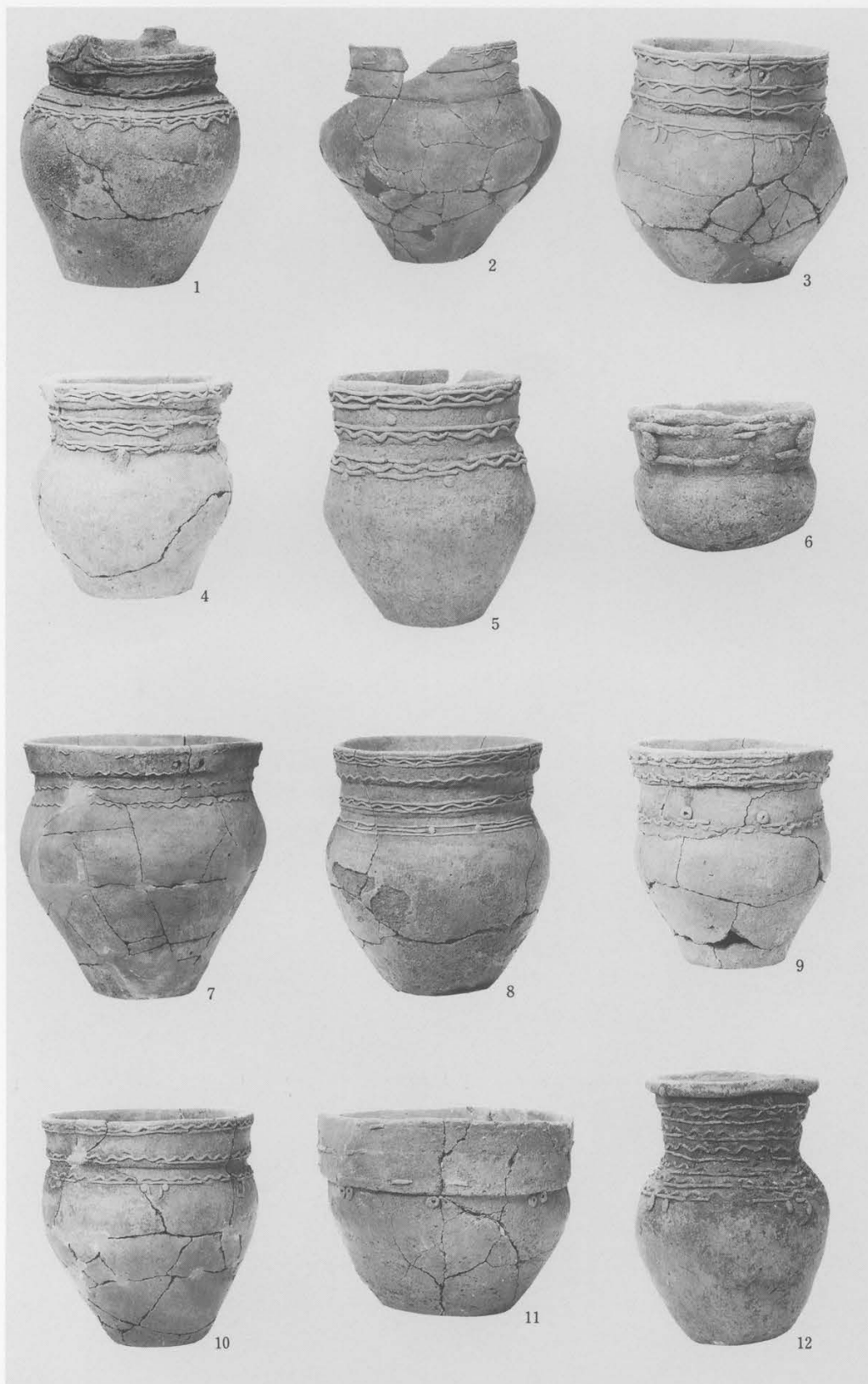
2. 15号竖穴遗物出土状况



1~7. 15号竖穴床面出土土器



1~11. 15号竖穴床面出土土器



1~12. 15号竖穴床面出土土器



1~11. 15号竖穴床面出土土器



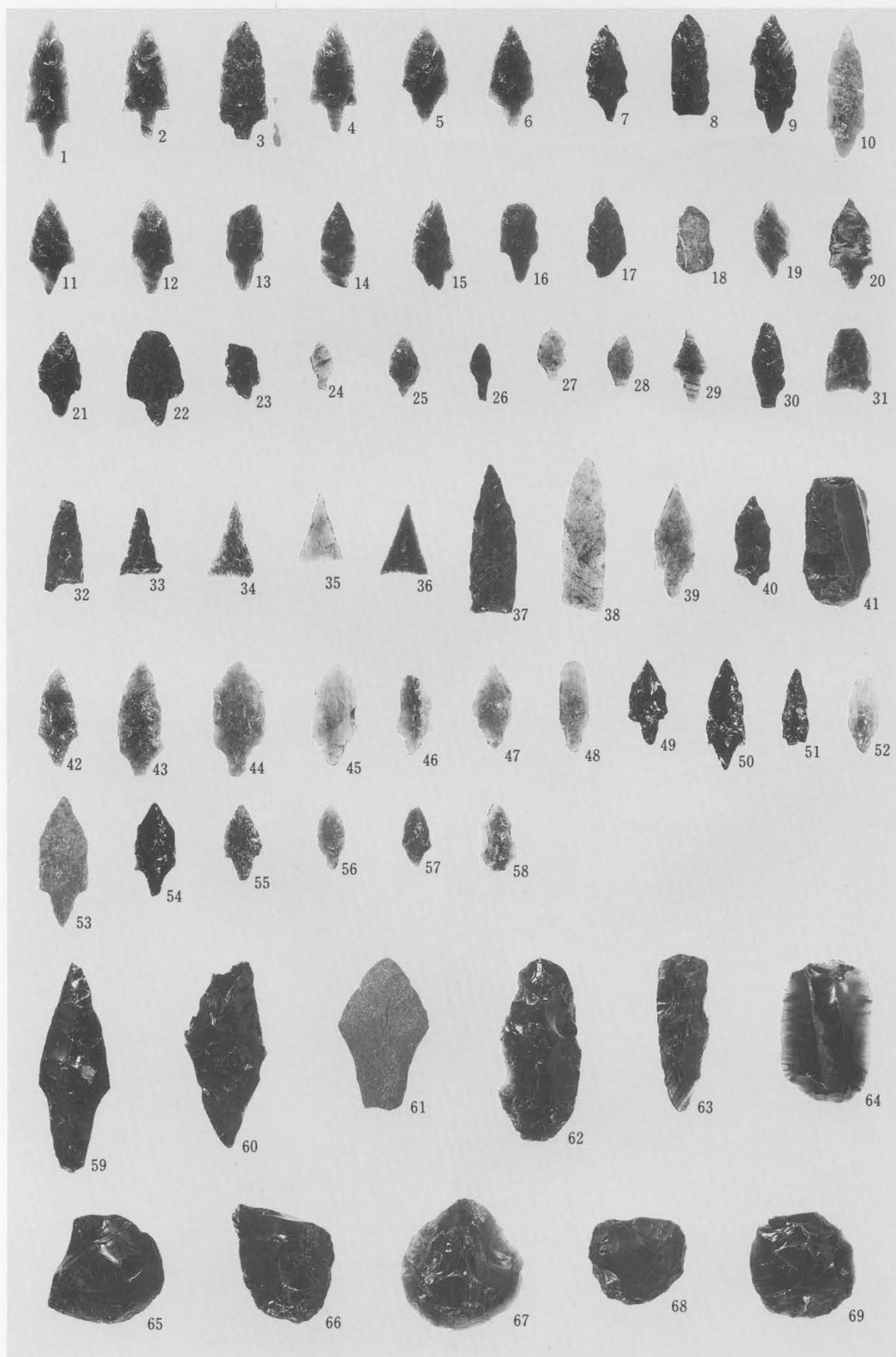
1~7. 15号竖穴埋土出土土器



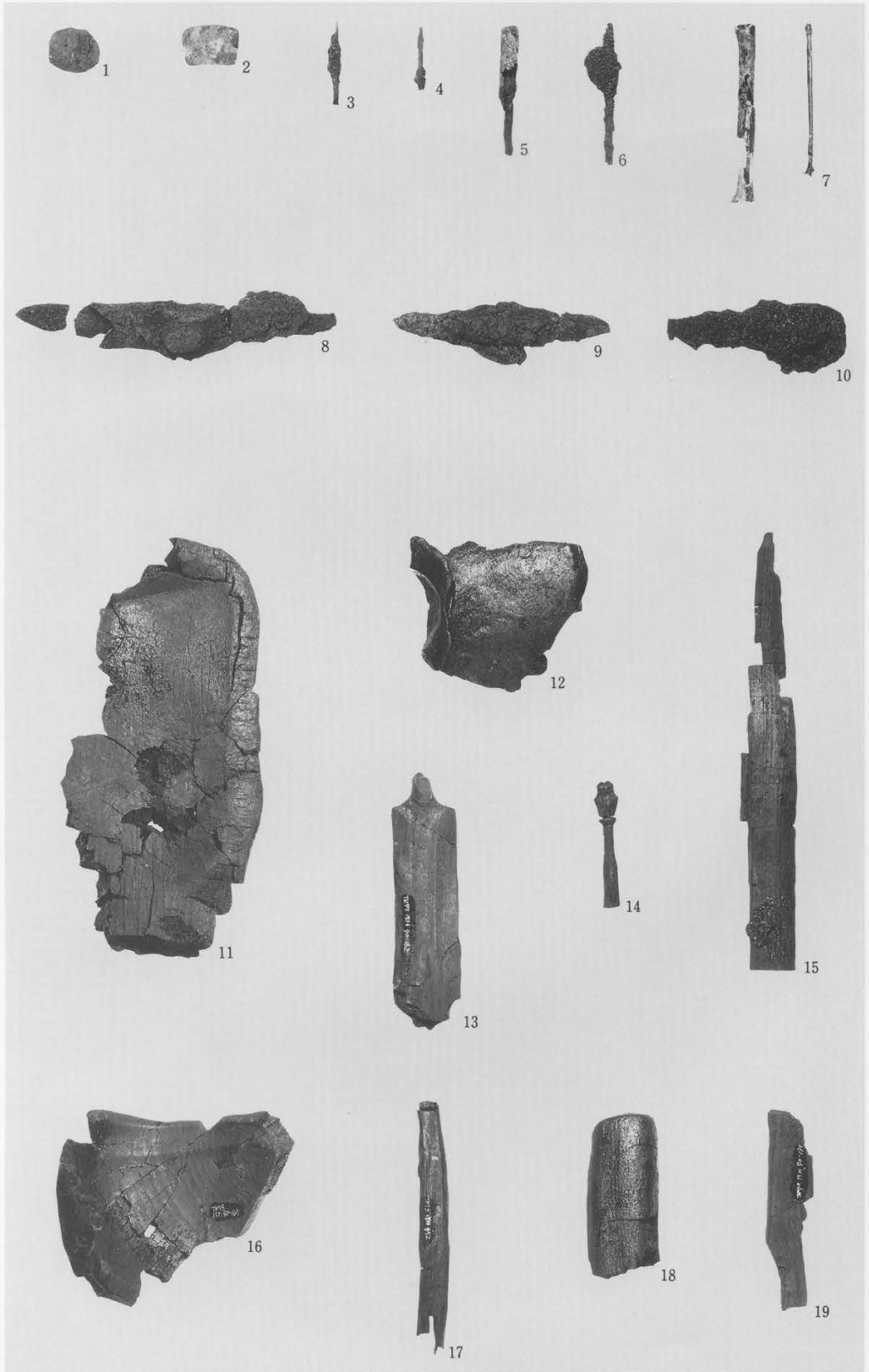
1~16. 15号竖穴床面出土骨角器



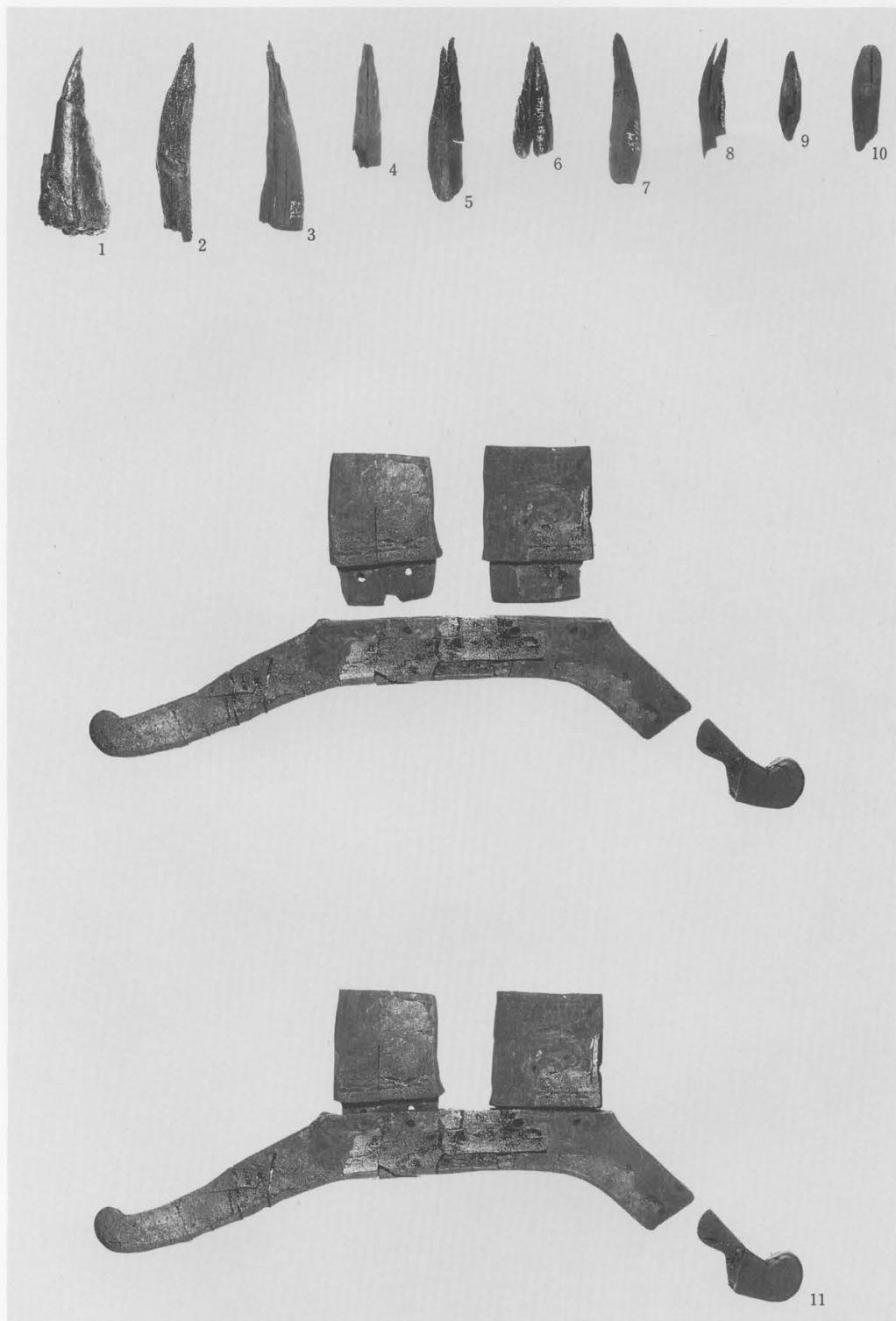
1. 2. 4~7. 23~25. 15号竖穴床面出土骨角器
8~21. 15号竖穴北侧骨塚出土骨角器
3. 22. 15号竖穴埋土出土骨角器



1～37, 61～69, 15号竖穴床面出土石器
 38～41, 15号竖穴中央南小ピット出土石器
 42～58, 15号竖穴骨塚出土石器
 59～60, 15号竖穴周溝出土石器



1. 2. 15号竖穴出土青铜製品 7. 15号竖穴埋土出土骨角器
3~6. 8~10. 15号竖穴床面出土鉄製品 11~18. 15号竖穴床面出土炭化物
19. 15号竖穴柱穴出土炭化物



3. 4. 7~11. 15号竖穴床面出土炭化物
1. 2. 5. 6. 15号竖穴埋土出土炭化物



1~16. 15号竖穴床面出土炭化物



1～3. 15号竪穴床面出土炭化物
4～5. 15号竪穴床面出土 布・ひも



1. 16号竖穴



2. 16号竖穴床面出土土器



3. 16号竖穴埋土出土土器



4. 16号竖穴埋土出土土器



5. 16号竖穴埋土出土土器



6. 16号竖穴埋土出土土器



7. 16号竖穴埋土出土土器



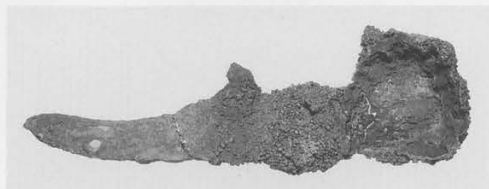
1. 16号竖穴土器出土状况



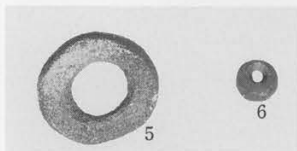
2. 16号竖穴床面出土石器



3. 16号竖穴床面出土石製品



4. 16号竖穴埋土出土鉄器



5. 6. 16号竖穴埋土出土石製品



1. 17号竖穴



2. 17号竖穴



1. 17号竖穴床面出土土器



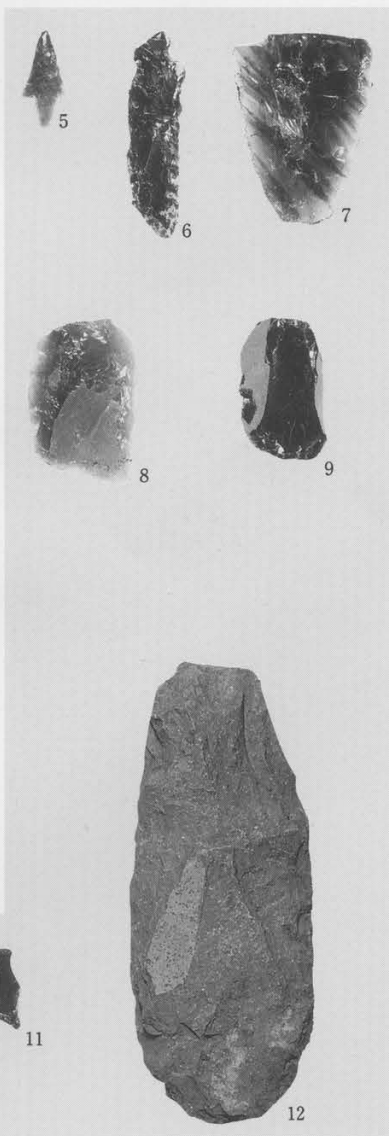
2. 17号竖穴埋土出土土器



3. 17a号竖穴埋土出土土器



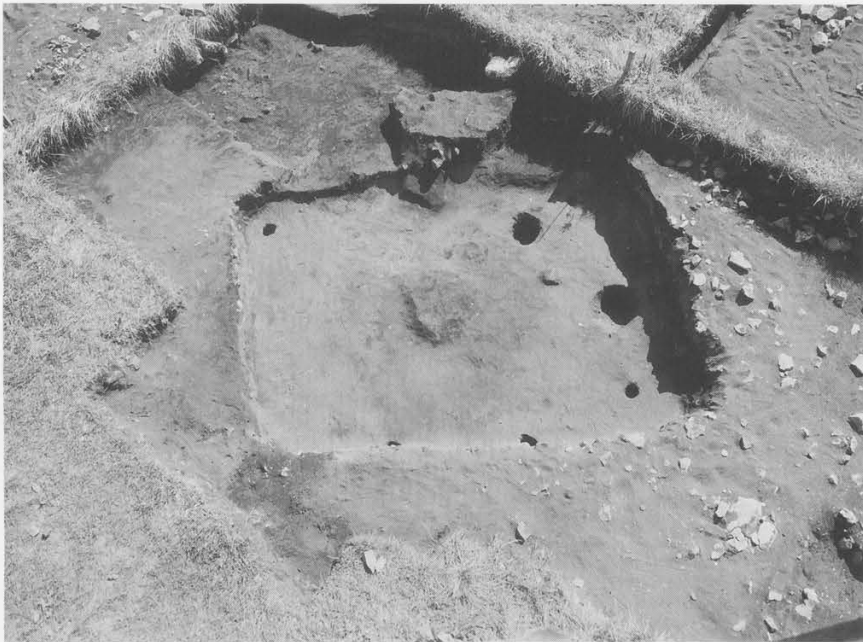
4. 17b号竖穴



5~12. 17b号竖穴床面出土石器



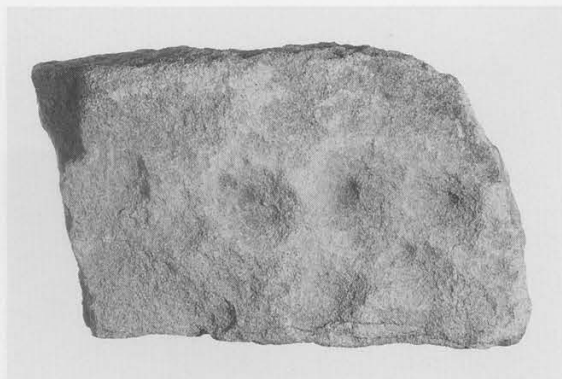
1. 19号竖穴



2. 20号竖穴



1. 18号竖穴床面出土土器



2. 18a号竖穴床面出土石器



3. 21号竖穴



4. 21号竖穴床面出土土器



5. 21号竖穴埋土出土土器



1. 21号竖穴埋土出土土器



2. 21号竖穴埋土出土土器



3. 21号竖穴埋土出土土器



4. 21号竖穴埋土出土土器



5. 21号竖穴埋土出土土器



6. 22号竖穴



1. 23号竖穴



2. 23号竖穴埋土出土土器



3. 23a号竖穴埋土出土土器



4. 23a号竖穴



1. 24号竖穴



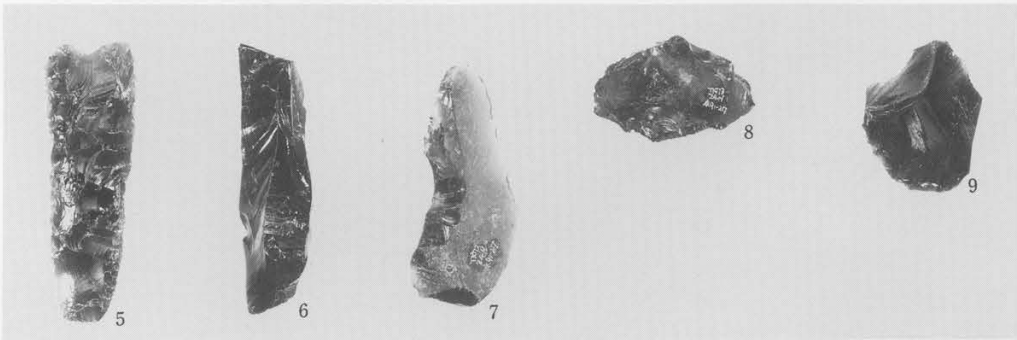
2. 24号竖穴埋土出土土器



3. 24号竖穴埋土出土土器



4. 24号竖穴埋土出土土器



5~9. 24号竖穴床面出土石器



1. 25号竖穴、25 a号竖穴、25 b号竖穴



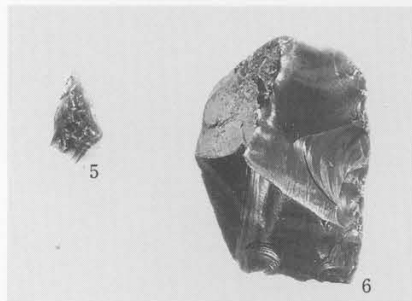
2. 26 a号竖穴埋土出土土器



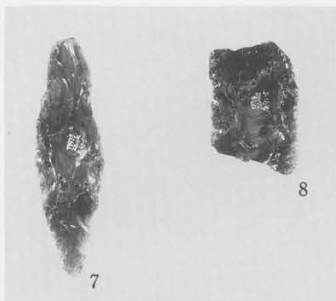
3. 26 a号竖穴埋土出土土器



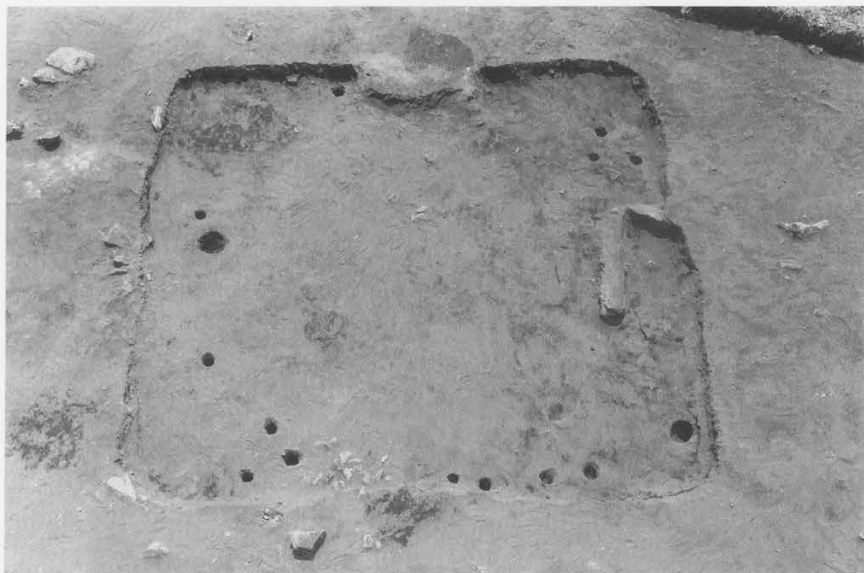
4. 26 a号竖穴埋土出土土器



5~6. 26号竖穴床面出土石器



7~8. 26 a号竖穴床面出土石器



1. 28号竖穴



2. 28号竖穴埋土出土土器



3. 28号竖穴埋土出土土器



4. 28号竖穴埋土出土土器



5. 28号竖穴埋土出土土器



1. 29号竖穴



2. 29号竖穴埋土出土土器



3. 29号竖穴埋土出土土器



4. 29号竖穴埋土出土土器



5. 29号竖穴埋土出土土器



1. 29 a 号竖穴·29 b 号竖穴



2. 29 a 号竖穴埋土出土土器



3. 29 a 号竖穴埋土出土土器



4. 29 b 号竖穴埋土出土土器



5. 30号竖穴埋土出土土器



7. 30号竖穴埋土出土土器



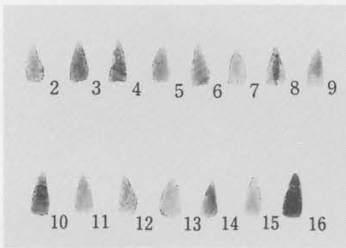
6. 30号竖穴埋土出土土器



8. 30号竖穴埋土出土土器



1. 31号竖穴



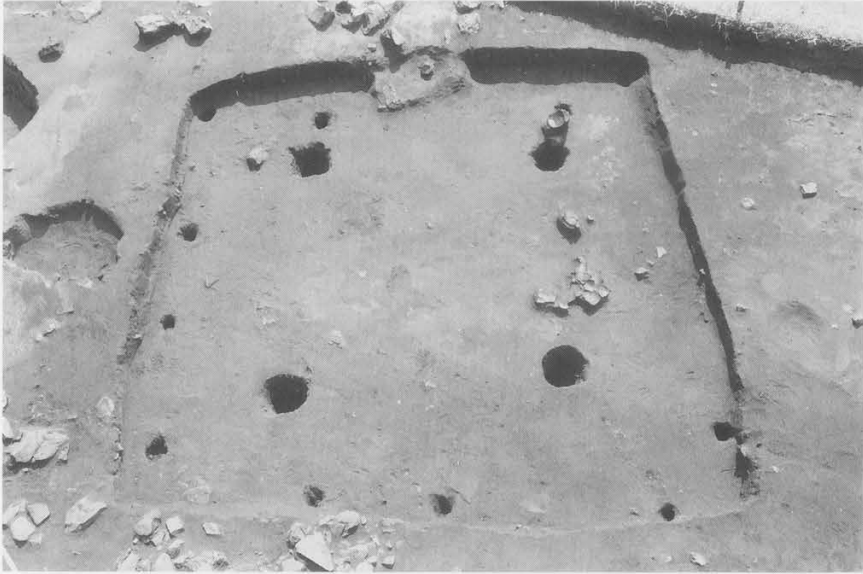
2~16, 31号竖穴埋土出土石器



17. 31号竖穴埋土出土土器



18. 32号竖穴



1. 33号竖穴



2. 33号竖穴埋土出土土器



3. 33号竖穴埋土出土土器



4. 33号竖穴埋土出土土器



5. 34号竖穴



1. 34号竖穴床面出土土器



2. 35号竖穴



3. 35号竖穴埋土出土土器



4. 35号竖穴東壁際上部出土土器



1. 36号竖穴



2. 36号竖穴床面出土土器



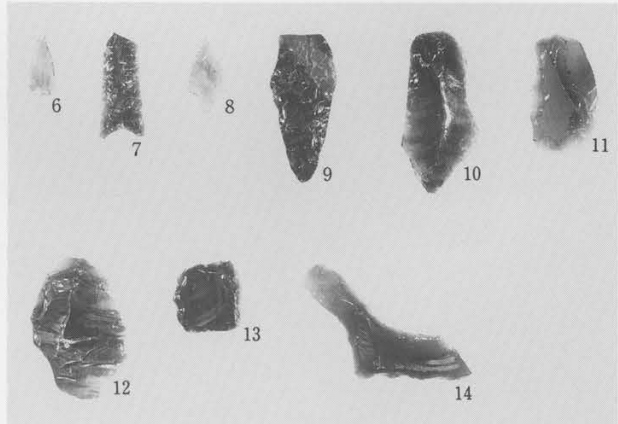
3. 36号竖穴埋土出土土器



4. 36号竖穴埋土出土土器



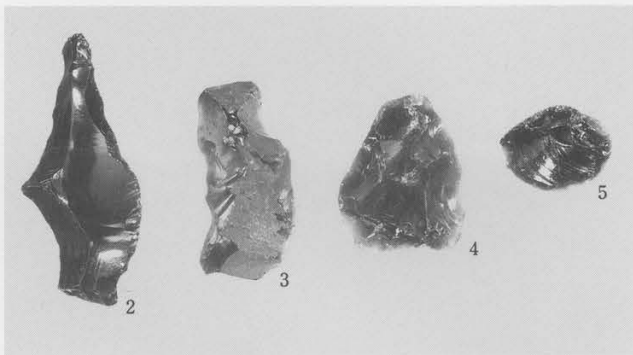
5. 36号竖穴埋土出土土器



6~14. 36号竖穴床面出土石器



1. 36 a 号竖穴埋土出土土器



2~6. 36 a 号竖穴床面出土石器



7. 37号竖穴



1. 38号竖穴



2. 38号竖穴埋土出土土器



3. 39号竖穴



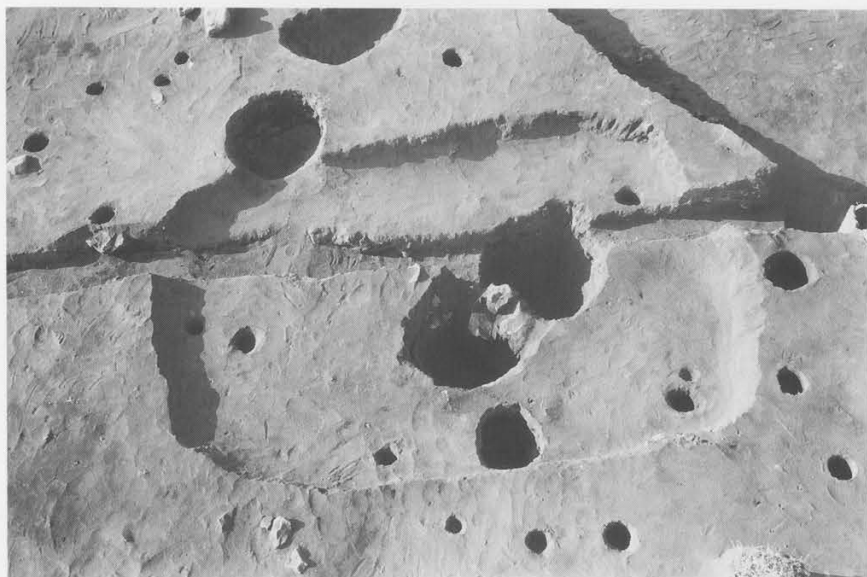
1. 40号竖穴土器出土状况



2. 40号竖穴床面出土土器



3. 40 a 号竖穴



1. 41号竖穴



2. 42号竖穴



3. 42 a 号竖穴埋土出土土器



4. 42 a 号竖穴埋土出土土器



1. 43号竪穴



2. 43号竪穴カマド



3. 43号竪穴カマド出土土器



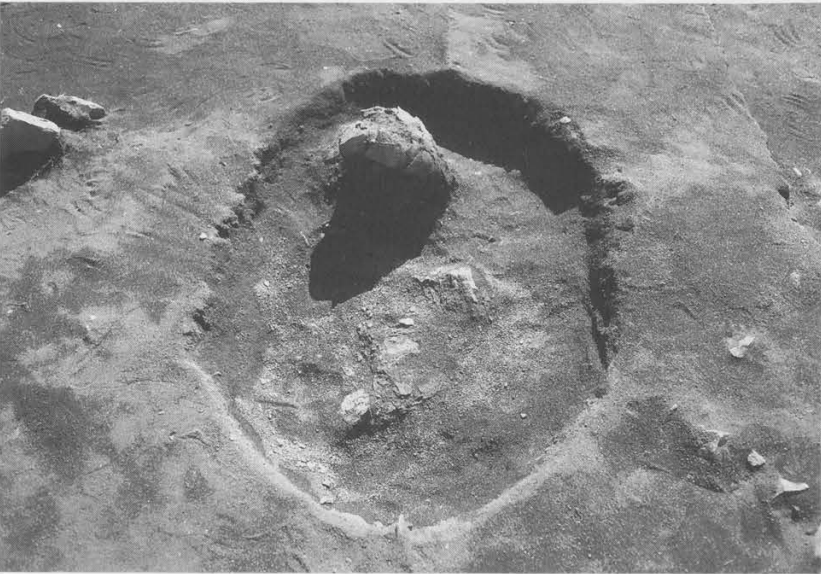
4. 43号竪穴カマド出土土器



5. 43号竪穴カマド出土土器



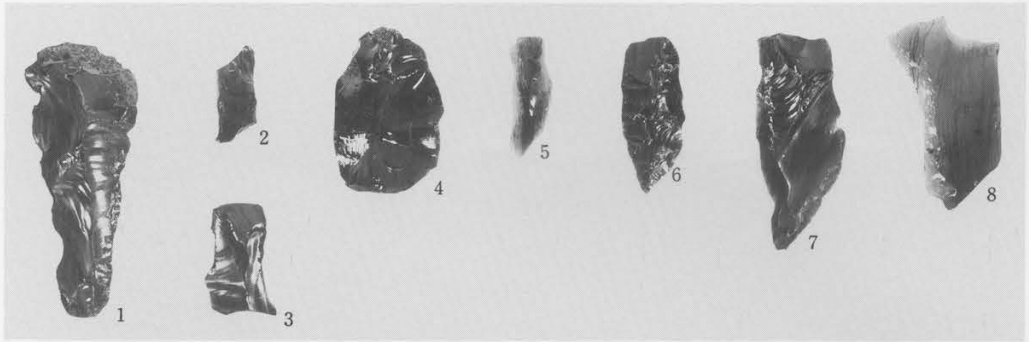
1. ピット14



2. ピット15



3. ピット15埋土出土土器



1～4. ピット19床面出土石器
5～8. ピット19埋土出土石器



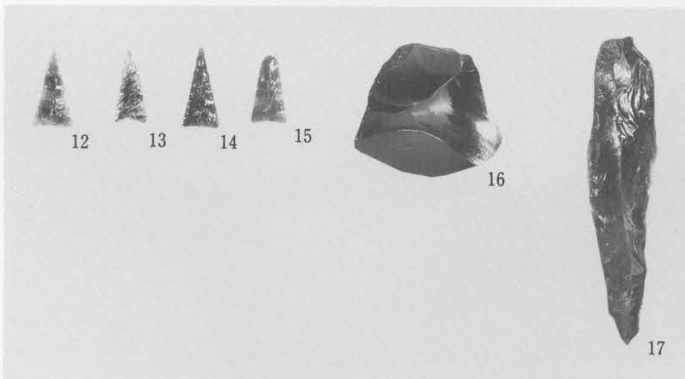
9. ピット20



10. ピット20埋土出土土器



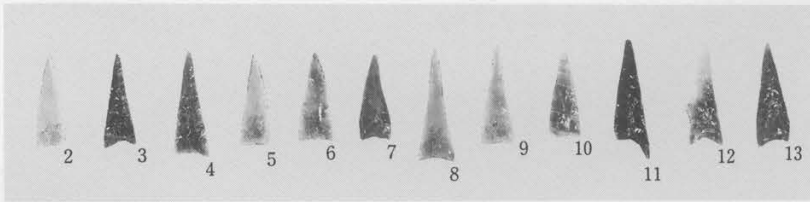
11. ピット20埋土出土土器



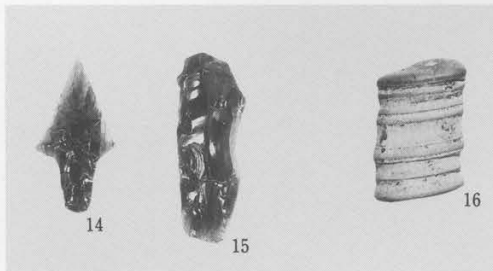
12～17. ピット20埋土出土石器



1. ピット21



2～16. ピット21埋土出土石器

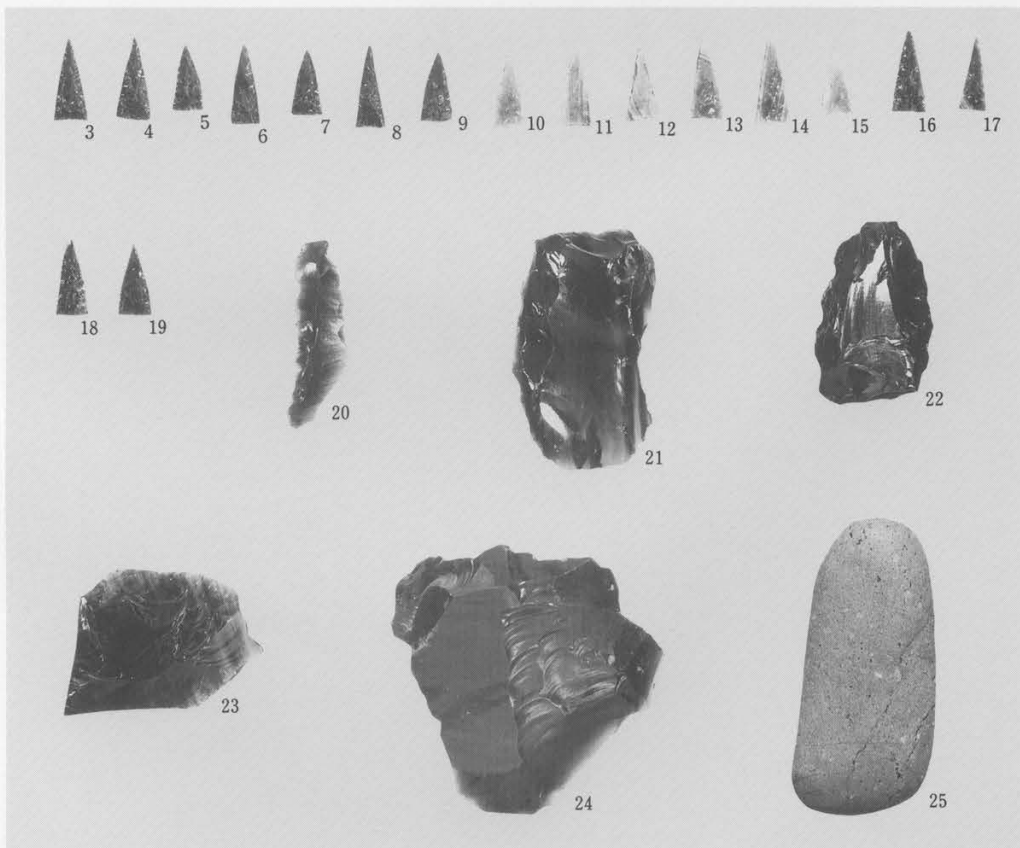




1. ピット22



2. ピット22埋土出土土器



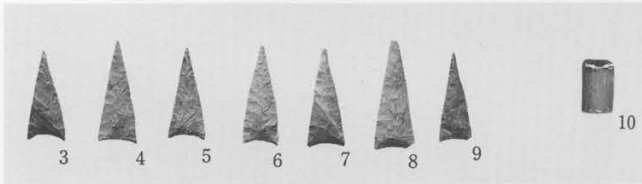
3～19. ピット22床面出土石器 20～25. ピット22埋土出土石器



1. ピット22 a



2. ピット22 a 埋土出土土器



3～9. ピット22 a 埋土出土石器

10. ピット22 a 埋土出土管玉



11. ピット22 a 管玉・琥珀出土状況



1. ピット23



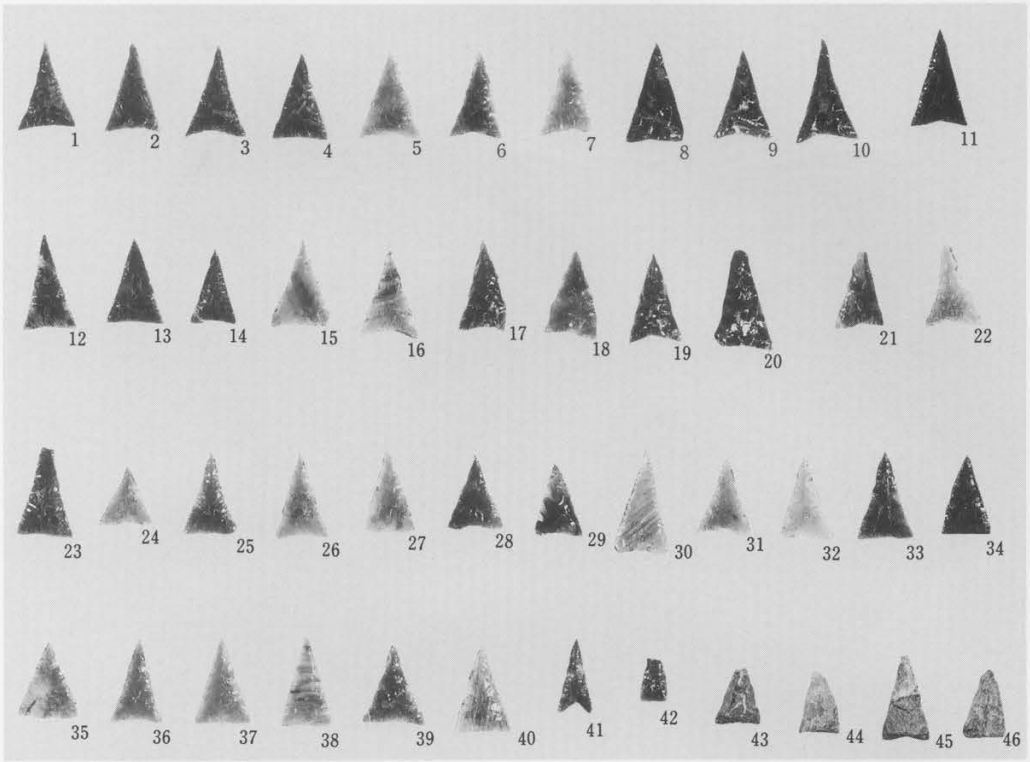
2. ピット23埋土出土土器



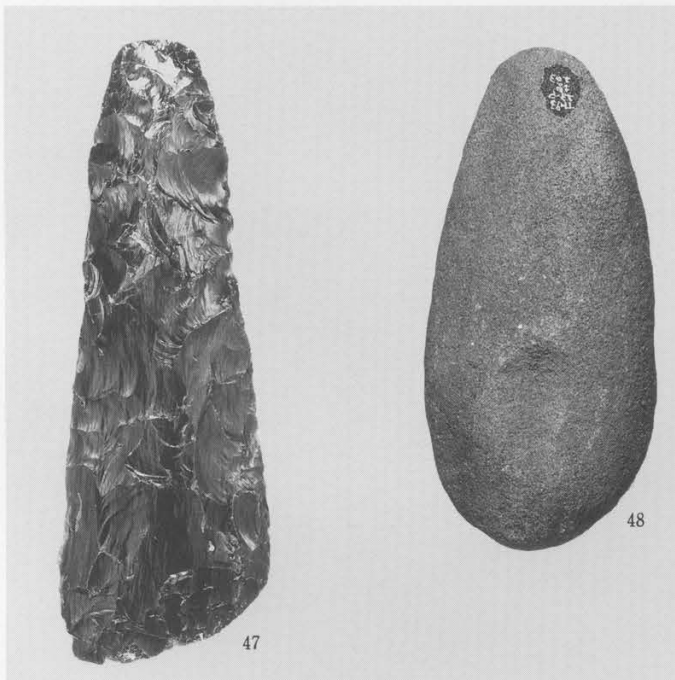
3. ピット23埋土出土土器

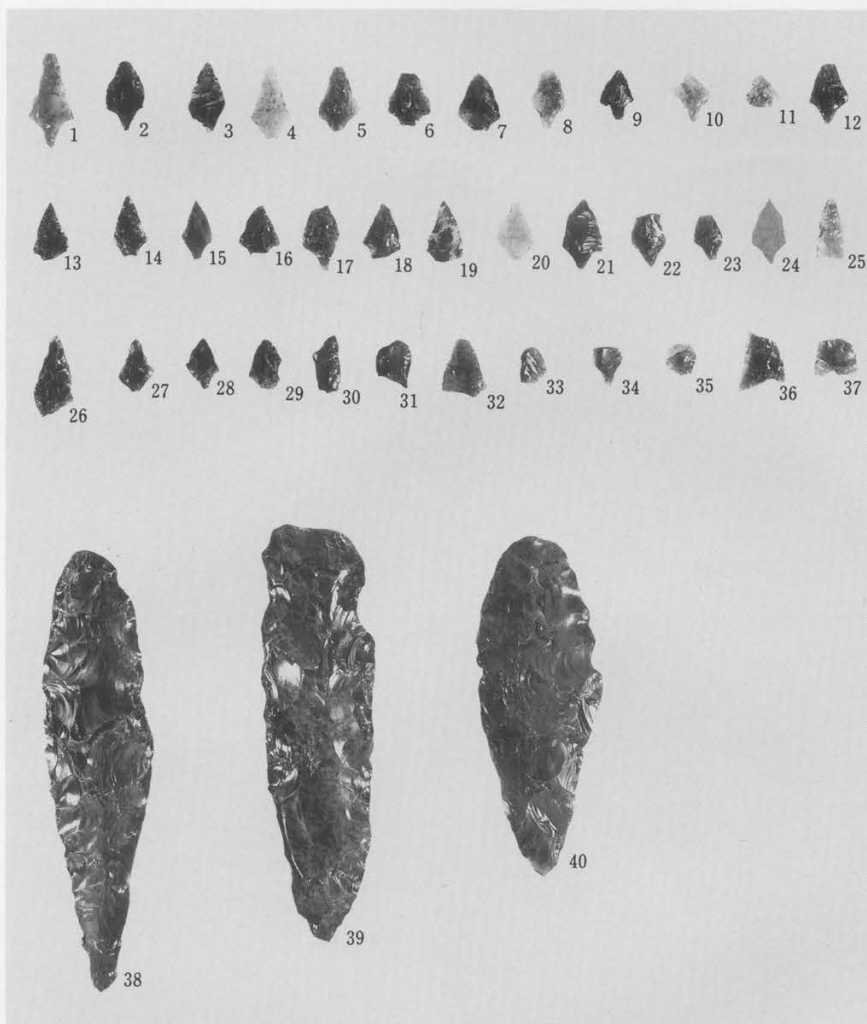


4. ピット23石器出土状況



1～48, ピット23埋土出土石器





1~40. ピット23a 埋土出土石器



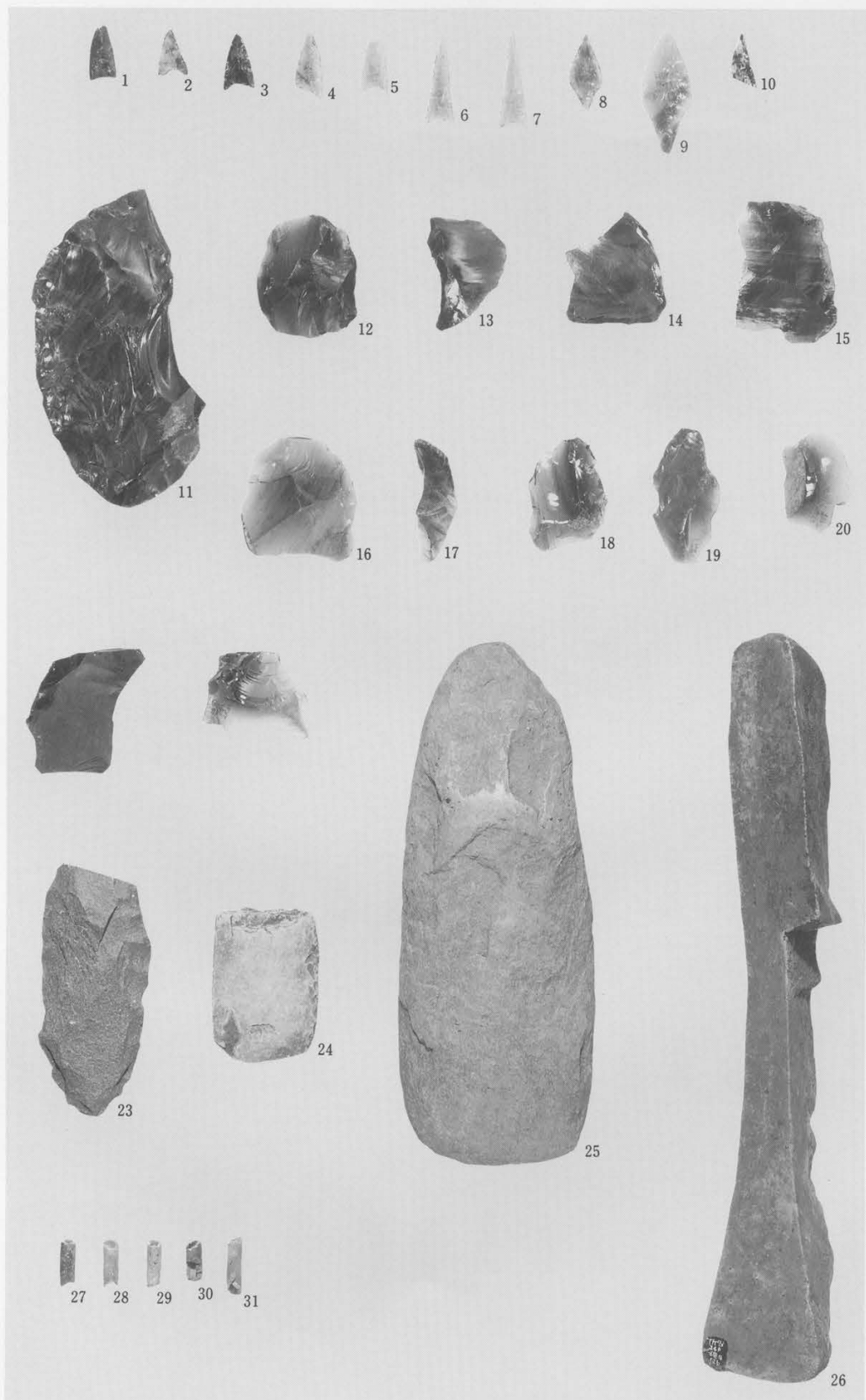
1. ピット24



2. ピット24遺物出土状況



3. ピット24埋土出土土器



1～26. ピット24埋土出土石器 27～31. ピット24埋土出土管玉



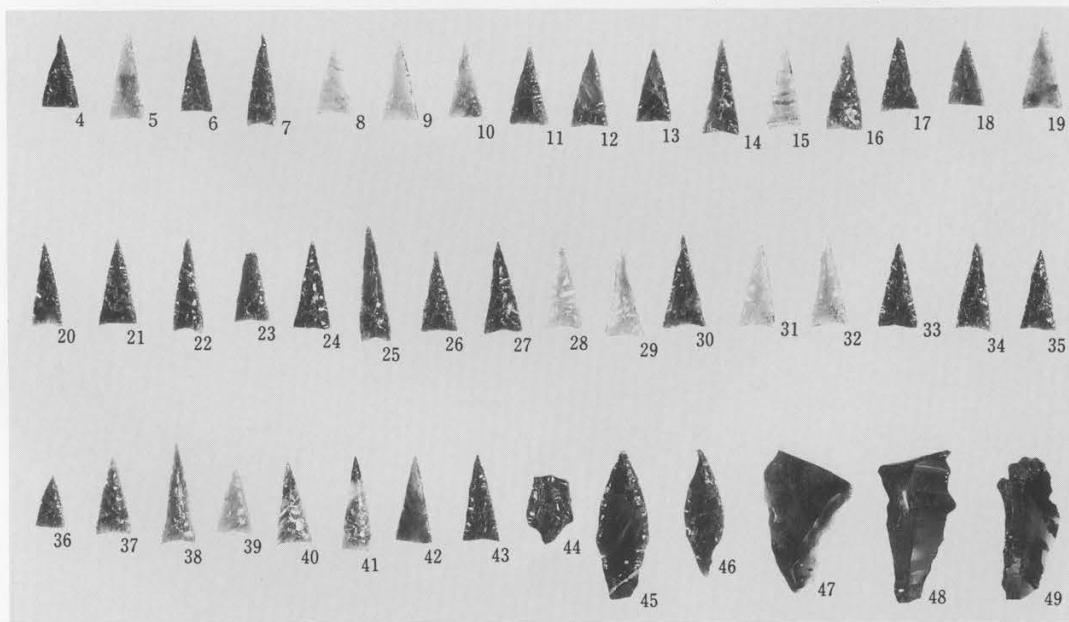
1. ピット25



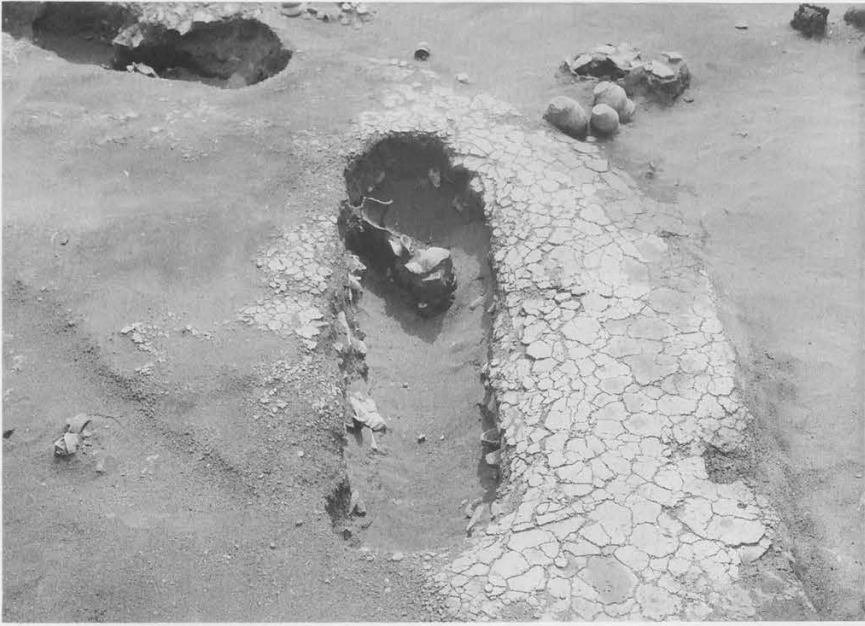
3. ピット25埋土出土石製品



2. ピット25埋土出土土器



4～49. ピット25埋土出土石器



1. ピット28、ピット33



2. ピット28埋土出土土器



3. ピット33埋土出土土器



4. ピット31埋土出土土器



1. ピット32



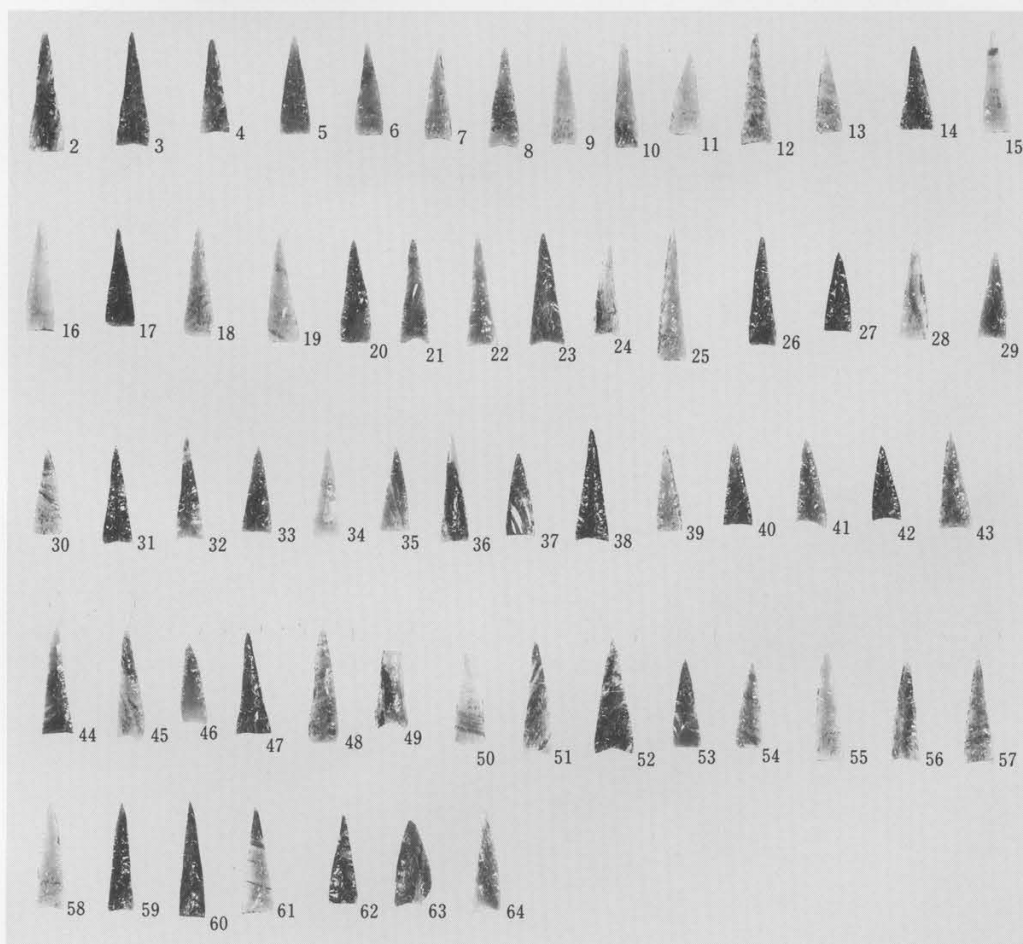
2. ピット32床面出土土器



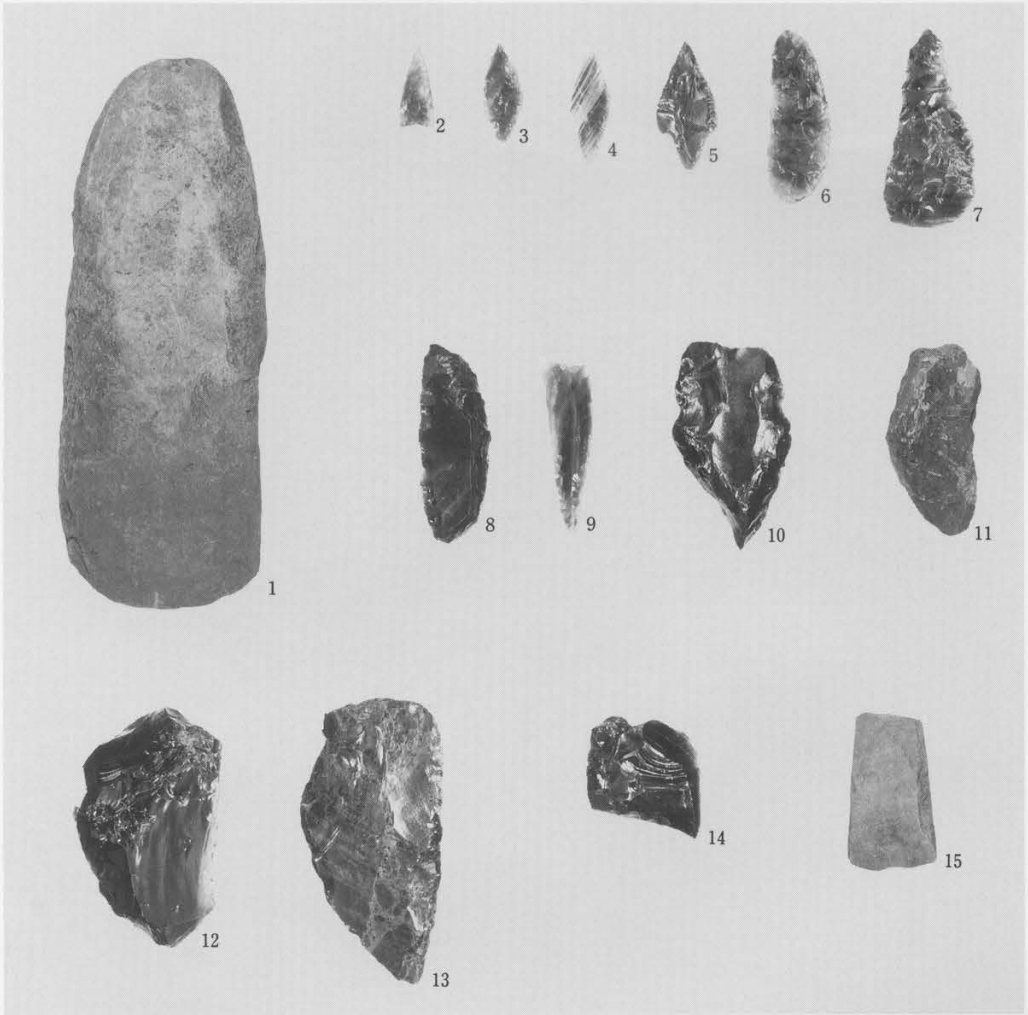
3～22. ピット32埋土出土石器



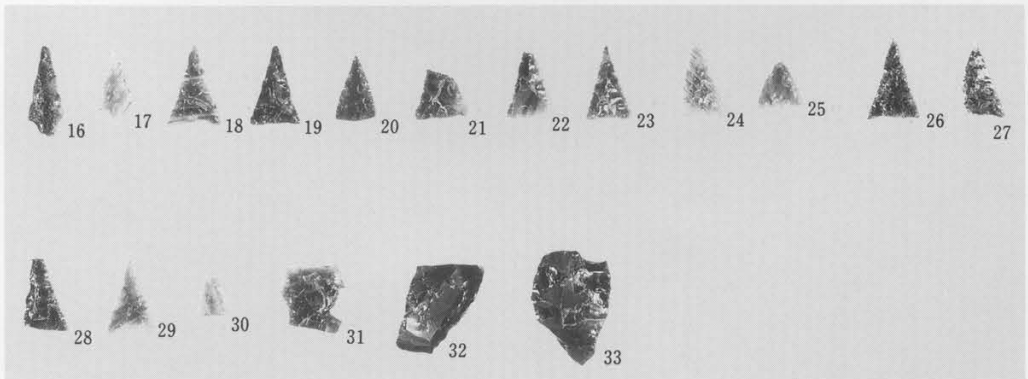
1. ピット34



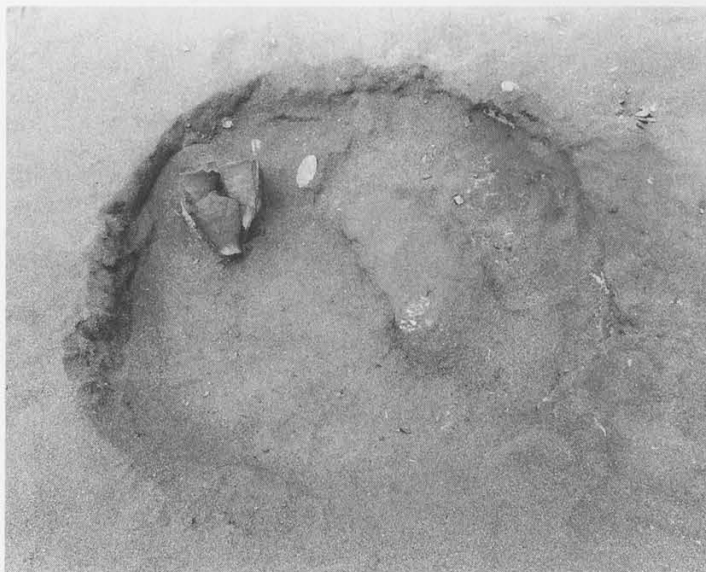
2~64. ピット34床面出土石器



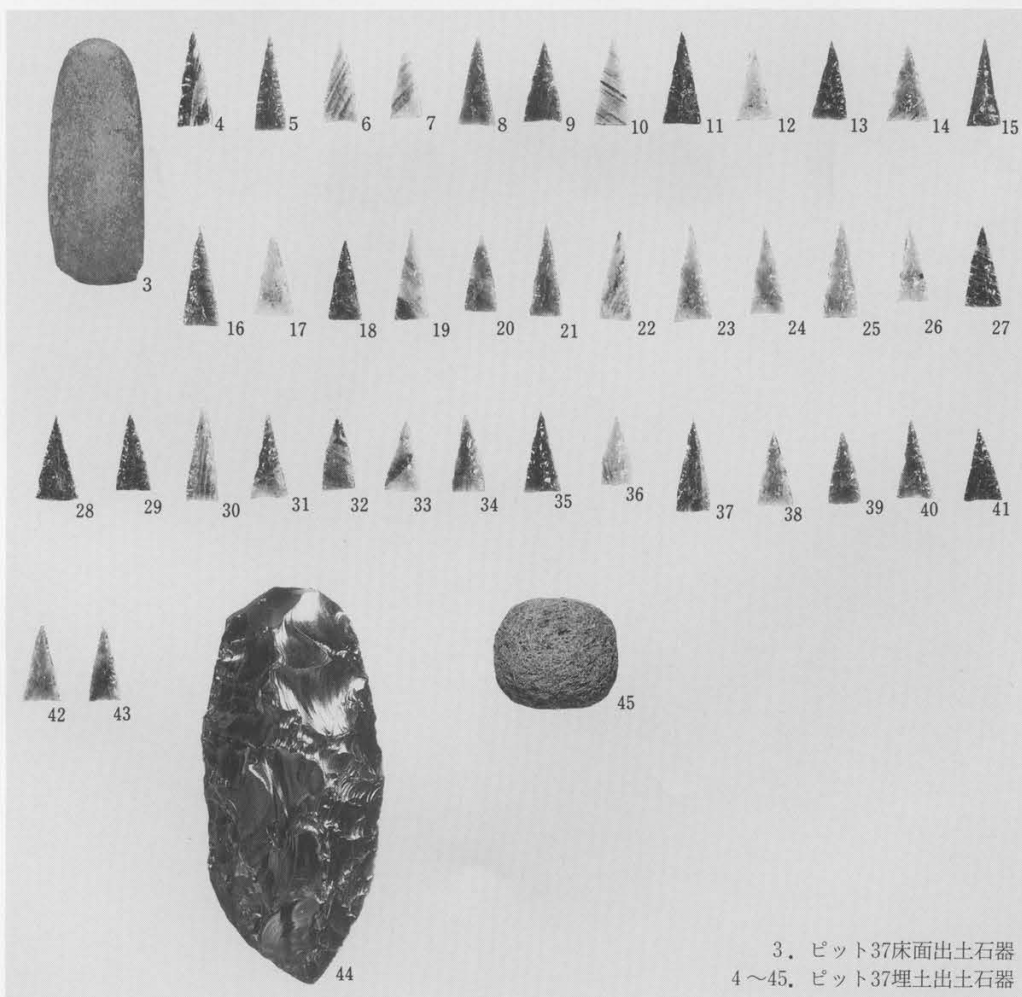
1. ピット34床面出土石器
2～15. ピット34赤褐色土出土石器
13. ピット34埋土出土石器



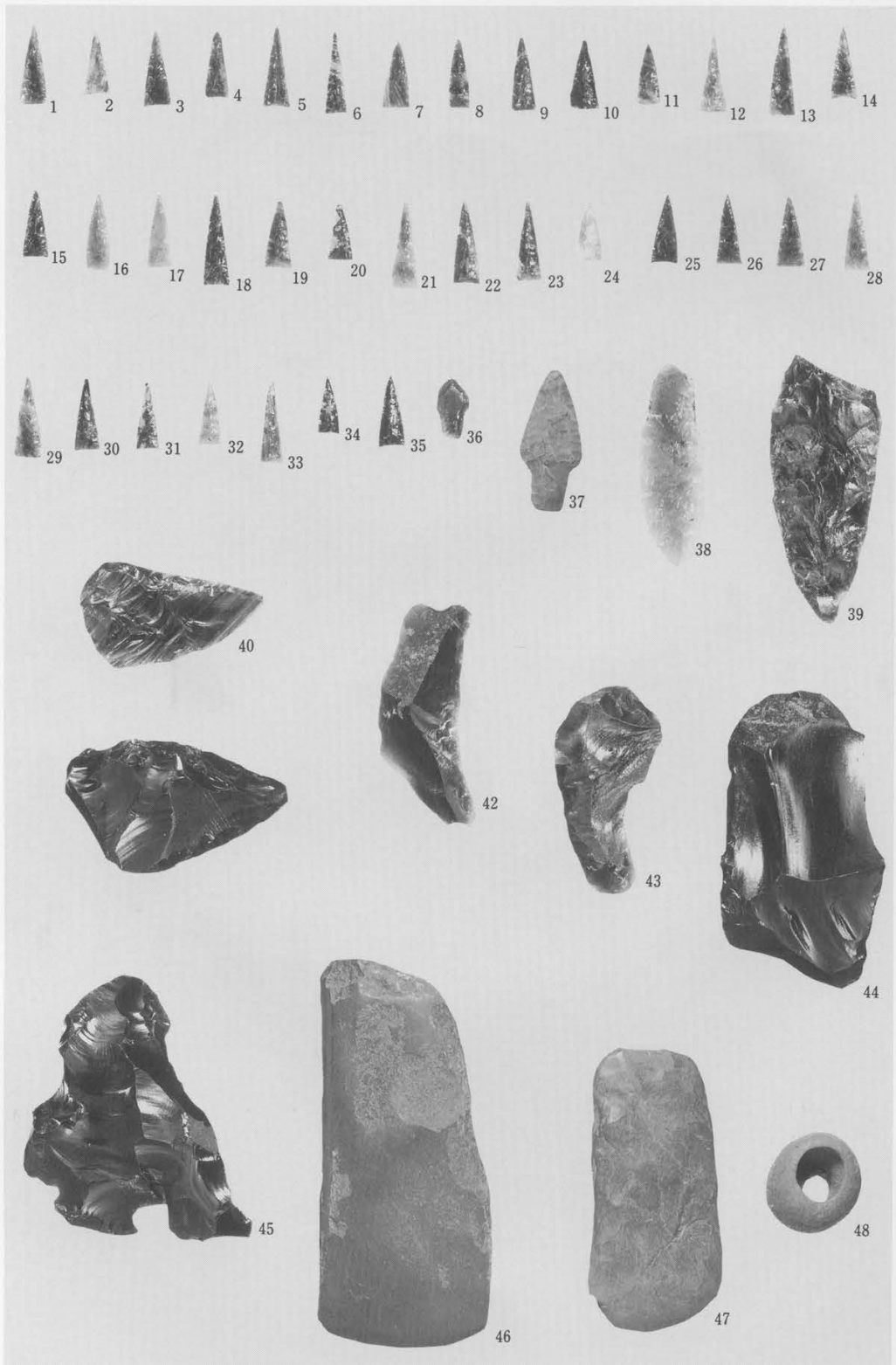
16～33. ピット35埋土出土石器



1. ピット37 2. ピット37床面出土土器



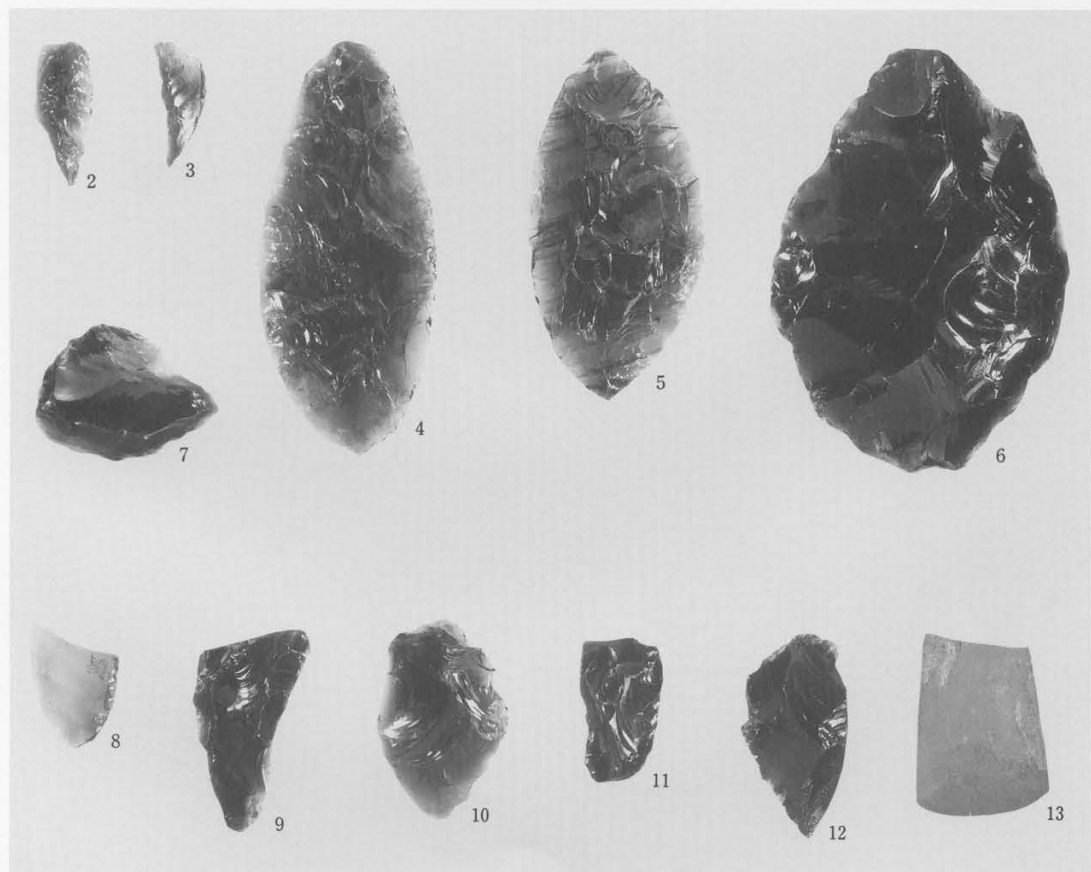
3. ピット37床面出土石器
4~45. ピット37埋土出土石器



1～47. ピット38埋土出土石器
48. ピット38埋土出土石製品



1. ピット39



2～13. ピット39床面出土石器



1. ピット43



2. ピット43床面出土土器



3. ピット43床面出土土器



4. ピット43床面出土土器



5



6



7



8

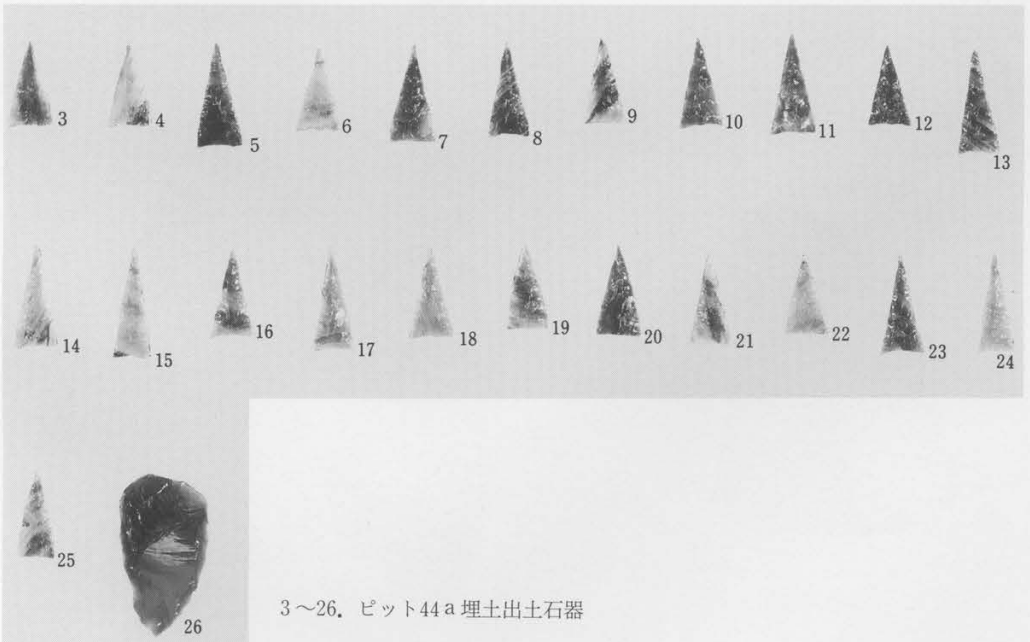
5～8. ピット43埋土出土石器



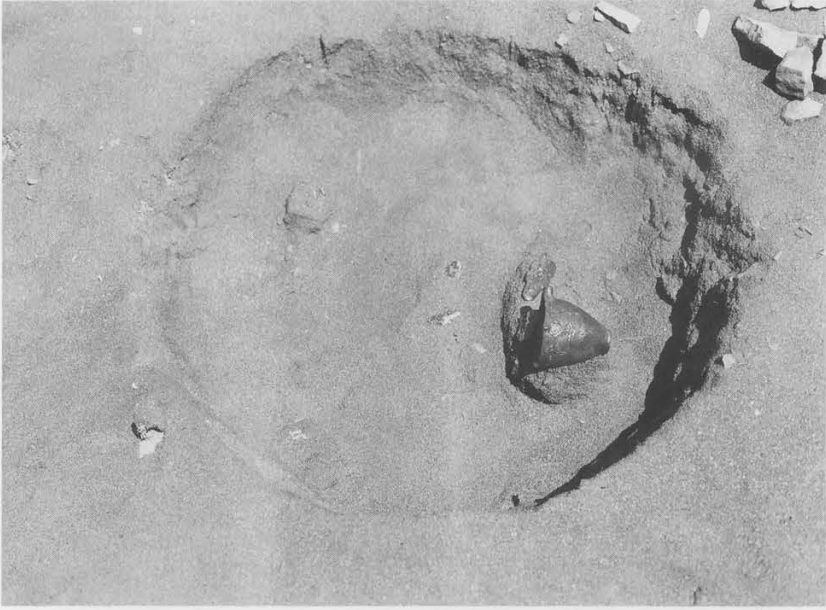
1. ピット44a



2. ピット44a 床面出土土器



3～26. ピット44a 埋土出土石器



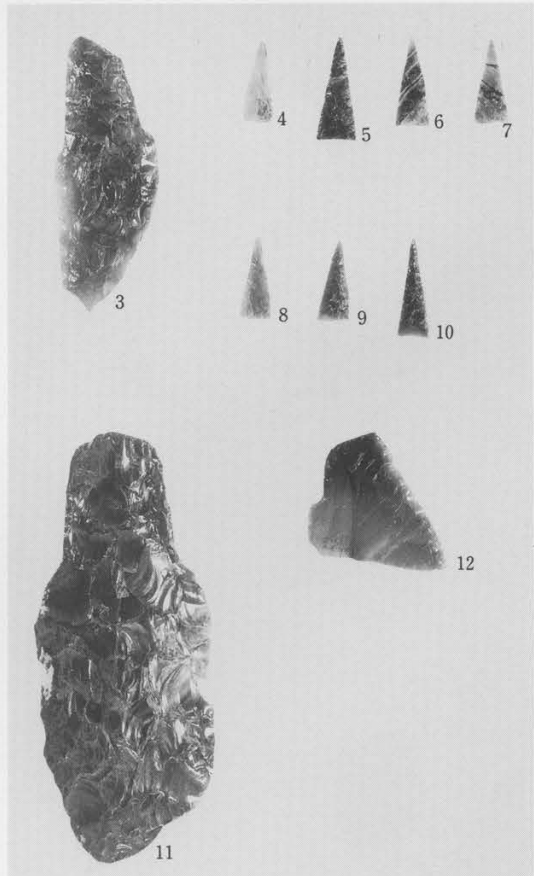
1. ピット46



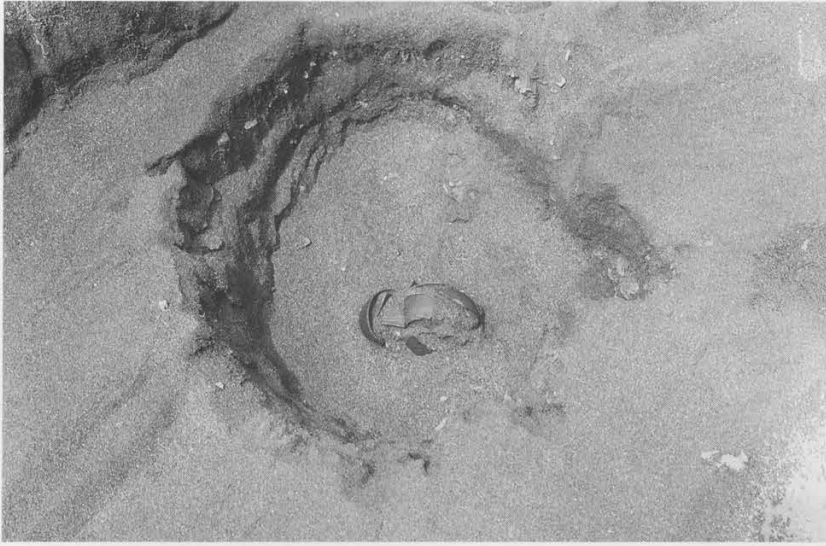
2. ピット46埋土出土土器



13. ピット46a 床面出土土器



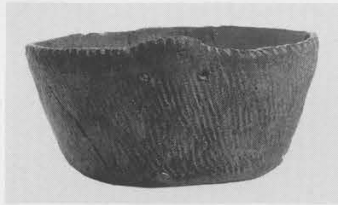
3. ピット46床面出土石器
4～12. ピット46埋土出土石器



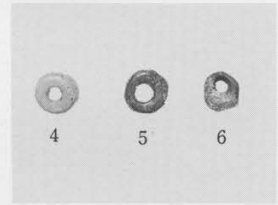
1. ピット47



2. ピット47床面出土土器



3. ピット47床面出土土器



4～6. ピット47床面出土石製品



7. ピット48



8. ピット48埋土出土土器



9. ピット48埋土出土土器



10. ピット48埋土出土土器



1. ピット52



2. ピット52床面出土土器



3. ピット53



4. ピット53床面出土土器



1. ピット95



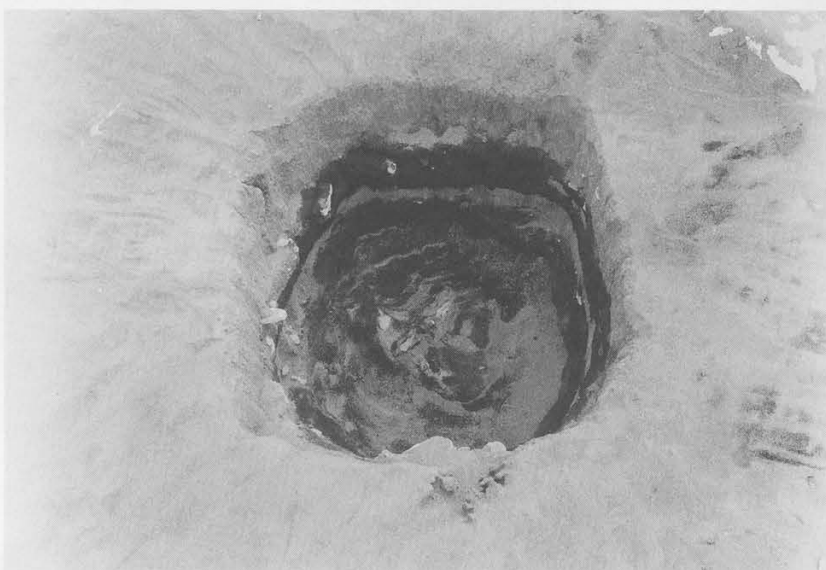
2. ピット95埋土出土土器



3. ピット95埋土出土土器



4. ピット95埋土出土土器



5. ピット100



1. ピット102 a



2. ピット102 a 床面出土土器



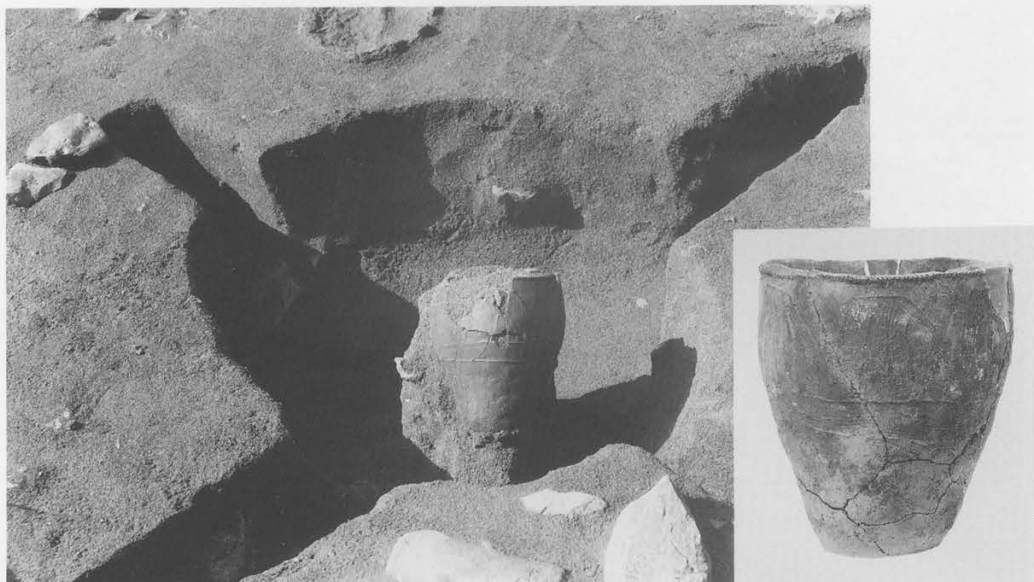
3. ピット102 a 床面出土土器



4. ピット104



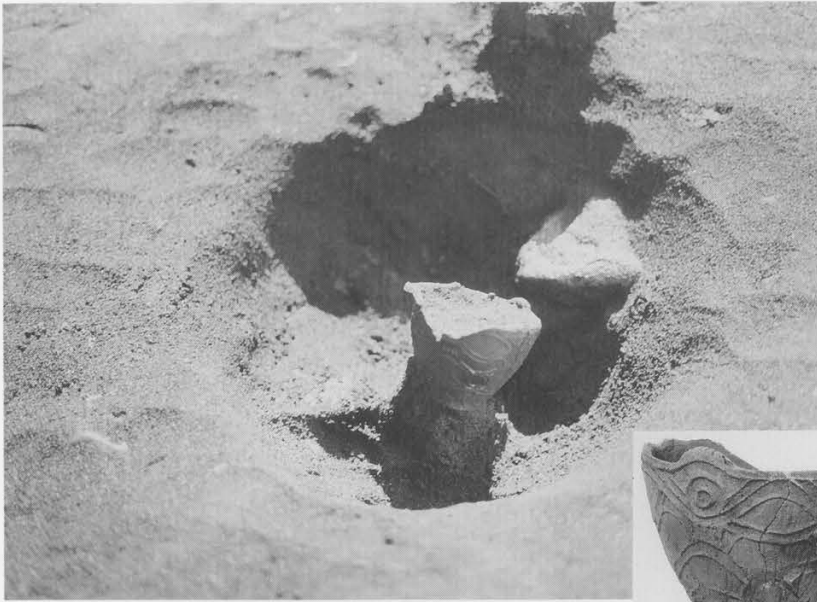
5. ピット104埋土出土土器



1. ピット105 2. ピット105埋土出土土器



3. ピット116



1. ピット117



2. ピット117埋土出土土器



3. ピット121



4. ピット121埋土出土土器



5. ピット121埋土出土土器



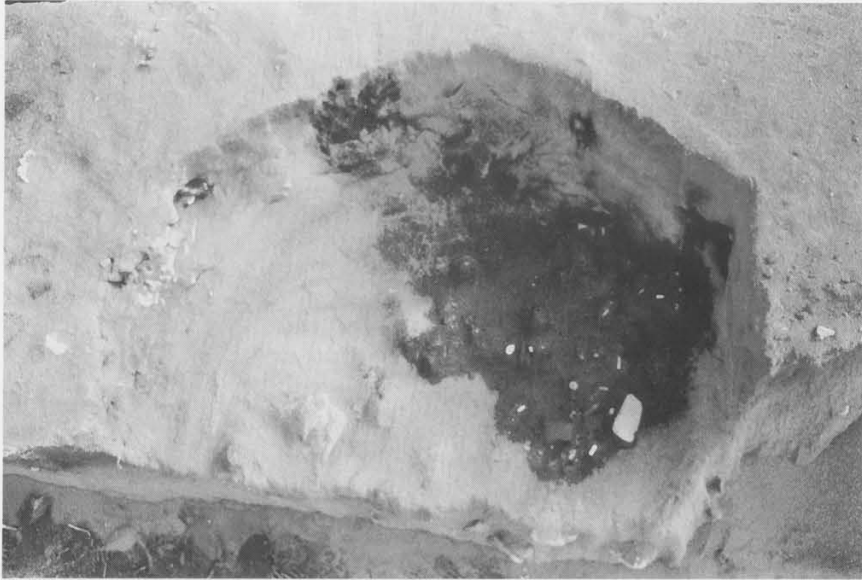
6. ピット121埋土出土土器



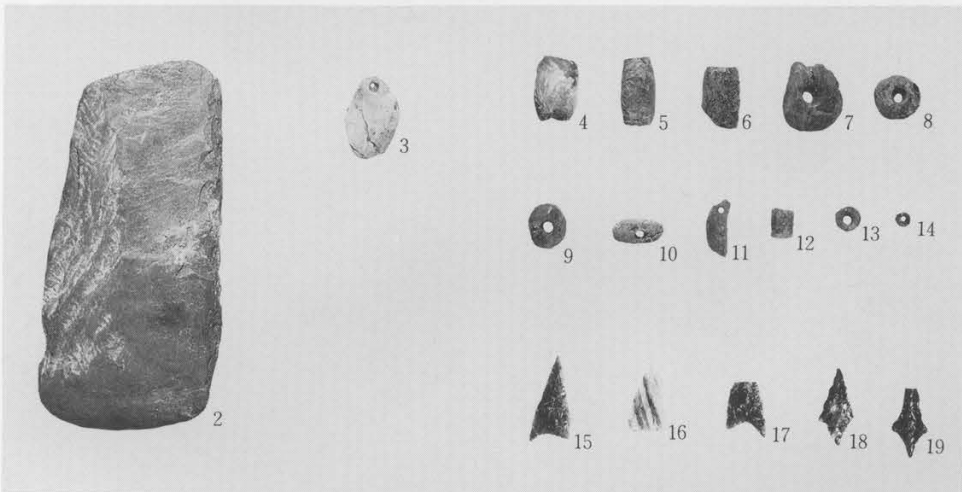
7. ピット121埋土出土石製品



1~41. ピット119埋土出土石器



1. ピット122a



2. ピット122a床面出土石器
3. ピット122a床面出土石製品
4～14. ピット122a床面出土琥珀
15～19. ピット122a埋土出土石器



20. ピット125埋土出土土器



1. ピット126



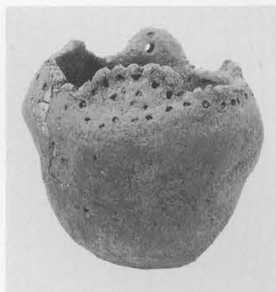
2. ピット126埋土出土土器



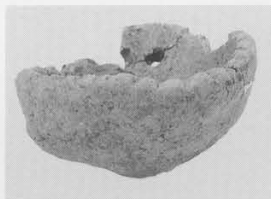
3. ピット126埋土出土土器



4. ピット126埋土出土土器



5. ピット126埋土出土土器



6. ピット126埋土出土土器

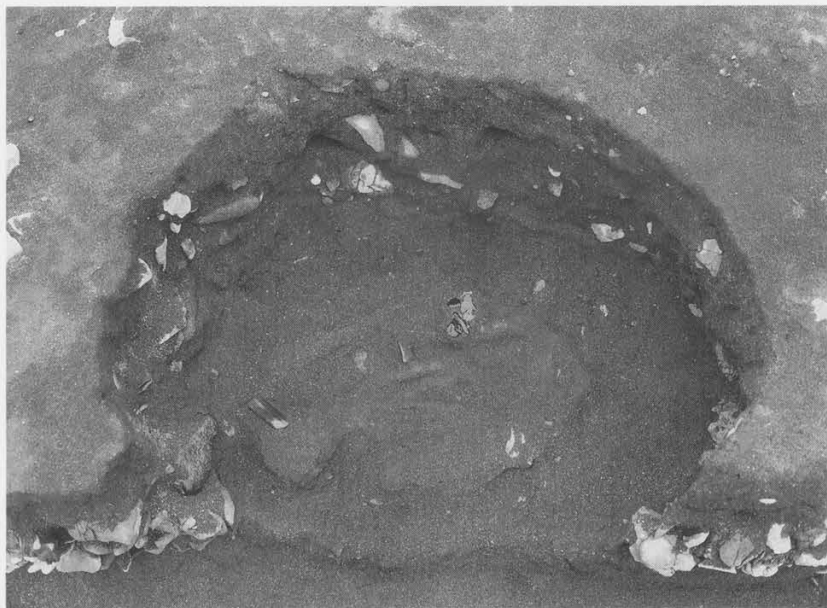


7. ピット126埋土出土土器



8. ピット126埋土出土石製品

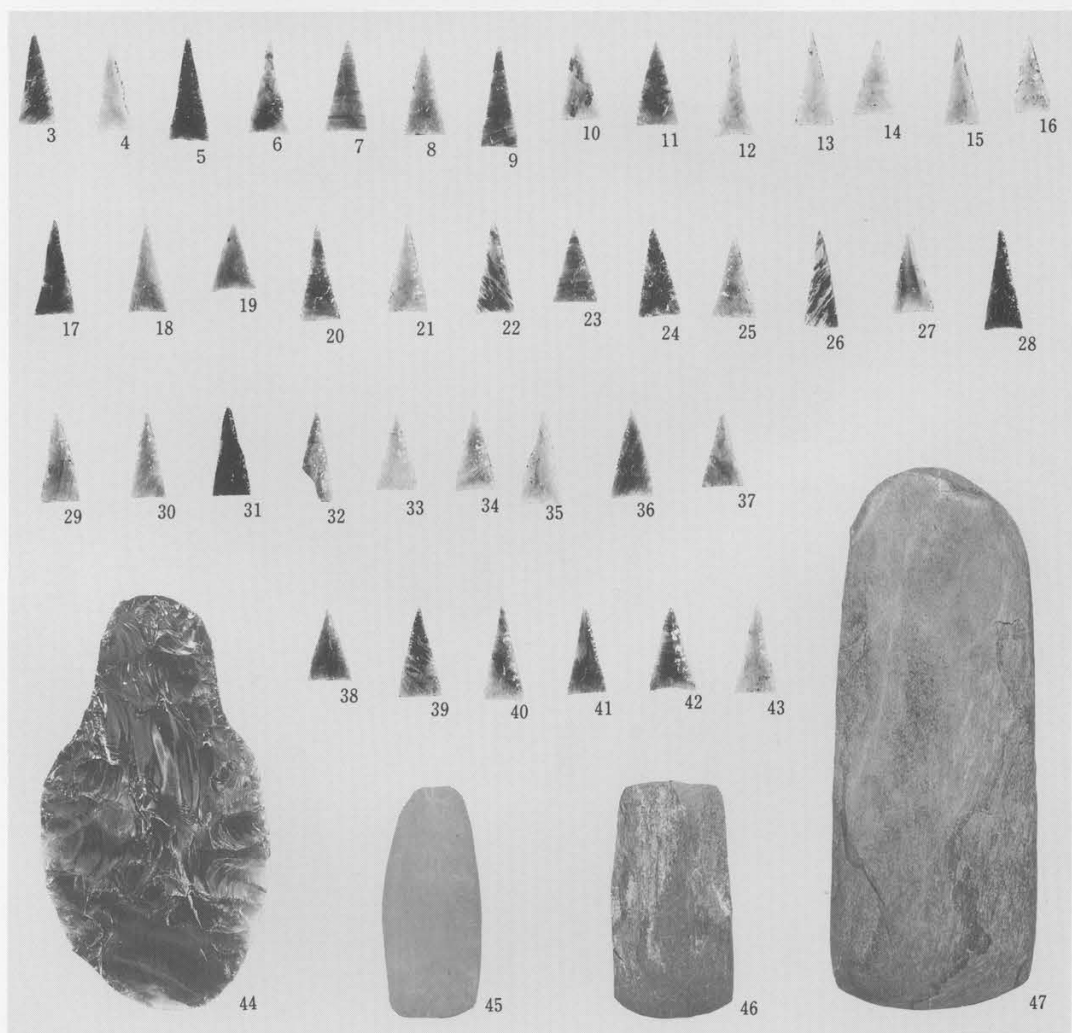
0 5cm



1. ピット128



1. ピット130 2. ピット130埋土出土土器



3~47. ピット130埋土出土石器



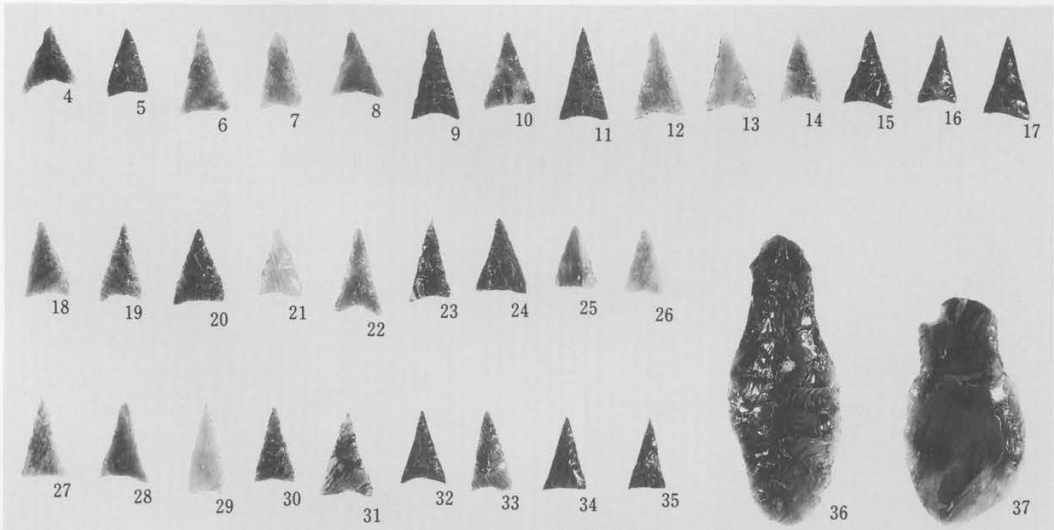
1. ピット132



2. ピット132床面出土土器



3. ピット132床面出土土器



4～37. ピット132埋土出土石器



1. ピット133

2. ピット133床面出土土器



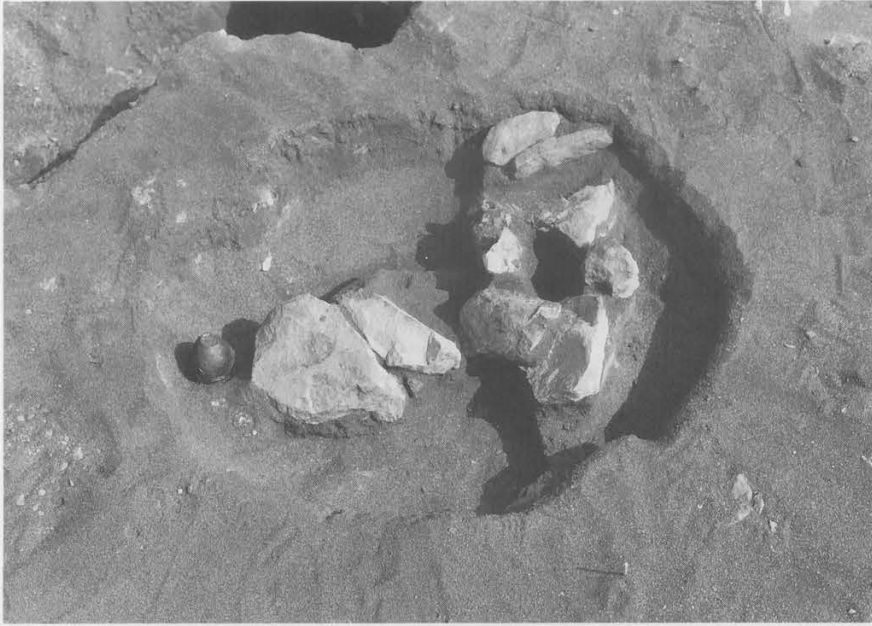
3. ピット138



4. ピット138埋土出土土器



5. ピット138埋土出土土器



1. ピット143上部角礫出土状況



2. ピット143遺体検出状況



3. ピット143床面出土土器



1. ピット145



2. ピット145床面出土土器



3. ピット145床面出土土器



4. ピット150



1. ピット151床面出土土器



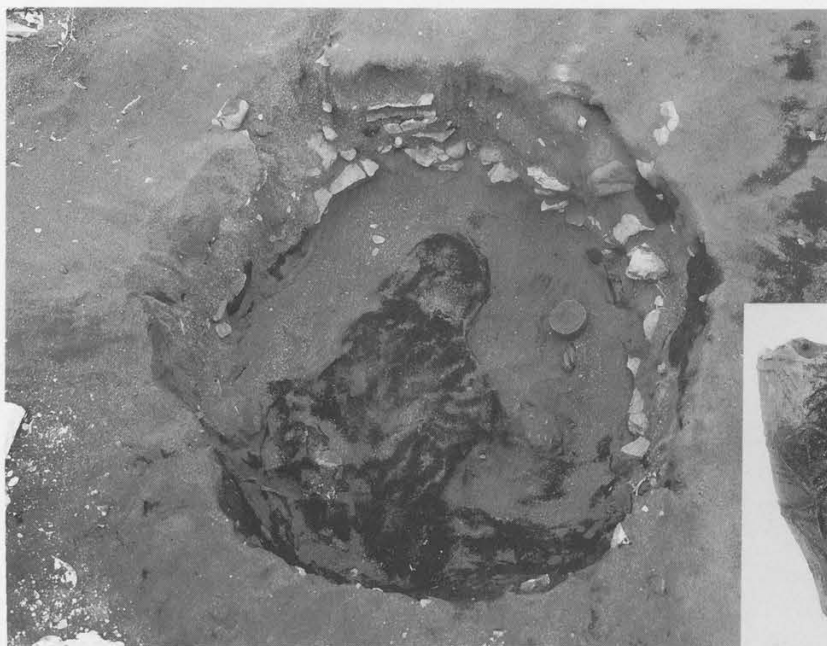
2. ピット151埋土出土土器



3. ピット153埋土出土土器

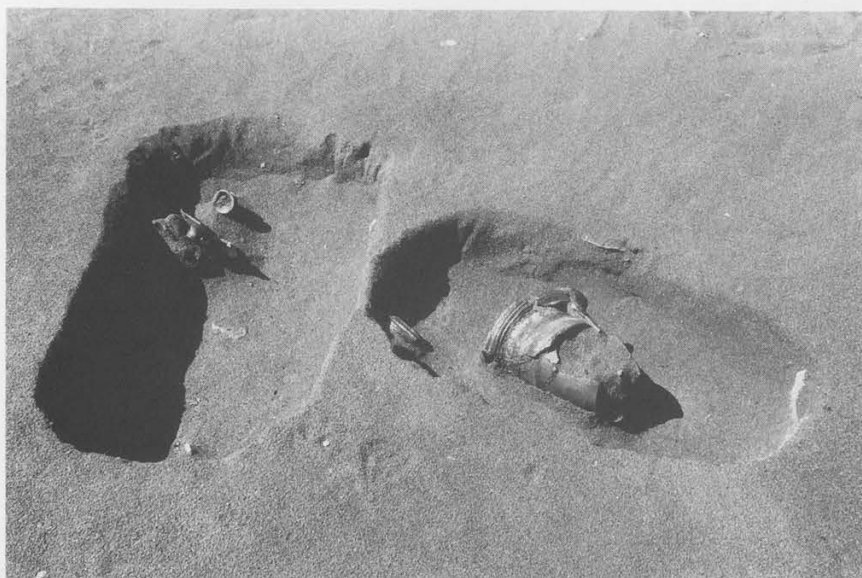


4. ピット154埋土出土土器



1. ピット157

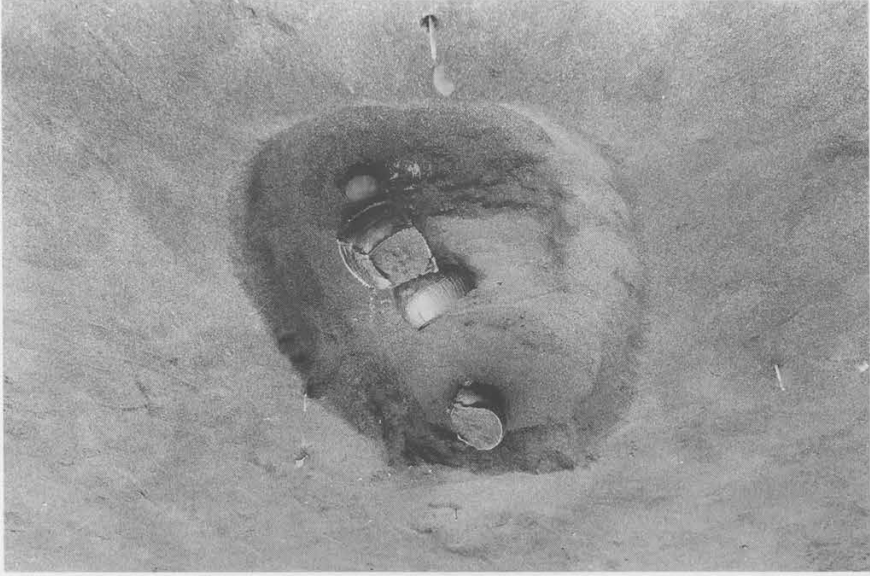
2. ピット157床面出土土器



3. ピット175、ピット176



4. ピット185上部出土土器



1. ピット201



2. ピット201



1. ピット201床面出土土器



2. ピット201埋土出土土器



3. ピット201埋土出土土器



4. ピット201埋土出土土器



5. ピット201埋土出土土器



6. ピット201
ベニガラ内出土石製品



7. ピット208床面出土土器



1. ピット213土墳墓



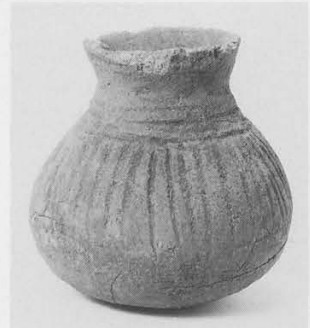
2. ピット213土器出土状況



3. ピット213埋土出土土器



4. ピット213埋土出土土器



5. ピット213埋土出土土器



1. ピット234



2. ピット234埋土出土土器



3. ピット242床面出土土器



1. ピット241



2. ピット241埋土出土土器



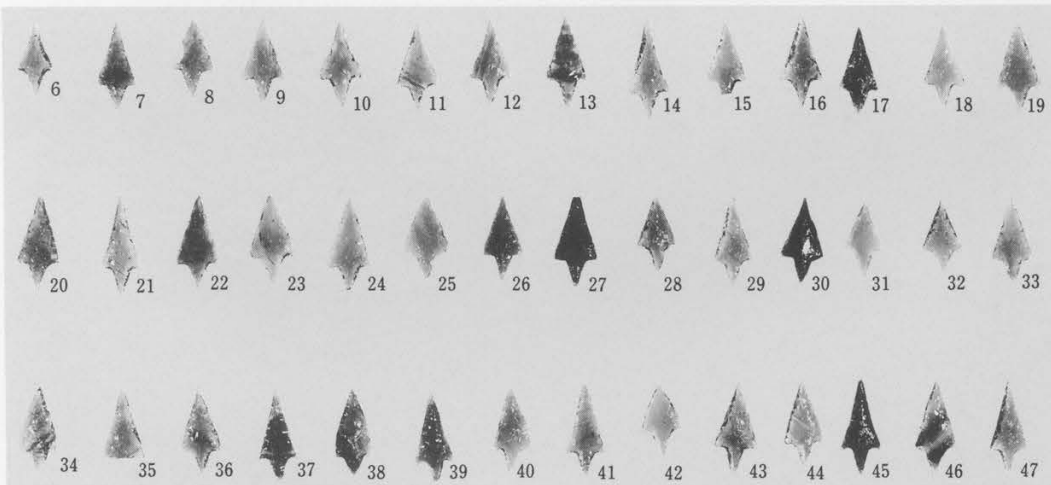
3. ピット241埋土出土土器



4. ピット241埋土出土土器



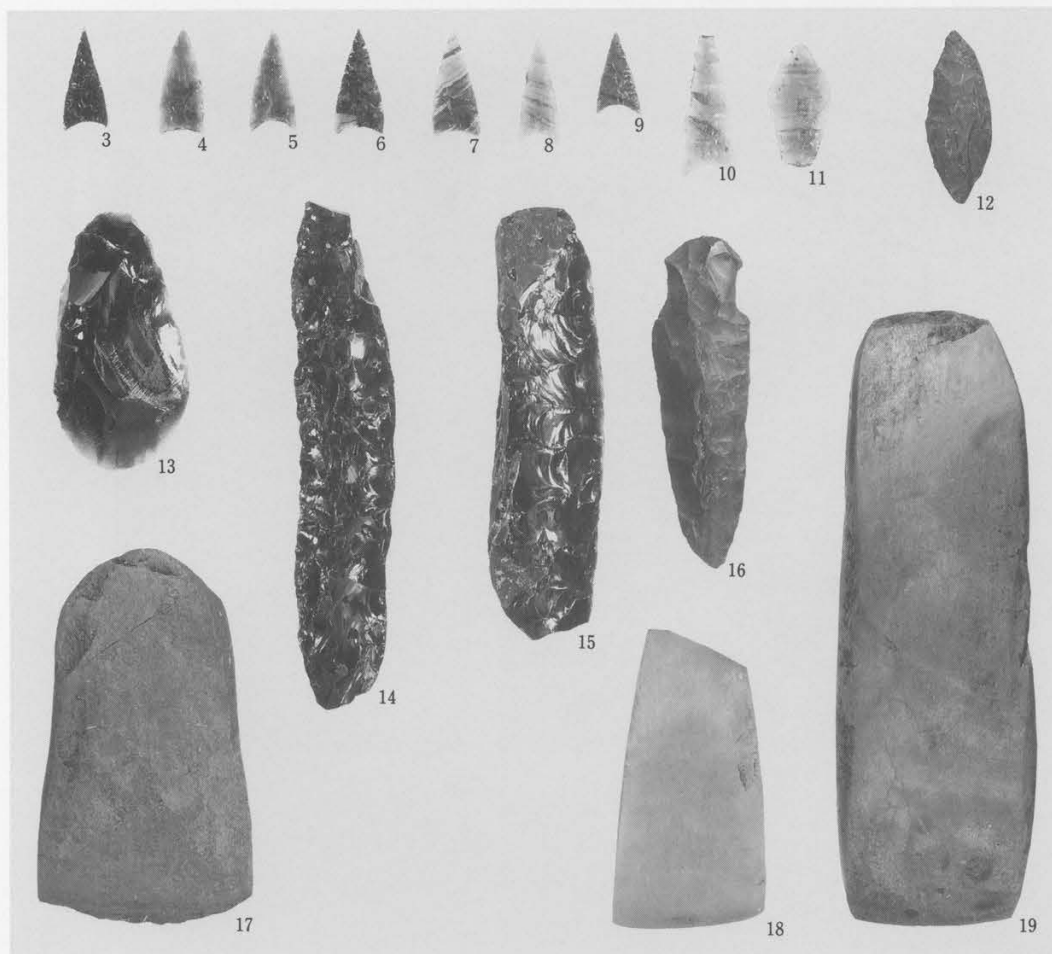
5. ピット241埋土出土土器



6～47. ピット241埋土出土石器



1. ピット246 a 2. ピット246 a 埋土出土土器



3～19. ピット246 a 埋土出土石器



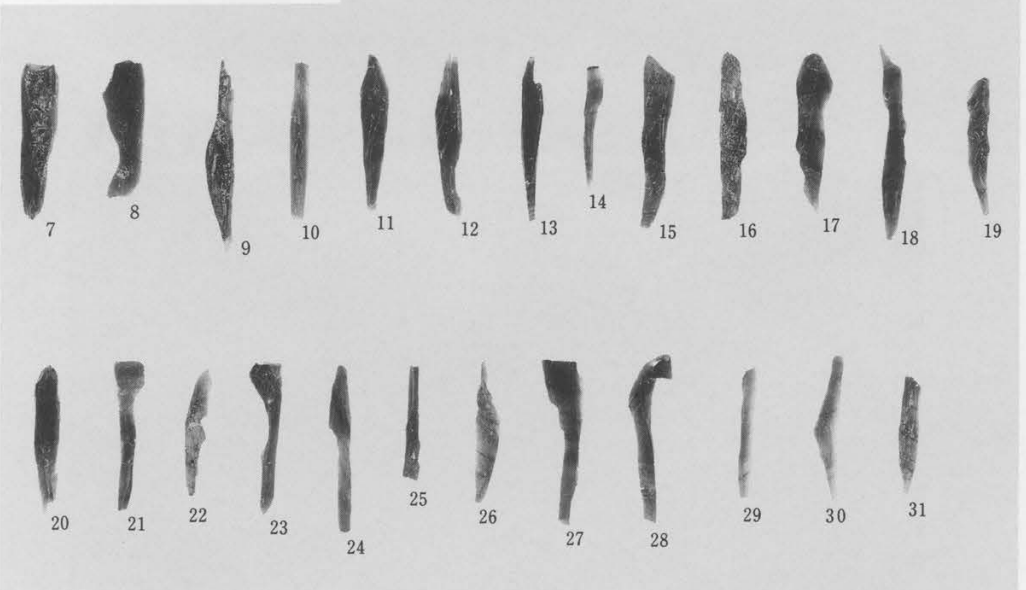
1. ピット252土器出土状況



2. ピット252遺体出土状況



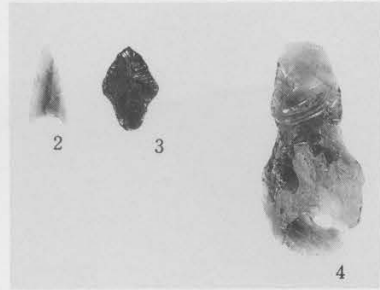
1. ピット252床面出土土器



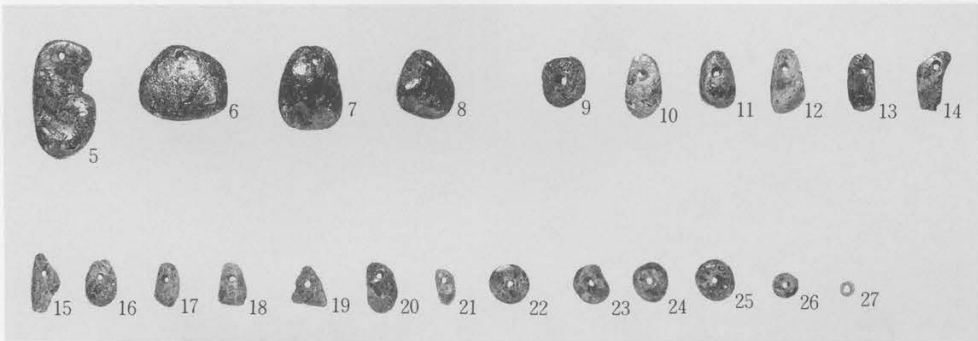
2～31. ピット252埋土出土石器



1. ピット253埋土出土土器



2～4. ピット254埋土出土石器



5～27. ピット254埋土出土琥珀



28. ピット255



1. ピット260



2. ピット260埋土出土土器



3. ピット260埋土出土土器



4. ピット261埋土出土土器



5. ピット261埋土出土土器



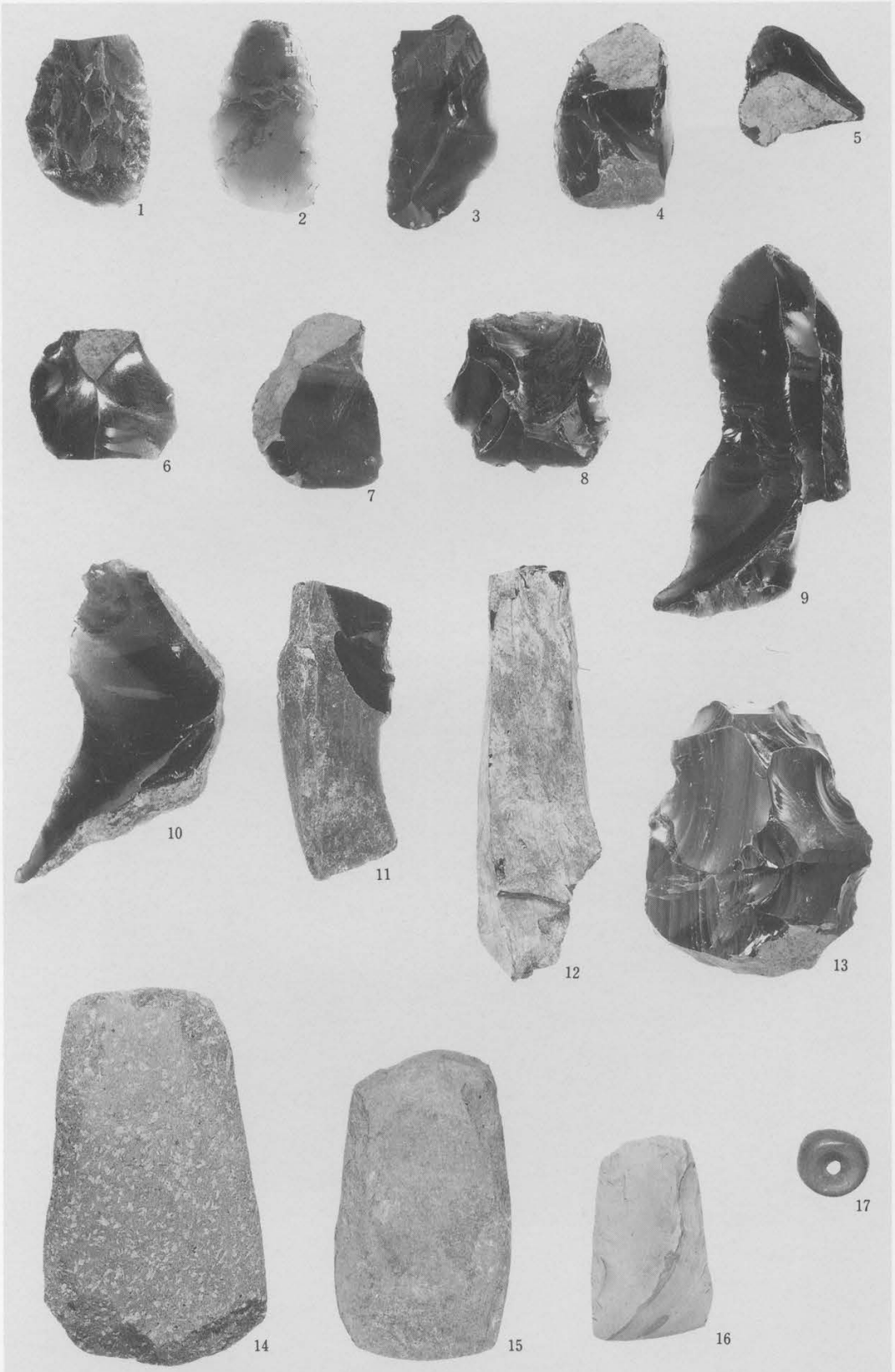
1. ピット262a



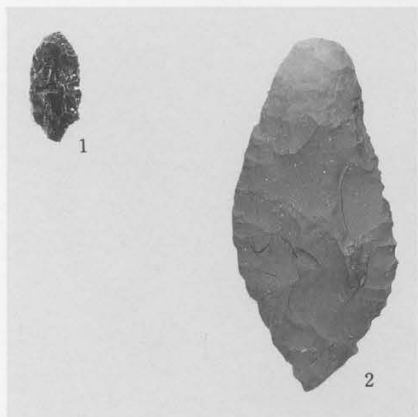
1. ピット263 a



2. ピット263 a 琥珀



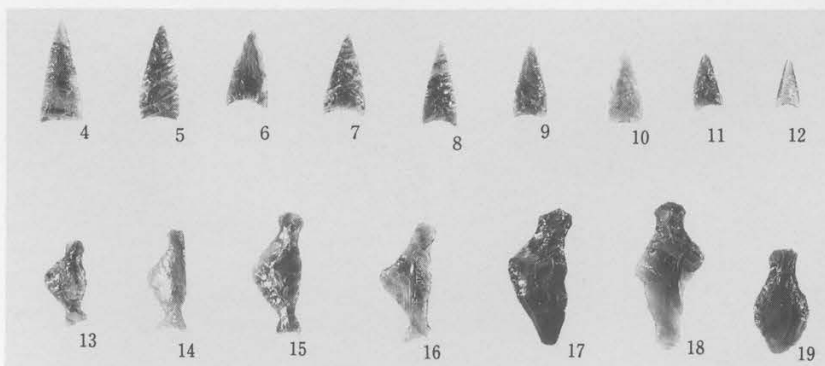
1～15, ピット263 a 埋土出土石器 16. ピット263 a 遺体上出土石器 17. ピット263 a 上部出土石製品



1～2. ピット263c埋土出土石器



3. ピット267



4～19. ピット267埋土出土石器



1~17. ピット267埋土出土石器



1. ピット272埋土出土土器



2. ピット274埋土出土土器



3. ピット274



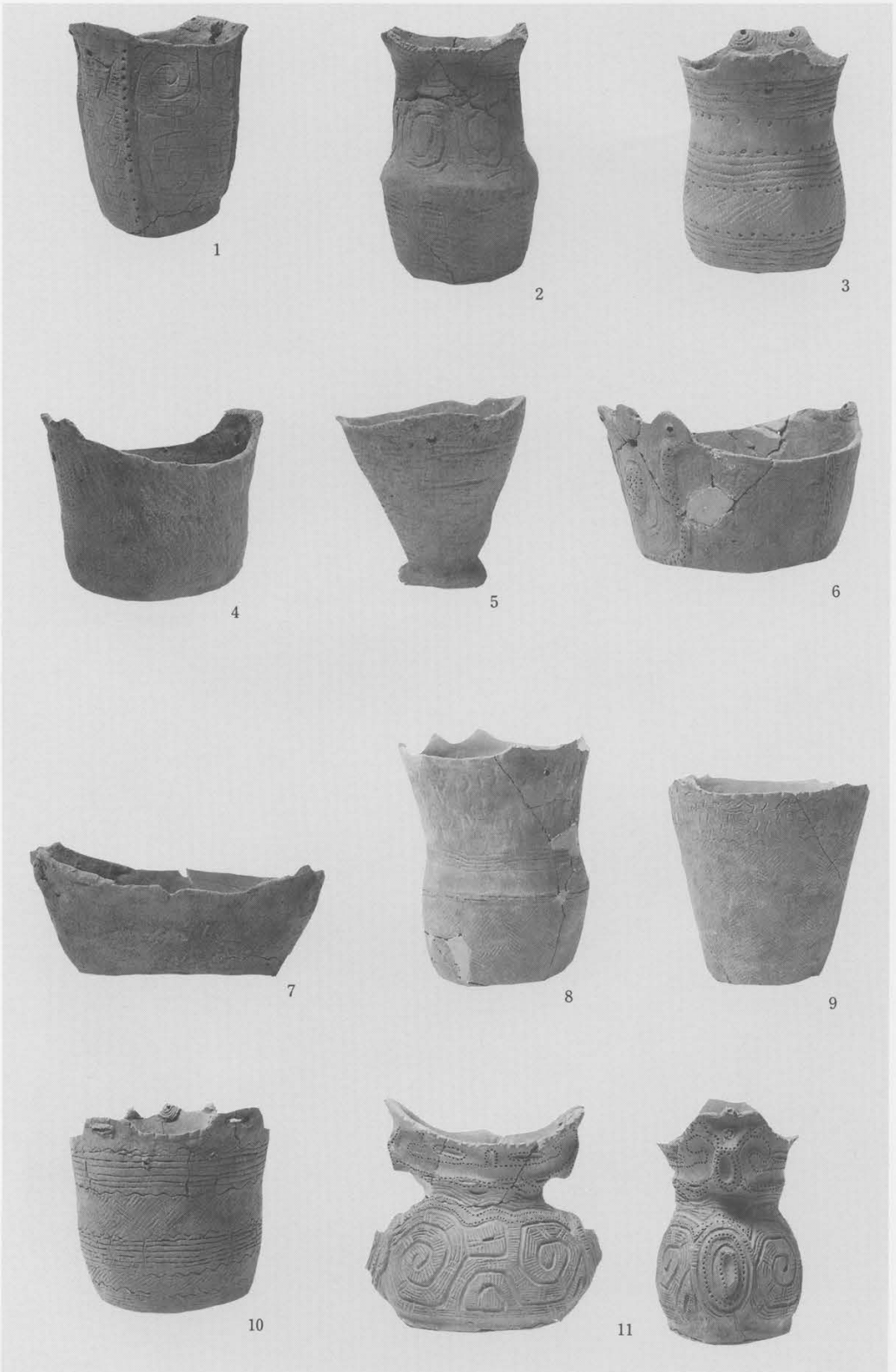
4. ピット288



1. ピット293床面出土土器



2. ピット295 a



1～11, ビット295 a 遺体上出土土器



1. ピット300遺体検出状況



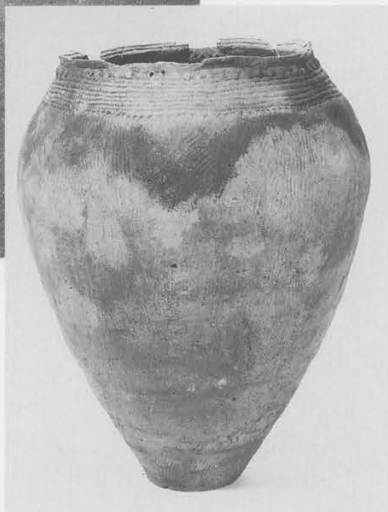
2. ピット300人骨頭部と鉄器出土状況



3. ピット300床面出土鉄製品



1. 埋甕1



2. 埋甕1



3. 埋甕2



1. 埋甕3



2. 埋甕4



1. 配石 1



2. 配石 2



1. 15号竖穴北側の屋外炉

1996年3月10日 印刷

1996年3月20日 発行

常呂川河口遺跡 (1)

—常呂川河口右岸掘削護岸
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道常呂町教育委員会

印刷所 株式会社 小林印刷

北海道北見市本町5丁目